アルカナ～切り札の騎士～

悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アルカナ～切り札の騎士～

【Ｎコード】
Ｎ７５１６Ｊ

【作者名】
悠

【あらすじ】
車に轢かれたわけでもなく神に連れ去られたわけでもなく、気が付けば遊戯王ＧＸの世界にトリップしていた主人公、御堂切。使うデッキは『絵札の三銃士』。原作キャラとのカップリングは特に考えていませんが、希望があれば可能な限り。原作ではまだ出てないカードや効果の違うカードが現実設定で出たりします。あとトリップの特性上、原作からは離れていくこともあるでしょうし、原作キャラも多少影薄いところもあったりしますが、どうか温かい目で見てくだされば幸いです。あ、ちなみに初投稿です。

第四期開始。第二期からはオリカも出ますので苦手な人はご注意を。

第一話「入学」（前書き）

初投稿です。手探りの自転車操業ですので、決して更新速度は速いと言えませんが、できる限りはがんばります。感想については忌憚なき意見を希望。ただし、理不尽な罵倒、展開が気に入らない等、作者にはどうしようもないものは申し訳ありませんが拒否させていただきます。

第一話「入学」

アルカナ～切り札の騎士～

第一話「入学」

異世界トリップ、という単語は近年ネット上では割とお馴染みになってきている単語だろう。オリ主ＴＵＥＥＥＥＥ！！　という類のヤツだ。だが、それはあくまで架空の物語だからこそ成り立つのであって、まさかそれが自分に振りかかるなんてのは夢にも……いや、夢として見ることはあってもそれはただの自分のイタイ妄想であると理解した上での夢だろう。少なくとも俺は夢にも思っていなかったのである。

「で、遊戯王ＧＸの世界にご招待、か」

とりあえず、自分の状況を確認。俺はあのデュエルアカデミアへの入学を控えた受験生。受験番号は１１２。十代の受験番号が確か１１０だった筈だから、その二つ後だ。

「ってことは、なんかもう一人くらいイレギュラーが混じっているわけだ」

具体的には、１１１番の人。

「まあなんにせよ、まずは入学試験のデュエルに勝たなきゃ話にならないな」

とゆーわけでデッキを確認。俺が現実で使っていたのは『終焉のカウントダウン』を使ったこの世界じゃ嫌われまくる特殊勝利系とか剣闘獣とか。まあグラディアルビーストはないな。つか、俺って

ば現実じゃ大分バーンデッキや特殊勝利、デッキ破壊とかの鬼畜デッキばっかり組んでたんだよな。もしそんなんだったら孤立間違いなしじゃん。

「お……」

デッキを確認してみると、意外や意外。俺が作った数少ないビートデッキの一つだった。しかも、この世界なら結構いい感じで目立てそうなタイプだ。俺も気に入っている奴だし、悪くない。

「くらえ！　スカイスクレイパーシュート！」

「マンママミーヤ！　我が『古代の機械巨人』がぁ～！？」

俺がデッキを確認している間に、十代が『フレイム・ウイングマン』でクロノス先生に勝利していた。やべ、見逃した。

「……はあ、では次の１１１番、どうぞなノ～ネ」

そういってクロノス教諭は気分が悪くなったと壇上を降りて行った。どうやら試験は別の試験官が担当するらしい。……残念。クロノス先生と戦ってみたかったんだが。

ともかく、次は俺と同じくイレギュラーであろう１１１番だ。しっかり見ておかなくては。

「は、はい」

ちょっと困惑気味に舞台上に上がったのは女子生徒。俺と同じ状況の人間なら、ああなってもおかしくない。あとで接触してみることに決め、まずはデュエルを鑑賞することにする。

「受験番号１１１番、天音アテナです。よろしくお願いします」

「うむ！　全力でかかってきなさい！」

「「デュエル！」」

「行くぞ、先生のターン！」

……もしかして、先攻後攻って速い者勝ちか？　少女もびっくりしている。

「先生は手札から『不意打ち又佐』を攻撃表示で召喚だ！　そして装備カード『デーモンの斧』を装備する！」

『不意打ち又佐』ＡＴＫ１３００→２３００

うわガチだ。又佐は二回攻撃でコントロールを奪えない１３００の優秀モンスター。その低い攻撃力をデーモンの斧なら十分補える。攻撃力２３００を超えるモンスターはおいそれと出せるもんじゃないしな。さて、どうするイレギュラー？

「ターンエンドだ」

「私のターン。手札から『ヘカテリス』の効果を使います」

お。

「『ヘカテリス』の効果で、デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加え、そのまま発動します！」

ソリッドビジョンにより、フィールドに巨大な門が現れる。

「ヴァルハラの効果発動！　手札から『アテナ』を攻撃表示で特殊召喚します」

『アテナ』ＡＴＫ２６００

フィールド上に、神々しい光を纏った戦女神が降臨する。攻撃力は２６００。十分不意打ち又佐を倒せる！

「おぉ……」

「さらに、私は手札から『ジェルエンデュオ』を攻撃表示で召喚します！」

『ジェルエンデュオ』ＡＴＫ１７００

「ぬぅ！」

「『アテナ』の特殊効果起動！　天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚されるたびに、相手ライフに６００ポイントのダメージを与えます！」

「ぐぁ！？」

教師ＬＰ３４００

あーそういや、ライフって４０００なんだよな。少ないなぁ。

「『アテナ』の効果起動！　『ジェルエンデュオ』をリリースして再び『ジェルエンデュオ』を特殊召喚！　『アテナ』の効果！　６００ポイントダメージ！」

教師ＬＰ２８００

出た！『アテナ』のループバーン！　こりゃライフ４０００じゃ溜まったもんじゃないよな。
「バトルフェイズ！『アテナ』で『不意打ち又佐』を攻撃！　えと、じゃ、『ジャッジメント・レイ』！」
あ、名前考えるの苦手っぽい。顔赤いし。
「おぉぉ！？」
教師ＬＰ２５００
「『ジェルエンデュオ』でプレイヤーにダイレクトアタック！　うぅ……『セイント・アタック・デュオ』！」
とりあえずひねり出しました的なネーミングだ！
「うあぁ！」
教師ＬＰ８００
まあなんにせよ試験官のライフはあと少しだ。『アテナ』の効果もあるし、このまま押し切れるだろう。
「カードを一枚セットして、ターンエンドです」
「くっ……やるな！　先生のターン！　ドロー！」
「トラップ発動！『ソーラー・レイ』！　１２００ポイントのライフダメージ！　私の勝ちです！」
「なにっ！？　うわあああああああ！？」
教師ＬＰ０
あ……。
いや、別にいいんだけど。ほぼワンキルなのもまあいいんだけど。流石にこの世界でバーンフィニッシュはちょっと悪目立ちするんじゃねーかなー？　ほら、なんかザワついてるし。
「よ、よし。もういいぞ。良いデュエルだった」
「は、はい。ありがとう、ございました……」
少女もなにやらビクついてるな。まあともかく、十代、少女と二人して目立ってくれちゃって。これじゃ俺が目立てやしない。
「最後！　１１２番」
「イエス、ティーチャー。１１２番御堂切、よろしくお願いしまっ

す！」

気楽に答えて舞台に上がる。おーおー見てる。さっきの少女がガン見してるよ。こりゃ俺が話しかける前に向こうから話しかけられるかもな。

「今年の新入生は粒ぞろいのようだな！　君にも期待しているよ」

「ども。期待を裏切らないよう精いっぱいやらせていただきますってね」

「「デュエル！」」

ひゅ～わくわくしてきた。さーて手札は……。

「先生の先攻だ！　ドロー！」

うお。またしても言ったもん勝ちの先攻。まあいいや。手札は揃いまくってるし。ぶっちゃけワンキルオーケーです。

「さっきは様子見が過ぎたからな。今度は全開だ！　行くぞ！『重装武者―ベン・ケイ』を攻撃表示で召喚だ！」

『重装武者―ベン・ケイ』ＡＴＫ５００

おっと。今度はベン・ケイか。つか、この人矢ヶ城先生か？　そうっぽいな。

「ベン・ケイに『デーモンの斧』を二枚と『団結の力』を装備！　ターンエンドだ！」

『重装武者―ベン・ケイ』ＡＴＫ５００→３３００

おおう。これで３３００の四回攻撃モンスターですかい。こりゃ圧巻。

観客席もザワついている。まあ一ターン目からあんなの出てきたら驚くわな。

「さあ！　どうする？」

「すいませんセンセイ。ワンキル、行かせていただきますよ」

「なっ……」

観客席のザワめきが大きくなった。そりゃまああんなフィールドの相手にワンキル宣言とかどんだけ～？　って気持ちもわかるけどな。

「俺のターン、ドロー！　手札から『融合賢者』を使わせてもらいます」

『融合賢者』で『融合』をサーチ。

「んでもって『融合』発動！　手札の『クィーンズ・ナイト』『キングス・ナイト』『ジャックス・ナイト』の三体を融合！　さあて、いきなりだけどお出ましだ！　出てこい『アルカナ　ナイト・ジョーカー』！」

『アルカナ　ナイト・ジョーカー』ＡＴＫ３８００

そう、俺のデッキは『絵札の三銃士』。『アルカナ　ナイト・ジョーカー』があまりにもかっこよかったもんでデッキを組んでみたら案外強かった。以来お気に入りのデッキだ。

「攻撃力……３８００！？」

「一ターン目からこんな……！」

おおー、目立ってる目立ってる。やりぃ。

「いっきまーす！『アルカナ・ナイト・ジョーカー』で、ベン・ケイを攻撃！『ロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」

名前は即興。まあなんでもいいし。

教師ＬＰ３５００

「ぐぅ！　だが、それではワンターンキルはできないぞ！」

「まだだ。まだ俺のバトルフェイズは終わっちゃいない！」

「なに！？」

「速攻魔法『融合解除』！　戻ってこい、三銃士！」

『クィーンズ・ナイト』ＡＴＫ１５００

『キングス・ナイト』ＡＴＫ１６００

『ジャックス・ナイト』ＡＴＫ１９００

アニメで遊戯さんが使ってたやつ、俺もぜひ一度やってみたかったんだよね～。

「そして『融合解除』で特殊召喚された絵札の三銃士には、まだバトルフェイズが残っている！」

キタ！　キタコレ！

「絵札の三銃士のダイレクトアタック！『三位一体』！」
「ぐあああああああああ！？」
教師ＬＰ０
「っしゃ！　宣言通りワンキル達成！　ありがとうございました～♪」
なにやらザワめくを通り越して沈黙してしまった観客席を尻目に、俺は意気揚々と会場を後にする。さーてと、あの少女はっと？
「おーい！」
むっ、あそこで手を振っているのは十代！　それに翔とスリー・スワンプ・アース（三沢）じゃないか。
「なんだ、どした？」
無視すんのも感じ悪いので、とりあえず近寄ってみる。
「お前すんげーデュエルだったな！　まさかワンターンキル決めてくるとは思わなかったぜ！」
「ありゃ初手からアホみたいに手札が揃ってたからだっての。普通、あんなに上手行くもんかい」
事実だ。正直史上稀にみる揃い方だったと思う。
「まあ、たとえそうだとしても華麗なワンターンキルだったと思うぞ。確かに、揃いすぎだった気もするが」
「ところで、えーと」
知ってるが、一応初対面設定なので名前を知らないふりをする。
「オレ、遊城十代！　十代でいいぜ！」
「僕は丸藤翔ッス。翔でいいッスよ！」
「俺は三沢。三沢大地だ」
「オッケ、把握。俺は御堂切。切でいいや」
「おう！　セツだな。よろしく！」
「み、御堂さん！」
「お？」
自己紹介が終わったところで、イレギュラーの少女が声を掛けてきた。

「ちょっと……お話があるんですけど、お話し中ですか？」
「んにゃ。悪い三人とも。またあとで」
「なんだ？　いきなりラブコメか？」
「そんなんじゃねっての」
意地の悪そうな笑顔で聞いてくる三沢を一蹴し、少女の下へ。
「あいよお待たせ」
「すみません。お話し中だったのに」
「いいっての。で？　話ってのは？」
単刀直入に聞くと、少女は言おうかどうしようか迷っている様子でもじもじしていた。
「えと、笑わないで聞いて欲しいんですけど……」
「ういうい了解」
「その、わ、私と……」
うん？
「私とお付き合いしてください！」
……あるぇ～？

第一話「入学」（後書き）

と、いうわけで、主人公とヒロイン登場の回です。
まあ初めてのデュエルだったので、ご都合主義として、そしてテンプレとしてめちゃめちゃ揃いまくった手札からのワンキルを決めさせてもらいました。
この小説は基本、今回出てきた二人を主軸としてまわしていきます。十代たちについてはさほど出番の予定はありませんが、扱いやすい翔あたりは出番が多めになるやも。といっても、まあ比較的、というだけの話ですが。あと、この小説で一番空気なのはおそらく三沢ではなくコアラ君です。

第二話「流石にこれは予想外」（前書き）

第二話です。今回はデュエルがありません。遊戯王の話なのにデュエルがないのも変な話かもしれませんが、まあデュエルだけが遊戯王じゃないってことでどうか一つ。

では、どうぞ。

第二話「流石にこれは予想外」

アルカナ～切り札の騎士～

第二話「流石にこれは予想外」

「わ、私と……私とお付き合いしてください！」

……あるぇ～？

「……は？　いや、ちょ、はぁ？」

やばい、理解が追い付かない！

「はぁ～？　ていうか、ええ～？」

なんか混乱しすぎて3わけわからんポイント入れてしまった。いやだって、てっきり異世界トリップの話が来ると思ってたのにきたのはブラック・ホワイト……じゃない、告白って。そりゃ流石に予想できんて。

「あ、あの……いきなりこんなこと、その、御迷惑だとは思うんですけど、その」

しかもなんかガチ！？　めっちゃ顔赤いし！　すっごく必死だし！

「さっきのデュエル見てて、う、運命感じちゃいました！　お付き合いしてください！」

うわぁ、俺の勘違い路線消えたわぁ～。

「わ、私、いつもは決してこんな惚れっぽいことなんてないんですけど！　未だ恋人いない歴＝年齢なんですけど！　その、それでも無視できない衝動が、その……」

やばい、俺まだ3わけわからんポイント入れた時以外発言してね

え。つかこの少女が別の意味でトリップしてる。救助活動を！
「いやその……はぁ～？」
うがぁ！　またわけわからんポイント入れちまった！　なんか俺までトリップしてるっぽい！　そりゃそうだよね！　俺ブラック・ホワイトされたの初めてだもん！
「ご、ごめんなさい！　い、今のは忘れて……欲しくはないですぅ～」
ああ！？　なんか勝手に断られた感じで半泣きだ！　きゅ、救助……いや、救命活動を！
「あっ、と。その、別に迷惑とか、嫌だったとか、そんなんじゃなくてな？」
よし、なんとか口は動いた。
「ぶらっ……じゃない、告白とかされたの初めてで……混乱の極地というかなんつーか」
あっぶね。ブラック・ホワイトとか言いそうになった。
「迷惑じゃ……ない、ですか？」
「そりゃまあ、うん」
この少女、よく見りゃ絶妙に可愛いし。スタイルもバランスいいし。ぶっちゃけ断る理由を探すほうが難しいくらいというか……。
「ただまあ、その。いきなりってのは流石に……」
そこ、ヘタレと言うなら甘んじて受けよう。なんも知らんで告白されたからとりあえず受けるとかいう選択肢は俺ん中にはないの。
「そ、そうですよね。やっぱり……いきなり過ぎました……よね」
「い、いやその！　ぶっちゃけ第一印象的には１２０％合格なんだけど！　オッケーなんだけど！　だからこそ不誠実な了解はしたくないっつーか」
ああどうせヘタレさ！　俺は自覚もあるヘタレだ！　文句あっか！
「じゃ、じゃあせめて！　あ、アドレスください！」
「お、おうとも。それくらいはお安い御用！」
なんだこの中学生カップル。我ながらそう思わざるを得ない。お

友達から始めましょうとか、現代では化石扱いだろ。
　とりあえずアドレスを交換し、登録する際に一つ問題が。
「あ、名前、教えてくれない？」
「はぁうっ！？　そういえば自己紹介もしてないぃ～」
　なんか自虐モード入ったっぽい。いや、さっきの試験の時に聞いた気がするけど、あの時はそれどころじゃなかったしなぁ……。
「こ、こほん……よし」
　あ、現世に復帰した。
「あ、改めまして天音アテナと申します！　１３歳です！　名前のまま『アテナ』中心の天使族デッキを使っています」
　あーそうそうそんな名前だった。って１３歳！？　そのスタイルで！？
「えーと、とりあえず俺も自己紹介。御堂切、デッキは『絵札の三銃士』。歳は……」
　あり？　そういやこの世界では俺って何歳なんだ？　現実では１９なんだが……とりあえず携帯……っぽい通信機を調べる。１５歳。おお、若返ってる。まあ今年で１６みたいだけど。
「１５だ。まあ、数えだと１６だな」
「う……私、実は数えで１３です」
　うぉい！？　ってこたぁ１２かよ！　後々出てくる早乙女さん家のレイちゃんとそう違わないじゃん！　……飛び級？　まあ、３歳差くらいなら許容範囲か……。つか、１２だとするとなおさらすごいスタイルだ。ぶっちゃけ高校生と言われても違和感ない。
「ま、まあ、俺のことは気軽にセツとでも呼んでくれ」
「い、いいえ！　そ、そんな年上を呼び捨てなんておこがましい！」
「あー、でも切さん、とかって語呂悪くて呼びにくいだろ？　だいじょぶだって。近所の悪ガキどもだってセツ呼ばわりだったしな」
「は、はい。でしたら、その、思い切ってセツと呼ばせていただきます！　あっ！　私のことはアテナで！」
「ほいりょーかい。よろしくアテナ」

「は、はい！」
「えーと……とりあえず俺は十代たちのところに戻るけど……」
「そ、その、それじゃあ私も一端戻ります。あの、メールとかしても……いい、ですか？」
「おう、当たり前だろ。好きな時にしてこいな。あー、ただ、俺ってば結構筆不精だからな。メールとかそっけないかもしれんが、勘弁してくれ」
「はい！　じゃあ今晩、さっそくメールしますね！」
めっちゃ嬉しそうな顔で去って行った。やば、思わず顔がニヤける。
「まあ、可愛かったしな」
「ふぅ～ん」
「へぇ～」
「ほぉ～」
……。
ギ、ギ、ギ、ギ、とブリキの案山子のような感じで振りかえれば、そこにいたのは十代、翔、三沢の三人。さっきの俺以上にニヤニヤしてやがる。
「『う、運命感じちゃいました！　お付き合いしてください！』だって」
……ええい！　その２８２８を止めい！
「『まあ、可愛かったしな』だったか」
「へへっ！　やっぱりラブコメだったな！」
「くぅ……この、デバガメどもが……」
流石に恥ずかしい。恥ずかしすぎる。
「いや～さっきのデュエルといい、今のといい、初日からすっげー面白いモン見せてもらったぜ！　これからもよろしくな！　セツ！」
「う、うるせい！　俺をギャグ担当扱いすんな！　てか純情少年おちょくって楽しいか貴様らー！」
流石の俺もそろそろキレるぞ！？　ただでさえいきなりこっちき

て混乱してるのに次から次へと！
「おっと、そういやオレ、セツに聞きたいことがあったんだ」
「あ？」
十代は俺の後ろを指さした。
「そいつら、見えてるか？」
まさかと思って振り向くと、そこにたたずんでいたのは紛れもなく絵札の三銃士！　マジか！　こいつら精霊なの！？
「ええー……」
驚きで硬直する俺の反応に、見えていると判断したらしい十代は確認を取ってくる。
「見えてる……みたいだな」
「ああ。えと、こいつらは？」
原作知識で知っているとはいえ、一応聞いておく。
「そいつらはカードの精霊だよ。仲よくしてやれ」
「……まあ、そりゃ仲良くはするけどさ……なんか、すでに一人不愉快そうなんだが」
『クィーンズ・ナイト』がめっちゃやさぐれた感じでつま先トントンしてる。『ジャックス・ナイト』は苦笑してるし。
『うむ。まあ、精霊にもちょっとしたオトメゴコロというやつじゃな』
「うおっ！　しゃべった！」
『キングス・ナイト』がやたらフレンドリーに話しかけてきた！
『はは、クィーンも、やっとできた主がいきなり誑かされればいい気はしないのでしょう』
『……別に、そういった意図はありませんわ』
……よっし、性格把握。キングが好々爺チックでジャックが爽やか好青年。クィーンは姫様系ツンデレということで認識。各々一言ずつで決めつけるのも良くないかもだが、わりとわかりやすい反応返してくれたんで多分間違っちゃいない。
「あはは、まあいきなりだとビビるよな。んで、こいつがオレの

相棒」
『クリクリ～』
「おお、可愛い」
茶色い毛玉に天使の羽。つぶらな瞳が実にキュートな『ハネクリボー』だ。
『クリ～』
ハネクリボー、間近でみると尚可愛いな。こりゃいいや。
「……アニキたち、さっきからなんの話してるッスか？」
「ああっと、いや、こっちの話」
そういや、翔たちには精霊見えないんだっけ。
まあともかく……精霊がいるってことは、まず間違いなく原作には介入することになるんだろうな。……気になるのはやっぱり、俺に告白してくれたアテナなんだが……う～ん。俺用のヒロイン？いや、なんか調子乗った解釈だけど。原作キャラとのカップリングなんぞ認めるかボケェ！　ってことかもしれん。……ほっといても原作キャラとカップリングすることなんざあり得なさそうだが。
……世界の平和、か。んなもん一介のオタクには過ぎた荷物だとは重々承知だけど……まあ、俺は俺らしく……ゆるゆる行きますか。まずは楽しむこと第一で、な。
「そういうわけで、ちっとばかし長い付き合いになりそうだが……ま、よろしくな」
俺の相棒たる三銃士に軽く会釈する。三銃士はさっきまで不機嫌そうだったクィーンも含めて全員笑顔で頷いてくれた。
『御意！』

第二話「流石にこれは予想外」（後書き）

はい。というわけで、わかる人にはわかるネタを入れつつ、精霊登場までです。多少ヒロインの設定が強引ですが、伝家の宝刀『ご都合主義』ってことで……駄目？

次は偽ラブレターの事件ですね。序盤の盛り上げどころのひとつのつもりですので、どうかよろしく。

第三話「偽ラブレター事件！　アテナとのデュエル」（前書き）

第三話です。早くも拙作をお気に入り登録してくださった方がいるようで、初投稿でドキドキしている身としては大変光栄です。

さて、第三話は一応最初の見せ場として設定しておりますので、楽しんでもらえることを願っております。長々と失礼しました。それでは、お楽しみください。

第三話「偽ラブレター事件！　アテナとのデュエル」

アルカナ～切り札の騎士～

第三話「偽ラブレター事件！　アテナとのデュエル」

試験の結果、俺は十代たちと同じオシリス・レッドに配属されることに。

……何故。華麗なワンキル決めたのに！……なんか筆記試験の結果が十代以下だったらしい。バカな！？　実際に受ければ三沢にだって負ける気しないのに！

「まあ、愚痴ってもしゃーなし、だな。むしろ三沢くらいしか知り合いのいないラー・イエローに入れられなくてよかった、としよう」

うむ。ポジティブポジティブ。

「……にしても、翔のやつ遅いな」

「あーそういや、今日一日ずっとトリップしてたよな」

この世の春一人占め！　ってな具合に。つーと今日はあれか、十代が明日香フラグ立てる日か↑ギャルゲー脳。

……原作じゃあ冤罪だったけど、もし本当に覗いててアテナも覗かれてたりしたら……そのときは明日香側に着こう。むしろ率先して吊るしあげてくれる。

ピッピー、ピッピーと電子音。一つは十代のから。もう一つは俺のから。

「ん……アテナだな」

「お、おいセツ大変だ！」

アテナのメールを開く前に、十代が血相を変えてこっちに通信機を近づけてきた。
『マルフジショウハアズカッテイル。カエシテホシクバ、ジョシリョウマデコラレタシ』
「むぅ……つまり、翔が誘拐でもされたのか？」
「かもしれねえ……オレ、迎えに行ってくる！」
「ちょい待ち！　俺んトコにもほぼ同時にメールが来たんだし、こっちも見てみよう」
「……それはいつものラブコールだろ？」
「……一応聞け」
十代の茶化をスルーし、アテナからのメールを開く。
『セツ、今平気ですか？　その、ちょっと話があるので、できれば今から女子寮の方に来てくれませんか？』
「やっぱいつものラブ……」
「いつも女子寮に呼び出されてたまるか！……明らかに関係してるっての」
まさか……まさか翔の奴……やっちまったか？　やっちまったのか？　だとしたら生かしちゃおけねえ。が、まだ信じておいてやろう……今は。

十代と二人でえっちらおっちらボートを漕いでブルー女子寮へ。
そこには案の定、両手を縛られた翔を囲むようにして明日香とその取り巻きである枕田ジュンコと浜口ももえ、そしてアテナがいた。
「アニキ～セツ君～」
「翔！　これは一体どういうことなんだよ！」
「それが、話せば長くなるようなならないような……」
「こいつが女子寮の風呂を覗いたのよ」
「なんだって？」

「だから覗いてないって！」
原作通りならそうなんだろうが……。
「それが学校にバレたらきっと退学ですわ～」
「そんな～！」
「そこで、提案なんだけど……」
明日香が俺たちを指さしてきた。人を指差しちゃいけないんだぞ。
「私たちとデュエルしなさい。貴方達が勝ったらこのことは水に流してあげるわ」
揉め事はデュエルで解決。いいねー平和だねー。しかし……。
「私と十代、御堂君は……アテナとね」
「は、はい！　よろしくお願いしますセ……」
「ちょい待ち！」
「なに？　何か問題でも？」
大アリだ。この返答如何で、俺はそっちの味方に着くからな。
「アテナ……お前も覗かれた、のか？」
「へ？　あ、いえそれはその……」
「その返答次第では……俺はむしろ率先して翔を吊るし上げる側に回ることに……」
「ちょ！？　違うッス！　僕はやってないッスよ～！」
「本当か？　天地神明、お天道様に誓えるか？　己がデュエリスト魂に賭けて自分は清廉潔白だと主張できるか？」
「え？　せ、セツ君？」
「あいわかった俺はそっちに「わ～！　誓うッス！　主張するッスよ～！」……いいだろう。お前を信じよう」
始めからわかってました的な笑顔を見せてやる。
「お前、性格悪いぞー」
「いや、わりぃ。だが告白までしてくれた娘の風呂覗かれてたら俺だって向こう側に着くことになるのは当然だろぃ」

「……よかったじゃない。結構普通に愛されてるわよあなた」
「はぅぅ……セツ……」
「くっ！　なんか妬ましいわ！」
「御堂さんも中々のイケメンですしね～」
……向こうは向こうでなにやら騒がしいが、ともかく。
「じゃあデュエルは十代と天上院。俺とアテナか？　いや、当事者がデュエルなしってのもおかしな話か。んじゃ、そっちは残りの二人からどっちか選出してくれ」
「そうね。確かにそれは妥当な提案だわ」
「じゃあ、３ＶＳ３で二本先取のチーム戦ってことでおｋ？」
「ええ。それで構わないわ」
「まあなんでもいいや！　待ってろ翔！　お前の無実はオレたちで晴らしてやるからな！」
「うぅ～ありがとうアニキ～」
「しゃ～ねえ。まあアテナとのデュエルってのは面白そうだし、俺も頑張ってやらぁ」
これも本音だ。あの『アテナバーン』チックなデッキにはかなり興味がある。明日香と十代は……多分原作通り『サンダー・ジャイアント』で勝つだろ。で、俺が勝てばそれでお仕舞い。けど、アテナの奴も強いしな。下手すりゃ翔までもつれ込む。……うん？　もしかしてもつれ込んだ方がいいのか？　だってそもそも当事者は翔なんだし……まあ、それで翔が退学になっても寝覚め悪いし、勝つに越したことはないだろ。
「「デュエル！！」」
おっ、始まった始まった。とりあえず観戦観戦。

しっかし、改めてみるとなんという運ゲー。戦略云々よりも『引

き』の強さが第一じゃね？　そら十代強いわ。毎ターンディスティニードローみたいなやつだし。

そうこう言う間にとっとと終盤。

「一気に決めるぜ！『サンダー・ジャイアント』の特殊効果発動！『サイバーブレイダー』を破壊！　そして相手プレイヤーにダイレクトアタックだ！『ヴォルテック・サンダー』！！」

「あぁぁぁ！」

「明日香さん！」

「大丈夫でございますか？」

おおー決まった決まった。さて、次は俺の番だな。

「うし。ナイス十代！　これでプレッシャーなしに戦えるってもんだ」

「おう！　決めちまえ、セツ！」

「……いや、それはいいんだけどな。ここでもし俺が決めたら、翔は当事者のくせにデュエルしないというなんとも矛盾した結果になるんだが……」

「い、いいじゃないッスか！　細かいことは言いっこなしッスよ！」

「……貸し一だぞ」

まあ、明日香の目的は翔がどうこうってより俺らの戦力調査だろうし、ぶっちゃけ翔がどうなろうと構わないんだろうな。

「よっし、そんじゃあアテナ！　やろうぜ」

しっかりとアテナを見据えて、デュエルディスクを展開する。

「……ひゃ～」

「ん？　どした」

「あらあら、御堂さんっていざデュエルとなると顔つきが変わってイケメンレベルが増しますわね♪　思わず見惚れてしまいますわ～」

……そんな嬉し恥ずかしな評価はやめてくれ。ある意味それって顔芸扱いされてる気分になるから。

「ん、んんっ！　ほらアテナ。いつまでも惚けてないで、しゃきっとしなさい！」

「……っは！？」
アテナ起動。
「す、すみません。……それでは一戦、お願いします！」
！　……ははっ。
「お前も、いつもとは顔つき違うぜ。プレッシャー感じるよ」
「光栄です。ボケっとしたままじゃ、カードに失礼ですからね」
……やべっ、こいつ改めて良い女かもしれん。
「んじゃ、俺も手加減なしだ。文句ないよな」
「はい。正々堂々、全力で！」
「「デュエル！！」」
「つーことで先攻もらうぜ！　ドロー！」
全力でってことならレディーファーストもなにもないよな！
「魔法カード『増援』発動！　デッキから『クィーンズ・ナイト』を手札に加える！」
『増援』は、デッキから星４以下の戦士族を手札に加える戦士族のサーチカードだ。『クィーンズ・ナイト』がなければ展開が始動しない俺のデッキには必須ともいえるカードである。
「！　来ましたね」
「手札から『切り込み隊長』を攻撃表示で召喚！　特殊効果発動！」
『切り込み隊長』ＡＴＫ１２００
『切り込み隊長』は召喚時に手札の四つ星を特殊召喚できる上、自分以外の戦士族を攻撃対象から外してくれる戦士族のキーカード！
「『クィーンズ・ナイト』、来ますか！」
「ところがどっこい！　俺は『戦士ラーズ』を攻撃表示で特殊召喚！　効果発動！」
『戦士ラーズ』ＡＴＫ１６００
『戦士ラーズ』は戦士族のサーチャー。四つ星以下の戦士をデッキの一番上に持ってくることができる。これだけだとドロー一回分のディスアドバンテージだが……。
「『キングス・ナイト』を選択し、デッキの一番上に！　さらに手

札から『強欲な壺』を発動！　デッキからカードを二枚ドロー！」
「……速い！」
　これでキングとクイーンが手札に揃った。あとは……。
「永続魔法『連合軍』！　さらにカードを一枚セット、ターンエンドだ！」
　『切り込み隊長』ＡＴＫ１２００→１６００
　『戦士ラーズ』ＡＴＫ１６００→２０００
「すっげー！　めちゃくちゃ良い感じじゃねーかセツ！」
「……とんでもないデッキ回りの良さね。強運もあるんでしょうけど、一枚一枚が無駄なく作用してる」
　確かに、試験の時といい今といい大した鬼引き。……メインキャラ補正か？
「……さすがセツですね。私も、負けてはいられません！　ドロー！」
　さあて……どう回してくる？　こっちの場は現在攻撃力１６００の『切り込み隊長』に攻撃力２０００の『戦士ラーズ』。攻撃力の高い天使デッキならなんとかなりそうなレベルではあるが……。
「『ヘカテリス』の効果発動！　そのままヴァルハラ発動です！　呼び出すのは『光神テテュス』！」
　『光神テテュス』ＡＴＫ２４００
　アテナのフィールドに、一体の天使が現れる。あいつは確か、ドロー補助の上級天使！
「さらに『ジェルエンデュオ』を攻撃表示で召喚！　私も手札から『強欲な壺』を発動です！」
　『ジェルエンデュオ』ＡＴＫ１７００
　アテナはデッキからカードを二枚ドローする。
「私は『勝利の導き手フレイヤ』をオープンして『光神テテュス』の効果でカードをドロー！『アテナ』をオープンし、さらにドロー！」
　っ！『アテナ』が手札に行きやがった。しかもまだドローは継続

中。
「『ヘカテリス』をオープン、ドロー！『シャインエンジェル』オープン、ドロー！」
うわ、いつまで続くんだよ。
「ドローは終了します。バトルフェイズ！」
来るか！
「『ジェルエンデュオ』で『切り込み隊長』に攻撃！『セイント・アタック・デュオ』！」
「トラップ発動！」
「！？」
悪いな。そう簡単にはいかねえぜ！
「永続罠『血の代償』！ライフを５００ポイント支払って手札から『クィーンズ・ナイト』を攻撃表示で召喚！　さらに５００支払って『キングス・ナイト』も召喚！　効果で『ジャックス・ナイト』を特殊召喚！」
セツＬＰ３０００
『切り込み隊長』ＡＴＫ１６００→２２００
『戦士ラーズ』ＡＴＫ２０００→２６００
『クィーンズ・ナイト』ＡＴＫ１５００→２５００
『キングス・ナイト』ＡＴＫ１６００→２６００
『ジャックス・ナイト』ＡＴＫ１９００→２９００
俺の場にトランプの三騎士が一気に並ぶ。流石に壮観だ。
「っ！　攻撃は巻き戻されます。私はカードを一枚セットしてターンを終了します」
アテナは手札から溢れた『ヘカテリス』と『シャインエンジェル』を墓地に捨てる。
「すごい！　すごいッス！　いきなりモンスターが五体並んだッス！」
「けど、これで手札はあと一枚。ライフも消費したし、テテュスのおかげで手札が大量にあるアテナと、どっちが有利とは言えないわ」

そうなんだよな～。手札が揃ってるのはいいんだけど、その分一気に使ってしまうからな。もしアテナが伏せたのがミラーフォースとかだったら一発で覆されて終わりだ。

「よっし、俺のターン、ドロー！」

引いたカードは二枚目の『クィーンズ・ナイト』。

「……どうすっかなー？」

全軍で攻撃すれば勝てる。テテュスは２４００だし、テテュスを倒せれば『ジェルエンデュオ』は自壊してくれる。だが……。

「怖ぇ～な～あのリバースカード」

あれが『聖なるバリア・ミラーフォース』や『閃光のバリア・シャイニングフォース』だと十中八九負け。『次元幽閉』や『万能地雷グレイモヤ』、『炸裂装甲（リアクティブアーマー）』で『ジャックス・ナイト』が除去されるのもやばい。ＬＰ的に『魔法の筒』も警戒対象だし……不確定要素が多すぎる。二枚ある手札もあんまし意味ないしここは……。

「……俺はターンエンドだ」

「え！？　マジかよ！」

「なんで攻撃しないんスか！？」

「……賢明な判断ね」

「どういうことだよ明日香」

「あの一見絶対的に有利な状況は、実は罠カード一枚で簡単にひっくり返ってしまうのよ。ただでさえテテュスで豊富な手札があるアテナに、迂闊な攻撃はできないと判断したんでしょうね」

「天上院、その説明ずばり図星だよ」

むしろ、ある意味では追いつめられているのは俺の方だ。遊戯さん曰く、『手札の数だけ可能性がある』だったか。それは逆に取れば、手札のない今の俺には可能性がない。そして手札の豊富なアテナには大量の可能性があるってこった。

「アテナは間違いなく最高クラスのデュエリストだ。イノシシみたく突進するだけで勝てるとは思えねえよ」

とはいえ、正直『アテナ』が出せる状況下であんまりもたもたし

てはいられねえ。あいつは間違いなく次のターンで『アテナ』を出してくる。その上、もし『ライトニング・ボルテックス』なんか食らったら一発で負け確定だ。ああクソ！　なまじ知識があるから色々考えちまう。

「私のターン、ドロー！　『コーリング・ノヴァ』オープン、追加でドロー！」

ぬう。やっぱりテテュスはキツイ。あそこまで好き勝手ドローされるとなると早急に排除しなくちゃな。

「……う。私は『ジェルエンデュオ』を二体分の生贄としてリリースし、手札から『アテナ』を攻撃表示で召喚します」

……なんだ今の『う』は。もしかして、特に除去系カードがないのか？　確かにテテュスの効果の関係上、引けるのは殆どモンスターだが……。

「『アテナ』の効果を発動します！　テテュスをリリースしてテテュスを蘇生！」

「うあ！」

セツＬＰ２４００

「テテュスで『切り込み隊長』を攻撃！『ホーリー・サルヴェイション』！」

「くそっ！」

セツＬＰ２２００

「『アテナ』で『クィーンズ・ナイト』を攻撃！『ジャッジメント・レイ』！」

「うぅ！」

セツＬＰ１９００

やば、そろそろキツイ……！

「ターンを終了します！」

アテナは手札から溢れた『勝利の導き手フレイヤ』を墓地に捨てる。

「うわわわ……セツ君大丈夫かなぁ」

「どっちもすげえよ！　まだ序盤のはずなのに終盤みたいな闘いしてやがる！」
「……ほんと、そういえばまだお互い二ターンしか経過してないのよね。どっちもすさまじい速攻デッキね」
我ながら同感。つーかやばい。マジでやばい。どうにかしないと……。
「っく！　俺のターン、ドロー！」
こいつは……。よし！
「なんとかしてやる！　魔法カード『悪魔への貢物』！」
正直ギリギリだが、望みを繋いでやるさ！
「こいつはフィールドの特殊召喚されたモンスターを墓地に送って発動する！　アテナの場の『光神テテュス』を墓地に送り、手札から『クィーンズ・ナイト』を攻撃表示で特殊召喚！」
「テテュス！？」
『悪魔への貢物』は条件こそ通常モンスター限定だが、ある意味ノーコストの『ディメンション・マジック』だ。ほんとならアテナに使いたかったが、アテナは普通にアドバンス召喚されているので使えない。
「さらにカードを一枚セット、ターンエンドだ！」
これで手札は尽きた。次にアテナが何らかの除去カードを引いたら俺の負け。そうでないなら俺の次のターンに望みを繋げる！
「終わらせます！　私のターン、ドロー！」
どうだ！？
「……私は『コーリング・ノヴァ』を攻撃表示で召喚します。『アテナ』の効果起動！」
セツＬＰ１３００
「『コーリング・ノヴァ』を墓地に送ってテテュスを復活！『アテナ』の効果！」
セツＬＰ７００
「せ、セツ君……」

「……終わったわね」
「バトルフェイズ！　テテュスで『クィーンズ・ナイト』を攻撃！
『ホーリー・サルヴェイション』！」
セツＬＰ６００
「トラップ発動！」
まだだ、まだ終わっちゃいねえ！
「『正統なる血統』！　墓地から『クィーンズ・ナイト』を蘇生！」
「っ！『アテナ』で『クィーンズ・ナイト』を攻撃！」
すまん、『クィーンズ・ナイト』。何度も何度も墓地送りにしちまう。
セツＬＰ３００
「う……ターンエンドです」
「俺のターン……」
どうする……正直、俺の勝てる目は薄い。アテナがいる以上、間違いなくこれがラストターンだし、手札はゼロ。フィールドには『ジャックス・ナイト』、『戦士ラーズ』、『キングス・ナイト』の三体。一番攻撃力の高い『ジャックス・ナイト』でも２５００。『アテナ』には一歩届かない。モンスターを引ければ……だが、あの伏せカードは……。
そこでふと、『ジャックス・ナイト』がこちらを見つめていることに気付く。コクリ、と頷かれる。
「……そうだな。普段バーンデッキとかばっか使ってるから、どうしてもビビっちまっていけねえ。けど……」
攻撃しなけりゃ次のターンで『アテナ』にやられる。あの伏せカードは確かに怖いが……。
「アテナ……」
「……なんですか？」
「やっぱ、お前強いな。正直、ここまでとは思ってなかった」
「ありがとうございます。セツも強かったです。私の速攻にここまで着いてきたのはセツが初めてです。でも……」

「でも？」
「今回は、私の勝ちです」
「はは……」
確かに、こりゃ絶望的な状況だ。けど……けどなアテナ。
「トランプの騎士に、後退の二文字はねえ！」
「！」
「俺のラストドロー！」
！　モンスター……じゃない！　けど！
「すまん！　またお前に頼る！　魔法カード『戦士の生還』！　墓地から呼び戻すのは『クィーンズ・ナイト』！」
手札に呼び戻した『クィーンズ・ナイト』を、再び攻撃表示で召喚する。
「っ！　また……蘇生カード！？」
蘇生はアテナ……お前だけのもんじゃねえ！
「悪かったな皆。俺はお前たちの『王』なのに……罠と決まったわけでもないリバースカードにビビっちまってよ！　なあ十代！　お前なら、さっきどうしたよ！？」
俺が攻撃宣言するかどうかで勝敗が決定する……そんな状況下であいつが……。
「！　当然、攻撃だぜ！」
「だよなぁ！　前門の虎、後門の狼。それなら俺は前門に行く！　倒れるときは前のめり！　好きな言葉は全速前進！　バトルフェイズ！」
攻撃しないはずないよなぁ！
頼もしい騎士たちが、その四つの剣を煌めかせる。
「『ジャックス・ナイト』！『アテナ』を攻撃！『ブレイク・ソード』！」
「っあぁ！？」
『ジャックス・ナイト』が『アテナ』を切り裂く。リバースカードは……発動しない！

アテナＬＰ３９００
「『ジャックス・ナイト』に続け！『戦士ラーズ』の攻撃！『レギュラー・ソード』！」
『戦士ラーズ』の剣がテテュスに突き刺さる。同時にテテュスの放った光弾がラーズを吹き飛ばす。
「犠牲を無駄にするなよ！　キングとクィーンで、プレイヤーにダイレクトアタック！」
「そんな……ホントに、あの状況から……あぁぁぁぁぁっ！？」
アテナＬＰ０
「っしゃあ！」
思わず思いっきりガッツポーズ！
「やったぜセツ！」
「めちゃくちゃすごかったッス！」
「おう！　半端なくギリギリだったけどな！」
ああもうほんとにめっちゃその場凌ぎで後は十代バリの鬼引きでどうにかしたようなもんだ。危なかったぁぁぁ……。
「……負け、ちゃいました」
アテナはどこかポカンとした様子で座り込んでいた。目をパチクリさせて、ちょっと可愛い。
「アテナ」
「あ……セツ……」
「ぶっちゃけ、最後ら辺はラッキードローだったよ。結局イノシシ戦法だったしな」
「……いえ、そもそも二ターン目、セツが攻撃していたらその時点で私の負けだったんです。私の、完敗ですよ」
「う……そいつは言わんでくれ……ビビった自分が情けなくなる」
そう、あの俺のフィールドにモンスターが五体だったときに攻撃してれば多分、何の問題もなく勝負がついてた。結局あのリバースカードはブラフだったわけだし。
「いえ、あの場合躊躇するのが普通です。それを狙って伏せたんで

すから」
「そういやあのリバースカードはなんだったんだ？」
「『奇跡の降臨』です。ただ、手札に『神聖なる魂』がなかったので、結局使わずじまいでしたけど」
「うげ。そいつは助かったな……」
「とりあえず……」
十代が明日香の方を向く。
「これでオレたちの勝ちだぜ！　翔は返してもらうぞ！」
「……ええ、そうね。それが約束だもの」
「ア、アニキ～セツ君もありがとう～」
「明日香さん、いいんですか？」
「いいもなにも、そういう話だったんだもの。約束は守るわ」
「まあ明日香さんがそうおっしゃるのなら、わたくしにも否やはありませんわ～」
よし、なんとか丸く収まりそうだな。
「それじゃ、もう門限も過ぎてることだし、見つからないよう帰るとしようか！」
「おう！　じゃーな明日香！　お前らもめちゃめちゃ強かったぜ！」
「……ええ。けど、今回は私たちの負け。次は負けないわ」
「楽しみにしてるぜ！」
あ、そうだ。
「アテナ」
「はい、なんですか？」
「お前とのデュエル、楽しかったよ。好感度に＋だ」
「へ……？」
「じゃあお休み！」
なんか言われる前に速攻帰還！　全速力でオールを漕ぐ！　十代と翔がめっちゃニヤニヤしてるけど！　そ、それくらいは必要経費だ！（どっかの空気男っぽく）
そうして、偽ラブレター事件は俺が夜通しからかわれる形で幕を

閉じた。……ちくせう。

おまけ

「はぁうぅ～」

「ちょ、アテナ、しっかりしなさいよ！」

「……最後のセリフ、むしろアテナの好感度に＋補正かかったわね……」

「わたくしの好感度にも＋ですわ～。やっぱり良い殿方はああじゃありませんと～」

第三話「偽ラブレター事件！　アテナとのデュエル」（後書き）

はい、というわけで第三話でした。
お気付きの方もおられるでしょうが、アテナはひとつプレイングミスをしています。切が『血の代償』の効果でモンスターを五体並べたときです。あの時、攻撃力２４００の『光神テテュス』であれば攻撃力が２２００だった『切り込み隊長』をあのターン中に倒せていたことになります。
　このミスは話の展開上、切に勝たせるために仕方なく配置したミスでもありますが、一応意図的でもあります。アテナたちもまだまだ学生。一つのミスもなく戦い続けられることなどあり得ないと僕は思っております。自身も、遊戯王をやって長い身ですが、いまだによくプレイングミスを冒します。それが学生の、しかも１３（数えで）のアテナならなおさらでしょう。これは今後も出てくることで、切もプレイングミスを行います。まあ、作者のミスの言い訳くさいですけどね（笑）。
　さて、次は試験の話ですね。純粋に試験というよりは、新たなキャラや新たな設定、新たな伏線など、ごちゃごちゃとした話になってしまうかとも思いますが、どうかお付き合いのほどを。
　んではでは、ご意見ご感想については常に大歓迎いたしております。レーネスでした。

第四話「月一試験！　そして新たな精霊！」（前書き）

そろそろストックが尽きてきた四話目です。今回はデュエルなし。タイトル通り新しく精霊が一人増える感じです。デュエルは次話ですね。

それでは、第四話どうぞ。

第四話「月一試験！　そして新たな精霊！」

アルカナ～切り札の騎士～

第四話「月一試験！　そして新たな精霊！」

「メザシとエビフライは俺のジャスティス！」
「……いきなり何言ってんスか？」
「とゆーわけで、俺は明日の試験サボる。おやすみー」
言うだけ言ってさっさと布団に潜り込む。
「ちょ！？　何考えてるんスか！　明日の試験でラー・イエローに昇級できるかが決まるんだよ！？　それをサボるって……」
えーだって。
「この寮意外と居心地良くてさー。メザシもエビフライもおいしいし、出ていく気が失せた」
ちなみに、本心だ。メザシいいよね。日本人の心だよ。
「メザシごときのために昇級のチャンスをふいにするとかありえないッスよ！」
「……お前は俺の大切なものを土足で踏み躙った！」
「どんだけメザシ好きなんスか！」
ネタだよネタ。好きなのは事実だが。
「でもほら、十代も寝てるし」
「アニキはサボるんじゃなくて試験自体気にしてないっぽいッスからね……」
「だしょだしょ？　ぶっちゃけ俺ならペーパーテスト程度ならラク

ラク通過できるし、実技の方は別に上の寮上がらなくたってできるじゃん。てか、レッド寮で十代相手にデュエルする方が絶対有意義だし。よって結論。実はこの寮天国」

「……その無駄な自信が心底うらやましいッス」

翔はずっと『死者蘇生』に向かって祈り続けている。……よし、『死者蘇生』を『降格処分』と入れ替えておこう。いや、むしろ『墓場からの呼び声』の方にするか。

ピッピー、ピッピーと最近すっかりお馴染となった電子音。メールボックスを開く。

『アテナです。セツ、明日はとうとう月一試験ですね！　応援に行きますので、頑張ってください！　セツがオベリスク・ブルーに来る日を待ってます』

「すまん翔。俺も明日、出ざるを得なくなった」

「……もうベタ惚れじゃないッスか。なんで告白オッケーしてないんスか？」

「別に惚れてるからってわけじゃねー。それを別にしたって可愛い女の子が応援してくれるってのに頑張らないのは男の子として恥ずべきことだ」

いや、確かにこないだのデュエルでかなり心が揺れたのも事実なんだが。

『そもそも主様。わたくしたちの主として、不真面目な生活態度は看過できませんわ……不純異性交遊などはもっての外です！』

『わしはいいと思うんじゃがのー。キャワイイオンナノコのために頑張る方が精神衛生に良いわい』

『私は……その、ノーコメントとさせていただきます』

「だぁ！　お前ら三人場所取り過ぎ！　この部屋せまいんだから、出るならせめて一人ずつ！　三人一遍に出てきたら人口密度が高すぎる！」

いつものように唐突に現れては説教してくるクィーンたちをカードに戻す。いや、キングの爺さんは説教とかしないけど。むしろ煽

ってくる。
「けど試験はめんどいなー。俺の嫌いな言葉ベスト１００くらいには余裕で入るぜ」
「嫌いな言葉、そんなにあるんスか？」
ノリだよノリ。いやまぁ、嫌いだが。
「ほれ翔、そこの問い7、間違ってるぞ」
「へっ！？　あ！　ホントだ」
「あと、そこの大問3、軒並み違う。つーかお前、各所にケアレスミスが目立つな。焦り過ぎ慌て過ぎ」
「うぅ……ホント、無駄に賢いのが悔しいッス」
そらそうだ。せめて賢くなきゃオタクはただのニート予備軍だからな。これでも俺、勉強においてはクラスでも相当優秀だった。
「しゃーねい。臨時の家庭教師してやるぜい。貸し二な」
「雪だるま式に借りが増えていくッス～」
「んじゃやめるか」
「あわわ、お願いします！」
よっこいせと体を起して翔の勉強を見てやる。
「いいかー。お前そこまでバカじゃないんだから慌てず落ち着いて行けや～。ほれまたケアレスミス」
「あうう～」
言ってるそばから。
「……ふむ。翔、やっぱ今日はもう休め」
「けど……」
「お前に必要なのは心の余裕だな。なにがあったか知らんけど、急がば回れ、急いては事を仕損じる、だぜ」
「うん……」
「だーいじょぶだぁって。落ち着いて～余裕持って～翔はできる子元気な子～」
なんか小さい子相手にしてる気になってきた。だって翔、必死に背伸びしてる子供みたいだし。

「ありがとう……でも、せめてもうちょっとだけやってからにするッス」
「……ったく、しゃーねーのー。明日居眠りしても知らねーぜ？」
「大丈夫ッス。セツ君こそ、また入学試験の時みたいに回答欄ずらして書かないようにしなよ」
むぅ、面倒なことを覚えてやがる。そもそも実質俺はその試験受けてねーし。
「ま、別に落ちてもタマ盗られるわけじゃあるまいに。気楽に行こうや」
ポンポンと翔の頭を撫でてやる。って、マジで子供扱いだな俺。現実年齢なら兎も角、ここじゃ歳変わらんってのに。
……さぁて、俺もアテナに返信してから寝るとしますか。

翌朝。原作通り、トメさんを手伝っていた十代が遅刻ギリギリに会場へ入ってきて、万丈目との一悶着。試験開始。五分で全部埋めてやった。楽勝。
「お疲れ様ですセツ。どうでしたか？」
「おーお疲れアテナ。ぶっちゃけ楽勝」
「わぁ！　ホントですか？　回答欄ずれたりしてないですよね？」
「流石に連続でそれはねーって。つか、十代ってば開始一分で居眠りとか。翔も船漕いでたし」
原作では翔もたしか十代と一緒に居眠りしてたはずだから、前日に寝るよう勧めといた甲斐は一応あった、ってことかね。
「三沢ー？　お前は十代たちとカード買いにいかねーの？」
「セツか。いや、俺は今の自分のデッキを信頼しているからな。特に新しいカードを買うつもりはない」
「んだなー。つーか試験直前に新しいカード買って入れても計算狂うだけだしな」

「まったくだ。デッキの構築は緻密な計算式の上に成り立つ。その場しのぎでどうにかするものじゃない」

全面的に同意。が、ぶっちゃけこの世界じゃ、大事なのって計算よりリアルラックなんだが。十代が計画立ててデッキ構築してるとは思えん。あの鬼引きがなきゃ回らねーよあんなバランス悪いデッキ。

「アテナの方は？」

「えと、私も大丈夫です。この間のデュエルでちょっと気になったとことか修正したので、今日の試験で試してみようかなぁって」

「な～る。まさにテストデュエルってわけだ」

「はい！　ちなみにこんな感じなんですけど……」

アテナにデッキを渡される。……んー。

「やけにモンスター比率の高いデッキだな」

三沢に同意。

「あー、もしかして、テテュスがいるからか？」

「はい。それと『アテナ』の効果も効率よく使うために……」

ん？　今『アテナ』のカードが光った気が……おわっ。

『……んぇ？　ふあ、あぁぁぁ。よく寝たわー』

……精霊こうりーん。つか、なんか軽いんですけど。『アテナ』がなんかめっちゃ軽い感じなんですけど。

『ん～？　あー、キミよね。あたしを目覚めさせてくれたの』

「目覚めさせたって……あんた、アテナのカードだろ」

『そうよ。私はアテナ』

「……ベタな。んや～そうでなくて。そっちの子、アテナってんだけど、お前さんのマスターはソッチ」

『ああ、そういうこと。みたいね。結びつきを感じるわ。けど、まだ見えてはいないみたいね』

「そうなん？」

『ええ。だから今の貴方ははたから見てとてもイタイ子』

……それはよ言ってくれい。確かになんかアテナ（人間）と三沢

の視線が痛い。
「えっと、セツ？」
「……あーいや、気にしないでくれ。ちょっと幽霊さんとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆してただけだから」
『幽霊とはお言葉。これでも天使よ？　偉い天使さまよ？』
「黙っとれ」
「セツ、昨日ちゃんとゆっくり寝ました？　疲れてません？」
「……憑かれてはいるかもな」
上手いこと言った。座布団プリーズ！
「ほ、保健室……とか」
「いらんいらんいらん！　俺平気！　俺正常！　全然だいじょびだから！」
っく！　おいそこの幽霊モドキ！
『せめて精霊って言ってねい』
「どうでもよろしい。後で話聞かせれ。今は黙れ」
『注文の多い……』
「料理店でもなんでもいいからとにかく黙れ。俺の社会的ＬＰがそろそろゼロだ」
『もうゼロっぽいわねえ……』
見ると、すでに三沢は自分の席に戻ってデッキをいじっていた。とりあえず、こっちを向く気はなさそうだ。ちくせう。そんなだからやがて空気君としてフェードアウトしていくんだい。
「セツ……」
ノウッ！　アテナがなんか憐れんだ目でこちらを見ている！　マズイ！　こうなりゃ自棄だ。無理を承知でアテナ（人間）にもアテナ（精霊）が見えるようにしてやる。
「アテナ、よく聞いてくれ」
がっしと肩を両手で掴んで目を合わせる。
「は、はいっ」
「……ちょっとこの辺りに注目して見てくれ」

アテナ（精霊）の居る辺りを指差す。『人を指差しちゃいけないでしょー』だかなんだかほざいているのは無視。
「なにか……見えないか？」
「え、えっと……」
……っく！　あまり使いたくなかった手だが、背に腹は代えられん。
「見るんだ！　愛の力で！」
「あ、愛!?　がんばります!!」
『なんやねんそれ』
なんか俗っぽいツッコミが聞こえた気がするけど努めて無視。
「むむむ……っは!?」
『うっそ、成功!?』
「あ、『アテナ』がいます！」
俺もまさか本当に成功するとは思わなかった。
「マジか……ひゅう、こいつはびっくりだぜ」
愛、恐るべしと言ったところか。
「せ、セツ。なんでソリッドビジョン通してないのに『アテナ』が？　一体どういう……」
「まあ経緯はともかく、見えるようになったなら話は早い。そいつはカードの精霊っつーやつでな。ときどき出る」
『出るって……どこまでも幽霊扱いしてくれるわね』
やかまし。てめえの所為で俺の人としての尊厳が最低ラインまで貶められたんでい。
「もしかして、セツも持ってるんですか？」
「んぁ？　まあなー。クィーン」
『……はい』
呼びかけてみると、心なしかムスッとした様子のクィーンが現れた。
『……なにかご用でしょうか』
ありゃりゃ、とってもご機嫌ナナメ。

「わ、『クィーンズ・ナイト』ですか？　なるほど……ってなんか私睨まれてます！？」

そりゃもうすごい形相だ。このっ……小娘が……！　ってな具合である。……失敗したな。ジャック辺りにしとけばよかった。

「というわけでジャックー」

『……主様。できれば収拾つかなくなったら私を呼ぶのは勘弁していただけませんか？』

「うん。それ無理」

使いやすいセリフだ。そして使われたらイラッとくるセリフだ眉毛さん。

『はぁ……ほら、クィーン。主様が迷惑していますよ』

『……わたくしとて、好きで不機嫌になっているわけでは……』

『それはわかっています。貴女も女であることも。ですがそれでも、貴女は騎士なのですから。主君を困らせることはなりません』

『……はい。申し訳ありません主様』

よし。丸く収まった。ジャックの不幸は能力があることだな。

「まあ、こんなやつらだ。あと、一応『キングス・ナイト』もいる」

めっさ好々爺チックだが。

「精霊って……結構一杯いるんですね」

「どうだろね。俺が知ってる限りじゃ、十代の『ハネクリボー』くらいだけど」

「見たいです！　『ハネクリボー』は是非とも見たいです！」

わお。すごい食い付き。まあ『ハネクリボー』可愛いしな。

「あと、もうわかってるかもしれんけど、普通の人にゃ見えんから、人前では話さないほうがいいな。……さっきの俺みたいになるから」

さっきの俺を思い出したのか、アテナ（人間）は目を逸らして乾いた笑いを浮かべる。ってか、いい加減このアテナ（人間）っての面倒だな。

「なあ、こいつに名前つけてやろうぜ」

「名前……ですか？　アテナじゃ……」

「紛らわしい。アテナって呼ぶだけじゃどっちに呼びかけてんだかわかりゃしない」
『それもそうねえ……まあ、人間界での俗称くらい付けてもらってもバチは当てないわよ』
当たらない、じゃなく当てない、なんだな。流石天使。
「んー。セツ、なにか良い名前あります？」
「んにゃ。お前の精霊なんだし、お前がつけんのが妥当じゃね？」
そも、俺にネーミングセンスを求めんな。めちゃ厨二な名前つけんぞ。
「じゃあ……シャルナ」
『それでよし。決定よ』
即断即決！？
「ま、良い響きではあるな。どうやって考えたんだ？」
俺がそう尋ねると、アテナはちょっと恥ずかしそうに頬を染めてはにかんだ。
「えと、フィーリングで……」
『……狙ってこの名前ならびっくりだけど、偶然でってのも逆に驚きね』
「なんか言ったかシャルナ」
『何でもないわ。それよりセツ、そろそろ試験とやらが始まるんじゃなくて？』
うお、確かに。そろそろ始まる時間じゃん。
シャルナの登場ですっかり忘れていたが、実技試験がこれから始まる。
「よし、まあ気を取り直して行ってみますか！」
「セツ、がんばりましょう！」
アテナの声援を受け、俺はさらにやる気をみなぎらせて実技試験に臨むのだった。

第四話「月一試験！　そして新たな精霊！」（後書き）

第五話でしたー。……えー今までの話以上にいろいろと言いたいことはあるでしょうが、一応言い訳。

なんかふつーに主人公勉学優秀だった裏設定。入学試験では回答欄を間違えていたおかげで赤点ギリギリ。本来の学力は、前話でも自分で言っていたように三沢にだって負ける気しません。いやむしろ、現実のアドバンテージでデュエル関係については三沢を上回るでしょう。

次に、なんか精霊が簡単に出てきちゃっていますが、これについては次話で解説いたします。その他ご質問ございましたら感想の方で。

ご意見ご感想は随時募集いたしております。レーネスでした。

第五話「月一試験！　セツの能力」（前書き）

祝！　一万ＰＶ！　流石遊戯王。拙い文でもあっさり大台。名前負けしないようにがんばります！

というわけで第五話です。今回のデュエルはちょっとあっさり気味。っていうか、そろそろネタが尽きてきた……プロットに近いものはあれど、まだまだ練りが甘いなぁとかいっちょ前に考えちゃったりしている初心者、レーネスでした。

第五話「月一試験！　セツの能力」

アルカナ～切り札の騎士～

第五話「月一試験！　セツの能力」

「それでぇ～わ。これより恒例月一試験実技試験を始めるノ～ネ」
相も変わらず特徴的なしゃべりしてるよな。クロノス先生。ん？
今こっち見たか？
『主様、あの教官の目、常ならぬ不穏な光を感じます。お気を付けください』
「ああ、わかった。ありがとなジャック」
『いえ、これも騎士の務めでありますれば』
ふぅむ。原作だと十代が目をつけられててクロノス先生からレアカードもらった万丈目と戦うことになったはずだな。……俺も目をつけられた？　いや、特に先生の気に障ることはしてなかったはず……。
「あ」
もしかして、アテナとデュエルしたあのときか？　たしかあれってクロノス先生の策略だった筈だし、俺らのデュエルも見てたはず。この時分のクロノス先生はエリート意識が強くてオシリス・レッドに良い感情を抱いてなかったはずだから、もしかしてそれで？
「んー。つーとまた誰だか知らんが新キャラ登場か？　それとも脇キャラ？」
多分、俺の対戦相手はクロノス先生により操作されている可能性

が高い。
「……ま、誰が相手でもやることは同じか」
『御意。まさにその通り。わたくしたちは主様の意向のままに、相対するものを蹴散らして御覧に入れて見せますわ』
「心強いよ。ああ。トランプの騎士に敗退はねえ」
『無論でございますわ』
微笑む。綺麗な笑顔だ。……アテナさえいなけりゃ機嫌いいんだけどなぁ。
「次！　オシリス・レッド、御堂切！」
そうこうしている内に、どうやらお呼びがかかったようだ。
「セツ、頑張ってください！」
「うぃうぃ。まーちょろんとやってきますって」
気合の入った笑顔で応援してくれたアテナに軽く手を振って（アテナが来た瞬間、クィーンは引っ込んでしまった）、壇上に上がる。
「キミがボクの相手になるのかな。しかし、ボクも舐められたものだね。一年の、しかもオシリス・レッドが相手なんてさ」
はいオベリスク・ブルーのモブキャラ入りましたー。しかもどうやら上級生のご様子。
クロノス先生、ちょいと大人げなくありません？
「ま、お手柔らかにお願いしますよセンパイ」
ちょっと意識して嫌味っぽく返してやると、案の定センパイは簡単に逆上してくれた。
「ふん！　そんな顔でいられるのも今のうちだよ？　すぐにこの学園にいたくなくなるくらいの絶望を味あわせてやる」
「そのセリフ、すっごい小物臭、というかかませ犬臭がするのでやめたほうが……」
「な、何だと!?　も、もう容赦しない！　徹底的に潰してやるから覚悟しろよドロップアウト！」
親切に教えてあげただけなのに、なんて理不尽。一応オブラートに包んで「存在自体がかませ犬っぽい」とまでは言わないでおいて

あげたのに。
「き、きさ、きさま……！」
おろ？
「あ、もしかして口に出してました？　いやー……わざとです。メンゴ（笑）」
「……！！」
よし、まあ挑発はこんなもんでいいっしょ。つか、これ以上やると俺の周りからの評価が地に落ちる。
「そんじゃま、始めましょか」
「……まて。ここまでこのボクをコケにして、ただ戦うだけで済むと思っているのか？」
「なんすか？」
「……アンティだ。貴様が負けたら貴様の『アルカナ　ナイト・ジョーカー』をボクに渡せ」
急に小声になったかと思えば、アカデミアで禁止されているアンティを提案してきた。
というか、アルカナ単体で渡しても意味ないだろうに……。
「じゃあ、センパイが負けたら何くれるんですか？」
「そんな仮定は無意味だね。オシリス・レッドのドロップアウトが、エリートであるオベリスク・ブルーのボクに勝つなんてさ」
「それじゃ、そのアンティは成立しませんね。そんなこともわからないでゆーとーせーやってんすか？」
「ぐっ……このっ！　わかった、じゃあ万が一、億が一ボクに勝てたなら、なんでも好きなカードを持っていくといいよ。ま、ありえないだろうけどね」
「よっし、タダでカードゲット」
「……ぶっ殺す」
ありゃ、キャラ変わるくらい怒ってらっしゃる。いかんよー、デュエルにも冷静さが肝要なんですから。
「「デュエル！！」」

「ボクのターンドロー！！」
　目が血走ってらっしゃる。はてさて、一体センパイは何デッキなのかな？
「ボクは手札から『雷電娘々（らいでんにゃんにゃん）』を攻撃表示で召喚！　カードをセットしてターンエンド！」
　『雷電娘々』ＡＴＫ１９００
　うげ、攻撃力１９００かよ。なんか向こうで翔がはしゃいでるし。そういや彼のアイドルカードでしたね。
「さあ！　ボクのニャンニャンを倒せるモンスターがいるのかい！？」
　鼻の下伸ばしてニャンニャン言うな。キモイ。実にキモイ。ほら、なんか『雷電娘々』も心なしか顔が引きつってる。……あれ～？　まさか精霊カードじゃないよな？
「ま、とりあえず俺のターン、ドロー！」
　手札は可もなく不可もなく。得意の超速攻はできないにしろ、そこそこといっていい。少なくとも、怒りに我を忘れているようなセンパイ相手には十分だろう。
「俺は手札から、『切り込み隊長』を召喚。効果により『コマンド・ナイト』を攻撃表示で召喚。カードを一枚セットする」
　『切り込み隊長』ＡＴＫ１２００↓１６００
　『コマンド・ナイト』ＡＴＫ１２００↓１６００
　『コマンド・ナイト』は攻／守１２００／１９００。自分フィールドの戦士族モンスターの攻撃力を４００ポイントアップさせる実質攻撃力１６００の炎属性戦士族のモンスター。さらに自分フィールドに『コマンド・ナイト』以外の戦士族がいれば攻撃対象にならないといった防御能力もある。まあこれだけじゃ攻撃力１９００の『雷電娘々』には敵わないわけだが……。
「さらに手札から『連合軍』発動！　場の戦士族、魔法使い族の数だけ戦士族モンスターの攻撃力を２００ポイントアップする！」
　『切り込み隊長』ＡＴＫ１６００↓２０００

『コマンド・ナイト』ＡＴＫ１６００→２０００
「なに！？」
これでさらに４００ポイント攻撃力アップで二体とも攻撃力２０００。
「さらに手札から『撲滅の使徒』を発動！　その伏せカードを撲滅する！」
「そんな！　ボクの『雷の裁き』が三枚とも！？」
おーおーやっぱそんなカードだったか。『雷の裁き』は自分フィールドに雷族モンスターが召喚、反転召喚、特殊召喚されたときにフィールドのカード一枚を破壊するそこそこ優秀な罠カード。雷族か。除去カードが豊富で優秀な下級が多い種族だな。
「バトルフェイズ！『切り込み隊長』で『雷電娘々』に攻撃！『切り込み十字斬』！」
例によって技名はテケトー。
『きゃうううううんっ！？』
「ニャンニャーン！？」
相手ＬＰ３９００
『切り込み隊長』の剣で十字に切り裂かれた『雷電娘々』が消えていく。……な、なんか妙な罪悪感が！　見学者からのブーイングもすごい！　というか翔は後で覚えとけ！　なにブーイングを扇動してやがる！　勝負の世界は非情なんだい！
「……『コマンド・ナイト』でプレイヤーにダイレクトアタック！『エンチャントソード』！」
「ぐわぁぁぁっ！」
炎に包まれた剣がモブ先輩（仮）を襲う。ライフが一気に削られていく。
相手ＬＰ１９００
「俺はこれでターンエンド」
「くそっ！　ボクのニャンニャンをよくも……万死に値する！」
おいこら翔。全力で肯定してんな。空き缶投げ込もうとするな。

十代は頑張って止めてくれ。
「ボクのターンドロー！　ボクはモンスターを一体守備表示でセット。カードを一枚セットしてターンエンドだ！」
またそんな不用心な……。
「俺のターン。ドロー」
……あー、まあ勝てるけど、なんか釈然としないな。
「……俺は手札から……」
「ストップだドロップアウト！」
何生意気に韻を踏んでる。
「ボクの伏せカードを発動するよ。トラップカード『サンダー・ブレイク』！　手札から『電池メン単三型』を墓地に送って『切り込み隊長』を破壊！　ニャンニャンの痛みを思い知れ！」
『ぐおおおおっ！？』
逆った雷光が『切り込み隊長』を黒こげにして破壊する。……普通そこで破壊するのは『コマンド・ナイト』の方だろうに。そこまで憎いか。そして翔。小躍りするな。目障りだ。……まあ、どちらが破壊されてもやることは変わらない。
「俺は手札から『抹殺の使徒』を発動！　その裏守備モンスターをゲームから除外する！」
「なんだって！？」
除外されたのは『電池メン単一型』。なるほど守備力１９００か。堅いな。
「さらに俺は『コマンド・ナイト』をリリースして『ジャックス・ナイト』を攻撃表示で召喚！」
『ジャックス・ナイト』ＡＴＫ１９００→２１００
まさかこいつをアドバンス召喚する日が来ようとは。
「そんな……」
まあなんにせよ、これで勝ちだ。
「バトルフェイズ！『ジャックス・ナイト』でプレイヤーにダイレクトアタック！『ブレイク・ソード』！」

「うわぁぁぁぁぁぁっ！？」
相手ＬＰ０
「勝者、御堂切！」
うい勝利。……は、良いんだが、またクィーンの機嫌悪くなりそうね。しょうがないじゃん。キミ手札に来なかったんだもん。がっくりとうなだれているセンパイを尻目に舞台から降りる。すぐにアテナや十代たちが駆け寄ってきた。とりあえず翔を捕まえてヘッドロック。
「いたたたたっ！？　ちょ、やめてよセツ君！」
「黙れ。散々ブーイングしてくれやがってからに。昨日は勉強見てやったりもしたというのになんと友達甲斐のないやつだ」
そうして翔を軽くいじめていると、アテナがちょっと苦笑気味だったが、笑顔で称賛してくれた。
「それにしても、相手はオベリスク・ブルーの先輩だったのに、セツはやっぱり凄いです！」
「いやぁ、デュエル前に散々挑発してプレイングミス誘ったりもしたからな」
明らかに『サンダー・ブレイク』の使いどころがおかしかったし。普通攻撃に対するカウンターだろあの場は。そうすりゃギリで持ちこたえられもしたってのに。
「それに勝ったとは言っても、正直俺もミスしてた。反省点は多いな」
そう、実は俺も、挑発するのに調子乗り過ぎてプレイングミスをしていた。
「そうだな。あの時だろう？『撲滅の使徒』の発動タイミング」
「お、さっすが三沢。その通りだよ」
「なんか問題あったか？」
「普通、除去カードが手札にあったら、チェーン発動されないように自分フィールドががら空きの時に発動させておくんだ」
もしあの先輩が一ターン目に伏せていたのが『雷の裁き』じゃな

くて『サンダー・ブレイク』の方だったら『コマンド・ナイト』が破壊されて『雷電娘々』を倒せなかっただろう。
俺の伏せカードは『魔法の筒（マジックシリンダー）』だったから、なんとかなったっちゃーなんとかなったが、大きなプレイングミスには変わりない。
「……ほへ～、そんなこともあるんスね」
「……一応、初歩的な戦術だぞ。ミスった俺が言えた義理じゃないが」
おっとそうだ、アンティがあったな。
「すまん、ちょっと待っててくれ。すぐ戻る」
皆にそう断りをいれ、未だガックリ来たままのモブセンパイに近づく。
「センパ～イ。アンティもらっていきますね～♪」
そう言って俺はカードをいただく。……デッキ丸ごと。
「っな！？　待て、アンティはともかく、なぜデッキごと！」
「だってセンパイ、アンティのときなんでも好きなカードを持っていくといいって言ったじゃないですか。ほら、俺嫌いなカードってないので『好きな』カード、もらっていきますね♪」
「ふ、ふざけるな！」
「いやいや、俺は別にふざけたりしてませんって。センパイがアンティ提案したときに調子乗ってアバウトな指定したのが悪いんだし」
「ぐ……」
「大体、アンティってのは基本等価交換ですぜ。俺の『アルカナナイト・ジョーカー』に釣り合うのなんて持ってやしないでしょ。校則違反は黙っててあげますから、デッキ丸ごと頂戴します」
そも、本来校則違反なアンティ持ち出したペナルティと思えば安いもんだろう。
「……っくそぉ！」
反論はない様で、またさらにうなだれてしまったセンパイをとりあえず無視して皆の下へ。
「おまたへ～」

「……お前、そのカードどうしたんだ？」
「親切で優しいセンパイからの贈り物」
その言葉で三沢は大体の事情は察したらしく、「しょうがないやつだな」と苦笑していた。
「それ、さっきのオベリスク・ブルーの人のデッキッスよね？　じゃ、じゃあもしかして……」
「ん？　ああ、もしかして『雷電娘々』か？」
聞くとすごい勢いで頷かれる。そこまで好きか。
「えーと、あった。これだ……な？」
『えへへ～こんにちわっ』
……ははは、なんかいるや。
『あっらー。また目覚めさせちゃってまあ』
「せ、セツ。『雷電娘々』が……」
「おー！　新しい精霊だな。オレ、遊城十代。よろしくな！」
十代は順応早すぎ。何故違和感なく受け入れるし。
『いやー助かったよ。あいつんトコから解放してくれてホントありがとね！』
「解放？」
『あいつすっごくキモイんだよ。夜自分の部屋でボクのカードに頬ずりしたりしてて怖気が走るったら』
それはひどい。
あのモブ（変態）んなことしてたんかい。
「せ、セツ君。そ、その良かったら僕にそのカード交換……いや、せめて良く見せてくれないかな……」
「……とかなんとかエロガキがモノ申しておりますがどないします？」
『ごめん、勘弁して。なんかその子からはあいつに似た雰囲気を感じるよ。断固お断り』
……哀れ翔。せっかくアイドルカードの『雷電娘々』の精霊なのに、見えないばかりか嫌われるとは。

「……あー、悪い翔。ちょっとワケあってそいつは無理だ」
「な、なんでッスか！？」
……どうしよう。まさかバカ正直に「本人たっての希望で」なんて言うわけにもいかんし。色々な意味で。
「あー、っと。まあ、自分のフェイバリットを信用できない奴に任せるわけにはいかないだろ？」
『にゃはは……なんか照れるなぁ』
『……主様。後でお話しがございますわ』
うぎゃあ。こうして俺の生活は精霊にガリガリ浸食されていくんだな。
「友達じゃないんスか！？」
「デュエル中にブーイングしてくる奴を信用できるか」
「そ、それは……」
「ほら、そろそろお前さんらも呼ばれるんだから、話は後にしてデッキ調整してろ」
会話を打ち切り、なんかどんどん増え始めた精霊たちに着いてこいと目配せする。ちゃんとその意図は伝わったようで頷いて返してくれた。
「……で？」
『あたしらが出てきた理由、でいいかしらん？』
「ああ。俺が目覚めさせた、だのなんだの。全くなんも知らんから一から十までみんな教えれ」
『あなたのお姫様たちからは何も聞いてないの？』
『……わたくしたちは、もとより主様の精霊です。わたくしたちとて何も知らぬも同然。話したくとも、話すことがございませんでした故』
『つかえない脳筋ー』
煽るな阿呆娘。クィーンの額に青筋浮かんでるから。
「それで？　俺の見たカードが一々精霊化するのはなんでだよ」
『あなた自身が精霊に好かれやすい、というのももちろんあるけれ

ど……』

それだけなら十代と変わらんな。

『キミにはボクらを呼び覚ます力があるっぽいね～。というか、キミ自身が極めてボクらに近いんだと思う』

「近い？」

『そうねぇ……単語にするなら、“架け橋”とでも言うのかしらね。精霊界とこの世界との狭間に近いあなたは、精霊がこの世界に来るための“門”みたいになっている、といったところかしらん？』

うへ。異世界トリップだし、ぜってーなんかあるとは思ってたが、それって要はこれからも精霊が大量に出てくるっちゅーわけだろ？

「……今回はまだ『アテナ』と『雷電娘々』だから良かったけど、デーモンとかドラゴンとか、シャレにならん奴らも呼び寄せちまうんじゃね？」

『あり得る。たいてーの雑魚ならボクの電撃で黒こげだけど、とても手がつけらんない奴らもいるしねー』

『使えない尻軽娘ですわね』

煽るなクィーン。『雷電娘々』の周囲に雷光が弾けてるから。

『ボクにどうにもできないんならあんたにだってできないもん！この弱っちい脳筋女！』

『わたくしの本分は仲間との連携です！　同族としか組まない我儘女よりよっぽど戦えます！』

「喧嘩すんなし」

お前らなら実は同居できるからな？　クィーンも光属性だからな？

「む。つーか何気して今まで出てきた精霊って皆光属性だな」

十代のハネクリボーもそうだし。まあそのうち光属性じゃない奴らも出てくるけど。サイコショッカーとか。

『……そういえばそうねえ。もしかしたら、あなたの力で呼べるのは光属性限定なのかも。それならそんなに危なくなさそうね』

……いやそうでもないし。『邪神機―獄炎』とかも実は光属性だし。大体『青眼の白竜』を始めとしたドラゴン族なら清濁関係なく

危険極まりない。
『なんにせよ、主様の御心身はわたくしたちがお守りします。思い悩むことはございません』
『ボクもやるよっ！　脳筋には任せてらんないし！』
だから煽るなっつの。
『まあ、あたしは基本アテナのそばについてるけど、余裕があれば助けるわ』
「心強いよ」
何せ攻撃力２６００だ。大抵のモンスターには負けんだろ。
「けど、アテナ優先な？」
『わかってるわよ。あたしのマスターなんだもの』
……それならよし。っていうかそういや。
「そろそろアテナの番なんじゃないか？　シャルナ、お前ここにいるの良くないだろ」
『……あ』
多分シャルナがいないからといって影響があるということもないと思うんだが。万が一ってこともある。
『それじゃ、あたしはマスターのところに戻るとするわ。また話しましょう、“王様”』
は？　王様って……。
『ところでシャルナってなぁに？』
「ん？　ああ、あいつのここでの愛称。あいつのマスターもアテナだから、紛らわしいんで付けたんだよ」
事情を説明すると『雷電娘々』がキラキラと期待のこもった目でこちらを見上げてきた。
「あー……付けて欲しい、とか？」
『うん！』
うむむ……だから俺にネーミングセンスを求めるなというに……よし。
「ライムで」

『オッケー！　ボクの名前はライムだね！　ちなみにどうして？』
……言うまでもなくラ○ちゃんだ。だって『雷電娘々』とか、間違いなくあの子が元だろ。インスパイアも甚だしい。
「ま、まあフィーリング。フィーリングだよ」
流石に「アニメのキャラ名をちょっとパクった」とも言えず、アテナの理由をちょいと拝借。
「ってどうしたクィーン。また機嫌悪そうだが」
『羨ましがってるんだよ。ハイハイ醜い嫉妬乙ー』
『べ、別にそういった意図はありませんわ！　大体、主様のカードになったってどうせ貴女が使われることはないのですから嫉妬することになるのは貴女のほうです！』
『へっへーん。ボクは別にデュエルで使ってもらうだけが存在意義じゃないもんねー。そもそもあんたと一緒のデッキに入る気なんざもーとーないし！』
……相性悪いなぁこいつら。つか、いっつもこんなこと思ってね？
「あー、やっぱクィーンも名前欲しいか？」
『っ！　いいえ、結構ですわ主様！　失礼します！』
『さっさとどっか行っちゃえ行っちゃえ』
このライム。さっきから毒舌である。まあ本気で言っているというよりからかって遊んでる印象が強いが。キングと同じ匂いがするし。
「……まあ、暇見て考えておくとするか」
『もぅ、優しいんだからー』
「一応、俺の相棒みたいなもんだしな」
『……さっきはああ言ったけど、その内ボクを使ったデッキも考えといて欲しい、かな』
「ああ。幸いデッキごと快く譲ってもらったわけだし、こいつを基盤にして作っておくよ。お前もなんだかんだで新しい仲間なんだしな」
『……やっぱり、優しいね。うん、それでこそボクのご主人様とし

て相応しいよ！』
は？　ごしゅ……なんだと？
『これから改めてよろしくね。ご主人様！』
「ごふっ！？」
……効いたぜ。これが美少女の『ご主人様』か。メイドコスだったら致命傷だったかもしれん。
ペタペタスリスリとじゃれついてくるライムを極力気にしないように意識しつつ（今思ったが、これって本末転倒じゃね？）、アテナたちの応援に向かうのだった。

第五話「月一試験！　セツの能力」（後書き）

第五話でした。……そろそろ化けの皮が剥がれてきたかな？　僕の。

回を重ねるごとに上手くなるどころかぐだぐだ感が強くなってきた感じがして悔しい。

今回出た『雷電娘々』それほど出番の予定はございません。デュエルでも使わないし。ぶっちゃけ元々予定になかったので。能力説明の辺りも本来はアテナ（シャルナ）が一人でするはずだったところを乱入させたがためにシャルナの出番まで減少傾向。

次回はまだ試験の話。アテナのデュエルです。試験だけでどんだけ話数使うんだという感じですが、この上まだ次々回も試験になりそう。

では、段々メッキも剥がれてきて文にもまとまりがなくなってきてしまっておりますが、なんとか踏ん張っていきたいと思います。

ご意見ご感想は随時募集中。レーネスでした。

第六話「月一試験！　アテナ、勝利へのタクティクス」（前書き）

第六話です。今回はアテナのデュエル。ぶっちゃけ主人公より圧倒的にガチ臭いデッキですので、割と書いてて楽しくはありました。

それでは、第六話、お楽しみください。

第六話「月一試験！　アテナ、勝利へのタクティクス」

アルカナ～切り札の騎士～

第六話「月一試験！　アテナ、勝利へのタクティクス！」

「次！　オベリスク・ブルー女子、天音アテナ！」
「は、はい！」
教官に名前を呼ばれ、少し緊張しながらも私はデュエルフィールドへ上がりました。相手は同じオベリスク・ブルー女子の人。あまり話したことはありませんが、目立って優秀ということも取り立てて落ちこぼれということもない、そんな印象のある人でした。
「……天音さん、で良かったよね～」
「あ、はい。えっと、加藤さん？」
「うん。加藤友紀。今日はよろしくね～」
「はい！　がんばります！」
よかった、結構いい人そう。
「「デュエル！」」
「先攻もらうね～。ドロー！」
な、なんだか微妙に調子の狂う人です。
「わたしは手札から『切り込み隊長』を召喚するね～。効果発動。『切り込み隊長』～」
『切り込み隊長』×２　ＡＴＫ１２００
っ！
「切り込みロック！？」

『切り込み隊長』がいると、他の戦士族を攻撃対象に選べなくなる……つまり、『切り込み隊長』が二体並べば魔法や罠、モンスター効果で除去しない限り、攻撃することができなくなるも同然。割とありふれたロックコンボだけど……

「魔法や罠の少ない私じゃ対応できない……！」

というか、モンスター除去の方法が、私のデッキには何一つ入っていない。魔法・罠によるロックならどうにかなったかもですが、こうしてモンスターによるロックは対応できない！

「カードをセットして、ターンを終了するよ～」

「う……私のターン、ドロー！」

手札を確認する。……幸い、私のデッキならロックをどうにかできなくても勝つ方法……バーンはある。でもそのためのアテナが手札にはない。

「手札から、『神の居城―ヴァルハラ』を発動します！　『光神機（ライトニングギア）―轟龍』を特殊召喚！」

『光神機―轟龍』ＡＴＫ２９００

私のフィールドに、輝く機械仕掛けの龍が現れる。一応、私のデッキに入っている天使族の中では最高攻撃力の２９００。そう簡単に戦闘破壊はできないはず！

「さらにモンスターを守備表示でセット！　カードも一枚セットしてターンエンドです！」

「わたしのターン。ドロー！」

まだ二ターン目だけど、互いに硬直状態。私にはこれを打破することのできるカードはない。じゃあ、加藤さんの手札には？

「手札から、魔法カード『抹殺の使徒』を発動するよ」

私のフィールドに伏せられていた『マシュマロン』がゲームから除外される。

っ！　『切り込み隊長』に『抹殺の使徒』……セツと同じ戦士ビート！

「さらに魔法カード、『洗脳―ブレインコントロール』を発動！」

「え！？」
私の轟龍がふらふらと加藤さんのフィールドに行ってしまう。
「ごめんね～。天音さんの『光神機―轟龍』をリリースして、『サイレント・ソードマンＬＶ５』を攻撃表示で召喚だよ」
『サイレント・ソードマンＬＶ５』ＡＴＫ２３００
『サイレント・ソードマンＬＶ５』……どんな効果でしたっけ。
たしか、すごく面倒な効果だったような……
「『サイレント・ソードマンＬＶ５』は、相手の魔法効果を一切受けないんだよ～わたしのフェイバリットなんだ～」
そういえばそんな効果でした。ただ、その効果はあまり関係ないですね。そもそも相手に効果を及ぼす魔法カード自体、私のデッキには入ってませんし。それよりも問題は……。
「轟龍が、容易く除去された……！」
それも、相手に利用される形で。
「一気に行くよ～。手札から魔法『撲滅の使徒』発動！　天音さんの伏せカードを除外するよ」
「っ！　チェーン！　除外される前に罠カード、『和睦の使者』を発動させます！」
巨大な剣が私の伏せカードを貫く直前、穏やかな顔の女性たちが私を護る結界を張ってくれました。
「ありゃ～。それじゃあわたしはターンエンドだね」
よし、とりあえずこれで加藤さんの手札も尽きました。セツもそうでしたが、戦士族は速くて強力な分、手札消費が激しいですね。
「私のターン、ドロー！」
とはいえ、状況は最悪。ライフこそ減っていませんが、数少ない防御カードを使ってしまった上に、フィールドはがら空き。救いはヴァルハラが残っていることですね。
「ヴァルハラの効果を起動します！　『テュアラティン』を攻撃表示で特殊召喚！　さらにモンスターをセットしてターンエンドです！」

『テュアラティン』ＡＴＫ２８００
『テュアラティン』は自分の場の天使族が二体以上存在するときに二体の天使族が戦闘破壊されたときに特殊召喚し、属性を一つ完全に封殺できる天使族の切り札的モンスター。
本来、こういう使い方をするモンスターじゃありませんが……背に腹は代えられません。攻撃力は２８００ありますし、この場を凌ぐことはできると思います。
「わたしのターン、ドロー！　バトル！」
加藤さんは引いたカードを一瞥すると、何もせずにバトルフェイズへと移行してきました。幸い、除去カードではなかったようです。
「『サイレント・ソードマンＬＶ５』で、守備モンスターを攻撃！『沈黙の剣ＬＶ５』！」
サイレント・ソードマンの持つ巨大な剣が、私のフィールドのモンスターに突き刺さります。私が伏せていたのは『スケル・エンジェル』！
「『スケル・エンジェル』のリバース効果発動！　デッキからカードを一枚ドローします！」
引いたカードは『光神テテュス』。私のキーカードの一つ。でも、今の状況だと出すに出せない。
「わたしは二体の『切り込み隊長』を守備表示に変更してターンを終了するよ～」
「ドローします！」
引いたカードを確認する。……よし、行けます。
「私はモンスターをセット。カードも一枚セットしてターンエンドします！」
「うん。わたしのターンだね。ドロー」
できれば除去カードは引いて欲しくない。
「手札から『サイクロン』を発動するよ。ヴァルハラに消えてもらうね」
「また除去カード……それにしても、セツとデュエルしているみた

いです」
　私とのデュエルだと使っていなかったけど、セツのデッキにも『撲滅の使徒』や『サイクロン』などといった除去カードが豊富です。
『切り込み隊長』といい、まるで三銃士を使わないセツのようです。
「あぁ、そりゃそうだよ～。デッキ構築はセツくんに手伝ってもらったんだし～」
　……。
「は？」
　今、何やら聞き捨てならない言葉を聞いたような……。
『ごめんねアテナ。ちょっと話しこんでたら遅れちゃ……』
「デッキ作りで悩んでたら声かけてくれてね。同じ戦士ビートだから力になれるかもって」
　ほ、ほほう……。
『え、なんか取り込み中？　あたし空気？』
　なんだか近くでシャルナの声が聞こえた気がしますが今はどうでもいいです。
「戦士族は展開力があって攻撃力アップも簡単だからトラップで一掃されたりしないように除去系多めに入れろって言ってくれたのもセツくんだよ～」
　……あれ、何でしょう。別に私はセツの彼女ではない（まだ返事は保留中）のに、なんだかすごく釈然としないというか……そう端的にいえば。
「ものすっごく腹立ちます！」
「へっ？」
　ぐりんっ、とセツたちがいる辺りを睨みつけてみると『雷電娘々』にじゃれつかれて鼻の下を伸ばしている（アテナ視点）セツ。……怒りメーター上昇、カンスト。
　あ、なんか人生初めての『ぷっつん』しちゃう感覚を味わえそうです。
「え、ええっと……とりあえず、『サイレント・ソードマンＬＶ５』

で、守備モンスターを攻撃！　『沈黙の剣ＬＶ５』！」
「……トラップ発動。『血の代償』」
セツのいる方を一睨みしてから、私は伏せていたトラップを起動します。
「５００ポイントライフを支払って、裏守備の『シャインエンジェル』をリリース。『光神テテュス』を攻撃表示で召喚します」
『光神テテュス』ＡＴＫ２４００
アテナＬＰ３５００
『サイレント・ソードマンＬＶ５』は攻撃力が精々２３００。強化されてない今、私のデッキなら雑魚同然。手札はなくなりましたが、テテュスを出した以上何の問題もありません。
「うっ……戦闘は巻き戻されてバトルフェイズを終了。ターンエンド」
くふっ。さあ、加速しますよ！
「私のターン、ドロー！　『アテナ』をオープンしてさらにドロー！　『ヘカテリス』オープンドロー！　『ジェルエンデュオ』ドロー『オネスト』ドロー『緑光の宣告者（グリーンデクレアラー）』ドロー『光神テテュス』ドロー『勝利の導き手フレイヤ』ドロー」
「え、えっと……」
途中から半ば機械的にドローを繰り返す。
「『紫光の宣告者（バイオレットデクレアラー）』『ヘカテリス』『アテナ』『オネスト』『スケル・エンジェル』『ムドラ』『ゾルガ』……ああ、終わりですね」
最後に引いたカードを見て、私はクスリと笑う。……なんだか自分がひどく黒くなっているのがわかりますが、関係ありません。
「モンスターをセット。『血の代償』の効果でセットした『ジェルエンデュオ』を二体分としてリリースし、『アテナ』を召喚」
『アテナ』ＡＴＫ２６００
アテナＬＰ３０００
「手札から永続魔法『エレメントの泉』を発動。また『血の代償』を使って『オネスト』召喚。『アテナ』の効果で６００ポイントの

ダメージ」
　『オネスト』ＡＴＫ１１００
アテナＬＰ２５００
「きゃっ！」
加藤ＬＰ３４００
「『オネスト』の効果を使い、自らを手札に戻します。『エレメントの泉』の効果でライフを５００ポイント回復。『血の代償』の効果起動……」
アテナＬＰ２５００→３０００→２５００
「あ、あれ？　もしかして……」
「無限ループ」
これが、私の選んだデッキ。自ら手札に戻すことのできる『オネスト』と、自分のモンスターが手札に戻った時に５００ポイントライフを回復させる『エレメントの泉』５００ポイントライフを支払うことで何度でも通常召喚が可能となる『血の代償』。『アテナ』のダメージ効果と併せて使えば確実に相手ライフをゼロにできるワンキルループコンボ。
正直、あまり褒められた戦術じゃありませんけど、私はこれを選びました。
「え、えげつない……」
「知りません」
やがてライフはゼロになる。
「私の勝ちです」
「しょ、勝者、天音アテナ……」
……なんだか私が勝った時、いつもどもられている気がしますね。
一度くらい、盛大な歓声の中勝鬨をあげてみたいです。……いえ、やっぱりそれも恥ずかしいですが。
私は溜息を一つ吐いて舞台上からおります。そして一目散にセツたちの下へ。

セツＳＩＤＥ

ライムがじゃれついてくるのを阻止しつつ向かう途中、アテナの名前が呼ばれたのに気付く。速足で観客席へと向かうと、すでにデュエルは始まっていてアテナの戦況は不利と言えた。

「おーいセツ！　こっちこっち！」

「お、席とっといてくれたのか。サンキュ十代」

「いや、オレじゃなくて明日香が」

見れば、確かに十代の隣には明日香の姿が。

「こんにちは、でいいのかしら」

「おう、こんにちは。天上院」

「……前から思っていたんだけど、貴方の『天上院』って呼び方になんか違和感があるのよ。明日香でいいわ」

「そうか？　んじゃ、遠慮なく」

もともと現実じゃ明日香の方で呼称してたから呼びなれてなかったんだ。かといって初対面でいきなり明日香と呼ぶわけにもいかず、多少窮屈ではあった。まあその分、脳内では散々明日香と呼んでたわけだが。

「む、というかあれ、ユーキちゃんじゃないか」

アテナとデュエルしていた女子に見覚えがある。

「あら、あなた彼女と知り合いだったの？」

「ああ。デッキのコンセプトが似てたから、お互いアドバイスしたりしてたからな。女子ん中じゃ、アテナの次くらいには話してると思う」

「……そもそも、女子と話している順番をつけられるのがうらやましいッス」

「翔だって、アテナや明日香とはそこそこ話すんじゃないか？」

「全部セツ君とアニキのおまけッス！　僕個人で話しかけられたことなんて皆無ッスよ！」

……そ、そうか。なるほど、現実ではともかく、俺もこっちではリア充扱いされる立場なんだな。ううむ……なってみるとあまり充実してる実感がないもんだな。

その時、背筋にゾクッとした感覚を覚えた。見ればアテナが何故かこちらを今まで見たことのないくらいおっそろしい眼で睨んでいた。

なんかアテナの目から『セツ、あとでO☆HA☆NA☆SHI☆がありま す』的な意志を強烈に感じる。

「俺、なんかしたか……？」

「さあ……？」

「けど、尋常じゃない感情を壇上の表情から感じるッス……」

おお、綺麗に韻を踏んだな。ライムのウインクをあげよう（翔には見えない）。

『……主様、そんなお戯れをなさっている余裕はなさそうです。見てください。あのシャルナが、縮こまって震えています』

「……うむ。偉い天使さまとやらの威厳やプライドをかなぐり捨ててでも小さくなりたいくらいの恐怖を感じているんだろうな」

『冷静に観察している場合では……』

いや、むしろテンパってるからこその分析だ。なんか、普段のアテナとはオーラが違う。オーラが。天使は天使でも堕天使系のデッキを使いそうな感じだ。

俺たちが冷汗をだらだら流していると、アテナは凶悪極まりないワンキルループコンボを決めて勝利してしまった。

「あいつ……あんなんどこで考えてきたんだ……」

正直あんなもん止めようがない。パーツをそろえるのもテテュスのおかげでそう難しくもないし、決まればどうしようもない。召喚反応型かフリーチェーンの罠でどうにかするしかないだろうが……。

「たしか天音の手札には『紫光の宣告者（バイオレット デクレアラー）』も加えられていたな……」

そうなのである。『紫光の宣告者（バイオレット デクレアラー）』は手札から自分以外の天使族を墓地に送って罠を無効化する擬似パーミッションモンスター。そ

れもまたテテュスのおかげで弾には困らないという驚異のコンボ。
「例え上級を墓地に送ったとしても『アテナ』で蘇生できるわね」
「ああ……13歳とはとても思えない、隙のないタクティクスだ」
明日香と三沢という二大成績優秀者も手放しで褒めるアテナのタクティクス。唯一アキレス腱があるとすればモンスター効果くらいのもんか……。
やば……なんかもう手に負えない感がある。アテナに勝てる気しねえー。
そのアテナはといえば、なんかこっちにすごい勢いで迫ってきている。こらお前ら、俺を盾にするな。むしろ俺の盾になれ。
「セツ」
「はい！」
重低音!?　気のせいか？　今アテナの声がエコーまでかかって聞こえたぞ。
「加藤さんのこと……聞かせてください」
「は？　ユーキちゃんのこと？　えっと……とりあえず、戦士族デッキ仲間で、たまにデッキ調整を一緒に……」
「一緒に？」
いやだからなんで重低音!?　女の子の声にすら聞こえないんだが!?
「……はい。一緒にテストデュエルなんかを少々……」
13歳にへこへこと頭を下げつつ言い訳じみた問答を繰り返す俺。……直視しがたいくらいに情けない。さっき、こっちの世界じゃ俺リア充ｗｗｗとか調子乗ってマジすんませんでした！
「……では、加藤さんのことはどう？」
「え、どうって……女子ん中で、アテナの次位によくしゃべる女子……だが？」
「私の……次？」
「む？　ああ、まあアテナの方がよく話すな。メールも定期的にしてるし」

お、なんか正解引いたっぽい。プレッシャーが収まっていく。
「……ふぅ。あ、すみませんでした。なんだか問い詰めるようなことしちゃって」
お、おお。アテナが普段の小動物チックな雰囲気に戻った。他のみんなもこれで安心……っていねえ!?　あいつらとっくに逃げていやがった!
「いえその、曲がりなりにも告白した身ですし、その返事ももらえないまま他の人に盗られてましたってなったら嫌じゃないですか。それで、その」
あ、ああそういうことか。
「いや、そういうことなら悪かった。そうだな。俺も不誠実だったか」
「あっいえ、デッキ調節とかする分には確かに同じ系統の人とやった方が効率は良いですし、私もちょっと気にし過ぎでした。……ちょっと加藤さんの雰囲気は気になりますが」
『……もう大丈夫？』
「あれ、シャルナ。いつからいたんですか？」
『いやさっきのデュエルの途中からはいたんだけど……まあいいわ』
そういってシャルナは大きな溜息を吐いた。……俺も吐きたいよ。
「後は十代たちか。まあ何とかなるだろ」
原作通りなら。
「じゃあ、応援に行きましょう！」
「そうだな。あ、ユーキちゃん」
「！」
ユーキちゃんが近くにいるのを見つけたので声をかけてみる。なんか一瞬アテナがピクリと反応した気がするが、とりあえず大丈夫だろ。
「セツくん。それに……天音、さん？」
「……こんにちわ。先ほどはどうも」
んー？　なんか硬いな。

むに。
「ふぁっ！？」
「ほ～れぐにぐに～」
ほっぺをぐにぐに。おお、程よく柔っこい。
「ふぇ、ふぇふ、ふぁにを（せ、セツ、なにを）！？」
「なに緊張してんだよお前さんは。年上かもしれんが同級生でクラスメートだぞ～？」
「ふぁぁぁぁ～？？」
何故かアテナから「そういうことじゃない」的な視線を感じるが、まあいいだろう。
「あ、あはは。仲いいわね～」
む、ちょっとユーキちゃんが苦笑している。そろそろやめるか。
「ぷぁっ！　そ、そうです。仲いいんです！　バッリバリです！」
バッリバリの意味が俺にはよくわからない。
「えっと、もしかしてライバル認定されてる？　わたし」
「ん～、多分」
俺が好きだと告白してくれたアテナだから、俺と仲いいユーキちゃんに対しての嫉妬、という見方をしても別に自意識過剰じゃあるまい。
「だ、だいじょうぶだよ～。別にセツくんにそういう感情今のところ持ってないし～……まだ」
「今、非常に気になる一言が最後にくっついていた気がします！」
「いや、アテナ？」
『不純異性交遊……』
『女ッ誑しだね』
『敵ね敵。女の。天罰てきめんいっちゃう？』
カオス！？　ええい引っ込めお前ら！　収拾つかんわ！　シッシ！
『こらあんた今天使さまを虫けらみたいにシッシってしたわね！？』
『いくら主様といえどそれは騎士に対する侮辱で……』
『ご主人様冷た～い！』

「でえええいっ！　ジャック、ジャーック！」
困った時のジャック頼り。本日も絶好のジャックス日和ですな！
意味分かんないけど。
『だからなぜ私を！？』
「精霊抑えるの任せた！」
『あるじさまー！？』
苦労は分かち合い、喜びは共有するのが俺たちの関係だろう？
『貧乏くじを押しつけられているような……』
「気のせい！」
『そんな！？』
「弱きを助け、強きをくじけ、ジャックス・ナイト！」
『あああ～！？』
よし、これで半分片付いた↑外道。
「アテナ！　ユーキちゃん！　とりあえず俺は十代たちの応援に行ってくるから！」
そして逃亡。アテナたちのことは丸投げで。
「あっ、待ってくださいセツ！」
「うわ、置いてかないでよ～」
しまったついてきた。
結局それから十代たちのデュエルが終わるまで、延々左右からのプレッシャーに耐え続けることになったのであった。まる。

おまけ

『ですから、少し落ち着いてくださいクィーン！』
『いいえ、今回ばかりは主様に一つ物申したいことが！』
『割といつでも好き放題言っているでしょう！？』
『まあよくわかんないけど、こいつにも天罰てきめん、逝っちゃう？』

『逝っちゃえ逝っちゃえ～』
『逝かないでください！』
哀れジャックス・ナイト。彼が報われる日は……きっと来ない。
『……出番少ないわしと、どっちがマシかのぅ』
今日もジャックは、胃薬常備（精霊用）。

第六話「月一試験！　アテナ、勝利へのタクティクス」（後書き）

最後にジャックで落とした第六話でした～。

あ、ちなみにタグのヤンデレあり？　のヤンデレってアテナじゃありません。念のため。この程度じゃまだちょっと嫉妬深いくらいのもんですしね。

そしてアテナのデッキ。つまりは宣告者パーミッションのギミックを搭載したアテナバーン、とでも言えばいいかな？　ちなみに現在なら、朱光が増えたのでモンスター効果にも対応できるようになりました。この小説ではシンクロがないので出てきませんが。

さらにアテナは今回は引いていませんがもう一体切り札的なモンスターを入れております。割と上級の多い重たいデッキのはずなのに、天使族はヴァルハラや場持ちのいいモンスターが多くて意外と回る。恵まれた種族です。

そして、新たなヒロインぽい予感です。しかも微妙に原作キャラです。モブですが。モブヒロインにも愛の手を！

では、引き続きご意見ご感想は随時募集中です。レーネスでした。

第七話「月一試験を終えて」（前書き）

第七話です。や、やっとこさ試験が終わった。しかもこれで遂にストックが完全に尽きました。明日、アップできるかなぁ……？

ちなみに今回は、全編コメディ……というか壊れギャグチックです。存分に、キャラと一緒に突っ込みを入れてくださいませｗｗｗ

では、どうぞ！

第七話「月一試験を終えて」

アルカナ～切り札の騎士～

第七話「月一試験を終えて」

「これにて、今回の試験の全工程を終了します」
十代が万丈目を下し、いつもの決め台詞が飛び出したところで、鮫島校長が試験終了の宣告をした。
お、終わったか……なんか、試験とはまるで無関係のところで神経をすり減らした印象が強い。主にアテナとか精霊とか精霊とか精霊とか！
「いやしかし、誰もがとてもすばらしいデュエルを見せてくれました。特に、最後まで自分のデッキを信頼し、モンスターとの熱き友情を見せ、そして何より、最後の最後まで勝負を捨てることなく、終始デュエルを楽しみぬいた遊城十代君。君の熱いデュエル魂は、ここにいる誰もが認めることでしょう。よって、遊城君はラー・イエローに昇格です」
会場を揺るがすような大歓声。オベリスク・ブルーの一部の生徒以外は皆一様に十代へ祝福の言葉を投げかけている。
「そして……同じく御堂切君」
「ほへ？」
思わず間抜けな声をあげてしまった。
「格上であるオベリスク・ブルー、それも上級生に対しても、普段と変わらずまっすぐな目でのデュエル。観客のブーイングにも負け

ず、自らのデュエルを貫き通した意志。何よりも突出した筆記内容！　どれをとっても、昇格に相応しい。よって君も、ラー・イエローへと昇格です！」

先ほどよりは小さいながらも歓声が湧く。が、何故か男子の数割はブーイングなんぞしてやがる。……あれか！？　やっぱり俺が『雷電娘々』を倒したからか！　そこまで好きかお前ら！

「おお～！　やったなセツ！」

「二人ともすごいや！」

「これで一歩オベリスク・ブルーに近づきましたね！」

「ん～……」

自分も当事者であることを忘れて祝福してくれる十代や純粋に喜んでくれているアテナたちには悪いが、俺自身はあまり乗り気じゃない。

「なー十代、どうんすんべ？」

「ん？　どうするって？」

「いやさ、俺あんまし昇格する気が起きねーんだが、十代の方はどうよ？」

俺がニヤリと笑いかけると、十代もまた、意図を察してくれたらしく、ニヤリと笑った。

「へへっ！　気が合うな！　実はオレも、昇級断ろうかと思っててさ」

そう言って笑い合う俺たちに、翔が慌ててツッコミを入れた。

「ちょ、二人とも何言ってんスか！？」

「いいじゃねーか。オレ、レッド寮好きなんだからさ。あそこがオレの部屋だぜ！」

「あ、アニキ……」

なんだか感動したような翔が、今度は俺の方に顔を向けてくる。

「……昨日言ったじゃねーか。覚えてないのか？」

「え……」

ポカンとしている翔に、俺は昨日も言ったセリフを繰り返してや

る。
「『メザシとエビフライは俺のジャスティス！』」
「え、ええ～！？」
「せ、セツ……本気、ですか？」
今度はアテナか。まあ、あんなメールよこしてきたし、期待してたのかもな。
「ああ。本気だ。正直、上に上がるメリットが思い付かない」
「え、えっと……ご飯とか、おいしくなりますよ！？　ほら、メザシやエビフライでしたら頼めばそれだって……」
「ん～正直美味いもん食いたかったらブルー寮とかお邪魔して貰えばよくね？」
「も、もらえませんよ！　普通は皆さん、格下の寮に対して自分たちのご飯を……」
「けど、もう俺何度か女子寮のメシも食べてるぜ？」
あっけらかんと言うと、全員何を言っているのかわからないといったようにポカンとしてしまった。
「え？　ちょ、ちょっと待ってください！　もしかしてセツ……女子寮に侵入とか、してました？」
明日香から厳しい目線が向けられる。……いやいや。
「侵入て。俺は普通に真正面から入って堂々と食堂でメシ食って帰っただけだが」
「あ、ありえないわ」
「その時普通にアテナや明日香とも会話したぞ」
はっとした表情で記憶を辿るアテナと明日香。
「そ、そういえば話してたような……」
「……普通に食事しながら会話してたわね……」
言いながら信じられないとばかりにこちらを見つめてくる。
ちなみに、その時の会話がこちら。

アテナの時は……。
『ようアテナ。こんばんは』
『セツ！　こんばんはです。今日はどうしたんですか？』
『レッドのメシも美味いんだが、たまには他の寮のメシも食ってみたくなってなー』
『そうでしたか。じゃあゆっくりしていってくださいね』

んで明日香の時は……。
『あら御堂くん。今日は今から食事かしら』
『まあなー。おっ、そうだ天上院、このカードなんだけどさ、お前のデッキにどうだ？　いや手に入れたのはいいんだけど、俺のデッキじゃ合わなくてなー』
『へぇ……良い効果じゃない。もらってもいいのかしら』
『ああ。どうせ持ってても腐らせるだけだからな』
『ありがとう。でも、まずは食事を済ませてからにしましょう。行儀が悪いわ』
『へーい』

「とまあこんな具合で」
「何故疑問に思わなかったのかしら……？」
「ごくごく当たり前にセツが女子寮にいました……」
「……お前は一体どんな魔法を使ったんだ？」
「いやー、昔からどこにでも自然に溶け込める特技があってなー」
三沢とは違うぞ。ある意味では確かに『空気』なんだが、フェードアウトするんじゃなくて、溶け込んでいくわけだな。

「警備の人とかどう突破したんですか？」
「いや普通に」

『こんちゃーっす』
『おう、こんにちは』
『毎日立ち仕事お疲れ様です』
『ははは、なに、これが仕事だからな』
『今後もお勤めがんばってくださいね～』
『ああ。お前も、勉強頑張れよ』

「てな具合で」
「……警備の意味がないじゃない。人員異動を提案しようかしら」
無意味だぜ。そも、お前らだって違和感なく受け入れてんだから。
「もしかして、イエロー寮にも来てたのか？」
もち。あそこはやはりカレーが美味かった。ブルーほど高級じゃないにしろ、庶民の贅沢位の質があってよかったな。
「しかし、あの時はただ単に誰とも会わなかっただけだ」
イエローの人間は総じて影が薄くて困る。
「じゃあ、ブルーにも？」
「ああ。女子寮のも高級で美味かったが、やっぱ女子寮のメシは上品すぎてな」
「……他の寮はともかく、ブルーに知り合いなんかいないだろお前」
顔見知りくらいなら、万丈目とかクロノス先生が。
「……あの二人が見逃すとか、今まで以上にあり得ません」
アテナがすごく疑わしげだが、これもまた事実。
「実際、クロノス先生や万丈目にも会ったぞ」

「どう切り抜けたんだ？」
なんか十代はもう適応してわくわくと俺の話を聞く態勢だ。こいつにもその内できそうだな。
「そうだな。クロノス先生の時は……」

『パルメザンチ～ズ』
『とろけるチ～ズ』
突破。

『……』
いやほんとだって。

万丈目の時は……
『ぱじゃまでお・ジャ・マ♪』
『マッスルマッスルおジャマッスル！』
クリア。

『あり得ない！』
「ていうか今の誰だよ！？　ぜってー、万丈目じゃなかったろ！」
紛れもなくおジャ万丈目さんです本当にありが（ｒｙ
「事実だ」
全員もはや驚きを通り越して呆れたような表情だ。

「実はブルーが一番簡単だった罠」
「……そこまで何でもありだと、もしかしてセツ君、女子寮のお風呂とかに入っても気付かれないんじゃ……」
むっつりスケベ乙。
翔の言葉を聞いて真っ赤な顔で記憶を辿ろうとしているアテナと明日香。
「それは無理だな。流石にそんなとこ入ろうとしたら下心が露出して気付かれる」
無理だと聞いてほっと胸を撫で下ろす女子二人。
「まあネタばらしするとだな。俺は普段から自然体のプレッシャー知らずだから、どんなに堂々と女子寮歩いていても周りが自然に受け入れてくれる……らしい」
前に現実の友人から聞いた話だが。
「けどまあ、流石に女子風呂なんか入ろうとすれば自然体ではいられんから、周りにも気付かれるってわけだ」
この妙な特殊能力のおかげで、学園祭では他クラスへのスパイに必ず任命されていたことを思い出す。
「……どっちにしろうらやましい能力ッス」
うらやましいと思っている時点でお前には出来ん。
「まーそんなわけで、俺にとって昇級するメリットはさほどないわけだ」
「セツ……」
「大体アテナ。お前こそ、なんで俺に昇級して欲しかったんだ？」
別に俺が昇級しようとすまいと、アテナに対する態度は変わらなかったはず。俺がそのことについて聞くと、アテナは軽く頬を染めた。
「セツは……私の好きな人ですから。オシリス・レッドだってバカにされているのが嫌だったんです」
……。
「じゃあ、オレたちは帰るとするか！」

「そうね。アテナも、門限までには帰ってきなさい」
「新たな計算式が……ブツブツ」
「はぁ～……リア充乙ッス～」
「でえい！　帰るな貴様ら！　こんな空気の中二人にするな！」
『不純異性交遊！』
『天罰てきめん！』
『やっちゃえー！』
「芸人かお前らは！？　ジャーック任せた！」
……。
……あれ？
『ジャック殿でしたら、ストライキ中です』
「ジャーック！？」
心強い味方が消えた。これから俺はどうすれば！？
『偶にはわしを呼んでみるという手も……』
「ない！　却下！」
むしろ出るな爺！
だがまあ少なくともあのむず痒い雰囲気は払拭された。そのことだけはぐっじょぶ！
「と、とりあえずアテナ！　俺はむしろオシリス・レッドだからってバカにしてるエリートさんどもを軽く蹴散らして悦に入る方が性に合ってるから無問題！　全然お前が気にするこたぁーない！　おk？」
「は、はい。すみませんセツ。あっ、それと、あんまり女子寮に出入りするのは良くないですよ。倫理的に」
「お、おう」
『まったくですわ。自重なさりませ主様』
『ぷぷっ、子供に倫理観説かれてるわ。なっさけな～い』
『子供っぽくてカワイイし、ボクはいいと思うけどな～』
自重すんのはお前らだよこのお騒がし三人官女。
結局最後は騒がしく試験を終える俺たちなのだった。……帰って

きてくれ、ジャック！

おまけ

『わし、扱いがぞんざいじゃね？　一応キングなのに……』

『キング……いえ、恐らく今はまだ、キングのターンに入っていないだけで……何故私はストライキに入って尚他人のフォローをしているのでしょう』

『それがお主の運命なんじゃな……』

『お気遣い、痛み入ります……』

第七話「月一試験を終えて」（後書き）

さて、みなさんご一緒に、『あり得ない！』
まだおジャ万丈目じゃねーだろとかそもそもとんでも設定だよとかいろいろありますでしょうが、まあこの話は壊れですので。
あ、ちなみにちゃんとアテナも評価されてますよ。「類まれなるデュエルタクティクスが～」とかって。本人すらまったく聞いちゃいませんでしたが。
不憫なジャック。出番のないキング。すっかり芸人なクィーン。三銃士は今日も元気です。
次回遂に、小説では聞かせられないのが残念なあのお方の登場です。ちょっとオリジナル設定色強めになりますが、まあがんばります。
では、変わらずご意見ご感想をお待ちしております。レーネスでした。

番外1「聖戦という名の殺戮」（前書き）

バレンタインなので番外投下。……いえ、決して本編が完成しなかった場つなぎじゃありませんよ？　実際、そこそこ長いですしこの話。それに、ここまでラブコメ色の強い遊戯王書いといて、このイベント逃すとかないでしょう。……よし、言い訳完了。

二話続けてギャグチックです。……あれ？　ラブコメだけどほぼギャグじゃね？　という突っ込みは……。

こ、こほん。では、アルカナのバレンタイン、どうぞ！

番外1「聖戦という名の殺戮」

アルカナ～切り札の騎士～

番外1「聖戦（ジハード）という名の殺戮（ジェノサイド）」

「出来ました！」

ブルー女子寮の厨房。他にもちらほらと同じ目的を共有する同志（ライバル）たちがヘラ片手に奮闘する中、私は一足先に目的のブツを完成させることに成功しました。

私が、さてラッピングをどうするかと次の問題に悩み始めていると、背後で奮闘中の同志（ライバル）たちの会話が耳に入ってきました。

「ねえ、あんた誰にあげる気？」

「もち、カイザー亮さまに決まってるじゃない！」

「うっわー、また無茶なとこ行くわねぇ……」

「む、無茶ってなによ！」

カイザー、カイザー亮。……丸藤翔さんのお兄さん。顔良し勉強良し運動良しデュエル良し性格クールでデュエル中は相手へのリスペクトを忘れない。確かに非の打ちどころがない女子寮内人気ランキングぶっちぎりトップのオベリスク・ブルー三年生。なるほど、やはり大半はそちらに流れそう。

「でも実際競争率高すぎだって。亮サマどれだけ人気あると思ってるのよ」

「う、うぅ……そういうあんたはじゃあ誰にあげるのよ」

「ん～とりあえずあたしも亮サマにはあげるけど……」

「ほらやっぱり！」
「違うって。だから、本命は別～」
「え～うそ、誰々？」
「ちょ、あんたら近寄ってくんな！」
そうです。近寄るのではなく私のように耳をそばだてて盗み聞くのが正解です。
「わたしは三沢君」
「……誰だっけ？」
「ちょ、イエローのナンバーワンでしょ。何言ってんのよ」
「あ、ああ～思い出した思い出した。確かに顔も性格も勉強も運動もデュエルもトップクラスだよね」
「……でもなんか地味」
確かに。
「でもさ～わたしは御堂くんとか良いと思うんだけど」
ピク。
「え～御堂君ってオシリス・レッドじゃん」
「イエローとかなら兎も角レッドはなぁ～」
「でもデュエルは強いよね」
「まあそれは……」
「顔だって悪くないし、こないだの筆記、満点だったんだって」
「嘘！？　あたし必死に勉強して７０そこそこしか取れなかった」
「あたしなんか５９点。出す問題が一々やらしいんだもん」
「た、確か三沢君で９８点って……」
「お～良く知ってるわね。流石」
「か、からかわないで！」
「そういえば、ユーキもこないだは結構良かったんだっけ？」
ピクン！
「そうなの？」
「そうよ。お～いユーキ！」
呼びかけられたことに気づいたらしく、加藤さんがいつの間にや

ら集団になって話しこんでいる女子に近づいていきます。
「呼んだ～？」
「呼んだ呼んだ。あんたたしか、こないだのテスト、すごい良かったって嬉しそうに跳ねてたじゃない」
「は、跳ねてはいないわよ～」
「言葉のアヤよ。で、何点だった？」
「は、８９……」
「うは、すごいじゃないユーキ。いつも６０位をうろうろしてたあんたが、急にどうしたの？」
「え、え～と……」
最早当初の話題はどこへやら。
「せ、セツくんが予想試験問題と勉強スケジュール作ってくれて…殆どそのまま出たからするすると……」
む、むぅ……。私にはそんなことしてくれなかったというのに……相変わらず加藤さんには甘い気がします！
「え～嘘、それって超すごいじゃん！」
「野球とかの時も結構活躍してたみたいだし……」
「亮サマと違って気さくで話しやすいよね」
「クールさはないけどね」
「なるほど……結構優良株だ」
ま、まずいです。こ、こんな直前になってセツの株が急上昇とか……流石に積み重ねの面で圧倒的優位な自信はありますが、うかうかもしていられません！　こ、これは普通のではインパクトがなさ過ぎて……。
「それで？　ユーキはそのセツくんにあげるのかにゃ～？」
「え、え～と。……うん」
「きゃ～！　キタ！　甘酸っぱいのキタ！」
「あ、でも御堂君って……」
女子集団の視線がこちらに集中するのを感じます。……気付いてないふりで作業を続けます。

「……まあ、こ～いうのは戦争だし」
「そうそう、これも一つの決闘（デュエル）だよ」
デュエル……。
「それです！！」
思わず私は叫びました。これは……まさしく天啓！　シャルナ辺りの天啓に違いありません！
『いや～あたし何もしてないんだけど……まあ勘違いしてるならしてるでいいか。さあ！　あたしを崇め奉りなさ～い！』
「早速準備です！」
『……アテナって、ホントにあたしのこと見えてるのよね？　なんかあたし、常に悉く無視がデフォになってきてる気がするんだけど』
私は降りてきたアイデアを形にするべく、急ピッチで作業を再開しました。

ＳＩＤＥセツ

今日という日を、心躍らせわくわくとした心持で迎えるか、目をギラつかせ、憎しみに狂った精神状態で迎えるかは、残念ながら人により様々だろう。もうはっきりと言ってしまえば、前者は勝ち組、後者は負け組である。そして肝心の俺はといえば……。
「勝ち組……ふははっ！」
告白までされている上、アテナから明日は楽しみにしていてくださいとまで言質が取れている。そう、俺はもう家族からしかもらえなかった寂しい負け組とはおさらばぶっ！？
「リア充氏ね！」
「モテ男死すべし！」
「でえい！　うっとうしい！」
だめだ。このレッド寮においてリア充は敵！　実際割と心労も溜まるということを知らない飢えた獣どもめ。

ピッピー、ピッピー！
「お、アテナだなげはぁっ！？」
「滅びろ！」
「これは正義の鉄槌じゃ！」
「がふぅ！？　おのれ、貴様らは普段からの好感度上げを怠るからそういうことに……ぐはっ！？」
「黙れリア充！」
「女子に話しかけることすらドキドキバクバクもののシャイボーイなめんな！」
駄目だ。こいつらはすでに修羅！　或いは羅刹！　ひとまずここから避難しないことにはアテナのメールすら読めん！

「ったく……」
魔窟と化したレッド寮から満身創痍で逃げ出した俺は、とりあえずアカデミアの方角へ向かって逃亡を続けていた。
いや、気持ちはよくわかる。俺だってこっちに来る前は全面的にあいつらの味方だった。
「まあいつらのことはいいか。さてアテナのメールはっと」
『アテナです。お渡ししたいものがありますので、今からそちら……レッド寮の方へと向かいます』
む。じゃあちょっと戻らないと行き違いになるな。あんましあっちへは戻りたくないのだが致し方ない。
「これも、アテナのチョコのため！」
そう、今日は聖（セント）・バレンタインデー。恋する乙女の聖戦であり、男にとっての最後の審判とも言える日であるのだから。

アテナとは、レッド寮に戻る途中で合流した。すぐにくれるものかと思っていたら、何故かまだあげませんともったいぶられた。
「大体、セツは八方美人なんですよ。もうちょっと自重してください！」
そして、何故か説教を食らっていた。
「んで、なんだってレッド寮に行くんだ？」
チョコを渡してくれるのはすでに明言されているので別にもったいぶらなくても、と言外に聞いてみる。シチュエーション的な是非を問うなら、餓狼の徘徊するレッド寮はむしろ鬼門。というか万一今日奴らの前でラブコメってみろ。確実に今日が俺の命日だ。
「もう……私だってホントは普通に手作りで頑張って作ったチョコをロマンチックなシチュエーションでセツに渡してそのまま……とか考えてましたけど……」
そのまま……の後は何もない。ありがとう、大事に食べるよ、位のやり取りで帰宅である。断じてそれだけだ。最近はなんかもう半ば以上恋人みたいな関係にまでなっている気がするのも事実だが、まだ明確には返事をしていないのも事実だ。
「けど！　セツが八方美人すぎたから、この案は没にせざるを得なくなったんです！」
え～なにゆえ～？
「それではインパクトに欠けます」
いらんし。インパクトいらんし。
「なので、ちょっと奇をてらってみることにしました」
普通であって欲しかった！
こういった場合、奇をてらったものは確実にコメディオチが来ることを、アテナはわかってない！
「で、その結果チョコの分量が多くなりすぎたので、普段セツがお世話になっているレッド寮の皆さんにもおすそ分けしようかと」
「なるほど」
そりゃ奴らは滂沱の涙を流して喜ぶことだろう。基本、女日照り

のレッド男子だし。
「そこで、なんですけど、セツには皆さんを食堂に集めて欲しいんです」
「正に、命懸けのミッションだな」
「は？」
今の奴らは獲物（チョコ）を求めて徘徊する亡者の群れであり、獲物（チョコ）を手に入れた者の喉笛を容赦なく食い破るハンターだからだ。
「まあいい。アテナは食堂で準備するのか？」
「はい。まあ準備と言ってもそう時間のかかることじゃないんですけど」
「よしわかった。……ニプーカ・ニペーラ」
「？　ニプーカ・ニペーラ」
戦場から生きて帰るためのおまじないを唱え、俺は神風特攻を決行するのだった。
「ゲーム……スタート！」
リプレイは、ない。

「ほほぅ……今この時、俺たちの前に戻ってくるとは……勇気のあるやつだ」
「或いは……よほど死にたいらしい」
「なんだ自慢か？　俺は今日これだけ貰いましたよすごいだろうとでも言いに来たかああん！？」
「同情ならするな。嘲笑なら死ねばいい。おすそ分けなら殺してくれる」
そこは……ソリッドビジョンを通していないのに『万魔殿―悪魔の巣窟』が再現されていた。いやむしろ『アンデット・ワールド』の方だろうか。
「お、落ち着け。いいか、お前らに妖精の贈り物のお知らせだ！」

ピクリ、と亡者の群れが濁った瞳でこちらを見据える。……怖ぇ。
「アテナが、日頃お世話になっているお前らにも幸せのおすそ分けを……」
『犬と呼んでください御堂様』
「変わり身早ぇ！」
「どこだ！　どこでその素敵イベントを行っている！」
「だからそれを今から案内してやるってんだ！　少し落ち着け！」
全員が片膝ついて頭を垂れてきた。本当に調子いい奴らだこと。
「こっちだ」
まるで軍隊のように隊列を組んでぞろぞろと後を着いてくる奴らを不気味に思いつつも、アテナが待つであろう食堂の引き戸を開ける。
「おーいアテナばっ！？」
「あ、セツ。連れてきてくれたんで……」
「女神さまの降臨だ！　さあ、神輿だ！　神輿を持てぃ！」
「神様仏様アテナ様！　ボクはこれから毎朝、女子寮に向かって最敬礼することを日課とします！」
「ひゃあっ！？」
奴らはアテナの前に跪き、おお神よとばかりに祈り始めた。ちなみに俺は引き戸を開けた瞬間に奴らに弾き飛ばされ顔面を強打したところである。
「き・さ・ま・ら～！　落ち着けつってんだろが！　アテナがおびえてるだろ！」
そう叫ぶと瞬時に大人しくなった。……こいつら、もうアテナの犬だな。
「あ～とりあえずアテナ。連れてきたぞ。命懸けで」
「は、はい。ありがとうございます……？」
まだちょっとおびえてるっぽい。まあ仕方ないだろ。こいつら眼がギラついてるし。
「で、アテナ。説明してくれ。こいつらも呼び寄せた理由」

「はい。実はですね。このバレンタインをデュエルに例えまして、ドローパンならぬドローチョコというものに挑戦してみたんです！」
「さすがアテナ様」
「凡夫とは眼の付け所が違う」
「崇めよ、称えよ」
『はは～！』
「せ、セツ……？」
「気にするな。こいつらはただの阿呆だ」
本気でアテナ信仰が始まっているレッド男子は放っておいて説明を始めさせる。
「は、はぁ……。えと、これがそのドローチョコです。表面はみんなチョコでコーティングしてありますが、中身は結構色々です」
机に、黒かったり白かったりするチョコが並ぶ。どれもそこそこのサイズで、全部食べるとなれば確かに俺一人じゃ無理だろう。
「中身は秘密ですけど、普通のホワイトチョコか何も入ってないチョコが当たりです。チャンスは一人一回。どれが正解かは実は私にも……」
「初手は貰ったぁ！」
一人のレッド男子が果敢にチョコに飛びつく。馬鹿！　一番手は死亡フラグだ！
「がふぅ！？」
「佐藤ー！？」
……オチたか。
ちなみに中身は納豆だった。……なるほど。ドローパンでも、納豆パンがあったな。
「こ、これは……」
「もしや……」
「とてつもない地雷臭が……」
ここにきて、レッド男子の威勢が急激に落ちた。
「……ここは、せっしゃが逝こう」

「峠！？」
「武士の誉れは、戦場での死と見つけたりー！　がはぁ！？」
「峠ー！！」
「す、ステーキにチョコは……絶望的に合わぬでござる……げふぅ」
……ああ、そいつは合わんわ。
「くっ！　佐藤、峠……お前らの遺志は、俺たちが受け継ぐ！」
「そうだ！　総員、チョコを持てぃ！」
「赤信号、皆で渡れば怖くない！」
全員が一斉に思い思いのチョコを手にする。確かに、全員で行けばだれか一人位は当たりを引けても良さそうなものである。
『目覚めろ！　俺たちの鷹の目（ホークアイ）！』
……だが忘れてはならない。ここはレッド寮。もっともデュエルに弱い男子が集まる格下寮。
彼らがここにいるのは、未熟なタクティクスでありデッキ構成であり、
『ぎゃはああっ！？』
……類稀なる、引きの弱さだということを。
『………………』
そして……死屍累々。
「さ、後はセツですね♪」
「悪魔か！？」
冗談ではない。この惨状を見せつけられてまだ食べようとする奴はよっぽどのギャンブラーか真性マゾのド変態だ。
無論そのどちらでもない俺はすぐにでも逃げ出したいのだが、期待に目を輝かせるアテナをがっかりさせるのもしのびない。
「大丈夫です。大分減りましたし、セツなら当たる確率は高いですよ！」
もしかしてそのためにこいつらを当て馬にでもしたのだろうか。

アテナ、恐ろしい子！
「食べて……くれませんか？」
……覚悟を決めるか。
「そうだ。俺だってここまでなんだかんだと鬼引きでデュエルに勝利してきたじゃないか。そう、俺はあたかも主人公補正と思わんばかりのラックの持ち主。いける、いけるはずだ……！」
いざ！
「俺のターン！　ドローォォォォォォ！！」
俺は特に数が少なかったホワイトチョコ（暫定）を掴み取った。
数が少ないから当たりやすいと思ったのもあるし、俺はどちらかと言えばホワイトチョコの方が好きだからだ。
「俺は……このホワイトチョコ（暫定）を、召喚する！！」
そうして俺はひと思いにチョコに食らいついた！
「逝った！」
結果は……。
「アテナよ……」
「せ、セツ……どう、でした？」
いままで納豆だのステーキだのくさやだのと散々なチョコばかりだったが……。
「ロウソクは……食い物じゃない……」
げふ。
「そ、そんな……よりにもよって最大のハズレを……！」
いや……きっとそれは最大の『当たり』だったんだ。そう、今この場では、主人公補正よりもギャグ補正が優先されたように……。
薄れ行く意識の中で、俺はそんなことを思っていたのだった。

おまけｉｎ保健室
「セツくん、大丈夫～？」

「ああ……なんとかね」
あの後、アテナはレッド寮におけるバイオハザード実行犯として三日間の謹慎処分を受けた。俺はと言えばまあロウソク食ったからと言って死にはしないので大事をとって保健室で休んでいる。
「ユーキちゃん？　どうしたんだそんなにそわそわと」
「え、えっとね。セツくん。もう、過ぎちゃったけど……」
そう言ってユーキちゃんが手渡してくれたのは何の変哲もないチョコレート。
「これ……」
「えっと、ホントは当日に渡したかったんだけど、あんなことになっちゃったから……」
あ、ああそりゃロウソク食った後に食いたくはないな。
「だから、1日遅れだけど、ハッピーバレンタイン！」
「あ、ありがとう……」
軽く頬を染めてはにかむユーキちゃんを見て、やっぱり普通が一番だ。そんなことを思う俺なのだった。

番外1「聖戦という名の殺戮」（後書き）

あ、あれ～？　なんか最後にユーキちゃんの一人勝ちに……？

……この小説のメインヒロインは、アテナです。

おかしいな。ギャグは書いててとてもスムーズだ。これ書くのにかかった時間三時間くらいだし。八話は三日くらいかけて三分の一も出来なかったのに。

まあそうはいっても本編からして結構ギャグですけど。この小説。

あ、ちなみにニプーカ・ニペーラは、ロシアのおまじないです。意味は……ぐーぐる先生に聞いてみよう。思いがけず、これまでのネタの意味もわかるかも！？　まあ今までにちりばめたネタが理解できるなら、ニプーカ・ニペーラの意味も大体分かることでしょう。

あ、ちなみに三沢の９８点。本人曰く、「っく！　ちょっとしたケアレスミスだった……前日に夜遅くまで十代やセツ対策のデッキを作っていて寝不足だったから……」だそうですよ？

では、なんとかがんばって次話も書きたいと思います。

感想は半永久的に募集中です。レーネスでした！

第八話「あの声が聞きたくて」（前書き）

ま、間に合わなかった……15日に間に合わなかった新話投稿です。

というか皆さんバレンタインネタ好きですね。いきなり感想増えましたよ。いや、いいことなんですが。

さてついにあのお方の出番なわけですが。そのせいで前半ものすごくギャグです。……え？　いつも通り？　やだなぁアルカナはシリアスラブを看板に掲げ……嘘です。

後半から次話にかけてはシリアスに入ります。というか久しぶりにデュエルを書い（ｒｙ

こほん。ではどうぞ！

第八話「あの声が聞きたくて」

アルカナ～切り札の騎士～

第八話「あの声が聞きたくて」

「アイテムなんぞ、使ってんじゃねえええええ！！」
「ど、どうしたんだセツ。いきなり叫んで」
「俺の渇きを、癒して見せろおおおおおおぃ！」
「め、めちゃくちゃ機嫌悪そうなんだな」
違う。違うぞ隼人くん（初登場）。むしろ俺は今、猛烈に興奮しているぅぅぅぅ！
「ふ、ふふふふ……偽ラブレター事件が終わり、月一試験が終わり、次に控えたイベントは……ふふふふ」
そう、あのお方の登場だ！
「ぶるぁぁぁぁぁぁっ！！」
興奮せずにはいられない！　何しろバルバ○ス、そしてビクトリ○ム！
「あの声が生で聴ける……？　すばらしい！！」
メロン……そうだ、メロンを食べよう！
「お口にとろける～ベリーメロン♪」
『ベリーメロン♪』
よしナイスだライム。
『えへへ～』
『どーしたんじゃそんな阿呆みたいに小躍りなんぞして。ほれ、ク

ィーンが引いとるぞ』
ぬ……。
「むう。なるほど確かに傍から見るとアホっぽい。だが、この上がりに上がったテンションは下がりようがない！」
あの声は是非とも生で聞いてみたい。あの独特の重低音は一度聴いたら癖になる。
「あ、そういや大徳寺先生が、今日はいいアナゴが入ったからそれを……」
「アナゴだとぅ！？」
「うおっ！？　本当にどうしたんだセツ。今日はとことんおかしいぞ」
おっといかん。つい反応してしまった。だってしょうがないじゃないか。あの人は緑〇さんに次いで好きな声優さんなんだぜ？　もう今朝からテンション上がりまくりだっての！　ひゃっほう！
ピッピー、ピッピー。
そんな時、毎度お馴染アテナからのメールを受信。興奮冷めやらぬまま上機嫌でメールボックスを開く。
『アテナです。セツ？　ごめんなさいですけど、明日香さんの所在を知りませんか？　寮内にはどこも見当たらなくて……十代さんたちと一緒なら、十代さんたちにも聞いてくださると助かります』
……来たか！
「十代！　明日香の居所を知っているか知らないかようしそうか！」
「はええ！　こっちが答える前に結論だすのかよ！？」
「どうかしたの？」
「アテナ曰く明日香の行方が知れないらしいさて君たちは居場所を知っているか知らないなさあとりあえず大徳寺先生にでも聞いてみようか！」
「一息！？　そしてやっぱり僕たちに意見は求めないんスね……」
「なんだか、ものすごく生き生きしてるんだなぁ……」
もう今の俺を止められる奴などいやしないぜ！

「ぃぃぃぃいやっほーーーぅ！」
「……なんでこいつ、明日香が行方不明かもしれないって状況で大喜びしてんだ？」
「最っ高にハイって奴だぁぁぁ！！」
「なんか……ラリってるね」
「突き抜けちゃってるんだなぁ」
外野が何やら言ってるが気にしない！　さっさと廃寮の情報提供してくれる大徳寺先生の下へレッツラゴー！

「行方不明といえば廃寮ですニャア～」
「情報サンクス！　レッツゴウ廃寮！」
俺はアテナに『廃寮に迷い込んだ可能性あり。見に行ってみる』とメールを返し、レッド寮を飛び出した。

「お、おいセツ、ちょっと待てよ！」
む。十代たちが大分米粒に。
『じゃから飛ばし過ぎじゃというに。そんなにテンション上げて、高血圧で死んでも知らんぞい』
『キング殿……主様はまだお若くていらっしゃいますわ』
「そうだそうだ。年寄りと一緒にすんな」
『だれがじーさんじゃあああっ！！』
「自覚してなかったのかよ！？　てかあからさまにネタ！」
わかる人にしかわからないが。まあネタなんて大抵そんなもんか。
そんな風に三銃士（いまだストライキ中のジャック除く）と漫才

をしていると、ようやく十代たちが追い付いてきた。
「ったく。いくらなんでも急ぎ過ぎだぜ。隼人が参ってるっつの」
見れば、確かにはるか後方でぜいぜいと荒い息を吐いている隼人の姿。
「ま、待って欲しいんだなぁ～」
「隼人～頑張れー！」
「ぼ、僕も結構キツイッス……」
「よしならば俺はこの逸る気持ちと高まり過ぎたテンションをどうにかして発散するとしよう」
セツは　ふしぎなおどり　を　おどった！
「は～りゃほ～れうまうっ！」
セツは　こんらん　している！
まわりが　しろいめで　こちらをみている！　なかまにしますか？
「イエーッス！」
「こっちからノーだよ！」
しょうはにげだした！　しかしまわりこまれてしまった！
「知らないのかい？　大魔王からは逃げられない！」
「セツ君大魔王だったんすか！？」
だめだ！　しょうぶのさいちゅうに　あいてにせなかはみせられない！
「ポケ○ンだった！？」
しょうは　がくぜんとしためで　こちらをみている！　とどめをさしますか？
「ためらいもなくイエス！」
「ためらってよ！　いやそれ以前にためらわずにノーだよ！」
「ノーと言えない日本人！」
「うわあああああああっ！？」
「ふう……落ち着いた」
「僕は余計に疲れたよ！」
結論。翔のからかいやすさは神。

「日に日にセツ君がおかしくなってる気がするんだなぁ」
実は俺もそう思う。
「とにかく、休憩終わり！　さっさと行こうぜ」
「行くも何も、それだろ？　廃寮って」
十代が指差す先。そこには確かに古びた洋館……といった風情の建物があった。
「ここに明日香さんが……ごくっ！」
「な、なんか……すっごく雰囲気があるんだなぁ～」
翔と隼人はすっかりビビっている。対して十代は瞳を輝かせ、めちゃくちゃ面白そう！　とでも言いたげな顔をしていた。実に好対照。俺？　当然、今もテンションはマックス！
「セツ～！」
「ぬ？」
遠くから俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。よく聞く声だから忘れるはずもない。アテナだ。
「アテナ……どうしてお前まで」
「は、廃寮で行方不明者が続出しているって噂は、はぁっ、女子寮でもよく聞く話で……はふ、私心配で……」
息を切らせて、それでも心配そうにこちらを見上げるアテナ。
「けど、明日香もここに来たかも知れないからな。友人としては、放ってはおけない」
実際にはかも、ではなく確実にここにきているわけだが。そして俺がここに来た理由の九割九分は明日香より若〇目当てだというのも伏せておく。……沈黙は金、多弁は身を滅ぼす。
「とにかく入ってみようぜ！　なんか探険みたいでわくわくしてくるぜ！」
「んだな。ほれ、アテナ。お前も来るんだろ？」
「て、手を繋いでてもいいですか？」
う……チェリーボーイには多少難易度が高いが……まあ巻き込んだっぽい形だし、妹と手を繋ぐのと同じようなもんだ。

「わかったよ。ほれ」
左手を差しだす。一応念のため、利き手の方は開けておく。
「あ、ありがとうございます」
『……不純異性交遊』
「……クィーンよ。そのネタはそろそろ飽きてきたんだが」
『ね、ネタなどではありません！』
仕方ない。
「ほれ、クィーン」
『あ、主様？　なんでしょうこの手は……』
「お前も掴まれ。実際触れやしないだろうが、ちょっとした気休めだ」
『な、何を……わたくしが、こわがっているとでも？』
「ん～そうじゃなくて、アテナだけ手ぇ握ってんのが不満なら掴まれってこった」
『な……』
クィーンは顔を真っ赤にして口をパクパクとあけたりしめたり忙しい。ちらちらとこちらの手を見て自分の手を出したり引っ込めたり。
「だー！　もうまだるっこしい！　ほら！」
『ひあっ！？』
ひんやりとしたクィーンの手を掴む。……おや？
「なんか、掴めちまったんだが」
『な、な、な』
クィーンは驚きのあまり固まっている。
『いえ、固まっているのはそれが理由ではないかと……』
「おお、僕らのジャックが帰ってきた！」
帰ーって来たぞ！　帰ーって来たぞ！（某三代目巨大宇宙人のテーマ）
これで俺の心の平穏が保たれる！
『いえ、どうもストライキとか関係なく私に平穏はないことがわか

りましたので。ならば主様に平穏を与えた方が……』
　どこか遠い目をしたジャックが乾いた笑みを浮かべながらそんなことを言う。……なんか、悟っちまったのか。ジャック……。
『ともかく、主様がクィーンに触れられる理由についてはまた後でお話しします。そちらのお嬢さんも大分不満そうですし……』
　む、確かにずっと放っておいたらアテナがムスッとしてしまっている。
『それに、他の方々はもうとっくに先に進んでしまったようですし……』
「何ィ！　しまった、出遅れた！　行くぞアテナ、クィーン！」
「え!?　きゃあ！」
『ぁ、ぁぅぁぅぁ……』
『ほ、ほらクィーン、しゃんと立って、走ってください！』
『ウブじゃの～。手を握られただけでオーバーヒートしとったんじゃ、この上更に進んでいけば憤死するのが目に見えるわい』
　俺の手を握ったまま、ジャックに運搬されているクィーン。……正直物凄く走りにくいが、半ば意識がない状態でもしっかり俺の手を握って離さないので仕方ない。
　とっても不格好な形でしか動けないのでなかなか先へ進めない。ていうか、もしかしてもう明日香と別れちゃったりしてない？
「あっ、来た。おーいセツ君、アテナちゃーん！」
「翔さん！　明日香さんは？」
「それが……」
　やはりもう会って別れた後だったらしい。まあここは原作通りだから仕方ない。
「なんか、明日香の兄さんも行方不明になったらしいぜ」
「それで、行方不明者が続出しているって噂のこの寮を調べに来たってところか」
　原作通りの流れだ。
「なあ、それならオレたちで明日香のお兄さんの手掛かりを探さな

いか？」
「ええ！？　これ以上奥に行くんスか！？」
「そ、それはちょっと、なんだなぁ」
「大丈夫だって！　セツはどうだ？」
「行く。行くとも。むしろ行かせろ」
ここで帰ったらあの声が聞けないじゃないか！　そんなの死んでもごめんだ！
「セツが行くなら……私もがんばります！」
健気や……。
流石に自分より年下の女の子が行くと言っているのに男の自分たちが行かないとは言えなかったらしく、翔と隼人も着いてくることに決めたようだ。
五人でぞろぞろと寮内を練り歩く。途中で闇のゲームに関する資料を見つけたりもしたが、とりあえずそこは省略する。
「おいこれ！」
そう叫んだ十代が懐中電灯で照らした先には、原作通り吹雪さんの写真が。……１０ＪＯＩＮを天上院と読むのには無理があると思う人挙手。
キャーーーーー……。
「なんだ！？」
「明日香さんの声です！」
「行くぞ！」
とりあえずその写真は回収して悲鳴の聞こえた方向へ向かう。
「これは……」
そこに落ちていたのは『エトワール・サイバー』のカード。間違いなく明日香のカードだ。
「そ、そんな。まさか明日香さん……」
「いや、決めつけるな。見ろ、ここに何かを引きずった跡がある」
ガイシャは……まだ生きているッ！
「行こうぜ！」

「う、うん！」
「お、おう！」
ッ！　マズイ！　先を越されるわけにはいかん！
「必殺Ｂダッシュ！」
「ふえっ？　きゃあ！」
半ばアテナ（と、未だオーバーヒート中のクィーン）を引きずるようにして俺は走った。
十代たちが立ち止まる。その先には気絶している明日香と、仮面をつけた大男。
「お前！　明日香に何をした！」
「私はタイタン。闇のデュエリストだ……」
お、おおおおおおおおおおお！！　キタ！　若〇キタ！
「そこの娘には、貴様らをおびき寄せる餌になってもらった」
っと、興奮してる場合じゃないな。流石に。
「お前……何が目的だ！」
「私の目的は、貴様らを闇に葬ることだぁ！」
そういってわかも……じゃないタイタンが指差してきたのは十代と……俺。
「それだけのために明日香を……こうなったらオレが……」
「いや、待て十代」
飛び出して行こうとした十代を止める。
「なんで止めるんだ！」
「ここは、俺が行く」
「セツ！？」
「明日香を……俺の友人を傷つけた罪は重い（訳：若〇とやるのは俺だ）」
「ふん。後悔するなよ……」
「「デュエル！！」」
これが、俺が本格的に原作へと介入していく発端となるのだった。

第八話「あの声が聞きたくて」（後書き）

えらく長くなったのでここでいったん切ります。続きはウェブで……じゃなくて次話で。次話は基本的にシリアス……のはず。僕のテンションが爆発しなければ。

デュエルに関しては希望のあったアルカナの効果も使えたし、まあよかったかなと。後編に続きますが。

では、ご意見ご感想をお待ちしております。レーネスでした！

※二月十六日改訂。尺の都合でデュエル部分を次話へ統合しました。

第九話「あの声が聞きたくて　後編」（前書き）

いつもよりもちょっと早い更新です。第八話を改訂し、デュエルの部分を完全にこの第九話にまとめましたので、改訂前の第八話を読んでいた方には多少最初は退屈かも。まあデュエルを全部まとめた方が読みやすくはあるかなと思い、こんな形に。あとは長さの都合。

では、若〇編……じゃない、廃寮編後編をどうぞ！

第九話「あの声が聞きたくて　後編」

アルカナ～切り札の騎士～

第九話「あの声が聞きたくて後編」

「私のターンだ。ドロー！」
ちっ、先攻取られた。
「手札から、『ジェネラルデーモン』の効果を発動！」
来たな『万魔殿（パンデモニウム）―悪魔の巣窟―』のサーチモンスター！
「『万魔殿―悪魔の巣窟―』を発動だぁ！」
フィールドが恐ろしい地獄のようなフィールドに変化した。
「ひっ！」
『うっわ趣味悪ぅ……』
アテナとシャルナは流石に気分がすぐれない。まあ当然だな。
「行くぞ！　手札から、『デーモン・ソルジャー』を攻撃表示で召喚！　ターンエンドだ」
『デーモン・ソルジャー』ＡＴＫ１９００
「俺のターン！　ドロー！」
しかしなんで俺とデュエルする奴らは皆一ターン目からあんな高攻撃力モンスターばっかり出してきやがるのかね？
「手札から『増援』を発動！　デッキから『キングス・ナイト』を手札に加える！」
「『キングス・ナイト』……ってことは」
「もう『クィーンズ・ナイト』は手札に……」

その通り。なんかさっきからやたらとやる気満々なクィーンがスタンバってますとも！

「『クィーンズ・ナイト』を召喚！　さらに『二重召喚（デュアル・サモン）』を発動するぜ」

『クィーンズ・ナイト』ＡＴＫ１５００

『二重召喚』は一ターンに通常召喚を二度行う召喚補助カード！

「来いっ『キングス・ナイト』！　そして『ジャックス・ナイト』！」

『キングス・ナイト』ＡＴＫ１６００

『ジャックス・ナイト』ＡＴＫ１９００

「出た！　セツのお得意高速展開！」

「三銃士が出そろったッス！」

が、まだ『融合』が手札にない。

「俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ」

伏せたカードは『炸裂装甲』。時間を稼ぐ！

「フフフ……私のターン！　ドロー！　私は『ジェノサイドキングデーモン』を攻撃表示で召喚。バトルだぁ！」

『ジェノサイドキングデーモン』ＡＴＫ２０００

「まずい！　攻撃力が『ジャックス・ナイト』よりも上だ！」

「リバースカードオープン！『炸裂装甲』！」

「フハハ！　甘いわぁ！『ジェノサイドキングデーモン』の効果発動！　ダイスロールだ！」

「ちょい待ち！　そのダイスロールはこっちのダイスを……」

……あれ？　イカサマを防止するためにサイコロを……ない。

「……忘れた！？」

しまった。テンションダダ上がりだったから持ち物確認を疎かに！　不覚！

「いや、続けてくれ」

仕方ない。イカサマを甘んじて許すしかない。

「ダイスの目は５！　『炸裂装甲』の効果を無効にする！」

今にも纏わりつこうとしていた装甲が、『ジェノサイドキングデーモン』によって掻き消された。
「行けぃ！『炸裂ゥ！　五臓六腑』！」
『ぐ……あああっ！？』
応戦したジャックも力及ばず、闇の力に呑み込まれた。
「ぐぅ！」
ダメージは微々たるものだが、キツイもんはキツイ。
セツＬＰ３９００
「さらに『デーモン・ソルジャー』で『クィーンズ・ナイト』を攻撃だぁ！」
『きゃあああああ！？』
っ！　クィーン！
セツＬＰ３５００
「そしてこれが闇のゲームの真の恐怖だぁ！」
そう言ってタイタンが偽物の千年パズルを掲げる。
「消えてゆく……貴様の体が、ライフと共に徐々に消える……」
「っう、お……」
い、インチキだってわかってても結構怖いぞこいつは。
「せ、セツ君の体が……」
「透けて……」
「セツ！！」
アテナの悲痛な叫びが聞こえる。俺は不安そうなギャラリーに笑顔で答える。
「心配するな！　こんなもん、痛くも痒くもない！」
「で、でも！」
「フゥハハハッ！　見たか、こいつが闇のゲームだ！」
「うるせえぞ似非ヤロウ」
「なんだとぅ？」
「こんなもん、俺が勝てばいいってだけの話じゃねえか。俺を怖がらせるなら、それこそ地獄の劫火でも持ってくるんだったな」

「強がっていられるのも今のうちだ！　カードを一枚セットしてターンエンドだ！」
「ドロー！」
そう、この程度で俺を怖がらせようなんざ百年早い！
「ぶっ倒す！　俺は手札から、『強欲な壺』を発動！　カードを二枚ドロー！　さらに『早すぎた埋葬』を発動するぜ！」
俺のＬＰが減少し、同時に俺の体も消えていく。でも、そんなの関係ねえ！
セツＬＰ２７００
「墓地から『クィーンズ・ナイト』を蘇生！」
『クィーンズ・ナイト』ＡＴＫ１５００
「ハッ！　血迷ったか！　態々攻撃力の低い『クィーンズ・ナイト』の方を召喚するとはな！」
「黙って見てろ！　俺は手札から、『融合呪印生物―光』を召喚する！」
フィールドに、人の手らしきものとか色々なものが混ぜ合わさったような不気味な物体が現れる。
「な、なんだあれ！？」
「『融合呪印生物―光』の効果発動！　フィールド上から、『融合呪印生物―光』と融合モンスターによって決められた融合素材モンスターをリリースし、エクストラデッキからその融合モンスターを特殊召喚する！」
さあ久しぶりにお出ましだ！
「俺のデッキ最強のモンスターを拝ませてやるぜイカサマ野郎！来いっ『アルカナ　ナイト・ジョーカー』！」
『アルカナ　ナイト・ジョーカー』ＡＴＫ３８００
三体のモンスターが光に包まれ、最強の騎士がその姿を現す。
「バトルフェイズ！『アルカナ　ナイト・ジョーカー』で『ジェノサイドキングデーモン』を攻撃！『フォースブレード』！」
「甘いわぁ！　リバースカードだ！『炸裂装甲（リアクティブ・アーマー）』！　早々に消える

がいい！」
「甘いのはどっちだ！　『アルカナ　ナイト・ジョーカー』の効果発動！」
「何ぃ！？」
「お前のその、イカサマダイスを使わなきゃ効果が出せない似非と同じと思うなよ？　俺は手札から『次元幽閉』を墓地に送り、『炸裂装甲』の効果を無効化する！」
『喝ッ！！』
　『アルカナ　ナイト・ジョーカー』はその体に纏わりつこうとする装甲を、一喝して掃った。そのまま『ジェノサイドキングデーモン』を真っ二つにした。
「さっきのお返しだ！」
「ぐおおおおおおおっ！？」
　タイタンＬＰ２２００
「よっしゃあ！　やったぜセツ！」
　飛び上がって喜んでいる十代に笑みを向けてから、インチキデュエリストに宣言する。
「どうだ！　これがトランプの騎士の力だ！」
　俺は燦然と剣を構える『アルカナ　ナイト・ジョーカー』と共にインチキ闇のデュエリストを見据える。
「ぬうう小癪なぁ……」
「俺はターンエンドだ！」
「ドロー！」
　引いたカードを見たタイタンは不敵ににやりと笑みを浮かべた。
……まさか！？　俺は来て欲しくないカードを思い浮かべる。
「私は手札から『おろかな埋葬』二枚発動！　デッキから『暗黒魔族ギルファー・デーモン』二体を墓地に送る！『暗黒魔族ギルファー・デーモン』の効果発動！」
「ギルファー・デーモン！？」
「ギルファー・デーモンは墓地に送られたとき、攻撃力５００ポイ

ントダウンの装備カードとなり、フィールド上のモンスターに装備する！　私が選択するのは当然『アルカナ・ナイト・ジョーカー』！」

「さっきみたく無効化しちまえセツ！」

「無理です！　アルカナの効果は、手札に対応するカードがないと発動できません！」

　確かに、あのモンスター効果を無効化するには手札からモンスターを捨てればいい。だが……。

「通す！」

『ぐぅ……』

　『アルカナ　ナイト・ジョーカー』ＡＴＫ３８００→２８００

　二体の悪魔が怨霊のように『アルカナ　ナイト・ジョーカー』に取り憑き、アルカナは苦しそうに身じろぎをする。

「そして私は『デーモンの斧』を『デーモン・ソルジャー』に装備！　バトルだぁ！」

　『デーモン・ソルジャー』ＡＴＫ１９００→２９００

「やばいぜ！　『デーモン・ソルジャー』の攻撃力がアルカナを上回っちまった！」

「セツ！」

「フハハハハハッ！　潰えろ『アルカナ　ナイト・ジョーカー』！」

　『デーモン・ソルジャー』の掲げた大斧の刃がアルカナを両断する……

「と、思うよな？」

「ぬぅ！？」

　『アルカナ　ナイト・ジョーカー』はその斧をしっかりとその手に持った剣で受け止めていた。その背に輝く翼をはためかせて。

「なんだ……どういうことだ！？」

「教えてやるよイカサマ野郎！　俺は手札から『オネスト』を発動させた！」

　俺の最後に残った手札。さっきの『強欲な壺』で引き当てたカー

ド！
「『オネスト』は、自分の光属性モンスターの戦闘時に手札から墓地に送って発動する！　戦闘を行う光属性モンスターの攻撃力を、ターン終了時まで相手攻撃モンスターの攻撃力分アップさせる！」
『アルカナ　ナイト・ジョーカー』ＡＴＫ２８００→５７００
「なんだとぅ！？」
「返り討ちだ！　『熾天使の剣』！」
『アルカナ　ナイト・ジョーカー』が暗黒魔族による戒めを打ち破り、『デーモン・ソルジャー』を光り輝く剣で両断した！
「バカなぁぁぁぁぁっ！？」
タイタンＬＰ０
「セツ！」
「すっげーデュエルだったぜ！」
やーやーどーもどーも。……が。
「あ、危なかったぁ……」
「せ、セツ？」
「いや、最後にあいつが引いたカードが『堕落（フォーリン・ダウン）』だったら負けてた。しかも自分のアルカナに殺された」
「まあいいじゃねーか！　勝ったんだから！」
「そうだ、明日香は！？」
人質にされていた明日香を見れば、ただ気絶しているだけのようで一安心。
「くぅ……まさかこの私が敗れるとは……」
原作通りならデュエルに決着がつく前にこいつは逃げ出して、闇の力に呑まれるはずだった。俺はそれを知っていたから、インチキのカラクリを明かす前にこいつを負かした。これでこいつが闇に落ちることはないはずだ。

原作通りには進まなくなるが、だからって見殺しにするわけにもいかない。

原作を知っているアドバンテージ？……そんなもんいらないさ。そんなのなくたってハッピーエンドを迎えて見せる。俺がいることで変わる未来も、みんなハッピーエンドに。それが、原作に思い切り介入しちまった俺の義務なんだ。きっと。

『主様？　どうかなさいました？』

「……いや、なんでもないよ。ありがとな、クィーン」

『？　いえ……』

不思議そうな顔で首をかしげるクィーンを横目に、俺は改めて決意を固めるのだった。

その後……。

「う……ん。ここ、は？」

「お、起きたか明日香！」

「十代……それに御堂君？」

「よう、起きたか偏屈お嬢」

無事に廃寮を脱出し、女子寮へとアテナと明日香を送り届けるその道中。それまで眠っていた明日香が目を覚ました。ちなみに明日香は、一番体格がいいという理由で俺が背負っている。……一応疲れてるんだが。

「私は……」

「心配すんな。全部が全部、万事解決だ。闇のデュエリスト語って荒稼ぎしてたアホはとっ捕まえたし、みんな無事だ。……どっかの考えなしのイノシシお嬢以外はな」

「……」

「……ったく。ほれ」

「え？」

背中越しでも、暗い表情をしているのが理解できたので、ポケットにしまってあった吹雪さんの写真と『エトワール・サイバー』のカードを手渡してやる。
「それくらいしかなかったけどな」
「あなたたち……これだけのために……」
「その『だけ』のために一人で突っ込んで行ったイノシシはどこの誰だよ」
「それは……だって、私は身内の問題で……」
「同じことだろ」
「え？」
「お前は大切な肉親のために勇気を出した。俺たちは大切な友達のために勇気を出した。そこに、違いなんてねえよ」
「……」
固まってしまった。
「もしあの時、お前が本当に一人で、兄貴と一緒の行方不明にでもなってみろ。みんなで心配して探し回るぞ。アテナとか……ジュンコやももえあたりは落ち込むだろうな。もしかしたら泣いちまうかもしれねえ」
アテナは優しい女の子だ。そんなこともあるだろう。
「いいか、俺たちはもう仲間で、友達。なんかあったら頼れ。十代たちは喜んで協力するだろうし、俺も、愚痴くらいは聞いてやる。意地っ張りはもう卒業するんだな。その方が可愛いぜ？」
「なっ……！」
「あと……そうだな」
俺は言うべきかどうか迷ったが、考えた末に口を開いた。
「あんたの兄貴は帰ってくるよ。きっと、近いうちに」
「えっ……」
「だから、うん。……もう無茶すんな」
結局、言いたかったのはそれだけだ。相変わらず俺は無駄に口数が多くて困る。もっと端的に、スパッと言えないもんかね？

「御堂君……」
「あーあとそれだ。仲間なんだから、他人行儀な呼び方してくれるな。セツでいい」
つか、俺だけ名字呼びとか、めちゃくちゃさびしいんだからな！
「そうね。そうするわ。改めてよろしく、セツ」
「おう……って、もう大丈夫そうなら降りろ」
正直アテナとクィーンの視線が痛い。
「あら、女子寮まで運んでくれるんじゃなかったの？　騎士（ナイト）クン？」
「お前な……」
「いいじゃない。仲間……なんでしょ？」
「……おう」
溜息を一つ。しょうがない。正直視線で殺されそうなくらいに針のムシロだが、ここは甘んじて受けることにしよう。だってさ……。
「広い背中……無事よね？　兄さん……」
無意識のうちに涙まで流されちゃ、下ろすなんて選択、できるわけないだろ？

第九話「あの声が聞きたくて　後編」（後書き）

珍しくシリアス多めな第九話です。……というか、元々僕はシリアスの方が好きなんですが……この小説ではめちゃくちゃギャグが書きやすかったのでそっちに流れています。

セツが、そろそろその本領（誑し）を発揮し始めました。別に現在明日香をヒロイン化する予定はありませんが、こうしておけば後で明日香のヒロイン化希望が出た時にスムーズにヒロイン入りが出来るでしょう。……伏線を堂々とバラす作者。馬鹿ですね。

あと、タイタンのセブンスターズフラグもぶち折っておきました。これで一つセブンスターズに空きができる。ふぅ、また伏線をバラしてやりました。作者は満足です。次回から、制裁タッグデュエルの話になります。予定されていたラストヒロイン、ヤンデレ一直線な娘が登場し、読者さん方の心証を大いに悪くしてくれることでしょう（おい）。

それは、ご意見ご感想、お待ちしております。レーネスでした！

第十話「タッグデュエル　災悪の少女」（前書き）

……第、十話、です。これ書いただけで、作者のテンションが最低ランクです……。もはやタグのヤンデレあり？　のクエスチョンマークは取っ払い、十五禁指定くらいにはすべきと判断。やりすぎか……？

ともかく、十五禁入るレベルの第十話、どうぞ……

第十話「タッグデュエル　災悪の少女」

アルカナ～切り札の騎士～

第十話「制裁タッグデュエル！　災悪の少女」

あの俺が原作に介入した廃寮の一件の翌日、寮で爆睡していたところを倫理委員会の人に叩き起こされ、廃寮への不法侵入を咎められた。そして原作通り十代と翔の制裁タッグデュエルが決定し、今回は俺とアテナにも同じくタッグデュエルが命じられた。

「誰が先導したのかはもうバレバレなノ～ネ」

とのことで。まあ確かに一番ノリノリで突入したのは俺だが。

「シニョ～ルには相手の方から逆指名が来ているノ～ネ。スンバラシ～イほどに強いデュエリストなノ～デ、せいぜい覚悟しておくノ～ネ」

……逆指名？

俺には特に心当たりがなかったのでアテナの方を見ても、やはり何も知りません、といった顔をするのみである。

首をかしげながら、とりあえずは寝なおすためにアテナと別れ、レッド寮に戻ったのだった。

……その俺がぐっすりと眠っている間に、翔の脱走事件が起こることはすっかり忘れていたわけだがな。

俺の寝ている間にすべて丸く収まったらしく、翔は帰ってきて十代はカイザー亮さんとのデュエルがどれだけ熱かったかを語ってくれた。……ぬう。俺も見たかったかもしれん。

その後の隼人父乱入事件も無事原作通りに進み、とうとう十代と翔、俺とアテナの制裁タッグデュエルの日が明日に迫っていた。

「セツ、私のデッキはこんな感じで問題ないでしょうか？」

「んー、そうだな。タッグ、ってことならそんなもんか」

俺とアテナは明日のタッグデュエルに向けて互いのデッキをいじりまわしていた。ちなみに、場所は思い切りアテナの部屋。例によってナチュラルに通された。流石俺。

「タッグだと、セツのモンスターがいたらヴァルハラは使えないんでしたっけ？」

「いや、たしか結構変則的で、互いのモンスターは別個のフィールド扱い。例えば、アテナのフィールドにモンスターがいても、俺のフィールドにモンスターがいなければ俺はダイレクトアタックを受ける、みたいな」

現実だとそんなルールではないが、なんでかこのアカデミアだとそんなタッグルールだった。まあヴァルハラが使えないとアテナのデッキは速攻性が落ちるから好都合だが。

「で、ライフは共有で８０００ですか」

「『アテナ』のバーンでも簡単には倒しきれないな」

「……できれば、私もあんまりバーンで勝利は好きじゃないんですけどね」

「そうか？　あれだって戦術の一つだ。そう気にすることじゃないよ」

むしろ俺は現実じゃそういったデッキばっかりだったんだ。そういう意味じゃ、アテナのことを悪く言えるはずもない。

「……ありがとうございます。やっぱり、セツは優しいです」

「優しいとか、そういうんじゃねえよ」

アテナは無邪気だ。まったく、どうも調子が狂う。まあ、今まで

傍にいた年頃の異性があんなのだけじゃ無理もないか。
「おっとそうだ、ここにこいつを入れてみるといいかもしれん。で、こっちを抜く」
「え、でも……」
「いいか。こいつは……」
「ふわ……な、なるほど。すごいかもしれません！」
経過は順調。アテナとのタッグデュエルは初めてだが、俺もアテナも使うモンスターは光属性と少数の地属性で共通してる。どちらかと言えば種族統一ならテテュスやアテナが最大限に生きるんだが……。
「まあ、ないものねだりしても仕方なし。それに俺の相棒はお前らだもんな」
『無論ですわ。そう簡単に見限らぬよう』
「お、珍しく機嫌悪くないな。アテナもいるのに」
『……妙に引っかかる言い分ですが。ともかく、わたくしは騎士です。騎士として、共闘は望むところ。個人的な好悪なぞ、連携時の妨げにしかなりません』
つまり嫌いは嫌いだが、共闘するとなれば話は別、ということか。
『こうは言っておるが、最初は暴風雨のごとく荒れておったぞぃ。ジャックが苦心の末に説得したのじゃ』
「さすがジャック。……で、そのジャックは？」
『体調不良で寝込んでおるわ……主に胃』
「ジャーック！？」
精霊でも体調不良になるんだ！？　しかも胃。
「っく！　お前の犠牲は無駄にはしない！　クィーンを決死の想いで宥めてくれたお前の偉業、この俺が必ず役立てて見せる！」
『……随分な言われようですわね。まるでわたくしが聞き分けのない頑固者ではありませんか』
『まーさしくそうじゃろがぃ』
「ん。じゃあそろそろ戻るわ。また明日な」

「はい。おやすみなさいセツ」
そうして、その日は女子寮を後にした。

「……っは！？　よ、よく考えたらまたセツが女子寮にいました！」
パジャマ着用さあ寝るぞ、と布団に入ったところで、アテナはようやく気付いたそうな。

翌朝、俺たちはタッグデュエルの行われるデュエル会場へと赴いていた。
「ではこれより、タッグデュエルを始めるノ～ネ！」
クロノス先生の言葉で、俺たちの制裁を賭けたタッグデュエルが始まった。
原作通り、十代たちの相手は迷宮兄弟。俺たちは……。
「それでは、入ってくるノ～ネ」
クロノス先生の視線の先には一人の女性。その姿は……。
『あ、あいつは……』
シャルナが戦慄している。それもそうだろう。なぜならそこにいたのは紛れもなく……。
『ルイン……！』
『破滅の女神ルイン』疑いようもなくそいつは『終焉の王デミス』と対をなす、レベル８の儀式モンスター。その精霊。
「おい……あれってルインじゃないか？」
「ああ……そう見えるけど」
周囲も戸惑っている。その様子をぐるりと一瞥したルインは、
「コスプレです」
などとのたまった。

「なるほど、コスプレか」
「見れば見るほどそっくりだ」
「いい出来をしている」
うおいっ！？　お前ら簡単に納得しすぎだろ！？　もうちょっと疑えよ！　大体……。
「あの……クロノス先生、もう一人は……」
俺がそう問いかけた時、首筋にゾクリとした感覚が。
「ひっ！」
「さだめならここよ。おにぃ～ちゃぁん♪」
いつの間に背後まで近付いてきたのか、一人の少女が俺に後ろから抱きつき、首筋を舐め上げた。そのままその手が俺の懐に……って！
「運命（さだめ）！？」
全力でそいつを振り払い、跳び退る。
「あん。どうして逃げちゃうの？　おに～ぃちゃん」
そこで妖艶に唇を舐めるその女は、紛れもなく俺の妹の御堂運命。
その俺を見る恍惚とした表情は、どうしたって見間違えようがない。
「ん……あぁ、はふ。久しぶりのお兄ちゃん分補給。……ちょっとさだめは控室に戻るね？　だいじょうぶ。この感じなら五分で済むよ」
「何がだ！？」
「ナニが。お兄ちゃんも来る？　大歓迎！」
「少し黙れ変態」
「聞いたのはお兄ちゃんなのに」
「もっと常識的な答えを期待したんだ」
「これ以上ない程に常識的だったよ？」
「お前の常識は世間一般の非常識だ」
不本意ながら、この類の会話が懐かしい。
「あぁ……この容赦ないツッコミ、イイわぁ……」
「ゾクゾクするな。ましてビクビクするな」

「ごめん。ちょっと下が大変なことになったから戻って着替えてくるね」
「少しは恥じらえ性的倒錯者」
「お兄ちゃんからの罵倒は麻薬のよう。なんだかまたきそう」
「もういいから控室に戻って賢者モードになって来い。じゃなきゃロクに話せもしない」
「うん……想像以上に昂っちゃったから、十分は頂戴ね？」
「できればそのまま帰ってくれれば尚良し」
「それはだ～め」
やりたい放題やって、さだめは控室に一時退室して行った。
『……』
む、無言だ。近くにいたアテナは元より、クロノス先生たちすらも無言。い、いたたまれない。
「あ、あの……セツ？」
結局、一番早く復活したのはアテナだった。一番近かった分、衝撃もでかかっただろうに、大分早い復活だ。
「い、今のは……」
「……不肖の……本当に不肖ながら、俺の妹だ。認めたく、ないが」
「さだめも認めたくない。残酷だよね？　さだめたちが決して結ばれないなんて。おんなじ気持ちでいたなんて、さだめ感激！」
「うおあっ！？」
気付けばまたもさだめが俺に背後から抱きついていた。
「控室に戻るんじゃなかったのか！？」
「さだめもびっくり。まさか五分で八回なんて……流石に、お兄ちゃん断ちが数ヶ月も続いただけはあったよ」
早い！　ではなく！
「何度も言うが唐突に後ろから抱き締めるな気配を消すな息を荒げるな！」
「ああ……だめ。お兄ちゃん断ちが長すぎて、賢者モードが長続きしないよぅ……」

「俺の股間に手を伸ばすなぁぁぁぁぁっ！！」
　渾身の力で振り払う。が、一体どんな吸着力かさだめは俺に絡みついたまま離れない。
「こうして後ろから組みついていると……お兄ちゃんを犯してるみたいで……あぁ、エェェエクスタシィィィー！！」
「離れろ常時モラルハザード女！」
「ふぅ～」
「ひあぁっ！　息を吹きかけるな！」
「お兄ちゃんの弱点は開発済み。後は乳首で腰砕け」
「ぎゃあああああ！？」
「せ、セツから離れてください！」
「あ？」
　ガラ悪ぃ！　それまでのみっともなく垂れ下がった眼は瞬時にギリギリと吊り上がり、邪気すらも伴ってアテナを直撃した。
「ひぅっ！？」
　一瞬でアテナが涙目に。……腰を抜かさないだけ根性あるよ。こいつは睨みだけで本職のヤーさんの頭失禁させた女だからな。
「お兄ちゃんとの前戯を邪魔するとか……何なの？　死ぬの？」
　前戯言うなリアルシスター。
『な、何こいつ……禍々しさが尋常じゃないんだけど……』
　シャルナまで引いてるし。
「相変わらずプレッシャーは地獄の闇魔以上だな」
「あぁんそんなこと言わないで。お兄ちゃんの前では常に天使でいたいのに」
「俺の前だと淫魔だよ！」
「そんな……それほどにお兄ちゃんがさだめに欲情してたなんて……このさだめ、一生の不覚！　こんなことならもっと早くヤッとけば……」
「都合のいい解釈をするな！　そして指をわきわきさせるな首筋に添えるな懐に手を突っ込むなぁぁぁ！！」

「カリッ」
「痛っ！？」
首筋にかみつかれ、血が流れる。それを運命は一心不乱に吸い続ける。
「あぁぁ……甘露」
「吸血鬼か！？」
「お兄ちゃん限定で」
「ぎゃあああああああっ！？」
こ、これだから！　これだから会いたくなかったのに！　こっちの世界に来てまでなんでこいつに苦しめられなきゃ……ちょっと待て。
「……さだめ、ちょっと離れろ」
「ヤ」
一文字で拒絶された。
「……特別にそのままでいい。質問に答えろ」
「今日は安全日」
「黙れ腐れシスター。そうじゃない。お前は……お前か？　この世界の」
「んふふ～。今晩約束してくれたら答えてあげるぅ～」
「……その言葉で確信した。お前、『現実』のさだめだな」
「当り前でしょ。別世界のお兄ちゃんなら別人も同じ。体は疼かないし欲情もしない。こんなに体が熱くなるのはさだめのお兄ちゃんただ一人」
理由は全くあれだが……こいつは、こいつも異世界トリップしてきた俺の妹なのか。なるほど甚だ不本意だが、こいつなら別世界の俺かどうか一目で判断付けても違和感がない。
「アニメの世界に現実からトリップしてきた兄妹二人。張りぼての世界で唯一人間の肉親との情事に溺れる……すてき」
「……ツッコミどころが多々あるどころかツッコミどころだけで構成されたセリフだが……これだけは許せん。ここにいる人たちは張

りぼてなんかじゃない。皆生きてる人間だ」
　俺の声に怒りが篭る。それを感じたのか、さだめもまた平坦な声と表情になってぼそぼそと俺の耳元で呟く。
「興味ない。元々さだめにとって兄さん以外はカメムシ以下の存在意義しかもたないから。いるだけで世界が臭くなる。兄さんとさだめの楽園（エデン）に湧いてる汚らしい蛆よ。踏みつぶしても踏みつぶしても湧いてくる。そこの女みたいに楽園の主（にいさん）に擦り寄ってくるのはもっと最悪。踏みつぶして焼きつくして滅ぼしつくす。それでもまだ湧いてくる。どうして蛆って絶滅しないの？　世界には、さだめと兄さんだけでいいのに」
　さだめは、やっぱり全然変わっていなかった。気分がハイなら所構わず俺に欲情し、ローなら全てを呪い蔑み罵倒する。ニュートラルじゃないだけまだマシか。
「聞いてるよ？　あの蛆、兄さんに告白したんだって？　蛆の分際でよくもまあ。ちょっと目を離したらこれだもの。まるで兄さんって誘蛾灯ね。それも周りからは清楚で可憐とか言われてるのばっかり引き寄せる。最悪」
　俺はその言葉を聞いてピンと来た。俺は現実で一度も告白されたことがない。モテないからだとずっと思っていたが、今のこいつの言葉から察するに……。
「お前、まさか……」
「でもその分楽ではあったな。そんな箱入りお嬢様みたいなの、ちょっと潰してやればすぐコワレちゃうし。ああ別にヘンな男に売りとばしたりはしてないよ。面倒だったし、適当に闇討ちしてゴミ捨て場に捨てたし。その後どうなったのかは知ったこっちゃないけど」
　こいつが俺に近づく前に潰してたのか。こいつのことだ。きっと自分の正体を悟らせるなんてことしていない。だがもちろん、そういう問題じゃない。
「おまえ、どこまで……」
「言ったでしょ？　兄さん以外は蛆同然。兄さん、蛆を見たら気持

ち悪いって思うでしょ？　蚊やゴキブリを見たら潰すでしょ？　同じだよ」

「どこが……！」

「さだめにとっては同じも同じ。見るのも聞くのもおぞましい害悪そのもの。見てたって生理的嫌悪しか及ぼさない不浄な害虫」

　こいつが今も放つ暗黒物質（ダーク・マター）のようなオーラに、俺以外の全てが気圧されて動けない。

「どうして……お前は……」

　そこまで歪んでいるのか。

「どうして？　知らないよそんなの。さだめは最初からこうだった。兄さんも覚えているでしょ？　さだめはまだ言葉もほとんど話せなかった二歳の頃に、兄さんを殺そうとしたのよ」

……そうだ。覚えている。忘れようにも忘れられない。あれは俺の心的外傷（トラウマ）だ。俺もまだ三歳で、物心つくより前。それでも俺は……。

「物心つく前だったけど、あれだけははっきり覚えてる。この人が愛しい。この人が欲しい。この人が憎い。この人をコワシたい。そんな衝動。心が震えて、自分がナニカから解放されて昇華するような快楽。おもちゃのブロックで兄さんの頭を何度も叩いて！！　まだ二歳だったから、力もなくて兄さんが気絶するまでとっても時間がかかった。その間の泣き叫ぶ兄さんの声が今でも脳裏に蘇る！　血に染まっていく幼い兄さんの顔が、今思えばどんな宝石よりも輝いて！……物心ついてからようやく理解したの。これが私の恋なんだって。愛だって。兄さんだけが特別で兄さんだけが普通な

の。両親だって私には異形の怪物にしか思えない」
まずい……一人称が『私』になった。ニュートラルだ。ハイでもローでもない。愛欲に狂っても破滅に囚われてもいない。でもその両方に囚われ狂った最悪のモード！
「ねぇ兄さぁん……私、また我慢できなくなりそうなのぉ……腕、腕一本でいいから……私にちょうだい……」
「ざけんな。誰が進んで腕折られるかよ」
ガリィッ！！
「がっ！？」
「は、ぁぁ……兄さんの血。私が……兄さんをキレイにデコレーションして上げるから……」
っ！　もうやばい。限界ラインを突破した！　俺は無駄と思いつつも腕を振り回して振り払おうとする。
「動くな！！」
「ぐあっ！」
それまでしがみついていたさだめの四肢がまるで万力のように俺を締め付けてくる。
「さ、だめ……やめろ……」
どんな力が加わっているのか、抵抗できず、悲鳴を上げる体に苦悶の表情を浮かべる俺を見て恍惚と上気した頬を見せるさだめ。ゆっくりと俺の体の拘束を緩めていく。
「くふふふっ！　あっはははははははっ！　うん。物足りないけど許してあげるね。これからデュエルだもんね。さだめは負けないよ！　おにーちゃん！」
さだめは纏っていた暗黒物質（ダーク・マター）なオーラを消し去り、普通の、無邪気な少女といった笑顔を浮かべた。にっこりと笑って『破滅の女神ルイン』の下へと走り去っていく。
俺は深く深く息を吐き、全身から脂汗を流してへたり込んだ。ハンカチで汗をふき、首筋に流れている血を拭き取る。
「セ……ツ。こ、これ、ば、ばんそう……」

目に涙をためてガクガクと震えながらも必死で俺に絆創膏を手渡してくれるアテナ。……正直、あれでまともに動けるとは思わなかったが助かった。

「……よく動けたな。大分根性いるぞ」

「……ぁぅ」

とはいえ、顔色は蒼白で今にも吐きそうなくらいだ。……一番近くであのオーラを受けていたのに。観客席の奴らですら吐いたり気絶したりしてる中、アテナは危ういとはいえ意識を保っている。

会場の空気はいまだかつてないほどのローテンション。それでもそんな中、早々に気絶したクロノス先生の代わりに鮫島校長先生が十代と翔ＶＳ迷宮兄弟のデュエル開始を宣言したのだった。

第十話「タッグデュエル　災悪の少女」（後書き）

気分を害した方、すみませんでした。正直やりすぎたかもしれません。妹で、変態の色情狂かと思えば完全ヤンデレです。作者の中でのヤンデレを、まったく何の規制もなしに書くとこうなるっぽいです……。自分で書いといて今日眠りたくないです。途中からこれが遊戯王のＦＦだって忘れかけてた作者がいます。

では……微妙に反応が怖いですが感想、お待ちしております……。

レーネスでした……。

第十一話「タッグデュエル　終焉を告げる少女」（前書き）

第十一話です。今回は前回に比べてヤンデレ薄め。多分。
相変わらずギャグはほぼなし。ネタも控えめと、最近はちょっと作品の形式すら変わってきましたが、多分そろそろ戻るかと。次の話終わった辺りからいつものギャグ成分を増量予定。では、今回は全編通してデュエルです。どうぞ！

第十一話「タッグデュエル　終焉を告げる少女」

アルカナ～切り札の騎士～

第十一話「タッグデュエル　終焉を告げる少女」

　第一次さだめショック（仮）から何とか立ち直った会場が十代たちの勝利に沸く。歓声がやまない。まるでこの先に出てくるナニカを少しでも先延ばしにするかのごとく。
「……煩い」
　ピタリ、と歓声がやんだ。あの大歓声の中で、何故あんなぼそりとした呟きが聞こえたのか謎だ。
「煩い煩い煩い……雑音雑音雑音！　兄貴以外は口を開くな！　呼吸音すら耳障りだ！　アハッ！　アハハッ、アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」
「げっ……今度は裏モードかよ。なんでこう顔見せとばかりに全部のモードが出てくるんだ……」
「セ、セ、セツ？　あああああの、ううう裏、裏って？」
「……基本艶っぽい笑みか無表情がデフォルトなさだめが、ああやって俺を兄貴と呼びながら高笑いを始めると裏モードだ。あれはやばい」
「どど、どれもこれもやばくないものがなかった気が……」
「そりゃそうだが、あれは周囲への被害が精々暗黒オーラだけだからな。裏だとさだめの破壊衝動が見境なしにまき散らされる。理性のトンだ状態、だな」

基本的には衝動は俺にしかこない。が、裏だと見境なし。周囲への被害は災害に匹敵する（俺調べ）。

「さっさと上がりなさい！　そして堕ちろ小娘ぇ！」

「ひいっ！？」

さだめ（裏）の殺意の波動を受け、さしものアテナも一瞬意識が飛んだらしく、ふらりとよろめいた。

……無理もない。あの状態でのプレッシャー直撃は暗黒物質オーラ（濃縮還元１０００％）の大剣による一刀両断みたいなもんだ。

「せ、セツ……か、帰りたくなってきました……」

「アテナ……そいつはこの場にいる誰もが思っていることだ。下手に口に出すと大混乱が起きるぞ」

主に、逃げようと出口に殺到する人で。死者が出ることもあり得る（経験あり）。

というか、ここまでくると俺も若干泣きそうだ。俺が泣いたらさだめが狂喜して被害が拡大するだけなので必死に込み上げてくる涙をとどめる。

「アテナ、さっさとデュエルモードに入っちまえ。そうすればまだ耐えられるだろ」

「……力を貸して。私のデッキ！」

うし。若干厨二チックだが落ち着いたので良し。まだ多少震えてるが。

「……」

「あっ！」

マズイ！　裏さだめの進路上に気絶したまま放置されたクロノス先生が！

「邪魔よ蛆ヘドロが」

「ひっ！？」

さだめは横たわるクロノス先生を一瞥し、右足を振りぬいて蹴り飛ばした。クロノス先生は2、3度跳ねてから壁に叩きつけられた。

「な、なんてことを……」

アテナたちは戦慄しているが、俺はむしろ安堵の息を吐く。
「良かった……機嫌は最低ってわけじゃなさそうだ……」
「あれでですか！？」
「あいつの機嫌が最悪なら、顔面と股間を徹底的にけたぐり回し、鳩尾にスタンピング入れてから空中コンボ決めて蹴り飛ばす」
裏の奴なら本気でやりかねない。
「……始めるよ。兄貴」
「……ああ。まあ、それが今回の目的なんだしな」
「サポートしなさい。破滅の」
「……わかった」
「行くぞ、アテナ。怯えることはない」
「……んっ！　はい！」
アテナは首を振り、恐怖を払い落す。
『デュエル！！』
「わた……「私のターン！！」ふあっ！？」
にゃろ！　強引に先攻奪いやがった！
「手札から『魔力倹約術』発動！」
『魔力倹約術』！？　魔法カードを発動する際のライフコストをカットする永続魔法！　こいつがあれを使うってことは……。
「おいこらまさかそのデッキ……」
「アハハッ！　わかる？　わかるぅ？　アハッそう、私はこれを使うよ！『終焉のカウントダウン』！」
「アテナ！」
「え！？」
「『緑光の宣告者』は！？」
「す、すみません！　ないです！」
「マジか……」
一ターン目でパーミッション出来るとしたらそれしか道はなかったんだが……。
「効果は知ってるよねぇ？　だってこれってば兄貴の常套手段だも

ん！」
「……ああ、そうだよ」
『終焉のカウントダウン』ライフを２０００支払う代わりに各ターンのエンドフェイズにカウントが一つずつ溜まっていき、２０カウントで勝利を決める特殊勝利カード。一ターン目には誰も攻撃できない特殊タッグルール採用のここじゃ、めちゃくちゃに危険なカード。
「ターン終了！　さあ、なんでも出してきて。完封してあげるからぁ！」
カウント１
「……俺のターン！　ドロー！」
さだめのターンが終了したら、次は正面にいる俺にターンが回ってくる。俺の手札はそこそこ速攻性があるが、一ターン目には攻撃できない。
「手札から、『クィーンズ・ナイト』を攻撃表示で召喚！　カードを二枚セット！　ターンエンドだ！」
『クィーンズ・ナイト』ＡＴＫ１５００
「カウントダウ～ン♪」
カウント２
「ぐ……」
まだ二つ目。とはいえ、『終焉のカウントダウン』はその特性上、途中で効果をなくすことができない。その上タッグだと、実質的に自分のターンは５回しか回っては来ない。そして一ターン目は攻撃できない。実質さだめは俺の攻撃を四ターン防ぎきれば勝利が確定。
……こりゃキツイな。
「私のターン」
ルインがあくまで冷静にカードをドローする。ルインが操る以上、デッキは……。
「私は『マンジュ・ゴッド』を攻撃表示で召喚。効果で『高等儀式術』を手札に加え、ターンエンド」

『マンジュ・ゴッド』ＡＴＫ１４００
カウント３
やっぱり。儀式モンスター主軸か。
「私のターン。ドロー！」
アテナがターン開始を宣言するも、さだめは全くそちらの方を見向きもしない。……当然だろうな。さだめにとってはアテナも『蛆』でしかないんだ。態々蛆に目は向けない、か。徹底してるよ。お前は。
「私は手札から、『ヘカテリス』を二枚発動！　『神の居城―ヴァルハラ』を手札に二枚！」
ぬ。ヘカテリスが被ったか。まあそういうこともある。デッキ圧縮と墓地肥しにはなるのだから良しとしよう。
「手札から『神の居城―ヴァルハラ』の効果発動！　『光神テテュス』を攻撃表示で特殊召喚！　さらにモンスターをセット！　ターン終了です！」
『光神テテュス』ＡＴＫ２４００
カウント４
「……ふうん。天使、かぁ」
「っ！　な、何か？」
「別に。兄貴に擦り寄る薄汚い蛆のくせして、随分綺麗な種族を使うのね、って思って。『ワーム』とかの方がお似合いよあなた」
「っ！！」
アテナが唇を噛みしめる。そしてそんなアテナに、もうさだめは興味を失ったようだ。
「ドロー。カードを一枚セット。終了」
カウント５
一枚伏せただけ、か。ってことはあれは何らかの防御カード。そうは行くかよ！
「俺のターン！　ドロー！　俺は手札から、魔法カード『撲滅の使徒』を発動！　さだめのリバースカードを撲滅する！」

「アハハッ。甘いよ兄貴。そのリバースカード発動『威嚇する咆哮』。このターン兄貴は攻撃宣言できない」
っ！　そいつかよ！
「俺は『キングス・ナイト』を召喚！　効果でデッキから『ジャックス・ナイト』を特殊召喚！　ターンエンドだ！」
『キングス・ナイト』ＡＴＫ１６００
『ジャックス・ナイト』ＡＴＫ１９００
カウント６
着々とカウントは進む。……俺に残されたターンは後３ターン。モンスター自体は出揃ってきているとはいえ、防御効果を持つカードを多く積んでいるであろうさだめにはキツイ！
「私のターン。手札から『高等儀式術』を発動」
来るか！　ルイン！
「デッキから『甲虫装甲騎士』を二体墓地に送り……」
「え……」
インセクト……ナイト？　っ！　まさか！
「我らが王、絶対の終焉を導く暴君、降臨せよ『終焉の王デミス』」
『終焉の王デミス』ＡＴＫ２４００
ルインのフィールドに、巨大な戦斧を携えたフルプレートアーマーの暴君が現れる。
コイツは……コイツは！
「デミスの効果を発動。ライフを２０００ポイント支払い、デミスを除く全てに等しく終焉を与える。『終焉の嘆き』」
『あああああああああっ！！』
さだめ＆ルインＬＰ６０００
「くっ！　クィーン！　みんな……」
デミスが掲げる戦斧に、フィールドの全てが巻き込まれていき、吹き飛ぶ。後にはデミスだけが残る。
「アハッ！　みんな消えちゃえ～！　アッハハハハハハハハハハハハ！」

全てが消え去ったことで機嫌が良さそうなさだめを横目で見ながら、俺は戦慄していた。

やっぱり間違いない！　ルインだからてっきり自分中心のデッキ構成をしてくるとばっかり思っていた！　違う、こいつのデッキは……。

「私は墓地の『甲虫装甲騎士』二体を取り除き、『デビルドーザー』を特殊召喚」

『デビルドーザー』ＡＴＫ２８００

ルインのフィールドに、見上げるほどに巨大なムカデが召喚される。

これで決定だ……ルインのデッキは『デミスドーザー』！　下手をすればワンターンキルも可能な強力デッキ！

「あ、ルイン～兄貴に攻撃するより、そっちの身の程知らずの蛆を潰してらっしゃい」

「……わかった。二体のモンスターでダイレクトアタック」

「きゃあああああああっ！？」

「アテナ！」

全てが吹き飛んで茫然としていたアテナに、上級モンスター二匹の攻撃が容赦なく襲いかかる。

セツ＆アテナＬＰ３８００

「カードを一枚セット。ターン終了」

カウント７

「アテナ！　おいさだめ、なんでアテナを……」

「ん～？　なんで兄貴が怒るのぉ～？　タッグなんだから、どっちを攻撃しようが自由でしょ？」

「……」

そう、それはそうだ。だが、それでも悪意を持って攻撃対象を選択するのはいただけない。

「だ、大丈夫です。ちょっとびっくりしただけですから」

「アテナ……」

「正直、驚きました。ロックしてくるだけかと思ったら、こんな高火力もあるなんて……」
「……多分、さだめのデッキには入ってない。あいつはビートを殆ど使わないしな」
「兄貴と一緒よね」
「っ！」
さだめが余計な茶々を入れる。
「さっきから、どういう意味です？」
アテナの問いかけに、さだめが嫌らしい笑みを浮かべる。
「なに？　聞いてなかったの蛆。特別よ。教えてあげる。私の兄貴、御堂切はね。元々フルバーンデッキや私と同じ終焉ロックを主軸にしてたの。そりゃあもう、私なんかメじゃないくらい嫌らしいデッキ構成してたんだから」
「……え？」
アテナが茫然とした表情でこちらを見つめる。それは会場の人間たちも一緒だ。……ここじゃ三銃士のビートしか使ってなかったから、まさか俺がそんなデッキ使いだったとは思っていなかったのだろう。
「そう、なんですか？」
「……ああ。そうだよ。俺はフルバーン使いだ。相手に嫌がらせみたいな邪魔しながらバーンで焼き尽くすのが俺の得意技だった」
「だから驚いちゃった。何を血迷ったのか兄貴、いきなりそんなくだらないビートデッキ使ってるんだもの。どんな心変わり？」
「……違う。ただ俺は、ビートの方が自分も相手も楽しめると思っただけだ」
「相手も？　アハハハハハハハハッ！　ヘンなこと言うね兄貴。相手を楽しませてどうするの？　デュエルは勝つから楽しいんじゃない。相手に何にもさせないで、じわじわじわじわじわじわじわじわじわじわ嬲って嬲って嬲って嬲って嬲って嬲り殺すの。その方が何十倍も愉快よ？　そうでしょう？　兄さん？」

「……そうかよ」
　ニュートラルに入ったらしい。破壊衝動をまき散らす裏にくらべりゃマシ。けど俺への被害は十割増し。
「そう考えれば、デミスの効果はキライじゃないなぁ。相手のフィールドがどんなに整っていようとお構いなしに全部まとめて無に帰す。粉々のぐちゃぐちゃのボロボロにするの。あぁ……イイ」
　そういって恍惚とした表情を浮かべる。
　さだめの考えを、俺は間違ってるとは言えない。俺も同じだったんだから。やっぱりなんだかんだで俺たちは兄妹なんだ。お前のその極悪な精神が理解できるんだから。心の片隅で、確かに……って、思っちまうんだから。
「『何もさせずに勝つ』これは私が、お兄ちゃんから教わったんだよ？　お兄ちゃんに言い寄ろうとしてた女たちも、何もさせずにコワしたよ」
　……結局、こいつの狂気にターボかけさせたのは俺、か。
「なら、俺が止めるしかないな」
「……いえ、ここは私に任せてください」
「アテナ？」
「……私には、セツが悪かったとは、どうしても思えません。セツがさだめさんを止めると言うのなら、私も手伝います！」
「アテナ……」
「ウウウウ煩い蛆虫！　兄さんに擦り寄るなぁ！　兄さんを見るな兄さんと話すな兄さんに触れるな穢れが移るゥゥゥァァア！」
「セツ！　見ててください！　きっと私は、セツの期待にこたえて見せますから！　私のターン、ドロー！　手札から魔法カード『打ち出の小槌』を発動します！」
「！？」
　来たか。現実よりも圧倒的に強力なカード！
「このカードと任意の枚数手札をデッキに戻して、新しくカードをドローします！」

アテナは手札を確認し、『打ち出の小槌』を含めた三枚のカードをデッキに戻す。
「ドロー！　私は手札からヴァルハラを発動！　『アテナ』を特殊召喚！」
『アテナ』ＡＴＫ２６００
アテナのフィールドに、自らと同じ名をもつ女神が召喚される。
『ルイン……』
シャルナは、ルインに何か思うところでもあるのか、先ほどからしきりにルインを気にしている。
「更に魔法カード、『死者蘇生』！　『光神テテュス』を蘇生！」
『光神テテュス』ＡＴＫ２４００
テテュスが特殊召喚されたことにより、シャルナの持つ杖から光線が走り、さだめたちのライフを減らす。
さだめ＆ルインＬＰ５４００
「最後の手札！『強欲な壺』！　カードを二枚ドロー！」
さあ……加速開始だ。俺も知ってる。アテナの、テテュスによるドロー加速！
「着いてこれるか？　さだめ！」
「なんで……なんでよ……ディスティニードローとかふざけてる……ふざけてるでしょおっ！？」
「『ジェルエンデュオ』をオープンしてドロー！『緑光の宣告者』ドロー『紫光の宣告者』ドロー『オネスト』！　ドロー終了！」
「な、なによ。それじゃまだどうしようも……」
「手札から、『打ち出の小槌』を発動！」
「っ！？　な、あ……」
「手札を戻してカードをドロー！　『オネスト』ドロー『緑光の宣告者』ドロー『虚無の統括者』ドロー『ムドラ』ドロー！」
アテナのドローは止まらない。相変わらず、とてつもない加速能力だ。似たような『凡骨の意地』と比べて天使限定だが効果モンスターでも関係ない上ドローフェイズじゃなくてもお構いなし。

「『ヘカテリス』ドロー『スケルエンジェル』ドロー『ゾルガ』ドロー！　手札から『打ち出の小槌』発動！」
「はぁ！？」
しかもこの世界の『打ち出の小槌』は減らない。三枚積んでおけばすぐに手札に来る。好きなだけ手札を交換できるのと同じだ。
その後もアテナは次々とカードをドローする。そして手札の枚数が二十枚を突破したころ、ようやくアテナはドローを止める。
「揃いました。セツ。セツの教えてくれたコンボパーツ。全部揃いましたよ！」
「……やっぱお前はすげーよ。アテナ」
半ばあきれ顔でアテナを褒めると、アテナはそれでも首を振った。
「いいえ。一枚しか持ってなかった『打ち出の小槌』も、セツが二枚くれました。レアカードなのに、頑張ってそろえてくれました」
「あー、いや……」
一枚はそうだが、もう一枚は例のアンティ時に先輩のデッキに入っていた奴だ。きっとあれもクロノス先生から貰っていたんだろうが……。
「これからやるコンボも、セツが昨日教えてくれたやつです。セツの、おかげです」
「決まってもいないコンボでもう勝ったような会話してるんじゃないっ！　兄さんと会話するなぁ！　通じ合うなぁ！」
「決まりますよ。このコンボは！　手札から『大嵐』発動！　リバースカードを破壊！」
「！　チェーン。『和睦の使者』」
「手札から『紫光の宣告者』と『ゾルガ』を捨ててパーミッション！」
ルインの和睦は聞き入れられない。聞き入れてなんてやらない。
「手札から、『光神化』を発動！　手札の『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を攻撃力と守備力を半減して特殊召喚！」
『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』ＡＴＫ２８００→１

４００
　アテナの場に、強すぎる輝きを持ったヴィーナスが現れる。輝きが強すぎて、今にも燃え尽きてしまいそうだ。
「速攻魔法『地獄の暴走召喚』！　自分フィールド上に、攻撃力１５００以下のモンスターが特殊召喚されたときに発動します！　自分の手札、デッキ、墓地から同名モンスターを出せるだけ特殊召喚！　来て！『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』！」
　『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』ＡＴＫ２８００
　更にフィールドに特殊召喚されるヴィーナスたち。
「わかってるよな！？　お前たちもフィールドのモンスターを選択して特殊召喚できる！」
「そんな……でも！」
「ああそうだ。お前らのフィールドにいるのは儀式モンスターの『終焉の王デミス』と召喚に制限のある『デビルドーザー』のみ！」
「よってあなたたちには特殊召喚ができません！」
「例え出来たとしても、『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』の効果により攻撃力守備力は１５００ポイントダウンする！」
「更に『アテナ』の効果！」
　さだめ＆ルインＬＰ３６００
「『アテナ』の特殊効果！『光神化』によって呼び出された『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』をリリースして再び蘇生召喚！」
　さだめ＆ルインＬＰ３０００
　場に、完全な状態の『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』が三体と『アテナ』そして『光神テテュス』が並ぶ。ルインの場にいるのは攻撃力が低下し、たったの９００となった『終焉の王デミス』と１３００になった『デビルドーザー』。さだめの場に至ってはがら空き。
「そんな……うそ。あり得ない」
「現実だ。アテナは決めてくれたよ。必勝コンボをさ」

「っ！　それがあり得ないのよ！　なんであのタイミングで『打ち出の小槌』だの『強欲な壺』だの引いてくるのよ!?　そんな非常識なドローがあってたまるか！　認めない認めない認めないミトメタクナイィィィィィィィィッッッ！！」

「さっきのお返しです。全モンスターで、さだめさんにダイレクトアタック！！」

「茶番、チャバンちゃばんよ！　全部茶番ンンンンン！！」

「終焉（コールドゲーム）だ。さだめ」

「えええええい！」

光を纏った天使たちが、暗黒のオーラをまき散らすさだめに殺到する。

……勝負、有りだ。

さだめ＆ルインＬＰ０

第十一話「タッグデュエル　終焉を告げる少女」（後書き）

はい。というわけで、特に何もしてない癖にかっこいいセリフでセツがシメました。しかもネタで。

本来あの世界のタッグにおいては終焉のカウントダウンはとても強いはずです。あの二人のタッグの場合、終焉のカウントダウンが初手にあれば迷いなく使い、そうでなくばデミスドーザーのビートで決めるのでしょう。相手としては絶望もんですよ。終焉食らえば守りきられて終わるかもしれないし、終焉なければまた別の終焉に全破壊食らうわけですし。が、アテナのコンボはさらに凶悪。あれはもう実質完全なワンキルですよ。光神化＋地獄の暴走召喚。ゲームで使ったことがあります。めちゃくちゃ気持ちよかったです。

次回でしばらくさだめは退場。ルインは時々ふらりと現れます。さだめはそもそもそんなに出番ないです。……ええ、一人で作品の空気感変えられちゃたまりません。そしてついでにさだめが終焉デッキを使うのも多分これきり。次回は全く違う、しかしやっぱりこの世界の空気は読まないデッキを携えて現れるでしょう。

それでは、レーネスでした！

第十二話「恐怖、そして絶望へ」（前書き）

……え～。なんだか作者自身理解できないうちにこの作品がどんどん鬱ストーリー化してきています。タイトルから見てわかるかもしれませんが。次回の途中からは多少いつものギャグペースが戻ってくるのですが。……うん。この流れからギャグに戻すとか馬鹿なの？　死ぬの？　って感じですが、戻ります。戻します。さだめの影響力が想像以上に強すぎたのが原因です。正直、自重しとけばよかった気がします。作風にすら多大な影響を及ぼすヤンデレ、恐るべし。

では、批判も激しそうな第十二話、どうぞ。

第十二話「恐怖、そして絶望へ」

アルカナ～切り札の騎士～

第十二話「恐怖、そして絶望へ」

「……」

「私の、私たちの勝ちです。さだめさん」

アテナが呆然とするさだめに宣言すると、さだめは顔も上げずにつぶやきだした。

「……クソ食らえ」

「え？」

「最低よ。最悪よ。蛆のくせに粋がりやがって。犯し殺し砕き壊し地獄へと引きずり堕としてやる。殺すだけじゃ飽き足らない。細胞の一つ一つ全てに恐怖と絶望を刻みこんで生かし続けておいてやる……朝も昼も夕も夜も正面も背後も上下左右にすらも安息のない疑心暗鬼の日常を送ればいいわ……」

「お、おいさだめ……？」

な、なんだ？　俺でも見たことないぞ。あれは。まだ他にもモードがあったのか？

禍々しいのは同じだが、他のモードのようにわめきたてたりはしない。あえて言うならローが一番近い気もするが、ローの時はいわゆる自虐モードみたいなものだからこんなふうに毒々しいまでの邪気は持たない。

「もうお兄さまを諦めるだけじゃ終わらないと知れ小娘。私が飼っ

て上げるわ。堕ちた天使として。希望を奪われ、廃人になって尚も新たな絶望を味あわせて。闇に堕ち、光を失い地の底まで堕とされた貴女のココロをすり潰す。貴女には何物も渡しはしない。全てを奪われ嘆くがいいわ」

さだめが一言しゃべる度、昏いオーラが濃縮されて、それで尚大きく強くなっていく。俺ですら、最早迂闊に近寄れない。

「尤も、嘆くココロさえあげはしないのだけど。そう、それがあなたの……」

運命（さだめ）、よ――

ぼそぼそと、しかし相変わらず良く通る声で呟くと、さだめは静かに会場を立ち去って行った。

ドシャッ、と何かが崩れるような音がして、会場の人間の何割かが崩れ落ちた。アテナたちでさえ腰を抜かしてへたり込んでいる。立っているのは俺と何故かその場に残ったルインのみ。

「……お前は、行かなくていいのか？」

「……まだ、キミへの挨拶が済んでいない」

「俺？」

「キミも、私に聞きたいことがあるはず。そこの『アテナ』も」

『……今はシャルナよ』

「そう……何の冗談？」

『偶然よ。奇跡的な、ね』

「そう。いいマスター」

『そういうあんたのマスターは、名状しがたいほどに暗黒ね』

「あの子には一点の曇りもない。ある意味誰より純粋で誰より真っ直ぐな光の神子」

『……昔からだけど、あんたの言葉は理解不能よ』

「……いや」

俺には、ルインの言葉がよくわかる。理解できる。

「さだめは、最初に俺を殺そうとした二歳の頃から何も変わらない。何一つ自分を曲げず、一心に生きている。方向性こそ間違っちゃい

るが、あいつはいい子だよ」
『わかりません。わたくしには、主様の言葉が理解できません。何度となく殺されかけ、自らの幸せを奪われかけ、今尚主様を苦しめ続けるあの悪魔を……』
「クィーン！」
『っ！？』
「さだめを……悪魔と呼ぶな。それだけは、何があろうと俺が許さん」
『……も、申し訳……ありません』
俺はあいつを嫌えない。何があっても、俺はあいつを怨めないし怨まない。
「あいつは俺の妹で……俺は、どこまで行っても、何をされてもあいつの兄貴なんだ」
なんとかショックから抜け出せたらしい十代たちもこちらに近づいてきた。
「なぁ、セツ……」
「……なんだ、十代」
「オレ、兄妹とかいないし、よくわかんねぇんだけど……」
「ああ」
「あの子は、お前をホントに兄貴として見てるのか？」
「……見てるよ。あるいは、俺なんかよりもずっと、な」
だからこそ、あいつはあんなに必死なんだ。誰より純粋で、誰より弱くて、誰より怖がりなあいつだから。
「なら、オレはなにも言わない。きっと、オレじゃわかんないことだからな」
「サンキュ、な。十代」
「僕には、分かんないよ……」
「翔……」
「僕はお兄さんが好きだ。心から尊敬してる。だから、同じ兄を持つ者として、あの子の考えがまったく理解できないんだ……」

……。

「翔は、それでいい。お前は、お前のままで、お兄さんを好いてやれ」

理解できない。それも仕方ない。さだめが異常であることは、俺にだって否定できはしない。

「俺には、彼女のお前に対する想いは、恋愛感情のようなものじゃなく、執着、妄執、何かに縋りつきたい心の表れ、のように感じたな」

三沢……やっぱりお前は良く見ているよ。

「そうかもな……」

「セツ……失礼だとわかってるけど、聞くわ。貴方達の御両親は……？」

「……母さんはベッドの上で生き人形。父さんはワーカホリックで殆ど家に帰らない。まるで、さだめと少しでも顔を合わせたくないように……」

「っ……！」

予想以上に酷い。そんな顔をしている明日香に、気にするなと手を振る。

「……二歳の頃に俺を殺しかけ、五歳くらいまで毎日のように殺されかけた。さだめが小学校に通い始めるころ、あいつは俺から片時も離れようとはしなくなった。殺されそうになることは激減したけど、その分あいつは四六時中俺にべったりで……」

思えば、あの頃が一番平和だった。さだめが自分の想いを恋だと錯覚して、性の意味も知らず、俺にくっついていたあの頃が。

「小学校の高学年くらいからは貞操を狙われ始めたんだったか。その辺りからは、今と大差ない」

「その……なんだ、病院とかには……」

「……連れて行ったさ。母さんたちがな」

「どう、なったんだ？」

「医師と看護師を廃人にして戻ってきたよ。母さんも、それで体調

崩して今もベッドの上さ」
　周りが息を呑むのが感じられた。
「……周りはもちろん、母さんたちでさえ、あいつを悪魔呼ばわりだ。あいつはずっと……一人ぼっちだ」
「そしてここに来て、キミも傍にはいなかった。ここ数ヶ月の彼女は見るに堪えなかった」
「……ああ」
　ルインの言葉には悲しみが篭っていた。
「ずっとキミだけを気にしていて、他の人とのデュエルでは、相手を徹底的に潰して再起不能にしていたあの子に、今回の話」
「俺と、ちゃんとした舞台で、誰にも咎められることなく会える。そういうことか」
「……意外だな。あの様子を見た限りだと、こんな機会なくっても乗り込んできそうだが」
「あいつは、ヘンなところで臆病なんだ。俺から会いに行かなかったから、来るに来られなかった。そんなところだろ」
　多分、デュエルで相手を再起不能にしていたのも俺の耳に自分の噂が届くように、ってことだったんだろう。……結局、気付いてやれなかったが。
「……やっぱ、俺の所為かな」
　道理でモードが不安定だったわけだ。あいつも、俺と会えて舞い上がってたんだろう。俺に拒絶されないか、不安で仕方なかったんだろう。
「そこに、その子がいた」
「っ！」
　アテナがビクッと反応する。
「やっと心の拠り所であるキミに会えたのに、傍には見知らぬ女の子。それも兄に告白までした、あの子にとっての怨敵」
「わ、わたし……」
「ああ……告白の返事、まだしてなかったっけか……」

「ぁ……」
「お、おいセツ。お前まさか……」
「……悪い、アテナ。俺がここで、お前の気持ちに答えたら……あいつは、さだめは支えを失って壊れる。俺は……あいつのために、お前を振るよ」
「っ！」
アテナが息を呑む。ペタン、と地べたに座り込む。
「セツあなた……！」
「悪い明日香。お前にあんなこと言った癖に……やっぱり俺は、肉親の情の方が重いらしい。トモダチとあいつ（妹）、俺は……さだめを一人にはできない」
「ぅ……あ」
「……虫のいい話だけど、さだめだけは、怨まないでやってくれ」
俺は、アテナのすすり泣く声から逃げるように、その場を立ち去った。

「良かったの？」
俺についてきていたらしいルインがそう尋ねてくる。
「良くねえよ」
そんな質問、何の躊躇もなく答えられる。
「良いわけねえだろ……！」
俺を信じてくれて、助けてくれて、好きだ、って言ってくれた娘を傷つけて……。
「くそっ！」
壁を殴りつける。ミシリ、と嫌な音がしたが、痛みなんてもう散々さだめで慣れている。悲鳴一つ上げなかった。
「……好きだったのね。あの子のこと」
「……当たり前だろ」

あんなに強くて優しい娘が、あんなに一途に慕ってくれて。
「惚れるに……決まってんじゃねえか」
「……そう」
ルインは何も言わない。慰めも、罵倒も、叱責の言葉も。それがありがたいと同時に苦しかった。
「キミは、これからどうするの？」
「……」
寮には、戻れねえな。
「……なら、精霊界に来るといい。そこでしばらく過ごせばいい」
『貴女……何を！』
「キミならその気になればいくらでも精霊界への扉が開ける。心の整理がつくまで、そちらにいればいい」
『ルイン……！』
「貴女だってその方が都合いいはず。大好きな主様を、自分の手で癒してあげられるのだから」
『っ……貴様！』
「やめろクィーン」
『主、様』
「どっちにしろ、そこに行くくらいしか今はできない。いいさ。しばらくは会わせる顔もない。いや、一生……かな」
『そんな……ことは……』
「ルイン。お前も意地悪な言い方をするな。クィーンは真に受けやすい」
「そのよう。自重する」
あっさりと非を認め、謝罪する。
「それで、どうすればその精霊界に行けるんだ？」
「キミならどこからでも望めばそこに扉が開く。でも、始めは実際にある扉から行くのがわかりやすくていいかもしれない」
ああ……温泉か。
「温泉の向こうにその扉はある。とりあえずそこに行く」

「アテナ……」
「うっ、ぐすっ！　ぅあ……」
「あいつは……セツは貴女が嫌いだから振ったわけじゃない。むしろきっと……」
「そっ、れでも……セツ、にはわ、私よりも、優先するものがっ！　ヒクッ」
「……それは」
「あのバカッ！　これじゃ妹さんの思い通りじゃねえか！」
さだめはアテナに、何も与えはしないと言った。希望を奪い、絶望を味あわせると。奪われて嘆けばいいと。それが、運命だ、と。
「こうなるって、わかって言ったのかな……あの子」
「例えそうでも、不思議じゃないな」
しばらく泣いて、ようやく少し落ち着いたアテナが口を開く。
「……きっと、セツにも分かっていたはずです。さだめさんの真意は」
「そう……かもな」
「ずっと告白の、答えをもらえなかったのも、きっと……」
「アテナ、今日は女子寮に帰りましょう？　帰って、休んだ方がいいわ」
「そうだな。天上院くんも付いていてあげてくれ。妹君が何か仕掛けてこないともわからない。俺たちが女子寮に行くわけにもいかないし……」
「……セツだったら、きっと何の違和感もなく入れるんでしょうね……」
昨日だって、アテナは自分の部屋で、いつの間にか来ていたセツと一緒にデッキを組んだのだ。そのことを思い出し、また心が沈む。
「……」

そして意気消沈したまま、アテナは明日香に連れられて女子寮へと戻って行った。

「……正直、俺には妹君もセツも許し難い。アテナの心を弄んだと言われても否定できない」

「……けど、セツは妹さんを怨まないでくれって、言ってたぜ」

「……ああ。妹ではなく、自分を怨め、と。そういう意味なんだろうな」

「どこまで……どこまであの子はセツ君の人生を蝕むつもりだよ……妹でしょ！？」

「わからない……わからないが……あの二人は、どうも普通じゃない。妹君だけでなく、セツもまた」

退学が取り消された、という事実があるにも拘わらず、この場で明るい表情の人間は誰ひとり存在しなかった。

「……おい、ルイン」

「なに？」

「温泉に扉があるのはわかった。わかったけどな……」

俺は裸にバスタオル一枚という少々青少年には刺激の強すぎる格好で温泉に浸かっているルインを、極力見ないようにしながら怒鳴った。

「別に浸かることないだろ！？　さっさと精霊界に行けばいいだろうが！」

「温泉があるのだから、浸かる。何も不思議ではない」

「壮絶な葛藤と逡巡の果てに女を振って傷心の男が、その日の内に別の女と混浴とかねえよ！　ただの最低男じゃないか！」

「それでなくとも最低」

「ぐはっ！？」

否定できない。

「だったらそのまま最低男の街道をひた走ればいい。鬼畜ルート乙」
「断固として断る」
「そう。じゃ、こっち」
「……」
や、やりづらい。今までいなかったタイプだ。反応が予測できない。
「ここか？」
「正直位置はどうでもいい。キミがそうだと思ったならそれでよし」
ルインのよくわからない回答と共に、俺の体は光の中に呑み込まれていった。

第十二話「恐怖、そして絶望へ」（後書き）

セツ死ねー！　との声が聞こえてきそうな第十二話です。おのれセツ……あんないい子を泣かせおって……はい。すみません。書いたのは僕です。あっ、石を投げないで！

ある意味、第一部のターニングポイントのような話です。ここら辺から、もうしばらくは完全に原作の面影がなくなります。ついでに、精霊界についてはほぼ完全にオリジナル設定。原作の精霊界とは色々と違い、というか別物な感じになります。

そしてアンケート。セツの精霊界からの帰還時期です。物語的にはセブンスターズとの戦いくらいで帰すのが一番いいんですが、そうするとレイフラグは完全に消滅すると言っていいでしょう。むしろ出番からしてほとんどなくなる可能性大。レイファンの方には申し訳ない。が、その代わりレイは原作通り十代フラグが立ちますので、十代×レイが良ければそちらの方がいいでしょう。レイの前に帰して、セツにレイフラグを立てる場合、ちょっと予定を崩す必要が出てくるので色々やっかい。それでもセツにレイフラグを立ててほしければそちらで。読者様の希望が聞きたいです。要約すると、レイをどうするか、です。

それでは、ご協力をお願いいたします。レーネスでした！

第十三話「精霊界　沈む心」（前書き）

超速アップ！　昨日までの話が重たく暗い奴ばっかりだったので、気を紛らわすために書いてたら速攻できあがりました。というわけで、お久しぶりのギャグです。タイトルと前半こそシリアスですが、それが終われば後はギャグ一直線な内容になっておりますのでこれまでの暗い雰囲気消し飛ばしていけたらなぁと思います！　ではどうぞ！

第十三話「精霊界　沈む心」

アルカナ～切り札の騎士～

第十三話「精霊界　沈む心」

俺が目を開くと、そこに広がっていたのは滅びた街。生命の息吹を感じさせないその光景に、俺は何故か心が落ち着くのを感じた。
「……ここはもう終わってしまった街。私が管理していた、そしてデミス王の誕生と共に滅びた世界」
「エンド・オブ・ザ・ワールド……か」
「まさかここに出るとは思わなかった」
「え？　お前がここを選んだんじゃないのか？」
「扉を開いたのは、厳密にはキミ。ここを選んだのも、キミ」
「そう、だったのか」
ルインが一緒だから、俺の意識が潜在的にここを選択したのかもしれない。
「……違う」
「え？」
「ここはきっと、キミの心象風景に最も近い地。ここを選んだのは、キミのココロ」
そう話すルインの顔が悲痛に歪んでいるのを見て、俺は周囲を改めて見渡す。
滅びた街。倒壊した家屋。風化した頭骨。そこには、そのような息吹も感じることができなかった。

「これが……俺の」
「心象風景。キミのココロ。もうとっくの昔に傷つき壊れた、キミの精神」
「さっきのルイン達の例で言えば、俺の心はさだめが生まれた時に壊れた、ってことか」
「私に言わせれば、あの子のなんかより、キミの方がよっぽど病んでいる。あの子と十年以上も一緒にいて、今も明るく何事もないように毎日を過ごしている、キミの方が」
「……俺の元気はから元気だよ。常に、な」
「……から元気で、あそこまで楽しそうにできるもの？」
「簡単だ。自分を騙してしまえばいい。今の俺はすごく楽しいんだって。幸せでしょうがないんだって」
仮面（ペルソナ）を被り続けていれば、何時かそれが本当の顔になると信じて。
「やっぱり、壊れてる」
「……いいさ。それでさだめの支えになれる。十分だ」
「何故、そこまでしてあの子を？」
「妹だからだ。俺にとっての唯一無二、絶対不可欠な肉親だからだ。おかしいか」
「その大事な肉親に、キミは殺されかかってる」
「ただの、じゃれあいさ」
「それは、紛れもなくキミの狂気」
「……言っただろ。一途にずっと慕ってくれて、惚れないわけないって」
「キミは……」
「ルインの言った通り、さだめは純粋で、曇りない瞳で、ずっと俺を、俺だけを見てきたんだ。何年も、何年も、ずっと、一途に」
俺は覚えている。あいつの、さだめの笑顔。今の歪んだ笑いじゃない、綺麗な笑顔。
「だから俺は……」
「自分を壊して、自分を騙して、支え続けるの？　その果てに待つ

のが、無残な最期でも？」
「さあ、な。さだめが二歳の頃から変わらずに、俺を慕い続けていたように、俺もまた、そのころからあいつの『支え』であり続けた。もう、他に思い付かない」
思い付いても、選べない。
「砕け散ったガラスのココロ。その破片でまたココロを傷つけて…見てられない」
「……俺も同じだ。見てられないんだ。見たくないんだ。壊れたさだめを。俺の、妹を」
おかしいかもしれない。壊れているかもしれない。狂っているかもしれない。
「でも俺は、それを肯定する」
「清も濁も、併せて呑み乾す。キミは、聖者にでもなるつもり？」
「何にもなる気はない。ただ、妹を護る兄でしかない」
変だな。いつもみたいな仮面（ペルソナ）が被れない。素のままの自分でしかいられない。
「それは当然。ここはいわば、キミの心が露出した地。そんなところにいれば、キミが仮面（ペルソナ）を被れるはずもない」
困った場所だ。素のままの俺なんて、ただの狂って壊れたシスコン兄貴でしかない。
「ここを出よう。素の俺ではいたくない」
「清濁呑み乾すキミが、自分だけは受け入れないのね」
「それができたら……揺るぎはしないさ」
そうさ。それができたら……どうなるんだろうな。アテナの告白を素直に受け入れたか、さだめのためにきっぱり断って、ああして沈みもしなかったろうにな。

滅びた街を出て、しばらく進む。その頃になって、俺はようやく

いつもの自分を取り戻していた。
「しかし、精霊界って結構混沌としてるなぁ……」
ハッピーラヴァーがふよふよと飛んで行ったりしたかと思えば、すぐ近くでスカゴブリンが昼寝をしていたりする。道の向こうは昼で、反対側は夜だったりする。
「様々な精霊が混濁して、世界に整合性が取れていない。平和は平和。でも秩序なし」
「なるほどなぁ……で、これからどこに向かうんだ？」
「王都。キミのお姫様たちが待ってる」
「クィーンたちか。そこまでどれくらいあるんだ？」
「……さあ？」
「さぁってお前……」
「さっきも言った。混濁してる。現在地が不透明」
「それじゃ辿りつけなくね？」
「タクシーを使う」
「タクシーあんの！？　いや待て、タクシーと見せかけてツクシーだったりするオチはないだろうな？」
「流石にそれはない」
考えてはいたらしい。微妙に視線を逸らすルイン。
ルインがなんか魔法陣っぽいのを地面に描くと、そこから一体のモンスターが現れた。
「よう、お呼びかい美人の姉さん？」
ルインにそう気軽に声をかけるタクシー（仮）……っていうか！
「サイクロイドだよなぁ！　これどう見ても！」
「なんだいなんだい文句があるなら乗せないぜ兄さん。およ？　っつーか人間サマじゃねーか。こりゃ驚いた。珍しいお客さんだ」
「……なあ、タクシーじゃなかったのか？」
「タクシー」
ルインがサイクロイドを指差す。サイクロイドがぐっ！　とサムズアップした。

「えー」
「精霊界ではこれが一般的」
「え、精霊界ってサイクロイドが一般的な交通手段なの？　何なの？　死ぬの？」
「ほらほら、さっさと乗った乗った！　おれっちも暇じゃないんだから、早く目的地を言ってくれ」
「王都まで」
「オーケーわかった任せな」
「早く乗る」
待った。これ一台しかないんだが。
「二人乗り。経費節約」
「おれっちなら大丈夫だ！　これでもその昔、岩石の巨兵を二人乗りで送ったことがあるってもっぱらの評判さ！」
「乗ったの！？　あれが二つ！？」
物理的にあり得ん。
まあとにかく乗らなければ話は始まらないのでルインと二人乗りでまたがる。俺が前だ。
「おっ！　いいケツしてるねぇ人間さん」
「車体の変更を要求する！　俺こいつに乗りたくない！」
なんかこいつ怖いこと言った！　下手したらさだめより怖いこと言った！
「冗談、冗談だって。さっ、早くペダルを漕いでくれよ」
「……」
え？　漕ぐの？
「な～に当り前のこと聞いてるんだい。自転車は漕がなきゃ動かないよ！」
そ、そりゃそうだが……これはタクシーじゃなく普通のレンタサイクルなのでは……。
「出発」
「お、おう！」

それからの道のりは困難を極めた。

「お、おい！　なんか異常にペダルの足回りが悪いんだが！？」
「あ～すまんね。最近利用者少なかったからすっかり錆びついちまったらしい」
「ちゃんと整備してから来いよ！」

「ぐっ……坂道は……流石にキツイ」
「ほれほれ、もっときりきり漕げってばよ。こんな速度じゃ欠伸が出らぁ」
「ファイトーいっぱーつ」
「主にペダルが重いのお前らの所為なんだが！？」

「おっ！　兄さん、ガソリンスタンドだ。そろそろガス欠だから寄ってってくれ」
「お前完璧手動だろ！？　むしろガソリンつかエネルギー使ってんの俺だからな！？」

「ひゃっほーぅ！　坂道だ！　ウィリー！」
「バカ野郎！？　何勝手にウィリー決めてんだ！　落ちるっ、落ちるって！」
「曲がり角さいこぉー！　いえーい！」
「ドリフトすんなぁー！　ていうかんなことできんなら自分で動けこのポンコツ～！！」

エトセトラエトセトラ。
基本的に道案内しかしない癖に態度だけ妙に偉そうなサイクロイドと一人だけ後ろで涼しい顔で煽るルインの所為で俺の体力精神力ゲージは完全にレッドゾーンに突入していた。
「ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

「ほい到着。ここが王都だ」
「やっと……着いたか、ぜえっ！　はっ！」
「んで、料金になりますが……」
　このポンコツ、自分じゃ殆ど何もしてない癖に料金までしっかり請求しやがるのか。
「料金決定ルーレットスタート～」
「ルーレット!?　タクシー料金ってランダムなの!?」
　しかもどう見てもルーレットというよりスロットだし！
「っじゃーん！　おおっ！　なんとおみごとスリーセブン！　フィーバーですぜお客さん！」
「ダメじゃね!?　支払う金額フィーバーしちゃダメじゃね!?」
「カードで。一括」
「毎度ありー！」
「カードあるの!?　しかも一括！　え、結構安かったの？」
「王国の国家予算五年分」
「たっか!?　え？　なに？　この自転車、一夜にして億万長者じゃね!?」
「私の三日分のお小遣いが……」
「お小遣いすげぇ！　一体誰が払ってんの!?　つーか王国の財政末期じゃね!?」
「あーあ、でもこれっぽっちじゃ車体のオーバーホールもできないよ」
「どんだけ金かかるんだよその車体のオーバーホール！　そんなボロい癖に！」
「こりゃやっぱり国家転覆が急務かな……」
「なに言っちゃってんのこの自転車!?　８００の１０００の弱小モンスターの癖に！」
　精霊界における国家事情が混沌だ。わけがわからない。
「よし、早速パーフェクト機械王の暗殺を計画しよう！」
「無理だよ！　そりゃどう考えても実現不可能な夢幻だって気付け

ポンコツ！」
「おっと、その前に酸のラスト・マシン・ウイルスを調達してこないと……」
「それならイケる！　ってイケちゃダメだし！　反乱はダメー！」
「おいおい兄さん、この世界じゃ反乱なんて子供のお遊びの一環だぜ？」
「精霊界終了のお知らせ！」
ここはそんなに反乱がありふれた魔窟なのか……。
「じゃーそういうわけで、またなー」
そう言ってサイクロイドはチリンチリンとベルを鳴らして去っていった。……ってやっぱり自分で動けるんじゃん！
「うん……また会えるといいな……いやホント」
「墓地に行けば会える」
「死亡確定！？」
精霊界は、ツッコミどころ満載の世界だった。
「とにかく、お姫様たちのところに行く」
「ああ……そうだな。ちょっと休みたいけど。切実に」
あれ？　おかしいな。さだめによって摩耗されつくした俺の精神が痛みを訴えてきてるぞ？　枯れ果てたはずの涙が……うっ！
「これで、いつものキミ。お姫様も心配しない」
「……」
ふ、複雑だ。励ましてくれたような更に精神的に追い詰められたような……。
ともかく、なんとか気を取り直して王都に入る。周りを見渡せばモンスターたちがたくさんいる。中には格闘戦士アルティメーターのような懐かしい奴もいる。外見が全く変わらない同じモンスターもいたりして結構面白い。
「主様。お迎えに上がりました」
「おっ」
そんな風にして見物していた俺に一人の騎士が声をかけてきた。

「ジャック！」
「こうして直接お会いするのは初めてですね。ようこそ。精霊界へ。ようこそ。私たちの王国へ」
そういって頭を垂れてくる。
「よしてくれ。普通に観光に来たってんならともかく、ただ現実から逃げだしてきたバカに、そんな礼を尽くす必要はない」
「は。ですが、例えここに来た理由がなんであろうと、主様が私たちの主様であることに、なんら変わりはありませんよ」
「……サンキュ、な」
「いえ。ですが、せめてクィーンの前ではいつもの主様で居られた方がよろしいかと。……随分と、気を揉んでおりましたので」
「……ああ」
クィーンには、ちょっと厳しく当たっちまったし、謝りたいとも思うが、確かにまずは安心させてやるのが最優先だ。
「……けど、いつも通りの俺とクィーンじゃ、またお前がストライキを起こしそうで心配だよ」
「……それを言わないでください。ですがまあ、その調子ですよ。少しずつ調子が戻ってきてらっしゃるようでなによりです」
「私のおかげ」
「……いや、ルインには凄まじい勢いで体力を奪われたんだが」
「無駄な体力があるから余計なことを考える。それを見越して敢えて疲れさせる私の妙手」
「体力がなくなったらその分気軽な考え事出来なくなると思うんだが？」
「でも今は大分元に戻った。結果を見るべき」
「終わりよければすべてよし、なんてのは過程から目をそむけた後ろ向きな言葉だと、俺は認識している」
「ハハハ、大分仲良くなられたようで。これはやはり、私の胃が痛むことになりそうですね」
「なんで機嫌が良さそうなんだお前は」

やっぱりジャックは気ぃ使いだな。……苦労をかける。
「ほら、また表情に陰りが出てきましたよ」
「あ、ああすまん」
ホントに、よく気がつくこって。

そんなジャックの先導で、王城の中へと案内される。
「む。ジャック殿か」
先頭を進むジャックに、精悍な面差しの戦士が話しかけてきた。
「おやネイ。今日は、あの鎧は着てらっしゃらないので？」
「今日は久々の休暇だ。我も、休日まで鋼鉄の鎧に身を包む趣味はないよ」
親しげな笑みを浮かべるのは紛れもなく剣聖ネイキッド・ギア・フリード。当り前だが、こんな奴も精霊なんだなと変なところで感心。
「おや、そちらの御仁はもしや……」
「はい。我ら、絵札の三銃士が主、御堂切殿です」
「おお、やはりそうか。なるほど不思議な気配をしている」
「ええと、どうも？」
「はっはっは！　そう硬くなられるな。ジャック殿たちの主ならば、この王国の元首も同じ。我のような一兵卒に恐縮することはない」
「い、一兵卒ですか……」
『アテナ』と同じ攻撃力を持つ剣聖に、これほど似合わない言葉もない。
「剣聖。久しい」
「おお！　ルイン殿！　今日も変わらずお美しい」
「当然。美貌はいつでも最前線」
「はっはっは！　違いありませんな」
なんかこの人、頬染めてね？　え、ルインてもしかして結構モテ

るのか？　良く見ればネイキッドの他にも男たちがルインをどこか熱い視線で見ているような……。
「当然だぞジャック殿たちの主殿！　ルイン殿の美貌は、その美しさで何人もの男を破滅させてきたことから破滅の女神と呼ばれているとも言われるほどだ」
「破滅ってそういう意味だったの！？」
「モテる女は辛い」
「うっわ余裕の発言！」
「でも私は処女」
「いいよそういう情報は！　っていうか俺、そんなルインと混浴したんだよな……」
うわ思い出すと恥ずい！
『何だとぅ！？』
「うおおっ！？」
何やら物凄い勢いでネイキッド始め男たちが詰め寄ってきた。
「あ、主殿、否！　セツ！　そ、それは真か！？　るるルイン殿とここっ混浴！？」
「あ、ああいや、ルインの悪ふざけのようなもんで……」
「気持ち良かった」
『気持ち良かった！？』
「温泉のことだからね！？」
「彼は優しかった」
『おのれ貴様ー！！』
「ルインさん紛らわしいこと言わんといてー！？　っていうか面白がってるでしょ！？　混浴の時といいさっきといい今といい、俺が困ってるの見て楽しんでるでしょ！？」
ルインは鷹揚に一つ頷く。
「私は破滅の女神」
「超納得！」
なるほどこいつは破滅するわ。

「セツ！　我とデュエルしろ！　騎士の誇りと……主にルイン殿との混浴を賭けて！！」
「すでにその言葉に誇りが一切感じられない！」
精神状態もあってまったく気が進まないが、こいつらの形相からしてやらないとは言えそうもない。
「ははは、これはやるしかなさそうですね。ネイはこうなったら引きませんよ」
「私のために勝ってー」
「お前らちょっと黙れ！　特にルイン！」
「貴様、ルイン殿の麗しい発声を邪魔するか！」
「何より直々に激励の言葉をかけていただけるなど……うらやま、いや妬ましい！」
「お前らも黙れ！」
くそぅ……なんで精霊界まで来て女絡みのいざこざに巻き込まれなきゃ……。
「がんばー」
「ルインてめえ！　……ええい！　やりゃいいんだろ！　やれば！」
「そうこなくては！」
「「デュエル！！」」
こうして、わけのわからないままに俺の精霊界初デュエルが幕を開けた。

第十三話「精霊界　沈む心」（後書き）

ふう、久しぶりにタイピングする指が軽いよ。やはりギャグは気分が浮き上がりますね。というわけで、前半のかっこいいセツ（のつもり）なシリアスからは考えられないくらいギャグしてやりました。そしてもともとデュエルの予定はなかったのですが、やっぱり遊戯王のＦＦである以上やらないわけにもいきません。というわけで、準レギュラー予定だったルインさんがレギュラー昇格したと同時に色々ひっかきまわしてくださいました。おかげで剣聖のキャラがあんなことに……次回はラストからもわかるように絵札の三銃士ＶＳ剣聖のデュエルになります。出来れば今日中、一日二話という自分的快挙が上げられればいいなぁ。

それでは、レーネスでした！

第十四話「戦士の決闘」（前書き）

第十四話です。今回もルインは大活躍。予定をはるかに超える活躍を見せております。

第十四話「戦士の決闘」

アルカナ～切り札の騎士～
第十四話「戦士の決闘」
「「デュエル！！」」
「我のターン！　ドロー！」
「っ！」
「我は手札から『増援』を発動！　デッキから『鉄の騎士ギア・フリード』を手札に加え、攻撃表示で召喚！　カードを一枚セットしてターンエンド！」
「俺のターン。ドロー」
手札を確認する。悪くはなさそうだ。
「俺は『クィーンズ・ナイト』を攻撃表示で召喚。手札から『二重召喚』を発動！　『キングス・ナイト』召喚し、効果により『ジャックス・ナイト』を攻撃表示で召喚。バトル！」
リバースカードは気になるが、ここは攻撃するべきだろうと判断する。
「『ジャックス・ナイト』で『鉄の騎士ギア・フリード』を攻撃！
『ブレイク・ソード』！」
「迂闊！　リバースカード『炸裂装甲』！　『ジャックス・ナイト』を破壊！」
「くっ！」
まずい、攻撃の起点が崩された！
「カードを一枚セットしてターンエンド」
「ふむ。我のターン。ドロー！」
ドローしたネイキッドは、これは面白い。とでも言いたげな顔をしていた。
「我は手札から『盗人の煙玉』をギア・フリードに装備！」
？　いやだがギア・フリードは……っあ！

「その顔だと気が付いているようだな。そうだ。ギア・フリードには装備された装備カードを破壊する効果が備わっている。そして『盗人の煙玉』は……」
「装備されたこのカードが破壊されたとき、相手の手札を一枚選択して捨てさせるハンデスカード……！」
「その通り！　さあ、手札を見せたまえ」
「くっ……」
「ほぉ……『融合呪印生物―光』と『オネスト』か。どちらも厄介だが、ここは『オネスト』を選択するとしよう」
オネストが……。
「更に我は手札から、『ライトニングボルテックス』を発動する！」
「っな！？」
「手札から『神剣―フェニックスブレード』を捨てて、セツのモンスターを全て破壊する！」
「ぐっ！？」
クィーンとキングが雷光に撃たれ、消滅する。
「我は『エヴォルテクター・シュバリエ』を攻撃表示で召喚！」
「げっ……」
『エヴォルテクター・シュバリエ』攻撃力１９００のデュアルモンスター！　特にデメリットもなくデュアル能力も優秀な戦士族モンスター！
「二体でダイレクトアタック！」
「カウンタートラップ『攻撃の無力化』！　バトルフェイズを終了させる！」
「おっと、そう来るか」
あ、危なかった……流石に１９００と１８００のダイレクト食らったら一発で瀕死だ。
「ターン終了だ。さあ、その『融合呪印生物―光』一枚でどう対処する？」
「くっ……俺のターン、ドロー！」

っ……やばい。どうしようもない。
「モンスターをセット。ターンエンド」
「おいおい、この程度かい？　ドロー！『エヴォルテクター・シュバリエ』をデュアル召喚！『融合武器ムラサメブレード』を装備して、『エヴォルテクター・シュバリエ』の効果発動！　装備カードを墓地に送り、その守備モンスターを破壊する！」
「ぐぅ……」
『融合呪印生物―光』が射出された剣に貫かれ、消滅する。
「本当に手詰まりらしいな……二体でダイレクトアタック！」
「ぐあああああっ！？」
セツＬＰ３００
「くそっ！」
どうする……こんな状況。自分の手札は一枚。向こうはモンスター二体に手札は一枚。次のドローでどうにかするしか……。
焦る俺を真剣な目で見つめていたネイキッドが、声をかけてきた。
「……なあセツ。お前、本当にこの程度か？　だとしたらあれだ。失望したぜ」
「……」
「ジャック殿やキング殿がことあるごとに自慢する上、ウチの姫さんやルイン殿のお気に入り。どんな強さがあるのかと思ってたら迂闊に攻撃を仕掛けてくるわロクに対応できねえわ。惨めったらしいったらありゃしねえ。お前……「黙りなさい！　ネイキッド！」！？」
「っ！　クィーン……」
ネイキッドの言葉に打ちのめされ、俯くばかりの俺の後ろから、聞きなれた声がネイキッドに叩きつけられる。
「まったく……ジャック殿を迎えに出したのに、何時まで経っても来ないと思えば何やら下が騒がしい。何事かと来てみればお待ちしていた主様が負けそうになっているではないですか。わたくしの預かり知らぬところで一体何をやっておいでなのですか」

心底呆れたと言わんばかりのその顔に、俺はつい頭を下げた。
「あ……その、すまん」
「らしくありませんよ主様。素直すぎます。何をそんなに殊勝な態度でいらっしゃるのです」
「う……」
「貴方も貴方です。ネイキッド」
「お、おう」
「我が王国の将軍ともあろう貴方が、何を私闘など……」
え？　将軍？
「ネイキッドって、一兵卒じゃ……」
「……そんなわけがないでしょう。あの男が一兵卒なら将軍はどんな化け物ですか」
……そりゃそうだ。
「……ともかく、主様」
キッと鋭い目で俺を見つめてくるクィーン。
「本当に、今の主様はらしくありませんわ。この程度の苦境で何を焦っているのですか」
「いやこの程度って……」
「あの小娘に打ち勝った時も、残りのライフは今と同じ３００。しかも手札はゼロ。その状況でも主様は勝ちを拾ったのです。今、ここで負ける道理はありませんわ」
「っ……」
小娘……多分アテナのことだ。今は、なるべく思い出したくない。けど、確かにクィーンの言っていることは確かだ。俺はあの時、手札がゼロでも負ける、という気にはならなかった。何故？　今と同じくらいに絶望的な状況であったはずなのに。
「それは主の心の問題じゃな」
「キング……」
「心に迷いがあるようじゃ。今主は心ここに在らずじゃ。それでは、デッキも応えんし、デュエルに勝つこともできぬじゃろ」

「心ここに在らず……」
確かに、いくらテンション高く誤魔化したところで、一度外れてしまった仮面をかぶり直すのは困難だ。どうしてもそこには綻びができる。今の俺は、まだ立ち直れていない空虚なバカ兄貴のままだ。
「素のままならば素のままでもいいのです。主様は主様のままで、ただこのデュエルに集中すれば、それで良いのですよ」
「ジャック……」
「まあ要するに、なにが言いたいかというとじゃな……」
「諦めないでくださいまし、ということですわ」
「そういうことです」
……はは。
「……了解。やるだけやってみるさ」
本当にやれるかは分からない。だが、やるしかない。
出来る出来ないじゃなく、やるかやらないか。そんな使い古された言葉が脳裏を過ぎる。
「俺のターン……ドロー！」
ここで何を引いたらいい？　何を引けば繋がる？　……決まってる。
「俺は手札から『強欲な壺』を発動する！　デッキから新たに二枚ドロー！」
「おお……」
重要なのは手札！　ドローソース！
「さらに手札から『貪欲な壺』の効果発動！　俺の墓地に眠る三銃士と『オネスト』、『融合呪印生物―光』をデッキに戻し、二枚ドロー！」
これで手札は四枚！　ここから勝利までのタクティクスを組み上げる！
「……」
手札を確認する。賭けになる部分もあるが、やるしかない。
「俺はモンスターをセット！　手札から『二重召喚』発動！　更に

モンスターをセット！　カードを一枚セットしてターンエンドだ！」
「よし！　我のターン！　ドロー！　バトルフェイズ！　『エヴォルテクター・シュバリエ』で右の守備モンスターを攻撃！」
倒されたのは『ネクロ・ガードナー』！　これで一ターンは凌げる！
「『鉄の騎士ギア・フリード』で守備モンスターを攻撃！」
ギア・フリードによって倒されたのは不気味に笑う壺モンスター。
「『メタモルポッド』のリバース効果発動！　お互いのプレイヤーは手札を全て捨て、デッキからカードを五枚ドローする！」
「なに！？」
ネイキッドの手札が墓地に送られ、新たに五枚引く。俺は手札がゼロなので無条件にカードを引く。
しかし、カードを引いたネイキッドは不敵な笑みを浮かべる。
「フッ……手札増強カードをここぞとばかりに引き当てたのには驚嘆する。だが、我も『メタモルポッド』には感謝せねばなるまい」
「なに……」
「行くぞ！　我は手札から『拘束解除』を発動する！　『鉄の騎士ギア・フリード』をリリースし、我自身を特殊召喚！」
ギア・フリードの鋼鉄の鎧が開かれ、中からネイギットが姿を現す。
ついに出たか！『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』！
「ギア・フリードの鎧は我が力を制限するための戒め！　我は今、解き放たれた！」
確かに、２６００の攻撃力と装備カードを装備するたびにこちらのモンスターを除去してくる効果は脅威だ。
「我はカードを一枚セットし、ターンを終了する！」
「俺のターン！　ドロー！」
！　このカード……。
ドローしたカードを見た俺に、先ほどのクィーンの言葉が蘇る。

『あの小娘に打ち勝った時も……』

クィーン。ほんとに、その通りだな。またこのカードに頼ることにするぜ。

「俺は手札から、『悪魔への貢物』を発動する！　全フィールド上から特殊召喚されたモンスターを一体墓地に送る！　出てきて早々悪いが散れ！　ネイキッド！」

「なんだと！？」

「そして俺は手札から通常モンスターを一体特殊召喚する！『クィーンズ・ナイト』！」

「主様！」

クィーンの弾んだ声が聞こえる。クィーンにぐっ、と親指を立てて応える。

「更に、『キングス・ナイト』を召喚！　効果で『ジャックス・ナイト』を特殊召喚！」

「ぬぅぅ……我を除去した上その速攻展開……見事」

「ジャックで『エヴォルテクター・シュバリエ』を攻撃！」

「だが、させん！　『攻撃の無力化』！」

「っ……カードをセットし、ターンエンド」

「我のターン！……セツ。先ほどの言葉は詫びよう。事情は知らぬが、何か心を乱す大事があったのだろう。そして、姫たちの言葉を受けてからの立て直し、真に見事。我自身も、こうも容易く除去されると感心するしかない」

「ありがとう。だけど、まだ、あんたには勝てなさそうだ」

「主様！？」

「……フッ。ここにきて、自らの敗北を悟るか。なおさら見事、と言わざるを得ないな」

「あんたの目はもう勝利を確信した目だ。対して俺は、なんとかその場しのぎでやってはいるが、所詮はその場凌ぎだ」

「……それでも、立派な引きとタクティクスだった。行くぞ！　我

は『死者蘇生』を発動する！」
「『死者蘇生』？　ネイキッド、あんた自身は呼びだせないぞ！」
「そんなことは百も承知！　だが、セツが先の状況から不死鳥のごとく蘇ったのと同様に、我の墓地にもいるのだよ！　死してなお、不死鳥のごとく蘇る我を超えた我が！」
ギア・フリードのことじゃない？……っ！　まさかあいつか！？
だがそんな奴いつ墓地に……。
「……あ」
「そう！　言ったはずだ！『メタモルポッド』には感謝するとな！」
そうだ。ネイキッドは『メタモルポッド』発動の際、手札を二枚捨てた。その二枚の内片方が……
「蘇れ！『フェニックス・ギア・フリード』！」
炎の渦が巻き起こり、その中から深紅の鎧に身を包んだ騎士が姿を現す。
「そしてデュアル召喚！　さらに墓地に存在する『鉄の騎士ギア・フリード』と我自身を除外し、『神剣―フェニックスブレード』を手札に戻す！」
ああ……負け、だな。
「『神剣―フェニックスブレード』を『エヴォルテクター・シュバリエ』に装備！　『エヴォルテクター・シュバリエ』の効果発動！　リバースカードを破壊する！」
俺の伏せていた『聖なるバリア―ミラーフォース』が破壊される。
「『フェニックス・ギア・フリード』に、『融合武器ムラサメブレード』を装備！」
「『エヴォルテクター・シュバリエ』で、『クィーンズ・ナイト』を攻撃！」
「っ！　墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果発動！『ネクロ・ガードナー』をゲームから除外して戦闘を無効にする！」
「トドメだ！『フェニックス・ギア・フリード』で『クィーンズ・ナイト』を攻撃！『ブレイズ・ソード』！」

「リバースカード！　『収縮』！」
「させん！　『融合武器ムラサメブレード』を墓地に送って『フェニックス・ギア・フリード』の効果発動！　モンスター一体を対象とする魔法・罠の効果を無効にして破壊！」
俺の『収縮』は効果を発揮することなく破壊される。
「最後まで足掻く、その意気やよし！　だが、今回は我の勝ちだ！」
炎に包まれた剣がクィーンを討ち倒し、炎の余波が俺を襲う。
「ぐあああああああああっ！」
セツＬＰ０

「負け、か」
なんだか、こうしてちゃんとしたデュエルで負けることとって初めてな気がする。授業や十代たちとの模擬デュエルでは何度も負けてはいたんだが。
「はっはっは！　我はこれでも将軍だからな。そうやすやすと負けはせん！……そ、それでルイン殿……」
「イヤ。別に私は了承した覚えもない」
「そんな!?」
……いやまあ、そりゃしょうがないでしょ。
「？　何の話です？」
「あ、ああいや、姫さんには別に関係のないことで……」
「ネイキッドが勝手に、彼に勝ったら私と混浴、なんて言い出した。私は関知していない」
「……」
「ああ!?　そんな汚物を見るような眼で見ないで下さいよ姫さん！」
「……というか、何をどうしたらそんな話になるのです」
「私が彼と混浴したことへの嫉妬。見苦しい」

あっ！　バカルインまたお前そんな火にニトログリセリンを投下するような真似を！
「……な」
ギシリ、とクィーンの体が硬直する。
これは……危険だ！
「あ、主様！？　だからって私を盾にしないでください！」
「すまんジャック！　またお前の胃を痛めつけることになるが……」
「その前に肉体的にも痛めつけられそうです！」
「大丈夫！　お前なんかそういうの好きそうだ！」
「好きではありません！　人をマゾ扱いしないでください！」
「ほっほっほ。ちなみに感想はどうじゃった？　精霊界でも有数の美女との混浴じゃぞ～」
「……そりゃ、お綺麗な体でありましたと……ハッ！」
「……ポッ」
「わざとらしく頬を染めるな！」
マズイ！　クィーンどころか男どもからも殺気が放たれ始めた！
「『愚かなるバリアーフールフォース』！」
「そんなカードはなかろうに！？　こ、これ、わしまで盾にするでない！」
黙れ！　お前は俺の死亡フラグを一本から数十本単位に増殖させた！
「私は完全なとばっちりなのですが！？」
「大丈夫！　お前は常にそういう立ち位置だ！」
「理不尽！？」
「彼が私の体を舐めるように見ながら『俺はこれから鬼畜街道を突っ走るぜうえっへっへっへ』と舌なめずりしていたのを覚えている」
「そんな事実は一切ない！　むしろ鬼畜道を提案したのはルインの方だった……ってお前ら信じる気ねえな！？」
「今……我の怒りが有頂天に達したぁぁ！！」
「それを言うなら頂点！　どこの筋肉馬鹿だお前は！」

いい加減こいつら全員ダーク化しそうなくらいのオーラを放っている。
「ルイン！　お前どこまで俺を追いつめるつもり……あっこら何『ほぅ……』とか満足げな顔してやがる！」
「驚いた。表情を読まれたの初めて」
「結構わかりやすい気がするんだが！？」
「やっぱり裸の付き合いは偉大。以心伝心」
「だからなぜお前は連中をそこまで怒らせようとする！？」
「私は破滅の女神」
「もういいよそれ！」
「あ・る・じ・さ・ま～」
「ヤバい！？　お、俺はキングを生贄にデッキに戻るぜ！」
「ちょ！？　これ！　もうちっと老体を労らんか！？」
「しかも発動する効果はデッキに戻るだけ」
「ルインはもう黙っとけ！」
「ぎょえええええええ！？」
キング、殉職！
「くそう！　生贄が稼いでくれた時間をルインの所為で無駄にした！」
キング、無駄死に！
「くそう！　ジャックを生贄にゲームから離脱する！」
「……やっぱり、そうなるんですね。ハハ、まあ、わかってはいたんですけどね……」
ぼーっと突っ立っているルインの手をつかみ、その場を離脱！
「愛の逃避行？」
「ここに愛はない！」
殺気増幅。
「じゃあ……助けてー攫われるー」
「頼むから黙れ！」
増幅する悪意（マリス）。

というか何故こいつを連れてきたし。というかむしろこいつこそ真っ先に生贄に捧げるべきだった。

「なんだかんだで女の子を放っておけないフェミニスト乙」

「ああもうそうですよバカですよ畜生め！」

もうジャックの方は悲鳴すらも聞こえなかった。達観した精神のまま散って逝ったのだろう。さらばだジャック！

「サラダバージャックー」

「ジャックバカにすんな！」

「生贄にしたキミの言えることではない」

まったくもっておっしゃる通りで。

その後生贄が尽きてすぐに捕まった俺たちは、クィーンたちからの執拗な質問攻め（ルインが一々引っかき回した）からの肉体的拷問（ルインが煽った）、更には数時間にわたるクィーンからのお説教（ルインが茶々入れまくった）で心身ともに疲れ切った。

「っていうか最初っから最後まで全部ルインの所為じゃね！？」

そもそも、精霊界に来ることになったところからは全部ルインの手のひらの上だった。精霊界に来ることを提案したのもルイン。心情暴露したのもルインの前。サイクロイドを呼びだしたのもルイン。ネイギットとデュエルすることになったのもルインの発言から。最後の騒動も全部ルイン。ルイン、ルイン、ルイン。全部ルイン。

「は、破滅の女神だ……」

「うむ」

「満足そうに頷くな」

「楽しかった」

「でしょうね」

あれだけ引っかき回して自分は被害ゼロ。俺はボロ雑巾じゃさぞかし楽しかろうよ！

「満足した」

そういうとルインは微かに笑みを浮かべて、自分用に宛がわれた部屋へと戻って行った。

「まったく……」
思わずその微笑にどきりとした。
おかげで、微妙に文句が言い辛い。あんまり悪い気もしないし。
「なんでこんな……」
「好みのタイプなんじゃねえのか？　セツ」
いつの間に部屋に入ってきたのか、そこには親しげな笑みを浮かべる男の姿。
「ネイキッド……別に、そういうわけじゃない」
「良い女だろう？」
「それは……認めるけど」
「……我はな、ルイン殿がああも楽しそうにしているのを初めて見る。人にいたずらしている姿もだ」
「……そうか」
「さっきは冗談交じりに男を破滅させるから破滅の女神、なんてことも言ったが、本当のところは違う」
「……あいつのいた街、か？」
「……知っているのか？」
「俺が最初に辿りついたのは、あの街だ」
「……そうか」
ネイキッドは、それの意味するところをわかっているのだろう。
何も言わず、次へと移った。
「あの街は彼女が管理していた。我は当時を知らぬが、当時は『慈悲の女神』とも言われていたらしい」
「慈悲……」
「だが、幾度か王が替わり、最後の王デミスが王座に着いた時……」
「あの街は終焉を迎えた……か」
「……その日から、彼女は「破滅の女神」と呼ばれ、人々の同情の対象となった。それからの彼女はそれはもう酷いものだったらしい。来る日も来る日も、崩壊してしまって精霊の一人もいない街にずっと一人で暮らし、街を復興しようとしていた。だが、そこはもう完

全に滅びた街。復興など出来るはずもなく……」
「……そっか」
「笑顔など、もうすっかり消えてしまったらしい。彼女の笑顔は、さぞ魅力的であろうに……」
「……さっき、さ」
「ん？」
「本当に、本当に微かだけど……良く見なくちゃわからないくらいだけど、笑ってたよ」
「……そう、か」
そうか、とネイキッドは本当に嬉しそうに何度も頷く。
「それは、良かった」
その話はさておき、と前置きをして、ネイキッドはまた真剣な顔でこちらを見据えた。
「……ああ、それでな、セツ。我はお前に話があってきたのだ」
「話？」
「ああ。本当はさっきのデュエルの後に言うつもりだったんだが……」
言い難そうに、しばらく逡巡していたネイキッドだったが、覚悟が決まったのか、真剣な目で俺を見据え、話を切り出した。
……それは、俺の今後に関わるとても重要な話。

「セツ。お前にあのデッキは合わない。お前はデッキを変えろ」

それは、とても衝撃的な言葉で……意味を測りかねる自分がいて、でも同時に「ああ、確かに」と納得してしまう自分もいたのだった。

第十四話「戦士の決闘」（後書き）

ジャックはマゾではありません。第十四話でした。

セツ、敗北。相手の方が一枚上手でした。実は敗北書くのは初めて。でもよく考えて敗北するのも書かなきゃダメだろ、ということで。

ルインがセツフラグを立てて行きました。はい。立てたのはセツではなくルイン。そこがポイント。

ルインの過去話とラストの衝撃発言。次話に続く、と言いたいところですが、引っ張ります。引っ張らせていただきます。次からはちょっと時間の進んだアテナたちの話。考えた結果、レイのフラグを多少強引に立てつつセツ復帰はセブンスターズで。そして、レイが出なくなるのもさびしいので次をレイの話に。どちらかと言うとレイとアテナが主役。結構時間は進んでますが、それでもまだ立ち直っていないアテナを立ち直らせる話にするつもりです。

それでは、レーネスでした！

※前話も含め、ネイキッドの名前がネイギットとしていました。作者の勘違いで紛らわしい表記になったこと、深くお詫び申し上げます。

第十五話「恋する乙女の憂鬱」（前書き）

セツのデッキは！　置いといて（おい
今回はアテナとレイのお話です。強引なレイフラグの形ですが、今回重要なのはレイフラグというよりも、アテナフラグの強化ですね。完全に落ち込みきっているアテナを元気付けよう！　みたいな。
ではどうぞ！

第十五話「恋する乙女の憂鬱」

アルカナ～切り札の騎士～

第十五話「恋する乙女の憂鬱」

「はぁ……」

静まり返った寮の自室で、アテナはもう何度目かもわからない溜息をついた。

「何してるんだろう……いつになったら、割り切れるのかな……」

セツに振られてから、もう何ヶ月と経った。いい加減割り切って前に進まなくてはならないとわかっているのに、体は動かない。心が拒否している。

「セツ……今どこにいるんでしょう」

アテナに別れを告げたあの日から、セツはアカデミアから姿を消した。

定期船を使った様子も船が奪われた事実もないことから、まだ島内にいるのかもしれないと何度も島内全域を捜索したが、足取りの一つも掴めなかった。なにしろあの時はさだめの発していた瘴気のようなオーラによって殆どの生徒や教員がダウンしていたのだ。得られた情報は、港とは逆方向にルインと向かったらしいという情報くらいだ。

「セツ……せめて、帰ってきて……」

この数ヶ月、アテナはずっとこんな感じだ。振られたことに落ち込み、セツの無事を心配し、セツに会いたい気持ちでまた落ち込む。

明日香たちも何度か元気づけようとしてはいたのだが、何を言っても上の空。まるで魂が抜け落ちたようなアテナには何の効果もなかった。せめて時間が解決してくれたら、と願うも日々アテナの憂鬱は酷くなるばかりである。

「セツのお部屋……行きましょう」

そしてアテナは毎日のようにセツの部屋に通い、セツの部屋の掃除をする。

少しでもセツの存在を感じたくて。少しでもセツの役に立ちたくて。セツが帰ってきたときに、埃だらけの部屋で過ごすことがないように来る日も来る日もセツの部屋に通い、掃除をしていた。

尤も、毎日掃除しなければいけない程大きな部屋でもないので最近はもっぱらセツの部屋でボーっとしているだけだが。

アテナはすでに授業にすら出ていない。部屋から出るのは食事などの生活上必要な場合とセツの部屋に通う時だけだ。

『言ったでしょう？　貴女にはなにも与えない。嘆いて狂って堕ちるといいわ』

アテナには、時折そんなさだめの嘲笑が聞こえてくる。幻聴だ。聞くことはないと思っても耳に残ったあの声が常にアテナを責め立てる。

『お兄ちゃんはさだめを選んだの。貴女じゃなくて、さだめと一緒にいることを選んだのよ』

「うるさい……」

『これでわかったでしょう？　いい加減未練ったらしいことはやめて……』

「うるさい！！」

狂ってきている。アテナはそう自覚しながらも、幻聴に怒鳴り続ける。

「さだめさん……こんな気持ちだったんでしょうか……」

心の支えがいなくなる。今までずっと自分の味方で、隣にいてくれた愛しいヒトが忽然と消えて、その傍に他の女性がいる。

これは……地獄だ。なるほど今ならさだめの狂気も理解できる。
これは狂いたくもなる。
『何馬鹿なこと言っているの？　たかだか数ヶ月一緒にいただけの貴女と、それまでの一生を共に過ごしてきた私とで、存在の重みが同じだとでも？　想いの深さが同じだとでも？　喪失感が同じだとでも？　絶望感が……同じだとでも？』
「っ！」
さだめの幻聴が心を蝕む。もしこれら全て、さだめの思い通りのシナリオだったとしたら……。
「……大成功ですよ。私、そろそろ耐えられそうにありません」
部屋の隅で蹲り、震えてしまいそうになる体を必死の思いで動かして、アテナは今日もセツの部屋に向かうのだった。
そんな折、アカデミアのレッド寮。十代の部屋に一人の編入生が加わった。
「早乙女レイです。よろしくお願いします」
「おう！　よろしくな！」
「いやー助かるんだニャア～。ホントは部屋数が足りないからセツ君の部屋に入ってもらう予定だったんだけどニャア」
「それは……ごめん、遠慮してくれ。大徳寺先生」
流石に、今はいない仲間の部屋を勝手に使うのは気が引ける。なによりアテナが今心の拠り所にしているセツの部屋を、少しでも荒らしたくない。
「わかっていますのニャア」
「え……と、そのセツ君って……」
「ああ、オレたちの……仲間だ。御堂切って言ってな……」
「やっぱり！　あ、いや。そ、その御堂君はこの寮にいるんだよな？」
セツの名前に過剰反応を見せるレイに、ちょっと驚いた十代たちはレイの言葉にちょっと戸惑う。
「……えっと、その」

「どうしたんだ？」
「今、セツ君は行方不明なんだよ。何ヶ月も前から……。僕たちも必死で探してるんだけど……」
「……え？」
何を言われたのか理解できない、といった面持ちで立ち尽くすレイ。
「う、うそ……それ、本当？」
「あ、ああ……島を出て行ったわけじゃなさそうなんだけど、どこをさがしても見つからなくて……」
「な、なんで……？　なんでそんな……じゃあボクは何のために……」
「お、おいどうしたレイ？　もしかして、セツの知り合いか？」
「……」
「レイ？」
反応がないレイの顔を覗き込んで見ると、振られた時のアテナのような絶望的な表情をしていた。やがてポツリポツリと話し出す。
「御堂君は……ボクがデュエルを始めるきっかけとなった人で……ボク、その人のためにここに……」
「……そうだったのか」
そういえば、セツのここに来る以前の交友関係については何も知らないことを思い出す。前に聞いたこともあったが、その時は何故かはぐらかされてしまったのだ。
「その……見てみるか？　セツの部屋」
「っ！　うん！　行く！　見せて！」
「お、おう。こっちだよ」
「じゃあアニキ、僕たちは先にお風呂に行ってるね」
「十代もあとで来るんだなぁ」
「おう、すぐ行くぜ！」
洗面用具片手に部屋を出ていく翔たちを見送り、十代はレイをセツの部屋に案内する。

「ここがセツの部屋。まあ、あいつはいつもオレたちの部屋に遊びに来てたから、ここには殆ど寝るときくらいしか帰ってなかったけど」
「ここが……」
あまり多くの物がない殺風景な部屋。幾つか机の本棚にノートが置いてある。机の上に開きっぱなしで置いてあるノートには、デュエルの研究だろうか。ちょっと読みづらい字でメモが殴り書きされている。
「……何ヶ月も放置されてたのに随分綺麗だな……」
「ああ、それは……」
「……十代さん？」
アテナのことを説明しようとした時に、ちょうどそのアテナ本人がやってきていた。
「おう。いつもの掃除か？　ごくろうさん」
「いえ……十代さんは？　それにそちらは……」
「え、えっと、早乙女、レイです。今日、こちらに編入してきました」
誰だろうと思いつつ、簡単に自己紹介を済ませる。
「そうですか……天音アテナです」
ぺこりと頭を下げるアテナ。そんなアテナに十代が声をかける。
「あー……悪いな、掃除の邪魔だろ？　すぐ出て行くよ」
「いえそんな……」
「いいから、ほら、レイも行こうぜ」
「え？　う、うん……？」

「ね……な、なぁ」
「ん？　なんだ？」
「あの女の人、誰なんだ？」

「さっき自己紹介したじゃねえか。アテナだよ」
「い、いやそうじゃなくて……み、御堂君とどういう……」
妙に強い目線で十代に問いかけるレイ。
「あー……えっと」
十代はちょっと言葉に詰まった。元々恋愛事に明るくないので、セツとアテナの関係をどう表せばいいのか分からなかった。その上今その話題はかなりデリケートな問題になっているのであまり詳しくは話せない。悩んだ末に十代は……。
「……そう、大切な人だ。アテナとセツはお互いに大切な人だな」
盛大に地雷を踏み抜いた。そりゃあもう見事なまでのブレイクダンスを地雷原の上で踊る感じで。
「そ……」
「レイ？」
「そんなのダメ～！」
今来た道を一目散に引き返し、セツの部屋の扉を弾き飛ばす勢いで開ける。
中ではアテナがセツの椅子に座って日記と思われるノートを見ていた。
「え、っと……レイさん？　どうかしまし……きゃ！？」
いきなり詰め寄ってきたレイにびっくりしたアテナは椅子から落ちそうになる。
「お姉さん、セツの大切な人だってホントなの！？」
「ふぇ？　え？　えっと、な、なんですかいきなり……」
「いいから答えて！」
その剣幕に押され、いざ答えようとした時、アテナは言葉に詰まってしまった。
なんと答えればいい？　セツと自分の関係を。
『告白して、振られたんでしょう？　そう答えればいいだけよ。何を迷っているの？』
（やめて……）

『事実じゃない。否定したい？　したいよねぇ？　そろそろ私の気持ちもわかってきたでしょ？　そうよ、そんな惨めな思いを感じて生きてきたのよ』

「っ……ぅ」

幻聴が酷い。頭が痛い。

「ねえどうなの答えて！」

「わ、たしは……」

セツの……なに？

「わかり……ません」

「わからない？」

「私がセツにとってどんな存在なのか……今の私には全然わからないんです」

「……」

レイはそんなアテナをじーっと見つめて、おもむろにデュエルディスクを取り出した。

「アテナさん。ボク……ううん。私と、デュエルして！」

そういってレイは被っていた帽子を脱ぎ捨てた。帽子の下から現れたのは長い黒髪。

「え……女の、子？」

そう、紛れもなくその風貌は女の子のそれ。その目に強い意志を込めて、レイはアテナに申し込む。

「私、アテナさんとデュエルしたい！　いいよね？」

「え、えっと……」

「決定！　行こう。寮の裏手でいいよね？」

「え、え？」

問答無用でレイに引っ張られ、何が何やらわからぬままアテナはレイとデュエルをすることになってしまった。

「な、なんでこんなことに」

「行くよアテナさん！　デュエル！」

「デュ、デュエル」

「私のターン、ドロー！」
戸惑うアテナをよそに、レイはさっさと自分のターンに入る。
「私は手札から『恋する乙女』を攻撃表示で召喚するよ！」
フィールドに人形のようにかわいらしい女の子が現れる。
「そ、それがモンスター？」
「私はターンを終了！　アテナさんのターンだよ！」
「わ、私のターン。ドロー」
アテナは伏せカードの一枚もなしに攻撃力４００のモンスターを攻撃表示で出してきたレイに戸惑いを隠せない。
「ええっと……私は『シャインエンジェル』を攻撃表示で召喚してバトルします」
『はぁ！』
『きゃあああん！』
「ううっ」
レイＬＰ３０００
「と、通った？」
しかし、何故か『恋する乙女』は破壊されずにその場に残り、うるうるとした目で自らを攻撃した『シャインエンジェル』を見つめていた。
『うっ……』
その何するの？　何でひどいことするの？　と問いかけるような瞳で見つめられて、『シャインエンジェル』が動揺している。
『りょ、良心の呵責が……！』
「『恋する乙女』は攻撃表示の間、戦闘では破壊されないんだよ！　そして、『恋する乙女』を攻撃したモンスターに乙女カウンターを一つ乗せる！」
『恋する乙女』からポワワ～ンとハートが飛び、それを『シャインエンジェル』が受け取った。
「お、乙女カウンター？」
聞き慣れないカウンター名にアテナは戸惑う。なんだか今日は戸

惑ってばっかりだ。
「え、えと。ともかく、ターン終了です」
わからないものはしょうがない。何かと物知りなセツなら『恋する乙女』の効果についても教えてくれたんだろうが……。
『でももう兄さんはいない。なにも言ってはくれない』
「っっ！」
また、幻聴。さだめの声だが、やっぱりこれは自分の心の声なのかもしれない。
「私のターン！　ドロー！」
レイの声が随分と遠くに聞こえる。
「私は手札から装備カード、『キューピッド・キス』を『恋する乙女』に装備！　バトルフェイズ！」
「えっ！？」
レイのフィールドにいるモンスターは相変わらず『恋する乙女』一体。装備魔法も、別段攻撃力を上げる類のものではなかったらしく攻撃力は４００のままだ。
「これが『恋する乙女』の真髄！『恋する乙女』で『シャインエンジェル』を攻撃！『一途な想い』！」
『天使さま～』
攻撃というよりどう見ても抱きつきに行っているだけとしか思えない『恋する乙女』は、『シャインエンジェル』にひしっ！　と抱きしめられた。
レイＬＰ２０００
「え、ええ～？」
自分からダメージを受けに行っているとしか思えないレイのプレイングに、アテナは困惑の声を上げた。
「そして『キューピッド・キス』の効果発動！　乙女カウンターが乗ったモンスターに攻撃してダメージを受けた時、そのモンスターのコントロールを貰うよ！」
「ええ！？」

『シャインエンジェル』が抱きしめた『恋する乙女』をそのままお姫様だっこしながら背中の翼を羽ばたかせ、レイのフィールドに移ってしまった。
「そして『シャインエンジェル』のダイレクトアタック！」
『申し訳ありませんマスター！　私は……私は愛に生きます！』
そんな天使らしいようならしくないようなことを叫びながら『シャインエンジェル』がアテナを攻撃した。
「きゃあああ！？」
アテナＬＰ２６００
「ターンエンド！　どう！？　恋する乙女は強いんだよ！」
「恋する乙女……」
そのフレーズに、アテナの心はまた沈んだ。
そんなアテナに、レイが静かに問いかける。
「……ねえ、アテナさんってセツが好きなんだよね？」
「え……？」
「そうだよね。あからさまだし」
「わ、私は……」
もう、振られた。その事実がアテナの心に重くのしかかる。
「まあ答えなくてもいいよ。見ればわかるもん」
でも、私は宣言しておくね。とレイは大きく息を吸い込んでアテナに宣言する。
「私はセツが好き！　私がもっと小さい頃に、セツは私にデュエルを教えてくれた！　友達を作るのが下手で、いつも泣いてばかりだった私の友達になってくれた！　だから私はセツを追いかけてここに来たの！」
迷いの全く感じられないその言葉に、アテナは打ちのめされた気がした。
「それなのに、肝心のセツは行方不明だって言うし、セツの大切な人、なんて言うのもいるし……もうぐっちゃぐちゃだよ」
それはアテナだって同じだ。新しくレッド寮に入ってきたのは女

の子でしかもセツのことが好きでいきなりデュエルを挑んできて……。

「でも、その『大切な人』のアテナさんがどんな人なのかなって思ったら、すっごく暗くてうじうじしてるだけの人だった」

そうだ。確かにアテナはセツに振られたのがショックですっかり腑抜けてしまっている。

「……そんなのってないよ。せっかくデュエルも強くなって会いに来たのに」

「……ごめん、なさい」

「謝られても困るよ。それより、さっきの質問、もう一回聞くね？いい？」

「さっきのって……」

「セツにとってのアテナさんって……何？」

「……」

また、答えに窮する。

「わ、わかりません」

「じゃあアテナさんにとってのセツって何？　これも答えられない？」

「そ、れは……」

自分にとってのセツ。

考えてみる。

最初にセツが、『アルカナ・ナイト・ジョーカー』を召喚したときの凛とした横顔に引きつけられた。その後の『融合解除』を使うときの無邪気な笑顔が可愛かった。

本当に、一目惚れだった。

それから女子寮の裏で本気のデュエルをした。罠かもしれないのに恐れず向かってきたセツがカッコよかった。

セツと過ごす時間の中で、どんどんどんどん好きになっていって……。

『振られたんでしょ？』

「っ」
そうだ。どんなに思い出を振り返ったところで、最後に待つのは振られたときのあの絶望。目の前が真っ白になって、知らず涙がこぼれていたあの時に辿りつくだけ。
『それまでいい感じだったのに、あっさり振られた貴女はどう思った？　兄さんのこと、怨んだんでしょう？』
「怨……んだ」
そうなのか？　自分はセツを、大好きだったセツを今、怨んでいるのか？
『怨むよねぇ。それまでどこまでも献身的に、一途に寄り添ってきたのに、あっさり捨てられて……憎いんだよね？』
「……ちがう」
『……』
「違う……！」
そうだ、違う。セツが自分のことを本当はどう思っているか。それはわからないし、本人に確かめてみるべきことだ。
それでもただ一つ、間違いのないこと。
「私にとって、セツは大切な人です。それだけは、確かです」
『振られたくせに……』
（それでも……）
「私は、セツが好きなんです」
セツの瞳に恋をして、セツの笑顔に胸がときめき、セツの声が愛しくて、セツの背中に憧れた。
一目惚れなんてしない。そう思っていた。
普通にしゃべって、普通に友達になって、その内にいつの間にか恋をして……そんな恋愛をすると思っていた。でも……ちがった。
「全部全部、吹っ飛んじゃいました。それまで私が考えていた恋愛観。全部あの時セツに会って、なくなっちゃいました」
『運命感じちゃいました！』
あの時そう言った。

「でも、もう言わない」
　『運命』なんかで、恋はしない。
「私は私の意志で、セツが好きになったんです。『運命』なんかじゃない。だから……」
　『運命』には……さだめさんには、負けません。
『……ふん。好きなだけ吠えてればいい。直に、そんな余裕はなくなる』
「ありがとうございます。レイさん。私、ようやく前を向けそうです」
「……別に、そんなつもりはなかったんだけど……まあ、いいかな。恋敵（ライバル）が腑抜けたままじゃ、張り合いないもん！」
　レイは満面の笑顔でそんなこと言う。アテナもくすりと笑う。
「それでは、復活記念ということで、手早く済ませてしまいましょう！」
「へっ？」
「ドロー！　私は手札から『ヘカテリス』の効果を発動！　デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加えて発動！　『アテナ』召喚！」
『まったく……心配させてくれちゃって。人騒がせな娘ね』
「えへへ。ごめんなさい。でも、もう大丈夫です。だからシャルナ！　ちゃちゃっと済ませてしまいましょう！」
『ま～かせなさい！　まずは、あの馬鹿天使からね』
『あ、アテナ様……？』
『ったく。天使ともあろうやつが、あっさり色香に参ってんじゃないわよ。ちょいと反省しときなさい』
「バトルフェイズ！『アテナ』で、『シャインエンジェル』を攻撃！　『ジャッジメント・レイ』！」
『さっさと……』
『ひぃっ！？』
『役目果たしてこんか馬鹿モンがぁ～！』

『たっ、ただいまぁ～！』
「きゃああ！？」
レイＬＰ８００
「墓地の『シャインエンジェル』の効果発動！　デッキから『コーリングノヴァ』を攻撃表示で特殊召喚！『アテナ』の効果で６００ダメージ！」
「わああ！？」
レイＬＰ２００
「『コーリングノヴァ』で『恋する乙女』を攻撃！『新星の輝き』！」
「うわあああああっ！？」
レイＬＰ０

「ふう。すっきり！」
「……私は複雑」
迷いも吹き飛び、流れるように勝利を掴んだアテナはともかく、余計な助言の所為でちゃっちゃと片づけられたレイは不満げだ。
「あ、あはは。ごめんなさい」
「……ううん。まだこんなに差があるんだなぁって実感できたから、良かったよ」
「そう言って貰えると嬉しいです」
「ん。でもすごかったよ。とっても強かったんだね。アテナさん」
「セツには負けましたけどね」
「う～んやっぱりセツはすごいね。私も強くなったつもりだったけど、もっと強くならなきゃだめだね」
「お互いに、ですね」
「うん！」
お互いに笑顔で握手を交わす。

「お〜い！」
そんなときに、寮の影から十代たちが現れた。
「わっ！　やばっ……」
慌ててレイが帽子をかぶり直そうとするが、念入りにバンダナで括って仕舞わないと入りそうにない。
「ああ、もういいって。全部そこから見てたからさ」
「そ、そうなの……？」
「ああ。レイの様子がなんかおかしかったし、とりあえず明日香も呼んで観戦してた。二人ともすっげえデュエルだったぜ！」
「……アテナも、立ち直れたようでなによりよ。レイちゃんには感謝しないといけないわね」
「明日香さん……御心配をおかけして、どうもすみませんでした」
「いいのよ。元気になってくれたなら何よりだわ」
「はい……」
「それじゃあ、レイはどうすんだ？」
「えっと……」
「今日は、私の部屋に泊めましょう。明日、定期船を使えばいいと思います」
「……いいの？」
「はい！　レイさんには恩ができてしまいましたから、恩返しです」
「うん！　ありがとう！」
「へへっ！　やっぱデュエルは最高だな！」
「ええ。二人とも、すっかり仲良しになったみたいね」
視線の先には、笑顔で話す二人の姿。
「今日は昔のセツのこと、聞かせてください！」
「いいよ〜。でも、アテナさんも、最近のセツのこと聞かせてね！」
「はい！　えへへ、今日は眠れなくなりそうですね！」
「うん！」
「……なんか、ここにはいない奴が不憫になってくる気もするな」
「……まあ、自業自得じゃないかしら。ついでに、私も興味あるか

ら参加させてくれる？　そのパジャマパーティ」
「そうですね。どうせだから加藤さんとかも呼んじゃいましょう！」
「え～誰々その加藤さんって！」
「それがですね……」
きゃいきゃいと、この場にいない人間のことで盛り上がる女子たち。
「……セツ。オレにはちょっと力になれそうもないや。帰ってきたら覚悟しといた方がいいぜ」
それを見ながら、今はどこにいるともしれないセツに、十代は呼びかける。
「早く帰ってきた方が、説教は短く済みそうだぞー？」
だから、早く帰って来い。そんな想いをこめて、十代は空の向こうへと呼びかけるのだった。

「……せっかく趣向を凝らしたのに……」
闇に包まれた部屋。その部屋以上に暗い瞳をしたさだめは唇を噛む。
「早乙女レイ……腹立たしい。兄さんを好いているだけでも許し難いのに、私の趣向まで邪魔するなんて……」
さだめは少し考えて、くすっと笑った。
「そうね。ちょっとした肩慣らしでもしましょうか。ちょうどいい贄ができたわけだし。くふっ！　くふふふふっ！　アハハハハハハハハッ！！」
狂気は止まることを知らず、やがて暴走する。その手に、悪魔の力を携えて……。

第十五話「恋する乙女の憂鬱」（後書き）

なんだかんだと過去最大の文量に。見てわかるかもしれませんが、デュエルはおまけです。その途中のアテナの立ち直りが書きたかっただけ。

というわけでアテナ復活。アテナはまたセツへの想いを再確認し、あきらめず進むことを決意しました。……アテナは順調に読者さんからの好感度上がる話ばっかりだな……。

ま、まあとにかく、難産ではありましたが、なんとかレイフラグを絡めてアテナを立ち直らせることに成功しました。……ふう、よく頑張った！（自賛）

やっぱりレイフラグは多少強引に突っ込みましたけどね。あ、わかりにくいかもですが、レイと会ったセツは『今』のセツではありません。トリップ……というか憑依する前の、この世界のセツです。といっても、両者に違いはありませんが。どっちもセツです。区別付くのはさだめくらい。

そのさだめも順調にダーク化。動き始めました。

ふう！　次回は……どうしよう。本格的に考えてません。やりたいことやりつくした感が……い、いえ！　更新はがんばりますが！

それでは、レーネスでした！

第十六話「そして誰もいなくなる」（前書き）

セブンスターズ編に入った第十六話です。っていうかそろそろ一期は終わりかも。ギャグ含有率ゼロパーセント。混じりっ気なしのシリアス&ダークで構成されておりますので閲覧の際はご注意を。

ではどうぞ！

第十六話「そして誰もいなくなる」

アルカナ～切り札の騎士～

第十六話「そして誰もいなくなる」

「じゃあね～！　今度はー！　またちゃんと小学校卒業してから入学試験受けにくるからー！」

昨夜は遅くまで話し込んでいたというのに、まったく疲れた様子を見せないレイが定期船に乗って帰っていく。

アテナたちはそれを皆笑顔で見送る。

「おー！　次来る時までにー！　セツの奴連れ戻しとくからなー！」

「次はちゃんと連絡してくださいねー！」

「気をつけるのよー！」

声が届かなくなるまで大声で別れの言葉を投げ合う。本当に、レイには感謝してもしきれない。レイがいなければ、アテナは精神的に参ってしまっていたかもしれないのだから。

「でも、セツのことは別問題です」

「ふふ。調子が戻ってきたじゃない」

「大体、たかが一回振られたくらいで諦めてたらそもそもさだめさんには勝てませんから。押して押して押しまくって勝利を掴んで見せますとも！」

ぐっ！　と改めて気合を入れるアテナだが、明日香は別のところに引っかかりを覚えた。

「さだめ……彼女は、今どうしているのかしら？」

「……正直、あんま思い出したくないけどな」
「けど、彼女の執着具合を考えると、セツは彼女のところということも考えられるわ」
拉致、監禁。どちらもさだめならためらいなく実行することだろう。
「それに去り際のセリフも考えれば、放っておくわけにもいかない、か」
三人で顔を見合わせ相談していると、三沢が走り寄ってきた。
「お～い！　十代、アテナ、天上院君！」
「三沢？　どうしたんだよ」
「ああ。校長が俺たちを呼んでいるそうだ。なんでも俺たちに頼みたいことがあるらしくてな」
「頼みたいこと？」
「ああ。メンバーは俺・十代・アテナ・天上院君・カイザー・万丈目・クロノス先生の七人だそうだ」
「亮やクロノス先生も？」
「俺もまだ内容は聞かされていない。とりあえず、校長室に向かおう」
「わかりました！」

「七星門？」
三沢と共に校長室に入室したアテナたちは、その聞き慣れない言葉に首をかしげた。
「うむ。この島の奥には、かの『幻神獣』三体とも並ぶと言われるほどのカードが封印されているのだが、七星門は、その封印を護るための門なのです」
校長の何時になく真剣な様子に、アテナたちも表情を引き締める。
「そして、最近この七星門を開こうと暗躍している者たちがいると

いう情報を聞きつけ、急遽、対策を取ることにしたのですが……」
　早い話が、七つある七星門の鍵をアテナたち七人に護って貰いたい、と言うのが校長の話だった。
「暗躍している者たちの通称はセブンスターズ。彼らは恐ろしい闇のデュエリストで、闇のデュエルというものを挑んでくることでしょう。とても危険な任務になりますが……」
「任せとけって！　鍵は絶対、オレたちが護る！」
「フン！　お前たちだけに任せておけるか。いいだろう。このオレ様もやってやる」
「はい！　俺も必ず、任務を果たします！」
「ああ。デュエルを悪用しようとしている奴らを、放ってはおけん」
「イヤなノ～ネやりたくないノ～ネ。でもドロップアウトボーイたちに舐められるのはもっとイヤなノ～ネ」
「アテナ、大丈夫？　私はやるけれど、貴女は……」
「アテナ君。私としても、君のように幼い女の子をこんなことに巻き込みたくはないのですが……本当なら、御堂切君に頼むことも考えていたのですが……」
　セツは今行方不明。頼むこともできない。
「……いえ、やります。私がセツの穴を埋められるのなら、喜んで！」
　そうして、アテナたちが七星門の鍵の守護者を引き受けた頃、すでに闇の胎動は動き始めていたのだった。

「ぅう～ん。でも、セツってばどこに行っちゃったんだろ。あぁ～会いたかったなぁ～」
　軽く伸びをしながら、レイは定期船を降りて本土へと到着していた。
「そう。でも、貴女が兄さんに会えることはもうないわ」

「っ誰！？」
レイが振り向いた先にいたのは、どこかセツと似た風貌をしている少女。
「貴女は……」
「私？　私はさだめ。今は、セブンスターズのさだめ、とでも言えばいいのかな」
「セブン……スターズ？」
「ああ、貴女は何も聞かされてないんだっけ？　まあいいか。私の要件はね？」
デュエルディスクを装着し、昏い笑みを浮かべる。
「兄さんに近づく蛆虫を、消すことよ。早乙女、レイ」
「っひ！」
突如広がった闇に、レイは恐怖する。何だ、一体何が起きている？
「さあ、デュエルディスクを構えなさい。これから楽しい楽しい闇のゲームの始まりよ」
「あ、あぁうあ……」
殺される。レイは直感的にそう思った。
「デュ、デュエルで勝てば……・見逃してくれるの？」
「ええもちろん。だってこのゲームの敗者は魂を永遠の牢獄に囚われてしまうもの。貴女が勝てば、私はもう貴女を消せない。簡単でしょ？」
なにが簡単なものか。つまり、勝てなければ自分は殺されるのと同義だ。
「逃げようったって無駄。もう闇のゲームは始まってしまったもの。今から逃げようとすれば、サレンダーとみなして魂を奪わせてもらうわ」
「そんな……」
つまり、もう勝つしか生き残る術はない。
「さあ、さっさと構えて、そして死ネェェェェ！！」
「ひぃっ！？」

構えなければ殺される。その恐怖に震えながらレイはデュエルディスクを手に取った。
「じゃあ始めましょうか。デュエル！」
「デュエル……」
「お姉さん優しいから、貴女に先攻は譲ってあげるよ。さあ、ドローしなさい」
「ど、ドロー！　私は『恋する乙女』を攻撃表示で召喚！　ターンエンド！」
周囲の闇に脅えているのか、『恋する乙女』も不安げだ。
「……フフ。私のターン。ドロー！」
そんな怯えるレイと『恋する乙女』を満足げに眺めるさだめ。
「私は手札から『処刑人―マキュラ』を攻撃表示で召喚！」
「えっ！？」
レイは驚愕した。なぜならさだめが出した『処刑人―マキュラ』は……。
「き、禁止カードでしょそれ！　なんでそんなの……」
「貴女こそ何いってるの。これは闇のゲーム。公式試合でもなんでもない、いわば野試合と同じ。なら、禁止だの制限だのなんて些細な違いよ」
「そんな……ズルイ」
「アハハッ聞く耳持たなぁ～い。改めて自己紹介しておくわ。私はさだめ。『禁止スタンダード』の御堂運命よ」
さだめの掲げたカードから迸った雷撃が、レイの『恋する乙女』を貫いた。
「あああああああ！？」
「さあ……闇のゲーム、本領発揮だよ？」

そして十代たちも、大徳寺の企画した課外授業で、闇のゲームと

いうものを体験した。まるで本当に自分が攻撃を受けているかのような衝撃。恐怖もあった。だが、だからと言って守護者の任を降りるわけにもいかなかった。

課外授業を終えて、数日としないうちに、第一のセブンスターズとしてダークネス。即ち、明日香の兄である天上院吹雪が十代とデュエルした。結果は辛くも十代の勝利。しかし、そのデュエルで十代は大きく体力を消耗した。

続いて襲いかかってきたのはヴァンパイアのカミューラ。相手のモンスターを全て破壊し、自らの墓地からモンスターを特殊召喚する凄まじい効果を持った『幻魔の扉』というパワーカードを使い、その上人質や蝙蝠によるデッキの盗み見等、卑怯な戦術を駆使する難敵にクロノスとカイザーが敗れるも、またそれを十代が撃破。今に至る。

その日、アテナは未だ意識の戻らない兄を看病している明日香に、差し入れを持っていくため病室へと向かった。

「明日香さん。アテナです。入っても大丈夫ですか？」

ノックと共に声をかけるが、しばらく待ってみても反応がない。

「明日香さん？　入りますよー」

仕方ないので一応断ってから扉を開く。

「あれ？　いない……お手洗いにでも行ったのかな……」

とりあえず差し入れをテーブルの上に置こうとして、そこに置かれている一枚のカードを発見する。

「何、これ……『ウィジャ盤』……？」

明日香のデッキコンセプトにも吹雪のデッキコンセプトにも合わないカードだ。何より、病室に置いておくには不吉に過ぎる。

「不吉……」

ふと、アテナの脳裏に『終焉のカウントダウン』を使っていたさ

だめの顔が過る。
「まさか、そんなことないですよね……」
いくらなんでも考え過ぎだ。そう思って気にしないことに決めたアテナ。
だが、その日いくら待ってみても明日香が帰ってくることはなかった。

「明日香さん、どうしたんでしょう」
「明日香まで行方不明って……セブンスターズのこともあるし、心配だな……」
十代にも相談したが、今度は前回の行方不明騒動と違ってセブンスターズの脅威もある上に明日香は七星門の鍵も持っている。
「やられちゃった、とか……ないですよね？」
「大丈夫！　明日香の奴、すっげー強かったじゃねーか！　簡単にやられたりしねーよ！」
「アニキ！」
十代がアテナを励ますように明るくそう言った時、顔を真っ青にした翔が部屋に駆けこんできた。
「ど、どうした翔、そんなに慌てて……」
「お兄さんが……お兄さんがいなくなっちゃった！」
「なんだって！？」
「亮さんが……！？」
「それで……お兄さんの部屋の扉にこれが……」
そう言って翔が見せたのは……『死のメッセージ「E」』。
「これ……って」
アテナは明日香がいなくなったときに見つけた『ウィジャ盤』のカードを取り出す。
「犯人からの……死のメッセージ……ってことか」

「じゃ、じゃあお兄さんは……」
「つかまってしまった可能性が非常に高いです……」
「そんな……」
「くそっ！」
あのカイザー亮が誰にも気づかれない内に易々と。まだ見ぬセブンスターズに、アテナたちは戦慄した。
「これ以上やらせるか！　翔、他の皆に召集かけるぞ！」
「う、うん！」
兄が倒されたかもしれないと落ち込みかけた翔だったが、十代の言葉に急いで他の仲間たちに連絡をする。しかし……。
「あ、アニキ！　クロノス先生に連絡がつかないよ！」
「なんだって！？　行くぞ翔、アテナ！」
「うん！」
「はい！」
イヤな予感がした三人は急いでクロノスの部屋へ向かう。そしてそこには……。
「あ……」
「そんな……」
扉の真正面にある壁に何枚もの『死のメッセージ「T」』のカードがTの形に張り付けられていた。
「エスカレートしてる……」
「『死のメッセージ』は、特殊勝利までの準備カード……ってことは」
明日香や亮、クロノスは即ちまだ準備運動でしかない、ということか。
「ねえ……確か死のメッセージはEの次はAだったはずだよ！？」
「それじゃ……まさか」
他の誰かがもう一人……。
「これは……なんということだ」
「校長先生！」

愕然とするアテナたちの後ろに、何時の間に現れたのか鮫島校長が立っていた。

わけを聞いてみると、万丈目の部屋の惨状と、今起こっている異常を照らし合わせた結果、クロノスも危ないのではということで確かめに来たのだという。

「万丈目の部屋が……どうしたんだ？」

「……万丈目君の部屋が、カードで埋め尽くされていると連絡があったんだ。それでそこに行ってみたら……」

「何のカードが……あったんですか？」

半ば確信していたが、そうでなければいいと願い、アテナは尋ねた。

「……『死のメッセージ「A」』が、部屋中に散らばっていたよ。でたらめに、部屋を荒らしまわった後のような酷い有様だった」

もう……その答えは明らかだった。

「み、みんな……」

「う、うそでしょ？　うそッスよね……？」

信じたくない。そう思って周囲を見回す翔だが、全員その表情は暗い。

「あと残るメッセージはたった一つ」

そんな中で鮫島校長が重苦しい口調で語り出した。

「最後のHが揃ったときのことはあまり考えたくありませんが……」

「待ってくれ……三沢は？」

「あ……」

守護者にはあと一人、三沢大地がいたはずだ。その彼はここにいない。一同に不安が走る。

「……行ってみよう！　三沢の部屋に！」

「っ！」

「ひぃ……」
三沢の部屋。翔は思わず腰を抜かしてへたり込んだ。彼らの目に飛び込んできたのは、壁一面に五寸釘で打ち付けられた大量の『死のメッセージ「H」』。
「し、正気の沙汰じゃない……」
恐怖に震えるように鮫島校長が漏らしたそのセリフに、アテナはこれをやった犯人が誰なのかがわかった。わかって、しまった。
「さだめさん……」
「え？」
「これ……さだめさんじゃ……」
「は、はは。ま、まさか……」
その可能性に、流石の十代も顔を引き攣らせた。
大いにあり得る可能性だ。
この陰湿で、恐怖を煽る悪質な手口。途方もない憎しみの込められたメッセージ。
「だとしたら……」
一行は全員、アテナを見つめた。さだめがここまでの憎しみを向ける相手はアテナ以外にいない。まだアテナが無事なのも、アテナの恐怖を極限まで煽るためだと考えれば辻褄も合う。
「けど、なんでオレは無事なんだ？」
「十代さんは、大抵誰かとずっと一緒にいたからじゃないでしょうか」
「もしくは、彼女が十代君を危険視しているからかもしれません」
「オレを？」
なんだかんだで、今までのセブンスターズを全員撃退してきたのは十代だ。そのことでさだめが十代を避けた、と考えるのはそれほどおかしなことでもない。
「よし、じゃあしばらく、アテナにもレッド寮で過ごして貰うっていうのはどうだ？」
「ふむ……悪くはないと思いますが……」

「アテナはどうだ？　寝泊まりするところは、それこそセツの部屋使えば……」
こんな状況だが、セツの部屋で寝泊まりするというのを想像し、アテナは顔を赤らめた。
「そ、それもいいかもしれませんね。そうしましょう」
即決。特にためらいもなく、アテナはそうすることに決めた。鮫島校長も特例として許可してくれ、アテナはしばらくの間レッド寮セツの部屋で寝泊まりすることが決定された。

「じゃあ私、部屋から数日分の生活用品取ってきますね」
「気をつけろよ」
流石に女子寮に入るわけにもいかず、十代たちは女子寮前で待機する。
「大丈夫です。寄り道せずに取ってきますから」
不安をふっ切るように笑顔でそう言って、アテナは部屋に戻る。

「えっと、カギカギ……っと」
ポケットから部屋のカギを取り出し、扉を開く。
「………………き」
部屋に一歩踏み入った瞬間、アテナは思わず悲鳴を上げた。
「きゃああっ！？」

アテナの絶叫は外にいた十代たちにも当然聞こえた。その時ばかりはここが女子寮だとかいうことを忘れ、アテナの部屋までダッシュした。

「アテナ！　大丈夫か！？」

「アテナちゃん！」

「あ、あ、あ、あ」

アテナの部屋の扉の向こうには……。

「……！？」

「あ……」

十代は絶句し、翔は一瞬意識を飛ばした。なぜなら、扉を開けた先にあったのは扉と同じ大きさの『墓場からの呼び声』だったのだから。

「……クソ！」

十代がその巨大な『墓場からの呼び声』を押しのけて部屋に押し入ると……。

「……いらっしゃい」

悪魔が、手招きをしていた。

「さ、さだめさん……」

「余興は楽しんで貰えた？　蛆虫さんたち」

悠然とアテナのベッドに座るさだめはごくごく自然体で、普通に遊びに来た客をもてなすかのよう。この異常な状況下で、そんな『普通』は逆にどこまでも『異常』。

「ああそうそう。これ、さだめちゃんからのプレゼント。ありがたく受け取って」

そう言ってさだめがアテナたちの足元にばら撒いたカード。それは……。

「お、お兄さん！？」

「明日香たちも！」

『魂の牢獄』そう書かれたカードに描かれていたのは行方不明になった仲間たちの姿が。しかもそれだけではなく……。

「レイ……さん！？」
そう。その中にはつい最近友達になった恋敵、早乙女レイのカードがあった。
「ああ、その子ね。肩慣らしとしてさくっと」
それがどうしたと言わんばかりのさだめ。
「なんで……レイさんを……」
「私の趣向を邪魔した。兄さんに近づこうとした。ほら、有罪は確定じゃない」
「貴女……」
「さ、それじゃあ最後の最後。クライマックスと行きましょうか。蛆虫」
さだめがデュエルディスクを構え、アテナに視線を向ける。
「待て！　あんたの相手はオレだ！」
アテナを庇うように十代が立ち塞がるが、さだめはにべもなく否定する。
「お断り。私の目的はそこの蛆。三幻魔とか、ぶっちゃけどうだっていい。それに誰が好き好んで主人公補正バリバリのチートドローなんて相手にするものですか」
「しゅじ……？」
十代たちはさだめの言った意味がわからず困惑する。
「わ、私が勝てば、みんな解放してくれるんですよね？」
「さあ？　してくれるんじゃないかな？　解放の仕方とかしらないけど」
「な……」
「大丈夫だよ。どうせテンプレで助かるように出来てるから」
さだめの言葉の意味はさっぱりわからない。わからないが……。
「ごめんなさい十代さん。やっぱり、ここは私にやらせてください」
「アテナ……」
「さだめさんとは、やっぱり私が決着をつけなきゃいけないと思うんです。だから……」

アテナの瞳に、強い決意の色を見た十代は、しぶしぶ頷く。
「……わかった。けど、絶対無理すんなよ！」
「はい！」
「テンプレ展開乙。それじゃ、ここからテンプレを外れるとしよっか」
「「デュエル！！」」
「私のターンよ。ドロー」
さだめはアテナを先攻にする気はないらしく、問答無用で先手をとる。
「私は手札から魔法カード『名推理』を発動」
「『名推理』？」
「さあ、モンスターのレベルを一つ宣言しなさい。蛆」
「え、えっと？」
「『名推理』は、私のデッキの上から通常召喚可能な出るまでカードをめくり、それが貴女の宣言したレベルだった場合それをそのまま墓地へ。そうでなかった場合はそのカードを特殊召喚するの。さあ、さっさとしてよ」
「じゃあ……レベル４」
アテナは、通常最もデッキに入る割合の高いレベル４を選択した。
「くふっ！　ええ。いいわ。じゃあ始めましょう」
さだめはすごい勢いでカードをめくり始める。レベル４はおろか、モンスターさえ全然出てこなかった。
「あいつ、めちゃくちゃ事故ってるんじゃないか？」
「じゃあもしかして、結構簡単に勝てちゃったりするかも！」
「フフ……これでいいのよ」
「え……」
そしてようやくモンスターを引き当てる。
「レベル１！『サイバー・ヴァリー』を特殊召喚！」
「サイバー流モンスター！？」
驚く翔に、さだめは愉快そうに解説する。

「アハハッ！　貴方のお兄さんはとってもいい贈り物をしてくれたわ。おかげでこんなデッキが組めたんだもの」
　亮を倒した際に奪い取ったのだろう。卑劣な行為にアテナは憤慨する。
「死力を尽くして戦った相手のカードを勝手に……！」
　しかしさだめはまったくきにした様子を見せない。
「さあて、続けよっか。『サイバー・ヴァリー』の効果で自身をゲームから除外して墓地の『マジカル・エクスプロージョン』をデッキの一番上に戻す。手札から『手札抹殺』を発動」
「え！？」
　アテナの手札の『オネスト』『神の居城―ヴァルハラ』『光神テテュス』『ジェルエンデュオ』『紫光の宣告者』が全て墓地に捨てられる。その中の『紫光の宣告者』を見てさだめは本当に愉快そうに笑った。
「アハハハハハハハハッ！　ああ良かった良かった。私ってば最高！　アハハッ」
「な、なんです？」
「貴女の勝ちはほぼなくなったってこと。カードを三枚セット！『サイバー・ヴァリー』を攻撃表示で召喚してターンエンド！」
　さだめの狙いがわからない。一体何を思って自らのデッキを破壊したのか。
「私のターン！　ドロー！」
　とにかく、さだめの真意がどうあれ、何かする前に速攻でケリをつければ問題ない。そう思っていつものようにカードを展開しようとして……。
「前に言ったでしょう？　貴女には何も与えない」
「……え？」
　アテナが自らのライフゲージを唖然として見つめる。
　ＬＰ０
「貴女のスタンバイフェイズにトラップカード『マジカル・エクス

プロージョン』を発動したの。『マジカル・エクスプロージョン』は、墓地の魔法カードの枚数×２００ポイントのダメージを相手に与える。私の墓地にある魔法カードの枚数は２３枚。合計４６００ダメージで死亡確定」

「そ……な」

「貴女には何も与えない。加速する時間も、カードを発動する機会も……兄さんも。何も与えないし、全部奪うよ。貴女の持っているもの全部」

そう酷薄な笑みを浮かべるさだめの声を、アテナは何処か遠くに聞いていた。

声が、上から聞こえてくる。目の前が真っ暗だ。

（……あ、わたし、たおれてるんだ……）

十代や翔の呼びかけももう聞こえない。聞こえるのは、こちらを見下したさだめの声だけ。

「永遠の闇を彷徨うがいいわ。貴女のは特別製。苦痛絶望が延々と繰り返される闇の奥底に沈めてあげる。それでも正気を失うことができない真の地獄だよ。悶え苦しみ、後悔しなさい。兄さんに手を出したこと。永遠に」

そして、アテナの意識は闇へ呑まれた。

第十六話「そして誰もいなくなる」（後書き）

さだめ無双。やりたい放題です。彼女にとっては制限だの禁止だのは全く関係ありません。禁止や制限完全無視の禁止スタンダードに所謂マジエクワンキル。正に、勝てればなんでもいい。といった風情です。批判は覚悟の上ですが、さだめというキャラの性質上、むしろそんなことを気にしたデッキ構成をする方がらしくないと判断。

というわけで、もはや味方勢は壊滅です。さだめ一人で。描写こそされていませんが、他の仲間たちは皆原作知識をフル活用したさだめの『禁止メタ』によってフルボッコでした。さだめはまったく自重しないヤンデレです。いまだかつてここまで遊戯王のルール無視したデッキ使いがいただろうか。というくらいめちゃくちゃです。

さて、次回は時間軸的にはカイバーマン。内容的にはセツの帰還かな？　セツの精霊界での出来事とかも多少描写するかと。

それでは、レーネスでした！

第十七話「三銃士」（前書き）

しつこいくらいに引っ張り続ける十七話です。いまだセツの新デッキ出ず、現実に帰還もしていません。が！　デッキについてはヒントが作中にありますし、何より次回がさだめ編最終話みたいな感じなので最後の引っ張りです。セツの新デッキも次話でお披露目。これは意地でも明日書き上げないといけません。

しかもまた過去最長記録。文字数にして８６６３字。一日で書くのキツイよこれ……。なんだかんだでここまで連続更新なので、いっそのこと最後までノンストップで行きたいところですね。

ではどうぞ！

第十七話「三銃士」

アルカナ～切り札の騎士～
第十七話「三銃士」
「アテナ！　おいしっかりしろアテナ！」
「そんな……起きて、ねえ起きてよ！」
必死でアテナに呼びかける十代たちがまるで目に入っていないさだめはその脇をすり抜けて部屋を出る。が、その腕を十代に掴まれた。
「待てよ……今度の相手はオレだろ……！」
「はぁ？」
何を言っているのかまるで理解できないとでも言いたげに眉をひそめるさだめ。
「オレとデュエルしろ！　それでオレが勝ったら、アテナたちを解放しろ！」
「やだ」
「なっ……」
にべもないさだめの拒絶。
「もうさだめの目的は九割方終わったもん。後はお兄ちゃんを探して一緒に生きていく。それだけで十分」
お兄ちゃんを探して。つまりそれは、セツの居所をさだめも知らないということ。
「まあお兄ちゃんならそのうち自分からさだめに会いに来てくれるよ。だってお兄ちゃんだもん」
無邪気でありながら魔性の色しか感じられない不可思議な笑顔を浮かべる。
「それより、そろそろ手を離してよ。さだめのカラダに触れていいのはお兄ちゃんだけなんだから」
振り払おうとするが、十代はしっかりと握って離さない。

「オレとデュエルしろ。そうしたら離してやる」
「……もう、仕方ないなぁ……」
やれやれと溜息を吐き、さだめはデュエルディスクに手を……伸ばさなかった。
「闇よ……」
「なっ！？」
さだめの周囲から闇が噴き出し、十代を呑みこもうとする。慌てて十代は手を離して後ろに下がる。
「アニキ！」
「大丈夫。なんともない」
「じゃあ、さだめは帰るね。蛆虫さんたちは闇と遊んでるといいよ」
そう言い残して、さだめは己の創りだした闇の中へと消えていく。後に残されたのは、アテナの部屋を覆う闇と、その中に閉じ込められた十代たち。
十代は気を失っているアテナを背負い、逃げ出す準備を整える。
「くそっ！　どこから出れば……」
『クリクリ～』
「ハネクリボー！？」
迫ってくる闇を、ハネクリボーが祓っていた。
『クリ～！』
そのハネクリボーが示す先には出口の光。
「よし！　助かったぜ相棒！　こっちだ！　翔！」
「え？　え？」
「いいから走れ！」
「う、うん！」
闇を祓い、出口へ導く。十代たちは、ハネクリボーのおかげでなんとかことなきを得たのだった。

「……そうですか。アテナ君までも……」
話の経緯を聞いた鮫島校長は両手を組んで額に当て、俯いた。その口から深い、深い溜息が洩れる。
「これで……残るは十代君ただ一人。いよいよ進退窮まりましたか……」
「校長先生……」
アテナを救えなかった無力を悔やむ十代。そんな十代に、鮫島校長は名案を思い付いたと言うように明るく声を上げた。
「そうだ！　君たちは今日温泉にでも入ってくるといい」
突然の提案に十代たちは困惑した。
「え!?　イヤ、今はそんな場合じゃ……」
「十代君も二度にわたるセブンスターズとのデュエルや、さだめ君との一件で疲れがたまっているだろう。疲れの溜まった体では、満足に戦えない。戦士には休息も必要だよ」
「けど……」
「いいから、行ってきなさい。気分転換もしなければ、今度はキミも倒れてしまう」
「……はい」
しぶしぶ、といった感じで頷く。疲れがたまっているのも事実だ。闇のゲームはそれだけ体力と精神力を使う。さだめの一件ではなおさら精神力を消耗した。
「アニキ……」
「行こうぜ、翔。校長先生の言うとおり、オレもちょっと疲れた」
「うん……」
鮫島校長の提案を受け、十代は翔と共に校長室を後にした。

「うおっ。でっけー風呂だなー！」
「レッド寮の風呂とは段違いなんだなぁ」

「温泉というより、スパリゾートみたいなところッスね」
校長室から退出した後、早速十代たちは隼人も誘って三人で温泉に来ていた。
「おー！　ここなんかプールみたいで楽しいな！」
「だからって泳いじゃダメッスよ！」
「へへっ！　……」
十代は湯に潜り、翔のタオルをはぎ取った。
「あっ！　こらー！」
「こっちこっち！」
「待てー！」
「結局翔も泳いでるんだなぁ」
そうして十代が束の間の休息を楽しんでいると、ハネクリボーが何かを伝えたそうに十代の周りをクリクリと舞う。
「どうしたハネクリボー」
『クリ～』
まるでついてこいとでも言うように飛んでいく。
「お～い……なんなんだ？」
『クリクリ～』
「へ？　うわっ！？」
突然床が抜けたような浮遊感と共に、十代は温泉の底へ沈んでいく。
「うわぁあああああああああ！？」

十代が落ちた先にあったのは精霊界であった。後から落ちてきた翔、隼人と共に奥へと進むと、その先に待ち構えていた『正義の味方カイバーマン』と出会った。
「『青眼の白龍』が貴様と戦いたがっている」
カイバーマンはそう言って十代にデュエルを申し込む。

「『青眼の白龍』の攻撃！『滅びの爆裂疾風弾（バーストストリーム）』！」
カイバーマンの召喚した『青眼の究極龍』を、『Ｅ・ＨＥＲＯエッジマン』専用サポートである『エッジ・ハンマー』を使って勝利したかと思われた十代だったが、カイバーマンはその十代の更に上を行き『融合解除』を使うことによって『青眼の究極龍』を三体の『青眼の白龍』に分離させることで『エッジ・ハンマー』をかわし、三体の『青眼の白龍』によるダイレクトアタックを決めて勝利した。
「強靭！　無敵！　最強！」
カイバーマンの勝利の哄笑が響く。
「粉砕！　玉砕！　大喝采ィ！！　ハーッハッハッハッハッハッハッハッ！」
「くっそぉー！」
「あ、アニキ！」
「負けちまった……でも、楽しいデュエルだったぜ！」
「フン……まあいい。そういえば貴様」
「？　なんだ？」
「最近、貴様と同じ人間界の者がこちらでチョロチョロと動きまわっているようだ。お仲間ならとっとと連れて帰れ。目障りだ」
「！」
「アニキ！」
「ああ！　なあカイバーマン！　そいつの特徴、何か聞いてないか！？」
「さあな。オレはさして興味も湧かなかったからロクに聞いちゃいない。何事か騒いでいたそこらの雑魚共ならば知っていることもあるだろう」
「サンキュ！　カイバーマン！」
「ねえキミたち、その人間のこと、何か知ってたら教えてくれないかな！？」
カイバーマンの言う自分たちと同じ人間。
もしや、それは行方不明になったというセツのことではないか？

船で島から出た様子もなく、港と反対側。即ちここへの入り口のある温泉に向かったという目撃証言もある。
考えれば考えるほどにセツである気がする。
「その人間さんならボク見たよ～」
「ホントか！？」
聞き込みに反応して声をあげたのはハッピーラヴァー。そう、セツがこちらにやってきたときに空をふよふよ飛んでいたハッピーラヴァーだ。
「うん。ルインさまのお供の人間さんでしょ？」
ルインのお供。目撃証言でもルインと一緒であることが確認されているし、間違いなさそうだ。
「今、どこにいるかわかるか！？」
「わかんない」
「そっか……」
「それはわたしが知ってますの！」
そう言って飛び跳ねているのはキーメイスだ。小さくて可愛らしい体で一生懸命飛び跳ねながら自己アピールしている。
「今その人間さんは、ルインさまとかと一緒に色んな種族の里を回っているようですの」
「色んな種族の里？」
「特に天使族の多い辺りによくいるですの。わたしも何度か御挨拶をさせていただきましたの！」
セツと会ったのがそんなに嬉しかったのかぴょんぴょんと飛び跳ねまくって喜びを表している。
「よし！　じゃあ早速その天使族の里に……」
「……その必要はない」
十代たちが天使族の里に案内してもらおうとした時、聞き慣れた、けれど久しぶりに聞く声がその場に響いた。
「セ、セツ？」
「……久しぶりだな。十代」

そこにいたのは、一体何があったのか服を見るも無残なまでにボロボロに炭化させ、体中やけど塗れなセツの姿。
「セ……ツゥ～！　この馬鹿野郎ー！」
「がっ！」
十代はセツの顔に思い切り拳を入れる。始めからよろよろだったセツはあっさり吹っ飛ばされ、壁に背中を打ち付ける。
「……っつ～。効いたぁ……。いきなりずいぶんなご挨拶だな」
「お前な……！　お前がいなくなってどれだけアテナが……」
「……ああ」
「それに、今アテナは……！」
十代は今、アテナがさだめに倒されて魂を捕えられていることを説明する。
「……さだめの奴。早まりやがって」
セツはその事実に苦々しげな表情を浮かべたものの、随分と落ち着いたものだった。その様子に十代は思わず掴みかかる。
「なんでそんなに落ち着いているんだよ！？　アテナがやられたんだぞ！　アテナだけじゃない。他の皆だって！」
「……予想はついてたからな」
「なんだって！？　じゃあなんで戻ってこなかったんだよ！」
「……今のままじゃさだめを止められない。アテナたちを助けることができない。だから俺はここにいる」
「どういうことだよ？」
「さだめを事前に止めるだけなら、あいつが闇に落ちる前に俺があいつの所に行けばさだめが暴走することもなかったさ。でも、それじゃダメなんだ」
それはつまり、セツが一生さだめの奴隷になるに等しい。だがセツも、それで全てが解決するなら迷いなく自分からさだめのところに向かっただろう。
「……俺はアテナたちを救うと同時に、さだめのことも救ってやらなくちゃいけない。そのためには、まだ俺には力が足りてなかった」

セツは思い出す。あのネイキッドとのデュエルの後、そのネイキッドに言われた言葉を。

「セツ。お前にあのデッキは合わない。お前はデッキを変えろ」

……。

「……え？」

長い沈黙の後、俺はそう漏らすのが精いっぱいだった。と同時に。

『ガシャンッ！』

何かが落ちて割れる音。驚いてそちらを見れば、そこにはお見舞い用なのか切り花の差してあったはずの壊れた花瓶と立ち尽くすクィーンの姿。

「く、クィーン……」

「……っ！」

俺が言葉をかけようとすると、クィーンはハッとして走り去ってしまう。

「クィーン！」

「お待ちください主様！」

「ジャック！？　どうして……」

どうして止める？　と聞き出そうとする前に、ジャックから口を開いた。

「まずはネイの話をお聞きください。クィーンについては、今は私が」

「……わかった」

ジャックの表情に本気の色を見て、俺はしぶしぶベッドに戻った。

「……ではネイ。主様を」

「おう。サンキュな」

ネイの感謝に一つ頷き、ジャックはクィーンを追って走っていく。

「……さて。予定外のアクシデントがあったが、話を続けようぜ」

「ああ……」
正直クィーンを追いたい気持ちもあるが、ネイキッドも逃がすつもりはなさそうだ。
「お前とさっきデュエルしてみて、我が抱いた感想なのだがな。お前さん、デッキの構築能力とか運用、タクティクスの面ではすごく優秀だ。なんだが……どうも攻撃が下手くそだな。戦闘に入るときに迷いが見える」
実際、最初のターンの攻撃は迂闊だった。確かに返しのターンで『ライトニング・ボルテックス』を使われればどっちにしろ全滅だったわけだが、それでも迂闊な攻撃だったことに変わりはない。
「んで、デッキのコンセプトも妙に戦術色が強い上保守的。あいつら使うんなら『メタモル・ポッド』とかもいいが、戦士族で統一して『一族の結束』とかを入れた方が攻撃力も高い。『オネスト』だのも優秀だが、やっぱり後手後手に回るカードだ」
確かに、それも言えている。種族統一は何かとおいしい面が多い。『一族の結束』然り『不死武士』然りだ。
「というか、自分から攻めるのに向いてないんだな。お前は」
「……」
それは自分でも思っていたことだ。
「デッキもお前さんを信頼して、お前さんもデッキを信頼してるから、ある程度回りはいいしここぞという時いいカードも引ける。……だが、それでもセツは根本的にビートダウンに向いてない。それじゃあ、相手の回りが悪かったり相手が愚図なことしない限り勝てねえ」
セツは今までのデュエルを思い返す。試験官戦は、自分の初期手札が神懸かり的なほどに揃っていたので論外。
アテナ戦。思えばアテナは除去カードが思うように引けず、最後まで攻撃するしかなかった。
試験でのブルー生徒戦。デュエル前に相手の平常心を乱し、プレイングミスを誘導した。

タイタン戦が一番まともだっただろうか。それでも、あの時『堕落』を使われれば負けていた。

さだめ&ルイン戦。これは明らかだ。自分は何もできなかった。アテナに全てを任せ、自分は事前のデッキ構築で助言しただけ。

「そして、我に負けた」

「……」

「わかるな？　セツにはビートダウンは向いてない。これはもう明らかだ」

「……けど、俺の相棒は……」

「わかってる。だが、やつらも騎士の端くれ。自分たちに固執された揚句主が負けたんじゃ、奴らだって気に病むさ」

「それはそうだが……」

「……まあ、我の話はこれだけだ。後は、自分で話してくるんだな。お前の『相棒』たちとよ」

「ああ。わかった。ありがとう」

「気にすんな。我とて、気に入った人間がやられるのなぞ気分のいいものじゃない」

「それでも、サンキュ」

俺は最後にもう一度お礼を言って、クィーンたちの後を追うのだった。

『申し訳ありません主様。クィーンの方は、もう少しお時間をくだされば……』

「……そっか。わかった。じゃあまた後で来るよ」

『はい』

クィーンの部屋まで行ったはいいが、ジャックに追い返されてしまった。

キングはどこだろう。ちょっとバルコニーにでも出て探してみる

か。

「……いないな」

バルコニーから城の中庭を見降ろすも、その景色の中にキングの姿は見えなかった。

「……」

俺は、どうすればいいんだろう。

確かに、最近デッキに力不足というか、自分とのシナジーを感じていなかったのは事実だ。ビートダウンは楽しいし、アルカナは好きだが、やはり使い辛い。どこか運用するのに違和感が付きまとうのだ。これから先、セブンスターズや光の結社。異世界と敵も強くなっていく中で、今のままでは生き残れない。

「でも……」

それでも俺は、クィーンたち『絵札の三銃士』が好きだった。彼らをずっと相棒として傍に置いておきたい。一緒に戦っていきたい。そんな気持ちが捨てられない。

「……ひどく悩んでおるようじゃな」

「キング……」

思い悩む俺の前に、探していたキングが現れていた。その顔はいつもの好々爺然としたものではなく。紛れもない騎士としての顔。

「……ああ。違和感を感じてたのは最初からだ。でも、それ以上にお前たちと戦うのが楽しくて……考えないようにしてた」

「儂らも、主とともに戦場に立つのには胸が躍った。久しぶりじゃったよ。あんな高揚感は。クィーンなぞ、事あるごとに儂やジャックに惚気ておるわ。いかに主が素晴らしい主かとな」

冗談めかしてほっほっほと笑う。空気が少し和んだ。

「……じゃから、儂らにとって何よりも恐ろしいのは、主と戦場に立てなくなること……」

「……」
「では、ないんじゃ」
「……え？」
あっさりと前言を撤回したキングは優しい、年長者特有の安心する笑みを浮かべていた。
「儂らがな。真に一番恐ろしいのは、主が儂らの所為で敗れること。儂らが強く、凛々しい主のお姿を見れなくなること。それが、一番なのじゃよ」
「キング……」
「主が儂らを好いてくれているように、儂らとて主を心から好いておる。主には、どうか儂らに縛られず、伸び伸びと主らしく戦って、そして勝って欲しいのじゃ」
もちろん、これはクィーンやジャックとて同じことじゃと言って、キングはまた笑った。
「クィーンは特別に主を好いておったから、まだ気持ちの整理がつかないだけじゃ。そろそろ落ち着くころじゃし、行ってやってくれい」
「ああ。ありがとうキング」
そして、ごめん。
「なぁに、お安い御用じゃ」
キングは更に謝る必要はない、とも言ってくれた。……聞こえない様に小声で言ったんだけどな。

コンコン。
少し緊張しつつ、クィーンの部屋の戸をノックする。ガチャリと扉が開いて中からジャックが顔を見せる。
「お待ちしておりました。クィーンもようやく落ち着きましたよ」
「ああ。ホント、お前にはずっと世話をかけるな。ジャック」

「なんの。いままでも、そしてこれからもずっと、私は主様のサポートをさせていただきますよ。どんな形であれ、ね」
「……そっか」
参ったな。先に答えを返されちまった。相変わらずよく気がつく男だ。
「クィーン……」
部屋の中心にあるベッドで、クィーンは鎧を脱ぎ捨て、アンダーウェア姿で膝を抱えていた。
「主様……」
「クィーン、俺は……」
「申し訳ございませんわ。先に、わたくしの話をさせてくださいませ」
「……ああ」
クィーンが何故そこまで俺を慕ってくれるのか。それはずっと気になっていたことだ。
「……わたくしたち『絵札の三銃士』は、今まで特定の主を持っておりませんでした」
そう言えば最初にクィーンたちが出てきたとき、ジャックが言ってたな。ようやく出来た主だと。
「それというのも、わたくしたちは昔から扱い辛いとされて、誰にも手を取って貰えなかったからなのです」
え？　でも確か遊戯が……。
「……確かに、わたくしたちを最初に使ってくださったのはデュエル王、武藤遊戯様です。ですが、それでも所詮は神への布石。捨て駒。生贄のための騎士扱い」
……あー、それは確かに。まともに『絵札の三銃士』として活躍したのは遊戯王Ｒの時くらいか。
「そのわたくしたちを、デッキの中核に据えて、多くのデュエルを戦い抜く主。わたくしは昔から、それを夢にまで見ていたものです」
そして、その主は現れた。

「はい。その上主様はわたくしたちカードの精霊と心を通わすことのできる稀有なお方。精霊を顕現させる能力まで持っているとわかり、狂喜したのを覚えていますわ」
「それで……俺に、か」
しかし、クィーンは首を振って否定する。
「それだけならば、ここまで心が拒絶することもありません。わかっているのでしょう？　わたくしの気持ちも」
「そりゃ、な」
あそこまで明確に態度で表わされれば、どれだけ鈍感でもそうと気付く。
「きっかけはそれ。けれど育っていった心はわたくし自身が育てた紛れもない本物。……今更主様とお別れなんて、できるはずがありません」
「クィーン……」
「もちろん、主様がわたくしたちを捨てるなどとは思っておりません。ただ、それでもわたくしは、何か一つでも、主様と繋がりが……決して断ちきれぬ絆が欲しいのです」
絆、か。
デッキとして使う以外に、明確な絆が欲しい。クィーンの望みはそれだ。
「希冴姫（きさき）……」
「えっ……？」
「お前の名前だ。ずっと考えてた」
月一試験の時。明らかに名前を欲しがっている様子だったから、なにかいい名前はないかと考えてた。やっと、思い付いた。
「希望の剣（つるぎ）、冴えわたる姫。そんなところか。それと、クィーンだから妃ってのもある」
安直かもしれない。でも思い付いたらそれ以外に思い付かなかった。
冴えわたる、希望の剣をその手に構え、俺のそばで見守ってくれ

るお姫様。
「希冴姫……」
「どうだ？　これじゃあ、俺との絆にはならないか？」
「希冴姫……」
クィーン……いや、希冴姫は何度もその名前を呟き、心と体に馴染ませるように体を抱きしめる。
「十分ですわ……ありがとう。ありがとうございます。セツ様……」
希冴姫は始めて見るかもしれない満面の笑顔で俺を見つめる。セツ様、という初めての呼び名に、俺が戸惑っていると、ジャックが一度手を叩いた。
「っ！」
「うあっ！？」
「さて、話は纏まったようですね」
「じゃ、ジャック……脅かすな」
「そ、そうですわ。も、もうちょっと空気を読んでくれてもごにょごにょ……」
「いえ、このままですと私とキングの存在を忘れたままベッドシーンにでも突入する勢いでしたので。流石にここらで止めるべきかと」
「べ、べ、ベッド……っ！？」
ぷしゅー。と蒸気を上げて希冴姫がオーバーヒート。目を回してベッドに倒れ込んだ。
……ちょっと面白かったのは内緒だ。
「やーれやれ。せっかく想いの一端が叶ったと言うに、相も変わらず純情じゃのう」
いつの間にかやってきていたらしいキングも嘆息気味だ。
「それでは主様。これからも我々一同、これまでとは違った形でサポートさせていただきます」
「……ああ。そうだ、お前らも名前、考えないとな」
「はは、我らの事は後回しで構いませんよ。それよりも、新しいデッキのことですが」

「ああ。大体どんなデッキがいいかは決まっているんだ」
「そうでしたか。それでは、これからその使う精霊と契約しては？」
「……そうだな。ホントは今すぐにでも人間界に戻ってアテナにも謝りたいけど……」
「はい。まずは御自身の方を固めるのがよろしいかと。どうやら今度の相手は一筋縄ではいかないでしょうから」
……今度の相手。俺の予想では、十中八九それはさだめだ。あいつとは、色んな意味で決着をつけなくちゃならない。そしてあいつは、一筋どころか二筋も三筋もいかない。万全の態勢を整えていく必要がある。
「よし、希冴姫の準備が整い次第、出発しよう。あんまり時間をかければ手遅れになる」
精霊のカードが持つ力は未知数。だが、その力は必ず俺を助けてくれる。せめて切り札級のあいつは精霊のカードとして着いてきて欲しい。
「待ってろさだめ。必ず、お前も救って見せるから」

回想を止め、現実に帰還する。
「十代。俺もお前と一緒に人間界へ戻る。アテナたちと……さだめを助けるために」
「……ああ。まだお前に言いたいこととかぶっ飛ばしたい気持ちとかあるけど、その辺はアテナのために取っておく」
「そりゃ怖い。アテナにはたかれるのなんて、想像したくないな」
「自業自得だろ」
「違いない」
互いに笑みを交わし、俺たちは人間界へと帰還する。
さだめと決着をつけ、皆を……アテナを助けるために。

第十七話「三銃士」（後書き）

クィーン、もとい希冴姫フラグ完成です。……うん。アテナほっぽって何他のフラグ強化してんだテメーって感じですね。

しかも盤石。希冴姫フラグがこれ以降折れる気配がないくらい濃厚に立ちやがりました。まあこれ以降は希冴姫イベント特にないんですけど。

で、キングがようやくまともに目立った……はずだけど、やっぱり希冴姫フラグの強烈さに押され、微妙に目立ってない気も……。

ジャックはもう執事でいいと思います。配役としてはキング＝旦那さま・希冴姫＝お嬢様・ジャック＝希冴姫の執事で。……うん、十分これでなんかイケる気がしてきた。

それでは、レーネスでした！

第十八話「埋めてくれたよ……」（前書き）

さだめ編クライマックスの第十八話！……なのに長さはいつもよりも短いという。

セツの新デッキ。意外なほど誰にも当てられなかったです。割とわかるかとも思ってましたが……まあとりあえず、セツの強さを見よ。みたいな感じで第十八話、どうぞ！

第十八話「埋めてくれたよ……」

アルカナ～切り札の騎士～

第十八話「埋めてくれたよ……」

俺は十代たちと精霊界を出て、来るのはもう数ヶ月ぶりにもなる人間界へと戻ってきた。

「どうするんだセツ。アテナたちを救うって言ってもまずは妹さんを見つけなきゃ話になんないぜ？」

「それは問題ないだろう。俺が探しに行かなくても、向こうからこっちに来るはずだからな」

さだめが俺を放っておくはずがない。きっと今にも……。

「見ぃ～つけた♪」

「っ！」

「……やっぱりな」

「そっか～精霊界かぁ。忘れてたよそんなとこ。兄さんもいい隠れ家を見つけたみたいだね」

「隠れてたつもりはないんだけどな」

「くふふっ！　なんでもいいよ。それで兄さん。私ね、がんばったんだよ。兄さんに近づこうとしてる蛆虫たち。みんなみんなみんなみんなみんなみんなみんなみんなみんなみんなみんな頑張って消したよ。頑張って頑張って……もう兄さんと私の間を阻むもの、ないもの。だから兄さん……」

「悪いが、俺はお前のものになるつもりはないぞ」

先手を打ってやる。さだめはピクリとコメカミをヒクつかせた。
「……どうして？」
「わからないか？」
「わかんないよ！」
そうか。なら言ってやろう。
「お前が、アテナたちを倒したからだ」
「っ！？」
もしここでさだめのものになる選択をしても、アテナたちは戻ってこない。さだめとデュエルして、勝たなければアテナたちの魂は解放されない。さだめの闇を、祓わなければ。
「わかるかさだめ！　お前のやったことは、俺を頑なにさせ、自らの首を絞めたと同じだ！　もう、選択肢は一つしかない」
即ち。
「お前が負けて、皆を解放するか。俺が負けて……お前のものになるか、だ」
「なら……倒してあげるよ！　完膚なきまでに！」
そうだ。それでいい。
「じゃあやろうか。さだめ。俺の方こそ……完膚なきまでに叩きのめして改心させてやる！」
「セツ！」
「止めてくれるなよ十代！　お前にも思うところがあるかも知れんが、ここだけは何が何でも譲れない！」
「……あったりまえだろ！　絶対に、負けんじゃねーぞ！」
「それこそ、言われるまでもない！」
さあ、始めるか。
「「デュエル！！」」
俺とさだめの、最後の決闘！
「さだめ！　俺はもう、お前に何物も奪わせはしない！　俺のターン！　ドロー！　俺は『豊穣のアルテミス』を守備表示で召喚！　カードを二枚セット。ターンエンド！」

俺は助けるんだ。アテナたちだけじゃない。こいつを……俺の大事な妹を！

「私のターンだよ兄さん。ドロー！　さだめは『終末の騎士』を攻撃表示で……」

「カウンタートラップ『キックバック』！『終末の騎士』の召喚を無効にして手札に戻す！」

「っ！？　パーミッション……くすすっ！　なんだ、お兄ちゃんらしいデッキだね。なぁに？　あの貧弱なお姫様は遂にリストラ？」

「……俺は『豊穣のアルテミス』の効果でカードを一枚ドローする」

「アハハッ！　まあなんでもいいや。そっちの方が兄さんらしくて私好き。私は手札から『闇の誘惑』を発動！　デッキからカードを二枚ドローして手札の闇属性モンスターを一体ゲームから除外。除外するのは『ネクロフェイス』！」

「永続トラップ『便乗』発動！」

「……まあいいよ。『ネクロフェイス』の効果発動！」

不気味な顔の人形らしきものが何処かへと消える。

「『ネクロフェイス』が除外されたとき、お互いにデッキの上から五枚を除外するよ！」

互いのカードが除外される。だが、その中にあるカードを見つけた。

「私はカードを三枚セット。ターンエンド！」

「……俺のターン。ドロー！」

手札は五枚。頭の中で戦力を練る。現在の手札で出来ること。勝つためのタクティクス。

「俺は『救済のレイヤード』を守備表示で召喚！　カードをさらに三枚セット！　ターンエンド」

「あんなに伏せるのかよ……」

「私のターン！　ドロー！」

「永続トラップ発動『人造天使（シンセティエンジェル）』！」

俺は布石として、永続罠を発動させておく。これで、態勢は整っ

た。
「アハハッ！　私は手札から『ハーピィの羽箒』発動！」
「なっ！？　禁止カードじゃねーか！」
「ズルイッス！」
後ろで十代たちが驚いているが、俺はさだめならそれくらいやると端っからわかってたさ！
「もう何も奪わせない！　俺のカードも、ライフの1ポイントだって奪わせるか！　カウンター罠『魔宮の賄賂』！　相手にカードを一枚引かせる代わりに魔法・罠カードの効果を無効にして破壊する！」
「っく……わ、私は『魔宮の賄賂』で一枚ドロー……」
「『便乗』！　カードを二枚ドロー！　カウンター罠『強烈なはたき落とし』！　相手がカードをデッキから手札に加えた時、そのカードをそのまま墓地に捨てる！」
「そんなっ……！」
「二枚のカウンタートラップが発動したことにより、『豊穣のアルテミス』の効果でカードを二枚ドロー！『救済のレイヤード』の効果で除外されていた『裁きを下す者―ボルテニス』『智天使ハーヴェスト』の二枚を手札に戻す！『人造天使』の効果で『人造天使トークン』を二体特殊召喚！」
「す、すげえ……相手には何させずに自分だけ……」
「さらに、カウンター罠が発動されたことにより、俺は手札から『裁きを下す者―ボルテニス』を、自分フィールドの全てのモンスターをリリースして特殊召喚！」
俺のフィールドのモンスターたちが、一斉にはじけ飛ぶ。
「ボルテニスの効果発動！　リリースした天使族モンスターの数だけ相手フィールドのカードを破壊する！　裁きよ！」
俺のリリースした天使族はトークン含めて四体。さだめのフィールドには三枚のリバースカード。それら全てをボルテニスの雷が焼き払う。

「うあああああ！？」
「こ、これ、妹さんのターン……だよな？」
「すごい……まるでセツ君のターンみたいにカードを展開してる」
さだめ……。思い出してきたよ。これが俺だ。
「っく！？　そんな……ま、またそんなあり得ない引き……」
「あり得なくない。俺とこのデッキなら、絶対に出来ると確信していた」
なぜならこれが、俺と最もシナジーするデッキ。そう、これこそが自分から攻めるのが不得手で、迎撃することが得意な俺に合ったデッキ。言うなれば……。
「ずっと俺のターンだ！」
考えに考え抜いた。俺にシナジーするデッキ。『現実』の俺に合っていて、『この世界』の俺が持っていたビートを楽しむその気持ち。全てをひっくるめた『俺』そのもの！
「これが、俺の新デッキ」
「エンジェルパーミッション！？　このっ……私はモンスターをセットしてターンエンド！」
「俺のターン。ドロー！」
さだめ……今のお前は、悪い夢を見ているんだ。
「俺は『智天使ハーヴェスト』を攻撃表示で召喚！」
お前の歪み。お前の狂気。お前の『運命（さだめ）』
「バトルだ！　ハーヴェストで守備モンスターを攻撃！」
俺が断ち『切』る！
「ぐぅ！　『クリッター』の効果で『黒き森のウィッチ』を手札に加える……」
「ボルテニスでダイレクトアタック！」
元の世界は、辛かったよなぁ……さだめ。
「あぁぁ！？」
さだめＬＰ１２００
「カードを三枚セット！　ターンエンド！」

どこに行っても、お前は悪魔呼ばわりで……。
「ぐ……ぅぁ……わ、たしのターン」
ずっと、狂気の裏で泣いてるお前を……見ているのが辛かった。
「認めない……お兄ちゃんは、絶対絶対、ずっとさだめと一緒にいるの……誰にも邪魔されない……二人だけの世界で、生きていくんだッ！！」
皆お前を恐れて、壊れてしまう中で……。
「もう……もういい……もう、眠れ」
俺は……俺だけは、壊れなかったから……お前は俺に縋るしかなかったんだ。
「いやだやだやだぁ！　全部、全部消えちゃえ！『幻魔の扉』！」
苦しみも痛みも、全部俺が一緒に背負うから。
「！　あれはカミューラが使った……」
お前を、絶対に一人にはしないから……。
「私と兄さん、二人の魂を！」
だから……。
「させない！　させるか！」
今は……。
「カウンター罠『封魔の呪印』！　手札から『光の護封剣』を捨てて無効化！　貴様には、もう何も奪わせない！　さだめをもう、苦しめるな！　幻魔ぁ！」
今だけは……。
「眠ってくれ……！　魔法カードを無効化したことによって、手札から効果を発動する！」

さだめ……俺の妹

「こいつは、お前のカードの効果をカウンターしたときに発動する！」

目が、覚めたら……

「魔法カードの効果を無効にした場合、召喚と同時に相手ライフに１５００ポイントのダメージを与える……」

きっと……

「いや……いやぁ……」

世界は優しいから……

「さだめ……さだめの狂気……冥王の咆哮にて消え去れ！」

やってしまったこと、償おう……

「さあ……姿を見せろ……」

俺も……一緒だから

「冥王竜……」

一緒に償うから……だから！

「ヴァンダルギオン！！！」

お前は、ここで眠るんだ。

「うあああああああああああああ！？」

新しい朝を、迎えるために

「俺の、勝ちだ。さだめ！」

さだめＬＰ０

「……ぁ」

闇が消し飛び、後に残ったのは、一人の、なんの力もない、女の子。

「ぅあ……え、えぇぇぇぇぇん……えぐっ、うぁぁぁぁぁぁん……」

「さだめ……」

「ぉ、兄ちゃん……うあ……」

「だいじょうぶ。だいじょうぶだよ……」

ゆっくり、包み込むように抱きしめる。

「お兄、ちゃん……」

「なんだ？」

俺の腕の中にいるさだめが、消え入りそうに小さな声を出す。

「さだめはね。生まれた時から、なかったの……」

「なにが？」

「……心の、一欠片」

まるで、イヴを創るため、肋の一つを掠め取られたアダムのように。

「順番は逆だけど……お兄ちゃんが、さだめにとってのイヴなんだって……思ってた」

欠けたココロ。それを埋めてくれるヒト。

「ホラ……」

――埋めてくれたよ……。

そう言って、さだめは気を失った。

「セツ！　それ……」

「！」

さだめの影で、黒い靄のようなものがくすぶっている。

「こいつか……！　さだめの闇の根源は……！　ルイン！」

「っ！」
ルインが杖を振る。『ソレ』はさだめの影から追い出され、苦しげにうめいた。
「『終焉の精霊（ジ・エンド・スピリッツ）』か！？」
「コイツ……コイツが！」
ルインの目が憎悪に染まる。
旅の途中、ルインから聞いた。ルインの街を滅ぼした元凶。デミスにとり憑き、終焉の王へと仕立て上げた邪悪な精霊！
「消えてっ！」
『ギィィィィィッ！？』
ルインの放った光弾が、闇の塊のような精霊を貫く。俺も、さすがにあいつは許せそうにない。
「ヴァンダルギオン！　あいつを……焼き尽くせ！」
『ゴオオオオオオオオオオッ！！』
俺が必死の思いで契約した精霊、ヴァンダルギオンはルインによって粉々になったその欠片を一欠片も残さず蒸発させる。
「これで……」
「全部、終わり」
ペタンとルインが地べたに座り込む。積年の恨みを果たし、気が抜けたのだろう。
「それにしても、あれは一体いつから……」
さだめの中にいたのか。あのタッグデュエルの後からだろうか？
「……それは違う」
だが、俺の考えはルインによって否定された。
「そもそも私がこの子に近づいたのも、この子から仇の気配を感じたから」
だとしたら……こちらの世界にやってきてすぐ？　いや、でもタッグデュエルの時、さだめからはいつもと同じ感覚しか受けなかった。じゃあ……？
「多分、最初の最初から」

「……おい、待て。じゃあまさか……」
思い出せ。さだめが最初におかしくなったのは何時だ？　どこからさだめは『外れ』た？
「さだめが……二歳の頃？　いやでもその頃俺とさだめは……」
こちらの世界にはいなかったはず。
「わからない。でもよく考えて。キミがさっきまでいた精霊界も……」
異世界。
俺は愕然とした。そうだ。俺は渡ったじゃないか精霊界という異世界に。それに、未だに俺とさだめがこちらに来た原因はわかっていない。だが、こちらに飛ばされてくることがあるならその逆もあって不思議ではない。
「じゃあ……まさか本当に全部……」
あの精霊が原因だったのか。
「その可能性は高い」
「じゃあ……じゃあこれでさだめは……」
「治る。少しの歪みは残るかもしれないけど、矯正できる範囲」
「は、はは……」
良かった。
「ほんとうに……さだめ！」
溢れてくる涙が止められそうにない。俺は腕の中で眠るさだめを更に強く抱きしめる。
「……！　セツ、皆の魂が……！」
十代が持つカードから、人魂のようなものが飛んでいく。これで、さだめに負けた皆も目を覚ますはずだ。……それに、アテナも。
「……お兄ちゃん」
「さだめ？　すまん、強すぎたか」
強く抱きしめすぎたかもしれない。苦しかったかと問いかけると、そうじゃないと首を振って答えた。
「アテナさんのところ……行くの？」

「……ああ」
「じゃあ、さだめも行く」
「え？　けど……」
さだめはゆっくりと立ち上がり、俺を見上げた。
「さだめは、謝らなくちゃ。許される許されないは関係なく、元凶がいたとかも関係なく……やってしまったことへの責任、果たすよ」
「さだめ……」
「それに、さだめはあの精霊によってずっと歪んでいたけど……元々は、皆さだめの願望だったから……お兄ちゃんが好きなのも……やっぱりさだめの本当の気持ち」
「それに、決着をつけるのか？」
俺が尋ねると、さだめはふるふると首を横に振った。
「決着（ゴール）するんじゃないよ。スタートラインに立つために、さだめは行くの。でもまずは……責任を果たすの」
「……わかった。行こう」
「うん！」
「そういうわけだ。十代、いいか？」
十代はまったく躊躇いもせずに頷く。
「おう！　セツ……」
「なんだ？」
「妹さんが治って、良かったな！」
……ははっ！　本当に、こいつは……。
「ああ！　まったくだ！」

アテナたちは病院の個室でそれぞれ寝かされているという十代の後に続いて病院まで走る。
「！　セツ、あれ！」
「どうした！？」

十代が指差す先に、窓が割れ、カーテンが風に靡いている病室が見えた。
「あそこの部屋……たしかアテナの部屋だ！」
「なんだと！？」
慌てて病院に駆け込み、その部屋に向かう。中は……もぬけの殻だった。
「アテナ……？」
「置いてあったデュエルディスクもなくなってる……」
「どこに行ったんだ……アテナ」
俺の呆然とした呟きが、風に流れて消えていった。

第十八話「埋めてくれたよ……」（後書き）

さだめ編、完！……いやいやまだアテナが残っております。つーかここで終わらせたらアテナじゃなくてさだめエンドです。あれだけ好き放題やってきたさだめがあれだけ健気にがんばってきたアテナ差し置いてゴールインしちゃったら流石に……ねぇ？

いくつか割と唐突な設定があったので補足とお詫び。

まず『終焉の精霊』とルインの因縁ですが、いずれ番外で書くかと。ネイキッドが言っていたデミスがいきなり街を滅ぼした、その原因です。一応、ものすごくわかりにくい伏線。

ヴァンダルギオンとの精霊契約。これもまあ番外で書くことに。使うカードの精霊と契約、というのは主にこいつとの契約でした。使うデッキは所謂ヴァンダルエンジェ。天使族が中心という点でちょっとアテナと被るのですが、割とわざと。あと、後々出てくるさだめのメインデッキとも関わりあり。

迎え撃つ。即ちカウンターです。以前からパーミッションデッキがみたいという声もありましたし、ちょうどよかったです。そしてやってしまいました。「ずっと俺のターン！」事実、禁止カードもまともに使えずさだめは敗れました。折角さだめ編のクライマックスデュエルだったのに、割とあっさり終わってしまったのは反省。もっと長引かせればよかった気もしますが、禁止オンパレードなさだめに長期戦は厳しい。

さだめはこれで大分まともになるでしょう。……多少ヤンデレは残りますが、今までに比べれば微々たるもんです。どっちかと言うとこれからは最初に出てきた変態エロ路線（ハイモード）に進路変更してくることでしょう。

で、失踪したアテナ。ここで目を覚ましていたアテナと和解して終わり、だと流石にあっさりしすぎです。世界も僕もそんなに優しくありません。次回がおそらく第一期の最終デュエル。対戦カード

はご想像ください。まあ、大方予想どおりでしょうが。

それでは、レーネスでした！

第十九話「絶対助ける！」（前書き）

第十九話です。い、今までで一番難産でした……が、なんとか一定のクオリティは出せた、かな……？

ここまで苦戦するとは思いませんでしたが、今回のデュエルはある意味一番デュエルらしいデュエルかも。かなり力入れましたが、どうでしょうかね。

まあ前置きは置いといて、第十九話、どうぞ！

第十九話「絶対助ける！」

アルカナ～切り札の騎士～

第十九話「絶対助ける！」

「ごめん……なさい」
アテナが消えて、しばし呆然と立ち尽くしていた俺たちに、俯いていたさだめが突然の謝罪をした。
「どうした？」
「さだめ、アテナさんには特別に酷い事を……」
さだめが言うには、他の魂を閉じ込めただけの人たちと違って、アテナだけは口に出すのもおぞましい精神的凌辱を精神世界で繰り返していたらしい。
「口に出すのもって……」
「う、蛆虫が……」
「オーケーわかった皆まで言うな」
想像するだに恐ろしい。
「だから……その……」
もしかしたら、壊れてしまっているかもしれない。
「そんな……」
ここまで来て、アテナを救えなかったら。アテナが、壊れてしまっていたら。
「そんなことになったら……俺は……」
「……ごめん、なさい」

「……大丈夫だ」
「え？」
「十代？」
「妹さんは知ってるだろ？　アテナがどれだけ強いか」
「……うん」
「アテナは強い。簡単に潰れたりしないって」
「……そうだな」
そうだ。アテナは強い。さだめとのタッグデュエルの時、会場の人間が皆気絶するような中でも、アテナは正気を保っていたじゃないか。
「アテナはお前に振られても立ち直ってまた前に進もうとしてたくらいなんだぜ？　きっと大丈夫だ。それより、早く見つけて連れ戻してやろう」
「ああ！」
まずは足取りを掴まないと。希冴姫たちにも協力してもらうか。
「きさ……」
『その必要は……ないわ』
希冴姫を呼び出そうとした時、俺たちの耳に聞き覚えのある声が届いた。
「シャルナ！？」
『……久しぶりね。元気そうで何より』
そういうシャルナは、完全に憔悴して今にも倒れそうな面持ちだった。
「どうした？　アテナは無事なのか？」
そうだ、こいつはずっとアテナと一緒にいたはずだ。それなら居場所も知っているはず。
『……どのあたりを指して無事、と言うのかは知らないけど、あんまり大丈夫じゃなさそうね……』
シャルナは立っているのも辛いと言わんばかりにその場に座り込んだ。

「アテナは……どうなったんだ？」
恐る恐るそう聞くと、シャルナは言い辛そうに目を逸らしたが、俺たちが引くつもりはないとわかったのか口を開いた。
『……端的にいうなら、そうね。ダーク化した、と言うのが適切ね』
「なっ……」
「そんなッ……！」
「お、おい、どういうことだよ！？」
『貴方達が言ってた通り、アテナの精神は強かった。でも、流石に延々と体中を蛆に這い回られ続ければいくら精神が強くても限界があるわ』
「うっ……」
予想はしていたが、やっぱり聞くだけで吐きそうだ。
『それでもアテナの精神は抵抗を続け……結果、防衛本能から周囲の闇を取り込んだのよ』
つまり、闇と同化することによって精神の均衡を保った、と言うことだろうか。
『そんなときに、貴方が呪縛を解いたからでしょうね。アテナの精神は解放され、ダーク化したまま、当てもなく飛び出して行ったの。止めようとは、したんだけどね』
「……そのアテナは、今どこに？」
それが最重要だ。アテナがどうであろうと、俺はアテナを救いだす。なら今一番必要なのはアテナの居場所だ。
『……アカデミアのデュエル場。ボーっとしながらそこに立ったまま動いてないわ』
「デュエル場……」
俺とアテナが最初に出会った場所。思い返せば、シャルナと出会ったのもさだめと会ったのもあのデュエル場だった。
「よし、じゃあ決まりだ。アテナの所に行くぞ！」
「ああ！」
「……うん！」

十代は元より、さだめも覚悟と決意を秘めた目で頷いた。
「シャルナ、お前は休んでろ」
『嫌よ。アテナはあたしのマスターよ？』
「でも、もうどう見てもお前は限界だ。少なくとも、ちょっと休んでからの方がいい」
『……そうね。じゃあ、任せるわ』
「ああ！　任せろ！」
『マスターを、よろしく……』
静かに帰還していくシャルナを見届けてから、俺たちはデュエル場へと向かった。

「アテナ！」
夜の帳。闇の中に沈むデュエル場で、アテナは静かにたたずんでいた。
「アテナ……？」
「……」
声をかけても、アテナは特に反応も見せず、ただデュエルフィールドを見つめるばかりであった。
「……セツ……」
「！　なんだ、アテナ？」
ボソリ、と小さく俺の名前を呟いた。すぐに返事をするも、アテナはまたしばらく無言で、俺の方を見てもいない。
「ここで……」
どれだけ黙っていただろうか。ようやくアテナが口を開いた。
「セツに、会って……」
「……ああ」
「ここで……セツに、振られました」
「……ああ」

否定はしない。出来るはずもない。俺は確かに、ここでアテナを振ったんだ。

「なぜ？　私はずっと、セツだけを見ていました。セツも、私を見てくれていました」

「ああ、そうだ。俺は……」

俺は誤魔化さない。もう、そんなのはやめだ。

「俺は、お前に惹かれていたよ」

後ろで静かに、さだめが息を呑む。

「でも、セツは……私を捨てたんです」

「っ！」

「あんなに一緒にいたのに。あんなに一途に、献身的に、健気に一緒にいたのに。私は、振られました」

「アテナさんそれはっ！」

「絶望……目の前が真っ白になって、苦しくて、切なくて……」

さだめがなにかを言おうとしたが、アテナはまるで無視して言葉を紡ぐ。

「夜になる度。ベッドに入る度、私の中の誰かが呟くんです。『怨んでいるんでしょう？』って……」

「それはっ！　さだめがっ！」

「さだめ？」

「全部っ！　全部さだめがやったことでっ！　お兄ちゃんは……」

「よせ。何があったのか、俺は知らんが……結局、俺があんな形で振ったのが悪い」

「否定しようとしても……その声はいつでも囁いてきて……。その度に、暗い暗い地の底に沈んでいくようで……」

「アテナ……」

アテナはゆっくりと、しかし一歩ずつ確実に俺の方へと近づいてくる。

「なんで……ですか？　なんでセツは、私を振ったんですか？　私、セツにとって迷惑でしたか？」

「そんなわけないっ！　俺はっ……俺だって……んむっ！？」
トンっと床を蹴って伸びあがったアテナの唇が、俺のそれに合わせられていた。軽い、それでいて確かな熱を帯びたその感触に、俺は一瞬意識がスパークしたような感覚を味わった。
「っは、あ、アテナ……」
「じゃあ……」
唇を離したアテナが次に目を向けたのは、突然の口づけに驚き固まっていた俺の後ろ。
「答えは一つ、ですよね」
「っ！」
さだめだった。
「貴女が……私からセツを奪ったんです。貴女さえいなければ……セツは私を……」
ここに来て、ようやく俺にも理解できた。
このアテナは……さだめだ。さだめによって追いつめられたアテナの精神が、さだめの闇を取り込んで、アテナと混ざりあった……。
「私は……貴女を……」
「アテナ待て！　今のお前は……」
「『兄さん』は黙っててください！」
「！？」
今、確かにアテナが俺のことを兄さんって……人格がかなり本格的に混ざり合っている。記憶も、想いも、何もかもが今のアテナは不安定だ。
「セツ様。デュエルディスクを！」
「希冴姫？」
いつの間にか現れていた希冴姫が、俺にデュエルディスクを渡してきた。
「今の彼女が妹君の闇を内包しているのでしたら、妹君の時と同じく、祓ってしまえば良いのですわ……闇の、ゲームで」
っ！　そうか！

「よし、なら早速……「待ってお兄ちゃん！」さだめ？」
「さだめがやるよ。そのデュエル」
「お前が……って、お前はさっき！」
さだめはさっきの闇のデュエルでのダメージが抜けてない。なにより、本来これは俺の問題で……。
「二人の邪魔をしたのは、さだめ。アテナさんにとり憑いている闇も、さだめ。こうなったのはさだめの責任。言ったよね？　責任を果たすんだって」
「さだめ……」
「だから、これはさだめの役目。お兄ちゃんには、譲ってあ～げないっ♪」
こんなときだと言うのに、さだめの顔は明るい。いたずらっぽい笑みすら浮かべてデュエルディスクを構える。
「あ、大丈夫。禁止カードや制限無視はしてない。正真正銘、ガチのメインデッキだよ」
「いや、俺が心配してるのはそういうことじゃなくって……」
「さあ、やろっか。アテナさん」
「聞けって！」
「もー、どうしたのお兄ちゃん」
「どうしたもこうしたも、ここは俺が……」
「往生際が悪いよ。もうさだめもアテナさんもやる気満々。今更止める気ないよ」
「でも！」
闇のゲームの疲労が残っているのに、無理させるわけには……。
「……痛みから」
「え？」
「痛みからも、苦しみからも、もう目を背けちゃいけないんだ。もう目を閉じて、耳をふさいで聞かないふり見ないふりは、できないよ。さだめは、もう逃げない。だからお願い。ここはさだめにやらせて。心配は、いらないから」

「さだめ……」
俺はもうそれ以上何も言えず、デュエルフィールドに上がっていく二人を間抜け面で見上げるだけだ。
「セツ……」
「十代、俺は……」
「信じてやれ。オレには、それしか言えない」
「……ああ。そうだな」
俺は祈るような気持ちで、二人の大切な少女たちを見つめる。どうか、誰にとっても良い結末で終わりますように……。

「……これで、三回目かな。さだめとアテナさんがデュエルするのは」
「……」
アテナは何も答えない。ただ無言で、デュエルディスクを構えるのみだ。
「なんだかなぁ……そのどれも、どちらかが正気じゃない、悲しいデュエルだね……全部、さだめの所為だけど、さ」
悲しいし、申し訳ない気持ちがあふれそう。だが同時に、別の感情もまた、ふつふつと湧きあがってくる。
「……まあ、どんな理由があっても、お兄ちゃんとドサクサ紛れにキスするとかさだめにとっては許されることじゃないんだけど……」
ちょっと前の黒い自分がまた戻ってきている気もする。が、前とはちょっと違う。
「これは……純粋な嫉妬かな？」
自分の思考にちょっと苦笑い。
「まあいっか。後でさだめもお兄ちゃんにしてもらおーっと」
下でその兄が悪寒に身を震わせていることを、さだめは知らない。
「……何言っても無反応、か。しょうがない。じゃあ始めよう」

「……デュエル」
「うん。デュエル！」
デッキからカードを引く。手札をざっと見て、さだめはすぐに宣言する。
「さだめの先攻！　ドロー！」
自分のデッキは多少準備が必要だ。まずはそのための布石を整える。
「『終末の騎士』を守備表示で召喚！　効果でデッキから『ダーク・ネフティス』を墓地に送るね。カードを一枚セットしてターンエンド！」
「……私のターン、ドロー。手札から魔法カード『天使の施し』を発動、デッキからカードを三枚ドローして二枚捨てます」
「手札交換……」
さだめとしては、以前それで痛い目を見ているので苦い表情。
「私は手札から『堕天使エデ・アーラエ』と『堕天使スペルビア』を墓地に送ります」
「堕天使……」
やっぱり。とさだめは表情を曇らせた。
「私は『ダーク・ヴァルキリア』を召喚。手札から装備カード『戦線復活の代償』の効果を発動。『ダーク・ヴァルキリア』を墓地に送って『堕天使スペルビア』を墓地から特殊召喚！　自身の効果により『堕天使エデ・アーラエ』を墓地から特殊召喚！」
「速い！？」
一ターン目からいきなり攻撃力２９００と２３００の貫通効果持ちの上級モンスターがフィールドに並んだ。しかも、アテナは手札を二枚しか消費していない。
「バトルフェイズ。『堕天使エデ・アーラエ』で『終末の騎士』を攻撃。『堕天の翼』」
「きゃあああっ！？」
「さだめ！」

ＬＰ２９００
攻撃を受けたさだめ以上に悲鳴のような声を上げる兄に、思わず苦笑する。確かにこれで『堕天使スペルビア』のダイレクトアタックを受けてしまえばちょうどさだめは負ける。
「『堕天使スペルビア』で、プレイヤーにダイレクトアタック！」
「トラップ発動！『サンダーブレイク』！　手札からカードを一枚捨てて『堕天使スペルビア』を破壊するよ！」
スペルビアが雷に撃たれて消滅していく。
「さだめは『ダーク・アサシン』をコストとして墓地に送るよ」
「……カードを二枚セットしてターンエンドです」
「さだめのターン。ドロー！　手札から魔法カード『トレード・イン』を発動！　手札から『ダーク・ホルス・ドラゴン』を墓地に送ってカードを二枚ドロー！　カードを一枚セットしてターンエンド！」
手札には、通常召喚できるモンスターがいない。仕方なくそのままターンを終える。
（相変わらず事故るなぁ……）
割と回りやすいデッキを使っているつもりだが、昔からどうしてもドロー運がない。とはいえ、今回はまだ何とかなる。
「私のターン。永続トラップ『血の代償』発動。『ダーク・ヴァルキリア』を召喚し、ライフを５００支払い『ダーク・ヴァルキリア』をリリースし、『堕天使ディザイア』を攻撃表示で召喚」
アテナＬＰ３５００
紅い翼を持った全身甲冑の天使が召喚される。その攻撃力は……３０００。
「『堕天使ディザイア』で、プレイヤーをダイレクトアタック」
「トラップカード！　『リビングデッドの呼び声』！　墓地から『ダーク・ホルス・ドラゴン』を攻撃表示で特殊召喚！」
「！」
『ダーク・ホルス・ドラゴン』の攻撃力は同じく３０００。

「っ……バトル続行！　『堕天使ディザイア』で『ダーク・ホルス・ドラゴン』を攻撃！」
「くっ！？」
『ダーク・ホルス・ドラゴン』と『堕天使ディザイア』の攻撃が激突し、両者が共に吹き飛んだ。
「『堕天使エデ・アーラエ』でダイレクトアタック！」
「あああああああああっ！？」
さだめＬＰ６００
かろうじてライフは残ったが、セツとの闇のゲームによるダメージと併せて、さだめの体力が限界に近い。ともすれば血を吐いて倒れこみそうになるのを必死で耐える。
「アテナさん、は……さだめが、絶対助ける！」
それは誓い。自分の所為で、この純粋で強い少女を闇に堕としてしまったことに対する責任。それを果たすため、さだめは必至でデュエルを続行する。
「さだめのターン！　ドロー！」
戦況は最悪。あと一歩で負け。そんな状況ですら、さだめの引きはいいとは言えない。
（あーあ。大山センパイにでも弟子入りしようかな）
ついそんなことも考えてしまう。修行でドロー運が良くなるなら是非とも弟子にしてほしい。
「さだめは手札から『闇の誘惑』を発動するよ！　カードを二枚ドロー！」
だからさだめはドロー加速カードを多用する。そうでなければあんな鬼引きには対抗できない。
「うん！　手札から除外するのは『ネクロフェイス』！　お互いにデッキの上からカードを五枚除外する！」
相変わらず不気味な顔のモンスターの効果でカードが除外される。
「手札から『天使の施し』発動！　デッキからカードを三枚引いて二枚捨てる！　さだめは『ダーク・クルセイダー』と『ダーク・グ

レファー』を墓地に捨てるよ」
　更にドロー。これでかなり良くなった。だがまだだ。
「手札から『異次元からの埋葬』を発動！　ゲームから除外されているモンスター二体を墓地に戻す！」
　戻すのは『ネクロフェイス』と『ネクロフェイス』で落ちた『ダーク・クリエイター』。
「魔法カード『終わりの始まり』！　墓地の闇属性モンスターの数は八体！　その内五枚をゲームから除外してカードを三枚ドロー！」
　やるだけやった。そう思ってドローしたカードを確認する。その中に、一枚のカードを見つけた。
「っ！」
　そのカードを見たとき、さだめの体は強張った。
　もう一度、さっきから何度も飛び出しそうになっては十代に止められている兄を見る。とても、心配そうだった。
「……さだめの墓地にいる闇属性モンスターはこれで三体。よって手札から『ダーク・アームド・ドラゴン』を特殊召喚！」
　フィールドに、漆黒の龍が召喚される。
「墓地の『ネクロフェイス』をゲームから除外して、『ダーク・アームド・ドラゴン』の効果発動！『堕天使エデ・アーラエ』を破壊！」
「くぅ……！」
「『ネクロフェイス』が再び除外されたことにより、デッキの上からカードを除外！」
　そして、その除外されたカードの中に、もう一枚、不気味な人形の顔が。
「っ！　もう一度『ネクロフェイス』の効果発動！」
　大分デッキがなくなった。そろそろ決めに行かないといけない。
「っ……」
　さだめは迷った。手札のカードを出すかどうか。だが、唇を噛んでそのままバトルフェイズに入る。

「『ダーク・アームド・ドラゴン』でプレイヤーにダイレクトアタック！」
「きゃあああああああああっ！」
アテナＬＰ７００
「さだめはこれでターンエンド」
「っ！　私のターン！　ドロー！」
互いにライフは互角。フィールドを見ればこちらが圧倒的優位だが、まだ油断はできない。
「リバースカード発動！」
「！」
そういえば、あのカードはアテナが最初のターンにセットしたまま使われてなかった。一体何を……。
「まさか……あれ……」
その時、下で見ていたセツは気がついた。アテナとの最初のデュエル。その時も最初に伏せて、あの時は結局使われることのなかったあのカード。
「『奇跡の光臨』！」
「え！？」
「ゲームから除外されている天使族モンスターをフィールドに特殊召喚します。私が選択するのは『堕天使アスモディウス』！」
召喚されたのは、黒い翼を持った正に堕天使。攻撃力……３０００。
「バトル！『堕天使アスモディウス』で『ダーク・アームド・ドラゴン』を攻撃！『ヘル・パレード』！」
「うあっ！」
さだめＬＰ４００
「ターン終了です」
「うくっ……さだめの、ターン……」
くらくらする。ドローするためにデッキに手を伸ばそうとしても目の焦点が合わず、空振りする。

「さだめ！」
「お、兄ちゃん……？」
「もういい！　もういいからやめろ！　もう限界だ！」
それはさだめの体か、それとも我慢できないセツ自身なのか。そんなことを考えてさだめは苦笑する。
「だいじょうぶ。まだ、行けるよ」
「さだめ……！」
「それに、闇のゲームじゃサレンダーしたって結果は同じだよ。だから……最後までやらせて」
「っ……っく！」
その表情から、さだめが決して引かないことが分かったのだろう。悔しそうにしながらセツは沈黙する。
「それに、まだ本当に終わっちゃいないよ。ドロー！」
なんとかドローを成功させる。引いたカードを見て、さだめはこのデュエルの結末を確信した。
「さだめは手札から……『終焉の精霊』を攻撃表示で召喚するよ！」
後ろでセツたちが驚愕に目を見開いている気配を感じる。フィールドには、あの忌々しい影の精霊が姿を現していた。
さっき、『ダーク・アームド・ドラゴン』と一緒に通常召喚すれば勝てていた。だが、このカードを出す、という気にどうしてもなれなかった。だが、もうそんなことを言っている場合ではない。
「『終焉の精霊』は、互いのゲームから除外されている闇属性モンスターの数×３００ポイントの攻撃力と守備力を得る！　除外されているモンスターの数は、あわせて１２体！　攻撃力３６００！」
アテナが瞠目する。『ネクロフェイス』による大量除外。それによって『終焉の精霊』はまさしく終焉を迎えるに相応しい攻撃力を持っていた。
「『堕天使アスモディウス』に攻撃！　『ジ・エンド・バースト』！」
「ぐぅあああああっ！？」

アテナＬＰ１００
終焉の炎に焼かれ、苦しそうなアテナを見て、さだめも表情をゆがませる。
「……っ！　わ、私は『堕天使アスモディウス』の効果でアスモトークンとディウストークンの二体を特殊召喚します」
「……カードを一枚セットして、ターンエンド」
もう、お互いに限界だった。ライフも、自身の体力も。
「アテナさん……」
「……？」
「さだめは……謝ろうと思ってお兄ちゃんについてここまできました」
でも、と言ってまたいたずらっぽく笑う。
「やっぱり、謝ってあげません。アテナさんが正気に戻ってから、改めて謝ることにします。ですから……」
――死なないでくださいね。お互いに。
「っ！　私のターン！　ドロー！」
さだめの顔から壮絶な覚悟を読みとったアテナは慌ててドローする。
「……私の、勝ちです！」
「っ！？」
「私の墓地にいる闇属性モンスターは『ダーク・ヴァルキリア』、『堕天使スペルビア』。『堕天使ディザイア』、『堕天使エデ・アーラエ』、『堕天使アスモディウス』の五種類。よって手札から、『堕天使ゼラート』をアスモトークンをリリースしてアドバンス召喚！」
「ゼラート……！」
堕天使究極のリセットモンスター。それがこのデュエル終盤で現れた。
「相変わらず……タクティクスを馬鹿にしたような引き……」
さだめは苦々しげな表情でそうつぶやく。

「手札から『堕天使エデ・アーラエ』を墓地に送り、相手フィールド上モンスターを全て破壊します！」

『終焉の精霊』が消えていく。自分のモンスターながら、思わずホッとしてしまう。

「これで……終わりです！『堕天使ゼラート』で、プレイヤーにダイレクトアタック！」

ゼラートの剣がさだめに迫る。

「うん……これで、終わりだね」

さだめはどこかさびしげな笑みを浮かべて兄を見る。今にも泣きそうになっている顔が情けなくて……とても、愛しい。

「リバースカード発動！」

「っ！」

（さだめの罪は、きっと死んでも償えない）

だから、ここでは死ねない。償えない罪を、放り捨ててなんて逝けない。

「『破壊輪』！」

「なっ！？」

リングにいくつもの手榴弾が取り付けられたような形をした首輪が、ゼラートの首にはまる。

「さだめは、勝てない！　勝っちゃいけない！　あれだけ酷いことをして、涼しい顔で勝つなんてできない！」

でも、負ければ兄が悲しむし、アテナも救えない。だから。

「一緒に、吹き飛ぶ！」

首輪が爆発を起こし、アテナも、さだめも、一切合財を吹き飛ばした。アテナの纏っていた闇までも。

「さ……」

吹き飛んだ二人を見て、セツが叫ぶ。

「さだめっ！　アテナァァァァァ！！」

互いのライフが、同時にゼロになった。

第十九話「絶対助ける！」（後書き）

さっそく補足。この話では、禁止・制限について２００５年６月、つまりは大体原作でいうとカミューラ戦が放映された頃のリストを参考にしてます。なので天使の施しは一応制限カード。死者蘇生が禁止カードです。破壊輪も同じく、あれはその当時は制限カードでした。なのでさだめもアテナも禁止カードは使ってません。

……ふう。難産でした。ものすごく書くのに時間がかかりましたよ。何せ僕は堕天使カードをほとんど知らない状態で完全手探り状態で書いてましたから。遊戯王ウィキにはお世話になります本当に。あ、でももしまだ間違ってたりしたら遠慮なく指摘ください。

さだめのデッキは除外を多く組み込んだ『次元ダーク』になりますね。で、さだめは遊戯王に出ている割に基本、引きがあまり良くない。たくさんたくさんドロー補助を使ってなんとかやりくりしております。あれだけネクロフェイス使ったのに対してモンスターが落ちなかった辺りも運がないですね。あれだけやれば普通に終焉の精霊破格の攻撃力になりますよ。普通は。

またしても気になる終わり方で次話に続きます。ふふふ……これがアニメとかの手法さ！　……嘘です長くなりすぎて切っただけです。

これ書くのにものすごく体力使ったのでこの辺で。

それでは、レーネスでした！

第一期最終話「終わりの始まり」（前書き）

遂に第一期最終話です。特に言うべきことはありません。セツたちの物語。そのひとまずの終わりを感じていただければ幸いです。

では、どうぞ。

第一期最終話「終わりの始まり」

アルカナ～切り札の騎士～

第一期最終話「終わりの始まり」

さだめとアテナの盛大なドローから一週間。

あれからさだめとアテナはすぐに病院に担ぎ込まれ、丸一日目を覚まさなかった。

無事、アテナの取り込んでいた闇はあのゲームで取り除かれたようで、目を覚ましたアテナはいつものアテナだった。

……ただ、ダーク化していた時の記憶はあったようで、自分の行いに対して落ち込むと共に真っ赤になって縮こまってしまった。……まあ、それに関しては俺はノーコメントとさせていただく。誰しも自分の恥は語りたくないものだからな。

さだめの方も憔悴しきってはいたものの無事に目を覚まし、とりあえず俺がありがたいお説教をくれてやった。説教されている時のさだめは苦笑気味ではあったが、どこか幸せそうで、俺もついつい説教の手を緩めない様気をつける必要があったが。

……セブンスターズとの戦いは、まだ続いている。だが、あんなことがあってすぐ戦線復帰ができるはずもなく、アテナは守護者から脱落。俺もアテナやさだめについていたいので、結局余った七星門の鍵は大徳寺先生が代理で預かることになった。

「歴史は繰り返す……ってのとは、ちょっと違うか」

結局、あれだけすったもんだあったというのに、物語は原作に沿

う形に修正された。世界の修正力、という言葉はラノベを始めとした創作物ではたまに聞く言葉ではあるが、なるほど実感した。

タイタンをセブンスターズから除き、さだめがその空いた席に座ることになっても、世界は元の姿を取り戻すらしい。

結局俺のやったことは無駄だったのか。そう思ったこともある。だが、例えさだめがセブンスターズにならなくても、結局は同じことが起きたと思う。それに、今はこうしてさだめの狂気も消え、万事上手く行ったのだから、それを無駄、と考えるのはやめた。

そのさだめの処遇についてだが、情状酌量が適用されたのか、軽い謹慎処分と反省文で済んだ。それも入院期間とさして変わらないので、実質お咎めなしみたいなもんだ。

むしろ問題は俺とアテナだな。俺は元より、アテナも俺がいなくなってから授業に殆ど出ていなかったらしく、出席日数がヤバかった。校長が掛け合ってくれたおかげで、なんとか先生方から渡されたありがた〜いレポートの山を全て片づけることで進級することができるようだ。

アテナに関しては完全に疑う余地なく全て俺の所為なのでアテナの分も全部やると言ったのだが、アテナがそれを固辞。曰く「それじゃあ私のためになりません」だとか。どこまでいっても真面目な奴だ。

「といいますか、入院中ってとっても暇なんです。もしセツがレポート取り上げて、それで私と会ってくれる時間が減っちゃったら最悪です」

「いや、俺ならあれくらい物の数ではないぞ？　面会時間が終わって寮に帰ってからやり始めても一週間あれば終わる」

「えっと……そうじゃなくてですね。ほら、レポートがあればこうしてセツに勉強見てもらえるじゃないですか。進級もできるし暇もなくなるし何よりセツがつきっきりで勉強を見てくれます。いい事尽くめですよ。ビバ！　レポートです！」

らしい。まあ、ポジティブシンキングで良いことだ。

ああっとそうだ。忘れちゃいけなかったな。俺とさだめは二人してアテナを始めとする関係者各所に頭を下げて回った。大抵皆カード一箱おごりとか下僕生活一週間（俺）とかで許してくれた。全く皆お人好しにも程がある。

……で、肝心のアテナとの折衝だが、俺にはデート十回。デートの間はアテナに絶対服従をオプションとしてつけることで手打ちとのこと。微妙に恐ろしい気もするが……俺もまあ、嬉しくないわけじゃないし、少しの不安くらい受け入れてやるさ。

そしてさだめ。こちらには二週間俺との接触禁止。要は俺限定の謹慎処分のようなものだ。そんなんでいいのかと拍子抜けした俺だったが、顔を真っ青にしてこの世の全てに絶望したようなさだめを見ると、相当に重い刑罰らしい。

……事実として、この刑が執行されて五分でさだめは血を吐いて倒れ、入院期間が延びた。んなバカなと言いたいだろうが、それが事実なんだから笑えない。アテナもここまでの被害は想定していなかったらしく、慌てて刑を解いた。代わりに自分のことは呼び捨てで呼ぶことをお願いする、という方向で決着がついた。ちなみにその時の会話は下記の通りである。

「さ、さだめさん大丈夫ですか？　ま、まさかここまで甚大な被害があるとは思いもせず……」

「だ、大丈夫だよアテナさん。さ、さだめがしたことを鑑みればこのくらいは妥当なけいば、げはぁっ！」

「わ、わぁぁぁぁっ！？　さだめさん、さだめさん大丈夫……じゃないですよねどう見ても！　わ、わかりました刑罰は別のに差し替えますから気をしっかり持って！」

「う、ううん……それでもやっぱりさだめのしたことは……」

「これ二週間も続けたら間違いなく死んじゃいそうです！　今の一

瞬でなんかリットル単位の喀血してましたよ！？」
「ごぶぅっ！？　あ……目が……かすんで……」
「き、きゃあああああ！？　さ、さだめさん！？　さだめさんの病室が一瞬にして血の海に！？　セツ、セツーーーーーー！」
アテナの悲鳴で病室に入ると、そこは血塗れでぶっ倒れているさだめと同じく血塗れでパニック状態のアテナ。その惨劇の現場を見て、俺は震える指でアテナを指差す。
「あ、アテナ……まさか、殺っちゃった……のか？」
な、なんということだ。アテナの積もり積もった怨みがついに爆発してしまった。さだめが、さだめが！
「殺っちゃってないです！」
「お……兄ちゃん？」
「さだめ！　大丈夫か？　生きてるか？」
「あ、ああ……お兄ちゃん、お兄ちゃんだぁ……復☆活！」
「何故明らかに致死量オーバーの血を吐いて普通に立ち上がれるんですか！」
「お兄ちゃんさえいればさだめはどこまでも高みに……イケる！」
「もうそれ中毒ですよ！　ヤク中患者と大差ないです！」
「あ……でもアテナさん。さだめの罰は……」
「急にシリアスに戻るの止めてくれません！？　テンションの違いに対応できません！」
さだめは治っても尚、人を振り回す存在であるらしい。
「ん、んんっ！　え、えっとですね。その、アテナ『さん』っていうの、止めてくれませんか？　さだめさんの方が年上ですし……」
「「……え？」」
兄妹二人して面喰った。
「……なんですかその『驚愕の新事実！』みたいな顔は」
「え、だってさだめって俺の一個下だぞ？」
「だから、私より年上じゃないですか。それも二つ」
「「……」」

「え、あれ？　なんでそこで黙るんですか？　私言いましたよね？　１３歳ですって！」
思い返してみると、そういえば確かにそう言っていた。だが……。
「う、うそ！？　１３歳！？」
「わ、忘れてた……全然そうは見えないからすっかり……」
「ぜ、全然そう見えないってなんですか！　もしかして私、とっても失礼なこと言われてますよねぇ！？」
「じゅ、１３歳にしては……」
「してはなんですか！？　老けてるとでも言いたいんですか！」
「い、いや……あ、アテナは大人びてるから……」
「全っ然フォローになってませんよ！　うわーん！　１３歳で老け顔認定される私の不幸！」
「ち、違うよ！？　ほら、アテナさんおっぱいもおっきいし！」
「大して大きくないですよ！　さだめさんが絶望的なだけです！」
「ぜ、絶望的……」
ｏｒｚ↑さだめ。
被害がさだめに飛び火していた！
「なぜ……？　お兄ちゃんに散々エロい事してても体は全然大人っぽくならないし……挙句二歳も年下の子に絶望的とか……」
「ふ、ふふ……どうせ私は老けてますよ。伊達にネタでやった精神年齢鑑定で３９歳をマークしてませんよ……」
「マジで！？　妙に納得！　あ、いやそうじゃなくて！」
マズイ。なんだか知らんが鬱病患者が二人、しかも病院内で発生した。なんとか二人を宥めてさだめがアテナのことを呼び捨てにするようになったころにはすっかり日が暮れていた。

相変わらずの混沌とした状況に思わず涙が出るね。色んな意味で。
……うん。そういえばアテナって１３歳だったよね。精神的にも肉

体的にも圧倒的にさだめより上だけど。
あとは……そうだ、希冴姫たちのその後についても言ってなかったか。
希冴姫はもう完全にこっちの世界で生活している。住むところについてはまた一悶着あったが。
俺の精霊でパートナーなんだから一緒の部屋で過ごすという希冴姫に対し、まあ当り前と言えば当り前だがアテナとさだめが猛反発。断固とした態度を崩さない希冴姫も希冴姫だが、まああの二人も凄まじい剣幕で激論を交わしてたな。結局議論は夜中まで続き、病院側から苦情が入ってストップ。結果として妥協案で俺の部屋に希冴姫。俺は部屋を追い出されて十代たちの部屋に居候、と。……なんか俺が一方的に被害者な気もするが、まあいい。十代たちの部屋はそこそこ楽しいし、元々あの部屋に入り浸ってたしな。
で、なぜかルインもちゃっかり希冴姫と同じく元俺の部屋に寄生していた。女っ気が増えてレッド寮の馬鹿共は狂喜乱舞していたが、その二人がいつも俺にべったりな所為で余計に俺が居心地悪くなった。周囲からの視線が最早物理的ダメージを伴って俺に突き刺さる。日常的に闇のゲームをしている気分になってきたね。
ジャックとキングは前と変わらず時々出てきてはひっかきまわして（キング）皆の喧嘩を仲裁して（当然ジャック）と変わり映えのしない生活をしている。
さだめによって魂を封じられていたレイも、無事に目を覚ましたと連絡を貰った。……正直レイと昔会っていたという設定には驚きを隠せなかったし何故か十代フラグも立たずに俺フラグ立ちっぱなのが納得いかん。いや、もちろん嫌いじゃないがここまで順調にハーレムルートを邁進していると善良な……おいそこ笑うな。俺の心は罪悪感と言うか当然の倫理観でチクチクとした痛みを覚える。
同時に吹雪さんの意識ももどったそうで、明日香が兄を伴ってお礼にやってきた。……問題があるとすれば俺が吹雪さんに物凄く気に入られてしまったことぐらいか。亮さんと共に振り回される毎日

だ。その代わりと言ってはなんだが亮さんとも仲良くなれたな。今までそれほど接点がなかったのでちょっと嬉しい。

……回想も疲れてきたな。それだけ色んな事があったってことなんだろうが、俺としてはあまり実感がわかない。それだけ充実した、忙しい日々だったからだろう。

そして今日。やっとアテナとさだめの二人が退院する。

「まったく……病室を血の海にするわ夜中まで騒がしいわ散々な患者だった」

「あ、あはは……ご、ごめんなさい」

「ごめんなさい」

「何度これのどこが病人だと叫びたくなったことか」

「あうぅ……」

二人はせっかく退院の日だと言うのにすっかり顔見知りになった医師さんに説教を食らっていた。

「君もだぞ御堂君！」

「はい！？」

「まったく彼女らが騒いだり病室を血の海にする根本の原因は全て君だというのに……」

訂正。俺も一緒に怒られてます。

「……まあ、それでも君たちの起こす騒ぎは迷惑でありながら、何処か楽しいものだった。正直、これで君たちが全員ここからいなくなるというのは……不謹慎だが、とても残念でもある」

「先生……」

「うむ。だから君たち。いつでも運び込まれてきなさい。スタッフ一同大喜びで歓迎しよう！」

「いやいや喜んじゃだめでしょう！？　普通もう来ないように言うのが医者でしょうが！」

「だってさびしいじゃないか！」

「私事か！」

「なんなら私たちが怪我させてあげるから！」

「あんたら本当に医者か！？　積極的に病人怪我人作ろうとすんな！　アホか！」

まったく……卒業を反対する教師といい（タッグフォース３参照）ロクな大人がいないなここは！

「でも……私もちょっとだけ残念です」

「アテナ？」

「私がずっと入院して、ベッドに寝た切りだったら……ずっとセツに世話してもらえるかな……なんて」

「あ、それさだめも思った。病院で禁断の一線を越えるっていうのも中々クるシチュエーションだよね！」

「いえ……そういう意味では、ないんですけど……」

……ったく、こいつらは……。

「……言っておくがな」

「「？」」

「俺は、介護が必要な妹を持つ気も……恋人を持つ気もないんだからな」

「「え！？」」

言うだけ言ってさっさと荷物持って逃げる。

「ちょっとお兄ちゃん！」

「い、今の言葉の真意は……」

「ええいうるさい！　勝手に想像してろ！　ただし！　想像通りとは限らんことも考えておけ！」

「ま、待ってください！　真意が聞けないことには今夜眠れそうにありません！」

「そうだよ！　このままじゃアテナもさだめもそのことを考えて枕を……じゃなくてパンツを濡らす羽目に……」

「そ、それはなりません！」

「さだめはなるもん！」

「なぜそこでキレるんですか！」

何事か口論しながら追いすがってくる二人の声を聞きながら、俺

は空を見上げた。
突き抜けるような青い空。まだ危機は去ってなくて、三幻魔のじいさんは己の若返りを狙っていて……それだけじゃなく、この先光の結社だの異世界だのと色んな問題が控えているのも知っている。

「だが、まあ」

今はただ、この幸せに浸っていよう

だから世界よ

これが、単なる終わりの始まりだったとしても

今だけは

俺たちに平和な時間を

辛いこと苦しいこと。そんなものは全部まとめて、後で相手してやるからさ

とりあえずは

いつの間にか服の裾を掴んでいる少女たちに言い訳するくらいの時間は、さ

第一期最終話「終わりの始まり」（後書き）

はい。とりあえずこれで一区切りです。三幻魔の問題については結局最後までは介入しないことに。これ以上介入するのは得策ではないというか、蛇足的な感じになってしまいそうだったので。

他の諸々は後であとがきとして書いてアップしますので、ここではこれくらいで。

それでは、レーネスでした！

第一期終了あとがき

あとがき

はい。とりあえずアルカナ～切り札の騎士～第一部さだめ編の完結になります。

別にこれで完結にするつもりはありませんし、光の結社や異世界編も変わらずやるつもりではおります。が、ここから先の原作は本当に完全に全く見たことがないので、蔦谷等に行ってちゃんと原作を確認してからプロットづくりなどもする必要が出てきます。

なのでしばらくは本編が進まず、番外をチョロチョロ出して行くことになると思います。今のところ考えているのは定番の学園祭や海水浴。各ヒロインが主役のもの。セツの精霊界での旅などです。後は時期にもよりますがホワイトデーとかも。パッと思い付くだけでも結構な量があり、番外編だけで本編の文量に届きそうなくらいです。が、まだ他に書いて欲しいイベントや番外などありましたらご自由に感想にお書きください。出来る限りで実現させたいと思っています。

番外編は基本ギャグ路線を貫きますが、精霊界での旅などはシリアスを多めに含むと思います。

ふう。番外編についてはこのへんでしょうか。

第一期が終了と言うことでキリもいいのでキャラについての紹介も作って乗せたいと思います。本編では殆ど描写もしてませんでしたしね。気になっている方もいらっしゃるでしょうから。

これからの活動についてはこんな感じです。それでは、いつまでもこんな作者の長ったらしい話に付き合っているのも酷でしょうから、ここからはおまけのキャラ対談でもするとしましょう。では、

どうぞ！

「と、いうわけで突発企画みたいなもんを任されることになった御堂切だ」

「アシスタントのライムでーっす！」

「……え？　ライム？」

「あれあれ？　なんでそんな首を捻ってるの？　もしかしてボクのこと、忘れちゃった？」

「い、いやそんなことはないんだが……普通、こういうのってアテナとかが来るもんじゃあ……」

「ぶーぶー！　ボクだってヒロインなんだからおかしくないよー。差別だー！」

「ヒロインねぇ……ヒロイン（笑）とか言われてないといいけど」

「……」

「あ、いやすまん。笑えない冗談だったな……」

「どうせ……」

「ライム？」

「どうせライムは一発屋だよぉ～～～！！」

「うわっ！？」

「よし、立ち直った」

「速いな！？　慰める暇すらなかったんだが！」

「それでは早速コーナーの方へと参りたいと思います！」

「え、何このラジオ番組のノリ」

「でも突発企画なのでお便りはありません！」

「じゃあやるなよ！」

「でもゲストはいるので続行！」

「ゲストしかいないの間違いだろ」

「では第一のゲスト！　ボクの元持ち主のオベリスク・ブルー男子

生徒！」
「誰得！？」
「と、ツッコミが入りそうなので省略！」
「容赦ないな！？」
「では次のゲストへ言って参りましょう！」
「実質最初のゲストだけどな」
「この人です！　矢ヶ城先生！」
「だから誰得！」
「ＴＦファン得！」
「だったら素直にユーキちゃん出せばいいんじゃないかなぁ！？」
「そこはホラ、重箱の隅をつつくといいますか……」
「だからそれは誰得なんだ……」
「では、ご主人様がユーキちゃんを出せー！　と駄々をこねていますので、加藤友紀さんです！　どうぞ～」
「そういう誤解を招くセリフは勘弁してくんないかなぁ！？」
「あ、あはは……セツ君、久しぶり」
「……ああ、久しぶり」
「なんだかすっごく疲れてそうだね～」
「……主にこの電撃小娘の所為でな」
「実はユーキちゃんさんも出番はすっごく久しぶり！　最後の出番は番外編でした」
「お前はもっと前だがな」
「ぐさー！　乙女のハートが傷ついた！　これは……責任を取ってもらう流れだね！」
「流れじゃねえよ！　っていうかゲスト！　ユーキちゃんおいてけぼりだろ！」
「あはは～元々自己主張薄いからね～わたし」
「そんなことじゃダメだよユーキちゃんさん！」
「ふえっ？　っていうかユーキちゃんさんって……」
「ボクたちのように出番の少ないキャラはもっとこう、ドカーンズ

ギャーンバリバリギャギャギャーーーーン！！　と目立っていかないと！」
「え、え～と……」
「やめろライム！　この小説における俺の癒しを奪うな！」
「い、癒し？」
「ああっ！　それを考えたらむしろユーキちゃんにはもっと後で登場して貰えばよかった！　たび重なる精神疲労で遺書をしたため始める寸前に女神のごとく登場して貰えば良かった！」
「め、女神……」
「はいはーいそこのナチュラルジゴロご主人様ーそろそろ時間が押して来てますので次のゲスト行きますよー」
「そんな！？　お前は俺からこの癒しを奪おうと言うのか！」
「あ、あれ～なんかわたし、結局あんまりしゃべってないような～？」
　フェードアウト。
「では次が最後のゲストになります」
「早ぇよ！　まだ二人目じゃん！」
「正確には四人目だよ？　ご主人様が他二人を飛ばしちゃったからもういないの」
「あの二人を正規のゲストとして呼ぶ辺りが意味不明！」
「それでは最後のゲスト、サイクロイドさんです～」
「よりにもよって最後がそいつか！？」
「よう！　良い子の皆、元気にしてたかな？　サイクロイドお兄さんの登場だよ！」
「なに良い子の教育番組みたいなノリで話してんだよ！　ゲストの癖に司会気取りか！」
「全世界に存在する６０億人のサイクロイドファンたちよ！　今立ち上がれ！」
「いねえよ！　ほぼ世界の全人口がお前のファンであるはずがねえよ！　そして立ち上がって何するつもりだ！」

「そりゃもちろん国家転覆……」
「お前そればっかだな！　っつーか６０億人がお前のファンなら国家を転覆するまでもなく世界はお前のものだよ！」
「おれっちは、新世界の神と……」
「ならねえよなれねえよならせねえよ！？」
「あのー……ボク一応司会なんだけど～……」
「いいか弱小ボロチャリ！　何をどう足掻いてもお前が単体でパーフェクト機械王にかなうはずがないということをだなぁ……」
「なぁにいってんだい！　おれっちの底力を知らねえな？　補助輪付けたおれっちは超強いぜ？」
「大して強くない上に補助輪つけなきゃ強くないあたりがカッコ悪いよ！」
「……ぐすん」
「え、え～と……あ、アテナです！　何やら場が混乱してカオスになって収拾つかない感じなので僭越ながら締めを務めさせていただきます！　まずはこの度、アルカナ～切り札の騎士～がこうして第一期分を終了させることができたのも、読者様方の熱い御支援あってのことです！　本当にありがとうございました」
「このっ……てめえこのボロチャリが！　毎度毎度出てくるたびに俺の精神に甚大な被害を……」
「はっはぁ！　たかが人間が、おれっちに追いつけると思ってるのかい！？」
「え～ん誰もライムを見てくれないよ～！」
「む、向こうはもうほんとにどうしようもなくなってるみたいですね……それでは、また番外編や第二期もアルカナ～切り札の騎士～をどうぞよろしくお願いします！　アテナでした！」

第一期終了記念「キャラ設定資料集」（前書き）

※このキャラ設定は第一期のネタバレを容赦なく含んでおります。キャラ設定だからって本編を読む前に読まれることはお勧めしません。どうかこの小説は一番上から順々に読んでいってくださると幸いです。

第一期終了記念「キャラ設定資料集」

アルカナ～切り札の騎士～

オリキャラ紹介

○御堂（みどう）　切男（せつ）　１６歳（現実では１９）１７２ｃｍ　５７ｋｇ

・使用デッキ　マイフェイバリット

『絵札の三銃士』　『アルカナ・ナイト・ジョーカー』

『ヴァンダルエンジェパーミッション』　『冥王竜ヴァンダルギオン』

『雷族（未使用）』　『雷電娘々』？

・容姿

作者の好みから、完全にリトバスの恭介（ＣＶ緑川光）をイメージ。恭介を黒髪にしてちょっと幼くしたら大体セツ。

・キャラ設定

言わずと知れた主人公。気がつけば現実から遊戯王ＧＸの世界にトリップ（後に憑依と判明）した大学生。ただし、年はＧＸに合わせて若返っている。

初期は『アルカナ・ナイト・ジョーカー』を切り札とした『絵札の三銃士』デッキを使う明るくさばさばとした好青年。だが後に、妹によって歪みすさんだ心に仮面を被り、それを主人格としていたことが判明する。

運動も勉強もできるし、容姿も可もなく不可もなくだったので、現実でもモテなかったわけではないが、妹さだめによって知らない

内に妨害され、未だ彼女ナシ。
　自分と同じイレギュラーだと思っていたアテナから告白されたことで、女難の運命が幕を開けることに。
　精霊と近い位相を持った人間で、精霊を人間界に現界させることができる。特に光属性の精霊と相性がいい。十代の場合はカリスマ的な好かれ方をするが、どうもセツの場合はチャーム的な好かれ方……というかぶっちゃけ惚れられる場合が多いようだ。
　素直に気持ちをぶつけてくるアテナのことは憎からず思っているようであるが、優柔不断な性格が災いし、未だ友達以上恋人未満。
　現在は『絵札の三銃士』と共に『ヴァンダルエンジェパーミッション』を併用している。たまにライムにせがまれて『雷族』も使うらしい。
　天然ジゴロなので全く同情の余地はないが、女難に逢いやすく、癖の強い女性陣に振り回されて少々疲労気味。
　当初はボケを多用していたが、周囲が混沌としていくにあたりツッコミ役として活躍することが多くなってきたように思える。
　デュエル傾向としては相手の行動を阻害し、相手ターンであっても自由にカードを展開していく「ずっと俺のターン！」な戦い方を得意としている。

○天音　アテナ（あまね　あてな）女　１３歳（飛び級）１５７ｃｍ　４３ｋｇ　Ｂ８１Ｗ５３Ｈ８０
・使用デッキ　マイフェイバリット
『アテナ』　『アテナ』『光神テテュス』
『堕天使』　『堕天使スペルビア』『堕天使アスモディウス』
・容姿
　色素の薄いブロンドの髪を背中に届くか届かないかまで伸ばしている。カチューシャチックな白いリボンをハルヒっぽい感じでつけ

ている。結び目には天使の羽のアクセサリーがちょこんと確認できる。

・キャラ設定

一話目から明らかなメインヒロイン。本来のGXにはいなかったキャラのため、セツに自分と同じイレギュラーかと勘違いされていた。未だ、その存在の理由は明らかにされていない。

性格は純粋で健気。儚そうなイメージと裏腹に芯の強い一面を持つ。結構嫉妬深い。13歳、という年齢の割に精神的にも肉体的にも成熟していて、普通に高校生くらいに見える。決して老けているわけではない（笑）。

アカデミアに飛び級で入学して勉強で苦労もしていないあたり、かなり頭はいいようだ。運動については人並みより多少マシくらい。得意と言うほどではない。

社交的で異性でも特にためらいなく話しかけられる性格と整った容姿もあって、小学校ではアイドル的な扱いを受けていた。が、セツに会うまでは心惹かれる異性はいなかった。

デュエルとの出会いは小学校に入った頃。自分と同じ名前のカード『アテナ』を手にしたことでデュエルに興味を持ち始める。

セツに一目惚れし、その後は一途にセツを慕う。

家族構成その他は不明。実はまだ色々と設定が明らかにされていないヒロイン。

さだめとは色々あったが、今ではそこそこ仲はいい。元々誰とでも仲良くできるアテナは、過去の遺恨もさらっと水に流し、お友達関係を築いている。が、セツに関しては今でも一時間に一回は激突しているらしい。

そのさだめとのいざこざの中で一時ダーク化し、その際にセツにキスをするという大胆な行動に出る。記憶は残っているらしく、今でも時々思い出しては赤面憤死している。まあ、幸せそうではある。

基本的にツッコミ体質。というか常識人。

デュエルの傾向は意外にも最上級天使を多用した重量級のハイビ

ート。アテナによるバーンも多用するので、ライフ４０００だとすぐに決着がつく場合が多い。ダーク化した際にもやはり重量級の天使を多用していた。

○御堂（みどう）　運命女（さだめ）　１５歳（現実では１８）　１４６ｃｍ　４２ｋｇ
Ｂ７４Ｗ５１Ｈ７６
・使用デッキ　マイフェイバリット
『終焉のカウントダウン』　特になし
『禁止スタンダード』　『処刑人―マキュラ』
『マジエクワンキル』　特になし
『次元ダーク』　『終焉の精霊』？
※あとは各種メタデッキ。
・容姿
顔立ちや髪の色は基本的にセツと同じ。細長い黒いリボンで短めのポニーテールにしている。
・キャラ設定
第十話から登場。出番こそ遅かったものの、登場時から作品の空気を全て掌握していたといっても過言ではない。これでもメインヒロイン。
性格は複雑で、テンション等によって変わる。ハイならセツに対して異常な愛欲を向ける変態エロ娘的な感じで、ある意味一番平和。ローになると周囲に大した被害こそ及ぼさないがこの世界に対する怨み事をブツブツつぶやき、ニュートラルや裏になった時に被害が増す。いわゆるチャージモード。ニュートラルだと本格的なヤンデレモードになり、嗜虐的な思考と常識無視の言動で周囲を恐怖に落とし込む。とはいえ、周囲への被害はそれだけ。主に被害はセツに向けられる。裏になるとそれが一変し、誰彼構わず手を出す暴走モード。セツに近づく女性たちを陥れてきたのは闇モード。理性を保

ったまま周囲を攻撃する最も危険な状態。セツはこのモードを知らなかった。

上記の性格はさだめの精霊である『終焉の精霊』によって生後すぐに歪められたものであり、本来のさだめはモラルハザードなところこそあれ普通に可愛らしい少女である。上で言うとハイモードが一番近く、アルカナのエロ担当。ただし、肉体的にはまったく色気はない。……特定の趣味の人なら話は別だが。

セツ中毒と言っていいほどセツに依存している。セツに二週間会えないと思っただけで死にかけるくらいには。だがどんなに死にかけていてもセツさえ与えれば全快で復活する。

アテナには罪悪感を感じているが、セツのことに関しては全く譲るつもりもないらしい。よくある、お兄ちゃんを任せるならせめてこの人。みたいなのも全くなく、依然兄を誰かに渡すつもりは欠片もないらしい。

完全にボケキャラ一直線。色んな意味で自重する、という言葉を知らないらしくメタ発言も平気でしゃべる。

デュエル傾向は相手に対するメタや禁止カードなど、手段を選ばない。

○希冴姫（ききさき）　女　精霊１６５ｃｍ　４５ｋｇ　Ｂ８２Ｗ５６Ｈ８０（クィーンズ・ナイト）

・使用デッキ

なし（使うとしたら『絵札の三銃士』）

・容姿

そのままクィーンズ・ナイト。最近は長い金髪を一房のみつあみにしてまとめている。服はロングスカートを好んでいるようだ。

・キャラ設定

セツの精霊の一柱。ツンデレ担当ヒロイン。最近はほぼ完全にデレに移行してきた模様。二話から登場しているが、セツに名前を貰

うまではそれほどヒロイン的な立ち位置ではなく、むしろギャグ要員として使われることすら多かった。

性格はお姫様系ツンデレ。作中では実は一番純情で、手を握られただけでオーバーヒートするぐらい。

クィーンとはいうが、あくまで絵札におけるクィーンであるというだけで、別に王国の王妃とかではない。ただし、姫として扱われることが多いので性格もお姫様チック。

アテナを酷く敵視していて、アテナが出てくると大抵不機嫌。ようやく出会えた憧れの主様を横から掻っ攫っていくのが我慢ならないらしい。それでも実力については認めているらしく、共闘することならやぶさかではないといったところ。

真面目な性格だが、浮世離れしているのでツッコミではない。天然ボケというのが妥当なところ。

○ルイン　女　精霊（破滅の女神ルイン）１７０ｃｍ　４８ｋｇ　Ｂ８７Ｗ５７Ｈ８５

・使用デッキ　マイフェイバリット

『デミスドーザー』　『終焉の王デミス』

『ルインライフゲイン（未使用）』　『破滅の女神ルイン』

・容姿

そのまま破滅の女神ルイン。普段着はワンピースか七分丈のパンツルックなどを好む。

・キャラ設定

元々サブキャラ予定だったのが、書きやすさも相まって一気にヒロイン格へと昇格した精霊。クーデレ担当。

さだめの相方としてタッグデュエルに登場。ただし、さだめの精霊というわけではない。精霊界では絶大な人気を誇り、ファンクラブのようなものまであるとのウワサ。

さだめには、さだめにとり憑いていた『終焉の精霊』の監視目的で近づいていた。セツのことも気にはしていたが、それよりも自らの復讐のために動いていたようだ。だが、セツの過去と心の歪みを知り、自らの過去と照らし合わせてセツに親近感のようなものを覚えたのがきっかけでセツと想いを共有し、共に在りたいと思うようになった。

ギャグでは煽りとボケを駆使してセツを振り回す。特に煽りが上手く、希冴姫をけしかけて楽しむのが最近のトレンド。

デュエルでは相手フィールドをとにかく殲滅していく傾向が強い。

○ジャック　男　精霊（ジャックス・ナイト）１８６ｃｍ　６２ｋｇ

・キャラ設定

言わずと知れた苦労人代表。事あるごとにケンカの仲裁に呼び出され、胃を痛める毎日を送っている。一度ストライキを決行したが、あまり意味がなく、結局変わらず仲裁役を務めている。

万能執事さん。人間界の料理や針仕事、掃除洗濯なんでもござれのすごい人。テキストには『あらゆる剣技に精通し……』とあるが、どうやら剣技以外も達者なようだ。

細かいところによく気が付き、気がきく。そんなところもやっぱり執事っぽい。

○キング　男　精霊（キングス・ナイト）１７９ｃｍ　６０ｋｇ

・キャラ設定

ずっといるのに影の薄いじいさん。好々爺な言動が目立つが、そもそもキャラの濃いセツたちの中ではあまり目立てない。一応年長者らしくいい事を言うこともあるようだが、それでもやっぱり目立

たない。インパクトその他で言えばライムとかより影が薄い。
キングとは言うが、希冴姫と同じくただ絵札のキングであるというだけのことで別に王様ではない。それでも国の重鎮ではあるらしく、普段から政務をこなしている。

○シャルナ　女　精霊（アテナ）１７３ｃｍ　５０ｋｇ　Ｂ８６Ｗ５６Ｈ８８
・キャラ設定
セツによって目覚めさせられたアテナの精霊。最上級天使で偉い天使さまらしいが、威厳は皆無。ノリが軽いのが原因かと思われる。
口癖なのかよく『天罰てきめん』しようとする。『アテナ』の効果だろうか？
アテナが落ち込んでたりダーク化したりするもんだからすっかり出番が少ない。当初の予定ではもっと出番もあったのだが……作者の見通しの甘さが良く分かるキャラの一人。

○ライム　女　精霊（雷電娘々）１５５ｃｍ　４２ｋｇ　Ｂ８４Ｗ５４Ｈ８５
・キャラ設定
月一試験にて満を持して登場……したはいいが、その後まったく音沙汰なし。次の出番はあとがきという結構不憫な子。それと言うのも元々この子の登場予定がなかったというのが大きい。
とはいえ、割と人気もあるような気がする辺りはさすがニャンニャン。アカデミアにもファンが多いだけはある。

○加藤（かとう）　友紀女（ゆうき）　１６歳　１６３ｃｍ　４５ｋｇ　Ｂ８３Ｗ５５Ｈ８４

・使用デッキ　マイフェイバリット
『戦士族お触れビート』　『サイレントソードマンＬＶ５』
・キャラ設定
　正確にはオリキャラではない。ＰＳＰのゲームＴＧＦシリーズにおいて登場したオベリスク・ブルーのモブ女子。当初はアテナの対戦相手としてセレクトしただけだったのだが、バレンタイン特別編にて何故か一人勝ちをかましている。
　特に目立ったところのない普通の女子。だが、それだけに癖の強いヒロイン勢の中でセツにとっての癒しキャラとしての存在を確立している。なので何気にセツからの好感度がかなり高い。いわゆるダークホース。出番さえあれば一気に他ヒロインを出し抜く可能性を持った危険人物。

○ネイキッド　男　精霊（剣聖ネイキッドギア・フリード）　１９３ｃｍ　８０ｋｇ
・使用デッキ　マイフェイバリット
『ギア・フリードデュアル』　『剣聖ネイキッドギア・フリード』
『フェニックス・ギア・フリード』
・キャラ設定
　作中でセツに勝利している唯一の人。セツがデッキを変えるきっかけになった。
　ルインに惚れているらしく、色々アタックしているらしいが全く効果はなさそう。ルイン曰く『筋肉が暑苦しい』で、希冴姫曰く『おぞましい筋肉お化け』ととりあえず筋肉が嫌らしい。普段は鋼鉄の鎧を纏って自らを戒めているが、作中の場合は休暇だったので拘束は外していた。

「こんなもんか？　アテナ」
「はいセツ。多分これで全員だと思います」
「まあライムの元持ち主とかまでいれるのは何だしな」
「そもそもそんな人に詳しい設定なんてありませんよ……」
「つーか長い！　キャラ設定だけでどんな長さだよ！」
「そ、それだけキャラを作り込んであるんですよきっと」
「いや、ただ単に作者が短くまとめるのが下手なだけだろ」
「……否定のしようがないですね」
「あとがきも毎回散々書いてるし。あとがきそんなに長くしても仕方なかろうに」
「あ、あはは……」
「まあいいや。とりあえず、俺たちの設定はこんなもんだ。他にも気になることがあったら感想辺りにでも記入してくれ」
「……ところでセツ」
「なんだ？」
「私は加藤さんの欄が非常に気になるんですが」
「……気にするな」

第一期終了記念「キャラ設定資料集」（後書き）

番外編諸々の前にとりあえず設定資料アップ。ネタバレの宝庫。
とりあえずこの紹介に出てきた女性陣は全員番外編で主役張る話を作ろうかと。
他疑問等ありましたらお気軽に感想までお書きください。
それでは、レーネスでした！

第二期第一話「学園祭は波乱万丈」（前書き）

一日開きましたがその代わりに早めの更新。
学園祭です。完全に好き勝手やりました。最近シリアスばっかりでちょっとギャグの勘を取り戻すのに苦労してます。まあこの話はギャグというよりドタバタ構成ですが。
では、どうぞ！

第二期第一話「学園祭は波乱万丈」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第一話「学園祭は波乱万丈」

それはアテナとさだめが退院して、一週間と経たない内にやってきた。

「そういえば、セツのところは何をやるんですか？」

「お兄ちゃんのところはコスプレ喫茶ならぬコスプレデュエル。色んなモンスターの格好してお客さんとデュエルするんだよ」

「……なぜ私と同じく入院していたさだめさんが我が事のように答えられるのかが不思議です」

「わかってないなぁ。さだめはお兄ちゃんの事だったらなんだって知ってるんだよ」

ウソつけ。原作知識の癖に。

「私も遊びに行きますね！　学園祭の出し物！」

そう、学園祭である。しかしアテナよ。勘違いして貰っては困る。

「お前もウチで接客手伝いだからな」

「え！？」

当然だ。アテナのような素材を見逃してなるものか。原作だと明日香のハーピィ・レディだけだったが……。

「当然、お前もな。さだめ」

「お兄ちゃんのためなら喜んで！」

何が着られるのかな～なんて鼻歌すら歌っているさだめを見て、

アテナも決心したらしい。
「わ、わかりました。お手伝いさせていただきます。えっと……」
「衣装は当日まで内緒な。安心しろ。お前たちのは、俺が一針一針丁寧に縫いあげた自信作だ」
「って、セツが縫ったんですか！？」
当り前だろう。何を驚いてるんだこいつは。
「い、いえ……セツが針仕事得意だったなんて知りませんでしたから……」
「知る人ぞ知る、俺の特殊スキルの一つだ」
「相変わらず妙な特技を持ってるんですね……」
俺の無駄スキルは主に学園祭でこそ発揮させると言っても過言ではない。
「昔からさだめの服を繕ってくれるのはお兄ちゃんだけだったから……」
「さだめさん……」
……なんか勝手にしんみりしているが……。
「繕うだけなら一から手縫いの技術まではいらんだろうが。ほぼ趣味の領域だよ」
コスプレ衣装はまた色々と別の難しさがあって苦労したもんだが……。
「ジャックにも協力して貰ったんだ。あいつは本当になんでもできるな」
まさか針仕事で俺に匹敵する技術を持っているとは思わなかった。
『むしろ私の方こそ、主様があれほどの腕を持っているとは夢にも思いませんでしたよ』
俺の言葉に反応して、ジャックがそうツッコミを入れてくる。
「俺は意外な特殊技能を大量に所持しているからな」
「役に立つのか立たないのか微妙な能力多いけどね」
「何をぅ。俺の特殊技能百八つの内の一つ『ゴキポンをサーチする程度の能力』でいくつの家庭が救われたと思っている」

「……セツ、今度女子寮に来てください。そこであの黒い悪魔の根絶を！」

女子寮に招待された。

「それはいいけど『混入された睡眠薬、媚薬を感じ取れる程度の能力』はなくして欲しい」

「……それはお前から貞操を守るために身に付けた生きるための知恵なんだが」

バレンタインだろうと普段の食事だろうとお構いなしに混ぜ物するからなコイツ。

「……なんか他の能力が聞きたいような聞きたくないような……」

「『旅行前日には眠れなくなる程度の能力』とか」

『主様、それはただ子供っぽいだけでは……』

などと冗談交じりの会話をしていると、完全に浮かれポンチと化した翔が駆け寄ってきた。

「みんなー！　やったッス！　明日香さんが協力してくれることになったッス！」

「おお！　やったな翔！」

「……あんなに必死で土下座されたら嫌とは言えないわよ……」

明日香は多少辟易しているらしい。まあ確かに、翔のあのテンションは引く。

まあそれはともかく。

「これで希冴姫とルインも併せて、女子分は確保したな」

「セツ……何時の間に希冴姫さんたちまで……」

その時、廊下の先から女子の黄色い声が聞こえてくる。ああ、これは……。

「やあ諸君！　元気に胸キュンポイントを溜めているかな？」

「あら、兄さんじゃない」

そう、復活したブリザードプリンスこと天上院吹雪さんだ。

「おお、アスリンじゃないか」

「アスリンはやめて」

「つれないなぁ。ところでセツ君。例の物はどうなっているかな？」
「バッチリです。明日香の協力も翔が見事とりつけてくれたので、万事が万事、上手くいっています」
「フフフ……それは何よりだ。僕も文化祭が楽しみで仕方がなくなってきたよ！」
二人していたずらっぽい笑みを交わし合う。
「……ほどほどにしておけよ」
「あ、亮さん」
呆れかえったような溜息が聞こえたのでそちらに目を向けると正にその通りの顔をしたカイザー亮さんが立っていた。
「まったく……お前は普段ごく真面目だというのに、どうしてそう……」
「甘いですね。俺は学園祭では化けますよ？」
「吹雪のストッパーから吹雪の推進活性剤に変貌するな。手に負えん」
しかし、それにしても……。
「なんか……視線を感じません？」
今まで感じたことのないようなプレッシャーを感じる。吹雪さんや亮さんは特に気にしていないようだが……。心なしかアテナやさだめの視線も痛い。
「そりゃ当然だよ～」
「ユーキちゃん？　なんか久しぶり？」
今日は千客万来だな。明日は学園祭だし、わからなくもないが。
「うん……わたしも久しぶりな気がするよ～」
「と、それは置いといて。なにが当然なんだ？」
「吹雪さま、亮サマ、セツ君といえばアカデミアではモテ男トップスリーだから」
「……初耳なんだが」
「ハッハッハッ！　いいじゃないか！　セツ君も女の子にモテモテで嬉しくないかい？」

「いや……今の俺の立場からするとあながち喜んでばかりでもいられないんですが……」
事実、アテナたちの視線が痛い。痛すぎる。ザックザクだ。
「というか、他二人は様付けで何故俺は君付けだし……」
「え、えっと～庶民的で親しみやすいモテ男っていうか……」
「それ、地味って言わない？」
確実に三人の中では最下位だ。いや、別にいいんだけども。あの二人は最早不動のトップツーだし。
「吹雪様たちはなんというか、アイドル的な人気でセツ君は普通にモテるみたいな」
「……やっぱり、素直には喜べないな」
「なんという羨ましい悩みッスか……」
翔がうらみがましい目で睨んできている。……元喪男だった俺も気持ちはわかるんだが……。
「あ、そうだ。ユーキちゃんも明日、俺たちを手伝ってくんない？」
「ふぇっ!?　わ、わたし？」
「ああ。衣装はこっちで何とかするからさ」
この際だ。引き込めるだけ引き込んでしまえ。衣装は余ってるのを調整すればいい。それくらいは今日一日でも十分可能だ。
「サイズは……と。オッケー把握した」
「把握したの!?　今の一瞬でわたしのサイズ把握したの!?」
特殊技能『一目で服のサイズを見分ける程度の能力』だ。
「なんでもそれつければいいと思ってませんか？」
気にするな。仕様だ。
「それで、どうかな？」
「う、うん。わたしでよければ……」
「いよっし！　癒し要員確保！」
「い、癒し……？」
「あ、いやなんでもない」
「そうなんだ。えっと、じゃあお願いします～」

これだ。この普通さが何よりの癒しなんだ。ちょっと拝んでおこう。

「南無……」

「せ、セツ君？」

不審な目を向けられてしまったので止める。

「あ、それで亮さんもどうです？」

これで亮さんまで入ってくれれば鉄壁の布陣になるんだが……。

「悪いが、遠慮させてもらう。柄じゃない」

「ですよねー……」

「ええっ！？　いいじゃないか、一緒にやろうよ亮！」

「……お前の提案に乗って得をした話が、今まで一度でもあったか？」

「むしろ乗ってくれたことがないじゃないか」

そりゃまともな提案がなかったからだろうな。

「でも、できれば出て欲しいなぁ……カオス・ソルジャーのコスで。カオス・ソルジャーのコスで！！」

大声で強調してみる。遠目から見ている女子にも聞こえるように。案の定、周囲からの期待する目線が増幅した。

「ぬ……」

「ハッハッハッ！　ナイスだセツ君！　さあ亮、女の子たちにここまで期待されてやらないのは男じゃないよ！」

「い、いやしかしな……そもそもカオス・ソルジャーの衣装はすでに鎧だろう。本当に用意できるのか？」

「すでに用意しました！　むしろ錬鉄しました！」

『造ったの！？　一から！？』

全員が驚愕していた。しなかったのはさだめくらいか。

「なにかおかしいか？」

「おかしいッスよ！　何もかも！」

「セツって鍛冶までできるんですか！？」

「いやー流石にマジな鎧じゃないけどな。アルミ製にメッキで」

それでも、段ボール製なんてチャチなもんでは決してない、本物の質感をお届け！

「十分に異常だと思うわ……」

「俺の無駄スキルに限りはない」

「確かに、鍛冶スキルが役に立つことなんて滅多にないよね～」

「何故そんなスキルを会得しようと思ったんだ……」

「中華鍋とかの修繕してたらハマりまして」

針仕事と同じく、家事が趣味になったわけだ。

「中華鍋の修繕は、普通個人ではしませんよ……」

「まあそんなわけで、結構出来にも自信がありますから。是非」

「……すでに作ったものを無下にするのも悪いな」

『キターーーーーーーーーー！！』

ちなみに、俺たちではない。周囲を固めていた女子連中がすごい勢いで連絡網らしきものを回し始めた。

「……これで学園祭は決まりだな」

「ああ。これでイケなかったら嘘だ」

もうこの時点で成功はほぼ間違いない。

「あとはセツの作った衣装がどれだけすごいかにかかってますよ」

「ふ……俺は学園祭においては一切の妥協をしない」

「お兄ちゃんの凄さ……その目に焼き付けるといいよ」

「……さだめさんが嫌に誇らしげなのが目につきます」

そして、学園祭当日。

「さあ目にも見よ！　これがカオス・ソルジャー・カイザーだ！」

『キャアアアアアアアアッ！！』

「す、すげぇ……女子連中の反応も不思議じゃないぜ……」

「まさか、ここまでとは……」

亮さんが目を剥いて驚愕してるのなんて実にレアだ。

「お前……これで十分食っていけるぞ」
「お褒めに預かり恐悦至極。さあ、続いてはお待ちかね、天上院兄妹！」
　ババン！　と吹雪さんが自ら用意したサーチライトを照らす。そこから登場したのは……。
「キミたちの頭上には……何が広がっている……？」
『天！！』
「ンンン～ジョイン！　ブリザードプリンス改め、ブリザード・ウォリアー吹雪、今ここに降臨だ！」
『キャアアアアアアアアッ！！』
　蒼銀の鎧に身を包んだ吹雪さんの登場で、一気に場が湧く。
「せ、セツ？　本当にこれ、個人で作ったのかしら？」
『ウオオオオオオオオオオッ！！』
　そしてコールド・エンチャンターのコスに身を包んだ明日香の登場で、男子生徒も凄まじい熱気だ。……なお、原作だとハーピィ・レディのコスだったが、敢えて俺はこちらを選択した。吹雪さんと並べるために。
「ハッハッハッ！　いいねセツ君！　まさか本当にアスリンとペアでプロデュースしてくれるとは思わなかったよ！」
「あ、重たくないですか？　それ結構重厚な奴で、結構重量がありますけど」
「無問題だよセツ君！　確かに多少動きづらいが、ここまで立派なものに文句なんてつけられない」
「……そうね。不気味なくらいに立派ね」
「いよし！　場のテンションは最高潮！」
　いつの間にかデュエル関係なしにファッションショーになっている気がするが、まあ盛り上がっているので問題なし。学園祭なんてもんは盛り上がったもん勝ちだ。
「アテナ！　いけるか？」
「こ、この後だと物凄く気が進みませんが……」

「心配はいらない。俺が最高のコーディネイトを披露してやる」
アテナの衣装は考えに考え抜いた末セレクトした自信作だ。
「続いては！　天音アテナ扮する『勝利の導き手フレイヤ』～！」
「ど、どうも……」
『キターーーーーーーー！！』
「ひゃあ！？」
ふふふ……アテナはすでにレッド寮では女神扱いだからな……この反応も予想済みだ。
「あれ、髪の毛とかどうしてるんだ？」
「まとめて上げて、ウィッグ使ってる。中々それっぽくなっているだろ？」
「むしろフレイヤの精霊にしか見えねえよ」
くくく……俺の無駄スキルもとうとう神の領域に足を踏み入れたな。
注目されまくって羞恥からボンボン使って縮こまるアテナ。それを見て更に熱狂の渦が巻き起こる。
「む……」
微妙に気に入らん。
「次！　さだめ！」
「はーい」
とりあえず次に行く。アテナもこれ以上は羞恥で倒れそうだし。
「ホントにそれだけかのぅ？」
祭りだからということで精霊界から来てもらったキングが茶化す。
「ええい黙れキング。さだめは『魅惑の女王ＬＶ３』！」
『おおおおおおおおおお……』
ちょっと他とは反応が違うな。まあさだめに関しては元々の印象が怖かったんだろうが。
「おにいちゃ～ん！　どう？　似合ってる？」
「ああ、似合ってるから擦り寄ってくんな」
「だって今のさだめは『魅惑の女王ＬＶ３』だもーん。お兄ちゃん

を装備～♪」
「するなっ！」
調子に乗り始めたのでチョップ。割と痛くしたつもりだが、全く堪えてないあたりは流石さだめか。
「そういや、お前は何もしないのか？」
「あん？　俺か？」
というか十代。前から思っちゃいたが、なんだそのごちゃごちゃしたコスは。ええと……『闇・道化師のサギー』に『エルフの剣士』に『鉄の騎士ギア・フリード』に『魔導戦士ブレイカー』に……カオスだな。
「というか、サギーだけ浮いてる」
他は戦士系なのに。いや、ブレイカーは魔法使いだけど。見た目は戦士。
「そりゃお前がオレたちのプロデュースはしてくれなかったからだろ！」
当り前だ。確実に客が掴める亮さんや吹雪さんなら兎も角、なぜ態々男をプロデュースせにゃならんのだ。
「ま、ウケ狙いとしちゃまあまあなんじゃないか？」
俺がウケ狙いでプロデュースするとしたら確実に『ハーピィ・クィーン』のコスを強要するが。男に。
「……それ、トラウマになるぞ。やった方もやられた方も」
「確かに」
やはり俺はさだめの兄だな。こんなところで血のつながりを認識したくはなかったが。
「それで、お前は？」
「おっと。そうだったな。じゃあそろそろ俺も着替えてくるからその間場を持たせといてくれ」
吹雪さんが率先して司会を引き受けてくれてるから問題なさそうだが。
「さあ皆！　続いての登場は我らが万丈目サンダー！　扮装は『X

YZドラゴンキャノン』だ！　皆で万丈目君を迎えようじゃないか！　1！」
『2！』
『万丈目サンダー！！』
「サンダー！」
……よし。大丈夫そうだ
盛り上がる会場の裏で、俺も用意しておいた衣装に着替える。ちょっと着るのに手間がかかるのが難点だな。仕方ないが。

「さて！　ここで僕を始めとした皆の衣装、演出をプロデュースしてくれた今回の立役者を呼ぶとしようじゃないか！」
おし、出番か。打ち合わせ通りに頼みますよ。吹雪さん。
「まずは彼を呼ぶ準備をしようじゃないか！　希冴姫君、いや『クィーンズ・ナイト』！」
「……まったく、セツ様の遊び心にも困ったものですわね……キング殿！」
「ほっほっほ。まあ、後先考えずに突っ走るのは若者の特権じゃて……ジャックよ！」
「喧嘩の仲裁などに比べれば、なんと平和で容易いことかと……」
希冴姫たち扮する……というか本人だが。『絵札の三銃士』たちが剣を合わせる。態々このために精霊界から来てもらったのだ。流石にいい仕事をする。
「さあ、召喚ぼうじゃないか！　御堂切君……いやさ『アルカナ・ナイト・ジョーカー』を！」
ドライアイスで演出。……ここまでは考えてなかったんだが、どうも吹雪さんがやってくれたらしい。さすが、気の利く人だ。
「はぁっ！」
俺は手に持った剣を堂々と前に突き出す。『融合』のイラスト（

隼人にがんばってもらった）が突き破られ、その後ろから俺は悠々とした足取りで姿を現す。
息を呑み、静まり返った会場を、俺は鋭い目で見回す。
「呼びかけに応え……我、降臨せり！」
『おおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！』
爆発する歓声。よし！　手ごたえ十分！
「素晴らしい！　本当にすごいじゃないかセツ君！」
「……お前は本当に、その道で食っていけばいいんじゃないか……？」
「ば、バカな……俺様のＸＹＺを超える完成度だと……？」
ふ、ふふふ……これでこそ何日も何日も貫徹で作業した甲斐もあるってもんだ。
「ところでどうだろう？　ここは一つ、僕とお手合わせ願えないかな？」
吹雪さんが手にしたダブルセイバーを構える。最後の演出。
「……いいだろう！」
俺も剣を手に構える。
「行くぞ！」
「はあああああああああっ！！」
ガインッ！　ギィン！　と剣同士がぶつかり合う。その戦いは真に迫っていて、会場の誰もが固唾を呑んで戦いを見守る。
「ははっ！　やるね！　このブリザード・ウォリアーの剣舞についてくるとは大したものだよ！」
「それは……こちらのセリフだ！」
……普通に考えて、攻撃力３８００のアルカナに１４００のブリザード・ウォリアーが拮抗しているのはありえないが。
「せぇい！」
「ぐぅ……！」
俺の豪剣が吹雪さんを襲う。吹雪さんはギリギリ防ぐも、その表情は辛そうだ。

『吹雪さまぁー！　頑張ってぇー！！』
『セツくんも頑張れー！』
盛り上がる会場の傍で、さだめが亮さんに何事か耳打ちしていた。
やれやれという顔をしつつも、亮さんはこちらに近づいてくる。
「吹雪っ！　加勢する！」
「おおっ！　亮！」
「ちぃ……最強剣士のお出ましか……」
俺は苦々しげにそうつぶやく。もちろん、亮さんの登場で会場のテンションはマックス！　亮さんが了承してくれるかは正直賭けだったが、さだめの交渉術と学園祭という一種の固有結界の影響だろうか。なんとか無事、亮さんも参加してくれた。……あとは。
「せ、セツ！　頑張ってください！」
「！」
キタ！　アテナの応援！　さだめよくやった！　あとで御褒美をやろう！
「我と互角に打ち合う氷結の剣士に最強剣士……絶望的な状況だ……だが！」
アテナを見る。顔を真っ赤にして今にもへたり込みそうだが、なんとかその場でボンボンを上下させ続けている。……正直萌えた。
「我には勝利の導き手が付いている。故に……我に負けはない！」
フレイヤは天使族にしか効果ありませんよーなんてのは最早ＫＹな暴言にすぎないとばかりに吠えて俺は突貫する。
「おおおおおおおおっ！」
「はあああああああああっ！」
亮さんとは特に事前の話し合いとかはしていなかったが、持ち前の運動神経と頭脳で見事に殺陣を演出してくれる。……まさかここまでとは。正直感服した。
そして、何合もの剣撃の末……。
「ここまで、だな」
「ああ。いい戦いだったよ」

俺は盾で亮さんの剣を受け止め、吹雪さんの首筋に剣を押し当てていた。だが、吹雪さんの剣もまた、俺の首筋に。引き分けだった。

『う……』

静まり返っていた会場が、堪え切れじと爆発する。

『うおおおおおおおおおおおおっ！！』

俺たちもめちゃくちゃ上手く行ったことに舞い上がりながら吹雪さんとハイタッチ。

「ハハハ！　やったねセツ君！」

「ええ！　やりましたよ吹雪さん！」

こうして、俺たちの学園祭は始まったのだ。

おまけ。

「デュエルはどこに行ったのよデュエルは」

「それは、言わないお約束」

どこぞのライブ会場のようになっている場を見て、呆れたように呟く明日香を、完全においてけぼりで出てくるタイミングを逸したルインが宥めていた。

第二期第一話「学園祭は波乱万丈」（後書き）

やりたい放題（作者が）の第二期開始です。まだ学園祭は続きます。ブラマジガール出てませんしね。ホントは全キャラ出したかったんですが、流石に全員操るのは無理。ライムも出したかったのに……。

セツは元の世界にいたころは演劇部の助っ人に引っ張りダコでした。いろんな意味で。役者としても大道具小道具衣装作成など、演劇部からは大金積んでも来てほしい人材だったに違いないです。

それでは、レーネスでした！

※間話だったのを全部第二部ということで改訂。

第二期第二話「オールスター戦」（前書き）

大分遅くなりました。学園祭の後編になります。
メインはもちろんブラマジガール！……と、言いたいですが、オリキャラ同士の掛け合いが書き易過ぎてちょっと埋没気味……いけない、それについて指摘があったばかりなのに。
ともかく、デュエルの内容……というかメンツは豪華にしたつもり。
ではどうぞ！

第二期第二話「オールスター戦」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第二話「オールスター戦」

存分に盛り上がったコスプレ披露イベントも終わり、いよいよメイン（ホントだよ？）のデュエルを開始することになった。

『それじゃー参加者をどしどし応募するよー！』

マイクを持ってノリノリのライム。散々ゴネられたので態々精霊界から連れてきた。まあ、お祭りだしいいだろう。男子生徒も嬉しそうだ。

「天音さん、俺！　俺とやろうよ！」

「いや何馬鹿言ってんだ！　ここはフレイヤちゃんって呼ばなきゃだめに決まってんだろ！　ってことで俺とやろうよ！」

「え、えっと。あの……」

……蹴散らしてくるか。

「まあまあお兄ちゃん。ここはさだめに任せてよ」

「さだめ？」

「あのカイザー亮さんをも説き伏せたさだめの交渉術であの場を収めてくるよ！」

「あ、ああ頼む……？」

微妙に嫌な予感もするが、確かに亮さんを説き伏せた実績は確かだし……。

「ああ、わかった。任せるよ」

「うん！　成功した暁には御褒美頂戴ね。お兄ちゃん！」
「あ、おいちょ……」
勝手な約束をしてさだめがアテナのいる辺りに歩いていく。
「まあ、お手並み拝見といきますか」
「はーいみなさん整理券ですよー。フレイヤちゃんとやりたい人は五百円でさだめから整理券を買って行ってねー！」
「おいこら待てそこの妹」
飛ぶように売れていく整理券を満面の笑みで渡して行くさだめの肩をがっしと掴んだ。
「どしたのお兄ちゃん？」
「ほう、わからないか？」
「ちゃんと列を整理して場を収めてるんだよ？」
「整理券の値段が安すぎる。その倍は絞りとれるぞ」
「セツーーー！？」
なにやらアテナが絶望的な叫び声をあげているが……すまん。耐えてくれ。
「金のために！」
「セツ。あとでお話があります」
Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆ですねわかります。
「あっ！　セツ君セツ君」
アテナをダシに小遣い稼ぎ中だった俺たち兄妹に『荒野の女戦士』のコスプレ衣装を纏ったユーキちゃんが寄ってきた。
「セツ君を御指名だよ」
「俺を？」
「うん。すっごく可愛らしい『ブラック・マジシャン・ガール』のコスプレをした人」
「ブラマジガール！？」
何故俺に？　十代を元気付けるためにデュエルするんじゃなかったのか？
「……そしてなぜキミタチはそうも不機嫌そうなのかね？」

「なんでって……」
「わかってるよねぇ……お兄〜いちゃん」
ヤバい。なんか知らんがまたさだめがちょっと黒い。
「ちなみにセツ君の整理券は二千円で販売されているんだけど〜」
高い！　ならアテナは五千円でも良かったか。
「殆どさだめちゃんが買い占めちゃって」
「おいこら待てそこの妹」
じろりと睨みつけてやると、恥ずかしそうに頬を染めて目を逸らした。
「十万円は痛かったけど、それでお兄ちゃんを独占できるなら……」
「バカだろお前」
こいつ一人で五十枚も買ったのか。
「一回のデュエルを平均十分として五百分。時間にして八時間三十三分三十三秒はさだめのものだよお兄ちゃん。それだけあれば何回戦できるかな？」
「デュエルだよな？　何回戦ってのはデュエルのことだよな？」
さだめは無言でビクビク痙攣していた。……今日は徹夜で警戒だな。
「で？　そのさだめのお兄ちゃんを奪おうとする魔女はどこ？　とりあえずトラウマを植え付ける必要があるんだけど」
「真顔で言うな。お前の場合は冗談ですまん」
「冗談じゃないよ？」
「小首をかしげるな。不思議そうな顔で見るもおぞましい物体を用意し始めるな」
ルインの言っていた通り、まだちょっと歪みが残っているらしい。
「あのー？」
「うおっ！？」
中々返事が来ない俺たちに業を煮やしてか、件の美少女……オホン！　ブラマジガールがやってきた。
「お相手、して貰えるかな？」

輝かんばかりの笑顔ゴチです！　あっ、いやさだめ、顔がなんか『終焉の精霊』チックになってるから。お前の場合それはシャレになってないから。

「！　ヤツの気配」

「嘘だよな？　嘘って言ってくれルイン様！」

「ウソ」

「ありがとう！　そして殴らせてくれ！」

シャレにならんとゆーに。

「あははっ！　本当に楽しそうな人だね！　私も仲間に加えてもらえますか？」

「お、おう。もちろん。デュエルだったか？」

「うん！　お願いしまーす！」

……うむ。翔たちが夢中になるのもわからなくも……。

「シャルナ！」

「天罰てきめん！」

「久しぶぎゃあああああああ！？」

流石に人目もあるから光線は出さなかったが代わりに杖で思い切り殴打してきた。地味に……いや！　派手に痛い！

「続いて急所攻撃～♪」

「待て！　それはシャレに……」

「待って！　お兄ちゃんだけのモノじゃないんだよ！？」

「いや俺だけのもんだよ！　少なくともお前の物ではねえよ！」

つーかアテナはあれだけの挑戦者をどうしたんだ。

「勝ってきましたけど？」

「もう！？」

「この子、全員ワンキルで沈めてたわよ……」

「アテナ無双！？」

くっ……こいつらに付き合ってたら何時まで経っても話が進まん！

「謎のブラマジガールよ！　我、アルカナの名の元に尋常の決闘を申し込む！」

頭を抑えたままカッコつかないことこの上ないが、これ以上漫才で彼女を置いてけぼりにするわけにはいかない。
「はぁい！　その決闘を受けまぁす！」
『実況は僕、丸藤翔がお送りします！』
「いきなり現れやがったな。まあいいや、始めるか」
『そして解説は伝説のＸＹＺドラゴンさん！』
『はい』
『そしてそして！　アジテーションはボク、雷電娘々がやっちゃうよー！』
「ライム、お前は帰れ！」
「そんな！？　どうして！」
「アジテーションはいらん！」
「じゃあごしゅ……」
「その呼び方をここでするな！」
「セツ君のサポーター！」
「それもいらん！」
「そうだよ！　そのポジションはさだめが……」
そう言い合っている内にちゃっかりサポート席に座っているルイン。
『ああー！？』
「くく……無益な争い」
「……もういいから、始めるぞ」
デュエルの前から疲労困憊にはなりたくない。……もう、遅いか。
「それじゃーみんなー！　応援よろピクでーす！」
『はーい！！』
「「デュエル！！」」
『それでは先攻は僕の独断でブラマジガールから！』
だから贔屓すんな。
「横暴ですわ！　きちんと話し合いの上で当事者同士が……」
反論してくれるのは希冴姫だけだった。

「はーい！　私のターンでぇす！」
結局聞き入れられず、ブラマジガールの先攻で始まる。まあ、そうだろうと思っちゃいたけど。
「私はモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンドでーす！」
「俺のターン！　ドロー！」
俺のデッキは一応こう言った余興のために組み直した特別デッキ。こいつで勝てるかどうかはわからんが……盛り上げては見せようか。
「俺は『雷電娘々』を攻撃表示で召喚！」
「やったー！　ボクだー！」
「くっ……セツ様……何故このどらねこを……」
後ろでなにやら騒いでいるが、いい加減気にするのが馬鹿らしくなってきた。
「うおおお～！　ニャンニャンとブラマジガール！　俺はどっちを応援すればいいんだぁ～！」
「くそう！　憎らしい！　よくもボクのニャンニャンを奪ってくれたな！」
外野では何故か壮絶な葛藤が行われている。何気にライムの元持ち主も来ていたようだ。
「バトル！『雷電娘々』で、守備モンスターを攻撃！『お仕置きサンダー』！」
……この技名はどうかと思うが、ライムの奴が指定してきた。兎も角、タカタカと太鼓をたたいて呼び出した雷が守備モンスターを……。
「残念！　私の守備モンスターは『王立魔法図書館』でーす！」
「げっ！」
しまった。原作知識を当てにしすぎたか！
『雷電娘々』の雷は本棚に弾かれて余波が俺に襲いかかる。
「くぅ！」
セツＬＰ３９００
「なんてことを……どらねこなんて使うから……」

「ボク悪くないもん！　脳筋姫ならもっとヒドかったもんねー！」
相変わらず奴らは仲が悪い。
『やったー！　ざまあみろー！』
そして翔、後で覚えてろ。さだめをけしかけてやる。
「……俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ」
「私のターンでぇす！　ドロー！」
『さあ！　僕らのブラマジガールのターンです！　みなさん大きな声援を！』
『うおおおおおっ！！』
『がんばれー！』
『モテ男滅殺！』
お前ら、夜道じゃなくても気をつけろ。俺がけしかけるまでもなくさだめがゴツいガス銃を用意している。
「私は手札から『強欲な壺』を発動しまーす！」
カードを二枚ドローし、その上図書館に魔力カウンターが乗る。
「さらに『魔力掌握』も発動でーす！　私はデッキから『魔力掌握』を手札に加えて『王立魔法図書館』に魔力カウンターを一つ乗せまーす」
うわ、これで魔力カウンターが三つ。使用可能だ。
「『王立魔法図書館』の効果で、魔力カウンターを三つ取り除いてカードを一枚ドローします」
『すごい！　いきなりのドローラッシュ！　可愛い顔してやるぞブラマジガール！』
『今の一連の流れで、手札を消費するどころか逆にアドバンテージを得ている。確かにいい戦術だ』
「みんなーありがとー！」
お前はどこのアイドルだ。
「私は『王立魔法図書館』をリリースして『ブラック・マジシャン・ガール』をアドバンス召喚しまーす！」
『キターーーーーーーー！！』

「むー、ボクの時より全然歓声が大きい」
「どっちも観客に媚び売っている尻軽ですわ」
希冴姫、色々な人を敵に回す発言は止せ。
「バトルでーす！『ブラック・マジシャン・ガール』で『雷電娘々』を攻撃します！」
『1！』
『2！』
『サンダー！（万丈目）』
「『ブラック・バーニング』！」
「リバースカード『攻撃の無力化』！」
ブラマジガールの攻撃を、空間の渦が吸いこんでいく。
『アルカナ選手、足掻いています！　そこまでして『雷電娘々』を護りたい気持ちは僕にもよーく分かります！』
「セツ様。後でお話を」
Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆フラグが凄まじい勢いで増殖していく。
そろそろ命にかかわる。
「ご主人様の愛が、ボクを護ってくれたの……」
「お兄ちゃん？　後でさだめともお話、ね？」
死亡確定。せめて遺書は書かせてください。
「あちゃーそうきますか。私はカードを一枚セットしてターンは終了です！」
「……俺のターン。ドロー」
この後の処刑が確定している俺はテンションがどうも上がりづらい。
「俺は手札から『エンド・オブ・ザ・ワールド』を発動！　手札の『クィーンズ・ナイト』とフィールドの『雷電娘々』をリリースし、手札から『破滅の女神ルイン』を攻撃表示で儀式召喚する！」
『アルカナ選手、せっかく護った『雷電娘々』を儀式の贄としたー！？　許すまじ！』
「ご主人様ー？　しびれるお仕置きと刺激的なお仕置き、どっちが

いいかにゃー？」
　しびれるお仕置きでお願いします。こう、心臓マッサージみたいな。多分俺の心臓は止まっているから。
「……そしてわたくしは完全にただの生贄ですのね。これは念入りにお話をする必要が……」
「ジャーック！　どこだ！　お願いします助けてください！」
「主よ、ジャックならばとうの昔に精霊界に叩き帰されておるぞ。ルイン殿の手で」
「ルイーン！？」
　当のルインは知らん顔である。くそう！　やはり貴様は破滅の女神か！
「……俺はルインに『ダグラの剣』を装備。バトルフェイズ！」
　ルインの両手にナックルダスターのような不思議な形をした剣が握られる。
「『破滅の女神ルイン』で『ブラック・マジシャン・ガール』を攻撃！『滅光吸斬』！」
『きゃあああああ！？』
『ああっ！？　ブラマジガールがやられちゃった！』
『おのれ御堂！』
「そして『ダグラの剣』の効果により、相手に与えたダメージ分、俺のライフを回復する！」
　ブラマジガールＬＰ３２００
　セツＬＰ４７００
「更に『破滅の女神ルイン』は相手モンスターを戦闘で破壊した場合、もう一度だけ続けて攻撃することができる！『滅光吸連斬』！」
「きゃあああああ！」
　ブラマジガールＬＰ４００
　セツＬＰ７５００
『ああ！？　そんなあ！』
『引っ込め御堂―！』

『相手は女の子だぞ！』
『大人げないとは思わないのかー！』
黙れ外野。
「さすが私。強い」
そこ、自画自賛しない。活躍できなかったライムや希冴姫の殺気が酷いから。
「……とはいえ」
ここまではいい。正直物凄くデッキは回ってくれている。が、そろそろ手詰まりだ。このまま押し切れればいいが……。
「うぅ……私のターン、ドローします！」
『がんばれー！　ブラマジガール！！』
『御堂を殺せー！』
『吊るし上げろ！』
「みんなありがとー！　私、まだまだがんばるよー！」
『おおーーーー！！』
勝ってる気がしねえ。
「私は『見習い魔女』を召喚しまーす」
攻撃力の明らかに低いモンスターを召喚？　まさか……。
「私は手札から『ディメンション・マジック』を発動でーす！」
っやば……。
「『見習い魔女』をリリースして『マジシャンズ・ヴァルキリア』を攻撃表示で特殊召喚でーす！」
『『ディメンション・マジック』は相手モンスターを破壊して魔法使いを特殊召喚することができるカードです！　反撃だぁー！』
『こら！　解説は俺の役目だろうが！』
ルインが破壊され『ブラック・マジシャン・ガール』と良く似た風貌の魔術師『マジシャンズ・ヴァルキリア』が召喚された。
「俺のフィールドががら空きか……」
「……私の出番終わった。何故対策してなかったの」
「一枚しかない手札でそうそう対策ができるか！」

「バトルします！『マジシャンズ・ヴァルキリア』でダイレクトアタックでーす！」
だが、まだライフには余裕がある。しばらくなんとか耐えて……。
「この瞬間、私はリバースカードを発動します！」
「っ！」
マズイ！　このタイミングで発動するのは……。
「『マジシャンズ・サークル』！　この効果で、お互いにデッキから攻撃力２０００以下の魔法使い族モンスターを特殊召喚します！
『ブラック・マジシャン・ガール』！」
「俺のデッキには魔法使い族はいない……」
「じゃあ、改めて行きますねー！『マジック・イリュージョン』！」
「ぐあっ！？」
セツＬＰ５９００
「そして『ブラック・マジシャン・ガール』でもダイレクトアタック！『ブラック・バーニング』！」
「ぐあああああっ！？」
セツＬＰ３９００
くそ！　回復した分丸々奪われたか！
『やったぁー！！　ブラマジガールさん！　優勢です！　すごい！　強いッス！』
『だが、まだセツの方がライフでは大幅に上回っている。勝負はまだついていないぞ』
「俺のターン！　ドロー！」
……くそ。
「俺はカードを一枚セット。ターンを終了する」
『キタキタキター！　さあみなさん！　僕らのブラマジガールの勝利が近づいて来ました！』
言いたい放題言ってくれる。
「応援ありがとう！　私のターン、ドロー！」
さあて、正念場だな。

「私は『サイレント・マジシャンＬＶ４』を攻撃表示で召喚しまーす！」

レベルアップモンスター……。

「よーし、いっきますよー！『ブラック・マジシャン・ガール』でダイレクトアタックしまーす！　せーの……」

『ブラック・バーニング！！』

「ぐあああっ……」

セツＬＰ１９００

「次でーす！　『マジシャンズ・ヴァルキリア』でダイレクトアタックです！『マジック・イリュージョン』！」

「くぅ……」

セツＬＰ３００

『決まり！　これは決まりましたね解説のＸＹＺドラゴンさん！』

『……そうだな。これで『サイレント・マジシャンＬＶ４』の攻撃が通ればだが』

『通るッスよ！　いっけー！』

「『サイレント・マジシャンＬＶ４』のダイレクトアタック！『サイレント・マジック』！」

ここだ！

「トラップ発動！『正統なる血統』！　墓地から通常モンスター一体を特殊召喚する！　俺が呼び出すのは当然『クィーンズ・ナイト』！」

希冴姫、任せたぜ！

「セツ様！」

「あちゃー。それじゃあ戦闘は巻き戻されるから私はターンを終了します！」

『残念！　ブラマジガールの勝利は一ターン遠のいてしまいました！』

『……いや、どうかな』

『ＸＹＺドラゴンさん？』

「俺のターン！　ドロー！」
　俺はドローしたカードを確認する。……よし、イケる！
「行くぞブラックマジシャンガール！　俺の最強を見せてやる！」
「！」
『ま、まさか……』
「俺は手札から魔法カード『増援』を発動！　デッキから『キングス・ナイト』をサーチする！」
　やっぱり、最後に決めるのはお前だよ！
「『キングス・ナイト』を召喚！　効果によりデッキから『ジャックス・ナイト』を特殊召喚！」
　フィールドに『絵札の三銃士』が揃う。そして俺の最後の手札……。
「俺は魔法カード『融合』を発動！　絵札の三銃士を融合し、エクストラデッキから俺の最強騎士。今の俺自身を融合召喚する！　出てこい！『アルカナ・ナイト・ジョーカー』！」
『そ、そんなぁ～……攻撃力３８００の最強騎士……』
『……決まったな』
「あちゃー、私の負けかぁ……。でも、すっごく楽しいデュエルだったよ！」
「……ああ、俺もだ！」
「みんなも応援ありがとねー！　楽しかったよー！」
『俺たちも楽しかったよー！！』
　やつら、若干涙声だ。……ここで攻撃するのは鬼畜呼ばわりされそうだが……しないわけにもいかないな。
「バトル！『アルカナ・ナイト・ジョーカー』で『マジシャンズ・ヴァルキリア』を攻撃！『ロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」
「きゃあああああああっ！」
　ブラマジガールＬＰ０

「……なあ、なんでお前は俺に声かけてきたんだ？」
デュエルが終わり、群がってくる野次馬（暴徒とも言う）を適当にあしらい、最初から疑問に思っていたことをブラマジガールに聞いてみた。
「最初はもちろん、みんながなんだか楽しそうなことやってるなーって思って見に来たんだ」
そこで俺……精霊界と人間界を繋ぐ門を見つけたので、興味が抑えきれなくなって出てきた、と言うことだった。
「でも本当に楽しかった～。ねえセツくん、また来てもいいかな？　セツくんの周りにいれば、とっても楽しそうだから」
……当事者は結構命懸けだからな？　特に今回お前の登場で死亡フラグが立ちまくってるんだからな？
「まあ……好きにすりゃいいさ」
けど結局、そんな風に許してしまう。
「お兄ちゃんの優柔不断」
「セツはもっと節度を保ってください。セツだけに」
「すいません。そしてそのシャレはつまらん」
「い、いいじゃないですか別に！」
「……ふふっ」
ブラック・マジシャン・ガールはそんな俺たちを見て、本当に楽しそうに笑っていた。
「……しょうがないだろ。あんなふうに笑われちゃ。お前らはダメって言えるのか？」
あんなに幸せそうに、嬉しそうに笑う彼女を、拒絶することなんて……。
「言えます」
「消えろ魔女」
「目触りですわ」
「精霊分は潤っている」

「もうこれ以上増えて欲しくないにゃー」
「たまには空気を読もうと思わないのかお前らは！」
こいつらまったく容赦ねえ！　ただの一人も歓迎の言葉を吐く気がねえよ！
さだめと希冴姫に至っては最早ただの暴言だった。
「ふふっ、愛されてるんだね」
「……一人残らずヤンデレ化しても不思議じゃないあたりが最大の問題だがな……」
とりあえず遺書は常に携帯しておくことにしよう……。
「それじゃあ、今日はこれで帰りまーす！　ありがとう、楽しい一日だったよ！」
「そうか。それなら良かった……お、そうだ」
十代、悪いがセリフ借りるぜ。
「ガッチャ！　俺も楽しい一日だったぜ！」
そして、あわただしくも楽しい学園祭の夜は更けて……。
「さあ、それじゃあお話を始めましょう。セツ」
いかなかった。
「さあ、長い夜はまだ始まったばかりだよお兄ちゃん」
「邪魔なジャック殿もいませんし、今夜はじっくりとお話できそうですわね」
「……連行」
「黒焦げのお仕置きは準備できてるよー！」
……遺書を携帯しよう、と思いいたるのは、少しだけ遅かったらしい。
せめてダイイング・メッセージくらいは残したい次第であります。
「どうにかして死から免れることは……」
「あ、お兄ちゃん。さだめにお兄ちゃんを食べさせてくれるなら……」
「いっそ殺せよ」
ひと思いにざっくりと。

後夜祭で流れる人々の談笑が、どこかドナドナのような響きを持って俺の耳に響く。

それをどこか達観した眼差しで見つめながら、俺は女子たちに引きずられて寮の影まで引っ張り込まれるのだった。

第二期第二話「オールスター戦」（後書き）

学園祭の後編でした。お待たせした割にドタバタ過ぎてカオスですが。まとまりないですが。ちょっとスランプ気味。

セツのデッキは言うなれば光属性。希冴姫、ルイン、ライムが全員光属性なので無理やり同居させてみました。タイトルのオールスターはそのあたりが由来。

実際に作ったら間違いなく事故るでしょうね。融合と儀式を両立させようという時点で確実に。

ブラマジガールの口調が微妙。把握しきれていないというか……。

次回は……特に決まってませんが、海水浴かヒロインごとの個別短編かでしょう。ホワイトデーとかも考えていくつもり。

それでは、レーネスでした！

第二期第三話「ニャンニャンしよ♪」（前書き）

申し訳ありません大分遅くなってしまいました。
言い訳。
なんでもウイルス性の胃腸炎とかで九度二分とかいう高熱が出ましてしばらく伏せっておりました。今回の話もそんな中作成したものなので気になる点も多々あるかとも思いますので、その時は遠慮せず一言物申してください。
ではどうぞ。

第二期第三話「ニャンニャンしよ♪」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第三話「ニャンニャンしよ♪」

タイトルからしてギリギリ臭のする今回だが、賢明なる読者諸兄であればこの発言をかましてくれやがったどらねこが一体どこのどいつなのかは言わずとも察してくれると思う。そしてそこに悪意が何一つなく、ちょっとばかし語彙が残念故の過ちであることも同時に察してくれるとありがたい。

ただしどうやら俺の周囲の女性陣はあまり賢明ではないらしく、そのセリフが聞こえてきた瞬間にそれこそ沸騰石を入れ忘れたビーカーの薬品のごとく急激な沸騰を開始して、俺を魔女狩りか宗教裁判かと言わんばかりに吊るし上げ、希冴姫に至ってはヤケにイイ笑顔で鞭を用意し始めた。

「新しい遊び？」

この小首をかしげるアホの子（暫定）に一言物申したい。これはキミが招いた事態であり、遊びは遊びでもチョット大人向けのしかも良い子は真似しちゃいけない類の遊びだと。

「まあ落ち着け希冴姫。そしてさだめは俺の局部から手を離せシャレになってないんだよお前は！」

十字刑に処されているのをいいことに身動きできない俺をちょっと味見～とかしようとしてるんじゃない。アテナさんも興味津々で覗きこまない！　初期の純情清純ヒロイン路線はどこに消えた。

「まずは話し合おう。いいか？　古人曰く、話せばわかる、だ」
「それを言った人はそのまま情け容赦なくヌッ殺されたということを知っているよねお兄ちゃん」
　余計なことを。俺が言いたいのは結果ではなくそういった過程を経てこそ円満な人間関係は築かれるというごくごく一般的な常識なんだ。つまり問答無用で魔女裁判はどうかと思う次第であります。
「でもほら、希冴姫さんを見てよ。すっごくノリノリ」
「うん。鞭の素ぶりで真空刃が発生してるな。いっそ剣じゃなくて鞭で戦えばいいんじゃないかい？」
　というかいま重要なことはそこではない。
「？」
　そこで今行われている奇行を興味深そうに見学しているアホの子（断定）に大変残念な語彙を吹きこんだ背信者を突き止め、本物の魔女裁判にかけてやることだ。
「というわけでライム」
「ふにゃ？」
「先ほどのセリフを誰から吹き込まれたか、誤魔化すことなく正確に伝えることを要求する」
「ルイン様だけど」
「聞いたかお前ら！　魔女裁判にかけるべきはヤツだ！　立てよ国民！　決起の時は今こそ来たれり！」
　だから俺をここから下ろしてくださいお願いします（泣）。
「……どうします？」
「え、迷う余地あんの！？」
「とりあえず、ヤルことはヤッた上で解放するという方向でどうかな？」
「ノーーーーーーーーーーーーゥ！？」
　ライム、ライムさーん！　ヘルプ、ヘループ！
「助けたらニャンニャンしてくれる？」
「その言葉の表すところをライムさん自身の言葉でプリーズリピー

ト！」

その言葉はアウトですライムさん。むしろそれが発端ですから。

「ボクのデッキを使ってデュエルして！」

「ほら聞きましたかお嬢さん方！　ライムの言葉には決してキミたちの考えるような事実はなくごくごく健全な……」

「だからねお兄ちゃん」

「はい？」

「いま重要なのは、お兄ちゃんがその無抵抗な体をさだめの前に差し出しているという事実で……」

「ライム助けて！　デュエルくらいいくらでもして上げるから！」

「はーい♪」

決死の攻防戦の末、ギリギリ救出された俺は、ライムから詳しい話を聞き出していた。

その理由を要約するとこういうことだ。

「ボクのデッキを作ってくれるって言ったのにまだ使ってくれてない」

らしい。

そう言えばそうだ。あれから怒涛の展開が待ち受けていたもんだからそんな余裕がまるでなかった。

「オーケーじゃあ準備しておくか」

「相手はそこの脳筋姫で」

「……何故セツ様たちまでその呼称で迷いなくわたくしを見つめるのですか」

「いや、指まで指してるし」

「お姫様ですし……」

「この中で脳筋っていったら……ねえ？」

「妹君以外は納得しましたわ」

しかし、希冴姫がデュエルするところなぞ見たことないんだが……。

「ご心配なく。わたくしとて精霊の一柱。デュエルくらい可能です

わ」
「そっか。それじゃあ早速……」
「あ、待って待って！」
「ん？　どうしたライム」
「できればボクのデッキはご主人様が使って欲しいな」
「俺が？」
「ボクは自分でデュエルするだけなら自分のデッキを使えばいいんだもん。ボクはご主人様の作ったデッキでご主人様にボクを使って欲しいの」
……なるほど。理解できないでもない。
「じゃあ、そんな感じでいいか？　希冴姫」
「……どことなく不満が残りますが、仕方ありません。良いでしょう」
「よっし、んじゃこいつをセット、と」
ライムのために作ったデッキをディスクにセットする。希冴姫もどこからか自分用のデュエルディスク（ネイキッドといいカイバーマンといい、精霊のディスクはカッコイイな。ズルい）を取り出して腕に構えた。
「セツ様だからとて、手加減は致しませんわよ！」
「「デュエル！！」」
「わたくしの先攻！　ドロー！」
初めて使うデッキなので様子見のため先攻を譲る。
「わたくしは『切り込み隊長』を攻撃表示で召喚！　効果でわたくし自身を特殊召喚しますわ。カードを二枚セット。ターンエンドですわ」
なるほど。俺も良く使う『切り込み隊長』による『クィーンズ・ナイト』の一ターン防衛か。
「俺のターン。ドロー！　俺は『雷電娘々』を攻撃表示で召喚！　バトルだ！」
「やっちゃえー！　お仕置きサンダー！」

……相変わらず声高らかに宣言したくない攻撃名だ。
「『切り込み隊長』に『雷電娘々』で攻撃！『お仕置きサンダー』！」
『雷電娘々』から放たれた雷撃が、いつかとは逆に『切り込み隊長』を撃ち抜く。
「この瞬間、リバースカード『ガード・ブロック』を発動しますわ！　戦闘ダメージを無効にし、デッキからカードを一枚ドロー！」
お、上手い。モンスター破壊は防げないまでもダメージを無効にして手札補充か。俺の使ってた時はいつも手札不足に悩まされたもんだからな。
「俺はカードを一枚セット。ターンエンド！」
「わたくしのターン、ドロー！　わたくしは『キングス・ナイト』を攻撃表示で召喚し、効果を発動しますわ！『ジャックス・ナイト』を攻撃表示で特殊召喚。手札から永続魔法『連合軍』を発動し、バトルフェイズに入ります！」
！　まだ『融合』は来てないか！
「『ジャックス・ナイト』でその小生意気などらねこを攻撃しますわ！」
「ご主人様～！　ボクがやられちゃうよ～」
「わかってる！　そう簡単にやらせやしねえよ！」
「ご主人様……」
仮にもこのデッキの象徴なんだからな！
「トラップカード『サンダー・ブレイク』！　手札の『電池メン単3型』を墓地に送って効果発動！『ジャックス・ナイト』を破壊する！」
……すまん！　ジャック！
「っく！？　わたくしは手札から『死者蘇生』を発動し、ジャック殿を蘇生させますわ！」
今さっきやられたばかりのジャックが再びフィールドに呼び戻される。

……ジャック、お前はデュエルでもこき使われるんだな。合唱。
「わたくしはターンを終了しますわ！」
「だが『死者蘇生』の使いどころを間違ったな！」
「まさか、学園祭の時と同じように護ったどらねこを生贄に……？」
「にゃにゃっ！？　そ、それはあんまりだよ～！」
流石にそんな二度ネタはしないから安心しろ！
「俺は『死者蘇生』を使って墓地から『電池メン単３型』を特殊召喚！」
セオリーとしてはここから暴走召喚に繋げたいところだがその暴走召喚が手札にない。
「俺は蘇生した『電池メン単３型』をリリースして『充電池メン』をアドバンス召喚！」
正直セオリーガン無視も甚だしいが、ある意味これはライムのための接待デュエル（希冴姫の方はマジっぽいが）。出来るだけライムは生存させた上で勝ちたいところ（かなり厳しいが）。
……幸い相性はいい。押し切れれば何よりだ。
「『充電池メン』……攻撃力は……２４００！？」
「まだだぜ！　『充電池メン』はアドバンス召喚された場合、デッキから更に『充電池メン』以外の『電池メン』と名のついたモンスターを特殊召喚することができる！　俺が特殊召喚するのは『電池メン単１型』！」
フィールドに乾電池に手足がついた（そのままだが）モンスターが現れる。
「『充電池メン』はフィールドに存在する雷族の数×３００ポイント攻撃力がアップする！『充電池メン』の攻撃力は２７００！」
「くっ！？」
「俺はメインフェイズを終了し……」
「リバースカード『威嚇する咆哮』！　攻撃宣言は行わせません！」
ピクッ！
……なるほど。これがあるからさっきのターンで躊躇うことなく

『死者蘇生』を使ってきたのか。
「だが甘い！　俺はこのままメインフェイズ1を続行！　手札から魔法カード『魔霧雨』を発動する！」
「『魔霧雨』ですって！？」
「『魔霧雨』は自分の場の『デーモンの召喚』か雷族モンスター一体を選択し、選択したモンスターの攻撃力より低い守備力を持つ相手モンスターを全滅させる！　俺が選択するのはもちろん『充電池メン』……といいたいところだが『雷電娘々』！　ライム、お前だ！」
　ここはライムに花を持たせてやるべきだろう。攻撃力は十分だしな。
「にゃーんおっ任せー♪」
　ライムの放った雷撃が希冴姫のフィールドを包む霧に通電し、全てのモンスターを破壊する。
「代わりにこのターンバトルフェイズに入れないが、そもそも攻撃宣言を行えなくなってしまったことだし、丁度いいよな」
　『魔霧雨』は基本的に『ライトニング・ボルテックス』に使い勝手で劣る。俺も基本的には四枚目以降の『ライトニング・ボルテックス』のような気分で入れていたのだが、今のように『威嚇する咆哮』を使われた場合になら『ライトニング・ボルテックス』よりもアドが大きい。……まあ、あくまで限定された場合に限りだが。
「このっ……どらねこごときに……！」
「へっへーんだ。『連合軍』で攻撃力は上がっても守備力はザルだねー。これだから脳筋は……」
「くぅ……」
　雷の強さはその除去能力の高さ。種類こそ少ないが、遊戯王で除去って言ったら雷だ。『サンダー・ボルト』から始まり『ライトニング・ボルテックス』『サンダー・ブレイク』などなど他にも多数の除去カードが雷の名前を冠している。『魔霧雨』もその一つ。
「俺はカードを一枚セットしてターンエンド」

「わたくしのターンです！　ドロー！」
さて、どう立て直してくる？
「わたくしは『強欲な壺』でカードを二枚ドローしますわ」
出やがった。俺も同じことしといて言うのもなんだが、どうしてこうこの世界じゃこんなベストタイミングで『強欲な壺』が来やがるのか。『神の見えざる手』みたいな力でも働いているんじゃないのか？　↑正解。
「……更に『トレード・イン』！『ギルフォード・ザ・ライトニング』を墓地に捨て、カードを二枚ドロー！」
うわ、絶対事故るだろそのデッキ。
とは言えさっきあの三体を除去出来なければ全除去食らってたらしいので危なかったと言えば危なかったが。
「わたくしは更に『貪欲な壺』を発動ですわ」
「マジかよ……」
これが精霊補正か！
「……お兄ちゃんの主人公補正も大概だけどね」
後ろでさだめが呆れたように溜息を吐いている。
「墓地のモンスターは『切り込み隊長』『クィーンズ・ナイト』『キングス・ナイト』『ジャックス・ナイト』『ギルフォード・ザ・ライトニング』！　この五枚をデッキに戻してシャッフルしますわ」
さっき落とした『ギルフォード・ザ・ライトニング』まで利用するか。
「カードをドロー！　……セツ様。わたくし自身、決して雷を馬鹿にしているつもりはありません」
「ん？　ああ、そうだろうな」
ただライムが個人的に気に入らないんだろ。希冴姫は人の好き嫌い激しいし。
「ですから、わたくしも使わせていただきますわ！『ライトニング・ボルテックス』！」
「げっ！」

「己が力に焼かれなさいどらねこ！」
「にゃあああんそんなー！」
ライムを含めた全てのモンスターが雷で薙ぎ払われる。
コストとして捨てられたのは『放浪の勇者フリード』。
「わたくしは自身を攻撃表示で召喚し、バトルフェイズ！　すみませんセツ様。ダイレクトアタックさせていただきますわ！」
「くっ！」
セツＬＰ２５００
「ターンエンドですわ」
「……俺のターン！　ドロー！」
とりあえず、デュエルしてみてわかった。そもそも希冴姫はデュエル自体慣れてない。デッキ構築からして恐らく初心者だろう。本当にお嬢様の嗜み、くらいにしかやってなかったに違いない。
「だからこそ、そこに勝機はある！　俺はカードを一枚セット！　モンスターは出さずにターンエンドだ！」
モンスターは出せない。否、出さない！　なぜならこれは……。
「わたくしのターン！　わたくしは自らに装備魔法『団結の力』を装備しますわ！」
希冴姫のフィールドには自身が一体のみ。それでも攻撃力は８００ポイントアップの２３００！
「バトルですわ！　プレイヤーにダイレクトアタック！」
「リバース発動！『リビングデッドの呼び声』発動！　墓地から呼び戻すのは『雷電娘々』！」
「っ！　そこまでもそのどらねこに拘りますのね……」
なぜならこれはライムのためのデュエルだから！
「それでも、わたくしの攻撃は止まりませんわ！　そんな我儘猫娘、わたくしたちの団結の前では無力です！」
いや、希冴姫のフィールドにいるのキミ一人だし。確かに『団結の力』は付けてあるけども。
「『エレガント・ハーツ』！」

あ、技名決まってたんだ。
「あーん脳筋姫にだけは負けたくないよー！」
「安心しろって！　何のための俺だと思ってんだ」
「ご主人様？」
「俺の得意技は迎撃！　手札から『オネスト』の効果を発動するぜ！」
「そんな……」
「さっき言っただろ？　モンスターは『出さずに』ターンエンドってな！　行くぞ！『雷電娘々』の……いや、ライムの迎撃！『エンジェリック・サンダー』！」
「黒焦げになっちゃえ～！」
「くぁあ！？」
希冴姫ＬＰ２１００
「くっ！　わたくしはターンエンドですわ」
「俺のターン！　ドロー！」
しかし、案外悪くなかったなこのデッキ。フィールドの制圧力だけならトップクラスだ。
「俺は『ライオウ』を攻撃表示で召喚！」
「わたくしの、負けですか」
「俺も楽しかったよ。希冴姫」
「……今度は、わたくしにセツ様のデッキを使わせてください。きっと使いこなして見せますわ」
「……おう！」
俺はこの騒動を巻き起こした張本人に目を向ける。
「にゃははっ！」
……聞くまでもない。めちゃくちゃ楽しそうだった。
「よし！　じゃあ締めと行こうか！　ライム！」
「はいにゃ！」
「バトルフェイズ！　まずは『ライオウ』でダイレクトアタック！」
「くぅ！」

希冴姫ＬＰ２００
「ラストだ！『雷電娘々』のダイレクトアタック！『お仕置きサンダー』！」
「きゃあああああああっ！！」
希冴姫ＬＰ０

「で、満足したか？　ライム」
「うん！　とってもキモチ良かった！」
「そっか、そりゃ何より」
ライムで始めてライムで締めた。完全にライムの、ライムによる、ライムのためのデュエルだったからこれで満足してくれなかったらどうすればいいかと思っていたのでなによりだ。
「それにしても、精霊さんにとって自分のカードを使って貰うことってそんなに嬉しいものなんですか？」
アテナのふとした疑問に、希冴姫もライムも当然とばかりに頷いた。
「ある意味では、それがわたくしたちの存在意義とも言えますもの。己の認めた主君に自らの剣を捧げ、主の剣となり盾となる。それこそが至上の喜びといっても過言ではございません」
「まーボクみたいに自由気ままに遊び歩いてる精霊だって、やっぱり嬉しいもんなんだよ。自分を使ってデュエルしてくれるとさっ！　なんかほら、ドキドキワクワクしてもーぐっちゃぐちゃでっ！」
「は、はぁ……」
ライムの説明は要領を得ず、アテナたちも困惑気味だ。希冴姫がそんなライムを冷ややかに見つめながら補足する。
「……人を脳筋呼ばわりしておいて、オツムの足りないおバカはどちらですかまったく……。恐らく根源的なものなのでしょうね。潜在的に、わたくしたちはデュエルで使われることに喜びを見出すよ

うに出来ているのでしょう」
もちろん、何事にも例外はあるものですが。と付け加える。
……たしかに、カイバーマンとかが使われて喜ぶとはとてもじゃないが思えないな。
「とにかくっ！　ご主人様、またその内ボクを使ってね？　前はデュエルで使って貰うだけが存在意義じゃないって言ってたけど……やっぱり全然使って貰えないのは寂しいから」
「ライム……」
「だから……」
俺は不安そうに俯くライムの頭を撫でる。ちょっとツノが邪魔で撫で難かったが。
「悪かったな。そうだな、お前だって希冴姫たちと同じだ。俺の精霊、その一柱だ。差別しちゃダメだな」
「う、うん！」
「……わたくしと同じというのむぐっ！？」
「あ、あはは……たまには空気読みましょう希冴姫さん」
「むぐ……」
「そこで空気を読まない選手権世界一、さだめ選手の……」
「さだめさんも！」
……ったく。
「……じゅーぶん空気ぶち壊しだよ～」
「ま、このメンツで綺麗な空気保とうってのが間違いか」
「ご、ごめんなさい……」
「さだめもこのデュエル中ほっとかれて寂しかったんだよ」
「……デュエル中は勘弁してくれ」
そんなときまで周囲に気を使ってられるか。
「えへへっ！　じゃあそういうわけでっ！　ライムさんは今日、とっても楽しかったよ。また呼んでねご主人様……じゃなくて、キリリン！」
「き、きり？」

「ばーいにー！」
最後にわけのわからない呼び方をして、ライムは精霊界の方へと帰っていってしまった。
「……キリリン？」
「おそらく……」
「セツ＝切＝きりだからだと……」
「……相変わらず独特な奴だ」
苦笑する。
そんな、精霊と自分たちの関係を再確認した今回の騒動はそうして幕を下ろしたのだった。

第二期第三話「ニャンニャンしよ♪」（後書き）

というわけで、結構難産だったライムの回です。といいつつ半分くらいは希冴姫のターンですが。やっぱりどうしても正ヒロインとして今まで書いてきたアテナやさだめ、希冴姫辺りは書きやすくて目立っちゃいます。今回も、できるだけ目立たせないよう頑張りましたが……ホントはここにルインも出てきてたことを考えれば頑張った方だと思いたい。

今回は『魔霧雨』について。このカードは遊戯王ウィキでもあまりいい書かれ方されてないのですけど、個人的にはそんなに悪くないと思っている一枚です。確かにバトルが出来ないのは痛いんですが、手札コストを要求する『ライトニング・ボルテックス』よりも使いどころが多いのですよ。遊戯王において手札ってものがとても重要であることは疑いようもありませんし。

たとえば『創世神』以外がミラーフォースとかで吹っ飛んでも次のターンこれで巻き返せます。『ライトニング・ボルテックス』とくらべて攻撃的には使えませんが、防御や立て直しには結構使いやすい気がするのです。なので、自分の雷デッキには普通に入ってます。

まあ、どんなカードも使いようだと思いますよ。

それでは、レーネスでした！

第二期第四話「沈黙のダークホース」（前書き）

ちょっとずつ更新が遅れがちになってきましたレーネスです。ちょっと時間がかかりましたが、今回はクオリティ重視、のつもり。そこそこ上手く書けたつもりです（自画自賛）。

ユーキちゃん回です。今回はギャグでもシリアスでもなく完全に恋愛一色です。不思議だ。ユーキちゃんが完全にラブ担当と化している。

おそらくアルカナで最も恋愛色の強い話になりました第四話。ではどうぞ！

第二期第四話「沈黙のダークホース」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第四話「沈黙のダークホース」

「はぁ……」

アカデミアブルー女子所属、加藤友紀は物憂げな瞳で溜息を吐いていた。

「セツ君……なんか遠いなぁ……」

その視線の先ではさだめやルインに振り回されながら機嫌を損ねたらしいアテナを必死で宥めているセツの姿。

噂では今楽しそうにセツに抱きついているさだめが暴走し、それを『冥王竜ヴァンダルギオン』を使ったセツが劇的な勝利で止めたのだそうだ。

「ヴァンダルギオン……セツ君、もう戦士族は使わないのかな～……？」

自分とセツを繋ぐ唯一の接点。使うデッキ構成が似ている故の相談。セツがパーミッションデッキに変えてしまったのだったらもう自分との接点がなくなってしまうんじゃないか。そんな風に思う。

実際最近はセツと会話することも少なくなってきた。

「はぁ……楽しそうだな～」

本人としてはかなり必死なつもりだろうが、傍から見ている分には全員とても楽しそうにしている。

「はぁ……」

三度目の溜息。
「悩み事？」
そんな彼女の肩をポンと叩く影。
「あ、明日香さん！？」
「こんにちは」
「どうしたんですかこんなところで……」
「それは私のセリフ。どうしたの？　さっきから溜息ばかりじゃない」
「あ、あはは……」
「……セツかしら？」
「あぅ……」
直球。ぐぅの音もでないユーキに、クスリと笑みを浮かべる明日香。
「あからさま、かなぁ」
「あからさま、ね」
傍から見てもユーキがセツを気にしているのは明らかだったらしい。
「セツ君も気付いてるのかな……」
女子ということ以外はあまり自分と接点のない明日香が気付いているのだから、もしかしてセツも自分が気にしていることに気付いてくれているのか。そんな風に思う。
「……そうね。案外気が付いているのかも。彼、意外と鋭いし」
「だよね～」
顔が熱い。告白したわけでもないのに気付いてくれてる。それは嬉しいような何だか恥ずかしくてもやもやするような、不思議な感覚だった。
「少なくとも、今加藤さんが元気をなくしていることには気付いているはずよ。そういうところはずば抜けて鋭いから」
「そう、なのかな」
「ただ、セツにも立場があるから。自分から話しかけるのは難しい

わね」
　つまり、自分から相談しなさいという遠回しな発破だろうか。
「……でも、あの中に飛び込んで行くのはちょっと……」
「……まあ、そうかもね」
　さだめたちのように自分からセツに飛びついて行けるのなら、こんな風に悩みはしない。
「……アテナちゃんはすごいなぁ……」
　一目見て心に衝撃が走ったというアテナ。セツに直接、自分の気持ちをぶつけたアテナ。その勇気、というか素直さが心底羨ましい。
「それは人それぞれよ。一目惚れもそうだけど、お友達からの恋愛も普通じゃないかしら？」
「それはそうだけど～」
「いつもみたいに話しかければいいんじゃないかしら。前は良く話していたんでしょう？」
「でも……」
　いつもは大体、デッキ作りについての相談ばかりだった。それもデッキのコンセプトが似ていたからで……。
「セツは……そんなの気にしないわよ。まだアルカナデッキも使っているみたいだし」
「そう……だね」
　成せばなる。成さねば成らぬ、何事も。その言葉を胸にユーキ、今発進……！
「あ、あのセツく……」
「オアシス発見！　確保そして急速離脱ー！！」
「ひゃあああああああああ？」
　声をかけようとした瞬間にセツの方から腕を引っ掴まれて連れ去られた。
「明日香ー！　後よろしくぅー！」
「はいはい。無理でも怨まないでね」
　最初から打ち合わせてあったかのように（きっとそうなのだろう）

一言ずつのやり取りでその場を明日香に任せたセツに連れ回され、最終的に辿りついたのはユーキ自身の部屋だった。

「はぁ、はぁ……」

「大丈夫かユーキちゃん？　悪いな。いきなり拉致るみたいに連れてきて」

「う、ううん。元々わたしが声かけたかったから～」

「そうそう、俺も最近ユーキちゃんと話してないなーとは思ってたんだけどな。学園祭の時とかも結局巻きこんでおいてほったらかしちゃったし」

「あはは～あの時は色々忙しかったからね～」

ファッションショーとかブラマジガールとか。その後もお仕置きフラグの破棄に忙しかったのは確かだが、それでもほったらかしにしてしまったことには違いない。

「それで、何かな？」

「あ、えっとね～。またデッキを見て欲しいな～って……いい、かな？」

「もちろん。任せてくれ」

そんなの、断るわけがない。

「よかった～セツ君最近デッキ変えちゃって、もしかしたら見てくれないかもって不安だったんだ～」

「そんなことねーって。別に同じ戦士デッキだからって見てたわけじゃないしさ」

「えっ……」

ユーキちゃんの頬が少し色付く。

「え、えっと、えっと……と、とりあえずお願いしますっ！」

「ほい、任されました」

わたわたとデッキケースを取り出すユーキちゃんに笑いかけてデ

ッキを受け取る。
「ふむ……」
基本的には以前と変わらない。『サイレント・ソードマンＬＶ５』をエースにした戦士族ビートだ。
「ちょっと最近伸び悩んじゃって……『サイレント・ソードマン』だけだとちょっとパワー不足なのかなって」
「ふーむ……ユーキちゃん、確か引きが弱いって言ってたっけ？」
「あ、うん。だからリクルーターとかも多めに入れてるんだけど……」
「うーむ……」
俺が精霊界で学んだことだ。自分に合ったデッキで、自分のデッキを信じていれば、必ずデッキは答えてくれる。なら……。
「ユーキちゃん『サイレント・ソードマン』は手札に来る？」
「うん。良く来るよ」
このデッキに『サイレント・ソードマン』は二枚しか入っていない。それでも良く来てくれるユーキちゃんのフェイバリット。なら……。
「『サイレント・ソードマン』を軸にして大幅にいじってみよう。多分だけど、その方がいい」
もしかしたらこいつは、俺と似ているかもしれない。
「ユーキちゃん、カードアルバム出してくれるかな？　ちょっと大きく改造してみよう」
「あ、うん。わかったよ」

そしてああでもないこうでもないと首をひねりながら数日間。さだめたちの妨害をかわしながら組み立ては試し組み立ては試しと試行錯誤した結果……。
「はは……こりゃいいや。完成だ」

「か、勝っちゃった？」
俺のアルカナデッキが為す術なく敗れるほどのものが出来上がった。
「こいつは……皆にお披露目だな」
「セツ君とデュエルするの？」
「……いや」
こういうのにもってこいの奴がいる。そいつは……。
「……ええー！？」

「デュエル？　おう！　もっちろんいいぜ！　セツとか？」
そう、ご存知遊城十代。三幻魔の復活を阻止し、陰ながらアカデミアのカリスマと言われ始めているこいつだ。
「いや、俺じゃない。ユーキちゃんとやってみて欲しいんだ」
「よ、よろしくお願いします～」
ユーキちゃんは当初絶対勝てないと及び腰だったのだが、ここに来てようやく腹を決めたらしい。若干どもりながらもしっかりと頭を下げた。
「良いぜ！　今からか？」
「ああ。こっちの方で準備を整えておいた。デュエル場でな」
「デュエル場？　使用許可とかとんなくていいのかよ」
「心配すんな。許可はとっくに取った」
その辺抜かりはない。
「観客も揃ってる。ちょっとしたイベント並みだぜ？」
「マジかよ！　相変わらずそういうの得意だな～セツ」
「まあな。とにかく、そういうわけだから行こうぜ」
「ああ！　どんなデュエルになんのかな～？　今から楽しみでしょうがないぜ！」
「ほら、ユーキちゃんも十代くらい気楽に行こうぜ」

「あはは……流石にちょっと無理かも」
確かに。十代くらいは流石に無理か。
「まあとにかく。大丈夫だ。ユーキちゃんならいけるよ。自分のデッキを信じて」
「う、うん！　セツ君が、わたしのために頑張って作ってくれたデッキだもん。きっと勝って見せるよ！」

『レディースアーンドジェントーメーン！　みんなー！　元気ー？　ライムだよー！』
会場はすでにライムが盛り上げてくれていた。というか勝手に暴走していた。
『今回はボクが司会進行実況解説全部一人でやっちゃうよー！』
「やっちゃうよじゃねえ！　解説は俺と三沢がやるって言っといただろうが！」
勝手なことを言い出した馬鹿を止めるために飛び出して行ってマイクを奪う。
『皆、今日はいきなりごめんな！　今回はちょっとしたサプライズ企画！　今やアカデミアでも知らぬもののいない遊城十代と、ブルー女子所属の加藤ユーキちゃんのエキシビジョンマッチだ！　楽しんで行ってくれると嬉しい！』
「そ、そういう設定になってるのか……相変わらず仕事がはえーな」
『早速デュエリストのお二人はフィールドにどぞー！』
「わ、わわ……」
ハイテンションまっしぐらのライムがユーキちゃんの背を押して舞台上に。
『それでは、今回の舞台セッティングから実況まで受け持ってくれましたキリリンと三沢っちの紹介でーす！』
『あー、今回は三沢と二人で解説をやろうと思っている。俺は主に

ユーキちゃん側の解説な。ユーキちゃんのデッキに関しては構築に俺も大分関わっているから任せてくれ』
『三沢だ。十代サイドの解説を主にやらせてもらう。今日はよろしく頼む』
さすが三沢。ソツがない分全く記憶に残らない自己紹介だ。
『そんじゃ早速行ってみよー☆　遊城十代ばーさす加藤ユーキ！　デュエルスタンバイ！』
「なんかめちゃくちゃ怒涛の展開だけど……よろしくな！　デュエル！」
「う、うん。お手柔らかにお願いします。デュエル！」
『ボクの独断で先攻はユーキにゃん！　行ってみよー！』
またあいつは勝手な……まあいいか。
「わたしのターン、ドロー！」
さあ、見せてくれよ。ユーキちゃんのデュエル。
「わたしは『シャインエンジェル』を攻撃表示で召喚！　手札から魔法カード『封印の黄金櫃』を発動。デッキから除外するのは『レベルアップ！』だよ。更にリバースカードをセットしてターンを終了するよ～」
『ユーキにゃんのモンスターは『シャインエンジェル』だー！　この辺はどう見ますか？　解説席のお二人！』
『妥当な布陣だろう。モンスター一体とリバースカード一枚は基本に忠実で事故を起こしにくい』
『だな。俺はユーキちゃんのここからの展開を知っているから詳しくは言えないが、上々の立ち上がりだ』
「へへっオレのターンだな！　ドロー！　オレは手札から魔法カード『融合』を発動！　手札の『Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマン』と『Ｅ・ＨＥＲＯバーストレディ』を融合！　『Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウイングマン』を融合召喚！」
『イキナリの融合召喚！　フェイバリットカードの登場だー！』
『相変わらずの鬼引き……まあこのくらいならそうでもないか。と

もかく『E・HEROフレイム・ウイングマン』が一ターン目から召喚か……』

『十代の得意技はあの速攻だからな。俺もあいつとデュエルした時は『融合』を封じることを最優先にしたよ』

『で、結局その他のE・HEROサポートカードの対策をしてなくて負けたんだな』

『……うるさい』

『まあ見てなって。ユーキちゃんが今度は完全な、遊城十代封じをやって見せてくれるからさ』

『何？』

「バトルだぜ！『E・HEROフレイム・ウイングマン』で『シャインエンジェル』を攻撃！『フレイムシュート』！」

『おおっとダイダイ、リバースカードをまったく気にも留めない攻撃宣言！』

十代→じゅうだい→だいだい→ダイダイなんだろうな。ライムのネーミングは毎度毎度わけわからん。

『まだ序盤。例えリバースカードで迎撃されたとしても立て直すのは難しくない。問題はないだろう』

『……まあ、あいつの場合は終盤であっても迷わず攻撃するだろうがな』

流石に三沢の解説は堂に入っている。筆記トップクラスは伊達じゃないな。

「きゃあっ！」

『E・HEROフレイム・ウイングマン』の炎弾で『シャインエンジェル』が黒焦げになる。

ユーキLP3300

「『E・HEROフレイム・ウイングマン』の効果発動だぜ！　相手モンスターを戦闘で破壊したとき、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「きゃああっ！」

ユーキＬＰ１９００
「く……ぅう。わたしは『シャインエンジェル』の効果を起動します！」
『さあ、ユーキにゃんは『シャインエンジェル』の効果を起動しました！』
『『シャインエンジェル』は戦闘によって破壊されたとき、自分のデッキから攻撃力１５００以下の光属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚するリクルーターだ。まあ、ユーキちゃんのデッキなら何を呼ぶかは決まってるな』
「わたしはデッキから『サイレント・ソードマンＬＶ３』を攻撃表示で特殊召喚します！」
『レベルモンスターか。なるほど。万丈目の『アームド・ドラゴン』でもそうだが、貧弱な攻撃力しか持たない初期レベルはリクルーターから出せば安全に進化できる』
『たった攻撃力１４００の『シャインエンジェル』を攻撃表示で出したのは、攻撃を誘うための布石だ。『サイレント・ソードマン』はＬＶ３さえ乗り切ってしまえば場持ちがいい』
「そうこなくっちゃな！　オレはカードを二枚セットしてターンエンドだぜ！」
「わたしのターン、ドロー！　このスタンバイフェイズで、わたしの『サイレント・ソードマンＬＶ３』をレベルアップ！　デッキから『サイレント・ソードマンＬＶ５』を攻撃表示で特殊召喚します！」
「攻撃力２３００……『Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウイングマン』の攻撃力を上回ってる！？」
「行きます！『サイレント・ソードマンＬＶ５』で『Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウイングマン』を攻撃！『沈黙の剣ＬＶ５』！」
「トラップカード発動！『ヒーローバリア』！『サイレント・ソードマンＬＶ５』の攻撃を無効にする！」
「させません！　リバースカードをチェーン発動！『王宮のお触れ』

！　トラップカードの効果を無効にします！」
「っならオレは速攻魔法『非常食』でライフを回復するぜ！」
　十代ＬＰ５０００
『『サイレント・ソードマン』に『王宮のお触れ』……セツ、まさか彼女のデッキは』
『ああそうだ。『サイレント・ソードマン』と『王宮のお触れ』によって相手を封殺する。正にサイレント（沈黙）デッキ、とでも言えばいいか？』
　『サイレント・ソードマンＬＶ５』の剣が『フレイム・ウイングマン』を両断する。
「ぐ……あぁ！」
　十代ＬＰ４８００
「私は『サイレント・マジシャンＬＶ４』を攻撃表示で召喚。カードをセットしてターンを終了するよ」
「やるな……オレのターン！　ドロー！」
「この瞬間『サイレント・マジシャンＬＶ４』に魔力カウンターが一つ乗るよ」
「オレは手札から『融合回収』を発動！　墓地の『Ｅ・ＨＥＲＯバーストレディ』と『融合』を手札に戻す！　そして『融合』！　手札の『Ｅ・ＨＥＲＯバーストレディ』と『Ｅ・ＨＥＲＯクレイマン』を融合！　召喚するのは『Ｅ・ＨＥＲＯランパートガンナー』だ！」
　十代のフィールドに数少ない女性型Ｅ・ＨＥＲＯが召喚される。
「『Ｅ・ＨＥＲＯランパートガンナー』は守備表示でも相手プレイヤーに攻撃力を半分にしてダイレクトアタックすることができる！　行け！『Ｅ・ＨＥＲＯランパートガンナー』のダイレクトアタック！『ランパート・ショット』！」
「きゃああっ！」
　ユーキＬＰ９００
『まずいな……『Ｅ・ＨＥＲＯランパートガンナー』の守備力は２５００。『サイレント・ソードマン』も『サイレント・マジシャン』

もランパートガンナーを倒せない』
『……と、思うよな』
『何？』
「オレはこれでターンエンドだぜ。さあどうする加藤さん！」
「えへへ……やっぱり遊城くん強いね。思ってたよりずっと早くてびっくりしたよ」
確かに、ロックが揃うまでの僅かな間に二体の融合ヒーローはキツイ。だが、それでもまだ予測の内。Ｅ・ＨＥＲＯが速攻デッキなのは俺もユーキちゃんもよくわかっている。
「それでも、わたしだって負けたくない。セツ君と一緒に、頑張って作ったデッキだもん！　こ、子供みたいなものだよ！」
……言葉のチョイスが危険だ。
その単語をチョイスされると後で非常に大変だ。無論俺が。
ほらほら！　すでになんか視線が痛い！　さだめはもちろんのこと何故かアテナの視線が一番痛い！
そんな俺の戦慄をよそにデュエルは終盤戦へ。
「ドロー！　この瞬間、わたしが除外していた『レベルアップ！』が手札に戻るよ！」
『……そうか！　最初に『封印の黄金櫃』で除外していた……』
『ああ、そうだ。これでほぼ完成だな』
「私はその『レベルアップ！』の効果で『サイレント・マジシャンＬＶ４』をレベルアップ！　デッキから『サイレント・マジシャンＬＶ８』を特殊召喚するよ～」
「攻撃力……３５００！？」
「バトル！『サイレント・マジシャンＬＶ８』で『Ｅ・ＨＥＲＯランパートガンナー』を攻撃！『サイレント・バーニング』！」
「うあっ！？」
ランパートガンナーがなすすべなく破壊される。
「そして『サイレント・ソードマンＬＶ５』でプレイヤーにダイレクトアタック！『沈黙の剣Ｌｖ５』！」

「うわあああっ！」
十代ＬＰ２５００
「私はターンを終了します！」
「くぅ……オレのターン……ドロー！」
さて……ここが山場だな。
いつも土壇場で逆転のカードを引く十代のディスティニードロー。
今回はどうか……。
「オレは手札から『ホープ・オブ・フィフス』を発動するぜ！　墓地の『Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマン』『Ｅ・ＨＥＲＯバーストレディ』『Ｅ・ＨＥＲＯクレイマン』『Ｅ・ＨＥＲＯフレイム・ウイングマン』『Ｅ・ＨＥＲＯランパートガンナー』の五体をデッキに戻す！」
うわ……。
『あのカードは発動時、手札とフィールド上に他のカードが存在しない場合、デッキから三枚カードをドローできる。十代お得意のドロー加速だ』
ユーキちゃん……ちょっとミスったな。
「行くぜ加藤さん！　オレは手札から『強欲な壺』を発動！　デッキからカードを二枚ドロー！　さらに『Ｅ－エマージェンシーコール』を発動！　オレはデッキから『Ｅ・ＨＥＲＯエッジマン』を手札に加える！　そして『融合』！」
『マジかよ……』
『これが、十代の引きの強さだ』
もうどうにでもしてくれ。こりゃお手上げだわ。
「オレは手札の『Ｅ・ＨＥＲＯスパークマン』と『Ｅ・ＨＥＲＯエッジマン』の二体を融合！『Ｅ・ＨＥＲＯプラズマヴァイスマン』！」
あー……。
「オレは最後の手札を捨てて『Ｅ・ＨＥＲＯプラズマヴァイスマン』の効果を発動！『サイレント・マジシャンＬＶ８』を破壊する！」
「あ……」

雷が沈黙の魔術師を巻き込み弾けた。
「そしてバトルフェイズ！『Ｅ・ＨＥＲＯプラズマヴァイスマン』で『サイレント・ソードマンＬＶ５』を攻撃！」
「きゃあっ！？」
ユーキＬＰ６００
「オレはターンエンドだぜ！」
「……」
ユーキちゃんは呆然としていた。流石に、切り札二体を一ターンで倒されるとは思ってなかったのだろう。
「……それでも」
「ん？」
「それでも、わたしは諦めたくない。このデッキは、セツ君と一緒に頑張って作ったの。アテナちゃんたちとも遊んで、すっごく疲れてる中でもセツ君いつも来てくれて……デッキ作り手伝ってくれた。だから……もう無理って諦めることだけは、したくない！　ドロー！」
ユーキちゃん……。
『……アテナくんといい、よくよく愛情深い娘に慕われるじゃないか』
『……うっせい。今話しかけんな』
不覚にも感動した。そこまで大切に思ってくれることに。そしてちょっと罪悪感。ユーキちゃんを今まで疲れた時の清涼剤のようにしか見てなかったことに。
「わたしは手札から『地砕き』を発動！『Ｅ・ＨＥＲＯプラズマヴァイスマン』を破壊します！」
最後まで、ユーキちゃんは諦めてない。俺は十代のドローの時点で諦めてしまったのに。
「わたしは『サイレント・ソードマンＬＶ３』を攻撃表示で召喚！　プレイヤーにダイレクトアタックします！」
「ぐあぁっ！」

十代ＬＰ１５００
「ターン、エンドです」
『わからない。これなら、これならまだ……』
『サイレント・ソードマンＬＶ３』をレベルアップさせることができれば……！
「オレのターン！　ドロー！」
どうだ！？
「……加藤さん」
「……」
「ガッチャ！　めちゃくちゃワクワクするデュエルだったぜ！」
「あ……」
「オレは手札から『戦士の生還』を発動！　墓地の『Ｅ・ＨＥＲＯスパークマン』を手札に戻し、攻撃表示で召喚！　そして『サイレント・ソードマンＬＶ３』を攻撃！『スパークフラッシュ』！」
「きゃあああああっ！」
ユーキＬＰ０
『勝負、ありだな』
『……ああ』
『決着ー！！　最後の最後に激闘を制したのは、流石貫禄を見せつけた遊城十代選手だー！』
自分を負かした十代に対する大歓声の中、それでもユーキちゃんは涙を見せず、ただ俯いていた。

「ユーキちゃん」
「あ……セツ、君」
デュエルの後、俺は無理言って三沢に後片付けの陣頭指揮を変わってもらい、ユーキちゃんのところに来ていた。
「おしかったな」

「あはは……でも、ごめんね～負け、ちゃった……」
「いや……」
確かに、プレイングミスはあった。『レベルアップ！』で『サイレント・マジシャン』ではなく『サイレント・ソードマンＬＶ５』をレベルアップさせれば、間違いなくユーキちゃんの勝利だっただろう。ただ、ああすれば両方のモンスターを進化させられる。決して間違った判断ではなかった。
「それよりも、俺はユーキちゃんに謝ることがある」
「え？」
「ごめん。最後まで信じてあげられなくて、ごめん」
俺はユーキちゃんの勝利を諦めた。十代の引きを見て、もう無理だと考えてしまった。自分の張った『王宮のお触れ』で罠も使えず、切り札すら倒されてしまったあの状況でプラズマヴァイスマンを倒す手立てはない。もう負けるだけだと考えてしまった。
「でも、ユーキちゃんは諦めてなかった。だからきっとあの場面で『地砕き』が引けた。俺たちで作ったデッキを信じていたから」
ユーキちゃんは俺を信じてくれたんだ。けど俺はユーキちゃんを信じきれなかった。
「だから、ごめん」
深く、頭を下げる。けれどユーキちゃんはクスリと笑って頭を上げるようジェスチャーしてきた。
「いいの。きっとね、それは想いの差だから」
「想いの差？」
「そう」
ユーキちゃんは俺を真っ直ぐに見詰める。
「わたしは、セツ君のことが好き」
「それは……」
驚きは、なかった。やっぱり、とすら思った。自意識過剰かとも思ったが、それでもきっとそうなんだろうと思っていたことだった。
「アテナちゃんみたいに一目惚れじゃなかったけど、気が付いたら

好きになってた。もう、どうしようもないくらいに」
普段の控えめな立ち振る舞いからは考えられないくらいにはっきりとした告白。
「でも、セツ君はまだわたしのことを仲のいい女友達としか思ってない。ちょっと自惚れてもいいのなら、彼女候補くらいには入ってくれると嬉しいけど……」
それは、決して自惚れじゃない。少なくとも、アテナたちを除けば一番好きなのはユーキちゃんだろう。
「でも、やっぱりわたしの想いまでは届いてない。だから、これは想いの差。どうしようもないくらいに好きな人を最後まで信じられるのは当然。でも、あの場面じゃ普通は勝てないって思うのも当然。全然不思議じゃないよ」
「ユーキ、ちゃん」
「答えはいらない。今聞いたって悲しいだけだから。でも……」
――これからは、遠慮しないから。
そう言い残して、ユーキちゃんは寮の方まで戻っていってしまった。
「はぁ……」
緊張、した。
今までもアテナたちに告白されたけど、思いがけぬところからだったり緊張している余裕のないものばかりだったから、ここまで普通に、けど強烈に告白を意識するのは実は初めてかもしれない。
デュエル場の方からはあわただしい声が聞こえてくる。
戻らなくちゃ、とも思うのだが、ちょっとしばらくは休んでから行こうかと思う。
せめて。
この顔の赤みが引くくらいまでは。

第二期第四話「沈黙のダークホース」（後書き）

間話のくせに下手すると本編より力入れて書きました。そしたらなんと過去最長の話に。ダークホース覚醒編です。アテナはもちろんさだめも希冴姫も告白してるんですけど、告白の強烈さはセツの中で群を抜いているユーキちゃん。相変わらず恋愛だといいところガシガシ持っていく娘です。

デュエルの方は何気に初となる十代戦。まさかユーキちゃんでやるとは思ってませんでしたが。ちなみにランパートガンナーはアニメ版の効果です。ＯＣＧだとモンスター無視して直接攻撃はできません。あしからず。

次はホワイトデーでしょうか。……またユーキちゃんが出てきそうです。おいしいところを持って行きそうです。がんばれ、アテナ！

それでは、レーネスでした！

※第四話として置き換え。

番外2「もはや神スキル」（前書き）

段々セツが天才万能キャラになってきた番外2です。ホワイトデーです。今回は割とほのぼの、かな？　そんなに笑い要素も強くないですし、あんまり面白くはないかも……。

折角のイベントデーなのに自信なさげなレーネスですが、とりあえずどぞ！

番外2「もはや神スキル」

アルカナ～切り札の騎士～

番外2「もはや神スキル」

3月14日。

言わずと知れたホワイトデー。

この日財布が軽くなればなるほど世間では勝ち組と呼ばれ、嫉妬と羨望の眼差しで見られることになるらしい。

俺はと言えばこの日は毎年さだめにせがまれ（脅され）て手作り菓子、主に飴の類を渡して終了、というのがパターンだった訳だが。

「今年は、そういうわけにもいかんよなぁ……」

アレが順当なバレンタインの贈り物であったかはさておき、アテナからも一応は受け取ったことになる（微妙に納得がいかないが）。ユーキちゃんからは普通に受け取っているし、状況が状況だけに貰っちゃいないが世話になっている礼としてさだめや希冴姫、ルイン辺りにも渡してやるのが筋ってもんだろう。

「……そういえば、さだめから貰わなかったのは初めてだな」

毎年何かしら混ざってはいたものの、さだめからは毎年貰っていた。そもそもクリスマスや元旦を一緒に過ごさなかったのも実は初めてだ。こう考えてみると、俺も大分さだめに依存していたのだろうかという気になってくる。

「ずーっとずーっと一緒にいたんだもんな……」

っと、いかんいかん。ついしんみりとしてしまった。俺は首を振

って雑念を追い出し、作業を再開した。

一方ガールズサイド。

「セツ、覚えていてくれているでしょうか……」

「アテナさん、バレンタインのことは知ってるけど、あれでお返し貰おうってのは虫が良すぎるんじゃないかな」

「う……」

「……まあ、お兄ちゃんなら大丈夫でしょ。何にも渡してないさだめの分すら用意してそうなくらいだし」

流石に兄妹。セツの行動は完全に読まれていた。

「っていうか、お兄ちゃんに限ってホワイトデーを忘れることはないよ。さだめがしっかり毎年刻みつけておいたし」

訂正。セツの行動は完全に掌握されていた。

「お兄ちゃんの飴細工はすごいよー。女としてのプライドがどうとか、そんなこと言ってられないくらいには」

「……ジャック殿に対しても思いましたけど、セツ様にできないことはないのですか？」

「お兄ちゃんなんだかんだで天才肌だから。本人は器用貧乏なだけって言ってるけど」

少なくとも無駄スキルに関しては天才だろう。勉強や運動もやって出来ないことは基本的にない。

「あ、でもお兄ちゃん泳げないよ」

「そうなんですか？」

「なんか『人類は地上で生活することに慣れ、水かきやエラも捨てて特化してしまっているのだから態々ホームからアウェーに移る必要はない』とかなんとか言いワケしてたけど」

「カナヅチなんだね～」

「ちょっと意外ですわね」

「おかげで水着イベントが起こせなくって……」
「……それは逆に僥倖」
「どういう意味かな？　ルイン」
「洗濯板」
ルインはオブラートという言葉を知らなかった。
「じ、自分が余裕だからって……」
「幼児体型」
「がふっ！？」
「寸胴」
「……」
「リバーシブル体型」
「も、もうやめてください！　さだめさんのライフはとっくにゼロです！」
しかも容赦なかった！
「は、話を戻しましょう。とにかく、セツはきっと用意してくれていると。なら後は一体どういうシチュエーションで渡されるんでしょうか？」
「……アテナちゃんみたいな方法じゃなければなんでもいいかなー？」
「あうっ」
「バレンタインにロウソクプレゼントは論外」
「うぅ……」
「そもそも何をトチ狂ったらロシアンルーレットなバレンタイン……」
「る、ルインさん？　このままだとわたしたち全員再起不能になっちゃうよ～」
「……恐らくですが、それが狙いなんじゃありません？」
事実、すでにさだめとアテナは二人仲よく撃沈している。
「うぅ……き、きっとお兄ちゃんのことだから全員まとめて、で確定だよ」

なんとか復活してきたさだめがそう分析する。
「確かに、セツ君は周りに角が立たないようにするよね～きっと」
「参考までに、セツ様はこれまでどんな形でお返しをしていたんですの？」
これは唯一経験者のさだめに聞くしかない。
「別に、普通だよ？」
「……そうでしょうか？　セツとさだめさんの普通は信用ならない気がします」
「同感」
「盆栽渡されたと思ったら飴細工だったり」
『突飛！』
「普通だよね」
「どこも普通じゃないですよ！　今のシチュエーションのどこに普通が入り込む余地がありましたか！」
「シャンパンタワーのグラスが飴細工だったり」
「だからその言葉のどこに『普通』と言う言葉を使うつもりですの！？」
「え？　ホワイトデーと言えばシャンパンタワーでしょ？」
「貴方達兄妹は常識を一から学び直すべき。早急に」
「もしかして、飴でステンドグラスも非常識？」
「……それを本気で常識だと思ってるの……？」
「とりあえず、セツが路頭に迷うことはないというのがよくわかりました」
無駄スキルだけで一財産築けるだろう。もはや無駄とつけるのもおこがましいほどの才能だが。
「お兄ちゃん昔からヘンなところに凝る癖あったからねー。今年はどんな細工を見せてくれるか……」
「……なんかもう、シチュエーション云々よりもセツの技巧の方が楽しみになってきました」
ギスギスするよりは圧倒的にいいだろう。

「前に百八の無駄スキルとか言ってましたけど、ホントのところどれくらいあるんですか？」
「うーん……そこら辺はさだめにもよくわかんないんだよね。でも、ホントに百八くらいあっても不思議じゃないよ」
「さだめちゃんでもセツ君の知らないことあるんだねー」
「いや、お兄ちゃんの無駄スキルが節操無さ過ぎて把握しきれないんだよ」
それは確かに。いつの間にか増えたりもするのでなおさらだろうか。
結局、ホワイトデーのことについて話していたはずがセツの無駄スキル談議に没頭してしまうアテナたちなのだった。

そしてホワイトデー当日。
数日前からセツとの接触やレッド寮に近づくことを禁じられていたアテナたち（希冴姫やルインも追い出されてアテナたちの所に泊まった）は気が気でなく、朝からそわそわするのを抑えられなかった。
「……」
「……」
「……」
「……」
ピッピー。
「着ました！」
「レッツゴー！」
「待ちなさい」
セツからのメールを読むこともせず女子寮から飛び出そうとするアテナたちを制止する影。

「まったく……セツからきっとこうなるからって聞いていたけど、本当に向こう見ずね貴女たち」
「明日香さん！」
「どうしてここに？」
「……ここ、女子寮なんだからいるのは当り前でしょう。私は伝令みたいなものよ。セツから貴女たちがメールも読まずに飛び出そうとするかもしれないからって」
本当にその通りになるんだから。と若干呆れ顔で溜息を吐く明日香。
「メール？」
そういえば、セツからのメールというだけで中も見ずに飛び出してしまった。
代表してアテナがそのメールを読みあげてみる。
『おはよう。今日はホワイトデーだが、ちょっとした余興ついでにパーティのようなものを開いてみることにした。よって来訪の際は正装で来ること』
「……正装」
「そ、そんなの持ってないよ～」
「……パーティドレスですか。困りましたね。ドレスの類は精霊界に置きっぱなしですわ」
「私も。どうしよう」
「……心配のベクトルが私たちと違います」
仮にも女神と姫なだけはある。
「あー……多分、お兄ちゃんのことだから……」
「……ええ。そのドレスとかも、今から十代が持ってくるわ」
「……ホワイトデーのお返しのレベルを遥か超越してます……」
パーティドレスプレゼントの時点でホワイトデーのお返しというレベルではない。その上パーティセッティング。
「……お兄ちゃんって、手段と目的を入れ替えるのが得意技だから……」

「ところで、パーティドレスを前座的に渡しておいて、メインは飴細工、なんだよね～？」
「……一体どれだけの物を……セツ様」
興味を通り越して恐怖すら感じる。
「お～い！　持ってきたぞー！」
十代がドレスの入っているらしいスーツケースを押してやってきていた。
それぞれその衣装を渡され、部屋で着替えてからレッド寮に向かうことに。
「ほい、明日香も」
「……っえ!?　私も!?」
「伝令と足止めのお礼、だってさ。吹雪さんからのたっての頼みでもあるらしいけど」
「ああ、兄さんの……」
ということは吹雪も関わっているのか、と少し頭の痛い想いを感じながらも、明日香もしぶしぶ着替えに戻っていった。

数十分後、女子寮の前には合わせて六輪の華が咲いていた。
「……これ、とても手造りとは……」
そう言って一番着つけに苦労したアテナは薄い蒼を基本色としたお姫様のようなドレス。まるでアニメに出てきそうなくらいの出来栄えに、アテナはもう何度目になるかもわからない驚きをあらわにする。
「露出が少な～い。さだめもルインみたいのが良かった……」
そう文句を言いつつも満更でもないさだめはショッキングピンクの若干子供っぽいもの。それでもところどころに嫌みのない程度に付けられたフリルが可愛らしい。
「洗濯板には無理。というかこれイブニングドレスじゃ……」

ルインもその言葉通り胸と背中が大きく空いた紫のイブニングドレス風。その抜群のスタイルを強調しつつも下品ではない絶妙のバランスは、とてもじゃないが素人技ではない。

「……今度からは、このドレスでパーティに参加することにしますわ」

そう言って満足そうに裾をつまんで見せる希冴姫のドレスは、アテナと同じくお姫様調だが、こちらはより大人っぽい落ち着いた赤。何処かクィーンズ・ナイトの鎧姿を彷彿とさせながらも女らしいものだ。

「こ、これはちょっと恥ずかしいくらいかも……」

頬を染めるユーキのドレスは淡い碧のスレンダーなもの。ななめにフリルがいくつも付いている辺りがセクシーだ。

「これ、兄さんの注文ね……まったく」

明日香のドレスは赤い正統派のパーティドレス。明日香もなんだかんだと言いつつ嬉しそうだ。

「……なんでセツ、アカデミアに来たんでしょう」

「素直にデザイナーにでもなってれば良かったんじゃ……」

今からでもその道に進めば大成功することだろう。ひいき目なしで。

「ともかく、これで準備は整いましたわ」

「行く」

ドレスを着なれているらしい希冴姫とルインはそれほど大きな動揺はないらしい。

そんな少女たちの前に、燕尾服の青年が現れる。

「どうやら、準備は整ったようですね。主様がお待ちです」

「ジャック殿！」

そう、最近すっかりご無沙汰の（笑）ジャックだった。いつもの鎧を脱ぎ、燕尾服を纏った彼は元々の素質も相まってまったく違和感なく執事に見えた。

「私は今回皆さんの御案内役を仰せつかっております。それでは、

こちらに」
そういって一礼し、レッド寮の方へと歩いて行く。
「……今さらですけど、開催場所はレッド寮で本当に良かったんでしょうか？　ブルーや女子寮の方がこの格好は……」
「まあさすがのお兄ちゃんでも勝手に他の寮を使うわけにはいかなかったんじゃない？」
「いえ、正確には規模的にレッド寮の大きさでないと飾り付けることができなかったためになります」
ジャックの補足説明になるほどと納得する一同。どっちにしても尋常ではない。
「ジャックさんも手伝ったんですか？」
「いえ……流石にあれほどの技巧は私にはありませんので、基本素材の飴を溶かす作業だけ、お手伝いさせていただきました」
「？　ジャック殿もお菓子作りはできた気がするのですけど？」
そんな希冴姫の疑問に、ジャックは苦笑した。
「いえ、あれはもうコック（料理）ではなくアート（芸術）ですので……」
一体何をした。
「まあ、詳細は見てのお楽しみということで」
そんな会話をしていると、件のレッド寮が見えてくる。
外見的には、さほどいつもと変わりはない。多少綺麗に掃除されてはいるらしいが。
「まあ、外見をどう取り繕ったところでボロはボロだからなー。その分内装に力入れてたよあいつは」
「あら、十代」
十代もちょっとした正装をしていたが……。
「あんまり、似合ってないわね……」
「だよなー。オレも動きにくくてあんま好きじゃないぜ」
活動的で子供っぽい十代に正装はまだ早かったのだろう。コスプレデュエルの時以上にコスプレ染みて見えた。

「けど、明日香たちは似合ってるな！　流石だぜ！」
「あ、ありがとう」
「そ、それで、セツはどこに？」
屈託なく褒められると流石に恥ずかしい。気を取り直すようにアテナが問いかけた。
「おう、食堂だ。何日も前から殆ど寝ないで作業してたんだぜあいつ」
それは逆に心配になってくる。手段と目的が逆になるといってもそれで体を壊してほしくはない。
「それでは、参りましょう。いらっしゃいませ、お嬢様方」
実に堂に入ったジャックのお辞儀と共に食堂の扉が開かれる。そこでアテナたちが見たのは……。
「べ、別世界……」
「わたくしたちの城が……」
まず目に入るのは、きらきらと輝く琥珀色のシャンデリア。それに『光神機―轟龍』を象った像。
他にも飴細工で作られたと思しき希冴姫たちの城の模型。さだめの言っていた飴細工のシャンパンタワー。エトセトラエトセトラ……
そんなとてもじゃないが元があの食堂とは思えない幻想的な光景に、一同は声を失った。
「……ようこそ。エレクトラム宮殿へ。お嬢様方」
そう言って現れたのはやはり正装した吹雪。こういうことに慣れているのか、とても自然な様子で一礼してきた。
「兄さん！」
「やあ明日香。相変わらず、セツ君の技巧には驚かされるね。プロだってここまでできる人はそういないよ」
「それよりも、エレクトラム宮殿って？」
聞き慣れない名称に首をかしげる一同。
「エレクトラムとは琥珀金のこと。その名の通り琥珀色に輝く、古くから魔除けとして用いられてきた貴金属だ」

そう言って姿を現したのは……。
「セツ！」
中世ヨーロッパの貴族風の衣装に身を包み、腰にはやはり飴細工らしいスウェプトヒルト（レイピアの柄）を覗かせたセツが背筋を伸ばし、凛とした立ち姿を見せていた。
「セツ様……よくお似合いでございますわ」
「うん……これは、ちょっとヤバいよ～」
「いやなに、自分で作っといてなんだけど、皆のドレスの方が良く似合っている。見惚れて、思わずどもりそうになったよ」
そんなことをその格好でさらりと言わないで欲しい。相変わらず、役に入りきるととことん気障なセリフも臆面もなく言うセツに、全員顔を紅潮させた。
「それじゃあ、パーティを始めようか……といっても、音楽も料理もない、形だけのパーティだけど」
「ちなみに、この飴って食べられるんですか？」
「それはもちろん。ただ、複雑な形してるからあまり食用には適さないと思うけれど」
というより、もったいなくて食べる気が起きない。
「お兄ちゃん……また今年はいつになく気合入ってるね～」
毎年セツのお返しを貰ってきたさだめですらこれには度肝を抜かれたらしい。
「当り前だ。家族一人へのお返しと、多くの女の子たちへのお返しが同程度なわけがあるか」
「それは、ちょっと複雑だよ」
暗に異性として見られてないと言われたようなものなのだから、複雑になるのもしかたない。
「なに、冗談だよ。まあ去年までならともかく、今は割と意識もしているのだから、あまり気を落とさないで欲しい」
「えっ……？」
「というわけで、さだめ。こいつを受け取ってくれ」

そう言ってセツが手渡してきたのは、小さな指輪……のように見える飴だった。
「そいつなら食えるだろ。遠慮せず食ってくれ」
「……填めちゃダメ？」
「指がベタベタのアリンコ塗れになってもいいのなら」
「う……」
確かに、それはキツイ。
「ほい、ユーキちゃんと希冴姫にもこれだ」
「あ、ありがとう……」
「まあ……わたくしの剣ですわね」
二人に渡したのは剣状のスティック飴。ユーキはサイレント・ソードマンの、希冴姫は希冴姫自身の剣をモチーフにしている。
「その柄の部分を持って食べてくれ。一種のペロペロキャンディだと思ってくれれば」
「……私は？」
「ホレサイクロイド型の飴。バキバキに砕いて召し上がれ」
個人的な怨みも含む。
「……なんか雑」
そうは言うが、実は一番時間がかかった。
「あ、あのセツ……」
「アテナはこれ」
そういって取り出したのはどう見ても何の変哲もない飴玉。
「『神聖なる球体（ホーリー・シャイン・ボール）』だ」
「え……？」
「『神聖なる球体（ホーリー・シャイン・ボール）』だ」
それはつまり、ただの玉ですよね？　と言う言葉は言う前に封殺された。
「安心しろ。間違っても飴玉に見せかけたただのビー玉ではない」
「えと……やっぱり怒ってます？　バレンタインのこと……」
あのホワイトチョコに見せかけたロウソクは我ながら頭がどうか

していた。できれば忘れて欲しい。……まあ、やられた本人がそう簡単に流してくれるとも限らないわけだが。

「期待してくださいねと言われてめちゃくちゃ期待してたところにあの仕打ち。だがそれを怒っているわけではないから安心してくれ」

「とっても怒ってます！？」

「あー……お兄ちゃん結構根に持つから」

あうーそんなー、と落ち込むアテナに、やれやれと肩をすくめたセツが何かを渡す。

「……冗談だよ。ほら、これが本命」

「これ……宣告者？」

そう、それはまさしく『緑光の宣告者』や『紫光の宣告者』にそっくりな飴玉。

「流石に、一番世話になってるアテナに手抜きはできない。ちょうどいいのが思い付かなくてそれになっちまったけど、許してくれると嬉しい」

「そんな……許すも何も……」

あんなもののお返しに、こんなドレスやパーティ、その上一人一人にプレゼントまで用意してくれて……。

「私の方こそ、許して欲しいくらいです……」

「何言ってんだ。そりゃ結果としてあんなんなっちまったけど、あの時アテナが俺にバレンタイン用意してくれるって聞いてめちゃくちゃ嬉しかったんだぞ。始めっから怒ってないよ」

「セツ……」

「あーはいはいそこまでそこまで」

「きゃっ！？」

いい雰囲気が流れるも、そもそもこんな恋敵の巣窟でそんな雰囲気が長続きさせてくれるはずもなく、あえなくさだめに割りこまれる。

「あーあ。さだめもお兄ちゃんにバレンタイン渡したかったなー」

「わたくしとて、その文化を知ってさえいれば……」
「来年こそは……！」
「えと、わたしも渡したんだけど～」
全員不満タラタラである。結局、パーティが終わるまでの間、いつものように全員のご機嫌取りに奔走する羽目になったセツなのだった。

番外2「もはや神スキル」（後書き）

難産でした。何がって各キャラのドレスが。上手く伝えられた自信はまったくありません。そもそも服装に関心がなかったので尚更ですね。

今回は前回が自信あるできに仕上がった反動か、あまり上手く書けなかった気がします。遊戯王の小説である意義も薄いですし、微妙。

次回は……ルインか希冴姫の回になると思います。全く構想が出来てませんが、なんとか早めにアップしたいですね。

それでは、レーネスでした！

第二期第五話「昔語りールイン」（前書き）

ルイン回です。ちょっと短めですが、内容は濃くしたつもりです。あと、番外ではなく間話にしました。番外というには本編に関わりのある話が多いので。

バレンタインやホワイトデーは番外ですが。あれは時期とかも謎なパラレルワールド的なものになるので。

今回はできればあとがきまでしっかり読んでほしいかな。ちょっとアンケートっぽいのがあるので。

では、どうぞ！

第二期第五話「昔語り―ルイン」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第五話「昔語り―ルイン」

いつからだろう。世界を退屈に感じ始めたのは。
女神としての生を受け、一つの世界の管理を任されて……。
最初は充実していた、と思う。見るもの全てが真新しく輝いて、人々の営みが愛しくて。それを退屈、なんて思う暇なんてなかったはずなのに。
「長く生きると、娯楽に飢える」
いつか、誰かがそんなことを言っていた。当時の私はそれがさっぱり理解できなくて。
「何を言ってるの？　世界はこんなにも楽しくて、希望に満ち溢れているのに！」
両手を広げ、そんなことを胸を張って言っていた。
……でも、この世に生まれ落ちてから、丁度千を数えた頃からだろうか。徐々にその言葉が真実味を帯びてきたのは。
変わらぬ世界。変わらぬ日常。あれだけ愛しく、輝いて見えた人々の営みが、どれも陳腐に、色褪せて見えて。
世界が、何度も繰り返し流れる壊れた映像のようで。
出来の悪い映画を、延々と強制的に見せられているようで。
――変革を望むか？
だからきっと、あれは罰。変化を望んだ私。その心に付け込んだ

あの忌々しい『終焉の精霊』。同じく世界を我が手にしようと野心を持った新たな王、デミス。

――世界が、色を持たないモノクロに沈んでいく。

「やめて……私のセカイを壊さないで……！」

私の必死の抵抗も、所詮は焼け石に水。世界はどうしようもなく脆くて、現実は私に厳しかった。

――女神。

そう呼ばれて。でも何もできなくて。

「馬鹿らしい……！」

なにが女神だ。自分の世界を、愛する世界を救えずに、なにが……！

そこで気付いた。

「愛する……世界……？」

――つまらない。

そう思っていたのは誰だ。

――変化が欲しい。

そう願っていたのは誰だ。

「私だ……！」

この世界をつまらないと思ったのも。世界の変化を望んだのも。

「全部、私だ……！」

世界は変化したじゃないか。崩壊というカタチで。

世界をつまらないとは思わなくなったじゃないか。世界に哀しみが満ちることで。

「馬鹿みたい……」

いつの間にか、私は抵抗をやめ、その場に呆然と立ち尽くしていた。
崩壊していく街。終焉に巻き込まれ、その命を散らして逝く者たち。
「あはっ……」
我知らず、笑いが漏れた。
「あははっ……あはははははっ」
見ろ、世界はこんなにも脆く、儚く、美しい。
――これが、お前の望んだ世界だ。
――喜べ。お前の望みは果たされた。
――これからお前は。
――破滅の女神だ。
「あ、アアアアアァァッァアアアアアアッァアアアアアアアッ！？」
その日、私は……私のセカイは壊れた。

「そんな、ことが……」
話し終えて、数刻もの間呆然としていた彼が、かろうじてそう漏らした。彼女に至っては、もう完全に言葉もないといった様子だ。
「……貴女を見た時、すぐに分かった。アレに魅入られていると」
『終焉（おわり）』の気配が色濃い少女。最初は、アレそのものかとまで思った。いやむしろ、私のときよりも圧倒的に力を増して。
「キミを見た時、すぐに分かった。あれは私だと」
『終焉（おわり）』に見染められて、セカイを壊された者だと。
「キミが崩壊したあの私のセカイに連れて行ってくれた時、愕然とした。でも同時に、ああなるほどって納得もした」
この少年は、私の写し身。この少年も……。
「『終焉の花嫁』。それが、私とキミ」

「花嫁、ね……男の俺には似合わん単語だ」
冗談めかして言う彼だけど、そこに笑顔はどこにもなくて。
「終焉に見染められ、終焉の傍らで、セカイの終わりを伴侶とする者。それが……」
「『終焉の花嫁』か……」
「さだめ……さだめは、お兄ちゃんを……」
「……貴女に罪はない。私とは違う。貴女はアレと驚くほどに波長が合っていたから。だから無理矢理乗っ取られた」
「それでも……波長が合ってたってことは、元々さだめはそうだったんだよね？　さだめは……『終焉』そのものだったんだよね？」
「それは違う」
そう、それは違う。少なくとも今、ここにいるこの子は……。
「貴女はきっと『再生』の象徴」
コインの表と裏。光と影。終わりと始まり。終焉と再生。
全ては表裏一体。
「プラスにマイナスをかければマイナスになる。それと同じ」
『再生』に『終焉』が取り憑けば、それは大きな『終焉』となって。
「むしろ……『終焉』の象徴は……」
「俺……か」
「キミと私は同じ。私がそうだったように、キミも……」
私は……彼に過去の自分を見た。
セカイを壊され、それでも尚抗おうとする痛々しい姿。それも叶わず、己をも誤魔化して生きている。そんな姿。
「でも、キミもやっぱり、私とは違った」
誤魔化して、壊れた本質を仮面（ペルソナ）の下に押し隠して。それでも、彼は楽しそうだった。
「キミは、誤魔化しのプロ。私が引き剥がしたりしなければ、もう少しでキミの仮面（ペルソナ）は真実の顔になっていたはず」
楽しそうに、日々を過ごす彼。それを仮面（ペルソナ）だと見破れたのは、偏（ひとえ）

に私も同じだったからに過ぎない。
「私は、そんなキミに興味を持った」
どうして、そんなに楽しそうなのか。『終焉』によって壊れたコロとセカイを持っていて、なぜそんな仮面（ペルソナ）が被れるのか。
「羨ましかった。今もまだ壊れたままの私には、その在り方が眩しく映った」
それは、久しぶりの感覚だった。
真新しく、輝いているモノ。壊れているはずの、心の底から愛しく思えた存在。
「キミと一緒なら、世界は優しい。そう思えた。キミと一緒なら、またあの頃の『慈愛の女神』と呼ばれた頃に戻れる。また、世界を愛せる。そう、思った」
事実、彼と一緒の精霊界は楽しかった。あんなにはしゃいだのはいつぶりだっただろう。ほんの幽かにでも、笑みがこぼれたのは。
「ああ……きっとこれが私にとっての『希望』なんだ。これが、私の『救い』だって」
僅かに、世界が色付くのを感じた。それは、まるで恋のよう。破滅して、壊れてしまった私のセカイ。モノクロに沈み、光を失ったセカイ。
「キミと出会って、キミの心に近づいて」
似ているのに、決定的に違うその心。
「キミに触れて、キミと視点を共有したら」
世界は、優しかった。
「眩しいの。あんなにつまらないって。もう飽きたって思っていた世界が……愛しいの」
まるで、この世界に生まれ落ちた時のように。
「キミの見ている景色。キミの心を、もっと見たい。もっと感じたい」
そう思ったら、セカイは尚更輝いて。
「きっと、これは恋じゃない」

きっと、それよりももっと深く、強いモノ。
「そう、愛」
かつての私が、世界の全てに抱いていたもの。注いでいたもの。
「私は、キミに愛を抱いたの。キミに愛を注ぎたい」
「ルイン……」
「私を癒して。私を愛して。私もキミを愛する」
恋でなくてもかまわない。そんなものは望まない。
「私が欲しいのは『愛』。『恋』とは似て非なるモノ」
私は女神だから。『恋人』なんて望まない。家族のように、母のように。
「ただ、愛して欲しい」
「……本当に？」
「っ」
一言。その一言だけで、私の心は揺れた。
――本当に、無様。
多くは望むまいと、望めば壊れるからと。
「また……自分の立場が悪くなりそうなことを……」
多くの女性に慕われているのに。いつも嫉妬で大変なのに。
「それでも、自分を押し殺しているのは見たくない」
「何故……？」
私は女神。自分を押し殺すのなんて昔からずっとしてたこと。
「何故、それを見破る……？」
そんな私の疑問に、彼は呆れたように溜息を吐いた。
「……お前が言ったんだろ。『似てる』ってさ」
「あ……」
そう、そうだった。私が彼の、誰にもわからないような仮面（ペルソナ）を見破れたように。
「俺にだって、ルインの心はわかるんだ。きっと、誰よりもな」
そう言う彼の笑顔は、本当に優しくて。
「キミは……天然ジゴロ」

いつか女に刺されそう。
「むしろ私が刺す」
「……やめてくれ。そういうのはもうこりごりだ」
「なら、自分の言動には気をつけるべき」
きっと彼は隣でぶつぶつ言っている妹にも気が付いてない。
「キミは不器用」
一つのことに目を向けて、それに全力を傾けるあまり、周りが見えない。
「隣の子には気をつけて」
「っ……げ！」
「お兄ちゃん……？　ちょっとその口、閉じようか……？」
「い、いやまてさだめ。お前何をするつもりだ！？」
「大丈夫。刺したりはしないよ？　ちょっと唇で口封じし続けるだけだから……エイエンに……」
「それは刺されるよりある意味恐怖だ！」
……ああ、この感覚。
「くすっ……」
思い出した。
「ふふっ、ふふふっ！」
笑い方、思い出した。
「……ルイン？」
「楽しい……」
これからも、彼と一緒なら、こんなにも世界は色付くのだろう。
「……訂正する」
「ん？」
愛して。そんな陳腐で使い古された言葉は相応しくない。
「私の、光になって。私の世界を、輝きで満たして」
うん。これだ。私は、彼にこれを求めている。
「それが、私の望み」
やっぱり、恋人じゃなくてもいい。私の世界を彩って欲しい。

「……そういうことなら、喜んで」
ああ……。
「ありがとう……っ」
気がつけば、私は彼と唇を重ねていた。
「あーーーーっ！！」
「るっルインおまっ！？」
「……ごめん、ちょっとトンだ」
主に、理性とか。けどまあ……。
「セカンド頂き」
ファーストは盗られたけど。
「お兄ちゃん！　せめてっ、せめてサードを！」
「うわっ！？　ちょ、待てさだめ、落ち着け！」
「落ち着けないーっ！　い、一度ならず二度までもさだめの目の前でーっ！！」
「ふふっ」
キスというより頭突きでもする勢いで顔面を彼に突き出す様子を見て、私はまた、声に出して笑った。
「はっ！？　こうなったらディープのファーストと本当のハジメテを頂くしか……！」
「うおーっ！？　服を脱ごうとするな脱がそうとするなベルトを盗るなボタンを外すなーー！！」
……流石に、そろそろ止めるべきかと思う。
私は慌てずに彼女の延髄に一撃。……うん。上手くいった。
「きゅう……」
「はあ、はあ……助かった、と言いたいところだが、そもそもの原因だから素直に礼を言う気になれん……」
追剥ゴブリンも真っ青な速度ではぎ取られたベルトやボタンを直しながら、彼が苦い顔をする。
「うん。ごめん」
そんなやり取りが楽しくて、笑顔が漏れる。

なんだ。
「こんなに、簡単だったんだ」
笑顔になるの。
「笑うって、こんなに嬉しいことなんだ」
きっと、昔の私ならそんなこと、当たり前すぎて知らなかった。
最近までの私なら、理解できなかった。
「……そうだな。俺も、笑顔はそろそろ仮面じゃなくなったよ」
この世界が楽しすぎてな。
そういって笑う彼。
いつか、私も。
「そうなりたい」
笑顔が、当り前の私に。
「いつか、じゃねえ」
そして彼は、やっぱり優しくて。
「すぐにでも、だろ」
きっと、これが私の愛のカタチ。

「ふう……」
いきなりルインが俺とさだめに話があるって尋ねてきた時はなにかと思ったが……。
「すごく、嬉しそうだったな」
ルインの過去。ルインの傷。前にネイキッドから概要だけは聞いていたけど、本人から聞いたソレは想像以上に悲惨だった。
それでも、今のルインは楽しそうだった。それが俺のおかげって言うのなら……。
「光栄、だな」
俺は、女神さまを救えたんだ。
「責任、取らなきゃな」

どこかで誰かが言っていた。誰かを救うには、常に責任が付きまとうと。救って、それで後はバイバイなんて、無責任だから。救った以上は、最後まで。

「ルインが、心から笑えるように」

俺も含めて、もう仮面を被る必要のないように。

「がんばろう」

そう決意した、夜なのだった。

第二期第五話「昔語りールイン」（後書き）

今回の話は割と思い切り本編に関わってます。ルインの過去話。以前ネイキッドが語った、その更に深いところまで今回は語りました。

というか、間話に入ってからガリガリ出番を削られているメインヒロインアテナです。さだめは比較的出てますが。……次は希冴姫予定なので、また出番がありません。その次はさだめ。その次。ヒロイン勢のトリを勤める予定なのですが、このままではメインヒロインの座が危ういです。アテナが主役の時はとことん力を入れにゃあ……。

さて、それではアンケート。アルカナに、オリカを出すか否か、です。出したいとは思っていますが、それはちょっと……という読者さんも当然いるでしょう。どちらがベストなのか、アンケートを取りたいです。ちなみに、オリカ肯定だと、希冴姫たち絵札の三銃士が復活することになるでしょう。なしだとこのままパーミッションのみ。ただ、オリカを出してもパーミッションの方針は変わらないのでヴァンダルギオンも普通に使います。次回更新の際にオリカが出るか否か、という余りにも急な話ですが、どうかご協力いただければ幸いです。

それでは、レーネスでした！

第二期第六話「アルカナの剣　前編」（前書き）

希冴姫回です。といいつつあまり希冴姫がメインではないという。どちらかと言えば三銃士やセツのパワーアップイベントに分類されます。そして、案外好意的な意見が多かったのでためらわずオリカの登場決定。まだ名前だけですが、次回から本格的に出てきます。

サブタイ通り今回は前後編。希冴姫のメイン率が低い分二話構成……いえ、ただ予想以上に長くなってしまっただけですごめんなさい。

では、どうぞ！

第二期第六話「アルカナの剣　前編」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第六話「アルカナの剣　前編」

「セツ様」
珍しく一人部屋で数枚のカードとにらめっこしていた俺は、背後から聞こえた希冴姫の声に常ならぬ強い意志を感じた。俺は作業の手を止めて彼女に向き合う。
「どうした希冴姫。穏やかじゃないな」
「はい。少々真剣なお話ですわ」
そういう希冴姫は、久しぶりに見る騎士装束の懐から一枚のカードを取り出した。
「これは？」
差し出されたカードを見ると、そこには何もなかった。カードの名称、絵柄、テキスト。その全てが白紙。
「それは、寄り代です」
「寄り代？」
オウム返しに尋ねる。
「わたくしたち精霊を封じたり、新たな力をセツ様に与える。そのための寄り代とするためのカード。いわば、力の入れ物ですわ」
そう言えば、原作の魂のカードにも似ている。つまり、新たなカードの入れ物。器か。
「これを、どうするんだ？」

「わたくしと共に、精霊界まで来ていただきたいのです。そこで、その寄り代に封じていただきたいものがございます」
「……それは、邪悪なものなのか？」
封じる、という言葉からそう想像したが、希冴姫は首を振って否定した。
「いいえ。むしろ、セツ様の力としていただきたいものです。わたくしたちの、剣ですわ」
「剣？　お前たちの？」
そんなカードは聞いたことがない。
「そんなものがあったのか？　俺は聞いたことないけど」
「はい。我ら絵札の三銃士が長『アルカナ・ナイト・ジョーカー』の持つ至高の剣。わたくしたちの結束の象徴。『アルカナソード』」
『アルカナソード』……恐らくは装備カードなのだろう。
「にしても、随分と大げさだな。そんなに構えなくても、封印くらい……」
『話はそう簡単ではないのですよ主様』
「ジャック……」
相変わらず唐突に現れる奴だ。しかし、簡単ではない？
『うむ。当然、強力な武具は封印されておるのが相場じゃ。『アルカナソード』もまた、例に洩れず……』
「封印ねぇ……」
確かに、強力な武具にはそれを守る守護者やトラップがいるもんだ。そういうことなのだろうか？
『まさしく』
『私たちは比較的政治や人間界とも関わりを持っているのですが、その守護の任に就き、外界との接触を絶った者がいるのですよ』
「名を『切り札の騎士（トランプ・ナイト）―エース』と『切り札の騎士（トランプ・ナイト）―テンス』」
「トランプ……ナイト？」
『本来はわしらもその切り札の騎士の名を受ける筈だったのじゃが、あやつらが頑なでのぅ……』

「あの者たちは人間が大嫌いで……人間に尻尾を振り、誇りを捨てたわたくしたちに騎士の名は渡せぬと……」
『神殿に篭ってしまいまして……私たちも少々困っているのですよ』
「ふむ……」
俺は今後も希冴姫たち絵札の三銃士を使って行くにあたり、戦力増強できるかもしれないという情報は確かに有益だ。
「そいつらに協力の意志は？」
『……いいえ。なにぶん人嫌いなものですので……』
「そいつは……梃子摺りそうだな」
「はい。ですが、騎士は自らの認めた主に仕え、剣を捧げることこそが本分。わたくしたちも、そのことを説き続けてはいるのですが……」
『自尊心の強い輩でのぅ。人に良いように使われることに強い拒否感を持っておる。騎士でありながら、己にしか剣を捧げぬ』
『テンスの方はそうでもない……というよりエースに付き従っているだけです。エース……私たちのリーダー格の者ですが……』
リーダー……確かに、希冴姫たちにはリーダーがいなかった。我の強い希冴姫が比較的リーダーシップを取ってはいたものの、どちらかと言うとジャックやキングが希冴姫に振り回されていた印象が強い。
「お前たちは、五人で一括りなのか？」
「そうですわ。わたくしたち切り札の騎士は、元々五人で一つの部隊。三銃士と呼ばれてはおりますが、元々は切り札の五人衆。王の身辺警護を主任務とする王族親衛隊。それがわたくしたち切り札の騎士達（トランプ・ナイツ）」
完全に初耳な話ばかりだ。
『先ほど希冴姫も申しました通り、我らは仕えてこその騎士。主様であれば、エースもわかってくれるのではないか。そう考えた次第です』
「いや……あんま過大評価されても困るが」

『ほっほ。何よりエースは女子。主なれば陥落は容易かろう』
「……一気に行く気が失せたぞ。キング」
『いえ……実は私も同じ意見でして』
「お前だけは信じていたのに！」
なんてことだ。ジャックまで俺をそんな目で見ていたのか。
「……わたくしとしては、実に不本意ですが」
『ここだけの話じゃが、ここまで主に話すのが遅れたのは希冴姫が散々にゴネておったからで……』
「キング殿！」
キングの暴露に希冴姫が反応して悲鳴じみた声を上げる。
『主様には、そういった資質があるのですよ。我ら精霊を惹きつける……そう、魅力のようなものが』
そう言われても。精霊限定のチャーム放っているとでもいうのか。
『まあ、ぶっちゃけそんなところじゃの』
……嬉しくない。
「……キング殿。でたらめはおよしください。わたくしが、その……お慕いしているのは、そんな不確かなものではなく……」
『あー、あー、ようわかっとる。人柄心根、ついでに容姿と。お主がベタ惚れで主のあらゆるところを絶賛しまくっとるのはようわかっとるよ。まったく、惚気を聞かされ続ける身にもなって欲しいもんじゃわい』
「キング殿！」
真っ赤になった希冴姫が絶叫する。俺はといえば恥ずかしいような嬉しいようなむず痒い気分だ。
『……まあ、チャーム云々はともかく、魅力については本当のことですよ。私も、彼女らが心を開くとすれば主様以外にないと思っています』
「……そんなに持ちあげなくても行くって。お前らとこれからも戦い続けていく以上、そいつらの協力も欲しいところだからな」
希冴姫たちも困っているって話だし、行かない理由もない。

「でしたら、すぐにでもご用意を。別段一刻を争うと言うほどではありませんが、早いに越したことはありませんもの」
それはもちろんだ。幸い今日は休日だし、アテナとの約束もない。
「まあ、準備するって言ったってデュエルディスクくらいだろ」
「そうですわね。彼らとはデュエルすることにもなるかもしれませんわ」
「デッキはどうする？　お前たちのデッキを使えばいいか？」
「……いえ、むしろセツ様の本気。ヴァンダルギオンをお使いになってくださいまし」
「なに？」
それでいいのか？
『主様のお姿。その在り方を彼らに示す必要があります。何より、ヴァンダルギオンを従えた主様のお力を見せること。それこそが大切になるでしょう』
「……なるほど」
ジャックの言い分も尤もだ。
「よし、わかった。……うん。準備できたぞ」
『では、参りましょう。精霊界への行き方はわかりますか？』
「えーっと、強くイメージすればいいんだっけ？」
『うむ。主なら、それだけで精霊界への扉が開かれよう』
イメージ、イメージ……。
『よう！　呼んだかい？　このサイクロイド様を！』
……雑念が混じった。どれだけあいつの印象強いんだ俺。
思い浮かべるのはあの筋骨隆々な立ち姿。俺がデッキを変えるきっかけを作ったあの男。
『なんというか……主様は基本人物を対象にモノを捉えるのですね』
横からジャックのそんな言葉が耳に届く。
「……俺にとっては、人がいて、世界がある。世界があって人がいるんじゃない。そう思っているからな」
人は世界に囚われない。どんな世界でも俺は俺だし、きっとジャ

ックたちだってそうだろう。俺は世界を想像できない。だから、そこに住まう人を想像する。

そして……。

「できた……」

俺たちの前には、いつか見た扉が現れていた。見た目的にはゼ○魔の扉に似ている。俺の想像で作った扉だからだろうか。

「……なら、どこ○もドアを想像したらその形で出るのか……？」

「セツ様？　どこかお加減でも？」

「ああいや、何でもない。ただの戯言だ」

心配そうにこちらを見つめる希冴姫にそう返し、俺もその扉を潜った。

「うおっ！？」

俺が久しぶりの精霊界に足を踏み入れて、最初に聞いたのはそんな声だった。

「き、きゃあああああ！？　な、なんて汚らわしいモノを露出しているのですか貴方は！？」

「ちょ、ちょっと待て、そもそもお前らがイキナリ……つーかセツの奴だって同じモノを持って……」

「問答無用！　切り捨てますわ！」

「ま、待てえええええっ！？　そんなことをしたら多くの我のファンが嘆き悲しむことに……」

……着替え中だったらしいネイキッドの私室。というより丁度ポージングの最中だったらしく……おえっ。

「せ、セツ！　お前さんからも姫さんになんとか……というよりこの状況の説明をだなぁ……」

「あー……すまん。暴走状態の希冴姫を止められる自信、ないや」

だから、すまん！

「お、おいいいいいいいっ！？　手を合わせてないで姫さんを……」
「そ、そんなモノをブラブラ見せびらかさないでくださいまし！」
うむ。実に目に毒。腐る。
「ならせめて着替える時間を……」
「隙アリですわ！」
「はおっ！？」
チーーーン……（擬音）。

その後、著しく気分を害したらしい希冴姫を自室に戻し、俺はネイキッドの看病ついでに説明を行っていた。
「……なんつー人騒がせな」
「あー……すまん」
鞘で手加減抜きに打ち据えられたダメージは如何程のものだったろう？……想像するのは自分にも良くないので思考を停止。
「んで？　あのエース殿やテンスのアホをひっ捕らえに来たと？」
「その表現には語弊があるが……つーか、やっぱり知ってるのな」
「これでも古株でな。姫さんたちが切り札の騎士隊の頃から我は将軍であったし」
「……ホントに古参だな」
そのネイキッドが一体どの面下げて一兵卒だなどと言ったのか。
「まあ、確かにエース殿は姫さん以上に頑固者で一本気な女だったよ。昔から姫さんとは反りが合わんくてなぁ」
「……まあ、希冴姫は人の好き嫌い激しいからなぁ……」
「いや、我の見たところ、むしろ問題はエース殿の方にあった様だぞ？　常に突っかかっているのはエース殿であったし……」
「マジか」
それは流石に予想外。いや、希冴姫が悪いと思っていたわけじゃ

ないが、突っかかると言うなら希冴姫の方からでもおかしくないと思っていたのも事実だ。
「まあ、お前さんなら大丈夫だろう。この我も思わず惚れこみかけた男だからな！」
「え……」
ツツーっと身を引く。まさかこの男、ルインに相手されないからってだ、だん……。
「待て待て待て！　そういう意味ではない！　純粋に人間性にという意味だ！」
「そ、そうか……いや、さっき衝撃映像見たばかりだったからつい……」
「あれはお前さんらの所為であろうが……」
確かに。
「と、ところでセツ」
「うん？」
「ルイン殿は……今回一緒ではないのか？」
「あー……」
筋肉男が縮こまってもじもじしている様子が気持ち悪くて吐きそうです。
「ルインは留守番……っていうかなんていうか」
そういえば誰にも言わずにこっち来ちゃったなー。アテナとかまた心配してないといいけど。
「そ、そうか……残念だ」
だから、その図体でシュンとするな。怖気が走る。
「あ、でも……」
そのルインについての朗報があったんだった。
「なんだ？」
「ルイン。笑ったよ」
「……」
俺がそう言うと、ネイキッドはしばらく何を言われたのかわから

ないという風にポカンとしていたが、やがて大きな声で笑い始めた。
「はっはっはっ！　そうか、ルイン殿は笑ったか！　そうかそうか！　はっはっはっ！」
ネイキッドは本当に嬉しそうに膝を叩いて笑った。
「それは、本当に目出度いことよ。惜しむらくは、我がその笑顔を拝謁できんかったことくらいか」
「心配すんな。またいつでも見れる」
あいつは、すぐに笑顔を取り戻すから。
「俺が、取り戻させて見せるから」
「よく言った！　よし、ルイン殿はセツ、お前さんに任せたぞ！　何としても、幸せにしてやってくれぃ！」
そう言ったバンバン肩を叩いてきた。……痛っ！　痛いって！
「つ、つーかお前はいいのかよ。好きなんだろうが！」
俺の問いに、ネイキッドはちょっと表情を歪めるが、すぐに遠い目をした。
「何を言っている。我が望むは、ルイン殿の幸せ一つ。何十年と共にいて、笑顔の一つも引き出せなかった我に、それを為すことはできん」
だからこそ、それができる者に全てを託すのだ。
そう言ってネイキッドは笑った。
「……ったく、お前もつくづくいい男だな」
「当然だ。我はこの国の将軍ぞ」
そしてまた、二人して笑う。本当に……こいつとは仲良くなれそうだ。
「おお、そうだ忘れるところであった」
「ん？　どうした」
「近々、我もそちらに行くぞ」
「こっちって……人間界に？」
「うむ。いや何。我のマスターが今度、セツと同じアカデミアに転校するでな。我もそのパートナーとしてそちらに向かうことになろ

う」
「マスター？　お前、誰かの精霊だったのか？」
「まあな。何、少々誤解されやすいが、気の良い御仁だ。お前さんとも仲良くなれることだろう」
「お前と同じってわけだ」
誤解されやすくて気のいいやつ。正にコイツそのものだ。
「はっはっはっ！　違いない！」
「んじゃ、そいつに伝えといてくれよ。アカデミアに来たら、デュエルしようぜってさ」
「承知仕った！　いやしかし、本当に気が合いそうで何よりだ」
「ん？」
「我もマスターにセツの話をしたらな。あ奴も、セツと同じことを言っていた。『俺がそっちに行ったらデュエルすんぞ。首洗って待っとけ』とな」
……はは。
「んじゃ、楽しみに待ってる、とだけよろしくな」
「任せておけ」
そして俺はネイキッドと軽く拳を打ち合わせ、ネイキッドの部屋を後にした。

「あ……」
ネイキッドの部屋を出て、希冴姫の部屋に向かうと途中で何故かルインと遭遇した。
「ルイン？　お前どうしてこっちに……」
「私は、墓参り」
「墓参り？」
「正確には、墓じゃないけど……」
その言葉を聞いて俺はピンときた。

「ルインの世界か」
「……そう」
「……吹っ切れたのか？」
「……まさか。そんな、すぐには無理」
「だよな」
流石に、何年も積み重ねた哀しみが、すぐに癒されるということはない。それでも、ルインの表情は今までと比べてどこか柔らかく、幽かに微笑んでいるようにも見える。
「キミは、どうしてここに？」
「ああ、希冴姫たちの頼みでな。アルカナの剣を手に入れるために、な」
「ああ……」
「ルインも知っているのか？」
「伝え聞く程度。詳しくはない」
「そうか……」
ルインも来るか？　と聞こうとしたが、ルインは先に断ってきた。
「これは、キミと騎士たちの問題。私は口を挟まない」
「……随分物分かりがいいな」
いつもなら希冴姫たちに反対されようとも着いてくるような奴だが。
「デートとかなら邪魔するけど」
その人にとって本当に大切なことを邪魔はしない。ルインはそういった。
「その代わり……」
「ん？」
「今度、私の墓参りにも付き合って欲しい」
「……ああ」
ルインとも別れようとした時、ふと思い出した。
「そうだ、ネイキッドの奴が心配してるみたいだから、顔出してきてやれよ」

「……えー」
「えーってお前」
露骨に嫌そうな顔をするルイン。
「冗談。偶にはいいかも」
「……ったく」
「軽くからかって遊んでくる」
「哀れネイキッド……」
ルインに玩具程度にしか認識されてないのな……。
「あいつ、いいやつなんだけどなぁ……」
「私が好きなのはキミ」
そういうことをサラッと言わないで欲しい。
「何より筋肉キライ」
「哀れネイキッド……」
結局はそこに帰結するのか……。
「じゃあ、今日はそういうことで」
「……ああ、せめて程々にしてやれよ」
「了解。軽くからかうだけに留める」
そういってルインはあっさりと身を翻してネイキッドの部屋に向かって行った。
「玩具的には、気に入ってるみたいなんだがなぁ……」
どうしたって恋愛には発展しそうにない。いや、俺がこんなこと考えるのはどっちに対しても失礼か。
「まあ、ともかく今は希冴姫だな」
ジャックたちとも合流しなければならない。そして神殿だ。
「うしっ！」
俺は改めて気合を入れ、もうすぐそこにある希冴姫の部屋へと向かった。
「……希冴姫、機嫌直ってるといいんだけどなぁ」
淡い期待とまあ無理だろうなという諦観を胸に、俺は希冴姫の部屋の扉をノックするのだった。

第二期第六話「アルカナの剣　前編」（後書き）

あ、あれ？　希冴姫回のつもりがルインで締めた……？　ネイキッドイベントといい、ルインのヒロイン化が止まらない……！？

と、ともかく、パワーアップイベント開始。オリカの登場も匂わせて、何よりようやくタイトルに物語を絡ませることができます。

……うん。間話とかいいながら本編だよねこれ。十代がネオス手に入れるレベルの大イベントだよね。

そしてカイナさんから提供頂いたオリキャラ登場の伏線も張りました。とりあえずこれで剣士くんも出せるでしょう。カイナさん、お楽しみに。

新キャラだのオリカだので割と忙しい後編も、なるべく早く書き上げるつもりです。こうご期待（ハードル上げ）。

それでは、レーネスでした！

第二期第七話「アルカナの剣　中編」（前書き）

すみません。伸びました。えっらい長くなった挙句またデュエルしてません。マジですいません。するする書けたんですがその分話が膨らむ膨らむ。

と、とにかく中編です。どうぞ。

第二期第七話「アルカナの剣　中編」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第七話「アルカナの剣　中編」

「ぐすっ……」
「あー希冴姫？　そんなに落ち込むなって……」
「あんな……あんな汚らわしい……筋肉の……」
精霊界では筋肉って需要ないんだろうか。シャルナとかも同じようなこと言ってたし。
「……ジャック」
「はあ……仕方ありませんね」
俺にはちょっと処置なしだ。ここは希冴姫第一人者のジャックに任せよう。
「主ももうちっと希冴姫のことを任せられるようにならんとのぅ」
「面目ない。何分近くにいたのがさだめ（エロ）だったりするから、こういう落ち込み方されるとどうすりゃいいかわからん」
あいつはむしろ積極的に覗いて舌舐めずりするタイプだ。
「まったく……これからエースたちのところに行こうというのに、前途多難じゃ」
やれやれとキングが見つめる先では、ジャックが希冴姫を慰めている光景。
「いいですか？　男性というものには必ず件の器官が存在しています。もちろん私にも、主様にもです」

「それは……理解しているつもりですわ」
「はい。ですから、こう考えてください。耐性をつけた、と」
「耐性？」
「希冴姫、例えば貴女が、首尾よく主様の御心を掴んだとしましょう」
「セツ様の、御心を……ほぅ……」
希冴姫の頬が淡く色付く。
「その交際が順調に進めば、やがてはあの部位を目にする機会も……」
「せ、セツ様の……はぅ……」
「その時、もし今日のような失態を犯してしまったらどうします？　嫌われるだけならいざ知らず、下手をすれば主様の未来までも奪いかねないのですよ」
幸い、ネイキッドの未来は奪われずに済んだが。
「わ、わたくしは……」
「ですから、そうならぬ内に耐性をつけることができたと考えましょう」
「そ、そうですわね……筋肉の未来なぞ別段問題ありませんもの」
おーい結論がおかしいぞー。
「い、いえそうではなく……」
「……そう、貴女の言う通り」
「ルイン殿！？　何故ここに……」
「野暮用」
「ルイン……お前、ネイキッドは？」
「……案外脆かった」
「ネイキッドーーーー！？」
「冗談」
「心臓に悪い！」
「事の顛末を聞き出した。……正直後悔した」
まあショッキング映像想像しちゃったんだろうな。無理もない。

「ワイセツ物陳列剤を適用。極刑が妥当」
「妥当じゃないから。不幸な事故だから」
「……業務上過失暴行？」
「そんな罪名はない。あと、業務上じゃないし過失したのは俺の方。そして暴行を加えたのも希冴姫だ」
「精神的凌辱による慰謝料請求は？」
「……なんだ、法律にでもハマってんのか？」
「罪を被せようと思って」
「お前の嫌がらせは性質が悪いんだよ！」
「あれはいい玩具」
「すまんネイキッド俺がルインにお前の部屋に行くよう勧めたばっかりにー！」
「言い直す。あれはいいパシリ」
「ネイキッドーーーー！」
恐らくルインの頼みなら躊躇わずにパシリでもやったのであろう将軍を想い、俺はこの国の未来に絶望した。
「……ほれ、いつ終わるとも知れん漫才はそこまでにせい。希冴姫も立ち直った様じゃし、そろそろ出発するぞい」
キングが常識人に見える。不思議だ。
「うむ……わしも自分の立ち位置を色々模索しておっての……ただ煽るだけならルインがおるし、ボケに走ろうにも時代がわしについてこん。残された道はツッコミしかなかったのじゃよ……」
切実な悩みだった！
「……まあ、ホントにこれくらいにして行くか」
「移動手段は？」
「サイクロイドじゃなければなんでもいい」
「……そこまで嫌いますか……」
「そう遠くにあるわけでもありません。徒歩で構いませんわ。セツ様は、それでよろしいですか？」
「サイクロイドじゃないからそれでいい」

「苦手意識が根付いとるのぅ……」
「いってらっしゃい」
「おう。ルインも、気をつけてな」
「私はもう帰るだけ」
「んじゃ、アテナたちによろしく」
「ん」
にぎにぎと手を開いて閉じて挨拶してくるルインに同じく返し、俺たちは一路アルカナ神殿へと向かった。

希冴姫たちと一緒だからか知らないが、道中特に盗賊の類に襲われることもなく神殿へと辿りついた俺たち。アルカナの神殿と聞いてどんなものか楽しみにしていた俺は、実物を見て絶句した。
「結構、きらびやかなんだな」
そう、きらびやかなのである。あらゆるところに金銀財宝が散りばめられたどの神殿は、俺の想像を遥かに超えた威容を持って俺を迎えた。ぎんぎらぎんにさりげなく～♪
「アルカナ……わたくしたちを司る四つの力。即ちスペード、ハート、クローバー、そしてダイヤ。ダイヤは中でも財宝を表すファクター。このくらいのものは至極当然ですわ」
「こんな豪華絢爛な神殿、盗賊だったら格好の的だと思うんだがなぁ……それだけ守護者が優秀ってことか……」
「まあそれもありますが、何よりこういった精霊の象徴たるものはその精霊に認められなくば、聖石から魔石へと変貌します。盗んだところで己が身を滅ぼすだけなのですよ」
「いわば、財宝そのものが最大のトラップなんじゃ。鉄壁じゃろ？」
「へえ……」
「セツ様でしたら呪われることもありませんし、何ならどれか持ちかえりますか？」

「いや、いい。俺自身特に興味もないし……誰かにプレゼントしたりもできなさそうだしな」
「そうですか。でしたら……」
何かを思いついた風に希冴姫が辺りを物色し始める。
「何してるんだ？」
「んしょ、っと……あ、いえ。それでしたらわたくしがセツ様にプレゼントいたしますわ」
「希冴姫が？」
「はい。わたくしこれでも細工の腕には自信がありますの。まあ、セツ様には敵う気がいたしませんけど……」
「あーいや、そういえば細工には特に手を出してなかったな。嬉しいよ」
これは事実だ。生活の延長やさだめ関連でなければ特に手を出してはいない。精々がカオス・ソルジャーコスとかの仕上げにやるくらいだ。
「そ、そうですの？　それでは……是非とも受け取ってくださいまし。わたくし、日頃の感謝を込めて精一杯作らせていただきますわ」
そういう希冴姫の顔は年相応の少女のように可愛らしく、姫の名が相応しいほどに華やかなものだった。なんて言うんだろう。花が咲く前の蕾のようでありながら、可憐に咲き誇る薔薇のようでもある。矛盾を孕んだ綺麗な笑顔。
「……ダメだな。俺に詩人の才能はないらしい」
今自分が考えたことが恥ずかしくてたまらん。こう言ったことを真顔で詠えるようでないと詩人にはなれなさそうだ。いや、別に詩人を目指しているわけでもないが。
「やりおるのぅ希冴姫。主はすっかり動揺しておるぞ」
「ええ。今のは大分ポイントを稼げたようですね」
「そ、そんな……わたくしそんなつもりは……」
「嬉しそうじゃの」
「まったくです」

「え、ええい！　それよりもさっさと入るぞ！　いつまでも入り口で駄弁ってても仕方ないだろ！」
「……まったくだ。久々の狼藉者が。まさか我が前で睦言を交わしに来たのでもあるまい」
「っ！」
突如聞こえた俺たち以外の声に、俺は慌ててその声の方を見た。
「……よくも抜け抜けと我が前に姿を現せたものだな。三銃士」
感情の篭らない、怜悧な声音。その声音に相応しい氷の瞳。ショートカットの銀髪が幽かに風に揺れていた。
「お前が、エースか？」
希冴姫たちと比べ、大分軽装だ。白銀の胸当てこそ身につけてはいるが、希冴姫たちほど物々しい鎧ではない。
「貴様に語る舌は持たぬぞ。人間」
「……」
なるほど……人間嫌いは伊達ではなさそうだ。明らかに取り付く島もない。
「エース。この方はわたくしたちの主、セツ様ですわ。それ以上の侮辱はお止しくださいませ」
「近頃の主従は睦言を交わすのか。随分と愉快で不快な世になったものだな」
「っ……！」
カッと顔を赤くする希冴姫。こりゃ相当だな。
「エース……」
「……ジャックか。貴様も相変わらず、クィーンの犬か？」
「そんなつもりはないのですが……」
さしものジャックも苦笑気味だ。
「まったく……ちぃっと見ぬ間にまーた石頭に磨きがかかっとるようじゃのぅ」
「そう言う貴方はお気楽蜻蛉な鳥頭に磨きをかけられたようで」
「ほっほ。こりゃ一本取られたかの」

「エース。私たちは……」
「要件なぞ、聞くまでもない。手を貸すつもりも、剣を渡す気もない。とっとと世俗に塗れて溺れ死ね」
「お前ら、仲間じゃなかったのか？」
思わずそんなセリフを口にしてしまう。それほどにエースの口調は過激だった。
「二度は言わぬぞ。人間」
「あー、語る舌は持たぬ、だっけか」
なるほど徹底している。
「けど、少なくとも神殿からでてきてここにいるってことは、希冴姫たちとは話す気があるんだろ」
「……」
無言。図星かどうか、そのポーカーフェイスからは何も読みとれない。
「どうなのです？　エース」
「……希冴姫なぞ、我は知らぬ。どこの誰だ」
あ、そういや希冴姫に名前つけたことも知らないんだったか。
「俺が付けた」
「貴様に聞いた覚えはない。口を閉じろ」
ハハ……はぁ。流石に強敵過ぎる。ここまで頑なだとは……。
「わたくしの名ですわ。セツ様に頂きました。自慢の名です」
「そうか。そこまで堕ちたか」
絶対零度の瞳はまるでその勢いを緩めない。心底から希冴姫を嫌っているのか。
「色欲に溺れ、騎士の誇りはおろか精霊としての矜持すらもなくしたか。哀れだな」
流石にカチンと来たらしい希冴姫が厳しい顔で反論する。
「愛も知らぬ小娘が、よくいいますわ」
ぶつっ、と何かがキレる音。
「黙れ騎士の名を汚す尻軽が。娼婦にまで身を堕としたか」

またぶちっ、とキレる音。
「尻軽……？　わたくしがどんな葛藤と精神的高揚を持って愛を感じているかも知らないで……」
「貴様の心情など知るものか。事実貴様が人間の男ごときに尻を振って媚びているのは事実だろう。なんだ？　抱かれたか？」
こいつ、言葉を選ばねえな。
「どこまでセツ様を侮辱すれば気が済むのです……！」
「おや、我は貴様を侮辱したつもりだが。人間の男などどうでもいい」
「それが侮辱だというのです！」
遂に希冴姫が抜剣した。
「図星を突かれて逆上か？　みっともない」
「黙りなさい！」
希冴姫が斬りかかろうとしたその間に、重装備の騎士が割って入った。
「……」
騎士は無言。自らの剣を受け止めた騎士を見て、希冴姫が苦々しげに吐き捨てる。
「テンス……」
「突っ込むことしか知らんのか。その上相も変わらずの儀式剣術。素直に鞭でも持ったらどうだ？　貴様はそちらの方がよほど達者だろう？」
「エース……！」
「希冴姫」
「ジャック殿……」
「落ち着いてください。エースもそうですが、頭に血が上ったままで何かを為せるはずもありません」
「……ふん」
「……そうですわね」
「希冴姫。あいつとはいつもこうなのか？」

「大概は。わたくしも……まああまり好きではありませんが、エースはわたくしを目の敵にしていますので」
「実力もなく我儘放題のお飾り姫を好く趣味はない」
「そういうお前は言いたい放題だな」
流石に腹立つ。とはいえ……。
「仏の顔も三度までだ人間」
「んで、なんだかんだで話はしてくれるんだな。やっぱお前、割と良いヤツじゃないか」
徹頭徹尾無視で無関心というわけではない。どちらかといえば……。
「なんか戸惑ってないか？　もしかして、人間と話すの初めてか？」
「……口だけは回る下衆か」
「そう言うお前は、何気に人見知り激しいシャイガールか？」
「……」
苦々しげにこちらを睨みつけるエース。
「人間が我らの話に口を挟むな。目障りで耳障りだ」
「人間も精霊も大差ないだろ。なんでそんなに拘るよ」
「何も知らぬ人間は黙っていろ」
「知らないから、知ろうとしてるんだろ」
「貴様が知るところではない」
「そういうわけにもいかないな。いわれもなくただ嫌われてますじゃ納得いかない」
「貴様の納得等知るものか」
「んじゃ、お前の考えも知らないな。教えてくれ」
「断る」
「断ることを断る」
「断ることを断ることを断る」
「断ることを断ることを断ることを断る」
「断ることを断ることを断ることを断ることを断る」
以下エンドレス。

二時間くらい経って、流石にお互い不毛であることに気付いた。
いや、もっと前から気付いちゃいたんだが、半ば意地だな。一人の断る発言だけで十分くらい経つようになったし。
「はあ、はあ……で、教えてくれ」
「ぜえ、ぜえ……断る」
わーお……。
「断ることを断る」
「断ることを……」
「無限ループさせるつもりですの!?」
「口を出すなクィーン。最早これは意地だ」
「同感だ。この頑固頭をどうにかするまで譲る気はない」
「一生粘るつもりか貴様」
「お前こそ、一生気張るつもりか？」
ピクピク……。
「我が考えを変えると思ったかこの粘着男！」
「変えるまで動かねえってんだよこの岩石頭！」
思い切りお互いの頬を抓る。
「ぐぎぎぎぎ……」
「うぐぐぐぐ……」
「あ、あああああ？」
「これは……少々予想外でしたが……」
「ある意味心を開くことには成功しておる気がするがのぅ」
「いやぁ、実際ここまで子供っぽいエースは初めて見ますよ。テンスもそうでは？」
「……知らぬ」
「こふぉふぁる！（断る！）」
「こっひこそこふぉふぁる！（こっちこそ断る！）」
「まーだやっとるわい」
「どちらも目的を忘れてますね」
「セツ様のお顔が……おのれエース……！」

「こっちはこっちで頭が痛いのぅ」
「希冴姫。主様は大丈夫ですから抑えて」
俺とエースの争いはすでに泥仕合、というかドッグファイトの様相を呈してきていた。
「目潰し！」
「何の！　カウンター！」
「あたたっ！？　女の髪を引っ張るとは何様だ貴様！」
「執拗に急所攻撃してくるお前に言われたくない！」
「急所狙いは戦では常識だ！」
「じゃあ戦じゃ男も女もないだろ！」
「あっ！？　貴様胸をっ！　胸を触ったな！？　どさくさ紛れになんて奴だ！」
「胸当てに当たっただけじゃねえか！　ノーカンに決まってるだろ！　あんな硬いモン触って何が嬉しいってんだ！」
「誰が貧乳だ！」
「胸当ての上からだっつったろボケ！」
「あんなものあったって重たくて肩が凝るだけで戦場じゃ邪魔にしかならん！」
「だからそんなこと言ってないだろうが！　いつからそんな話になった！？」
「……そろそろ止めましょうか」
「うむ……ほれ二人ともその辺に……」
「「引っ込め爺！！」」
「……お呼びでない。わし、お呼びでない」
「……自然に止まるのを待ちますか」
「気付いたら二日後、とか普通にありそうですわよ？」
「まあ流石に体力の限界があるでしょうし……」
結局、お互いに体力が尽きてデュエルで決着をつけようと至極真っ当な結論に達するまで、また丸々二時間を要したのだった。

第二期第七話「アルカナの剣　中編」（後書き）

エースが……エースがセツはおろか僕の予想を超えて頑固だったもので……伸びました。そしてなんだかんだでセツと相性は良さそうなエース。そして二回しか、それも言葉自体は一言しかしゃべってないテンス。目立ち方に差が大きい。まあ元々テンスは無口設定ですが。なのはでいうとザフィーラ的立ち位置ですが。

新キャラオリカのエース。銀髪ショートの書かれてませんがレイピア持ち。男装が似合いそうな女の子です。

次回やっとこさ、今度こそデュエルです。流石にもう伸びないと……いいなぁ（遠い目）。

そ、それでは、レーネスでした！

第二期第八話「アルカナの剣　後編」（前書き）

うん。なんなの？　死ぬの？　と言わんばかりに一日二話更新です。

一応終わりはしましたが予定とは大幅にずれた終わりかたになりました。

なんでしょうね。僕、プロットとか立てても自分でガン無視してます。キャラが勝手に物語をガンガン進めてっちゃいます。作者すらおいてけぼりです。

オリカも出ますが、実はデュエルは諸事情によりおまけです。それよりも大事なやり取りをセツとエース。いえ、その場の全員でやっているので、そちらの方にも注目していただければ。

では、どうぞ！

第二期第八話「アルカナの剣　後編」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第八話「アルカナの剣　後編」

壮絶なドッグファイトを終えて、俺とエースはデュエルディスクを構えて対峙していた。
「ぜえ、ぜえ……覚悟はいいな、人間」
「はあ、はあ……お前こそ」
お互いなんかもうボロッボロだ。整っていた銀髪も乱れに乱れ、抓られ過ぎてちょっとむくんでいるほっぺたも真っ赤。まあ、それは俺も同じだろうが。
「……で、元は何の話だったか」
「……忘れた。つかどうでもいい」
「同感だ」
「どうでもよくありませんわよ……」
呆れたような希冴姫の声。
「ああ、そうか。我らが力を貸すとか貸さないとか……剣がどうこうという話だったな」
「……ああ、そうだったか」
「ふん……まずは力を見せろ。話はそれからだ」
「こっちは端からそのつもりだよ」
「「デュエル！！」」
「先攻は貰うぞ。我のターン！　ドロー！」

さて、どんなカードを使ってくるのか……完全に未知数だな。
「我は魔法カード『天使の施し』を発動する！　デッキからカードを三枚ドロー！」
割とメジャーなカードを使う。
「そして、カードを二枚捨てる……この瞬間、墓地に送られた『切り札の（トランプ・）騎士（ナイト）―エース』の効果を発動する！」
「なに！？」
いきなり自分を墓地に？　しかもそれで効果起動？
「『切り札の騎士（トランプ・ナイト）―エース』が手札から墓地に送られたとき、デッキからカードを一枚ドローする！」
ドロー加速！？『天使の施し』と併せてアドバンテージ確保か！
「そして永続魔法『ポット』を発動する！」
「『ポット』？」
知らないカードだ。
「このカードは発動時、お互いに５００ポイントライフを支払う」
セツ・エースＬＰ３５００
「この時このカードにはチップカウンターが十枚乗る」
チップカウンター……一体どんな効果が……。
「そしてモンスターを一枚セット。ターンを終了する」
「……俺のターン、ドロー！」
「スタンバイフェイズに『ポット』の効果発動！　そのターンプレイヤーはライフを１００ポイント単位で支払わなければならん」
「何？」
「さあ、ライフを支払え」
「……１００ポイント」
セツＬＰ３４００
『ポット』にチップカウンターが一つ乗る。
待て……このシステムどっかで……。
「どうした？　貴様のターンはまだ始まったばかりだぞ」
「……俺はモンスターを守備表示でセット。カードを二枚セット。

ターンエンドだ」
「攻撃しないか。まあいい。我のターンだ」
『ポット』の効果が不明瞭過ぎる。こういう時相手のカードしっかり確認できないこの世界は不利だな。
「我はスタンバイフェイズにライフを……そうだな我も１００、支払おう」
エースＬＰ３４００
『ポット』にチップカウンターがさらに一枚。これでもう十二枚にもなった。
「我は手札から『忍者マスターＳＡＳＵＫＥ』を攻撃表示で召喚」
「カウンター罠『昇天の角笛』！　俺のフィールドのモンスターをリリースして『忍者マスターＳＡＳＵＫＥ』の召喚を無効にして破壊する！」
「何！？」
「そして俺のリリースしたモンスターは『クリッター』！　デッキから攻撃力１５００以下のモンスターを手札に加える！　俺が加えるのは『シャインエンジェル』！」
「ふん……我はカードをセットしてターンを終了する」
「俺のターン、ドロー！」
「『ポット』の効果だ」
「……１００ポイント」
セツＬＰ３３００
「なんだ。みみっちい。肝の小さい男だ」
「効果もロクにわかんねえのにライフを早々払えるか。つーかお前だって同じだろ」
「それもそうか。まあいい。続けろ」
「……俺は『シャインエンジェル』を守備表示で召喚。カードを一枚セットしてターンエンドだ」
「我のターン。ドロー！　我はライフを今度は２００支払おう」
エースＬＰ３２００

『ポット』に乗ったチップカウンターは十五。一体この大量のカウンターで何をするつもりだ。

「行くぞ！　我は手札から『レイズ』を発動！　ライフを５００支払ってデッキからカードを三枚ドローする！」

エースＬＰ２７００

またドロー加速……そしてまた『ポット』にカウンターが乗った。

「『レイズ』はフィールドに『ポット』が存在する時、５００ライフを支払い発動することができる。そして『ポット』はライフコストをチップカウンターに変換する」

段々分ってきたかもしれない。『ポット』にチップ。更に『レイズ』そこに彼女らが切り札の（トランプ・）騎士（ナイト）であることを考えれば……。

「ポーカーか！」

「ようやく気がついたか。愚鈍め」

間違いない。エースのデッキはあたかもトランプのポーカーのごときカードがひしめいている。そしてポーカーであるならあのチップカウンターは……。

「我は『放浪の勇者　フリード』を召喚！　守備モンスターを攻撃する！」

「くっ……『シャインエンジェル』の効果を起動！」

「チェーンだ。モンスターを戦闘によって破壊したことにより『ポット』の効果を起動！　『ポット』に乗っているチップカウンターの数×２００ポイントライフを回復する！」

「マジかよ……」

ポーカーの賭けに勝った、ってことかよ！

『ポット』に乗っていたチップカウンターは二十。ってことは……。

「我はライフを４０００ポイント回復する！」

エースＬＰ６７００

一気にとんでもない量のライフを回復しやがった。くそ。これじ

や迂闊にリクルーターは出せないな。
「俺は『シャインエンジェル』の効果でデッキから『救済のレイヤード』を攻撃表示で特殊召喚する」
「雑魚を並べたか……我はこれでターンエンドだ」
「俺のターン！　ドロー！」
とにかく相手モンスターを戦闘で破壊すればそれまで蓄積された大量のライフアドバンテージを得られる。あえて自分のターンに大量にチップを乗せ、相手の攻撃を誘う。色んな戦術が取れる良いカードだ。こうして大量にライフを稼がれると自分も……と心のどこかで考えることもあるだろう。
「本物のポーカーさながらの、心理戦だな」
とは言え、そもそも自分から攻撃するのに向いてないこのデッキだとそれも難しい。
「俺はスタンバイフェイズに、ライフを１００ポイント支払う」
セツＬＰ３２００
「チップカウンターが一枚乗るぞ」
さてどうしたもんか。二ターン目、俺のフィールドががら空きになったにも関わらずエースのセットモンスターは攻撃してこなかった。とするとリバースモンスターか、それとも攻撃に向いてない守備要員なのか。
『ポット』の特性を考えれば後者の可能性が高く感じる。俺が知っている四つ星以下最強の守備力は２７００。『アテナ』のような最上級でも攻撃が通らない場合だってある。とすると表側攻撃表示の『放浪の勇者　フリード』狙い。だが……。
あいつは大量にハンド・アドバンテージも稼いでいる。『放浪の勇者　フリード』は光属性。今エースの手札に『オネスト』がある可能性は決して捨てきれない。
「どうした？　随分と悩んでいるな」
奴の表情は読めない。さっきも考えた通り、大したポーカーフェイスだ。

「今は……耐える！　俺は『豊穣のアルテミス』を守備表示で召喚！　カードを更に二枚セットしてターンエンドだ」
「我のターン、ドロー！　我はリバーストラップ『チェック』を発動。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分は『ポット』の強制効果を任意効果として扱うことができる。今回我はライフを支払わない」
　十分なライフを得たからか、それともただアルテミスを倒す手がないからか。どっちにしても……。
「チェーン！　カウンター罠『魔宮の賄賂』！『チェック』の発動と効果を無効にして破壊する！」
「何っ！」
　本当はあんなどうでもいいトラップに使うもんじゃないが……。
「そして見せてやる。俺の力を！　トラップカードの効果をカウンターによってパーミッションした時、俺は手札からこのカードを特殊召喚する！」
「まさか！？」
「そのまさかだ！　出てこい！『冥王竜ヴァンダルギオン』！」
『ゴオオオオオオオオオオッ！！』
「くっ……まさかこの人間、冥界の主を精霊に……！？」
「『冥王竜ヴァンダルギオン』第二の効果を発動！　相手フィールド上のカード一枚を選択して破壊する！　俺が選択するのは当然『ポット』！」
「くっ……我は『魔宮の賄賂』の効果によりカードを一枚ドロー……」
「カウンター！　『強烈なはたき落とし』！　今手札に加えたカードをそのまま墓地に捨てる！」
「馬鹿な……貴様」
「俺は『豊穣のアルテミス』の効果でデッキからカードを二枚ドローする」
「ちっ……だが、冥界の竜など勇者に討伐されるのが宿命！　『放

浪の勇者　フリード』の効果を発動！　墓地の『忍者マスターＳＡＳＵＫＥ』と『サイレント・ソードマンＬＶ７』をゲームから除外し、このカードよりも攻撃力の高いモンスター一体を破壊する！」

サイレント・ソードマン？『天使の施し』か……。

「っ……冥界の王！　闇は闇に還れ！」

一瞬何故か辛そうに顔を歪めたエースだが、迷いを断つとばかりに強く叫んだ。

「させるか！　俺はもう一枚のカウンター罠を発動させる！『デストラクション・ジャマー』！　手札からカードを一枚墓地に送って発動！　モンスターを破壊する効果を無効にし、破壊する！」

「くっ！　このっ！　どこまでも邪魔を……！」

「エース！　お前にもう一度だけ聞く！　なんでそんなに人間を嫌う！　過去の人間はお前たちに何をした！？」

俺は改めて尋ねる。ただ勝ったってダメなんだ。俺は、彼女たちの心に触れなきゃいけない。そうでなければ、力を貸してもらう資格はない。

……そう、思っていた。

「……では……い」

「え？」

突然俯き、ぼそぼそと何事か呟くエース。聞き返すと、エースはキッと今にも泣きそうな顔で俺を睨みつけてきた。

「過去ではない！　今だ！」

「なに……」

「精霊のカードだと！？　ふざけるな！　我らは貴様らの道具ではない！」

「エース……」

「生贄だと！？　コストだと！？　壁だと！？　貴様らは我らをなんだと思っている！？」

「……」

「貴様らはいつもそうだ！　我ら精霊をパートナーだと、口では綺

麗事を言いながら、すぐに私たちは使い捨てだ！　我らは……人形ではない……」

「エー……」

「だから！　我は貴様らに屈しない！　お前ら人間も一度死に臨んでみろ！　その辛さも知らずに……もう、我らを……我らを殺すなぁ！！」

エースの悲痛な叫び。

「何故精霊なんだ!?　何故精霊のカードを使うことがある!?　ゲームがしたいならただの紙でも良いだろう!?　精霊を殺し、墓地に送る意義とはなんだ!?　お前らは墓地の恐怖を知らない！」

カードも投げ捨て、狂ったように頭を抱えるエース。

「やめろ……やめろ、止めてくれ！　もう、嫌だ。嫌なんだ！……もう、止めてぇ……」

遂には膝を着いて座り込んでしまうエース。そんな彼女に静かに近づく影が一つ。

「……デュエルは、俺が引き継ぐ」

「テンス……」

エースからデュエルディスクを外し、自らの腕に装着する。

「……俺は『切り札の（トランプ・）騎士（ナイト）―テンス』を攻撃表示で反転召喚。ターンを終了する」

テンスはあくまで冷静に、ターンの終了宣告をする。

……俺のターンだ。

しかし、俺はデッキに手が伸びない。

「……どうした。カードを引け」

「お、俺は……」

手が震える。

……エースの言葉が、心に鋭い棘のように突き刺さっていた。

「で、きない……」

「……何故だ。お前の目的は俺たちを同志とすることだろう」

「けど……けど！」

エースたちを使えば、俺は間違いなく彼女を殺す。墓地に送られることを恐れる彼女の力は、その墓地に行ってこそ意味を為す。なら……。

「……続けろ」

「無理、だ……」

「続けろ！！」

「っ！」

声だけでぶっ飛ぶかと思った。それほどまでに大きな声だった。

「力を見せろ。お前を表せ。俺を、認めさせてみろ」

「でも……」

「……俺を殺せ」

「っ！？」

「俺を殺して、お前は勝て」

「な、何を……」

「精霊使いとしての、覚悟を見せろ。俺たちの、“王”たる器を見せろ」

「何を……何を言ってる！？　俺に、これ以上お前たちを……希冴姫たちを殺せって言うのか！？」

「そうだ」

「な……」

テンスの口調は、あくまで静かなままだった。

「嫌がる者を、従えることには反対だ。だが……奴らは違う」

テンスが見据える先には希冴姫たちの姿。

「セツ様……」

「希冴姫……俺は……」

希冴姫は、特に多く墓地送りにした。戦闘で、コストで、融合のために。理由は様々だが、墓地送りには違いない。

「セツ様。わたくしは、セツ様をお慕いしております」

「……え？」

「それが、全ての答えですわ」

「希冴姫……？」
「セツ様……セツ様になら、愛するが故の献身。死への恍惚。それがわかるはずですわ」
愛するが故の献身……？　死への……恍惚？
「例えどんなに傷つこうとも、そのそばを離れずに、何時までだって共に居たいと望む……セツ様、本当に分かりませんか？」
……さだめ。
「きっと……エースは“普通”だったのでしょうね。誰よりも人を嫌いながら、その心はどんな精霊よりも人間らしく純粋で……私たち精霊は、きっと……」
――誰もが歪んでいる。
「主よ……」
「キング……」
「主は今、分岐点におる」
「分岐点？」
「優しさと思いやりに溢れた“神子（みこ）”となるか。強さと厳しさを併せ持つ“王”となるか」
「神子か王か……」
希冴姫たちを殺したくない。でも、それは希冴姫たちの“誇り”と“愛”を傷つける。それに、カードを墓地に送らない、なんて無理だ。希冴姫たちを使って、墓地に送らずに戦うなんて。
「俺は……」
「……どうせ……」
「エース？」
「どうせ……貴様には“先”が見えているのだろう？　お前は、とっくの昔に選択している……」
「エース、貴女……」
「勘違い……するな。我は、力を貸す気はない」
「ああ……」
「ふふ……だが……」

――精霊とドッグファイトする奴なぞ、貴様以外にいまい……。
エースはそれきり沈黙した。
「……」
俺はデッキに手を伸ばす。
「セツ様……」
「……俺のターン！　ドロー！」
俺は……俺は……！
「俺だ……！」
忘れるな。俺はいつだって……。
「自然体。俺は、何にもならない。俺は、“俺”になる！」
いや、違うな。
「変わらない……何も変わらないさ……俺は、何にもならないんじゃない……」
何にも、なれないんだ……！
「キング！　俺の結論だ！　よーく聞いとけ」
「うむ」
「買い被るな！　俺が“神子”だの“王”だの、そんなもんになれるか！　俺は、お前たちの相棒で、友達だ！　お前たちに全力で迷惑かけて、お前たちに全力で報いる！」
傲慢だろうな。何様だって話だよな。
「それでも……俺はこのままでしかいられない」
“神子”か“王”か。
「そんな選択肢はいらん！　与えられた選択肢に、縛られるつもりはない！」
それが俺の選択。
「……真実を知って、尚も揺るがず我道を貫く、と」
「……ああ。そうだ」
「……見事」
「それでこそ、主様です」
「……ならば」

「ああ。行くぞテンス。まずは……お前を超える」
「……来い。“王”！　否、御堂切！」
テンスの場にいるのはテンス自身。攻撃力は１０００守備力は２０００
態々攻撃表示にしたのは『オネスト』のためか？　……いや、きっとテンスは……。
「手札から『ライオウ』を召喚！『豊穣のアルテミス』を攻撃表示に変更！　バトル！『救済のレイヤード』で『切り札の（トランプ・）騎士（ナイト）―テンス』を攻撃！」
「ぐ……ぅ！」
テンスＬＰ６３００
「『豊穣のアルテミス』でダイレクトアタック！」
テンスＬＰ４７００
「『ライオウ』でダイレクトアタック！」
テンスＬＰ２８００
「これで終わりだ！『冥王竜ヴァンダルギオン』でダイレクトアタック！」
「うおおおおおおおおおおおおっ！！」
テンスＬＰ０
「……俺は、お前に付こう」
「テンス……」
「だが、エースは……」
「……わかってる」
エースに、デュエルは無理だ。
「あ……」
「これは……」
「なんと……」

「どうした？」
「セツ様。わたくしたちのカードを」
言われて、希冴姫たちのカードを見てみる。そこには……。
「『切り札の（トランプ・）騎士（ナイト）―クィーン』……」
希冴姫たちのカード名とカードテキストが変化し、それぞれ『切り札の（トランプ・）騎士（ナイト）―クィーン』『切り札の（トランプ・）騎士（ナイト）―ジャック』『切り札の（トランプ・）騎士（ナイト）―キング』となっていた。
「それと……剣だ」
そう言ってテンスが差し出してきたのは五本の剣。
それぞれが俺の持っていた寄り代のカードに吸い込まれていき、そのカード名はこうなっていた。
『アルカナソード　スペード』
『アルカナソード　ハート』
『アルカナソード　クローバー』
『アルカナソード　ダイヤ』
『アルカナソード　ジョーカー』
「これが……」
「はい。アルカナソードです」
「……五本もあったのか」
「わたくしたちは、五人衆、ですもの」
「そうか……」
「セツ。お前はどうする」
「ん？」
「俺を手にし、真なるクィーンたちも得た。お前は、この先に何を望む」
「……は、決まってるさ」
最初、こっちに来た時思った通りだ。
「俺は俺らしく……ゆるゆる行くさ。楽しくな」
そうさ。

「俺は、ずっとそうして生きてきたんだから」

第二期第八話「アルカナの剣　後編」（後書き）

はい。第八話、アルカナの剣の最後です。うん。間話とか言いながら本編最終話レベルでシリアスってますね。何がしたいんでしょう僕は。迷走しております。

しかももうこれアンチだと叩かれるレベルですよ。自分で書いといて。

ガンガン墓地送りにする遊戯王自体否定するような話です。自分で批判するレベルです。

……けど、本音なんですよね。精霊も生き物であるはずなのに何度も何度も殺して墓地に送って。精霊は何故、そこに疑問を持たないのでしょう。歪んでますよ。きっと。ええ。もういっそ批判覚悟でぶっちゃけます。精霊たちは歪んでいます。エースこそが普通の反応しているのだと、遊戯王の小説書いている身ですが主張します。やられる度に精霊は悲鳴をあげてるじゃないですか。墓地に送られているじゃないですか。怖くないのでしょうか。痛くはないのでしょうか。

精霊を一生命体として見た時、どうしてもこの疑問にぶつかります。……ええわかっています。これはポケモンを見て、なんという虐待だと憤るようなものだと。

でもきっと精霊の中にもエースのような精霊がいる。そう思ったのです。

ええと……オリカの詳しい紹介は活動報告に出します。そちらもご照覧下さい。

すみませんでした。

レーネスでした。

特別編「デッキレシピ　さだめ」（前書き）

ネタです。それだけ。

特別編「デッキレシピ　さだめ」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「デッキレシピ　さだめ」

「いや、これはダメでしょ」
いきなりダメだし！？
「だってさだめのこれ友達とのネタにしか使えないし」
それがいいんじゃないか！
「希望はもらったけど……」
一人でもいるのなら……。
「それより本編、って人は一人どころじゃないんじゃ……」
うぐ……。
「ところでお兄ちゃんは～？」
ここにはいません。
「さよなら～」
待って～行かんといて～！
「報酬は？」
アテナはそんなの要求しなかった！
「甘い。さだめは読者の好感度すら気にしない」
気にしようよ！　読者様の声がなければ君はヒロインにはなれないよ！
「今のさだめは他人を蛆虫とまでは思ってないけどお兄ちゃんを世界の至宝として他人を路傍の石程度には思ってます……これでいい

？」
何が！？　それで好感度稼げたと思ってるの！？
「毒舌キャラは人気が出るよ？」
そうか！？　少なくともさっきのは毒舌じゃなくて暴言、爆弾発言の類だと思うぞ！？
「許してぴょん♪」
うん。キミの笑顔がギアスになると思ったら大間違いだ。そしてその語尾うざい。
「お兄ちゃん以外にどうやって媚び売ればいいかわかんないんだもん！」
逆切れ！？　そして媚び！？
「え？　媚びでしょ？」
ぶっちゃけ過ぎだから。キミは空気を読もう。
「うん、それ無理」
それアルカナだと二度目ですよ。
「お兄ちゃんと同じことがしたかった」
基本的にセツ中心なんですね。
「基本的じゃなくて絶対的」
……わかりました。キミの執念には負けました。妥協しましょう。
「え♪」
僕は消えてセツに任せる。さらばっ！
「おいぃぃぃぃ！？　俺に丸投げ！？」
「さっすが作者さんわかってるぅ♪」
「なるほど。スケープ・ゴートということか……」
「お兄ちゃん……二人っきり……だね？」
「甘い雰囲気を作り出そうとしてもお前の場合恐怖しか作りだせないことに気付いてくれ」
「ちぇー」
「いいから、デッキレシピに行くぞホレ」
「はーい」

・上級モンスター
『混沌帝龍―終焉の使者―』×1
「マテ」
「なにお兄ちゃん」
「イキナリだがヤバい。そいつはダメだ」
「強いよ？」
「それが問題だと気付け」
「禁止スタンダードだから」
「限度を覚えよう。頼むから」
「まあまあ、とにかく次行こう」
『カオス・ソルジャー―開闢の使者―』×1
「待て！」
「もう、また？」
「まただ！　そもそもお前は何をどうしてそんなカードを手に入れた！？」
「……世界の秘密に至るのはまだ早いよ。お兄ちゃん」
「え、何その盛大な伏線。お前の禁止スタンダードには世界の秘密に関わる何かが隠されてんの？」
「次逝ってみよー！」
計二枚
「よりによってその二枚！？」
「むしろこれ以外まで入れたって事故するだけだよ？」
「……そうじゃなくて。そうじゃなくて！」
「はいはいとっとと次に逝くよー」
・下級モンスター
『八汰烏』×1
「よし。待て」
「四度目～」
「このままだと一枚ごとに制止をかける勢いだ」
「なんで～？」

「お前が本気でそう言っているんだとしたらお兄ちゃんは泣きたくなってくる」
『処刑人―マキュラ』×1
「わーお……」
「さだめのフェイバリット♪」
「とんでもない輩をフェイバリットにしておられるのですね」
「何よりもまず響きが堪らないよね。処刑人だよ処刑人」
「そこに痺れて憧れているお前はおかしい」
『黒き森のウィッチ』×3
「お前は往年の八汰ロックを再現する気満々だな」
「さだめちゃん強い♪」
「言い直せ。さだめちゃんエグイと」
『クリッター』×2
「制限だが、今さらだな」
「ホントにお兄ちゃん全部のカードで制止かけてる……」
『聖なる魔術師』×3
「よしわかったこのデッキは酷過ぎる」
「雑魚だよ？」
「効果欄みて言ってるか？」
『魂を削る死霊』×3
「盾にする気満々だろ」
「贄にする気も満々だよ？」
「なんでも満々ならいいわけじゃない」
『マシュマロン』×3
「禁止や制限無視以外には入ってないのかこれは」
「入ってるよ？」
「今だ出てこないんだが」
「次だよ次」
『コーリング・ノヴァ』×3
「うん？　また随分平和的な……イヤ待て、マシュマロン出てくる。

カオスの素材になる！」
「うーん光属性は禁止制限少なくて……」
「そこ、笑うところか？」
計１９枚
「闇属性９枚光属性９枚……完全にカオススタンダードだな」
「八汰烏は違うよ？」
「そいつは属性以前の問題だ」
・魔法カード
『苦渋の選択』×１
「これ一ターン目からカオス出てくる勢いだよなぁ！？」
「カオスを五枚以上持ってればなぁ～」
「悪魔か！」
『天使の施し』×２
「腐らないよなぁ……間違いなく」
「カオス出しやすいよー」
「禁止制限出してるコナミに謝れ」
『強欲な壺』×３
「謝れ！」
「何に？」
「全てに」
「ごめんなさい謝る気がありません」
「えー謝るところそこー？」
『サンダーボルト』×１
「これを良心的だと思ってしまうほど、今までが酷かった」
「カオスの性質上『ブラック・ホール』の方が都合よくて」
「うん。どこも良心的じゃなかった」
『ブラック・ホール』×２
「魔法カードに禁止制限じゃないカードは？」
「入ってるって」
「きっとそれもどうせ……」

『ハーピィの羽箒』×１
「その心は？」
「エンペラーで全除去できるし良いかなって」
『遺言状』×２
「これクリッターとかじゃなくても八汰ロック完成するよなぁ！？」
「さだめちゃん最強！」
「最凶或いは最狂」
『おろかな埋葬』×３
「準制限って……平和だよなぁ～なんて言うと思ったら大間違いだ。カオスだろ。カオス出てくるだろ。マキュラ使う気だろ」
「まあね～」
『死者転生』×２
「……」
「平和だよね」
「一つ前に『おろかな埋葬』がなければな」
「どうして？」
「カオスのサーチと墓地肥しで大抵出せるよなこれ」
「バレたか」
計１９枚
「驚いたことに『死者蘇生』が入っていない」
「カオスも正規の召喚手順踏めば蘇生できるんだけどね」
「ま、正規手順で出た瞬間ほぼ勝ちだから入れるまでもないのかもな」
・罠カード
『第六感』×３
「外しても殆ど損しないよなぁこのデッキ！」
「ちなみに作者さんは『ダイス・ポット』マイスターを自称しているよ？」
「六割で６０００ダメージ与えるって自称してるな」
「『ダイス・ポット』なら自分には運命力があるとまで豪語してた」

「馬鹿だな」
『聖なるバリアーミラーフォース―』×1
「おや、制限通りじゃないか」
「たまにはいいじゃん」
「常にそうしろ」
『刻の封印』×3
「ドローくらいさせてやれよ」
「八汰ロックの代用だよ」
「どうせマキュラと組み合わせるんだろ」
「まあね～」
計7枚
「マキュラ使ってる割に少なめだな」
「マキュラはアイドルカードみたいな……」
「どんなアイドルだ！」
「デビューシングルは『あなたと愛の公開処刑♪』」
「ヤバい聞きたい！」
「マキュラを題材にしたモノマネ芸人まで出る人気っぷり」
「モノマネで死人が出るわ！」
「大丈夫だよ。そのモノマネ芸人の名前は『通行人―まきゅら』だから」
「まさかの一般人！」
「とにかく計47枚。でも以外と勝ち筋は限定されてるんだよね」
「その分凶悪極まりないがな」
「実は作者さんの中ではマキュラ精霊化が検討されて……」
「考え直せ。このデッキを使わせるつもりか！」
「ううん。この小説のマスコットにって」
「ならねえよ！？　どうしたってマキュラがマスコットにはならねえよ！？」
「ゆくゆくはヒロイン化」
「まさかの女の子！　っていうかデッドエンド以外にルートあるか

！？」
「結婚式は公開処刑」
「結婚は人生の墓場ですねわかりますこんちくしょう」
「ケーキ入刀ならぬ頭部入刀」
「俺じゃなくて作者の脳を切開した方がいいと思う」
「ライスシャワーはブラッドシャワー」
「血の雨が降る結婚式」
「狐の嫁入りだよ？」
「天気雨と一緒に考えるな！」
「ブーケトス＝頭部トス」
「幸せのおすそ分けが次の殺人予告に早変わり。ワアスゴイナー」
「さだめ、マキュラにならお兄ちゃんを取られても……」
「安心しろマキュラを選ぶくらいなら迷いなくさだめを選ぶ」
「本当！？　嬉しい！」
「確実な死か生き残る確率が僅かでもあるか、くらいの違いしかないけどな」
「これは……イケるね！」
「イケねえよ！　これ以上そんな存在自体が死亡フラグな精霊出されちゃたまんねえよ！」
「じゃあ『通行人―まきゅら』ならどうかな？」
「そいつは精霊なのか」
「攻／守１６／１２効果なし」
「ゼロは！？　攻撃力二ケタ！？　しかも１６！？」
「『千眼の邪教神』なら倒せます」
「入れる価値ねえ！」
「レベルは１２」
「神！？」
「テキストには『作者と友人たちの馬鹿話から誕生したマキュラのパチモン。当時はこの名前を出すだけで場を爆笑の渦に叩きこむことが可能だった最強モンスター』って書いてある」

「事実だ！」
「種族は人間族」
「ありそうで全くなかった種族出た！　種族におけるメリットすらない！」
「まあ一般人だからこの種族は当然」
「ですよね！」
「お兄ちゃん、今日はツッコミが絶好調だね！」
「今の一連の流れでツッコミ放棄してたらアルカナは終わっていた」
「きっとルインだったらボケが連鎖したに違いないよ」
「そうだな。その時はルインが名実ともに破滅の女神になっていたことだろうな」
「というわけで、さだめの禁止デッキレシピでした～」
「そういえばこれデッキレシピだったな。（笑）が付く」
「参考になったかな？」
「ネタ以下の価値もないが」
「息抜きにしても酷いよね」
「反省するべきだな。さだめも含めて」
「サンダーボルト抜いてブラック・ホール三枚積みにした方がよかったかなー？」
「そうじゃない！」
「実際に組んで見れないから回るかどうかわかんなくて……」
「だからデッキの出来についての反省じゃなくて！」
「実際はシリアスに疲れた作者が虚ろな笑いを漏らしながら書いてたから……」
「前々回のシリアスがそこまで尾を引いていたのか……」
「ギャグしないと精神的に無理そうだったって」
「次は期待していいのか？」
「多分。明日ちょっと仕事だから無理かもしれないけど、だって」
「進める気ないだろ作者！」
「普通なら一週間放置くらい当たり前なんだから譲歩しろって」

「３０話程度書いたくらいで随分偉そうになったもんだな」
「ホントだね」
「他の作者さんの中には百話近く連続更新する人もいるというのに」
「そこら辺は神の一種じゃないかな？」
「まあともかく、すまん。最新話はもうちょっとだけ待っててくれ！　今オリカ入れた俺のデッキを組むのに苦戦してる。エースが入らないのは作者としても予想外の展開だったらしく……」
「というわけで、今回はこれでお茶を濁します」
「また、今度こそ本編……というか間話６で！」

特別編「デッキレシピ　さだめ」（後書き）

ただネタが書きたかっただけです。
これをさだめの個人回に……は、流石にしません。殺されます。
さだめに。
それでは、レーネスでした！

第二期第九話「戦野剣士」（前書き）

改訂一つ目です。
一気に半分近くになってしまってなんだかさみしく感じる悠です。
剣士の登場回。剣士は、エルやフレイがいなくなった以外に変更点はありませんが、それでも変更点はありますね。

第二期第九話「戦野剣士」

アルカナ～切り札の騎士～
第二期第九話「戦野剣士」
セツが精霊界にて、エースの慟哭に体を震わせたその三日後。
セツがまだ帰還していないアカデミアでは編入生の噂で持ちきりだった。
「どんな奴がくんのかな～？　今からワクワクしてしょうがないぜ！」
「アニキはデュエルがしたいだけでしょ」
「へへっ！　まあな！」
という十代たちのようにそれを歓迎する生徒がいる一方、その編入生の素行等について問題視する生徒もちらほらといた。
「なんか、前の学校で不良集団のボス張ってたらしいよ」
「暴力団のアジトに乗りこんで壊滅させたとか聞いたことある」
「視線だけで犬に服従のポーズ取らせるくらいの威圧感が……」
などと何の根拠もない噂も溢れていた。
そんな教室に、クロノスが入ってきた時には、遂に編入生の登場かと一同はピタッと話を止め、クロノスの挙動に注目した。が……。
「え～本日ゥ～ハ、編入生の紹介をする予定だったノ～デスガ。パルメザンチ～ズ。何故かこちらに顔を出していないノ～デ、紹介は後日に回ス～ノデス」
「え～マジかよ！　せっかく新しいやつとデュエル出来ると思ってたのに」
「本当に貴様はそればっかりだな」
「だが、確かに編入生のデュエルタクティクスを見ることができないのは残念ではあるな」
「あ、三沢君。いたんだ」
「……いたんだ。というか授業なんだからいるに決まっているだろ

う！」
「はいはい空気空気オキシゲドン」
「俺は空気じゃない！　それとオキシゲドンは空気じゃなくて酸素だ！」
「同じじゃない？」
「同じじゃない！　いいか、一般的に空気と呼ばれるものはその大部分を窒素が占めていて……」
「でも、空気より酸素って呼ばれた方が大事にされている感じしない？　人が生きていく上でなくてはならないものだし」
「……確かに」
「三沢君、騙されてるッスよ」
「っていうかなんで中等部のさだめさんが普通に混ざってるんですか？」
「さだめはお兄ちゃんの妹だからね。空気に違和感なく溶け込むのは容易」
「セツと違って明らかな存在感を醸し出してるんですけど……」
「……っく！　羨ましい」
「静かにするノ～ネ！　そしてまたモ～ヤシニョールセツはお休みなノ～ネ？　いい加減校長ゥ～も庇いきれなくなってくるノ～ネ！」
「す、すみません！　多分もうすぐ戻ってくると思うんですけど……」
「お兄ちゃん……相変わらず頭良い割に感性で行動するんだから……」
「いいじゃね～か！　こういう時、セツはまた強くなって帰ってくるパターンだろ？」
「そうッスね。今度は一体何してるんだろうね」
「フン。それで留年してたら元も子もないだろうに。馬鹿な奴だ」
「はっ！？　そうすればさだめとお兄ちゃんは同学年……修学旅行も一緒に行動……これまでのように修学旅行のバスに隠れ潜んで餓死しかけることも、飛行機の貨物室に潜んで凍死しかけることもな

く一緒に旅行……クロノス先生！　お兄ちゃんを是非りゅうね……モガモガ……」
「あ、あはは……すみません、セツには私からもよく言っておきますので……」
「……もうシニョールセツの監督ゥ～はシニョールアテナたちに一任しているノ～ネ。煮るなり焼くなり好きにするといいノ～ネ」
「はい是非……む～む～！」
最近はさだめの暴走を止める役も板についてきたアテナである。
「それでぇ～ワ、本日の授業を始めるノ～ネ」
そうしてセツ不在、本来今日から参加のはずの編入生抜きで授業が開始された。

その頃、件の編入生は……。
「……どこだよここは……」
アカデミアの森の中で絶賛迷子中だった。
「くそ……んだよこのアカデミアってやつは。無駄に広過ぎんだろ……ブツブツ」
何事か呟きながら森の中を当てもなく彷徨い続ける。
『マスター。何なら我がひとっ飛び周囲を探索してくるとしよう。このまま闇雲に歩くよりは建設的だろう』
途方に暮れる編入生の傍らから、半透明の騎士がそう声をかける。
「ああ、そうしてくれネイキッド。こんな調子じゃ授業どころかレッド寮にも辿りつけやしねえ」
溜息混じりにそう漏らした編入生に、半透明の騎士――ネイキッド・ギア・フリード――はその逞しい胸板を張って頷く。
『了解した。任せておけ』
「んじゃ、頼むわ。こんなんもうお手上げだ」
そうネイキッドにひらひらと手を振って、その編入生はその場に

どっかりと腰を下ろすのだった。

本日の一連の授業が終了し、セツもいないので暇になったアテナはとりあえず女子寮に戻ってから散歩に出かけた。なんとなく、今はセツのいないレッド寮へと足を向ける。

「もう、本当にさだめさんの言う通りです。セツってばお勉強できるのにどうして直感頼りで行動するんでしょうか……」

十代やセツ本人に聞けば、その方が面白そうだから。とでも答えそうだ。ついでにルイン辺りに聞いても同じ答えが返ってくるだろう。

「……いえ、きっとさだめさんも同じですね。はぁ……なんかそんな人ばっかりです」

私が子供っぽい皆さんを上手く制御しなくちゃ！　と気合を入れるアテナ13歳（最年少）。

「……こんなだから年下扱いされないんですよね……」

その事実に思い至り落ち込むアテナ（精神年齢39歳）。

そんなアテナが女子寮を出て直ぐに、何やら正面玄関付近で騒ぎが起きているのに気付いた。

「なんでしょうか……」

通り道だったこともあり、アテナは騒ぎが起きている中心に向けて足を進めるのだった。

そして、その騒ぎの中心となっていたのは、やはりというべきか編入生の少年である。

『注目されているな』

「……悪い意味でな」

探索から戻ったネイキッドの先導でなんとか森を抜け、建物が見えるところまで来たはいいが、どうも女子寮だったらしい。遠巻きに自分たち（どうせネイキッドのことは見えていないが）を見つめているのは全員女子生徒だ。

「……っち」

その視線に明らかな戸惑いと恐怖が含まれているのを感じて、つい舌打ちしてしまう。

（もう慣れっこのはずなんだがな……）

昔からこうだ。眼つきが悪い、雰囲気が怖いと遠巻きにひそひそと怯えられ、不良からはガンつけているなどと因縁をふっかけられ結局ここまで流れてきた。こういった状況は初めてではないというのに何故かいつも以上に気分が悪い。

（期待でもしてたか？　柄にもねえ）

デュエルの精霊と出会い、彼らが受け入れてくれたからか。それともこの新しい生活のどこかに、儚い希望か何か抱いていたのか。

「くそっ！」

『マスター。そんなことではなおさら怯えられてしまうだけだ。冷静になれ』

「あーあーそうだな悪かったよ」

ネイキッドがそうアドバイスしてくれるものの、どうにも居心地の悪さが拭えない。

「大体オレが何をしたって……」

そんな風に思わずネイキッドに愚痴りそうになった時、横合いから声がかけられた。

「あのー、何かお困りですか？」

時間はちょっとだけ巻き戻る。

ざわめく女子たちの集団に近づいたアテナは、その中心にいるリ

ーダー格の女子に声をかける。
「海野さん。どうかしましたか？」
「……ああ、天音さん？　ちょっと、不審な男がいたので警備に通報するかどうか相談していただけですわ」
「不審な男性、ですか？」
「ほら、あれです」
彼女が指差す方向には、確かに男性がいた。燃えるような赤毛を無造作に切った眼つきの悪い男。それと……。
（ネイキッド・ギア・フリード……？）
精霊。彼は精霊を連れていた。それに仕草を見ていればわかるが、しっかり認識もしているようである。
「あの男、最初から見ていた子によれば森から出てきてこの辺をずっとうろうろしているらしいですわ。あの凶悪な眼つきといい、とても堅気の人間とは……」
「あ、もしかして……」
「あら、何か知ってるんですの？」
「ほら、今朝クロノス先生が言っていたじゃないですか。編入生ですよ。あの人」
「……ああ、そう言えばそんなこともありましたわね。けど、なんでその編入生が授業にも来ないで、女子寮周辺をうろちょろしてるんですの？」
「それはちょっと……あ、じゃあ私、聞いてきます！」
「あ、ちょっとお待ちなさいな天音さん！」
「はい？」
海野の慌てたような声に、今にも駆け出そうとしていたアテナは制動をかけて振り向いた。
「あんな得体の知れない野蛮人に声をかけるだなんて……何を考えているんですの？　乱暴されても知りませんわよ？」
「大丈夫ですよ」
「どこからそんな根拠が……」

思わず、精霊を連れている人に悪い人はいませんと答えそうになったアテナだが、精霊が見えていない海野にそんなことを言っても通じないだろう。

「とにかく、私なら大丈夫ですから」

元々物怖じしない性格のアテナだが、さだめの一件を経た今なら例え相手が大量殺人鬼であろうと国家間テロリストであろうと笑顔でお友達になれる自信を持っていた。

「天音さん!?」

慌てたように、けれどとても心配そうな海野の声を置き去りにして、アテナは編入生の所に向かう。

「あのー、何かお困りですか?」

困惑していた。どうせ自分から声をかければ逃げられ通報でもされてしまうのだから当てがなくともとにかくここから離れようと思っていた矢先に、あちらから声をかけられたんだから、それも仕方ないだろう。

「……あ……?」

思わず間抜けな声が口から洩れる。後ろでネイキッドが噴き出しているのが癪に障った。

「な、なんだテメエ。オレに何の用だよ」

動揺のあまりついそんなぶっきらぼうな口調になってしまったオレに、ネイキッドが呆れたような視線を向ける。

『マスター……親切に声をかけてくれた婦女子相手に、その態度はなかろう』

わかっちゃいるが、オレとしても予想外過ぎた。思わず警戒してしまったのは、仕方ないことだと思いたい。

「いえ、何かお困りの様子でしたから、何か力になれるかなって思って」

「……別に、困ってなんかねえ。さっさと消えろガキ」
言ってから失敗した、と内心頭を抱えた。戸惑った挙句突き放してしまった。こんなことだからオレは……と自分の口の悪さに呆れ果てる。
（ったく、結局なんだ。悪いのはオレじゃねえか。歩み寄ってこようが自分でこうして引き離して……これじゃこいつも……ほらな、やっぱり俯いてやがる）
罪悪感。溜息を一つ吐いて早々に立ち去ろうと踵を返そうとし……唐突に服の裾を引っ張られた。
「あ？」
「あ、あの！　私、ガキですか！？　私、ガキに見えますか！？」
「は……？　いや、ガキ……」
ずずい、と顔を近づけてそう聞いてくるその女に困惑し、ついまたガキ呼ばわりしてしまう。
（なに言ってんだ！　ここは否定するところだろ！　せっかく逃げて行かなかったのにまた……）
「ホントですか！？　良かったぁ～」
「……なんだと？」
女は逃げるどころか、嬉しそうに微笑みを浮かべてオレを見上げていた。
「最近誰からも年下扱いされなくてちょっと不安だったんですよ。私やっぱり老けてるのかなぁって」
んなこと知らん。そう思ったが流石に今度は口を噤んだ。
「あ、私天音アテナといいます。貴方のお名前は？」
「戦野、剣士」
最初と変わらない笑顔で自己紹介されて、ついオレも名乗ってしまう。いや、名乗って悪いというわけじゃねえが。
「イクサノケンジさん、ですね。どんな字を書くんですか？」
「戦う野原の剣士……」
「かっこいいお名前ですね！　私は天の音で天音。アテナはカタカ

ナです」
「お、おう……」
なんだかペースが乱れる。
「戦野さん……いえ、剣士さんとお呼びしてもかまいませんか？
あ、もちろん私のこともアテナで構いませんから」
「い、いや遠慮しておく……呼び方はそれでいいが」
「そうですかー……ちょっと残念です」
（な、なんだコイツ……）
自分に怯えるどころか驚くほど懐っこい。曇った笑顔を見て罪悪感で死にたくなるくらいには。
「あ、あーやっぱアテナ……で」
今までロクに女子を名前呼びしたことなどないのについ了承してしまう。この少女の笑顔が曇ることがとんでもない犯罪に思えた。
「そうですか！　よかったです！」
（う……つーかコイツ……）
落ち着いてみれば、とんでもなく整った容姿をしていた。
とりあえず世の中に存在する美辞麗句を片っ端から並びたてても遜色ないほどには。
『おやマスター、惚れたか？』
「ばっ……！？　んなわけあるか！　アホかっ！　あ、いやなんでもない」
ネイキッドが見えないと思い、慌てて誤魔化すオレだったが、その考えに反してアテナはあくまでも笑顔だった。
「あ、いいえ。私も見えてますから大丈夫ですよ。ネイキッド・ギア・フリードさんですか？」
「は……お前、じゃねえあ、アテナはこいつが見えるのか？」
今まで自分以外にネイキッドが見えている人間を知らなかったオレは思わず目を丸くする。
「はい。私も精霊いますし……シャルナー？」
『あー……なんかリアルに久しぶりだわよ～一体いつ以来かしらん

？』

体育座りですっかりいじけている『アテナ』が姿を現す。何やらやさぐれているが……。

『おお、『アテナ』殿か！　以前は遠目から見ただけであったが……なるほど近くで見れば尚美しい。我はネイキッド。マスターの少女も、我がマスター共々よろしく頼むぞ』

「はい！　よろしくお願いします！」

『あーはいはいヨロー。今はシャルナって呼んでねー』

感激したようなネイキッドの挨拶に対しても、気だるげな挨拶を返すアテ……いや、シャルナ。女神だか天使だか知らないが威厳は欠片もない。

（そういや、ネイキッドが言ってた奴も精霊に囲まれてるようなこと言ってたな）

だとすれば、自分以外にこうして精霊と交流を持つものがいるのもおかしくはない。

「す、すみません。シャルナったら最近すっかりニートに……」

『呼び出してくれなきゃニートにもなるわよ。最近ネトゲ麻雀にハマって徹夜するくらいにはニートになるわよ』

「……精霊界にはネット麻雀があるんですか……？」

そんな感じで自分の精霊と会話するアテナを見て、オレもネイキッドにちょっとだけ文句を言う。

「つーかネイキッド。お前アテナが見えてること始めから知ってたろ」

『無論だ。我は自身に向けられた視線を感じとれぬほど間抜けではない』

「それならそうと始めっから言えってのの……」

どうせその方が面白そうとかその辺だろう。オレは意地の悪い将軍に恨めし気な目を向ける。

「あの、それで結局剣士さんはここで何を？」

「あ……」

そうだった。つい忘れていたが自分は道に迷っていたんだった。せっかくこうして声をかけてくれたのだ。この機会を逃せばまたネイキッドに探索に向かって貰わなくてはならない。

「あー、アカデミア……いや、レッド寮って何処かわかるか？」

今から行ってもアテナがここにいる以上、もう授業は終了しているのだろう。ならばとりあえずこれから自分が住むところに挨拶に行った方がいい。

「はい。私もちょうどそちらに行こうと思っていたので、ご案内しますね」

アテナのような女子がレッド寮に用事があるとは思えない。下手な言い訳だと苦笑しつつ、アテナの気遣いに感謝する。

「ああ、悪ぃな。頼めるか？　礼はする」

「そんな。お礼なんていいですよ。私が行くついでなんですから」

「いや、例えそうでも礼はする。オレの気が済まん」

「あはは、じゃあ期待して待ってますね」

「おう」

今度はアテナに案内されてレッド寮を目指す。ふと気になったオレはそのことをアテナに尋ねてみた。

「……なあ、なんでアテナはオレに話しかけたんだよ」

「え？　ですから……」

「違ぇ。オレのこと、怖くねえのか？」

オレの疑問に、アテナは素でポカンと……というよりポケッとしていた。意味がわからなかったとでもいうように。

「えっと……すみません。怖い、ですか？　剣士さんが？」

その顔はどう見ても真顔。本気でそう思っていなかったようだ。

「ほら、オレは眼つき悪ぃから」

「ああ……でもそれって、生まれつきのものですよね？　性格とは関係ありません」

即答。迷いなく紡がれた言葉は、オレの心を大きく揺さぶった。

（なんだよ……？　これ）

「というか、可愛い顔してこの世全ての悪的なプレッシャー放つさだめさんを見た後じゃあかなり今更ですし……」（アンリ・マユ）

アテナの言葉もちょっと耳に入らない。眼つきと性格は関係ないとすんなり言いきられた感動で、オレはかなり舞い上がっていた。

だからだろうか。

「お？」

「あ、セツ！」

ようやく見えてきたレッド寮から軽い足取りで出てきた男に、アテナが嬉しそうな声を上げて駆け寄って行くのを見て、頭に血が上ったのは。

「アテナ、三日ぶり。ちょうど今から報告に……ぐえっ」

「もう！　心配したんですからね！　ルインさんから聞いてはいましたけど……」

「わ、悪い悪い。ちょっと色々あってな……」

心の底から心配そうなアテナに抱きつかれ、苦笑している男を見て、理性が抑えきれなくなったのは。

「おい！」

気付けばオレは、男を見て何やら驚いたような顔をしているネイキッドにも気付かずに、男に怒声を張り上げていた。

「ん？」

頭を一撫でしてアテナを引き剥がした男が、こちらに初めて気が付いたとでもいうような顔を向ける。

「テメエ！　オレとデュエルしやがれ！」

殴りかからず、かろうじてデュエルを申し込んだのは最後の理性か。それともアテナを怖がらせたくなかったからか。

「……まったく事情が理解できんが……まあ、デュエルするのは丁度いいか」

よく状況が理解できていない様子で、それでも迷いなくデュエルディスクを構える男。

「テメエ……覚悟しやがれ」

完全に逆恨みだと、相手には何の落ち度もないことを理性は叫んでいるが、ここまで来て後には引けない。デュエルして勝ち、その後でしっかり謝ろう。そう考えながら、オレは頭をデュエルモードに切り替えるのだった。

第二期第九話「戦野剣士」（後書き）

エルの出番がなくなったことで、必然的にネイキッドの出番は多くなりました。多分、他のキャラの穴もこうして他の既存キャラが埋めていくことになるのでしょう。

というか、改めて見て特別編の多さに驚きました。こんなにたくさんあったのか……。

それでは、悠でした！

第二期第十話「らしくない」（前書き）

改訂二つ目。モンスターの攻撃力とかを追加したくらいであまり変わっていませんが。二期の分はそんなに変化しませんね。

第二期第十話「らしくない」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第十話「らしくない」

互いにデッキをシャッフルし、自らのデュエルディスクにセットする。
その頃になると、血が上ってきた頭も大分冷え、冷静に相手のことを観察する余裕も出てきた。
（あいつも、ネイキッドのこと見えてやがんな……）
口には出さなかったが、さっきネイキッドの方をちらっと見ていたのに気付いた。
（ってことはオレのデッキは読まれてるか……）
しかし、その後にデッキを交換していた様子はなかったからメタデッキ使いじゃない。或いは元々自分に対するメタデッキだった可能性もあるにはあるが、可能性としては低いだろう。
（結局、やってみねえことには何もわかんねえか）
ある意味当然ではある。ネイキッドの姿をみられている時点で情報アドバンテージは握られているのが痛いが。
「俺の名前は御堂切。セツって呼んでくれ。お前は？」
「……戦野剣士だ。好きに呼べよ」
「剣士な。先攻後攻はどうする？」
「テメエはどっちがいい」
「希望としては、先攻だな」

「んじゃオレが先攻だ」
「ありゃ」
苦笑された。それもそうだろう。気を取り直して互いにデュエルディスクを構える。
「「デュエル！！」」
「行くぞ！　オレのターン、ドロー！」
手札を確認。悪くない。
「オレは手札からフィールド魔法を発動する！　これが、己が武勇を信じて剣を取る合戦の舞台！『侍の戦場』！」
フィールドが折れた剣や矢が突き刺さった合戦の場へと変化する。
「これは……初めて見るな」
「このフィールドである限り、互いの戦士族モンスターは戦闘以外では破壊されねぇ！」
「！」
「そして戦士族モンスターの攻撃力と守備力は５００ポイントアップする。オレは魔法カード『増援』の効果でデッキから『切り込み隊長』を手札に加える！『切り込み隊長』を召喚！　効果により、もう一体の『切り込み隊長』を特殊召喚！」
『切り込み隊長』ＡＴＫ１２００→１７００
「切り込みロック……！　しかも……」
『侍の戦場』が存在する限り、戦闘以外での除去ができない。
「ターンエンドだ！」
引きは上々。後は相手の戦法を見極め、それに応じた策を取る！

いきなりデュエルを挑まれた時は一体何事かと思ったが……。
「俺のターン、ドロー！」
俺の知らないカード。知らないキャラクター。色んな意味でのイレギュラー。しかも効果は強烈。救いは……。

「俺も戦士主体のデッキってことくらいか」
ミラーマッチ。それならとりあえず攻撃力上昇効果は怖くない。
相手に応じて自分のモンスターも強化されるからダイレクトアタックでもなければ怖くはない。それよりも気になるのは……。
「アテナ、なんでまたあいつと一緒にこんなところまで？」
そっちだ。最初は展開が急すぎて気にならなかったが、よくよく考えれば見たこともない男と一緒にアテナがレッド寮に現れたことが気にかかる。
「あ、剣士さんは編入生の方なんですけど……レッド寮に行きたがっていたのでご案内したんです」
「……お前のその物怖じしない性格とか人懐っこさは嫌いじゃないが、ちょっとは警戒することも覚えろ」
まあ、そんなことを言っても聞くアテナじゃないか。
「大丈夫ですよ。剣士さんは精霊を連れていましたし、良い人です！」
「……はぁ」
……ったく。人の気も知らないで。って、それは俺が言えたセリフじゃないか。
「……まあいいや。丁度いいから今回俺が心配させた成果、見せてやるよ」
心配かけたんだし、せめて最初にそれぐらい見せてやっても罰は当たらないだろう。さだめが当たりそうだが。
「……罰の方が数段マシだな。……俺は手札から『切り札の騎士―クィーン』を攻撃表示で召喚！　出番だ！　希冴姫！」
『切り札の騎士―クィーン』ＡＴＫ１５００→２０００
少しテンションが下がりつつも、俺は希冴姫を召喚する。
『はいっ！』
「トランプ……ナイト？」
「『切り札の騎士―クィーン』は、そのカード名を『クィーンズ・ナイト』としても扱う。更に、フィールド上と墓地に存在する限り

このモンスターは通常モンスターとして扱う！」
言ってしまえばリメイクカードと大差ない。が、これにより……。
「俺は手札から『アルカナソード　ハート』を『切り札の騎士―クィーン』に装備する！」
希冴姫の持つ剣が深紅の飾り剣へと変化した。しかし、儀式剣なのか刃引きをされていて、攻撃能力はなさそうに思える。事実、希冴姫の攻撃力は５００ポイントダウンしている。
『切り札の騎士―クィーン』ＡＴＫ２０００→１５００
「俺はカードを一枚セット。ターンを終了する」
「アルカナソード……これが、セツの新しい力ですか？」
「ま、そんなところだ」

オレは内心舌打ちしていた。ミラーマッチでは『侍の戦場』の真価が発揮できない。しかも、あちらもまた自分の知らないカードで展開してきた。
「オレは手札から『召喚僧サモンプリースト』を召喚！　効果により守備表示に変更される。手札から『テラ・フォーミング』を捨てて効果発動！　デッキから『コマンド・ナイト』を攻撃表示で召喚する！」
『召喚僧サモンプリースト』ＤＥＦ１６００
『コマンド・ナイト』ＡＴＫ１２００→１６００→２１００
「高速召喚！？　速い！」
「更に、オレは魔法カード『命削りの宝札』を発動！　デッキからカードを五枚ドローする！　ただし、自分のターンで数えて五ターン後、オレは手札を全て捨てる必要がある」
デメリットも大きいように見えるが、この五ターンというのは意外と遠い。少なくとも、オレのデッキなら勝敗はどうあれ後五ターンもあれば決着は付くだろう。

（五ターンは必要ない！　速攻で決める！）
カードを五枚ドローし、手札を確認する。
「オレは手札から永続魔法『連合軍』を発動！　フィールド上に存在する戦士、魔法使い族の数×２００ポイント戦士族の攻撃力を上げる！　バトル！『切り込み隊長』でテメエの『切り札の騎士―クィーン』を攻撃！」
『切り込み隊長』ＡＴＫ２９００
あの装備カードやリバースカードは気になるが『侍の戦場』でミラーフォースも怖くない。まずは斥候を放って探りを入れる！
『はあああああっ！』
『ふっ！』
『切り込み隊長』が斬りかかるのを冷静に見極めた『切り札の騎士―クィーン』はその双剣を儀礼剣で受け止めた。
「なに！？」
「『アルカナソード　ハート』の効果発動！　このカードを装備したモンスターは戦闘によっては破壊されず、超過分の戦闘ダメージを無効にし、その分だけ自分はライフを回復する！」
「くそっ！」
セツＬＰ５４００
「ただし、このカードを装備したモンスターは攻撃宣言を行うことができない」
例えそうでも、フィールドに残存することに意味がある『切り札の騎士―クィーン』。その上今はオレの『侍の戦場』が発動されている。
「まずったか……ターンエンドだ」
「俺のターン、ドロー！」
ん。よし。とりあえず凌いだ。今回は相手のカードに助けられた

な。
「にしても『命削りの宝札』か……チートドローだな……」
見たところ相手のデッキは下級戦士族の大量展開による速攻。五ターン後に手札を捨てるデメリット効果なんてあってなきがごとしだろう。
「……俺は手札から『同族の絆』の効果を発動する。ライフを１００ポイント支払い、デッキから『切り札の騎士―クィーン』と同じ戦士族のレベル４以下モンスターを二体まで特殊召喚する！　俺が特殊召喚するのは『切り札の騎士―テンス』と『切り札の騎士―キング』！」
セツＬＰ４４００
俺のフィールドに、寡黙な重装備の騎士といつもの老騎士が現れる。
『切り札の騎士―キング』ＡＴＫ１６００→２１００
『切り札の騎士―テンス』ＤＥＦ２０００→２５００
「そして『切り札の騎士―キング』の効果を発動！　場に『切り札の騎士―クィーン』が表側表示で存在するときに、このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚された場合、デッキから『切り札の騎士―ジャック』を特殊召喚する！」
『切り札の騎士―ジャック』ＡＴＫ１９００→２４００
切り札の騎士として、最も成長を遂げたと言っても良いのがこのキングだ。希冴姫と同じくカード名を『キングス・ナイト』としても扱う効果と併せて、かなり扱いやすい効果になった。
「テメエも高速召喚だと！？」
とはいえ、あの切り込みロックはまだ破れない。あれを破るにはあのフィールド魔法を破壊するしか手はないんだが……くそ、先攻一ターン目だったからパーミッション出来なかったのが痛いな。
「セツ……また、希冴姫さんたちを使うようになったんですね」
「……ああ。詳しくは後で話すが、結構、色々あってな」
そう、色々だ。脳裏にエースとのやり取りが思い起こされる。

「俺はカードを一枚セットしてターンエンド！」
今はこのデュエルに集中しよう。そう簡単に勝たせてくれる相手でもなさそうだしな。

「オレのターン、ドロー！」
本当にミラーマッチになるとは思わなかった。相手も自分と同じく下級モンスターを大量に展開することでフィールドを制圧するタイプ。
だが、その割には攻撃力アップに値するカードがない。恐らくは、自分のような純正ビートダウンではなく特殊なコントロールビートの戦士デッキ……。
さてどうするか。先ほどの戦闘では伏せカードを使用してこなかったが、それは恐らく『アルカナソード　ハート』の効果があったからだろう。だとすればあれらのカードが攻撃を防ぐ系統のカードである可能性は少なくない。『侍の戦場』がある以上、ミラーフォースなどの破壊カードであるとは考えにくい。だとすれば『和睦の使者』や『威嚇する咆哮』などフリーチェーンの防御カード。或いは『攻撃の無力化』といった選択肢もあり得る。一番まずいのは『突進』や『収縮』などで迎撃されることだ。
（つーと、あの二枚残った手札も……）
『オネスト』。その可能性も高い。いずれにせよ、ロックの要である『切り込み隊長』で攻撃することは躊躇われる。
「だが、攻めないのはもっとヤベえな」
あの切り札の騎士とやらが『クィーンズ・ナイト』たち絵札の三銃士として扱われるなら、三体残しておくことは即ち『アルカナナイトジョーカー』の融合に繋がる。さっきのターンに融合しなかったということは、まだ手札に『融合』がないのかもしれないが。
「手札から魔法カード『ハリケーン』を発動！　互いの魔法・罠を

全て手札に戻す！」
　これで戦端を開く！
　そう考えての『ハリケーン』だが……。
「よしっ！」
「！？」
　ガッツポーズをしたセツに、悪手を打ったか！？　と戦慄する。
「カウンター罠『マジック・ジャマー』！　手札を一枚捨てることで魔法カードの発動を無効にし、破壊する！」
　なんだ、と安心した。ガッツポーズまで取るものだからよほどのことかと思えばただディスアドバンテージを負っただけ。だが……。
「俺が手札からコストとして捨てたのは『ジャム・ウォリアー』！　こいつはカウントラップのコストとして墓地に送られた場合、デッキからカードを二枚ドローすることができる！」
「なんだと！？」
　ディスアドバンテージを回避してきた！？　しかもリバースカードはそのまま残っている。
「ちっ……ソイツも聞いた事ねえ奴だぜ」
　兎も角、これでまた『オネスト』の危険性が増した。あんなカウンター罠専用のモンスターを入れているということは、相手は恐らく迎撃を得意とする後だしタイプ……それならなおのこと『オネスト』が怖い。
「くそっ……！　それでも攻撃しないわけにはいかねえ！　バトル！」
　ここで情けなくビビってエンド宣告だけはしたくない。デュエリストとしても、一人の男としても。
　ちらりとアテナの方を見る。こちらを見てはいるが、その意識は最初からずっと相手の男……セツに向いたままだ。
「クソっ！　バトルフェイズ！『コマンド・ナイト』で『切り札の騎士―キング』を攻撃！『ブレイズソード』！」
『コマンド・ナイト』の剣が炎に包まれ、セツの場の老騎士に向

かう。
「速攻魔法発動！」
「！」
『突進』や『収縮』の類だったか！？
「『絵札の結束』！」
また……知らねえカード！
「こいつはライフを１０００ポイント払って発動する！　エクストラデッキから『アルカナ　ナイトジョーカー』を選択して自分フィールド上或いは墓地に存在するクィーン・キング・ジャックの三体を融合！　来いっ！『アルカナ　ナイトジョーカー』！」
セツＬＰ３４００
『アルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ３８００→４３００
「クソッ……！」
みすみすアルカナの召喚を許しちまった！
攻撃力３８００。現在存在する最強の戦士族モンスター……。
「なにやってんだ……！　オレは……！」
やることなすことが全て裏目に出ている。まったくいつものプレイングができていない。
「ガラにもねえ……」
集中力が乱れているのを自覚する。焦っていた。最初の迂闊な攻撃も、さっきの『ハリケーン』も、そのどちらもがいつもの自分なら絶対にしないようなミス。その結果がこれだ。情けない。
「……ターンエンドだ！」
とにかく、今は凌ぐしかない。幸いアルカナではこちらのロックは崩せない。
「俺のターン、ドロー！」
相手は冷静だ。最初こそ自分と一緒にいたアテナを気にしていたようだが、今はしっかり気持ちを切り替えてデュエルに集中している。
「俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ！」

集中、集中しろ！　雑念を払え、ネイキッドの将たる自分を取り戻せ！
「あぁっ！」
パァンっ！
「！」
「……っふぅー」
思い切り両頬を叩く。衝撃で目の前がチカチカしたが、おかげで目が覚めた。
「ここからが本番だぜ……セツ！」
「……おう、来い！　剣士！」
「オレは手札から『簡易融合』を発動！　ライフを１０００ポイント支払ってエクストラデッキから『魔導騎士ギルティア』を攻撃表示で特殊召喚！　更に手札の『鉄の騎士　ギア・フリード』と『融合』！　来いっ！『鋼鉄の魔導騎士―ギルティギア・フリード』！」
剣士ＬＰ３０００
『鋼鉄の魔導騎士―ギルティギア・フリード』ＡＴＫ２７００→４６００
「ギルティギア！？」
ギルティギアの攻撃力は『連合軍』と『コマンド・ナイト』『侍の戦場』によって強化されて４６００。
「アルカナを上回って来た……！？」
「行くぞ！『鋼鉄の魔導騎士―ギルティギア・フリード』で『アルカナ　ナイトジョーカー』を攻撃！『魔導鋼破斬』！」
「カウンター罠『攻撃の無力化』！　バトルフェイズを終了する！」
「ちっ！　ならオレはカードを一枚セットしてターンエンドだ！」
流れは悪くなくなってきた。だがまだ相手のペースだ。
「……俺のターン、ドロー！」
カードを引いたセツの目の色が変わる。仕掛けてくる気か！
「だが、そうはさせねえ！　オレはリバースカード『王宮のお触れ』を発動！　トラップを封じ込める！」

「！　そっちこそ、やらせない！　カウンター罠『魔宮の賄賂』！　無効化する！」
「クソッ！　まだ、まだダメなのかよ！」
「そして、トラップを無効化したことで俺は手札からモンスター効果を発動する！」
「カウンターして効果発動……！？　まさか！」
「来い！『冥王竜ヴァンダルギオン』！　トラップをパーミッションした場合、カードを一枚破壊する！　俺が破壊するのは当然『侍の戦場』！」
『冥王竜ヴァンダルギオン』ＡＴＫ２８００
「しまった……！」
ロックが……崩れる！
「これで最後だ……！　俺は手札から『ライトニング・ボルテックス』を発動！　手札一枚をコストに、剣士のモンスターを全て破壊する！」
「くっ！？　だが『鋼鉄の魔導騎士―ギルティギア・フリード』は魔法・罠の効果によっては破壊されない……！」
『鋼鉄の魔導騎士―ギルティギア・フリード』ＡＴＫ４６００→２９００
それでも、焼け石に水だが。
「バトルフェイズ！『アルカナ　ナイトジョーカー』で『鋼鉄の魔導騎士―ギルティギア・フリード』を攻撃！『ロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」
「がぁっ……！」
剣士ＬＰ２１００
「トドメだ！『冥王竜ヴァンダルギオン』でプレイヤーにダイレクトアタック！『冥王葬々』！」
「ぐあああああああっ！？」
剣士ＬＰ０

「大丈夫か？」
「……ああ」
憮然とした表情で座り込んでいる剣士に手を貸す。
「お前、大分テンパってたろ？」
「……未完成のデッキ使ってた奴に言われたかねえよ」
「……バレてたのか」
苦笑する。こいつは思った以上に頭が良い。観察力もある。
「未完成、ですか？」
「ああ、そのことも……」
「あーっ！　なんかもう終わっちゃってる！」
「さだめ？」
アテナに事情を説明しようとしたところでさだめが十代たちを引き連れて駆け寄ってきた。
「うおっホントにいたぜ！？　すげえな妹さん……」
「さだめのお兄ちゃんレーダーは例え地球の裏側にいても感度良好！」
「でもさっきまではわかんなかったッスよね？」
「……異世界だとさすがにジャミングが酷くて……」
「……発信器か？」
「ううん。気配」
「お前は何者だ……」
「あと声。脳内に響いてきた」
「テレパシー……！？」
「……で、何しにきたんだお前ら」
今更さだめの異常性については突っ込むまい。……そういえば今までさだめに盗聴器や発信器を取り付けられたことはなかったな。なるほど。自らがその代わりとなる優秀なレーダーそのものだったら、確かにそんなものいらないな。……納得しちゃいけない気もす

るが。
「あっ！　そうだよ、お兄ちゃんアテナには帰ってきてすぐに会っておいて、さだめの所には来ないってどういうこと！？」
「……帰って来て丁度アテナがいたんだよ。あいつを連れてな」
そこでさだめは初めて気付いたというように剣士に顔を向ける。
「誰？　アテナの愛人？」
「ち、違います！」
「っば……何言ってやがるこのチビ！」
「チビ……」
さだめが沈む。相変わらず体型の話題では打たれ弱い奴だ。というか、友達やら兄妹やらが出てくる前に真っ先に愛人をセレクトするさだめの脳内に末期を感じる。
「おっ！　もしかして編入生か！？　なんだよセツ、いないと思ったら早速横取りしやがって～」
「いや、それもかなり成り行きで……」
「って、おおっ！？　お前も精霊連れてるんだな！　オレ、遊城十代！　こいつは相棒のハネクリボーだ！」
『クリクリ～』
『はっはっはっ、中々愛いヤツではないか。気に入ったぞ！』
俺はハネクリボーに笑顔で接しているネイキッドに声をかける。
「ネイキッド。さっきぶり、でいいのか？」
『うむ。無事、テンスの協力は得られたようで何よりだ』
「ああ。エースの方は、無理っぽいけどな」
『何。エース殿とて、時が経てば理解もしてくれるであろう。何せ、お前さんは我が認めた男なのだから』
「なんだ？　ネイキッドと知り合いだったのか？」
「まあな。ついさっきまで精霊界で話してもいたから」
ネイキッドから、お前のことも聞いていたと話す。剣士も、それを聞いて俺がネイキッドの話していた人間だと気が付いたらしい。
「知らねえ間に、デュエルするっつー伝言は果たしていたわけだな」

「そうなるな。俺は途中で気付いたけど」
最初こそ気付かなかったが、剣士の後ろでネイキッドが見ていたことには気が付いた。
「……つーかよ」
「ん？　なんだ？」
「こいつら……全然オレ見てもビビんねえんだな」
そんな剣士の感心したような呆れたような呟きに、みんなも苦笑するばかりだ。
「はん！　この万丈目サンダー様が貴様ごときにビビるだと？　冗談も程々にしておけ！」
「眼つきは悪いッスけど……今更ッス」
「さだめはお兄ちゃん以外どうでもいいし」
さだめは答えなくてもよろしい。
「まっ、オレたちは妹さんとかので慣れてるからな！　それよりオレともデュエルしよーぜ！」
「……そのチビが一体なにやったってんだ？」
それは……。
「聞くも涙語るも涙、と言うか……」
「聞くも失禁語るも失禁」
『それだ』
あまりに的確な答えに思わず全員でルインを指差してしまう。
「いや何があった！？　そんでなんでそのチビは照れ笑いしてんだ！？」
「いやーあの頃はさだめも若くて……」
チビ呼ばわりされている奴が年寄りぶるな。
「はぁ……何だよ。悩んでたのが馬鹿みてぇじゃねえか」
「そうですよ！　剣士さん良い人なんですから胸を張ってください！」
「お、おう……」
ん？　なんかちょっと頬を染めてる……？

「！　ほぉーそっかそっかこれは……」
「チャンス」
何やらさだめとルインが顔を寄せてこそこそとしゃべっている。
「……おいセツ」
何を話しているのかと聞こうとした俺に、剣士が話しかけてきたのでそちらに対応する。
「ん？　どうした？」
「またデュエルすんぞ。今度はお互い万全の態勢でな」
「……ああ。もちろんだ。今日のはノーカンで……」
「ざけんな。負けは負けだ。言い訳させるんじゃねえよ」
「……そうだな。んじゃ、そういうことで」
「オレもオレも！　なあ剣士、オレともデュエルしよーぜ！」
「ったり前だ。お前らだけじゃねえ。誰とだってデュエルしてやらあ」
「よっしゃ！　んじゃ早速……」
「今日は勘弁しろって」
「えー！？」
「これでもやること溜まってんだよ！　荷物の片づけだのアカデミアへの謝罪だのめんどくせえイベント盛り沢山だ」
「あ、じゃあお手伝いしますね」
「あ……お、おう」
そんな感じで話が流れていき、さだめたちの密談に注意を向けなかったのが、後日の騒動に繋がるきっかけになることに、俺はついに気が付かなかったのだった。

「……これはチャンス」
ルインの言葉に、しかしさだめは首を振る。
「甘いよルイン。確かに一見ライバルを減らして優位に立つチャン

ス。だけど昔の人は良いことを言ったよ。『ピンチの時こそ最大のチャンス』だって。それは裏を返せば『チャンスの時こそ最大のピンチ』とも取れる」

「なんと……」

「アテナと編入生をくっつける。その基本方針は悪くない。でも、そこに拘った挙句失敗するのはラブコメの鉄則。今まで特に気にしていなかったけど新しい男の影ができることにより相手を意識し始めて……なんて良くあること」

「……深い」

「だからむしろ、あちらは好きに泳がせる。そして無意識の内に邪魔をさせて……その間に自らの基盤を固めるのがベスト」

「……師匠」

「やめて。さだめなんて十五年以上もかけて未だに大金星を上げられない未熟者だよ」

「……では、この機会に」

「そう。ライバルを脱落させる要素は増えたけど、それを敢えて“利用しない”。邪魔ではなく攻めの姿勢を取る」

「あの計画……」

「そう。そのための準備も大方終わっているから、すぐにでも仕掛けるよ。……フフフ。大丈夫だよ、ルインにも十分甘い蜜を吸わせてあげる」

「……今回は従う」

「そう、それでいいよ。そうすればきっとだれもが幸せになれるから……フフフ」

……水面下でそんな陰謀が始まっていることに、セツは終ぞ気が付かなかったのだった。

第二期第十話「らしくない」（後書き）

ふむ。というか、以前のを知っている人からすれば退屈極りないですよね。もう一気にアップしてしまいましょう。ほぼ変わっていない話もあったりしますし。

それでは、悠でした！

第二期第十一話「御堂さだめの陰謀」（前書き）

例によってタイトルからしてパクリ臭全開の第二期第十一話改訂版です。

とはいえ、改訂版とは名ばかりで、変更点は剣士の一人称を「俺」から「オレ」に直したくらいのささやかなものですが。

第二期第十一話「御堂さだめの陰謀」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第十一話「御堂さだめの陰謀」

どうして……。
どうしてこうなった……。
「さだめっ！　おいさだめしっかりしろ！」
目の前には、血塗れでぐったりとしている俺の妹。さだめの血液が俺の頬を伝う。
――生温かい。
「なんで……こんなことに……」
俺は、こうなるまでの経緯を思い出していた。

「デュエル？」
「うん。新しいデッキができたから、お兄ちゃんとデュエルしてみようと思って」
「それはいいが……」
何をたくらんでいる。
そう声に出さなくてもそれは伝わったようで、バレた？　とか言いながら苦笑している。
「そりゃな。さだめが何の利もなく行動を起こすとは思えん」

「信用ないなぁ～」
「信用されるような行動を一度でも取ったと自信を持って断言できるか？」
「できる」
「お前に聞いた俺が馬鹿だったよ」
こいつに常識が通じないことくらいわかっていただろうに。
「……で、何が望みだ」
「さだめがこのデッキでお兄ちゃんに三連勝したら、デートに連れてって」
「デート？」
思ったより要求が軽い。もっと無茶振りがくるかとも思ったが……。
「そう。デート。ただし、キス付きで」
「却下です」
俺が何か言う前にアテナが却下した。
「いいじゃんアテナはもうしてるんだし」
「ダメです！　というかあれはまったく正気じゃなかったので……」
「じゃあお兄ちゃんのファーストはルインということに……」
「私が最初です。異論は認めません」
「前言撤回早っ！」
「どっちにしても却下です！　なんというか……さだめさんの言うデートは非常に不健全な香りがします！」
「そこには同感だな。デートだからとベッドインを強要されそうで怖い」
「え？　デートの締めはベッドインでしょ？」
「その常識は捨てなさい。お兄ちゃんからの忠告だ」
「そ、そうなんですか？　だ、だとしたら私……」
「アテナも間に受けるな。お前とはまだ強制デート権（絶対服従）が残ってるんだからその常識の下に行動されると危険だ」
主に、倫理委員会（運営）が。

「うん。さだめのウソだから本気にしちゃだめだよ」
「自分に不利になりそうならあっさり前言を翻すんだなお前は」
「でもせめてキス！　キスくらいは！」
「……マウストゥマウスはなしだ」
「イエッサー！」
「セツ！？」
「経験上、ここら辺が妥協点だ。唇でさえなければギリギリ兄妹のじゃれ合いの範疇に……入るよな？」
「入りません」
断言された。
「いいじゃんアテナは散々お兄ちゃんとイベント消化してるんだしさだめもお兄ちゃんからフラグ立てて欲しいんだよ」
「……さだめさんの言葉は時々よくわかりませんが、とりあえず最近は良い目を見た記憶がありませんよ私」
「シリーズ全体を見ようよ」
「だから全く意味がわからないんですが、とりあえず危険なセリフだということは理解しました」
「さだめ関連のフラグは脆い！」
「例によって意味はわかりませんがここは絶対に否定しておくべき個所な気がします！」
「とにかく、お兄ちゃんはそれでいいんだよね？」
「……仕方ない」
「うぅ～」
すまん、アテナ。なんか頷かないと後が、というか今現在進行形で怖い。
「じゃあ……デュエルしよう！　さだめの……禁止デッキと！」
「よし、待とうか」
「え？」
「何故不思議そうな顔をしているのかむしろこちらが聞きたいです……」

「だって普通のデッキで三連勝とか無理だよ？」
「禁止デッキ相手に一勝するのとどっちが難しいかなぁ！？」
「じゃあ五連勝。これでどう？」
「禁止デッキを止める、という選択肢はないんですか……？」
「ない！」
「なんでも自信満々に頷けば許されると思ったら大間違いだ」
「ねえお願い！　良いじゃんデートくらいしてくれたって。減るもんじゃなし」
「将来の選択肢がガリガリ減りそうなんだが……」
「お願い！」
珍しいことに屁理屈捨てて頭下げてきやがった。
「……はぁ、しょうがない。五連勝な。条件はそれ以上まからないからな」
「やった！　お兄ちゃんありがとう！」
「セツ～？」
ジト目で睨んでくるアテナに慌てて弁解する。
「いや、さだめがここまで頼み込んでくることって今までなかったし……」
問答無用か実力行使の二通りしかなかった。どっちも同じか。
「うぅ～。わかりたくないですけど、仕方ありません」
「ありがとう！　アテナ！」
「うっ……確かにここまで素直で普通なさだめさんは初めてです……」
二人とも、ここまでの経緯や禁止デッキには目をつぶっていた。
「よーしそれじゃ、さだめの先攻でも良いよね？」
「……しょうがないな」
「「デュエル！！」」
「さだめのターン、ドロー！　さだめは手札の『処刑人―マキュラ』を捨てて『ＴＨＥ　トリッキー』を特殊召喚！『処刑人―マキュラ』の効果で罠カードを手札から使用！『破壊輪』でトリッキーを破壊

してお互いに２０００ダメージ手札から『地獄の扉越し銃』発動お兄ちゃんに２０００ダメージ！」
「……わっつ？」
セツＬＰ０
「まずは一勝！」
俺は……選択肢をミスった。

「で、結局こうなるのか……」
翌日。俺は結局さだめの思惑通りに五連敗を喫してデートをすることに。
「いやーここまで綺麗にハマってくれると色々策を弄したのが馬鹿らしくなってくるよ」
「素直で普通なお前を幻視した俺も馬鹿らしくなってきたよ……」
結局全部さだめの手のひらの上だったらしい。
「でも残念。ホントはもっと色んなところを見て回りたかったのに」
さだめの溜息も尤もだ。アカデミアには何だかんだで娯楽施設は少ない。デュエルという趣味と実益を兼ね合わせたものがあるのだから基本的にそんなものが必要なかったのだろう。だが、さだめたち思春期真っ盛りの少年少女たちの中にはこうしてデートをする際に苦言を呈すものも少なくない。
「そういやアテナも困ってたな。デートプランが作れないとかって」
「こら、デート中に他の女の子の話題禁止！」
ちょっと不満げな顔のさだめにそう窘められる。感情の動きや好意自体には鋭いつもりだが、どうも俺はデリカシーというものに欠けるらしい。まあ相手が妹のさだめだからという理由もあるのだろうが。
「しっかし、いいのか？　なんかこうして島の中ぐるぐる回ってるだけで。見なれたもんだぞ」

「そりゃあさだめ自身としたらもっと色々刺激的なこともしたいしアブノーマルちっくなデートも憧れるけど……」
「何故憧れるし」
「でも、お兄ちゃんは嫌でしょ？」
「……そりゃ、手放しで歓迎は出来ないな」
「だから、今日はいいんだ。普通で」
「……そうか」
確かに、最近はさだめと二人っきりで何かするってこともなくなってきている。周りに喧しい友人が増えたからか。
さだめと静かに過ごす。ある意味では、昔からの夢だった。それが叶うというのなら、こういうのもたまにはいいか。
そんな風に俺は今日と言う日を……甘く見ていた。

（よし、とりあえず目標であったお兄ちゃんをデートに連れ出すことには成功したね）
さだめはすぐ隣にいる兄のぬくもりに恍惚としながら思考する。
（『チャンスは最大のピンチ』それならそれでライバルに『チャンス』を逆に与えてやればいい）
さだめはすぐ隣にいる兄の香りを胸一杯に吸い込んで思考する。
（即ち、さだめとお兄ちゃんのデートを邪魔“させる”。そしてそれを逆手にとってごくごく自然に妨害を妨害する。これで勝ち）
さだめはすぐ隣にいる兄の感触に息を荒げながら思考する。
（そのための布石はすでに打った。あえてアテナのいるところでデートを決めて、態々邪魔しやすいように島内でのデートに留めた）
きっとアテナは今頃自分たちの後方でやきもきしながらデートを見守っていることだろう。純粋で単純な恋する乙女ほど騙しやすい存在もない。
（後は、ルインが上手くやるだけ）

「……万事、抜かりない」
私は妹たちの右後方。つかず離れずの位置に陣取りながら邪笑する。
私の視界には、妹たちと、妹たちを後方から監視している“二人”の姿が鮮明に映っていた。

「……なあ、あーアテナ？　別に何も起こりゃしねえって。趣味良いモンでもねえし、やめといた方が……」
「剣士さんはさだめさんの危険レベルを知らないからそう言えるんです。あのさだめさんとセツを二人きりで置いておいたらセツの身に何が起こるか……せ、セツのその、て、貞操が……」
本日は早起きしてデートを一日見張るつもりのアテナと、ルインによって唆されてアテナの付き添いとして同行している剣士の二人だ。
「やっぱよぉ……尾行、なんてのは道理に反するっつーか……」
「甘いです。道理はおろか倫理や道徳性格思考その他諸々ありとあらゆる意味で反しまくっているさだめさんの前で、その考えは甘々です。ストロベリークリームパスタ（苺味のパスタに生クリームがてんこ盛りの甘々パスタ）くらい甘いです」
「……それ、どこで売ってる？　食ってみたいんだが」
実は無類の甘党である剣士はアテナとまったく違うところに目をつけた。
「とにかく、今日一日は二人の監視です。剣士さんも付き合ってくださるというのでしたらマジメにお願いします」
「……くそぅ、なんでオレがこんなこと……」

あんな奴妹とくっついちまえばいいんだ、とかアテナの目的と正反対のことを考えながら、律儀にも二人を尾行し始める剣士だった。

「万事、抜かりないよ」
「なんか言ったか？」
「ううん、なんでもないよお兄ちゃん」
つまりはこういうことだ。さだめがセツとデートする。それを知ったアテナはデートを監視する。そこにルインが剣士を唆して同行させる。何かさだめが危険な真似をしたらすぐに飛び出してくるであろうアテナだが、裏を返せばさだめが何もしなければアテナも動かない。それくらいの良識、というか常識をアテナは持っている。
（なら、それを利用してあの二人もデートさせてしまえばいい。変則的なダブルデートによって基盤を固める！）
そのために、敢えて今回のデートコースにはアテナが喜びそうなスポットを多数用意し、目的をさだめたちのデートから逸らさせるように調整もしてある。
（……後は、ルインの裏切りには気をつけておかないと。これが終わった後に、甘い蜜を吸わせてあげる約束を、さだめが律儀に守るはずがないことを、ルインは知ってるハズだし）
ルインはそんな間抜けではない。そうでなければ計画の片棒を担がせはしなかった。
（まあ、裏切ったら裏切ったで死の咎が降りかかるまでだけど）
さだめはちょっと前の闇モードチックな邪笑でルインのいるであろう方向を見つめた。

（表立って裏切るような真似はしない）

一方のルインも、さだめのそんな考えをしっかり見抜いていた。
（神を謀ろうなどとは、愚か）
ルインとてセツに焦がれる一人。みすみす恋敵と二人のデートを成功させるつもりはない。
（手駒を使うまで）
自分で動けば証拠が残る。なら噂話などで自然と周りに働きかけるだけで良い。
（大丈夫。情報操作は得意）
どこぞのインターフェースのような事を考える。
（彼女は謀略の相方としては役不足。でも駒としてはとても優秀）
意図的に噂話が届くようにしておいた“彼女”を使って二人のデートを邪魔するつもりだった。

「まったく……わたくしの知らぬうちに逢引など……不純異性交遊はいけませんとあれほど申し上げたというのに……」
と、ルイン発信のさだめとセツのデート話につられてのこのこやってきたお姫様が一匹。
「今度こそはきっちりとセツ様に一言申し上げませんと」
しかし、そんな希冴姫（とルイン）の思惑を邪魔するかのように現れた猫が一匹。
「あれー？　脳筋姫だ。こんなところでなにしてんの？」
「今はどらねこに関わっている暇はありませんわ。というか、脳筋はおやめなさい」
「むー！　じゃあそっちこそどらねこやめてよ！　ボクは自由気ままなシャム猫だもん！」
「根なし草の野良猫の間違いでしょう」
「違うもん！　ぷりてぃきゅーとなマンチカンだもん！」
「短足なんですのね。お可哀そうに」

「ムキー！　誰が短足だこの我儘ツリ目の筋肉女ー！」
「そんなに筋肉筋肉してませんわよ！」
結局いつものように喧嘩になり、目的のデートのことはすっかり忘れてしまう単細胞姫なのだった。

（ふふーん。ルインが脳筋姫を使ってくることくらい最初っからわかってたよ。そのために猫を一匹放っておいたから、その作戦は無駄だよ）
事前にジャックやキングといった辺りは無力化しておいたようだが、まだまだ甘い。
（このラブ・ウォーズを生き抜くにはもうちょっと経験を積むべきだよ。ルイン？）
しかし、そのさだめもただ一つ、見逃していることがあった。神の目についた、たった一つの小さな塵。しかしそれが時に神の思惑をも狂わせることにもなり得るのだ。
「あれー？　セツ君にさだめちゃん、こんなところでどうしたの～？」
「ッ！？」
「お、ユーキちゃん」
その出現に、さだめとルインの二人は同時に戦慄する。
（（しまった！　沈黙の闇狩人（サイレント・ダークホース）！））
存在をすっかり忘れていた。
（まずい……加藤さんに関しては対策を用意していなかった……）
（普段は出番が薄いのに、こと恋愛における影の濃さが半端じゃない……）
二人ともとても失礼なことを言っているが、それも仕方ないだろう。実際出番は少ないのだし。
（まだだよ！　まだ終わらないよ！）

（戦いはこれから……）
「いやーさだめとの賭けにちょっと負けてさ。今日一日デートする羽目に……」
「ふーん……」
ちらり、とさだめの方を流し見てくるその目に、さだめは久しく感じていなかった恐怖を感じた。
（あれは……狩人の目！）
狙っている。覚醒したダークホースは明らかにこの場からセツを略奪していくことを狙っている。させない、させるわけにはいかない。
「ほ、ほらお兄ちゃん、そろそろ次のところに行こうよ！」
「え？　さ、さだめ？」
（ここからとにかく引き離さないと……！）

（これは、むしろチャンス？）
予期せず、自分の目的であったデートの妨害が成功している。しかも、正真正銘自分は手を下していない完全な白。ある意味理想的な展開かもしれない。
（けど、油断はできない。チャンスはピンチ）

「あ、じゃあセツ君、丁度わたしも今は暇してて……」
まずい。デリカシー皆無のセツならここで簡単に「じゃあ一緒に来る？」とか言う可能性が高い。そうはさせない。
（くっ！　大丈夫。焦らないでさだめ。相手は所詮天然系ナチュラルパーソンモブキャラ筆頭！　ここはさだめの華麗なナチュラルスルーで……）

そしてここで、さだめにとっての救世主（？）が現れた。
「やあ諸君！　今日も元気に胸キュンポイントを溜めているかな？」
（キタ！　ブリザードプリンス！　これで勝つる！）
さあ、ここで一波乱吹雪を巻き起こしてさだめの追い風となって！　とさだめは吹雪にアイコンタクトを送る。

（っく……ここで流れを邪魔させるのはマズイ）
とはいえ自分が出ていくのはもっとマズイ。
（どうする？　ここはダークホースの力を信じる？）

「……ふむ。そうだね、加藤さんといったかな？」
さだめのアイコンタクトが通じたのか吹雪はユーキに声をかける。
「はい？」
「どうかな？　セツ君たちは今デート中のようだし、僕らも一つ」
「すみません今日は忙しいのでご遠慮します」
「そ、そうかい？　なら仕方ないなぁハハハ」
にべもないユーキの拒絶に、百戦錬磨のブリザードプリンスも動揺を隠せない。
（ちっ！　粉雪だったか！）
だが突破口は得た。それだけは感謝しても良い。
「それじゃお兄ちゃん、加藤さん今日は忙しいらしいし、さだめたちも行こう？」
「あ！？」
「そっか、そうだな。じゃあユーキちゃん。また学校で」

（ちっ……未熟者）
所詮は天然系ナチュラルパーソンモブキャラ筆頭。高望みはするべくもない。
ここにきて、さだめもルインも悟っていた。
（やはり、他人は当てにならない）
（このラブ・ウォーズ、結局最後に頼りになるのは自分だけ！）
（そうやはり、自分の力で掴み取ってこその……）
（（イエス！　フォーリンラブ！））
ふたりの影に某芸人の姿が見えた。

「お兄ちゃんお兄ちゃん！　そろそろ今日の締めとしてさだめの部屋に行こう！」
「さだめの部屋って……危険な予感しかしないんだが……」
「そう。止めておいた方がいい」
「ルイン！？　裏切る気！？」
「最早手段は選ばない。彼の貞操がかかっている」
「かかってないよ！　さだめ今日はプラトニック志向なんだから！」
「密室で二人きり。キス」
「襲うね。確実に」
「認めるの速ぇよ！　もうちょっと躊躇えよ！」
「は！？　つい極彩色の欲望がダダ漏れに！？」
「せめてピンク色であって欲しかった欲望！」
「語るに落ちたと言わざるを得ない」
「くっ……プラトニックに行こうと欲望を抑制しすぎた！？　濃縮還元された愛欲が制御できない！」
「だからか！　だから極彩色まで変色したのか！？」
その頃になってようやくこちらの異変に気が付いたらしい遥か後

方のアテナ――ちなみに森の動物たちに囲まれて地上のユートピアを作り上げていた――たちも駆け寄ってきた。
「さだめさん！？　そういうのはしないって話だったでしょう！　それに今の欲望の波動みたいなものの所為でうさぎさんたちが逃げ出しちゃったじゃないですか！」
「あの、アテナサン？　もしかして、それ俺はついでっぽくないですか？」
「あぁ～！　結局邪魔が入った！　折角色々考えたのに～！」
「策士策に溺れる。よくあること」
「裏切り者が抜け抜けと！」
「私は破滅の女神」
「そのネタもう飽きた！」
「もうネタ切れ……」
「作者の都合か！」
「ああ～もう少しでうさぎさんとコモドオオトカゲさんの夢のカップルが完成したのに……」
「この森の生態系カオス！　そしてそのカップルの未来前途多難！」
「こうなったら……お兄ちゃん！　せめてキス！　約束のキスだけでも！」
「させない。こうなったらとことん妨害」
「セツ？　実の妹さんにキスとか……非生産的ですよ？」
「うさぎとコモドオオトカゲよりは生産的だよ！」
「ていうかアテナ怖い！　殺気！　殺気出てるから！」
「剣士……使えない子」
「いや、オレはあのユートピアに相応しくないかと……」
「意外と気が利く！」
「っていうかキス～！」
焦れたさだめが捨て身で突っ込んできた。
「うわっ！？　ちょ、馬鹿んむっ！？」
「ッッッッッ！？！？？？！」

『ああ！？』
時が、止まった。
「ん……」
「……」
ぶはっ！
突然さだめが鼻血を噴いた。
「さ、さだめっ！？」
「ま……まだ、死ぬわけには……」
「さだめーっ！？」
そして、話は冒頭に戻る。
「だ、だけど……これは、いいもの……ガクッ」
「くっやられた……」
「や、約束が違います！　マウストゥマウスはダメって言ったのに！」
「いや、あんたらが邪魔したからじゃ……」
剣士の至極最もなツッコミに耳を貸す者はいない。
「お、俺は……」
「セツ……？」
「俺は……き、キスを……？」
「セツ、セツ？　しっかりしてください！」
「さだめと……？　り……実の……妹（リアルシスター）？」
「ダメ……呆然自失」
「あれ……もしかして」
「そう。チャンス」
「今なら何してもバレなかったり……」
「とりあえず……脱がす？」
「待て待て待て！　テメエら一体何するつもりだ！？」
「ドキドキ……」
「アテナ！？　お前まで……」
とりあえず……今この時点でのセツの貞操の行方はこの場で唯一

良識を保っている……。

「とにかく落ち着け！　いいか？　お前らは今正気じゃない。そしてセツの馬鹿もまた正気じゃない。こんな形でそんなことになればどちらも……」

剣士に全てかかっているといっても過言ではないだろう。

第二期第十一話「御堂さだめの陰謀」（後書き）

こんにちは。

殆ど再アップでしかないですが、十一話です。次の十二話や十三話は更にｈん光展皆無です。消さなくても良かったレベル。

それでは、悠でした！

第二期第十二話「何度だって何時だって」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第十二話「何度だって何時だって」

アテナが入院してた時に約束したデート十回。何だかんだと用事が重なってまだ四回ほどしかしていない。その時のことはまたいずれ語ることもあるだろうが、今回……即ちターニング・ポイントとなる五回目のデートは、俺たちの関係もまた転換期を迎えるに相応しいものになったと感じたので、今回はその時の話だ。

事の始まりは二日前。アカデミアの授業が終わり、放課後にいつものように駄弁っていた時まで遡る。

「セツ、日曜日……明後日は空いてますか？」

「ん？　ああ、今のところ何もないな。デートか？」

「はい。大丈夫ですか？」

「ああ。問題ないぞ」

「……この会話に殺意を覚えるのはきっと罪じゃないッスよね？」

レッド寮男子を始めとした男子勢はすごい勢いで頷いている。……アテナ教の信者共が。

「……くっ、この件に関しては文句を言えないさだめの立場が憎い！」

「あ、そうだ。明後日は目覚ましをかけないでください」

「は？　それだと寝坊するかもしれんが……」

「いいんです。私が起こしに行きます！」

「なんでまたそんな面倒くさそうな……」
「さだめにはわかる……眠っているお兄ちゃんの無防備な体を思う存分……」
「セツを私の手で起こして、私の作った朝食を食べて貰って……そんな感じのことがしたいんです」
「え、あれ？　さだめには文句はおろかギャグで口を挟むことすら許されないの？」
「そりゃまた……やると宣言されると目が覚めそうだが……」
「あうぅ～お願いですから寝ててくださいよ～」
「どうかな……さだめに対する警戒態勢で目を覚ましやすい体質だから……」
「こんなところでも邪魔が……」
「うわなんか無視されてるのに邪魔者扱いされてる！　流石に理不尽を感じるよ！」
横で何やらさだめが騒いでいるが、この話題ではあまり突っ込んで来ないので無視しておこう。
「朝ごはんも私が作ります！」
「へえ、アテナの料理か……」
「セツと比べられるとおままごとみたいなものですけど……」
「いや、むしろ俺のは料理じゃないしなぁ……」
「セツの料理はアートですからね……」
「ん。まあ了解。じゃあ明後日は丸ごとお任せしますか」
「はい！　ふふ、楽しみです」
とりあえず……今はこの殺気立った連中からどう逃げ切って日曜日を迎えるかを考えた方が良いな。

そしてあっという間にデート当日。
「……ツ。……セツ、起きてください」

「む……あてな……？」
「はい。ふふ、良かった。ちゃんと寝ててくれました」
「ああ……そっか。デート、だったか」
「……ホントに寝ぼけてますね。ちょっとレアです」
「むぅ……かお、洗ってくる」
「はい。私は食堂でご飯用意しておきますね」
「ああ……」
アテナに促され、洗面所へとふらふら向かう。冷たい水で顔を洗ってようやく意識が覚醒してくる。
「ふぅ……十代たちは、まだ寝てるな」
それほど早い時間というわけでもないが、休みだし早く起きる必要もない。寝かしておいてやろう。
「アテナは……食堂だったか」
アテナの料理の腕自体は、それほど問題ない。一度教えてくれと言われた時味見等もしたが、普通に美味かった。ちょっと包丁の使い方などはらはらするようなところもあったとはいえ。
「あ……」
そういえば、俺が遅く起きたらレッド寮のメシ作るやついないじゃん。
「まさか、それもアテナが作ったのか？」
あいつはレッド寮男子に対して甘いところがあるからな。おかげですごい勢いで信者が増加している。
「アテナー？　来たぞー」
「あっ、おはようございます！」
食堂の戸を開けた俺を迎えたのはアテナのエンジェルボイスとレッド男子のアンデッドアイズ。寝起きだからかその禍々しさは五割増しだ。
「なあ、こいつらのメシって……」
「あ……それなんですけど、ごめんなさい。セツが食事当番だったなんて知らなくて……」

「あーってことは、こいつらは今飢えた獣なわけだ」
「あの、私やりますか……？」
「あーいいっていいって。こいつらの分は俺が適当に用意するさ」
殺気が増加した。せっかくアテナの手料理が食えるかと思ったのに何故貴様が……！　みたいな感じだ。馬鹿が。そう簡単にアテナの手料理が食えると思うな。
「そうですか？」
「ああ。アテナ、そういうことだから、俺も手伝うよ」
「は、はい……じゃあ、お願いします……」
何故か顔を赤くして尻すぼみになっていくアテナ。
「どうした？」
「その……一緒にお台所に立つっていうのが……新婚さんみたいで……えへへ」
そのアテナを可愛いと見惚れる余裕は俺にはなかった。ぶった切られたかと錯覚するくらい濃密な殺気が周囲から一斉に放出されればそれもしかたないだろう。さだめがいなかっただけ救われた。
「と、とにかくやるぞ。あ、あいつらも腹減って殺気立って来てるみたいだからさ」
殺気立っている理由はそんなことではないのだが、若干天然入っているアテナならこれで簡単に信じ込む。
「はい！　あ、あな、あなた……」
「……」
うん。だからそろそろ殺気が物理的圧力を持って襲いかかってきてるから！　このボロいレッド寮食堂がミシミシ怪しい音立てて軋んでるから！
嬉しいというかアテナの積極性に恐怖を覚える。
「……アテナ。怖いから包丁プルプルさせるのは勘弁してくれ」
「す、すみません不器用なもので……って、そんなセツみたいに二刀流で空中分解させるような人と比べないでください」
「なれればこっちのが楽でな」

「それは絶対ウソです」
そんな感じで朝食。
……その際起こった事件についてはまだ始まったばかりだというのに俺の精神力が尽きかけているのでダイジェストでお送りする。

「セツ、あ、あーん……」
「皆の者！　武器を、武器を持てぇい！」
「あっ、セツ口にご飯粒付いてます。私がとって……はむ」
「核！　米軍に出動要請だ！　この島ごと焼き払ってくれる！」
「おうともさ！　一思いに俺たちごと葬ってやれ！」

……すまん。ダイジェストにしても俺の精神が持ちそうにない。
後、周囲から放たれる怒りの波動で燃え尽きそうになる。
……ここで燃え尽きそうになってる場合じゃないんだが……とにかく、一番重要なところはここではない。ここまでは割といつも通り……ごめんなさい物を投げないで！……アテナの積極性はいつものことだが、この日は特にそんな感じがしていた。今思えばアテナも不安だったのか、それとも焦っていたのか……どちらにしても、その原因は俺にあったんだろうな。

「それじゃ、行くか……」
「だ、大丈夫ですか？　なんかすっごく疲れきってますけど……」
「だいじょうぶ私は平気」
「一人称すら変わってますけど……」

正直危なかった。さだめの所為で命の危機は何度も経験してきたが、その俺にして死の淵を見た。
「で、今日はどこに行くんだ？　って言っても、アカデミア内は大方回った気もするけど」
「今日は……」
顔を赤くして言い淀んだアテナが躊躇いの後に口に出したのは……。
「私のお部屋……です」
「な……」
アテナの決意を秘めた提案に、俺たちは二人して動きを止めて見つめあった。
これは……危険だ。

「ど、どうぞ……」
「あ、あーお構いなく……？」
くそぅ……流石にこれじゃ自然体をキープすることは無理がある。いつもみたいな隠密行動ができやしねえ。
「……」
「え、えっと……ら、楽にしてください」
そりゃ無理な注文だ。正直すぐに気を失いそうだ。
「あー……っと、そういやシャルナとかはどうしたんだ？」
危険な空気を払拭しようと、つい最近見てない精霊の名前を出してみる。
「……シャルナなら今日はネトゲのイベントデーだから声をかけるなって言ってました。そ、それより、他の女性の名前は出さないでください。せっかく二人っきりなんですから……お、お部屋で」
……作戦失敗。
「そ、そうだ！　せっかくだからデュエルでも……」

「しゃ、シャルナが今日は呼ぶなって言ってました！」
「あ、だ……」
失敗！　というか成功する気がしない！
「ど、どうしたんだアテナ、今日ちょっとおかしくないか？」
「おかしい……ですか」
「あ、ああ。なんていうかいつも以上に積極的と言うかさだめチックというか……」
「……さだめさんチックはショックです」
「……そうだな。悪い」
でもそのおかげで少し空気が軽くなった。ナイスさだめ。
「で、どうしたんだ？」
少し余裕の出来た俺は、今日朝からどうも様子のおかしかったことを尋ねてみる。しばらく言おうかどうしようか迷っていた様子のアテナだったが、やがて口を開いた。
「……私、自信がなかったんです」
「自信？」
「はい。セツに恋人に選んでもらえる自信です」
「うぐっ……」
そこまではっきり言われるとふらふらしている自分が情けなくなってくる。
「ルインさんもさだめさんもセツとキスして……希冴姫さんはまたセツのパートナーとして信頼を勝ち取って……加藤さんだって最近積極的になってきました。私の持ってたアドバンテージ、全部なくなっちゃいました」
「アテナ」
「でも、私はセツが好きだから。絶対絶対、誰にも渡したくないから……」
「アテナ……アテナは、いつも俺の事を好きだって言ってくれるな」
「当たり前ですよ。好きなんですから。何度だって何時だって、セツに好きって言いたいです。でも、どれだけ好きって言葉を重ねて

も、セツの傍には居続けられない」
俺は……。
「セツ！」
「っうぁ！」
思い切りアテナに飛びつかれ、俺は背後にあったベッドの上に倒れ込む。その俺の上にアテナは馬乗りになって……。
「お、おいっ！？」
「……セツ、知ってましたか？」
「な、何を……」

「私も結構……えっち、なんですよ？」

「ッッッッ！！」
マズイマズイマズイ！　頭の中が段々真っ白になってきた。
何も考えられなくなりそうで……。
そりゃそうだ。憎からず想っている女の子にこんなことされて、正気でいられるなんてどうかしている。
俺はアテナを勢いよく抱きしめる。
「きゃ……」
「アテナ……よく聞いてくれ」
それでも俺は自制心をフル稼働させて自分の情動に耐える。
「は、はい……」
「俺は……このアカデミアでアテナに会って、告白されて……その答えを保留した」
「はい」
「きっと、それが一番最悪な……俺の罪だ」
「セツ……？」
俺は考える。あの時、不誠実な答えは返したくない、なんて考え

ずにオーケーしていたら、一体どうなっていたのか。それはわからないが、それでも今、こうしてアテナを不安にさせて、こんなことをさせてしまったのは俺の罪だ。

「あれから……希冴姫やユーキちゃん、さだめにルイン。たくさん俺を慕ってくれる人たちがいて……もう、誰か一人なんて選べない。選びたくない」

「我儘……ですよ？」

「わかってる。最低だ、俺……でも、俺には……大切な人が出来過ぎた」

「セツ……」

俺は想い浮かべる。大切な人たちの顔。自分の想いを。

「さだめは……ずっと一緒に居てやりたいって昔から思ってた。希冴姫には、ずっと傍で支えてもらいたい。ルインには、笑顔を取り戻して、幸せにしてやるって約束した。ユーキちゃんと一緒の時間は心地よくて、疲れた俺に癒しをくれた」

「私……は？」

「……離したくない。絶対に、何があっても」

俺はアテナをさらに強く抱きしめた。

「あ……」

「だから、ごめん。俺がここでアテナをどうにかしてしまえば、きっとその先はバッドエンドだ。俺にとっても、アテナにとっても」

「私……」

「だからアテナ……いつかと同じで、答えは保留だ。今答えを出すのは遅すぎて……早すぎる」

「もう……愛想尽かしちゃいますよ……？」

「そうはさせない。離さないから」

「でも、隣においてはくれないんですね」

「ああ」

「勝手……です」

「ああ」

「勝手すぎます。女の子の気持ち、全然わかってくれてません」
「ああ」
「でも……何でででしょう。すっごくセツらしくて……それでいいって、思っちゃいます」
「ああ」
「セツの心臓……とくんっとくんって動いてます。緊張、してますか？」
「当り前だ。っていうか、アテナに言われたくない」
「だって……セツの気持ちが伝わってきます。こんなにあったかくって幸せなモノが流れ込んできてるんです。私、どこかに飛んで行っちゃいそうです」
「そっか……」
「しばらく……こうしててください。それくらいはいいですよね？」
「アテナの気が済むまで、な」
「じゃあ、一生です」
「……悪い。前言撤回する」
「もう、しょうがない人です」
「なんか、年上っぽい反応」
「酷いです。気にしてるのに」
「いいじゃないか。俺は年上好きだぞ？」
「そうなんですか？」
「少なくとも、アテナはそのままが良い」
「……じゃあ、いいです」
「そうそう。俺たちの優秀なツッコミ役兼ストッパーのままで居てくれないと」
「そんな理由なんですか！？」
「ははははっ、その調子その調子」
「もうっ……」
すっかりいつもの調子で語り合う俺とアテナが、そのとんでもなく危険な体勢と距離にお互い真っ赤になって離れたのは、すっかり

日が沈んで夕食の時間になってからだった。

第二期第十二話「何度だって何時だって」（後書き）

こんにちは。

例によってピロートークなアテナメインの話。アテナメインの話はラブが濃厚。というかズシリと重いラブです。一撃が。

それでは、悠でした！

第二期第十三話「天岩戸の駄女神さん」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第十三話「天岩戸の駄女神さん」

「セツ～助けてくださいぃ～」
「アテナ？　どうしたんだいきなり」
珍しく途方に暮れた様子のアテナが泣きついてきた。
「なんですの？　折角セツ様に一矢報いることが……」
「ほいそれロン」
「あ……」
「やれやれ。これで希冴姫はハコですね」
「相変わらず腹芸は苦手じゃのぅ……」
「呑気に麻雀してないでください！」
いや、希冴姫が興味あるっていうから……。
「んじゃ希冴姫抜けてテンスなー？」
「……主、今はゲームを続けている場合か？」
「そうですよ！　私の話を聞いてください！」
アテナがいつになく必死なのでギャグのノリを止めてアテナに向き合う。
「で、どうしたんだ？」
「シャルナが……シャルナが！」
「……シャルナがどうした？」
悲痛な表情のアテナ。そこにとてつもなくシリアスなものを感じ

て表情を引き締める。
「シャルナが完全にニートになっちゃいました！」
……なんだ、ただのギャグか。
「あっ！　ちょっと麻雀に戻ろうとしないでください！　ホント、助けてくださいって！　結構切実な問題なんですから！」
「……まあ、話だけは聞いてみるか」
シャルナがニートって、なんか今更じゃね？
「今日、加藤さんとデュエルしてた時なんですけど……」
『アテナ』のカードが全く来なくて苦戦したとのこと。……それでも勝ったらしいところがアテナらしい。
「だからそのデュエルの後でシャルナを呼んでみたんですけど……『今忙しい』とかってすぐ引っ込んじゃって」
「なんという……主を守る精霊ともあろうものが個人の都合でその責務を放棄するとは……」
「だから、セツに説得するのを手伝って欲しいんです。必死に呼びかけてたんですけど、途中から『レアアイテムゲットの邪魔だからしばらく放っておいて』とか……」
もう偉い天使さまとか面影が欠片もないな。ただのヒッキーだ。
そんなシャルナに憤懣やるかたないといった様子の希冴姫が鼻息も荒く立ち上がる。
「セツ様！　同じ精霊として看過できませんわ！　説得などと甘いことを言わず、精霊界まで行って引きずり出してくるべきですわ！」
「あー……まあ確かにデュエルにまで影響与えるのはマズイよなぁ……」
「精霊界……セツ！　私、私も行きます！」
そういえばアテナはまだ精霊界に行ったことなかったか。
「前から行ってみたかったんです！」
「良いのか？　希冴姫」
「問題ないでしょう。冥界や万魔殿のようなところに近づかなければ危険はありませんわ」

「……俺、冥界にケンカ売った気がするんだが」
「流石セツ様ですわ。他の凡夫とは何もかも違いますわ」
「誤魔化してるよな？」
「ところで、どうやって行くんですか？」
「俺が扉を開く。そこを通るだけだ」
「……それも無駄スキルですか？」
「……それでいいや」
特殊すぎるが。
「それではセツ様。お願いしますわ」
なんか最近魔法使いになった気分だ。
「てい」
「……あの、これパソコンですよね？」
「さあアテナ。こう叫ぶんだ。『デジ○ルゲートオープン！』」
「デジ○ン！？」
「ぶっちゃけ扉のカタチは何でもいいらしくてな。ならそこは遊びを入れるかと」
「じゃあ叫ばなくてもいいんですか？」
「……叫ばなくちゃいけません。叫びましょう。レッツ・シャウト！」
「嫌ですよ！　恥ずかしいです！」
「むしろそれがいい」
「ドS！？」
「まあ、アテナ弄りはこんなもんでいいか」
「セツ……なんか意地悪です。この間はあんなに優しかったのに……」
「……セツ様？」
「ナニモシテマセン。ボクハムジツデス」
「ベッドの上で……」
「セ・ツ・さ・ま？」
「お兄ちゃんどういうこと！？」

「お前は一体どこから現れた!?　一話に一回発言しないと気が済まないらしいな!?」
「出番がなければ首が回らなくなるからね」
「お前に関しては問題ないんじゃないかなぁ……」
「セツ、また抱いてくれませんか?」
「ウソつかないで!　お兄ちゃんはまだ童貞!　さだめにはそれがわかる!」
「アテナもアテナだがお前も何言っちゃってんの!?　そんな悲しい事実を明らかにしないで!?　そして何故知っている!」
「さだめはお兄ちゃんが今まで捨てた子種の数すら諳んじられる自信がある!」
「もうお前は黙れ!」
「……そろそろ軌道を修正しろ。女神はどうした」
「おっと、すまん。ついいつもの調子で」
「……前途多難だな」
テンスはテンション低くてストッパー役が板に付いている。ジャックの立場が危ういな。
「……心配するな。喧嘩の仲裁はジャックの仕事だ」
「……私は出番を奪われたいですが」
まあ、とにかくそろそろシャルナを連れ戻しに行くか。
「デジ○ルゲートオープン!」
「ホントに叫ぶんですか!?」
アテナのツッコミを背景に、俺たちはパソコンに吸い込まれていった。

「ほい到着」
「ホントにあれで来ちゃいました……」
「へぇ～ここが精霊界なんだ～」

結局さだめも着いてきた。こいつは意地でも出番をもぎ取ってくるな。
「シャルナはどこにいるんでしょう……？」
「……彼女はヴァルハラ在住」
「あ、やっぱりそうなんですか……」
「上級天使は大抵そう。私もそこに別荘がある」
「別荘ってすごいですね。ルインさんってお金持ち……え？」
「待てルイン。何故居る」
「神出鬼没は萌えポイント」
「そういう問題か……？」
「私ならヴァルハラフリーパス。道案内もする。今ならキミのキス一つでお買い得」
「さよなら～」
「また人間界で会いましょうね」
「……冗談。タダでいい。私は投げ売り」
「その発言も問題あるからな？」
「……まあ、素行に問題は残りますが上級天使の同行がなければヴァルハラに入るのに手間がかかりますから、同行させるべきですわ」
基本嫉妬深い希冴姫（まあ全員そうだが）が同行を勧めるのは珍しい。
「ヴァルハラまでは少し遠い」
「……待て、この展開は」
「よう！　このサイクロイド様に……」
「カウンタートラップキックバーック！」
「ぎゃあああああっ！？　それただの蹴り！　キック！　なにしやがんでぃ！」
「もうお前ネタ良いよ！　なに準レギュラー気取ってんの！？　お前精霊界来るたびにいるじゃん！　下手したらシャルナより出番多いよ！」
「それだけ俺っちの人気がすごいってことよ！」

「誰一人お前の再登場願ってなかったよ！　お前の人気、お前が思ってるほどすごくないよ！」
「内心で燻ってるだけよぉ！　この出番によって隠れていた人気が爆発すんのさ！」
「お前のそのポジティブさ何か怖いよ！」
「お兄ちゃん、お友達？」
「敵だ。不倶戴天の敵。マイ・エネミー」
「……流石に、これに全員は乗れませんよ」
「おおっと可憐なお嬢さん、俺っちを舐めちゃあいけませんぜ。俺っちには必殺の巨大化がありまさぁ」
「誰が漕ぐつもりだ。誰も足届かねえよ」
「っち！　これだから近頃の人間は短足でいけねえ！」
「昔の人間でも無理だよ！」
ったく……コイツを交通手段に使っている精霊界は何かが間違っている。
さてどうするか……俺たちが途方に暮れていると、地の底から響くような声が聞こえてきた。
『我が運ぼう……』
「へっ……？」
「まさか……」
ズズズッ……と地面の影から現れたのは……。
「ヴァンダルギオン！？」
『こうして話すのは契約の時以来か。我が駆り手』
「あ、ああ……しかしまたどうして……」
『……カイエンに泣きつかれた。そろそろあの戦女神をどうにかしてくれと』
どうやらシャルナの怠慢は精霊界でも問題になっているらしい。
しかも結構大きな。
『そんな時、我が駆り手たちも同じ目的でやってきた。ならば手を貸すのが近道というもの』

そういうことか。まあタイミングが良かったんだかなんだか……。
「……シャルナがちゃんと働かないと冥界も苦労する」
「そうなのか？」
「嘆願書を適当に処理して凶悪犯を勝手に蘇生させたりする」
「最悪だなあのアホ女神！」
っていうかそんなに重要な役職に就いてたのかあの駄女神。
「うぅ……私の精霊さんがご迷惑をおかけして……」
アテナはすっかり恐縮している。
『……まあそういうわけだ。我が下手にヴァルハラに干渉することもできぬ。できればお主らで解決してくれると助かるのだ』
「ま、こっちも困ってたし、願ったりかなったりだよ」
「よっしゃ！　じゃあ俺っちの体にロープを巻きな！　しっかり牽引してやんよぉ！」
「いらねえよ！　お前もういらねえから！　大体誰が漕ぐ！？」
「旦那に決まってるじゃねえかよ！」
「殺す気か！　あんなでかいのに全員乗って、それを牽引とかどんな無茶振りだよ！」
「じゃあ俺っちはどうすりゃいいんだよ！？」
「帰れよ！　適当に国家転覆の計画でも練ってろよ！」
こいつは……出てくるだけでさだめの出番すら喰うのか……。
「精霊界って……愉快なところだね」
「妹君にまでそう評されるとは世も末ですわ……」
まったくだ。
「じゃあとりあえず頼む。ヴァンダルギオン」
『任されよ』
でかすぎてよじ登るのに苦労したが、なんとか全員乗り込んでヴァルハラに向けて出発する。
『着いたぞ』
「速いなおい！？」
「元々サイクロイドで十分な距離。ヴァンダルギオンならこれくら

い当然」
「ですよね！」
自転車でいける距離に自家用ジェット使ったみたいなもんか。そら速いわ。
とりあえずヴァンダルギオンには帰ってもらい、ルインが俺たちの入国手続き（？）をしてくれた。……恵まれたメンバーだなそういや。
「あははっ！　くすぐったいですって。もう、服を引っ張らないでください」
ルインを待っている間アテナは小さな天使たち（恐らくは『小天使　アル』とか『小天使　テルス』辺りだと思われる）に懐かれまくって戯れている。とりあえず癒し効果は抜群の光景だ。それに対し……。
「……お兄ちゃん。なんかさだめ、すっごくお呼びでない感が……」
ガジガジゲシゲシとちっこい天使たちに攻撃されているさだめもいたりするのでちょっと楽しい。対照的過ぎる。
「心配すんな。お前は万魔殿とか行ったらモテモテだよ。きっとみんな服従のポーズを取ってくれる」
「それ、あんまり嬉しくないよ。痛っ！　痛いってば！　食べるよ！　頭から！」
「喰うな！」
「……手続き終了」
「おっ、早かったな」
「元々私は住人。キミも冥王竜のお墨付き」
なるほど。アテナはあの通りだしな。
「って、さだめお邪魔虫？」
「……おジャマトリオならもっと簡単に通れた」
「あいつら以下！？　さだめの信用あいつら以下なの！？」
珍しくさだめが突っ込んだ。ま、あいつ等仮にも光属性だしな。
「天空の聖域には通行許可が下りなかったけど」

「今回は問題ないだろ。シャルナのとこに行けばいいんだし」
コクリと頷くルインの先導で、俺たちはシャルナの家を目指す。
「……っていうか」
シャルナの家……というかこれは既に……。
「お城……ですね」
「まあ、彼女も最上級の女神ですもの。これくらいの扱いは妥当ですわ」
今は駄女神も良いところだが。
「シャルナー！　来ましたよー！」
トテトテとアテナがその城に足を踏み入れる。と、急に立ち止まった。
「どうした？」
「あ、えっと……」
中に入ってみて驚いた。それは城が豪華で金銀キラキラしていたから……というわけではない。
「きったな……」
そう。さだめの言う通り、汚いのである。所謂ゴミ屋敷。文字通り屋敷だが。
「……ほう。これはあれか。俺たちに対する挑戦と取って良いんだな？　ジャック！」
「仰せのままに！」
俺とジャックは一瞬で箒やチリトリ、雑巾にバケツとエプロン三角巾というお掃除スタイルに変化してこの腐海を浄化しようと……。
「ちょーっと待ってお兄ちゃん」
「なんださだめ！　俺たちは今からこの主夫のお掃除欲を刺激する腐海を……」
「うん。お兄ちゃんたちの主夫的反射にはさだめもちょっと驚いたよ。でもとりあえず今はシャルナさん」
「ならばジャック！　俺たちでこの腐海に血路を開く！　俺に続けぇ！」

「御意に！」
どちらにせよこのゴミ山を何とかしなければシャルナの部屋までは辿りつけそうもない。俺たちは戦った。戦って戦って……戦い抜いた。
「開通！　シャルナ寝室と思われる部屋までの道、開通だ！」
常人離れした掃除能力を持つ俺とジャックの二人掛かりでざっと半日。すっかり日も暮れ、俺たちはドロドロ。そして……。
「チェックメイト。弱い」
「あぐっ……ルイン、貴女イカサマしてませんこと？」
「希冴姫さん弱ーい」
「な、なら妹君がやってみなさいな！」
「いいよーさだめ強いし」
「……勝てる気がしない。実力者は相手の力量もなんとなく読み取る」
「ふふふー、流石にルインは賢明だね」
「……姦計謀略の類で貴方達兄妹に勝てる気がしない」
「貴女女神でしょうに……」
「って何チェスに興じてるか！」
思いっきり遊んでいる他のメンバー。お前ら実はシャルナとかどうでもいいだろ。
「お兄ちゃんたちお疲れーって、すごいねそれ」
「ゴミの壁です……」
シャルナの部屋までに溜まったゴミの量は半端じゃなく、一体どれだけの年月を経過したのか底の方のゴミは液状化していた。正直周囲には毒素が充満していた。とてもじゃないが聖なる天使、とかの空気ではない。
「パンデモニウムだってもう少しマシな空気だったろうに……」
「……さっさとあの駄女神引き摺り　出して帰りますわ。こんなところに長居は無用です」
「同感だ……」

ジャックは引き続き清掃中。あのジャックでさえ心が折れそうだと涙ながらに言っていたのだから城の酷さは推して知るべし。

「シャルナー！　おい出てこーい！」

ドンドンと扉を叩く。乱暴かも知れんがそれぐらいしないと気が済まん。

「うぅ……腐臭が気持ち悪いです……」

違いない。これはもう毒素だからな。

「開けるぞ！」

返事がないので声をかけてから扉を開く。むわっとした酒気が鼻に付く。

「うわ、酒臭……」

シャルナは机に突っ伏して眠っていた。パソコンが付きっぱなしなのを見ると、どうやら寝落ちしたらしい。

「なんというはしたない格好を……」

タックトップ一枚と短パン。どこのアル中女子大生だと言わんばかりの格好でビールの空き缶片手にいびきをかくシャルナに、もう全員でこう思う。

「コイツだめだ。もうどうしようもない」

早くなんとかしないと。を通り越してもうこりゃダメだ。処置なしっぽい。

「ふがっ？」

人の気配に気づいたのか、最早女神以前に女としてどうよ的な声を漏らしてむくりと起き上がる。

「ん～……寝落ち、したわぁ～」

そしてうげ、と口を押さえる。

「二日酔い……うぶっ！」

「げ……」

一応エチケット袋にはしていたとだけ言っておく。シャルナはその袋の口を結んで放り捨てる……っておい！

「ちゃんと捨てろよ！」

思わず突っ込んでいた。うん、今のは仕方ない。希冴姫は耐えきれずに逃げ出したし。

「あ……？　あらーマスターたちじゃない。どうしたのこんなとこに」

そこでようやく俺たちに気が付いたらしいシャルナが濁りきった眼でこちらを振り向く。

「うぅ……」

……アテナもちょっと限界か。精神的には強くても毒素が充満するようなこの腐海じゃ体の方が耐えきれないな。

「……さだめ、アテナを頼む」

「了解。あとよろしくね」

「正直俺も帰りたい」

とりあえず全然平気そうにしているさだめにアテナを任せ、俺はシャルナに向き直る。

「シャルナ、単刀直入に聞くが何でまたアテナのデュエルに出てこなかったよ」

「んー？　あぁーそういえばそうだっけ。ごめんごめん、丁度イベント期間中でさ」

「……もうちょっと悪びれろよ。女神の業務の方も滞ってるらしいじゃないか」

「……そうねぇ。適当に処理してたみたいね」

「どうしたんだ？　前から確かにノリは軽かったし適当そうな雰囲気ではあったけど、無責任な奴じゃなかったろ？」

「言ってくれるわねぇ……」

アテナを守る。そう言ってくれた時、シャルナは確かに目に力があった。今みたいに脱力し濁りきってしまった目はしていなかったはずだ。

「そうねぇ……なんでかしらね」

「シャルナ……」

意識せず、語調がきつくなる。それを感じたのか、シャルナも肩

をすくめる。
「落ち着きなさいな。ほら飲み物」
「ああ、サンキュ……ってチューハイだし」
「ジュースみたいなもんよ。てか、ここにはアルコール以外じゃ水しかないわよ」
「……水でいい。っていうか、お前もそうしろ」
「迎え酒よ」
「やめとけ。マジな話だ」
ダルそうな仕草でビールを置く。その姿に以前の精彩は欠片も感じられない。
「本当に、一体どうしたんだ。今にも死にそうだぞ」
「あーもううっさいわね……。しょうがないじゃない。なんか馬鹿らしくなっちゃたんだから」
「何？」
「マスターを守るだとか言っといて、あたし結局ロクに役立ってないもの。さっきまでそこにいたあんたの妹さんにやられた時もダーク化した時も、あたし何もしてない」
「それは……」
「挙句マスターもあたしのことを呼びだすこと少なくなっちゃったし、あたしが守らなくてもどうせあんたは護ってくれるんでしょ？　だったらもう良いじゃない」
「もう良いって……」
「ここまであの子連れてきたならわかるでしょ？　あの子の精霊になってあの子を守りたいってやつは掃いて捨てるほどいるわ。あたしの仕事だって同じ。あたしなんかいなくたって世界は回る。だったらもう好きにして」
「シャルナ……」
「世界なんてそんなものよ。誰もいなくちゃ回らないけど、誰か一人欠けたって小揺るぎもしない。それなら……「いい加減にして」……？」

「ルイン？」
　それまでずっと黙りこくっていたルインが珍しくも怒りをあらわにシャルナに杖を突きつけていた。
「世界が回る？　ウソつかないで」
「ウソなんて……」
「なら聞く。貴女の世界は回っている？」
「あたしの？」
「貴女の世界は貴女が回す。貴女がいなければ世界に未来は訪れない。貴女の見ている未来に色がある？」
「……」
「貴女のマスターは生きている。貴女の世界は破滅してない。その程度で世界を語るな。反吐が出る」
「無事だからこそ、その無事な姿を見る度に何もできなかった事実に打ちのめされるのよ。一切合財綺麗さっぱり消え去ったのとはベクトルが違うのよ！」
「不幸の比べ合いをする気はない。護れなかった絶望や痛みも、私と貴女で差があったとは言わない。でも、今の貴女は私と違う」
「……」
「今の貴女は、自分の思い通りに世界が動かず、不貞腐れているだけのただのガキ。昔の私でも、今の貴女ほど酷くなかった」
「……うっさいわね」
「また耳を塞ぐの？　聞きたくない？　自分の浅ましさが妬ましい？」
「あんたの声が二日酔いに響くだけよ」
「違う。貴女は酔ってなんかない。目を逸らそうと必死なだけ」
　ルインはまったく容赦せず、シャルナに厳しい言葉を浴びせていく。それは過去の自分重なるシャルナに対する糾弾か。それとも早く立ち直れという荒々しい発破か。
「貴女は何も失っていない。貴女はやり直す必要すらない。また、始めればいいだけ。燻っている今は、時間の無駄」

「また……始める、か」
「貴女が立ち止まっている間に、彼女も私たちも先に進んで行く。私のように、世界から置いて行かれる前に。本当の意味で失う前に、また……歩きだして」
「……小走りくらいにはなる必要があるかしらね」
「私は全力疾走。文句言わない」
「あーあ……まずは溜まり溜まった仕事の処理かぁ……めんどくさいから全部認可でもいいかしら」
「それでいい」
「いやよくないだろ」
思わず突っ込んだ。また妙な仕事されたらヴァンダルギオンたちが困る。
「そーよねぇ……つーか書類、どこいったかしら」
「……まずは掃除だな」
「……やっぱ寝ていい？」
「ダメ。俺たちも手伝うから、お前もやれ」
「見ればわかるでしょうけど、元々掃除できないのよあたし」
「だろうな。ありゃ数年単位のゴミだ」
「んにゃ数百年」
「世紀跨いでんのかよ！」
予想以上のダメっぷりだ。数世紀放りっぱなしのゴミとか。そりゃ液状化するわ。土に還るわ。
「最近はカップラーメンとかも増えてきて便利な世の中になったわよねー」
「ロクな食生活してねえなコイツ……」
「あーそだ、ジャック貸してねぃ。あたしの世話役で」
「どうぞ」
「いやルインが決めるなし」
そろそろジャックを気遣ってやれ。
「じゃあ坊やでもいいわよん」

「ジャックを差し出す」
「キミも中々……」
このゴミ溜めで執事をする気はない。というかいい加減留年する。
「あーしんど……お日様が眩しいわぁー」
「女神が光で苦しむなよ……」
まだアンデッドぽいが、とりあえずは復活したシャルナに気付いたアテナが駆け寄って……鼻を押さえて後ずさりした。
「シャルナ……臭いです」
「華の乙女になんてことを！」
「その華の乙女にあるまじき匂いだから引いてるんですよ……」
「っていうかそんな歳じゃないでしょ女神」
「きっとドライフラワーですわ」
「私に対する挑戦と見た」
「これは全面戦争ね」
「ピチピチとカラカラじゃ勝負はみえてるよ。やめとけばー？」
挑発的なさだめのセリフに、いつかの不敵な笑みを浮かべたシャルナがいつものセリフを言い放つ。
「……天罰てきめん！」

第二期第十三話「天岩戸の駄女神さん」（後書き）

こんにちは。

駄女神シャルナも改訂後は出番三割増し！……に、なるといいですね。うん、ホントに……。

それでは、悠でした！

第二期第十四話「冥界からのお客様」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第十四話「冥界からのお客様」

『きゃうっ！』

……。

「なあ、今なんか聞こえなかったか？」

「わんちゃんですか……？」

「なら食料だね」

犬と聞いて真っ先に食料扱いするな。

「わんちゃん食べないでください！」

「知ってる？　韓国だと一般的な食材らしいよ？」

「ダメです！」

『こぁっ！　きゃうぅん！』

「あ、また聞こえた」

「セツ……上です」

お……？

『きゃう！』

トサッ！

頭に重みが加わった。

「わぁ！　可愛いです！」

「朱黒い……竜？」

「赤黒いって言うと、なんかエロいね」

「ちっちゃいね～」
　ユーキちゃんがさだめの台詞を丸っきり無視して俺の頭の上に手を伸ばす。
「あはっ！　ツルツルしてる～あっ、舐めた！」
「なんだなんだ？　これじゃ俺には見えないんだが……」
　手探りで頭の上の謎の物体Ｘを下ろして顔の前に持ってくる。
「……えーと、どちらさん？」
『かうっ！』
　それは確かにさだめの言ったようにところどころが朱色の黒い竜であった。しかし『黒竜の雛』とはちょっと違う。あれよりも多少ゴツイというか……。
「あ……もしかして」
　最近その竜と話した記憶が蘇る。
「ヴァンダルギオン？」
『かうーっ！』
　当たりー！　とでも言うように万歳して啼くヴァンダルギオン（？）。
「っていうか、なんでこんなちっちゃく……」
『きゅ！』
　ごそごそと背中に背負っていた黒いバック――色が同じで気付かなかった――からやっぱり黒い手紙らしきものを取り出して俺に手渡す。
「……読めん」
『きゅ？』
　その手紙は精霊界、それも（恐らく）旧字体で書かれているのでさっぱりだ。
「……ルイン辺りなら読めるか？」
「でもどこにいるのか……」
『……ねえ、ここであたしを呼ぶべきなんじゃないの？　だからあたし、不貞腐れるって理解してる？』

「……や、何か頭悪そうだったもんで」
「期待値がルインと比べると……」
『あんたら偉い女神さま何だと思ってるのよ！』
『オタニート』
全員息はぴったりだった。
『……ですよねー』
本人も自覚はあるようだ。
『まあとにかく見せてみなさいな』
「……まあ、ダメ元で」
『端っからダメ元とか言われるとやる気失せるんだけど……えーと何々』
「どうだ？」
『……うん、あれよね。あたし、心は十代だから』
「読めなかったんだな。うん、大方の予想通りだよ」
時間の無駄だった。ルインを探そう。

「……達筆過ぎて読みにくい。でもざっとで良いなら読みとれた」
「流石ルイン」
「オタニートとは格が違うね」
『あんたら兄妹容赦してよ』
「で？　内容は？」
「要は、息子が生まれたので、しばらくキミに預けたいってこと」
「俺に？」
っていうか息子……え、妻子持ち？
「どちらかと言うと後継者のようなもの。お腹を痛めて産んだわけじゃない」
「あー……？　ヴァンダルギオンって雌？」
「……特に性の概念もないと思う。あれは神霊のようなもの。自然

発生が基本」
「精霊にも色々いるんですね～」
「ともかく、色々な経験を積ませる意味も持って、信頼できるキミに我が子を託す……というようなことが書かれている。これも一緒に」
ルインに渡されたのは一枚のカード。チビヴァンダルの絵と共に『冥幼竜ヴァーミリオン』の名前が。
「ヴァーミリオン……朱色か。確かにちょっと朱っぽいな」
体に走るラインや瞳の色が朱色だ。仄かに輝いていて綺麗だ。
『きゅ？』
つぶらな瞳を潤ませて首をかしげるヴァーミリオン。……うん。まあ……。
「可愛いです……」
アテナがもう涎を垂らさんばかりに見つめている。
「えーそうかなー？　もっとトゲトゲして抱きしめたら血塗れになるくらいの方が……」
「そんな拷問器具紛いのものを可愛いとは言いません！」
さだめの感性的にはドストライクなんだろうよ。
「私もそっちがいい」
「ルインさんやさだめさんの意見は参考になりません」
「わたくしとしてもそちらの方が自衛に適していますし、強そうでいいのですが……」
「……もしかして、私が異端ですか？」
「そ、そんなことないよ～わたしもこっちのが可愛いと思うよー？」
『あたしは……』
「あ、シャルナはいいです」
『またグレるぞこのやろー！』
積極的に外に出てくるようになったのはいいが、扱いの悪さはまるで変わってないシャルナだった。
「ん～でもこの子、どうやってお世話すればいいのかな～」

『きゅー？』
「可愛いですー……」
アテナがすっかりメロメロになっていた。
「セツ、私も手伝いますから一緒にこの子を育てましょう！」
「うん、その物言いは引っかかる奴らがいるからやめような？」
まるで俺たちの子供のように宣言するアテナに……というか何故か俺にさだめが（文字通り）噛みついていた。
「ガジガジ……あ、なんかおいしい」
「離れろ性的倒錯者！」
「で、結局どうするの」
「ああ……ルインはこいつらが何食べるかとか知らないか？」
「……私が何もかも知ってると思ったら大間違い」
「まあそうだよな」
「シャルナは当てになりませんし……」
『ねえ、だからそうサラッとあたしを戦力外通告するのやめてくれない？』
「じゃあ知ってますか？」
『いや、知らないけどさ……』
「ほら見ろ」
「大体シャルナって何か知ってることあるんですか？」
『そりゃああるわよ。なんたって偉い女神さまだし』
「例えば？」
『え？　え、えっと……ネトゲのレアアイテムゲット場所とか能力なら一通り……』
『はぁ……』
『わー今完全にあたし役立たず認定されたわぁー』
シャルナは放っておいて、とりあえず考えることに。
「お兄ちゃんがヴァンダルギオンに聞いてくればいいじゃん」
「いや……最終手段としてはそうするけど、冥界は流石にもうあんまり行きたくないんだよな……」

「そんなにすごいところなの？」
「うん、まあ……その話も追々するよ。そういえばしてなかったし」
ヴァンダルギオンに力を貸してもらおうと冥界に行った記憶はまだ新しい。あの場所は生者が在るべき場所じゃない。
『う～ん……』
『きゅ～ぅ……？』
考えに煮詰まった俺たちがヴァーミリオンを囲んで唸っていると……。
『セツ、ルイン殿』
「……ん？　ネイキッド？」
最近こちらでもちょくちょく見かけるネイキッドが声をかけてきた。近くに剣士の姿は見えないようだが……代わりに一人の精霊を引き連れていた。
『いや何、こちらの御仁がセツを探していたのでな。今の時間ならばここだろうと連れてきた次第だ』
「よう。久しぶりじゃねェかラブコメ野郎」
「って、ゴーズか！？」
非常に心外（？）な言葉と共に現れた青年は間違いなく『冥府の使者ゴーズ』その人。かつて俺がヴァンダルギオンとの契約を望んだ時に会った口の悪い熱血漢。
「セツ……こんな人とも知りあっていたんですか？」
「お兄ちゃんちょっと見ない間に顔が広くなったねー」
だが、そのおかげで手間が省けた。
「ゴーズ、お前ならコイツの世話とかやり方知ってるんだろ？」
「あったりまえだろォが。そもそもコイツが先走ってお前のトコにスッ飛んでかなきゃオレが色々説明するはずだったンだよ」
ちょっと訊りがちな日本語も懐かしい。というか、精霊たちの言語ってのはどうなってんのかね？　普通に日本語喋ってるように聞こえるけど。
「じゃあ、これからどうすればいいか教えてくれ」

「はいよ。つか、基本的にコイツのメンドウはオレが見ることになってンだ。世話とかもナ」
「え、そうなのか？」
「あのヴァンダルのオッサンが大事な後継者一人で人間界まで大冒険させるわきゃねーだろ。ちったァアタマ使え」
　相変わらず癇に障る言葉遣いだが、とりあえず問題は解決したわけだから良しとしておこう。
「じゃあしばらくお前もこっちにいるのか……この島、ドンドン精霊の移住が進んでないか？」
「テメエの所為もあンだろうが。寝ぼけたこと言ってンじゃねェぞ」
　うぐっ……言い返せない。
『あーいいわね。あたしもそっち行こうかしらん？』
「シャルナはダメです」
『だからなんであたしだけそんな扱いなのよ！』
「シャルナが来たらパソコン料金だけで破産しちゃいます」
『……なんでこー否定できない正論ばっかりあるのかしらね』
　それだけロクな生き方してないんだろ。
「大体テメエが精霊界からいなくなったらカイエンのアホがどンだけやつれると思ってンだ。そろそろマジメに仕事しろやゴミオタニート」
　もうボロクソに言われて自棄酒を呷り始めたシャルナはとりあえずまた放っておくことにする。
「まあこっちで生活するのはいいけど、住むところとかどうすんだ？」
「ンなもン、どこだっていい。どこだって冥界に比べりゃ天国だろ」
　ある意味冥界こそ天国な気がしなくもない。文字通りの意味で。
「まァ、タダでここに居付こうなンざ考えちゃいねェ……そこのチビスケ」
「……チビスケ？　何処？」
「ここにさだめ以上にチビはヴァーミリオンくらいだぞ」

「ｏｒｚ」
落ち込むさだめの前にゴーズがピンっと弾いて渡したのは、自らの宿るカードだった。
「使え。報酬代わりだ」
「ふぇ？」
「テメエが一番マトモにオレを使えそうなンでな。兄キが兄キだし、丁度いいだろ」
確かに、この中で悪魔族を扱うのはさだめくらいだ。ヴァンダルギオンと関係している割にはカウンタートラップと相性が悪くて俺も使えないし。
「さだめの……精霊？」
「はン。キチンと使いこなせや。腹立たしいが、兄キだったら使いこなすだろうよ」
「え～もっと可愛い精霊が良かった」
うん。空気読もうなさだめ。さだめらしいっちゃらしいが。
「希望としては『万力魔神バイサー・デス』とか『バイサー・ショック』辺りが可愛いよねぇ……」
誰に使うつもりだ。俺か！？　俺なのか！？　そしてそいつらは可愛くない！
「まあ、でもとりあえず使ったげるね。さだめをしっかり守ること！」
「超上から目線！　何様！？」
それでもそこそこ嬉しそうなのは長年の経験で読み取れる。意外とさだめの奴、自分に精霊がいないこと気にしてたしな。
「はン、やなこった。オレが手を貸すのはデュエルの時だけだ。後は勝手にやってろ」
ゴーズもゴーズで全く素直じゃない。さだめのことを気に入ったからこそあいつは自分を預けたのだ。
『ぱうっ！』
「ひゃっ！？　な、なに？　さだめに何か用？」

『かうぅ～？』
さだめの頭の上に飛び乗ったヴァーミリオンがさだめの顔を覗き込もうとして……。
『きゅ！？』
「うひゃ！？」
そのまま滑り落ちた。思わず受け止めたさだめはひっくり返ったヴァーミリオンをじーっと見つめる。
「ほらほら、やっぱり可愛いですよね？」
「ん～……さだめにはよくわかんない。アテナにあげる」
「いや、俺かゴーズに渡せよ」
「つかこのチビ竜、あり得ねぇくらい懐っこいな。冥界の主候補としての自覚あンのかコイツ」
今もかうーっとか啼きながら一同の周りをピコピコ回っている。特に懐いているのは俺と……何故かさだめ。アテナの方が圧倒的にラブコールを出しているのだが、むしろちょっと嫌そう。さだめの頭に上ったり俺の背中に張り付いたりと忙しい。
『ご、ご歓談中失礼しますっ！』
また新たな精霊の声。一同が振り向いた先には少しゴーズと似た雰囲気の白い服を纏った女性の姿。
『げっ……』
「カイエン？」
『あっ、せ、セツ様。御無沙汰しております！　え、ええと今回はゴーズ様がマスターを定められたということで私もご挨拶に伺いました！　そ、その少々仕事が立て込んでおりまして直接そちらに出向かぬ無礼をお許しください！』
あわあわとかなり焦りまくりながら挨拶をするカイエン。仕事って……。
『ああ！？　やっぱりサボってましたかアテナ……じゃなくってシャルナ様！　そろそろお仕事してください！　もう書類やら嘆願書やら散々溜まって私だけじゃ対処しきれなく……。というか以前か

ら溜まってたやつも十分の一も終わってなくって……』

そろそろと隠れつつ移動していたシャルナが見つかってカイエンに捕獲されていた。もうなんか殆ど逃げる漫画家と追う編集みたいな関係になっている。

『私が人間界に向かえないのも元はと言えばシャルナ様がお仕事を終わらせてくれないからで……』

『あ、あー……全部認可！　とか』

やめれ。

『いいわけないじゃないですかぁ！　それでこないだ危うく『終焉の精霊』転生させかけたの忘れたんですか！？』

「うおおおい！　なんか裏で大変なことしてくれてましたよこのオタニート！」

俺たちの必死の戦いが丸ごと無駄になるところだったらしい。

『ギリギリで私が気付いた……というか誰でも見ればわかったはずですけど兎に角もう少しで大惨事だったんですよ！？　お願いですからマジメにやってくださいよぉ！』

もうカイエンは涙目だ。そしてありがとう！　君のおかげで俺たちの戦いは無駄にならずに済んだ！

「私の説得で心を入れ替えたかと思ったら……」

『甘いわね。引き籠りの仕事ギライがそう簡単に直るはずないでしょう』

「胸張って言うな」

確かにそうだけども！

『と、とりあえずこの方は連れていきます！　セツ様！　また今度ゆっくりお話きかせてくださいね！　それでは！』

『た、助けてマスター！　あたしこのままじゃまた出番の少ないニートに……』

「それはきっとカンヅメという名のニートですからいいんじゃないでしょうか？　というかお仕事はキチンとしてください」

『そんなぁ～！？　折角出番を増やそうと頑張ってたのに！』

非情にもアテナに見捨てられたシャルナは精霊界の方へと帰還していった。
「ところでセツ？」
「ん？　どうしたアテナ」
「なんだかカイエンさんの様子がちょぉぉっと気になったんですけど……」
その『ちょぉぉっと』は世間一般で言うところの物凄く、とかめちゃくちゃ、とかと同義語なのだろうな。
「いや……カイエンの場合はゴーズとヴァンダルギオンに認められた人間ってことで色々話を聞きたがっているだけでそこにお前らの思っているようなものは存在しない……筈だ」
少なくとも俺はそう認識している。
「ま、このラブコメ野郎だからわからなくもねェが……アイツァ昔ッから働き通しで、ある意味世間知らずでな。人間界なンて異界の話を興味持って聞いてただけだろ」
珍しくゴーズもフォローしてくれる。
「そうですか……流石にこれ以上増えてもらうとプチッと逝っちゃっても構いませんよね？　という意味を込めての確認だったんですが……何事もないんだったらいいんです」
……最近アテナが怖い。ある意味さだめより。
「カイエンのアホや駄女神は良いとして……これから少し世話になるぜ」
『きゃうぅ～ん！』
そんなこんなで、俺たちに新しい仲間が増えた午後なのだった。

第二期第十五話「進級試験～準備編～」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第十五話「進級試験～準備編～」

アカデミアの一学年もそろそろ終わり、俺たちにも進級の時が近づいてきた。

だが……。

「出席日数が全然お話にならないノ～ネ！　一体どれだけサボれば気が済むノ～ネ！」

「あー……ハハハ……」

俺はその進級についての説教をクロノス先生から受けていた。

そらそうだ。セブンスターズとの戦いの最中散々休んでいたのが大きい。ただそれだけならアテナも同じだし、その分のレポートは提出してある。だが俺はそれに加えて何度か精霊界に足を運んでその度にアカデミアを欠席している。どれも本意ではなかった……というか大事なことだったということは主張したい……したいが、したところで実質的にはただのサボりである。

「なノ～デ……シニョ～ルセツにはそれ相応ゥ～ノ進級試験を受けてもらうノ～ネ！」

「進級試験……ですか」

ペーパーテスト……じゃなさそうだな。隼人と同じでデュエルだろう。だとしたら相手は……？

「進級試験の相手はワタクシの温情ゥ～デこの二人のどちらかから

選ぶことができるノ～ネ！」
「二人……ですか？」
「どちらも本人からのたっての希望なノ～ネ！　光栄に思うノ～ネ。その二人はシニョ～ルセツの妹、シニョ～ルさだめとなんとあのカイザー亮なノ～ネ！」
「亮さん！？」
さだめは予想していた。あわよくば俺を留年させて同じ学年に……という腹積もりだろう。そうはいくか。
しかし亮さんというのは予想していなかった。本人も十代との卒業模範デュエルの調整に忙しいだろうに……。
「さあ、どっちを選ぶノ～ネ？」
……決まってるよな。
「両方、でお願いします」
「パルメザンチィ～ズ！？　何を言っているノ～ネ！？」
「どちらともデュエルします。その結果如何で俺の進級の是非を決めてください」
「気は確かなノ～ネ！？　シニョ～ルさだめだけデェ～モ十分なノ～ニ、態々カイザーとまでやるなン～テ！」
「理由こそわかりませんが、卒業模範デュエルとかで忙しいはずなのに俺の試験に立候補してくれたのを無下にはできません。それに……」
この世界に生きるデュエリストとしては、強者からの挑戦はいくらでも受けたいもんだ。
「そういうわけなんで、向こうの了承さえあれば俺は両方とデュエルします」
ただし、一対一で二戦。流石に二人まとめて二対一は不可能に近い。
「わ、わかったノ～ネ。先方にはその通りに伝えておくノ～ネ」
愕然とした様子のクロノス先生を尻目に俺はレッド寮へと戻る。
デッキの調整をしないと。今回はかなりの難題だ。俺のデュエルの

癖を知り尽くしている上カードの知識も俺と同じくらいにあるさだめと、カイザーとまで呼ばれるアカデミアナンバーワンデュエリスト……万全に万全を重ねて、ようやく敵うかどうか……。

「……けど、それだけ楽しみでもあるな」

亮さんとデュエルしたことは、実はまだない。サイバードラゴンを軸にしたデッキ自体は現実で何度かデュエルしたことがあるけど、それともまた勝手が違うだろう。

「それに……さだめはやっぱり怖いな……」

あいつは大抵相手に合わせたメタデッキを用いる。俺の場合はやはり代表格は『王宮のお触れ』や『人造人間―サイコ・ショッカー』か。あいつがサイコ・ショッカーを持っているかどうかはわからないが、何せ『混沌帝龍―終焉の使者―』とかまで持っていたあいつのことだ。持っていたとしても不思議じゃない。その上で融合封じをされれば俺に勝ち目はなくなると言っても良い。

「あいつはやる。間違いなく」

流石に禁止デッキまでは持ちだせないだろうが、周囲から忌避されるような戦術も当然のように使用するだろう。俺のデッキがパーミッションタイプだからワンキル系を用いるとは思えない。とはいえ、フルバーン系だと少々キツくなってくる。

「あー……くそ。敵に回すと半端なく厄介だなあいつは……」

メタデッキなぞ、まともに相手してられん。だが、それでもやらなきゃ留年だ。さだめと同学年というのも相当にアレだが、何よりアテナの後輩というのはちょっと……恥ずかしすぎる。三つも年下の女の子の後輩って……。

「屈辱的過ぎる……」

一応現実では優等生で通っていたからか、俺は少々プライドが強い。エリート意識……まではいかないだろうが、留年のようなものはどうしたって受け入れがたい。自分の能力に対する自負もある。

「負けられないな……」

この際だからアテナたちにも手伝って貰う。手は抜かない。

「はいっ！　そういうことなら私も最大限お手伝いします！」
「わたしもがんばるよ～」
「……オレもか？　まあ、いいけどな」
とりあえず俺はアテナとユーキちゃん、剣士の三人に協力を頼んだ。
「つっても、オレはアイツとデュエルしたこともねえから、大して役に立たねえぞ？」
「それはわたしも……」
「私は三回くらいありますけど……あれは参考になるんでしょうか？」
「いや、あいつのデュエル傾向についてはむしろ俺自身が良く知っているから、それは良いんだ」
「じゃあ、何を？」
「……さだめの組んできそうなデッキを組んでみた。そのデッキを使って俺とデュエルしてくれ。後は俺がどうにかする」
「なるほどな……ん？　こりゃ……」
「ああ、そいつは『プロキシ』だ。さだめの使いそうなカードの中には俺の持ってないカードもあったりするからな。あんまり褒められたことじゃないが、対策のためにそれを使ってくれ」
プロキシとは「代理」の意味。入手していないカードを、何らかの方法で代用した物の事を指す（遊戯王ウィキより）。
「なるほど……まあどこかの人みたいにカードに数式を書き込むよりはよっぽどマシですけどね……」
アテナ、それを言ってやるな。
「どーでもいいことだけどよ、たまにカードを手裏剣みてーにしてる奴いるだろ。ありゃどんな仕組みだ？」
そこらへんも世界の神秘だ。気にしてやるな。金属に突き刺さる

紙製カードは遊戯王ファン全員の謎だ。
「さあ、それじゃあ頼む。できるだけさだめの思考をトレースするような形で」
「……いきなり最大の難関だよ～」
「……とりあえずセツに迫ればいいんですかね？」
「……それ、オレもやんのか？」
「……すまん。俺が悪かった」
さだめの思考トレースなぞやってもらったら俺の命か貞操が散る。というか出来ん。
「そ、それでこっちが亮さんだ。まあ亮さんのデッキそのままじゃないけど、できるだけ近づけたつもりだ」
実際に見せてもらったわけじゃないし、とりあえずサイバードラゴンデッキを組んでみただけだが。もちろんサイバー流モンスターは皆プロキシ。
「……あの、ところで質問いいですか？」
「ああ、オレも丁度聞きてぇことがあんだが……」
「……セツ君だから、で納得できることではあるんだけど～」
？　なんだろう。三人が納得いかない、という表情で俺を見つめる。
「このプロキシ、ホントにプロキシですか？」
「本物なわけないだろ？　サイバー流のカードを俺が持ってるわけもなし……」
「そうじゃねぇ。このサイバードラゴンの絵柄！　そのままそっくりサイバードラゴンじゃねえか！？」
「俺が描いた。自信作だ」
「毎度のことですけど、プロキシの出来じゃないですよ！　普通に模写、いえむしろこっちが本物でもいいくらいです！」
「うおっ！？　サイバーエンドまで……」
「そのまま公式大会で使ってもバレないんじゃ……」
それは言い過ぎだ。張替したりしてるからバレる。

「つまり、絵柄ではバレねぇんじゃねぇか！　お前隼人と一緒にカードデザイナーにでもなっちまえ！」
「断る。デュエルしてる方が楽しい」
当り前だ。一人黙々と絵を描いているよりも皆とわいわいデュエルしてる方が絶対に楽しい。
「っていうか、なんでプロキシにここまで力入れんだよ」
「何事も手を抜くのは良くない」
「ここは手を抜いても良いところだったと思うが……」
「……ぶっちゃけ途中から手段と目的が入れ換わっていた事実は否めないな」
「セツの得意技ですからね……」
「と、とにかく！　今は対策だ。頼むぞ皆！」
「ちなみに、ご褒美とかあります？」
「……強かになったな、アテナ」
前はこんなこと言わなかったろうに……。
「えへへ……ちょっと言ってみただけです」
「……別に良いぞ」
「へ？」
「俺だってタダで手伝って貰うのは気が引けるからな。無茶なことじゃなけりゃ最大限譲歩しよう」
「ほ、ホントですか？」
「わ、わたしも～？」
「もちろん」
「オレはカードパックおごりでいい」
「了解」
真剣に悩み始めたアテナとユーキちゃんに対し、さっさと報酬を決める剣士。この辺りは女性と男性の違いか。
「まあ、そんな今すぐ決めることはないだろ。とりあえず対策をしてから……」
「いえ、これはデュエルのモチベーションにも影響します！」

「そうだよ！　さだめちゃんは来年同学年になれるっていう報酬があるからすごく高いモチベーションで来るはずだから～」
「私たちも先に報酬を決めておくことでモチベーションを高めることができるんです！」
「そ、そうか……？」
よくわからんが、アテナたちがそういうならそうなのかもしれん。
「キス……いえ、いつもワンパターンでもアレですよね。でもしたい気も……ブツブツ」
「デート……ううん。それくらいなら普通に頼んでもしてくれると思うし～……やっぱりここはもっと……ブツブツ」
……早まったか？
何やらぶつぶつと物騒、というか不穏な、とも違うか。不純そうな“ご褒美”を考え始める二人を見て、ちょっとだけ自分の迂闊な発言を後悔した。
「……あの二人は放っておいて、先に始めとくか。剣士」
「……っち。オレはとことんモチベ下がったぜ……」
そもそも俺は根本的に人選を間違えたっぽい。といっても他の誰呼んでも結果は同じだった気もするし……あれ？　もしかして俺って意外と友人に恵まれてない？
「俺もモチベーション下がった……」
非常に残念な事実に気が付いて若干グダグダになりながらも俺は剣士とテストデュエルを始めた。
「『パワーボンド』だ」
「チェーンして『魔宮の賄賂』。うん。やっぱり融合系を相手にする場合は魔法をパーミッションするほうがよさそうだな」
「けど、サイバードラゴンは融合手段が豊富にあるぜ。全部パーミッションするつもりか？」
「それなんだよな。多分、全部はパーミッション出来ない。それは高望みしすぎだ。だから優先するべきはその『パワーボンド』だな。普通の『サイバー・エンド・ドラゴン』ならアルカナを多少強化す

るだけで事足りる」
「いっそ『融合禁止エリア』とかを使うのはどうだ？　お前もアルカナを使えなくなっちまうが……」
「それも考えたんだが……そうなると半上級モンスターの『サイバードラゴン』に対抗できない。その上亮さんのデッキには『サイバー・レーザー・ドラゴン』とかもいるから、こちらの方が受ける被害が大きい」
「だからお前は『冥王竜ヴァンダルギオン』中心で戦えよ。折角チビヴァンダルもいることだしよ」
「それも一つの手か……」
それでもやはり剣士は優秀だった。不良みたいな外見をしている癖に相当に切れる。
「……今、なんか余計なこと考えなかったか？」
「なんでもない」
……勘もいい。
「決めました！」
「うおっ！」
アテナが突然大声をあげたのでびっくりした。
「セツ、デートしましょう！」
「デート？」
おや、案外緩い……というかいつもの強制デートと変わらないような……。
「アカデミアの外へ。い、一泊二日で！」
違う！　緩くない！　危険だこれ！
「ど、どうです……？」
「そ、それは……」
かなり、危険では……。いや、何かするつもりじゃないが、それでも十二分に危険。ただでさえ最近のアテナは積極的というか大胆さが増して来て理性を圧迫しているというのに……。
「……」

が、こうも期待を込めた瞳で凝視されると断るのも……というか今回の報酬として頼んでるんだし、断るのは……。

「わ、わかった。そうしよう」

……頷いてしまった。最近アテナに甘くなってきている気がする。

「わたしも、決めた」

アテナと違って静かにそう宣言したユーキちゃんが提案したのは……。

「これから一年間、授業でタッグを組むときはわたしと組んで？　それだけでいいから」

「え？　あ、ああわかった。ユーキちゃんがそれでいいなら」

これもまたやけに緩い報酬。特に何のためらいもなく頷くと、横でアテナがやられた……！　とばかりに苦々しげな表情をしているのに気付く。

「……やりますねユーキさん。これでセツと一緒の時間を増やして地道に好感度を稼ぐつもりですか……」

「アテナちゃんは即物的過ぎるよ。確かに一泊二日デートは強力。でも後が続かないもの」

「その上、授業で常にタッグを組むことで周囲の印象や空気から自分に有利な状況に持っていくつもりですね……やられました」

……そんな深い意味があったのか。タッグに。

「先生の采配でタッグを決める時もセツ君が提案してね？　わたしと組むからって」

……なるほど。確かにそんなことしてれば周囲からは俺がユーキちゃんと付き合っているように見えると。

「これが……さだめさん曰く沈黙の闇狩人（サイレント・ダークホース）の実力……！」

「戦は長い目で見ないとダメだよ。アテナちゃん。だからさだめちゃんだって自分と同学年にセツ君を置きたがってるんだし」

「あいつら、オレよりよっぽど戦慣れしてるな……」

「さだめ曰く、ラブ・ウォーズらしいが」

「テメエ当事者が何言ってやがる」

いや、もう客観的に俯瞰しないとやってられないというか……。
「ともかく、これでわたしたちのモチベーションは十二分だよ～！」
「くっ……戦略的には敗北感が大きいですが、そのデートで勝負を決めれば……！」
確かにやる気にあふれているのは伝わるが、それと反比例して俺のモチベーションが下がっていく。
それでも二人を加えてその日はさだめと亮さん対策を進めていくのだった。

第二期第十六話「進級試験～さだめ編～」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第十六話「進級試験～ＶＳさだめ～」

……結局あれから進級試験の当日まで、さだめは一度も俺に接触してこなかった。不思議には感じたものの、それだけ本気なのだろうと納得もした。

……まあ、当然のごとくその考えは甘かったんだが。

「フ、フフ……長かった……長かったよお兄ちゃぁん……♪」

さだめの目は完全に血走っていた。心なしかフラついている気もする。

「さ、さだめ……どうした？」

「な、何か尋常じゃない状態になってますけど……」

ちょっと近寄りがたい雰囲気だけなら以前を遥かに超えている。

「チャンスなの……これはチャンス。チャンスチャンスチャンスチャンスチャンスチャンスチャンスチャンス！！　遥か昔から延々と夢見ていたお兄ちゃんと一緒の教室で一緒の授業。席を並べて机を寄せて肩触れ合ってのラブラブ授業！」

それは妄想過多だ。というか若干ヤンデレ臭がする。ベクトルはプラス方向だからまだマシだが。

「二人一緒の修学旅行！　二人で一緒の自由行動！　二人一緒にホテルの部屋！　二人で迎えるアバンチュール！　二人で育む禁断の愛！」

「おーいそろそろいいかー。ぶっ飛んだ妄想が妙なオーラと共に垂れ流されてますよー」

　毒々しいオーラだ。禍々しかった以前のオーラとはまた違うヤバさを感じる。

「フフ……このためにこの一週間自らお兄ちゃん断ちをしてハングリー精神を極限まで高めたの。今日は絶対負けない」

「お前は高めるまでもなくケダモノも真っ青なハングリー精神の持ち主だろうが」

「いつか見た漫画でやってました。チョコジャンキーが復讐のためにチョコ断ちして宿敵との勝負に挑む話……」

　……それ、もしかして俺がコイツ倒したらハングリー精神のままに襲いかかってくるんじゃね？

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！　最高にハイってやつだよ！！」

ヤバい。素のテンションだと今のコイツに気圧される。かといってギャグのテンションでこの大事な一戦に挑むわけにも……。

「考えたな……さだめ！」

「いえ、セツの考え過ぎじゃ……」

　くっ……我が妹ながら恐ろしいヤツ！　俺が対策を組んでくることを予想していることくらいは予想していたが、まさかこんな絡め手で来るとは……！

「……既にギャグのテンションですよ。セツ」

「相手を動揺させてプレイングミスを誘う……セツ君が最初の試験でやってたことだね～流石さだめちゃん。セツ君と同じことをする

……」
「え？　なんですか？　もしかして、また私が非常識なんですか？」
「セツ」
俺が妹の戦術に齒噛みしていると、亮さんに話しかけられた。
「亮さん！」
「今日はよろしく頼む。……しかし、また随分と思い切ったな。俺と自分の妹、二人とデュエルとは」
「さだめは断ると何しでかすかわかったもんじゃなかったですし……亮さんとは個人的にデュエルしたかったんですよ。だから、二人ともです」
「……ああ。俺もお前とデュエルがしてみたかった。十代とはタイプが違うが、お前も大したデュエリストだ。卒業前に、二人とデュエルがしたかった」
「それは俺も同じです。そうじゃなきゃ、こんな不利過ぎる提案してませんよ」
「それもそうだな。では、今日はお互い全力を尽くそう」
「ええ。いいデュエルにしましょう」
ではな、と亮さんは俺たちに背を向けて去って行った。
「……ふう。亮さんには感謝だな。妙なテンションを払拭できた」
「あ、やっぱりギャグのテンションだったんですね。よかった、私が普通で……」
「キシャシャシャシャシャー！！」
「きゃあ！？　さだめさんが殆ど妖怪みたいに！」
……コイツ錯乱してってもプレイミスしないから厄介なんだよな。
「シニョ～ルシニョ～ラ……それデェ～ワこれより進級試験を始めるノ～ネ」
クロノス教諭の言葉に、俺は気を引き締める。まずはさだめだ。
「ああ……お兄ちゃんと共に過ごす夢の学園生活への扉が今開かれた！　ウフフフ……ジュルッ！」

……やりたくねーなーコイツと。
「「デュエル！！」」
「先攻はシニョ～ルセツなノ～ネ」
「よし！　ドロー！　俺はモンスターを一体守備表示でセット！　カードを二枚セットしてターンエンドだ！」
「さだめのターン、ドロー！　さだめは手札から『トレード・イン』を発動。手札の『闇より出でし絶望』を墓地に送ってカードを二枚ドロー！」
『闇より出でし絶望』か……『強烈なはたき落とし』対策か？
「魔法カード『闇の誘惑』発動！」
「それはさせない！　カウンター罠『マジック・ジャマー』！　手札の『ジャム・ウォリアー』をコストに、そのカードを無効にする！」
「ちぇ……」
「俺は『ジャム・ウォリアー』の効果でデッキからカードを二枚ドロー！」
「なら、さだめは手札から『終末の騎士』を攻撃表示で召喚！　効果によりデッキから『人造人間―サイコ・ショッカー』を墓地に送るよ」
『終末の騎士』ＡＴＫ１４００
「っ！」
やはり……入っていたかサイコ・ショッカー！　わかっていても冷汗が出る……カウンター罠主体のこのデッキであいつを出されればかなりキツくなる。
「お兄ちゃん……カウンターするカードを間違えたね。魔法カード『死者蘇生』！」
「げっ……」
「さだめが蘇生するのはもちろん『人造人間―サイコ・ショッカー』！　パーミッションする？」
「……通す」

ザワッ！

会場がざわめく。それも当然だな。罠カードの発動を封じるサイコ・ショッカーはパーミッションデッキ最大の急所。

『人造人間―サイコ・ショッカー』ＡＴＫ２４００

「……まさか一ターン目から出してくるとはな……」

想定内ではあった。だが、例え想定してあったとしても一ターン目からそれを防げるとは限らない。

……くそ！『闇の誘惑』からの『ネクロフェイス』や『闇次元の解放』を意識し過ぎた！　もっと単純なコンボで召喚された！

「さだめの得意技はセオリーブレイク……っていう“セオリー”をさだめが守るわけないよね。お兄ちゃん」

「……相変わらず、俺なんかメじゃないくらい天才肌だな」

あいつは事あるごとに俺を天才肌扱いするが……あいつに比べれば俺なんかただの器用貧乏でしかない。

俺はあいつにチェスで勝ったことがないし、将棋でも囲碁でも勝ったことはない。唯一勝機があるのがこう言った運の絡むカードゲームくらいだ。

「さだめの弱点は幸運ランクが低いというただ一点！　だけど、この間ゴーズが来てくれた時からかなぁ……“引き”が強くなった気がするんだぁ……」

「補正……ってやつか」

精霊との繋がりを得て幸運ランクに補正がかかった……と見るのがいいのか。ともかく、これは……マズイかもしれん。

「さだめのバトルフェイズ！『人造人間―サイコ・ショッカー』でセットされた守備モンスターを攻撃！『電脳エナジー・ショック』！」

サイコ・ショッカーの目から発射されたレーザーが俺のセットモンスターを貫く……。

「かかったな！」

「！？」

「俺の守備モンスターは『異次元の女戦士』！　一緒に消えて貰うぞ！　サイコ・ショッカー！」

『異次元の女戦士』ＤＥＦ１６００

女戦士の輝きが自らとサイコ・ショッカーを包み込む。輝きが収まった時、そこに残されていたのは『終末の騎士』一体のみ。

「……流石お兄ちゃん」

「サイコ・ショッカーは読んでたからな。できるだけモンスター効果で対処することができるようにしておいた」

デッキ構成を光属性の戦士で固めてヴァンダルギオンの要素は少なめに。それが今回の俺のデッキ。

「じゃあさだめは『終末の騎士』でお兄ちゃんにダイレクトアタック！」

「速攻魔法『速攻召喚』！　俺はデッキから『切り札の騎士―クィーン』を攻撃表示で召喚する！」

『お任せくださいな。セツ様』

『切り札の騎士―クィーン』ＡＴＫ１５００

力強く剣と盾を構える希冴姫。ここからが真骨頂だ。

この世界には現実よりもよっぽど扱いやすいカードが溢れている。この『速攻召喚』もその一つ。完全な『二重召喚』の上位互換。デッキからも通常召喚できる上、速攻魔法なので扱いやすさが段違いだ。

「くっ……お兄ちゃん……やっぱりお兄ちゃんはいい引きしてるよ」

「俺がさだめに勝ってる所なんか打たれ強さとラックぐらいだからな」

「そんなことないんだけどなぁ……さだめはこれでターンエンドだよ」

「俺のターン！　ドロー！　俺は『切り札の騎士―キング』を攻撃表示で召喚！　効果でデッキから『切り札の騎士―ジャック』を攻撃表示で特殊召喚！」

『切り札の騎士―キング』ＡＴＫ１６００

『切り札の騎士―ジャック』ＡＴＫ１９００
いつもの三銃士による連携。そして……。
「バトルだ！『切り札の騎士―クィーン』で『終末の騎士』を攻撃！『エレガント・ハーツ』！」
『行きますわ妹様！　はぁぁっ！』
希冴姫の素早い連続攻撃が闇に堕ちた騎士を切り刻む。
「くぅ……」
さだめＬＰ３９００
「俺は……」
俺はジャックとキングに攻撃をさせようとしてふと思いとどまった。
さっきのさだめのセリフを思い出す。
『この間ゴーズが来てくれた時からかなぁ……“引き”が強くなった気がするんだぁ……』
『冥府の使者ゴーズ』
この間からさだめの精霊としてさだめの守護に就いている粗暴な男。
その効果の発動条件を、今のさだめは見事に満たしている。
「フフフフフフフフフフフフフフフフフフフフ……悩んでる悩んでる♪」
……こういう駆け引きでさだめに勝てる気がしない。
「……けど、ここで躊躇ったら負けるような気もするな」
大体、例えゴーズが出てきても手札で対処可能。
「バトル再開！『切り札の騎士―キング』でさだめにダイレクトアタック！『貴光斬』！」
『少々気が引けるが……すまぬの』
「くぁ……」
さだめＬＰ２３００
攻撃は通った。しかし……さだめの目が教えてくれる。やはり……来るか！

「手札から『冥府の使者ゴーズ』の効果を発動！『冥府の使者ゴーズ』を攻撃表示で特殊召喚！　今回は戦闘ダメージだから更に『冥府の使者カイエン』のトークンを守備表示で特殊召喚！」
『やれやれ、ようやく出番かよ』
『精いっぱい頑張らせていただきます！』
『冥府の使者ゴーズ』ＡＴＫ２７００
『冥府の使者カイエントークン』ＤＥＦ１６００
カイエントークンの攻守はダイレクトアタックしたキングの攻撃力、即ち１６００。
「バトル続行！『切り札の騎士―ジャック』でカイエントークンを攻撃！『瞬光剣』！」
『張り切っていたところ申し訳ありませんが、早々に散って頂きます！』
ジャックの剣で為す術なく切り裂かれるカイエン。
『わ、私なんのために出てきたんですかー！？』
『……壁扱いに決まってンだろォがダァホ』
『ひあああーーーっ！？』
……なんか妙に萌えた。仕事忙しい中御苦労さまカイエン。
カイエンは守備表示だったのでさだめのライフに変動はない。そしてさだめのフィールドには攻撃力２７００の『冥府の使者ゴーズ』
『よォ、ラブコメ野郎。またラブコメ的事件に巻き込まれてやがンなァ』
「……うっせ。否定できないタイミングでその呼び方すんな」
『否定できるタイミングなンつーもンがテメエにあるかよ』
くそう。コイツにはなんか言い返せない。
「ま、まあ今はいい。とにかく俺はメインフェイズ２に手札から魔法カード『融合』を発動！」
「『融合』……？」
「俺の場にいる三体の切り札の騎士は、それぞれ『クィーンズ・ナイト』『キングス・ナイト』『ジャックス・ナイト』としても扱う

！　よってこの三体を融合し、エクストラデッキから『アルカナナイトジョーカー』を攻撃表示で融合召喚！」

『アルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ３８００

「っ……出たね。お兄ちゃんの最強騎士」

「俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ」

「さだめのターン、ドロー！　……お兄ちゃん。さだめに『アルカナ　ナイトジョーカー』は効かないよ」

「何？」

「さだめは手札から魔法カード『おろかな埋葬』を発動。デッキから『ネクロフェイス』を墓地に送るよ」

『ネクロフェイス』……面倒なカードを。

「そして、さだめの墓地には『闇より出でし絶望』『終末の騎士』『ネクロフェイス』の三体闇属性モンスターがいる……さだめは手札から『ダーク・アームド・ドラゴン』を特殊召喚！」

『ダーク・アームド・ドラゴン』ＡＴＫ２８００

「っ！」

来たか大物！

「さだめは墓地の『ネクロフェイス』をゲームから除外して『ダーク・アームド・ドラゴン』の効果を発動！『アルカナ　ナイトジョーカー』を破壊！」

「『アルカナ　ナイトジョーカー』の効果発動！　手札の『Ｅ・ＨＥＲＯプリズマー』を捨てて効果を無効化する！」

「……それが、アルカナの弱点だよお兄ちゃん。まずは除外された『ネクロフェイス』の効果発動。お互いにデッキの上から五枚のカードをゲームから除外する！」

「くっ……」

俺のデッキから除外されたのは『魔宮の賄賂』『聖なるバリア－ミラーフォース－』『異次元の女戦士』『神の宣告』『ジャム・ウォリアー』の五枚。

「マジかよ……」

除外されたカードはどれも有用で除外されたのはかなりの痛手だ。
「さだめも五枚、除外するね」
さだめの除外されたカードは『速攻の黒い忍者』『闇王プロメティス』『漆黒のトバリ』『ダーク・ホルス・ドラゴン』そして……『ネクロフェイス』
「ッッ！！」
「アハハッ！　ラッキー！　ラッキーだよさだめは！　これはもうさだめに勝つように神様が操作してくれてるみたい！」
俺のデッキトップから除外されたのは……『デストラクション・ジャマー』『融合』『アルカナソード　クローバー』『アルカナソード　ハート』『冥王竜ヴァンダルギオン』……。
「ヴァンダルギオン……！」
マズイ……ヴァンダルギオンが落ちた……！
「さだめも除外除外～♪」
ご機嫌なさだめが除外したのは『ダーク・グレファー』『ダーク・クリエイター』『ダーク・アサシン』『ジャイアントウイルス』『D・D・R』の五枚。
「あちゃー『D・D・R』が落ちちゃったかー。まあ誤差の範囲だよね」
まったくだ。確かに除外されたサイコショッカーを復活されずに済むのはラッキーだが、それよりもデッキをことごとく除外されたことの方が大きい。
「それじゃ、改めて『アルカナ　ナイトジョーカー』を対象に『ダーク・アームド・ドラゴン』の効果を発動！　墓地の『闇より出でし絶望』をゲームから除外して『アルカナ　ナイトジョーカー』を破壊するよ！」
「そうか……アルカナは……」
「そうだよ。『アルカナ　ナイトジョーカー』の弱点は、自分を対象とする効果を『無効化』することはできても『破壊』することはできない。しかもその無効化できるのは一ターンに一度だけ。そし

て『ダーク・アームド・ドラゴン』は……」
「墓地に闇属性モンスターがいれば何度でも破壊効果を使える……！」
「そう！　消えちゃえアルカナ！」
「アルカナ……ッ！」
『ダーク・アームド・ドラゴン』の放った暗黒の衝撃波がアルカナを為す術なく呑み込んで行く。
「アルカナ破れたり、だよ。お兄ちゃん！」

「うそ……セツのアルカナが……」
「負けるところ、初めてみたよ～……」
「っち……アイツ自身は気に入らねぇが、フェイバリットカードが倒されるのを見るのは胸糞悪ぃな」
私たちはセツの『アルカナ　ナイトジョーカー』が闇に呑まれて行くのを呆然と眺めていました。攻撃力３８００を誇り、破壊耐性まで持っていたアルカナがこうして倒されるのを、私たちは初めて見ました。最初サイコショッカーを迎え討ち、希冴姫さんたちを連続召喚したところまでは、見事にセツのシュミレーション通り。良い流れでした。
「ゴーズの辺りから流れが変わり始めたな」
剣士さんの言う通り、さだめさんがゴーズを召喚した辺りから雲行きが怪しくなっていました。それでもセツが『アルカナ　ナイトジョーカー』を召喚したことで、暗雲は晴れたと思ったら……。
「悪夢は、そこからでしたね」
「『ダーク・アームド・ドラゴン』……『ネクロフェイス』の連続発動……アルカナの除去……どれも完璧だ。隙がねえな」
「セツ君……」
このままだと、セツは……。

「留年しちゃったらわたしの御褒美が～」
「……そう考えるとセツ留年でも良いかもしれません」
「おい」

「さあ！　仕上げだよお兄ちゃん！　さだめは墓地の『終末の騎士』をゲームから除外してお兄ちゃんの伏せカードを破壊するよ！」
「チェーンする！　『和睦の使者』！　このターンの戦闘ダメージを無効化する！」
「……粘るね。さだめはこれでターンエンド」
……状況は……最悪、か。
「けど、悪いな。この後に亮さんとのデュエルも控えてるんだ。ここで躓くわけにはいかないな。さだめ」
「……ここで、また奇跡的なドローにでも賭けてるの？　そんなに上手くいくと思う？」
「いくさ。何故ってお前が散々デッキ圧縮してくれたからな」
「っ！」
除外されたカードたちの中に俺の今望むカードは入っていなかった。なら、いける筈だ。
「俺のラストターン！　ドロー！」
俺は引いたカードをフィールドに呼び出す。今更確認は……しない！
「俺は『放浪の勇者　フリード』のモンスター効果を発動する！」
『放浪の勇者　フリード』ＡＴＫ１７００
「……ぁ」
「墓地に存在する『ジャム・ウォリアー』と『切り札の騎士―クィーン』をゲームから除外して、さだめの『ダーク・アームド・ドラゴン』を破壊する！」
「また……そんなバカヅキに……」

「俺はターンを終了する！」
「まだ……まだだよ。さだめのターン！　ドロー！」
引いたカードを確認したさだめの顔が歪んだ。
「さだめは……『終焉の精霊』を攻撃表示で召喚するよ」
『終焉の精霊』……あいつ……やっぱり入れてたのか……。
「ゲームから除外されている闇属性モンスターの数はお兄ちゃんのヴァンダルギオンも含めて１３枚。攻撃力は３９００。バトルフェイズ。『冥府の使者ゴーズ』で『放浪の勇者　フリード』を攻撃！」
『行くぜセツ！』
「俺は手札から『オネスト』の効果を発動！『冥府の使者ゴーズ』の攻撃力分『放浪の勇者　フリード』の攻撃力をアップする！　迎え討てフリード！」
『ぬおっ！？　チィッ！　すまン、負けたゼ……』
さだめＬＰ６００
これで『放浪の勇者　フリード』の攻撃力はこのターンのみ４４００。攻撃力３９００の『終焉の精霊』にも負けない！
「さだめはターンエンド……やっぱり、負けちゃったか」
さだめはブラフを伏せる様子も見せず、どこか清々しい表情でターンを終了した。
「ああ。今回は、俺の勝ちだ。俺のターン、ドロー。俺は『放浪の勇者　フリード』の効果を発動。墓地の『切り札の騎士―キング』と『切り札の騎士―ジャック』をゲームから除外して『終焉の精霊』を破壊する」
勇者の波動を受け、禍々しい悪魔が消滅する。
「……一応、さだめは『終焉の精霊』の効果を使うよ。このカードが破壊され、墓地に送られた時、ゲームから除外されている闇属性モンスターを全て墓地に戻す……ねえお兄ちゃん。やっぱり、さだめと一緒の教室は嫌？」
不安そうなさだめの声。けど、そんなに不安になることはない。
「……そうじゃない。そうじゃないよさだめ。お前と一緒が嫌だっ

たら、俺はとっくの昔に逃げ出してるか廃人にでもなってたさ。お前の隣は……まあ流石に心地良いとは言えないが……他の誰より、違和感はないかもな」

ずっと一緒にいた妹。例えどんなに歪んでいても、永遠にそれは変わらない。

「けど、俺はやっぱり普通に進級したいんだ。それに、この後に控えてる亮さんとのデュエルも楽しみたい。そのためにも、ここで負けるわけにはいかなかったんだ」

「……うん。ごめんねお兄ちゃん。ありがとう……やって。お兄ちゃん」

「ああ。バトルフェイズ！　俺は『放浪の勇者　フリード』で、さだめにダイレクトアタック！　これで……勝ちだ！」

「あああぁっ！」

さだめＬＰ０

「さだめ、またデュエル、しような。今度はもうちょっと普通にさ」

「……うん。その時は負けないよ」

「それは、俺もだ」

「そこまで！　なノ～ネ！　シニョ～ルセツの勝利なノ～ネ！」

クロノス先生の勝利宣言を聞いて、俺は一先ず安堵の息を吐くのだった。

第二期第十七話「進級試験～カイザー亮～」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第十七話「進級試験～ＶＳカイザー亮～」

さだめとのデュエルを終えた俺は、小休止とデッキの調整のために一度アテナたちの所に戻ってきた。どうやら十代たちも来ていたらしく、全員笑顔で迎えてくれた。
「セツ！　お疲れ様でした！」
「危なかったね～」
「ヒヤヒヤさせんなアホ」
「しょうがないだろ。さだめ相手に圧勝なんてできるか」
いやまったく。ヒヤヒヤしたのは俺の方だ。
「いや～アルカナがやられちまった時はどうなるかと思ったぜ！」
「アルカナの効果の盲点を突かれたな。いや、それも想定済みだったのか？」
「ああ。さだめが『ダーク・アームド・ドラゴン』を使ってくる可能性は考えてあったからな。とはいえ、正直血の気が引いたよ」
「次はいよいよお兄さんッスね……」
「フン。コテンパンにされてくるといい」
「悪いな万丈目。そういうわけにもいかないんだ。あと翔。遠慮せず、亮さんを応援してくれていいからな」
心配そうにしている翔と相変わらずの万丈目にもいつも通り返す。
「しかし、思ったよりメタでもなかったじゃねえか」

「ああ、それはきっと……」
「メタのメタ張られてるってわかってるのにそのまま使うわけないじゃん」
剣士の疑問に答えようとした時に、横からさだめ本人が答えを明かした。
「さだめさん？」
「何そんなに驚いてるのアテナ」
「いえ、さだめさんがいつになく普通に登場したので……」
「平和でいいじゃないか」
「最初はお兄ちゃんの股の下から顔を出そうとしたんだけど……」
やめれ。
「まあ偶には普通に出ても良いかなって。ギャップ萌えを狙ってみた」
「戸惑っただけみたいだけど……」
「うん。やっぱり変態チックな方がお兄ちゃんの受けもいいみたいだね」
「さも俺が変態のように言うのはやめろ」
ったくコイツは……。
「まあいいや。アテナ、サイド貸してくれ」
「はい。これですね？」
「サンキュ。えーとこれをこうして……」
さだめ用に調整したデッキを亮さん用に調整し直す。
「お兄ちゃん、気負ってない？」
「？……ああ。俺はいつでも俺だよ」
多分、原作の十代みたいなことにならないか心配してくれているんだろう……ん？　原作の十代って……どうなったんだったか。
「どうしんたんですか？」
「あ……いや、なんでもない。俺は元々バリバリの頭脳派、研究派だからな。これでいつも通りだよ」
「まあさだめとやってた時も大丈夫そうだったし、心配ないかな」

「よしっ……と。これでいいかな。希冴姫」
「はい。セツ様」
「次も頼む。一応、軸はお前たちだから」
「いつ何時も、わたくしたちはセツ様のために動くことに躊躇いはありませんわ」
「ああ。頼りにしてるよ」
さて……休憩時間もあと少しだな……。
「セツ……」
「どうした、アテナ」
「勝て、ますか？　また来年も、セツと一緒に勉強できますか？」
アテナ……。
「……相手はアカデミアのナンバーワンデュエリスト。カイザー亮。勝てる、と断言するには、余りにも強すぎる相手だ」
引きの強さ。戦略の緻密さ。冷静に次の手を打つ戦術眼。どれをとってもナンバーワンの名を持つに相応しい。
「セツ君……」
けど……。
「負ける気は……ない！」
負けるつもりでデュエルするつもりなんてない。
「どうせならカイザーの名も、パーフェクトデュエリストの名も剥ぎ取ってやるつもりでやらせてもらう。そのつもりで俺は、亮さんの挑戦を受けたんだ」
「ま、負け戦と決まったわけじゃねぇ。勝機はどっかに転がってんだろ」
「そうですよ！　セツならきっとパーフェクトを超えられます！」
アテナたちの声援に後押しされ、俺は亮さんの待つデュエルステージへと登った。
「……もういいのか？　まだ休憩時間は残っているが？」
「あんまり休憩が長いと中弛みしちゃいますから。調整も終わったし、心強い声援も貰いましたしね」

折角さだめにも勝ち、調子は良好な状態だ。下手に間をおいて気分を途切れさせる必要もない。
「お前も、良い仲間を持ったな」
「ええ。最高ですよ」
本当に、最高の友人だ。
「さて、それじゃあ亮さん。アカデミア卒業の前に、経歴に泥をつけさせて貰いますね」
「面白い。俺も、お前をここで留年させてみるとしようか」
互いに軽口をたたき合い、デュエルディスクを構える。
「クロノス先生！　こっちはもう準備完了ですよ」
「マンマミーヤ!?　早いノ～ネ、まだ休憩時間中なノ～ネ！」
「まあまあ、いいではないですか。当人たちが大丈夫というのなら」
「鮫島校長……」
どっちかというと、自分が休憩したいだけだったっぽいクロノス教諭に、鮫島校長が助け船を出してくれる。
「ってことで、始めましょうか。亮さん」
「ああ。来い、セツ！」
「「デュエル！！」」
「先攻後攻は？」
「どちらでも」
「んじゃ、先攻貰います」
亮さんのデッキは後攻有利。そんなことは百も承知だが、正直俺のデッキが完全に先攻型のデッキだからな。相手に合わせるより、自分のやりやすいようにさせてもらう。
「俺のターン！　ドロー！　俺は手札から装備魔法『未来融合―フューチャー・フュージョン』を発動！　デッキから『切り札の騎士―クィーン』『切り札の騎士―キング』『切り札の騎士―ジャック』の三体を墓地に送り、融合デッキから『アルカナ　ナイトジョーカー』を攻撃表示で融合召喚！　カードを二枚セット。ターンエンド！」

『アルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ３８００
会場がザワつく。一ターン目からの『アルカナ　ナイトジョーカー』。それも手札の使用枚数はたったの一枚。
「……やるなセツ。お前も、前以上にアルカナを使いこなしている」
「この一年、色んなことがありましたから。騎士たちとの絆は、どこまでも強く深く結ばれていますよ」
「そうか。では、俺も手を抜いては居られないな。俺のターン！ドロー！」
亮さんの手札に、すでに『サイバー・ドラゴン』はあるのだろうか。現実的に考えればあるはずがないが……相手はカイザー亮。どんな手で来ても不思議ではない。
「俺は魔法カード『融合』を発動！　手札の『サイバー・ドラゴン』三体を墓地に送り、来い『サイバー・エンド・ドラゴン』！」
『サイバー・エンド・ドラゴン』ＡＴＫ４０００
「っ！」
ホントに居やがった！
「行くぞセツ！『サイバー・エンド・ドラゴン』で、『アルカナナイトジョーカー』を攻撃！『エターナル・エヴォリューション・バースト』！」
「アルカナ！　ぐあああっ！？」
セツＬＰ３８００
アルカナがあっさりと倒される。相変わらずの火力。だが！
「リバースカードオープン！『アルカナソード　クローバー』の効果を発動！　自分フィールド上の『アルカナ　ナイトジョーカー』か、切り札の騎士と名のついたモンスターが破壊され、墓地に送られた時、破壊されたモンスター以外の該当モンスターを墓地から特殊召喚してこのカードを装備する！　戻って来い！　希冴姫！」
『わたくしたちの結束は破れません！』
「『アルカナソード　クローバー』が装備されたモンスターの攻撃力は７００ポイントアップする！　その代わり、このカードが破壊

された時、装備モンスターも破壊されるんですけどね」
『切り札の騎士―クィーン』ＡＴＫ１５００→２２００
「エースモンスターが倒されても次に繋げるか……」
「当然！　負けても次に勝てばいい！　諦めたらそこで試合終了ですよ！」
「フ……俺はカードを一枚セット。ターンを終了する」
「俺のターン！　ドロー！」
手札を確認する。手札は四枚。ここから勝利に繋がるタクティクスを組み上げる！
「手札から魔法カード『死者蘇生』を発動！」
「アルカナか……」
「いいえ！　俺が蘇生するのは『切り札の騎士―キング』！　戻って来いキング！」
『ほ。年寄り遣いが荒いのぅ』
『切り札の騎士―キング』ＡＴＫ１６００
「キングの効果により、デッキから『切り札の騎士―ジャック』を特殊召喚！」
『切り札の騎士―ジャック』ＡＴＫ１９００
「再び三銃士を揃えてきたか……」
「手札から魔法カード『融合』を発動！　フィールド上の三銃士を墓地に送り、もう一度力を貸してくれ！『アルカナ　ナイトジョーカー』！」
『はぁ！』
『アルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ３８００
「装備魔法『アルカナソード　ダイヤ』を『アルカナ　ナイトジョーカー』に装備！　攻撃力３００ポイントアップ！」
『アルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ４１００
「サイバー・エンドの攻撃力を上回ったか……！」
「バトルだ！　アルカナでサイバー・エンドを攻撃！『ジュエル・フラッシュ・ソード』！」

アルカナのもつ宝石剣が『サイバー・エンド・ドラゴン』を切り裂く。
「ぐぅ！」
亮ＬＰ３９００
「『アルカナソード　ダイヤ』の効果発動！　このカードを装備したモンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した時、俺はデッキからカードを一枚ドローする！」
「すぐさま手札補充……やはり、俺とお前はどこか似ている……」
「いいや違うよ亮さん！　あんたが完璧（パーフェクト）なら俺は……無敵（イージス）だ！」

「そしてさだめは自由（フリーダム）！」
「え、運命（ディスティニー）じゃないんですか？」
「……さだめちゃんは自由（フリーダム）でいいんじゃないかな～？　やりたい放題だし」
「つか、セツも含めてお前らこんな時にネタに走ってんじゃねえよ……」
「その辺りがお兄ちゃんの凄いところだよ」
「気負うことなくいつでも自然にネタを絡ませてきますからね」
「……それは、いいことなのか？」

「面白い。ならお前の無敵のタクティクス、見せてもらおうか！」
「望むところ！　カードを一枚セットしてターンエンド！」
「俺のターン！　ドロー！　俺は永続魔法『命削りの宝札』を発動！　デッキから手札が五枚になるようにドローする！」
手札補充……初手から揃い過ぎてるとすぐに手札が尽きる。その場合やキーカードを手札に加えるための手札補充カードはコンボデ

ッキではほぼ必須。
「魔法カード『パワー・ボンド』を発動！」
「っやば……」
今の俺に『パワー・ボンド』をカウンターできるカードはない。
しかし、亮さんだって『パワー・ボンド』で素材にできるモンスターは……あのカードか！
「手札から『サイバネティック・フュージョン・サポート』を発動！　ライフを半分支払い、このカードを機械族融合モンスターの融合素材の代わりとすることができる！」
亮ＬＰ１９５０
まさかこんな序盤に高コストのそのカードを使ってくるとは……。決めに来るつもりか！？
「真のサイバー・エンドを見せてやろう……『サイバー・エンド・ドラゴン』！」
『サイバー・エンド・ドラゴン』ＡＴＫ８０００
攻撃力８０００の貫通効果持ちモンスター。やはり、圧巻だ。
「これで終わりだ！『サイバー・エンド・ドラゴン』で『アルカナナイトジョーカー』を攻撃！『エターナル・エヴォリューション・バースト』！」
「まだだ！　リバースカードオープン！『ガード・ブロック』！
戦闘ダメージを無効にし、デッキからカードを一枚ドローする！」
「だが、アルカナには消えてもらう！」
アルカナが、サイバー・エンドの放つ熱線に焼き尽くされる。
「『アルカナソード　ダイヤ』の効果発動！　装備モンスターが戦闘によって破壊された場合、デッキからカードを一枚ドローする！」
「更にドロー加速か……俺は『サイバー・ジラフ』を攻撃表示で召喚！　このカードをリリースして効果発動！　このターン終了まで戦闘以外によるダメージを無効化する！」
「そう来ると思ってましたよ！　カウンタートラップ発動！『天罰』！　手札から『冥幼竜ヴァーミリオン』を捨てて効果発動！　効果

モンスターの効果を無効化して破壊する！」
「何っ！？」
「まだです！　効果モンスターの効果をカウンターしたことによって手札の『冥王竜ヴァンダルギオン』第三の効果が起動！　このカードを特殊召喚し、墓地に存在するモンスターを一体特殊召喚する！　今再び蘇れ！『アルカナ　ナイトジョーカー』！」
『冥王竜ヴァンダルギオン』ＡＴＫ２８００
『アルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ３８００
「セツのデッキ、エースの揃い踏みか……」
「それだけじゃない。『サイバー・ジラフ』の効果を無効にしたことで、亮さんには『パワー・ボンド』のデメリット効果、融合召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受けてもらいます！」
これが通れば勝ちだ！
「……そう簡単に俺が負けると思うか？　俺はカウンタートラップ『ダメージ・ポラリライザー』を発動！　このターンカードの効果によるダメージをゼロにする！」
やっぱり、そう簡単には行かないな。
「『ダメージ・ポラリライザー』の効果で、お互いにカードを一枚ドローする！　カードをドロー！」
「俺も、カードをドロー！」
「俺はカードを二枚セットし、ターンを終了する」

「……すごい」
「お互い、超重量級の融合モンスターを自由自在に操ってる」
「……フィールド上のモンスターの平均攻撃力がどうかしてるぜ」
「ヴァンダルギオンの２８００が最低ですか……」
「けど、未だカイザー亮さんのフィールドには攻撃力８０００の『サイバー・エンド・ドラゴン』だよ……セツ君、大丈夫かな」

「大丈夫です。セツの手札はありますし、何よりセツの眼は死んでません！」
「ありゃ、完全に勝つ気満々って顔だな。突破口を見つけたか……ただ油断してるだけか」
突破口であればいい。だがそれがもし油断であるのなら……。
「……いや、あいつに限ってそりゃねえか」
基本的に慎重すぎるくらいのプレイングをすることが多いセツだ。この大事な一戦で、油断などする男ではない。

「俺のターン、ドロー！」
手札は三枚。更に……。
「墓地の『冥幼竜ヴァーミリオン』の効果発動！　このカードがカウンター罠の効果によって墓地に置かれている場合、スタンバイフェイズ時に手札に戻す！」
『きゃうー！』
墓地から戻ってきたヴァーミリオンが俺に纏わりついてくる。
……ええい鬱陶しい！

「ミーちゃんです！　可愛いです！」
「ミーちゃんって……あのヴァーミリオンのこと？」
「はい！　ミーちゃんです！」
「略すなら普通リオンとかじゃない？　ほら、そっちのほうがかっこいいよ」
「ミーちゃんは可愛いんです！」
「わたしはミリーちゃん、っていうのもいいと思うなぁ～」
「あ、それも可愛いです！」

「ヴァーミリオンってオスなんじゃない？　息子でしょ？」
「可愛さに性別は関係ありません！」
「ダメだ……こいつらと一緒に見てると緊張感がまるでねえ」

「更に魔法カード『貪欲な壺』の効果を発動！　墓地の『切り札の騎士―クィーン』『切り札の騎士―キング』『切り札の騎士―ジャック』を二枚と『アルカナ　ナイトジョーカー』一枚をデッキに戻してシャッフル。デッキからカードを二枚ドローする！」
　これで手札は五枚！
「まだだ！　更に魔法カード『強欲な壺』！　カードを二枚ドローする！」
　六枚！　仕掛ける！
「亮さん、このターンで決着をつけます！」
「！　馬鹿な……この俺相手にワンターンで決着をつけるつもりか！」
「速攻魔法『トラップ・ブースター』！　手札を一枚捨てることで、手札からトラップカードを発動させることができる！　俺は『切り札の騎士―テンス』を墓地に送る！」
『勝て……セツ！』
　すまんテンス。お前のことも、またコストに使ってしまう……。
『俺のことは気にするな。お前は……勝利を見据えて進め！』
　ああ！　必ず勝つ！
「バトルフェイズ！『アルカナ　ナイトジョーカー』で『サイバー・エンド・ドラゴン』を攻撃！『ロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」
「馬鹿な。サイバー・エンドの攻撃力は８０００！　お前のアルカナでも遠く及ばないぞ！」
「わかってますよ。速攻魔法『決闘融合―バトル・フュージョン』

！『サイバー・エンド・ドラゴン』の攻撃力をアルカナに加える！」
アルカナの攻撃力が増大し、１１８００まで上がる。
「まだ甘い！　こちらも速攻魔法『リミッター解除』！」
そしてその上を行く『サイバー・エンド・ドラゴン』の攻撃力は１６０００。力が更に漲る。
「そのくらい、予想してないわけがないでしょう！　俺は手札から『オネスト』の効果を発動！　更に攻撃力を上げる！」
『オネスト』の効果はダメージステップの発動！『決闘融合―バトル・フュージョン』などではチェーン出来ない！　背に熾天使の翼を生やしたアルカナの剣が輝きを帯びる。攻撃力２７８００。
「やるな……だが、俺の『サイバー・エンド・ドラゴン』も光属性だということを忘れたか！？『オネスト』！」
「っ！」
サイバー・エンドの背にも翼。攻撃力４３８００。
「俺の……勝ちだ！　セツ！」
「……俺が、何故態々『トラップ・ブースター』を使ったと思います？」
「……なに？」
「手札からカウンター罠『天罰』を発動！　手札から『冥幼竜ヴァーミリオン』を墓地に捨てて亮さんの『オネスト』の効果を無効化します！」
『きゅ！』
ヴァーミリオンがその身を光に変え、『サイバー・エンド・ドラゴン』の翼を消し去る。
「……俺を、完璧（パーフェクト）を超えるか……！」
「貴方はまだ、限界（パーフェクト）なんかじゃない！　俺も……貴方も、もっと高みへ行ける筈だ！　勝手に限界を決めるな！　カイザー！」
「セツ……」
「それは驕りだ！　どんなに強くなったって、限界（パーフェクト）なんかには至らない！　誰が何と言おうとも、あんたも俺もまだまだ発展途上なん

だ！」
「フ……そうか。そうかも……しれないな」
「行け！『アルカナ　ナイトジョーカー』！　その剣を以て『サイバー・エンド・ドラゴン』と共に……亮さんの未来も切り開いてやれ！『熾天使の剣』！」
『はぁぁあっ！』
「ぐおおおおおおおおっ！？」
亮ＬＰ０
「ポカーン……なノ～ネ」
「まさか……カイザーに勝ってしまうとは……」
クロノス先生や校長先生が呆然と呟いています。
正直、私たちも同じ気持ちです。セツならきっと勝ってくれる。
そう信じてはいましたが……それでも、実際に、本当に勝ってしまうと驚きが隠せません。
「……やりやがった」
「うわ……え、いいのこれ？　お兄ちゃん……」
さだめさんは何か別の方向で戸惑っているような雰囲気を感じます。
「セツ君……すごいよ～！」
加藤さんがパチパチと拍手するのを皮切りに、会場の歓声が爆発しました。
「すっげー！　セツの奴、あのカイザーに勝っちまった！」
「これは……凄まじいデュエルだったわ」
「いやはや……どうやらセツ君を侮っていたかな？」
「馬鹿な！？　くぅ、この万丈目サンダー様を差し置いて先にカイザーに黒星をつけるとは……」
「最後の最後、ダメージ計算時であってもカウンター罠は発動可能

というところを見事に活用した素晴らしいコンボだった。カイザーのタクティクスと併せて、非常に参考になるデュエルだったな」

「お兄さん、大丈夫かな……？」

翔さんが負けてしまったお兄さんを心配しています。確かにすごいデュエルでしたし、心配になる気持ちもわかります。とりあえず私たちはみんなでセツたちの方へと向かうことにしました。

「……亮さん」

「……俺がお前とのデュエルを望んだのは、お前が十代とは逆で、俺と完全に同じタイプのデュエリストだったからだ」

俺も亮さんも、タクティクスを重視し、相手の出方を見つつどんな状況にも対応できるようにデッキを組むタイプのデュエリストだ。

「だからこそ、十代とは別の意味で、お前ともデュエルがしたかった。純粋に、お互いどちらが上かを見たかった。……もしかしたら、こうして俺の限界（パーフェクト）を否定して欲しかったのかもしれないな」

「……俺も、まだまだ未熟です。今回勝てたのだって、幸運が大きく作用していることを否定できません。次やれば、手も足も出ずに負けてしまうかもしれませんし、逆に圧勝出来るかもしれません。運の要素が強く絡んで、毎回どうなるかわからないから……デュエルって楽しいんですよ」

「……そうだな。俺とお前は似ているが……やはり違うようだ。どこまでもタクティクスに固執してるかと思えば、最後には運に頼るような暴挙にも出る。俺には出来ないデュエルだ」

「できますよ。それに、俺は中途半端なだけです。どうしようもなくなったら神様に祈ることしかできない、半端者です」

「だが、お前はこうして勝利を掴んだ。それが結果だ」

「結果なんか後から勝手についてくるんです。デュエル中はただ楽しめばいい」

「……お前に負けることができて、良かったよ」
「光栄です」
今度デュエルする十代には気の毒だが、亮さんはこれでまた強くなってくれるだろう。願わくば……プロになってからも、負けることを怖がらないで欲しい。
「……しかし、お前たち兄妹には負け通しになってしまったな」
「へ？　兄妹？」
「聞いていないのか？　俺は以前の三幻魔事件の折、お前の妹に為す術なく敗れている。メタデッキではあったが……負けは負けだ」
あ、あー……そう言えばそんなことになってたんだっけ……。あいつはまったく……。
「ともかく、こうして見事に俺たちを打ち破ったんだ。お前は文句なしで進級できるだろう」
「あ……そう言えばこれ、進級試験でしたっけ」
「……忘れていたのか？」
亮さんの呆れたような視線が痛い。
「いや、俺って何かに集中してると他のこと忘れちゃうみたいで……」
デュエルに集中し過ぎてそんな大事なことをすっぱり忘れていた。
「まったく……器用なようで不器用な奴だ」
「はは……さだめからもよく言われます」
俺たちの間で笑いが漏れる。こちらに駆け寄ってくるアテナたちに手を振って、俺はなんとか進級への切符を手にすることができたことを喜ぶのだった。

第二期第十七話「進級試験～カイザー亮～」（後書き）

こんにちは。

以前のあとがきにもありましたが、今回も補足。セツが使った未来融合はアニメ効果です。装備カードで、即時融合が出来る代わりに、融合ターンに攻撃ができない効果になります。あと、最後のオネスト↓天罰の効果ですが、セツのオネストはダメージステップの発動で、そのオネストにはチェーンせず、その後ダメージ計算時にカイザーが改めてオネスト起動。セツはそのオネストを天罰で跳ね返しています。

それでは、悠でした！

特別編「さだめデッキレシピ2」（前書き）

中身は以前と変わっていませんが、順番がおかしいとの指摘を受けたので入れ替えです。

特別編「さだめデッキレシピ2」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「さだめデッキレシピ2」

「なぜこのタイミングで……」
息抜きです。
「そしてなぜお兄ちゃん居ないし……」
前回やり過ぎたんじゃないですか？　大分お疲れでしたよ。
「お兄ちゃんはあれくらいでヘコたれないもん！」
色々あって疲れてるんですよ。そっとしておいてあげてください。
代わりも呼んでおきました。
「お兄ちゃんの代わりがいるとでも？」
……偶には譲歩してください。
「だが断る！」
では代わりのアテナさんです。
「無視された……」
「えと、セツの代理のアテナです。さだめさん、あまり気を落とさな……いえ、気を静めてください！」
「ぅぅぅう～！」
「デッキレシピ！　デッキレシピに行きましょう！　とりあえずごり押しでも進めておいた方が良さそうです！」
・上級モンスター
『ダーク・アームド・ドラゴン』×1

『ダーク・ホルス・ドラゴン』×1
『ダーク・クリエイター』×1
『ダーク・ネフティス』×1
『人造人間サイコショッカー』×2
『闇より出でし絶望』×1
『冥府の使者ゴーズ』×1
計8枚
「比較的多いんですね」
「その辺ちょっとアテナと似てるんだよね。さだめはアテナと真逆の闇属性主体のダークデッキだけど、モンスター比率が高い辺りは似てるよ」
「一応作者さん曰く私とは真逆の存在みたいな立ち位置で作ってたみたいですからね」
「最近怪しいけどね」
・下級モンスター
『キラートマト』×3
『終末の騎士』×3
『ダーク・グレファー』×1
『ジャイアントウイルス』×3
『速攻の黒い忍者』×1
『ファントム・オブ・カオス』×3
『死霊騎士デスカリバー・ナイト』×3
『ネクロフェイス』×2
『闇王プロメティス』×2
『終焉の精霊』×1
計22枚
「『終焉の精霊』……さだめさん、まだ入れてるんですね」
「……抜こう、って思ったことは一度や二度じゃないんだけどね。でもやっぱり、さだめのデッキには有用な効果だし、もう邪悪な精霊が宿っているわけでもないから」

モンスター総計３０枚
・魔法カード
『闇の誘惑』×１
『漆黒のトバリ』×２
『おろかな埋葬』×２
『トレード・イン』×２
『死者蘇生』×１
『Ｄ・Ｄ・Ｒ』×２
『終わりの始まり』×１
『強欲な壺』×１
計１２枚
「ドローカードと帰還カードですね」
「うん。墓地の枚数調整とかも含めてね」
「もしかして、罠カードは少なめですか？」
「アテナと同じでね」
「……そう言われればそうですね」
・罠カード
『闇次元の解放』×２
『リビングデットの呼び声』×１
『王宮のお触れ』×２
計五枚
デッキ総数４７枚。
「さだめ的には『速攻の黒い忍者』は抜いても良かったかなぁ～って思ってるんだけどね」
「そうですね。でも、あまりデッキ枚数を減らすと……」
「そう。『ネクロフェイス』で自分が先にデッキが尽きたりしかねないのが怖いんだよね～」
「重要な下級モンスターは……『ファントム・オブ・カオス』ですか？」
「そうだね。もし『ダーク・アームド・ドラゴン』が腐ったりして、

墓地に捨てた時とかにコピーして効果を使ったりもできるから。後は『闇王プロメティス』」
「墓地の枚数調整兼ビートの主力ですね」
「出来るだけワンキル狙いで使いたいな。元々の攻撃力は１２００しかないし」
「墓地の闇属性を三枚まで減らして『ダーク・アームド・ドラゴン』が一般的なダムドビートと言われるデッキですね」
「そ。他には……そうだね。デスカリバーナイトも居るからサイコショッカーと出せば結構強力なロックになるかな」
「魔法カードには対応していないのが穴になりますけどね」
「うん。一応『ダーク・ホルス・ドラゴン』はいるけど、あんまり抑制にもならないかな。活用できたことも少ないし」
「罠対策の『王宮のお触れ』とサイコショッカーですけど、さだめさんのデッキに入っている他の罠は……」
「うん。どちらも帰還用。サイコショッカーに使えば完全蘇生に繋がるし、これらのカードで帰還させた上で『王宮のお触れ』を使えばやっぱり完全蘇生だよ」
「結構サイコショッカー中心でもあるんですね」
「まあやっぱり強いからね。罠が使えなくなるのは。今回は負けちゃったけど、お兄ちゃんみたいなパーミッションデッキには致命的だし」
「そして『終焉の精霊』ですか……」
「……たくさん闇属性を除外してる場合は戦力になるし、やられたらまた色んなコンボに転用できるから、すごく使えるカードだよ」
「気分的にはあまり良くないですけど……」
「……いつまでも引きずってても仕方ないよ」
「さだめさん……」
「お兄ちゃんをずっと苦しめてたさだめはもういない。……まあ、いまでも迷惑はかけ通しだけどさ。それでも、ずっとお兄ちゃんは傍にいてくれるから」

「ちょっと羨ましいです」
「それ、さだめはアテナにだけは言われたくないなー。どれだけ自分がおいしい思いをしてるか理解してる？」
「う……はい」
「本音を言えば今ここで八つ裂きにしてしまいたいくらいには精神が昂っているさだめが居ます」
「……逃げてもいいですか？」
「逃げるならとりあえずさだめの理性が残っている内に。お兄ちゃんを連れて来てくれるとモアベター」
「い、今すぐ連れてきます！」
アテナフェードアウト。さだめが邪気眼症状っぽく呻いている間にセツ到着。
「……で、俺は何のために呼ばれたんだ？　もう大体デッキレシピ紹介は終わってるんだろ？」
「とりあえず、さだめの行き場のない情欲とか諸々を発散させるために」
「さらばだ」
「１％冗談だから待って」
「九割九分本気じゃねえか！」
「その１％に賭けてみようよ！」
「分が悪すぎる！　それで賭けられるギャンブラーは自殺志願者かただのアホだ！」
「大丈夫！　お兄ちゃんは気持ち良くなるだけだから！　痛いのはさだめだけ！」
「黙れ人型モラルハザード！」
「……ふぅ、大分落ち着いた」
「漫才したら紛れるのか。どっちにしても疲れる奴だ」
「どっち道疲れるんなら気持ちの良い倦怠感の残る方を選択しようよ」
「その結果妹に一生憑かれることになるのはごめんだ」

「お兄ちゃんのイケズ」
「久しぶりに聞いたなイケズとか」
「ところでお兄ちゃんはさだめのデッキになにかコメントはある？」
「ん～……ホントはきっとＤ・ＨＥＲＯとかＥ－ＨＥＲＯも入れるといいのかもな」
「まあ、こっちの世界じゃそれは厳しいよ」
「だな……といいたいが、すでに『混沌帝龍―終焉の使者―』とか手に入れてるやつが無理とか言ってもな」
「混沌帝龍はそこまでおかしくもないよきっと。ほら、双六おじいさんのショップにもあったみたいだし」
「ああ……そういやそうか。いや、でもやっぱり普通は持ってないって」
「これが、お金の力だよ！」
「買ったんだ……大金出して公式で使えないカード買ったんだ……」
「コレクション的にもあの二枚は持っていたいという気持ちが強くてね～」
「ああ、確かにそれはわかるかもしれん。俺もレアカードは使えなくても持っていたいと思う時あるし」
「ファンデッキとかも作ったりねー」
「……お前のファンデッキはただただ恐怖だったよ」
「主力は『振り子刃の拷問機械』。他にも『万力魔神バイサー・デス』や『バイサー・ショック』、『拷問車輪』に『悪夢の拷問部屋』……あの拷問デッキは楽しかったな～」
「……やめてくれ。なまじロック・バーンとしてはそこそこ機能している辺りシャレにならん」
「『悪夢の鉄檻』も使ってたしね」
「現実で使われても嫌だったんだ。ソリッドビジョンまであるこっちの世界でやられたらトラウマになる」
「闇マリクさんのデッキは個人的に好き」
「最悪だな……」

「『悪夢の鉄檻』と『悪夢の拷問部屋』。そこに『拷問車輪』と『溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム』を組み合わせた時はもう興奮が止まらなかったよ」

「城之内さんの悲劇を繰り返そうとすんな！　闇のゲームでならホントにああなるんだからな！」

「……お兄ちゃんちょっとやってみようか」

「俺は逃げる！　逃げるからな！」

「あっ！　ちょっとお兄ちゃん！？……お兄ちゃんが逃げちゃって相方が誰もいなくなっちゃったのでこの辺りで終わりにするよ。待ってーお兄ちゃーん！」

特別編「さだめデッキレシピ2」（後書き）

今になって改めて見直すと、ちょこちょこ変えたくなりますね…。というか、構築甘い……。スナイプストーカーとか入れようぜ悠……。ホルス要らねえだろ悠……。ウイルスもいらねえ。デスカリバーナイトも邪魔になりそうだし……。封印の黄金櫃入ってないし。まあ、ダメなところがわかるだけ成長したということにしておきましょう。

それでは、悠でした！

第二期第十八話「楽しかったんだ……」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第十八話「楽しかったんだ……」

「ここ、か……」

冥界。生者に生無く、亡者にこそ真の生が存在する精霊界の魔境。

そこに足を踏み入れたものが生きたまま現世に戻ることはできぬと言われるその地に、一柱の精霊が訪れていた。

「……行くか」

その精霊は揺るぎない足取りで王座へと赴く。……ショートカットの銀髪を冥界の風に揺らしながら。

「ったく、定例報告ってまだ一週間程度しか経っちゃいねェだろうが。我らが盟主はどこまで親馬鹿なンだよ」

「ゴ、ゴーズ様。盟主様に向かってそのような口は……後で怒られるの私なんですからね！？」

「あァ？　なンでテメエがどやされンだよ」

「ゴーズ様が常にそんな態度だからですよぅ！　あいつにいくら言っても聞かないからお前がしっかり監督せんかーって怒られるんですぅ！」

「そりゃゴクローなこったな。せいぜいこれからも怒られてくれや」

「ゴーズ様ぁ！」
　カイエンはもう完全に涙目だ。シャルナとの折衝などの仕事も含め、毎日必死に仕事をしているのに報われた試しがない。
「はぅ……今日もいつぶりかのオフだったんですよ……？　もし許されるならセツ様にお話を聞かせてもらいたかったのに……」
「一応言っとくがよ。あいつはやめとけ。世界報われない女ランキングダントツ一位のお前なンかじゃあの競争率を勝ち残れねェよ」
「わ、私はそんなつもりじゃありません！　人間界の話とか、普通の生活の話をお聞きしたいだけで……」
「尚更やめとけ。あいつの日常が世間一般の日常だと勘違いしたら益々テメエの浮世離れが進行しちまう」
　むしろ非日常を日常として生きているようなセツだ。常識感覚が完全に麻痺していると言っても良い。
「うぅぅ……こないだは折角の初デュエルだったのに出て早々切り倒されて出番終わってしまうし……どうしてこんなに理不尽なんですかぁ！」
「テメエがトークンだからじゃね？」
「はぅ！？」
　トークンとは、明確なカード＝寄り代を持たず、精霊としての力も弱いものたちのことだ。カイエンの場合、ゴーズが誕生した時に副産物のような形で生まれたので、ある意味二人は双子の兄妹とも言える。
　ゴーズの精霊としての力はかなり強いが、カイエンの場合は非常に不安定で時にはゴーズ以上の力を発揮することすらあるが、普段は力も弱く、あまり実力を発揮できない場合が多い。
「ま、テメエは精霊界で気張れやってこったな」
「私は人間界に行きたいんです！　というか是非とも精霊界に週休二日制を導入したいです！　私にはオフが少なすぎます！」
「オレに言ってもどーしようもねェだろォよ」
「せめて、せめて有給休暇くらいくださいよぅ～」

「だからオレに言うなっての」
こんなカイエンでも仕事自体は優秀だった。尤もそれこそがカイエンにとっての不幸なのかもしれないが。
「オラ、そろそろ御前だろが」
「はぅ。すみません……」
冥王の間。即ち冥界の盟主であるヴァンダルギオンが常駐している部屋を前に、二柱の精霊は姿勢を正した。
「冥王様。我ら冥府の使者二名、人間界より帰還し、定例報告を「ちーっす。報告に来たぞヴァンダルのオッサン！」ってちょっとゴーズ様！？」
何のために姿勢を正したんだかわからない傲岸不遜なゴーズの口調に慌てて制止しようとするカイエンだが、すでに放たれてしまった言葉を取り消すことはできない。
『……入れ馬鹿共』
「はぅぅ……また、また怒られますぅ……」
さめざめと涙を流すカイエンを無視して扉を蹴破りつつゴーズが冥王の間にズカズカと踏み入って行く。その様子に目上に対する尊敬や畏怖のようなものは何も感じられない。
「つーかたかだか一週間ちょっとで一々呼び戻してんじゃねェよ親馬鹿竜」
「ご～ずさまぁ～……」
最早止めることもできず、散々叱られるであろう己が不運を目の幅涙で受け入れることにしたらしいカイエンを尻目にゴーズは報告を始めた。
「ンで、報告報告っと。ふぁ……チビ竜の奴は元気一杯。くるくるちょこちょこと、御堂兄妹の周りをウロチョロしてンよ。目ェ離しても、とりあえずそこにいるから楽でいいやね」
欠伸交じりにそう報告するゴーズに、ヴァンダルギオンは冷ややかな目を向ける。
『……そもそも目を離すな馬鹿者め。まあ、元気そうで何よりだが』

「大体たかが一週間でどうにかなるわきゃねェだろ。チビでも時期冥王竜だぜ？　人間界みてェに温い世界で万一どうにかなったらその方が可笑しいぜ」
「いいなぁ～温い世界に行きたいですぅ～……」
『……貴様らは……』
超強気なゴーズと超弱気なカイエン。双子のようなモノの癖に性格正反対な使者二人にヴァンダルギオンも対応を持て余しているようだった。
『む……』
「あン？」
「へ？　どうしたんですか？」
ふいに表情を険しくするゴーズとヴァンダルギオンにカイエンがきょとんとした様子で尋ねる。
「相変わらず鈍臭ェなテメエは。侵入者だよ」
『しかし、随分と静かな足取りだ。どちらかと言えば、訪問者だろうな』
「コンなところにアポなしの訪問者だァ？　侵入者の方がまだ信憑性あるぜ」
気配が近付き、念のため武器を構えるゴーズとカイエン。冥王の間に繋がる門がノックされた。
『何者ぞ』
ギギギギと門が重たい音を立てて開いて行く。その先にはふらつく足を必死に真っ直ぐ立て、真っ青な顔色をしつつも強い意志を感じさせる眼をした一人の騎士。
「我は切り札の騎士（トランプ・ナイト）が一人、エース！　この度は冥王竜殿に、尋ねたいことがあって参った！」
今にも倒れそうな風貌で、それでもエースははっきりとした声で名乗った。
「へェ。セツの親衛隊じゃねェかよ。今日は一人でどうしたよ」
「……我はまだ、奴の軍門に下った覚えはない。あのクレイジー共

と同列に並べるな」
　不機嫌そうな顔を隠そうともせずに吐き捨てるエース。
「それで、そのエースさんがどのようなご用件で……？」
「冥王竜殿に尋ねたいことがあると先に申した筈だ。同じことを二度も言わせるな間抜けめが」
「はぅ！？」
　ふらついていても、その凍えるような眼光は変わらぬままにカイエンを貫く。
「つーかテメエ、端からボロボロじゃねェか。今に死ぬぜ？」
「……心配いらぬ。この程度で倒れるほど、柔な鍛え方はしていない。下がれ下郎。我は貴様に用などない」
「……あ？」
　エースの歯に衣を着せない物言いにカチンと来たゴーズが表情を険しくする。
「テメエ……雑魚の風情が調子乗ってンじゃねェぞ。何様だテメエ」
「力だけのチンピラが粋がるな。この程度の挑発に乗るから下郎だと知れ」
「テメ……」
『よせ。ゴーズ。エースとやらも口が過ぎるぞ。貴様は招かれざる客だと、まさかわからぬわけでもあるまい』
「……チッ」
「……申し訳ありませんでした。以後、気をつけます」
『よい。して、貴様の尋ねたいこととは何ぞ？』
「……冥王竜殿の、御子についてです」
『……我が子が何か？』
　たった今報告途中だったヴァーミリオンの話題と聞き、表情を引き締めるヴァンダルギオン。エースは続ける。
「何故、人間界に預けるような真似を？　デュエルの精霊として赴けば、色々と辛い目にも遭いましょう。我が子をそのようなところに送る真意をお聞かせ願いたい」

『何かと思えば……そんなことか』
「そんなこと？　貴殿は御自らの後継の事をどうお考えか！？　デュエルの精霊などとは、死に臨むようなもの！　態々大切な御子をそのような……」
『貴様こそ、一体何を馬鹿なことを言っている？　我らは元よりデュエルモンスターズの精霊。デュエルにおける死など、我らにとっては役割の一つに過ぎぬ』
「役割……？　何度となく使い捨てられ、滅びを常に隣人とすることが、我らの役割だとでも申すのか！？」
『いかにも。我らにとっての墓地とは、一時の休憩所であり控室のようなもの。我らの中には死してこそその本質を扱えるものとていよう。我が子も、そしてエース。貴様とてその一人ではないのか？』
「それは……しかし！　だからと言って死をよしとするのは間違っている！　我らにだって、死を恐れる権利があるはずだ！」
「なァ……オレにゃよくわかんねェんだがよ。墓地に送られることのどこが怖ェンだ？」
「……なに？」
「墓地に行ったところで別に痛くも痒くもねェ。そりゃ墓地の見た目は不気味かもしれねェが、そこまで怖がるもンでもねェだろ」
「馬鹿な！？　貴様にはわからんのか！？　自身を喪失する恐怖、墓地に送られる時の痛みと苦痛！　いつ終わりが訪れるかもしれぬ絶望が！」
　思い出すだけで足が竦み、体が震える。あの恐怖を、ゴーズは何でもないことのように言う。
「……わかンねェよ。オレたちにとって墓地だの死後の世界だのは日常なンだ。テメエもここに来たのならわかンだろ。この冥界は、死を貴しとするような風潮すらあンだ。ここでテメエの望む答えは得られねェよ」
「くっ……どいつも、こいつも……」
　クレイジーだ……とエースは苦しげに呻く。

「わ、私には墓地に送られるという概念がありませんので、やはりエースさんの望む答えはあげられそうにありません。すみません……」

カイエンはトークン。墓地に送られることはない故に、彼女は死を知らない。或いはエースと最も遠い位置に在るのがカイエンだった。

「……教えてくれ。どうすれば、死の恐怖を克服できる？　どうすれば、貴様らのように死を受け入れられる……？」

『……貴様は、我が駆り手の力となることを望むのか？』

「……奴の軍門に下る気など、更々ない。ない、が……知りたいのだ。クィーンが、キングが、ジャックが。テンスまでもが奴と共に在り、死を受け入れ、共に肩を並べて戦っている。何故、命を賭して戦うのか。クィーンは『愛するが故の献身、死への恍惚』とまで言っていた。……我には、我が同胞たちの心が見えぬ」

クィーンたちは、心からセツのための死を受け入れていた。

「……あいつらだってよォ。認めてもいねェ奴のために死を受け入れたりはしねェだろォさ。あれだろ？　敬愛すべき君主のために騎士は命を賭して戦うってやつだ」

「わからぬ……何故、奴に従う？　そこまで、奴は素晴らしい人間なのか？　いやそもそも、人間などに従う意味があるのか？　わからぬ。我にはわからぬ」

「エース様も、セツ様にはお会いしたんですよね？　その時、なんというかこう、魅力のようなものを感じませんでしたか？」

「……オイオイ」

「……知らぬ。我は奴と会った時はただお互い意地の張り合いからドッグファイトにもつれ込んだからな。そんなモノを感じている余裕はなかった」

「え、えっとそれは……か、可愛らしいところがあるんですね。セツ様」

「オイオイ」

苦しいながらもセツを擁護するカイエンに、ゴーズはやれやれと肩を竦める。
『……魅力云々はともかく、我が駆り手は主君としての力を示したのだろう？　自らを使うに値する存在とは思わなかったのか？』
「……我らのデュエルは結局流れたようなものだ。それに、我は人間に従う気はない」
相変わらず取り付く島のないエースに、ヴァンダルギオンはセツが自らの下に契約を望んでやって来た時のことを話し出した。
『……我も、初めはそうであった。我が駆り手がここに三銃士や破滅の女神を伴って現れた時も、初めは話にならぬと追い返そうとした』
「……あンときゃ、結局オレがデュエルすることになったンだったな」
「で、見事に負けちゃったんですよね」
「るせェ！　なンもしてねェテメエが言うな」
「ひゃぅ！？　す、すみません！」
『……我が駆り手は力を示した。そして、覚悟も。我が炎に一月もの間堪え切ることで』
「なん……だと？」
『我が炎は死を与える。我が駆り手はその炎に対し妹を助けたいという一心で一月の間耐え忍び、我に覚悟も示したのだ』
冥王竜の炎に一月。それがどれほどの苦痛か。ただでさえこの冥界に来るだけで相当な生命力の減衰を感じるというのにその上……。
「奴も……クレイジーか……！」
「オレは途中から暇になって寝てたンだがよ。まさかマジで堪え切るたァ夢にも思わなかったな」
「あの時のセツ様は……少し怖かったかもしれません。鬼気迫るというか……妹さんを助けるんだってずっと言い続けていました」
『我が炎は一種の幻炎。決して物理的に燃え尽きるようなものではないが……易々と耐えられるものでもない。我が駆り手は意志と願

い。口に出し続けた妹への想いを言霊とし、我が炎を打ち破った。
我が力を貸すとすれば、この者以外にあり得ぬとまで思ったほどだ』
「我は……」
僅かに迷うようなそぶりを見せたエースに、カイエンが恐る恐る尋ねる。
「エースさん……あの、もう一度だけ聞いていいですか？」
「……なんだ」
「エースさんがここに来た理由を……もう一度聞かせてもらってもいいですか？」
「なんだ……それはさっきも……」
言った筈だ。そう答える前にカイエンが言葉を選んで改めて尋ねる。
「いえ……私が聞きたいのは、盟主様に尋ねたいことがある、ということではなく……尋ねた結果、貴女は何を望んでいるのか。答えを聞き、そして何を為したいのか。最終的なエースさんの願いです」
「……」
カイエンの問いにエースは俯き、目を泳がせる。
「エースさん……貴女も本当は、セツ様にお力を貸したいのでは？共に肩を並べて……仲間の騎士たちと共に……」
「……ち、がう。我は……ただ……」
「力を貸したくて……一緒に戦いたくて、でも怖くて……どうすればいいか、セツ様の精霊である盟主様に相談に来た……そんな風に感じました」
「違う……違うんだ。我は……あいつに力など……貸すつもりは……」
「では……？」
「我は……ただ、もう一度だけ……」
「もう一度だけ？」
「奴との喧嘩が、したかっただけだ……」
「けんか……ですか？」

意外な答えにポカン、とするカイエン。
そんなカイエンに、エースは以前セツと初めて顔を合わせた時のことを思い出す。
「あいつとの喧嘩は……腹は立ったが、どこか愉快だった。楽しかったんだ……」
「エースさん……」
「だから……それでも……あんな別れ方……強く、強くならなきゃ……あいつと喧嘩もできそうにない……！」
「……ッケ。ズイブンとまァ入れこんでやがンなァ」
「そ、そういうことではない！　とにかく！　我は恐怖を克服したい！　そのためにどうすればいいか聞きたいだけだ！」
僅かに顔を赤くしながら自棄のように叫ぶエースをしばらく眺め、何事か考えていたヴァンダルギオンが結論を下す。
『……カイエン。相談に乗ってやるが良い』
「ふぁっ!?　わ、私ですか!?」
「そーだな。この貧乳と立ち位置も似てっから丁度いいだろ」
「き……さま……っ！　人を捕まえて貧乳扱いだと……!?　どいつもこいつも……！」
「で、でも私恐怖心がどうこうって一番わかりませんよ!?」
「報われない女代表でアドバイスしてやれ」
「む、報われないってなんですか!?　ひ、人を不幸の権化みたいに！」
そうは言うものの、自分でも否定できる要素がなくて落ち込むカイエン。
「いいから。オレたちにだってロクなこと言えねェしよ。だったら同性の方がナンボかマシだろォよ」
「そ、そんなことといわれても……」
完全に自分に丸投げするつもりらしいゴーズたちに、戸惑うカイエン。
「我からも頼む。我も、一人で考えたのだが……正直見当もつかぬ」

エースにまでそう懇願されて、カイエンは断り切れずに頷く。
「え、えっと……じゃあ……わ、わかりました！　不肖カイエン、エースさんとセツ様たちのために一肌脱がせていただきます！」
「うーしンじゃ後は任せンぜ。オレは人間界にでも戻るわ」
『うむ。ヴァーミリオンを頼んだぞ。ゴーズ』
「心配せンでもあのチビはどーせ御堂兄妹に纏わりついて元気だろォよ」
『万一のことがあろう！』
「へイへイ……」
「エースさん！　とりあえず一度冥界を回ってみましょう！　死に最も近いこの冥界で死に触れることで徐々に恐怖心を慣らしていく作戦です！」
「う、うむ……？　なんだか少々不安が残るが……我に異存はない」
雲行きは多少怪しいが、こうしてエースの更生計画が始動したのだった。

『それと、エースの更生が済むまでの間、カイエン。お主を休暇扱いとしておく』
「ええっ！？　わ、私の数少ないお休みが……お休みでなくなって……そ、そんなぁ～！」
……若干名の悲鳴と共に。

第二期第十八話「楽しかったんだ……」（後書き）

こんにちは。

懐かしいですね。この頃はまだエース合流していなかったんですよね。今となっては……。

それでは、悠でした！

第二期第十九話「乙女の勝負と謎の青年」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第十九話「乙女の勝負と謎の青年」

アカデミア、某所。

「……と、いうわけで見事セツとのお泊り旅行の権利をげっとしたわけです」

『やったじゃない！　これはもうアレよ。ゲームでいったらちょっとRとかZとか必要になってくるイベントが待ってる流れよ！』

「ですよね！　わ、私としてもとっても勇気が要りますが……ここは……」

『キメちゃわないとマズイわね……何しろグズグズしてたら掻っ攫われても不思議のないメンツだし』

「ホントですよ……普通こういうのって抜け駆けはご法度っていう暗黙の了解があるのが相場だと思うんですけど……」

『……全員抜け駆け上等な攻撃的過ぎる乙女なのよねぇ』

「……シャルナ、それもしかして私も含まれてます？」

『初期のアテナからして押せ押せ上等！　な感じだったじゃないの』

初対面でいきなり告白したアテナとしては、そこらへんは全く否定できない。

「……それでもさだめさんとかと一緒にされるのは心外です」

『そのさだめもやってないベッドインした身で何言ってんの』

「なっ……ま、まさか見てたんですか！？」

『むふっ』
「な、なんですかその下品な笑顔は！」
『何度だって何時だって、セツに好きって言いたいです』
「きゃあ！？」
『私も結構……えっち、なんですよ？』
「いやあああーっ！？」
改めてあの時のことを思い返すと恥ずかしさで死にたくなる。けど幸せ。そんなアテナをニタニタと厭らしい笑みでからかうシャルナ。その光景は仲の良い姉妹のようでほのぼのとした雰囲気が漂う。
『うふふー♪　思い出し照れは若い証拠だって誰かが言ってたわね～青春性春』
「二つ目の青春発音おかしくなかったですか？」
そんなこんなで翌日に控えた勝負に備えて作戦を練るアテナとシャルナ。時々シャルナがアテナをからかいつつも、二人の夜は和やかに更けていった。

一方、アテナに出し抜かれた形になったさだめたち。
「……ふう。とりあえず、アテナたちの作戦会議はミリー（ヴァーミリオン）がしっかり盗聴してきたみたいなのでそれを元に対策会議を始めます。ミリー、報告」
『きゅ！　きゅー、かうっ！　きゃ～う！』
「って、誰も解読できないじゃありませんの！」
「盲点だったね……これじゃ報告じゃなくてただの咆哮だよ……」
「上手いこと言ってる場合じゃありませんわ！　どうするつもりですか！？」
『きゅ？』
「ああいえ、貴方は悪くないのですが……」
「まあそんなことは始めっからわかってたからルインが盗聴器を仕

掛けてありました」
「……抜かりない」
「じゃあ今までのやり取りは一体なんだったんですの!?」
「面白かった？」
「心っ底腹立ちましたわ……！」
「それは重畳」
「きぃぃーっ！」
一通り希冴姫を弄って満足したらしいさだめとルインが会議を始める。
「盗聴した限り、状況はマズイ」
「ほほう。その心は？」
「私のアドバンテージが失われる」
「なんですの？　そのアドバンテージって」
「彼との混浴という絶対的なアドバンテージが……」
「聞き捨てなりませんわ！」
「右に同じく！　さだめだってしたことないよ！」
なんでも、幼い頃から警戒されて入ったことはないらしい。
「……まあ盗撮はしてたんだけどね」
「なっ……」
「悉く見破られて破壊されたよ。お兄ちゃんは目敏すぎるよ」
「セツ様……そんな小さな頃から防衛本能を磨かれていたのですね……」
「ちなみにお兄ちゃんの小さい頃の写真、一枚十万」
『買った』
とんでもないぼったくりなのにも関わらずポンと支払う姫と女神。
それぞれ十枚の大人……というか貴族買いである。
「臨時収入ゲット！　って流石にこうもあっさり二百万現金で渡されるとビビるね……」
思わぬ形で札束が手に入ったさだめはさすがに冷や汗ものだった。
「というか札束いつも持ち歩いてるのこの二人……」

「後でもうちょっと持ってくる……一千万くらい」
「わたくしも、国庫から出させますわ……一億ほど」
「流石にヤバいんじゃないかな王国！　さだめでもツッコミに回らざるを得ないよ！」
ネガやメモリーカードだけでいくらでも量産可能な写真だけで億万長者になれるらしいさだめはいつになくビビって涙目だった。
「大丈夫。お小遣いの範囲」
「まあジャック辺りに無償奉仕させれば大丈夫でしょう」
「いくらさだめでもそこまで外道にはなれないよ……」
希冴姫の尻拭いにこき使われるジャックの姿が目に浮かぶ。
「……でも、今となっては他に手に入れる手段のない彼の幼少期の写真」
「うんまあ他の有象無象なんてどうでもいいよね」
……ツッコミ役が不在のこの状況ではもうどうしようもなくなっていた。
「コホン……話が逸れちゃったね……そのおかげで一生遊んで暮らせそうだけど」
「この玩具の車に乗って遊んでいる写真は秀逸」
「ああ……幼い頃のセツ様の寝顔写真……」
「うわヤバい。さだめがツッコミに回らなければどうしようもないこの現状に寒気すら覚えるよ」
そもそも纏まりのなさすぎる連中である。さだめ自身その筆頭であるが。
「とりあえず尾行はするとして……泊まるところはどうしよっか？　流石に同じ旅館だと気付かれるから……」
「ジャックに調べさせましたら、近くには誰も使っていない洋館があることが判明しておりますわ」
希冴姫のジャック使いの荒さが、最近は特に目立つ。
「とりあえずそこで潜伏。妨害工作に回る」
「基本方針はそれだね」

「ところで、メンバーが一人足りないんじゃありません？」
「ああ、あのサイレント・ダークホースはそのダークホースっぷりを発揮して一年間授業でお兄ちゃんを一人占めとかいう暴挙に出たのでハブりました」
恋敵にはまったくなんの容赦もしないさだめであった。
「基本方針は決まった。後は煮詰める」
「うん。なんとしても既成事実だけは許すわけにはいかないよ」
「最近の小娘は段々手段を選ばなくなってますからね。各自、努々油断はなさりませんよう」
自分たちのことを棚上げするのは恋する乙女の得意技らしい。
各々の欲望と陰謀が渦巻くセツとアテナの一泊旅行はこうして幕を開けるのだった。

おまけ。
「これ、一千万。百枚頂戴」
「流石に一億は無理そうだったので同じく一千万ですわ。百枚」
「ねえいいの！？　こんなに簡単にさだめ億万長者になっちゃっていいのホントに！？」

そして当日。
「セツ、今日から二日間、よろしくお願いします！」
「お、おう」
気合入りまくりといった様子のアテナに、ちょっと引きつつ返事をする。今日は朝からこんな感じだ。
さだめたちがどうも尾行しているらしいことにもまったく気付いていない辺り、かなり空回っているらしいが。

……まあ、今回ばかりはさだめたちに尾行されてた方が間違いを起こさずに済むから俺としては尾行については見過ごす方向で行こう。

「それで、ここが今日泊まる温泉旅館か」

「は、はい！　眺めも綺麗な露天風呂とか、その……か、かか家族風呂みたいなのもあったりなかったりで……」

「露天風呂か！　いやー露天風呂好きなんだよな俺！」

家族風呂とか……混浴どころの危険さじゃない。あんなもん聞くところによると殆ど密着しないと入れないようなシャレにならない奴だという話じゃないか。まあ中には大きいのもあるんだろうが、相当値が張る奴だ。そもそも混浴の時点でマズ過ぎる。

「か、家族風呂みたいなのもあったりで！」

まさかの家族風呂押し！？　了承せよと！？　最近のアテナは完全にフルアタックモード。防御無視な感じで扱い辛い！　というか危険極まりない！　それでいて純情そうな反応返してくるからさだめ以上に対処できない！

「そ、そうか……いや、流石にそれはマズイ」

「ルインさんとは入ったらしいじゃないですか。しかも私を振ったそのすぐ後に」

「がふっ！？」

そこを突かれると痛い！　というか本人から言われると罪悪感が半端ない。思わず家族風呂を了承してしまいそうに……。

スカッ！

「っ！」

その時突然俺の鼻先を掠るように飛んできたカードが木に突き刺さった。……ナイスさだめ。危ないところだった。ただまあ飛んできたカードが『終焉のカウントダウン』だった辺りが恐ろしい。さだめの中では既にカウントダウンが始まっているようだ。

「い、いやいやあれはルインが勝手にな……」

必死で弁解し、なんとか家族風呂使用だけは思いとどまってもら

うことに成功した。
「うぅ……作戦失敗です。ルインさんのアドバンテージを消しておきたかったのに……」
いやもうアドバンテージとかそんなレベルの問題じゃなかった気がする。もう一気に決めてしまおう的な野望をヒシヒシと感じる。……こんな時、世の主人公たちの鈍感スキルがとても羨ましく感じる。きっと幸せだろうなぁ……何も気付かないって。
そんな愚痴はさておき、まずはチェックインをしようとフロントに……。
「はぁ！？　来てないって……まさか、旅館間違えた？」
「いえ、上月様のお名前は若様より伺っております。ただ……」
「その当の本人が来てないって？」
「はい。そのことについては特に連絡も受けておりませんが……」
何やらトラブっているらしい。アテナと二人して顔を見合わせる。
「あの……どうかしましたか？」
「ん……？」
振り向いた女性はまたえらくスタイルの良い美人だった。例の無駄スキル『一目で服のサイズを見分ける程度の能力』で見た限り、ルインと同等くらいのスタイルをしている。
「あんたたち、ここの宿泊客？」
「はい。御堂『夫妻』で予約しました」
「！？」
完全に初耳だった。いつから夫妻になった。そして突き刺さる死のメッセージ。
「今のは俺悪くないだろ……」
「……そのナリで夫妻は無理があるわよお嬢ちゃん」
「うぇ！？　い、いえ！　ホントに私たちは……」
「無理しなくてもいいわ。どう見たって高校生くらいでしょうが」
「わ、私は１３歳です！」
『……』

「あ……」
墓穴を掘ったな……実年齢より年上に見られたのが気に食わなかったらしいが、それにより美人さんからの俺への視線が多少キツくなった。
「……中学生こんな宿に連れ込んで何する気よ？」
「違う！　俺にそんなつもりは……」
むしろ連れ込まれたのは俺の方だということを主張したい。
「……まあいいか。旅館には私から言っとく」
「あ、ありがとうございます！」
「別にいいわよ。気にしないで」
旅館に言っておく？
「もしかして、ここの偉い人だったり……？」
「ん？　ああ、私は別に直接偉くはないんだけどさ。ここの旅館経営の母体となってる会社の会長と個人的に関わりがあってね。ある程度の融通は利くのよ」
十分すごくないか？　子会社の旅館にまで融通が利くほどの人間と関わりがあるってのは……。
「個人的に関わり……ってもしかして」
が、アテナはまた別の所に食い付いたようだ。ここら辺は恋愛ごとに興味津々のアテナらしい。
「んー……ま、そんなとこ。まあ今回はこうしてすっぽかされたような形だけどさ」
「わぁ……ファーストレディへの道ですね」
「そこら辺は割とどうでもいいことなんだけどねぇ……」
女同士、さっさと仲良くなったらしくて何よりだ。……別に疎外感を感じてはいない。本当だよ？
「あなた、名前は？　私は上月光」
「天音アテナです。こちらは、御堂切」
「よろしく」
「仲良くなった記念よ。女将さん、この子たちの部屋、グレードア

ップしといて」
「ええ!?　そんな、いいですよ!」
「いくらなんでも……」
「いいからいいから。どうせ金払うのはあの馬鹿だし」
そう言えば、上月さんは何故トラブっていたのだろう。そのことを尋ねると、多少眉根を寄せた。
「……ああ、その例の奴が温泉旅行するからって言っといてすっぽかしたみたいでさ」
「それは……」
かなり最悪なんじゃなかろうか。
「まあ、どうせその内ひょっこり現れるわよ。あいつもあいつでそこそこ忙しい身だしね」
確かに、大企業の会長ともなればその忙しさは想像を絶するものだろう。ある意味仕方がないのかもしれない。
「ま、とりあえず部屋に行きましょう。あなたたちの話も聞きたいしね」
「はい。色々とありがとうございます!」
まあなんにせよ、これで二人っきりの旅行から来る緊張感みたいなものはなくなったし、純粋に楽しむとしようか。

「これは……想定外だったけど、僥倖だね」
お兄ちゃんたちが上月光を名乗る女と一緒に部屋に向かうのを見てさだめは安堵の息を吐く。これで下手な空気にはならないだろう。
「じゃあ、いったん引き揚げ。私たちは今夜の寝床を確保する」
「では、わたくしが監視を続けておきますわ」
「よろしくね。希冴姫さん」
こういう時は同志の存在がありがたい。一人で監視をしているとトイレに行くのも一苦労だし。

さだめはルインと誰も使っていない洋館とやらに移動する。そこそこ不気味な雰囲気がさだめ好みだ。

「……待っていたよ」

「!?」

突然洋館の奥から聞こえてきた年若い男性の声に、一気に警戒心を強めるさだめとルイン。待っていた？　あの世への案内人かなにかかな？

警戒しつつも奥へと進み、大広間と思われる所に出る。そこに居たのは腰ほどまである黄金の髪を揺らした、長身の男性。

「久しぶり、というべきか。元気そうで何よりだ」

相手はそういうけど、さだめにはさっぱり見覚えがない。元々お兄ちゃん以外の異性については何の興味もわかないし記憶にも残ってないけど、この人は何と言うか、一度見たらとてもじゃないけど忘れられそうにないほどの存在感を持っていた。

「ま、さか……」

隣でルインがジリッと後ずさる音が聞こえる。

「貴方は……あの時の？」

「誰？　ルイン」

どうやら知っているようだったので聞いてみる。見るからに怪しい登場をした謎の男。彼を見たルインはまるであり得ないものを見たかのような顔をしていた。

「……貴女にも話した。彼は、かつて私に『長く生きると、娯楽に飢える』と語った人」

確かに、ルインが過去を教えてくれた時、そんなことを始めに言っていた。でも……

「まさか。あの人、人間でしょ？」

「……その筈」

目の前に立つ男は、どう見ても人間だった。ルインや希冴姫さんも今は実体化して人間界で暮らしてるけど、それでも独特の気配のようなものがある。あの人からは、そんなものは感じられない。

「人間だよ。かなり特殊だけどね。けど、それは君の言えることじゃないはずだ。異邦人（イレギュラー）」
「！」
この人……さだめたちのことを知ってる？　確かに、さだめの知る原作に、こんなキャラは居なかった。でも……それにしたって異質な存在感を感じるような……。
「ルイン。長く生きた、その感想はどんなものだったかな？　あの頃とは大分性格も摩耗してしまったようだけど」
「……本当に、あの時の男？」
「そうだよ。だけどまあ、どうやら今はそこそこに幸せそうじゃないか。君は、希望の光を見つけられたのかな？」
「……格別なものを」
「それは良かった。悲劇的な物語は感動的で楽しめるが、悲劇的な現実は笑えない。やはり、現実では喜劇の方が幸せだね」
「貴方は何者？　私よりも遥か昔に生を受け、今もなお生き続けている貴方は」
「さて、それが君たちにとってさほど有益な情報とは思えないのだけど」
「答えて」
ルインの表情は険しい。嫌悪じゃなくて、得体の知れない存在への恐怖と警戒の色が濃い。
「……ふむ。そうだね、折角君たちはデュエルの精霊なんだ。やはり、物事はデュエルによって決めるというのがこの世界の基本原則じゃないか？」
「私は構わない」
「そうか。それじゃあデュエルと行こう」
謎の青年は、腕にデュエルディスクを取りつける。
「……」
ルインもそれを見て、自前のデュエルディスクを腕に構える。
「さて、始める前に名乗りだけはあげておこうか。僕の名前は真中

希望。世界の記録者、とでも名乗っておくよ」
「……ルイン。破滅の女神、ルイン」
「その號が変わることを、心から祈らせてもらうよ」
「「デュエル」」
そして、真中希望と名乗った謎の青年と、ルインのデュエルが幕を開けた。

第二期第十九話「乙女の勝負と謎の青年」（後書き）

こんにちは。

この話ではメイドのシャインが省略されています。流れ的に、居なくても進行に問題が出ないので思い切って削りました。

それでは、悠でした！

第二期第二十話「深まる謎と歪み」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第二十話「深まる謎と歪み」

「さて、先攻は譲ろう」
「……なら私のターン、ドロー」
真中希望と名乗った男とルインのデュエル。さだめは前ダーク化していた頃に、ルインがデュエルするところを何度か見ているし、その実力的にはかなりの物だった筈だから大丈夫だとは思うけど……。
「私は手札から『天空の使者　ゼラディアス』の効果を発動。デッキから『天空の聖域』を手札に加えて発動」
フィールドが雲の上に浮かぶ神殿のようになる。この聖域では天使族に戦闘ダメージを与えることができなくなる。
「モンスターを守備表示でセット。ターンエンド」
「なるほど。『ホーリー・ジェラル』か。『天空の聖域』の影響下では良い効果を持つモンスターだ」
「！？」
真中希望はあっさりとルインの守備モンスターを見抜く。確かにあの場面で裏守備にするのは『ホーリー・ジェラル』が筆頭かもしれないが、あそこまで確信を持って宣言できる程ではないはずだよ。
一体どうして……。
「まさか、イカサマ？」

さだめの疑問に、真中希望は涼しい顔で否定する。
「そんなつもりはないけど、そう取られても仕方ないかな。僕のターン、ドロー」
あくまで冷静に真中希望はカードをドローする。
「モンスターをセット。カードを一枚セットしてターンエンドだ」
「私のターン。ドロー」
相手は特に動かず、守りの姿勢。守備モンスターが守備力２００の『ホーリー・ジェラル』だとわかっているからなのか、まったく攻撃をする様子も見せない。
「……なら、守りに入ったことを後悔させる。手札から儀式魔法『エンド・オブ・ザ・ワールド』を発動する」
「ほう……手札の『英知の代行者　マーキュリー』とフィールドの『ホーリー・ジェラル』をリリースして君自身を呼ぶか」
「っ……その通り」
真中希望の宣言通り、ルインの手札からリリースされたのは『英知の代行者　マーキュリー』。そして儀式召喚されたのは『破滅の女神ルイン』。不気味なくらいにルインの手を言い当てている。
「私はリリースした『ホーリー・ジェラル』の効果でライフを１００ポイント回復する」
ルインＬＰ５０００
ルインと謎の男のデュエル。希望と名乗った男、なんでルインの手札や守備モンスターを一発で言い当ててるの？
「あれ……なんだろ、こんなことどこかであったような……」
さだめは思い出そうとするけれど、頭に靄がかかったようになっていてどうしても思い出せない。
「ともかく、状況は一応ルインが有利だね……」
ルイン自身の効果は戦闘でモンスターを破壊した後、もう一度だ

け続けて攻撃できるというもの。相手の守備モンスターが何かはわからないけど、あの伏せカードだけ注意していればほぼ確実に相手に大ダメージを与えられるはず。

「ルインが勝てば、もしかして色々教えてくれるのかな。結構色々知ってそうだったし」

ルインの過去に登場したという謎の人間。一体どんなデュエルをするんだろう……。

「更に私は装備魔法『ダグラの剣』を私に装備。手札から『創造の代行者　ヴィーナス』を攻撃表示で召喚。私自身で守備モンスターに攻撃。『滅光吸斬』」

ルインの手に不思議な形の剣が握られ、その剣が守備モンスターを切り裂く。切り裂いたのは三つの目玉を持った悪魔。

「僕は『クリッター』の効果を発動しよう。デッキから『クリボー』を手札に加える」

「……私は相手モンスターを戦闘で破壊した場合、もう一度だけ続けて攻撃することができる。私自身でプレイヤーにダイレクトアタック」

「手札から、今しがた手札に加えた『クリボー』を墓地に捨てて効果発動。戦闘ダメージを一度だけゼロにする」

「……『創造の代行者ヴィーナス』でダイレクトアタック」

「リバースカード『クリボーを呼ぶ笛』発動。デッキから『ハネクリボー』を特殊召喚しよう」

「続行。『ハネクリボー』を攻撃」

ルインの剣が十代の相棒と同じ『ハネクリボー』を切り裂く。

「……ターンエンド」

ルインとしてはこのターンで決めるつもりだったのか、少々不満そうだ。攻撃力２８００のルイン自身と１６００のヴィーナスの攻

撃が通っていれば、希望のライフはゼロだったはず。でも実際にはたった一枚のリバースカードと守備モンスターで全て凌がれ、相手ライフは1ポイントも減っていない。それに引き換えルイン自身はライフこそ回復したものの、手札はゼロ。相手の手札は未だ四枚。次のドローで五枚だ。結果的には大損といったところか。

「僕のターン。ドロー」

とはいえ、ボードアドバンテージは完全にルインの方が上。ルインの攻撃力は早々簡単には上回れないし、上回ったとしても『天空の聖域』がある限り戦闘ダメージは受けない。

「僕は魔法カード『天使の施し』を発動。三枚ドローして二枚捨てる。僕はこの時『暗黒界の刺客　カーキ』と『暗黒界の策士　グリン』を捨てることにより両者の効果を発動。『破滅の女神ルイン』と『天空の聖域』を破壊しよう」

「く、ぅ……！？」

自らの分身を破壊されて僅かに苦悶の声を上げるルイン。けど、こんなに簡単にボードアドバンテージまで……。

「更に『魔法石の採掘』を発動。手札から『スケルエンジェル』と『マシュマロン』を墓地に送って墓地の『天使の施し』を手札に戻す。そのまま発動」

真中希望はまた『天使の施し』でカードを引き、墓地に捨てる。今度は暗黒界じゃなかたみたいで、特に何らかの効果が発動されるわけじゃなかった。でも、墓地に送られたのは『紫光の宣告者』と『ワタポン』。どちらも光属性の天使族。まさか……。

「……さてルイン。すまないけど、僕はこれでも多忙の身でね。今も人を待たせているし、余り長々とやっては居られない。このターンでケリをつけよう」

「！？」

「僕は墓地に存在する『クリッター』『クリボー』『暗黒界の刺客　カーキ』『ハネクリボー』をゲームから除外し、光と闇を統べる神を呼ぶ。『天魔神　ノーレラス』」

墓地から闇と光が放たれて混ざり合う。その混沌から現れたのは一柱の神。
「まだだ。僕は更に墓地の『スケルエンジェル』『マシュマロン』『ワタポン』『暗黒界の策士　グリン』をゲームから除外。ノーレラスの対。『天魔神　エンライズ』」
天魔が……もう一体。そして真中希望の手札は残り一枚。
「そして、僕はまだこのターン通常召喚を行っていない。手札から『死霊騎士デスカリバー・ナイト』を攻撃表示で召喚。バトル」
ルインのフィールドに伏せカードはない。手札もゼロ。モンスターは攻撃力１６００の『創造の代行者　ヴィーナス』ただ一体。
真中希望のフィールドは、攻撃力２４００の天魔神二体と１９００の死霊騎士。
「手札もないから、特に『オネスト』を警戒する必要もなさそうだね」
「うそ……一ターンでボードアドバンテージまで逆転して……ワンキル？」
完璧だ。手札も使い切り、ライフを全く減らすことなくワンターンキル。正にパーフェクトデュエル。完全封殺。
「終わりにしよう。三体のモンスターで攻撃」
「く……ぁあ！？」
ルインＬＰ０

デュエルが終わった後、さだめは真中希望を問い詰める。
「どうしてルインの手が読めたの？　どんなイカサマ？」
「さっきも言ったけど、僕はイカサマなんてしていないよ」
「信じらんないよ」
「そこは、信じてくれとしか言えないな」
問い詰めても話にならない。

「じゃあ、今度はさだめとデュエルして。それで勝てば……」
「すまない。さっきも言ったけれど、これでも多忙なんだ。今日はここまでにしておこう」
「……なにも話すつもりはないの？」
「まさか。それじゃあ本格的に何をしに来たのかわからないじゃないか」
「え、それって……」
「こんなデュエルしなくても、必要なことは答えてくれた、ということ」
ルインの説明でようやく理解する。つまり……。
「……私の負けは無駄骨」
珍しく苦々しげにルインがそう答える。
「さて……まずは今日僕たちが現れた理由だけど、一つはルインへの挨拶だ」
「私……」
「君のことは気になっていたからね。元気なのは知っていたけど、直接顔を合わせるのも良いかと思ってね」
「もう一つは何なの？　ルインへの挨拶とかは思い切りついでじゃん」
「ごもっとも。もう一つは君だ。御堂運命。君に忠告……というかアドバイスを少々」
アドバイス？　というか今更だけどこの人さだめの名前とかも知ってるんだ。
「君のお兄さん。御堂切を起点として、異邦の存在が次々と現れてきている。それにより、この世界に歪みが広がっている」
「異邦の存在……イレギュラーのこと？」
「そう。例えばこの場にいる全員がそうだ。僕はまた別枠だけどね」
とするとさだめとルイン。お兄ちゃんもそうなら希冴姫さんやもしかしたらアテナとかもそうなのかも。
「世界はそれほど脆くはない。一つ二つの異邦人（イレギュラー）なら世界の方で勝

手に修正を施す。例えば、鍵の守護者が色々な要因が重なって元々あるべき形に修正されたりね」

「！？」

この人、セブンスターズの事件も知ってる。

「だが、世界の修正力。或いは強制力はそう何度も使っていれば逆に世界のバランスが崩れる。それほどに大きな力だからだ。そしてそのバランスを整えようとして世界は更に力を使う」

「完全に負の連鎖だね。それが？」

「わかるだろう？　バランスを失った世界が行きつく先は、当然終焉だ。そうだね。君たちがこの後に遭遇する破滅よりもよほど危険な、世界自体の終焉さ」

この後……遭遇する。

「その終焉を引き寄せているのは……」

「……さだめだとでも？」

「いいや。お兄さんの方さ」

「お兄ちゃんが？」

何故？　その疑問に反応したのはルインだった。

「……終焉の花嫁」

「それだ」

満足そうに真中希望はルインを指差した。

以前、ルインから聞いた。ルインとお兄ちゃんは終焉に好かれる。

それが今回も当てはまったということ？

「だからこそ僕は、君にも会いに来たんだ。ルイン」

「私と彼が、終焉を呼んでいる？」

「そうなるね。そして、その時寄り代となるだろう存在が……」

「……さだめ？」

「その通り。終焉との相性が抜群で、終焉を引き寄せる者を兄に持つ君こそが、その寄り代だ。だからこその忠告さ」

また、さだめが迷惑かけるのか……。

「君たち兄妹の存在は、過去を捏造し未来を壊し現実（いま）を変質させる。

『世界』としては、そろそろ黙ってはいられない頃だろうね」
「そんな……」
過去を捏造する。つまり、ルインの過去なんかも……。
「そう。君たちが現れなければ存在し得なかった過去となる。君たちの存在が、様々な形で異邦人（イレギュラー）を引き寄せて世界のバランスを狂わせる」
「さ、さだめたちは……」
どうすればいい？　もしかしたら、さだめたちの存在がこの世界を壊してしまうかもしれない。流石にさだめも焦らざるを得ない。
「そこでアドバイスだ。異邦の力を集めて束ね、歪みを消してくれ。僕たちは世界が終焉に呑まれるのを良しとしない」
「集めて束ねる……？」
一致団結するってこと？　そもそもどのあたりまでをイレギュラーと呼ぶのかわからない。
「……もし、それが成らなかった場合、僕は君たちをこの世界から抹消せざるを得なくなる。そうならないよう、頑張ってほしいものだね」
「なら、全部聞きたいことを教えてくれても良いじゃない」
そうすれば話は速いのに。
「……それができれば早いけど、世界としては君たちのような存在を消したくてたまらないらしいね。僕の発言にもある程度の規制がかかっている。ほら、禁則事項ですってやつだよ」
……そう上手い話はないよね……。
「というわけで、僕はこれで」
言いたいことだけ言ってさっさと去ろうとする真中希望。
「あっとそうだ。ルイン。プレゼントだ。受け取るといい」
「……これは？」
ルインが手渡されたカードに目を向ける。さだめもつられて覗き込む。
「君に与える力だよ。是非使いこなして、さだめたちの力になって

あげるといい」
「これは……」
数枚のカード。それはさだめにとっては見たことのあるカード群。
そして、ルインのデッキには非常にシナジーするカードだった。
立ち去り際、真中希望は首だけこちらに向けて質問を投げかけてきた。
「ああそういえばさだめ。君たちは……」
「なに？」
「原作知識、どのくらい覚えてる？」
「っ！」
「じゃあね」
コツコツコツ……。薄暗い洋館に真中希望の革靴の音だけが響く。
そうだ……そうだよ。
「さだめ、原作がこの後どうなったか、全然思い出せない！」
さっきから頭に靄がかかったようになっていた正体がようやくわかった。こっちに来た時はあったはずの、原作知識が綺麗さっぱりなくなってるんだ。
横で原作知識ってなに？　と尋ねてくるルインの声を半ば無視して、さだめは呆然とその場に立ち尽くした。

その頃、旅館で寛いでいるアテナとセツ。そしてすっかり意気投合した上月光の三人は……。
「へぇ、それじゃあアテナったら出会ったその場で告白しちゃったんだ？」
「は、はい……」
「いいわねいいわねそういうの！　ドキューン！　ときてズバキューン！　となっちゃったわけね！？」
「いや、光さん飲み過ぎですよ。つかペース早いな……」

すっかり酒盛り状態と化していた。肴は主にアテナとセツの恋愛話である。

「大丈夫よ。私すっごいウワバミだから。底なしよ～♪」

「いや、そりゃこのペース見ればなんとなくわかりますけど」

既に一升瓶を二本空けている。もうすぐ三本目も空に……今なった。

「ぷはっ！　ん～でもやっぱり私、お邪魔よね。折角こうしてアテナたち二人で旅行に来たのに私が居たらイチャつけないでしょ？」

「えと、でも光お姉さんのお話は楽しいですよ？」

確かに目論見とは違ったが、こうしてセツと楽しい時間を過ごすのも望んでいなかったわけじゃない。

「いやダメダメ。やっぱり若い二人の邪魔はできないわよ」

「光お姉さんだって十分若いんですが……」

「ん～どれくらいに見える？」

「えと、二十歳くらい……ですか？」

「ふふー。まあそんなところにしておいてよ。それじゃあアテナ。折角アテナはアカデミアの生徒なんだし、部屋に戻る前に一度デュエルしてみましょうよ」

「え？　私はいいですけど……」

「大丈夫。私だって結構強いんだから。油断してると足下救われるわよ？」

「ディスクは……」

「大丈夫よ。私二つ持ってるから」

アカデミアのデュエルディスクは流石に旅行先までは持って来れなかった。だが偶然にも光が二つ持ってきていた。なんでも、連れの人とやるために持ってきていたらしい。

「よーし！　それじゃあ景気づけに一発派手にやりましょ！　デュエル！」

「はい！　よろしくお願いします！　デュエル！」

こうして、さだめたちの方とは違い、和気あいあいとした雰囲気

の中アテナ対光のデュエルが開始されるのだった。

第二期第二十一話「楽しいかい？」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期第二十一話「楽しいかい？」

「さって、先攻後攻はどうする？」
「えと、どちらがいいですか？」
「私はどちらでも。そうね。じゃあ後攻ってことで」
「わかりました。じゃあ先攻、行かせてもらいますね。ドロー！」
さて……あの光さんは一体どんなデッキなんだろうな。名前そのまま光属性でミラーマッチってのもあるかもしれないが……なんとなく、あの人の性格にはあっていない気もする。
「私は手札から永続魔法『神の居城―ヴァルハラ』を発動します！手札の『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を攻撃表示で特殊召喚！　更にモンスターを一体セットしてターンエンドです！」
早速アテナはいつも通りヴァルハラで最上級天使、しかも今回は実質攻撃力３３００クラスの『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』だ。悪くない展開と言っていいだろう。
「へぇ。天使ビートかぁ……大人しい顔してパワーデッキなんだ。ちょっと意外ね」
「ただのビートダウンのつもりはありませんよ？」
少し挑発的な調子でアテナが言う。確かに、他のハイビートとは一線を画す程の爆発力やギミックを搭載している。バーン要素もあるのでかなり凶悪なハイビートと言っていいだろう。

「ちょっとセツ。凶悪は酷いです」
「心の声を読むな。さだめかお前は」
「最近ちょっとだけさだめさんの言い分が理解できるようになってきました」
「あれが二人とかマジで勘弁してくださいアテナ様」
流石にそれは体も心も持ちそうにない。
「楽しそうねぇあんたたち……」
なんかちょっと呆れられてる。まあ確かに結構愉快な関係性ではあるかもしれない。
「ま、私の方も他を言ってられないけど。私のターンでいいかしら？」
「あ、はいすみません」
「んじゃ私のターン、ドロー！……ちょっと似たようなタイプのデッキで驚いたわ。アテナ」
「え？」
やはり光属性のデッキか……？
「ああ違うわよ。私が似ているって思ったのはね……こういうこと！　私は手札から『神獣王バルバロス』を攻撃表示で召喚！　バルバロスはレベル８だけど、攻撃力を１９００に下げることによりリリースなしで召喚できるわ！」
「まさか……上級モンスター主体のハイビート……！？」
「デュエルは全速前進あるのみ！　ってのが信条なの。個人的には、海馬瀬人さんとかのデュエル、結構好きよ？」
あの『粉砕玉砕大喝采うわーはっはっはっはっ！』のデュエルか。
「というわけで、手札から魔法カード『アドバンスドロー』の効果を発動！　フィールドに存在するレベル８以上のモンスター一体をリリースして効果発動！　デッキからカードを二枚ドローするわ！」
「ドロー補助？　確かにバルバロスでは『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』は倒せませんけど……」

フィールドも結局空になる。どうするつもりだ？
「そして速攻魔法『デーモンとの駆け引き』発動！　自分フィールド上のレベル８以上のモンスターが墓地に送られたターンに発動可能！　さあ、私のエースを見せてあげるわ！」
「『デーモンとの駆け引き』！？　やば、その手があったか！」
それなら『神獣王バルバロス』と『アドバンスドロー』を使えば実質手札消費一枚で特殊召喚できる！
「来なさい狂気の屍竜！『バーサーク・デッド・ドラゴン』！」
「こ、これは……」
攻撃力３５００！　アテナの『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』でも太刀打ちできない凶悪な全体攻撃モンスター！『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』の効果で攻撃力は５００ポイント下がっているが、それでも尚『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を上回る攻撃力！
「さあ行くわよ！　バトルフェイズ！『バーサーク・デッド・ドラゴン』で、アテナの場の『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を攻撃！『バーサーク・デッド・ブレイズ』！」
「きゃああ！？」
アテナＬＰ３８００
「まだよ！　『バーサーク・デッド・ドラゴン』はフィールドに存在する全てのモンスターに一回ずつ攻撃が可能！　アテナの裏守備モンスターを攻撃！『バーサーク・デッド・ブレイズ』！」
「っ私の守備モンスターは『ジェルエンデュオ』！　戦闘によっては破壊されません！」
よし！　次に繋いだ！『バーサーク・デッド・ドラゴン』は最初こそ凶悪極まりないが、徐々に攻撃力がダウンしていく。これで後次のターンだけ凌げれば……。
「面倒くさいモンスター。私そういう戦闘で破壊できないモンスターとか嫌いなのよね。まあいいわ。私はカードを二枚セットしてターンエンド。エンドフェイズ時に『バーサーク・デッド・ドラゴン』

は攻撃力を５００ポイントダウンする。狂気の暴走は長くは続かないってところかしらね」

「わ、私のターン。ドロー！」

アテナの奴、動揺してるな。元々あんなハイビートを扱っている以上、ああもあっさり攻撃力を上回られたことが少ないんだろう。慣れない状況かもしれないな。元々アテナや光さんみたいなハイビートタイプは先手を取られると痛い。こんな状況だと特にどうすればいいのかわからないのかもしれない。

「私はモンスターを一体守備表示でセット。ターンを終了します……」

「しゃらくさい！　守りの姿勢はもっと好かないの！　リバーストラップ発動！『最終突撃命令』！　その裏守備はともかく『ジェルエンデュオ』には攻撃表示になってもらうわ！」

「そんなっ！？」

まずい……こいつは……。

「私のターン、ドロー！……アテナ。あんたのデッキの真の力、見てみたかったけど、残念ながらこれで終わりみたいね」

「え……」

「一応『オネスト』対策だけはしておくわ。トラップカード『あまのじゃくの呪い』！」

げっ……。

「このカードの発動ターンのみ、攻撃力守備力のアップダウンは反転するわ！　よって攻撃力が５００ポイントダウンしている『バーサーク・デッド・ドラゴン』の攻撃力は５００ポイントアップして４０００！　そして『オネスト』は発動したところで無意味よ！」

このタイミングで『オネスト』を使えば『バーサーク・デッド・ドラゴン』の攻撃力４０００ポイントダウンする効果に変わる。

「あ……」

「蹴散らしなさい！『バーサーク・デッド・ドラゴン』で『ジェルエンデュオ』を攻撃！『バーサーク・デッド・ブレイズ』！」

「きゃあああああっ！」
アテナＬＰ１５００
アテナの『ジェルエンデュオ』は、ダメージを受けたので自壊してしまう。
「そしてその裏守備モンスターにも攻撃！『バーサーク・デッド・ブレイズ』！」
「ま、『マシュマロン』の効果で１０００ポイントのダメージです」
光ＬＰ３０００
「ダメージステップ時に『最終突撃命令』の効果！『マシュマロン』の表示形式は攻撃表示として処理！　終わりよ！」
「きゃあああああああっ！？」
アテナＬＰ０
正に……『粉砕玉砕大喝采』的なデュエルスタイル……。『最終突撃命令』と『バーサーク・デッド・ドラゴン』の攻撃はライフ４０００じゃとても堪え切れるもんじゃない。その上『あまのじゃくの呪い』で『バーサーク・デッド・ドラゴン』のデメリットすらメリット扱い。そして『オネスト』も効かない完全なパワーデッキ。
「まあ相性が悪かったのもあるわよ。アテナのデッキ、殆ど罠カードとか入ってないでしょ。私のデッキなんて『魔法の筒』一発で大打撃受けちゃうしさ。その癖『最終突撃命令』とか使うとなるとお触れとか使うわけにもいかないし」
確かに、真正面からぶつかり合うタイプのデッキに対しては滅法強いが絡め手を使われるとあっさり瓦解しそうなデッキではある。『バーサーク・デッド・ドラゴン』の攻撃力もアルカナよりは下だし、もしかして俺がやったら結構あっさり勝利してしまいそうな感じもする。
どこか呆然とした様子で座り込んでいるアテナに手を貸して立ち上がらせる。
「私……そう言えば負けちゃったのってすごく久しぶりかもしれません」

「そういえば……最後に負けたのっていつだ？　テストデュエルは除いて」
「いえ……それを入れたとしても最後に負けたのは闇モードのさだめさんにワンキルされた時以来かと……」
　マジか……そんなのもう数ヶ月は前のことじゃないか。そんな前から無敗だったのか……恐れ入った。
「まー基本的にデュエルも色んなものと同じで負けて成長するものよ。私も散々アイツに……まあそれはともかく、アテナもこれでしっかり負けられたんだし、良かったんじゃない？」
「……そうかもしれません。このままだと私、慢心して嫌な子になっちゃうかもしれませんでした。光お姉さん。ありがとうございました」
「いえいえ、どういたしまして」
　負けて成長……か。そう言えば、俺も最後に負けたのはいつだったかな。テストデュエルとかでは散々負けてる気もするけど、ソリッドビジョンを通したデュエルだと俺はネイキッドにしか負けてない。そして、そのデュエルのおかげで俺は強くなれた。
「俺も……負けるべきなのかもしれないな」
　もちろん、手加減して、ということじゃない。それじゃ何の意味もない。本気でデュエルして、完膚なきまでに負ける。そんな経験が必要なのかもしれない。
「それじゃあ私はこれで部屋に戻るわね。楽しかったわ。それと、邪魔して悪かったわね」
「いえそんな……私の方こそ、色々とありがとうございました」
　アテナがぺこりとお辞儀をして、光さんを部屋から送り出す。と……。
　コンコンッ。
「あら？」
「誰でしょう……旅館の人でしょうか」
「もしかして、騒ぎ過ぎたか？」

心当たりは大いにある。何しろアテナと光さんのデュエルで光さんが散々大声で宣言とかをしている。……光さんが。
「う……そんな目で見ないでよ。悪かったってば」
「はい。どなたですか？」
とりあえずアテナが応対するために声をかける。すぐに返事が返ってきた。
『すまない、入らせて貰っても構わないかな？』
「！　この声……」
「お知り合いですか？」
「ええまあ。私は居るわよ」
光さんが声をかけると、扉の向こうから安堵した気配が伝わってくる。
『ああ良かった。呆れて帰ってしまったんじゃないかと、心配していたんだ』
ガチャリ。
「ごめんね。光。急に用事が入ってしまった」
「ないわね。あんたのことだから、どうせ端からそれが目的でこの旅館に来たんでしょ？　ったく……人をダシにするのも大概にしなさいね。“希望”」
扉を開けて入ってきたのは超絶美形の欧州系の顔立ちをした長身の男。
「君たちも。いきなり上がり込んでしまってすまない。光が迷惑をかけてないかい？」
「わ。い、いえ光お姉さんにはとてもよくして頂いて……」
一々行動が絵になる男だった。男の俺でも周囲にキラキラエフェクトがかかっているような錯覚を覚える。ここまでだと嫌みにもならん。ただ呆れるだけだ。
「それでも、恋人同士の旅行を結果的にこうして邪魔していることに違いはないだろうに」
「……よく言うわよ。何も話してくれなかったけど。そういうこと

でしょ？　あんたの目的の、そのためのピースとして私を配置したのよね」
「付き合いが長いだけのことはあるね。お見通しか」
「……ったく。そんなことしてると、いつか愛想尽きちゃうわよ」
「それは困るな。これでも君のことは本気で愛しているつもりなんだけど」
「……ばか」
「な、なんだか話はよくわかりませんが、いいなぁ……」
「なにが？」
「あんな風に、ストレートに愛を伝えてくれるのは、女の子にとっては憧れみたいなものなんです。セツも見習ってくださいね」
　無理だな。あんな気障ったらしいセリフ、所謂『ただし、イケメンに限る』みたいなもんだし。あの欧州系のいかにも王子様チックな外見で言われればそりゃあときめくこともあるだろうが、平凡な日本人の顔立ちであんなこと言ってみろ。恥掻くだけだ。
「……こないだのだってそこそこストレートだったつもりなんだけどな」
「何か言いましたか？」
「なんでもない」
　希望と呼ばれた男は顔を赤くする光さんの額にチュッと軽いキスを落としてからこちらに向き直った。
「まあともかく、君たちには何かお詫びをしなくちゃいけないね」
「い、良いです別に！　私たち、もっとランクの低いお部屋だったのを光さんがこうしてグレードアップしてくれましたし……」
「おや、そんなことをしていたのか。まあそれでも、僕の方は何のお詫びもしていないからね。台無しにしてしまうお詫びだ。どうか受け取って欲しい」
　ん……？　台無しに“してしまう”？　してしまった、ではなく？
「これ……海馬ランドのプレミアム招待券！？　ど、どうしてこんなものを……」

「何ィ！？」

彼の言葉のニュアンスにちょっとだけ違和感を覚えた俺だったが、さらっと手渡されたとんでもないものにそんな疑問はあっさりと吹き飛んだ。

「プレミアム招待券って確か……」

「そう。一日どころか年間完全フリーパス。飲み放題食べ放題で特典付き。あの気に入った相手には太っ腹な瀬人らしいね。とりあえず六人分あるから、全部渡しておくよ」

いや、渡しておくよってあんたの方が百倍太っ腹だろう。何者だこの人。

「うん？　ああそう言えば、まだ自己紹介していなかったね。僕は真中希望。これでも、真中グループという企業で会長を務めさせてもらっている。まあ、ただ生家だったから後を継いだだけなんだけどね」

「ま、ま、ま、真中って……」

「知っているのか？」

俺はまったく知らないが、アテナがすっかり真っ白になっている以上、相当でかい会社のようだ。そんなところの会長をこんな若さで？

「知らないんですか！？　あの海馬グループやＩ＆Ｉ社にも技術提供や多額の投資をして、海外貿易を中心に世界でも有数の規模を誇る大企業ですよ！　その会長さんだなんて……」

「何、僕は会長。ただ高い椅子にふんぞり返って座っているだけのお飾りさ」

なんてこった。この男、人生の勝ち組を地で行ってやがる。で、この旅館もグループの子会社が経営してるのな。

「まあ、僕の素性なんてどうでもいいじゃないか。それに、こうしていつまでも邪魔をするのは僕も本意じゃない」

「あっすみません。私たちと同じで、光お姉さんたちも旅行の最中だったんですよね」

「別にいいわよ。どうも、これで帰ることになりそうだしね」
「え……？」
今日泊まりに来たのに、もう……？　今から夜になって、恋人同士ならこれからが本番といったところだろうに。
「流石、光はよくわかっている」
「もしかして、お仕事……ですか？」
「……さて。そんなところかな。それじゃあ、良い夜を。それと……――――――――？」
「っ！？」
真中希望は、スッとアテナの耳元に顔を寄せると、何事か呟いた。アテナはサッと顔を蒼白にしてへたり込んでしまった。
「お、おいアテナ！？　どうした！？　おいお前！」
しかし、その時には既に真中希望と光さんは姿を消していた。廊下を覗いてみても、その姿はどこにも確認できない。
「一体何を……アテナ、どうしたんだよ？」
「……な……んで……」
血の気の引いた顔でそれまで真中希望の居た場所を呆然と見詰めるアテナ。
一体なんだって言うんだ。あんな短い言葉だけでアテナがここまで動揺するなんて。俺にも幽かに聞こえてきた。確か……。
『人生は、楽しいかい？』
そう言っていたように思える。この言葉のどこに、アテナがここまで動揺する要素が隠されていたのか。俺にはさっぱりわからない。
「教えてくれ……アテナ」
しかしアテナは何も言わず、ただ「なんで……どうして……」と呟くばかりだ。
「これじゃ……確かに」
“台無し”……だ。

「私、あの娘と友達になったわ」
「そうか。それは良かった」
「いい娘だった。とってもね」
「ああ、知っているよ」
「……あの二人、どうなるの？」
「……さて。未来は常に流転する。正確なところはわからないよ」
「どうして、あの娘たちに？」
「……彼女が目覚めてくれないと何も始まらない。だから今回、彼女に手を出した」
「そんなに重要なことなの？」
「運命を寄り代として終焉が胎動し、其を切り開く剣が眠る扉を開く。彼女は鍵だ。まずは鍵を開ける必要がある」
「私、携帯番号とか交換したの」
「そうか」

「アテナ、かけて来てくれるかしら……」
「……未来は常に流転する。正確なところはわからない。……ただ」
「ただ？」
「きっとかけて来てくれるさ。ちゃんと自分を受け入れて、全てが丸く収まった頃にね」
「そう、願うわ」
「人の祈りは、きっと現実になる。強く祈れば、きっとね」
希望たちは夜の闇に消えていく。その目に確かな光を携えて……。

第二期最終話「確かなもの、一つ」

アルカナ～切り札の騎士～

第二期最終話「確かなもの、一つ」

アテナが落ち着くまでは一刻ほどの時間を要した。
その間アテナはずっと何故、どうしてと何かに問いかける声を発していて、俺の呼びかけにも全く答えようとはしなかった。
「……セツ」
「なんだ。アテナ」
「私……私は……」
縋るように俺の腕にしがみつき、また口を閉ざしてしまうアテナ。
一体何が、アテナをそこまで追いつめているのか。一体あの男の言葉に何の意味があったのか。
「教えてくれ、アテナ……」
しかしアテナは俺の問いには答えず、悲しみと後悔の念を湛えた瞳で俺を見つめてきた。
「セツ……すみません」
「何を謝ってるんだ？　俺はお前に謝られることなんて……んっ」
唇が塞がれる。また、アテナの唇で。そのまま体重をかけてきたアテナに押し倒される。
「アテナ……？」
「確かなもの、一つ。私にください」

「む……アテナ……？」

目を覚まして、最初に探したのはアテナの姿。そして目に入ったのは一つの書置き。

『ごめんなさい。私には皆の傍に、セツの隣にいる資格はありません。

後のことは任せてください。全部、終わらせてきっとセツたちが穏やかに暮らせるように、幸せになれるようにしてみせますから。さようなら』

泣きながら書いていたのか、涙でインクが滲み、文字はどれも書いていた時のアテナを表すかのように震えて掠れていた。

……なんだよ。

「なんだよ……！　資格って！？　後の事って何のことだよ！？　穏やかに！？　幸せに！？　ふざけんな！　どっちも俺は……」

わからなかった。あの男のたった一言で、なぜアテナが……。

「お兄ちゃん！」
「さだめ？」
「ごめんお兄ちゃん！　ついてきてたことは謝るけどそれよりも……」
「アテナが居なくなった！　お前たち、俺たちを見張ってたんだろ！？　アテナがどこに行ったか知らないか！？」
「……申し訳ありませんセツ様。わたくしとしたことが、何が何やらわからぬ内に気絶させられてしまいまして……」
「私たちも……色々あって呆然としてたから……」
「くそっ！　アテナがこんな書置き残して消えたんだ！　あの男……真中希望とか言う奴に何か言われて……それから様子が……」
「真中希望！？」
「知ってるのか！？」
「知ってるも何も、昨日さだめたちに接触してきたんだよ。それで……」
「詳しく聞かせろ！」

「何者なんだ……あいつは」
ルインがあっさりと、一瞬で倒されたという話を聞いて、流石に俺も絶句した。
「わからない……それで、アテナに囁いた言葉って……」
「『人生は、楽しいかい？』だった筈だ。それ以上の言葉は言ってなかったと思う」
「何かの言霊が含まれていた可能性があります。精神干渉の類の」
「それじゃ、アテナは……」
「決めつけるのはダメ。そうだとして、彼女に接触した意図が読めない」
「それは……」

「どちらかと言えば、私たちの気がつかなかった意味が、その言葉に含まれていたと考えた方がいい」
ルインの言葉に考え込む。『人生は、楽しいかい？』その言葉に別の意味……？
カサッ……。
「？　お兄ちゃん、何か落ちたよ」
「え？　あ、これはあいつから……」
海馬ランドのプレミアム招待券が入った封筒。その封が解けて、中身が少し出ていた。
「また物凄いモノくれたね……あ、これ！　手紙！」
「なに！？」
封筒を拾い上げたさだめがその中に入っていた短い手紙……というか紙切れを取り出して中を読む。
「えと『終焉は君たちのすぐそばに。鍵は天使の少女。過去を見つけ出せ』だって」
「なんだそれ……終焉が傍に？　鍵？　過去を見つけ出せ？」
「……天使の少女はアテナのことでしょ？　やっぱり」
「では、過去とはアテナの過去……ということですの？」
そういえば、俺はアテナの過去について何も知らない。家がどこに在るのか、家族構成は？　そもそもアカデミアに飛び級という時点で何か特別な事情があるのでは？　そういったことを俺は何一つ知らない。
「……一先ず、アカデミアに帰る」
「そうだね。学園長先生なら何か知ってるかもしれないし」
「アテナ……」
昨日のアテナの温もりを思い出す。唇に感じた感触は、今でもしっかり覚えている。
「何で……何でお前とのキスは……」
いつもこんなに、悲しいんだ……。

帰りの船の中、俺たちは全員表情を暗くして、まるでこれから誰かのお通夜にでも行くのかと言わんばかりだった。中でも最も落ち込んでいたのは……。

「さだめ、大丈夫か？」

「……あんまり」

さだめは仲直りしてからアテナとはぶつかり合いながらも仲良くやっていた。多分……いや、間違いなくアテナはさだめにとって初めてできた友達だった筈だ。その失踪が辛くないわけがない。

「違う……」

「え？」

「違うよ……わかってるでしょう？　別に鈍感じゃないもの“兄さん”は」

「……俺と、アテナのことか？」

「……いつもそう。いつも“わたし”は後れを取る。これだけ好きなのに。好きな気持ちじゃ絶対に負けてる気しないのに。なぜ？“わたし”の何がいけないの？　“わたし”が劣ってる部分って何？　どうして“わたし”じゃダメなの？　答えて……答えてよ。“兄さん”！！」

「っ！」

何だ……？　さだめの奴、人称が……。

「っ……なんでもない。忘れて。“さだめ”、もうちょっと外で風に当たってくるから……」

ズズッ……。

「っ！　さだめっ！」

ゆっくりと振り返るさだめ。そこには、覇気こそなかったが一応いつものさだめの幼さの残る顔があるだけだった。

「……何？“お兄ちゃん”」

「……いや、なんでもない」

さだめはそう、とだけ呟いて静かに船室から出ていった。さだめ……。

「っ……！　ダメ。なんで、こんな……イヤ……また、乗っ取られるのだけは……」
――それが、お前の本質だろう？――
「っ……あっ、くぅ……！」
――憎らしかろう？　後から現れてあっさり掻っ攫って行ったあの色魔が。あの天使とは名ばかりの淫魔が……と――
「やめて……なんで、また……」
――滅びぬ……その心の弱さがある限り、我らは幾度でも現れて貴様らに“終焉”を与えよう……――
「さだめは……もう……“わたし”……は……」
――醜い心を剥き出せ……汝が本質を受け入れよ……汝にとって最も大事なものは何ぞ……？――
「お……兄ちゃん……“兄さん”……兄さんッ！　兄さんッ……！」
――そうだ……お前のモノだ……――
「わたしの……兄さん……！」
「っ！　大丈夫？」
「っ！　はっ……ルイ……ン？」
「イヤな感覚がした。肌がチリチリするような……気持ち悪くて、吐きそうなくらいの嫌悪感……」
「あはは、多分、ちょっと船酔いしちゃっただけだよ。しばらく風に当たって行ったら？　“さだめ”もさっきまでちょっと具合悪かったんだけど、だいぶ良くなったから中に戻るね？　ルインはもう

ちょっと風に当たって行くといいよ」
「……ん」
ルインをその場に残し、さだめは船室へと戻る。
「そう……船酔い、なんだよ。きっと……」

「わたくしは……」
セツ様の役に立っているのでしょうか？　シャルナ様ではありませんが、いつもいつも大事な時にいつも役立たずで……今回だって、知らない内に気絶させられて……。
「せめて……これだけでも早く完成させましょう。セツ様の身を守るため……少しでも心の支えになれるように」

アカデミア校長室。
俺たちは定期船から降り、島に着くなり荷物を置くことも忘れて校長室へ駆け込んだ。
「ふむ……そうですか。そんなことが……」
「はい。それで、できればアテナの事を教えて欲しいんです。もちろん、個人情報だから無理なら……」
「いえ、そういうことでしたら。それに、アテナ君も君たちになら、嫌とは言わないでしょう」
鮫島校長は快諾してくれて、アテナの入学用の書類を探しに行ってくれた。しかし……。
「馬鹿な……」
「どうしたんですか？」
「ないのです……アテナ君の入学願書やプロフィール。家庭事情などの情報も……」

「そんな……」
アテナの情報が根こそぎ消去されている？　誰が、何のために？
「まさか、またあいつか？」
「考えにくい。彼は怪しかったけど、立場的には私たちの味方である筈。過去を見つけろと指定してきたのに、それを妨害するのは筋が通らない」
「じゃあアテナ本人が処分……」
「それも不可能ですわ。わたくしたちは今日、朝一番の定期船で戻りました。そして脇目も振らずこの校長室に来ましたし……セツ様、昨晩アテナ様を最後にお見かけしたのは何時頃になりますか？」
「え？　ええっと……よく覚えてないけど、少なくとも深夜だった」
「……では、その頃にはこの島への定期船はありませんし、可能性は消えましたわね」
何も聞かないでくれるのは優しさなのかただ気がついていないだけなのか。
「……」
「さだめ？」
「いいよ。続けよう。とすれば、始めからなかったと考えるのが有力だよ」
「ですが、それではアテナ君は始めから入学していないことに……」
流石にそれは荒唐無稽すぎるな。
「そもそも校長。アテナは飛び級みたいですけど、どういう経緯で？」
アカデミアに飛び級するくらいだからなにか特別な理由があるのでは？　そう考えての質問だったが、鮫島校長の返答は予想に反して困惑したものだった。
「いえ……そもそも改めて考えてみると何故アテナ君を入学させたのか、その辺りの記憶もあやふやで……」
どういうことだ？　アテナに繋がるもの全てが消えている。でも、誰もアテナについての記憶を失ったりしているわけではないので消

失した、というわけではないはず。じゃあ……？
「……部屋に行ってみよう。何かあるかも」
「そ、そうだな。ここに居ても仕方がなさそうだ」
「うむ。私の方でもアテナ君の捜索と情報の検索は進めておこう」
「お願いします」
アテナ……本当に君は一体何者なんだ……？

「部屋は……特に変わりないね。昨日部屋を出た時と変わらないと思う」
「後は、家探しでもするしかありませんわね」
「……流石に、俺はやめておいた方がよさそうだな」
「任せて」
女性陣に捜索を任せ、俺は部屋の前で待つ。
「あれ？　セツ君、どうしたの女子寮で……」
「ユーキちゃんか？」
「うん。そこ、アテナちゃんのお部屋だよね？　アテナちゃん、そこにいるの？」
「……いや、実は……」

俺はユーキちゃんにも事の経緯を話した。
「そっか……そんなことが……」
「ユーキちゃんは、何か聞いてないか？　アテナの昔の話とか」
「うーん……そういえばアテナちゃん、そういう話何もしてなかったなぁ……セツ君も知らないのにわたしが知ってることもないかもだけど」
「そっか……そうだよな」

「ん。とにかくわたしも協力するよ……って言ってもどうすればいいのかわかんないけど」
「いや、ありがとう」
正直、俺たちだって何をどうすればいいのかわからないんだ。協力してくれる。その言葉だけで随分と救われるもんだ。
ガチャ。
「どうだった？」
アテナの部屋から顔を出したルインたちに成果を聞く。ルインは懐から数枚の写真を……ってそれは。
「キミの隠し撮り写真。中々巧妙に隠されていた」
「けどまあ無駄だよ。さだめたちにかかればそんなもの、隠し通せるわけないもん。っていうかよくお兄ちゃんに気付かれずに撮れたよね。さだめ、いっつも失敗してるのに」
それは信用してるかどうかの違いだ。
「っていうか何を探してんだ何を！　アテナの事はどうした！？」
「いえその、特に何も見つからずこれが見つかったので……」
「探し物や片づけをしてる時、ふと目に入ったもので注意が逸れることって……よくあるよね？」
「今そんな場合か！？」
この期に及んでそんなバカみたいな……。
「ユーキちゃんからも何か……」
「セツ君の写真……」
ちくしょう！　味方が居ない！
「っていうかお兄ちゃん動揺し過ぎ」
「え？」
「アテナ様が居なくなったことはショックでしょうが、焦りは何も生みませんわ」
「いつも自然体。それがキミ」
「みんな……」
そうか……そうだったな。アテナが居なくなったこの状況でも、

下手に焦ったらダメ……。
「いや、それでも馬鹿してる場合でないことも事実だろ」
「バレたか」
バレないでか。っていうか危なく流されるところだった。
「でも実際何も見つからなかったことは本当だよ」
「この部屋に在ったものは全部、この島で買ったと思われるものばかり」
「アルバムや日記帳のようなものもありませんでしたわ」
「徹底的に過去を感じさせるものがないのか……アテナ」
「うーん……あ、過去と言えば」
「何か知ってるのか？　ユーキちゃん！」
「セツ君が初恋だって」
「……そうか」
役に立つ情報ではなさそうだった。いや、嬉しくないわけではないが。
「しょうがない。とりあえず荷物を置きに部屋に戻るよ」
「そうだね。いつまでもここにいても仕方ないし」
「そうだね～さだめちゃんはもうすぐ入学式なんだし、準備もあるよね」
……？
「ああ！　そういえばさだめはまだ中等部だったか！」
一瞬ユーキちゃんの言葉に首をかしげた俺たち（さだめ本人も含む）だったか、ようやく思い至った。
「最近あまりにもさだめが居るのが普通になっていたから」
「そういえば、さだめって今度入学式だっけ。すっかり忘れてたよ」
「忘れてたって……さだめちゃん、自分のことなのに……」
「……ともかく、そういうことなら尚更一端解散するべきだろ。アテナのことは……また改めて考えよう」
可能性としてはシャルナだが……あのちゃらんぽらん天使が知ってるかどうか怪しいし、それにアテナについて行っているのなら連

絡を取ることも難しい。
「そうだ……それにアテナのこと以外でも考えることは山ほどある」
真中希望が残していった言葉はどれも謎めいていて、解読することからして難しい。が、それを一つ一つ解いていけばアテナ失踪にも繋がるかもしれない。
「アテナ……言っただろうが……お前を離さないって」
なのに。だから。
「絶対連れ戻してやるから覚悟しておけ。アテナ」
俺はどこにいるとも知れないアテナに向かって自分の決意を固めたのだった。

第二期最終話「確かなもの、一つ」（後書き）

こんにちは。

これで第二期分の改訂完了。……すごいですね。事情さえ知らなければ凄まじい更新速度だと思います。ええ、事情さえ知らなければ。ほぼ全て大した変更点もなしにここまでアップしただけですからね。ぶっちゃけ二期分は一々削除しなくても良かった気がします。今更ですが。

それでは、悠でした！

第三期第一話「全略」

アルカナ～切り札の騎士～
第三期第一話「クルンテープマハーナコーンアモーンラッタナコーシンマヒンタラーユッタヤーマハーディロッカポップノッパラットラーチャターニーブリーロムウドムラーチャニウェートマハーサターンアモーラピマーンアワターンサティットサッカタティヤウィッサヌカムプラシット」

アテナが失踪して数日。俺の周りはとりあえずの平穏を取り戻していた。

あの後、間違いなく何らかの情報を握っているだろう真中希望に連絡を取ろうとしたのだが、相手は大企業の会長ということもあって全くつかまらない。ならばと以前番号を交換した光にかけてみるのだが留守電になるばかりだ。

「八方塞……か」

「大ニュース！　大ニュースッス！」

はぁ、と溜息を吐いたセツたちのところに翔が息を切らせてやってきた。

「どうしたんだよ。そんな慌てて」

「今日の入学式、あの水原凛ちゃんが入学するらしいッス！」

「何ィ！？　水原凛だと！」

……。

しかし、反応したのは万丈目だけだった。

「って、なんでみんな無反応なんスか！？　あの小悪魔リンちゃんで有名なアイドルデュエリストの水原凛ッスよ！？」

「いや、オレそれが誰だか知らねえし」

「さだめも知らない」

「わたくしたちが知っているとでも？」

「……私はテレビを見ない」

十代を始めとして、皆一斉に首を振る。
「……ここまで世情に疎い人たちばかりだったとは知らなかったッス」
「お前と万丈目がミーハーだから丁度いいんじゃねーか？」
「さん、だ。それに俺様は別にミーハーなわけじゃない！」
例によって十代にかみつく万丈目は置いといて翔はやっぱり興味無さ気にボケーっとしていた剣士と俺に矛先を向けた。
「剣士くんも知らないッスか？」
「ああ。別にアイドルとか興味もねえしな」
「セツ君も？」
「御堂切の無駄スキル。有名人を記憶できない程度の能力」
「ついに出たッスね……本当の本当に無駄スキル……」
仕方ないだろ。現実を生きるのに一杯一杯なんだ。テレビにまで脳細胞を消費したくない。アニメやらはそこそこ見てたけどこっち来てからはデュエルなんていう最高の娯楽があるわけで。俺のテレビ離れはどんどん深刻化していったのでありました。まる。
「はぁ……」
そして俺は今絶賛憂鬱中。見たこともないアイドルではしゃぐ元気はない。
「重症だな……おいセツ。世界一長い名前を持つ首都の名前は？」
突然三沢から投げかけられた質問に訝しみながらも、俺は答えを返す。
「クルンテープマハーナコーンアモーンラッタナコーシンマヒンタラーユッタヤーマハーディロッカポップノッパラットラーチャターニーブリーロムウドムラーチャニウェートマハーサターンアモーラピマーンアワターンサティットサッカタティヤウィッサヌカムプラシット」
「……どこだそれは」
「タイの首都」
「え？　バンコクじゃないんスか？」

「正式名称だ」
「つーか三沢、お前は答えを知ってたのかよ？」
「……正直すまん。バンコクだ、ということは知っていたが正式名称までは覚えていなかった」
「っていうかもう一度言ってくれないかしら。とても覚えられそうにないわ」
明日香がコメカミを抑えてリピートを要求してきたので仕方なく復唱する。
「クルンテープマハーナコーンアモーンラッタナコーシンマヒンタラーユッタヤーマハーディロッカポップノッパラットラーチャターニーブリーロムウドムラーチャニウェートマハーサターンアモーラピマーンアワターンサティットサッカタティヤウィッサヌカムプラシットだ」
「……ごめんなさい。例え何億回聞いたところで覚えられそうにないことがよくわかったわ……」
「別に『寿限無寿限無五劫のすりきれ海砂利水魚水行末雲行末風行末食う寝るところに住むところやぶら小路ぶら小路パイポパイポパイポのシューリンガンシューリンガンのグーリンダイグーリンダイのポンポコピーのポンポコナーの長久命の長助』を覚えるのと大差ないだろ」
「……現代日本でそれを丸暗記している高校生が一体どれだけいるのかしらね」
本職なら。↑素人
「……そもそも、三沢はなんのためにこんな質問したんだ？」
「いや……例え憂鬱でも頭脳スペックは変わりないようだな」
そういうのは馬鹿が落ち込んでいる時にとる手段だろう。十代とか。
「オレ、例えどんだけ落ち込んでもあんなもん答えられる気がしないぜ……」
「そもそも知っていても即答できる人はまずいない。普通。さすが

キミ」
　ルインに褒められた。ちょっと癒された。
「……」
「……どうしたんですの？」
「ううん。ちょっと……ねえお兄ちゃん。ちょっと来て。あ、さだめはそのまま入学式の会場に行くから」
「ん？」
　さだめに引っ張られて教室の外に連れ出される。周りに聞こえないようにヒソヒソと小声で耳打ちしてくる。
「ねえ、水原凛なんていう新入生、原作にいたっけ？」
「……悪い。俺ももう殆ど原作は記憶に残ってなくてな。でも、確かにちょっと違和感はあるな」
「イレギュラーの可能性が高いよ。お兄ちゃん、とりあえず整理しよう？　今現在判明しているイレギュラーは……」
　さだめが指折り数えていく。
「とりあえずさだめとお兄ちゃん。ルインに希冴姫さん……だけど精霊まで含めたらかなりの数だね。ジャックやキングもそうだし、ヴァンダルギオンやゴーズたちだってそうだもん。後人間では剣士さんと……アテナ」
　ピクッ……。
「アテナは……その中でも特別なのかも。真中希望の置き土産からすればね」
「真中希望……」
　正直複雑だ。どうも俺たちに助言してくれているようだが、その所為でアテナは失踪してしまった。それは絶対に許すことができない。なのに……。
「くそっ……」
　行き場のない怒りを言葉として吐きだす。あいつの眼は真摯だった。とても俺たちを陥れようとか仲を引き裂こうとか、そう言った悪意のある感じじゃなかった。それでも実際にアテナは失踪して…

…。俺の感情はあいつを許せないのに、冷静な部分はあいつに罪があるわけじゃない。アテナ自身になにかがあったから、だからアテナは自分から姿を消したんだと主張する部分もある。こんな時、自分の二面性が嫌になる。

表層……俺の仮面。感情と、深層……素の俺自身。仲間想いでアテナに惹かれていて……いつもの俺自身は消えたアテナを心配し、すぐにでも飛び出していきそうなのに、俺の根っこが邪魔をする。

「？　どうしたのお兄ちゃん」

さだめが、ここにいる。俺にとっての唯一無二、絶対不可欠な肉親。絶対に一人にしないと誓った。支えであり続けると。

「はは……」

ルインの言ってた通りだ。俺は、病んでいるよ。

「さだめ……」

「なに？」

「いや……入学式、がんばれよ」

「？　うん……まあ頑張るっていったってさだめは特にすることもないんだけど」

怪訝そうな顔をするさだめは、じゃあ先行くね。といって入学式に向かって行った。取り戻した素のさだめ。やっぱり素でも困る奴だけど、それでも愛しい妹。

素のままの俺は、このままでいい。このままさだめを、さだめだけを守り続けていれば。そんな風に考える。

「いや……もうどっちが素の俺なのか、わからないな」

アテナを心配している俺と、さだめだけを守り続けようとしている俺と。

「仮面（ペルソナ）を被り続ければいつかそれが真実の顔に……か。結局、どっちが真実かわからなくなっただけみたいだな……」

俺は自嘲気味にそう呟き、皆が待っている教室へとゆっくりと戻るのだった。

事件は、やはり入学式に起こった。
翔の言っていたなんとかというアイドル（無駄スキル発動中）が入学するからか、今年の入学式には数台のカメラもやってきているようだ。しかも生特番。なるほど翔が騒ぐのもわかる話題性だ。
『えーそれでは新入生代表の言葉。新入生代表、御堂運命君』
この時点で良い予感は欠片もしなかったことはまあいい加減言うまでもないことだろう。
鮫島校長（何故さだめを代表にしたし）の言葉にはい、と答えて静々と壇上に上がるさだめ。だが俺にはわかる。あいつ、真剣そうに全体を見つめている振りして俺に全神経を集中させてやがる。お兄ちゃん聞いててね（はぁと）みたいなこと考えているのが丸わかりだ。
静かに壇上に上がり、真剣な表情でゆっくりと原稿を開きコホン、と一つ咳をして……。
『……みなさん。禁忌に萌えましょう』
……なんのこっちゃ。
会場にいる全員と、恐らくはテレビの前の皆さん方も含めて一言で混乱に陥った。
『禁忌はさだめの神経回路を甘く刺激し禁断という文字に甘く切ない快楽を覚え背徳の響きはさだめの心を震わせます。具体的には兄萌え。って言うかお兄ちゃん萌え。禁忌に足を踏み入れることに躊躇することはないの。四十過ぎのオジサンが幼女を略取し大の大人が未成年を己の城に監禁し団地妻に三河屋さんが欲情する。そこに共通する言葉は即ち禁忌！　禁断！　背徳！　人はその言葉だけで遥かなる高みへと至れるの。具体的に言えばお兄ちゃん愛してる。それだけでさだめの精神はかつてない高みへと至りああそろそろ我慢できなく』
「希冴姫ぃぃぃぃぃ！　ルイーーーーーーン！　ヤツを止めろぉ

おおおおお！　これ以上公共の電波にヤツの言葉を乗せるなぁぁぁぁぁぁ！！」
「御意！」
「了解」
『ちぃぃ！　余計な邪魔を……お兄ちゃんのイヌめ！』
『違う。雌犬』
「希冴ぁぁぁぁぁぁ姫！　そこのアホもまとめて摘み出せぇぇぇぇぇ！」
テレビに生出演してなんたるアホを！　何たる毒電波を公共の回線に流してしまったんだ！　放送事故だよこれもう！
『なんで！？　さだめのこの実兄に対する溢れんばかりの愛を全世界に知らしめようとして何が可笑しいの！？』
「マイクを離せそこのモラルハザァァァァァァド！！」
『所詮は一方通行の愛。その幼児体型で何を吠える。彼は私に責任を取ると言ってくれた』
「おんどりゃどこまで俺を貶めれば気が済むんじゃダァホォォォォォ！！」
何故マイクに向けて言うし！
「そしてＡＤの皆さんも何奴らにカメラ向けちゃってんの！？　放送事故にも程があるだろ！？」
『近親相姦を禁じるこの世界など滅びてしまえぇぇぇぇ！』
『異種族でも婚姻を結べる法律を作るべき』
終わった。ただの入学式で特番が組まれるほど注目されているアイドルが来ている時に全国のお茶の間に毒電波を生放送。ぶっちゃけ俺以上にデュエルアカデミアが終わった。
「これが……っ！　終焉かっ……！？」
シリアスな展開を予想していたところを途方もないギャグ展開で俺と共にデュエルアカデミアを終焉に導くなんて……なんて知能犯だ！　終焉！

……なんてアホな話があるわけもなく。
希冴姫がなんとか毒電波の発信元を排除し、俺や鮫島校長。クロノス先生たち教師陣でどうにかこうにか場の混乱を収束させ……何より助かったのは空気を呼んでくれたらしいアイドルさん（相変わらず名前覚えてない）が上手く場を取り繕ってくれたことだな。これは後でお礼の一つもせねばなるまい。
「で、なにか申し開きはあるか？」
そして現在、俺はさだめとルインを目の前に正座させての説教タイムである。
「さだめ的には大方満足。でも出来れば決定的瞬間の一つや二つは見せつけたかったな」
「……微妙に不満。彼女と違ってウソは一つも言ってないのに」
「黙れ痴れ者コンビ。なんとか……本当になんとか何事もなかったかのように処理されたから良かったものの、一歩間違えればアカデミアが問題になるばかりか俺は臭い飯を食うはめになっていたかもしれん」
しかも事実無根の近親相姦的な意味で。
「……大体、なんでまたこんな暴挙に出たんだ。さだめ」
如何にこのモラルハザードといえど、特別理由もなくここまでの騒動は起こさないだろう。そもそもそんなに人前に出たがるタイプでもなし。
「……だって」
これまた珍しいことにさだめが拗ねたような表情をしていた。
「だってお兄ちゃん、最近落ち込んでばっかり。いっつもアテナのことばっかり考えてるし、なんかちょっとピリピリしてるし」
「……それ、は……」
否定できない。アテナの失踪から数日。そんなすぐに立ち直れるほどアテナという存在は俺の中で小さくない。

「そんなこと、さだめだって知ってるよ。だから思い切り爆発させたんだもん。あれだけ叫べば少しくらいマシになったんじゃない？」
「……どうかな」
そう言いつつも、俺の顔には軽く笑みが浮かんでいるだろう。
「……それにしたって、もうちょっとやり方というものがありますわ。あれでは……」
「日本中にさだめとお兄ちゃんの爛れた性活（誤字にあらず）が生放送。これで公式。既成事実どん。やったね！」
「俺は旅に出る。とりあえず富士の樹海あたりまで」
或いは一生引き籠って衰弱死する方を選ぼうか。
「そして全国生放送ってことは……誰かさんも見てたかも、ね？」
え……。
「だって人気アイドルの入学式生放送だよ？　まあ全国各地とまでは行かなくても、結構色んなところで放送されて色々話題にもなるでしょ」
「……確かに、そうなればセツ様に御執心のアテナ様のこと」
「黙ってはいない」
「まさか……さだめお前……」
「まあ望み薄だけどね。とりあえずお兄ちゃんを励ます、全国に既成事実を垂れ流すの二つは達成できたわけだし、一石二鳥であわよくば三鳥って感じかな」
「……感謝すべきところなのかもしれんが、達成されてはならない事項も同時に達成されてしまっているので素直に感謝できない」
でも、結果元気づけられたのは事実なわけで。
「……いやしかし、さだめに借り一つというのは即ち婚姻届にサインすると同義！　ここで迂闊な返事はできない！」
「……ちっ！」
「ほらやっぱり舌打ちとかしてるし！　うわあっぶねーっ！　もう少しで真の策略にはまるところだった！」
「貴女は姑息」

「その姑息な策略に便乗した貴女の言えたセリフではありませんわ」
「一人だけ気がつかなかった脳筋姫は哀れだねー」
「なんですって！？」
そして、いつもの調子で馬鹿騒ぎ。
きっと皆気がついている。俺が無理してること。
少しマシになったのは事実。でもそう簡単に立ち直ることはできなくて。
でも……しばらくは、なんとかやっていってみるさ。
「から元気は、俺の得意技だからな」
いつかルインにもそういったのだから。

――真中グループ会長室。
「……もう。この子たちは馬鹿なのかどうなのか……」
呆れたような様子を見せる光に対し、真中希望はただ楽しげに口元を緩ませている。
「愉快な子たちじゃないか。それに、これは経過確認でもある」
「経過確認？」

「そう。考えてみてくれ。そもそもデュエルアカデミアに明確な入学式なんていうイベントはない。いいや、“なかった”んだ」
「あ……」
確かに希望の言う通り、セツたちの入学時……即ち前年度には普通の学校が行うような入学式は存在しなかった。
「しかし、今はある。順調に世界が変質していっている証拠だよ。言いかえれば、歪みの具現でもある」
「でもほら、今年はアイドルの子が入学したから……」
「そもそもそのアイドル……水原凛自身がイレギュラーだからねぇ」
希望は苦笑する。あらゆるところに齟齬が出来始めている。
「さて……ここまで本来の歴史とズレが生じているわけだけど……彼の方はどうなっているのかな」
「ああ……そっちも気にしなくちゃなんないのね。メンドクサイわ……」
心底嫌そうに溜息を吐く光を宥める。
「仕方ないさ。これでも一応この世界の平和を守る立場にあるんだ。職務は全うしなければね」
「――希望様」
スッ、といつの間にか背後に近寄っていた秘書が次の仕事の予定を促す。
これからまた分刻みで仕事が待っている。そう考えるといくら希望でもうんざりしてしまう。
「……やれやれ。君よりよほど忙しい身の僕を労って欲しいね」
光などよりよほどかったるそうに希望は腰を浮かし、秘書を従えて会長室をあとにするのだった。

第三期第二話「異常と普通」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第二話「異常と普通」

入学式の騒動の後、俺はさだめを連れて一連のお詫びをアイドルさんにするため一年教室へと向かっていた。
「お？」
途中にてボケーっとしている剣士を発見。話しかけてみる。
「よ。どうしたんだ、なんか黄昏てるみたいだけど」
剣士は俺たちを一瞥すると、表情の読めない顔で皮肉った。
「よう、変態兄妹」
「いかにも」
「肯定すんな。つか、剣士もやめれ。違うっつーに。お前だって知ってるだろ」
「……おう。まーな」
「本当にどうした？　随分へこんでいるっつーか、自己嫌悪ーって顔してるぞ」
「ったく。なんでテメエはそうムカつくくらい鋭いんだよ」
溜息と共に吐きだすような言葉だった。
「鋭かないさ。鋭かったらアテナに逃げられたりしてないって」
アテナの件については剣士にも説明してある。思いっきりぶん殴られたけどな。あれは痛かった。と、それはいいとして。
「それで、結局どうしたんだお前は」

「……なんでもねえよ。テメエの言う通り自己嫌悪してるだけだ」
「ふむぅ。それならどうだ？　俺に悩み相談してみないか？　なに、心配するな。これでも俺は相談された悩み事を即座に解決する程度の能力持ちだ」
「……そりゃ嘘だな」
「なんと。その根拠や如何に？」
「お兄ちゃん、さだめ、お兄ちゃんが好きすぎて悩んでいるの。この股間から溢れそうな激情を解決して！」
「その御相談にはお答えすることができません」
「ホレ見ろ」
「っは！？　つい条件反射で！　いやしかし安心しろ剣士。何事にも例外は付きもの。少なくともさだめは例外中の例外だ。さあ、遠慮せずに話しかけてみるといい」
返答は呆れかえったような溜息だった。肯定の溜息。
「お前らはさ、なんでそう在れるんだ？」
「ん？　どういう意味だ？」
剣士の言葉の真意が掴めず、首をかしげる。
「お前らはさ、そう。どう考えたって異常だ」
入学式の一件、だけではないだろう。
「……そうだな。返す言葉もない」
俺もさだめも、一般的とはかけ離れた人間性や行動をしている。その自覚はある。
「で、今の社会って奴は腹立つことに“人とは違う”ってことに敏感だ。オレならこのチンピラめいた容姿。お前らなら行動全般。そういう異端ってのは当然のように排斥されるのが普通だ」
「そうだろうな。俺はともかく、さだめは大分その煽りを食ったと言っても良い」
「けどよ。お前らはそうしていつでも明るく自分らしく、幸せそうに馬鹿やってる。ここの奴らも全然お前らを差別したりしねえ。良いことだ。わかってる。わかっちゃいるが……」

「納得いかない？」
「……ああ」
前に軽く話を聞いただけだが、剣士は昔から大分イジメに遭ってきたらしい。もちろん、直接的なイジメとかじゃない。剣士の眼つきが悪く、恐怖の対象となってきたために友達といったものがまるで作れなかったということらしい。
「こんなこと言いたかねえが……お前らは異常で異分子だ。そんなお前らが楽しく普通の学園生活を送れているのが納得いかねえ」
「なるほど」
俺は思わず苦笑した。遠慮するなとは言ったが、ホントに直球ど真ん中で来たな。
「わかってんだよ……別になんも悪くねえ。ただ、オレが周りに溶け込めなかったのになんでって……くだらねえやっかみだってわかってても……考えちまうんだ」
だから、罪悪感で自己嫌悪してたわけだ。
「いいだろう。その悩みにお答えしよう。さだめ」
「あい？」
「お前、俺のことどう思ってる？」
「モノにしたい犯したい食べちゃいたい具体的に言うとえっ「もういい黙れ」ちぇー」
ったく……まあいいか。
「このようにコイツは異常者なわけだが……さだめ、お前のその異常のこと自分ではどう思ってる？」
「別にどうも思ってないよ。さだめがお兄ちゃんを好きで愛していて今すぐにでもベッドインしちゃいたい気持ちにウソはないもの」
「だ、そうだ」
「それがどうしたってんだ」
「さっき、お前は言ったな。異端は排斥されるものだと」
「ああ。違うか？」

「いいや。違わない。人間なんてそんなもんだ。じゃあどうすれば排斥されなくなると思う？」
「……それがわかるなら、オレは……ってかこの世界に差別される奴なんかいねーよ」
「そうか。俺はその問いに即答できる自信があるぞ。異端じゃなくなればいいってな」
世界は複雑だが、答えってもんは常にシンプルなもんだ。
「異端じゃなくなればって……それこそできるなら誰だって……」
「剣士の今考えていることとは違う。俺が言っているのは、物理的な問題じゃなく、もっと観念的、或いは精神的な問題だ」
剣士の場合で異端じゃなくなる。例えば整形するとかだが、俺が言っているのはそんなこっちゃない。んなことしたってどうせまた「あいつ整形してんだぜー」とかって異端視されるに決まっている。
「そもそも差別や異端視ってもんが人間の精神的な病の一種だからな。意識改革こそが差別をなくす唯一の道だ」
「……社会風刺染みた説法はいい。結局どういうことだよ」
「要するに、だ。他者に対して自分は異端ではないと思わせれば勝ちだ、ということさ」
「あ……？」
「例えば剣士。ルインは少なくともう千年は生きているそうだ。どう思う？」
「そりゃ……精霊なんだからそういうのもあるんじゃねぇのか？」
「そうだな。精霊だからそれもアリだ」
剣士には俺の言いたいことがまだ上手く伝わっていないようだ。
剣士の奴も普段は意外と頭も良いが、今回は事が事だけに頭の回転が鈍くなってるな？　前回俺とデュエルした時もそうだが、自分のコンプレックスに関する事例になるとコイツは極端に処理能力が落ちるな。それだけトラウマなんだろうが。
「つまり、ルインは精霊だから千年生きていても“普通”だ、とお前は認識している。が、他の極々“一般的”な見解で言えば、千年

以上も生きる生命体なんて異端中の異端だ。俺やさだめなんかメじゃない」

「おい……お前そりゃ」

「それなら話は簡単だ。周囲に対し、俺やさだめは『異常であることが普通』だと思わせてやればいい。俺たちは異常だ。それが普通だ。だから俺たちは異常じゃない」

正に、コペルニクス的転回。

「いやいやいや、お前今相当飛んだぞ。端から端に、一気に」

「元々異常かそうでないかの二極しかないんだ。そりゃ飛ぶさ」

表と裏に中間はない。表でなければ裏である。異常でなければ普通である。

「……なんつー強引な論法だよ」

「だが、現に俺たち兄妹はこうして普通に、幸せそうに過ごしている。それはお前が言ったことだろう？」

論証に於いて最も証明が簡単なのは結果論だ。だって今こうだもん。と言ってしまえば数ある反論は無意味な文字の羅列と化す。

要するに俺とさだめが異常である、ということが周囲にとっては普通になっているわけだ。普通の存在は早々排斥されない。排斥されるには何かしら特別が必要なんだ。

「だからさ。お前もただ“らしく”してろ。そうすりゃ自ずと周りがお前にチューニングされてくさ」

自分で自分を異常だと思ってりゃ周りだってそういう風に扱う。こいつはこういうもんだと周りに錯覚でも何でもいい。認識させてしまえばこっちの勝ちだ。

「かの偉人。アインシュタインはこう言ったそうだ。『常識とは、人が二十歳までの間に集めた偏見のコレクションのことを言う』と。実に全くその通り。俺たちは俺たちが設定した認識の上に生きている。ならその認識を味方にしてしまえばもう怖いものなしだ」

「暴論だ……」

「暴論をまかり通せ。お前の普通を世の中の普通にしてしまえ。そ

うすりゃ誰もお前を異端とは扱わない。お前は普通で居られる」
　自分とその在り方に誇りを抱く事。イジメを受けていようがなんだろうが、きっとそれさえできれば世界はきっと優しい。
「少なくとも、俺はそうやって生きてきた。後悔もするし間違いも犯す。でも死ぬ間際にでもそれを笑って思い出せれば俺の勝ちだと。そう思って生きてるよ」
　どうせ後悔しない人生なんか夢幻。なら死ぬ間際まで誇り高く。自分の選び歩んだ道を。
「ま、カッコいい事言っては見たが、結局は剣士の心の持ちようで世界は変わるぞってことだよ」
「お兄ちゃんは説明が長い。最後の一言だけでもよかったじゃん」
「俺だって偶には語りたくなることだってある。タダでさえ今は色んな事が続いてナイーブになってるんだ。少しくらい語ったって罰は当たらんだろ」
　物を語るってのは気持ちを落ち着けるのにちょうどいいんだ。で、その鎮静効果は相手にも及ぶ。だからみんなして物語を書いては読んで楽しむんだろうさ。
「……ったく。オレにゃどーにも理解できねえな」
「ありゃ、そーなの」
「だから、もうちっとお前らの在り方っつーもんを見学させてもらうぜ。退屈しなさそーだし」
「今に退屈な日々が恋しくなるよー」
　まったく同意だ。どう考えてもロクなことにならんのは目に見えている。
「不吉な予言すんなよ。まあいい。ところでお前ら、どこ行こうとしてたんだ？」
　おっと、そう言えば当初の目的を忘れるところだったな。
「いやなに。あの入学式の騒動で随分迷惑かけたからな。そのお詫びと礼を言いに行こうと思って」
「つーと、あのなんとかっつーアイドルのとこか？」

「そうそう。そのなんとか」
「……この今からお詫びと礼に行く相手に対する認知度の低さは我がお兄ちゃんながら酷いもんだよね。まあお兄ちゃんに下手に女の名前覚えて欲しくないから好都合と言えば好都合なんだけど」
仕方ないだろ。無駄スキル発動中なんだから。
「確か……んー水属性！」
「水原だよ。デュエルに関係あるとこだけ抜き出して覚えてるのはある意味すごいけど」
「おおそうだ。そんな名前だ。良く覚えてたな」
「これから挨拶に行く相手の名前くらいは把握してるよ。ってさだめに常識を語らせないでよ。なんか似合わな過ぎて寒気してきた」
「俺もだ」
「……だから、てめえらはどんな兄妹だよ」
常識を語ると微熱症状が出るくらいだ。特に可笑しくない。
「可笑しいっつの」
そんな会話をしつつ一年生の教室前。
「……あれ、つかなんでオレはここまでついて来てんだ？　オレ関係ねえじゃねえか」
「ま、ここまで来たんだからついでになんとかってアイドルの顔くらい拝んで行けばいいだろ」
「お兄ちゃん、もう名前忘れたの？」
忘れた。
「水原だろ。下の名前は知らねえが」
「凛だったと思うよ」
あー、そんな名前だったか。五秒後には忘れている自信があるが。
「それじゃあえーと……水ー！」
「「忘れるの早っ！」」
呼びかけてみたが、案の定それじゃあ誰を呼ばれているのか判別できなかったらしく、初々しさの残る新入生たちは困惑気味に顔を見合わせるのみだ。あと、微妙に怯えの色が見て取れる。

「まあ入学式で散々問題起こした兄妹とヤクザもびっくりな眼つきの上級生がつるんで現れたらビビりもするよね」
ごもっとも。
「えーと、水原さんいるー？」
ちょっと待て。今更だがさだめも新入生の一員。要はこいつらと一緒に教室内にいる人間なんじゃないかよく考えたら。
「……まあさだめのことを深く考えることほど無駄な時間もないか」
「酷っ！　まあいいけど」
「あの」
兄妹揃って不毛なやり取りを始めると、何やらすんごく顔立ちの整った黒髪の女子生徒の姿。
「ん？　なんか用か？」
「え？　いえ、先輩方が私に用があるのでは……」
つーとあれか。この女子が。
「水」
「原凛ね。いい加減覚えてお兄ちゃん」
「ああすまん。実はな。入学式の件で大分世話になったから、一応お詫びと礼を、な」
「そうですか。まあ大分はっちゃけてくれましたしね。主役で特番組まれたのに脇役でフォロー役やらされるとは夢にも思っていませんでしたし」
流石に度胸あるな。アイドルさんは。あんな騒動巻き起こした連中に対してここまで強烈な皮肉を言える奴は早々いない……いや、なんか知り合いの奴らはみんなできそうだが。
とはいえ、この子はちょっと作ってる感があるな。かなり隠してるけど、結構な緊張感に溢れているようだ。んーキャラ作り？　まあアイドルならそういうのも必要だわな。
「私の顔になにか？　それで、先輩と御堂さんはともかくそちらの……？」
「あ……？」

む？　なんだ？
「剣士さんはただの付き添い。というか流れでついてきただけだよ。何か気になるの？」
「……いえ。なんでも。ちょっとデジャ・ヴュを感じただけです」
「……オレも似たようなもんだ。で、オレは戦野剣士」
「御堂切な。こっちは妹のさだめ。クラスメイトになってるから仲良く……うん。仲よくしてくれると兄として嬉しい」
ちょっと仲良くは厳しいかとも思ったがまあ何事も言わなければ始まらん。
「はい。私は水原凛です。芸名というわけではなく、本名ですのでそのあたりは勘違いしないで頂けると助かります」
「オーケー凛な。名前了解。今度こそ覚えた」
「り……いえ、構いません。というか、今まで覚えていなかったと？」
「悪いが、アイドルの名前は覚えられない特殊技能があってな」
「それは特殊技能ではなく一種の欠陥では？」
「耳に痛いな。まあこうして実際に会話したらちゃんと覚えられるから」
「っつーか初対面の女をいきなり名前で呼び捨てってのがありえねえだろ」
「俺は基本、いつもそうだぞ？　明日香とかは最初こそ名字で呼んでたが、違和感バリバリあったしな。まあ嫌ならやめるが」
「いえ結構です。それで、本題は」
本題。ああそうだ。お詫びと礼だったか。
「何がいい？　理不尽なことじゃなきゃ大体叶えるけど」
俺のその言葉に、凛はしばし思考していたようだったが決まったようで顔を上げた。
「では、折角このような場所ですし、一局ご指導お願いできますか？」
そう言って凛は支給品のデュエルディスクを手に取る。

「ん。そうだなそっちがそれでいいならそうしようか。じゃあデッキを……」
「あ、ちょっと待ってお兄ちゃん」
「どうした？」
「ねえ水原さん。確か水原さんって悪魔デッキでしょ？　ならさだめがやるよ」
　珍しいな。こいつが自分からそんなこと言いだすのは。
「ってか何でさだめは凛のデッキ知ってるんだ？」
「……今更ですが、本当に先輩は私の事を知らないんですね」
「ああ。気を悪くしたなら謝るが」
「いえ。私はメディアに於いて主に悪魔族主体のデッキを用います。尤も、その実力があまり褒められたものではないのでこのアカデミアに来たのですが」
　なるほどな。まあさだめも純粋な悪魔デッキじゃないが、そういうことならさだめの方が適任だろ。
「じゃあここじゃあなんだし、ちょっと広いところに行こう。なんならデュエル場使わせてもらうか」
「いえ、そこまでしていただかなくても結構です。ですがまあ確かに教室では目立ち過ぎますし、移動しましょうか」
　まだアカデミアの地理に疎いであろう凛を先導して俺とさだめが先頭を行く。剣士はさっきから何やら難しい顔をしていた。凛もまた時折剣士の方を見て考え込んでいるようなので、もしかしたらどっかで知り合いだったりするのかもな。

「ん。この辺でいいか」
「じゃあお兄ちゃん、審判お願いね」
「任せろ。凛も準備いいか？」
「はい。構いません」

凛は何やら腰に二つついているデッキケースの内片方の上にしばらく手を置いていたかと思うと小さく深呼吸してもう片方をデッキを手に取った。
「「デュエル」」
こうして“小悪魔リンちゃん”（後で聞いた凛の通り名）対“アカデミアの悪夢”（巻き起こした数々の事件でそう呼ばれている）さだめのデュエルが始まるのだった。

――某県某所
「――――ようやく見つけました。終焉の欠片」
『ちぃ……なれの果てが……』
「なんとでも言ってください。私はただここで貴方を滅ぼすだけです」
『むざむざやられると思うのか？』
「やられて貰います。私も、欠片程度に梃子摺ってあげるほど悠長な時間の使い方はしたくないので」
『ほざけぇぇぇぇっ！』
「『デュエル！！』」

第三期第三話「盤面の世界で」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第三話「盤面の世界で」

「それじゃあ先攻は新入生の水原さんに譲るよ」
「……確か御堂さんも新入生ですよね？」
「おっと、そうだったね。何かさだめの場合新入生らしさが自分で感じられなくて」
何しろ前年度から散々俺らの教室に忍び込んでいたからな。いや、むしろ堂々とふんぞり返っていたと言ってもいい。
「では……私のターン、ドロー！　速攻魔法『終焉の焔』発動します」
「へ？」
あー……。
「……何か問題でも？」
ちょっと向こうも困惑しているらしいので補足説明を入れてやる。
「その『終焉の焔』は使用したターンにモンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚が封じられる。折角速攻魔法なんだから、セットして相手ターンのエンドフェイズ時に発動するのが基本になる。どうせ自分のターンに発動するなら『迷える仔羊』でいいわけだし」
「あ、そうでしたか。すみません。ありがとうございます」
プレイングに難あり、だったか？　というよりそもそもデュエルに慣れてないというか……なんかぎこちないな。

「では、二体の『黒焔トークン』をリリースしてモンスターをセットします」
お、上手い。確かにセットなら可能だな。とはいえ、半端な守備力のモンスターなら下級モンスターにも勝てないが。
「ターン終了します」
「さだめのターン、ドロー！　さだめは手札から魔法カード『デビルズ・サンクチュアリ』を発動！『メタルデビル・トークン』を一体特殊召喚するよ！」
「ん？　もしかしてさだめ、それ普通に悪魔デッキなのか？」
「ううん。でもいつものダークとは違うんだけどね」
とはいえ、これでさだめのフィールドにも上級を召喚するチャンスが出来た。『デビルズ・サンクチュアリ』ならモンスターの召喚を阻害しない。
「さだめは『メタルデビル・トークン』をリリースして『バイサー・ショック』を攻撃表示で召喚！」
『バイサー・ショック』ＡＴＫ８００
げっ……アイツまさか……。
「『バイサー・ショック』のモンスター効果発動！　このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上の全てのセットされたカードを手札に戻す！」
「っ！」
凛のセットした最上級モンスターが手札に戻される。これで凛のフィールドは空。
「バトルフェイズ！『バイサー・ショック』でプレイヤーにダイレクトアタック！　『処刑攻撃』！」
……その攻撃名はなんとかならんのか。
「え？　ぅひぁっ！？　きゃあああああっ！？」
ガシャンガチャンと自分の体が拘束されていく様に凛のクールフェイスが一瞬崩れる。っていうか……。
「うわ、ちょ！　さだめ、待て！　流石に絵面的にまずい！」

闇のゲームじゃないから実際にダメージがあるわけじゃあないんだろうが、それでもあれは酷い。少なくとも人様の……じゃない。売れっ子アイドルに対して行う攻撃方法じゃない！

「う……だ、大丈夫です。すこし、驚いただけですから」

凛ＬＰ３２００

とりあえず問題なさそうで一安心。しかし、やはり絵的にどうかと……。

「くふっ……たーのしっ」

こらこら。

「そもそもなんでまたそんな拷問カードを……」

十中八九趣味なんだろうが。

「さだめはカードを一枚セットしてターンエンドだよ」

「私のターン、ドロー！……ぇと……『ゴブリンエリート部隊』を攻撃表示で召喚。バトルフェイズ」

『ゴブリンエリート部隊』ＡＴＫ２２００

ふむ……。

「『ゴブリンエリート部隊』で『バイサー・ショック』を攻撃」

「トラップ発動！『和睦の使者』！　このターンさだめのモンスターは戦闘によっては破壊されず、戦闘ダメージも無効になるよ！」

「……ターンエンドします」

「……ん？」

「え、どうしました？」

「いや『ゴブリンエリート部隊』の効果処理忘れてるよー」

「あ……すみません。『ゴブリンエリート部隊』を守備表示に変更し、ターンを終了します」

『ゴブリンエリート部隊』ＤＥＦ１５００

「じゃあさだめのターンね。ドロー！……んー」

やっぱりなんかさだめのやつも調子悪そうだな。

「さだめは『終末の騎士』を攻撃表示で召喚！　効果でデッキから『儀式魔人リリーサー』を墓地に送るよ！」

『終末の騎士』ＡＴＫ１４００
儀式魔人!?　もしかしてあいつ……真中希望に渡されたってカードか！
「更に手札から儀式魔法『奈落との契約』発動！　墓地の『儀式魔人リリーサー』とフィールドの『バイサー・ショック』をリリースして手札から『闇の支配者―ゾーク』を儀式召喚！」
『闇の支配者―ゾーク』ＡＴＫ２７００
「墓地から儀式召喚!?」
「儀式魔人は墓地から儀式召喚のためのリリースとして除外することができる。更にリリーサーの特殊効果発動！　リリーサーを儀式の贄としてリリースした儀式モンスターがフィールド上に表側表示で存在している限り、貴女は特殊召喚を行うことができないよ！」
こいつのために『バイサー・ショック』入れてたのか……。フェイバリットでもあるわけだしな……。
「効果発動するよ！」
『闇の支配者―ゾーク』の効果は強烈。凛のフィールドにモンスターが一体しかいないこの状況なら……。
「さだめの勝率は六分の五！　さあ、ダイスロール！」
さだめは意気揚々とサイコロを転がす。
ゾークはダイスで一か二が出れば相手モンスターを全て破壊する『サンダー・ボルト』となり、三・四・五なら相手モンスター一体を破壊。そして……。
「……六。えー……」
六なら、自分フィールドのモンスターを全破壊。
ｏｒｚ↑さだめ。どうもさだめばっかり落ち込んでいる気がする。
「ひ、酷い不運……さだめの幸運ランクはＥランクにちがいないよ……」
ともかく、これでさだめの場はゼロ。手札も一枚のみ。
「た、ターンエンド……」
「は、はい。私のターン。ドロー！」

流石にあちらさんも困惑している。まあもう「勝った！」とばかりに得意げな顔でサイコロ振って結果壮絶な自滅だしなぁ……。
「私は『ゴブリンエリート部隊』をリリースして『偉大魔獣ガーセット』を攻撃表示でアドバンス召喚します」
『偉大魔獣ガーセット』ＡＴＫ４４００
あー……『偉大魔獣ガーセット』はリリースしたモンスターの攻撃力を倍にした攻撃力を得る。デメリットアタッカー故の高い攻撃力を持つ『ゴブリンエリート部隊』はリリースとしては妥当な判断だ。
「『偉大魔獣ガーセット』でプレイヤーにダイレクトアタック！」
「うきゃあ！？」
さだめＬＰ０
……いや、負けんなよさだめ。

「うぅー負けたー」
「この流れで負けるか？　普通」
「思い切り上から目線で始めといて壮絶な自爆。何と言うか……さだめ」
「お兄ちゃんがすっごい憐れむような眼をしてる！？」
「最後の自爆は……まあともかくとして」
「なかったことにされた！？」
「お前にしては珍しいデッキ使ってたな」
「いや……ちょっと調子乗って未調整のデッキ使ってみたら……」
おいおい……。
「お前、それは失礼だろ……」
「あっちだっておんなじようなもんだし、良いじゃん別に」
「え……」
「そりゃそうだが、それでも手加減するのは違うだろ。マジメにや

れ」
「あの……」
「いや、真面目にやってはいるよ。っていうか、ミスしたり効果把握してなかったりする割に引きはいいんだよねぇ……」
「その……」
「おい馬鹿兄妹。対戦相手が困惑してるぞ。反応してやれ」
おっと。そうだった。
「どうした。凛」
「いえ……何故その……私が本気ではない、と？」
ん？　そんなことか？
「あれだけプレイミスしてればな。プレイングに難あり……っていうかそもそもその悪魔デッキを使い慣れてないとしか思えないミスだったし」
「それにさっきデュエル始める時、もう一つのデッキに触ってたでしょ？　あっちがホントのメインデッキなんじゃない？」
メディアでは悪魔を使ってるって話だったから、リアルではむしろ殆ど使わないのだろう。というか……。
「悪魔族嫌いでしょ。水原さん」
身も蓋もないさだめの言葉に一瞬息を詰まらせた凛だったが、やがてポツポツと語り始めた。
「嫌い……というか、苦手……でしょうか」
聞けば、この悪魔族デッキは事務所から渡されて渋々使っているだけだそうで。本来の凛は別のデッキを使うのだという話だ。
「なるほど……キャラ作りって奴か」
「胸糞悪ぃな……まあそういうもんなんだろうが……」
「ちなみにメインデッキの方はどんなデッキを使っているんだ？」
俺が尋ねると、凛はこれです、と自分のもう一つのデッキケースからデッキを取り出した。
「私は水属性デッキを主に使用しています。あの……」
「ん？　なんだ？」

「……いえ、なんでもありません。それではこの辺で失礼させて貰います。御指導、ありがとうございました」
「負けたけどな」
「お兄ちゃん……もう言わないで～」
相変わらず打たれ弱い……。
最後にちらりと剣士の方を一瞥し、凛はさっさと教室へと戻って行った。どうも剣士が気になるようだった。
「で、お前の使ってたデッキなんだが……」
「うん。悪魔族の儀式モンスター中心のデッキだよ。採用してるのはゾークと『終焉の王デミス』『破滅の魔王ガーランドルフ』『サクリファイス』の四種類。ルインと一緒に組んでたんだけど……さだめ、儀式モンスターデッキなんて組んだことなかったからどうも勝手がわからなくて」
んー……そうだな。
「まず、四種類は多すぎるんじゃないか？　儀式はただでさえコストパフォーマンスが悪いし事故率も高いんだ。二種類くらいにしておいた方がいい」
「デミスゾークみたいにすればいいかな？」
「そうだな。だが敢えてその二体を使わずに『儀式の準備』を採用するのもありだと思う」
「うーん……やっぱりそういうのはお兄ちゃんの方が上手いね。後で手伝って」
「了解した。……で、剣士はどうした？　なんかまた浮かない顔してるけど」
「……大したことじゃねえよ。ただ、どーもどっかで見たことある気がするんだよな。水原のこと」
「テレビじゃなくてか？」
凛はアイドルなのだからそういうことがあってもおかしくはないだろう。尤も、向こうも剣士に興味を示していたようだからどちらかというと……。

「いや、もっと昔だ。多分な」
「……典型的なラブコメ展開の序章が始まったよお兄ちゃん」
「当人が居る前で堂々とそういう発言できるお前の感性の鈍さには感動すら覚えるわ」
当然褒めちゃいないが。
「なら、今度あった時にでも聞いてみるんだな。向こうも意味あり気にお前のこと見てたし、何かあるかもしれない」
「……いや、別に良い。んな安っぽいナンパ染みたことできるか」
まあ確かに『キミとオレ、いつかどっかで会ったことない？』とか聞くのは安いな。古いな。陳腐だな。
「別にナンパってわけじゃないんだから気にしなくてもいいだろうに」
それに、真中希望の言葉を信じるならば、あの水原凛もイレギュラーの可能性が高い。当然剣士もだ。ならその二人に関わりができるのは今後の展開に於けるメリットになるはずだ。
「ま、そんなものなくても純粋に友達を増やそうぜって感じでいいだろう」
「……オレがそんな社交的なキャラに見えるか？」
「甘いな。生せば生る。成さねば生らぬ。何事も。生らぬは人の生さぬ生りけり、だ。お前だって、友達が増えて困ることはないだろう？」
「そりゃそうだけどよ……」
「黙ってるだけでは何もならんぞ。アテナは特殊だ。特に何にもしなくても友達になってくれたアテナはな」
……今思えば、俺も特に何かしたわけじゃないのにアテナに告白されてるんだよな。アテナは基本的に唐突。しかも行動力あり過ぎ。
「……はぁ。わぁったよ。その内適当な時にでも聞いてみる。それでいいだろ？」
「お前がいいなら、いいんだろ？」
「……くっそ、いつかお前に口で勝ってやる」

「いつでも来い」
ただし、俺は強いぞ。何度さだめの襲撃を口八丁で潜りぬけてきたことか。こちとら命と貞操かかってますから。
ちっ！　と一つ舌打ちして去っていく剣士を見て、もうちょい口調とか柔らかくするだけで大分違うだろうになぁ、と思う。
「……あの二人、どうなるかな？」
少しワクワクしたような表情で聞いてくるさだめ。なんだかんだで、自分に関わりのない恋愛話なら、普通の女子と同じように興味津々なんだな。
「さあな。けど、どうも面白いことにはなりそうだ」
「根拠は？」
「ベッタベタなラブコメ展開だって、お前が言っただろ？」
「でも、現実だしさ」
「……そうなんだがな。気に食わないことに、真中希望の言うイレギュラーって奴がある。その繋がりを考えると、色々と仕組まれているような気すらする」
「アテナのこと？」
「だけじゃない。ルインの過去にも関わりのある謎の男。極自然な流れでアテナと交友を持った剣士。その剣士と繋がりのありそうな新入生……笑えない繋がりだろう？」
「……そうだね。お兄ちゃんとルイン、二人の花嫁疑惑といい、出来過ぎな感はあるね」
「一度、剣士や凛に真中希望のことについて聞いてみた方が良いな。そこでも何か繋がりがあれば、もう間違いないだろ」
まるでパズルだ。或いは、よく出来たチェスの盤面か。意図的に整えられたような、気味の悪い機能美すら感じる。
「相変わらず、お兄ちゃんは頭が回るね。さだめには無理」
「そんなこたない。お前は俺にばっかり意識が向き過ぎているから周りに目がいかないだけだ。お前は俺以上に凄いよ」
「お兄ちゃん以外に目を向ける気がないさだめには、何の意味もな

いけどね」
　まったくコイツは……。
「さて、とりあえずお前のデッキ構築をしようか。部屋でいいだろう？」
「もちろん！　あ、それとルインも一緒にお願いお兄ちゃん。ルインも、さだめと一緒に儀式魔人をデッキに組み込んでいる筈だから」
　さだめのその提案に、俺は思わず目を丸くした。
「珍しいな。お前が俺と二人きりになれる機会を自ら逃すなんて」
「う……それを言われるとすっごく勿体なく感じるけど……さだめだって、デッキ構築くらいは真面目にやるもん」
「そっか。それならいい。大歓迎だ」
「……それもなんか釈然としない」
「お前と二人きりを心から歓迎するには、俺はまだ人生経験が足りないからな」
　尤も、自惚れかもしれないが、さだめへの耐性で言えば俺に匹敵する人生経験持ちは早々いないだろうが。
　その後も、何かと纏わりついてくるさだめをいつものように躱しつつ、俺たちはレッド寮まで戻るのだった。

『ぐ……馬鹿な……』
　パーフェクト。『終焉の精霊』はまともにカードをプレイすることもできずにそのライフを散らした。
「私の勝ちです。消えてください。欠片」
『おのれ……だが我らをいくら消そうとも、我ら終焉に終わりはない……』

「ならば永遠に、無限に砕き続けるのみです」
『ぐ、おおおおおおっ！』
『終焉の精霊』はその体を周囲の闇に溶け込ませるように崩れて消えてしまう。私はそれを確認し、ずっと張りつめていた気を緩ませ、一息吐いた。
「これで、五体目……」
『終焉の精霊』が言ったように、いくら砕いたところで終わりはない。だが、欠片を砕き続けていればいつか必ず本体に辿りつく。いや、辿り着いて見せる。
「……それも偏に、セツへの愛のために……かな？」
「っ！　誰！？」
「僕だ。真中希望だ」
振り向けば、確かにそこに悠然と立っていたのは真中希望その人。
「……終焉を滅ぼすのに理由なんて必要ありません。まして、愛なんて……」
私はセツを置いて、捨てて、逃げ出しました。そんな私が、どうして愛など語れましょう。どうしてあの手を握れましょう。かつて私が振られた時など比べ物にならない。散々好きだ、愛してると言っておいて。いつまでも傍に居たいと、離さないで欲しいと言っておきながら、あっさりと逃げ出して、裏切りを成したこの口、この手で！
「そうだね。理由なんていらない。けど、キミは持っているみたいだからさ。終焉を滅ぼす理由。その使命を果たす源を」
「……私はただ、セツに幸せになって欲しいだけ。悪意と侮蔑、拒絶から逃れ、“この世界”での幸せを全うしてほしいだけ」
「愛だよ。それは。見返りを求めず、ただ献身的に、健気に相手に尽くす。それが愛じゃなくてなんだという？」
「だとしても。今私が抱いているのが愛だとしても、私にはもう資格がありません」
私はもう舞台を降りた。裏切って、逃げ出して、背を向けました。

「愛することに資格を求めようとでも？　人の感情をそんなもので支配できるものか」
「黙ってください」
「ああ、確かに僕の言葉は君には届かない。いつだって囚われたお姫様を救うのは勇者の役目だ。所詮僕は要所要所で現れては意味深な助言を残して消えていく端役に過ぎない」
「私が何に囚われていると？」
「囚われているじゃないか。凝り固まった罪悪感という名の檻に。自らに対する疑心と嫌悪の鎖に縛られて」
「……」
「尤も、その盤面を整え、君を鎖に縛り付けた僕が偉そうな口を利くものではないね」
「……それでよく、端役などと言えたものですね。黒幕の間違いではないんですか？」
「僕は一介の演出家。物語のエンディングにて滅ぼされる黒幕は他に居る。そうだろう？」
「その黒幕すら、貴方の敷いた盤面の駒、と？」
「買い被り過ぎだね。どうしても僕を悪役に仕立て上げたくてたまらないらしい。やはり、憎んでいるのかな？　この僕を」
「憎んでいないとでも？」
セツの元から去らなければならなくなった、その切欠。私が憎まないわけがありません。
「やはり、愛だね。結局君の行動理由は、セツへの愛だ。今ので確かめられたよ」
「っ……！」
ギリッ、と歯を噛みしめる。
「だけど、そうだね。それで君たちの物語がハッピーエンドになるのなら、僕はいずれ、君たちの前に立ち塞がり、全ての黒幕、悪役を全うして斃れるとしよう」
なんて献身的だろうか、そう言いたげな彼を冷ややかに見つめま

す。
「気に食わない、と。まあそうだろうね。そんな僕の筋書き通りの結末が、君たちのハッピーエンドになる筈もない」
「なら、最初から言わないでください」
「でも、いずれ君たちの誰かが、僕を倒すことだろう。それもまた、殆ど確定した未来だ」
「……敵に回る、と？」
「乗り越えるべき壁として。そもそも、アテナも含めて皆僕には敵愾心を持っているのだから、いずれぶつかるだろうさ」
「そうでしょうね。その時は精々、セツにこっぴどくやられてしまってください」
「その時が来たらね。何しろ、この整えられた盤面（フィールド）の中、僕が一番の異端なんだ。バトルフェイズに、相手モンスターにデュエリストが殴りかかっているようなものだからね」
「……余計なお話はその辺りでいいでしょう。私は、そんな話よりも、貴方に聞きたいことがあるんです」
「ふむ。何かな？」
私の無理矢理な話題転換に、何の疑問も執着も見せずに乗ってくる真中希望。
「終焉の本体の居場所。貴方なら知っている筈です。話してください。今ここで、知っていることを全部。洗いざらいです」
私の問いに、真中希望は薄く笑みを浮かべるだけでした。
「物事には順序がある。優先順位がある。知らなくてもいいことがある。全てを知るということは即ち……」
「余計な説法は結構です」
「……やれやれ、忙しないね」
私は無言でデュエルディスクを構える。口を割らせるにはやっぱりこれが一番です。
「デュエルか。いいよ。それがこの世界の抗えぬ律法であるのだしね。ただし、僕は強いよ？　恐らく、君たちが考えるよりもずっと、

ね」
「御託はもう結構です」
「しょうがないな。それじゃあ、少しだけ頑張るとしようか」
真中希望も、あくまでゆったりとデュエルディスクを構える。……その面差しに、何故か一瞬、いつか私が憧れた、セツの横顔がよぎった。
「「デュエル」」

間話「水姫と武士　前編」（前書き）

すっかりアップするのを忘れていた間話です。いや申し訳ない。
まあ変更点と言えば精霊が減ったくらいのもんですが。ここは、多少さびしくなって残念かもです。

間話「水姫と武士　前編」

アルカナ～切り札の騎士～

間話「水姫と武士　前編」

オレはセツたちと別れ、購買にでも行くかとアカデミアへ向かっていた。

「ぁん？」

視線の先には、さっき別れた水原の姿。なんだか知らねえが、ブルーの新入生らしき男子生徒二人に話しかけられてやがる。

どうにもきな臭ぇ。ふと、脳裏にセツの言葉が蘇る。

『――生せば生る。成さねば生らぬ。何事も。生らぬは人の生さぬ生りけり、だ。お前だって、友達が増えて困ることはないだろう？』

「……下らねえ」

『だが、放っておくつもりもないのだろう？』

「だぁってろ」

ニヤリ、とオヤジ臭い笑みを浮かべながら問いかけてきたネイキッドを黙らせる。

『お、オヤジ臭いっ！？』

何故か凹んだネイキッドを一端無視して、オレは水原に声をかけた。

「おい」

「あ……戦野、先輩」

「ぁにやってんだ？　こんなとこで。教室に戻ったんじゃねえのか

？」
「いえ、それが……」
「なんだ？　オシリスレッドがリンちゃんになんのようだ！」
「お呼びじゃないんですよ。さっさと帰ってくださいませんかねぇ」
……うぜぇ。
その気持ちを込めて睨みつけてやると、新入生二人はヒッ！？とか言って及び腰になったが、それでもギリギリ強気な顔を崩さずに踏みとどまりやがった。エリートの意地、とかいう奴か。下らねえ。
『まったく。エリートだの何だのと言っている奴に限って根性のないのが相場だがな』
まったくだ。苦労の一つも知らねえお坊ちゃんエリートなんぞ下らねえだけだ。
「あ……精霊……」
「ん？」
こいつ……見えてんのか？
「こらッ！　俺たちを無視するな！」
「どうやら先輩のようですが……所詮はオシリスレッドのドロップアウトのようですねぇ」
「……で、水原。コイツら、なんだ？」
「それが……」
「もーいい。大体わかった」
それが……、なんつー冒頭の時点でロクでもねえことはわかる。どーせ言い寄ってたんだろうが。
「この……リンちゃんの言葉を遮るとはなんて無礼な奴！」
「ドロップアウトは礼儀まで知らないようですねぇ」
「年上に対する礼儀も知らねぇテメエらに言われたかねえよ」
そろそろあいつらの堪忍袋の緒は限界か。経験上なんとなくわかる。
「くっ……こうなったら、俺とデュエルしろ！」

「貴方に任せては置けませんねぇ。ここはボクが……」
俺がボクがと言い争う雑魚二人。
「めんどくせぇ。二人まとめてかかって来い」
どうせどちらから挑んできても返り討ちにして二戦やらかすのは目に見えてる。なら纏めてブッ潰した方が早い。
「このっ……貴様！　後悔させてやる！」
「ドロップアウトの分際で、エリートたるボクらに刃向かったことをねぇ！」
……キレたな。安い挑発に乗りやがって。馬鹿が。
「あ、あの……先輩」
「あんたは引っ込んでろ。心配すんな。ぶちのめす」
止めようとしているらしい水原を遮って、オレはデュエルディスクを構える。
「「「デュエル！！」」」
「俺のターン！　ドロー！　俺は『馬頭鬼』を攻撃表示で召喚！」
……アンデットか。そこそこにウザいデッキだ。らしいっちゃらしいが。
「カードをセットしてターンエンドだ！」
「オレのターンだ。ドロー！」
手札を見る。片方の相手はアンデット。倒しても倒しても蘇生してくる往生際の悪いデッキ。もう片方は知らねえが、性格的に厭らしいデッキだろう。口調からして気色悪ぃ。
「オレは手札から魔法カード『増援』を発動！　デッキから『切り込み隊長』を手札に加え、その『切り込み隊長』を攻撃表示で召喚！　効果発動！　手札から『コマンド・ナイト』を攻撃表示で召喚！」
『切り込み隊長』ＡＴＫ１２００→１６００
『コマンド・ナイト』ＡＴＫ１２００→１６００
『切り込み隊長』と『コマンド・ナイト』自身の攻撃力が上昇する。

「更に手札から永続魔法『連合軍』を発動！　ターンエンドだ」
『切り込み隊長』ＡＴＫ１６００→２０００
『コマンド・ナイト』ＡＴＫ１６００→２０００
永続魔法の効果が発動し、二体の戦士族の攻撃力が更に上昇する。
このデュエルは変則タッグ。一ターン目は全員攻撃できないルール。ターンの回る順はアホＡ→オレ→アホＢ→オレ、となる。
「ボクのターン、ドロー。ボクはモンスターを一体セット。カードを二枚セットしてターンエンドですねぇ」
……どうでもいいが、コイツの口調気色悪ぃ。
「オレのターン、ドロー！」
あくまでタッグの相方扱いなので、このターンにもオレは攻撃できねえ。もどかしい。
「オレは『翻弄するエルフの剣士』を攻撃表示で召喚。ターンエンドだ」
『翻弄するエルフの剣士』ＡＴＫ１４００→２４００
『切り込み隊長』ＡＴＫ２０００→２２００
『コマンド・ナイト』ＡＴＫ２０００→２２００
『翻弄するエルフの剣士』は攻撃力１９００以上のモンスターとの戦闘では破壊されねえ。攻撃力が上がっている今なら、戦闘で破壊されることはねえ！
「よし、俺のターン、ドロー！　俺は『邪神機―獄炎』を攻撃表示で妥協召喚！　コイツは生贄なしで召喚できるんだ！　驚いたかドロップアウト！」
『邪神機―獄炎』ＡＴＫ２４００
知ってるよ。つーか。
「今はリリースっつーんだ。生贄じゃねえよ。エリート」
「ぐ……」
顔を真っ赤にしてオレを睨むアホＡ。
「この……！　バトルフェイズ！　俺は『邪神機―獄炎』で『切り込み隊長』を攻撃！　ダークネス・フレイム！」

「ちっ！」
剣士ＬＰ３８００
『コマンド・ナイト』ＡＴＫ２２００→２０００
『翻弄するエルフの剣士』ＡＴＫ２４００→２２００
場の戦士族が減ったことで、他の戦士族の攻撃力も下がってしまう。
「俺は『馬頭鬼』を守備表示に変更！　エンドフェイズに妥協召喚した『邪神機―獄炎』は自壊するが、フィールドに他のアンデット族モンスターがいる場合、自壊しないぜ！　ターンエンドだ！」
「オレのターン、ドロー！　オレは墓地の『増援』をゲームから除外して『マジック・ストライカー』を攻撃表示で特殊召喚！」
『マジック・ストライカー』ＡＴＫ６００→１６００
『コマンド・ナイト』ＡＴＫ２０００→２２００
『翻弄するエルフの剣士』ＡＴＫ２２００→２４００
「ハッ！　そんな雑魚モンスターで何ができる！」
「その雑魚モンスターに、今からテメエはやられるんだよ！」
「なんだと！？」
「オレは『アーマー・ブレイカー』を攻撃表示で召喚！『マジック・ストライカー』にユニオンする！」
『マジック・ストライカー』の頭上に巨大なハンマーが浮かぶ。
「バトルフェイズ！『マジック・ストライカー』はプレイヤーに直接攻撃ができる！『ストライク・バック』！」
「ぐあぁっ！？」
アホＡ　ＬＰ２４００
「ユニオンされた『アーマー・ブレイカー』の効果を発動する！装備モンスターが相手ライフにダメージを与えた場合、相手フィールド上のカードを一枚破壊する！」
オレが選択するのは……。
「お前の伏せカードだ！」
「なにぃ！？」

リバースカードは『ツタン仮面』。……なるほど。オレが『アーマー・ブレイカー』で獄炎を破壊しようとしていたら引っかかってたってことか。

「残念だったな。オレは『翻弄するエルフの剣士』で『邪神機―獄炎』を攻撃！」

『邪神機―獄炎』が、闇を吐き出して攻撃してくるが、エルフの剣士は素早いステップでその攻撃を躱しながら獄炎に接近していく。一気に至近まで近づいたエルフの剣士の長剣が獄炎を連続斬りで討ち取った。

「ぐっ……」

攻撃力が変わんねえから戦闘ダメージは発生しねえが、エルフの剣士は攻撃力１９００以上のモンスターとの戦闘じゃ破壊されねえ。

「続け！『コマンド・ナイト』で『馬頭鬼』を攻撃！『ブレイズ・ソード』！」

『コマンド・ナイト』の剣が炎に包まれ、馬面のゾンビを焼き切る。

「……とにかく、オレはターンエンドだ」

「やれやれ。ブルーともあろうものが、不甲斐ないですねぇ」

「なにぃ！？」

「ボクがエリートのタクティクスというものを見せてあげますねぇ。ドロー！」

……間違いねえ。あいつら、チームワークはボロボロだ。

「ではメインフェイズにセットされた『ワーム・カルタロス』を反転召喚しますねぇ。『ワーム・カルタロス』のリバース効果でデッキから『ワーム・ゼクス』を手札に加えますねぇ」

『ワーム・カルタロス』ＡＴＫ１２００

……ワームかよ。口調通り、気持ち悪いデッキを使う奴だぜ。

「そしてリバースカード『毒蛇の供物』を発動しますねぇ。フィールドの『ワーム・カルタロス』をリリースして貴方のリバースカードと『コマンド・ナイト』を破壊しますねぇ！」

「ちっ！」
『翻弄するエルフの剣士』ＡＴＫ１８００
『マジック・ストライカー』ＡＴＫ１０００
アホＢの癖に味な真似を……！
「更にボクは『ワーム・ゼクス』を攻撃表示で召喚しますねぇ。効果でデッキから『ワーム・ヤガン』を墓地に送りますねぇ……そして墓地の『ワーム・ヤガン』の効果を発動しますねぇ」
くそ、結構ヤベぇな……。『ワーム・ヤガン』はフィールドに『ワーム・ゼクス』しか存在しない場合、裏守備表示で特殊召喚される……。
「墓地から『ワーム・ヤガン』を裏守備表示でセット。リバースカード『太陽の書』を発動しますねぇ」
……ち。結構やりやがる。
「リバースされた『ワーム・ヤガン』の効果を発動しますねぇ。貴方の『翻弄するエルフの剣士』を手札に戻しますねぇ」
『マジック・ストライカー』ＡＴＫ１０００↓８００
これでオレの場には『アーマー・ブレイカー』を装備した『マジック・ストライカー』が一体。その攻撃力はたった８００。『ワーム・ヤガン』にすら戦闘破壊を喰らうレベル。
「バトル。『ワーム・ヤガン』で『マジック・ストライカー』を攻撃！」
「『マジック・ストライカー』は戦闘によるダメージを受けねぇ！そして戦闘破壊される時『アーマー・ブレイカー』を身代わりにする！」
「では『ワーム・ゼクス』で『マジック・ストライカー』を攻撃ですねぇ」
「……戦闘ダメージは発生しねぇ」
「しぶといですねぇ。ターンエンドですねぇ」
くそ、このねぇねぇ野郎。あの馬鹿っぽいのと比べりゃまだ賢い。
「オレのターン、ドロー！　オレは手札から『強欲な壺』を発動！

デッキからカードを二枚ドロー！……行くぜ！　フィールド魔法『侍の戦場』！」

フィールドが戦国時代の戦場に変化する。

「オレは『鉄の騎士―ギア・フリード』を召喚！　来いよフリード！」

『鉄の騎士―ギア・フリード』ＡＴＫ１８００↓２５００

フィールドに、ネイキッドが拘束としての鎧を纏って現れる。

『我、参上！』

アホな登場やってんな。だからギャグキャラ扱い喰らうんだよ。

「バトル！『鉄の騎士―ギア・フリード』で、ガラ空きのテメエを終わらせる！」

『むん！　獅子、戦吼！』

遊ぶなアホ。

「ひっ！？　お、おい助けろ！」

「……仕方ありませんねぇ……リバースカード発動『和睦の使者』。戦闘ダメージは無効化しますねぇ」

「ちっ……ターンエンドだ」

「ほっ……お、俺のターン、ドロー！」

アホの目が喜色に染まる。

「よし！　俺は墓地の『馬頭鬼』の効果を発動！　墓地から『邪神機―獄炎』を特殊召喚！　俺は獄炎を生贄に『龍骨鬼』をアドバンス召喚！」

……おい、まさかコイツ。

「行くぜ！『龍骨鬼』で『鉄の騎士―ギア・フリード』に攻撃！」

「……ま、迎え討てや」

『獅吼旋破！』

だから……。

『あのようなアホ、遊びでも入れぬとやっていられんわ』

気持ちはわかるけどな……。

「くぅ！」

アホＡ　ＬＰ２３００
「……何がしたいんだテメエは」
「ハッ！　やっぱり所詮はドロップアウトだな！　特別に教えてやる！　この『龍骨鬼』は、戦士族と魔法使い族を相手に戦闘した場合、問答無用で破壊す……る？」
　オレのフィールドには、普通に生き残っているフリード。
「な、なんで……」
「『侍の戦場』のもう一つの効果だ。戦士族モンスターは、戦闘以外では破壊されねえ」
「そ、そんなっ！？」
　……付き合いきれねえアホだな。
「何をやってるんですかねぇ」
「くっ……う、煩い！　知らなかったんだから仕方ないだろ！」
「戦場で、知らなかったから負けました、なんつうのは最低の言い訳だ。覚えとけエリート（笑）」
「この……俺は『生者の書―禁断の呪術―』を発動！　お前の墓地の『コマンド・ナイト』をゲームから除外して、『龍骨鬼』を守備表示で蘇生。ターンエンド！」
「オレのターン、ドロー！　オレは手札から魔法カード『拘束解除』を発動！『鉄の騎士―ギア・フリード』の拘束を解き放つ！『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』！」
　『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』ＡＴＫ２６００→３３００
『はぁっ！　今こそ真の力を見せてくれる！』
「更に『翻弄するエルフの剣士』を召喚！」
　『翻弄するエルフの剣士』ＡＴＫ１４００→２０００
　『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』ＡＴＫ３５００
「オレは装備魔法『与奪の首飾り』をネイキッドに装備！　ネイキッドの効果発動！　コイツに装備カードが装備された時、フィールド上のモンスター一体を破壊する！　オレが選択するのは『ワーム・ゼクス』！」

「！？」
まさか自分が狙われるとは思っていなかったらしいアホＢが驚く。
『はぁぁっ！　魔神剣！』
ネイキッドの放った剣圧が『ワーム・ゼクス』を吹き飛ばす。はっ！　ザマミロ。
「ま、待って……普通はあっちを狙う筈じゃあ……」
「テメエを先に潰しておくのが賢明だと判断したんでな。あばよ。
『翻弄するエルフの剣士』で『ワーム・ヤガン』を攻撃！」
「ひぎぃぃっ！？」
アホＢ　ＬＰ２７００
「さよならだ！『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』のダイレクトアタック！」
『さあ、これにて終いだ！　これぞ剣劇！　殺劇舞荒剣！』
「ぐぎゃあああああっ！？」
アホＢ　ＬＰ０
「っし、一匹終わり！　ターンエンドだ！」
「へへ……なんだよ。偉そうなこと言っといて、結局自分が先にやられてんじゃねえか」
「ぐっ……そもそも貴方を助けたりしなければですねぇ……！」
「いいからさっさと続けろよ」
「くっ……ドロー！　……カードを一枚セットしてターンエンド」
「オレのターン、ドロー！……終わりだな。『翻弄するエルフの剣士』で『龍骨鬼』を攻撃！」
「う……トラップカード『聖なるバリア―ミラーフォース―』」
「無駄だ。『侍の戦場』の前では、そんなバリア屁でもねえ」
当然『侍の戦場』で『龍骨鬼』の効果も不発。
「終わりだ……！『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』でプレイヤーにダイレクトアタック！」
『覚悟は出来たか？　ワールド……』
「待てネイキッド。流石にそいつは許可できねえ」

とりあえず撃破。
「ぎゃあああっ！？」
アホＡ　ＬＰ０
少々苦戦はしたが、ダメージの方は最小限。まずまずってとこだな。
オレはガックリと膝をついてしまっているアホ二人に目を向ける。
「これに懲りたら、マナー守ってナンパしやがれ」

間話「水姫と武士　後編」

アルカナ～切り札の騎士～

間話「水姫と武士　後編」

困った。

何がって、さっき先輩たちと別れて教室に戻ろうとしたら、見知らぬブルー男子に話しかけられたから。

「だ、だからさ！　この後、時間が余ってたら俺たちと……」

「いえ、心配することはありませんねぇ。少しお茶でもどうですかというだけですからねぇ」

……なんだろう。私は曲がりなりにも有名人だし、声をかけられること自体は予測していた。けど、なんだかさっきから特殊な人種にばかり絡まれているような……。

『類は友を呼ぶ、でしょう？　諦めることね』

そうして戸惑っている私を精霊の『水霊使いエリア』が皮肉ってくる。……その私と一緒にいるあんたはどうなんだと小一時間ほど問い詰めたい。

『……それと、新手もいるみたいよ』

エリアがそう言うと同時に、何故か不機嫌そうな声が聞こえてきた。

「おい」

「あ……戦野、先輩」

声をかけてきたのは先ほどまで一緒に居た戦野先輩だった。……

なんだろ。さっきから、戦野先輩を見る度に何処か懐かしいというか……どこかであった気がしてくる。
「ぁにやってんだ？　こんなとこで。教室に戻ったんじゃねえのか？」
「それが……」
私が事情を説明する前に、戦野先輩はブルー男子の人と諍いを起こしてしまう。
「あ……精霊」
改めて見れば、戦野先輩の隣に精霊が居る。戦野先輩も認識しているみたいだ。
「……水原。コイツら、なんだ？」
「それが……」
「もーいい。大体わかった」
すっぱりと私の話を打ち切って、ブルーの二人と対峙する戦野先輩。
「あ、あの……先輩」
「あんたは引っ込んでろ。心配すんな。ぶちのめす」
その言葉通り、戦野先輩は殆どライフを減らすこともなくあっさりとブルーの二人をやっつけてしまった。
「これに懲りたら、マナー守ってナンパしやがれ」
正直、マナーを守ったとしてもナンパは遠慮してほしいけど。
「……大丈夫か」
「は、はい……」
逃げ去っていった男子と、私を見下ろしてくる先輩の鋭利な目つきで、私は確信した。この人は、昔私を助けてくれた人だと。

小学校の頃だった。放課後、ちょっとだけ寄り道してジュースを買い、公園で一人夕陽を眺めていた。……たかが小学生のとる行動

ではなかった気がするけど、当時友達も一杯いて、たまたま全員に用事があったから空いた時間の使い方を知らなかったんだと思う。

そこで、大分くたびれたサラリーマン風のおじさんに襲われそうになった所を助けてくれた目つきの悪い男子。明らかに身体の大きな大人相手に一歩も引かず、挙句叩き返してしまった男の子。

『……ったく、ロクでもねえ奴がいるもんだな』

『……』

恐怖で何も言えずに固まっていた私を一瞥したその男の子は、ややあって口を開いた。

『……大丈夫かよ』

その、こちらを見下ろす鋭利で、でもどこか寂しさを湛えた目が印象的だった。

『ぁ……ぅ……ん』

ただ小さくなって震えていた私は、そんな意味のあるかどうかわからないような呻きしか口に出せなかった。

口下手なのか、しばらく何を言えばいいかわからないといった感じでそっぽ向いていた男の子は、『無事なら、いい。気をつけて帰れ』とだけ言ってさっさと帰って行ってしまった。

『あ……』

名前も聞けなかったその男の子を、当時ただの小学生だった私が見つけることは出来なかった。……思えば、あれが芸能界に入ったきっかけだったのかもしれない。男の子を見つけることができなかったから、代わりに貴方が私を見つけて。なんて。

『……夢見過ぎ（笑）』

「……エリアは黙ってて」

冷やかに鼻で笑うエリアにちょっと抗議。少しぐらい感傷に浸ってもいいじゃないか。

「おい？」
「あ、その……助けてくれてどうもありがとうございました」
「……おう」
ぶっきらぼうな返事。愛想がないのは変わらないらしい。
「あの！」
「っな、なんだ？」
しまった、少し大きな声を出し過ぎた。
「え、ええっと……」
う、そもそも呼びとめて何を話そうというのか。どうやら先輩も私のことを覚えてはいないようだし。
ああ、どうしよう。えと、えと……こ、困った時は……。
「デュ、デュエルしませんか！？」
「……は？」
困惑させてしまった。そりゃそうだ。
「ああっと、その、助けてもらったお礼にですね、先ほどはお見せできなかった私のメインデッキをご覧いただければと！」
支離滅裂だが、まあいい。とにかく、会話を引き延ばす。
「いや、別にんなこと頼んじゃいねえんだが……」
まったくもってその通り。
「……まあ、オレも一応デュエリストだし、挑まれたら受けねぇわけにもいかないんだが……」
「じゃ、じゃあいいんですね！？　いいってことにしましょう！　デュエル！」
勢いで押し切る！
「お、おう。デュエル」
よし。デュエルには持ちこめた。
『猫、剥がれてきてるわよ』
もうそんなのどうでもいい！
「私のターン、ドロー！」
しまった。勢いで先攻までもぎ取ってしまった。気を悪くしてな

ければいいけど。
「モンスターを一枚セット、カードを一枚セットしてターンエンド！」
「……何が何だか。まあいい。オレのターン、ドロー！　オレは『鉄の騎士―ギア・フリード』を攻撃表示で召喚！　フィールド魔法『侍の戦場』を発動！　バトルだ！」
『鉄の騎士―ギア・フリード』ＡＴＫ１８００→２３００
っ！　いきなり『侍の戦場』！　攻撃力２３００は止められない！
私の守備モンスターである『海神の巫女』が斬り裂かれ、墓地に送られる。
「ターンエンドだ！」
「私のターン、ドロー！」
『侍の戦場』は優秀なフィールド魔法。でも、フィールド魔法ならではの弱点がある！
「私は手札から『アトランティスの戦士』の効果を使います！　デッキから『伝説の都アトランティス』を手札に加えます！」
「……ちっ！　アトランティスか！」
「フィールド魔法『伝説の都アトランティス』を上書き発動！」
戦場が海の底に沈み、私の背後には海中神殿。失われた都が映し出される。
「アトランティスがある限り、私のフィールドと手札の水属性モンスターのレベルは一つ減ります。私は『ギガガギゴ』を攻撃表示で召喚！」
『ギガガギゴ』ＡＴＫ２４５０→２６５０
アトランティスの影響下ではリリースなしで通常召喚可能な最大攻撃力２６５０を誇るモンスター。これなら！
「バトル！『ギガガギゴ』で『鉄の騎士―ギア・フリード』を攻撃します！」
「ぐっ！」
剣士ＬＰ３１５０

「ターンエンドです！」
「やるな……オレのターン、ドロー！」
『ギガガガギゴ』の攻撃力はそう簡単には超えられないはず。どう凌いでくる？
「オレは『翻弄するエルフの剣士』を守備表示で召喚。カードを一枚セット。ターンエンドだ」
『翻弄するエルフの剣士』ＤＥＦ１２００
なるほど。やっぱりそう来るんだ。攻撃力１９００以上のモンスターとの戦闘で破壊されないエルフ。でも！
「甘いです！　私のターン、ドロー！　私は『マーメイド・ナイト』を攻撃表示で召喚！『マーメイド・ナイト』で『翻弄するエルフの剣士』を攻撃します！」
『マーメイド・ナイト』ＡＴＫ１５００→１７００
『マーメイド・ナイト』の攻撃力はアトランティスの影響下で１７００。それに……。
「連続攻撃能力……！」
そう。『マーメイド・ナイト』はフィールドが『海』なら二回攻撃することのできるモンスター。アトランティスは『海』として扱うから、この場合も二回攻撃できる！
「だが、迂闊だぞ。トラップカード『聖なるバリア―ミラーフォース―』！」
攻撃反応型！？　さっきのデュエルじゃあ使わなかったからてっきり罠の入っていないデッキかと……。
「それでも！　チェーンして『水霊術―「葵」』を発動します！『マーメイド・ナイト』をリリースして先輩の手札を確認させて貰います」
先輩の手札は『コマンド・ナイト』『マジック・ストライカー』『拘束解除』の三枚。
「私は『マジック・ストライカー』を選択します」
「……わかった」

簡単に特殊召喚が出来る上、直接攻撃能力とダメージを防ぐ能力を持っている『マジック・ストライカー』は邪魔。さっさと叩き落とせてよかった。
「ターンエンド」
「オレのターン、ドロー！」
ただし、私のフィールドもガラ空き。ダメージだけを見るなら『コマンド・ナイト』のパワーアップは驚異的。
「オレは魔法カード『強欲な壺』を発動！　デッキからカードを二枚ドローする！」
手札増強……タイミングが悪いなぁ。
「オレは『コマンド・ナイト』を攻撃表示で召喚し、『翻弄するエルフの剣士』を攻撃表示に変更する」
『コマンド・ナイト』ＡＴＫ１２００→１６００
『翻弄するエルフの剣士』ＡＴＫ１４００→２０００
……やばいかも。
「バトルだ！　二体でダイレクトアタック！」
「きゃああっ！？」
凛ＬＰ６００
早くもライフはギリギリに。やっぱり叩き落とす対象間違えた？
ううん。もしかしたら引いたカードもモンスターカードだったかもしれないし、それならこの手で間違ってはいなかったはず。
「ターンエンドだ。どうする？」
「まだ、行ける！　私のターン、ドロー！」
こんな簡単に負けられない。そうだよね！　エリア！
『まったくね。こんなあっさり負けるのは屈辱的だもの』
「私はモンスターを一体守備表示でセット。カードを一枚セットしてターンエンド！」
今は、耐えるしかない。必ず逆転は出来ると信じて。
「オレのターン、ドロー！　オレは手札から『戦士の生還』を発動し、墓地の『鉄の騎士―ギア・フリード』を手札に戻す。そのまま

召喚！」

『鉄の騎士―ギア・フリード』ＡＴＫ１８００→２２００

「さっきオレの手札を見たから知っているよな？　オレは手札から魔法カード『拘束解除』を発動！　鉄の戒めを打ち破り、真の姿を見せろ！『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』！」

『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』ＡＴＫ２６００→３０００

やっぱり！　あの剣聖の能力は危険。でも、どうすることも出来ないし……。

「バトル！『翻弄するエルフの剣士』で守備モンスターに攻撃！」

！　効果を使って来ない？　なら……。

「リバースカード『グラヴィティ・バインド―超重力の網―』！　このカードが存在する限り、レベル４以上のモンスターは攻撃することができません！」

「ちっ！　やっぱり入ってやがったか……」

やっぱり、ということは、先輩もこのカードを警戒していたということ。アトランティスで水属性モンスターのレベルが一つ下がるので、アトランティスデッキには当然のように入れられているから、警戒するのは当然だと思うけど。

「カードを一枚セット。ターンエンドだ」

何もない。と言うことは先輩の手札に装備カードは存在しないということ。なら……。

「私のターン、ドロー！　私は速攻魔法『非常食』を発動します！『伝説の都アトランティス』と『グラヴィティ・バインド―超重力の網―』を破壊してライフを２０００ポイント回復！」

凛ＬＰ２６００

「更に、セットされたモンスターを反転召喚！『水晶の占い師』のリバース効果でデッキの上から二枚を確認……私は『逆巻くエリア』をデッキの一番下に置き、『壺の中の魔術書』を手札に加えて発動！　お互いにデッキからカードを三枚ドローする！」

これは先輩にもドローを許してしまう両刃の剣。でも、これで！

「私は手札から魔法カード『テラ・フォーミング』を発動！　デッキから『ウォーター・ワールド』を一枚手札に加え、発動！」
フィールドが南国風の海辺に変化する。
「私は『水晶の占い師』をリリースして『ブリザード・プリンセス』を攻撃表示でアドバンス召喚！」
『ブリザード・プリンセス』ＡＴＫ２８００→３３００
「なに！？」
『ブリザード・プリンセス』はレベル８。通常ならアドバンス召喚に必要なリリースの数は二体。でも。
「『ブリザード・プリンセス』は、魔法使い族一体をリリースすることでアドバンス召喚できる！」
それだけじゃない。
「さらに、このカードが召喚されたターン、先輩は魔法・トラップを発動出来ません！『ブリザード・プリンセス』で、『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』を攻撃！『ブリザード・スター』！」
『ブリザード・プリンセス』の手に持つ巨大な氷で出来たモーニングスターが、剣聖を殴り倒す。……正直、あの見た目からは想像もできないけど。
「うおっ！？　ネイキッド！」
『ぐ……すまん。奴の方が上手のようだ……』
剣士ＬＰ２８５０
「ターンエンドです！」
「ちっ……オレのターン、ドロー！……オレは『与奪の首飾り』を『コマンド・ナイト』に装備。二人を守備表示に変更してターンエンドだ」
「私のターン、ドロー！……よっし、行くよ！　エリア！」
『やっと出番ね。遅すぎるわ』
「そう文句言わないで！　私は『水霊使いエリア』を召喚！」
「リバースモンスターを通常召喚？　ってことは……」
そう、これじゃあ終わらない。

「手札から魔法カード『神霊の継承』を発動！　フィールド上に存在するエリア、ヒータ、アウス、ウィン、ダルク、ライナの内いずれかの名がついたカードを一枚選択し、そのカードと同じ属性、レベル８以上のモンスター一体を選択。それぞれの霊使い、その頂点を手札かデッキから特殊召喚する！　来て！『水神使いエリア』！」

『水神使いエリア』ＡＴＫ２８００→３３００

『さあ、本気よ』

私のフィールドには、背後に『ゴギガ・ガガギゴ』らしき影を従えた、神官服のエリアの姿。攻撃力は２８００！

「手札から装備魔法『幻惑の巻物』を『翻弄するエルフの剣士』に装備！　属性を水属性に変更します！」

「何っ！？」

これで『翻弄するエルフの剣士』の攻撃力が５００ポイントアップした。先輩は戸惑っている。態々相手のモンスターを強化した理由が掴めないんだと思う。

「私は手札の『憑依装着エリア』を墓地に送って、『水神使いエリア』の効果を発動！　相手の水属性モンスター一体のコントロールを得る！」

『さあ、『水神使いエリア』が命じるわ。貴方は、私に従いなさい』

『Ｙｅｓ，ｙｏｕｒ　ｍａｊｅｓｔｙ！』

……エリア。珍しくノリが良いのはいいけど、ネタに走らなくてもいいんじゃない？

「くっ……そういうことかよ」

「と、とにかく、私は『翻弄するエルフの剣士』を攻撃表示に変更。『水神使いエリア』で『コマンド・ナイト』を攻撃！『水神の粛清』！」

『行きなさい。私の手足』

エリアの言葉に従い、背後の『ゴギガ・ガガギゴ』の幻影が『コマンド・ナイト』を襲う。衝撃は突き抜けて背後の先輩をも襲った。

「ぐっ……！　貫通能力持ちか……！」

剣士ＬＰ１４５０
「オレは『与奪の首飾り』の効果でデッキからカードを一枚ドローする！」
「トドメです！『翻弄するエルフの剣士』でプレイヤーにダイレクトアタック！」
これが通れば、私の勝ち！
「トラップ発動！『ガード・ブロック』！　ダメージを無効にしてデッキからカードを一枚ドローする！」
耐えられた！　なら……。
「メインフェイズ２に『水神使いエリア』のもう一つの効果を発動します！　自分フィールド上に存在する水属性モンスター一体をリリースして、相手の手札を確認、一枚を墓地に送ります！」
つまり、『水霊術―「葵」』のモンスター版。選択するのはもちろん『翻弄するエルフの剣士』。
「ち……コイツだ」
先輩の手札は『切り込み隊長』『神剣―フェニックスブレード』『デーモンの斧』『連合軍』『召喚僧サモンプリースト』『命削りの宝札』『簡易融合』の七枚。
「……うわぁ」
正直悩む。どれを捨てたものか……。
「私は『デーモンの斧』を選択します」
とりあえず、攻撃力を１０００ポイントも上げることのできる『デーモンの斧』は危険だから、それを選ぶ。他のカードも皆危険だけど、手札がこれだけあるのなら『命削りの宝札』はとりあえず無視できる。『神剣―フェニックスブレード』は墓地に送るだけ無駄。後のカードで悩んだけど、貫通能力持ちのエリアがいる以上、モンスターの大量展開よりも攻撃力の高いモンスターを出されて『デーモンの斧』で戦闘破壊されるのが一番怖い。
「私はターンエンド！」
手札はこれで使いきった。後は、運を天に任せるしかない。

「オレのターン、ドロー！……」
どう！？
「オレは『切り込み隊長』を攻撃表示で召喚！　効果で『召喚僧サモンプリースト』を攻撃表示で特殊召喚！」
その二体はさっき確認した。後は……。
「『召喚僧サモンプリースト』の効果発動！　手札の『神剣―フェニックスブレード』を墓地に送り、デッキから『鉄の騎士―ギア・フリード』を特殊召喚！」
モンスターが揃ってきた。でもまだ！
「更に魔法カード『簡易融合』発動！　ライフを１０００ポイント支払って、融合デッキから『魔導騎士ギルティア』を攻撃表示で特殊召喚！」
剣士ＬＰ４５０
「更に手札から魔法カード『融合』を発動する！」
あ……。
「フィールドの『鉄の騎士―ギア・フリード』と『魔導騎士ギルティア』を融合！『鋼鉄の魔導騎士―ギルティギア・フリード』を融合召喚！」
その攻撃力は……２７００。
「そしてオレは手札から『連合軍』を発動！　オレのフィールドには戦士族と魔法使い族のモンスターは三体。よって攻撃力６００ポイントアップ！」
エリアに並んだ。でも……。
「墓地の『神剣―フェニックスブレード』の効果を発動！　墓地の『マジック・ストライカー』と『翻弄するエルフの剣士』をゲームから除外し、このカードを手札に戻す！　ギルティギア・フリードに装備！」
攻撃力、３６００。
「バトルだ！『鋼鉄の魔導騎士―ギルティギア・フリード』で『水神使いエリア』を攻撃！『魔導鋼破斬』！」

「きゃあっ！　エリア！」
『くっ……まずったわ』
凛ＬＰ２３００
「更に、『切り込み隊長』と『召喚僧サモンプリースト』でプレイヤーにダイレクトアタック！　終わりだ！」
「きゃあああああっ！？」
凛ＬＰ０

「ほらよ。大丈夫か？」
「うん。ありがと……ぅ？」
しまった！　放心してついキャラ作りを……。
「やっぱりか。デュエルしてた時からそんな気はしてたけどよ」
「あ……」
そういえば、デュエル中も殆どキャラ作りなんてしてなかった。
「猫かぶりか」
「き、キャラ作り！　猫かぶりなんて人聞きの悪い……」
『同じでしょうが』
「エリアは黙ってて！」
「……ま、オレはどっちでもいいんだがな」
うぅ……。
「あ、あの……」
「ぁん？」
「私のこと、覚えてない？」
聞いてみた。私はもう間違いなく、あの時助けてくれたのがこの人だって確信している。けど、先輩は……？
「……悪ぃが、覚えてねえ。微妙に見覚えがある気もしないでもねえが」
「そ……っか」

少しだけ、残念。

でも、それでもいい。別に過去のことを覚えていたからってどうってことはない。……そ、それに、あの時は襲われそうになって恐怖でもしかしたら私おもら……私も忘れた。だからいい。

「大事なのは、過去じゃなくて今！」

『……なかったことにしたわね』

聞こえない。

とにかく、別に先輩が忘れていたところで関係ないんだ。スタート地点は変わらない。だから、まずは第一歩。

「あの……」

「今度はなんだ？」

「私と、お友達になってくれませんか？」

これから、全部育んで行けばいいんだから。

『でも結局、アイドルになった思惑は完全に外れたのよね』

「……エリア。一言多いよ……」

第三期第四話「バッドエンドは見飽きたよ」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第四話「バッドエンドは見飽きたよ」

コンコン。

「ルインー居るかー？」

希冴姫とルインに占拠されてしまった元・俺の部屋の扉をノックする。中からドガラガッシャンという凄まじい音と共に『ひゃあああーっ！？』とかいう希冴姫のものと思われる悲鳴が聞こえてきた。……まあルインがあんな悲鳴を上げるのは考えられないし、もし上げるのなら逆に見てみたい。

「……あー、希冴姫？　大丈夫か？」

『ご、御心配には及びませんわセツ様！　しょ、少々取り乱しただけですので！　で、ですがその、申し訳ありませんが少々お時間を頂いてもよろしいでしょうか？』

「ああ、別にいいよ。ゆっくり準備しな」

俺がそう希冴姫に声をかけ、数秒もしない内に『ちょ、お待ちなさいまだわたくしの用意が終わって……というか貴女もなんて格好で……』という希冴姫の焦った声が聞こえてきた。

「お待たせ」

「な」

思わず絶句する俺。

「あ、あああああああセツ様これはその……い、いえ何と言います

か……あぅあぅ」

俺が見たのは着替え途中でかなり着衣が乱れた状態であわあわしている希冴姫と、平然と下着姿で、堂々と俺を出迎えたルインの姿。

「……お兄ちゃ～ん。ちょぉぉっといい子にしててねぇ～……」

さだめは空恐ろしい笑顔で俺を牽制しつつ、固まっているルインを部屋の中に蹴り込んで扉を閉めた。

「……あー」

希冴姫たちの口論が聞こえてくる。

『なんという生き恥……セツ様にこのような……それもこれも貴女が……！』

『彼に肌を見られることに羞恥の感情はない。むしろ喜ばしい』

『それには全面的に同意するけどさだめ以外の女がやることには許容できない。っていうか他の人居たらどうするの』

『人の気配には気を配った。私も彼以外に肌を見せる気はない』

『そもそもお兄ちゃんを誘惑しようとするその性根が……』

『自分の武器を使わずに戦争には勝てない』

『くっ！　この忌々しい巨乳族が！　万死に値するよ！　地獄に落ちて闇魔に舌じゃなくて乳抜かれて転生してくればいいのに……』

『きっと、前世でそうされたのが貴女』

『くきゃー！！』

『い・い・か・ら、早く服を着なさいな貴女は！』

……あー。って俺さっきからこればっかりだな。

まだしばらくドッタンバッタンと騒いでいたが、やがてそれも落ち着いたのか、再び扉が開かれた。

「……ま、予想はしていたが」

現れたのは目を回して突っ伏している希冴姫と下着姿の二人。一体何がどうなってそんなアホな状態になったのか、小一時間ほど問い詰めたい。

「どう！？　お兄ちゃん」

「服着れアホ」

「冷ややか！？」
「妹の半裸に反応するとでも？」
「義妹！」
「実妹だ！」
「設定変更！」
「できるかっ！」
「私は？」
「服着れ。目の毒」
「顔が赤い！？」
「満足した」
「おのれ巨乳族！」
「これがブラの力」
「さだめもしてるし！」
「ベビードールレベルで何をほざく」
「くにゃーっ！」
「いいからとっとと服を着ろ馬鹿二人！」
結局この馬鹿二人が服を着るまでに、小一時間。俺と希冴姫の二人で説教するのに二時間近い時間をかけて、漸くデッキ調整に入れたのは、もう日も暮れかけた後の事であった。

「先攻後攻はお好きにどうぞ。僕はどちらでも構わない」
あくまでも余裕の姿勢を崩さない真中希望。舐められていると言うよりは強者の余裕といった雰囲気を強く感じます。なら……。

「私のターン、ドロー！」
その余裕、打ち崩して見せます！
「手札から『ヘカテリス』の効果を発動！　デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加えて発動します！」
いつも通り。ワンパターンと言われても、私はこのスタイルを崩さない。
「手札の『ジェルエンデュオ』を特殊召喚！『ジェルエンデュオ』を二体分のリリースとして『虚無の統括者』を攻撃表示でアドバンス召喚します！」
『虚無の統括者』ＡＴＫ２５００
残念ながら『虚無の統括者』をヴァルハラで特殊召喚することはできませんが、『ジェルエンデュオ』と絡めれば一ターン目から出すことができます。これで特殊召喚は封じました。通常召喚できるモンスターでは攻撃力２５００の『虚無の統括者』はそう簡単には倒せません。
「更に、カードを一枚セットしてターンエンドです！」
「ふむ……伏せカードは『和睦の使者』、かな？」
……動揺は、顔に出なかったと思います。何故、この人は……。
「何。別に大したことじゃない。ただ君のデッキに入っているトラップは『和睦の使者』か『血の代償』くらいだからね。適当に言ったって二分の一で当たるさ」
心を読まれた？　それともなにか別の……。
「さあ、どうだろうね。知りたくば、力を見せてもらおうか」
やっぱりです。私の考えていることは相手に筒抜け。
「……随分と卑怯な真似をするんですね。実力では勝てないからって小細工ですか？」
「さてね。ただ言えるのは、僕の力は常時発動していてね。正々堂々とはどうしてもいかない」
「……私はこれでターンエンドします」
「僕のターンだね。ドロー」

私のデッキは相手に筒抜け。でも私は相手のデッキを何一つ知らない。情報のアドバンテージは圧倒的に不利。
「……でも、そんなことは始めからわかっていたことです」
「勇ましいね。では、僕は手札から速攻魔法『トラップ・ブースター』を発動。手札からカードを一枚捨てることで手札からトラップカードを発動することができる。僕が捨てるのは『おジャマジック』！」
「な……」
「手札から『おジャマジック』が墓地に送られたことにより効果発動！　デッキから三体のおジャマたちを手札に加える。手札からトラップカード『サンダー・ブレイク』を発動する。手札の『おジャマ・グリーン』を捨てて『虚無の統括者』を破壊する」
『おジャマ・グリーン』が体を雷に変えて『虚無の統括者』を撃ち抜く。
「っく！」
そんな……あんなモンスターで『虚無の統括者』が……。
「どんなカードも使い様。さて、僕は手札から『融合』を発動。手札の『おジャマ・イエロー』『おジャマ・ブラック』を融合し、エクストラデッキから『おジャマ・ナイト』を融合召喚する」
『おジャマ・ナイト』ＤＥＦ２５００
二匹のおジャマが飛び跳ねて融合の渦の中に入り、中から鎧姿のおジャマ・イエローが。……ぶっちゃけ鎧が似合ってません。
「更に手札からトラップカード『おジャマ・トリオ』を発動。君のフィールドに『おジャマ・トークン』を三体特殊召喚」
「っ！　しまっ……」
「気付いたようだね」
私のフィールドが気色悪いおジャマたちによって占拠されてしまう。これじゃあ……。
「キミのデッキはモンスター特化型。モンスターが出せなければ何もできない。今まではそんな弱点を突いてくる相手が居なかったよ

うだけどね」
「まさか……」
「そう……君のデッキの弱点は……」
「おジャマ……！？」
愕然とする。い、いままでこんなアホな対策されたことは……。
「なかった？　だろうねぇ」
真中希望はくっくと愉快そうに笑っている。
「さて、僕はこれでターンエンドだ。モンスター破壊カードを持ってないアテナはどうするのかな？」
……っ！
「わ、私のターン、ドロー！……ターンエンドです」
「僕のターン、ドロー。僕は『弾圧される民』を守備表示で召喚。ターンエンド」
『弾圧される民』って……あ、あの人まさか……。
「あ、気付いた？　そう。これファンデッキ。『大革命』が使ってみたくてねー。戦闘力皆無だけど」
ば……。
「馬鹿にされてる……！」
でも、私にはどうすることもできない。
「ドロー……エンドです」
「ドロー。僕は魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚引く。『逃げ惑う民』を守備表示で召喚してターンエンド」
「こ、この……」
ここまで腹が立ったのは初めてです。相手に、というよりもむしろ自分に。ファンデッキに良いようにやられるこの屈辱！
「た、ターンエンドですっ！　もう好きにしてください！」
半ば以上に自棄になっているのを自覚する。でも仕方ないじゃないですか！　あれだけシリアスに決めておいてなんですかこのグダグダ感！
「僕のターン。ドロー。残念、レジスタンスは来なかったか。『キ

ーメイス』を攻撃表示で召喚。装備カード『光学迷彩アーマー』を『キーメイス』に装備。ダイレクトアタック」

『キーメイス』ＡＴＫ４００

可愛らしい妖精がステルスモードで……ってせっかく可愛いのに隠しちゃダメじゃないですか！

「きゃ……」

アテナＬＰ３６００

「はい。ターンエンド」

「ぐっ……ドロー！　ターンエンドです！」

ちまちまと削るだけ。こっちに対抗策がないのをいいことに！

「僕のターン。ドロー。おっと、ちょっとだけ『革命』が成功したね」

「きゃあああっ！？」

アテナＬＰ２４００

「で、更に『キーメイス』でダイレクトアタック」

「う」

アテナＬＰ２０００

「ターンエンド～♪」

「ど、どこまでコケにすれば……」

温厚な天使として有名なアテナちゃんもいい加減怒りますよ！

「いや、微妙に温厚じゃないよね。君。というか結構壊れてきてる？」

「誰のせいですかぁ！」

さっき「僕は強いよ。君たちが考えているより、ずっとね」とかなんとかカッコよく言ってた癖になんてバカバカしいデッキを……。

「いやいや、これでも結構強いんだよ？『トランス』って言ってね。最高クラスのロックを……」

「少なくとも『キーメイス』は関係ない筈です！」

「アイドルアイドル。いいじゃないか。マキュラとかをアイドル設定するよりよっぽど健全だよ」

「ロリコンは健全ではありません！」
「さて、十三歳の君と半ば付き合っていたセツと、光みたいな子を恋人にしている僕。どっちがロリコンか……」
「私だっておっぱいありますもん！　セツはロリコンじゃありません！」
「爆弾発言だねぇ。さだめが聞いたら怒るよ～？」
「そっちの方が似合うのに意地張ってベビードール着ないさだめさんはどうでもいいです！」
「ちなみに丁度セツたちの方でもベビードールの話題が」
「だから何がしたいんですか貴方は！」
「ほらほら、君のターンだ」
「はいはいエンドですよ何もできませんよ！　わかってるんだから勝手に『ずっと俺のターン』とかやってればいいじゃないですか！」
「いやー『ずっと俺のターン』かー。それはセツの専売特許だからねえ……」
「セツのだってパクリですよ！」
「じゃ、とにかくドロー。おお、『団結するレジスタンス』だ。揃った揃った。……『大革命』以外」
「肝心のカードがない！」
「『キーメイス』でダイレクトアタック」
「ああもうチクチクチクチクとぉ！」
アテナＬＰ１６００
どうせなら一思いにドカンとやって欲しい。これ以上屈辱的な会話を続けたくないです！
「はいエンド。アテナの「エンドですっ！」おやおや……」
我ながら乱雑です。ですがいい加減イライラが頂点に……。
「お、来た来た『大革命』だ」
「さっさとやっちゃってください！」
「残念だけどこのカードはトラップだから一ターンおかないと「私はエンドですってば！」ごめんねーまだ伏せてなかった。もう一度

ドロー」
「あああああ～もう！」
「お、『革命』」
「ってちょっと！」
アテナＬＰ４００
「おや、丁度４００。『キーメイス』でダイレクトアタック」
「せめて『大革命』使ってくださいよー！？」
アテナＬＰ０
私はがっくりと膝を着く。悔しさとかより単なる疲労感で。
「ふむ……ここはこう言っておくべきなのかな？　ガッチャ！　いいデュエルだったよ！」
「死・ネェェェェェ！！」
私は思わず立ち上がって叫んでいた。
「おお、キャラが完全に崩壊した」
「誰の所為ですかぁぁぁぁぁぁっ！？」
「十代君じゃない？　セリフ的に」
「貴様ダァァァァァ！！」
「さあ、誰が予想したでしょうか。あのアテナが貴様とか叫ぶ光景を！」
「こっ、これはもう精神的凌辱です！」
「楽しかったでしょ？　セツたちとしゃべってるみたいで」
「どこが！　セツたちとのやり取りはもっと楽……し、くて……」
……。
一気に頭が冷えていく。
いつの間にか、希望さんも真剣な、けれど柔らかな微笑みを浮かべています。
「楽しかったんだろう？　幸せだったんだろう？　なら、戻ればいいじゃないか」
あの、微温湯のように温かで、優しい世界に。
「君は負けたけれど、教えてあげよう。終焉の本体は君の愛する者

のすぐそばに。今にも弾けて呑み込みそうなほどに大きく強く」
「っ！」
「欠片をいくら潰しても意味はない。いずれその生成速度に追いつかなくなって世界は終焉を迎える。セツもろとも」
癌細胞をチクチク潰しているようなものだ。そう言って希望さんは首を振る。
「じゃあ……どうすれば」
「随分と簡単な問いだ。答える価値すら感じない」
帰れと……セツたちの下へ……。
「だめ……ダメです。私は……」
「またセツの優しさに触れるのが怖い？　弱くなってしまいそう？　もう一人では立てなくなる？　きっと……」
「依存してしまいます……」
きっともう、離れられない。
「恋は人を弱くする。慣れ合うことで隙が生まれる。……なんだい？　君は僕に『恋は人を強くもするんだよ』だの『助け合い、協力することは何より尊い』とかそんなテンプレートでチープな説教をさせるつもりかい？　まったく冗談じゃない。僕はただアテナ、君とセツたちの協力が要る。君たちが力を合わせなくちゃ終焉は打倒できない。世界を守るため、君には何としてもセツたちの下に戻って貰わなくてはならない。だからそのために、君がセツことを好きだというファクターが有利に働きそうだったから利用させて貰っているだけ」
その言葉に愕然とする。まさか……。
「私がっ！　私がセツのことが好きになったのはっ！　まさか、まさか……」
「おっと、悲しい勘違いはすれ違いの元だ。君の感情を操作なんてするもんか。そんなことをするなら手っ取り早く君をセツたちの下に縛り付けておくような暗示をかけている。君の気持ちは君だけのものだ」

「あ……」

すごく、ほっとした自分がいました。セツへの気持ちは……。

「ウソじゃない。偽物の、人から強制された勘違いの愛なんかであそこまで人を愛することはできない」

「……」

「偽ることの天才であり常に自分すら偽り続けているセツが、偽りの愛に心動かされる筈もない。君の、君たちの愛は本物だ。何にも恥じることはない」

希望さんの言葉がスーっと心にしみてくる。セツへの気持ち、大好きな気持ち。全部本物だと、その言葉だけで泣きたくなるほどに嬉しい。

「でも」

「君は尚更自分を許さない。愛が本物だとわかったからこそ、疑心が消えて罪悪感が顔を出す」

そう……そうです。私は、セツを。

「それは、君がセツを“この世界に引き込んだ”張本人だから？それとも、さだめが“欠片にとり憑かれる”原因となったからか？」

やっぱり、知っていた。この人は、何もかも。

「そんなの……」

そんなの。

「両方に……決まっているじゃないですか……っ！」

私は今にも零れそうな涙を堪えて希望さんに向かって叫ぶ。今にも掠れて、消え入りそうな声だったけど。

「……血の滲むような慟哭だ。積もり積もった幸せが、取り戻した記憶と共に癌となって君の心を蝕んでいる。幸せな記憶を、心に突き刺さる棘として感じる不幸は、一体どれほどのものなのだろうね」

「帰って……ください」

もう、この人の言葉は聞きたくない。

「また逃げるのか？　現実から目を背けて？　その行為が君を苦しめると知っていながら」

「帰って！！」
「……」
希望さんは背を向けた。
「……光が、君とまた友達になりたい、メールがしたいって、言ってたよ。僕も……次に会う時は、彼の傍らに佇む君を、見たいものだね。……もう、バッドエンドは見飽きたよ」
希望さんは最後に小さな声で何事か呟いて、立ち去って行きました。
「……セツ」
逢いたい。逢えない。
「……最低、です」
貴方に不幸を押し付けて。貴方に好意を押し付けて。
「最後は裏切る。……本当に、最低」
夜の帳が落ちてくる。しばらくは、動きたくなかった。

第三期第五話「未来に望む光」（前書き）

お待たせしました。第五話です。

この第五話は、ほぼ完全に書き下ろし。何しろ改訂前だと朱雀とルインのデュエル回でしたからね。朱雀が出ない以上、完全書き下ろしです。カードはルインＶＳさだめになります。では、どうぞ。

第三期第五話「未来に望む光」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第五話「未来に望む光」

一通り説経が終わった後、俺は希冴姫に慌てていた理由を尋ねていた。

「で、希冴姫は何をそんなに焦ってたんだ？」

「実は、その……これを」

希冴姫が見せてくれたのは親指大の宝石を五つ、五芒聖の形で集めたペンダント。それぞれの石はゴールド・シルバー・ブルー・グリーン、そしてルージュ色に透き通っていて、思わず目を奪われた。

「その……以前、細工物をプレゼントすると言ったことを覚えていますか？」

「あ、ああ。確か……」

エースとの諍いがあった時だ。その後にあった事件ですっかり忘れていたが、確かにそんなことを言っていた。

「あの時から、コツコツとやっていたのですが、ついさっきようやく完成いたしまして……本当はもう少し包装やシチュエーションにも凝りたかったのですが……」

目を逸らして頬を染める。

「……ありがとう。貰っていいか？」

「は、はい！　どうぞ、お納めくださいまし！」

パァッと笑顔を見せてくれる希冴姫。

折角だから付けてもらおう、と提案しようとしたところで……。
「そぉい！」
「あっ！？」
さだめにペンダントを奪われ、付けさせられた。
「ふぅ……危ない危ない。もう少しで『じゃあ、折角だし付けてもらおうかな？』『はい！　喜んで！』とかいうクソったれイベントが行われるところだった……」
鋭い……。まあ奪って壊したりしなかっただけ自重したと思っておこう。
「くっ……チャンスが……」
「ぐっじょぶ」
悔しげに顔を歪める希冴姫とさだめにサムズアップを向けるルイン。
微妙に険悪な雰囲気だが、こいつらは何だかんだで普段はそこそこ仲が良いのは知っているので放置する。というか、下手に俺が口を出すと泥沼化するのは目に見えて明らかなのでスルーが上策。
「賢明」
「何か言ったか？　ルイン」
「さあ？」
相変わらず、さらっと俺の心を読む奴だ。
「それで、貴方は何故ここに？」
「ん？　ああそうだった。ちょっとさだめのデッキ構築するから、お前も一緒にどうかと思ってな」
ルインに問われて、ここに来た理由を思い出す。
「ん。ありがとう。でも……」
「でも？」
「最初は、自分の力で組んでみたい。それから一度デュエルして、その後でアドバイスを貰いたいから」
「……なるほどな。そういうことなら」
ルインも、色々考えてるんだな。

「貴方に頼るばかりじゃいけないから」
「そんなことは気にしなくてもいいが……そうだな」
ルインにも何か思うところがあるんだろう。それなら、その意志は尊重したい。
「むぅ……そんな風に言われると、さだめがお兄ちゃんに頼りきりなイメージに……」
事実だろうに。
「ま、お前はそれでもいいんだよ。人それぞれだからな。こういうのは」
「それでは、わたくしはお茶でも用意させていただきますわ」
「え……」
そう言って席を立つ希冴姫に、さだめがヘンな顔をした。
「……なんですの？」
「希冴姫さんって……お茶淹れられるの？」
「し、失礼な！　わたくしだってお茶くらい淹れられますわ！」
「いやだって、そういうのって全部ジャックさんに任せてるんじゃないの？」
ジャックは執事じゃないぞ。一応な。
「それは……まあ普段はそうですが」
「そうなのかよ」
「で、ですが少し喉が渇いた程度の時まで呼びつけたりはしません。そういう時は自分で淹れますもの！」
「……まあなんにせよ、そういうのはお兄ちゃんに任せとくといいよ」
「信用ゼロですの！？」
丸っきり信用してないさだめに愕然とする希冴姫。
「彼と貴女、どちらの方が美味しく淹れられる？」
「……それは、セツ様の方が」
「なら、彼に任せるべき」
「……わかりましたわ。何だか釈然と致しませんけど」

ムスッとした様子の希冴姫に苦笑して、俺はお茶を淹れるため、食堂に向かうのだった。

「パワー・ウォール！！」
「カードを捨てるな！」
デッキ構築を初めて小一時間ほどで、さだめがカードを投げ出した。
「あーもう！　ダメ！　さだめに儀式は合わない！」
「あっさり諦めたな」
「だって手札に儀式魔法と儀式モンスターと生贄揃えて……とかまどろっこしいんだもん。全然来ないし」
「……ま、確かにお前が使うと『マンジュ・ゴット』も来てくれない始末だしな。それも仕方ないか」
とことん天使族に縁がないんだな。コイツは。
「やっぱさだめはいつも通り、次元ダークで組むよ。ごめんねルイン。儀式魔人借りといて」
さだめはルインに儀式魔人のカードを返しつつ謝る。
「別にいい。人それぞれに合ったデッキがある」
「ルインは、儀式魔人合うの？」
「……私は元々儀式モンスター」
「あ、な～る……」
そりゃ、抜群のシナジーだろうな。
頭を抱えるさだめに、俺は少し頭を捻って考えてみた。
「さだめ、仮想敵を作って構築してみればどうだ？」
「仮想敵？」
「ああ。相手の戦略を読み、メタメタのメタデッキで嫌がらせをして高笑いするのはお前の得意技だろう？」
「言葉を選んで！？」

「……ん？　ああ悪い。相手の弱点を、ネチネチ生かさず殺さず執拗に攻撃して敵の戦意というか心を徹底的に蹂躙するのが、お前のデュエルだろう？」
「選べてないよ！？　むしろ更に印象悪くなってるから！」
「……いや、他に言い回しが思い付かないというか、実に的確な表現ができたと我ながら感心しているところなんだが……」
「的確ならいいってもんじゃないよね！？　オブラート！」
「さだめにだけは言われたくない単語の一つだよな。オブラート」
「そうだけど！」
「まあ兎も角、お前は基本的なデッキの構築能力は俺よりも高いんだよ。ただ、その能力がメタる方向に特化してる所為で、仮想敵なしだと構築できないだけで」
　事実、コイツは相手のデッキを見切ると一分足らずで即興のアンチデッキを組み上げる。それで事故を起こさないんだから、コイツのデッキビルダーとしての能力は相当なものだ。
「だから、最初にデッキを組む時から、誰かとデュエルすることを前提に組めば絶対に良いデッキが組めるさ」
「なるほど。つまり、アテナをボロクソのメッタメタに叩きのめして鼻で笑えるようなデッキを組めばいいと……」
「言葉を選べ！」
「……え？　ああ、だからつまり、天使族や光属性を地の底に引きずり込んで背中の羽をむしり取って犯し尽くすイメージで組めばいいと」
「選べてねえよ！　むしろ残虐性が増しているよ！」
「よし、大体の構想は固まった。ククク、待ってるといいよアテナ。アンチやメタを作らせたらさだめの右に出る者はいないということを思い知るといいよ」
「速えよ！　今までの苦労は何だったんだよ！」
　ったくコイツは……。
「……似た者兄妹」

「ですわね……」
「えーっとこれをこうしてああして……よっし出来た！」
「速えよ！　さっきの小一時間何だったんだよ！」
残像が見える程のスピードでデッキを組み上げたさだめに思わず突っ込む。
「……まあいいか。じゃあ、試しにそのデッキでルインとデュエルしてみろ」
「私？」
「ルインも出来てるんだろ？　デッキの調整も、使ってみなきゃ出来ないからな」
「わかった」
「えーと、ルインのデッキか。じゃあこれを入れて……よし、アンチデッキ構築完了！」
「だから速えよ！」
ものの数秒でアンチデッキを組むその手腕は脱帽に値するが……何だかなぁ。
「……あまり気が進まない」
「気持ちはわかるが……まあ頑張ってくれ」
「……わかった」
「「デュエル！」」
「私のターン、ドロー。私は『終末の騎士』を召喚。効果により、デッキから『儀式魔人リリーサー』を墓地に送る」
『終末の騎士』ＡＴＫ１４００
ルインは定石通り、儀式魔人を墓地に送ったか。
「私はこれでターンエンド」
「さだめのターン、ドロー！　さだめは『霊滅術師カイクウ』を攻撃表示で召喚するよ！」
『霊滅術師カイクウ』ＡＴＫ１８００
「げ……」
俺は思わず呻いた。

「セツ様？　あのモンスターは……」
「カイクウは……儀式魔人の天敵だ」
「そうなんですの？」
「ああ。儀式魔人は、墓地から除外することで、儀式召喚のリリース源として扱える効果を持っているんだが、カイクウは相手プレイヤーが墓地からカードを除外する効果を阻害する効果を持つ」
「ということは……」
「今さっき墓地に送ったリリーサーの効果は使えない。更に、カイクウは……」
「バトル！　カイクウで『終末の騎士』を攻撃！『霊滅独鈷杵（どっこしょ）』！」
「くっ……！」
ルインＬＰ３６００
「更にカイクウが相手プレイヤーにダメージを与えた時、墓地のモンスターを二体まで除外することが出来る！　墓地のリリーサーを除外するよ！」
「！？」
『～ハァッ！』
カイクウが念じると、墓地にいたリリーサーの霊魂が消滅していった。
「あれが、カイクウのもう一つの効果だ。相手の墓地のモンスターを除外する」
「……確かに、基本墓地にあって除外してこその儀式魔人にとっては天敵ですわね」
「さだめはカードを一枚セット。ターンエンドだよ」
「……私のターン、ドロー。私は『マンジュ・ゴット』を守備表示で召喚。『マンジュ・ゴット』の召喚に成功した時、デッキから儀式モンスターか儀式魔法一枚を手札に加える。私はデッキから『高等儀式術』を手札に……」
「カウンタートラップ発動！『強烈なはたき落とし』！　手札に加えたカードをそのまま墓地に落として貰うよ」

「っ！」
アイツ……マジでアンチっていうかメタデッキだな。その内『ライオウ』とか出てきそうだ。
「……私はカードを一枚セット。ターンエンド」
ルイン、苦しそうだな。まあ、とことんメタられているんだから気持ちはわかるが。
「……悪いことしたか」
デッキ調整するためのデュエルには不適当な采配だった。どっかから三沢あたりでも連れてきてやればよかったか。
「さだめのターン！　ドロー！」
さだめの方はノリノリだな。
「さだめは『ライオウ』を攻撃表示で召喚！」
『ライオウ』ＡＴＫ１９００
「うわ！　マジで出しやがった！」
「セツ様、あれは？」
「ああ、『ライオウ』はメタビートの代表的なモンスターだ。下級のメリットモンスターとしては最高クラスの攻撃力、チェーンに乗らない特殊召喚を、自らをリリースして封じる効果、更にドロー以外の方法で、デッキから手札に加える効果を無効化する。例えばさっきの『マンジュ・ゴット』とかな」
「それは……」
二つもメリット効果を持っていながら１９００の攻撃力は脅威だ。かなり卑怯と言ってもいい。
「バトルだよ！『ライオウ』で『マンジュ・ゴット』を攻撃！『ライトニング・キャノン』！」
「リバースカードオープン。トラップ発動『ドレイン・シールド』！『ライオウ』の攻撃を無効にしてライフを１９００ポイント回復する」
ルインＬＰ５５００
「むぅ……ならカイクウで攻撃！『霊滅独鈷杵』！」

カイクウの攻撃が『マンジュ・ゴット』に突き刺さる。今度はなんのトラップも発動せずに倒される。しかし、守備表示だったため、カイクウの効果は発動しない。
「やるね。さだめはターンエンドだよ」
「私のターン、ドロー。私はモンスターを一枚セット。カードを一枚セットしてターンエンド」
ルインは淡々と、冷静にカードをプレイする。この辺りが優秀だな。ポーカーフェイスも崩れないし、読みにくい。俺みたいなパーミッション使いからすればやり難い相手だ。
「さだめのターン、ドロー！　バトルだよ！『ライオウ』で守備モンスターに攻撃！『ライトニング・キャノン』！」
『ライオウ』の放った雷の砲弾が、裏守備モンスターを貫く。ルインの守備モンスターは……。
「……私は『メタモルポット』の効果を発動する」
「んげっ」
なんかさだめがヘンな声出したが、兎も角互いの手札がリセットされる。ルインの手札は三枚、さだめの手札は四枚だったため、さだめの方が損をしている。
「お、でも悪くないかも。とりあえずカイクウでダイレクトアタック！」
「リバースカードオープン。『ガード・ブロック』。ダメージを無効にしてデッキから一枚ドロー」
「むぅ、また防がれたか……さだめはメインフェイズ2に『霊滅術師カイクウ』をリリースして『虚無魔人（ヴァニティー・デビル）』をアドバンス召喚！」
『虚無魔人』ＡＴＫ２４００
「最悪だ……」
ここに来て、お互いに特殊召喚を封じる『虚無魔人』。儀式召喚主体のルインにとっては最悪も最悪。さだめの手札を交換したのが仇となったか。
「むふふ～。更にカードを一枚セットしてターンエンドだよ！」

「……私のターン、ドロー。私は速攻魔法『禁じられた聖杯』を発動。『虚無魔人』を選択」
「んえっ！？」
またヘンな声出した。
「禁断の聖杯に口を付けし者は、理性を失い暴走する。攻撃力を４００ポイントアップする代わり、効果を無効にされる。これで、特殊召喚は可能」
『虚無魔人』ＡＴＫ２４００→２８００
「ぬぅ、流石にやるね……けど、これで『虚無魔人』の攻撃力は２８００！　ルインの攻撃力じゃ勝てないよ！」
「……なら、勝てるようにするだけ。私は手札から儀式魔法『エンド・オブ・ザ・ワールド』を発動。墓地の『儀式魔人プレサイダー』二体をゲームから除外して手札から『破滅の女神ルイン』を儀式召喚」
『破滅の女神ルイン』ＡＴＫ２３００
ルインを出せたか。とはいえ、ルインの攻撃力は素の『虚無魔人』にも敵わない２３００。果たしてどうするか。
「私は装備魔法『ダグラの剣』を私に装備」
『破滅の女神ルイン』ＡＴＫ２８００
「……なるほど。『虚無魔人』の攻撃力が上がっているのはこのターンのみだから、次のターンまで耐えるつもりだね」
しかも『ライオウ』を倒すには十分な攻撃力だ。
「バトル。『破滅の女神ルイン』で『ライオウ』に……」
「甘い！　リバースカードオープン！　永続トラップ、発動！『超古代生物の墓場』！」
げ……。
さだめの罠が発動し、ルインの身体が凍りつく。
「『超古代生物の墓場』がある限り、特殊召喚されたレベル６以上のモンスターは攻撃することも、効果を発動することも出来ないよ！」

なるほど。『虚無魔人』を突破されることは予想済みか。さだめらしい、えげつないアンチデッキだ。
「ま、ルインには相応しいカードだよね。超古代生物。ぷくくっ！」
「……カチン」
あ。
「……なぁ希冴姫。何か今、キレちゃいけないモノがキレなかったか？」
「わたくしにも、聞こえましたわ」
……まあ、散々アンチされた挙句超古代生物呼ばわりされたら、いくらルインでもキレるか。
「……流石に、今のはカチンときた。イラっとした」
「ふふん。じゃあどうするの？」
「……全力で勝ちに行く。私はカードを一枚セット。ターンエンド」
「さだめのターン、ドロー！　さだめは『昇霊術師ジョウゲン』を守備表示で召喚！　効果発動！　手札をランダムに一枚捨てて、フィールド上の特殊召喚されたモンスターを全て破壊するよ！」
アイツまた特殊召喚メタを……。
「くっ……！」
「さあ、バトルだよ！『ライオウ』でダイレクトアタック！」
「っ！」
ルインＬＰ３６００
「続いて『虚無魔人』でダイレクトアタック！」
「くぁっ！？」
ルインＬＰ１２００
「さだめはカードを一枚セット。ターンエンドだよ」
「私のターン、ドロー」
さあ、どうするルイン？　手札は三枚。逆転が不可能だとは、言わせないぞ。
「私は手札から魔法カード『ライトニング・ボルテックス』を発動。手札を一枚捨てて、全てのモンスターを破壊する」

「にゅあっ！？」
「お前、そのヘンな声マイブームなのか？　さだめの中では奇声が来ちゃってるのか？」
「そ、そういうことじゃないけど！　思わず漏れた呻きと言うかなんというか……」
　兎も角、さだめの場のモンスターは全滅。勿論、それだけじゃまだルインに勝ち目はないわけだが……。
「永続魔法『命削りの宝札』。デッキからカードを五枚ドローする」
「いつも思うんだけど、そのカードずっこい！」
　同感だ。俺も使うけど。
「手札から装備魔法『契約の履行』を発動。ライフを８００ポイント支払い、墓地から『破滅の女神ルイン』を蘇生する」
　ルインＬＰ４００
　『破滅の女神ルイン』ＡＴＫ２３００
「そして手札から儀式魔法『未来への光』を発動する」
「何それ？」
　さだめの疑問に、ルインはニヤリ、と珍しく得意げな笑みを見せた。
「……貴女の知らない、逆転のカード」
　少なくとも、儀式魔法。そして、態々ルインを蘇生させたからには、それに関連するカードだろうが……。
「私は墓地の『儀式魔人プレコグスター』と『儀式魔人ディザーズ』、そしてフィールドの『破滅の女神ルイン』をリリースする」
「何その儀式魔人！　何時の間に……って、そっか『メタモルポット』と『ライトニング・ボルテックス』……！」
　いやそれよりも、プレコグスターのレベルは３。ディザーズのレベルは１。そしてルインのレベルは８だから、儀式召喚のルールに従えば……。
「レベル１２……神に並ぶレベルのモンスター！？」
「私は……女神。貴方のお陰で、未来に希望を見出した女神。だか

らこそ、私はこの力を、貴方のために使うと誓う。『希望の女神ルイン』を儀式召喚！」

『希望の女神ルイン』ＡＴＫ２５００

ルインは、先ほどの得意げな笑みとも、普段の無機質な笑みとも違う、透明で綺麗な笑顔で俺に言う。

「更に手札から『デュナミス・ヴァルキリア』を攻撃表示で召喚」

「と、トラップ発動！『奈落の落とし穴』！『デュナミス・ヴァルキリア』には消えて貰うよ！」

「構わない。手札から魔法カード『死者蘇生』で、貴女の墓地の『霊滅術師カイクウ』を蘇生させるから」

『霊滅術師カイクウ』ＡＴＫ１８００

「うあ～……ちょい、ちょい待ってよ。まださだめの場には『超古代生物の墓場』が……」

「……さだめ、わかってるんだろ？　だからルインの儀式召喚に重ねて『奈落の落とし穴』を使わなかったんだろ？」

「うぅ……」

「どういうことですの？」

「……『儀式魔人ディザーズ』を儀式召喚に使った儀式モンスターは、罠の影響を受けなくなるんだ。つまり、墓場を素通り」

「ということは……」

「私の勝ち。ダイレクトアタック」

「ぅにゅあ～～～！！」

さだめＬＰ０

「うあ～！　負けた～！」

「……さだめのアンチデッキ事態に問題は無かった筈だけどな」

実際、さだめの使ったカードは最後の奈落に至るまで全てルインにとってはご遠慮願いたいカードばかりだった筈。

「よくもまぁ勝ったよな。ルイン」
「任せて」
ルインはいつもの無表情ながら、何処となく気分が良さそうだ。
「何せ、初勝利」
「なに？」
「貴方と会ってから、初めて勝てた」
「そうだっけか？」
そもそもルインがデュエルすること自体あまりなかったか。
「むぅ……何が悪かったかなぁ？」
「お前は油断し過ぎだ。伏せ除去くらいしてから突っ込め」
「うっ……それは、まぁ……」
「とはいえ、あの一瞬でアンチデッキとしては完璧な位に組み上げてはいたけどな」
主に特殊召喚メタのデッキだったが。ルインに対してはこの上なく作用していた筈だ。
「ルインのプレイングが良かったってことか」
「……ぶい」
得意げなルインに、さだめが憮然とした表情を見せる。
「さだめ、アンチデッキ使うと負ける気がしてきた」
「……そうかもな」
俺も、なんとなくそんな気がしてきた。
「なにゆえ!?　ホワイ!?　何故アンチデッキで勝てないの!?　今回のデッキだって、ルインのみならず、大半のデッキに互角以上に戦えるスタンダードなメタビートのつもりだったのに!」
確かに、汎用性の高い強カードだったとは思うが。
「あー何と言うか、この世界のルール的に、アンチデッキは許容され難いんじゃないか？」
「なんて狭量な世界……！　もっと寛容に、人に優しくならなきゃダメだと思う！」
「そうだな。言ってやるといい。鏡に」

「うにゃ～！　さだめ最近勝率低い～！！　いつかはアカデミアを恐怖の底に陥れるほどのボス的風格を醸し出してたのに～！」
「よくあるだろ。敵の時滅茶苦茶強かったのにパーティインすると全然使えないライバルキャラ」
「そんなキャラは嫌ぁ～！！　絶対、絶対もっと強くなって見返してやる～！！」
日も暮れ始めたレッド寮に、さだめの叫びが響き渡るのだった。

第三期第五話「未来に望む光」（後書き）

こんにちは。

というわけで、ルインの勝利です。今回は希望だけです。慈愛は、またいずれ。一度に両方出すのはもったいないと気付きました。

今回のさだめは本人も言っていた通り、メタビート。主に特殊召喚に対するメタビートです。注目カードは『超古代生物の墓場』。現環境に於いては高レベルシンクロモンスターに対するメタですね。GXだと融合ヒーローとかには効果抜群です。ルインのデッキには刺さりまくりなカード群を使いましたが、世界の法則だか何だかの所為で敗北（笑）。というか、今回のさだめ、いいとこなしです。前回のデュエルから、ずっとダメダメさだめちゃんです（笑）。通称さ駄目ちゃん（嘘）。

それでは、悠でした！

第三期第六話「新入生の日々」（前書き）

完全書き下ろし～。ちなみに、改訂するにあたって改訂前とは話の順番が入れ替わったりとかしますが、そこら辺も予めご了承ください。

第三期第六話「新入生の日々」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第六話「新入生の日々」

「え～ですから以上のように、フィールド魔法は魔法・罠ゾーンを圧迫せずに効力を発揮できるという利点の他、その効果を相手にも利用される可能性があることや、特性上魔法・罠除去カード以外に、相手のフィールド魔法の上書き発動による破壊まで視野に入れなくてはならないので、運用についての注意点は他の永続カードよりも多く……」

「うぁ～……タイクツ」

さだめは、今更わかりきったことをつらつらと並び立てる授業にうんざりしつつ、机に突っ伏した。

この世界では、これだけデュエルモンスターズが重要な意味を持ってくる癖に元の世界のような所謂遊戯王Ｗｉｋｉと言うべきものがないらしく、デュエルに関する知識の習熟はさだめやお兄ちゃんからすれば小学生レベルと言っても過言じゃない。

「むしろ、重要な意味を持っているからかも」

重要であるからこそ、経済の中心ともなり、Ｗｉｋｉにあるような運用法や考察は研究者による参考書として売買されている、と見るべきか。

「うぅ……」

我ながら、柄にもない真面目な思考。けど、そうでもないとくだ

らな過ぎる。なにしろさだめには、生けるウィキペディアことお兄ちゃんがいるのだ。元の世界じゃ遊戯王初心者でも知っているような講義しかしないアカデミアの授業なんて、退屈でしかない。

う～……やっぱお兄ちゃんとこに遊びに行こうかなぁ……でも授業には出ろって散々言われちゃってるし……お兄ちゃんには言われたくない気がするけど。

そんなことをぼけーっと考えていると、次第に瞼が下がってくる。

「……御堂さん」

「むぁ？」

退屈過ぎて半ば以上眠っていたさだめに、教師（名前は知らない）が声をかけていた。

「そんなに、私の授業はつまらないですか？」

「うん」

即答する。超つまんない。

「っ……そ、そうですか。なら、これから出す問題に答えていただきますが、よろしいですね？」

「いいけど、手短にね。さだめ眠いし」

毎晩お兄ちゃんとの情事をシミュレートするのに忙しくて寝不足だし。

「……！　では、フィールド魔法を守る際に最も有効なカードは何か、お答えください」

「はぁ？」

あまりにバカバカしい質問に、さだめは眉をひそめた。

「わかりませんか？」

何故か得意げに問いかけてくる教師がむかつくので思い切り答えてやることにした。

「フィールド魔法を守る効果自体は『フィールドバリア』が一般的。フィールド魔法の破壊や上書き発動を防げるから。でも、バウンスや除外には対応してないから、例えば『ペンギン・ナイトメア』なんかの効果でバウンスされた場合『フィールドバリア』自体が足か

せになって発動できないこともある」
　どうせこの教師は『フィールドバリア』を正答として用意してたんだろうから、思い切り馬鹿にしてやる。
「他のカードを守ることまで考慮するならカウンター罠によるパーミッションが防衛には最適。でも基本的に永続的にフィールド魔法を守ろうと考えるより、破壊されてもすぐさま二枚目を発動できるようにサーチ手段を確保する方が効率的。汎用性の高い『テラ・フォーミング』は筆頭として、特定のフィールド魔法はモンスター効果によってもサーチ出来るんだから一々守るためにスロットを裂くのは非効率だよ」
　大体最も有効なカード、なんてその場その時で変わるんだから唯一絶対の回答なんてないのにさ。
「っていうか、教える内容が薄い。そんなルールブック読めば誰にだってわかること態々高い金払って教えてもらうとか馬鹿らしい。もうちょっと実のある授業しないと眠くなるだけだよ」
　あ～もうホント、お兄ちゃんの個人レッスンが懐かしい。昔からそうだった。学校の勉強も、全部お兄ちゃんに教わってきた。学校の授業なんて半ば素通りしていたさだめが無事に進級できたのも、お兄ちゃんが教えてくれたお陰だった。
「さだめ、お昼寝にお金かけるほど裕福じゃないよ？」
「くっ……！」
「御堂さん」
「んぁ？　どしたの凛」
「言い過ぎです」
「凛は真面目だね。さだめだって真面目に受けたくはあるんだよ？」
　態々お兄ちゃんの所に遊びに行くのも我慢して出ているんだから、出来るならそれだけの意味のある授業を受けたい。
「でも、お兄ちゃんの愚痴とか雑談聞いてる方が圧倒的に実になりそうなんだもん。それにさだめ、フィールド魔法みたいな、場持ちの悪いカードあんまり好きじゃないし」

さだめがそう言った瞬間だった。
「それは聞き捨てならないザウルス！」
教室の後方から、すっごく個性的な怒声が聞こえてきた。
「なに？　今の……」
「御堂さだめ！　オレとデュエルするドン！　オレが勝ったら、フィールド魔法が弱いとは言わせないザウルス！」
「は？」
さっぱり分からない内にどんどん話が進んで行く。
「ちょっと待って。大体、きみ誰？」
「オレの名前はティラノ剣山！　今年最強の新入生ザウルス！」
「主席入学はさだめだけどね」
とりあえず反論はしておいた。
「それがまず納得いかないドン！　あんたみたいな奴がオレを差し置いて成績トップなんてあり得ないザウルス！」
「うっさいな～。大体なにその語尾。馬鹿にしてる？」
「愛すべき恐竜さんを最大限リスペクトした結果ザウルス！　いいからオレとデュエルするドン！」
一応授業中なんだけど……ま、いっか。授業聞いてるより退屈しのぎにはなりそうだし。
「いいよ？　丁度最近負けが込んできて鬱憤溜まりまくってるし……アンタで発散してあげる」
「お、おい君たち……」
「別にいいでしょ。どうもフィールド魔法の有用性を示したいみたいだし……ルールブックの音読聞いてるよりは見世物になるしさ」
「ぐ……」
さっ、と括るのが面倒で下ろしたままだった髪を縛る。
「んじゃ、デュエルしよっか。自称一番君？」
「自称じゃ、ないドン！」
「「デュエル！！」」
「オレの先攻ザウルス！　ドロー！　オレは手札の『キラーザウル

ス』を墓地に捨てて、フィールド魔法『ジュラシックワールド』を手札に加え、はつドン！」

はつドンって……兎も角、フィールドが原生林に囲まれた太古の時代に変化する。

「これこそが恐竜さんたちの楽園！　最強のフィールド魔法ドン！」

「はいはい。それで？」

熱くなっている剣山に、水を差すように冷たい対応をして見せる。

案の定不満そうな剣山は、舌打ちをしてからカードの説明をする。

「このフィールド魔法は、恐竜さんと鳥獣族の攻撃力・守備力を３００ポイントアップさせ、罠の効果も受け付けなくなるドン！　更に、攻撃対象に選択されたとき、守備表示にすることもできるザウルス！」

ドン、だのザウルス、だのうるさいなぁ……。

「オレは手札から『俊足のギラザウルス』を特殊召喚するドン！」

『俊足のギラザウルス』ＡＴＫ１４００↓１７００

へぇ。まあ恐竜族なら定石通りだね。

「更に、オレは『俊足のギラザウルス』をリリースして『暗黒ドリケラトプス』をアドバンス召喚ザウルス！」

『暗黒ドリケラトプス』ＡＴＫ２４００↓２７００

剣山の場に、なんか羽毛とかクチバシとか生えたヘンなトリケラトプスが召喚される。

「これがオレの愛する恐竜さんザウルス！　カードを一枚セットしてターンエンド！」

あー……確かあのフィールド魔法、さだめの知ってる奴と違って面倒なんだよね。罠の効果受けなかったっけ。

「ま、関係ないか。さだめのターン、ドロー！　さだめは手札の『ダーク・クリエイター』を捨てて『ダーク・グレファー』を攻撃表示で特殊召喚」

『ダーク・グレファー』ＡＴＫ１７００

「ふん！　そんなモンスターじゃ、オレの恐竜さんは止められない

ザウルス！」
「わかってるよ。さだめは『ダーク・グレファー』のモンスター効果。手札の『キラー・トマト』を墓地に送ってデッキから『ネクロ・ガードナー』を墓地に送るよ」
「そんなにモンスターを墓地に送ってどうするドン？」
「こうするの。さだめの墓地に存在する闇属性モンスターが三体になったことで、さだめは手札から『ダーク・アームド・ドラゴン』を特殊召喚！」
『ダーク・アームド・ドラゴン』ＡＴＫ２８００
「げっ！？　こ、攻撃力２８００！？」
「更に『ダーク・アームド・ドラゴン』のモンスター効果！　墓地の闇属性モンスターを除外することで相手フィールドのカードを破壊するよ！『キラー・トマト』を除外して『暗黒ドリケラトプス』を破壊！『ダーク・ジェノサイド・カッター』！」
ダムドが『暗黒ドリケラトプス』を葬る。
「ああっ！？　オレの恐竜さんが！」
「続いて『ダーク・クリエイター』を除外！　伏せカードを破壊するよ！」
「くっ！　その効果にチェーンするドン！　トラップカード『生存本能』！　墓地の『キラーザウルス』と『俊足のギラザウルス』、『暗黒ドリケラトプス』を除外してライフを１２００ポイント回復するザウルス！」
剣山ＬＰ５２００
ダムドの伸ばした鎖に貫かれながらも、伏せカードはその効果を発揮する。
「む、破壊する順番ミスったね。んじゃ更にダムドの効果。アンタの大好きなフィールド魔法を破壊するよ！」
ダムドの鎖が暴れ回り、『ジュラシックワールド』を破壊しつくしていく。
「恐竜さんたちの楽園が！　なんてことするドン！」

「楽園なんてね、いずれ滅び去る運命なんだよ！　恐竜は絶滅した！　それが何よりの証拠でしょ！　さあ、行くよ！　二体のモンスターでダイレクトアタック！」
「うぐわぁあああああああああっ！？」
剣山ＬＰ７００
「さだめはカードを一枚セット。ターンエンドだよ！」
「くぅぅ……まだまだ、恐竜さんは、そう簡単には負けないドン！　オレのターン！　ドロー！　ガルルゥ！」
うひゃっ？　なんかヤバい目。ど、瞳孔縦に裂けてない？
「オレは手札から『トレード・イン』をはつドン！　手札の『究極恐獣』を捨ててデッキからカードを二枚ドロー！」
デッキ圧縮ね。あ、でもそれだけじゃないかな？
「そして魔法カード『死者蘇生』！　墓地から『究極恐獣』を蘇生するザウルス！」
『究極恐獣』ＡＴＫ３０００
「っ！」
来たね……攻撃力３０００の全体攻撃モンスター。
「カードを一枚セット。そして永続魔法『命削りの宝札』をはつドン！」
「うぐ、どいつもこいつも……！」
なんでこういう時にいっつもそんなカード持ってるのさ！
「バトルだドン！『究極恐獣』で『ダーク・グレファー』を攻撃！『アブソリュート・バイト』！」
「くぅっ！」
さだめＬＰ２７００
「続けて『ダーク・アームド・ドラゴン』にも攻撃ザウルス！」
「それはさせないよ！　速攻魔法『異次元からの埋葬』！　除外されているモンスターを三体まで墓地に戻す！　さだめのモンスターを全て戻し、墓地から『ネクロ・ガードナー』の効果を発動！　このカードを除外することで相手モンスターの攻撃を無効にする！」

『究極恐獣』の攻撃は確かに怖いけど、同じモンスターには一度しか攻撃できない。これでダムドは残せる。
「くっ……！　モンスターを一体セット。カードを更に三枚セットしてターンエンドだドン」
「さだめのターン！」
それにしても面倒くさい。『異次元からの埋葬』で墓地にモンスターは戻ったけど、伏せカード四枚とモンスター二体を破壊するにはカード不足。
「ドロー……！」
さだめはドローしたカードを見て、ああやっぱりと溜息を吐きたい気分になった。
「結局最後に決めるのは、コイツか。さだめはダムドの効果発動！『キラー・トマト』を除外して伏せカードを一枚破壊！　右側！」
破壊されたのは『激流葬』。危なかったね。
「そして次に『ダーク・クリエイター』を除外して左端のカード！」
破壊されたのは『狩猟本能』。むぅ、ブラフか。
「破壊するのを間違えたザウルス！　これで墓地の闇属性は一体！　例え『究極恐獣』を倒しても、オレには次のターンがあるドン！」
「……ないよ。次のターンなんてね」
「！？」
「さだめは『終焉の精霊』を召喚。攻撃表示」
『ケケケケッ！』
『終焉の精霊』ＡＴＫ９００
笑い声を上げながら現れた、忌々しい闇の精霊。除外されているのは三枚だから攻撃力はたったの９００。
「な、なんか禍々しいモンスターザウルス……」
剣山の台詞に、思わずクスリと笑ってしまう。そうだね。その感想は正しい。
「け、けど攻撃力９００じゃオレの恐竜さんは倒せないザウルス！」
「わかってないね。この子で攻撃なんかしないよ」

「ど、どういうことザウルス？」
「ダムドの効果を発動。墓地の『ダーク・グレファー』を除外して『終焉の精霊』を破壊する」
ダムドは『終焉の精霊』を鎖で貫く。『終焉の精霊』は奇声を上げながら消滅していく。
「自分のモンスターを破壊した！？　なんのつもりドン！」
「……『終焉の精霊』は、破壊された時、除外されている闇属性モンスターを全て墓地に戻す。『イビル・デッド』！」
除外されていたカードが纏めて墓地に戻ってくる。
「そ、そんな……じゃあ！？」
「そう。蹂躙しなさい。『ダーク・アームド・ドラゴン』。『ダーク・ジェノサイド・カッター』！」
墓地の闇属性は『終焉の精霊』も含めて五枚。『ネクロ・ガードナー』を残して全てのカードを除外し、剣山の『命削りの宝札』以外、全てのカードを破壊する。
「破壊したのは……ミラフォに奈落に『奇跡のジュラシック・エッグ』か……ふふ、やっぱりこの期に及んで良い引きしてるね」
もっとも、最初に『激流葬』を貫いた時点で、さだめの勝ちは決まっていたらしいけど。
「さあ……トドメだよ。ダムドでプレイヤーにダイレクトアタック！『ダーク・アームド・ヴァニッシャー』！」
「うわあああああああっ！？」
剣山ＬＰ０
「ま、どんな強力な効果を持つフィールド魔法も、破壊耐性を持ってない奴は弱いし、除去され易いんだよ。覚えといて」
さだめは、何だかんだで久しぶりの勝利にスッとした気分になりながらそう締めくくった。

「御堂さん、絶好調でしたね」
「ああ凛。まあね。凛とデュエルした時は、まあ凛と同じく使いなれないデッキだったってことで言い訳させてよ」
「はい。その内メインデッキ同士でデュエルしましょう」
「もちろん！　あ、でも気をつけてね。さだめのメインデッキって要するにメタデッキだから」
「う……お、お手柔らかにということで……」
「くふふー、どーしよっかな～」
凛とは、こないだのデュエルから割と仲良くしてる。まあ……いちおートモダチ、って言ってもいい、と思う。
「どうしましたか？」
「あのさ、凛」
急に黙り込んださだめを不思議がったのか、凛が怪訝な顔で尋ねてくる。
「う……その」
こういうのって、どう言葉にすればいいのかわかんない。というか、言っていいのか不安になる。
「その、さ。敬語、なしにしてもらってもいい、かな？」
「え？」
「凛の敬語ってさ、キャラ作りのためでしょ？　できればその、そーいうのなしにして欲しい、っていうのかな。あはは……」
「あ……」
らしくないな、とは思うけど、さだめは正直、お世辞にも人間関係得意じゃないし。全部お兄ちゃんに頼ってたから、トモダチとかも、いなかったし。アテナはなんか知らない内に喧嘩トモダチっぽくなってたけど。
「その……」
「うん。わかった。ごめんね。他人行儀に接してて」
「あ……えと、その……」
「じゃあ、さだめって呼び捨てにしていい？　さだめの方は、もう

呼び捨てにしてるけど」
「え、あ、うん。いいけど……」
あっさりと、素の喋り方で話しかけてくれた凛に、さだめの方が戸惑う。
「ふふ、でもさだめって、いつでも誰に対しても強気っていうか、押せ押せゴーゴー！　みたいな性格だと思ったけど……こんなところもあったんだね」
「う……」
そりゃ、さだめは押せ押せゴーゴー青信号な感じでお兄ちゃんには迫ってるけど……。
「だって、今までお兄ちゃん以外と話したことなんて殆どなかったし」
誰もがお兄ちゃんみたいになんでも受け入れてくれるわけがない。さだめはそれをよく知ってる。だからこそ、お兄ちゃんとか、それ以外のどうでもいい人にはいくらでも強気で話しかけられる。
「でも……」
トモダチ、なんて。
こないだ、お兄ちゃんが剣士さんに言っていた『甘いな。生せば生る。成さねば生らぬ。何事も。生らぬは人の生さぬ生りけり、だ。お前だって、友達が増えて困ることはないだろう？』『黙ってるだけでは何もならんぞ。アテナは特殊だ。特に何にもしなくても友達になってくれたアテナはな』……その言葉は、さだめにも向けられていた気がした。お兄ちゃんは、剣士さんを諭しながら、さだめの背中も押してくれた。だから……。
「……本当にお兄さんのことが好きなんだね」
「好きだよ。他人に何を言われても、こればっかりは譲ってやらない。お兄ちゃん以上の人なんて、さだめ知らない。絶対いない」
だから、絶対、絶対……。
――渡さない。誰にも、渡さない。
「さだめ？」

「っ！？」
あ……。
「な、なんでもない。そ、それよりもう授業も終わりでしょ？　お兄ちゃんのとこ行こうよ！　剣士さんもいるよ～？」
「ちょっ！　わ、私はその……」
「いいっていいってわかってるから～♪」
「わ、わかってないって！　ちょっとさだめ！」
一瞬脳裏に浮かんだモノを、考えないようにして、さだめは凛とお兄ちゃんの所に向かうのだった。

第三期第六話「新入生の日々」（後書き）

というわけで、さだめＶＳ初期剣山でした。まだこの時期の剣山は十代と出会ってないです。デュエルディスク狩りもしてないですね。というか、こんなの書いた後で今さらですけど、アカデミアって一年二年の教室って分かれてましたっけ？　なんか普通に剣山とか十代たちと同じ教室にいたような……（汗）。ま、まあこまけえこたぁいいんだよ（開き直り）！

前回さだめが想像以上に負け続けていることに気付いた作者が救済のために勝たせてやったというのは内緒です。

さだめは友達作りなんてしたことないですからね。人付き合いはセツの仕事でしたから。凛は、自分から歩み寄って得た最初の友達、ってことになるんでしょうね。

それでは、悠でした！

第三期第七話「圧倒」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第七話「圧倒」

「やっほーお兄ちゃん。遊びに来たよ～」
放課後、俺が帰り支度をしていると、教室の扉が開いてさだめと凛が顔を出した。
「よう、お前たちも授業終わったのか？」
「退屈だったけどね」
「言うな」
元の世界で大学生だった俺は元より、高三だったさだめも、高一レベルの授業やデュエルの超基礎的知識を問うアカデミアの授業はそりゃ退屈だろうが。
「あと、なんか突っかかってきた一年坊をデュエルで叩き潰してきたから。それはそこそこ楽しめたかな～」
「……トラウマ作ってないだろうな？」
「大丈夫でしょ。別にそれほどメタったわけじゃないし、極々普通の次元ダークでブッ潰しただけだから」
それなら大丈夫だろうが……。
「まあ、退屈でも授業はちゃんと受けておけ。俺みたいに、出席日数で頭悩ますのも馬鹿らしいだろ？」
「自分で言うんだ……」
当事者だからな。是非反面教師にでもなんでもしてくれ。

「……でもさだめって本当に頭良かったんだね」
半ば呆れたような口調でそう言う凛。
「まあ、何と言っても新入生代表だからね！」
思い出したくもないがな。
「コイツも、頭の出来は悪くないんだよ。残念な思考回路しているけど」
主に下ネタ方面に。
「うぅ、納得できないよ～セツ君もさだめちゃんも、何時の間に勉強してるの？」
どうもそれほど勉強が得意ではないらしいユーキちゃんが若干涙目で問いかけてくる。
「俺は時間の開いた時にやってるぞ。さだめは知らんが」
「別にやってないよ？　テストとかはお兄ちゃんにヤマ聞いて一夜漬けすればどうとでもなるし」
「セツ君は兎も角、さだめちゃんの何それズルイ」
「ふっ、表面だけ聞けばそうかもしれないけど、お兄ちゃんの勉強方法聞いたらさだめの方が幾分か常識的に思えるはずだよ」
「なんだ。人を非常識人みたいに」
少なくともさだめにだけは非常識人扱いされたくはないが。
「セツの勉強方法ってどんなだよ？　教科書読んだだけ、とかか？」
からかい半分、といった様子で剣士が尋ねてくる。
「いくらなんでもそんなわけないだろ。何者だよ俺は」
「いや、お前ならあり得そうだ」
一体どういう評価をされているんだか。
「それで、どんな勉強方法なの～？」
それは、と俺が答える前にさだめが得意げに話し始めた。
「右手で古文、左手で数学の問題集を解きながら英語のリスニング」
「え……」
「要するに、色んな教科を同時進行で進めるんだよ。お兄ちゃんは。両手にシャーペン持って、ヘッドフォン付けて三十分。これがお兄

ちゃんの勉強スタイル」
「教科書読んだだけよりよっぽど人外じゃねえか……」
「時間が取れないんだ。効率よく進めることを突き詰めたら、同時進行になるのは当然の流れだろう？」
「だろう？　じゃねえよ！　んなことできんのはテメエくらいだ！」
「というか、時間が取れないのってなんで？」
「無駄スキルに磨きをかけるのに時間がかかるからな」
どれもこれも、一朝一夕には極められないのが無駄スキルでもあるんだ。
「後は睡眠学習。これがまた効率いいんだ」
何しろ寝ているだけで頭良くなるという優れモノである。授業中には必須のスキルだ。
「いや……普通睡眠学習ってのはそういうもんじゃねえと思うが……」
「授業はちゃんと聞こうよ～」
呆れたと言った様子のユーキちゃんにも言われてしまった。むぅ、一体何が悪かったのか。
「それはそれとして、凛もよくコイツに付き合ってここに来たな。大分迷惑かけたのに」
「いえ……」
凛は横目でチラリと剣士の方を見た。やっぱり、こいつらって何かあるのかね。まあ、詮索はしない方が良いかもしれんが。
「……勢揃い」
「ルイン、お前も来たのか」
「迎えに来た」
そんな必要もないんだが……。
しかし、本当にこれで勢揃いだ。そうなると、どうしてもあいつの言葉が思い起こされる。
「イレギュラーを集め束ねて……こういうこと、なのか……？」
俺が思案の海に沈もうとした、丁度その時。

「やあ、ちゃんと僕のアドバイス通りに行動してくれて嬉しいよ。セツ」
「っ！？」
そいつは、平然と現れた。
「真中……希望……！」
「久しぶりだね。セツ。元気になったようで何よりだ」
「……アテナは何処だ」
「何故僕に聞く？　別に僕がアテナを連れ去ったわけでもないのに」
「だが……」
アテナが消えた原因。それに深くかかわっているコイツなら……。
「まあ、確かにアテナの居場所くらいなら知ってはいるんだけどね」
「！　何処だ！」
「……ふぅ。アテナといい君といい、どうしても君たちは“答え”を知りたがる。ＲＰＧをやる時、必ず攻略本を見ながらやるタイプだね。現代人は誰しも……」
「そんなことはどうでもいい！」
コイツの言葉遊びに付き合うつもりはない。
「あ……」
「凛？　もしかして、この人のこと知ってるの？」
希望を見て、びっくりした表情を見せる凛。
「私の所属している芸能事務所の、スポンサーです」
「なに？」
「職業柄、知り合いは多い方だよ。とはいえ、初めて会う子もいるけれど」
希望は剣士に目を向ける。
「まあ、それはいいさ。それよりも、だ」
真中希望は、俺に目を戻す。
「どうしても、聞きたいかい？　“答え”を」
「当たり前だ」
「仕方ない。なら、アテナに言ったのと同じ提案をしようか」

「提案？」
「僕とデュエルして、勝てばいい。そうしたら、君たちの知りたいこと、一言一句漏らさずに、解決法その他諸々プラスα含めて話してあげよう。それが、この世界のルールであることだし、ね」
真中希望は悠然とデュエルディスクを構える。……上等だ。
「イマイチお前の目的が判然としないが……アテナの居場所がわかるっていうんなら容赦しない。全力で勝つ」
「彼は強い。気をつけて」
以前戦い、負けたというルインが忠告してくる。
「そう、アテナにも言ったけど……僕は強いよ？　君たちが考えているよりもずっとね」
関係ない。ルインやさだめは、コイツが心を読む力を持っているかもしれないと言っていたが、俺だって、負けるわけにはいかない！
「「デュエル」」
「さて、たまには先攻を譲ってもらおうか。ドロー」
ルインに聞いたコイツのデッキは光属性天使と闇属性悪魔のカオス。だが、それを鵜呑みにするつもりはない。
「僕はモンスターをセット。カードを二枚セットしてターンを終了しよう」
「俺のターン、ドロー！」
「リバースカードオープン」
「！」
「『ダスト・シュート』だ。手札を公開して貰おう」
「くっ……」
俺の手札は『オネスト』『切り札の騎士―クィーン』『豊穣のアルテミス』『マジック・ジャマー』『アルカナソード　クローバー』『切り札の騎士―テンス』の六枚。
「そうだね。『切り札の騎士―クィーン』には退場しておいて貰おうか」
『セツ様……申し訳ありません』

希冴姫がすまなそうにデッキに戻って行く。
「ち……なら、俺は『豊穣のアルテミス』を攻撃表示で召喚！　バトルフェイズ！」
『豊穣のアルテミス』ＡＴＫ１６００
アイツの守備モンスターが何かはわからない。だが、情報を得るためにリバースさせる！
「俺は『豊穣のアルテミス』で守備モンスターに攻撃する！」
「残念。僕の守備モンスターは『ペンギン・ナイトメア』だ。守備力は１８００。残念ながら、『豊穣のアルテミス』では突破できない」
『ペンギン・ナイトメア』ＤＥＦ１８００
「ぐ……」
セツＬＰ３８００
アルテミスの攻撃は、燕尾服を纏ったヘンなペンギンにブロックされてしまう。しかもアイツは……！
「『ペンギン・ナイトメア』がリバースした際、バウンス効果が発動する。『豊穣のアルテミス』にはもうしばらく休んでいて貰おうか」
「くそ……俺はカードを二枚セットしてターンエンドだ」
俺が伏せたカードは、アイツにはバレバレだろうが、伏せないのもおかしい。
「僕のターン、ドロー。僕は『闇の指名者』を発動する。宣言するカードは『オネスト』だ」
「なに……？」
俺のデッキには確かにもう一枚『オネスト』が入っている。だが、なぜ態々……。
「……俺はデッキから『オネスト』を手札に加える」
「おや、カウンターはしないのかい？」
「アドバンテージを稼がせてくれるカードに態々カウンターして手札を減らすような馬鹿はしない」

アルテミスも戻されてしまったので、『マジック・ジャマー』を使えばディスアドバンテージにしかならないしな。
「そうかそうか……甘いな」
「！？」
「僕は手札から『疫病狼』を攻撃表示で召喚。効果で攻撃力を倍の２０００ポイントにアップ。バトルフェイズだ」
『疫病狼』ＡＴＫ１０００→２０００
不味い。俺のフィールドにモンスターはいない……！
「『疫病狼』でプレイヤーにダイレクトアタック」
「ぐあっ……！」
セツＬＰ１８００
「メインフェイズ２にリバースカードオープン『魔のデッキ破壊ウイルス』」
「なにっ……！？」
「知っていると思うけど、このカードは攻撃力２０００以上の闇属性モンスター一体をリリースして、君のフィールド上、手札に存在する攻撃力１５００以下のモンスターを全て破壊し、墓地に送る。僕は攻撃力２０００の『疫病狼』をリリース」
「くっ……！？」
俺の手札には二体の『オネスト』と『切り札の騎士―テンス』。辛うじて『豊穣のアルテミス』は引っかからないが……。
「僕はカードを一枚セット。ターンエンドだ」
「っ……俺のターン！　ドロー！」
「ドローしたカードを確認させてもらおう」
「……『ジャム・ウォリアー』だ」
「では、『魔のデッキ破壊ウイルス』の効果で破壊だ」
「……俺は」
「ストップ。リバースカード発動だ。『マインド・クラッシュ』」
「な……」
「宣言するのは、当然『豊穣のアルテミス』。捨てて貰おうか」

これで……。
「君の手札はゼロ。リバースカードは二枚とも判明しているしね」
「……」
何も……出来ない……？
「た、ターン、エンド」
「僕のターン、ドロー。残念だ、セツ。君は……思った以上に、弱いな」
「っ！！」
「僕は『ペンギン・ナイトメア』をリリースし、『野望のゴーファー』をアドバンス召喚。バトルフェイズにダイレクトアタックだ」
『野望のゴーファー』ＡＴＫ２４００
「ぐあああああああっ！？」
セツＬＰ０
「……そんな」
ここまであっさり……？
何も……何もできないままに……？
「ずっと、僕のターンだったね」
「……」
圧倒的だ。コイツが人の心を読めるとか、読めないとか。そういう問題じゃない。
「心なんて読めなかったとしても、全く関係のない戦略……」
「そうだね。正直、僕の力を考えれば、別にピーピングカードなんて使う必要もなかったわけだけど。それじゃあ君たちも納得できないだろう？」
確かに……コイツがもし、ピーピングも何もなしでハンデスを使ってきたのなら、卑怯だ、とでもなんとでも言えた。だが……。
「僕は、この力の性質上、どう足掻いても正々堂々とはいかない。だから、本来なら君とデュエルして徹底的に叩きつぶすような役回りは向いてなかったんだけどね」
愕然とする俺を前に、真中希望は淡々と言葉を紡ぐ。

「隔絶しているから。君たちとは。だが、それでもセツには敗北を見て貰いたかった。本来なら、その役目は他の……そう。君たちにやって貰いたかったが……」

そう言って、真中希望は俺たちのデュエルを呆然と見学していたメンバーを見渡す。

「結局、セツがまともに敗北したのはネイキッドだけ。ここまで負けなしを続けていたら、セツが弱くなってしまいそうでね。過干渉はしたくなかったが……」

「思った通りにことが運ばなくてイラついたのか？」

むしろ自身がイラついているような剣士の言葉に、真中希望は苦笑気味に肩をすくめた。

「さだめたち、貴方のコマでもなんでもないんだもん。思い通りにいかないのは当然だよ」

「ゲームマスター気取りなら帰って」

さだめとルインの容赦ない口撃にも、真中希望は特に気にした様子も見せない。

「……嫌われたものだね。そこまで悪いことをしたかな？」

「貴方が来てから、みんなおかしくなっちゃったんだよ？　アテナちゃんがいなくなったのも、セツくんが元気をなくしたのも。……好きになんてなれないよ～」

「……そうだね。もっともだ」

寂しそうな笑顔で頷く。

「言い訳はしない。確かに、アテナが行方不明になったのは僕の一言が原因だ」

『人生は、楽しいかい？』だったか。

「一体、あの言葉に何の意味があったんだ」

「セツ。君はもう、僕に質問する権利を失った。僕は敗者の言葉に耳を傾けない」

「っ！」

そうだ……俺は、負けたんだ。何もできず、あっさりと。圧倒的

な実力差で。
「……じゃあ、オレが質問する。それなら構わねえだろ」
「剣士……」
「じゃ、さだめも。お兄ちゃんやルインの仇もとってやりたいし」
他の皆も一斉にディスクを構える。
「みんな……」
「事の次第は、さだめから聞きましたから。正直、許せません」
「……本当に、嫌われたものだね」
――なら、とことんまで嫌われ役に徹そうか。
他の皆には聞こえない。近くに居た俺にもギリギリ聞こえるかどうかといった声量でそうつぶやいた希望は、その背の高さを使ってその場に居る全員を見下す。
「いいだろう。一人一人、なんてそんな悠長なことをしている時間はない。……全員纏めてかかってくるといい」
「なっ……!?」
この場に居る全員……!? 希望の言うところの敗者である俺とルイン、デュエルをしない希冴姫を除けばその人数は四人。それを纏めて……!?
「ば、馬鹿にしてんのか！」
「そうだ。馬鹿にしている」
「……」
はっきりと、断言した。馬鹿にしていると。冷たい目で、彼らを見下しながら。
「無様に大声を張り上げ、気合でドローが変わると本気で信じている。滑稽過ぎて最早笑いも起きないね。優雅さの欠片もない」
クックッと心底から馬鹿にしたような笑い声を上げる。
「セツを負かしてくれるかと期待していたのに、情けない。もうちょっとくらい優秀だと思っていたんだが」
「テメエ……」
全員の殺気染みた視線を浴びても、真中希望の余裕は崩れない。

涼やかに、ただ視線を受け流すだけだ。
「そうだね。どうせだからハンディキャップもつけようか」
それどころか、更に怒りを煽るような言葉を続ける。
「君たちは一人につきライフ４０００。僕は……」
真中希望は、あくまでも不敵な笑みを浮かべたまま……、
「1、あればいい」
とんでもない条件を平然と繰り出した。

第三期第七話「圧倒」（後書き）

改訂前だと、ユーキちゃんとのタッグがあったりしましたが、それを削除。ただし、ユーキちゃんの出番は別に作ります。ご安心を。次回のハンデデュエルも、改訂前の七対一に比べれば難易度が下がっていますが、当然決して楽ではないデュエルになると思います。

それでは、悠でした！

第三期第八話「革命」（前書き）

お久しぶりです。今回もデュエル内容を完全に一新したので、中々苦戦いたしました。ただし、希望のデッキの基本コンセプトは変わっていません。要するに、例のおジャマ大革命。

切「そんなデッキで大丈夫なのか？」

希「大丈夫だ。問題ない」

問題ないらしいので、見てやってくださいな（笑）。では、どうぞ！

第三期第八話「革命」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第八話「革命」

「ライフ……1だと……！？」

「そんなの……」

一瞬頭の中が真っ白になったのか、呆然と呟く彼ら。僕はそんな彼らを見渡して、余裕たっぷりに告げてやる。

「ああ。加えて、ライフを回復するカードも使わない。最初から最後まで、ライフ1のまま勝利して見せようじゃないか」

「貴方は……何処まで……」

馬鹿にすれば気が済むのか。そんな言葉は、口にするまでもなく伝わっていた。更に、追い打ちをかけてやる。

「ああ、それと一人一人がエンドを迎える度に僕のターンじゃむしろ僕が有利になってしまうね。よし、君たち四人のターンが終了してから僕のターン。これで良いだろう」

いくら僕でも、この条件は流石に厳しい。だけど、それでも尚、僕は自分を不利に追いこんで行く。

「僕の使うデッキも教えておこう。『おジャマ大革命』。もちろん、僕なりの調整は加えてある」

アテナを相手にしたときのデッキ。当然、あのままじゃいくらなんでも勝ち目がないし、改良はしてあるけど。

「ファンデッキ……！？」

「当然、このデッキを使う以上『大革命』も決めて見せよう。これも、僕の勝利条件に加えておくか。『大革命』を使わずに勝利したら僕の負け、とね」

相手が複数いる以上、アテナに使ったようなロックの形は使えない。その状態で発動難度の高い『大革命』の使用……やりがいがある、どころの話じゃないな。

「……本当にそんな条件で勝てると思ってるの？　さだめたち、これでも結構強い自信あるんだけど」

「プライドに拘るのは好きじゃねえが……それでも、全く気にならないわけじゃねえな」

だろうね。プライド、いや、自負と言ってもいいだろう。それを持たないデュエリストなどいない。少なくとも、ここまでコケにして黙って引き下がるような子たちじゃない。

「ふふ、まだ条件が欲しければ、考えても構わないが」

「結構です。これでも私たち、怒ってるんだから」

「そうだね。そのようだ。なら、改めて始めよう。究極のハンデデュエルをね」

『デュエル！！』

「先攻も譲ろう。特に必要性を感じないからね」

「ちっ、ならオレのターン、ドロー！　オレは『切り込み隊長』を攻撃表示で召喚！　効果で『コマンド・ナイト』を攻撃表示で特殊召喚だ！」

『切り込み隊長』ＡＴＫ１２００→１６００

『コマンド・ナイト』ＡＴＫ１２００→１６００

展開力に優れた下級戦士、それに除去力のある剣聖を組み合わせたビートダウン。なるほど、確かにバランスがいいね。

「オレはカードを二枚セットしてターンエンドだ！」

「私のターン！　私は『海神の巫女』を守備表示で召喚。効果で、フィールドは『海』として扱われます。カードを一枚セット。ターンエンドです」

『海神の巫女』ＤＥＦ２０００
「さだめのターン、ドロー！　さだめは『終末の騎士』を攻撃表示で召喚。効果でデッキから『ネクロ・ガードナー』を墓地に送ってカードを一枚セット。ターンエンドだよ」
『終末の騎士』ＡＴＫ１４００
「わたしのターン、ドロー。わたしは『サイレント・ソードマンＬＶ３』を攻撃表示で召喚するよ」
『サイレント・ソードマンＬＶ３』ＡＴＫ１０００→１４００
サイレント・ソードマン……『切り込み隊長』がいる以上、狙うことは出来ないか。
「カードを一枚セットしてターンエンドだよ」
「僕のターン、ドロー」
さて……漸くターンが回ってきたか。自ら科したルールとはいえ、もどかしいね。
「僕は手札から『ライトニング・ボルテックス』を発動。手札を一枚捨てて、フィールドのモンスターを一掃する」
「それくらいは予想済みだ！　リバースカードオープン！『我が身を盾に』！　ライフを１５００ポイント支払って『ライトニング・ボルテックス』の効果を無効にするぜ！」
剣士ＬＰ２５００
そう。発動するしかない。例えライフを支払おうとも、全体破壊は避けなきゃならない。
「いいだろう。ちなみに、僕が手札から捨てたのは『おジャマジック』。よってデッキからおジャマ三体を手札に加える」
例え無効化されても問題はない。手札が増えるだけのことだ。
「更に魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚ドローする」
これで、手札は十分。
「僕はモンスターを一体守備表示でセット。カードを四枚セットし、ターンエンドにしようか」

「なら、オレのターンだ！　ドロー！」
「リバースカード連続発動。罠カード『凡人の施し』を二枚発動する。カードを二枚ずつドローし、手札から『おジャマ・グリーン』と『おジャマ・イエロー』を除外する」
「手札交換！？」
本来なら、ただ手札を入れ替え、デッキ圧縮をするだけのカードだけど、『おジャマジック』と組み合わせれば、手札の不要なおジャマを処理しつつ、新たな手札を四枚ドローするに等しい超アドバンテージカードに化ける。
「ちっ、オレは『鉄の騎士―ギア・フリード』を攻撃表示で召喚！更に手札から永続魔法『連合軍』を発動する！」
『鉄の騎士―ギア・フリード』ＡＴＫ１８００→３２００
『切り込み隊長』ＡＴＫ１６００→２６００
『コマンド・ナイト』ＡＴＫ１６００→２６００
『我がマスターをああも侮辱されては、我とて堪忍袋の緒が切れる。と言うものだ』
「僕は君のことは、高く評価しているんだけどね？　セツに勝ったのは君くらいのものだし」
『ふん。敵からの世辞など、虫唾が走るのみよ』
「言ってくれるじゃないか」
さて……さだめやユーキの場の戦士も合わせて戦士族は五体……下級モンスターとは思えない攻撃力だ。
「まずは『切り込み隊長』で守備モンスターに攻撃だ！」
「この瞬間、僕は手札から『牙城のガーディアン』の効果を発動する。手札から捨てることで、守備モンスターの守備力を１５００ポイントアップさせる。僕の守備モンスターは『弾圧される民』。よってその守備力は３５００だ」
『弾圧される民』ＤＥＦ２０００→３５００
「なに！？　ぐあっ！？」
剣士ＬＰ１６００

民の前に現れた守護者が、弾圧されている民を、身体を張って守り切る。その光景はまるで……。

「まるで、君たちが悪者のようじゃないか」

皮肉気に口の端を釣り上げてみせる。

「くっ……オレはカードを一枚セット」

「おっと。そのメインフェイズ2にトラップ発動。永続トラップ、『ディフェンダーズ・マインド』。このカードはメインフェイズにのみ発動することができる永続トラップ。僕の守備モンスターの守備力は更に倍になる」

『弾圧される民』ＤＥＦ７０００

「なっ……守備力７０００だと！？」

「ただし、僕はモンスターを攻撃表示にすることが出来なくなるけどね。ああ、勘違いしがちだけど、『牙城のガーディアン』の効果が切れても守備力は７０００のままだよ。『ディフェンダーズ・マインド』を破壊しない限りはね」

「くそっ……ターンエンドだ」

「わ、私のターン、ドロー！　私は『水陸両用バグロスＭｋ－３』を攻撃表示で召喚します！」

『水陸両用バグロスＭｋ－３』ＡＴＫ１５００

「ほう……そのカードを引いたか」

「バグロスは、フィールドが『海』の時、相手プレイヤーにダイレクトアタックが可能になります！　どんなに守備力が高くても無意味ですよ！」

フィールドは『海神の巫女』の効果で一時的に『海』になっている。ダイレクトアタックには不都合がない。

「バトル！　バグロスでプレイヤーにダイレクトアタック！」

「手札から『速攻のかかし』を墓地に捨て、ダイレクトアタックを無効にする」

バグロスから放たれた魚雷を、僕の前に現れたかかしが身を呈して防ぐ。

「くっ、ダイレクトアタックでも無理なの……！？　ターンエンド！」

「さだめのターン、ドロー！　要するに、そのトラップを破壊すればいいんでしょ！？　速攻魔法『サイクロン』！」

「よし、これなら……！」

剣士たちの顔に、笑みが浮かぶ。だが……。

「甘いね。甘過ぎる。それは鬼門だ」

「え……？」

僕は、むしろ笑みを深めてトラップを発動する。

「カウンター罠発動！『アヌビスの裁き』！　手札から『おジャマ・ブラック』を捨てて『サイクロン』を無効化！　そして『鉄の騎士―ギア・フリード』を破壊する！」

「な……」

『馬鹿なっ！？　ぬおおおっ！？』

「更に、破壊したモンスターの攻撃力分、ダメージを与える！」

「ぐあああああっ！？」

剣士ＬＰ０

「まず……一人だ」

「く、そっ……！」

全体攻撃力の底上げを担っている剣士を最初に排除出来たことは大きい。

「そんな……」

「全てが裏目に出たね。『我が身を盾に』でライフを削らなきゃ、今ので終わることもなかったろうに」

「っ！」

「ついでに、これで『終末の騎士』たちの攻撃力も元に戻る。僕にとっては、いいこと尽くめだね」

『終末の騎士』ＡＴＫ２８００→１４００

『サイレント・ソードマンＬＶ３』ＡＴＫ１０００

「くっ……さだめは『ダーク・グレファー』を攻撃表示で召喚！

効果で、手札から『キラートマト』を墓地に送ってデッキから『ネクロフェイス』を墓地へ！　そして『ネクロフェイス』と『キラートマト』を除外することで、手札から『ダーク・ネフティス』を墓地に送るよ！」

『ダーク・グレファー』ＡＴＫ１７００

なるほど……次のターンへの布石か。『ディフェンダーズ・マインド』の場持ちは望めそうにないな。

「そして除外された『ネクロフェイス』の効果を発動！　全てのプレイヤーはデッキの上から五枚をゲームから除外する！」

味方にも影響するカードを躊躇いなく使う。この辺りは、流石と言っておこうか。

「そして速攻魔法『異次元からの埋葬』！　除外された凛の『ゴギガガギゴ』と『水霊使いエリア』それにさだめの『ネクロフェイス』を墓地に戻す！」

アフターケアも万全か。悪くない。

「さだめはこれでターンエンド。ごめんね剣士さん」

「いや……あの場面なら、オレもきっと同じことをした筈だ。それより……」

「うん。後は任せて」

「わたしのターン、ドロー！　わたしは『サイレント・ソードマンＬＶ３』をレベルアップさせるよ！　デッキから『サイレント・ソードマンＬＶ５』を特殊召喚！」

『サイレント・ソードマンＬＶ５』ＡＴＫ２３００

「更に『サイレント・マジシャンＬＶ４』を召喚。マジックカード『レベルアップ！』を発動！『サイレント・マジシャンＬＶ８』！」

『サイレント・マジシャンＬＶ８』ＡＴＫ３５００

「中々の攻撃力だ。僅か二ターンでそれだけの攻撃力が並ぶのは壮観だね」

「……『サイレント・マジシャンＬＶ８』の倍の守備力を盾にして言われると、嫌味にしか聞こえないよ」

「本心なのだけどね。気を悪くしたのなら謝ろう」
「……ターンエンド」
「さあ、僕のターンだ。ドロー！」
とはいえ、僕も大分手札を使った。受け身なだけじゃ、押し切られるだろう。
「スタンバイフェイズに、『ネクロフェイス』の効果でゲームから除外された『異次元からの宝札』の効果を発動。このカードを手札に戻し、全てのプレイヤーはデッキからカードを二枚ドローする」
相手にもドローさせてしまうけど、それは仕方がない。
「手札から二枚目の『ライトニング・ボルテックス』を発動。手札の『異次元からの宝札』を墓地に送り、君たちのモンスターを全て破壊する」
「でも、わたしのサイレントモンスターは、貴方の魔法効果を受けないよ！」
「構わない。いくらでも沈黙を守り通せばいいさ」
ともかく、サイレントモンスター以外はこれで全て処理出来た。厄介なバグロスも倒せたのだから結果としては上出来だ。
「カードを三枚セット。ターンエンドだ」
「私のターン、ドロー！　私は『憑依装着エリア』を攻撃表示で召喚。ターンエンドです」
『……』
凛の精霊か。僕をみる目には猜疑心こそあるものの、他の人間たちに比べて冷静な視野が見て取れる。なるほど、優秀な精霊だ。
それにどうやら、まだアトランティスは来ないらしい。アトランティスを出されると少々面倒だから、出来るだけその前に片付けておきたい。
「さだめのターン、ドロー！　スタンバイフェイズに墓地から『ダーク・ネフティス』の効果を発動！　特殊召喚して、魔法・罠カードを一枚破壊するよ！『ディフェンダーズ・マインド』を破壊！」
『ダーク・ネフティス』ＡＴＫ２４００

『ディフェンダーズ・マインド』が破壊されたことにより『弾圧される民』の守備力が元に戻る。
『弾圧される民』ＤＥＦ７０００→２０００
「バトル！『ダーク・ネフティス』で『弾圧される民』を攻撃！」
「迂闊だね。トラップ発動『聖なるバリアーミラー・フォース』！」
「させないよ。カウンタートラップ『トラップ・ジャマー』！　バトルフェイズ中のトラップカードを無効化するよ！」
「悪いが、それも想定済みだ。カウンタートラップ『魔宮の賄賂』を発動。魔法・罠の発動を無効にし、相手はカードを一枚ドローする」
「くっ！？」
罠を阻害する効果を無効にされ、フィールドのモンスターが聖なるバリアによって跳ね返された暗黒の焔に焼き尽くされていく。
「サイレントモンスターも、罠には無力だからね」
「う……」
これで改めて、フィールドを一掃できた。
「さだめには感謝しないといけないね。見事に僕をサポートしてくれている」
「……っ！」
悔しそうにさだめが唇を噛む。
「ふふ、それにしても……」
敵である僕が、聖なるバリアとは……、我ながら皮肉が効いているね。
「さだめは、ターンエンド」
「わ、わたしのターン、ドロー。わたしは……『シャインエンジェル』を守備表示で召喚。ターンエンドだよ……」
『シャインエンジェル』ＤＥＦ８００
「おやおや、急に元気がなくなったな。若い内はもっと元気を見せてくれなくちゃ」
「このっ……！」

憎々しげに僕を睨むさだめたちだが、言い返すことは出来ないらしい。
「さあ、僕のターンだ。『ディフェンダーズ・マインド』を破壊してくれたお陰で、僕も攻撃に移ることが出来る。本当に、ありがたい話だ」
「ぐ……」
自分のしたことが、次々と裏目に出ていることが悔しいのだろう。さだめが俯く。
「とはいえ、手札がなければ何もできない。僕は魔法カード『天よりの宝札』を発動。全てのプレイヤーは手札が六枚になるようにデッキからカードをドローする」
これも、相手にまで手札を与えてしまうカードだけど……まあ構わない。何故なら……。
「僕は手札から『団結するレジスタンス』を攻撃表示で召喚。魔法カード『悪魔の供物』の効果で、さだめの場の『ダーク・ネフティス』を墓地に送り、手札から『逃げまどう民』を守備表示で特殊召喚する」
『団結するレジスタンス』ＡＴＫ１０００
『逃げまどう民』ＤＥＦ６００
『っ！』
三人のみならず、傍から見ていたギャラリーも息を呑む。それはそうだろう。何せ……。
「これで、『大革命』の準備が整ったのだから」
僕の場に伏せられた一枚のリバースカード。それが殊更にゆっくりと持ち上がって行く。
「トラップ発動。『大革命』！」
最早説明は不要。『天よりの宝札』によって増えた手札すら、この効果により全て墓地に送られる。
「そして魔法カード『死者蘇生』を発動。墓地から『おジャマ・ブラック』を守備表示で特殊召喚。カードを一枚セットし、更に永続

魔法『命削りの宝札』デッキから手札が五枚になるようにカードをドローする」

まったく。『天よりの宝札』といい、非常識なドローカードだが、四人ものデュエリストを相手にしている僕にとっては非常にありがたい。

「よし。では装備カード『団結の力』を『団結するレジスタンス』に装備する。僕の場のモンスターは四体。よって攻撃力は３２００ポイントアップ」

『おジャマ・ブラック』ＤＥＦ１０００

『団結するレジスタンス』ＡＴＫ１０００→４２００

「バトルフェイズ。そうだね……凛に攻撃するとしようか」

アトランティスやバグロス、『ギガガガギゴ』などの純粋に強いモンスターの登場や、モンスターを奪われる、ピーピングハンデスを受ける。どれもライフがたった１しかない僕にとっては防御を崩され易く、非常に危険だ。早々に倒してしまいたい。

「っ！」

「バトル！『団結するレジスタンス』で凛にダイレクトアタック！」

「待った！　さだめは墓地から『ネクロ・ガードナー』の効果を発動！　ゲームから除外してモンスターの攻撃を一度だけ無効にする！」

「残念、止められてしまったか」

当然、さだめの墓地にそのカードがあったことは知っていたので然程の落胆はない。

「あ、ありがとうさだめ」

「ううん。さだめ、今回足を引っ張ってばかりだもん。せめてこれくらい……」

「ふふ、それじゃあ、僕はカードを一枚セットし、ターンエンドだ」

「私の、ターン！　ドロー！」

凛の手札は、今ドローしたカードのみ。果たして何が出来る？

「私はカードを一枚セット。ターン、エンド」

「さだめのターン、ドロー！　さだめはモンスターを一体セットしてターンエンド」
「わたしのターン、ドロー。カードを一枚セットしてターンエンド」
全員動かず、か。いや、動けないんだろう。『大革命』を使われれば、手札すら空っぽにされるのだから。
「僕のターン、ドロー。さて、随分と時間がかかってしまった。そろそろ行かせて貰うよ」
「っ！」
僕の言葉に、全員が身構える。
「フィールド魔法『おジャマ・カントリー』を発動する」
フィールドが、どこかファンシーな集落のように変化する。
「フィールド魔法……！？」
「フィールド魔法『おジャマ・カントリー』は、手札のおジャマをコストにおジャマを蘇生する効果と、おジャマが存在するときに、全てのモンスターの攻守を反転させる効果を持っている」
「それじゃ……！」
『おジャマ・ブラック』ＤＥＦ１０００→０
『弾圧される民』ＤＥＦ２０００→４００
『団結するレジスタンス』ＡＴＫ４２００→３６００
「二体目の『弾圧される民』を攻撃表示で通常召喚。そして、僕はもう一体の『弾圧される民』を攻撃表示に変更する」
『弾圧される民』×２　ＡＴＫ２０００
『団結するレジスタンス』ＡＴＫ３６００→４４００
「こ、れは……」
「さて……二人に消えて貰おう」
僕はモンスターのいない凛とユーキを眺める。
「バトルだ。『弾圧される民』二体で凛を。『団結するレジスタンス』でユーキをそれぞれ攻撃する」
「と、トラップ発動『和睦の使者』！　このターンの戦闘ダメージを無効にするよ～！」

「そうはさせない。リバースカードオープン『トラップ・スタン』！　このターン、トラップカードの効果は無効になる」
「あ……」
「きゃあああっ！？」
凛ＬＰ０
「うあああっ！？」
ユーキＬＰ０
「凛っ！　ユーキさん！」
「さて……これで、残るは君一人。さだめは僕を支援してくれたからね。一人だけ残してみた」
「くっ……」
「とはいえ、そろそろ決着だ。僕は手札を全てセットし、ターンエンドだ」
「さだめのターン……」
「どうした？　ドローしないのかい？　サレンダーでも、僕は一向に構わないが」
「だ、誰が……！」
強がるが、さだめの顔色は悪い。デッキに手が伸びない。
「さだめ！」
「……お兄ちゃん？」
「頑張れ。さだめ」
「え？」
「今の俺には、外から見ているしかできないから……だからせめて、今だけは目を逸らさない」
「お兄ちゃん……」
「正直に言う。最近、アテナの事が頭からずっと離れなかった。お前たちといる時も、きっと心ここに在らずな状態だったと思う……」
「……うん。わかってる。お兄ちゃん、ずっとカラ元気だったもん。さだめたちにはわかるよ」
「ああ……でもだからこそ、今はお前から目を逸らさない。最後ま

で……見てるぞ」
「ありがとう。お兄ちゃん」
セツの励ましで、さだめはその目から怯えが消え、その手がデッキに伸びる。
「さだめの……ドロー！」
セツ、さだめ。君たちの覚悟、しかと見届けた。
「……だが、現実は残酷に、滅びを告げる」
「っ！？」
「カウンタートラップ発動『強烈なはたき落とし』。その逆転は、実らない」
「あ……」
さだめの手から、カードが落ちる。そのカードは『終わりの始まり』。さだめの墓地に闇属性モンスターは『大革命』などの影響で八枚。内五体を除外して三枚ドロー。ドローする筈だったカードは『ダーク・アームド・ドラゴン』『冥府の使者ゴーズ』。そして『終焉の精霊』。僕の場の、全てのカードを殲滅し、フィニッシャーとなっていた筈の、正にディスティニードローだった。
「……素晴らしいラストドローだった。君たちの、健闘を称えよう。だが、今回は……」
僕の勝ちだ。
「僕のターン、ドロー。マジックカード『抹殺の使徒』を発動。裏守備モンスターを除外するよ」
さだめの場に残された、最後のカード。『魂を削る死霊』が消滅する。
「……数々の暴言、ここに詫びよう。君たちは、素晴らしいデュエリストだった。これから先、もっともっと強くなる。世界を救う希望となる決闘者だ」
だからこそ、一度徹底的に潰れておかなきゃならない。挫折を知らない強者ほど、脆いものはないのだから。
「負けない強さより、負けて立ち上がる強さの方が、尊いものだか

ら。誰かを救うなら、救われる立場としての経験が、きっと必要になるから」
　ここで一度、負けて貰おう。踏みつけられて尚、綺麗に花咲かす事を願って。
「バトル。『団結するレジスタンス』でプレイヤーにダイレクトアタック。『団結の旗印』」
「あ、あああああああああっ！？」
　さだめＬＰ０
「這い上がり、強くなれ。そしてまた、僕とデュエルしよう。いつか全てが終わった、その時に」
　そして、その時は……。
「僕を倒せるくらいまで、強くなってかかっておいで」

第三期第八話「革命」（後書き）

こんにちは。

というわけで、パーフェクト勝利の希望さんでした。

ううん。それにしてもチートドローカードを超多用しましたね。

強欲な壺を始めとして。

『異次元からの宝札』（アニメオリジナル）

ゲームから除外されたこのカードを、次のターンのスタンバイフェイズに手札に戻し、お互いにカードを二枚ドローする。

『天よりの宝札』（アニメ効果）

お互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにデッキからカードをドローする。

『命削りの宝札』（アニメオリジナル）

デッキから手札が五枚になるようにカードをドローする。発動後自分のターンで数えて五ターン後のエンドフェイズ、このカードを破壊する。このカードが破壊された場合、自分は手札を全て墓地に捨てる。

……いやちょっと自重しましょう希望さん。自分で書いておきながら。ちなみにディフェンダーズ・マインドも原作、ゲームオリジナルカードです。効果は大体以下の通り。

『ディフェンダーズ・マインド』永続罠

このカードはメインフェイズにのみ発動することができる。自分フィールドの守備モンスターの守備力を倍にする。自分フィールドに存在するモンスターは全て守備表示となる。

効果により増減した守備力を倍にするので、今回のように守備が上がっている時に使うと破格の守備力を得られる実にアステカ向きのカードです。

それでは、悠でした！

第三期第九話「これから」（前書き）

モンハンをやりつつも、一応更新はします。まあ、改訂前からあんまり変わっていませんしね。とりあえず投下です。

第三期第九話「これから」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第九話「これから」

「……立てるかい？」
「……いい。自分で立つ」
「ふむ。じゃあセツ。手を貸してやってくれ。それならいいだろう？」
「大歓迎」
「ったく……」
調子のいいさだめの言葉に苦笑しながら手を差し出す。それから、希望の方を向く。
「真中……希望」
「希望でいい。僕は、呼ぶ時も呼ばれる時も必ず名前で、と決めているんだ」
「お前の言葉に従う義理もないが……まあいいか。希望」
「何かな」
優雅に、洗練された、と言ってもいい微笑みを浮かべる。そんな希望に、俺は……、
「ありがとう」
礼と共に、頭を下げた。
「……どういたしまして」
それでも奴はピクリとも動揺せず、涼しい顔で礼を受ける。

「ちぇ。少しは裏をかけたかとも思ったんだけどな」
「甘いな。僕の裏をかく、というのは４０００年に一度の奇跡でも起こらない限り不可能だよ」
「言ってろ」
「ふふ……さて」
一頻り微笑した後、希望は先ほどよりも幾分敵意の薄れた目で自分を見つめる俺たちを見渡す。
「さだめ、最後のドロー。あれは中々良かった。土壇場であの引きが出来たのは、流石にセツの声援あってのものかな？」
「……どっちにしろ、はたき落とされちゃったけどね」
希望の讃辞に、僅かに面食らったようなさだめが、ぷいっと目を逸らして皮肉気に返す。
「それでも、だよ。そもそもあれは、さだめのドローが何なのか、あらかじめ知っていた僕だからこそ出来た反則に過ぎない。もちろん、『強烈なはたき落とし』自体は『大革命』と相性が良いから入れている、と言うのもあるんだが」
そうだろうな。『大革命』で手札全滅した後でドローをはたき落とされたら後は基本的に為す術なくやられる。だが……。
「別に俺の声援は関係ないだろ。あれはどっち道ドローしてたカードだし」
そう言う俺に、希望はふっ、と柔らかな笑みを浮かべた。
「違うな。そうじゃない。確かに現実的に考えて、デュエリストのメンタルが次のドローに影響することはあり得ないオカルトかもしれない。けれど、確実にそれはあるんだ」
「……そういうものか？」
「そうとも。例えば今回、君たちは有効なカードをあまり引くことができず、僕はその場に最適とも言えるカードを引き当てることが出来た。何故だと思う？」
「そりゃ……ついてなかった、とか」
「違うね。間違っているよ剣士。確かに運でもあったのかもしれな

い。だけど、やっぱり大事なのはデュエルに臨む心構え。あんなハンデを提示されて、『勝って当たり前』みたいな心境でデュエルするより、絶対に負けない、負けたくない。勝ちたい！　って強く想うデュエルをしてこそ、デッキは答えてくれるのさ。最後の、さだめみたいにね」

「……けど、それって精神論だろう？」

「何事も、最後にモノを言うのは心の強さだよ。それって、結構冗談抜きで力を持つものさ」

「意外だな。お前って、もっとガッチガチに理論武装したりロジック中心に物事を捉えるタイプだと思ってたんだが」

俺の言葉に、希望はチチチと指を振る。……どうでもいいが、コイツさっきから一々挙動が大げさだな。

「確かに僕は、基本的にはロジカルに考えるタイプだよ。けど、奇跡ってものが、強く願う者に力を貸すってことも、僕は知っているつもりだから」

奇跡、ね。

「さて、それじゃあこれで講評は終了！　後は、君たちの成長を願って幾つか情報を公開しておこうか」

「は？」

希望のあっさりとした言葉に俺たちは目を見開いた。

「お前……だって、俺たちは負けたのに……」

「ああ。君たちの言葉に耳を貸して、質問に答えるつもりはないよ。けど、僕自身は話さない、なんてことは一言も言ってないしね」

愕然とした。

「じゃ、じゃあ、私たちが貴方とデュエルしたのって……」

「うん。まあ基本的には無駄骨だね」

あっさりとそう暴露する希望。

「ま、また……またやられた……」

「……やっぱり」

さだめは特に落ち込んでいるし、珍しくルインが溜息を吐いてい

る。そう言えば、初めて会った時も同じような返し方されたって言ってたっけか……。

「さて……と言っても、言うべきことはそれほど多くない。君たちのこれからの動きについての提案、といったところだね」

「提案？」

「そう。別に言った通りにしなくても構わない。僕のことを、そう簡単に信用は出来ないだろうしね。が、少しくらいは考慮して貰えると嬉しいかな」

確かに、散々引っかき回されて直ぐ信用出来るほど、俺たちは人が出来ちゃいない。

「……わかった。聞くだけ聞いておいてやる」

「まずは君たちが一番気になっているであろうアテナのことだけど……多分、近い内アカデミアには戻ってくるはずだ」

「っ！？　本当か！」

それは、多分今一番知りたい情報。それを知っているというのなら……。

「ただし、彼女にも君たちと会えない理由がある。ここに来たとしても、決して君たちの前には姿を現そうとしないだろうね」

「なんで……！」

「これぱっかりは、どうしても言えないな。これは彼女の……アテナ自身の口から語られるべきだと思うから」

「そう、か……」

期待していなかったと言えばウソになる。だから、こうして断られると落ち込んでしまう。だが、アテナのためだというのなら我慢するしかない。

「なに、心配することはない。アテナを見つけた時、全てを聞いて判断するだけだろう？　君なら、悪いようにはしないだろうしね」

「当たり前だ。アテナにどんな隠しごとがあろうと、今更引くわけないだろう」

俺がそう言うと、希望は安心したように微笑む。

「そうか。いや、そうだろうね。君ならばそれも当然か。これでも心配していたんだ。僕にも理由があるとはいえ、君たちを引っかき回してしまった負い目というものがある」
「アテナが無事に帰って来さえすれば、水に流してやってもいい。元々、人を恨むのは苦手なんだ」
もちろん、その理由にもよるがな。
「それはありがたい。では、続いてのアドバイスだ。一度精霊界に行くといい」
「精霊界に？」
「僕とデュエルしてわかっただろう？　君たちはまだ、力が足りない。精霊界、即ちデュエルの力の源泉に触れることで、君たちはより強くなるだろう。精神的にも、より成長すると思う。行ってみて損はないだろうね」
「精霊界、ね。そんな簡単に行けるもんなのか？」
剣士が胡散臭げにそう漏らす。だが、その点は問題ない。
「その点は、セツがいるから問題ないね」
「ああ。俺なら精霊界まで皆を連れていける」
未だに原理が良くわからんこの力だが……まあ、そんなものは後でもいい。
「うん。精霊界での交通手段は僕の方で手配しておくとしよう」
「！」
俺はその言葉を聞いて、物凄く、そう物凄く嫌な予感がした。
「お、おい希望……まさかその交通手段って……」
「当然、サイクロイドだね」
「ぎゃあああああああっ！？」
俺は悲鳴を上げてその場にしゃがみこんだ。さ、最近やっと忘れかけていたのに！
「……何故そこまで嫌うかわからない。彼は気の良い二輪」
「……今更だが、気の良い二輪というその状況に冷汗が止まらない俺がいます。何処の九十九神だ」

「ビークロイド系は基本みんなそうかと……」
「っていうか本当にニガテなんだねお兄ちゃん」
思わず寒気がするほど。アレとは致命的に相性が悪い。自転車怖い。
「饅頭怖い？」
「ヤメロ」
その小噺のままもしヤツに囲まれるようなことがあれば……。
「俺は……死ぬかもしれん」
「どれだけ苦手なんだ……」
「一応、精霊界では最も標準的で、愛されている乗り物なのですけど……」
溜息混じりの希冴姫だが、俺からすれば、その感覚がわからない。
「どうやら俺は、精霊界とは相容れぬようだ」
というかあの馬鹿高いレンタル料で愛されてるとか。王国の国家予算レベルじゃなかったか？
「なあ、それ俺も一緒に行かなきゃいけないんじゃ……」
「おや、行きたくないのかい？」
「奴に遭いたくない」
「徹底してるね」
まあ、そうも言ってられないんだろうけどさ。
「にしても、存外色んな事を教えてくれるんだな」
もっと思わせぶりに、色々なことを隠すかと思っていた。
「まだまだ、隠していることはあるさ。大事なこと、色々とね」
「それは……」
確かに、アテナのこと、終焉のこと、イレギュラーのこと、希望自身のことなど教えてくれないことは多々あるが……。
「まあ、あれだよ……」
希望は遠い目をして、遥か過去を思い返しているようだった。
「……悲劇なんて、物語の中だけで十分だ、とは思わないか？」
「……そうかもな」

創作、フィクションだからこそ楽しめる。でも、現実は……。
「……こんなことしておいて、虫が良いかもしれないが……」
「ん？」
「僕も、君たちに出来る限りの協力はするつもりだ。僕の連絡先を渡しておくよ。何か……そう、何かあれば、頼ってくれ」
「……気が向けばな」
色々思うところはあるが、希望の支援というのは必ず役に立つだろう。
「大事にしてくれると嬉しい。一応、僕の彼女たちを除けば極少人数しか知らないプライベートナンバーだからさ」
「そんな凄いもの……ってイヤ待て。お前今なんて言った？」
「うん？　極少人数しか……」
「その前！」
「大事に……」
「ベタ過ぎる！」
「僕の彼女たち、かな？」
「彼女『たち』ってなんだ『たち』って」
「ああ、言ってなかったかな。僕は彼女が複数いる」
「なぁっ……！？」
ざわり、と一瞬周りが騒然とした。
『なにぃぃぃぃ！？』
「おまっ！　それ、光さん知ってんのかよ！？」
俺は思わず希望の彼女であるはずの名前を出す。希望は別段特に問題ないといった風情でサラッと返す。
「もちろん。っていうか、隠れてやってたら僕今頃ミンチだから」
あの光さんがどうやって希望をミンチにするのかも多少興味があったがそれ以上に！
「それって……その……」
「ハーレム？」
「そうそれ！」

ルインがあっさりと口に出してしまったが、マジでか！？
「その言葉を使うと、途端に薄っぺらく、というか軽く感じるけど……まあ、そうだね」
唖然とした。いや、確かにコイツ超絶美形の金持ちでデュエルも神懸かり的に強くて……って別に不思議じゃないじゃん。けど……。
「よく、ハーレムなんか作ろうとしたな」
「作ろうとした、なんてつもりはないよ。ありがたいことに、僕に好意を寄せてくれる娘たちが複数人いた、ってだけ」
「いやだから、それを全員、その……受け入れることにしたなって……」
「なに。僕は、こういう立場だから全員を養っていく力はあった。後は、覚悟だけさ」
「覚悟？」
「全員を養う力はある。だけどその立場から、スキャンダルってのは結構致命的でね。そういう、所謂世間の目とかから彼女たちを守る覚悟、って奴だよ」
「……覚悟、ね」
複数に好意を寄せられている、という状況自体は俺もそう変わらない。それに悩んで、アテナを受け入れることを悩んでいる俺に対し、コイツは全員受け入れる、という選択肢を選んで実行してしまったわけだ。
「なに。君ならきっと、皆納得できるエンディングを迎えられるさ」
「……なら、いいんだけどな」
正直、コイツの決断力とか覚悟は羨ましくも思う。俺は……。
「まあそもそもセツなんて今全国的に“妹を手篭めにし、銀髪美女を雌犬にしている鬼畜界の英雄”的立場になってるんだから今更と言えば今更……」
「うおおおおおおおおおっ！？　そういやそんなことがぁぁぁぁぁっ！？」
「さだめたちの蒔いた芽は、確実に花を咲かせようとしているよ！」

「計画通り（ニヤリ）」
「わ、わたくしもテレビには映っていたハズですのに……」
「せ、セツくん……あんまり気を落とさないで……」
ユーキちゃんが慰めてくれているが、何と言うか、焼け石に水だ。
周りからの同情の視線も逆に痛い。
「あー……アレは、痛かったな。ツッコミを入れるとか、いっそ笑うとか、そんな次元を遥か超越してたしよ」
「ネットでもお祭り騒ぎだったからねぇ……凄いよ？『鬼畜王子を祭るスレ』とか」
「どるぅあああああああああああああ！？」
まさかの追い打ち！　ハンカチとかハニカミとかのノリで王子化すんなよ！
「割と羨ましがられているみたいだよ？　俺もあやかりたい！　みたいなコメ多かったし」
「見た目だけなら可愛いもんね。さだめ」
「色んな意味で、自分で言うな、ですわ」
得意げなさだめに、希冴姫が突っ込んでいた。まったくその通りだが、今の俺は突っ込んでいる余裕がない。
くっ！　まさかここに来てあの入学式のダメージが襲ってくるとは！
「……一応、私が場を収束させてはおいたんですけど……」
「まあ、流石にアイドルといえど、あのインパクトじゃなぁ……それこそ、焼け石に水ってヤツだろ」
「もう……許してくれ」
これ以上恥の再確認はしたくない。
「はっはっは。まあ、そう難しく考えることはないよ。軽く考えるのは良くないが、考え過ぎて手遅れになるのはもっと辛い。セツ。願わくば、誰も後悔しない結末を望んでいるよ」
希望はそう言って俺たちに背を向けた。今回はこれで、ということらしい。

「……ああ、そうそう。最後に一つ、アドバイスを」
「？」
「今日は早めに休むといい。セツも、色々と疲れが溜まっているはずだから」
「はぁ？」
最後にそんな、物凄く一般的なアドバイスを残して、希望は帰って行った。
俺たちは顔を見合わせつつも、これからのことを話し合ってその日は解散することにした。

翌日、俺は疲れから風邪を引いてダウンし、改めて希望のアドバイスの正しさを実感することになるのだった。

第三期第九話「これから」（後書き）

以前程の酷評にはなりませんでした。まあ、改訂後のデュエルはそれほどさだめたち悪手は打ちませんでしたしね。

ちなみに一昨日くらいから、モンハンばかりで全然タッグフォースはやれていない悠ですが、最近は自分なりにさだめデッキを構築中。一応次元ダーク。いや素人構築ですが、意外と回るもんですね。キラー・トマトからスナイプ・ストーカーリクルートして除去、すかさずダムドと繋ぐのが理想的。ダムドが初手になければなんとかネクロ・ガードナー使いまわしで耐えつつ闇王プロメティスからダムド・終焉の精霊でコンボ。次元ダークとかいいつつ、殆ど普通のダムドビートですが、一応除外ともコンボしてるので次元と言うことにしといてください。上手く決まるとめっちゃ気持ちいいです。

それでは、悠でした！

祝・１００万ＰＶ記念特別編（前書き）

タイトル通りです！　ちょっとした企画もやりますので、どうかご協力くだされば幸いです！

祝・１００万ＰＶ記念特別編

アルカナ～切り札の騎士～

祝・１００万ＰＶ記念特別編

　というわけで、タイトルの通り特別編になります！
「……まあ、色々言いたいことはあるが、まず一つだけ言わせろ。作者」
　なにかな？　主人公。
「……ぅ遅い！　遅すぎる！　おま、アクセス数見てみろ！　１００万どころか今１１８万行ってるぞ！？　今まで何してた！」
「１１８万って……端数として切り捨てられるレベル遥か越してるよ……いっそ１２０万行くまで待ってからやればよかったんじゃないかとさだめは思うんだけど」
　し、しょうがないじゃないか！　まさかここまで行ってるとは思わなかったんだよ！　祝・六十話！　とか前々話で言ってる場合じゃなかった！
「あはは……その気持ちはわかりますけど……」
　おや、メインヒロイン（笑）のアテナじゃないか。本編では今大変な状況だけど、こんなとこ来ていてもいいの？
「今の私は異時空同位体の……って！　今サラリと聞き捨てならないこと言ってませんでしたか！？　誰がメインヒロイン（笑）ですか！」
　いやだって……出番が……。

「じゃあ出してくださいよ！　ほら、あるじゃないですか！　私がセツたちのために華麗に終焉の欠片相手に無双するところとか！」
　今は希望が無双状態で……。
「端役が無双してメインヒロイン（笑）が出番なしって……ってだからなんで（笑）とかついてるんですか！　これ取ってくださいよ！　こんなもの、ぺいっ、です！　ぺいっ！」
　いや、っていうか希望を端役呼ばわりって……君が最初に無双され始めたんだし……。
「っていうか、何気に私敗戦多くありません!?　作者さんの中じゃ一番ガチなデッキだって言ってたのはウソですか？」
　いや、そのはずなんだけどね。話の流れ的にというか……。
「あ、あーそろそろいいか、アテナ……」
「うぅ～……」
「唸らない唸らない」
「きゅうううううううう!!」
「威嚇しない威嚇しない。……っていうか威嚇になってない。むしろ可愛らしい」
「か、可愛くないですもん！」
　何この子可愛い。
「あ、別に貴方に言われても嬉しくはないです」
　ですよね！
「……そろそろ話戻そうよ。お兄ちゃんもアテナも作者さんも」
『さだめ（さん）に突っ込まれた……』
「そこで絶望的な雰囲気醸し出さないでくれるかなぁ!?」
　とりあえず、話を戻しましょうか。
「まだ本題にも入ってないけどな」
　……訂正。本題に、入りましょうか。
「そうしてください」
　要するに、なんかこう、ねぇ？
「要してないし、そもそも要する話が出てなかっただろうが」

口下手なんだよぅ。
「それは物書きとしてどうなんでしょう……」
コホン。冗談はさておきまして、拙作がここまでの来れたのもアルカナを応援してくださった皆様のおかげです。つきましては、何か企画の一つや二つやろうかなーと思いましてございますはい。
「いきなりみょうちきりんな口調で話だすな……まあ、そういうことだ」
「１００万記念に企画を、ってことだね」
そんなとこ。ほら、他の作者様方はやってる方もいるわけですし。
「……尻馬に乗っかろうということですねわかります」
「浅はかですわ……」
「そんなことよりとっとと本編進めた方がいいんじゃないかな～？」
でぇい！　いきなりどこから湧いてきたヒロインズ！　いいじゃないか！　時代の流れには乗るもんだよ！
「で、例えばどんな企画が思い付いてるんだ？」
そうだねー。とりあえずキャラ人気投票で一位のキャラに番外を……。
『却下』
アテナ以外からダメだし！？
「ダメだよ！　さだめ全然読者に媚び売ってないもん！」
「まずお前は、その読者に媚を売る、という考え方から矯正していこうな？」
「そうでなくとも、残念ながら読者人気ではアテナに勝てる気がしない」
「……まことに遺憾ながら、同意見ですわ」
「わたし、そもそも出番も少ないし……」
「い、いいじゃないですか！　私は今、本編で殆ど出れないんですから番外くらい優遇してくれたって！」
……君たちだけが対象じゃないんですけどね。
『……』

「……みんなすごい表情で黙ってしまったから代表して俺が聞こう。……どういうことだ？」

いえね。ダークホースってのは案外色んなところに転がっているわけでして。

「前置きはいい」

……例えばホレ、様々な人から深く愛されている気の良い二輪さんとか。

「ひっ！？」

意外といるんだよねーあの二輪のファン。作者的にもあの二輪の恋愛話とか書いてみたかったりも……ね？

「は、はは……まさか」

……。

「なんで黙るの！？　ねえなんで黙ってんの！？　なんとか言えよおい！」

……まあ九割方本気の冗談はさておき。

「冗談一割！」

一割は真実。

「笑えねえ！」

さておき！　まあ人気投票っぽいのはありかもしれないと思っている。御褒美とか関係なく。

「それじゃあ誰も投票してくれないんじゃ……」

企画内容のアンケートと一緒に書いて貰えばいいのです。それならきっと。まあこれまでの反応的に考えるとやっぱりアテナが強そうですが。

「メインヒロインですから！」

「あれ？　なんで（笑）ついてないの？　折角つけといたのに」

「さだめさんが犯人だったんですか！？」

「さだめ以外に誰がやると」

「……それもそうですね。とにかく、あの不名誉極まりない修飾は取って捨てました。こう、ぺいっと」

まあ、とりあえず人気投票は人気投票でやっときましょう。投票対象は、アルカナに出てきてさえいれば誰でも結構です。余裕さえあれば一位のキャラの短編も。

「で、肝心の企画はどうするんだ？」

そーですねーぶっちゃけこれもアンケートしたいくらいですけど……。

「無責任すぎる！」

なので、ある程度絞ってみようかと。とりあえず考えてるのはこんな感じで。

？他作品とのコラボ

「人様任せ過ぎないか？」

もう一々考えるのめんどくさくて。

「最低だね」

？アルカナ外伝～暗黒さだめ無双伝～

「何だこれ！？」

要するに、元の世界におけるセツとさだめの一エピソードを公開、という。

「……悪くないね。さだめが如何にして有害な雌をお兄ちゃんの傍から排除してきたか、その暗黒の歴史が語られる外伝……これは、アリだね！」

「ナシだよ！　なんかそれもう、残酷描写アリどころじゃすまなそうだよ！」

あ、ギャグですから。

「ギャグなの！？」

題名からしてギャグっぽいじゃないですか。暗黒さだめ無双伝ですよ？

「その、無駄な語呂の良さが気になります……」

？人気投票三位のキャラの短編

「だからそれじゃあ……」

「いやちょっと待て。良く見ろ。一位じゃなくて……」

「……三位？」

です。一位だとアテナになる確率が高そうだったので、調整も兼ねて三位に。

「あの……それって逆に言えば私になる確率低いってことですよね……？」

一位になったキャラは人気高いってことで、本編でも優遇するから。

「だから！　その本編に私最近出れてないんですけど！」

出てきたときに。

「いつですかそれ！？」

……まあ、夏は、跨がないと……思うよ？

「遠い！　べらぼうに遠いですよ！」

「……アテナ、自分が一位になるのを前提にして話してない？」

「え！？　い、いえ……そんな、ことは……」

「っていうか、それって二位には特典なしってこと……？」

その通り。

「二位悲惨！　二位なのに！」

で、人気投票の形式をこうしてみよう。

「ん？」

好きなキャラクター上位三名まで選出し、読者様方の中での一位、二位、三位を決定してください。一位には三ポイント。二位には二ポイント、三位には一ポイントのポイントが投票されます。最終的にはポイント合計の一番高いキャラの優勝となります。

「……めんどくさくない？」

「でも、これなら可能性がある」

「いやー……むしろアテナちゃんはコンスタントに点取りそうな気がするんだけど～……」

メンドクサイのは主に集計する作者だからいいんです。どうせだから、企画はみんなやります。何と言っても１００万ですから。あ、？のコラボは希望者ありの場合ですが。もし複数人いらっしゃった

場合、そうですね……何人もは流石に無理なので……先着三名、ってことにしておきますか。余ったら余ったで僕が楽できるし。

「怠惰！」

仕方ないだろう。コラボデュエルって結構大変だし。どんなデッキ使ってくるのか聞かないといけないし。

「……そうだけど。ちなみに、その場合シンクロは？」

……アリにしておきます。セツなんかはシンクロの存在自体は知っているわけですし、問題ないでしょう。

「相手をするのは俺なのか？」

そこら辺も相手の希望に合わせます。アテナが良ければアテナでもいいし、さだめの禁止デッキ希望するような方がいればそれでも。

「え♪　あのデッキ使ってもいいの？」

……相手が希望すればね。さだめの禁止、一応二種類あるのでどっちか言ってください。まあ、居れば、の話なんですが。

「……ちなみに、相手にネイキッドとかを指定するのもアリなのか？」

当然。そこら辺のルールはゆるゆるです。希望でも光でもシャインでも、投稿されたオリキャラ指定するのも構いません。……流石に、ライムの元持ち主、とかの無茶振りはアレですが。

「……そう考えると、沢山いるね」

「節操なし」

セツに言ってあげなさい。

『節操なし』

「ホントに言った！？　しかも全員声を揃えて！？」

さて、まあこんな感じで１００万ＰＶ記念はやりたいと思います。今まで感想書き込んでなくて、今更書き込むのもちょっと敷居が高いと思っている方もいらっしゃれば、まるで気にせず投票してください。投票だけの記入も全然オッケーですので。ちなみに、投票締切は切りのいいところ……一週間後の六月十二日土曜日終日と致します。

「……敷居、高くないだろ。こんなもん」
いいの！　少しでも投票数増やそうと思ってるだけだから！
「あの投票システムもそれが目的。意地汚い」
う……と、兎も角！　この度、アルカナはついに１００万の大台に乗ることと相成りました。これも偏にアルカナを応援してくださった読者諸兄皆さまのおかげです。よって厚く御礼申し上げます。
『ありがとうございました』
この１００万ＰＶ記念の短編のみならず、本編の方も鋭意執筆中ですので、今しばらくお待ちくださいますようお願いいたします。
「まずは次回、お兄ちゃんが風邪をひいてしまったことで始まるほのぼのを……ほのぼの？」
「ほのぼのにしような？」
「エロティカルにならいくらでも」
「ほ・の・ぼ・の・に・し・よ・う・な！」
「それでは、また近いうちにお会いしましょう！」
「……投票、待ってる」
「是非とも、ご協力お願いいたしますわ」
「じゃあ、またね～」
「え！？　あ、ちょっと待ってまださだめ読者に媚売ってな『ブッ！』（強制終了）」

祝・１００万ＰＶ記念特別編（後書き）

というわけで、人気投票やります。まあなんか本文ではアテナ勝つだろみたいな前提で話してますが、投票の得票が多少変則的なんで他のキャラが一位とる可能性も十分ありうるでしょう。投票は、おひとり様一度までとさせていただきます。ちなみに、作者たる私も投票します。作者票です。この作者票は最後まで誰に入っているか謎なので、最後まであきらめず投票お願いしますね～。

それでは、悠でした！

第三期第十話「慈愛の女神の看病日誌」（前書き）

連投です。まあ、ほぼ以前と変わっちゃいないのですがね。

第三期第十話「慈愛の女神の看病日誌」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第十話「慈愛の女神の看病日誌」

「けほっ！……あー」

希望のアドバイス通り早めに寝たつもりではあったんだが……見事に風邪をひいた。

「あの時の寒気は……ヤツのことだけじゃなかったのか……」

てっきりサイクロイド関係での悪寒だとばかり思っていたんだが……油断した。症状は発熱と少しの咳。鼻水や下痢になるよりはマシだが、気だるさがハンパない。

「っくしゅ！　しかし……」

もしかして俺、風邪なんてひいたの初めてじゃないか？……そこ、馬鹿っていうな。

「俺が風邪なんか引いたりした日にゃ……」

「お兄ちゃ～ん！　看病しにきたよ～！」

「そうか、ありがとう。まあぶぶ漬けでも食え」

「間髪いれずに！？」

こうなることは目に見えていたからな！

「お兄ちゃんそう邪険にしなくても～。さだめ、役に立つよ？」

「ほう。例えばどんな風に？」

「風邪は誰かにうつせば治るっていうから「もういい。オチは見えた」さだめと風邪がうつりそうな……ってまだ言い終わってもない

のに！？」
　ベタ過ぎる。今時そんなネタで迫るヤツがあるか。
「風邪引いて看病という時点で使い古された感が……」
「それは言うな」
「でも知ってる？」
「何をだ」
「病気の時は、性欲が高まるって「だれか！　このアホを摘み出せ！」ちょ！？」
「ったく……オラ、病人を騒がせてンじゃねェよ」
「ゴーズ！？　アンタ誰の味方を……にゃ～～～～！？」
　ぱたむ。
「ふぅ……これで静かに「お見舞いに来た」ならねー」
　連れ出されたさだめと入れ違いに入室してきたのはルインだ。心配してくれるのはありがたいんだが……。
「……何これ？　漬物？」
「ぶぶ漬けだ」
「おいしそう。貰っていい？」
　しまった。精霊のルインには日本独特の暗喩が伝わらない。
「ちなみに、帰らない」
「伝わってんじゃねえか！」
　敢えて無視したのかコイツは。
「私は彼女と違って騒がない」
　まあ、確かにルインが騒ぐのは想像つかないが……。
「お前がいると、騒ぎが二乗三乗と大きくなるんだよなぁ……」
「何という評価。凹む」
「これくらいで凹むタマか」
「タマはない。私は女」
「下ネタ自重」
　まったく……。
「……お腹、すいてる？」

「ん？　あーそうでもないけど……食った方がいいんだろうな」
朝から何も食べてないし……。薬も食後だしな。
「おかゆとか？」
「まあ、定番と言えばそうだな」
「……よし。作る」
「なに？」
ルインって……料理できるのか？
「……やったことはない」
「よし、待とうか」
それは明らかな失敗フラグです本当にありが（ｒｙ
「……平気。ちゃんと味見はする」
「……ほう」
確かに、大抵の失敗料理は味見をしないことが原因らしいし……っていうか何故味見をしないという選択肢を取るのかわからんが。
「……ダメそうなら他の人に頼む。私は見栄を張らない」
「まあ、それなら……」
その辺は希冴姫とかと違って信用できるところだ。何だかんだでルインは常識弁えて……いや、まあそれはともかく。
「何故言葉を濁す」
「気にするな」
ルインを含めて全員、常識があると断言しては怒られそうな気がしただけだ。
「……失礼な」
「普段の行動を省みろ」
「……とにかく、行ってくる」
「ああ……あ、いやちょっと待て」
「？」
俺は手近なメモ用紙をとり、おかゆのレシピを書いてルインに手渡す。
「レシピくらいないとどうしようもないだろ。とりあえず簡単にレ

シピ書いといたから」
「……ありがとう」
「いや……看病して貰ってるのはこっちだし、お礼をいうのは……やっぱ、ちゃんとおかゆが出来てからにしよう」
「……捻くれてる。お礼くらい言っても罰は当たらない」
「じゃ、素直に礼を言えるくらい、いいおかゆ作ってきてくれ」
「……がんばる」
「ああ。がんばれ」
最後に薄く微笑んだルインは意気込んで部屋を出ていく。……案外平和だったな。
「セツくん、いる～？」
そして入れ替わりでユーキちゃん。って……。
「なんだ？　今日は面接か何かか？　俺は面接官なのか？」
「？　何のこと？」
「……いや、なんでもない。気にしないでくれ。多分、風邪引いてボーっとしてただけだから」
「そう？　大丈夫～？」
「……ああ、大丈夫だ」
まあ、心配して来てくれてるんだろうし、文句を言うのは筋違いだよな。ユーキちゃんなら、さだめとかと違ってヘンに騒いだりしないだろうし。
「って、あれ？　ユーキちゃん授業は？」
ルインは関係ないし、さだめは躊躇なくサボるだろうが、ユーキちゃんはそんなことない。基本的に真面目なので、今日はアカデミアの授業に出ているはず……。
「今はお昼休みだよ～。レッド寮って遠いね～ここまで来るのに結構時間経っちゃったよ」
だから、あんまり長くはいられないらしい。ユーキちゃんに関しては風邪で弱っている今その癒しオーラが非常にありがたいので居て欲しいくらいなのだが、そうそう都合よくもいかないようだ。

「……熱は？」
「ん、さっき測った。37・6℃。まあ、そこまで酷くはないよ」
「そっか。良かった～。でも、油断したら長引くから気をつけてね～？」
「ああ、わかってるよ」
平和だ。やはり、ユーキちゃんは平和だ。最近ちょっと怪しかったが、やっぱりユーキちゃんは癒されるなぁ……。
結局、ユーキちゃんとは少しの間しか話せず、ユーキちゃんは名残惜しげにアカデミアへと戻っていった。多分、居て欲しいと言えば残ってくれただろうが、流石にそれは気が引けた。
「……ん」
人がいなくなり、少し静かにな『ドンガラガッシャン！！』……らない。
「……今の、食堂の方だよな」
ルイン……大丈夫かアイツ……？

ドンガラガッシャン！！
重ねられた鍋やフライパン等が崩れて凄まじい音を響かせる。
「……おのれ」
私は、料理というものの思わぬ難易度につい恨めし気な呻き声を出した。
「というか……」
自分の不器用さに凹む。あと、調理器具多過ぎ。何が何やら。
「これが……フライパン……必要ない。ぽいちょ」
放り投げたわけじゃない。置いただけ。
「圧力鍋……圧力？」
意味が良く分からない。彼のメモには、土鍋で……と書いてあった。ど……なべ？　土の鍋？

「……まずい。これは、料理以前の問題」
まず基本的な知識が足りてない。外食オンリーだったツケ。
「えと……」
……どうしよう。
『お手伝いしましょうか？』
「！」
背後からかけられた声に振り向くと、彼の騎士（ジャック）が柔和な微笑みを浮かべて佇んでいた。
「……執事騎士。久しい」
『ハハハ……執事ではないのですが……あとそれは言わないでください。それよりも、お困りのようですね』
「……ヘルプ」
私は迷わず助力を頼む。下手なプライドより実を取る。というか、このままじゃ何もできそうにない。
『分かりました。私は見ての通り実体ではありませんので、実際に料理をするのはルイン殿となりますが』
「それは、好都合。元よりそのつもり」
さすが、細かい気配りが行き届いている。アドバイス以外の口を挟まない辺りが。
『はい。では、一先ずおかゆに必要な調理器具から覚えましょう』
「わかった」
こうして私は、執事（騎士）の指導の下特製おかゆ作りに取り掛かるのだった。

「きゅ～？」
「よしよし……風邪がうつるからあんまり近寄るなよ～？」
ユーキちゃんが帰ってから数刻。しばらくの間ウトウトとまどろんでいた俺は、部屋に侵入してきたらしいミリーに起こされて相手

をさせられていた。
「きゅきゅっ」
「だから風邪がうつるって……しょうがないな」
「きゅ～！」
言っても離れないミリーをどうしようかと悩む。そこそこあったかいし可愛らしくていいんだが……やっぱり風邪引いてるやつの傍に子供を置いておくのは……や、子供って言っても精霊だから免疫力とか人間と同じと思っちゃいけないのかもしれんが。
「きゅー！」
心配する俺を余所に、ミリーは実に嬉しそうだ。普段なら俺はアカデミアに行っている時間で、お留守番していなければならないミリーにしてみれば、久しぶりに一日俺と一緒に居られるということで嬉しくて仕方がないらしい。
「でもなぁ……けほっ」
なまじ人間じゃない分、人間のウイルスがどのように作用するかわからない。
「そういう時はさだめにお任せ！」
「何処から湧いた。そしてゴーズはどうした」
「偉大なる煩悩の前ではさだめの攻撃力は相手より1上回るんだよ！」
「邪神か！」
「とにかく、ミリーはさだめに任せて。さだめも結構懐かれてるし、さだめが相手しておいてあげるよ」
「……それだと、お前も俺から離れる必要があるぞ？」
「ふん縛って幽閉するね☆」
「お前にミリーは渡さん！」
お前も成長したな、とか褒めようと思ったのが間違いだった。
「夫婦の愛の営みを邪魔するものは、例え子供でも容赦はしない！」
「夫婦じゃねえしお前の場合は愛じゃなくてただの性欲だろうが！」
さだめはミリーをむんずと掴み、俺の上からどかして飛びかかっ

てくる。ルパンダイブか！？
「くっ……力が……」
入らん！　ヤバい！
バタン！
「ハァ、ハァ……ヤロウ、よくもやりやがったな……」
「ゴーズ！」
「オラ、テメエは退場だ！」
「性欲を持てあますぅぅぅぅぅぅぅ！！」
ぱたむ。
……た、
「助かったぁぁぁぁ……」
今回ばかりは本気で奪われるかと……ルパンダイブでなければ危なかったな。
コンコン。
「ん？　誰だ？」
『……私』
「ルインか？」
そういえば、ルインがおかゆを作ると張りきって飛び出して行ったんだったか。
『……入っていい？』
もちろん、と軽く許可を出すと、先ほどよりも遠慮がちにルインが扉を開けて入ってきた。その手には一人用の土鍋。
「お、出来たのか」
「……あまり、自信はない」
「なんだ、珍しいこと言うじゃないか」
ルインは割といつでも自然体で、自信無さ気にしているところなんてあんまりなかったしな。比較的レアな表情かもしれん。まあ、相変わらず表情は薄いんだが。
「……食べる？」
「ああ。貰うよ」

正直、流石に腹が減ってきた。朝から何も食べてないしな。
「……」
しかし、ルインは中々土鍋を渡そうとしない。
「わ……」
「笑わないよ」
「……セリフの先読みは卑怯」
「意外と分かりやすいよな。ルインって」
「……どうぞ」
「おう。いただきます」
目を逸らしながら渡された土鍋の蓋を開ける。むわっと湯気が立ち昇り、柔らかな香りが鼻腔を刺激した。
「……なんだ。結構美味そうにできてるじゃないか」
一般的な玉子粥。まあちょっとベタっとしていたり玉子が卵白混じりだったりするが、概ね普通の玉子粥だ。初めてなら十分過ぎる。
「……キミの騎士に、手伝って貰った」
「ジャックか。相変わらずの気配り上手だな。後で礼を言っておかないと」
そう言ってレンゲを手に取る。
「あ……」
「自分で食べられるからな」
「……なんというラブコメ封じ。鬼畜の所業」
「これ以上体温上げてどうするんだ」
レンゲでおかゆを掬って、十分に冷ましてから口に入れる。味を確かめるように何度か咀嚼してから呑み込む。
「……一応、味見はしたつもり」
「……味、薄いな」
「う……」
「炊くときにかき混ぜたな？　米粒がぐちゃっとしてるぞ」
「うぅ……」
どんどん小さくなっていくルインに苦笑して、でも、と付け加え

る。
「美味いよ。ありがとな。ルイン」
「……！」
バッ！　っとルインが少し紅潮した顔を上げる。すぐに眼を逸らしてポソリ、と呟く。
「……落ち込ませておいてこの感想……ラブコメの基本を押さえてる……さっきは封じたのに……なんというギャップ」
別にラブコメのつもりで言ったわけじゃない。タダの本心だし。
「……ツンデレに見せかけて普通にデレてきた。これは、いい」
「……そーかい」
「これ、結構いいかも」
「ん？　なにが」
「料理して、美味しいって言って貰うの」
「そっか。じゃあ、俺が治ったら料理、教えてやるよ。慣れれば、結構簡単だからさ」
「……うん」
ルインはまた、少し恥ずかしそうにはにかんだ。
「……なんか、私も熱出てきたかも」
「……気のせいだ」
「大マジ」
「じゃあ部屋に戻って休んだ方が……」
「ここで寝る」
「寝るな。つーか、一応ここ、十代たちの部屋でもあるんだからな」
「それは盲点」
「忘れんな」
「でも、少しくらい添い寝してもいい？」
「だめ」
「ケチ」
さだめじゃないが、風邪の時とかってのは結構性欲を持てあます。で、ルインはスタイル抜群の美女なわけで……。

「そ、そうだ！　そう言えば希冴姫はどうしたんだ？　今日は姿を見てないけど」
　なんだか妙な雰囲気になってきたので、咄嗟に話を変える。気になっていたのは事実だし。自惚れじゃなく、希冴姫なら俺が風邪をひいたと聞けばすぐにでも見舞いに来てくれそうなものだが……。
「お姫様は……寝てる」
「は？」
「まだ起きてない」
　まだ、って……。
「もう夕方なんだが……」
　もしかして、希冴姫もどこか悪いのか？
「彼女も、慣れない人間界で疲れが溜まっていただけ。心配はいらない」
「ああ……」
　そう言えば、希冴姫にしてみれば人間界は外国、もっと言えば異界なわけだし、色々と勝手が違うこともあるんだろう。
「じゃあルイン、お前は大丈夫なのか？」
　人間界が異界だと言うのはルインだって同じだろう。
「私は平気。元々順応能力は高いし……ずっと転々としていたから」
　ルインの世界が滅びてから、ずっと精霊界を旅していたルインだから、別の土地にきてもすぐに順応出来たということらしい。
「ゴーズは？」
「冥界に比べれば、人間界は天国。不自由はないと思う」
　なるほど……確かに、あの場所は出来ればもう近寄りたくないな。
「で、お姫様な希冴姫は順応能力が低かったと」
「そう」
　そう考えれば、確かに頷ける話だ。しかし、なんだろう。この何とも言えない違和感は……。
「……おかゆ、冷める」
「あ、ああすまん。今食べる……っあち！」

慌てておかゆを掬って食べるが、思ったよりも冷めていなかったので火傷しそうになる。
「……これは、所謂『あ～ん』フラグ……張りきらざるを得ない」
「いやだから……」
いい、と拒否する前に、素早くレンゲを奪い取られる。おかゆを掬い、ふーっと息を吹きかける。
「もぐ……ん。大丈夫そう。あ～ん」
「う……」
流石にここに来て拒否は失礼だし、男らしくない。腹を括っていざ、と思ったのだが、冷めたか確認するためにルインが先に一口食べてしまった。
「ふーふー＋あ～ん＋間接キス。どうだ」
「ど、どうだってお前な……」
複合技にも程がある。流石に恥ずかしすぎる。
「……あ～ん」
「う……わかったよ。あ～ん」
覚悟を決めて口を開ける。何故か、さっきは感じなかった甘味を感じた。

「はっ！？　どいてゴーズ！　今凄く羨ましい事態に陥っている電波が届いた！」
「うっせェ！　つーかテメエ、本気で人間か……？　オレ、かなりマジだぞ……！？」
「煩悩解放！　リミットブレイク！　待っててお兄ちゃん！　お兄ちゃんの貞操は、さだめが奪う！」
「普通そこは守るじゃねェの！？」
「ダルビッシュ・アダルト、セーット・アーップ！」
「色々間違って……ぐおおおっ！？」

「くっ……流石手強い！　こうなったら、行って！　私の使い魔、ミリー！」
「きゅー！」
「だっ、ばっ！　卑怯くせェ！　オレがコイツに攻撃できねェの知ってて！」
「勝てばいいんだよ！　勝てば！」
「つーかソイツはテメエの使い魔じゃねェだろ！？」
「タダで言うこと聞くなら使い魔も子供も奴隷も家畜も似たようなもの！」
「一々発言がロクでもねェな！？」
「おーっほっほっほっほ！　人質を兵士にすればそれ即ち最強の軍隊！」
「外道に堕ちることに対する躊躇がカケラもねェ！？」
「お兄ちゃんの貞操を奪うためなら、さだめはどこまでもぉぉぉぉ！！」
「テメエ、カイエンのアホよりよっぽど冥府の使者向きだ！　何処までも常軌を逸してやがる！」
「これで、終わりにするよ！　吹っ飛べー！！」
「なにっ！？　ぐはァっ！？」
「対象の沈黙を確認。今行くよお兄ちゃん！」
さだめが辿りついた時、絶賛ラブコメ中だったセツとルインにさだめがまた癇癪を起こすのだが……それはまた、別のお話。

第三期第十話「慈愛の女神の看病日誌」（後書き）

というわけで、ルインの看病日誌的なアレコレでした。
コレ、実はそこそこお気に入りの話だったりします。というか、どうもルインとさだめの二人がメインになる話は個人的にお気に入り。いえ、アテナとかも好きではあるんですが、個人的に丁寧語苦手だったりするんで。希冴姫も同じく。ユーキちゃんに関してはダークホース故に影が薄く……いえ、なんでもありません。
まあそんなわけで、ルインとさだめの二人が登場しているこの回は、ギャグ的な意味でも全話通してトップクラスにお気に入りです。なので、あんまり変えませんでした。変えるべき箇所がなかったのもありますが。
そして次回からは遂に……彼女か。作者の依怙贔屓を一身に受けている精霊か。よし、あんまり変えるところもないし、とっとと進めてしまいましょう。
それでは、悠でした！

第三期第十一話「アカデミアの……」（前書き）

更に連投です。……決してモンハンで勝てないからって理由じゃないですよ？　ええ、ホントです。鳥竜種三連撃な大連続狩猟で、あっさり二死したとか、そんなバカなハハハ……。

第三期第十一話「アカデミアの……」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第十一話「アカデミアの……」

ルインの看護の甲斐もあってか、俺の風邪は見事に完治し、俺は普段通りの生活に戻っていた。

それにしても、今回は風邪で一日休んだだけだってのに、クロノス先生の嫌味が多いこと多いこと。……まあ、タダでさえオシリス・レッドの人間で、去年も殆どお情けで進級させてもらっただけみたいな出席率だったから、気持ちはわからなくもないが。

「ただいまーっと……ん？」

そのクロノス先生の説教も済まし、いつものように十代たちの部屋に戻ってくると、十代と翔といういつものメンバーの中に、一人見慣れないラー・イエローの制服を纏ったガタイの良い男がいた。

「おっ、帰ってきたな」

「おかえりッス。セツくん」

「おう、ただいま……で、そちらさんは？」

「アンタこそ、誰ドン？　人に名前を尋ねるときは、自分から名乗るものザウルス！」

ド、ドン？　ザウルス？　え、なにその語尾。ギャグ？

思わぬ言葉遣いに、一瞬ポカンとしてしまったが、気を取り直して俺も自己紹介することにした。言っていること自体はまともだったからな。

「悪い。俺は御堂切。諸事情あって、十代たちの部屋の居候をやっている。セツって呼んでくれればいい」
「オレはティラノ剣山。本日付で、十代のアニキの舎弟にして貰ったんだドン！」
「僕は認めてないけどね」
「丸藤先輩に認められる必要なんてないザウルス！」
あ、あー……これは、アレだな。イレギュラーじゃなさそうだな。ここまで『あり得ない』個性の在り方は、うん。ない。
「それにしても、驚いたドン！　まさか、『デュエルアカデミアのカリスマ』であるアニキに引き続き、あの……」
「お、なんだ？　俺にも通り名みたいなのがついてるのか？」
そうだとしたら、なにやらこそばゆいものがあるな。まあ、ユーキちゃんの『沈黙の闇狩人』みたいに不本意な二つ名である場合も考えられるんだが……あ、さだめの『アカデミアの悪夢』は、正にその通り、これ以上なくピッタリだから除外。
「『デュエルアカデミアのラブコメ担当』までいるなんて……」
「よっし剣山クン……オモテ、出よか？」
「な、なんだドン！？　今、このオレの生存本能が警告を発したザウルス！」
「っていうか、なんで関西弁なんスか！？」
なんちゅう二つ名だ！　まったく……
「不本意、極まりない！」
「この上なく、ピッタリだと思うッス」
「オレも……同感」
「お前らまで何言ってんだ！　俺は……」
ふと、今までの俺の日常を振り返ってみた。
入学初日、告白される。
←
妹と彼女候補（アテナ）のイザコザで大変な騒動。
←

計五人の女性からの告白を未だ保留中。

←

その他諸々恋の鞘当て的騒動の数々。

……ゴメンナサイ否定できる気がしません。

「っていうか、我ながら酷い……特に三番目」

「オレとしては、あの入学式の騒動では度肝を抜かれたドン！」

「ああっ！　会う新入生皆に言われる！　おのれあの馬鹿今度お仕置きを……あ、いや、アイツにどんなことをすればお仕置きになるのか想像もつかん。温いと悦びそうだし、やり過ぎると危険だし……ああもう！」

「な、なんだか良くわからないけど、すごく苦労してそうだドン……」

「うん、まあ……羨ましいのと等量くらいには遠慮したくもなるッスね……」

「オレは絶対ゴメンだぜ……」

恋愛事に然程の興味を持っていない十代からすれば、ただ苦労してるだけだしな。

「で、それよりなんで剣山はそんな大荷物なんだ？」

「今日からここでお世話になるドン！」

「……ちょっと待て。流石にこれ以上は定員オーバーじゃないか？」

「そうそう。だから大人しくイエロー寮に戻りなよ。剣山君」

「嫌だドン！　オレは、絶対にここで暮らすザウルス！」

「だから定員オーバーだって言ってるでしょ！？」

「ガウゥ～！！」

「うう～！！」

「あー……」

ったく……仕方ないな。

「じゃあ、俺が部屋変わるよ。それで問題なしだ」

「え！？」

「お、おいセツ！」

「さ、流石にそれは気が引けるドン！」
「心配すんな。当てはある」
幸い、最近になってこのレッド寮に知り合いは増えたんだ。剣士にでも頼みこもう。編入生は全員レッドからって制度に感謝だな。

そう思って、とりあえず剣士の部屋に来てみたのだが……。
「すまん、定員オーバーだ」
「ぬぐっ……」
剣士のところも、何やら三人くらい纏めて押し込められていてとてもじゃないが俺が入るスペースはないようだった。
「なぁセツ、やっぱオレたちの部屋に戻ろうぜ？」
「そうッスよ。剣山君をイエローに戻らせればいいんスから」
「オレとしちゃあ、アニキの部屋にいたいとは思うザウルス。けど、御堂先輩を追いだしてってのは気が引けるドン」
「あー、いいっていいって。お前こそ、ヘンな遠慮すんなよ」
いやまあ、確かに道理で考えれば剣山をイエローに戻すのが当然なんだろうが。
「まあ確かに……他に交流あるレッド男子は特にいないのも事実なんだよな……」
そもそも、下手に相部屋にでもなろうものなら寝首を掻かれる心配をしなくちゃならない。主に、アテナの件とかアテナの件とかアテナの件とか。
「何言ってんだよ。いるじゃんか。まだ二人しか入ってなくて、セツを喜んで受け入れてくれそうな部屋がさ！」
「……あるッスね～。まあちょっと別の意味で問題ありそうッスけど」
「元々お前の部屋だったんだろ？」
十代が明るく提案してくれたその部屋は、確かに受け入れてくれ

そうではある。あるのだが……。
「お前ら……敢えて考えないようにしてきた可能性をここで穿り返すのか……？」
なんというか……あそこはダメだ。色々と、ダメだ。確かに寝首を掻かれる心配はする必要ないが、それ以外に、ある意味もっと大事な心配をしなくちゃいけなくなる。
「私たちは大歓迎」
「っっ！？！？」
突如首に回された腕と、聞き覚えのある声に思わず体が硬直する。
「……そこまで驚かなくても」
慌てて振り向くと、ちょっぴり傷ついた表情のルインがそこにいた。どうでもいいが、さだめといいルインといい、普段攻めッ気の強い奴は打たれ弱い傾向にある気がするな……アテナなんかは結構打たれ強かった気がするんだが……。
「い、いや、あんまりタイミング良く現れたもんだからつい……」
ちょっとだけ、捕食者に目をつけられた獲物の心境だったことは黙っておこう。
「……そう」
「で、なんでいきなり現れたんだ？　こいつらに何か用でもあったのか？」
「噂されたから、影が差した」
「諺に忠実！」
「本当のところは、キミが部屋を探してることを聞いたから、攫いに……じゃなくて、勧誘しに来た」
「うん、ベタな言い間違い本当にありがとうございました。そして断らざるを得ない」
その、本音を隠す気もないらしい正直さは、時として美徳にも悪徳にもなると言うことを学んで欲しいところだ。
「据え膳を食わないのは、恥」
「むしろ、俺自身が据え膳な気がするのですが」

俺、思わず敬語。
「否定はしない」
ルイン、大真面目に肯定。
結論。
「謹んで、お断りさせていただきたく……」
「拒否することを、拒否する」
「拒否することを拒否することを、拒否する」
「……私は乗らない」
「そうか。なら、俺は拒否するぞ」
「問答無用という言葉がある」
「ゑ？」
「実力行使、という言葉も、ある」
「ありますね」
「私は、言葉の意味に忠実」
「割とさっきから、そんな感じですねルインさん」
現に、今後ろ手に縛られそうになっているのを必死で抵抗しているところだ。文面からは伝わり難かろうが。今、必死の攻防戦が、行われております。
「……じゃあ、選択肢」
「……ほほう。一応聞いておこうか」
「私たちの部屋と、妹のｈ「さあ、お前たちの部屋に荷物を運ぶぞ。手伝ってくれ」……計画通り（ニヤリ）」
「待て待て待て！　お前、今賢明な判断をしたように見えて、物凄く危険な、言うなればアメリカと不平等条約を結んだ日本みたいな感じだぞ！」
「そ、そうッスよ！　妹さんの部屋は女子寮ッス！　選ぶ選ばない以前に、そっちで暮らせるハズが……」
「さだめなら、やりかねん」
「「「た、確かに……」」」
一言で納得するこの説得力。さだめの名が持つネームバリューは

凄まじいな。
「……妹さんが許しても、他の人間が許さないんじゃないか？」
「俺の無駄スキルに、『場の空気に溶け込んでしまう程度の能力』というものが、あってだな」
本来ならありえない、非常識非日常でも、このスキルの前では常識日常に早変わり。
「……初めて、あのスキルが無駄なところで発揮されたな……」
だからこその、無駄スキルであることを御理解いただきたい所存。
「そもそも、男子だ女子だと言う時点で発生する問題なら、ルインと希冴姫の時点で発生していて然りだろうが」
俺の言葉に、三人はハッとして顔を見合わせた。
「ま、まったく不思議に思ってなかった……」
「素直に、受け入れていましたね……」
「これが、セツの無駄スキルの本領……」
……まあこれも、普通じゃないさだめや俺を、少しでも馴染ませるために培われたスキルなんだが……。
「とにかく、さだめの部屋で生活とか、十分後には奴がシンデレラを卒業している事請けあいだろうな」
「わかりにくい表現だが、わかった」
こっちも少しでも規制から逃れるので必死なんだ。悪いな。
「……大丈夫。私は抜け駆けをしない。前にも言った」
……まあ、確かにそこら辺も安心要素の一つなんだよな。何だかんだで、ルインと希冴姫なら安心なんだ。
「……むしろ、アテナとかだったりした方が危険そうで……」
いや、何も言うまい。
「あ、ちなみに加藤さんの部屋とかだったらどうだったんスか？」
少しからかい気味に、そんなことを言いだした翔。俺は如何にも呆れた、という表情で返してやる。
「……あのな？　ユーキちゃんは女の子なんだぞ？　女の子の部屋に男が同居とか、やっちゃダメだろう。常識的に」

「お前、今までの一連の会話を思い出してからしゃべれ」
「何かおかしいか？」
「おい、コイツ真顔なんだが……」
「誰か、翻訳頼む」
「多分、今のセツのセリフには“普通の”っていう修飾語が抜けていたんじゃねえのか？　ほら、女の子の前に」
「「なるほど」」
「そういや、希冴姫は？　アイツもいいって言っているのか？」
「心配ない。あのお姫様が、キミを拒絶する筈がない」
「それは……まあ、そうかもしれんが」
それでも、一応は聞いてみるのが筋ってことで、荷物を運び入れる前にルイン達の部屋に行くことにした。
「ええ、もちろん大歓迎ですわ！　それに、元々この部屋はセツ様のものですもの。もし問題があったら、どちらかと言えばわたくしたちが立ち行かねばならないでしょう」
「いや、そんなことないって。もうここは、お前たちの部屋だよ」
案の定、と言っていいのか、希冴姫はあっさり許可してくれた。むしろ結果的に部屋を追い出す形にしてしまったことを謝る形で。
「……ところで、希冴姫。やっぱり体、良くないのか？」
ふと、気になったことを尋ねてみる。希冴姫は、もう放課後の時間だと言うのに寝間着姿で、ベッドに横たわっていた。昨日ルインから、体調を崩したと聞いてはいたが……。
「なんか……今の希冴姫は……」
すごく、弱々しい感じがする。ただの体調不良と言うには、ちょっと……。
「だ、大丈夫ですわ。少し……慣れない人間界に体が驚いただけですわ。御心配してくださって、ありがとうございます」
「そっか……もし、何日かしてもまだ体調が良くないときは言ってくれ。それまでは、俺が看病するよ」
「本当に……お気遣い、感謝しますわ」

覇気がない。いつもの希冴姫から感じる、溌剌とした、凛とした雰囲気が感じられない。

「ルイン、荷物運び、手伝ってくれ。今日から、とりあえずここで寝起きするよ」

「……わかった」

希冴姫の看病もできるし、ここで過ごすことは間違ってないだろう。ルインだって、こんな状態の希冴姫を無視してどうこう、なんてする奴じゃない。

むしろ、ルインがこの部屋に俺を誘ったのは、そう言う理由もあったのかもしれない。

その日は引っ越しと、希冴姫の看病で一日が過ぎて行った。

「え？　カイザーの次の対戦相手が決まった？」

「そうッス！」

数日後、めでたくラー・イエローに昇格することが出来た翔が持ってきたのは、そんな知らせだった。

相手はエド・フェニックス。以前、十代と売れ残っていた８パックのみで組んだ即席デッキでデュエルして、十代を敗北寸前まで追い詰めた相手らしい。

……というか、その時のデュエル内容を聞かせてもらったが、売れ残り８パックで十代を追い詰めたことよりも、売れ残り８パックでよりにもよって『大天使ゼラート』を召喚できるデッキを組めた事実こそが脅威だと思う。元の世界でアレを、あのカードを手に入れるためにどれだけ苦労したと……。

「これまで３０戦負けなしのプロデュエリスト、ね……」

エド・フェニックスについての情報は、それこそ山のようにあった。『プロデュエル界の貴公子』とかいう通り名も持つ、非常に将来有望な若手ということで、いくつもの雑誌で特集が組まれていた。

……なんだろう。この、胸に宿る苛立ちは。方や『貴公子』方や『ラブコメ担当』……うん。これは、怒ってもイインジャナイカナ？

「畜生……！　こんな厨二極まりない二つ名を、羨ましく思う日が来ようとは……！」

「セツ君？」

「あ、いやなんでもない。なんでもないぞ翔。まさか、この俺が、厨二病に憧れなど。ハハハ……」

「なんだ？　その乾いた笑い」

「ええい黙れ！　とにかく、そのデュエルは何日後なんだ？」

「三日後ッス！」

「なるほど、じゃあその日を楽しみに待つとしよう」

「セツ君は、どっちが勝つと思う？」

「セツは一回カイザーに勝ってるんだよなー」

ああ……あの時のデュエルは良かった。正直、今までデュエルしてきた中で一番大迫力のデュエルだったな。

「俺は、そのエド・フェニックスってヤツの実力を知らないから何とも言えないが……」

「フン。十代に負けた程度の奴が、カイザーに勝てるわけがない！」

「万丈目、決めつけにかかるな。実際、プロとしての経験はそのエド・フェニックスの方が長いんだろ？　プロだからって、特別なルールがあるわけじゃないが……」

本人にも言ったが、カイザーだってまだ発展途上。負ける可能性だってある。というか、エドが負けたデュエルって即席デッキだろうが。そんなデッキで、カイザーと引き分けた十代を追い詰めたんだから、その実力は相当高いと見るべきだ。

「そんなぁ……」

「……けどま、一度デュエルした俺としては、勝って欲しいってのが正直なところだな」

「そ、そうだよね！」

不安そうな顔から一転、安心したような顔になった翔を、もうひ

と押し元気づけてやる。
「第一、ここで俺たちが論議したところで結果は変わらない。今は、信じて待てばいいさ。我がアカデミアの、誇るべきデュエリストをな」
「フン。お前も、中々いいことを言うじゃないか」
「お前に褒められる日が来るとは思わなかったよ。万丈目」
「さん、だ。オレがカイザーの勝利を疑っていないのは、正にそういう理由だよ」
「どーかな。プライド高そうだもんな。お前」
「なんだと！？」
「あはは、言えてる！」
一頻り笑い、落ち着いた頃に三沢も自らの感想を述べた。
「エド・フェニックスは、今回のカイザーとのデュエルで今まで使って来なかったメインデッキを披露すると言っていた。そのメインデッキがどんなものなのかが気になるところだな」
「あ、三沢君。居たんだ」
「……居たんだ」
三沢はかなり苦しそうな笑顔だった。
「甘いな三沢。居たことに違和感を持たれる空気感じゃあまだまだ甘い。俺のように、居る筈のないところに違和感なく入り込める空気感を目指すが良い」
「し、師匠！　って、俺は別に空気の道を極めようとしてるわけでもなんでもない！」
また笑う十代たちを横目に、俺はエド・フェニックスについて調べた限りで、好ましくないものを見つけていた。
「エド・フェニックスの好む言葉は、『運命』……か」
エド・フェニックスは、デュエル中やデュエル後、その言葉を好んで使うらしい。それが、どうも俺には気に食わなかった。
そして、その不満はついに爆発することになる。数日後、エドと十代のデュエルをきっかけにして。

第三期第十一話「アカデミアの……」（後書き）

ここもそんなには変わってないですね。ただ、零たちの居なくなったところを十代たちがカバーしている形になります。流れ自体は以前のままです。

うん。これでさだめイベントと彼女のイベントを経て、ようやくメインヒロイン……とは、行かないんですよねこれが。

それでは、悠でした！

特別編「アルカナ?クロスワールドX?」（前書き）

こんにちは。
とりあえず記念特別編一本目。カイナさんの『遊戯王X』とのクロスで、レオVSセツになります。結構苦戦しましたが、なんとか形にできました。
ではどうぞ！

特別編「アルカナ？クロスワールドX？」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「アルカナ？クロスワールドX？」

「ん……？　これは……」

朝、俺が目を覚ますと、部屋の中に謎の渦が出現していた。

「なんだ……？」

見た感じは『攻撃の無力化』とかのエフェクトに似ている。

「ってことは、時空の渦？」

「そんなところだね」

「おわっ！？」

突然聞こえた言葉に振り向けば、そこに居たのは真中希望。相変わらず唐突に現れる奴だ。

「正確には、時空の歪、と言ったところか。近頃終焉が力を増してきて、世界に綻びが各所に生じ始めている。これは、その内の一つだね」

「ってことは、消さないと不味いんじゃ……」

「そうだね」

「そうだね、って……」

「うん？　消すのは君の仕事だよ？　だからここに歪が生まれたわけだしね」

「そうなのか？」

「ああ。消す方法は簡単。この歪の向こう側。一種の平行世界（パラレルワールド）に移

動して、そこの人間とデュエルしてくればいい。勝敗は問わない」
「……そんなことでいいのか？」
「おや、信用できない？」
「……分かったよ」
完全に信用できはしないが、ウソとも思えない。……行ってみるか。
「うん。行ってらっしゃい」
ひらひらと手を振る希望に見送られ、俺は時空の歪へと飛び込んだ。

ドサッ！
「った！？」
時空の歪から放り出された俺は、着地に失敗して尻もちをついた。
「きゅっ！」
更に、頭にポスッと軽い衝撃。
「み、ミリー！？　どうしたんだお前……まさか、ついて来ちゃったのか！？」
「きゅー！」
あちゃー……まあ別に帰れないってわけじゃないんだし、いいかもしれないけど……。
「きゅ？」
「はは……いや、それよりまず、ここはどこだ……？」
どこか中世欧州的な建物に、中央にそびえ立つ銀の尖塔。俺の記憶が正しければここは……。
「魔法都市……エンディミオン？」
ということは、精霊界なのか。いや、しかしいつもの精霊界とは微妙に空気に差異がある。なんとなく違和感と言うか……。
「あ、そうか。平行世界（パラレルワールド）って言ってたっけか」

こちらに来る前の、希望の言葉を思い出して納得する。
「とすると……」
とりあえず、あの尖塔を目指してみるとするか。そこなら確実に誰かがいる筈だしな。

「きゅー！」
「あっこら待てミリー！」
尖塔に近づいてすぐ、ミリーが定位置となっている頭の上から飛び立って先行してしまう。慌てて追いかける。
「きゅ～？」
『きゅきゅ！』
「ぬ、あれは……」
上記のセリフだけだとどっちがどっちやら分からないが、片方はミリーもう片方は……。
「『黒竜の雛』、か……？」
疑問形で言ったが、まず間違いないだろう。ミリーと似た、しかし更に輪をかけて黒い鱗。赤い瞳に卵の殻。どこからどう見ても『黒竜の雛』そのものである。
『きゅ～』
「しっかし何でエンディミオンに黒竜……？」
両者にシナジーは欠片もないし……。そもそも、雛が一匹だけでここにいると言うのもおかしな話だ。
「迷子か……？」
『きゅ？』
試しに抱き上げてみると、特に抵抗もなく雛は腕の中に収まった。
「きゅ！」
「おとと」
じーっと雛を見つめていると、ミリーが頭の上に飛び乗ってきた。

「……？」
ふと、視界が暗くなる。日の光が遮られたらしい。
「うわ……」
上を見上げると、案の定そこには巨大な黒い影。漆黒の翼を羽ばたかせ、真紅の瞳を輝かせる巨竜。『真紅眼の黒竜』だ。
『息子を離せ！　人間！』
その声に滲む明らかな敵意に、思わず後ずさるが、すぐに雛を頭上に掲げて、敵意のないことを示す。
「俺は敵じゃない！　ここで偶然この仔を見つけたから保護しただけだ！」
バサッ、バサッ、と翼をたたみつつ降下してくるレッドアイズ。その背には、青年が一人跨っていた。
「お前は……？」
とりあえず親竜に雛を返してから青年と相対する。剣を佩いている事を除けば、ごく普通の青年と言った感じだ。青年はレッドアイズから降りると、少し意外そうに口を開いた。
「驚いたな。ここに俺たち以外の人間がいるなんて」
「どういうことだ？」
「まずは自己紹介だな。俺はレオ。今はここで救世主とかやってる」
救世主？　聞き慣れない単語に、少し首をかしげるが、この世界の事情って奴だろうと勝手に納得しておく。
「俺は御堂切。セツって呼んでくれればいい。ここに来たのは……あー、なんて説明すればいいのか……」
事情を説明しようとして、言葉に詰まる。
「俺は……」
迷った末に、俺は……ネタに走ることにした。
「宇宙人でも未来人でも超能力者でもないが、異世界人なんだ」
「何そのハ〇ヒ的説明！」
おお、伝わった。
「まあ、冗談のような真実は置いておいて」

「真実なの!?　冗談じゃないの!?」
「ちょっとした事情でお前たちの世界に迷い込んでしまってな。帰るには、誰でもいいから一度デュエルして、問題を解決しなくちゃならん」
「なんだそのアバウトな解決法……」
同感だ。しかし、勝敗は問わないとの事だったから、この説明で正しいんだよな。
「まあ……そういうことなら、俺とデュエルするか？　チビスケを保護して貰ったお礼もしたいしさ」
「お、そうか？　なら、お願いしようか」
お互いにデッキをシャッフルしてディスクにセット。これで準備は整った。
「「デュエル！」」
「先行は貰う！　俺のターン、ドロー！」
俺のデッキは先攻有利！　相手のデッキがどんなデッキか分からない以上、先攻を取る！
「俺は『切り札の騎士―クィーン』を攻撃表示で召喚！　手札から装備カード『アルカナソード　ハート』を装備！　カードを一枚セットしてターンエンドだ！」
希冴姫の手に儀礼剣が握られ、その実用性の低さから攻撃力が低下する。
「切り札の騎士……？　あれは、『クィーンズ・ナイト』か？　それに、初めて聞く装備カードだな……俺のターン、ドロー！」
レオは僅かに訝しげな顔でカードをドローする。聞き慣れないカード名に戸惑ったのだろうか。
「俺は手札から『調和の宝札』で『伝説の白石』を墓地に捨ててカードを二枚ドロー！『伝説の白石』の効果で『青眼の白龍』を手札に加える！」
「なに……！」
しかし、俺もレオの使うカード一枚一枚に驚愕せざるを得なかっ

た。チューナーにブルーアイズ……どちらも元々の世界では割とありふれたカードだが、GXに於いてはあり得ないはずのカード。
「いや……そもそもここは平行世界だったか」
一瞬慌てたが、そう思い直して落ち着きを取り戻す。
「更に、俺は魔法カード『トレード・イン』発動！『青眼の白龍』を墓地に送って二枚ドロー！」
デッキ圧縮。ドラゴン族でバニラであるブルーアイズなら、蘇生は容易だろう。
ここまで見た限り、相手はドラゴンデッキ。それも、俺が元居た世界にあったカードをフルに使えると見ていい。俺もレオの知らないカードを持っているにしても、向こうもないとは断言できない。
「……厳しそうだな」
チューナーが居るということは、相手はシンクロ召喚すら使ってくるかもしれないということ。正直、シンクロ召喚についての対策ができているデッキではないので、使われると厳しいかもしれない。
「……よし。俺は手札から魔法カード『融合』を発動！　手札の『神竜　ラグナロク』と『ロード・オブ・ドラゴン―ドラゴンの支配者―』を融合し、『竜魔人　キングドラグーン』を融合召喚するぜ！」
「……いきなりか」
思わず舌打ちをしたくなる。『竜魔人　キングドラグーン』。ドラゴン族の召喚&魔法・罠耐性に関するサポート効果を持った優良カード。このモンスターがいるだけで魔法・罠の対象にならないドラゴン族が次々現れるのだからシャレにならない。
「更にキングドラグーンの効果で『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を攻撃表示で特殊召喚！」
「げ……」
思わず呻いてしまう。が、それも仕方ないことだろう。キングドラグーンに続き、ダークネスメタル。ドラゴン族召喚サポートの二強とも言える二体が一ターンで召喚されたのだから。しかも……。

「レオの墓地には……」
「その通り！　俺は『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』の効果で、墓地の『青眼の白龍』を攻撃表示で特殊召喚する！」
「あらら……」
「更に、俺はこのターンまだ通常召喚を行っていない！　俺は手札から『ミラージュ・ドラゴン』を攻撃表示で召喚！　バトル！」
おいおい……俺は思わず苦笑してしまう。ここまで流れるように召喚されては色々成す術がない。しかも、バトルフェイズ中の罠の使用まで制限されてしまった。
「……が、ここで情報アドバンテージの差が出たな」
思わず、口角を釣り上げる。
「まずは『青眼の白龍』で『切り札の騎士―クィーン』に攻撃！『滅びの疾風爆裂弾』！」
そう来るよな。普通は。『ミラージュ・ドラゴン』は確かにトラップを封じるが、速攻魔法までは封じられない。『突進』で迎撃される可能性を考えたら先に攻撃力の高いモンスターに攻撃させたい。しかも、なるべく倒されたとしても害の少ないモンスターで。
「……それが、仇となる！『アルカナソード　ハート』の効果発動！このカードの装備モンスターは攻撃力が５００下がる代わりに戦闘ダメージを受けず、戦闘では破壊されない！」
「何！？」
「更に、その際に発生するハズの戦闘ダメージ分ライフを回復する」
「くっ……厄介な装備魔法を……」
セツＬＰ６０００
「決まったと思ったんだけどなぁ……俺はターンを終了するぜ」
「そんな簡単に決着付いたら面白くないからな。俺のターン、ドロー！」
とはいえ、流石に焦った。まさかあんなめちゃくちゃな速攻かけてくるとは思いもよらなかった。思わず先攻を取ったことを後悔しそうになった。

「俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ」
布石は整った。後は、向こうが狙い通りのカードを使ってくるかどうか……。
「俺のターン、ドロー！　俺は手札から『スタンピング・クラッシュ』を発動！『アルカナソード　ハート』を破壊する！」
「来たな。俺はこの瞬間、カウンタートラップを発動！『アヌビスの裁き』！」
「！　カウンター！？」
「フィールドの魔法・罠を破壊する効果を持つ魔法カードの発動と効果を無効にし、破壊する！　俺はコストとして、手札から『冥幼竜ヴァーミリオン』を墓地に捨てる」
『きゅー！』
「あ、さっきのチビ竜！」
「俺の相棒。その一体だ。過保護な王様から預かっててな」
「へぇ。レッドアイズと話が合いそうだな」
「かもしれないな。……処理を続けるぞ。『アヌビスの裁き』は、カウンター処理後、相手フィールド上の表側表示モンスター一体を破壊し、その攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！」
「けど、『竜魔人　キングドラグーン』の効果で、こちらのドラゴン族は効果の対象にならないぜ！」
「悪いな。『アヌビスの裁き』の破壊効果は、そのテキストに反して“対象を取らない”んだよ」
「あれ！？　そうだったっけ！？」
めちゃくちゃ勘違いしやすいんだけどな。
「俺が破壊するのは『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』！」
「くっ！？」
レオＬＰ１２００
まずは先制だ。ドラゴンを調子づかせると止まらないからな。トコトン出鼻を挫かせて貰うぞ！

「くっ……なら俺は『竜魔人　キングドラグーン』の効果で手札から『タイラント・ドラゴン』を攻撃表示で特殊召喚！　カードを一枚セットしてターンエンドだ」
「俺のターン、ドロー！　スタンバイフェイズに墓地の『冥幼竜ヴァーミリオン』の効果発動！　カウンタートラップのコストとしてこのカードが墓地に送られている場合、手札に戻す！」
『きゅー！』
「俺は『切り札の騎士―キング』を攻撃表示で召喚！　その効果により、デッキから『切り札の騎士―ジャック』を攻撃表示で特殊召喚する！」
「うわ、まんま絵札の三銃士……リメイク？　ってことは……」
「手札から魔法カード『融合』を発動！　切り札の騎士三体を融合し、来い！『アルカナ　ナイトジョーカー』！」
「来たな……攻撃力３８００……！」
「バトル！『アルカナ　ナイトジョーカー』で『竜魔人　キングドラグーン』を攻撃！『ロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」
「速攻魔法『突進』！『竜魔人　キングドラグーン』の攻撃力を７００ポイントアップ！」
「それでも、アルカナには勝てない！」
「くっ！」
アルカナの剣が、キングドラグーンを両断する。しかし、その一瞬前にキングドラグーンが懐に飛び込んできたために多少剣筋がブレ、威力を軽減された。
レオＬＰ５００
「くそ……」
レオのライフを削りきれなかった。出来ればこのターン内に決着をつけたかったんだが……狙うのはキングドラグーンじゃなくて『ミラージュ・ドラゴン』にしておくべきだったな。ミスだ。
「俺はメインフェイズ２に魔法カード『地砕き』を発動する！　破壊されるのは守備力が最も高い『青眼の白龍』！」

巨大な手が、ブルーアイズごと大地を砕く。
「俺はターンを終了する」
俺の手札はミリーのみ。……なんとなく、嫌な予感がするな。レオは手札ゼロ枚。普通に考えたらこれで逆転なんて……とは思うんだが……。
「やるな……俺のターン、ドロー！」
ドローしたカードを見た瞬間、レオの目が輝いた。……来るか！？
「俺は魔法カード『竜の鏡』を発動するぜ！　墓地の『伝説の白石』『青眼の白龍』『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』『神竜　ラグナロク』『竜魔人キングドラグーン』の五体をゲームから除外し、エクストラデッキから『Ｆ・Ｇ・Ｄ』を融合召喚する！」
「げっ……」
まず……！
「行け！『Ｆ・Ｇ・Ｄ』で『アルカナ　ナイトジョーカー』を攻撃！『ファイブ・ゴッド・ブレイズ』！」
「ぐおっ……！」
アルカナが、五つの竜頭から吐き出された炎に巻かれ、倒れる。
セツＬＰ４８００
「たたみかける！『タイラント・ドラゴン』でプレイヤーにダイレクトアタック！」
「ぐああっ！？」
セツＬＰ１９００
「いっけー！『ミラージュ・ドラゴン』でダイレクトアタック！」
「ぐ、ぅ……」
セツＬＰ３００
「俺はターンエンドだ！」
くそ……これは、マズイな……。
「俺のターン、ドロー！　俺は手札から永続魔法『命削りの宝札』を発動！　デッキからカードを四枚ドローする！」
「うは、反則っぽいなーそれ」

まったくだ。手札がゼロなら一方的に四枚のアドバンテージとか……。

「だが、おかげで望みが繋がる！　俺はリバースカード『リビングデッドの呼び声』を発動！　墓地の『切り札の騎士―ジャック』を攻撃表示で特殊召喚！　『ミラージュ・ドラゴン』に攻撃！」

「うわっ！？」

レオＬＰ２００

「カードを二枚セット。ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！　手札増強カード、俺も使わせてもらうぜ！『壺の中の魔術書』！　お互いのプレイヤーはデッキから三枚カードをドローする！」

「俺も三枚ドロー！」

「……そろそろ終わりにしようぜ！　俺は手札から装備魔法『Ｄ・Ｄ・Ｒ』を発動！　手札の『青眼の白龍』を墓地に捨て、除外されている『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を特殊召喚！」

再び現れる漆黒の鋼鉄竜。この流れは……！

「行くぜ！『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』の効果で墓地から……」

断ち切れる！

「ちょっと待った！　そのモンスター効果にチェーン発動！『天罰』！　手札の『冥幼竜ヴァーミリオン』を墓地に捨て、その効果を無効にして破壊する！」

「ぐっ！？」

「更に、モンスター効果をパーミッションしたことにより、手札から『冥王竜ヴァンダルギオン』を特殊召喚！　第三の効果を起動する！」

「なっ……」

「モンスター効果をパーミッションした時、ヴァンダルギオンは冥界からモンスターを一体呼び戻す！　再臨しろ！『アルカナ　ナイトジョーカー』！」

ヴァンダルギオンの咆哮に導かれ、俺の最強剣士が蘇る！
「くっ……バトルだ！『Ｆ・Ｇ・Ｄ』で『アルカナ　ナイトジョーカー』を攻撃！」
「切り札の騎士は、二度同じ相手に負けはしない！　手札から『オネスト』の効果を発動する！　迎え討て！『アルカナ　ナイトジョーカー』！」
「しまっ……」
アルカナが、五頭の竜を斬り捨てる。これで……。
「勝ちだ！」
「ぐあああっ！？」
レオＬＰ０

「いやー負けた負けた。強いな、異世界人」
「いや、正直ギリギリだった。最後の『壺の中の魔術書』がなければ、俺は『オネスト』引けなかったしな」
「……あれ、俺もしかして余計なことしたか？」
「いや、まあ一応『攻撃の無力化』は伏せていたから、あそこで負けはしなかったと思うけど……微妙だな」
「用意周到じゃないか。くっそー手札自体は良かったんだけどなー」
「まあ……ドラゴン族に対しては『アヌビスの裁き』が結構メタだし、アルカナソードの情報アドバンテージもあったから。あそこで攻撃してなきゃ俺のライフは『Ｆ・Ｇ・Ｄ』出されたターンでなくなってた」
実際、汎用の『サイクロン』や『大嵐』のみならず、ドラゴンに限れば『スタンピング・クラッシュ』『巨竜の羽ばたき』といった除去カードに対しても『アヌビスの裁き』は使える上、基本攻撃力の高いドラゴン族に対してあのバーン効果は相性抜群なのだ。
「お……？」

俺の身体がスゥ、と徐々に透け始める。どうやら、歪が消えたらしい。
「……お別れ、か」
「……みたいだ。ありがとな。デュエルに付き合って貰って」
「気にすんな。俺も楽しかった……けど、勝ち逃げは許さないからな。また、いつか再戦しようぜ！」
「ああ、もちろん」
……けど、なんていうかこう……借りを返したって言いたくなるのはなんでだろうな？
少し不思議な感覚を覚えながら、俺はレオに別れを告げて、元の世界に帰還するのだった。

「よっ、と……」
「おかえり」
帰還した俺を待っていたのは希望。しかも思いっきり寛いでる。
「……こら。人の部屋で勝手に寛ぐな」
「いいじゃないか。それより、無事任務達成おめでとう。それも、勝利してきたみたいで何よりだ。どうだった？　他の世界は」
「……良かったよ。ちなみに希望」
「うん？」
「あの世界にまた行く方法って……何かあるか？」
「おや、大分気に入ったらしいね」
「またやろうって約束してきたからな」
「なるほど。心配しなくても、キミの力さえあればまた行けるさ」
「あれ？　そうなのか？」
「ああ。ただし、今は遠慮してくれ。その力も、世界のバランスに影響を与えるから。行くとしたら、終焉を倒し、バランスを整えた後、だね」

「そっか。なら、尚更とっとと終焉を倒さないとな」
「ああ。頑張ってくれ。その暁には、君たち全員で異世界旅行でも何でもすればいいさ」
「ああ。そうさせてもらうよ」
軽口を叩きながら、俺は改めて終焉打倒に意欲を高めるのだった。

特別編「アルカナ?クロスワールドX?」（後書き）

結果はセツの勝ち。いや、人のオリキャラホント、負けさせるとかコラボ主催者としてどうなんだ。……言い訳としては、セツの語った「アヌビスの裁き」。これほんと、ドラゴンに効きすぎて。あの場面でヴァンダルギオン出したら終わり、くらいのレベルで。後、カイナさんとこの遊戯王Xでセツモドキ（笑）が痛い目に遭わされたので仕返しの意味も込めて（ぁ

ま、まあともかく、カイナさんとのコラボ、もう一つエルフィの奴もあるんですが、これは申し訳ありませんが後回しということで。や、やるつもりではあるんですけど、他の方とのコラボもやっちゃいたいので。

そして、本日六月十二日の零時をもちまして、投票が締め切りとなります。まあ今更投票する人がいるかはわかりませんが、とりあえず、もしまだ投票していない方で投票したいと言う方がいれば、本日以内なら投票可能ですので、感想若しくは悠へのメッセージにでもどうぞ。

それでは、悠でした！

※修正しました。

特別編「第一回アルカナ人気投票結果発表！」（前書き）

こんにちは！
アルカナ人気投票、ご協力ありがとうございました！
それでは早速結果発表をどうぞ！

特別編「第一回アルカナ人気投票結果発表！」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「第一回アルカナ人気投票結果発表！」

というわけで、一週間かけて行われた人気投票の結果発表～！！
「どんどんぱふぱふ～……」
おや、どうしたねライム。随分とまあテンションの低いことで。
「それを本気で聞いているのなら、とりあえずここで一発かましておくよ！」
待て、プリーズウェイト。話し合おう。暴力は何も生まないアンダスタン？
「ジンギスカン」
ちょっと語感は似てる！　ってそうじゃなくて！　やめて！？
キミの雷撃とか喰らったらそれこそジンギスカンのごとく黒焦げに……。
「……うぅ、もういいや。なんかここで作者痛めつけても気は晴れないよ……」
ほ、ホントにテンション低いな……らしくない。
「そりゃ、一ポイントも入ってないモブキャラレベルの人気じゃテンションも落ちるよ……はぁ」
ま、まあまあ。同じゼロ票でここにすら呼ばれていない駄女神さんとかに比べれば、まだ優遇して――天罰てきめん！！――ギャアアアッス！？　何処からか天罰！？

「ぅよしっ！　いつまでも落ち込んでても仕方ないよね！　せめて持ち味である明るさだけは維持して行こーぅ！」

お、おお……その意気だ……（プスプスと黒焦げになりつつ）おかしいなぁ、こういう役って秋代さんとかその辺りの作者さんの役回りじゃないのかなぁ……？

「はいは～い。他の作者さんの事はいいから、早速人気投票の結果を発表して行くよ～！！」

はい。ではまず、尺の都合上、一票も入らなかった方々は省略させていただきますね。

「……省略された。こうなったら一番最初に名前を呼ばれる栄誉くらいは手に入れたかったのに」

……な、なんかまたライムが落ち込んでいますが、とにかく！　ポイントを獲得したキャラクターは全部で十四人！　ということで、第十四位から行ってみましょうか！

「多いよねーしかも全部オリキャラか半オリキャラ。どれだけ作ってるのかって話だよ」

……確かに。まあ、主要キャラだけでも六人いますしね。

「よーしそれじゃあ行ってみよー！」

あ、その前に、作者票にの行方について公開しておきましょうか。

「うにゃ。確かに、それでランキングに差が現れるかもしれないしね」

では、僕の中でのランキング上位三人をご紹介しましょう。

・一位　ルイン
・二位　エース
・三位　カイエン

でしたー。

「うにゃ……なんか割とヘンなところ来たにゃ～あんまりランキングに変動来なさそう……」

まあ作者とはいえ所詮一投票者ですからねー。まあ、ともかく、この作者票を含めて結果発表行ってみましょう！

○第十四位　作者　得票数1ポイント

……

「……」

……え、えと……ふふん♪（得意げに）

「うぅ八つ当たりサンダー！！」

あばばばばばばばばばっ！？

「何故！？　ホワイ！？　何で作者に一ポイントとはいえ入ってて、ボクには入ってないの！？　っていうか一番最初に名前を呼ばれる栄誉まで持ってかれた！」

ぼ、僕としても予想外ですよ！　まさかポイント頂けるとは微塵も思ってませんでしたから！

「じゃあ渡せー！　その他の恵まれないキャラにその一票渡せー！！」

ちなみに、渡した場合この一票はネイキッドに行くらしいですよ？

「うにゃ！？……やっぱりアルカナに於いて唯一全裸を晒したサービスシーンが……」

いやいやいや！　あれは間違いなく投票理由には入って来ないから！　っていうか、とっとと次に行きましょう！

○第十二位　剣士&カイエン2ポイント

第十二位は……また異色な組み合わせですね。全く絡んでない。
「別にペア投票でも何でもないしにゃ～」
まあそうなんですけど。剣士はアルカナで初めて出した他人のオリキャラということで、他のオリキャラに比べれば出番も多いですね。
「というか、他の皆はまだ出てきたばっかりだよ。不利にもほどがあるよ」
確かに。とはいえ、どの時期に始めたとしても割を食うキャラは出てきますからね。そこら辺は運が悪かったとして諦めてもらうしか。
「……ところで、最初期の方に出てきた割に、ボクの出番は絶望的に少なくないかにゃ？」
……頑張れ！
「作者が頑張ってくれないと出れないんだよ～！！」
次ー！

○第十一位　ヴァーミリオン3ポイント

ということで、第十二位はアルカナのマスコットことヴァーミリオンのミリーちゃんでした～！
「別にマスコットと言える活躍はしてないよーな……」
細かいことを気にしちゃいけません。現にこうして人気は出ているのですから。
「う……何故マスコットに票が入ってアルカナのアイドル（自称）ことライムに票が全く入ってないの……って（自称）ってなんだよ

ー！」

いや、あれしきの出番でアイドルはないわ。

「出番を作らない原因が言うにゃー！！」

では続いて第十位！　ここからは個人の応援では取れない点数になって来ます！

○第十位　エース４ポイント

というわけで、作者の個人的な支援も含めて４ポイント獲得のエースがベストテンの先陣を切りました！

「割とコメディ色も強いアルカナで、ただ一人シリアス路線貫いてる子だね」

出番は殆どない割に、印象に残る出番だけ持って行ってますからねー。

「ボクだって印象には……」

“今ライムはどうしてるー？”みたいな印象ならあるみたいですよ？

「そうならないように努力して欲しいにゃ！」

さて、そろそろ票数が多めになって参りました。続いての第九位は……

○第九位　希冴姫５ポイント

ヒロイン勢一人目、希冴姫が早くもやって参りました！
「納得いきませんわ！」
おや、呼んでもいないのにご本人登場です。よほど腹に据えかねることが何かあったのでしょうか？
「不思議だねぇ～」
「まったくどこもおかしくありませんでしょう！？　むしろここでわたくしが『まあ妥当な順位ですわね』とか言い出したらそっちの方が問題でしょう！？」
「でも妥当な順位だよね～」
「貴女のゼロ票よりは妥当じゃないことだけは確かですわ！」
「ボクはさっきからそこに何度も意義を申し立ててるけど、通ったためしがないよ～」
「これでもわたくし、第二話から登場の古参ですのよ！？　セツ様のパートナー！」
でも、主要ヒロイン五人の中で一番恋愛イベントが少ない希冴姫さんでしたー。
「ちょ！？　屈辱的かつ殺意の沸く流し方しないでくれません！？」

○第六位　ユーキ&ジャック&ゴーズ6ポイント

一気に飛んで第六位！　ヒロイン勢二人目の沈黙の闇狩人ことユーキちゃんを筆頭に、苦労人執事騎士ことジャックとワイルドな兄貴分、冥府の使者ゴーズの三人がランクインしたしましたー！
「みんな～ありがとね～」
「ははは……正直、希冴姫に申し訳ありませんが……ありがとうご

ざいます」
「はン。なンだこれ？　表彰？　メンドクセエから帰っていいか？」
帰らないでください。最終日まで3票だったのにいきなり追い上げてここまでのし上がってきたある意味六位メンバーの主役ですから。
「……くだらねェ。……が、まァカイエンのアホに負けるよかマシか。サンキュ」
ジャックは最後の最後で希冴姫を抜き去りました。それについて何かご感想を。
「いえ、その……とてつもなく答えにくい質問ですね。控室から希冴姫が射殺さんばかりに殺気を叩きつけてきているので勘弁してくれませんか？」
「ユーキちゃんさんとは登場時期被ってるのに、何このボクとの扱いの差は……」
裏話～実はユーキちゃんは急遽参入が決定した……というか作者も知らない内にヒロインの座に収まっていたシンデレラ的ヒロインです。
「さすが……サイレント……」
「うぅ……その二つ名、もう最近じゃ会う人皆に言われるようになっちゃったよ～」
いえ、実際美味しいとこ取りのエキスパートですから。
「そんなつもりはないんだけど～」
さ、次に行ってみましょうか。ベスト5！

○第五位　サイクロイド8ポイント

……おや？

「目の錯覚……じゃ、ないよね？」

おかしいですね。一体何をどう間違ったら人気投票でサイクロイドがベスト５に来るような異常事態になるのでしょうか……。

「納得できませんわ！」

うわ！？　何故か希冴姫さん登場！？

「最終日２１時３５分を回るまではわたくしと同率であったはず……それが……それが！」

三人ゴボウ抜きでベストファイブ入って来ましたからねー。では、ご本人登場！

「いよう！　良い子の皆！　サイクロイドお兄さんのご降臨だよ！」

「……この登場シーンがまた腹立ちますわ……」

「というかヒロインを二人抑えてのベストファイブ入りとか……」

古今東西あり得なかった珍事でしょうね。ウチのサイクロイド。

「やあやあ。どうもどうも！」

しかも何やら声援に応えてますよあの二輪。今までのキャラの中で一番楽しげにしてますよあの二輪。

「……スクラップ処分が妥当かと思われますわ」

「おいおい姫さん止してくれよ。そんなことしたら、全６０億のおれっちのファンが黙っちゃいねぇぜ？」

「いくらなんでもいませんわよそんなに！」

「応援してくれたおれっちファンの皆！　ありがとぅ！　いつか語られるおれっちの、国家転覆物語～サイバーライダーチュチュ～で、また会おう！」

って意味わからない予告しないでくれません！？　書くの僕なんですからね！？

「つ、続いては第４位～！　この圧倒的存在感を誇るサイクロイドを打ち負かした猛者たちが出てくるよ～！」

「……そもそもサイクロイドを打ち負かせなかったわたくしたちは……」

……第四位！

○第四位　ルイン１１ポイント

というわけで、初の十ポイント台突入は我らがルイン様～！！
はい拍手～！　左舷！　拍手薄いよ何やってんの！？
「……テンション高いね～引くわ～」
そりゃ僕が一位票上げたの彼女ですもん！　ご本人登場！
「……」
あ、あら？　案外テンション低い……？
「あと……一人……」
「あーあと一人抜けばご褒美短編だったんだよね～おしかったね～」
い、いやほら！　それでも四位ですし！　あと、僕の中では一位です！
「一位じゃご褒美なし。あと、作者的に一番でも特に嬉しくはない」
酷い！
「本編で優遇するべき」
してますよ！　めっちゃ優遇してますから！　間違いなくヒロイン勢の中で最も優遇してますから！　出番と質、両方ともトップクラスですから！
「けど四位」
う……そこはほら、流石にメインヒロインとかには……。
「何故私はメインヒロインじゃないの？」
いやその……ぶっちゃけルイン様も追加ヒロイン枠ですし……ツンデレヤンデレがいるならクーデレも……みたいな。
「すごい数合わせ臭に全私が泣いた」

で、でも予想以上にイイ感じのキャラになったので僕は満足しています！

「……作者票なかったらサイクロイドと同率だったと言う驚愕の事実。凹む……」

そ、それでは、遂に残すはあと三人！　ベスト３の発表です！　しかも、次の第三位にはご褒美短編の座もかかっております！　さあ！　その栄えある第三位は……

○第三位　セツ１４ポイント

ここで来ました我らが主人公！　俺の無駄スキルは１０８式まであるぜ！　御堂切～！！

「……なんだその紹介は」

いきなりツッコミから入るとは、やりますね流石主人公。

「意味わからんヨイショはいいから」

「ここは結構妥当なところだったりするのかな？」

……ええまあ、良く考えるとそうかもしれません。上二人はやっぱりメインもメインですし……となるとやっぱりこの位置には主人公が来て然りだったのかも。

「けど……ユーキちゃんや希冴姫は残念だったな……まさかヤツがここまで上に来るとは……」

天敵ですからねー。良かったですね。サイクロイドとのカップリング短編にならなくて。

「それは……もしそうなったら俺は、死ぬかもしれん……」

「廃人くらいにはなりそうだね……丸々一話あの調子でやられると」
作者的にはあのテンションだと書いてて結構楽しいんですけどね。
「やめてくれ。俺には耐えられそうにない」
ともかく、三位おめでとうございます主人公。
「ああ。応援してくれた皆。ありがとうな。きっと、本編ではハッピーエンドを迎えて見せるから……また、これからも応援してくれ」
ソツのないお礼メッセージ、ありがとうございました！
「さあ！　ここからついにラスト二人！　票数もきりりんを突き放した“あの”二人！」
果たしてどちらがアルカナの頂点に立つのか……活目して見よ！

○第二位　アテナ１８ポイント
○第一位　さだめ２２ポイント

決っっっっっ着！！　第一回アルカナ人気投票、その頂点に君臨したのは！
「第一期第十話登場からいきなりアルカナの空気を掌握し、第二期以降はコメディの主役ともなった……」
御堂さだめさんです！
「いよっしゃ勝ったぁぁぁぁぁぁ！！」
いきなり喜びの雄たけびを上げてくれました、さだめさんです！
「世論は我に味方した！　これはもう、お兄ちゃんとの禁断の一線越えを推奨していることと同義！」
いや同義じゃないから！　自重して！
「さだめは今、自重を知らぬ戦士！　いざ新床！」
「そのセリフからして自重してない！」

あ、あーところで……。

「ｏｒｚ」

仮にも二位を取ったのにこの世の終わりとばかりに落ち込んでいる娘が一人いるんですけど……。

「問・題・外！　人気も出番もさだめに負けた負け犬は黙ってこのままフェードアウトするがいい！」

ド外道！

「……そうです！」

うおっ！？

「出番さえ……出番さえあれば……今この時期、新規キャラと同じくらいバッドタイミングで催されたこの人気投票。私は今、レギュラーから外れています……レギュラー復帰すれば……」

「見苦しい敗戦の言い訳はそれだけぇ？」

「うぐっ！」

……なんというさだめの見下し精神。これで一位なんだから世の中はわからない。

「というか、読者に媚売るだの売らないだの言ってた子が一位で健気にきりりんを想い続けてた子が二位……この世の不条理を体現してるにゃ～」

……今、あの二人は正に明暗分かたれてますね。闇属性悪魔使いのさだめが明で、光属性天使使いのアテナが暗ですけど。

「結構、面白い対比だね」

さだめは投票開始時から延々ぶっちぎり。最後多少失速してアテナが最後にすごく追い上げましたが、僅かに届かず、最終的にはさらに引き離される結果に終わりました。

「く、くくくくく……あーっはっはっはっはっはっはっはっ！　これではっきりしたねアテナ！このアルカナの……お兄ちゃんの人生にお

ける真のヒロイン！　それはさだめ！　さだめなのだよ！」
「ぐ、ぅぅ……なにが、一体なにがいけなかったと……」
「無様だよねぇ……始まる前はあんなに自分が一位前提で話していたのに……終わってみればこの結果！　無様無様！　アハハハハハハ！」

……なんか、調子乗り過ぎた挙句少しダーク化している気がしないでもありませんさだめ。Sモード全開です。
「やれやれ。そろそろ止めてくるか」
「……そうした方が良さそうですわね」
「彼女は調子に乗り始めると際限なし」
「けど……すごく、嬉しそうだけどね。さだめちゃん」
「ああ。滅多にないほど超ご機嫌だな。それだけに、下手に触れたくないが」
と言いつつ、しっかりさだめとアテナの方に向かうセツ君。何だかんだで、いいお兄ちゃんしてます。

「あっ！　お兄ちゃん！　さだめ、勝ったよ！　これで心置きなくさだめルートに入れるよお兄ちゃん！」
「俺が心置きなくさだめルートに入るときは、他の選択肢がマキュラルートのみの場合くらいしかないと思うがな」
「そこまで優先順位低いの！？」
「せ、セツ～……私、負けちゃいました……しかも、一度もさだめさんを抜けませんでした……」
「ああほら、泣くな泣くな。自分で言ってただろ？　時期が悪かったんだって。アテナ最近出れてないんだし、ある程度は仕方ないっ

て」
「む～お兄ちゃんアテナの味方なの？」
「いやだから、さっきのお前は調子に乗り過ぎ。最近のアテナの出番補正を入れれば、大体同じくらいだよお前らは」

……すっごいいいとこ取りな仲裁。流石、さだめと十年以上付き合ってきただけはあります。場を収めることに関しては天才。
「ところで、みなさん気になっていることを聞いてもよろしいですの？」
はい？　なんでしょう。
「……ご褒美短編」
「三位はセツくんだったけど……その場合どうするの～？」
そりゃあもちろん、セツの短編ですよ。
「……俺の、って……」
セツ単独短編。
『ちょっと待て』
おおう。全員から総ツッコミ来たわぁ～。
「ちょ、それギャルゲーでいったらバッドエンドじゃん！　さだめが一位になったんだからさだめとのカップリングで書いてよ！」
「それを言うなら、私は最近出番がないんですから、埋め合わせとして私を……」
「……ヒロイン内順位は私が三位。私を出すべき」
「ヒロインの人気を平均化するためにも、わたくしにチャンスを……」
「え、えっと、わたしも～……」
みなさん必死ですね（笑）
『笑うな！』
すいません（土下座）。じゃあ……こうしましょう。セツを中心

に、ヒロインオールキャスト。全員でドタバタ。
「ちょっと待て！」
おや、セツ君なにか問題でも？
「俺の御褒美短編なのに、俺が一番苦労しそうな匂いがぷんぷんする！」
がんばれ主人公！
「せめて否定しろよ！」
ネタはこれから考えます。セツが中心な時点で普段のコメディ本編とあんまり変わらないような気もしますが、とりあえずそんな感じで考えます！
「ったく……まあいい。とにかく、人気投票に協力してくれてありがとう。こっちとしても、色々と参考になった」
『ありがとうございました！』
１００万アクセス記念の特別編は、コラボや外伝も含めて色々残っているので、その辺りもよろしくお願いします！
それでは、今回はこれにて失礼します！

特別編「第一回アルカナ人気投票結果発表！」（後書き）

ということで、優勝はさだめ。ご褒美短編はセツという御堂兄妹オンステージの結果に終わりました！

しかし、ホントにサイクロイド強かったなぁ……かつてここまでサイクロイドプッシュの遊戯王は……あるはずがない。

ちなみに、投票者数で言うとさだめが十人、アテナが九人、セツ六人のルイン五人。サイクロイドが四人と、なんだかんだでポイントと同じような順になります。サイクロイド……。

それでは、悠でした！

第三期第十二話「何度も、何度でも、ありがとう」（前書き）

ホント、どうしたんでしょう。こんな時間になってもまだ連投は続きます。完全に昼夜逆転しているらしい悠です。

第三期第十二話「何度も、何度でも、ありがとう」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第十二話「何度も、何度でも、ありがとう」

その日、アカデミアには二重の意味で衝撃が走っていた。
『迎え討て！　シャイニング・フェニックス・ガイ！』
『ぐあぁっ……ぐぅ……』
カイザー亮さんの『サイバー・エンド・ドラゴン』が、エド・フェニックス操る『E・HEROシャイニング・フェニックス・ガイ』に迎撃され、亮さんのライフが、0になった。
「お兄さんが……負けた……」
『ぐ、うぅ……俺は、自分に……』
『いいや、戦う前からお前の運命は決していた』
カイザー亮の敗北。そして、もう一つの衝撃。
『彼は確かに強い。だが、僕が勝つのは、運命でした』
『今回、秘蔵のHEROデッキを使いましたが、何故、このタイミングで？』
『僕が入学したデュエルアカデミアに、僕と同じ、HEROデッキを使うデュエリストがいるんです』
「ええ！？」
「それって、アニキのことドン？」
『元々HEROデッキは、僕の方が早く作っていたんですが、このデュエリストが、マニアの間で有名になってしまった。先日そのデ

ュエリストがカイザーと引き分けたという話を聞きました。ならば僕がカイザーに勝てば、僕の方が強いと言うことになる。だからこの機に、デッキを披露したんです』

「この男、カイザーを山車に使ったというのか……」

『でも、ファンの中には、それでは不十分だと言う人もいるでしょう。だから僕はこの場を借りて、同じＨＥＲＯデッキを使うデュエリスト、遊城十代に挑戦することを、宣言したい！』

もう一つの衝撃。それは、プロデュエリスト、エド・フェニックスの遊城十代への挑戦である。

『遊城十代。明日僕は学園に行く。その時、本当の決着をつけよう。どちらが、ＨＥＲＯを使うに相応しいのかを』

そして、インタビューは終了した。教室は未だ二つの衝撃に揺れている。そんな中、俺は益々エド・フェニックスに不審感を強くしていた。

「戦う前から運命は決していた……勝つのは運命だった……？」

「……お兄ちゃん？」

「おいセツ。どうしやがったんだコイツ……？」

「あー……お兄ちゃん、運命とか、そういう言葉で片付けちゃうの、何より嫌ってるから……」

「そうなのか？」

「そう。酷い話だと思わない？　さだめ、名前からしてお兄ちゃんに嫌われてるんだから」

「……さだめ。俺は別に、言葉自体を嫌っているわけじゃない。ましてや、さだめを嫌っている、なんてことは万が一にもありえない。自虐するな」

「はぁ～い。ごめんねお兄ちゃん」

「……俺は、むしろ運命とか、さだめって言葉を知っているから……だから、ああも軽々しく使う奴に、好感が持てないだけだ」

特に、カイザーとのデュエルを運命の一言で終わらせてしまったのが、何より気に入らない。山車に使ったとか、そんなことよりも、

だ。
「……十代」
「セツ？」
「これは、俺の個人的な頼みなんだが……」
「おう！　セツから頼みなんて珍しいな。なんだ？」
「……奴に、勝ってくれ」
「え？」
「……いや、なんでもない。忘れてくれ。ちょっと、頭を冷やしてくることにする」
何を自分勝手なお願いをしてるんだ。それで、十代が気負ってしまったりしたらどうする。俺は頭を振って、皆に背を向けた。
「あ、おいセツ！」
十代たちの制止も聞かず、俺は教室を後にした。

「待て。エド・フェニックス」
インタビューを終え、帰路につこうとしていたエドに、凛とした声がかかる。
「おや、どうしましたカイザー亮。僕に連勝を留められたからって恨み事ですか？」
「そんなことではない。勝負は時の運。今までは調子よく勝てていたが、負けることもあるだろう。特に、今回は俺の未熟さがはっきりとわかった。恨み事など、言う筈もない。それとは別件だ」
エドが思っていた以上に冷静なカイザーの態度に、逆に違和感を持った。
「……では、なんですか？」
「……遊城十代に、挑戦状を送りつけたらしいな」
「ええ、テレビ越しですけどね。それが何か？」
「……俺は、アカデミアに居た時、十代とは別の、ある兄妹に負か

されている」
「それが何か？　僕に態々未熟を強調する必要なんて……」
「大したことじゃない。どうもお前は、自分の力を過信する傾向にあるようだったからな。余裕ぶっていれば、足下をすくわれることもある、ということを忠告しに来た」
「……僕が、過信……？　ッハ！　何を言い出すかと思えば、結局は恨み事じゃないですか。僕に油断などあり得ない。遊城十代にも、その兄妹とやらにも、負けなどしませんよ。それが運命ですから」
「……そうか。なら、いい。最後に一つだけだ」
「まだ何か？」
「兄の方は、運命（さだめ）を打ち破る男として有名だ、とな」
それは、ラブコメ担当、などというふざけた二つ名とは別に、セツにつけられたあだ名。アカデミアで、悪夢のごとき力を振るった妹……即ち運命（さだめ）を打ち破り、アカデミアを、三幻魔による滅亡の運命からも救った男として。
「……くだらない」
エドは、むしろその言葉に、相当な嫌悪を抱いたようで、不機嫌そうにそう吐き捨て、立ち去ろうとする。そんなエドに、カイザーはもう一度だけ声をかける。
「また！　デュエルをしてくれるな。今度は、俺もまた一つ強くなって、お前に挑もう」
「……敗北の運命に、腰が引けなければね」
忌々しげに、エドは海馬ドームを立ち去るのだった。
「……俺は、まだ発展途上……か。そうだなセツ。俺はこれでまた、強くなれる」
完璧（カイザー）の名は捨て、また、一から行こう。カイザー亮……いや、丸藤亮はそう決心し、彼もまた、海馬ドームから立ち去るのだった。
勝者でありながら苦々しげな表情のエドとは違い、どこか、清々しい表情で。

俺はグラウンド脇の芝生で、爆発してしまいそうな感情と戦っていた。
「……ふう。ったく、なんだろうな。俺としたことが、全然ダメだ。感情が制御できない」
これでも、感情制御は得意だったつもりなんだが……。
「運命……か」
確か、アテナに告白された時にも言われたっけな。『運命感じちゃいました』って。
「俺は運命って奴を信じている。信じているからこそ……抗いたい」
今まで……ロクな運命じゃなかった。信じているからこそ……抗いたい」
ことではあったが……。俺だって、さだめを恐もうとしたこともある。そうすれば、楽になれるって。
「……でも、お兄ちゃんは結局、さだめのことを恐みはしなかったよね」
「さだめか……」
気付けば、後ろにさだめが追いかけてきていた。ま、コイツなら追いかけてくるだろうって予想はしていたから驚きはないが。
「ロクな運命じゃなかったよ。確かに。でも、お兄ちゃんは絶対に運命から目を背けようと……逃げようとしなかった」
「……どうかな。むしろ、全力で逃げていたのかもしれない。運命って言葉から」
「運命だからって言えば、楽になれたんじゃないの？」
「いや……俺はむしろ、運命だって認めてしまうことが怖かった。だって運命だったら、もう覆しようがないじゃないか」
幸せになれないってことを、認めたくなかった。
「それに、ぶっちゃけて言えば、もうそんなのどうだっていいんだ。だって、俺たちは今こうして、そこそこ面白可笑しく生きていられるんだから。運命だったとしても……俺たちは覆したんだ。この世

界に来てな」
「……そうだね」
さだめがトン、と俺の背中に自分の背中を預けてくる。いつもの、行き過ぎなまでの愛情表現と違って、どこか純粋に、妹が兄に甘えるように。
「お兄ちゃんは、勝っちゃった。クソったれた運命の輪に。断ち切ったんだよ。お兄ちゃんは。ルインの言ってた、終焉の花嫁でありながら。終焉の運命を」
「……そう、なのかね」
「きっと。……皆の力も借りて、精霊の力でだけど、ずっとさだめたちに纏わりついていた終焉。それにお兄ちゃんは、ずっと、少なくともさだめがおかしくなった二歳の頃から十五年以上、耐え続けた。それは、それだけは間違いなく、お兄ちゃんにしかできなかったこと。さだめとお兄ちゃんが終焉に屈さなかったのは、お兄ちゃんのおかげ」
「……そっか」
「だから、ありがとうお兄ちゃん。もう何度も、何度もお礼は言ったけど。何度でも、ありがとう」
いつになく、しっとりとしたさだめの声。
「じゃあ、俺も。ありがとう。さだめ」
「え？　なにが？　さだめ、お兄ちゃんにお礼言われることなんて……」
今日は珍しい日だ。さだめの見たことないような反応が、一々見れる。
「ん……生きていてくれたことに、かな。終焉に屈さなかったのは、俺だけじゃない。さだめ、お前も戦ってたんだよ。きっと。心の何処かで、クソったれた運命に抗って」
さだめが驚いたような気配を背中に感じる。俺は続けた。
「そりゃ、元の世界で散々、お前は酷いこともしてきたさ。でも、たった二歳の頃、そんな、自我もロクに発達していない頃から終焉

に魅入られていて、尚お前はこうして心を取り戻したんだ。お前も、すごい。強かったんだよ」

後ろのさだめは、何やら震えている。次に聞こえてきた言葉は、涙声だった。

「……もう、困るなぁお兄ちゃんはっ！　そんな、そんなこと、言われたら……そんなこと言うから……さだめ、お兄ちゃんから離れないんだよ？」

「さだめ？　お前、泣いて……」

さだめの声が、背中が震えている。その震える声のまま、さだめは言葉を紡ぎ続けた。

「お兄ちゃんは、さだめを受け入れてくれたから……だから、好き。でも、それだけじゃない。さだめを受け入れてくれるだけなら、多分、他にも居たかもしれない。周りをもっと見渡せば、他にも、そんな人が居たのかもしれない。でも、さだめには……お兄ちゃんしか見えない」

だって……と、さだめは一呼吸置いてから、俺の前に回る。

「お兄ちゃんの全てが、さだめを助けてくれるんだもの。そうだよ。このクソったれた運命の中の、唯一の救い、唯一の、最上の運命。それが……」

お兄ちゃんが、お兄ちゃんであったことなんだから。

そういって微笑む、涙に濡れたその顔を、俺は綺麗だと思った。

見惚れた、ということなのだろう。今まで、さだめを可愛いと、妹としての好意を持つことは何度もあったけど、今初めて……、さだめを、女の子として意識したかもしれなかった。だから、だろう。

「んッ……」

押しつけられた唇を、避けるという選択肢が浮かばなかったのは。

「……ねえお兄ちゃん。お願いがあるの」

「……なんだ？」

俺は、どこか熱に浮かされたような気持ちだった。不意打ちや、事故。哀しみに溢れたキスじゃなく、喜びを……歓喜を乗せた、幸

せな口づけ。そこに在った心地良さに、ただ浮かれて。
「さっき十代さんに言ってたセリフ。そのままお兄ちゃんにあげたいの」
「なんだって？」
「十代さんとアイツのデュエルが終わった後、なんとかしてお兄ちゃんもアイツとデュエルして。そして、勝って。勝って欲しいの。さだめ、わかるんだ」
アイツは、エド・フェニックスは、ただ軽く『運命』を口にしているわけじゃない。きっと、何か耐えがたいことがあって、運命という言葉に逃げているだけなのだろう。
……そんなことは、俺にだってわかっていた。
「だから、勝って。お兄ちゃん。あの人に、運命は変えられるって、運命だからって、あきらめちゃダメだって、そんな、当たり前の、でも一番大事なこと、教えてあげて」
……ああ。
「ああ、そうだな。そうしよう」
兄妹で交わす、必勝の誓い。まだ、デュエルしてくれるかどうかも決まっていないのに、傍から見れば、なんと馬鹿げた皮算用。それでも交わす、その誓い。
「守るさ」
意地でもエドをデュエルのリングに引き摺り出して、そして勝つ。そう決心して、俺はレッド寮に戻ろうと……。
「――そうか。ならば、尚のこと我の力は欲しい筈だな？」
背後からかけられたその声に、思わず目を見開いた。
「お、お前は――！？」

白く染め上げられた広間。そこで、やはり白いフードを被った人影が、手慣れた手つきでタロットカードと思しきものをシャッフル

していた。
　エドは、その男に近づく。と、男が口を開いた。
「行くのか？」
「僕はいつまでも、回り道をしていられない。僕は世界を周り、一刻も早く、奴を見つけ出す！」
「急がずとも、必ず運命の扉は開く」
「……」
「エド。“あの”カードを使うのか？」
「そのつもりです。遊城十代に、本当のＨＥＲＯの姿を教えてやる」
「同じＨＥＲＯ使いとしてのプライドが許さないというわけか……ならば私が観よう。お前のデッキに宿る、闘志と未来を」
　エドは、その男に自らのデッキを手渡す。男は、数秒の間デッキに手を当ててから、すぐにエドに返す。
「僕の運命は？」
「占うまでもなかったようだな」
「ふふ……すぐ戻ります」
　満足げにそう言い、立ち去ろうとしたエドだったが、ふと気がついたことをその男に尋ねる。
「……ああ、そういえば、アカデミアにカイザー亮を破った男がいると聞いたのですが」
「……何？」
　それまで不敵な笑みを浮かべていた男が、そこで僅かに怪訝そうな顔をする。
「カイザーはやけにその男を推していました。油断をすれば、足下をすくわれると。……まあ、どうせただの負け惜しみでしょうけどね」
「……そうか」
「ただ、どうも僕がソイツに劣っていると言いたげな態度だったので、少し気になったんですよ。それだけです」
「……待て、エド」

立ち去ろうとしたエドを、男が呼び止める。
「……その男の名は？」
「いえ、それは言っていませんでしたね。なんでも、運命を打ち破る男で通っていると。バカバカしい話ですが」
「……待っていろ。私が観よう」
しばらく、シャッ、シャッとカードを繰る。その男、セツを象徴するカード、それは……。
「『吊るされた男』……？」
「待て。まだだ」
何かを感じたらしい男が、更にカードを繰る。
「『吊るされた男』傍に、力を持つ者がいる……それが……」
「まさか！？『審判』のカード！？」
「それも、逆位置の、だ……」
「確か、『審判』の意味は……」
「そうだな……逆位置ならば、アンラッキー、嫉妬心、疑い、執念などになるか……」
「……なんだ。それなら、大した話ではないでしょう。それよりも、結果を」
「……そうだな」
まだ、疑惑の色濃い男だったが、エドに急かされ、カードを繰る。
「……」
「『戦車』……やはり、僕の勝利は揺るぎない」
「……ああ。だが、その男も『吊るされた男』の象徴……もし余裕があれば、この男も倒し、さらなる力をつけるといい」
「ええ。元よりそのつもりです。運命を打ち破るなんて傲慢な通り名、引っぺがしてやりますよ」
今度こそ、エドは立ち去り、広間には男一人が残された。
「……」
その目は、先ほどに比べ、何処か剣呑な光が宿っている。
「……『吊るされた男』の正位置……意味は、忍耐、辛抱の時、初

めは辛く、やがて報われるといった意味を持つ……」

そのタロットをしばし見つめ、男は頭を覆っていたフードを取りつつ立ち上がる。

「辛き運命に耐え、勝利を掴み取ったとでもいうのか……？　彼もまた、我が手駒にすれば……ククク」

フードの男――斎王琢磨はその瞳に穏やかならざる白き光を湛えて、一人静かに哄笑を漏らすのだった。

第三期第十二話「何度も、何度でも、ありがとう」（後書き）

というわけで、さだめ回。基本ギャグに走りがちなイメージあるさだめですが、普通に背負っている過去はシリアス一直線なので、まあこんなことも。

っていうか、ホントに有言実行しないというか、言ったことを守らない作者ですね我ながら……モンハン買えたら更新速度落ちるとかなんとか言っときながらこの連投ですよ。わけがわからん。これから信用されなくなったらどうすんだ。

それでは、悠でした！

第三期第十三話「騎士の誇り」（前書き）

……何故か、止まりません。まあ、いいんですけどね。早い分には文句も言われないでしょう。さっさと書きたいところもありますし、この調子で以前の話まで追いついてしまいたいところです。

第三期第十三話「騎士の誇り」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第十四話「騎士の誇り」

「十代。既に運命のカウントダウンは始まった。お前はもう。敗北と言う運命から逃れることはできない」
俺は、耐えていた。
「運命？　そんなもんオレは信じないね。未来は常に、自分で、切り開くもんだろ！」
十代は、エドの操る『Ｄ－ＨＥＲＯ』に苦戦していた。
「エド・フェニックス……この男とＤ－ＨＥＲＯは、本当に未来を操るというのか……！？」
「……違うさ」
「セツ？」
「違う。間違っているぞ三沢。未来を操る？　違うよ。あれは、カードの効果を正しく理解して、相手の行動を先読みする。つまり、俺たちが普段のデュエルでやっていることと同じだ。未来は、操れなんかしない」
「お兄ちゃん。落ち着いて」
「……ああ。すまん」
どうしても、堪え切れない怒り。エド・フェニックス……お前の過去に、何があったのかは知らない。だけど……。
「運命は、その瞬間になるまで決しない……！」

ギリッ、と歯を食いしばり、十代とエドのデュエルを見る。デュエルは、エドが『Ｄ－ＨＥＲＯダイヤモンドガイ』の効果で、『ミスフォーチュン』の効果発動が決定したところだった。
「マズイな……『ミスフォーチュン』の効果は、相手モンスターの攻撃力の半分をダメージとして与える効果……次のターンには、『Ｅ・ＨＥＲＯシャイニング・フレア・ウイングマン』が戻ってくる……」
俺の言葉通り、デビルガイの効果で除外されていたシャイニング・フレア・ウイングマンは、戻ってくるなり十代へのダメージを与えてまたデビルガイに除外されてしまう。
「オレはネクロイド・シャーマンの効果を発動！　お前の場のダイハードガイを生贄に捧げ、フェザーマンを召喚！」
「上手いドン！」
「これなら、ネクロイド・シャーマンの攻撃は有効！」
「この攻撃で、十代の勝ちだわ！」
「……いや、ダメだ」
「え？」
「どうして？　だってもうエドの場には……」
「時計塔の針が、既に……零時を指してしまった」
俺は時計塔を見上げる。他の皆も、釣られて見上げる。
「アレがどうしたって……」
「時計塔が出現して、五ターン。今この時点を持って、十代からの戦闘ダメージは、決してエドに届かない」
俺の言葉通りになった。
「セツ……さっきから思っていたんだが、お前は奴のＤ－ＨＥＲＯの事を知っているのか？」
「……ちょっとした事情でな」
「残念だったな。どんな攻撃を仕掛けようと、お前が敗北する運命は変えられない」
……くそ。

そして十代は、『幽獄の時計塔』から『Ｄ－ＨＥＲＯドレッドガイ』の特殊召喚を許してしまう。
「確かに、お前は良い腕をしたデュエリストだ。だが、お前は絶対に、僕には勝てない。なぜなら、僕にはあるモノが、お前にはないからだ！」
「オレにないモノ……？」
「ＨＥＲＯを、渇望する理由さ！……僕は、このＤ－ＨＥＲＯの力を使い、父さんを殺した奴に復讐する！」
「復讐？」
復讐……そうか。それが……。
「お前が、運命に縛られたきっかけか」
Ｉ＆Ｉ社のカードデザイナーだった父親を、強盗に殺された恨み。それが、今のエドを構成する要素となってしまっている。
「表の世界で裁けぬのなら、僕がＤ－ＨＥＲＯの力を使い、裏の世界で裁いて見せると！」
「けど！　折角お前の父さんが残してくれたカードを、復讐の道具に使うなんて！」
「わかったような口を利くな！　十代！　ムカつくんだよ！　お前のように、憧れだけでヒーローを使う奴が！　僕には必要なんだ！　奴に罰を与えるために、僕に力を与える本当のヒーローが！　僕のターン！　これで最後だ！　行け！　ドレッドガイ！」
ドレッドガイにより、十代のサンダー・ジャイアントが破壊され、十代のライフがゼロになった。
「フン。消えろ、雑魚が」
「あ、あぁ……」
『十代！？』
明日香たちが、十代に駆け寄る。俺は……さだめと共に、エド・フェニックスの前に立ち塞がっていた。
「……なんだ？　お前は」
「俺は、御堂切。デュエリストだ」

「同じく、御堂さだめ」
「フン。それがどうしたって……いや、待て。もしかしてお前たち、カイザーに勝ったというデュエリストか？」
「……それが？」
「丁度いい。お前も相手をしてやろう。どうせ、僕の勝利は運命に決められている」
まさか、向こうから挑戦してきてくれるとは、な……。
「……手間が省けて、結構だ」
「お兄ちゃん」
「任せろ。絶対に勝つ」
「セツ！」
「明日香。お前は十代についていてやれ。こっちは任せろ」
「……わかったわ」
エドが俺を見る目は、厳しい。だが、それは俺も同じこと。タダでさえ気に食わないのに、十代を雑魚と一蹴することなぞ、認めない。
「さあ、勝負だエド・フェニックス。運命って奴が、決して定まっていないことを、教えてやるよ」
「無駄だよ。お前も、運命に踊らされるがいい」
そんなの……
「今更だ。デュエル！」
「デュエル！」
「俺のターン、ドロー！　俺は『切り札の騎士―テンス』を守備表示で召喚！　カードを二枚セットし、ターンエンド！」
『切り札の騎士―テンス』ＤＥＦ２０００
「フン。僕のターン、ドロー！　僕は魔法カード『テラ・フォーミング』を発動する！　デッキからフィールド魔法『幽獄の時計塔』を手札に加え、発動する！」
フィールドが、さっきの十代戦と同じく時計塔に変わる。
「時計塔のエフェクトはもう知っているな？　あと、四つカウンタ

ーが乗れば、時計塔は僕を守る無敵のエフェクトを発動させる！」
「ああ、知ってるさ。無敵の時計塔を破壊すれば、幽閉され、怒りに狂ったプレデターが呼び覚まされる」
「そうだ！　お前に勝ち目はない。僕は魔法カード『デスティニー・ドロー』を発動！　手札のＤ－ＨＥＲＯと名のつくカードを墓地に送り、デッキからカードを二枚ドロー！　僕は『Ｄ－ＨＥＲＯダッシュガイ』を墓地に送る！　ドロー！」
ダッシュガイ……なるほど。墓地に居た方が都合のいいモンスターだ。
「僕は魔法カード『Ｄ－スピリッツ』を発動。手札から『Ｄ－ＨＥＲＯドゥームガイ』を攻撃表示で特殊召喚！　更に『Ｄ－ＨＥＲＯドレッドサーヴァント』を攻撃表示で召喚し、そのエフェクトを発動する！」
『Ｄ－ＨＥＲＯドゥームガイ』ＡＴＫ１０００
『Ｄ－ＨＥＲＯドレッドサーヴァント』ＡＴＫ４００
「っ！」
「その顔……知っているようだな。そう、『Ｄ－ＨＥＲＯドレッドサーヴァント』は、時計塔の針を一つ進める！」
時計塔の針が三時を示す。これで、後三つ……。
「僕はカードを二枚セットし、ターンを終了する！」
一ターン目から手札を全て使い切りやがった。よっぽどの自信って奴だな。あれは。
「俺のターン、ドロー！」
ドローしたカードを見る。そうか、早速力を貸してくれるか。
「この瞬間、『幽獄の時計塔』の針がまた一つ進む！」
カチカチと、針が六時を指すが、俺はもうそんな古びた塔に注目することはなかった。
「俺は『切り札の騎士―テンス』をリリースする」
俺がテンスをリリースしたことで、周囲から意外そうな声が漏れる。

「リリース？」
「セツのデッキに、レベル５か６のモンスターなんて、ジャックくらいしか入ってなかったと思うのだけど……」
「力を貸してくれた子がいたんだよ。お兄ちゃんに。自分のトラウマを乗り越えて」
頼むぞ……。
「俺は『切り札の騎士団長（トランプ・ナイト・リーダー）―エース』を攻撃表示でアドバンス召喚！」
『切り札の騎士団長―エース』ＡＴＫ２０００
『推して参る！』
「トランプ・ナイト・リーダー！？」
「新たなトランプ・ナイトか！？」
怪訝そうな表情のエドと、驚いているギャラリーのために、少しだけ解説をする。
「『切り札の騎士団長―エース』は、切り札の騎士と名の付くモンスターをリリースする場合、一体のリリースでアドバンス召喚することができる！」
エースのレベルは７。通常なら二体のリリースを必要とするそのアドバンス召喚は、騎士の絆に導かれ、軽減される！
以前のエースは、団長とは付かず、レベルも４。攻守も１０００だったが、トラウマを乗り越えたエースはその真の力を解放することに成功した。
俺は、この間さだめと共に必勝を誓った時のことを思い出していた。

「――そうか。ならば、尚のこと我の力は欲しい筈だな？」
「お、お前は――！？」
銀に輝くシャギー。輝く銀の胸当てと、同色の細剣。懐かしいそ

の怜悧な瞳には、以前になかった自信が溢れている。
「エース！？」
「久しぶり、とでも言えばいいか？　人間」
「エース、なんで……」
「……ふむ」
俺が尋ねると、何故かエースは困ったような顔で黙り込んだ。
「エース？」
「……実のところ、明確な“何故”は見つかっていない。そうだな。敢えて言うなら、決着がついていないから、だろうか」
「決着？」
「ケンカの決着だ」
「は？」
思いがけない言葉に、俺は絶句する。
「まあ、そんなことはどうでもいい。今貴様が、やるべきことはなんだ？　あるのだろう？　我を振るうに相応しい戦いが」
「我を振るうって……俺に、力を貸してくれるってこと、か？」
信じられない、という感情をストレートに出し過ぎたのが気に食わなかったのか、エースは少々不機嫌そうになってしまう。
「それ以外にどう聞こえる。耳も腐ったか？　クズめ」
……相変わらず、言葉は辛辣でした。
「だ、だがなんでだ？　前はあんなに……」
デュエルに対する恐怖。精霊にとっての死。トラウマ。そう言ったしがらみを抱えていたエースは、俺と来ることを拒んだ。それなのに……。
「……気がついたことがある」
「気がついた、こと？」
「そうだ。我を、我たらしめるモノ。我にとって、何よりも尊いモノ。我は、それを守るため、剣を取り、ここに来た」
「何よりも尊いモノ……」
「そうだ。貴様にもあるのだろう？　貫き通すものが。我にも、そ

れがあった。それに気がついた。ただそれだけのこと」
「……参考までに、聞いてもいいか？　その、尊いモノって奴を」
失礼かもしれないが、以前見たときとは何もかもが違うエースの顔に、聞かずには居られなかった。意外にもエースは渋ったり嫌な顔をしたりすることもなく、素直に答えてくれた。
「……プライド。騎士としての尊厳と誇り。持ち続けるべき矜持。そんなところか」
騎士として。確か、以前にもエースは騎士としての誇りを口に出していた。しかし、その時と今では、明らかに違うものがあった。
眼だ。
以前の、昏い負の色は消え、希望に満ちた、言葉通りの誇らしい光だ。
「以前の我は、恐怖から、トラウマから逃れるために、誇りや矜持を口に出し、従属を否定してきた」
エースは、隠せぬ憤りを滲ませた口調と表情で語る。
「……それが、真に騎士としての誇りや、矜持を裏切る行為とも知らずに、だ」
誇り高き騎士は、壁やコスト、生贄だのと言った使われ方を厭う。だからこそ、人間に従属しない。
「しかし、それはただの逃げだ」
恐怖から、トラウマから逃げるため、その言い訳に“誇り”や“矜持”を口に出していただけなのだ、と。
「……未だに、死は怖い。体が震えそうだ。だが……恐怖から逃げ、背を向けることだけは、もうしないと決めたのだ。己の……そう、プライドにかけて」
結局、自分が最後に縋るのはそれしかなかった、とエースは自嘲する。
「だが逃避ではなく、立ち向かう覚悟の果ての誇りとは……プライドとは、これほど清々しいものだと、その時初めて知ったよ」
だから、自分はもう逃げない。恐怖、トラウマに立ち向かい、い

つか乗り越えて見せるのだと。
「……そのために、俺のところに？」
「我が最初に、乗り越えた姿を見せるのは、以前無様を晒した貴様意外におるまい。そうしなければ、疼くのだ。我の……」
プライドが。
「……そっか」
そんなエースに、俺は笑顔を向ける。
「……お前は、強いな。弱くて、弱くて……とても、強い」
「そうだ。我は弱い。だからこそ、強くなると決めた。その意志だけは、弱いつもりはない」
一度目を閉じたエースは、一つ深呼吸して、キッ、と目を見開いた。
「御堂切！」
ビッ！　といきなり細剣を突きつけてくるエース。俺が戸惑っていると、エースは不敵な笑みで告げる。
「我は、貴様を主とは認めん！」
「な、なに？」
力を貸してくれる、と言った傍からこの否定。意味がわからず硬直する俺に、エースは更に言葉を重ねる。
「その代わり……」
ニヤリ、と笑みを更に濃くしたエース。
「その代わり、我が友となることを、認めよう。力を、貸してやる」
剣をクルリ、と反転させて、柄を俺の方に差し出してくるエース。俺はその剣を受け取り、エースに習い、ビッ！　とエースに突きつけた。
「よろしく頼む。我が友、『ガツッ！！』エー……ス……」
徐々に、言葉尻が弱くなる。思わず、手元の細剣を、上から下までじっくりと見る。
……ガツ？
恐る恐る、と言った感じでエースを見る。

眉間に、剣が、突き刺さっていた。そりゃもう、ぶっすりと。だ、だいじょうぶかな～？　し、死んでないよね～？　とか、さだめが心配するくらい、思いっきり。
「あ、あー……エース、その……大丈夫か？」
ブツッ！　と、ナニか、大事なものがキレたような気がした。
「き……」
「き……？」
「キリマンジャロ？」
「きぃ～さぁ～まぁ～！！」
「うわっ！？」
や、やっぱり怒った！？（※当たり前です）
俺の手から剣をはぎ取り、自分の眉間からズブッと抜くと、エースはその剣を構えて一目散に俺の方へ切りかかってきた！
「このっ……！　この剣が儀礼剣だったから良かったようなものの！　し、素人が思い切り剣を突き出すな戯けがぁ～！！」
「す、すまん！　今回は全面的に俺が悪かった！　男女の手足の長さの違いを考えてなかった！」
「！！？　き、貴様それは我が短腕短足とでも言いたいか！？」
「い、いや決してそんなつもりは！？　というか、儀礼剣だったとしても思いっきり突き喰らって良く無事だったな！？　随分と頑丈な頭をしていらっしゃ……」
「こ、今度はまた石頭呼ばわりするつもりか！？　ど、何処までコケにすれば……ええい！　もう許さん！　やっぱり貴様は、この場で精肉売り場に送ってやるわ！」
「精肉売り場！？」
脳裏に、『セツ右腕二の腕グラム１００円』とかいう嫌なテロップが流れた。
「あ、それさだめが買う！　全身丸ごと！」
「おまっ！？　今そんなふざけたこと言ってる場合か！？　愛しの兄が、今ここで解体ショーの見世物にされそうになってるんだぞ！

？」

「お兄ちゃん……さだめ、お兄ちゃんなら例えひき肉でもブロック肉でも骨付きカルビでも、美味しく頂く自信があるよ！」

「この上なく嫌な自信！」

……最後に、とんでもなくアホなオチがついてしまったが、ともかく、エースが力を貸してくれるようになった経緯はこんな感じだった。

「頼むぞ。エース」

『ふん。気に食わんが、貴様の事は希冴姫からも頼まれたのでな。不本意ながら、力を貸してやろう』

希冴姫、という言葉に、俺は少し顔を曇らせる。今このデッキに、三銃士は入っていない。理由は、希冴姫が体調を崩したまま、かなり辛そうにしていたからだった。

エースとのすったもんだを終え、ブチブチと文句を言われながらも、とにかく希冴姫にも報告しなければ、と希冴姫とルインの部屋に行った俺たちは、相変わらず……いや、どう見ても以前より酷そうな病状の希冴姫と、看病するルインに出くわしたのである。

「希冴姫！？　る、ルイン、希冴姫は……」

「……平気。少しひどい風邪のようなもの」

そうは言うが、それにしたってもう寝込んでから大分経つというのに、快復するどころか悪化して行く一方だ。どうしたって心配になる。

「……ふん。なるほどな。セツ、ルイン殿。少し、こやつと二人きりにさせよ」

「え？」
「……わかった」
「――――――な……」
ルインはあっさりと頷き、俺の手を引いて部屋から出る。部屋には、希冴姫とエースが残された。部屋を出る直前、エースが何か呟いたような気がしたが、それを聞き返す間もなく俺は部屋を追い出された。

「……希冴姫」
「はぁ、はぁっ……エース、ですの……？」
「そうだ。ジャックとキング殿。テンスも居る」
『希冴姫……いつの間にこんなことに……私がついて居ながら……』
『なんということを……お主、そこまで……』
『……くっ！』
「……まったく、何処まで惚れこんでいるのだ。クレイジーに過ぎる」
「あ、なたに……何が……大体、なぜここに……」
「ふん。代理だ代理。貴様がそんな調子では、奴を護る者がおらんだろう。我は、少しだけの代理に過ぎぬ」
「そう……ですの。良かった……」
「……何がだ」
「ふふ……エースも、やっとわかりましたのね……騎士の心が」
「……貴様に言われるのは、大層不本意だ」
「相、変わらず……素直じゃ、ありません、ゴホッ！？　ゴホッ！」
希冴姫は、まともにしゃべる体力も怪しいらしく、すぐにせき込んでしまう。
「……まったく。今から貴様の主は、己の信念を、意志を貫く戦場に赴こうと言うのに、なんだ貴様のそのナリは」

「な……それでは、騎士装束を……」
　ベッドから這い出ようとする希冴姫を、テンスとジャックが慌てて止めた。
『行けません希冴姫。流石に、今無理すれば……』
『ならん。大人しくしていろ』
「ですが……」
「アホか貴様は。そんなナリで、剣など振れるか。構えるどころか立つことすらも危うい癖して。足手まといだ」
「し、かし……！」
「……ジャック。希冴姫の看病。キング殿も、そのサポートだ」
『わかりました』
『承知じゃ。団長』
「テンスは、我と来い。貴様はこちらだ」
『承知』
「え、エース何を……！？」
「わからぬか？　病人は大人しくベッドに縛り付けられているがよい、と言うことだ。貴様の主は、不本意だが、我が任された」
「エース……」
　意外そうな目でエースを見る希冴姫。
「我らは……騎士だ。騎士の本分は主君を護り抜くこと。だが……」
　エースは、希冴姫と、他の三人を見渡してから告げる。
「我は、騎士団長。団長であるからには、貴様ら団員も護り通す義務がある」
　特に、前に騎士団をバラバラにしてしまった我には、な……と自嘲気味にエースは呟く。
「それに、貴様は主を、どうしてもその身で護りたいようだが……忘れるな」
　エースはまたこの場にいるメンバーと、この場にいない、セツを取り巻く精霊たちを想い浮かべる。
「貴様の主は、貴様にしか護って貰えないような奴ではない。ジャ

ックも、キング殿も、テンスも、先のルイン殿も、冥界の者たちも、皆が奴を護っているのだ。思い上がるな。貴様一人が奴を想ってなどいない」

「エース……貴女……」

「ふ……心配するな。我は奴に惚れたりなどしていない。ただ……」

友として、背中くらいは護ってやる。

「行くぞ。テンス」

『ああ』

「我らの……誉れ高き戦場が待っている！」

『……ああ！』

エースは、テンスを引き連れて部屋から出て行ってしまう。

「……まったく、なんですのもう。言うだけ言って、さっさと……」

『照れ臭かったのでしょう。彼女らしい』

『ほっほ。しかし、まあ……よくも団長らしくなりおって』

『今の彼女なら……主様を任せることができますね』

「ええ……まったく、口惜しいですわ……こんな時に、こんなザマとは……」

『今は、ゆっくり休みなさい。希冴姫。また、共に……』

『うむ。また、五人揃って主を護ろうぞ。希冴姫よ』

「……ええ。必ず」

「さっきから何を惚けている？　さっさとデュエルを続けろ。それとも臆したか！？」

「……慌てるな。ちょっと思い出話に耽っていただけだろ」

俺はエースと顔を見合わせ、コクリと頷く。

「さあ、行くぞ運命野郎！　騎士の力を思い知れ！」

第三期第十三話「騎士の誇り」（後書き）

というわけで、最新の人気投票にていきなり三位を勝ちとったエースさんです。作者の依怙贔屓（せめて寵愛辺りにしておけ）を一身に受ける精霊さんです。残念な娘と化しているアテナとは偉い違いです（ぁ

それでは、悠でした！

第三期第十四話「運命を切り開く剣」（前書き）

結局夜通しとなる連投。もうわけがわからない！　ま、まあいいでしょう。調子のいい時にやるだけやって、後はモンハン漬けにでもなんでもなれば良いんです。女王に踏みつけられて殺された鬱憤とか、そんなんはないです。ないったらないです。畜生……まさかこやし玉が欲しくなる時が来ようとは……。

第三期第十四話「運命を切り開く剣」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第十四話「運命を切り開く剣」

「さあ行くぞ運命野郎！　騎士の力を思い知れ！」
エースの攻撃力は２０００。奴の……エドのドレッドサーヴァントの攻撃力は４００。なら！
「俺は手札から装備魔法『アルカナソード　スペード』をエースに装備する！」
『来たれ！　猛き剣よ！』
エースの手に、美しい、しかし鋭い気を放つ神剣が握られる。
「攻撃力が変わらない……？　エフェクトを付加する装備魔法か！」
「そんなところだ。行け！　エース！　ドレッドサーヴァントを攻撃！『スペード・フラッシュ』！」
『せぇいやあああああああ！』
「甘い！　リバースカードオープン！『エターナルドレッド』！　このカードは……」
「させん！　リバースカードオープン！　カウンタートラップ『トラップ・ジャマー』！『エターナルドレッド』の効果を無効にし、破壊する！」
「何っ！？」
「行けエース！」
『承知！』

エースの剣が、ドレッドサーヴァントを細切れにする。
「っ！？　ぐあああああああっ！？」
想像していた以上の衝撃に、エドが思わず吹っ飛ばされる。
「な、なんだ今のは……」
「戦闘の時、『アルカナソード　スペード』の効果が発動したのさ。スペードの剣は、装備モンスターの戦闘ダメージを倍にする。尤も、自分が受ける戦闘ダメージも倍になるんだけどな」
「くっ……」
エドＬＰ８００
「なら僕はトラップカード『デステニー・シグナル』を発動！　デッキから『Ｄ－ＨＥＲＯダイハードガイ』を特殊召喚！　ダイハードガイは、破壊されたＤ－ＨＥＲＯを次のターンに復活させる！　ワンダーアライブ！」
『Ｄ－ＨＥＲＯダイハードガイ』ＡＴＫ８００
くそ……元の世界のダイハードガイじゃ、そんなコンボはできないんだが……。原作の、細かい効果の違いまでは想定できない。
「俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ」
「くっ……僕のターン、ドロー！　僕はダイハードガイのエフェクトによりドレッドサーヴァントを蘇生！　ワンダーアライブ！」
エースに倒されたドレッドサーヴァントが再び特殊召喚される。
「そして僕は、カードを一枚セット。ドゥームガイを守備表示に変更し、ターンエンドだ」
「俺のターン、ドロー！」
「この瞬間、『幽獄の時計塔』の針が進む！」
時計塔が指し示すのは九時。あと一ターンか。
「行くぞ！　俺はエースでダイハードガイを攻撃！『スペード・フラッシュ』！」
『瞬光に散れ！』
「リバースカードオープン！『Ｄ－シールド』！　ダイハードガイは破壊されない！」

……やるな。
「俺はターンエンドだ」
「僕のターン、ドロー！　僕は手札から魔法カード『強欲な壺』を発動！　カードを二枚ドロー！　更に『Ｄ－ＨＥＲＯダイヤモンドガイ』を守備表示で召喚！　エフェクトを使う！」
『Ｄ－ＨＥＲＯダイヤモンドガイ』ＤＥＦ１６００
来たか。ダイヤモンドガイ。コイツの効果だけは、『天罰』でも使わないと防ぎようがない。次のターンに発動が決定した魔法カードの効果にはカウンターができない。
「僕が引いたのは『終わりの始まり』よってこの瞬間、次のターンにこのカードの発動が決定した！　ターンエンド！」
「俺のターン、ドロー！」
「この瞬間、『幽獄の時計塔』の針は零時を指す！　よって、僕を護る無敵のエフェクトが発動する！」
これで、ドレッドガイの召喚条件が整った、か……。
『無駄だ』
「エース？」
『彼奴らは既に、墜ちた英雄（ヒーロー）……エド・フェニックスという復讐鬼に取り憑かれ、誇りをなくした者どもだ。誇りなき剣に、我は倒せぬ』
「……な、なんだ？　今の声は……」
『ほう。我が声が聞こえたか。心底の愚者ではないようだ』
「これは……ソリッドビジョンが……？」
『先ほど貴様は、あの者に言っていたな。お前にはないモノが、自分にはある、と』
「それが……どうしたと言うんだ」
『勘違いするな。愚か者。ヒーローを渇望する理由？　ふん。ふざけるなよ』
「なんだと……！？」
『貴様は、貴様こそ、ヒーローをなんだと思っているのだ？　復讐

？　力？　真のヒーロー？　笑わせる』

「貴様！」

『貴様の眼には復讐しか映っていない。負の感情に支配された者が、ヒーローを語るなクズが』

エースは、エドに対しても全く変わらない態度で罵倒する。

『英雄（ヒーロー）とは……希望だ。幼子にとっての救い。護りの存在。敵を倒すのがヒーローではない。殺し、奪い、絶望させるヒーローの、何が真のヒーローだ』

「黙れ！　貴様に……貴様に何がわかる！？」

『貴様こそ黙れ。今は我のターンだ。貴様に発言の権利などない。我の話が終わってから、存分にわめけ。聞く耳は持たんが』

理不尽だ。相変わらず、基本的に取り付く島もないんだなコイツは。

「ヒーローが常に光に満ちていると思うな！　ヒーローの真実は、闇に塗れている！」

『だが、ヒーローが子供たちに齎（もたら）すモノは、常に希望だ。光だ。ヒーローがその背中に庇うもの。それらは全て、希望に満ちていなければならない。ヒーローは、相対した者にのみ闇を与える。護る者には、希望を。貴様は……ヒーローの背中に在りながら、絶望しか見ていない。そんな貴様が、ヒーローを語るな』

「くっ……」

エースの言葉は、俺の胸にも届いた。ヒーローが、その背中で語るモノ。それは……。

『それは我ら、騎士とも同じ。安堵を、憧れを、希望を。その背中で語るのだ。そこに、我らは誇りを、プライドを、名誉を感じて、更に猛る。真実が闇であろうとも、血に塗れていようとも、我らの力の源は、我らの護る者たちの希望。それだけは、変わらぬ』

「お前は……」

『忘れるな。貴様にも辛いことがあったろう。しかし、貴様のその絶望が、恨みが、悲しみが、彼らを……魔物にしている』

俺には……俺には見える。エースも、エドのＤ－ＨＥＲＯも……
「泣いてる……」
『我は騎士！　高潔なる切り札の騎士だ！　英雄ならずとも、同じく守護の剣！　よって、魔物に負けることは許されん！　セッ！』
「……ああ、任せろ。エド・フェニックス。俺は……お前を、運命を……超えるぞ」
「くっ……！？」
「バトルフェイズ！『切り札の騎士団長―エース』で、『Ｄ－ＨＥＲＯダイヤモンドガイ』を攻撃！『スペード・フラッシュ』！」
『瞬光輝刃……』
エースの持つ剣が煌めく。
『尖晶斬！』
一瞬の交錯。
『散れ。哀れな墜ちた英雄よ』
また一瞬の間を置き、ダイヤモンドガイが細切れになった。
「ぐううっ！　だが、『幽獄の時計塔』の効果でダメージはない！」
「わかってるさ。ターンエンドだ！」
「僕のターン、ドロー！　僕だって、言われっぱなしではいられない！」
「ああ、来い！」
「この瞬間、『終わりの始まり』のカードエフェクトが発動する！　三枚ドロー！」
うわ……わかっちゃいたが、きっつい効果だぜ……。
「更に『Ｄ－ＨＥＲＯダイハードガイ』のエフェクト！『ダイヤモンドガイ』を蘇生！」
エドの手札は五枚。一気に手札が増えたな。流石だ。
「行くぞ！　僕はドレッドサーヴァントでその騎士を攻撃する！」
「攻撃力４００のモンスターで攻撃！？」
「時計塔の効果でダメージを受けないからって……」

外野は困惑しているが、俺にはわかる。ドレッドサーヴァントのもう一つの効果、それは……。
「迎え討て！　エース！」
『当然！』
ドレッドサーヴァントはエースの持つ剣が煌めくと同時に霧散してしまう。だが……
「この瞬間、『Ｄ－ＨＥＲＯドレッドサーヴァント』のモンスターエフェクトが発動する！　このモンスターが戦闘によって破壊された時、自分フィールドの魔法・罠を一枚破壊することができる！」
「自分のカードを破壊!?　それって……」
「それって、『幽獄の時計塔』の効果が、発動するドン！」
「そうだ！　来い！『Ｄ－ＨＥＲＯドレッドガイ』！」
『オオオオオオッ！』
『現れたか……殺戮の囚人』
『Ｄ－ＨＥＲＯドレッドガイ』ＡＴＫ？
「ドレッドガイが召喚された時、自分のＤ－ＨＥＲＯ以外のモンスターを全て破壊し、墓地からＤ－ＨＥＲＯを二体まで蘇生することができる！　ドレッド・ウォール！」
「マズイッス！　これでモンスターが蘇生されたら、エドのフィールドにモンスターが五体も……」
『させん！　セツ！』
「任せろ！　カウンタートラップ『オーバーウェルム』！　コイツは俺の場に、アドバンス召喚されたレベル7以上のモンスターが存在する場合にのみ発動可能！　モンスター効果か罠の発動と効果を無効にし、破壊する！」
『闇に還るが良い……囚人よ』
エースを中心にして描かれた魔法陣が、ドレッドガイを光で包み、消し去ってしまう。
「何!?　ぐっ!?」
「更に、カウンタートラップにより、相手モンスターの効果を無効

化したことで、手札の『冥王竜ヴァンダルギオン』第三の効果が発動する！」

『グオオオオオオオオオッ！！』

『冥王竜ヴァンダルギオン』ＡＴＫ２８００

「冥王竜……ヴァンダルギオン！？」

「天冥流転！」

『主よ……俺も、戦おう！』

「頼むぞ……俺は墓地から『切り札の騎士―テンス』を守備表示で特殊召喚！」

『切り札の騎士―テンス』ＤＥＦ２０００

『フン。また頼むぞ。守護騎士テンス』

『その名で呼ばれるのも……懐かしい。神殿騎士エース』

「『切り札の騎士―テンス』は、フィールド上に表側表示で存在する限り、自分の他の切り札の騎士と名のついたモンスターを攻撃する時、このカードにその攻撃を移し替えることができる！」

『守護は任せろ。団長』

『ああ……我は攻める。遅れるな』

「くっ……まだだ！　僕は手札から魔法カード『死者蘇生』を発動！　墓地からドレッドガイを……」

「させねえって言っただろ！　カウンタートラップ『マジック・ジャマー』！　手札を一枚捨て、相手の魔法カードの発動と効果を無効にし、破壊する！　俺は手札から『ジャム・ウォリアー』を捨てて効果無効化する！」

ここから、俺の真骨頂！

「更に俺は墓地に捨てた『ジャム・ウォリアー』の効果を発動！　このカードがカウンタートラップのコストとして墓地に送られた場合、自分はデッキからカードを二枚ドローする！」

まだだ。まだ終わらない！　俺のターンは、まだ続く！

「そして『切り札の騎士団長―エース』の効果も発動！　このカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、一ターンに一度プレ

イヤーが手札を墓地に送った時、手札を墓地に送ったプレイヤーはデッキからカードを一枚ドローする！」

「馬鹿な……コストが……コストにならないだと！？」

そうだ。エースが力を貸してくれたことで、俺のカウンターデッキは……手札消費の激しいカウンターデッキでありながら、手札を絶やさず、相手ターンでもいくらでもカードを展開できる形まで完成した！

「さあ、何やってる。お前のターンだろ」

「ぼ、僕のターン、ドロー……」

「違う違う！　“まだ”お前のターンってことだよ！」

「あっ……」

プロにあるまじきミスといっていいだろう。ターンの把握に失敗するなど。

「くっ……僕は、カードを二枚セット。ターンエンドだ……」

「なら、改めて行くぞ。俺のターン！　ドロー！」

このターンで決める！

「俺は魔法カード『トラップ・ブースター』を発動する！　手札を一枚捨て、このターン俺は手札からトラップカードを発動することができる！　俺は……ッ！」

捨てようとしたカードを見て、一瞬躊躇う。なぜならそのカードは……、

『捨ててくれ。セツ。我が……過去と決別するために』

俺が捨てようとしたのは『切り札の騎士―エース』。以前の……俺に、死への恐怖を語ってくれた、あの時のエースだ。

「っ……！　俺は、『切り札の騎士―エース』を墓地に捨てる！」

『っ……！　ぅ、ぁ……』

エースが、辛そうな顔をする。だが、俺は謝らない。謝れない。エースの決意を、無駄にしたくないから。

「この瞬間、墓地の『切り札の騎士―エース』と、フィールドの『切り札の騎士団長―エース』の効果が発動！　まずは『切り札の騎

士―エース』の効果で、このカードを手札から墓地に捨てた時、カードを一枚ドローする！」
『さあ、我を存分に振るえ！　セツ！』
「ああ！『切り札の騎士団長―エース』の効果！　手札を捨てたことにより、デッキからカードをドロー！」
「くっ……！？　なんてタクティクスだ……これが学生……！？」
「行くぞ！　まずは邪魔なその盾をぶっ壊す！　速攻魔法『サイクロン』！『Ｄ－シールド』を破壊する！」
渦巻く風が、ダイハードガイの盾を吹き飛ばす。
「俺は更に、『豊穣のアルテミス』を攻撃表示で召喚する！」
『豊穣のアルテミス』ＡＴＫ１６００
アルテミスの本領はドロー加速。だが、アタッカーとしてもそこそこの能力を持つ。少なくとも、攻撃力の低めな下級Ｄ－ＨＥＲＯ相手なら！
「行くぞ！　テンスを攻撃表示に変更し、バトルフェイズ！　テンスでダイハードガイを攻撃！『轟断剣』！」
『切り札の騎士―テンス』ＡＴＫ１０００
『おおおおおおっ！』
テンスの持つ大剣が、ダイハードガイを一刀の下に両断する。
「次！　ヴァンダルギオンでダイヤモンドガイを攻撃！『冥王葬送』！」
「ぐうぅ！」
「もう一つ！『豊穣のアルテミス』でドゥームガイを攻撃！」
天使の放つ光に耐えきれず、ドゥームガイが爆散する。
「ラストだ！　エースでプレイヤーにダイレクトアタック！『スペード・フラッシュ』！」
「リバースカード『ドレインシールド』！　この効果により僕は……」
「無駄だよ！　手札からカウンタートラップ『魔宮の賄賂』！　相手に一枚ドローさせる代わりに『ドレインシールド』の効果を無効

にする！」
「まだだ！『トラップ・ジャマー』！　これならどうだ！」
テレビで亮さんにやったコンボか……しかし！
「悪いな……少なくともカウンターなら、俺は亮さんの先を行く！
更に手札からカウントラップ『神の宣告』！　ライフを半分支払うことで『トラップ・ジャマー』の効果を無効化する！」
セツＬＰ２０００
「なんだと！？」
「カウンタートラップ二枚が発動したことにより、俺は『豊穣のアルテミス』の効果でカードを二枚ドロー！」
『終わりだ。我が友は、立派に使い手としての責務を果たした。ならば、次は我の番だ！』
「そんな……斎王の預言が、運命が外れると言うのか……？　御堂切……コイツ、一体……！？」
『兄の方は、運命（さだめ）を打ち破る男として有名だ、とな』
エドの脳裏に、カイザーの言葉が蘇る。
『運命に縛られし愚か者……我が剣にて浄化する！　せえええええいっ！』
「僕が……父さんのＤ－ＨＥＲＯが……！　ぐあああああああっ！？」
エドＬＰ０
「エド……」
俺は膝を着いてしまったエドの傍により、手を伸ばす。
「運命って言葉に、逃げるな」
「っ！」
「逃げるための理由を探すことほど、無駄なことはないぞ」
「……認めない」
「エド」
「認めないぞ。僕は。斎王の預言は間違っていない。僕のプレイングが甘かっただけだ。Ｄ－ＨＥＲＯは……父さんの作ったヒーロー

は最強だ」
「……ああ」
わかっていた。俺が例えコイツに勝っても、コイツには届かない。コイツの心に届くのは……。
「また、いつか十代と再戦してくれ。エド」
同じＨＥＲＯ使いである、十代だけだ。
「なに……？」
「今は……無理だが、アイツはきっと、すぐに立ち直るから。だからその時は、またアイツとデュエルしてみな。きっと、何か見えるものがある筈だ」
ＨＥＲＯ使いじゃない俺には、きっとエドや十代の心に届くメッセージはあげられない。
「エド・フェニックス」
「お前は、さっきの……！」
「ヒーローを使うなら、希望を持て。遊城十代のように。ワクワク、だったか。奴は、ヒーローの使い手として、お前よりも数段優れた資質があるぞ。今はまだ、未熟だがな」
「何を……」
「ヒーローは、希望でなくてはならん。ならばその使い手もまた、希望を胸に宿し、光を知れ。……騎士の使い手が、胸に誇りを持つように」
エースの言葉はエドだけじゃなく、俺にも向けられている。
「眼を覆い、耳を塞いだままでは、お前を護る精霊の鼓動も聞こえまい。貴様の曇った眼が晴れることを、祈っているぞ」
「……」
エドは俺の手を無視して立ち上がり、デュエル場から出て行った。
アイツにも、考える時間が必要だろう。
「お兄ちゃん」
「さだめか。なんだ？」
「勝ったね」

「ああ。約束、したしな」
「ん……」
さだめが嬉しそうに微笑む。少し頬を染めて、はにかむ様に。
最近のさだめは妙に殊勝だ。なんか逆に恐ろしく感じてしまう俺がダメだ。
「明日香、十代の方はどうだ？」
「……多分、気を失っているだけよ。少しすれば、眼を覚ますと思うけど……」
「そうか。なら良かった」
「セツ。何をボサッとしている。行くぞ」
「エース？　行くって……」
「決まっている。希冴姫の見舞いだ。三銃士とルイン殿に戦果報告もせねばなるまい」
「ああ、そうだな。けど、十代は……」
「十代のことなら心配するな。俺が責任持って保健室に送り届けよう」
「そっか。なら、頼む。三沢」
「アニキの看病は、オレたちに任せるザウルス！」
「むっ！　アニキの看病をするのは僕！　剣山君はただの運び屋！」
「何言ってるドン！　アニキを背負うこともできない丸藤先輩は引っ込んでるドン！」
「はは……」
問題なさそうだな。なら、お言葉に甘えて、俺たちは部屋に戻りますか。
「エース」
「？　なんだ」
「ありがとう。今回は、お前のおかげで勝てたよ」
「……フン。希冴姫の代理だ」
「だとしても、だよ。それに、お前いつから希冴姫のこと、名前で呼んでくれるようになったんだ？」

「……そんなこと、どうでもよかろう」
エースの顔が、微妙に赤い。
「照れなくても……」
「照れてない！」
思い切り照れてますがな。
「素直じゃな……」
「ええい黙れ！　それ以上言うなら貴様をそこの妹への貢物として捧げるぞ！」
「待て！　それはシャレでは済まん！」
そんなことになったら……。
「そんなことになったら、さだめ、エースさんに全財産あげてもいい！」
「貢がれる側が金払ってどうする！？　って、そうじゃなくて……」
「ふ、フフフ……なるほど、貴様の弱点がわかったぞ。その妹か！」
「しまったバレた！」
エースの奴、これは面白いモノを見つけたとばかりに嗤っていやがる！　くそ、ならこっちも……。
「はん、高潔な騎士様が随分と腹黒い、卑怯な真似をするな？　そりゃ人質と大して変わらんぞ！」
「な、なにぃ……？」
「誇りだプライドだと言っておいて人質とは……片腹痛い！」
「き、貴様……」
「いや、人質でも何でもない気が……」
さだめが至極最もなツッコミをしていたが、既に頭に血が上っているエースには聞こえなかったらしい。
「ええいやはり貴様とは直接決着をつけねば気が済まん！　そこに直れ！」
「だが断る！」
「な、なんだと！？」
「今は一刻も早く、戦果報告に行くべき時だ！　よって俺は帰る！」

「くっ……お、おのれ、後で覚えているがいい！　必ず泣かせてやる！」
「その言葉、そっくりそのまま返してやろう。石頭ひんぬー小娘」
「なぁっ！？　き、キサマ……」
エースが顔を真っ赤にしてプルプル震えている。引きつった顔で、今にも腰のレイピアに手を伸ばしそうだ。
「……ははっ！」
俺は、思わず笑った。
「な、何がおかしい！」
「いや……やっぱいいなぁ。お前は」
「なっ！？」
こんな風に、嫌味ったらしくケンカ出来て、こんなに楽しい友人を、俺は持ったことがない。
「やっぱりお前とは、こういう関係がしっくりくるよ。エース」
希冴姫たちのような、異性の感情はなく、かといって剣士や十代たちのような、男同士の友情、といったものでもない。純粋にケンカし、笑いあえる。そんな友人。
「俺は、お前の親友になりたいよ。エース」
それは、俺の偽らざる気持ちだった。
「……フン。貴様なぞ、精々が悪友止まりだ」
顔を逸らしてそんなことを言うエースの頬は、隠しきれない喜色に染まっていた。そんな、予想通りの表情に、また笑う。
「エースさん顔真っ赤～」
「頬が緩んでるぞ。エース」
「く……ええいもう黙れ！　そ、それ以上は言うな！　ジグソーパズルにしてくれるぞ！」
「ははっ！　バラバラにされちゃ敵わないな。逃げるぞ、さだめ！」
「オッケー！」
「ま、待て！　置いて行くな！　我一人では道がわからんだろうが！」

慌てたようなエースの声が背後から聞こえてきて、やっぱり、笑う。

アテナは、未だ帰って来ないし、希冴姫は寝込んでしまっている。だが、今この場においては、俺も、さだめも、エースも。皆、笑顔だった。

「待てこのっ……待たんかー！」

「うおっ！？　ちょ、おま！？　剣投げるな！」

「全力で投げた剣を普通に白刃取りするあたり、底が知れないよね。お兄ちゃんって」

「全部お前関係で培った生存本能だけどな！」

言い争い、でも笑顔。そんな、俺たちの関係が嬉しい。

俺たちはただ笑いあった。終焉の影が、すぐ傍に迫っていることにも気付かずに。

再会と、そして別れが、すぐ傍に迫っていた。

第三期第十四話「運命を切り開く剣」（後書き）

改訂前と変わらずにエース無双。登場してから一切倒されてもいません。というか、ほぼエースさんしか活躍していない件。希冴姫はこんな活躍したことないのに！

まあ、それはともかく。改訂前だと、次でアテナ帰還だったのですが、ちょっと二、三話追加で話入れます。主に、修学旅行あたり。以前の話だと、精霊界から帰ってもセツたち修学旅行いけないじゃん！　と読者の皆様のご指摘にて気付きまして。よし、ならアテナ帰ってくる前に行っちゃおう！　と。……え？　アテナ？　ええとその、ごめんなさい。ユーキちゃんの出番を削っちゃった分、お詫びにユーキちゃんのメイン回にしたいんです。アテナ帰還しちゃったらユーキちゃんが……。

それでは、悠でした！

第三期第十五話「迷える少女と偽りの現在」（前書き）

……すみません。修学旅行編ですが、ユーキちゃん軸にしようとするとアテナ復帰後のアイドルデュエルと時期がかみ合わないことに気が付きました。よって。ユーキちゃんのメイン回は別に用意して、修学旅行編はアテナ帰還後にアテナも交えてやりたいと思います。

第三期第十五話「迷える少女と偽りの現在」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第十五話「迷える少女と偽りの現在（いま）」

『グオオオオオオオオオオッ！？』

夕闇に染まる空の下、欠片の断末魔と共に周囲の闇が晴れて行きました。

これで、もう何百匹目になるんでしょうか……もう、数えるのも馬鹿らしくなるくらい、私は終焉の欠片を消滅させてきました。

「……けど、本体は未だ現れない……もう、時間がないのに……！」

焦る気持ち。

とにかく、次の欠片を潰さなきゃ、と踵を返した私の視界に、意外な人物が写りこんできました。

「……光、お姉さん……」

悲しげに顔を伏せた短髪の女性。それはあの時、私がセツの下から去ったあの日に、仲良くなったお姉さん。光お姉さんが口を開く。

「……無駄よ、アテナ……」

光お姉さんは、後ろ手に引き摺っていた『ナニカ』を私の前に放りだす。

「ッ欠片……！」

それは無数の欠片。そのなれの果て。光お姉さんに放りだされたそれらは、あっさりと消滅する。

「……こんなもの、いくら潰したところで意味はないの。わかって

いるんでしょ？」
「……わかってます。でも、私にはこうするしか……本体を見つけ出すには、これくらいしか……」
「ウソね。貴女は知っているハズでしょう？　終焉の本体の居場所。希望が言っていたはずだもの」
「……あの人は、信用できません。あの人が本当のことを言っているのか、判然としませんから」
「それもウソね。希望が本当の事を言っていると、貴女は分かってる。だって、希望が言っていた言葉は全て、事実起こっていることだもの。そしてアテナ、貴女はそれを理解しているもの」
　お姉さんの言葉が、私の虚勢を次々と突き破ります。私は、ただ目を逸らすことしかできません。
「デュエルアカデミア。そこに本体はいる。希望は、そういうことを言っていたハズでしょう？　何故、貴女はアカデミアから遠く離れたこんな辺境で欠片狩りなんてしているの？　そんなにセツに会いたくない？」
「……会いたくありません」
「それもウソ。じゃなきゃ、そんな痛みに塗れた顔で目を逸らすはずがない」
「っ……！」
「……ねえアテナ。なんでそこまで恐れるの？　貴女の犯した罪って本当にもう……」
『いい加減にしなさい！』
「シャルナ！？」
　シャルナは、光お姉さんに向けて杖を構えていた。憎しみの篭った、とまで言える凄まじい形相で、殺気すらも伴って。
「……何のつもり？」
『もう、やめなさい。この娘をこれ以上苦しめないで！』
「シャルナ……」
『最初は……あたしだって坊やたちの所に帰って欲しかった。そう

することがこの娘にとっての幸せだって、思ってた……』
「じゃ、今は？」
『……変わってない。今でも、坊やたちの所こそが、この娘にとっての安息だと……理想郷だと思ってる。でもね……』
フッ、とシャルナの顔から表情が消えた。先ほどの、烈火のごとき怒りの表情とは打って変わり、冷徹な、氷雪のごとき怒り。
『あんたたちのやり口が、気に入らない』
「……」
光お姉さんは、ただ無言。こちらも表情を消して、私たちを静かに見据えています。
『散々この娘を追い詰めて……苦しめて苦しめて、もう駄目って所を坊やに救わせてハッピーエンドがお望み？　絶望の淵に置かれたこの娘を、救世主よろしく坊やが救う。こんな感じかしらね。あんたたちの描いた筋書きは。……反吐が出る』
シャルナは淡々と、光お姉さんに言葉の矢を突き立てて行きます。
『……させないわよ。もうこれ以上、アテナを苦しめさせるもんですか。あたしは、もう……“二度もこの娘を失っている”んだから。三度も……失って溜まるもんですか』
シャルナ……。
『アテナ……もういいから、もういいから休みましょう？　貴女はこれ以上、苦しまなくていいのよ。終焉のことも、貴女が罪と呼んでいるものも、全て忘れて休んで、元気になってから、あの坊やの所に帰りましょう。ね？』
「……シャルナ、でも私は……」
『……また、貴女は死ぬの？　あたしを置いて、一人責任を背負ったまま、幸せを放棄して？　あたしはもう、貴女を守れないのは嫌』
「……」
シャルナ……。
「……気に入らない、かぁ」
『っ！』

ボソリ、と呟いた光お姉さんに、シャルナはまた鋭く睨みつけます。
「おあいにく様。私も気に入らないのよね。今のあなたたち」
『なんですって……！？』
「私はね、希望に言われてここに来た。それは認める。でも、あんたたちをどうこうしようなんて、欠片も思っちゃいない」
『何を……！』
「信じろ、とは言わない。けどね、アテナ。貴女が望むのなら、私は貴女に協力するわ。希望のこととか、終焉のこととか世界のこととか、そんなこと無視してね」
光お姉さんは、優しげな瞳で私を見つめます。その瞳に、ウソは見当たりません。
私は、その赤い瞳の魔性の輝きに、一瞬見惚れて、思わず手を伸ばしかけます。でも、そんな私の手は光お姉さんにスッ、とかわされてしまいました。
「……でも、今のアテナには協力できない」
「え……」
「……ねえアテナ。アテナは、セツにどうして欲しいの？　貴女はセツに、何を望んでいるの？　聞かせて。アテナ」
私が、セツに望んでいること……？　そんなこと……、
「……何も、望んでなんかいませんよ」
私に、そんな権利はありませんから。
「……はぁ。ダメね。これは」
光お姉さんは、そう言ってやれやれと肩をすくめる。
「この期に及んでまだそれ？　呆れた。いいわ。もう一度ボコボコにして、ついでにあんたの本心を暴いてやるわ」
「え？　え？」
いきなりデュエルディスクを構える光お姉さん。反射的に私もデュエルディスクを構える。
「ま、待ってください！　今光お姉さんとデュエルする意味があり

ません！」
「意味を見出すのよ！　このデュエルから！　デュエル！」
「デュ、デュエル！」
なし崩し的に、デュエルをすることに。光お姉さんの意図は読めませんが、デュエルをする以上……。
「本気で、行きます！」
「そうしなさい。じゃないと、すぐ終わっちゃうから。私のターン、ドロー！」
光お姉さんのデッキは高攻撃力モンスター主体のパワーデッキ。そして、エースに『バーサーク・デッド・ドラゴン』を据えた完全なパワータイプ。
「私はモンスターを一体守備表示でセット。カードを二枚セットして、ターンエンドよ」
「私のターン、ドロー！　私は永続魔法『神の居城―ヴァルハラ』を発動します！　手札から『アテナ』を攻撃表示で特殊召喚！」
『あんたたちの思い通りにはならないわ。あたしは、この娘を守る！』
「更に『聖なるあかり』を攻撃表示で通常召喚！」
「……へえ、そう。『聖なるあかり』……ね」
これが、光お姉さんの『バーサーク・デッド・ドラゴン』対策！『聖なるあかり』が表側表示で存在する限り、闇属性モンスターの召喚も特殊召喚もできません！
「『アテナ』の効果で６００ポイントのダメージです！」
「ちっ……」
光ＬＰ３４００
「更に、もう一枚永続魔法『コート・オブ・ジャスティス』を発動！　手札から『光神テテュス』を攻撃表示で特殊召喚！『アテナ』の効果でダメージ！」
光ＬＰ２８００
『バーサーク・デッド・ドラゴン』は出させません！　一気に決

めます！
「まずは『光神テテュス』で守備モンスターに攻撃！」
「……目が曇っているわよ。アテナ。私の守備モンスターは『マシュマロン』。裏守備表示のこのカードが攻撃されたことで、１００ポイントダメージを与えるわ。知っているでしょう？」
「くっ……」
アテナＬＰ３０００
失敗しました……てっきり、バルバロス妥協召喚のセットだと思っていましたが……リリース確保のための壁……。
「私はターンエンドします」
「私のターン、ドロー。リバースカード『メタル・リフレクト・スライム』。永続魔法『冥界の宝札』発動。二体のモンスターをリリースし、『火之迦具土』を攻撃表示で召喚。『冥界の宝札』の効果でカードを二枚ドロー！」
『火之迦具土』ＡＴＫ２８００
『火之迦具土』！？　それは……マズイです！
「更にリバースカード『無力の証明』！　アテナの場に居るレベル５以下のモンスターを纏めて消し去る！」
「きゃ……！」
私の場のモンスターは『アテナ』を除いて全てレベル５以下。そんな……。
「行きなさい『火之迦具土』……！　あの子に現実を思い知らせてやりなさい！『紅蓮滅殺拳』！」
『ぐ、ああっ！？』
「きゃああっ！？」
アテナＬＰ２８００
「私はメインフェイズ２に『アドバンスドロー』を発動！『火之迦具土』をリリースしてカードを二枚ドロー！　手札から速攻魔法『デーモンとの駆け引き』を発動。デッキから『バーサーク・デッド・ドラゴン』を特殊召喚してターンエンドよ」

『バーサーク・デッド・ドラゴン』ＡＴＫ３５００→３０００
結局『バーサーク・デッド・ドラゴン』まで出されてしまいました。攻撃力は５００下がるとはいえ……キツイです。
「くっ……私のターン……」
「ドローの前に、『火之迦具土』の効果で手札を全て捨てて貰うわよ。まあ、元々残りの手札は一枚しかなかったわけだけど」
「……ドローします。……！　私は『神の居城―ヴァルハラ』の効果で手札の『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を攻撃表示で召喚します！」
『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』ＡＴＫ２８００
「あら。いい引きしてるじゃない」
『バーサーク・デッド・ドラゴン』ＡＴＫ３０００→２５００
攻撃力の下がった『バーサーク・デッド・ドラゴン』なら……倒せます！
「バトル！『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』で、『バーサーク・デッド・ドラゴン』を攻撃！『ホーリー・フェザー・シャワー』！」
「く……」
光ＬＰ２５００
「私はこれでターンエンドです」
「つつ……私のターン、ドロー。カードを一枚セット。ターンエンドよ」
「私のターン、ドロー！」
行けます！　今なら！
「『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』でダイレクトアタック！」
「リバースカード『サンダー・ブレイク』！　手札を一枚捨てて『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を破壊！」
「くっ……ターンエンドです」
「私のターン、ドロー！　私はモンスターを一体守備表示でセット。

ターンエンドよ」
　光お姉さんのデッキは最上級軸。だからこそ、一度崩されれば立て直しに時間がかかります！
「私のターン、ドロー！　私は『強欲な壺』を発動します！　カードを二枚ドロー！」
　これなら……！
「私は手札から魔法カード『儀式の準備』を発動します！」
「！　儀式……ですって……！？」
「デッキから『神光の宣告者』を手札に加え、墓地から『宣告者の預言』を手札に戻します！」
「……『火之迦具土』の時か……！」
「私は手札の『光神機―桜火』をリリースし、『宣告者の預言』を発動します！　来てください、完全にして絶対なる宣告の神！『神光の宣告者』！　守備表示で特殊召喚！」
　『神光の宣告者』ＤＥＦ２８００
　私の、新しい切り札！　最強の宣告者！
「ちっ……面倒なのが出てきた……でも、これでわかった。確信したわ……アテナ」
「更に『宣告者の預言』の効果を発動します。儀式召喚に成功した時、このカードを墓地から除外することで召喚の贄を手札に戻します。ターンエンドです」
「……私のターン、ドロー」
　光お姉さんは、どこか複雑そうな表情です。嬉しそうでもあり、腹立たしげでもある。そんな表情。
「……アテナ。やっぱり、貴女は間違ってるわ」
「な……どういうことですか」
「今のあんたは、ウソばっかりってことよ！　ハリボテ同然の今のあんたが、私に勝てると思うな！　私のターン、ドロー！」
　無駄、です……例え光お姉さんが最上級モンスターを主軸としていても、私の手札には既に二体の天使族。二回までなら、どんな効

果だって無効化して見せます！
「手札から魔法カード『ライトニング・ボルテックス』を発動！手札の『レベル・スティーラー』を捨てて……」
「無駄です！『神光の宣告者』の効果を発動！　手札の『シャインエンジェル』を捨てて無効化！」
「なら私は守備モンスターの『神獣王バルバロス』を反転召喚。墓地の『レベル・スティーラー』の効果を発動するわ！」
『神獣王バルバロス』ＡＴＫ１９００
『レベル・スティーラー』？　一体どんな効果で……。
「『神獣王バルバロス』のレベルを一つ下げて、墓地から特殊召喚するわ！」
「さ、させません！　手札の『光神機―桜火』を捨てて『神光の宣告者』の効果発動です！」
『神光の宣告者』は、手札の天使族を捨てることで魔法・罠・モンスター効果のどれであっても無効化できる最強の宣告者。これなら……！
「あっそう。んじゃ、もう一度『レベル・スティーラー』の効果を発動するわ」
「な……」
「別に、一ターンに一度しか発動できない効果じゃないのよ。残念だったわね」
「し……」
しまった……余計なことを……これで私の手札はゼロ。『神光の宣告者』の効果が使用できない！？
「更にもう一体の『レベル・スティーラー』の効果を発動！『神獣王バルバロス』のレベルを更に一つ下げ、墓地から特殊召喚！」
『レベル・スティーラー』ＡＴＫ６００
「そんな……もう一体！？」
まさか、『サンダー・ブレイク』！？　あの時既に……。
「さあ、まとめてぶっ飛ばすわよ！　私は三体のモンスターをリリ

ースし、二枚目の『神獣王バルバロス』を召喚！　効果発動！」
『神獣王バルバロス』ＡＴＫ３０００
そんな……また、私は……、
「目を、覚ましなさいよ。アテナ。『神獣王バルバロス』で、プレイヤーにダイレクトアタック！『トルネード・シェイパー』！」
「あ、あああああああああっ！？」
負ける……の？
アテナＬＰ０

『アテナ……っ！』
「あ……わたし……」
「気を失ってたのよ。大分、疲れが溜まってたんでしょうね」
「ひかり……お姉さん……」
「そ。光お姉さんよ。大丈夫？」
『あんた……よくも抜け抜けと……！』
「いきり立たない。ったく……」
苛立たしげなシャルナに、光お姉さんもつられて不機嫌そう。
「……ねえ、アテナ。やっぱりアンタは、ウソだらけよ」
「……」
「最後の『神光の宣告者』。あれではっきりわかった。アテナが、セツのことどうしようもないくらい大好きだってこと。助けて欲しいって思ってること」
「……なんで……」
「最後の最後に『神光の宣告者』が出てきた時点で、もう明らかよ。パーミッションの親玉みたいな天使。助けて欲しいんでしょ？　セツに。伝わってきたわ。貴女の気持ち」
「私は……」
セツと離れて、心細くて、辛くて……でも、セツには会うわけに

はいかなくて……。
「その代替。パーミッションデッキ使いのセツに準えて、構築の難しい儀式召喚のギミックも組んで……もう、分からない方がどうかしてるわ」
「……」
「アテナはウソつきね。そんなにセツの事好きなのに、ヘンな負い目を感じて一人離れて……ホント、馬鹿」
「だって、私はセツに酷いこと……謝ったって、許されることじゃなくて……きっと、光お姉さんみたいに嫌われて……」
「……私が、今のアテナが嫌いって言ったのはね……アテナ。今のアテナが、ウソつきだからなのよ」
「え……？」
「初めてアテナと会った時、なんて素直で健気で、真っ直ぐな娘なんだろうって思ったのよ。真っ直ぐ、正直に、自分の気持ちを大好きな相手に伝えられる、そんな貴女が好き。そんな貴女だから、お友達。でも、今のアテナは、ウソつき。だから、嫌い」
それは、何も……何も知らなかっただけで……知っていたら……。
「そうかしらね。例え、最初から知っていたとしても、アテナなら告白してたんじゃないかしら。それくらいじゃなきゃ、初対面でいきなり告白なんてしないと思うわ」
あの時……セツと初めて会った時、殆ど衝動的に告白しました。断られるかも、とか、ヘンな子だと思われるかも、とか、そんな危惧、あって然るべきだったのに。
「ウソじゃないって……わかったんでしょ？　セツへの気持ちが、本物だって、わかったんでしょう？　なら、戻ればいいじゃない。自分の心に正直に、さ」
でも……でも私は！
「罰を受けたいの？　セツたちに酷いことをした罰を？　だからセツに会わずに、自分を追い込んでいるの？　さっきシャルナが言っていたけど、ホントにアテナを追い込んでいるのはアテナ自身よね

？」
「そう……です」
「だったら、いい方法があるでしょうが。罪を償い、罰を受ける、最善の方法が」
「え……？」
思わず顔を上げる。あっさりと、罪を償う方法があると言いだした光お姉さんに目を向ける。
「殺人者が罪を償えないのは、犯した罪の対象が既にいないから。既に死んだ人には、どう足掻いたって罪を償えない。でも、アテナは違うでしょ。セツも、さだめも、普通に生きてるんだから。あの二人の前まで行って、正直にゴメンナサイしてくればいいの」
「そんな……そんなこと……」
「できないって？　そう思うアテナだからこそ、これが一番なのよ。罪悪感で潰されそうになるくらい酷い罰を、受けられるんだから。一番酷い罰よね」
あ……。
「このままここに居れば、罪を償うこともできず、世界は、滅びるわよ」
「わ、たし……」
「それでも罰を受け足りないなら、セツを誰かに譲っちゃいなさいな。目の前でラブシーンでもして貰うといいわ」
「それはダメです！　あ……」
思わず、といったように口から出た言葉に、私は呆然とする。でも、光お姉さんは笑顔を浮かべる。
「ほら、正直な娘。舞台から降りたーだの、私には資格がないーだの言ってても、結局アテナの望みはそういうことでしょ。なら、素直になっちゃえばいいのよ」
私の、望み……。
「……もう少し、もう少しだけ、時間をください」
例えそうだとしても、すぐには無理。勇気が、足りない。

「……いいえ、待たない」
「え？」
「力尽くで、引っ張ってってあげるわ。いつまでもウジウジ悩むな！」
「や、ちょ、ちょっと……待ってください！」
「あんたに勇気をくれるのは何！？　セツでしょ！　だったらここでいくらウジウジしてても勇気なんざ湧いて来ないわよ！　セツに会えば勇気も貰えて罪も償えて一石二鳥！　違う！？」
「ご、強引すぎます！　無茶苦茶な理屈です！」
「ちょっとでも前向きになった今行くのが一番いいのよ！　また一人で勇気が湧くまで……なんて言ってたら、また延々悩み続けて落ち込んで行くだけよ！」
「そ、それは……でも！」
「デモもストもない！　無理矢理、力尽くで、セツの所まで速達よ！」
「や、やあああああっ！？」
『ちょ、ちょっと！』
「セツに会えば全部解決すんのよ！　希望みたいに心理的に操ってセツの下に連れ返すようなことはしないわ！　私は！　最終的には！　力尽く！」
『力強く言うな！』
「でも、これが手っ取り早いでしょうが！　私の見たとこ、アテナみたいなのは、ここ一番で度胸があるの！　追い詰められたら夜這いだってするタイプと見たわ！　自分から押し倒すタイプよきっと！」
『……確かに』
「ちょ！？　シャルナ！？」
「……あれ？　もしかしてもう押し倒しちゃった？」
『……ノーコメントにしておくわ』
「……なら尚更！　無理矢理強引に力尽くでセツの前に叩きだせば

上手く行くわ！」
『……ホントに、それが良いかもしれないわ』
「シャルナ～！？」
ひょい、と軽々と片手で抱えられ、光お姉さんのものと思われる車に放りこまれる。
「さあ！　デュエルアカデミアに向けて……全速前進！」
「ちょ、まっ……いやあああああああああああああああっ！？」
……追記、光お姉さんの運転は、酷く豪快かつ荒っぽかったです。
「し、死ぬっ！　死んじゃいます！　セツに会う前に死んじゃいますってばぁ～！？」
「大丈夫！　私は車が木っ端微塵になっても無傷で助かったことあるから！」
「私は死にます！」
「アテナなら大丈夫！」
「何を根拠に！？」
「シャルナが守る！」
『無茶言わないで！』
「やっぱり死にます！　セツ！　セツ！　助けてくださいぃぃぃぃ！」
「やっと本音が出たわね！」
「あからさまに死を目前にしてますからね！　死ぬ前に一目会いたいですよ！　悪いですか！？」
キキィィィィッッ！！　とか物凄い音を立てて車がドリフトします。……住宅地で。
「っと！　あっぶねー子供轢くとこだったわ」
「なんで免許持ってるんですか！　取り消しです取り消し！」
「持ってないわよ？」
「論外じゃないですかぁ～！？」
「ゲーセンで散々練習したから！」

「だからなんだっていうんですかぁ！？」
「同じくクルージングも練習だけはしてあるから。……ゲームで！」
「殺される！？」
「ヘリの方が良い？　練習してないから面白そうね」
「希望さんを！　希望さんを呼んでください！　あの人ならなんでもこなしそうです！」
「ジャンボジェットとかなら予習バッチリよ！……コナンの映画で」
「いやあああああああ！？」
「野暮な悩みなんか吹っ飛ぶでしょう？」
「物理的に吹っ飛びそうです！　って前！　前見てください！　崖です！」
「近道なのよ」
「あの世への！？」
「ジャーンプ！」
「ぅきゃあああああああああっ！？」
「エーキサイティング！」
「デンジャラスですよ極めて！」
セツ……ここまで来たらもう素直になります！　会いたいです！
物凄く会いたいです！……死ぬ前に！
『荒療治にも程があるわね……良かったーあたし、精霊で。実体なくて』
「私を失いたくないんじゃなかったんですか！？」
『いや、多分大丈夫よ』
「だから何を根拠に！」
『ギャグ補正かかってるから、吹っ飛んでも無傷よ。きっと』
「現実にギャグ補正なんてものはありません！　シャルナはもっと現実と向き合ってください！」
『え？　そうなの？』
「あああああああああああああ！」
「ニトロ！」

「なんでそんなものがついてるんですかこの車！」
「希望が面白がって付けてくれたわ」
「あああああの人は！」
「ぶっ飛ばせー！」
「やめてぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」
「空を舞え！　重力制御、ウイング起動！」
「オーバーテクノロジー過ぎます！」
「変形ぇぇぇぇ合体！」
「最早意味不明！」
「アカデミアまでひとっ飛び！」
「せめて……せめて遺書だけでも……」
「死なない死なない……あら？　燃料切れ？　もーちゃんと給油しといてよ希望ー」
「……さよならです、セツ。どうか、お幸せに……」
「脱出ポット起動！　目標、アカデミア！」
「って脱出ポットっていうかこの形状はミサイル……っていやああああまた飛んだー！？」
「ってこれ、着地どうすんのかしら……ま、いっか」
「何処がですか！」
「ちぃ……流石に遠くて届かないわね……海中に不時着よ」
「どう考えても墜落ですが！？」
「落ちても生きてりゃ不時着なのよ」
「私は生きていられそうにありません！」
「この脱出ポットの硬度なら問題ないわ」
セツ……もし、生きて再会出来たら……その時は……。
「あ、もしもし希望？　私だけど、船で迎えに来てくれない？　いやーアテナも一緒なんだけど、海中に不時着しちゃって……場所はわかるでしょ？　よろしくー」
「いやあああ！？　墜ち……！？　くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ」

生きて……会えたら……。

どばっしゃあああああああああああん！！

第三期第十五話「迷える少女と偽りの現在」（後書き）

とりあえず、アテナをサクッと帰還させてしまいましょう。次話は書き下ろしでユーキちゃん回をやる予定。それからアテナ帰還、修学旅行としたいと思います。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者？」（前書き）

こんにちは。

今回は豆フクロウさんの「遊戯王ＧＸ～旋風の守護者～」より、主人公甲斐祐騎君とヒロイン紅龍蓮さんにお越しいただきました。とはいえ、デュエルするのは祐騎君だけですが。お相手は現在活躍中の本音担当ツンデレ（！？）エース。結構難産でしたが、なんとか完成しました。どうぞ！

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者？」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者？」

「む……」

早朝、エースが散歩に出かけていると、一ヶ所だけ妙に景色が歪んでいる。

エースは今、希冴姫たちの部屋に居候している。男がいるのは不健全だということで部屋に入ったばかりのセツを追い出しての入居である。

「お前ら……言い分はわかる。わかるが、そんなに俺をたらい回しにして楽しいか！？　俺は一体、何回部屋を変えれば落ち着けるんだ！？」

「少なくとも、我は楽しい」

「鬼か！？」

「騎士だ」

良く言う、と我ながら苦笑した。だが、どうにも毎回やり込められるセツを、ようやくやり込めることに成功したので気分が良かった。結局空き部屋もなく、途方に暮れたセツはテント暮らしの憂き目に遭っている。今も気分よく散歩をしていたのだが……。

「これは……」

不用意に近づくことはせず、やや遠巻きにその歪みを観察するエースに、背後から声をかける者がいた。

「それは、時空の歪。終焉の影響で生み出された、異世界への扉だ」
「何者だ！」
牽制と威嚇の意味を込めて銀の細剣を振るう。しかし、その剣は軽くいなされ。それればかりかキィン……と軽い音と共にエースの手から奪われる。
「なっ！？」
「危ないな。こんな物騒なモノ、人間界ではあまり振り回さない方が良い。問題になるよ？」
そう言って苦笑するのは、エースよりも頭一つ半は高い、長身の男。風に靡く金の長髪といい、隙のない身のこなしといい、タダものではないオーラから、エースはその人物に当たりをつけた。
「……真中希望か？」
「正解。セツから話は聞いているね？　切り札の騎士団長、エース」
「そうか、貴様が……」
セツたちからは、大雑把にしか話を聞いていないが、相当な強者であり、一種のゲームマスター的存在であることは聞いていた。
「なに、そんなにいいものじゃない。権限自体は君たちと何ら変わりない、何処にでもいる一般市民さ」
「戯けたことを」
希望のジョークをエースは一蹴する。あからさまにからかっているのが丸わかりだ。
「それで？　この……時空の歪、だったか。これはどうするべきだ」
「当然、放っておくのは良くないな。以前、セツもこれに遭遇してね。異世界でのデュエルで、歪みを正してきたのだけれど……」
希望は、エースとその歪みを交互に眺める。
「今回は、キミを御指名のようだ」
「何故我が。貴様が行けば良かろう」
「いやいや……物語のメインキャストを退けて主役などとてもとても」
「ふざけた奴だな……」

「けどまあ、実際こういった歪が目の前に現れた以上、今回はキミが主役なのさ。だから、行っておいで」
　真面目なのかふざけているのかは分からないが、確かにこの歪は自分を呼んでいる気がしたエースは、訝しげな顔をしながらも仕方ないと首肯する。
「だが、確かこの歪は異世界へと繋がる扉なのだろう？　向こうの世界で正してしまえば、こちらにはどうやって戻ってくる？」
「なに。基本的にはキミを、世界がこちらの世界に引っ張り戻してくれる。歪がなくなることで異世界とのパスが切れ、修正がかかる、と言った具合さ」
「……とにかく、元に戻れるのならばそれでいい。余計な説明はいらん」
「そうかい？　なら、いってらっしゃいな。僕は、ここで待っていよう」
「待たなくとも構わんが」
「いいじゃないか。キミをけしかけた手前、無事を確認する責任があるしね。責任は取らなくちゃいけない。そうだろう？」
「そうだな。それには、同意してやる」
　それだけ言い残し、エースは歪の中へと身を躍らせた。
「あ、ちょっと待って」
　……訂正、踊らせようとした。
「……な、なんだ人の出鼻をくじいて！」
「いや、君には今説明したけど、良く考えれば相手方にも説明が必要だろう。いきなり現れてデュエルしろ！　じゃあ辻斬りみたいだし。辻斬り扱いされたくないでしょ？」
「……当然だ。我は騎士なのだから」
「というわけで、今回は僕も同行しようか。ストーリーテラーとしての役割、存分に発揮させてもらうよ」
　説明好きの血が騒ぐのか、何処となく嬉しそうな希望を伴って、エースは歪に飛び込んだのだった。

「……む、ここか……」
気がつくと、目の前にはいつものレッド寮。特に代わり映えもしない、普通のレッド寮である。
「……？　異世界、と言っていたが……」
「なに、平行世界も異世界の内だよ」
屁理屈ばかり言う奴だ、と顔をしかめる。
「まあとにかく、中に入ってみるといい。キミのデュエル相手が……まあ、待っているというか、待ちぼうけているというか……」
「なんだそれは。はっきりしないな」
希望の指示する部屋の扉を開ける。と……
「……寝ているな」
「寝ているね」
部屋の中では、一人の男が平和そうな顔で一人眠っていた。確かに、待ちぼうけている、様にも見える。
「とりあえず、起こさんことには始まらないな。おい、起きろ」
適当に声をかけて揺するも、少し反応しただけで中々起きない。氷水でもぶっかけるか、とエースが少々物騒なことを考えていると、男が身動ぎした。
「起きたか？」
「……ｚｚｚ」
ギュッ！
「っ！？　ひ……」
眼を覚ましたかと思ったその男は、寝ぼけてエースに抱きついてきた。
「しッ……」
「あ、剣は預かっておくねー」
「痴れ者がぁぁぁぁぁっ！！」

突き飛ばしてから渾身のアッパー。幸い剣を持っていなかった――剣があればブロック肉にしていた――ので、仕方なく思い切りぶん殴った結果、男は更なる深い眠りに……

「つかないつかない」

「め、滅したか!?」

「滅さない滅さない。倒すならデュエルで。リアルで殴り倒しちゃダメだから」

『きゃあああっ!?　ま、マスター!?』

「む？」

突如聞こえてきた悲鳴に、何事かと振り向けば、そこにいたのは半透明の、鷲のような帽子をかぶった天使の女性。

「……確か、『ガーディアン・エアトス』……だったか」

『そ、そうですマスターの精霊をやらせていただいていますエアトスです！　というよりいきなり何を……』

「痴れ者を成敗しただけだ」

『ウチのマスターぶん殴っておいて何を抜け抜けと……！』

「いきなり見知らぬ男に抱きつかれれば、自衛のために鉄拳くらいは当然だろう」

この際、希望が剣を回収していなければ刃傷沙汰だったことは黙っておく。

『あ、またマスター寝ぼけて……なるほど。ですが、だからといってマスターが殴られたのを平然と見逃すことも……』

「職務熱心なことだな。エアトス」

『当然です！　私はマスターをお守りするために居るんですから！　あ、あと私のことはエールと呼んでください』

「断る。我の名前はエース。エールだと紛らわしい。エアトスと呼ぶ。文句は好きなだけ言え。聞く耳持たんが」

『取り付く島なし!?』

その時、コンコンとドアがノックされ、真紅の髪をしたポニーテールの少女が入ってきた。

「祐騎、起きてる？　また何かヘンな世界に……って、あんたたちは？」
「む……来客か」
「こんにちは。お邪魔しているよ」
未だにムスッとしたエースが少女を一瞥し、相変わらず自然体な希望が軽く手を上げる。
両者を眺め、少女はなるほど、と一つ頷いた。
「……今回のゲストは、あんたたちなのね」
「話が早くて助かるね。紅龍蓮」
「……なんで私の名前を？」
「禁則事項です」
伝家の宝刀一閃。これを言われたら黙るしかない。
「って、祐騎！？　え、なんで祐騎が寝相じゃ説明つかない体勢でベッドから転がり落ちているの！？」
混乱する蓮に、希望が一通りの説明をこなす。ここにはデュエルをするために来たこと。祐騎が寝ていたこと。エースが起こそうとしたら抱きつかれたので自衛のため（強調）全力のアッパーカットで吹っ飛ばしたことなど。
「……ああ、またやったのね祐騎……とりあえず、事情は理解したわ」
顔を赤くしていることや、また、という言い回しから、恐らくは以前やられたことがあるのだろう。この状況も含めて。
「じゃ、とりあえずエースは、祐騎とデュエルをする必要があるのね？」
「そうだ。その痴れ者の女ならしっかりコントロールしておけ。危うく奇怪なオブジェを作りだすところであった」
「お、女！？　ち、違うわよ私と祐騎はそんな……」
「なんでもいいから起こせ。話が進まん」
「おや、もうその話題を終わらせてしまうのかい？　もっと弄れそうなんだけど」

かかった獲物をあっさりとリリースしてしまったエースに、希望は何やら不満げだ。
「弄らなくていいから！　起こせばいいんでしょ！？」
蓮もこれ幸いと赤くなった頬を隠すようにして祐騎を起こしに向かう。慣れたもので、ものの数分で深い眠り（気絶）に落ちていた祐騎を起こすことに成功してしまう。
「流石、手慣れたものだね。まるで熟練夫婦のような手並みで……」
「アンタは黙っていなさい！」
「説明役は引っ込んで後ろで解説していろ。誰も聞かんが」
「……辛辣。では、お言葉に甘えるとしようか」
希望は肩を竦めて背を向ける。
「え、えーと……すみません、なんか、状況が良く分からないんですが……」
突然起こされたと思ったら知らない人間が二人。しかも何やら顎も痛むという状況に混乱する祐騎に、今さっき下がったばかりの希望が嬉々として戻ってきて説明する。よほど説明するのが好きらしく、瞳が輝いている。
「なるほど……では、僕はエースさんとデュエルすればいいんですね？」
「そうだ。出来れば付き合って欲しい」
「はい。僕で良ければ喜んで」
「ふふ……そのセリフだけ抜き出せば告白っぽいね」
「だから、アンタは黙ってなさい！」
相変わらず余計な茶々を入れてくる希望を半ば無視し、エースと祐騎はデュエルデスクを構える。
「「デュエル！！」」
「僕の先攻、ドロー！　僕は『暴風小僧』を攻撃表示で召喚。ターン終了です」
「我のターン、ドロー！　我は永続魔法『ポット』を発動する！」
「『ポット』？」

初めて聞くカード名に、祐騎だけでなく蓮も首をかしげる。
「解説しよう。永続魔法『ポット』は、発動時互いに５００ポイントライフを支払わなければ発動できない。このカードが存在する限り、ライフを支払う効果を使う度、１００ポイントごとにチップカウンターを一つ、このカードに乗せる。更に、互いのスタンバイフェイズ時にも、最低１００、最高５００のライフポイントを支払う。そして、戦闘によってモンスターを破壊した時、破壊したプレイヤーはこのカードに乗っているチップカウンターを全て取り除くことで、その数×２００ポイントライフを回復するゲインカードだ」
「なるほど……と言うことは」
「ああ。賭けようか。我らのライフを。まずは５００ずつ、な」
エース&祐騎ＬＰ３５００
「そして、我は『お注射天使リリー』を攻撃表示で召喚する」
「リリー！？」
「そうか、リリーの効果は……」
「そう。“ライフコスト”だ。バトル！『お注射天使リリー』で『暴風小僧』を攻撃！　そして我はライフを２０００ポイント支払って効果発動！」
エースＬＰ１５００
『お注射天使リリー』の注射器が巨大化し、『暴風小僧』に突き刺す。
「子供になんて仕打ちを。トラウマになったらどうするんだい？」
「……だ、黙れ」
「ところで、攻撃名は言わないのかい？　ほら、『検診のお時間でーす』って」
「黙れと言っている！」
希望の茶々はともかく、リリーの攻撃により、『暴風小僧』は破壊される。
「くっ……！」
祐騎ＬＰ１６００

「そしてこの瞬間、永続魔法『ポット』の効果が発動する！　今のコストで、『ポット』に乗っているチップは三十枚！　よってライフを６０００ポイント回復！」
エースＬＰ７５００
「なっ……」
蓮が絶句する。初手からライフ差が６０００近く開いたのだから無理もない。
「何よあのチート！」
「いやまったく。リリーはキツイね。あの効果と相性抜群だ」
何しろ、『ポット』の影響下ではライフコストがコストにならない。これでは『お注射天使リリー』は実質攻撃力３４００の三つ星。しかも攻撃する度２０００ライフを回復するようなものだ。
「更に我はカードを一枚セット。ターンエンドだ」
「つっ……いきなり手痛いダメージだ……僕のターン、ドロー！」
「『ポット』の効果だ。ライフを支払え」
「くっ……僕は１００ポイントライフを支払います」
祐騎ＬＰ１５００
「祐騎！　頑張って！」
とはいえ、序盤からこのライフ差はキツイ。
「祐騎……」
心配そうに祐騎を見つめる蓮に、希望はフッ、と微笑みかける。
「大丈夫。彼は、打開策を見つけているよ」
「え？」
「行きます！　魔法カード『死者蘇生』！　墓地から『暴風小僧』を蘇生します！」
「させん！　カウンタートラップ『神の警告』！　ライフを２０００ポイント支払い、モンスターの特殊召喚を含む効果を無効にし、破壊する！」
エースＬＰ５５００
そして、ライフを支払ったことにより『ポット』にチップカウン

ターが２０枚乗る。
「祐騎！」
「いや、これでいい」
「え？」
なんでもないことのようにそういう希望に、蓮が一瞬顔を向ける。
蓮の耳に、祐騎の力強い声が聞こえてくる。
「僕は装備魔法『早すぎた埋葬』を発動！　ライフを８００ポイント支払い、『暴風小僧』を蘇生！」
祐騎ＬＰ７００
ライフを支払ったことでチップカウンターが乗る。
「くっ……馬鹿な。『死者蘇生』を囮に『早すぎた埋葬』だと？」
通常なら、まったく反対の戦術をとるだろう。だが、『ポット』の発動下に於いてはこの“セオリー外”こそが妙手となる。
「更に『暴風小僧』をリリースして『神禽王アレクトール』をアドバンス召喚！」
「っ！　アレクトール！？」
「そして、これがリリーの攻略法」
「行きます！『神禽王アレクトール』の効果発動！　このターンのみ、『お注射天使リリー』の効果を無効化します！」
「しまった！？」
「バトル！　アレクトールでリリーを攻撃！『デルタ・リバース・トルネード』！」
「くあっ！？」
エースＬＰ３５００
「更に、モンスターを戦闘で破壊したことで僕もライフを回復します！」
現在『ポット』に乗っているチップカウンターの数は２９。
「よって、僕はライフを５８００ポイント回復します！」
祐騎ＬＰ６５００
「これで、形勢逆転だ」

「すごい……」
ライフ差約６０００を一気にひっくり返した祐騎。それを、あたかも未来を読むかのごとく言い当てた希望。どちらも尋常ではない。
「僕はカードを二枚セット！　ターンエンドです！」
「我のターン、ドロー！　我は『ポット』にライフを１００支払う。我は手札から魔法カード『レイズ』を発動！　ライフを５００支払ってカードを三枚ドロー！」
『レイズ』は『ポット』が存在するときのみ使用可能なドロー補助。エースはカードを三枚ドローする。
「我は『切り札の騎士―テンス』を召喚。魔法カード『二重召喚』を発動！『切り札の騎士団長―エース』。即ち我自身をアドバンス召喚する！」
エースＬＰ３４００
「レベル７モンスターを一体のリリースで！？」
「我はリリース軽減能力を持っている。さあ、これで我の準備は整った」
エースは祐騎に向かって、無敵な笑みを浮かべる。
「我は手札から魔法カード『ブラック・コア』を発動！　手札を一枚捨てることでアレクトールを除外する！」
「うっ……アレクトールが……」
「更に、我のモンスター効果を発動！　我が存在する限り、我も貴様も、手札を捨てる度、カードを一枚ドロー出来る」
「手札コストまで……まさか、そのデッキは……」
「そうだ。我と、この『ポット』の効果を利用したコストレス・ポーカー！　我はたった今引いた装備魔法『閃光の双剣―トライス』を我に装備！　手札を捨てたことによりカードをドロー！」
「コストレス……！」
なんという恐ろしいデッキ。コストとは基本的に、強すぎる効果の規制のために設けられていると言うのに、それを無視するなど。
「バトル！　ダイレクトアタックだ！　二連続攻撃！」

「ぐぅぅ！」
祐騎ＬＰ３５００
「またライフが並んだ……」
「良い勝負だね」
そう言った希望だが、すぐに表情を鋭い笑みに変えて呟く。
「だが、もう終わる」
「え？」
「我はカードを一枚セットし、ターンエンドだ！」
「僕のターン、ドロー！　僕は『ポット』にライフを１００支払います。僕は墓地の『暴風小僧』を除外して『シルフィード』を攻撃表示で特殊召喚！」
「さっきアレクトールを除外ではなく、破壊しておくべきだったな。エース」
希望の言葉。確か、祐騎の墓地にはこれで……。
「僕の墓地にモンスターがいないことで、僕は『ガーディアン・エアトス』を攻撃表示で特殊召喚します！」
『エースさん、私のマスターを殴った分は、きっちりお返ししますよ！』
「バトルフェイズ！　僕は『ガーディアン・エアトス』でエースさんに攻撃！『フォビドゥン・ゴスペル』！」
「させん！　トラップカード『サンダー・ブレイク』！　悪いが倒させてもらう！」
「なら、僕も『サンダー・ブレイク』にチェーンしてトラップカード『ブラスト・モード』！」
「出たわ！　祐騎の切り札！」
「説明しよう。『ブラスト・モード』は、特定のモンスターを／ブラストと名のついた上位種に進化させることができる通常罠カードだ」
「……なんで別世界のアンタが説明できるのよ」
「解説キャラなもので」

その癖解説になっていないことを言う。
「『ブラスト・モード』の効果で、エールを進化！『ガーディアン・エアトス／ブラスト』！」
『力が漲る……！　これなら！』
「そして『ブラスト・モード』の効果で特殊召喚されたエールは、このターンエースさんの魔法・罠・モンスター効果を受け付けません！」
「なにっ！？」
よって『サンダー・ブレイク』は不発。更に、進化した守護者の、真の力が解放される……！
「『ガーディアン・エアトス／ブラスト』の効果発動！　お互いの墓地に存在するエアトス以外のモンスターを全てデッキに戻し、その数×５００ポイント攻撃力がアップします！」
「……我の墓地に存在するモンスターは二体だ」
『墓地に眠る魂よ。私に力を！』
リリーとテンス。二体の魂が守護者の銃に吸い込まれ、攻撃力が１０００ポイントアップする。これで、攻撃力は３８００。
「更にトラップカード『ダブル・ショット』！　このターンのエンドフェイズに対象を破壊する代わり、エールの攻撃力を倍にします！」
攻撃力７６００。
「バトルを再開します！『ガーディアン・エアトス／ブラスト』で、『切り札の騎士団長―エース』に攻撃！『コミュニオン・ブラスト』！」
『ええい！　スピリット・ブラスター、シュート！』
「ぐあああああっ！？」
エースＬＰ０

「大丈夫ですか!?　すみません、エースさんの分身に……」
「否、心配するな。むしろ今は、気分が良い」
「え?」
言葉の通り、どこか清々しい表情のエースはエアトスと祐騎に顔を向けた。
「最後、テンスとリリーをデッキに戻してくれて、ありがとう」
困惑する二人に、エースが言ったのはそんなことだった。
「何、我もお前と同じだ。出来れば、墓地にあいつらをとどめたままデュエルを終えたくはなかった」
「エースさん……」
「……やはり、別世界にも、居るものだな。我々を道具ではなく、生き物として、友として扱ってくれるものが。それがわかっただけで、我は満足できる。勝敗など、些末事に過ぎん」
エースの身体が透け始める。歪が消え、世界に引き戻されるのだろう。
「さらばだ。異世界の精霊使い。願わくば、その優しき心が陰らんことを」
「は、はい!　エースさんも、どうかお元気で!」
お前もな、という言葉と笑みを残して、エースは消滅した。
「さて、じゃあ僕も後始末をしてから帰るとしようか。君たちも、元の世界に送ってあげるよ」
「え?　そういえばあんたはなんで帰ってないのよ」
「フフ。さっき説明した事情だけど、実は嘘なんだ」
世界が徐々に綻びていく。端から糸が解けるように。
「嘘?」
「彼女の前に歪なんて現れていない。今回は僕の自作自演。君たちは、無自覚の仕掛け人。悪かったね。利用しちゃって」
「え、えっと……よく事情が……」
困惑する二人に、希望はまた笑顔を向ける。
「彼女は……エースは少々、繊細な子でね。モンスターが墓地に送

られる。とりわけ精霊が墓地に行くことが我慢ならない性質なんだ」
　希望は二人に、エースの事情を話して聞かせる。
「そんなことが……」
「だから、エアトス。墓地から魂を救いだす守護者を使うキミに、彼女の相手をして欲しかった。それが、今回の主題。ありがとう。優しい勇者殿」
「いや、僕は！」
　いきなり勇者などと言われ、思わず顔を赤くする祐騎。
「それじゃあ、二人も元の世界で仲良くね。君たち二人の前に、光差す道があらんことを」
　希望が指差す先、そこには光の道らしきもの。
「さあ、その道を行くといい。元の世界に戻れるハズだ」
「あ、あの」
「うん？」
「ありがとうございました。僕を選んでくれて」
「……どういたしまして」
　純朴な言葉に心からの笑みを浮かべ、希望は返す。
「それじゃあ、行きなさい。もうすぐこの世界が壊れるよ」
「え、ええ。行きましょ。祐騎」
「はい。蓮さん」
　二人の少年少女は手に手を取り、光の道を行く。それを見届けて、希望は解けて逝く世界を見上げる。
「すまなかったね。使い捨ての世界。キミの残骸は、決して無駄にはしないと誓おう」
　解けた光の糸を、希望は掌に集め、光の珠をその手に抱える。
「さあ、次はどんな物語（せかい）を紡ごうか」
　世界が全て光の珠に消えると共に、希望もまた、その世界から姿を消した。

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者？」（後書き）

とりあえず二つほどコラボを終えた感想。

コラボって思いの外難しい！　あと、自分が作ったオリカがちょうどいいと思っていても、やっぱりチート臭い！　リリー強い！『ポット』あるとリリーめちゃ強い！　最強のメリットモンスター！

なにコストレスデッキって！？　反則！

やっぱ、使ってみないとわかんないもんだなぁ……制限くらいは行きそうだ。

そしてエースより希望を目立たせてしまった。反省点多し。

どうにも微妙な感じになってしまいましたが、豆フクロウさんの旋風の守護者。こちらもよろしくお願いします。シンクロを導入する流れとかが秀逸ですので。あと、僕はティルが好き。このコラボでは出してない癖に。

それでは、悠でした！

第三期第十六話「心理作戦！」（前書き）

大分更新が遅れてしまい、申し訳ありません。
少々風邪を引いて、とりあえずは病み上がったので更新です。
完全書き下ろし。ユーキちゃん分補充回の前編になります。……はい。二話あります。ユーキちゃんの話。まあいいでしょう。ダークホース的活躍はともかく、普段はあまり影が濃くないユーキちゃんですし。後、アルカナに於いて不足気味の原作キャラの出番もありますので、どうかお楽しみください。

第三期第十六話「心理作戦！」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第十六話「心理作戦！」

先日のエド・フェニックスとのデュエルに敗北した十代が、精神的ショックからか、カードが全て真っ白にしか見えなくなってしまったと報告を受けた俺は、急ぎ足で保健室へと向かっていた。

「十代！」

「あ……セツか」

保健室についた俺が見たのは、今まで見たことがないほど覇気がなくなっている十代の姿だった。

「十代……」

「へへ……情けないぜ。セツに勝って欲しいって言われてたのにな。それに、セツは勝ったんだろ？　明日香たちから聞いたぜ」

「ああ……」

なんとか笑顔を見せようとする十代に、俺は何も言えずに目を逸らした。

「参っちまうよな。全然、見えないんだ。カードが。相棒の声も、聞こえなくなっちまってさ……」

「ハネクリボーの？　そういえば……」

十代の傍に、ハネクリボーの姿がない。十代が見えなくなったからなのか、或いは……。

「十代」

俺は考えた末、このことは十代自身の問題だと結論付けた。
「セツ？」
「俺は信じてるからな」
「え？」
「お前は、こんなところで潰れる奴じゃないって。それに、まだ俺はお前と、本気のデュエルしてないんだ。こんなところで終わって貰っちゃ困る」
俺に言えることはこの程度。後は十代自身が立ち直る切欠を掴まないとダメだろう。
「セツ……」
「んじゃ、今日の所はこれで。お前はゆっくり休めよ。俺はこれから授業だからな」
どちらにせよ、今みたいにどんよりと沈みきったままじゃ立ち直るも何もない。今はゆっくり休むことが一番の特効薬だろう。そう判断した俺は、十代を残して教室へと向かった。

「それでぇ～わ。本日の授業を始めるノ～ネ。……シニョ～ルセツも、ちゃんといるノ～ネ？」
「見ての通り、いますよ」
以前からクロノス先生は、俺がちゃんと授業に出席しているかどうかを本来の出席確認とは別に行うようになった。……そんなに信用ないか。俺。
「よろしいノ～ネ。本日ゥ～わ、タッグデュエルのお勉強なノ～ネ。ルールの確認をしてから、各自ペアを組むノ～ネ」
何だかんだ、クロノス先生の授業は他の授業と比べればやはり実践的だ。実技指導の責任者というのもあるんだろうが、ルールとかは各自で確認。兎に角実践してみましょうという授業スタイルは俺からすれば好感が持てる。

「っと、タッグデュエルということは……」
俺は目的の人物を探す。丁度向こうも俺を見つけたようで、少し小走りで此方に向かってきた。
「セツくん、組も～？」
「ああ、約束だったしな。ユーキちゃん」
以前進級デュエルの際にユーキちゃんとタッグを組む約束をしていたことを思い出す。
「えへへ～ちゃんと覚えていてくれたんだ。良かった～」
「忘れたら後が怖そうだからな」
「あーわたしそんなことで怒ったりしないよ～」
一頻り談笑し、改めて今回のルールに目を通す。
「……なるほど。フィールドは共通。ライフも共通で８０００。先攻一ターン目のターンプレイヤーのみバトルフェイズを行えないルールか」
所謂タッグフォースルールと言う奴だ。まあ、標準的なタッグルールだな。
「じゃあ、少しお互いのデッキを弄ろうか。そのままだと色々と不都合も出てくるだろうし」
「うん。と言っても、わたしの方は大体出来てるよ～。タッグのことは考えてたからー」
そう言ってユーキちゃんがデッキを手渡してくる。ふむ……。
「なるほど。特に問題ないかな？　後は……」
ユーキちゃんのデッキに合わせて俺もデッキを調整する。と言っても、今は希冴姫がダウンしているのでエース主軸のコストレスパーミッションだが。
「よし、こんなもんだろ」
「それじゃあ、デュエル相手を探そっか」
ユーキちゃんの言葉に頷き、誰か空いている相手はいないか周囲を見渡す。
「おい、セツ」

「ん？　万丈目か？」
「さん、だ。デュエルの相手を探しているなら、オレたちが相手になってやる」
　見れば、万丈目と組んでいるのは翔だ。
「また、珍しい取り合わせだな」
「フン、十代の奴が潰れていては、コイツと組む奴がいないだろうが」
「そ、その言い方は酷いッス！　大体、万丈目君だって組む人いないじゃないッスか！」
「馬鹿言え！　オレ様は組む相手を選り好みしているだけだ！　今回貴様と組んでやったのも、十代の代わりに仕方なくだ！　わかったら精々オレに感謝するんだな！」
「はいはい、わかったからやろうぜ。授業時間がなくなるだろうが」
　なんだかんだで、コイツも十代のことを気にしているのはわかるし、意外とこれで面倒見がいいことも承知しているので安心だ。
「フン、まあいい。お前らがオレの相手になるのか知らんが、精々楽しませろ」
「相変わらず、プライド高い奴だな……お前と気が合うんじゃないか？　エース」
『馬鹿を言うな。騎士のプライドとエリート思考のプライドを同列視するな』
「そりゃ悪かった」
　まあ、万丈目もこれで大分丸くなったんだけどな。
「セツ君、今日はよろしくッス」
「おう、しかし、翔たちと真面目にやるのは何だかんだで初めてじゃないか？」
「そうかもしれないね。じゃあ、尚更負けられないッス！」
「同感だ」
　笑い合い、お互いに向かい合ってデュエルフィールドに着く。
『デュエル！！』

「オレの先攻！　ドロー！」
先攻は万丈目か。とすると、俺のターンが回ってくるのは最後だな。
「オレは永続魔法『前線基地』を発動！　手札から『Ｗ－ウイング・カタパルト』を特殊召喚！　更に『Ｖ－タイガー・ジェット』を攻撃表示で召喚する！」
『Ｗ－ウイング・カタパルト』ＡＴＫ１３００
『Ｖ－タイガー・ジェット』ＡＴＫ１６００
万丈目はＶＷＸＹＺデッキか。まあ、翔とタッグを組むならアームド・ドラゴンよりもそっちだよな。
「行くぞ！　オレは二体のモンスターを除外し、『ＶＷ－タイガー・カタパルト』を特殊召喚！」
『ＶＷ－タイガー・カタパルト』ＡＴＫ２０００
「早速か」
攻撃力２０００は、アルカナ軸の俺なら決して高くはないが、ヴァンダルギオンを除くと最大攻撃力がエースの２０００でしかない今の俺からすれば十二分に高い攻撃力だ。
「オレはカードを一枚セット。ターンエンドだ」
「わたしのターン、ドロー！　わたしはモンスターを一体守備表示でセット。カードを一枚セットして、ターンエンドだよ～」
ユーキちゃんは目立った動きは見せず、カードだけ伏せて終了する。守備モンスターは……『シャインエンジェル』か。
「ボクのターン、ドロー！」
先日めでたくラー・イエローに昇格した翔。表情からも心なしか自信を見てとれる。
「僕は『ドリルロイド』を攻撃表示で召喚！　バトルだ！」
『ドリルロイド』ＡＴＫ１６００
「これは……マズイか！」
「『ドリルロイド』で加藤さんの守備モンスターを攻撃！」
「きゃっ！？」

守備モンスターの『シャインエンジェル』が破壊される。
「『ドリルロイド』は相手の守備モンスターと戦闘する場合、ダメージ計算を行わずに破壊できるんだ！」
「リクルーター封じか！」
これで俺たちの場はガラ空き。
「更に『ＶＷ－タイガー・カタパルト』でプレイヤーにダイレクトアタック！『ＶＷ－タイガー・ミサイル』！」
「きゃあああっ！？」
「ちっ！」
セツ＆ユーキＬＰ６０００
「僕は永続魔法『機甲部隊の最前線』を発動。カードを一枚セットして、ターンエンド！」
「くっ、俺のターン、ドロー！」
しかし、面倒だな。手札一枚をコストに表示形式を変更出来るタイガー・カタパルトと守備モンスターを問答無用で破壊する『ドリルロイド』か。即席タッグの割に、効果がシナジーしてやがる。
「俺は『切り札の騎士―テンス』を召喚！　魔法カード『二重召喚』！　テンスをリリースし、『切り札の騎士団長―エース』をアドバンス召喚！」
『切り札の騎士団長―エース』ＡＴＫ２０００
早速頼む！　エース！
『ふん。いいだろう。任せておけ』
俺の手札に、翔たちの伏せカードを破壊出来るカードはない。仕方ないか。
「バトルフェイズ！　エースで『ドリルロイド』を攻撃！『リッター・ブリッツ』！」
『せいっ！』
「うくっ……！」
万丈目＆翔ＬＰ７６００
「この瞬間、『機甲部隊の最前線』の効果発動！　そしてチェーン

して永続トラップ『サイバー・サモン・ブラスター』を発動！」
「む……」
機械族の特殊召喚に応じてダメージを与えるトラップか。機械族の融合召喚を主体とするあいつらには合ったカードだな。
「僕は『トラックロイド』を特殊召喚！『サイバー・サモン・ブラスター』の効果でセツ君たちに３００ポイントのダメージッス！」
『トラックロイド』ＡＴＫ１０００
「ぐっ！」
「きゃあ！？」
セツ＆ユーキＬＰ５７００
「……やるじゃないか。翔」
「僕だって、いつまでもアニキたちの足手纏いじゃないッスよ！」
イエローに昇格し、表情にも幾分か余裕が出てきた翔。
「俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」
「フン、オレのターン、ドロー！」
「この瞬間、トラップカード発動！『砂塵の大竜巻』！『サイバー・サモン・ブラスター』を破壊する！」
継続的にダメージを与え続ける永続罠はさっさと破壊しておくに限る。ただでさえ特殊召喚を多用する機械族デッキなんだから。
「ああっ！？」
「更に、効果により手札のカードを一枚セットする」
多くの人が忘れがちなこの効果だが、ことタッグデュエルに於いては有効に作用する！
「フン、だがお前は破壊するカードを誤った。見るがいい！　この万丈目サンダー様のデュエルタクティクスを！　オレは手札から魔法カード『天使の施し』を発動！　デッキからカードを三枚ドローし、二枚を墓地に捨てる！」
「む……」
手札交換？　いや、万丈目のデッキタイプを考えると……。
「そして、墓地に捨てた『おジャマジック』の効果発動！　デッキ

から雑魚共を手札に加える！」
『オイラたちの出番だわ～ん！』
「ええい！　お前たちに出番などない！　たまたま手札に来たから捨てただけだ！」
『ああん、アニキったらイケズぅ～』
……なんか変な奴らも来たな。
「うるさい！　オレは『Ｘ－ヘッド・キャノン』を攻撃表示で召喚！　更に永続魔法『前線基地』の効果により手札から『Ｙ－ドラゴン・ヘッド』を特殊召喚！」
『Ｘ－ヘッド・キャノン』ＡＴＫ１８００
『Ｙ－ドラゴン・ヘッド』ＡＴＫ１５００
「ま、マズイ……！」
この流れは……！　ということはあの伏せカードは恐らく……。
「リバースカードオープン『ゲットライド！』を発動！『天使の施し』で墓地に送った『Ｚ－メタル・キャラピラー』を『Ｘ－ヘッド・キャノン』にユニオン！　更にユニオンを解除して特殊召喚！」
『Ｚ－メタル・キャタピラー』ＡＴＫ１５００
「やっぱり……」
くそ、油断していた。まさか……。
「オレの場のＸ・Ｙ・Ｚの三体をゲームから除外し、融合デッキから『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』を融合召喚！　そして『ＶＷ－タイガー・カタパルト』と共にゲームから除外することで『ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン』を融合召喚だ！」
『ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン』ＡＴＫ３０００
まさか、たったの二ターンであの召喚条件が鬼畜なモンスターを呼び出すとは！
「ハッハッハ！　どうだ見たかセツ！　これが万丈目サンダーのタクティクスだ！」
「……ああ、認めるよ。確かに、大した引きだ。驚嘆に値する」
「フン、それでいい。行くぞ！『ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパル

トキャノン』の効果発動！　一ターンに一度、相手フィールド上のカード一枚を除外する！　オレはセツの伏せた二枚目の伏せカードを除外する！『ＶＷＸＹＺ－アルティメット・ディストラクション』！」

「くっ……『トラップ・ジャマー』が……」

『トラップ・ジャマー』はバトルフェイズの発動しかできないので、『ゲットライド』をパーミッションすることは出来なかった。

「チッ、ただのカウンターか。ならばバトルだ！　ヴィトゥズィで『切り札の騎士団長－エース』を攻撃！『ＶＷＸＹＺ－アルティメット・ディストラクション』！」

『ぐおおおおっ！？』

「エース！　ぐああっ！？」

「きゃあああっ！？」

セツ＆ユーキＬＰ４７００

「そして『トラックロイド』でプレイヤーにダイレクトアタックだ！」

「ぐぅ……」

「うっ……」

セツ＆ユーキＬＰ３７００

「オレはこれでターンエンドだ！」

「うくっ……わたしの、ターンだよ～」

マズイな……大分旗色が悪い。砂塵経由でユーキちゃんにトスしたカードも速攻性はないし……。

「しかも、対して役に立ってない俺の方は手札ゼロ、か……」

どうにも、アテナとの時といい俺はタッグデュエルが苦手らしい。パーミッションの特性的な理由もあるんだろうが……。

「ドロー！……」

ユーキちゃんはどうすればいいか迷っている風だった。手札に逆転の手はあるが、ヴィトゥズィの効果を考えて下手な手は打てないと考えているのだろう。

「セツくん……」
ユーキちゃんが不安そうな表情で俺に目を向けてくる。俺も助言してやりたいが……。
「ダメなノ～ネ。タッグパートナーのターン中に、助言は許されないノ～ネ！」
「ぐ……」
クロノス先生の言う通りだ。今はユーキちゃんのターン。俺が口を挟むことは許されない。ここは、ユーキちゃん自身の力で乗り越えてもらうしかない。ない、が……。
「ユーキちゃん」
「え？」
せめて、意志を込めてユーキちゃんの目をみつめる。これで、意志が伝わるかどうかはわからないが……これまで、ユーキちゃんのデッキ構築やタクティクス指南は俺が一緒にずっとやってきたんだ。それを思い出してもらえれば！

「セツくん……」
わたしは改めて自分の手札を眺める。手札は五枚、フィールドのカードはセツくんがトスしてくれたカードとわたしの一ターン目に伏せた『リミット・リバース』。こちらの方は、『シャインエンジェル』が除去されてしまった時点で今は無用の長物と化しているからアテには出来ないし～。
「セツくんのくれたカードは……」
『封印の黄金櫃』。
「えっ！？」
思わずセツくんを見る。……なんで、自分で使わずにトスしたの……？　ううん、それよりも今は、これを使ってどうするか考えないと……。

「多分、セツくんはわたしの方がキーカードが多いからって渡してくれたんだろうけど……」
確かに今、手札に『レベルアップ！』のカードがない。それを使えば、どうにかなるのは手札の『サイレント・マジシャンＬＶ４』が物語っている。よし、なら……。
「リバースカード、オープ……」
そこではた、と気付いた。
そんな安易な使い方でいいの……？
いくら手札がそう出来る手とはいえ、サーチには時間がかかる。ライフも正直心許ないし、そんな悠長なことはしていられない。
「でも……」
今すぐにどうにかするには、『封印の黄金櫃』じゃあ役に立たない。じゃあどうすれば？
「どうした？　戦意喪失か？」
「ちょ、ちょっと待って～！　考え中だから～！」
うん、そうだ。もっと考えよう。セツくんの目を思い出すの。セツくんとのデッキ作りとか、戦術指南とか、そういうセツくんとの思い出を！
「えへへー……って、浸ってる場合じゃないよ～！」
っそうだ！　確かセツくん、『封印の黄金櫃』のデメリットである情報アドバンテージについてもなにか言ってた！　確か～……。
「……うん、決めた！　わたしはセツくんの渡してくれた『封印の黄金櫃』の効果を使うよ～」
「なに!?　そんなものを何故伏せカードに……」
「わたしはデッキから『オネスト』を選択してデッキから除外するよ～。そして手札から『サイレント・マジシャンＬＶ４』を攻撃表示で召喚。カードを一枚セットしてターンエンドだよ～」
『サイレント・マジシャンＬＶ４』ＡＴＫ１０００
……これでいい、筈！　だよね、セツくん！
「僕のターン、ドロー！」

「この瞬間『サイレント・マジシャンＬＶ４』にカウンターが一つ乗るよ～」
『サイレント・マジシャンＬＶ４』ＡＴＫ１０００→１５００
大丈夫。きっと大丈夫。そう思ってはいても、心臓がバクバク言ってるのがわかる。
「……う～ん」
丸藤くんは迷ってる。多分、ヴィトゥズィの効果で何を除外するか迷ってるんだ。わたしの場には前のターンから残っているカードを含めてリバースカードが二枚。攻撃表示の『サイレント・マジシャンＬＶ４』が一体。ずっと発動していない『リミット・リバース』は選択しないとして、残る選択肢は二つ。
「おい翔！」
「な、なんスか万丈目君？」
「……っむん！」
「ってそんな気合入れて睨まれても、僕たちにセツ君たちみたいな意志疎通は無理ッスよ～！」
……なんか変なことしてる。
「う、うぅ……ぼ、僕は加藤さんがさっき伏せたカードを除外するッス！」
「う……除外されるのは『奈落の落とし穴』だよ～」
丸藤くんが効果を使う前にモンスターを出していたら引っかかったかも知れないんだけど……。
「よし、そのまま押し潰してしまえ！」
「わかったッス！　僕は『スチームロイド』を召喚！　バトル！」
『スチームロイド』ＡＴＫ１８００
「行くよ！『ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン』で『サイレント・マジシャンＬＶ４』に攻撃するッス！」
「っ！」
瞬間、わたしは思わずセツくんの方を振り向いた。
「やった、やったよセツくん！」

「！？」
「この瞬間、手札から『オネスト』を捨てて効果発動するよ～！」
「ええっ！？」
「バカなっ！？『オネスト』だと！？　何故今持っている！？」
丸藤くんも万丈目くんも凄く驚いていた。だってその筈。『オネスト』はさっきわたしがデッキから除外して、手札に引き入れようとしていたカード。
「えへへ～。『オネスト』はデッキに一枚きりじゃないから～」
わたしは、セツくんの言葉を思い出して考えた。
『『封印の黄金櫃』の欠点は手札に何を加えるか特定されてしまうってことだが、それはつまり、相手に対して、その時点で手札に欠けている物を誤認させる手段にもなり得るんだ』
つまりは、そういうこと。一種の心理トリックの様なもの。『オネスト』がデッキに複数入っているくらい、万丈目くんたちなら普通想像出来る。でも、さっきわたしが『封印の黄金櫃』でデッキから手札に加えようとした時に、二人は勘違いしちゃった。
「わたしは今『オネスト』を持っていない、って」
そして思わせぶりに攻撃表示で出されたモンスターと伏せカード。ヴィトゥズィの効果で除去できるのは一枚だけ。なら……。
「伏せカードを除去したくなるよね～」
何せ、二人からすればわたしは今『オネスト』を持っていないから。なら、攻撃表示の『サイレント・マジシャンＬＶ４』はただの攻撃を誘い、トラップを発動させるための囮程度にしか思わなくても仕方ないよね～。曲がりなりにも、もしかしたらどうにかできるかもしれないトラップだったこともあるし。
「うん。はじめから持ってたんだ。『オネスト』」
にこっ、と会心の笑顔でわたしはセツくんを見る。セツくんもまた、笑顔で見返してくれた。
『サイレント・マジシャンＬＶ４』ＡＴＫ１５００↓４５００
「うわあああああっ！？」

「ぐうううううっ！？」
万丈目&翔ＬＰ６１００
『ＶＷＸＹＺ－ドラゴン・カタパルトキャノン』の砲撃を、光の盾で受け止めた魔法少女が、反撃の魔法で変形合体ロボを破壊する。
「さあ、反撃開始だよ～」
わたしはセツくんと顔を見合わせて、小さくハイタッチするのでした。

第三期第十六話「心理作戦！」（後書き）

こんにちは。

というわけで、セツ＆ユーキちゃんＶＳ万丈目＆翔のタッグデュエル前半部分です。いや～ホントはデュエルを前半後半に分けるのはあんまりしないタイプなんですけどね。思った以上に長くなってしまったので、キリの良いところで分けました。なるべく早い内に、後編をアップしたい所存。

翔がなんか『機工部隊の最前線』とか使ってますが、仕様です。いえ、ロイドとの相性は悪くないので、問題はないかなと。ついでに、ＶＷＸＹＺとの相性もいいです。まあ、両者の相性は良くないですが。属性が違うので。

心理作戦については……まあ、悠の頭ではこの程度が限界か（ぁいやいや攻撃表示の時点で『オネスト』疑おうよ！　とかいう意見があるのは承知の上です。でもまあ、ある程度は理にかなった行動のは、ず……？　だといいなぁ……。

それでは、悠でした！

※ちょっとだけ修正。天使の施しの際、捨てたカードのもう片方を『おジャマジック』にしました。

第三期第十七話「御堂切の突発的ヤンデレ対策講座」（前書き）

まずはじめに謝っときます。すみません！　二話使っても終わりませんでした！……ま、まさかここまで長引くとは……いえ、デュエルどうこうじゃなく……まあ本編を見れば一目瞭然なのですが……とりあえず、もう一話続きます。今回は、ユーキちゃんよりもタイトル通りセツが目立っている話です。

第三期第十七話「御堂切の突発的ヤンデレ対策講座」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第十七話「御堂切の突発的ヤンデレ対策講座」

「さあ、反撃開始だよ～」

私はそう言う加藤さんたちのデュエルを見ていて、驚いた。

「天上院くん……」

「ええ……」

侮れない。その一言ね。加藤さんと言えば、セツと関わるようになってから成績が随分良くなったということこそ聞いていたけれど、セツ自身や元ブルーの万丈目君。最近イエローに上がって調子の良さそうな翔君と言ったメンツの中では、正直埋もれてしまうと思っていた。その彼女が、万丈目君のエースモンスターを打倒した。

これまでの授業の中でも、時々そんなことがあった。以前、十代とのエキシビジョンマッチの時にも、あわや十代を倒しそうなところまで行ったことも覚えている。それでも尚、彼女のことは正直眼中になかった。

「けど……違ったわね」

「カードの効果だけじゃなく、デメリット効果やそれによる相手への情報アドバンテージ、その全てを利用した高度なプレイングだ。“速攻性のないサーチカード”としてのデメリットを、まさかメリットに逆転させてしまうとはな……」

三沢君の分析に頷く。情報アドバンテージ……そんな使い方があったなんてね。

「……セツが教えたのかしら？」

「だとしても、実践で使うことが出来る以上、彼女の実力だろう。以前、加藤と十代のでエキシビジョンがあったが……」

「ええ。あの時も、あと一歩のところだったわね」

「いや、あのデュエル、加藤のプレイングミスがなければ十代が負けていたんだ」

「え？」

「詳しくは省くが、『サイレント・ソードマンＬＶ７』の魔法封殺能力。あれを発動されていたら、十代はお得意の融合も、サポートカードも、ドロー補助カードも使えず負けていた筈だ。とはいえ……」

「その時は、まだ隙があった」

「そうだ。プレイングミスという隙があった。だが、今の彼女には……」

「……強敵ね」

「ああ。正に『沈黙（サイレント）の闇狩人（ダークホース）』と言ったところか」

「ダークホース、ね……」

「ちぃっ！　まさかセツならまだしも、貴様に煮え湯を飲まされるとは……！」

「ダークホースだったッス……」

「だ、だからぁ～！　どうしてみんなしてわたしをダークホース呼ばわりするのよ～！」

顔を赤くして、恥ずかしそうにそう叫ぶユーキちゃん。相変わらず、サイレント・ダークホースの呼び名は不満なようだ。

「いや、まあ……イメージ？」

「セツくんまで～！」
いやだって。
「わたしはただ、普通に頑張って普通に結果が出ているだけだよ～」
まあ、確かに……周囲の人間（俺含む）が目立つ分、普段は目立たないものが、ここぞと言う時に成果を上げてるから……
「って、それは正にダークホースそのままなんじゃないか？」
「うっ……」
むしろ、成果もきっちり出しているのに毎回ダークホースになる辺り、天然のダークホースというか……。
「も、もう！　い、今はデュエル中でしょ～！」
「おっと、そうだったな」
「え、えっと、まだ僕のターンだったよね？『機甲部隊の最前線』の効果を使いたいところだけど……僕のデッキに光属性の機械族は入ってないから効果は使えないッス。僕は『トラックロイド』を守備表示に変更。カードを二枚セットしてターンエンド」
「よし、俺のターン、ドロー！」
タッグになると、妙にいいとこないからな。俺は。なんとかしたいところだが……。
「バトルだ。『サイレント・マジシャンＬＶ４』で『スチームロイド』を攻撃する」
「バカが！『スチームロイド』の方が攻撃力は上だぞ！？」
「うっ、それが……『スチームロイド』は、相手から攻撃を受けた場合、攻撃力が５００ポイントダウンするッス」
『スチームロイド』ＡＴＫ１８００↓１３００
「な、なにぃ～！？　なんて打たれ弱いモンスターを出してるんだ貴様は！？」
「だ、だってヴィトゥズィがやられちゃうと思わなかったから……そ、それに攻撃するときは逆に攻撃力が５００ポイントアップするんスよ！？」
まあ、確かに『スチームロイド』はアタッカーとしては優秀なん

だが……所謂デメリットアタッカーという奴だからな。
「ともかく、攻撃続行！」
「うわあっ！？」
「ちぃっ！？」
万丈目＆翔ＬＰ５９００
「うぐっ……でも、『機甲部隊の最前線』の効果発動ッス！　デッキから『エクスプレスロイド』を特殊召喚！」
『エクスプレスロイド』ＡＴＫ４００
「また何と言う低攻撃力モンスターを呼び出してるんだ貴様は！？」
「だ、大丈夫ッス。セツくんたちにもうモンスターはいないし……『エクスプレスロイド』の効果発動！　墓地の『エクスプレスロイド』以外のロイドと名の付くモンスター二体を手札に戻すよ。僕は『ドリルロイド』と『スチームロイド』を手札に戻すッス！」
俺たちに追撃モンスターがいない？　甘く見て貰っちゃ困るな翔。
「俺はユーキちゃんの伏せた『リミット・リバース』の効果発動！　墓地から『切り札の騎士―テンス』を特殊召喚！」
『切り札の騎士―テンス』ＡＴＫ１０００
「うわわっ！？」
「ほら見ろ言わんこっちゃない！」
「ははっ、悪いな翔。テンスで『エクスプレスロイド』に攻撃！『轟断剣』！」
『ぬぅんっ！』
「うわっ！」
「くっ！？」
万丈目＆翔ＬＰ５３００
「そしてテンスの効果発動！　俺のフィールドの切り札の騎士と名の付くモンスターが相手に戦闘ダメージを与えた時、墓地から切り札の騎士と名の付いたモンスター一体を手札に戻す！　戻って来いエース！」
『……ふん。戻すのが遅い』

「無理言うなって。これでも最速だ」
憎まれ口を叩いちゃいるが、多少エースの身体が震えている。やっぱり、トラウマが完全に拭い去れたわけじゃないんだな……。
「俺はメインフェイズ2にテンスをリリースしてエースをアドバンス召喚。カードを一枚セットしてターンエンドだ」
『切り札の騎士団長―エース』ＡＴＫ２０００
「チッ。オレのターン、ドロー！」
「この瞬間、『サイレント・マジシャンＬＶ４』にカウンターが一つ乗る」
『サイレント・マジシャンＬＶ４』ＡＴＫ１５００→２０００
さて、これで万丈目のエースは倒したわけだが……。
「フッ、セツ。まさかＶＷＸＹＺだけがオレの切り札だと思っているわけじゃないだろう？」
「ああ……おジャマだろう？」
『そう！　万丈目のアニキにはオイラたち三兄弟かいるのよ～ん！』
『そうだそうだ～！』
『行くぞ！　弟たちよ！』
「違う！」
『そ、そんなぁ～っ！？』
……哀れな。
「行くぞ！　オレは手札から魔法カード『強欲な壺』を発動！　デッキからカードを二枚ドロー！　オレは『Ｂ－１カブトップ』を攻撃表示で召喚！」
『Ｂ－１カブトップ』ＡＴＫ１７００
ビー……トロン？
「なんだそれは？」
なんだかわからないが、ともかく『強欲な壺』でドローしたことにより、『サイレント・マジシャンＬＶ４』にはもう一つカウンターが乗る。
『サイレント・マジシャンＬＶ４』ＡＴＫ２０００→２５００

「フ、知らないようだな。オレは更に魔法カード『おジャマ・ゲットライド！』を発動する！　手札の雑魚共を墓地に送り、デッキからレベル４以下の機械族ユニオンモンスターを三体まで守備表示で特殊召喚できる！」

『捨てないでアニキ～！』

……哀れな。

「オレは『Ｂ－２クワガターボ』と『Ｂ－３スパイダーベース』を特殊召喚！」

『Ｂ－２クワガターボ』ＤＥＦ１８００

『Ｂ－３スパイダーベース』ＤＥＦ２０００

「ぬ……」

俺の知らないユニオンモンスター……？

「融合合体！　ビートロンメカ！『アサルト・キャノン・ビートル』！」

『アサルト・キャノン・ビートル』ＤＥＦ２４００

「だが、その攻撃力では成長した『サイレント・マジシャンＬＶ４』は倒せない」

まあ、エースなら倒せるんだが……。

『……ギロッ！』

……何でもないから睨むな。擬音を口に出すな。

「いいや。まだオレは更に魔法カードを使う！『フロントチェンジ』！」

「『フロントチェンジ』……？」

また、俺の知らないカード……！

「コイツは、フィールドの『アサルト・キャノン・ビートル』と融合デッキの『コンバット・シザーズ・ビートル』を、入れ替える！」

『コンバット・シザーズ・ビートル』ＡＴＫ３６００

「攻撃力３６００！？」

マズイ。あの攻撃力はアルカナでないと……！　ユーキちゃんの『サイレント・マジシャンＬＶ８』でも太刀打ち出来ない！　それ

に……！

ちらりとユーキちゃんの方を見る。

「ユーキちゃんの手に、今度こそ『オネスト』はない。そもそも今は、俺が受けプレイヤー……くそ」

ああもうホントに、なんでかわからないがタッグだと調子悪いな俺は！

「行くぞ！『コンバット・シザーズ・ビートル』で『サイレント・マジシャンＬＶ４』を攻撃！」

「ぐあああっ！？」

「きゃああっ！？」

セツ＆ユーキＬＰ２６００

「そしてこの瞬間『コンバット・シザーズ・ビートル』の特殊効果が発動する！　相手モンスターを破壊した場合、相手ライフに１００ポイントのダメージを与える！」

「なにっ！？　ぐあああっ！？」

「うぅぅっ！」

セツ＆ユーキＬＰ１６００

「どうだ！？　オレはこれでターンエンドだ」

「うぅ……わたしの、ターン。ドロー！」

「すまん、ユーキちゃん。俺、何も役に立ってないよな……」

「そんなことないよ～。セツくん、わたしを立てるために動いてくれてるもん」

「いや……結果的にそうなってるだけだ。どちらかと言うと、ユーキちゃんに頼らないとどうにもならないだけで……」

しかし、そんな俺の弱音にも、ユーキちゃんはフルフルと首を振って手を握ってくれる。

「だいじょうぶ。セツくんのおかげで、凄く助かってる。さっきのプレイングだって、セツくんの授業がなければ出来なかった。セツくんが、わたしを信じて心を伝えてくれたおかげで、教えてくれたことを思い出せたの。だから、みんなセツくんのおかげ」

「ユーキちゃん……」
「それにね……」
　ユーキちゃんは、少し恥ずかしそうな、それでいて嬉しそうにはにかんだ。
「わたし、ずっとセツくんに頼ってばっかりだったから～……こうして、少しでも頼ってくれると嬉しいの」
「あ、えっと……」
　別に……頼られてばっかりな自覚もなかったんだが……というか、結構今までだって頼ってたような……主に、精神安定的な意味で。
『……貴様ら、いい加減にしろ』
「ぬおっ!?」
「ひゃっ!?」
　多方向から殺気!?
「そこの女騎士の言う通りだ！　セツ貴様……毎朝毎晩寮でも教室でも所構わず……誰かれ構わずイチャつきおって！」
「ちょっと待て！　誰かれ構わずは納得いかん！」
「……“不”特定多数が特定多数であったところで、僕らの怒りに微塵の変わりもないッス」
　……我が事ながら、まったくだな。
「……ちなみに、今俺は不特定多数から殺気を受けている真っ最中なんだが」
「フン、殺気で済んでいるだけマシだと思え！　いつか刺されろ！　或いはあの妹に監禁でもされてしまえ！」
「いや、前者はともかく後者はマズイ！　俺の貞操が！」
「いやいやいや！　前者もマズイよセツくん!?　死んじゃうよ!?」
「今更俺が、刺されたくらいで死ぬと思うか？」
「いや～……とっても説得力はあるんだけど～……やっぱり刺されたら死んじゃうんじゃ……」
「甘いな。甘過ぎる」

例えるなら、ストロベリークリームパスタ（苺味のパスタに生クリームがてんこ盛りの甘々パスタ）くらい甘い。
「……気のせいか。オレ、丸っきり同じ料理名をアテナから聞いた気がするんだが……」
遠くで剣士が何か言っているが、それは置いておけ。
「さだめと十五年以上も兄妹をやってきたこの俺、御堂切のヤンデレ対策論を聞かせてやろう」
『……おい、デュエルはどうした』
「その一！」
『無視か！？』
「刺されても死なない丈夫な身体作り！」
「一つ目から過激なのキタ！」
「尚、メッタ刺しでも耐えられると尚良し！」
「尚良しじゃないよ！　耐えられないよ！」
「その二！」
「その一の時点で無理臭いぞ！？」
「銃弾をかわせる反射神経！」
「クラ○ストロ人！？」
「至近距離でせめて狙撃銃程度はかわせるようになっておこう！」
「無茶言うな！？」
「それ以前に、至近距離で狙撃銃を使うな！」
細かいことを気にするガンマニアがいるな。誰だか知らんが。
「その三！　殴られても割れない頑丈な頭蓋骨！」
「カルシウム……？」
「その四！　何時電撃喰らっても良い様に鉄製品（アース）常備！」
ジャラッと服の下から腕輪と腰元のチェーン、ネックレスを取り出して示す。
「それお洒落じゃなかったの！？」
命綱だ。
「その五！　一服盛られても大丈夫なように毒に身体を慣らさせて

おく！」
「どこの忍びだ！？」
ちなみに、最重要項目だ。これを怠ると、呼吸すら安心して行えなくなる。
「その六！　縛られたり関節極められても抜け出せる、関節外しの技能！」
「怖ぇよ！」
「その七！」
「まだあんのかよ！？」
「腹に穴くらいでは一々騒がない」
『無茶言うな！？』
何かクラス全員唱和したが、まあ気にしない。
「総括。殺されかけても生き残る強靭な生命力」
「全部それでよかったんじゃ……」
内訳だ。総括だって言っただろう。
「それ強靭っていうより狂人な生命力だろ……」
剣士め。人を捕まえて何を失礼極まりないことを。
「他にもまぁ、色々あるが、とりあえずは以上を持ってすれば、ヤンデレ恐るるに足らず。みんな、良い勉強になったな」
『ならない、ならない』
「その教訓、今後に活かせるものが何一つねぇよ……」
「と言うか、セツくんはその全部を体現してるの～？」
「全て、体験談だからな」
「懐かしそうにうんうん頷いてるんじゃねえよ。なんで生きてんだよ」
「む、じゃあ言い直す。……総括。ゴキブリ並みのしぶとさ」
「なんで言い直したの！？　ねえなんで態々カッコ悪い方に言い直したの！？」
「最悪、人間急所だけでも守れば即死はしない。後はなんとかしぶとく生き延びろ」

『……貴様は精霊連中以上に死線を潜り抜けてきているな』
自慢じゃないが、バトロワやったら世界トップクラスだと自負している。……生き残り戦的な意味で。
「万丈目君、どうしたんスか？」
「……オレも、ノース校で散々地獄の底を這いまわっていたつもりだったが、どう足掻いても地獄レベルで次元が違うと知って、少々、凹んだ」
「……それは幸せなことだと思うッス」
「ん？　なんならヤンデレ的地獄巡りツアー体験談をレクチャーしてやってもいいぞ？」
「お断りだ！」
何やらデュエルフィールドの向こうで膝を付いている万丈目が目に入って、ようやく今はタッグデュエルの最中だと言うことを思い出した。
「すまん。話が脱線に脱線を重ねたが、デュエルを再開しよう」
「まったくだ！　役に立たないだけならまだしも、パートナーのプレイを妨害するな！」
「ぐっ……おっしゃるとおりで」
そういえば、ユーキちゃんのターンだったか。
「う、うん。わたしのスタンバイフェイズ時に、除外されていた『オネスト』が手札に戻ってくるよ～」
これで、『コンバット・シザーズ・ビートル』を戦闘破壊することと自体は問題なくなったわけだ。例えユーキちゃんの手にモンスターがなくても、エースも光属性だからな。
「わたしは魔法カード『強欲な壺』の効果を発動するよ～」
これでユーキちゃんの手札、現在五枚。俺、ゼロ枚。……なんだろう。活躍の度合いと比例したかのようなこの手札差。いや、普通逆だろう。活躍すればするほど手札がなくなり、事故れば事故るほど手札が温存されるのがこのゲームの常識だろう。
「ということはあれか？　今回俺は、俺なりに活躍して尚、この戦

果なのか……？　タッグデュエル苦手過ぎだろう俺……」

「え、えっと～だからセツくんは十分に活躍してて～、わたしたちへのダメージ源を破壊したのも、キーカードの『封印の黄金櫃』を渡してくれたのも、戦闘でモンスターを破壊してるのも何だかんだで大体セツくんだから～」

「……つまり、今回俺は地味なんだな」

ユーキちゃんの気持ちが、若干わかった気がする。

「そ、それは少し複雑だけど～。とにかく、わたしは手札から『サイレント・ソードマンＬＶ３』を召喚！　マジックカード『レベルアップ！』を発動！　来て！『サイレント・ソードマンＬＶ５』！」

『サイレント・ソードマンＬＶ５』ＡＴＫ２３００

流石に、あれだけ手札があれば『レベルアップ！』も引き入れてるか。

「バトル！『切り札の騎士団長―エース』で『コンバット・シザーズ・ビートル』を攻撃！『リッター・ブリッツ』！」

「ちっ！」

ユーキちゃんの攻撃宣言に、苦々しげに顔を歪める万丈目。普通なら攻撃力は『コンバット・シザーズ・ビートル』の方が上だが、当然奴も知っている。ユーキちゃんの手札に『オネスト』がいることを。

「させないよ！　僕はトラップカード『進入禁止！ＮｏＥｎｔｒｙ！！』を発動！　相手の攻撃表示モンスターを全て守備表示にして、手札を一枚捨てさせる！」

「ええっ！？」

『サイレント・ソードマンＬＶ５』ＤＥＦ１０００

『切り札の騎士団長―エース』ＤＥＦ２０００

俺たちのモンスターが守備表示にされ、ユーキちゃんは手札をシャッフルし、その中から一枚を抜き取る。そのカードは……『オネスト』。

「やったッス！」

「フン、上出来だ！」
「うぅ……わたしはこれでターンエンドだよ～」
先ほどとは逆に、翔に一杯喰わされた形になったユーキちゃんがターンを終了する。
「僕のターン、ドローッス！　さあ、こっちも反撃開始ッス！」
元気を取り戻した翔が、そう言ってターンを始めるのだった。
……あれ？　前回と終わり方が酷似しているような……気のせいか？

第三期第十七話「御堂切の突発的ヤンデレ対策講座」（後書き）

というわけで、めっちゃギャグ色の強い話に……。どうしてこうなった。多分悠の、ギャグを思いついたらやらなきゃ気が済まない体質が原因でしょうが。……ちなみに、万丈目のビートロンですが……もしかして、あれ斎王に貰ったカードなんですかね？　レイとのデュエルでも使っていたので、普通に万丈目の持ち物だと思ったんですけど。ほら、ホワイトナイツと違って白関係ないですし。まあいいか。

ちなみに、最後の翔が使った進入禁止はアニメ効果です。アニメだと守備表示になるのは相手のみ。その上、相手の手札を一枚捨てさせる鬼畜効果でした。いや、普通にずっこいだろこの効果。相手に得が何一つない。自分得し過ぎ。

ヤンデレ対策論は……セツはバトロワでは確実に生き残るでしょうね。うん。どうやったら死ぬのか。急所貫くしかないような。それ以前に拉致できねえ。

しかし……十代といい、万丈目・翔といい、ユーキちゃんは妙に原作キャラと縁があるなぁ。

それでは、悠でした！

第三期第十八話「近くて、遠いその手」（前書き）

お待たせしました。まさかの三部構成となったタッグデュエル、後編をお届けいたします！　ユーキちゃんも、今度はセツも大活躍の後編なので、お楽しみ頂ければ幸いです。

第三期第十八話「近くて、遠いその手」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第十八話「近くて、遠い、その手」

「さあ、一気に勝たせて貰うよ！」
一発逆転の『オネスト』を封じられた上、あいつらの『コンバット・シザーズ・ビートル』は健在……確かに、かなりマズイ状況だ。
「僕はトラップカード『チェーン・マテリアル』を発動！」
「なにっ！？」
『チェーン・マテリアル』！？　しかも、翔のデッキはビークロイド。とくれば……。
「僕は魔法カード『ビークロイド・コネクション・ゾーン』を発動するッス！」
やっぱりソイツを持っていたか！
「これはビークロイド専用の融合魔法。この効果で融合召喚されたビークロイドは、効果によっては破壊されなくなる上、効果も無効にならなくなるッス！」
「ええっ！？　確か、『チェーン・マテリアル』の効果って……」
「除外ゾーン以外のあらゆるところから、融合を行うことが出来る代わりに、そのターン攻撃することができず、そのターンのエンドフェイズ時に破壊される効果だ」
つまり、『チェーン・マテリアル』の効果であらゆる場所から融合出来る上、デメリットを最小限に抑えることが出来る。

「僕は墓地の『トラックロイド』『エクスプレスロイド』とデッキの『ドリルロイド』『ステルスロイド』をゲームから除外して『スーパービークロイド―ステルス・ユニオン』を融合召喚！」

「四体融合！？」

『スーパービークロイド―ステルス・ユニオン』ＡＴＫ３６００

「くっ……これで、攻撃力３６００のモンスターが二体並んだか……！」

攻撃力だけなら、まだいい。攻撃時に攻撃力が半分になるデメリット効果のお陰で、貫通効果もそこまで怖くはない。だが、もう一つの効果は厄介だ。

そして『コンバット・シザーズ・ビートル』の効果も、ライフが心許ない今、相当に脅威だ。１０００ポイントのダメージは安くない。

「このターン、僕はバトルを行えない。でも、効果は使えるよ！『スーパービークロイド―ステルス・ユニオン』の効果発動！『切り札の騎士団長―エース』を装備カードとして装備！」

『ぬわっ！？』

ステルス・ユニオンに吸収されたエースは、ステルス・ユニオンの胸部から顔がポコン、と……。

「……カッコ悪」

『な、なんだと貴様ー！』

いやだって。

「僕はこれでターンエンド！」

「ふぅ、俺のターン、ドロー！　俺は魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚ドローする」

ふぅ、さてどうしたものか。このままなら……いや、なんとかなるか？　さっき伏せたカードがアレだから……よし。問題なさそうだ。あと残る問題は……。

「俺は『放浪の勇者フリード』を攻撃表示で召喚。効果を発動する」

『放浪の勇者フリード』ＡＴＫ１７００

「フリード！？　確か効果は……」
「俺は墓地の光属性モンスター、『シャインエンジェル』と『サイレント・ソードマンＬＶ３』をゲームから除外し、『コンバット・シザーズ・ビートル』を破壊する！」
「ちぃっ！」
　まあステルス・ユニオンは破壊できないから、選択肢はなかったわけだが。
「俺は『サイレント・ソードマンＬＶ５』を攻撃表示に変更、バトルだ！」
「えっ！？」
「馬鹿な！？　『コンバット・シザーズ・ビートル』を倒したとはいえ、まだ攻撃力３６００のステルス・ユニオンがいるんだぞ。まさか、奴も『オネスト』を引きいれたとでも言うのか！？」
　そうじゃない。俺は『オネスト』を引きいれてはいない。だが……。
「無理矢理にでも引き入れる！　リバースカードオープン！『光の招集』！」
　これは、さっきのターンに伏せておいたトラップカード。ユーキちゃんと、お互いに光属性を多用するからと念のため入れておいたのが役に立った。
「俺は一枚の手札を墓地に捨て、墓地から『オネスト』を手札に戻す！」
「おのれ、そういうことか！」
「更に墓地に捨てた『切り札の騎士―エース』の効果発動！　カードを一枚ドローする！」
　これでいい。これで……。
「準備は整った。行け！『放浪の勇者フリード』で『スーパービークロイド―ステルス・ユニオン』を攻撃！」
「む、迎え討て！　ステルス・ユニオン！」
「無駄だ。俺は手札から『オネスト』を捨てて効果発動！　攻撃力

をアップする！」
　『放浪の勇者フリード』ＡＴＫ１７００→５３００
「うわあああああっ！？」
「くっ！？」
　万丈目＆翔ＬＰ３６００
「で、でもこの瞬間『機甲部隊の最前線』の効果発動！　デッキから『スチームロイド』を守備表示で召喚するッス！」
「続けて『サイレント・ソードマンＬＶ５』で『スチームロイド』を攻撃！『沈黙の剣ＬＶ５』！」
「うわぁっ！」
　『機甲部隊の最前線』の効果は一ターンに一度。これ以上の増援はない。
「俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ」
　とりあえず、これで役割は果たした。手札が二枚あれば、『オネスト』二枚重ねでこのターン中に倒せたんだが……そう上手くはいかないな。
「やってくれる……！　オレのターン、ドロー！」
　万丈目の手札は今ドローした一枚のみ。一枚でこの状況を打破できるとも思えないが……。
「フ……どうやらまだ天はこの万丈目サンダーを見放してはいなかったようだ。装備魔法『次元破壊砲―ＳＴＵ』（スーパー・サンダー・ユニット）！　このカードの効果で、墓地に存在する『ＶＷＸＹＺ―ドラゴン・カタパルトキャノン』を、召喚条件を無視して特殊召喚し、このカードを装備する！　このカードを装備した装備モンスターの効果は無効となり、守備表示モンスターを戦闘で破壊した場合、貫通ダメージを与える！」
　『ＶＷＸＹＺ―ドラゴン・カタパルトキャノン』ＡＴＫ３０００
「なにっ！？」
　何のリスクもなしにヴィトゥズィを復活させる装備魔法！？
「そんなのアリか……！？」
「行け、ヴィトゥズィ！　フリードを蹴散らせ！『ＶＷＸＹＺ―ア

ルティメット・キャノン』！」
「ぐあああああああっ！？」
「きゃあああああああっ！？」
セツ＆ユーキＬＰ３００
「ターンエンド！　流石にもうどうしようもあるまい！」
確かに、効果が無効になっているとはいえ、攻撃力３０００の壁は厚い。しかも貫通効果まで付加されてしまっては、守備で耐えることもままならない。
「う……わたしのターン」
つまり、このユーキちゃんのドローに全てがかかっている。
「……ドロー！」
どうだ！？
「……わたしは手札から『レベルアップ！』を発動。『サイレント・ソードマンＬＶ５』をＬＶ７にレベルアップ！」
『サイレント・ソードマンＬＶ７』ＡＴＫ２８００
「ＬＶ７が存在する限り、フィールド上の魔法カードの効果は無効になるよ～。わたしはこれでターンエンド」
「僕のターン、ドロー！　攻撃力を高めてギリギリ持ちこたえようとしたのかもしれないけど、その選択はミスだよ！　魔法カードの効果が無効になったことで、『次元破壊砲―ＳＴＵ』の効果も無効になる。だからヴィトゥズィのモンスター効果も使えるようになるッス！」
更に言えば、自壊効果もなくなって完全蘇生ってことになる。もしかして、ユーキちゃん……！？
「ヴィトゥズィの効果発動！『サイレント・ソードマンＬＶ７』を除外するッス！」
「ミスじゃ……ないよ」
そうだ、ミスじゃない。ユーキちゃんは、ここに来てそんな単純な、自分のモンスター効果で自滅するようなデュエリストじゃない！
「えっ……！」

「セツくんが残してくれた、リバースカードが残ってる！　カウンタートラップ発動！『天罰』！」
「よし！」
俺は思わずガッツポーズをとる。手札がなかった俺には使えなかったカウンター。しっかり発動してくれた！
「わたしは手札を一枚墓地に捨てて、ヴィトゥズィの効果を無効化！　破壊するよ～！」
「うわっ！？　そんな……」
「ええい！　貴様はさっきから！」
「ぼ、僕の所為ッスか！？」
いや、ユーキちゃんが一枚上手だったんだろう。しかし、それにしても……。
「考えたな。装備魔法が無効化されることを利用した心理誘導か」
これまで悉く『オネスト』で撃退されたら、戦闘で倒すより効果で除外したくなるだろう。普通に戦闘したんじゃライフが削りきれないことや、無効化されていた効果が使えるようになっていたことも、効果を使用したくなる一つの誘導になっていただろう。
「カード効果の使い方が上手くなったな。ユーキちゃん」
「セツくんのおかげだよ～。いいカードを伏せていてくれてありがとう」
ともかく、これでまた一つ、危険を脱した。しかも、もうこれで魔法カードは封じたも同然だ。
「うぅ……僕はモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンドッス」
「俺のターン、ドロー！」
あとは、俺が下手を打たなければいい。
「バトル！『サイレント・ソードマンＬＶ７』で守備モンスターを攻撃！『沈黙の剣ＬＶ７』！」
翔の守備モンスター、『ドリルロイド』が破壊される。
「『機甲部隊の最前線』は……」

「既に発動している魔法カードも、『サイレント・ソードマンＬＶ７』の効果で無効だ」
　これで後続を呼ばれる心配もいらない。
「俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ」
「くっ……オレのターン、ドロー！……ちっ、ターンエンドだ」
　万丈目も有効な手を打てずにターンを終了する。仕方ないな。基本的におジャマたちは魔法カード依存のモンスターだ。魔法が封殺されていては使える効果もないだろう。
「わたしのターン、ドロー！　わたしは『サイレント・ソードマンＬＶ７』でプレイヤーにダイレクトアタック！」
「ぐあああああっ！？」
「うぅうっ！」
　万丈目＆翔ＬＰ８００
「ターンエンドだよ」
「うぅ、僕のターン、ドロー！　モンスターをセット。カードを一枚セットして、ターンエンドッス……」
「俺のターン、ドロー！」
　随分と、静かになったな。やはり、魔法カードは封じられると相当にダメージが大きいか。
「俺は……あー、『雷電娘々』を攻撃表示で召喚する」
『ひっさびさー！！　ライムちゃん久々の登場だ～！！』
　……テンション高いな。まあ、わからなくもないが。
「ああっ！？『雷電娘々』ッス！」
「いやー……ほぼ光属性だし、打点高めだし、空きスロットに差しておいたんだが……まさかこのタイミングで引くとは……」
　まあ、相手が翔だし、コイツで決めてやるのも悪くない……か？
『あ～もうチョ～久々だよ！　キリリンったらライムのこと忘れちゃったんじゃないかって不安だったんだからね～？』
「あー、ずっと呼んでやれなくて悪かった。ほら、ヴァンダルギオンとの兼ね合いとかもあるから、微妙にデッキに組み込みづらくっ

て……」
　シナジー皆無だしな。
『でもでも、呼んでくれたからにはがんばるよ～！』
「ああ、頼む。バトルだ！『サイレント・ソードマンＬＶ７』で守備モンスターに攻撃！」
「ニャンニャンッス～……」
「おいコラ貴様、何をボサッとしている！？」
「はっ！？　そ、そうだ、デュエル中だった！　と、トラップ発動『聖なるバリアーミラーフォース』！　ごめんッス、ニャンニャン！」
『にゃにゃっ！？』
「させん！　リバースカードオープン、カウンタートラップ『トラップ・ジャマー』！　バトルフェイズ中のトラップの発動と効果を無効にする！」
「うわっ！？」
「ここに来て、そんなチャチなトラップに引っ掛かるわけないだろう！　行け！『沈黙の剣ＬＶ７』！」
　沈黙の騎士の大剣が、伏せられていた『トラックロイド』を貫く。
「翔！　このモンスターでトドメをさすことが、俺のせめてもの手向けだ！『雷電娘々』でプレイヤーにダイレクトアタック！『お仕置きサンダー』！」
『おいしいトコいただき！　お仕置きサンダー！』
「うわあああああああああっ！？」
「くそおおおおおおおおっ！！」
　万丈目＆翔ＬＰ０

「やったね、セツくん！」
「ああ。ユーキちゃんのおかげだよ」

いやホントに。今回は完全にユーキちゃんの一人舞台だったと言ってもいい。

「そ、そんなことないよ～。『封印の黄金櫃』も『天罰』も、どっちもセツくんが伏せてくれたからだし……それに、セツくんだって攻撃力３６００のモンスター二体も一ターンで倒してるんだし」

「俺は、ただモンスター効果を単純に使っただけだから。それよりも、ユーキちゃんの効果の使い方は上手かった。俺、あそこまでは教えてないぞ？」

事実だ。『封印の黄金櫃』の情報アドも、一応ちらっと話はしたが、あんな使い方まではレクチャーしていない。そこら辺は、全部ユーキちゃんが自分で考えて使ったものだ。

「今回勝てたのは、ユーキちゃんのおかげだよ」

「そうね。今のデュエル、素晴らしかったわ」

「明日香さん？」

突然声をかけてきた明日香に、戸惑うユーキちゃん。

「今のデュエルは貴女の独壇場よ。セツたちも十分以上に良い働きをしたと思うけど……貴女の活躍の前には、霞んでしまうでしょうね」

「そ、そんな……」

明日香、ベタ褒めである。アカデミアクィーンと呼ばれていた（今はどうだか知らないが）明日香にここまで絶賛されて、ユーキちゃんは真っ赤だ。

「セツ、加藤さんの実力、底上げしたのは貴方の力？」

「まさか。俺はきっかけを教えただけだ。あそこまでのことは教えた覚えはない。あれは全部、ユーキちゃん自身が磨きあげたものだよ」

「そう……」

「すンばらしいデュエルだったノ～ネ！　シニョ～ラユーキ、アナタの成績ぃ～に、加点しておくノ～ネ！」

「あ、ありがとうございます」

「先生、俺は？」
「シニョ～ルセツは、まず欠席を減らしてカ～ラものを言うノ～ネ！」
「たはは……」
そりゃごもっともで。
「しか～シ、タッグデュエルに於けるカードトスやパートナーへの信頼～ニョ、見るべき点は、評価に入れておくノ～ネ」
「ありがとうございます」
「シニョ～ル万丈目とシニョ～ル翔も、よく頑張ったノ～ネ」
「フン」
「結局、負けちゃったッスけどね」
しかしまあ、クロノス先生も丸くなったもんだ。しっかり生徒の頑張り評価している辺り、去年とはエライ違いだ。
「それでぇ～わ、今日の授業はここまでなノ～ネ。各自、復習をしっかりやっておくノ～ネ」
クロノス先生の言葉と共に、ユーキちゃん大活躍のタッグデュエル授業は終わりを告げた。

「……セツくん」
「ん？　どうした、ユーキちゃん」
「ありがとう、ね」
「……？　なんの話だ？」
「わたしが強くなれたの、セツくんのおかげだから～」
何かと思えば、そんなことか。
「それは、ユーキちゃんが頑張ったからだろう？」
「……違うよ」
「ユーキちゃん？」
「わたし、セツくんに会えたから、きっとこんなに頑張れた。セツ

くんを好きになったから、セツくんの役に立ちたいと思ったから、頑張って勉強したんだよ。だから、わたしが強くなれたなら、それはセツくんのおかげ、なんだよ」

「ユーキちゃん……」

「セツくんが……こういう気持ちにさせてくれるから……だから……」

ちゅ……。

「あ……」

それは、余りにも一瞬で。

「……こんな時間が、いつまでも続けばいいのにね」

「あ、その……ユーキちゃん」

すぐ傍に居たユーキちゃんが、何処か遠くに見えて。

「ホントに……ずっと……」

「ユーキ、ちゃん？」

思わず俺は、手を伸ばしていた。

「……なんでもない。ごめんね。いきなり」
「あ、いや……」

その手はしっかりとユーキちゃんに届き、手を握られた。

「みんなもしてるんでしょ？　わたしだけ、なんて悔しいじゃない」
「あー……その、なんていうか……」

けど、どこかその手は冷たくて。

「ふふ、セツくん顔真っ赤～」
「し、仕方ないだろ。っていうか、前から思ってたけど、何で、俺みたいな奴に……」

近くに居る筈なのに、どこか遠く感じて。

「セツくんだから、だよ～。わたしも、さだめちゃんも、アテナちゃんも、ルインさんや希冴姫さんも、セツくんだから、何でもしてあげたくなるの」
「俺は……」

俺は、思わずその身体を抱きしめていた。

「セツ……くん？」
「……わからない。何故だか、ユーキちゃんが、いなくなってしまうような気がして……」
「……だいじょうぶ、だよ～」
「ユーキちゃん？」
「セツくんが望んでくれるなら、わたしは何時でも傍にいるよ。きっとそれは、他の皆も同じだけど……わたしも」
「……悪い」
ユーキちゃんを抱きしめていた腕を解く。今になって、顔が熱くなってきた。
「ううん、いいよ～。だ、大歓迎、だから～」
ユーキちゃんの頬も赤い。まったく、これじゃラブコメ担当、なんて言われても否定出来やしない。
「じゃ、じゃあユーキちゃん。俺は寮に戻るから……」
「……うん。じゃあ、またね。セツくん」
「ああ。また明日な」
小さく手を振るユーキちゃんに手を振り返して、俺はその場を後にした。

「また……また、ね……セツくん」

背後で、そう呟くユーキちゃんに気が付きもせず。

第三期第十八話「近くて、遠いその手」（後書き）

まあ例によって不吉極まりない終わり方なわけですが。改訂前を御存じの読者さんなら想像はつくでしょうが。次回はアテナ帰還になります。まあ……さほど変更点もないんでさっさかアップ出来るかと思います。あんまり変えたくないですしね。あの話は。

今回万丈目サンダーの使った装備魔法『次元破壊砲―ＳＴＵ』。どう考えてもチートでしょう。いや、禁止とかになるほどじゃないのかもしれませんが、ノーコストで特殊召喚モンスターを蘇生、且つ貫通効果付与と、ずいぶんなカードです。ちなみに、原作だとＶＳアモンで使用されました。異次元格納庫とかも……強いなぁアレ。どう考えてもＯＣＧより出しやすいだろ。ヴィトゥズィ。

なんというか、オネストの使い方百選、みたいなデュエルでしたね。今回。散々オネスト使いまわし。まあ、オネストに関する駆け引きは実際のＯＣＧでも色々あるんで考えてみると面白いです。光の招集だって、オネストが出てから随分と有用性上がりましたしね。

それでは、悠でした！

第三期第十九話「再会と、悪夢の始まり」（前書き）

というわけで、アテナ帰還回です。こっからが急転直下なわけですね……。少々暗い話が続きますが、お付き合いの程、お願いいたします。

第三期第十九話「再会と、悪夢の始まり」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第十九話「再会と悪夢の始まり」

十代がデュエル出来なくなってから数日、アカデミアは衝撃に揺れていた。

なにしろ、あの遊城十代である。アカデミア随一のデュエル馬鹿と言っても過言ではない程のデュエル好きが、デュエルできなくなったというのだから、生徒たちが動揺してもおかしくないことだろう。

「原作に、こういうイベントあったっけ？」

「わからん。もう正直原作がどうとか、そういう境界があやふやになって来ているからな。俺たち」

「だねー……」

ため息交じりにさだめと一緒にレッド寮へと帰る。さだめは女子寮に帰るべきなのだが、毎日必ず俺の部屋――というかテント――に寄ってくる。あわよくばお泊りなんかもしちゃおっかなー？　的なオーラを感じるので、女子寮の門限までには丁重にお帰り頂いているのだが。

「ところで、希冴姫さんの具合どう？」

「……芳しくはないな。一度精霊界に戻った方が良いんじゃないかって提案してみたんだが、ルインもエースも意味がないって一蹴するし。今はその二人が交代で看病してるよ」

もちろん、放課後など俺の身体が空いた時は必ず俺も参加しているけど……ちなみに、ルインは俺の看病からどうも料理その他家事に興味が湧いたらしく、希冴姫の食事の世話なども率先してやってくれている。以下は、その例である。

『……できた』

『あ、あのルイン様……お気持ちは嬉しいのですがわたくし仮にも病人でしてそのあからさまに危険そうな物質Ｘを口にするのは……』

『大丈夫。おいしい……と、錯覚する筈』

『今錯覚って言いましたわよねぇ！？　ゴホッ！』

『かまわん。ルイン殿。好きに実験台にするがいい。団長の名に於いて許可する』

『え、エース貴女つい先日団員を護るのも団長の務めだとか言っておいて……げふっ』

……なんだろう。すごく今更だが、希冴姫が回復しないのも当然な気がしてきた。

「――ターゲット、ロックオン！」

「「え？」」

いきなり遠くから、しかし明瞭に聞こえてきた女性の声に、俺とさだめは二人して振り向く。

遥か遠くに、いつか会った短髪女性と、襟首を掴まれ今にも投擲体制に入れられようとしているアテナの姿が……

「「ってアテナ！？」」

「超電磁アテナ、全弾発射ぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

「いぃぃぃやあああああああああああああっ！？」

「アテっ……」

「避けてぇぇぇ！！　避けてくださいぃぃぃぃぃぃ！！」

「これはまさか某食い逃げ・うぐぅとの出会いイベントでお馴染…」

衝突確定。……正直、ヘンな解説せずに受け止める体勢にでも入っていればよかったと思う。今は反省している。

「ごぶぅぅぅぅぅぅっ！？」
腹に突っ込んできたアテナと共に軽く十メートル近くぶっ飛ばされた俺は、そのまま意識を失った。
「っていうかあんな遠くから人一人投擲して且つ十メートル以上吹っ飛ばすとか、どんな勢いで投げられたんだろ……」
というさだめの声を、薄れ行く意識の中で聞いたような……がふっ。

「……ん」
独特の消毒液の匂い……あんまり俺自身は世話になったことがないが、さだめを精神疾患という名目で度々連れてきていたので、なんとなく覚えのある保健室の匂い。
「あら、目が覚めたのね」
俺が眼を覚まして最初に声をかけてきたのは、保険医の鮎川先生。
「鮎川先生……初登場ですね……」
「ほっといて頂戴！」
「っと、寝ぼけたこと言ってる場合じゃなかった！　アテナ！」
アテナが戻ってきたんだ！　こんなモブ教師を相手にしてる場合じゃなかった！
「……誰が、今まで看病していたと……ｏｒｚ」
項垂れる鮎川先生を尻目に、俺はカーテンを引く。
「アテナ！」
「あ……せ、セツ……」
「お兄ちゃん……」
そこには、ベッドに腰掛けて俯くアテナの姿。俺と一瞬目が合うも、すぐに逸らされてしまう。アテナ……。
「ぁ……わ、私……」
「無事で、良かった……」

「え……」
「正直、聞きたいこととか、言いたいこととか、色々あって頭はごちゃごちゃしてるけど……とにかく、無事で良かった」
「あ……」
アテナを抱きしめる。アテナの驚いたような、戸惑ったような気配が伝わってくる。その手が、一瞬俺の背中に回されそうになって……
「や、やっぱりダメ！」
すぐに、突き飛ばされた。
「アテナ……？」
「わ、私はっ！　私は……やっぱり……セツ、ごめんなさッ！？」
がしゃあああああん！！
「アテナ！？」
アテナが何か言おうとした瞬間、何処からともなく飛来してきたタライに頭部を強打された。
「きゅう……」
眼を回すアテナに光さんが近づいてくる。
「ったくこの子は……」
「ひ、光お姉さん……でも……」
「ええい、デモもストもないっつったでしょうが！　いいからさっさとさっきみたいに飛び込んで……むぅ～！！」
「はいはい。キミは基本的にムードブレイカーだから黙ってようね」
「ぷはっ！　ちょっと希望！　今回の立役者に対して……」
「はいはいわかったわかった……アテナ」
「は、はい……」
「キミの心を信じて、素直に……ね？　頑張りなさい」
「あ、ぅ……」
「さ、行くよ光。……あと、君には改造車のこととかミサイルのこととか、とにかく色々お話がありますからそのつもりで……あ、鮎川先生もご一緒に来てください。美味しいお茶とお菓子でも、如何

ですか？」
「あ、はい是非！」
おいそれでいいのか保険医。運び込まれた生徒ほっぽってナンパされてどうする。いや、正直ありがたくもあるんだが。
ばたん。
「……」
三人が出ていき、保健室には俺とさだめ。そしてアテナの三人が残される。いや、もう一人いたか。
『……久しぶりね。坊や』
「シャルナ……」
シャルナも、アテナと一緒に居なくなっていた。連絡が取れないとカイエンが嘆いていたのも記憶に新しい。尤も、仕事だけはきっちりしてあったらしいが（それが逆に不気味だとカイエンは怖がっていたが）。
『ねえアテナ……話しましょう？　いつまでも黙っているわけにもいかないし……彼らなら大丈夫だって、自分でもわかっているんでしょう？』
「シャルナ……」
シャルナに促され、しかしまだ躊躇うようなそぶりを見せるアテナ。そんなアテナに、やがてシャルナは痺れを切らしたのか、俺たちの方を向く。
『ああもう……あの女に同調するようで気に食わないけど……あのねセツ。アテナがあんたたちの前から姿を消したのは……』
「シャルナぁ！」
『あんたが言わないならあたしが言う。全部ぶちまける。そうされたくなかったら言いなさい。自分で』
「わ、私にだって心の準備とか……」
『これ以上待ってたら来世まで持ち越しそうなんだもの。ほら、勇気を出して』
「ぅう……」

アテナは、尚も躊躇っていた様子だが、俺たち三者の視線に覚悟を決めたのか、俺の方を向いた。
「セツ……聞きたいこと、なんですか？　私、答えます」
「無理……してないか？」
この期に及んで、そんなことを聞いてしまう。もしこれでまたアテナが口を閉ざしたらどうするんだ。俺は馬鹿か。
しかしアテナは、俺のそんな懸念を余所にふるふると首を振った。
「いえ、ここで甘えたら、私きっと一生話せなくなります。せっかく、光お姉さんたちが作ってくれた機会ですから……セツ。私に、遠慮しないでください」
「……わかった」
アテナの覚悟が伝わってくる。まだ、その覚悟を決め切れた、というわけではないようだが……遠慮するなというアテナの言葉を信じ、俺は話を聞くことにした。
「じゃあ……まず、何で俺の前から姿を消したりなんかしたんだ？」
「……罪悪感、です」
「罪悪感？」
「私は、絶対に許せない事をしました。セツに……それに、さだめさんに」
「さだめ、に……？」
コクリ、と頷くアテナ。
「さだめさんが、かつて終焉の精霊に取り憑かれたこと……セツたちがこちらの世界に呼びこまれたこと……その二つの原因となったのが、私なんです」
「！？」
流石に、これには驚いた。アテナが、俺たちの事をトリッパーだと認識していたことや、こちらの世界に来る原因となった……くらいまでは、なんとか予想の範疇だ。しかし……。
「さだめが……アレに取り憑かれる原因？」
そればっかりは、予想していなかった。

「かつて……そう、かつての私の犯した過ちが、終焉の精霊をセツたちの世界に追いやり、そこでさだめさんに取り憑いた……そう、終焉の花嫁であるセツの、最も近しく、寄り代として相応しい存在として、さだめさんに」

「ま、待てアテナ、話が読めない。お前は今十三歳だろう？　もうわかっていると思うから言ってしまうが、元の世界の年齢と併せると俺はもう二十歳のさだめも十九歳……どう考えても年齢が……」

そこまで話してからはっとした。そうだ……俺たちは……。

「セツたちがトリッパーであると同様……私も似たようなものなんです」

アテナは、ふいに立ち上がり、部屋の中央に歩いて行く。そして胸の前で手を組み、眼を閉じた。

「私は……」

アテナが光に包まれ、光が収まるとそこには……。

「転生者、なんです」

純白の法衣と翼を持った、一人の天使がそこに居た。

「それも、私の前世は精霊。そしてそのまた前は人間……二重の転生者。人としての生を終え、また精霊としての生を終えて人間界へと舞い戻った……それが私。それが、天音アテナの真実……」

アテナが翼を仕舞い、服装も元に戻る。

俺は、アテナが失踪する前、希望の言葉を思い出していた。

『“人”生は、楽しいかい？』

「人の……生……あれはそういう……」

俺の呟きに、アテナはクスリと小さく、力なく微笑んだ。

「あの時までは、忘れていました。私が転生者であること。また、精霊としての最期の時……追い続けていた終焉の精霊を取り逃し、貴方達の世界に堕としてしまったことを……」

それが、希望のあの言葉をトリガーに思い出されたのか……。

「記憶を失っていた私は、それでも最期に残された、精霊としての矜持か義務か……取り逃した終焉の精霊を捕捉し、無意識の内にこ

ちらの世界へと引っ張って来た……そう。終焉の花嫁、セツごと巻き込んで」

そういう、ことだったのか……。こちらの世界にトリップしたこと……むしろ、さだめがメインだったんだ。俺は、言わばおまけ。さだめとの繋がりから、巻き込まれただけ。

しかし、話はそれだけではないらしく、アテナはまた話を続けた。

「そして、私は精霊として転生する以前……人間だったときにも、終焉の精霊と関わっています。その時は……花嫁として」

「な……」

アテナも、終焉の花嫁だったのか……？

『補足しておくと、あたしも転生者。人間から精霊に。人間だったときは、アテナと同じ街の、裕福な商人の家に生まれた普通の少女だったわ』

「シャルナも……」

『で、その当時のあたしの名前は“シャルナ”。……だから、驚いたのよ？　アテナがあたしに、フィーリングでシャルナって名前をつけた時にはね』

そういえば、その時のシャルナはシャルナって名前に酷く反応していたな……。そういうことだったのか……。

『ルインなんかは、その辺りの事情知っているから、後で聞いておくといいわ。一応、古いなじみだから』

「私は終焉の花嫁として、シャルナと一緒に終焉に巻き込まれ、私は街やシャルナと共に一度終焉を迎え……その後、精霊として転生。私の街を終焉に追い込んだ精霊を探して、追い込んだんです」

そして、取り逃がした……か。

『あたしは、人間のアテナと精霊のアテナ……二回もこの娘を失った……一度目は、奇跡的に精霊として再会できた。今回も、またこうして再会できた……でも、次はどうなるか分からない。なにより、もう目の前でこの娘を失うのは嫌』

ああ……だから、引き籠りになった時はあんなに……護れなかっ

た。“また”護れなかったって苦しんでいたのか……。
『アテナがあの娘だってことは、会ってからしばらくたった頃には気がついていたわ。ホント、以前のあの娘そのままなんだもの……まあ、多少色恋に酔っちゃいたけど』
それは……今は置いておいてくれ。
「私は……憎しみに囚われ、自分の全てを奪った終焉の精霊に復讐しようとして、結局、セツやさだめさんに災厄の種を蒔いただけ……シャルナを悲しませ、自分は全てを忘れ、のうのうと転生し……挙句の果てには、自分が不幸に、絶望に突き落とした相手に恋をして……。私一人が幸せに……最悪です。最低です。ホントに……最低」
吐き捨てるように……いや、まるで血反吐を吐くがごとく、アテナは自分を罵った。
「アテナ……」
「やめてください」
伸ばした手は、アテナに届かない。
「セツは、私を赦します」
アテナの言葉が、俺には届く。
「セツは、間違いなく私を赦すんです。私にはわかる。でも、だからこそ、私は貴方達の傍から消えた……赦されたくないから。罪人（つみびと）は、罪を受けるべきなんです。でも、セツはそれを私に望まない」
俺の言葉は、アテナに届かない。
「例え、セツが“赦さない”と言ったとしても、セツは心の中で、私を赦します。私に、今まで通り接してくれるでしょう。もしかしたら、好きにもなってくれるかもしれない。恋だって……してくれるかもしれない。でも……だめ。それは、だめ」
アテナは、自分を抱きしめる。
「怨み、憎しみ、執着……私の原動力は……私が今、ここに居るのは、生きているのは……全てそれに絆されたから……ただ、終焉を滅ぼすために……そのためだけにここに居て、なのに……」

俺の腕は、アテナを抱きしめられない……。
「だがら、私はやっぱり、また消えます。私に、セツの……優しくて暖かなあなたの傍に、いる資格はないから」
「っ！」
――違うだろ……。
「違うだろっ！」
伸ばした手が届かない？　声が届かない？　抱きしめられない？
「そんな筈……ないだろ……っ！」
足が地を蹴る。一瞬身を引こうとしたアテナを、思い切り抱きしめる。
「届くじゃないか……！」
「せ、セツ……」
「資格とかっ！」
「っ！？」
――思い出せ、御堂切。俺は、どんな奴だよ……？
「お前の事情なんか、端から聞いちゃいない……！」
――いつだって自然体で、マイペースで……。
「俺はっ！　他人の事情なんか露ほどにも気にしないマイペースな最低男なんだ！　だから、アテナの事情なんか知らない！」
俺は主人公なんかじゃない……さだめのトリップに巻き込まれただけの、ただの脇役みたいなもんだ。なら……。
「自分の、好きに生きるさ」
アテナを赦してハッピーエンドとか、そんなの俺の柄じゃない。
「俺は……そんな主人公じゃない。だから……っ！」
アテナの目を見て、告げる。
「俺を不幸にしたと……絶望に突き落としたと思うなら……」
更に、アテナを強く抱きしめる。
「今よりもっと……俺を幸せにして見せろ……！　俺に、希望を見せてくれ！　不幸に、絶望に突き落としたまま消えて貰っちゃ、困るんだよ！」

「……ぁ」
「離さないって、言っただろ……！　忘れたとは言わせない……俺は、お前を離したくないんだ……！」
「セ……ツ……」
「それに……」
辛いことも、あった。さだめのことで、色んな辛い目に遭ってきた……でも！
「俺は、一度だって自分を不幸だと思ったことはない……！」
さだめの兄であることに、不満を感じたことなんてない。さだめの兄であることに、誇りすら感じていたんだ……。
「そして、この世界に来て……俺は、どんどん幸せになってたんだ」
アテナと出会い、希冴姫やルイン、ユーキちゃんと出会い……。
「さだめも……助かった……」
何処の誰とも知らない、俺たち兄妹をこの世界に送り込んだ存在に、感謝していたんだ。それが……。
「お前だったなら……尚更だ」
強く、強く、抱きしめる。
「お前は、俺を幸せにしてくれたんだ……！　だから、もう、居なくなるな。もっと、俺に感じさせてくれ」
幸せを。
誰かを想うということを。
愛しさを。
「恋なんて……とっくの昔からしてるんだよ……！」
始まりは、きっと初めて会った時……。
恋なんて、したことなかったからわからなかったけど……きっと……最初から……！
「ぁ、あぁ……もう……これだから……だから、来たくなかったんです……」
少し苦しそうなアテナが、それでも文句一つ言わずに俺の背中に手を回す。

「ぜったい……離れられなくなるから……依存、してしまうから……」

どちらともなく、少しだけ、体を離す。

「一度目のキス……不意打ちだった。何も考える間もなく、錯乱しているアテナと……」

「二回目は……悲しかった……もう、会わないつもりだったから……」

だから、三度目は……。

俺とアテナの唇が、重な――

『ちょっと……！　ま、待ちなさいっ！！』

ドンッ！！

「なっ……！？」

「え……」

突然、凄まじい力で弾き飛ばされた俺が、その目にしたのは……。

「さ、だめ……？」

「幸せなキスなど……赦さない……」

アテナの飛びつくように、アテナに“ナニカ”を突き立てるような体勢の……

「苦しいキスも……赦さない……」

――さだめ

「さだめ、さん……」

――俺の、妹

「悲しいキスだって……赦しはしない……」

――抑揚のない、どこか空虚な響きの声。

――僅かに覗く、歪んだ口元。

「別れのキスなら……」

いつか見た……狂気の具現。

「潔く、去ね……！」

――そして

――その小さな体が

――崩れ落ちた

第三期第十九話「再会と、悪夢の始まり」（後書き）

改訂前と、特に変わったところもありませんので、ノーコメントとさせていただきます。

それでは、悠でした！

第三期第二十話「真実と裏切り」（前書き）

続けて連投です。おなじく、改訂前と違いはありません。

第三期第二十話「真実と裏切り」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第二十話「真実と裏切り」

――その小さな体が、崩れ落ちた。

「さ……」

さだめの、小さな体が。

「さだめっ！？」

「え……ぁ、私、なんとも……え、じゃあ……“コレ”……何……？」

アテナは呆然としているが、怪我はしていない。

アテナの足下に広がる、赤・朱・紅。

零れ落ちていく命の滴。

さだめの……最愛の妹の、命の……っ！

「さだめぇぇ！！」

さだめの影から、ズルリとナニカが抜け出る……。

『グッ……愚かな、自決だと……？』

「き……」

ソイツを目にした時、俺の視界が真っ赤に染まった。

「キサマァァァァァァァ！！」

思い切り拳を振りおろすが、俺の拳はソイツをすり抜けて空を切る。

『コイツは、コイツだけは……』

シャルナが俺と同じ血走った眼で杖をその終焉の精霊に突き立てる。
『消えなさい……災厄！』
カッ！
『グオオオオオオオオオッ！？』
また……またコイツなのか……！　また、コイツに、俺たちは……！
「さだめさん！」
「っ！　さだめ！」
アテナの悲鳴染みた声に、俺はすぐにさだめの傍に戻る。
自らの腹部にナイフを突き立てたさだめは、腹部から大量の血を……！
「さだめっ！　お前、なんでこんな……っ！？」
コヒュー、コヒュー、とパンクしたタイヤのように呼気を漏らすさだめは、それでも笑っていた。
「お、にいちゃ……さだめ、耐えたよ……」
その一言で、俺は察した。コイツは……あの終焉の干渉に対して、最後の抵抗をしたんだ……止まらない手足を、それでも動かして、アテナを殺さないために。
「馬鹿っ……！　それでお前、自分に……！」
「さだめさん！」
「らしくねえ……らしくねえよ……っ！」
「ア……テナ、は……」
さだめが、アテナに何かを伝えようとしていた。
「さだめさん！？」
「アテナは、トモダチ……さだめにとって、さい、しょの……初めてできた……だから……」
「あ、あぁ……」
だから、殺したくなかった……？　初めての友達を……。
「セツ！」

「希望!?」
「何してる!?　すぐに処置しなければ、死ぬぞ!」
「!?」
希望の言葉にハッと我に帰る。そうだ、泣いてる場合じゃない!
「けど、どうすれば……!?」
「ここが保健室で助かったな……光の行動が、巡り巡って吉と出たか……!」
希望はさだめの手からナイフをはぎ取り、そのナイフでさだめの制服を裂く。さだめの、血が出ている場所をすばやく針で縫って行く。その動きに淀みはない。そして何処からか持ってきたのか大量のガーゼや包帯でさだめのむき出しの腹部を覆って行く。
「ルイン!」
「っ!　わかってる……!」
ルインも連れてこられたのか、手から出した淡い光をさだめに当てていく。
「心配すンな……」
「ゴーズ……」
「一応よ……これでもオレたちャ、コイツの精霊だからな……コイツの魂、冥土になンぞ送って溜まるかよ!　テメエなンぞ、冥界に来ても門前払いにしてやらァ!」
『私たちは、この娘を冥府に連れていくために来たんじゃありません……!』
カイエンも……。
やがて、希冴姫に肩を貸したエースも現れる。
俺は、その場に集まってきた皆を眺め、涙を流す。
「さだめ……良かったな、さだめ……」
俺は、何もできなかったけど……。
「お前にも、トモダチが一杯できたぞ……!」
ずっと、一人ぼっちだったお前にも……俺以外に、お前の傍に居てくれる奴が、こんなに増えたぞ……。

「だから、死ぬなよ……！　お前が幸せになるのは、これからなんだからな……！」
俺は、さだめの手を握り、ただ、祈る。
「さだめ……！」

「お前にも、トモダチが一杯できたぞ……！」
お兄ちゃんの声が聞こえる。
お兄ちゃん……さだめ、頑張ったよ……？　嫉妬で、気が狂いそうだったけど……呑み込まれそうだったけれど……頑張って、耐えたよ……？
あの時……
「や……だめっ……やめて」
視界の奥、お兄ちゃんとアテナが抱き合っていた。
「いや……いやぁ……」
――さだめの、さだめのお兄ちゃん、盗らないで……！
《――――》
ドクン……ッ
「あ……」
ドクン、ドクン、ドクンドクンドクン！
「だ、だめ……それだけは、それだけは、ダメなの……」
《――委ねよ》
「や、いやぁ……」
《絶望に……委ねよ》
「だめ……アテナは、トモダチ、だから……」
《兄を……奪われたとしても……？》
「っダメ！　それ、は……！　それだけは、でも……」
《奪え……奪え。欲しければ、奪え……！　奪え

奪え！》

「あ、あぁ……！」

消えていく。

さだめの中、大事なモノ全部……！

残るのは、渇望。

「お兄ちゃん……兄さん……」

愛しい。

「兄さん、大好き……」

兄さん……！

思考が、それ一色に塗りつぶされていく。

気付いた時には、わたしはその手にナイフを握り……

『ちょっと……！　ま、待ちなさいっ！！』

制止も聞かず、わたしの身体は兄さんを突き飛ばし、憎い泥棒猫に……！

（……ダメッ！）

とっさに、さだめはナイフの持ち手を逆手にして、自分のお腹にナイフを突き立てていた。

お腹に、灼熱の味。

手足に力が入らなくなって、さだめはその場に崩れ落ちた。

（お兄ちゃん……）

お兄ちゃんの大事な人、守ったよ……さだめのトモダチ……守ったよ……。だから……お兄ちゃん。

さだめ、ごほうび……欲しいなぁ……。

「……今、この場で出来る限りのことは、やった」

後は、さだめ次第……か。
「大丈夫だ。信じろ。セツ。貴様の妹は、それほど柔ではなかろう」
「ああ……」
殺しても死なないような奴だ。きっと、すぐにケロッとした顔で目を覚ますに決まっている。
「良かった……さだめさん」
僅かに、その場の全員から安堵の息が漏れる。

「なぁんだ。誰も死ななかったんだ～。ざぁ～んねん」

『っ！？』
全員が、驚いて振り向く。
「にしても……くだらない三文芝居だったね～。せっかく色々お膳立てしてあげたのに、つまんないなぁ～」
保健室のドア。そこに背を預けて、クスクスニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべる人影。
「私……私には、分かります……」
「私も、わかる……忘れもしない……！」
アテナとルインが戦慄する。希望が、二人の言わんとしていることを引き継いで言った。
「現れたか……。終焉の闇……本体！」
「ぴんぽ～ん。もう、さだめちゃんなら、きっちり殺してくれるかなぁ～って思ってたんだけど……買い被り過ぎだったかな～？」
どこか間延びした声。綺麗に整えられたブラウンの髪……余計な肉のない、女性らしくもスレンダーなその肢体を包むオベリスク・ブルーの制服……。

「まさか……キミが……？」
どうして……
「どうしてだよ……っ！」
混乱する頭で、俺はその娘の名前を呼んだ。

「ユーキちゃん！」

加藤友紀。
今、俺たちの前でニヤニヤと昏い笑顔を浮かべているのは、間違いなく、ユーキちゃんだった。
「フフ……その答えだったら、そっちの人がよ～く知っているんじゃないかなぁ～？　ねえ、希望く～ん？」
俺たちの視線が、一斉に希望の方を向く。希望は、いつもの微笑みを消した、一切の無表情で、俺たちに説明する。
「終焉は……イレギュラーその他による世界の改変……世界のバランスが崩れることで生まれ、活性化する……そう、イレギュラーが関わり、世界が本来のレールから外れることで、終焉は生まれる……」
「つまり、どういうことですの……？」
「イレギュラー……君たちが最も深く関わり、最も改変が顕著に表れた、ただ一人の人間……イレギュラーでなく、イレギュラーとなった……この世界の、狂ったバランスのクロスポイント……」
それが……、
「ユーキちゃん……？」
「大正解～♪」
そんな……。

『終焉は君たちのすぐ傍に』
希望の手紙に書かれていたそのフレーズの意味が、漸く理解できた。俺たちが深く関わり、未来が改変された、その中心。そこに……終焉は居たんだ。
「終焉の闇。その本体だけは、他の欠片たちとは違い、憑依したりはしない。闇が潜むのは、世界の異常。その存在。その狂界」
狂界……。狂った世界……。
「ユーキちゃん、いつから……」
いつから、終焉になっていたのだろうか。今まで俺たちと一緒に居たユーキちゃんは、どこまでが……。
「……ん～何か勘違いしているようだから言っておくけど～」
今や終焉の闇と化したユーキちゃんは、少しさびしそうな表情をしていた。
「この体……加藤友紀の想いは、本物よ」
ユーキちゃんの……終焉の口調が変わる。
「私は、宿主の……加藤友紀の恋心と共に、育ってきたのだから。我が花嫁……いえ、花婿」
「ユーキちゃん……」
「宿主の、貴方への想いが、我が源泉。彼の者の恋情と共に、私は目覚めた」
「……加藤友紀はイレギュラーではない。彼女をイレギュラー足らしめたのは、偏にセツへの恋心。キミに恋をし、元あったレールから外れた、これがその結果」
希望の言葉が、何処か遠くから聞こえてくるような感じがした。
「まあ、今日はただの顔見せだよ～。ホントなら、さだめちゃんかアテナちゃんを失って絶望するセツくんが見られれば最高だったんだけど～。まあ、誤差の範囲かな？」
口調を戻したユーキちゃんは、クスリと笑って俺たちに背を向けた。
「逃がすか！」

「待て！」
「何故止める！？」
「あの体は、紛れもなく加藤友紀のものだ。剣で斬りつけたりしたら、加藤友紀が死ぬだけ。終焉の闇自体は、他の場所で生まれるだろう。他の……そう、イレギュラーとの接触によって運命が変わり、バランスを崩す要因となっているものたちの所に。例えば、丸藤亮やタイタン、早乙女レイ辺りに、ね」
「フフッ！　そういうこと。だから、今日は見逃してね？　セツくん。アテナちゃん」
「くっ……」
「じゃあ、バイバ～イ。また、近い内……そう。終焉の時までさよなら。みんな」
　ユーキちゃんは、闇に溶けるようにして消えていった。俺たちは、それを睨むことしかできない。何処からか、ユーキちゃんの声が聞こえてくる。
　――いつか、迎えに来るよ。それまで待ってて。セツくん。傍に……いるから。
「……」
　俺たちは、しばらく誰も何も話さなかった。ユーキちゃんが、敵の本体。倒すべき、敵……。
「……真中希望」
　そんな中、ユーキちゃんとの関わりが薄かったからか、いち早く立ち直ったエースが、希望に剣を突きつける。
「なにかな」
「貴様は、知っていたのか？　加藤友紀が敵……終焉の闇本体であると」
「ああ。知っていた」
　淡々としたその答えに、ギリッと歯軋りをするエースだが、爆発するのを堪えて、質問を続ける。
「ならば、何故対処しなかった。何故、我らにそれを伝えなかった」

「本体が表に出てこなければ、対処も何もない。それに、君たちにそれを伝えたところで、状況が悪化するだけだと判断した」
「どういう意味だ」
「仮に、ユーキが終焉の本体だと君たちに伝えたとする。君たちはどうした？」
「それは……」
言い淀むエース。俺たちも、それを想像してみた。
「どうすることもできない。それどころか、黒幕がユーキだとわかれば、君たちはユーキに対する態度を変えかねない。そうすれば、ユーキの心に淀みがたまり、さらに終焉は力をつけていただろう。負の感情は、終焉の餌だ」
「っじゃあ、今この場で奴が表に出ることを、貴様は予知していたのか？」
「していた。アテナがセツと再会する時。そしてさだめが再び闇に堕ちる時。奴が顔を出すなら、このタイミングしかないとまで思っていた」
「ま、待て。じゃあ何か？　お前は、さだめかアテナがこの場で死にかけることも……」
慌てて、俺は口を挟んだ。それに対しても、希望は淡々と答える。
「当然、予測していた。さだめの中に欠片が潜んでいることは知っていたし、君たち二人が仲直りすれば、嫉妬で表面化するだろう、と」
「こうなることを知っていて、お前……」
アテナを、唆したのか。
「そうだ」
「っ貴様！」
俺より先に、エースが憤った。
「貴様、何様のつもりだ！　彼らを、どこまでも自分の駒のように……神にでもなったつもりか！？　彼らの命をなんだと思っている！？　我らとは違う、我らが、デュエルで墓地に行くのとはまるで

違う……本当の意味での“死”をお前はっ！」
「だがそうしなければいけなかった」
「っ！」
一遍の迷いもない希望の瞳に見詰められ、エースは気圧されたように後ずさる。
「アテナに力を自覚させ、セツたちに力をつけさせ、君たちを鍛え上げるには、綱渡りが必要だった。君たちの命をかけた綱渡りだ。現実はゲームなんかじゃない。それを一番よく知っているからこそ……守られているだけで、経験値が入ってレベルアップなんてできないことを、知っているからこそ」
静かな、しかし圧倒的な力を持って叩きつけられる希望の言葉に、エースはしかし怯まない。
「貴様自身には、何一つ賭けるもののない、失うもののない、そんな賭けを、我らを担保にしておいて良くも抜け抜けと！」
「失うものならある。僕は、この賭けに負ければ、この世界そのものを失っていただろう。自分の命も、君たちの命も、全てひっくるめてこの世界を。愛する者も、守るべきものも、全てだ」
「貴様っ……「よせ、エース！」セツ……！？」
俺は、希望に顔を向ける。希望の目に迷いはない。初めて会った時から、コイツの目は変わらない。強い意志の篭った、揺るがない目だ。
「ありがとう」
ザワリ……と空気が振動するのを感じた。皆が驚愕の目を向けてくるのがわかる。驚いていないのは、目の前の希望くらいのものだ。
「セツ、貴様何を……なぜ、コイツに頭を下げている……？」
「ずっと、俺たちを護っていてくれたんだろう？　お前は」
「……」
希望は無言。
「やっとわかった。お前が一体何者なのか。なんでここまであらゆる事を知っていながら、なんでもできるハズのお前が、終焉退治を

俺たちに託していたのか……」
「……答えを聞こう」
「出来なかったからだ。あの終焉だけは、お前じゃどうにも。例え倒しても意味がない。お前以外の誰かには出来ても、お前にだけは出来なかった。そうだろ……？」
俺は、確信を持って指摘した。

「“世界の修正力”……いや、世界！」

「えっ……」
「修正力……？」
「世界……だと？」
「……」
アテナたちが、今日何度目かもわからない驚愕に身を震わせる。
本当に、今日一日だけでどんどんわからなかった事実が浮き彫りになっていく。正直俺も、混乱しそうだ。が……。
「希望……どうなんだ？」
俺が、殆ど確信しながら希望に問う。希望は、しばらく黙っていたが、やがてフッ、と表情を緩める。
「……やっぱり、キミは頭が良い。良くわかったね。その通りだ」
認めた。
「セツ……どこで、そのことに……？」
「……初めは、コイツのデュエル。俺たちのデッキ構成はおろか、今の手札、リバースカード、次にドローするカードまで知っているかのようなプレイング。この世界でもあるお前は、その気がなくとも、この世界に存在する全てを知覚している。そうだな？」

「いやまったく、その通りだ。僕が望む望まないに関わらず、僕はこの世界で起こっている全てのことを知覚している」
「もう一つ。ルインのことだ」
「……私？」
「ルインは、少なくとも１０００年以上昔に、コイツと会っている。しかも、今と寸分違わぬ姿のコイツと」
「……そう」
「不老不死。そんな存在がホイホイいて溜まるか」
「だから、寿命もクソもないこの世界そのものではないか、と気付いたわけだ」
「もう一つは、さっき言った。お前がどうしても俺たちを使って終焉を倒させようとしている事実。最初は、自分が手を汚さないためとか、ゲームマスター気分だとか、そんな風にも思ったさ。けど、希望の世界を救わんとする思いは本物に見える。だから……」
「自らが手を下せない理由があるのでは。そう考えたわけだね」
その通り。以前言っていた、世界のバランスの話。
「世界の修正力がかかればかかるほど、終焉は力を増す。お前が下手に干渉すればするほど、終焉は強く、大きくなっていく」
「その通りだ。一時的に消すことは出来るだろう。だが、所詮焼け石に水。どころかすぐにでも力を増して蘇ってくるだろう。……僕が手を下しても、どんどん状況が悪化するだけだった」
同時に、詳しい情報も、下手に与えたりすれば世界の干渉と同義となってやっぱり終焉は力を増す。
「だから僕は、過干渉を避けた。君たちの心を操ったり、光みたいに力尽くで君たちを導くようなことは、出来なかった。言葉で、なんとかして君たちを導くしか方法はなかった」
当然、それらの情報も、俺たちが自分で気付くまでは過干渉に当たるから漏らせない。
「僕は、あくまでそう……ゲームマスター的立ち位置で動くしかなかった。君たちを言葉で翻弄し、チェスの駒を操るがごとく心境で」

希望はアテナに目を向ける。
「すまなかったね。今回の場合、キミに賭けるしかなかった。終焉の欠片の対であるキミには、随分と辛い想いをさせた」
「欠片の、対？」
「終焉の精霊が、終焉の端末なら、キミは僕の……世界の修正力、秩序を司る端末だった。これまで、ご苦労だった。ありがとう」
「い、いえその……私は……」
「人間で唯一、終焉の欠片に抗することのできる者……アテナ。キミに、力を」
希望は、懐からカードを一枚取り出し、アテナに渡した。
「受け取るといい。キミのカードだ」
「私の……これは、私が、精霊だったときの……」
「ああ。『反魂（はんごん）のスピリチュア』のカードだ。これからの戦いで必要になってくるだろう。持っていなさい」
「……はい。確かに賜りました。盟主様」
「……君は人間だ。僕を主とする必要はない」
「ケジメです。今回だけ、ケジメとしてしただけですよ。もうしません」
「うん。そう言われると、少し勿体なく感じるね」
冗談交じりに言う。
さて、と希望は俺たちを見回す。
「……僕はこれで失礼するよ。君たちも、精々僕を守るため、頑張ってくれたまえ」
「お、お前なぁ……」
「はは、冗談だよ。今は、終焉のこととか、皆忘れて、さだめに付いていてやるといい。アテナとも、もう少し話すこともあるだろう」
「……ああ。そうさせてもらうよ」
「……あぁ、そうだ。希冴姫」
「？　なんですの？」
「これを」

希望は希冴姫に、なにかを渡した。
「これは……」
「――――」
「っ！　わかりましたわ。ありがとうございます」
「じゃあ、これで。また会おう」
希望に何かを耳打ちされた希冴姫は、一瞬顔を強張らせてから受け取ったものを大事そうに抱え、希望に頭を下げた。
「おい、また何か……」
「大丈夫ですわ。セツ様。わたくしは、彼にお礼を言わなければなりませんし」
「……そうだな。このクレイジーに関しては、我も特に言うこともない」
隣にいて、希望の言葉が聞こえていたらしいエースも、顔を顰めつつもそう答える。
「……いい加減、そのクレイジー呼ばわりはやめてくださいませんこと？」
「クレイジーはクレイジーだ」
なんだか良く分からないが、エースが見逃しているなら、問題ないのだろう。希冴姫も少し調子いいみたいだし……今は。
「さだめ……」
コイツについていてやろう。まずは病院にいって、輸血だな。俺が血液型一緒だし、何よりコイツ、俺以外の血なんて嫌がりそうだから……そうだな。
「頑張った大賞だ。貧血くらい、我慢してやるか」
さだめの髪を撫でながら、俺はそんなことを呟くのだった。

第三期第二十一話「白熱！？　アイドルデュエル！」（前書き）

続けて連投です。多少改訂箇所もありますが、まあ概ね以前と変わりなしです。

第三期第二十一話「白熱!?　アイドルデュエル!」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第二十一話「白熱!?　アイドルデュエル!」

十代失踪。
またしても届けられたこの知らせに、アカデミアは揺れた。
そして、追い打ちをかけるかのようにナポレオン教頭たちのレッド寮廃止作戦。
「私がいない間に、そんなことになっていたんですね……」
俺はアテナに、先日のエドとのデュエルや、十代がデュエル出来なくなってしまったことを伝えた。
「わかりました。そういうことなら、心配させてしまった分、私も協力します!」
するとアテナは、勢い込んで明日香の方へ体を乗り出す。
「ということで明日香さん!　私も今日から、レッド寮に泊まり込みます!　相部屋、お願いしてもいいですか!?」
「え、ええ私は構わないけれど……何か、不純な動機も感じるわ……」
そりゃ、ここんとこずっとアテナが俺にひっついているからだろう。周りから見れば引くくらいべったりだった。俺としては……まあ、悪い気はもちろんしないのだが、正直、さだめに申し訳ないと言うか……戸惑っているのが現状だ。
「……しかし、俺たちも舐められたもんだな。十代がいないからっ

て、レッド寮の攻略が簡単に出来るとでも思ってるのか？」
「あー……その件に関してだがな」
「どうした、剣士」
「今朝方、オレのとこにこんなもんが届いててな」
「えーと……これは、イエロー寮への格上げ通知？」
「……なるほど。実力のあるレッド生がいると都合が悪いからって、急遽格上げさせようってことか……」
三沢の分析に、それは少し甘い考えなんじゃないかと思う。急にイエローに格上げされたからって、レッド寮への愛着がなくなるわけでもあるまいに……。
「「納得いかん（行きません）！！」」
「おおう！？　どうしたアテナに万丈目！？」
突然怒りも露わに咆哮した二人に、俺は瞠目した。
「実力あるレッド生というなら、何故この万丈目サンダー様にその知らせが届いていないのだ！？」
「万丈目さんはともかく、セツにだってその知らせが届いていてもいいはずです！　というか、届いてなきゃおかしいじゃないですか！？」
「あー……」
二人とも似たような理由か……というか、帰って来てからこっち、アテナの俺リスペクトがすごい。
「いや、多分俺の場合は出席率その他が酷いことになっているからかと……」
「確かに、最近はまたさだめの看病とかで、セツ随分休んでいるからな」
「じゃあオレ様はどういうことだ！？」
「お前は……多分、おジャマトリオかと……」
まあ、おジャマトリオ使いが下手に格上げされると、他の生徒から反感が出かねないってのはあるかもしれんな……。
『んまぁ～！　オイラたちとアニキの絆を馬鹿にするのは許さない

わよ～ん！』
『そうだそうだ～！！』
「ええい黙れ雑魚共！」
「とにかく、例え格上げがどうでも、オレもレッド寮廃止には反対だ。協力するぜ」
「よっし！　これがオレらの、進化した結束ザウルス！」
「来るなら来なさい！　クロノス臨時校長！」
と、俺たちが結束を高め合ったところで、外からギターの音色が聞こえてきた。
「この音色は……」
急いで外に出てみると、そこにはボートの上で、アロハシャツ姿でエレキギターを爪弾いている吹雪さんと、その後ろにちょこんと目を逸らし気味に俯いている凛の姿。
「兄さん！」
「凛！」
「誰ドン？　あの、突き抜けたお人は」
「男の方は、年長さんだ」

「兄さん、どうしたの？」
「凛、お前まで一緒になってどうした？」
「そ、それは……その」
剣士に問われて、どうも気まずそうに身じろぎする凛。対して、吹雪さんの方は堂々としたものだ。
「お前を迎えに来た。ブルーに帰ろう。明日香」
「ええ！？」
「その……私は、アテナ先輩を……」
「わ、私ですか！？」
「まさか、兄さん……！」

「そのまさかなノ～ネ！」
声が聞こえた方に顔を向ける……と。
「ぶふっ！」
思わず噴き出した。く、クロノス臨時のウェットスーツ……凄い光景だ……。
「シニョ～ラ明日香。それにシニョ～ラアテナ。貴女たちには、ブルーのアイドル養成クラスに来ていただきますニョ～ネ」
「アイドル養成クラス？」
要するに、凛のような生徒を養成するためのクラスらしい。しかし、アテナも明日香もそれをきっぱりと断った。
「何故？　可愛いアイドルになることが、そんなに嫌なのかい？」
「どういうことッスか？」
「クロノス臨時校長は、私と兄さんに、ユニットを組ませようとしているのよ」
「その……事務所の方から、アテナさんと組んでみないかって提案が……」
「わ、私ですか！？　いつの間にそんなことに……私のいない間に……」
いや、それは俺たちも初耳だった。
「デュエルアカデミアから、爽やか兄妹デュオと、小悪魔＆天使アイドルデュオの誕生なノ～ネ！」
「！！……良い～！」
「良くないわよ！」
「そ、そんなアイドルだなんて、私……」
「明日香もアテナくんも、アイドル界の金の卵だ。そうは思わないかい？　万丈目君。セツ君」
「し、師匠……」
「いや、俺は……」
「せ、セツ。私は、その……」
アテナが不安そうにこちらを見上げている。

「……すみません吹雪さん。俺は反対です」
「セツ！」
「何故？」
「アテナは嫌がってますし、その……出来ればあんまり、アテナを衆目に晒したくもないので……」
『そうだそうだー！！』
「ん？」
突如聞こえてきた大勢の声に振り向くと、そこには大勢のレッド寮男子の姿。
「アテナ様はレッド寮の女神だ！」
「太陽だ！」
「俺たちレッド専用アイドルなんだ！」
「折角、俺たちの太陽を取り戻したのに……」
「我らが女神を奪おうと言うのか！？」
「アテナ様を欲望でギトギトに濡れた畜生共の目に触れさせてたまるか！」
……正直、お前たちに言われたくはないだろうな。まだ見ぬ視聴者も。
「皆さん……」
アテナが少し感動したように呟いているが、こいつらにそんな感動的な理由なんてないことを忘れるな。
「大体、折角アテナ様と一つ屋根の下になれるかもしれんのに、女子寮になんて戻してたまるかー！！」
『そうだそうだー！！』
「おいコラ待てや」
思わず突っ込む。ほら見ろやっぱり邪な理由だった！
「よ、予想外の反対意見があったが、とにかく、俺たちは断固反対の姿勢だ」
「……結局、僕たちの意見は平行線だね。まるで夜汽車のレールだ。決して交わることはない」

「結局、私たちはデュエルでしか結論を出せないのよ」
「えと……私としても、出来ればアイドル養成クラス、認めて欲しいんです。そうすれば、お仕事で休んでも公欠にできるので……」
「すみません凛さん。私、レッド寮から離れるつもりはないんです」
最終的に、明日香ＶＳ吹雪さん。アテナＶＳ凛のデュエルで決着をつけることと相成った。

翌日、デュエル場にて双方の意見をかけたデュエルが行われた。
先ほど行われた明日香と吹雪さんのデュエルは、無事明日香の勝利で終わった。次はアテナと凛の番だ。
「行きます。アテナ先輩。私のターン、ドロー！」
正直、さだめの傍から離れるのには抵抗があったが、ルインが看ていてくれると言っていたので、俺はアテナの応援だ。なんでも、『私なら、もし何かあっても応急処置ができるから、キミは彼女の方に付いていて』だと。ホント、こういう時に限って気配り上手だよ。ルインは。
「私は『デーモン・ソルジャー』を攻撃表示で召喚！」
『デーモン・ソルジャー』ＡＴＫ１９００
「悪魔族！？」
凛のメインデッキが水属性だと言うことは、アテナにも言ってある。だから、態々悪魔族を選択した凛に驚いたのだろう。
「……一応、ここには“小悪魔リン”として立っていますので。こちらを使わせていただきます。それに……」
凛はちらりとソリッドビジョンに映し出された『デーモン・ソルジャー』を見る。
「悪魔族の使い方については、さだめに何度も教えてもらいました。私はもう、悪魔族だからって嫌ったりはしませんよ」
実際、凛と悪魔族デッキ自体の相性は悪くなかった。ただ、凛が

悪魔族デッキに抵抗感と言うか、拒絶していたからプレイングが甘かったり効果を理解していなかったりしただけで、そこさえ克服すれば、凛にとって悪魔族は十分武器になる（さだめ談）。
「私はカードを一枚セットして、ターンエンドです」
「私のターン、ドロー！」
一方、アテナのデュエルを見るのは久しぶりだ。天使族デッキなのは変わっていないにしても、今どんな構成をしているのか、さっぱり聞いていない。
「私は魔法カード『打ち出の小槌』を発動します！　手札のカードを三枚と、このカードを戻してカードを四枚ドロー！」
手札交換……いきなりしてきたってことは、初手にいつものカードがなかったのか……。
「む……私はモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンドです」

「珍しいな」
「ああ、アテナの初手に、ヴァルハラがなかったのは初めて見たかもしれん」
剣士がポツリ、と呟いた言葉に俺も反応した。ん？　そういえば……。
「なあ剣士、お前って今どっちを応援してるんだ？」
「は？」
俺の質問に、遠くで凛がピクっと反応するのが見えた。流石、恋する乙女は地獄耳。
「そりゃ、アテナに決まってるだろ」
ピクっ！
「あー……」
だと言うのにこの馬鹿は……。

「レッド寮潰されるわけにはいかねえしよ。アテナの方を応援すんのは当然だろ？」
「あーソウダネ。当然ダネ」
遠目に見える凛は、明らかに戦意が増していた。

「私のターン！　ドロー！！」
「な、なんかすごく気合入ってますね……」
しばらくドローもしないで沈黙していたかと思うと、突然凛さんが吠えるようにカードをドローしました。な、なんというか、鬼気迫るというか……。
「私は『デーモン・ソルジャー』をリリースして、『軍神ガープ』を攻撃表示でアドバンス召喚します！　効果発動！」
『軍神ガープ』ＡＴＫ２２００
「っ！」
しまった！　ガープは……。
私のセットモンスター、『マシュマロン』が攻撃表示に変更される。
『マシュマロン』ＡＴＫ３００
「『軍神ガープ』が表側表示で存在する限り、フィールド上のモンスターは全て表側攻撃表示となり、表示形式は変更できません。更に、手札の『クリッター』をオープンすることで、ガープの攻撃力を３００ポイントアップ！　バトル！『軍神ガープ』で『マシュマロン』を攻撃します！」
『軍神ガープ』ＡＴＫ２２００→２５００
「きゃあっ！？」
アテナＬＰ１８００
「っ……『マシュマロン』は、戦闘では破壊されません」
「はい。それでは、私はターンエンドします」

「っ私のターン！　ドロー！」
正直、余りよろしくない展開です。初手にヴァルハラや『ヘカテリス』も来なかったですし、『マシュマロン』がサンドバック状態では……。
「私は『マシュマロン』をリリースして『光神テテュス』を攻撃表示でアドバンス召喚！　バトルします！『光神テテュス』で『軍神ガープ』を攻撃！『ホーリー・サルヴェイション』！」
『光神テテュス』ＡＴＫ２４００
「トラップカード『プライドの咆哮』！　ライフを２００支払って、ガープの攻撃力をアップします！」
凛ＬＰ３８００
『軍神ガープ』ＡＴＫ２２００→２７００
「テテュス！？」
テテュスがガープによって迎撃され、また私のライフが削られる。
アテナＬＰ１５００
「どうです！？」
力強く宣言する凛さん。その目に宿る力に、想いに、私はハッとしました。
「……やっぱり私、調子に乗っていたみたいです」
私は、以前ユーキさんと初めてデュエルした時のことを思い出しました。
「……？」
そう、確かあの時、私は今の凛さんと同じ瞳を……恋する乙女の目をしていた筈でした。
「以前私、アカデミアで殆ど負けなしで、調子に乗っていたんです」
それを、希望さんや光お姉さんに鼻っ柱を折られて……。そして今また、少し頭が冷えました。
「！？　城が……」
私の力の源、それが何なのか、やっと思い出しました！
「……テテュスが迎撃されたのは、予想の範囲内でした」

私にとって困ったのが、攻撃表示のまま放置された『マシュマロン』。
「でも、場にモンスターがいなくなったおかげで、このカードが使えます」
今回は、少しだけ出番が遅れましたが……たった今、引くことができました。
「私はメインフェイズ2に『神の居城―ヴァルハラ』を発動しました！　効果によって、一ターンに一度、天使族モンスターを特殊召喚します！　来て！　シャルナ！」
『アテナ』ＡＴＫ２６００
私の力の源、それは間違いなく、セツへの気持ち！　セツを想うだけで、いくらでも湧いてくるこの闘志！
『はいはーい。お姉さんにお任せよん♪』
「私はカードを一枚セット。ターンエンドです！」
負けられません！　このデュエルに勝って、レッド寮に……セツの傍に！
「私のターン、ドロー！　私は手札の『クリッター』と『クリボー』をオープンして、ガープの攻撃力を６００ポイント上昇させます！」
『軍神ガープ』ＡＴＫ２２００→２８００
ガープの攻撃力が『アテナ』……シャルナを上回った。
「更に『クリッター』を攻撃表示で召喚。バトルです！『軍神ガープ』で『アテナ』に攻撃！」
『クリッター』ＡＴＫ１０００
「トラップカード、『和睦の使者』！　このターン、私のモンスターは戦闘によっては破壊されず、ダメージも受けません！」
「くっ……カードを一枚セット。ターンエンドです」
「私のターン、ドロー！　私は手札から速攻魔法『光神化』を発動！　手札の天使族モンスター一体の攻守を半減させて特殊召喚します！　私は『ジェルエンデュオ』を特殊召喚！　更に速攻魔法『地獄の暴走召喚』！　攻撃力の半減した『ジェルエンデュオ』が特殊

召喚されたことで、私はデッキから二体の同名モンスターを特殊召喚します！」

『ジェルエンデュオ』ＡＴＫ１７００→８５０

『地獄の暴走召喚』は、相手のモンスターも増やしてしまいます。でも、私の予想が正しければ……。

「う……私のデッキに同名モンスターはいません」

やっぱり。『クリッター』は制限カード。デッキには一枚しか入っていない。ガープの方はわからなかったけど、三枚積みにするようなカードとも思えなかったから、出てきても一体だと思っていました。

「そして『アテナ』の特殊効果起動！　モンスターが召喚、特殊召喚される度、相手プレイヤーに６００ポイントのダメージを与えます！　私は二回、天使族モンスターを特殊召喚しました。よって１２００ダメージ！」

『天罰てきめーん！』

「きゃあっ！？」

凛ＬＰ２６００

「永続魔法『生還の宝札』発動！　更に、攻撃力の半減した『ジェルエンデュオ』を『アテナ』の効果でリリースし、墓地の『光神テテュス』を攻撃表示で特殊召喚！『アテナ』の効果で６００ダメージ！」

『てりゃ！』

「うくっ……」

凛ＬＰ２０００

「そして、『生還の宝札』の効果を発動！　デッキからカードを一枚ドロー！『光神テテュス』の効果で、ドローした『紫光の宣告者』をオープン！　ドロー！『緑光の宣告者』ドロー！『オネスト』ドロー！『ムドラ』ドロー！『虚無の統括者』ドロー！『シャインエンジェル』ドロー！……！」

ちらり、と今ドローしたカードを見る。

――まだです。このカードは……“私自身”は、味方とのデュエルで使うようなカードじゃありません！
「私は『ジェルエンデュオ』を二体分のリリースとして、手札から『虚無の統括者』を攻撃表示でアドバンス召喚！『アテナ』の効果でダメージ！」
『虚無の統括者』ＡＴＫ２５００
『それそれまだまだ行くわよん！』
「っ……！」
凛ＬＰ１４００
「バトルです！『アテナ』で『軍神ガープ』を攻撃！『ディヴァイン・クロス』！」
『ちょーち痛いわよ？』
「更に手札から『オネスト』の効果を発動します！」
「っく、手札から『クリボー』を捨ててダメージを無効化します！」
「続いて『虚無の統括者』で『クリッター』を攻撃！『トリニティー・ヴァニッシュ』！」
「トラップカード『ガード・ブロック』！　ダメージを無効化してカードを……」
「させません！　手札から『シャインエンジェル』と『紫光の宣告者』を捨てて、トラップの発動と効果を無効にします！」
「そんな……」
「すみません凛さん……私も、そうそう簡単には負けられないんです！」
少しでも、セツの傍にいるために。レッド寮で過ごす時間を、日々を……、
「無くしたくないんです！」
『虚無の統括者』の放った極光が、『クリッター』をその名の通り消滅（ヴァニッシュ）します。その光の奔流は、『クリッター』を消滅させるだけでは飽き足らず、凛さんを包み込んで行く。
「きゃあああっ！？」

「……はぁ、負けました」
「ごめんなさい。大丈夫ですか？」
「はい。何ともありません。でも……」
「でも？」
「……悔しかったな」
「え？」
「デュエルに負けたこともそうですけど……アテナ先輩は、もう好きな人と想いが通じちゃってるんですもん。それが、悔しい。私なんて、まだまだですもん」
「あ、あはは……かなり、紆余曲折ありましたけど……」
想いは通じた……ってことでいいんですかね？　まだ、ちょっと怪しい気もします。というか、何より私自身が今まで逃げちゃってましたしね。さだめさんのこともありますし、まだ正式に、ってわけにはいきません。
「……それに、なんかどうも剣士先輩……ぶつぶつ」
「あの……？」
「アテナ先輩！」
「は、はい！？」
「負けませんからね！」
「へ？　え、えっと……何が……」
「アテナ先輩は、もうガチな想い人いるんだし、いくらなんでも大丈夫だとは思うんだけど……」
わ、私にはさっぱり何のことやら……。でも……。
「え、えっと凛さん」
「ぶつぶつ……は、はい？」
「その、敬語なんですけど、やめにしませんか？」

「え？」
「もうお友達ですし、それに……」
くすり、と笑みが漏れる。確か、さだめさんにも同じようなこと言ったんですよね。
「私の方が歳下なんですから、敬語で話されるのは、ちょっと違和感があるんです」
まあ、精神年齢というか、転生前まで含めれば歳上どころじゃありませんけどね私。
「……え？　歳下？」
「……ええ。そうですよ？」
……なんでしょう。この辺のやり取りも、さだめさんとした気がします。
「え？　なに？　ギャグ？」
……ぷっつーん。
「ぎゃ、ギャグとはなんですか！？　私はそこまで老けて見えますか！？」
「ひゃあっ！？　い、いえ！　じゃなくてううん！　そ、そういうことじゃなくて、なんて言うかその、お、大人びた容姿というか雰囲気と言うかその……」
「精神年齢はともかく、肉体年齢はまだ十三歳なんです！　ピッチピチですよ！　凛さんなんかよりもずっとずっと若いんですからね！」
「そ、その言い方だとむしろ私の方が老けてるみたいじゃない！　や、やめてよ私だってまだ十五歳なんだから！」
「ああもう！　何でみなさん私を同年代扱いするんですか私は一番歳下なのにぃ！」
「そう見えないんだからしょうがないじゃない！　むしろ羨ましいよ何そのおっぱい！」
「は、発育が良くて悪いですか！？」
「さだめや私からすれば敵だよ敵！」

「目の敵にするならルインさんにしてください！　大体、さだめさんからすれば凛さんクラスだって十二分に敵です！」
「ルインさんはもう成長しないけど、アテナはこれからいくらでも成長する年齢じゃない！　それが胸囲……じゃなくて脅威なの！」
……どうしてこう、必ず言い争いになるんでしょうか。もしかして私、友達作るの下手なんでしょうか……うぅ。

「……まーた言い争ってるな」
「いいのか？　止めなくて」
「いいっていいって。どうせ、しばらくすれば仲良く笑顔だよ。さだめ相手でもそうだったんだ。凛くらい余裕余裕」
「……ま、オレ相手でも躊躇いなく友達になるような奴だしな」
「なんだ？　もしかしてアテナに未練でもあるか？　渡さないぞ」
「うっせえな。ねぇよそんなもん。盗るかアホ」
冗談交じりにそんな会話をする。少し顔を赤くしている辺り、やっぱりちょっとは惚れてたっぽいな。コイツ。
「ま、お前は凛についていな。あの子も、剣士を頼りにしてるっぽいし」
「……なんでだかな。別に特別何かしたわけじゃねえんだが」
「それ言ったら、俺だってアテナに何かしたわけじゃない。気付いたら今みたいになってたんだ。そういうもんだよ。恋愛なんて」
とかなんとか。偉そうに言っているが、俺だってそんなもん全然わかっちゃいない。どうなったら恋なのか、どうなったら愛なのか。好きって言葉の違いすらまともにわかってない馬鹿だ。けど、これだけは言えるな。
「ちゃんと見てやれよ。あの娘が思いつめてからじゃ、遅いんだから」
俺は、確かに何とかなった。でもそれは、いくつもの奇跡的な偶

然に助けられたものだし、何よりそうなる前に幸せになってしまう方がいいに決まっている。
「……ああ。頭にゃ入れとくさ」
「……それでいい」
さて、まずはアテナの引っ越し準備をしなくちゃな。
「手伝えよ」
「わぁってるよ」
俺たちは、案の定口論から笑い声に変わった少女たちに向けて足を動かすのだった。

第三期第二十一話「白熱！？　アイドルデュエル！」（後書き）

こんにちは。

とりあえず、これで次回から修学旅行編に入ることができます。元々ユーキちゃん回にする予定だったのが、この話との兼ね合いから急遽アテナ回に。しかもその代わりと書いたユーキちゃん回が妙に長くなったので、三期の話数が延びました。修学旅行も、まさか一話では終わらないでしょうから、二話、三話と……おや、凄まじい話数になりそうだ。

それでは、悠でした！

第三期第二十二話「攫われたアイドル」（前書き）

こんにちは。

修学旅行編です。改訂前ではスルーしたこのイベントですが、読者様方からの要望や、悠自身やっておきたいこともあったので、やることにしました。

タイトルからわかるかもしれませんが、最初はあの二人です。一番修学旅行をプッシュしていた方のキャラでもあるので、しっかり活躍させたいところです。

第三期第二十二話「攫われたアイドル」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第二十二話「攫われたアイドル　前編」

突然だが、アカデミアにおける修学旅行というのは全学年通して、三年に一度だけ行われる。というのも、毎年毎年予算を組むのが厳しかったり、引率する教師に空きがなかったりと、妙にセコイ事情だったりするのだが……。ま、というわけで……。

「良かったな剣士。凛とも一緒だぞ」

「そこでオレに振るのか！？」

仕方ないだろう。本来なら飛び上がって喜ぶであろうさだめは寝込んだままだし……本当なら付いていてやりたいんだが、そうするとアテナも気を使って一緒に休んでしまうだろうし、何よりアテナと俺はクロノス先生から出席を厳命されている。曰く、出席日数を少しでも稼ぐ～ニョ！　だと。

「希冴姫も具合が良くならないし……二人の看病でルインも行けないしな」

そのことが決まってから、ルインは事あるごとに「私、最近看病しかしていない」と愚痴っているのだが。

「十代は復帰して……けど今度は明日香や万丈目がおかしくなってるしなぁ……」

十代は、失踪からしばらくして復帰した。失踪しているときに何があったのか、ネオスとネオスペーシアンという新たな力を携えて。

しかし、それからすぐに万丈目と明日香が、何やら光の結社がどうこうと言いだし、真っ白な制服を着て何やらおかしくなり始めた。しかも、どうやらその不可思議な現象は今も尚ブルー寮を中心に広がり続けているらしい。

「で、どうするよ。目的地は童実野町に決まったみたいだが……」

「そりゃ、俺はアテナと回るから、お前は凛と回ればいいだろう」

「……当たり前のように二人きりにしてんじゃねえよ。皆で回ればいいだろうが」

「え、修学旅行ってデートイベントじゃないのか」

アテナや、以前はさだめからもしつこくそう聞かされているんだが……。

「違ぇよ！　“学”を“修める”旅行だよ！　お前も、アテナが帰って来てからなんか変だぞ！」

「そりゃまあ、多少は自覚したからな。何を、とは言わないが」

言わなくても、想像は付くだろうが。

「それに、こんな時にこんなことを言うのは不謹慎だが、滅多にない機会だしな。アテナと二人きりなんて」

アカデミア入学時は兎も角、最近はさだめやルインをはじめとして周囲に人が増え、アテナと過ごす時間は減ってしまった。もちろん、今は今で賑やかで楽しいし、さだめなんかは隣に居るのが当たり前だったので、俺としては不満などない。

「けど、アテナとしては、やっぱり寂しいと思うことだってあるだろ」

アテナは特に、俺の周りに誰もいない時期に俺と出会ったのだから、その気持ちは強いだろう。

「セツ……」

「というか、アテナを不安にさせると暴走しそうだし」

部屋に連れ込まれたり押し倒されたり、例を上げるとキリがない。

「定期的にガス抜きしないと俺の貞操が……」

「急に安っぽくなったぞ、おい」

それまで神妙な顔をしていた剣士が、めちゃ白けた目で俺を見る。
まあ、それは冗談にしても、今アテナとどうこう、というのは出来ないのも事実だ。
「失うのが貞操だけならいいが、命までかかってるとなるとな」
さだめはもちろん、今となってはユーキちゃんのこともある。下手は打てない。
「だからさ、お前はそーゆーしがらみが出来ない内に楽しんどけ」
「一応言っとくが、別にオレは……」
「まだ好きになったわけじゃない？」
「……ああ」
「いいんだよ。それでも。憎からず思ってるなら、とりあえずデートしとけ」
「いいんかね。そんなんで。アイツだって一応アイドルだろうに」
確かに、俺のようなことはないにしろ、凛だって色々としがらみを抱えている。
「……ま、簡単な恋愛なんてそうないか」
「お前が言うと重みがあるな」
「良くも悪くも、それに振り回されてここまで来たんだ。きっとこれからも、振り回されるんだろうな」
勿論、俺が優柔不断なのが悪いのも承知の上だが。
「それに、どうせ誘われてるんだろ？　凛に」
「……一応な」
「だったら、迷うことないだろ」
「……どうすりゃいいかわかんねぇんだよ」
不機嫌そうな、拗ねたような表情で目を逸らす剣士。
「昔から……嫌われてばっかりだったしよ。アテナの時でさえどうしていいかわからなくて……勘違いしちまったくらいだ」
初めて剣士と出会った時のことを思い出す。アテナと親しい様子を見せた俺に対し、容姿と合わせて何処のチンピラが因縁をつけてきたのかと思ったくらいだ。

「オレにだって、わかってるよ……」
凛が、剣士に想いを寄せていること。言葉に出すまでもなく、態度でわかる。剣士は鋭い方じゃないが……それでもあからさまだろう。凛とアテナは多少似ている。主に、物怖じしない性格や、積極性などが。
「敵意に敵意を返すことは散々してきた。けど……好意への返し方なんて、オレは知らねえんだ」
「剣士……」
俺も、まあそれはわからなくもない。痛みと恐怖を伴う好意しか知らなかった俺が、アテナの純粋な好意でどれほど戸惑ったか。だが、剣士の場合はそもそも好意すら知らなかったのだ。
「じゃあ、尚更だ。今回の修学旅行で、少しでも慣れておけ。友達と一緒に回る、くらいの感覚でさ」
「だからっ！　友達と街を回ったりする経験からしてねえんだよ！」
「……しっかりエスコートして貰って来い」
「ぐ……テメエ」
女の子にデートのエスコートを任せる、という男としては相当に情けないことをニヤついた顔で宣言された剣士は、かなり恥ずかしそうな顔で俺を睨みつけてきたのだった。

そして、修学旅行当日。
「それじゃあ、私たちは行きますね」
「しっかりエスコートされて来いよ」
「るせぇ！　余計な御世話だ！」
「凛さん、頑張ってくださいね」
「うん！　お互いにね」
定期船に乗り込み、童実野町に到着した俺たちは、別行動をすると言い残して船着き場を去って行った光の結社と斎王琢磨を見送り、

自由行動と言い残して引率を放棄したナポレオン、クロノス両教諭に呆れつつも二手に分かれることにした。
「しかし……」
「どうしたんですか？　セツ」
「いや、光の結社とかいう集団なんだが……」
「ああ……変な人たちですよね。明日香さん、どうしたんでしょう」
「万丈目もな。あれ、明らかにいつもの二人と違うぞ」
洗脳された、といった感じだ。正直、野放しにしておくのはマズイ気がする。
「ブルーの生徒さんを中心に、どんどん制服が白く染まっていっているみたいです。私は、レッドに居候させて貰っているせいか、特に干渉されていませんけど……」
「関わるべきか、関わらないべきか……正直、さだめたちのこともある現状、余計なトラブルは避けたいところなんだけどな」
「ですね。ただ、このまま放っておくのも……」
アテナと二人、頭を悩ませる。
「……ああ、やめたやめた。折角の修学旅行で、二人して頭抱えてるなんてやってられん。今は忘れよう」
「そうですね。臨機応変に、ということで」
要するに行き当たりばったりなわけだが、それが一番現実的だろう。
「じゃあ、どこから見て回る？　正直、俺は童実野町にはあまり詳しくないんだが……」
「そうですね……決闘王武藤遊戯（デュエルキング）の生まれ育った街ということで、彼のデュエルしたところなんかは観光名所になってます。他には、バトルシティ関連の……って、殆ど街中が観光名所みたいなものですよ。決闘王はこの街のあらゆる場所でデュエルしてますしね」
それだけ、武藤遊戯が周囲に与えた影響は計り知れないってことだな。
「ただ、そう言った名所は多いんですけど、二人で回って面白いと

ころは……」
「海馬ランドくらい、か？」
「はい。あ、そういえば希望さんから、フリーパス貰ってましたよね？　あれ、どうしました？」
「ああ、あれか……」
一応、持ってきてはいる。いるが……。
「どうせなら、皆で行きたかったな」
「それは……でも、年間フリーパスチケットですし、今使っても今年中なら」
「そうだな。そうするか」
それに、実は武藤遊戯の名所巡りもしてみたい。何しろ、俺は何だかんだで武藤遊戯の使ったカードの精霊を所有している。希冴姫たち三銃士やヴァンダルギオン。どちらも武藤遊戯が実際に使ったモンスターだ。
「後継者、なんて自惚れるつもりはないが……」
『ふん、奴のことか……』
「エースさん！？」
「お前、ついて来てたのか！？」
『当たり前だろう。我は貴様の護衛だ。ついて行かないでどうする』
「ああ、そりゃそうだが……」
『心配するな。別に貴様らの逢引きを邪魔はせん』
「本当でしょうか……」
エースの言葉に、アテナがジトーっとした目を向ける。
「まあまあ。それで、エース。お前も決闘王のこと、何か知っているのか？」
『……奴は嫌いだ』
「えっ？」
「嫌い？」
エースから発せられた思わぬ言葉に、俺とアテナは瞠目した。
『奴は、確かにデュエリストとして優れてはいたのだろう。希冴姫

たちを、見事に使いこなし、あ奴らに幾多の勝利を齎してきた』
「じゃあ、なんで……？」
『……奴は、精霊に慕われ、また精霊を感じられる優れた資質を持ちながら、我ら精霊を真の意味で見ていない。奴が見つめているのは、勝利のみだった』
エースの言葉は苦渋に満ちていた。なるほど、確かに俺の知っている武藤遊戯のデュエルでは、いつも希冴姫たちは神への供物だった。団員を特別大切に想っているエースからすれば、それは許し難いことなのだろう。
『我とて、最早そのことに疑問は挟まぬ。我らの意義、我らのプライド。勝利という最善へと至るための礎。今ならば、あの男のプレイングは正に“王”たる者の為すべきであったと認めることもできる。だが……』
一度付いてしまった苦手意識は、そう簡単には払拭出来ないのだろう。エースは苦々しげに首を振る。
『まあ、いい。我の個人的好悪など、今となっては些細なことだ。邪魔をしたな。我は一端消えるから……っ！？』
「っ！　セツ！」
突然、エースとアテナが身体を強張らせた。
「どうした？　アテナ、エース」
そこで、俺も気が付いた。
「空が……」
それまで晴れ渡っていた空が、突然暗雲に呑まれ始めた。暗雲は通常あり得ない速度で空を覆い尽くし、周囲にはピリピリとした緊張感が漂い始めた。
「セツ……」
「アテナ、どうしたんだ？　一体、何が起こっている？」
「結界だ」
エースが実体化し、腰の剣に手をかける。
「結界？」

「そうだ。見ろ」
エースが顎をしゃくって示す方へと顔を向けると、そこには童実野町を囲むように佇む巨大な影。
「あれは……帝か！？」
元居た世界では、上級モンスターの中でも特に重宝されているモンスターだ。その数は四体。
「雷帝、氷帝、炎帝、地帝の初期四帝か……。どういうことだ？」
帝モンスターは、此方の世界ではどうにも手に入らなかった。さだめも、『邪帝ガイウス』を入れたいのに手に入らないと嘆いていたのを覚えている。
「奴らが楔となって、この街を結界で覆っている。奴らをどうにかせんと、我ら精霊はこの街から出ることが出来ん」
「多分、私も影響を受けます。セツの力なら、もしかしたら出ることが出来るかもしれませんが……」
「……どっちにしろ、放っておくのは得策じゃなさそうだな」
俺は直ぐに、十代に連絡を取った。
『セツか！？　丁度いいや、手伝ってくれ！』
「どうした？　結界のことで何かあったか？」
『いや、そうじゃなくて、いやそれもそうなんだけど、それより双六じいさんが居なくなっちまったんだよ！』
「双六じいさん？」
確か、武藤遊戯の祖父の……。
『ああ、オレたち、双六じいさんに街を案内して貰ってたんだけどさ。途中で姿が見えなくなっちまって……手分けして探してた、翔と剣山とも連絡が取れなくなっちまったんだよ』
「……わかった。そっちは俺たちも探してみる。十代、お前の精霊から聞いているかもしれないが、この結界を張った元凶が何処かに居る筈だ。そっちの方も、並行して進めよう」
『わかった！　気をつけろよ』
「お前もな」

そこまで話して、俺は剣士の方にも連絡を入れる。なるべく邪魔したくはなかったが、緊急事態だし、アイツもこの事態に気付いているだろう。

「剣士、俺だ。ちょっとばかり問題が発生した。お前も把握してるか？」

『ああ！　だが悪ぃ！　今ちょっと手が離せねえ！』

「どうした？　何があった？」

『凛の奴が、ヘンな男に攫われちまった！　クソッ！　オレのミスだ！』

「なに！？」

凛が？

『凛の奴はオレが絶対取り戻す！　こんなことで、失ってたまるかよ……！』

「……わかった。気をつけろよ。お前の実力は知ってるが……」

『当たり前だ！　セツ、お前こそ気をつけろ。オレみたいに、無様に奪われるんじゃねえぞ！』

「わかってる。アテナは絶対守り通す」

『それでいい。こっちは、オレが絶対に責任持って取り返す！』

そこまでで、剣士の電話は途切れた。

「セツ」

「凛が攫われたらしい。今、剣士が取り戻すために向かっている」

「そんな！？」

「チッ、下種が……！」

「向こうは剣士に任せる。俺たちは、この結界の原因を探そう。アテナ、俺から絶対に離れるなよ」

「はい。信じてます」

信じられたら、応えるしかない。俺はエースと頷きあい、走り出した。

「ちくしょう……！」
オレは、ギリッ、と音がなるほど歯を食いしばった。
一瞬の油断だった。突然曇り始めた空に動揺し、一瞬隣に居た凛から目を離した。その隙に、凛は何者かに連れ攫われた。
「畜生！」
気を失っているらしい凛を抱えた男は、人一人を抱えているとは思えない程の速度で路地をするすると駆ける。地理にも精通しているらしく、スピードでは若干上回っていながら、オレは中々奴に追いつけない。
幾つかの路地裏を通り、不意に視界が開けた。
「凛！」
そこは、丁度オレたちが童実野町に来た時に使った埠頭だった。
凛の奴を誘拐した男は、そこでオレを待ちかまえていた。
「中々しぶといな、お前？」
ニヤニヤと、無様に凛を奪われたオレを嘲笑する表情に、オレはまた歯を食いしばる。
「テメエ……ソイツを放せ！」
そう言って聞かないことはわかっていたが、それでも言わないわけにはいかなかった。
「ハン、そう言われて素直に放す馬鹿がいるかよ。コイツは大事な人質だ」
「テメエ……！」
「しかし……水原凛、だったか。アイドルっつーだけあって、キレーな顔してんなぁ？　お前の女か？　あぁ？」
凛を肩に担いだ奴は、凛の顔を覗き込みながら、嫌らしい笑みを浮かべた。
「いい御身分だねぇ。天下のアイドルと修学旅行デートか？　俺もあやかりたいもんだ。ちょっと分けてくんねえ？」
「ざけんな……っ」

「おぉ？　なに？　独占欲？　ちっちゃいねぇ……女なんて、俺らの間じゃ共有財産だぜ？」
「っ……！」
睨む。目つきが悪いと散々言われ、疎ましく思い続けたその目で、男を睨みつける。しかし、男は涼しい顔。
「お怖い怖い。へへっ、しかし見れば見るほどキレーな女だ。髪もこんなにさらっさら～♪」
男は、凛の背中まである黒髪をその手で梳く。
「……よ」
「あん？」
「……せよ」
「あぁん？　聞こえねえなぁ。何か言ったか？」
「手、離せよ……！」
「はぁ？」
「手を、離せっつってんだ……！」
湧き上がる怒りに任せて、感情に任せて言葉を紡ぐ。
「ソイツは……」
オレは、アイツをどう思ってるか、まだ知らない。だが……。
「ソイツは、テメエが触れていい女じゃ、ねえんだよ……！」
それだけは、確かで。
「だから……」
未だかつて、出したことのないほど低い、低い声が口から洩れる。
「手、離せよ……！」
奴の濁った眼を、あらん限りの力で睨みつける。
「離して欲しけりゃ……」
奴は、それでも濁った眼のままで、その手のデュエルディスクを構えた。
「俺と、デュエルするんだな。この、光丸様とな！」
「望むところだ……！　下種野郎……！」
足下に用意されていた、デュエルディスクを装着する。

「戦野剣士……推して参る！」
絶対に勝つ。その覚悟と共に、そう吠えた。

第三期第二十二話「攫われたアイドル」（後書き）

こんにちは。

修学旅行といえば、あの四帝事件ですね。というわけで、ありがちではあるでしょうが、あの時に使われていない残りの四帝でアルカナの修学旅行は構成していきたいと思います。剣士の相手は……まあ、名前からわかりますわな。使うデッキのタイプも大体分かるかと。ただ、そこまで単純にはしませんが。

タッグフォースをやっていて、悠はネットの攻略ウィキを参照しているのですが……そこのユーキちゃんの欄に書かれたことを見て、思わず笑いました。「欠点を挙げるとすれば、欠点がなさ過ぎてここに書くことが殆どなく、手がかからないゆえ印象に残りにくいのが欠点」……確かに！　っていうか結構べた褒めです。ユーキちゃん。ちなみに、同じウィキにはこうも書かれていました。「初心者はカードの少ない序盤に彼女に教えを請うつもりで組んでみるのも面白いかもしれない。　教師らしく序盤のデュエルを優しく導いてくれるだろう」とも。……大丈夫！　アルカナの読者さんたちはユーキちゃんへの印象を強く持ってくれたハズだから！　教えは請うたかもしれませんが。↑まず真っ先にユーキちゃんをクリアして、その難易度の低さに愕然とした作者。

さてさて、年内更新は、これで最後かな？　もしかしたら、筆が乗って更新するかもしれませんが、明日は夜にちょっと用事があるので難しいかも。

それではみなさん、良いお年を！　悠でした！

第三期第二十三話「翼に……」（前書き）

遅くなりました～。予想以上に……いえ、内容を見てもらってからの方がいいでしょうね。とりあえず、剣士のデュエルです。

第三期第二十三話「翼に……」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第二十三話「翼に……」

「戦野剣士……推して参る！」
光丸と名乗った下種野郎を叩きのめすため、オレはデュエルディスクをその手に構えた。
「おおっと、ちょい待ちな」
「なんだと？」
「お前の相手は、俺一人じゃねえ」
光丸がそう言った瞬間、光丸の隣に風が渦を巻く。
「この風丸も、その決闘（デュエル）に参加させていただこう」
切れ長の目と、逆立てた長髪が印象的な風丸は、そう言って光丸に近づく。
「だが……その前に、その少女は離してやるといい」
「あぁ？　なに馬鹿言ってんだ」
「娘を抱えて決闘（デュエル）に臨むつもりか？　それとも、娘を盾に敗北を迫るか？　私は、貴様が決闘（デュエル）前にどんな卑劣を働こうが関知せぬ。だが、決闘（デュエル）に限ってはその卑劣さを抑えよ。見苦しいぞ」
「チッ。マジメなヤローだ」
光丸の野郎は、ブツクサ言いつつ風丸の言葉通り凛をその場に下ろす。風丸はそれを確認した後、オレに顔を向けてきた。
「戦野剣士」

「……なんだよ」
「そのまま逃げられるわけには行かぬ故、少女を返すことは出来ぬ。しかし、正々堂々決闘（デュエル）に臨むのであれば、私の矜持に賭けて、決して傷つけぬと誓おう」
「……どういうつもりだ」
下種の光丸とは全く違う態度に、訝しげな視線を向ける。
「勘違いはするな。私とて、所詮はこの光丸と同じ。人質を取り、徒党を組まねば決闘（デュエル）に臨めぬ下種に過ぎん。だが……」
風丸はそこまで言うと目を伏せ、無言でデュエルディスクを構えた。
「……いや、よそう。どれだけ言葉を重ねようと、私が下種であることに変わりはない」
「とっとと始めようぜ。ルールは変則タッグ。俺たちのフィールドはそれぞれ独立している。テメエへのハンデはライフ８０００。充分だろ？」
口を挟んできた光丸に、オレは顔を顰める。
「……何でもいい。さっさとやるぞ」
「ははっ、勇ましいねぇ……んじゃあ行くぜ！」
「「デュエル！」」
「先攻は俺、ドローだ！　俺はマジックカード『おろかな埋葬』を発動！　デッキから『光帝クライス』を墓地に送るぜ！」
「光帝？」
聞き覚えのないカード名に、訝しげに眉をひそめる。
「へへ。コイツが俺のエースモンスターだ。見せてやるぜ色男。俺はカードを一枚セット。そしてマジックカード『死者蘇生』！」
「なにっ！？」
「見せてやるぜ！『光帝クライス』を特殊召喚！」
『光帝クライス』ＡＴＫ２４００
「クライスの効果発動！　このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを二枚まで破壊する！」

「二枚……？　だが、オレの場にカードは……」
「誰がテメエのカードを破壊するっつったよ！？　俺が破壊するのは……今俺がセットしたカードだ！」
「なにっ！？」
自分で伏せたカードを破壊する？　破壊されることで発動するカードか！
「俺が破壊したのは『呪われた棺』！　コイツはトラップカードだが、発動条件さえ満たせればセットしたそのターンでも発動することが出来る！」
「チッ……！」
確か、『呪われた棺』の効果は……。
「テメエは自分のモンスターか、手札をランダムに選択して一枚捨てる。だが、テメエの場にモンスターはいねえ。よってテメエは必然的に手札を捨てる方を選択する！」
「仕方ない……」
先攻一ターン目じゃ、アテナでもなきゃカウンターすることはできねえ。
「そして、クライスにはもう一つ効果がある！　クライスの効果でカードを破壊されたプレイヤーは、その枚数分、デッキからカードをドローする！」
「そういうコンボかよ……」
自らカードを破壊することで、ドローされるというデメリットをメリットに変換するのがアイツのデッキコンセプトか。
「さあ、手札を捨てな！」
「わかってる」
いきなりアドバンテージに差が付いた。思ったより、面倒だな……。
「俺はモンスターを一体セットしてターンエンドだ！」
「オレのターン！」
チラリと光丸の隣で沈黙を保つ風丸を見る。アイツ、一体……。

「なんだ？　ビビってんのか？　さっさとプレイしやがれ！」
「……まあいい。オレは墓地から『不死武士』を特殊召喚」
『不死武士』ＤＥＦ６００
「なにぃ！？　まさか、さっきの『呪われた棺』の効果で……」
「そういうこった。残念だったな。思惑が外れて」
「ちっ……」
まあ、かなりラッキーだったな。五分の一で落ちてくれるとは。
「更に、オレは『マッシブ・ウォリアー』を守備表示で召喚。カードを一枚セットし、ターンエンドだ」
『マッシブ・ウォリアー』ＤＥＦ１２００
とはいえ、手札に上級モンスターはいない。仕方なく、オレは防御を固める。
「……私の番（ターン）だ」
あくまでも静かに、風丸はカードをドローする。
「私は『有翼賢者ファルコス』を攻撃表示で召喚。戦闘を行う」
『有翼賢者ファルコス』ＡＴＫ１７００
ファルコスか……破壊した攻撃表示モンスターを、デッキトップに戻すモンスター。だが、オレのモンスターはどちらも守備表示。戦闘破壊はされても、デッキトップに戻されることはない。
「私は有翼賢者で『不死武士』を攻撃する」
「くっ！？　だが『不死武士』は死なねえ！　次のオレのターンに、再び戻ってくる！」
「それはどうかな？」
「なにっ！？」
「私は手札より『Ｄ・Ｄ・クロウ』の効果を発動する。お前の墓地の『不死武士』を取り除く」
「マジかよ……」
「更に、札（カード）を三枚伏せ、終了する（ターンエンド）」
「ちっ……オレのターン、ドロー！」
よし。コイツだ。

「オレは『マッシブ・ウォリアー』をリリースし、手札から『無敗将軍フリード』をアドバンス召喚する！」

『無敗将軍フリード』ＡＴＫ２３００

「はん！　たかだか攻撃力２３００じゃ、俺のクライスには敵わねえな！」

「馬鹿が。戦士には、それぞれに相応しい得物ってもんがある！　オレは手札から装備魔法『神剣―フェニックスブレード』をフリードに装備！　攻撃力は３００ポイントアップだ！」

『無敗将軍フリード』ＡＴＫ２３００→２６００

「クライスの攻撃力を上回りやがった！？」

「バトル！　フリードで『光帝クライス』を攻撃！」

「ちっ！」

いけるか！？

「させん。私は伏せ札（カード）『鳳翼の爆風』を発動。手札を一枚捨てることで、無敗将軍を山札（デッキ）の一番上に戻す」

「デッキトップに！？」

ちっ。ファルコスの段階でその予想はあったが……下手打ったぜ。

「へ、へへ。馬鹿はどっちだ。結局テメエのフィールドはガラ空きじゃねえか」

「……オレはカードを一枚セット。ターンエンドだ」

「俺のターン！　ドローだ！」

風丸に守られておいて調子に乗る光丸が、デッキからカードをドローする。

「俺はセットされたモンスターをリリースして二体目の『光帝クライス』を攻撃表示で召喚だ！　効果発動！」

二体目だと？　今度は何を……。

「俺が破壊するのは風丸の伏せカード！」

「……私はその効果に連鎖（チェーン）発動し、二枚の『八汰烏の骸』を発動する」

「そういうことか……！」

やられた。コイツらのデッキは元々タッグ用。風丸が手札を消費して、カードを除去、メインでデュエルを進め、光丸はクライスの効果で手札を補充する。コイツは……骨が折れそうだ。

「逆順処理により、まずは『八汰烏の骸』二枚の効果で札（カード）を引く。そして、光帝の効果により破壊され、更に二枚を引かせてもらう」

「手札が一気にゼロから四枚に……くそ」

しかも、フィールドには攻撃力２４００の光帝が二体。俺のフィールドにモンスターはいない。

「へっ。安心しな。クライスは召喚・特殊召喚されたターンに攻撃することは出来ねえ。まあ、当然……」

光丸の場の、最初に召喚されたクライスが動き出す。

「こっちは動けるぜ？」

「くっ！？」

「バトルだ！　クライスで、プレイヤーにダイレクトアタック！『フラッシュ・ブレイク』！」

「ぐあああっ！？」

剣士ＬＰ５６００

「ははは っ！　モロだ！　まともに受けやがった！」

攻撃が通ったことで、光丸の馬鹿は散々はしゃいでいる。

「……今の内に、いい気になっておけ」

「なんだと？」

「すぐ、後悔する」

「言ってろ！　俺はこれでターンエンドだ！」

「その前に、オレはリバースカード『トゥルース・リインフォース』を発動。デッキから『デュアル・ソルジャー』を特殊召喚する」

『デュアル・ソルジャー』ＡＴＫ５００

「ハッ！　そんな雑魚モンスターで何が出来る！？」

「今にわかる。オレのターン、ドロー！　オレは手札からマジックカード『天使の施し』を発動！　デッキからカードを三枚ドローし、二枚捨てる！」

よし。これでいい。
「オレは手札から装備魔法『スーペルヴィス』を発動！『デュアル・ソルジャー』に装備し、デュアル状態にする」
「ほう……二重（デュアル）か」
「バトル！『デュアル・ソルジャー』で『有翼賢者ファルコス』を攻撃！」
「血迷ったか！？　テメエから自爆してやがる！」
「トラップカード『デュアル・ブースター』！　こいつは発動後装備カードとなり、フィールド上のデュアルモンスター一体に装備。攻撃力を７００ポイントアップさせる！」
『デュアル・ソルジャー』ＡＴＫ５００→１２００
『デュアル・ソルジャー』の背にブースターが装備され、その勢いが増す。しかし、それでもファルコスの攻撃力には及ばず、弾き返される。
剣士ＬＰ５１００
「くっ……この瞬間『デュアル・ソルジャー』の効果発動！　このモンスターは一ターンに一度戦闘では破壊されず、自分から攻撃した場合、デッキからレベル４以下のデュアルモンスターを一体特殊召喚する！　オレは『エヴォルテクターシュバリエ』を攻撃表示で召喚する」
『エヴォルテクターシュバリエ』ＡＴＫ１９００
「なにっ！？」
「肉を切らせて骨を断つ……それが、お前の兵法か」
「兵法の一つ、ってだけだ。兵法なんてのは千変万化。その時々で臨機応変が基本だろう」
「フッ……確かにな」
「オレのバトルフェイズはまだ終了していない！『エヴォルテクターシュバリエ』で『有翼賢者ファルコス』を攻撃！」
「ぬぐっ……」
風丸ＬＰ３８００

「更に、メインフェイズ2に移行！『エヴォルテクターシュバリエ』を二重召喚（デュアル）！　効果発動！」

シュバリエが、その身に激しい炎を纏う。

「シュバリエの効果！　オレのフィールド上に存在する装備魔法一枚を墓地に送ることで、フィールド上に存在するカード一枚を破壊する！　オレは『スーペルヴィス』を墓地に送り『光帝クライス』を破壊する！『壊刃炎覇斬』！」

「なにぃっ!?　うおっ!?」

『エヴォルテクターシュバリエ』のサーベルから奔った炎が、光帝を焼き尽くす。

「クソッ！　だが、俺にはもう一体クライスが……」

「更に墓地に送られた『スーペルヴィス』の効果発動！　墓地から『フェニックス・ギア・フリード』を蘇生させる！　来い！　ネイキッド！」

『天使の施し』で捨てていた、ネイキッドを蘇生させる。

『今の我はフェニックスだが……まあよかろう。下種な漢に天罰を下すのは、我とて望むところであるし……何より、マスターが漢を見せたのだ。我も本気を出さねばなるまい』

「……余計な茶々は要らねえ。とっとと構えやがれ」

『うむ』

「まだだ！　手札から装備魔法『自律行動ユニット』を発動！　ライフを１５００ポイント支払い、テメエの墓地の『光帝クライス』をオレの場に蘇生！　このカードを装備する！」

剣士ＬＰ３６００

「テメエ……俺のクライスを！」

「お前のモンスターだ。効果は知ってるんだろ？　オレは自分の『デュアル・ブースター』と『デュアル・ソルジャー』を破壊！　カードを二枚ドローする！」

まだだ。まだ、オレのコンボは終わらねえ！

「そして破壊され、墓地に送られた『デュアル・ブースター』の効

果発動！　オレのフィールド上に存在するデュアルモンスター一体を、再度召喚した状態にする！」

『おおおっ！』

ネイキッドがシュバリエと同じく、身体に炎を纏う。

これで、あいつ等のフィールドは殲滅し、俺のフィールドには攻撃力２０００以上のモンスターが二体並んだ。

「ば、馬鹿な……一瞬で、あんな雑魚モンスターで、状況を一変させやがった……」

「……光丸」

「な、なんだよ」

「見るがいい。あれが、本物だ」

「ほ、本物……？」

「与えられた力ではなく、自らの才覚と努力によって手に入れた、本物の力を持つ決闘者だ。例え二対一でも、圧倒的不利な状況からでも、こうして逆転の一手を引き入れる」

「う、うるせえ！　テメエだって俺と同じ癖に、訳知り顔で語ってんじゃねえよ！」

「……そうだな。そうであった。私も、所詮は同じか」

光丸の焦ったような絶叫に、風丸が自嘲する。

「……オレはこれでターンエンドだ」

「私の番（ターン）か……」

「風丸」

「なんだ」

「お前は、飛べるだろ？」

「なに？」

「お前が、与えられた力で潰れて行くだけの愚者とは思えねえ」

「戦野剣士……」

本来なら、凛を攫った敵に言う言葉じゃないのはわかる。だがコイツが、デュエリストの魂を持っている漢が、こんなくだらない形で潰れて行くのは見過ごせねえ。

「……そうだな。私にも、翼はある」
風丸は、フッと笑い、カードをドローする。
「私は手札から魔法、『死者蘇生』を発動。有翼賢者を蘇生する」
『有翼賢者ファルコス』ＡＴＫ１７００
光丸のエースはレベル６の帝、クライスだった。とすれば、同じ力を貰ったと言う風丸のエースは……。
「お前が魔法カードを発動した瞬間、オレは『フェニックス・ギア・フリード』の効果を発動する！　墓地から『デュアル・ソルジャー』を守備表示で蘇生する！」
『デュアル・ソルジャー』ＤＥＦ３００
「私は『有翼賢者ファルコス』を生贄に捧げ『風帝ライザー』を生贄召喚！」
『風帝ライザー』ＡＴＫ２４００
「我が風帝は、生贄召喚に成功した時、場の札（カード）を一枚、山札（デッキ）の一番上に戻す」
デッキトップに戻す効果だと！？
「私が選択するのは当然『フェニックス・ギア・フリード』だ」
「くっ！？」
『ぬおっ！？　な、なんだこの竜巻は！？』
風帝の巻き起こした竜巻に、ネイキッドが吹き飛ばされてしまう。
「ちっ！　ネイキッドの効果は、モンスター効果には対応してねえ……」
「これで、お前の山札（デッキ）は封じられた。次の引きで、状況を変えることは出来ん」
「くっ……」
「戦闘（バトル）だ。我が風帝よ。『エヴォルテクターシュバリエ』を打ち倒せ！『破魔風陣』！」
「ぐあぁっ！？」
剣士ＬＰ３１００
纏っていた炎ごと、シュバリエが身体を切り裂かれていく。

「更に速攻魔法『スワローズ・ネスト』！　風帝を生贄に、山札（デッキ）より『神禽王アレクトール』を特殊召喚する！」

『神禽王アレクトール』ＡＴＫ２４００

「なにっ！？」

「追撃する。守備表示の『デュアル・ソルジャー』を攻撃！」

「くっ！」

これじゃ、次のターンネイキッドをアドバンス召喚することもできねえか！

「私はこれで、終了する」

与えられた力、風帝を“繋ぎ”として追撃か……やるじゃねえか。

「オレの、ターンだ」

風丸。お前とは、もっとデュエルを続けたい気分だ。だから、そのために。

「ひっ！？」

「邪魔な奴は、とっとと消させて貰う！　ドロー！」

「ふ、ふん。そんな勢い込んでドローしたところで、そのカードは……」

「そう。『フェニックス・ギア・フリード』だ。だがな……」

オレは、もう一枚の手札をオープンする。

「な……」

「オレは手札から魔法カード『トレード・イン』を発動！　レベル８の『フェニックス・ギア・フリード』を捨て、デッキからカードを二枚ドロー！」

「フ……山札（デッキ）を封じることも、出来んか……」

「て、テメエ風丸！　テメエがしっかりしねえから……」

「他人の所為にしてんじゃねえよ。オレは手札から『鉄の騎士　ギア・フリード』を召喚！　そして、魔法カード『拘束解除』！『鉄の騎士　ギア・フリード』の拘束を解除し、剣聖の真の姿を呼び醒ます！　来い！『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』！」

『おおおっ！　再び参上！　そう簡単に、我を消せると思うな！』

『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』ＡＴＫ２６００
「う、うわっ！？」
「更に、墓地の『マッシブ・ウォリアー』と『デュアル・ソルジャー』をゲームから除外し、手札に『神剣―フェニックスブレード』を手札に戻し、ネイキッドに装備する！」
『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』ＡＴＫ２６００→２９００
『神剣か……手に馴染むっ！』
ネイキッドが神剣を一振りし、衝撃破が走る。
「剣聖が得物を手にしたその時！　相手モンスター一体を問答無用で破壊する！　オレが破壊するのは『光帝クライス』！」
「ぐぅっ！」
「オレはカードを一枚セット。バトルだ！『光帝クライス』で光丸を攻撃！『フラッシュ・ブレイク』！」
「ぎゃあああああっ！？」
光丸ＬＰ１６００
「終わりだ！　ネイキッドでダイレクトアタック！『フェニックス・ギア・ソード』！」
『おおおおっ！』
「い、いやだ。いやだいやだいやだいやだ！……死にたくない！！」
「……なに？」
死にたくない。その言葉に、幽かな違和感を覚えたが、ネイキッドの攻撃は止まらない。その剣で、光丸が切り裂かれる。
「う、うわあああああああああああっ！？」
光丸ＬＰ０
「あ、あああああああああっ！？　あああああああああああっ！」
絶叫する光丸が、身体を強く抱きしめる。
「なっ！？」
その身体が、溶け崩れる。
「ど、どうなってやがる！？」

「アア、アァァァァァ……ッ」
溶けて行く。光丸の身体が、光の糸となって溶けて行く。
「ひ、光丸……」
「ァ……」
溶けた。光丸の身体は、光の糸に分解され、消滅した。
「どう、いうことだ……どういう、ことだよ……風丸！」
目の前で起こったことが信じられず、オレは思わず風丸に叫んでいた。
「……これが、力の代償なのだろう」
「な……」
「身に余る力が、その身を滅ぼしたのだ。いずれ、私も……」
「なん、だよ……なんだよ、それ……！？」
死ぬ？　デュエルで？　こんな、あっさりと？
「ふざけんな！　デュエルで……たかがデュエルで、人が死んでたまるかよ！」
「たかがデュエル……？」
「っ！」
風丸の鋭い目に、オレは気圧された。
「たかが、デュエル。そんな考えの男に、これだけの決闘はできまいよ。そうでなくば……私たちは、光丸は、負けなかっただろう」
「……くっ！」
そうだ。わかってる。わかっていたはずなんだ。セツや、アテナたちを見ていれば。その話を聞いていたオレなら、知っていた筈だ。デュエルに、命を賭けなければならないこともあると。だが……だが、オレは……。
「そんな……覚悟が……」
「……私に同情するな。私は、身から出た錆に殺される。光丸も同じこと。お前が気に病むことはない」
「そうじゃねえだろ！？　なんで、なんでそんな、力を……」
そんな、身を滅ぼす力を、手に入れようとしたんだ……。

「……力も、意志も弱かった私が、変わるためには……背水の陣をしかなければならなかった。それだけだ」
「なに……？」
「私は、力を得て初めて、変わることが出来た。力を得て初めて、真正面から戦う意志を得た。それまでの私は、光丸と大差ない、矮小な男でしかなかった」
風丸は、握り拳から血を滴らせながら、そう言った。
「力を持たねば、変わることも出来なかった。力がなければ、正々堂々と戦うことも出来なかったのだ！　私は……！」
「風丸……」
「……さあ、決闘を続けるぞ。私の番（ターン）だ」
「風丸！」
しかし、風丸はオレの言葉に耳を貸さず、デッキからカードをドローする。
「私は、手札から魔法、『死者転生』を発動する。手札を一枚捨て、墓地の『風帝ライザー』を手札に戻す」
最後は……やっぱりソイツなのか……！
オレは、伏せてあるカードを思う。
（コイツを使えば、オレは勝てる。だが、そうしたら風丸が……）
「……戦野剣士。これを見ろ」
「なっ！？」
風丸が、凛の首筋に刀を向けていた。
「本気でやれ。もし、私に同情などして、態と敗北を選んでみろ。この少女を、殺す」
「お前……！」
なんで、そこまでして……。
間違いない。あいつは、オレの伏せカードがどんなものか、想像が付いている。それなのに……。
「……良い夢を、見させてもらった」
「風丸ぅぅぅ！」

「私は『神禽王アレクトール』を生贄に、『風帝ライザー』を生贄召喚！　効果により、剣聖を山札（デッキ）に！」
「クソッ！　カウンタートラップ『畳返し』！　召喚時に発動するモンスター効果を無効にし、破壊する！」
　風帝の放った竜巻が、風帝自身を巻き込み、吹き飛ばす。天高く飛ばされた風帝は、その身を大地に叩きつけ、消滅する。
「これが……私の終焉か」
「終焉……！？　まさか、お前らに力を与えたのは……」
「……やれ。お前の番（ターン）だ」
「クソッ……オレの、ターン。ドロー！　オレは……」
「……やれ。娘がどうなってもいいのか」
「っ！　オレはっ！　ネイキッドとクライスで、風丸をダイレクトアタック！　行けえええっ！」
「……それで、いい」
　風丸は、凛の身体を優しく横たえ、静かな笑みを浮かべ、風に溶ける。
「……翼だ。私は……風、と……翼、に……」
「風丸ぅぅぅっ！」
　風丸ＬＰ０
　風丸は、風に溶け、消えて行く。
「やり過ぎ、だろ……！　こんなの……」
　先日、オレたちと決別し、姿を消した同級生を脳裏に思い浮かべる。
「これも……お前の望みなのかよ……加藤……！」
　終焉と共に、消えた同級生。セツに懸想していた、という以外、然程の特徴も、オレとの接点もなかったが、皆と同じで、オレを受け入れてくれた一人。
「畜生！　こんな、こんなデュエル……」
『マスター……』
　痛ましげな目を向けてくるネイキッドにも気付かず、オレはただ、

項垂れた。かつてデュエルキング武藤遊戯と、親友城之内克也が死闘を演じたという埠頭で、ただ、項垂れたのだった。

第三期第二十三話「翼に……」（後書き）

こんにちは。

いや、予想以上に大きい話になりました。風丸ェ……。

うん。最初はこんな話にするつもりはなかったんですが、書いている内に……いえ、一応先の展望もありますが。風丸がとてもいい感じになった分、光丸の小物臭がひどく……。そして、凛の出番が結局皆無に。なんてこった。

デュエルも、最初はもっと長くやる予定だったのが、尺の問題で……う～ん。色々、ままならないものです。もっとプロット通りに進めることが出来ればいいのですが。それにしても、剣士は二体一のシチュエーション多いなぁ……二度目だし。ちなみに、今回の剣士のデッキは戦士族デュアルが中心の装備ビート、かな？　以前ネイキッドが使っていたものに近いです。どんなもんでしょ？

次は、セツとアテナサイドの話になります。登場する敵は……まあ、お分かりでしょうね。問題の彼です。どうしよう。

それでは、悠でした！

第三期第二十四話「命を懸けて繋いだモノ」（前書き）

修学旅行編の最終話です。最近更新速度が落ちてきて、申し訳ないです。デュエル内容も……ある意味では見ごたえ十分だと自負しておりますが、ある意味では拍子抜けな内容に。

第三期第二十四話「命を懸けて繋いだモノ」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第二十四話「命を懸けて繋いだモノ」

少し時間は巻き戻る。
剣士が、光丸&風丸とデュエルを始めた頃、俺とアテナ（とエース）は童実野町を事件の元凶を探して駆けずり回っていた。
「アテナ……」
「なんです？　セツ」
「実はな……」
「は、はい……」
「たこ焼きが喰いたい」
ずしゃあっ！
「大丈夫か？」
走りながらずっこけるという、中々芸人根性の据わったアテナに手を貸す。
「大丈夫じゃないです！」
がばっ！　と身体を起こして俺に詰め寄るアテナ。
「元気そうじゃないか」
「なんで、この状況で、たこ焼きですか！？」
「いや、たこ焼きって時々ふと、無性に食べたくならないか？」
「この状況で！？」
「三大欲求は空気読んでくれなくて」

「ええそうですね！　セツの場合、性欲も空気読んでくれませんしね！」
「残るは睡眠欲か」
がんばれ、睡眠欲！
「……一番空気読まなそうだな」
「ってそんなことはどうでもいいんです！　例え食べたくなったとして、それを今言う必要がどこに！？」
「いやほら、たこ焼きって食べたくなると他のものでは代替できないくらい食べたくなるんだよ」
「そんなの、後でいいじゃないですか！」
「だが、腹が減った」
「ああもう！　普段ほぼ我儘言わないのに、なんでよりにもよって今我儘を！　お好み焼きで我慢してください！」
「馬鹿者！　お好み焼きとたこ焼きを同一視するな！　怒られるぞ！」
「今まさにセツに怒られました……」
アテナがずーんと沈んでしまった。
『貴様ら……こんな時に何を漫才しているか』
「私は真面目だったと思うんですが……」
「俺も、至極真面目だ」
『何故貴様らは、＋と＋をかけてマイナスになるんだ……』
「セツがマイナスだからだと思います」
「だって、たこ焼きだぞ？」
「ですから、ＴＰＯと言うモノをですね……」
『貴様ら、ヘンなところで喧嘩するのだな……』
「というか、セツがヘンなところに拘りを持っているんですもん」
「関西人ならわかってくれる！」
「セツ、関西人なんですか？」
「わしゃあ、バリバリの東北人じゃけん」
「嘘です！　どこだったかは忘れましたが、その方言は東北とは正

反対だったはずです！」
「冗談だ」
「もう。なんでこんな非常時にふざけるんですか……」
「……ま、緊張しっぱなしじゃ、キツイと思ってな」
「え？」
『っ！』
「迂闊だぞ、エース。俺が気付いたのに、お前が気付かないでどうする」
そう言って俺が視線を向けた先には、二人組の男。二人とも両手にデュエルディスクを付けて、思い切り臨戦態勢だ。
「あの人たちは……」
「何者だ！？　名を名乗れ！」
実体化したエースの一喝に、漸くその二人は顔を上げた。
「……闇丸」
「……邪々丸」
言葉少なに答え、二人は俺たちにデュエルディスクを放り投げた。
「状況からして、お前たちがこの結界を張っている一味か？」
「「……」」
「だんまりか。無口な奴ら……」
「「デュエル」」
「っておい！　問答無用かよ！　仕方ない。やるぞ、アテナ」
「は、はい！」
慌ててアテナもデュエルディスクにデッキを装着する。
「ったく……ホントはこの一年、タッグデュエルはユーキちゃんと、って約束だったのに……」
「……始める前から、モチベーションが少し下がりました」
「勘違いするなよ。アテナとのタッグが嫌なわけじゃない。それに、わかってるだろ？」
「はい。私とセツの相性は最高です」
「その通りだ。俺たちのデッキは最高にシナジーする。二人で組め

ば、互いにサポートしあって１２０％の力を発揮できる」
「はい！」
「「デュエル！！」」
セツ＆アテナＬＰ８０００
闇丸＆邪々丸ＬＰ８０００
「私の、ターン。ドロー」
先攻は闇丸。俺の正面ということは、アテナがラストか。
「私は手札から『闇帝ディルグ』を墓地に送り、手札の『ダーク・グレファー』を特殊召喚する」
『ダーク・グレファー』ＡＴＫ１７００
「闇帝……？　聞いたことのないモンスターです」
なるほど……名前のままか。だが、闇帝はその読み方と裏腹に、安定性というか、使い勝手はあまりよくない帝。だが……。
「アテナ。邪々丸のエースには気をつけろ」
「え？　セツ、何か知っているんですか？」
「……ああ」
さだめが手に入らないことを非常に残念がっていた、汎用性ではトッププクラスの、もっとも採用率の高かった帝……。
「私は『ダーク・グレファー』のモンスター効果を発動。手札の『ネクロ・ガードナー』を墓地に送ることで、デッキから二体目の『闇帝ディルグ』を墓地に送る。そして『終末の騎士』を通常召喚し、デッキから『レベル・スティーラー』を墓地に送る」
『終末の騎士』ＡＴＫ１４００
「『ダーク・グレファー』や『終末の騎士』による墓地肥し……まるでさだめさんですね」
「闇属性だからな。墓地からの特殊召喚手段は豊富だろう。闇帝は特殊召喚でも効果が使えるしな」
「私はカードを二枚セット。ターンエンドだ」
「俺のターン、ドロー！」
さて……どうするか。出来れば邪々丸のターンに生贄を残したく

はないんだが……。
「俺は手札からマジックカード『二重召喚』！　このターン俺は通常召喚を二回まで行うことが出来る。俺は『切り札の騎士（トランプ・ナイト）―キング』を召喚し、キングをリリースして『切り札の騎士団長（トランプ・ナイト・リーダー）―エース』をアドバンス召喚！」
『切り札の騎士団長―エース』ＡＴＫ２０００
『ふん、早速か。精々我を守れ。セツ』
「……一応お前、俺の護衛じゃなかったのか。俺は手札から『ライトニング・ボルテックス』を発動！　手札から『切り札の騎士（トランプ・ナイト）―エース』を墓地に捨てて効果発動！　相手フィールド上の表側表示モンスターを全て破壊する！」
「む……」
激しい雷が、闇丸のフィールドを焼き尽くす。
「更に、墓地に捨てられた『切り札の騎士（トランプ・ナイト）―エース』の効果と、場の『切り札の騎士団長（トランプ・ナイト・リーダー）―エース』の効果でカードを二枚ドロー！　バトル！」
『ほう。お前にしては勇ましいな』
使ってくるエースモンスターがわかっているんだ。あまり長引かせるのは得策じゃない！
「エースでプレイヤーにダイレクトアタック！『シュバルツ・ドンナー』！」
『雷光ッ！』
「永続トラップ『リビングデッドの呼び声』。墓地から『闇帝ディルグ』を蘇生する」
「っ止まれエース！」
『ちっ……』
『闇帝ディルグ』ＡＴＫ２４００
「『闇帝ディルグ』のモンスター効果。召喚、特殊召喚に成功した時、相手の墓地のカードを二枚除外し、相手のデッキを二枚削る」
『む、むぅ……』

俺の墓地からキングとエースが除外されて行く。すまん、キング。
「デッキからは……テンスと『神の宣告』か」
『ちっ……我が団員を悉く……おのれ』
「俺はカードを三枚セット。ターンエンドだ」
「私のターン、ドロー」
結局、邪々丸のターンにモンスターを残してしまった。しかも、墓地には『レベル・スティーラー』。確実にリリース確保を狙ってくる筈だ。
「私は墓地に存在する『レベル・スティーラー』の効果を発動。闇帝の星（レベル）を盗み取り、蘇れ『レベル・スティーラー』」
『闇帝ディルグ』レベル６→５
『レベル・スティーラー』ＡＴＫ６００
「そして『レベル・スティーラー』をリリースし、『邪帝ガイウス』をアドバンス召喚！」
『邪帝ガイウス』ＡＴＫ２４００
「っ！」
やはり来たか。邪帝！
「セツ、あれが……」
「ああ。帝と名の付くモンスターの中でも、屈指の汎用性を持つカードだ。その効果は……」
「邪帝の効果発動。アドバンス召喚に成功したとき、フィールド上のカードを一枚除外する！『黒邪瘴気』！」
「そんなっ！？」
『くっ！？』
そう。カードの種類も、表示形式も問わない万能除外。属性や種族的な後押しもあり、帝モンスター最強とも言われるガイウス。だが……！
「効果を知っていれば、対策もとれる！　カウンター罠『オーバーウェルム』！　俺の場にアドバンス召喚されたレベル７以上のモンスターが存在する場合、相手の罠・モンスター効果の発動と効果を

無効にして破壊する！」
「なにっ！？　ぐっ！？」
ガイウスの効果を知っていて、そう易々と使わせるわけがないだろう。
「ならば『闇帝ディルグ』で『切り札（トランプ・ナイト・リーダー）の騎士団長―エース』を攻撃！『常闇の衝撃』！」
「カウンタートラップ『攻撃の無力化』！　バトルフェイズを終了する！」
「……私はカードを二枚セット。ターンエンドだ」
「私のターンです。ドロー！」
さて……エースを守ることはできた。だが、その結果アテナのヴァルハラによる展開を阻害してしまう結果にも繋がるわけだが……。
「……私たちの勝ちです」
「なんだと？」
「アテナ？」
「セツのターン内に勝てなかった時点で、貴方たちの勝利は消えました」
「何を言っている……」
「今から、その理由をお見せします。私は手札から『ヘカテリス』を捨てて効果を発動。デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加えます」
『どういうことだ。ヴァルハラでは……』
そうだ。ヴァルハラでは、フィールドにエースが居る以上、効果を使えない。どうするつもりだ、アテナ。
「いいんです。私の目的はヴァルハラを手札に加えることじゃなく、墓地に天使族を送ることでしたから」
アテナは不敵な笑みを浮かべる。どうでもいいが、あんまり似合ってない。
「ちょ、どういう意味ですか！？」
「不敵な笑みはさだめ辺りに任せておけってことだ」

根が純粋で優しいアテナに悪者っぽい笑みは似合わない。さだめならベストマッチするんだが。

「……何故でしょう。褒められているのにあんまり嬉しくありません。……兎に角、私は手札から速攻魔法『光神化』を発動します！

手札の『アテナ』の攻撃力を半分にして特殊召喚！」

『アテナ』ＡＴＫ２６００→１３００

『はいは～い！　お姉さんとうじょ～ぅって眩しっ！？　溢れ出る威厳が目に痛い！』

……いや、威厳はないだろ。

「そして更に速攻魔法『地獄の暴走召喚』！　デッキから『アテナ』を更に二体特殊召喚します！」

『アテナ』ＡＴＫ２６００

『おおぅ、あたしが三人！　その中でも一際輝くお姉さんの美貌が眩しいっ！』

……いや、確かに眩しいが美貌は関係ない。皆同じ顔だし。

「くっ！？」

「貴方は邪々丸さん。フィールドにいるのは闇帝。でしたら、デッキにはいませんね？」

「ぐっ、だが墓地には存在する。私は墓地から『闇帝ディルグ』を蘇生する」

「ええ、分かりました。構いませんよ」

「まだだ！　トラップカード『激流葬』を発動！　闇帝ごと、貴様のモンスターを葬る！」

「させません。セツの残してくれたリバースカードが、それを許しません。私はカウンタートラップ『盗賊の七つ道具』を発動します。ライフを１０００ポイント支払い、トラップカードの発動と効果を無効にして破壊します！」

セツ＆アテナＬＰ７０００

「アテナのデッキは重量級天使によるビートダウン。性質上、リバーストラップに弱い。伏せておいて良かったな」

「ええ、ありがとうございます。セツ。お陰で勝てますよ。尤も……戦闘する必要もありませんが」
「え……」
「まずは天使族モンスターが特殊召喚されたことにより６００ポイントのダメージです」
『天罰てきめん！』
「く……」
闇丸＆邪々丸ＬＰ７４００
「そして、このターン私はまだ通常召喚を行っていません。よって手札から『フェアリー・アーチャー』を通常召喚」
『フェアリー・アーチャー』ＡＴＫ１４００
「天使族モンスターの召喚に成功したことで６００ポイントのダメージです。ただし『アテナ』三体分……１８００ポイントになりますが」
『はい皆さんご一緒に……『『天罰てきめん！』』』
「なにっ！？　ぐっ！」
闇丸＆邪々丸ＬＰ５６００
「そして『アテナ』の効果発動。フィールド上の『フェアリー・アーチャー』をリリースし、再び『フェアリー・アーチャー』を蘇生。効果により１８００のバーンダメージです」
『『『天罰てきめん！！』』』
「くっ！？　その効果は……！」
闇丸＆邪々丸ＬＰ３８００
「ええ。あと二回、使用できます。『アテナ』の効果で『フェアリー・アーチャー』をリリース、そして蘇生。１８００のバーン効果です」
『『『天罰てきめん！！』』』
「ぐあああああっ！？」
闇丸＆邪々丸ＬＰ２０００
「もう一度！」

「あああああっ！？」
闇丸＆邪々丸ＬＰ２００
「ラストです！『フェアリー・アーチャー』の効果発動。私のフィールドに存在する光属性モンスターの数×４００ポイントのダメージを与えます。私のフィールドには光属性モンスターが五体。よって２０００ポイントのダメージです！」
「がああああっ！？」
闇丸＆邪々丸ＬＰ０
……わ、ワンターンキル。そしてまた俺は目立たなかった。いやアテナ。そのコンボ、俺いらないじゃん。俺のデッキとのシナジーを見せるまでもなく、一人でこの二人、普通に殲滅出来たんじゃね？
相変わらず容赦なく最強なアテナに若干引いていると、エースが複雑そうな表情をしているのに気が付いた。
「エース？」
『……いや』
恐らく、アテナの墓地とフィールドを行き来させる戦術が気に食わないのだろう。とはいえ、それで勝てたこともあり、複雑なのだ。
「……エースさんには、少し酷だったかもしれません」
『いや、わかっている。わかっているが……やはり、簡単には割り切れぬものだな』
「これは、私の精霊としての性質にも関わってくるのですが……」
アテナの精霊としての名前……。
「『反魂のスピリチュア』……私は元々、生と死の狭間を操る天使。エースさんからは受け入れがたいでしょうが、それが私の本質なんです」
『……そうだな。わかっている。我の考え方は、精霊としては異質だと』
「精霊としては異質でも、人としては正しい考えだと思います。それに……」
「待てアテナ。あれを……」

「え？」
『なにっ！？』
何か言おうとしたアテナを遮り、俺は闇丸たちを指差す。
「「……」」
虚ろな目をした二人の男は、緩やかに闇へと溶けて行くところだった。
「どう、いうことですか……？」
「おい！　闇丸、邪々丸！　お前ら、一体……」
慌てて二人に手を伸ばしたが、時既に遅く、二人の身体は闇と消えた。
「これは……」
その場に残された衣服とデュエルディスク、そしてデッキを見る。
「っ！」
闇丸と邪々丸のデッキ、双方共に入っていた一枚のカード。
「終焉の……精霊！」
普通に考えれば、デッキとしてシナジーするから投入されたモンスター。だが、俺たちはこのモンスターに因縁があり過ぎた。
「まさか……これも」
「とんだ修学旅行に、なってしまいましたね……」
「ああ……」
この分だと、剣士の方も……。
「とりあえず、剣士と合流しよう。結界も消えていないみたいだし……これからのことを話し合おう」
剣士が負けるとは思えない。だが、勝っていたとしても、この分だと……。

「剣士！」
「……セツ」

埠頭にいる、と言った剣士を迎えに行くと、気絶した凛を背負った剣士を見つけた。しかし、どうも様子がおかしい。
「なぁ」
「どうした？」
「デュエルって……なんだ？」
そう言った剣士の表情は、今まで見たことがないくらい暗く沈んだものだった。
「なんで……デュエルで人が死ななきゃならねえ。デュエルって、命を懸けてまで強くならなきゃいけないのか？」
デュエルした相手と何かあったのだろうか。剣士は一枚のカードを手にしていた。『風帝ライザー』……。
「強く、なってよ。それで死んでたら、意味なんてねえだろうが……！」
「それは……違う」
「なんでだよ！？　どんなに強くなっても、何を為しても、それで死んだら……」
「違う！」
「っ！？」
「セツ……？」
「それは、違うんだ……剣士」
「なんで、だよ」
「命を懸けて……例え死んでも、成し遂げたいことが、あったんだ……」
俺には……。
「他人からすれば、どうしてと思われることでも、命を懸けて。俺は……」
さだめを守ろうとしていた。どれだけ命を懸けて護っても、いずれその護るべき存在に殺されるかもしれない。それでも、俺は……。
「お前が、何を見たのかは知らない。わからない。でも……そいつが命を懸けて得たものは、本当に無意味だったか？」

「無意味……だろっ……死んだら……全部っ！」
「お前に、遺したものがある。違うか？」
剣士は苦しんでいた。だが、それでも何か思うところがあったから、こうして悔やみ、苦しんでいる。それは……。
「そいつが、命を懸けた結果だ」
俺は剣士の持つ『風帝ライザー』のカードを指差す。
「お前の苦悩が晴れた時、きっとわかる。命を懸けた、その理由。例え死んでも、遺したものがあるのなら……」
その死は、想いは、決して無意味じゃない。
「そう思わなきゃ……命なんて、懸けられやしない」
無意味じゃないから、命を懸ける。遺したものが、何かを繋ぐと信じているから。
「何かを、遺す……」
「何を遺したかは、遺された側が判断するしかない。剣士……遺されたモノ……繋いでやってくれ」
「……ああ」
まだ複雑そうではあったが、剣士は一先ず落ち着いた。
「あ、結界が……」
消えて行った。俺たちとデュエルした連中はあの結界を張っていた帝を持っていなかった。ということは、十代がどうにかしたのだろう。十代の方も、何事もなければいいんだが……。
俺たちは、それぞれに若干の蟠りを抱えつつ、帰路に就くのだった。

第三期第二十四話「命を懸けて繋いだモノ」（後書き）

こんにちは。

いえ、まずは言い訳をさせてください。本当は闇丸が闇帝を連続で召喚＆特殊召喚しつつ、邪帝の効果で除外＆１０００ポイントダメージというデッキ破壊＆ビートバーンな展開にしようとは思っていたのです！　セツの方もパーミッションが冴えわたり、アテナのデッキがエンジェルパーミで相手のサイコショッカーを桜火で除去、ヴィーナスとマジックドレインのコンボ、エースとアルテミスとテテュスの効果で連続ドロー。俺とアテナのデッキ相性は最高だ！　みたいな展開持って行こうとはしたのです！……ただ、思っていた以上に某メインヒロインが強すぎまして。折角ライフ８０００もあったというのに一瞬でワンキルしてくれやがりまして。あれ、先攻ワンキル可能なレベルですよ。フェアリー・アーチャーでなくても７８００ダメージ受けて瀕死ですよ。どないせーっちゅーんじゃ。ある意味さだめすら超える鬼畜バーン。セツみたいにガンガンオリカを使うわけでもなく、さだめのように禁止・制限ガン無視するでもなく、極々当たり前に無制限カードだけでワンキルしてしまうメインヒロインです。どうかしてるぜ。現実でも可能ですが、アテナ、光神化、地獄の暴走召喚、フェアリー・アーチャーの四枚が揃わないといけないので悪しからず。まあアーチャーは墓地にいてもいいですが、代わりの天使族必須。……テテュス使えば実現できそうでアレですけど。ともかく、勝手にとっとワンキルしちゃった所為で特にセツのデッキとのシナジーを魅せることもなくデュエルが終わっちゃうあたり、流石に残念ヒロインですが。

次回は舞台をアカデミアの方に戻して改訂前にもあった話に戻ります。修学旅行でのラブを期待していた方々には申し訳ありませんが。アテナとのラブコメは書き尽くし……いえ、なんでもありません。いい加減先に進めたいですしね。

それでは、悠でした！

第三期第二十五話「光の結社　アルカナＶＳアルカナ」（前書き）

第三期クライマックス！　ということで、遂にアルカナとアルカナが激突します。まあ改訂前を読んでいた方々からすればもう結果はわかっているでしょうが……。特別変わったところもありませんが、どうぞお楽しみください。

第三期第二十五話「光の結社　アルカナＶＳアルカナ」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第二十五話「光の結社　アルカナＶＳアルカナ」

――セツ様。
――わたくしの、敬愛すべき主様。
「貴方を守るためなら、わたくしは……」
――わたくしは……。
「希冴姫。本当に、いいのだな？」
エースが、柄にもなくわたくしを心配そうな目で見つめてきます。
「――ええ。わたくしの心は変わりませんわ」
終焉とはまた別の、やはり恐ろしい影がセツ様に迫っているのを感じます。
その力は、邪悪な光の波動。我が主を脅かさんとする、憎むべき光輝。
「決して、やらせはしませんわ」
「……お前がいいというのなら、我には止めることはできぬのだろうな」
「クレイジー……ですの？」
「ああそうだ。不本意……そう、不本意極まりないが、我の口癖だな。それもこれも、貴様のような奴がいるから……」
エースが不機嫌そうに、ぶつぶつと文句を連ねる。
本当に、優しい娘……優しくて、優しすぎて、そして純粋過ぎて

……だから、精霊としては出来損なった我らが団長。その心に惹かれて、わたくしたちはこの娘を団長と仰いだ……でも、もしかしたらそれがまた、この娘の負担になってしまったのかもしれません。

「……」

そして、わたくしたちは出会った。出会ってしまった。セツ様に。一目で、そう一目で惚れ込みました。恐らくは、ジャックやキングも。もしかしたら、テンスもそうだったのかもしれません。エースだけが、人に仕えることを拒み、わたくしたちは袂を別った。

ですがそれも、セツ様は取り戻してくれた。

――ですから。

「後悔は、ありませんわ」

わたくしは、長らく身につけていなかった騎士装束と甲冑をつけ、その一歩を踏み出したのです。

色々と波乱に満ちた修学旅行も終わり、俺たちは新たな問題に直面することとなった。

“斎王琢磨”

そう呼ばれる男。エド・フェニックスのマネージャー。そいつが、先日剣山とデュエルしていた。どうやら、以前からおかしくなってしまっていた万丈目や明日香も、コイツの影響を受けておかしくなってしまったようだ。

そして……。

そいつは今、俺の目の前にいる。

「……俺に、何か用か？」

「御堂切……エドを倒し、私の預言を覆した者……その力を見せて貰いたいのですよ」

「早い話、デュエルしようってことか？」

「そうなりますねぇ」

「いいだ「待ってください！」アテナ？」
俺が斎王の挑戦を受けようとした時、アテナが急に割って入ってきた。
「セツ……この人は、ダメです。良くない感じがします」
それは、転生者としての嗅覚なんだろうか。しかし、奴が諦めるとも思えない……。それに……。
「……悪いアテナ。俺も、コイツとはデュエルするつもりだったんだ」
「で、でもセツ！」
「アルカナフォース……」
俺の呟いた言葉に、アテナがハッとする。
「同じアルカナ使いとしては、その力を使って得体の知れないことやって欲しくはない」
「セツ……」
「そう言うことでしたら、わたくしがいないことには始まりませんわね」
レッド寮から聞こえてきた声に、俺たちは振り向く。
「希冴姫！」
「セツ様。御心配をお掛けしましたわ」
騎士甲冑姿でこちらに歩み寄ってくる希冴姫の足取りに、特に陰りは見えない。
「大丈夫なんだな？」
「ええ。御心配なさらずとも、わたくしは、必ずセツ様をお守りいたしますわ」
「我も行ける。久々に、切り札の騎士団、集結だ」

「……よし」
斎王に向き直る。

「待たせたか？」
「いえいえ……こちらから不躾に挑んだのですから、準備に時間をかけることに、まさか文句など言いませんよ」
「そうかい。んじゃ、やるか」
デュエルディスクを展開。希冴姫たちを加えたデッキをシャッフルしてディスクにセットする。
「「デュエル！！」」
「私のターン、ドロー！」
さて……アイツのデッキは、タロット……アルカナフォースデッキ。本来アルカナフォースは、その強烈なメリット効果とデメリット効果をコイントスによって決定する、不安定ながら爆発力の高いデッキ……。
「でも、剣山に聞いた話が本当なら……」
“斎王は、運命を操る”
正直眉唾もいいところだが、実際に自分にとって都合のいい方の効果を使ってきたのは事実らしいし……。
「私は『アルカナフォース？－ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ』を攻撃表示で召喚。効果発動！」
『アルカナフォース？－ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ』ＡＴＫ１３００
来たか！
『アルカナフォース？－ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ』のカードがソリッドビジョン上で回転する。
「ご存知かとも思いますが、私のアルカナフォースは召喚時、正位置か逆位置かでその能力が決定します。さあ、選んでください。貴方の運命を」
良く言う。結局お前の思う通りに決めるんだろうに。
「……ストップだ」
俺の宣言から僅かに惰性で回転したカードは、すぐにその回転を止めた。その結果は……。
「正位置！　よって『アルカナフォース？－ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳ

S』の効果が決定！　その効果は、相手が通常召喚する度に私の手札に存在するアルカナフォースを特殊召喚します！　私はカードを一枚セット、ターンを終了します」

「俺のターン、ドロー！」

俺は手札を確認する。『アルカナフォース？－ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ』の攻撃力は１３００……俺の手札には攻撃力１５００の希冴姫。だが……。

「どうしました？　モンスターを出さないのですか？」

「っ……俺は『切り札の騎士―クィーン』を攻撃表示で召喚！」

『切り札の騎士―クィーン』ＡＴＫ１５００

「この瞬間、『アルカナフォース？－ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ』の正位置の効果が発動します！　私は手札から『アルカナフォース？－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ』を特殊召喚！」

『アルカナフォース？－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ』ＡＴＫ１４００

再び『アルカナフォース？－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ』の頭上で回転を始めるカード。

「さあ、ストップの宣言を」

「ストップ」

「正位置です。よって『アルカナフォース？－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ』の正位置の効果が発動します。私の場のアルカナフォースの攻撃力は５００ポイントアップ！」

『アルカナフォース？－ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ』ＡＴＫ１３００→１８００

『アルカナフォース？－ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ』ＡＴＫ１４００→１９００

「ちっ……」

これで希冴姫の攻撃力を上回った……。

「なら俺は装備魔法『アルカナソード　ハート』を『切り札の騎士―クィーン』に装備！　カードを一枚セットしてターンエンドだ！」

『切り札の騎士―クィーン』ＡＴＫ１５００→１０００

「私のターン、ドロー！　私は手札から魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動。手札の『アルカナフォースＸ？－ＴＨＥ　ＨＡＮＧＥＤ　ＭＡＮ』を墓地に送り、デッキから『アルカナフォース０－ＴＨＥ　ＦＯＯＬ』を特殊召喚！　回転を止めてください」

『アルカナフォース０－ＴＨＥ　ＦＯＯＬ』ＤＥＦ０

「ストップ」

カードの回転が止まり、『アルカナフォース０－ＴＨＥ　ＦＯＯＬ』は逆位置の効果を得る。だが、コイツは珍しく逆位置で強力な耐性効果を得るモンスターだ。

「そして永続魔法『コート・オブ・ジャスティス』を発動します」

「な……」

「私はその効果により、手札から『アルカナフォース？？－ＴＨＥ　ＭＯＯＮ』を攻撃表示で召喚！　効果発動！」

『アルカナフォース？？－ＴＨＥ　ＭＯＯＮ』ＡＴＫ２８００↓３３００

「……ストップ」

「またも正位置です。ふふふ、そろそろ信じて貰えましたか？　絶対的な運命を。我ら光の結社の力を」

「……ほざけ。こちとら、もうちょっとやそっとのことじゃ驚かないくらい周囲に毒されてるんでね。そのくらいじゃ驚かねえよ」

とはいえ、状況は最悪。相手のアルカナフォースたちじゃ、『アルカナソード　ハート』を装備した希冴姫を倒せないが、それでも相手フィールドには計四体。しかも“皇帝”の効果で攻撃力がアップし、“月”に至っては攻撃力３３００。最早俺のデッキでは、それこそ『アルカナ　ナイトジョーカー』くらいじゃないと倒しようがない攻撃力を持ってしまっている。

「そうですか。それは残念です。私はこれでターンエンドですよ」

攻撃はしてこない。流石に、もうハートの効果は割れてるか。

「俺のターン、ドロー！」

だが、アルカナでしか倒せないってんなら……、

「俺は手札から『切り札の騎士―キング』を攻撃表示で召喚！　効果発動！」
　アルカナを出せばいいってことだよな！
「デッキから『切り札の騎士―ジャック』を特殊召喚、魔法カード『融合』！　来いっ！　俺のアルカナ！『アルカナ　ナイトジョーカー』を攻撃表示で融合召喚！」
『おおっ！』
　『アルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ３８００
「ほう……これが貴方のアルカナ……私のアルカナフォースと、似て非なる存在……」
「行くぞ！『アルカナ　ナイトジョーカー』で、『アルカナフォース？？―ＴＨＥ　ＭＯＯＮ』を攻撃！『ロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」
　アルカナの持つ剣が謎のカプセルを内蔵したようなモンスターを切り裂く。
「ぐぅっ！」
　斎王ＬＰ３５００
「俺はこれでターンエンド！」
「っ……やりますね。私のターン、ドロー！　私は手札から『カップ・オブ・エース』を発動！　さあ、回転を止めてください」
　そのカードもそういう形で決めるのか……仕方ない。
「ストップだ」
「ふふふ、正位置です。私はデッキからカードを二枚ドロー！　今ドローした魔法カード『スート・オブ・ソード？』を使用させていただきます。さあ、正位置と逆位置を選んでください」
「ストップ！」
「残念、正位置です。このカードの正位置の効果は、貴方の場のモンスターを全て破壊します」
「くっ！？」
　しまった、対象を取る効果じゃないから『アルカナ　ナイトジョ

ーカー』の効果じゃ防げない！
　アルカナが無数の剣で貫かれ、爆発四散する。
「っだがこの瞬間、トラップカード『アルカナソード　クローバー』の効果を発動！『切り札の騎士―クィーン』を蘇生し、このカードを装備する！」
『セツ様をやらせはしませんわ！』
　『切り札の騎士―クィーン』ＡＴＫ２２００
「攻撃力２２００……なるほど、残ったアルカナフォースでは太刀打ちできませんね。私はこれでターンエンドです」
「俺のターン、ドロー！　俺はクィーンをリリースして『切り札の騎士団長―エース』を攻撃表示でアドバンス召喚！」
　『切り札の騎士団長―エース』ＡＴＫ２０００
「ほう。エドを倒したカードですか。興味深い」
『ほざけ。我らを見ることすら叶わぬ愚物が。切り捨ててくれる！』
「俺は装備魔法『アルカナソード　ダイヤ』をエースに装備！　攻撃力３００ポイントアップ！」
　『切り札の騎士団長―エース』ＡＴＫ２０００→２３００
『ふっ……装飾剣、だが悪くはないか』
　一応お前らの宝剣だろうが。相変わらずだなお前は。
「エースで、『アルカナフォース？―ＴＨＥ　ＥＭＰＥＲＯＲ』を攻撃！『ジュエル・フラッシュ・ソード』！」
『煌めけ！』
「ぐぅぅっ！」
　斎王ＬＰ３１００
「更に、ダイヤの効果でデッキからカードを一枚ドローする！　カードを一枚セットして、ターンエンドだ！」
「私のターン、ドロー！　私は魔法カード『強欲な壺』を発動し……」
「させん！　カウンター罠『マジック・ジャマー』！　手札の『アルカナソード　スペード』を捨てて、効果を無効化！　更に、俺が

手札を捨てた時、エースの効果が発動する！　一ターンに一度だけ、手札を捨てた時にデッキからカードを一枚ドローする！」
「ならば私は『コート・オブ・ジャスティス』の効果を発動します。手札から『アルカナフォース？？－ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ』を攻撃表示で特殊召喚、効果発動！」
『アルカナフォース？？－ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ』ＡＴＫ２４００
「……ストップだ」
もういい加減、その流れはわかっているので、さっさと回転を止める。やはり正位置。正直、普通ならイカサマを疑いたくなる光景だが、そんな感じではない。今更コインの裏表を自由に決められるくらいで驚きはしないが、困ることには違いない。
「行きますよ。『アルカナフォース？？－ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ』で『切り札の騎士団長－エース』を攻撃！『ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥネイル』！」
『ぐっ……』
「エース！」
『も、問題ない。我のことは気にするな……っ！』
セツＬＰ３９００
「くそ、この瞬間、『アルカナソード　ダイヤ』の効果を発動！デッキからカードを一枚ドローする！」
「私のバトルフェイズはまだ終了していません。『アルカナフォース？－ＴＨＥ　ＥＭＰＲＥＳＳ』でプレイヤーをダイレクトアタック！『ＥＭＰＲＥＳＳ　ブレッシング』！」
「ぐあぁっ……！」
「セツ！」
セツＬＰ２６００
後ろから心配そうなアテナの声。
「大丈夫、このくらいなら問題ない」
「私はこれでターンエンドです」
「俺のターン、ドロー！」

幸い手札は潤っている。アイツの手札はゼロだし、なんとかやれないこともない。
「俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」
「ふふふ、私のターン、ドロー！　私は手札から魔法カード『大嵐』を発動。魔法・罠を全て破壊します」
「待った。カウンタートラップ発動。『魔宮の賄賂』相手に一枚カードをドローさせる代わり、魔法・罠の効果を無効にして破壊する！」
「では、お言葉に甘えてカードをドローさせていただきます」
「更に、魔法カードを無効にしたことで、手札から『冥王竜ヴァンダルギオン』を特殊召喚！　効果発動！　魔法カードを無効にした場合、相手ライフに１５００ポイントのダメージを与える！『冥王咆哮』！」
『冥王竜ヴァンダルギオン』ＡＴＫ２８００
「ぐっ！？」
斎王ＬＰ１６００
「冥王竜……なるほど。これが御堂切のパーミッション……」
しばらくヴァンダルギオンを眺めていた斎王は、すぐにターンエンドをする。
「行くぞ！　俺のターン、ドロー！」
これは……。
「俺は『冥王竜ヴァンダルギオン』で『アルカナフォース？？ー ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ』を攻撃！『冥王葬送』！」
「ぬぅぅ！　しかし、『アルカナフォース？？ー ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ』の正位置の効果で、私の受ける戦闘ダメージは半分になります！」
斎王ＬＰ１４００
「わかっている。俺はこれでターンエンドだ」
「私のターン、ドロー！　ふふふ……どうやら、運命は私の味方のようです」

「なに？」
「私は『コート・オブ・ジャスティス』の効果を発動します！　見よ！　これが最強のアルカナフォース！　私は『アルカナフォース？？？ー ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』を特殊召喚！」
『アルカナフォース？？？ー ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』ＡＴＫ３１００
「やばっ……」
アイツの効果は……マズイ！
「ストップ！」
「無駄です！　正位置！　バトルフェイズ！『アルカナフォース？？？ー ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』で、『冥王竜ヴァンダルギオン』を攻撃！『オーバー・カタストロフ』！」
「くっ！　カウンタートラップ『攻撃の無力化』！　攻撃を無効にし、バトルを終了させる！」
「無駄なあがきを……メインフェイズ２に『アルカナフォース？？？ー ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』のモンスター効果！　二体のアルカナフォースを墓地に送り、次の貴方のターンをスキップします！」
「そんな！？」
アテナが後ろで悲痛な叫びを上げる。
「さあ、もう一度私のターン、ドロー！　私は再び『アルカナフォース？？？ー ＴＨＥ　ＷＯＲＬＤ』で『冥王竜ヴァンダルギオン』を攻撃！『オーバー・カタストロフ』！」
『グオオオオッ！？』
「くっ……ヴァンダルギオン！」
セツＬＰ２３００
「私は手札から魔法カード『死者転生』を発動。手札を一枚捨て、墓地の『アルカナフォース？？ー ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ』を手札に戻し、ターンエンドです」
「くっ……俺のターン」
かなり、マズイ状況……だが、この状況を打破出来るカードなら……ある！

「ドロー！」
　来た！　このカード！
「斎王！　俺はまだ負けない！」
「ほう。この最強のアルカナフォースを前に、まだ自らの敗北を悟りませんか……」
「なら、こちらも最強のアルカナを出すまでだ！」
「なんですと！？」
「行くぞ！　俺は墓地に眠る四枚のアルカナソードをゲームから除外し、最後のアルカナソード、『アルカナソード　ジョーカー』の効果を、ライフを半分支払って発動する！」
　セツＬＰ１１５０
「コイツは、デッキ、手札、墓地から『切り札の騎士』と名のついたモンスターをこのターンのみ特殊召喚することのできるカード。集まれ！　騎士たち！」
『この剣の下に……再び集う日が来たか』
『セツ様。必ず、何があってもお守りします』
『遂に、出すのですね。あのカードを』
『ほっほ。血が滾りおる』
『……俺に異存はない。やれ。セツ』
「五体のモンスターをいきなり……！？」
「更に俺は最後の手札を使う！　ライフを１０００ポイント支払って速攻魔法『絵札の結束』を発動！　俺は、融合デッキに眠る最強の騎士を呼び起こす！」
　セツＬＰ１５０
「俺はフィールド上の、五体の騎士を融合！」
「五体融合！？」
「来い！　最強のアルカナ……『切り札の騎士帝（トランプ・ナイト・ロード）―アルカナ　ロイヤルジョーカー』！」
　『切り札の騎士帝（トランプ・ナイト・ロード）―アルカナ　ロイヤルジョーカー』ＡＴＫ４５００

「これが……最強の……」
「攻撃力……４５００、だと？」
「行け！『切り札の騎士帝―アルカナ　ロイヤルジョーカー』の攻撃！　『ファイブ・オブ・ア・カインド』！」
「くっ……！　私は手札から『アルカナフォース？？―ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ』を捨てて、ダメージを無効化します！」
「しかし、“世界”には消えて貰う！」
アルカナの剣が、“世界”を切り裂く。一刀両断された“世界”は白煙を上げながら消滅していく。
「ぬっ……」
「俺はこれでターンエンドだ」
「私のターン、ドロー！」
とりあえず、危険な“世界”は潰した……コイツの攻撃力なら、そう簡単には倒されないだろうが……。とにかく、このターンを凌げば……。
「ふふ……驚きましたよ。御堂切。やはり、貴方は私の予知を超越する……ですが」
「っ！？」
「やはり運命には勝てはしない！　私は『アルカナフォース？―ＴＨＥ　ＭＡＧＩＣＩＡＮ』を召喚！　さあ、最後の審判です。選びなさい。貴方の運命を……」
「……ストップ」
俺が選び取った運命は……。
「逆位置です！」
アテナの喜色に溢れた声。そう、確かに“魔術師”のカードは逆位置を示していた。
「どうだ斎王。これで……！？」
ぎょっとした。斎王が嗤っている。そして、“魔術師”の背後に、別の影が見えている。あれは……。
「ククク……甘い。甘すぎますよ御堂切。私は最初のターンから、

ずっとこの瞬間を待っていたのですよ。この、運命の瞬間を……」
「なにが……」
「トラップカード『アルカナコール』……フィールド上のアルカナフォースと、墓地のアルカナフォースの効果を入れ替えるカードです……」
「それがなんだって……ぁ」
そういえば、最初の方の『ワン・フォー・ワン』で……。
『――私は手札から魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動。手札の『アルカナフォースX？－ＴＨＥ　ＨＡＮＧＥＤ　ＭＡＮ』を墓地に送り、デッキから『アルカナフォース０－ＴＨＥ　ＦＯＯＬ』を特殊召喚！』
ＴＨＥ　ＨＡＮＧＥＤ　ＭＡＮ……“吊るされた男”……。
「そう……正に貴方を象徴するこのカードによって、貴方は破れるのですよ……私は、ターンを終了します……そして、この瞬間、『アルカナフォース？？－ＴＨＥ　ＨＡＮＧＥＤ　ＭＡＮ』の逆位置の効果を発動！」
そうだ……“吊るされた男”は……逆位置がメリットになる……その効果は……。
「終わりですね。私のターン終了時、貴方の場のモンスター一体を破壊し、その元々の攻撃力分のダメージを受けて貰います。さあ、貴方も私の下に来るがいい……御堂切！」
ロイヤルジョーカーの効果は、手札を捨てることでこのカードを対象とする魔法・罠・モンスター効果を無効にして破壊する効果……でも、
「手札が……」
ない。
「う、あああああ……」
『お、おお……』
アルカナに次々と亀裂が走り、遂には爆散してしまう。
キィーン……。

爆風に飛ばされたアルカナの剣……それが、今。
「さあ、我が光の洗礼を受けよ！」
セツＬＰ０
俺の胸に、突き刺さった。

第三期第二十五話「光の結社　アルカナＶＳアルカナ」（後書き）

というわけで、アルカナ対決は斎王に軍配が上がりました。この所為で最強のアルカナが負けフラグ扱いされるように……ふ、フラグじゃありませんよ？　究極嫁と一緒にしないでくださいね？

ちなみに、つるされた男はアニメオリジナルです。悪魔とかはともかく、なんでこれＯＣＧ化されてないんでしょうね。普通に悪くないカードだと思いますが。

さて、改訂前だと次回が最終話でしたが、後一話だけ追加されます。その話は実は改訂前から入れ忘れたー！　と後悔していた結構な重要イベントだったりするので、お楽しみに。まあとりあえずは次話ですが。

それでは、悠でした！

第三期第二十六話「想いの在り処」（前書き）

連投です。あんまり変わっていませんが、ラストだけ少し変わっています。そして、ようやく話数が１００話に戻りましたね。一応百話目、と言うことになるのかな？

第三期第二十六話「想いの在り処」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期第二十六話「想いの在り処」

――光が、広がっていく。
視界一杯に、白い……光が。
「セツ！！」
アテナの声も、何処か遠くに聞こえる。
ああ……意識が、薄れ……。
ポッ……。
「え？」
「……なんだ？」
俺の胸元が、淡く輝いている。そこには確か、希冴姫から贈られたペンダントがあったはずで……。
「……希冴姫？」
『……はい。セツ様』
白い光の中で、唯一違う輝き……。ルージュの光。
『先ほどのデュエル……お役に立てず、申し訳ありませんでした』
「何、言ってるんだ。希冴姫には助けられている。今も、さっきも……今までもずっと」
思い出す。最初にこの世界に来てから、今までの戦いを。
その間、ずっと傍で共に戦ってきた。何度も何度も召喚し、何度も墓地に送ってしまった。エースとの確執の時、希冴姫の想いを聞

いた。それでも、心のどこかにずっと引っかかっていた想い。
「お前は……幸せなのか？　俺たちは、エースの言うように、お前たちを道具のように使い回しているだけじゃないのか……？」
今でも思う。俺たちは、交わるべきだったのか。俺なんかと戦って……いや、使われていて、希冴姫は……。
『……幸せですわ』
「でも……」
『セツ様』
「希冴姫……？」
ルージュ色の光が、希冴姫の形をとって俺の前に来る。
『んっ……』
一瞬だけ感じた温もり。
『幸せだから……貴方が好きだから、だから……ここに、こうしていますのよ。おわかりですか？』
「……ぁ。っ希冴姫！　体が……」
希冴姫の身体がルージュ色の光輝となって広がっていく。その輝きが白い、俺を取り込もうとしていた光を押し返していく。
『そう……そうですの。触れてみて初めて分かりましたわ……これが、破滅の光……』
「破滅の光？　何言っているんだ希冴姫、おい希冴姫！」
『セツ様。わたくしは貴方をお守りします。騎士の名誉、そして、女としての想いに懸けて。全身全霊、魂の全てで！』
「バカな……我が支配が、我が光が押し戻される……！？　これが、精霊の力……御堂切や遊城十代の持つ力か！」
『わたくしは……これから“破滅”より、何倍も恐ろしい“終焉”からセツ様を守り通さないといけませんの……この程度の力に、後れをとるわけにはいきませんのよ！』
完全に、ルージュの輝きが白の光を跳ね返した。
「ぬぅっ！？」
白い光が完全に消え、ルージュ色の光の中に、俺と希冴姫だけが

残る。
『セツ様……ご無事ですか？』
「ああ。ありがとう。希冴姫のおかげだ……でも希冴姫」
『……なん、でしょう……？』
「なんで、お前……」
――そんなに、ボロボロなんだ？
希冴姫の全身には、先ほどのアルカナのように罅が走り、希冴姫自身の輝きも徐々に弱まっている。姿自体も、時を経るごとにどんどん薄く、透けていく。
これじゃまるで……。
「消え……ちまうみたいじゃないか……」
俺の言葉に、希冴姫はただ微笑むばかり。
「っ……！」
俺は思わず希冴姫に手を伸ばし……その手は、むなしく空を切った。
「っなん……なんでだよ！？　何で……何でみんな、みんな……！」
『……言った筈ですわ。セツ様。全身全霊、魂の全てで、お守りします、と……』
「守る……？　守るって、こういうことじゃないだろ！？　俺は、こんなこと望んじゃいない！　希冴姫っ……！」
『希冴姫……わたくしの、名前。セツ様に、付けていただいた、今のわたくしにとって、何よりも愛しい、確かなモノ……』
「希冴姫……希冴姫！」
『セツ様……そのペンダント、ずっと身につけていただいて、とても嬉しいですわ』
希冴姫が、俺の胸元に目を向ける。そこには、例のペンダントが淡く光を放っていた。
『出来ればこれからも、それは肌身離さず身につけていてくださいまし。それが……わたくしの想いとなり、力となって、セツ様をお守りしますわ』

「お前が……」
希冴姫はもう、殆ど消えかけていた。罅も全身に回り、今にも砕けそうだ。
「お前が守れよ！　俺の傍に居て、お前が！　そのための騎士なんだろ！？　魂の全てとか……そんなの、いいから……」
『……最早、叶わぬ願いです』
「なんで……」
なんで、こんなことを。
その時、フッ、と希冴姫の身体が風に揺らいだ。
「希冴姫！？」
『……セツ様。お別れの時間が、近いようです』
「希冴姫ッ！」
手を伸ばす。しかし、届かない。俺の手は、徐々に光の粒となっていく希冴姫の身体をすり抜けていくだけ。
「待てよ……待ってくれ……勝手だろ……！　全部、全部お前の自己満足じゃないか！　俺は、俺はこんなもの望んじゃいない！　希冴姫！　破滅の光だか何だか知らないが、お前に守って貰わなくたって、俺は囚われたりしない！　勝手だ……勝手だよ……！」
違う。そうじゃない。そんなことを言いたいんじゃない。俺は、俺は希冴姫に……。
「何も……何もしてない！　お前の忠誠に、親愛に、何一つ応えてない！　守ってもらっただけで、俺は！」
『……既に、頂きました』
俺の慟哭に、少しだけ悲しそうな顔をしていた希冴姫が、静かに口を開く。
『名を。希望を、光を、喜びを、幸せを。たくさん、頂きましたわ』
「……足りない」
足りるわけがない。
「……なぁ」
『……はい』

「もう、会えないのか？」
『……いいえ』
「え？」
『またきっと、会えますわ。セツ様』
希冴姫の身体は、もう上半身しか残っていない。
『貴方が……願ってくださるのなら……きっと……また』
「きさっ……！？」
光が、散った。
そしてその瞬間、フッとナニかが見えた。
理解した。
「……そうかよ。これも、全部仕込みか……！」
その“ナニか”……黒い、終焉の影を思い、歯噛みする。
「……舐めるな……屈するとでも思ったか……？　絶望するとでも、思ったか……？」
「セツ！？　セツ！　しっかりしてください！　セツ！」
アテナの声も耳に届かない。
今まで、一度も感じたことのなかった感情が、俺の心を満たして行くのを感じる。
“憎悪”
「絶望なんてしない……そうか、そうだったか。希冴姫の思想も、みんな織り込み済みだったか……！」
お前を倒す。絶対に。そして、希冴姫もユーキちゃんも取り戻して見せる。
『憎しみで繋がる愛もある』
「っ！？」
『ありがとう。愛してくれて』
「な、ぁ……！？」
『ねえ、セツくん……』
「ぁ……あ」

『大嫌い……』

「囚われるな！　セツ！」
「がっ！　はっ……！」
一瞬目の前がスパークした。自分が殴られたことに気がついたのは、少し経ってからだ。
「ぐ……エース？」
何かに堪えるように表情を消したエースが、少し赤くなった拳をさすっていた。
「……希冴姫の覚悟を無にするつもりか。愚か者め」
「今、俺は……」
「呑まれかけていたな。まったく……いくら希冴姫が守ろうと、貴様自身が望めば精神防壁などあってないようなものだ。希冴姫の奴め……こうなることくらい予測しておけ。本当に、盲目でクレイジーな奴だ」
落ちていた一枚のカード――恐らく、希冴姫のもの――と傍に落ちていた何かの結晶を拾い上げるエース。
「……案ずるな。まだ希望はある」
「え……？」
しばらく思案顔でカードと結晶を見つめていたエースが、突然そんなことを言う。
「希冴姫は確かに逝ったが、力も魂も残っている。これなら……」
「どういうことだ……？」
わけもわからず目を瞬かせる俺を、エースが助け起こす。
「そもそも、あのクレイジーが消えた理由を、貴様は勘違いしているだろう」

「消えた理由……？」
　破滅の光による干渉から救うためじゃ……。
「違う。正確には、あの干渉があろうが無かろうが、奴の死は決していた」
「どういうことですか？」
「……お姫様は、彼のペンダントに、力を移譲していた」
　アテナの疑問に答えたのは、いつの間にか現れていたルイン。異変を察知して駆けつけてくれたらしい。
「その通りだ。知っているかもしれんが、我ら精霊は、カードから離れるとその力をほぼ全て封じていた。最近体調が思わしくなかったのはそのためだ」
「あ……」
　希冴姫が体調を崩していたのは、そういうことだったのか……。
「そしてそのペンダントの加護は、お姫様の死と共に、彼女の魂を吸収して完成する予定だった」
　ルインの補足に、俺はペンダントをマジマジと見る。
「もっとも、本当にそのペンダントに魂を吸収されれば奴を蘇らせることはできなくなるところだったがな」
「じゃあ……」
「ああ。今そのペンダントの加護は完成していない。だからこそ少しばかり終焉の干渉を許してしまったが……まあ、結果的に無事だったから良しとしろ」
　そしてエースは、俺に先ほどの結晶を見せた。
「そこでこれだ」
「え？」
「以前、世界の抑止力……真中希望が希冴姫に何か渡していただろ

う？」
「あ、ああ……」
アテナが戻ってきて、ユーキちゃんがいなくなった時だ。確かに、希望は希冴姫に何かを手渡していた。
「アイツが渡したのは一種のドーピングアイテムのようなものでな。力をほぼ失い、デュエルに力を貸すのが困難になっていた希冴姫の力を一時的に復活させるものだった」
「そんなものを……」
アテナが感心しているが、俺はそれどころではない。
「今、ドーピングと言ったか？」
「そうだ」
「じゃあまさか……」
「当然、副作用がある。復活するのは一デュエル限り。そして、終わった後には力を全て使い果たす」
「な……！？」
じゃあ、希冴姫が消えたのはそれで……。
「慌てるな。ただ使い果たすだけではない。この結晶は、死んだ精霊の魂を封じるものだ」
「……世界は、その機能だけお姫様に伝えなかった。彼女の蘇生には、魂が必要」
「ほっといてもその内あのクレイジーは死んだだろうから、そのくらいなら、という奴だろう。次善策だがな」
「蘇生……じゃあ、希冴姫は」
「で、でも肝心の蘇生はどうやってするんですか？　そんなこと……」
アテナがそう懸念を口にすると、何故かエースとルインは呆れたようにアテナを見た。
「え？　え？　なんですか？」
「……大分、人間生活が長かったらしいな」
「……毒されてる」

二人して溜息を吐く。
「えっと……？」
未だハテナ顔のアテナ。だが、俺はピンと来た。
「アテナ。確かお前の精霊としての名前って……」
「え？　あ、はい。『反魂のスピリチュア』です……ってあああっ！？」
顔にでかでかと『すっかり忘れてました！』と書かれている。
「……そう。まさに、適役がいる」
「……まったく。良くできていると言うかなんというか……これも、真中希望の筋書きか？」
それはわからないが、とにかく。
「希冴姫は、助かるんだな？」
「そこの間抜けがポカしなければな」
「ま、間抜けじゃありませんよ！　ちょっとド忘れしていただけです！　そ、それに、今は人間で、あんまり力もありませんし……確実ではないですよ」
少し申し訳なさげにそうつぶやくアテナ。
『だいじょぶよん。おねーさんも補助するし、いざとなれば冥王竜もカイエンちゃんたちもいるからさっ！』
「シャルナ……」
「ま、そういうわけだ。そう悲観するな。儀式は我らの神殿で行う。あの場所が最も霊的な意味でも、希冴姫の魂が最も定着しやすいという意味でも優れている」
「あとは、キミ次第」
皆が俺を見つめてくる。答えは、当然決まっていた。
「……行こう。精霊界へ。どっち道、希望もそうした方がいいって言っていたし、他の皆も連れて行こう」
「それでいい」
エースがニヤリと笑みを見せた。
「あ、でもさだめさんはどうしましょう？　まだ意識が戻っていな

いみたいですけど……」
「……少なくとも、今は小康状態。私が離れても、時間で全快する」
「……さだめは……」
俺が、今回は置いて行こう、と言いかけたその時。
「ちょぉぉっと待ったぁぁっ！！」
レッド寮、さだめを寝かせておいた部屋の扉が吹き飛んで、そこから見なれた小さな影が飛び出してきた！
「とうっ！」
「うおっ！？」
そこから一足飛びに俺に飛びついてくる。なんとか受け止めた。
「さだめっ！？」
「さだめさん！？　もう起きて大丈夫なんですか離れてください！」
「うあたたっ！？　ちょ、アテナ痛い痛い！　心配しながら引き剥がさないで！　いいじゃん久しぶりのお兄ちゃん分なんだから補給させてくれたって！」
「私の補給が終わってないんです！」
「あれから何日経ったと思ってるのさ！　もういいでしょ！」
「ダメです！　足りてません！」
「気持ちはわかる！」
「わかりあってないでさっさと退け！」
俺の上で言い合う二人をなんとか退かし、改めてさだめに向きあう。
「さだめ。お前本当に大丈夫なのか？　今の今まで寝ていたんだろう？」
さだめは病人服のままだし、暴れたために少し肌蹴た服の下に見える包帯もそのままだ。
「ん？　ああ平気平気。全然オッケー」
心配する俺たちを余所に、さだめは至って元気そう。怪我人とは到底思えない。……先ほどの動きも含めて。
「……いや、そもそもさっきの動き、明らかに怪我人じゃないだろ

どう考えても」
　死にかけて意識不明だったのがいきなりドア吹っ飛ばして二階からダイブ。一足飛びで俺にもダイブ。……健康な人間でも出来るか怪しい。
「怪我人？　誰が？」
「いや、お前が」
　きょとん、と何を言っているのかわからない、とばかりに首をかしげるさだめを全員で指差す。
「そんなもの、速攻完治だよ完治」
　シュルシュルと包帯を解いて行くさだめ。その下からは、傷跡一つない綺麗な肌色。……待て、傷跡一つ？
「……あれだけ深くグサっと逝っといて、なんでそんな綺麗に傷跡なくなってるんですか」
「お兄ちゃんの血を輸血して貰ったから。それも大量に」
「理不尽！　だけどすごく納得です！」
「いやいやいや！　納得するな！　理不尽だろ！」
「怪我なんて輸血して貰って直ぐ治ったよ？　今まで寝てたのは、幼虫が成虫になる時にさなぎになるのと同じこと」
「貴様……本当に人間か？」
　エースが引いている。俺も同感だ。
「さだめの細胞が、お兄ちゃんの血液によって進化したの。今なら百メートル１０秒で走れそう！」
　運動音痴のさだめにしては大きく出た、とかそういう問題じゃない。
「あの……錯覚かもしれませんがいえ錯覚の筈なんですけど！……さだめさん、背と胸、少し大きくなってませんか？」
「進化したからね！」
「絶対有り得んだろうが！　貴様はアレか、吸血鬼か！？」
　例え吸血鬼でも、血を貰っただけで体まで変質はしないと思う。
　いや、知らんが。

「お兄ちゃんのＤＮＡが、さだめを死の淵から蘇らせるだけじゃ飽き足らず、遥か高みまで昇華させてくれたの！　今のさだめはそう！　言うなれば新生ニューさだめＭｒｋ－２セカンドツヴァイドスデュオ！」
「どれだけ二を被せれば気が済むんだお前は」
「というわけで、さだめも一緒に行くからね。当然」
……こうなったら、何言っても聞かないだろう。
「わかった。でも、一応病院で検査してからだぞ」
「いよし！」
「ほ、ホントに元気ですね……」
まったくだ。お陰で、陰鬱な気分も吹き飛んだよ。
「……まったく何なんだ貴様ら兄妹は……」
疲れたように溜息を吐くエース。すまん。俺もそう思う。
その瞬間。
「っ！？　エース！」
「後ろ！」
「っな！？」
突然、エースの後ろに終焉の精霊が現れる。俺たちの声に反応し、咄嗟に身を捻ったエースだったが、かわし切れず、終焉の精霊の腕がかすめる。
「ぐっ！？」
「エース！」
「わ、我は心配ない、それより結晶が！」
「な……」
ケケケケッと馬鹿にしたような笑い声を上げる終焉の精霊が、その手に希冴姫の魂が入った結晶を摘まんでいる。初めからあの奇襲はあれを狙って……！？
「返せぇ！」
「待ちなさい！」
「っ……！」

エースたちが一斉に攻撃するが、その一瞬前に終焉の精霊は煙のように消えてしまう。……希冴姫の魂と共に。

「そ、そんな……」

「くっ……我が、油断したから……」

「くっ……」

そんな……これじゃ、希冴姫が……。

「お兄ちゃん、今の大切なモノ？」

俺たちが絶望的な気持ちで膝を着く中、唯一平然としていたさだめがそう聞いてくる。

「さだめ……そうか、さだめは知らなかったか」

俺はさだめに、先ほどまでの話をしようとして……さだめがその手にぶら下げているものに目が向いた。

「さだめ……お前、それ……」

「ん？　ああ、さっきの奴の腕。なんか大事なものっぽかったから、取り返しておいたよ。はい」

消滅する腕を放り捨てて、さだめは俺に希冴姫の結晶を渡す。

「い、いつの間に……」

「皆の攻撃が届くちょっと前に。サクッと」

「い、いえそれよりも、どうしてさだめさんが終焉の精霊に……」

そうだ。アイツに俺たち人間の物理攻撃は通用しなかった筈……アテナたちの攻撃より早く動いたのもあり得ないが、そっちはもっとあり得ない。

「だから、言ったでしょ？　今のさだめは、さだめであってさだめに非ず！　お兄ちゃんのＤＮＡによって進化したさだめにとっては、それくらい造作もないこと」

「……理不尽」

ルインに同意。

「まあ真面目な話。さだめ、嫌ってほどアレに取り憑かれてたからね……多分、もう魂とか、その辺が精霊寄りになっちゃってるんだと思う。なんとなく、それがわかるよ。一回臨死体験したから、そ

れがきっかけかな」
「あ……」
そうか……殆ど生まれてこの方ずっとアレに憑かれていたから……。
「ま、でもさだめ的にはお兄ちゃんのＤＮＡぱぅわ～の方が納得できるし、嬉しいけど」
「……はは」
「さだめさんらしいですけど……」
さだめはやっぱりさだめのままだな。変わらない。
「よし。とにかく、さだめのおかげで希冴姫の魂も無事だった訳だし、精霊界行きの件をみんなにも話して、早いとこ精霊界に行こう！」
「はい！」
「わかった」
「了解だ」
「さだめにも説明よろしくね。お兄ちゃん！」
しかしそれにしても……。
「また、学園休まなきゃな……今度こそ、留年するかも」
「……言わないでくださいセツ。私も、似たようなものです」
「さだめも」
ユーキちゃんもアレだし……はぁ。
「こうなりゃ、揃って留年してやるか……」
半ば以上に諦観の篭った溜息を洩らす。
「……いや、それとも」
「セツ？」
「……いや、精霊界に行く前に、やっておくことがあるのを思い出した」
「やっておくこと？」
「さだめ、お前が起きたのも、今考えれば丁度いい。少し……付き合って貰うぞ」

「何々？　お出かけ？　デート？」
「いや……帰省、だ」
「っ……」
さだめの表情が強張る。
「そろそろ……決着着けないと、な」
携帯電話を取り出して、ディスプレイに表示された名前を見る。

『御堂　正（ただし）（父）』

第三期第二十六話「想いの在り処」（後書き）

次回、今まで謎のベールに包まれていた御堂兄妹の父親が登場です。かなりシリアス度合いの強い話になります。ご注意ください。

それでは、悠でした！

第三期最終話「決別」（前書き）

改訂版第三期の最終話です。もうなんでこんな大事な話を改訂前は入れてなかったのか。ある意味、ここが改訂作業のメインイベント。もちろん、キャラを削るのも理由の一つでしたが、この話だけはここに入れておきたかった。そんな話です。アルカナ史上、最もシリアスレベルマックスな話になったかとも思うので、そういう話苦手な人は……いえ、苦手でも見てもらった方がいいでしょう。それでは、どうぞ。

第三期最終話「決別」

アルカナ～切り札の騎士～

第三期最終話「決別」

「……うん、そう。だからできれば、今度の休みには帰って来て欲しいんだ」

俺は携帯で、久しぶりに父親と連絡を取っていた。

「頼むよ。母さんの見舞い？　いや、だからさ。俺とさだめの話を優先して欲しいんだ。母さんの見舞いは……大事だってわかってるけどさ」

中々首を縦に振らない父親に、俺は根気強く頼む。

「さだめと……話してやって欲しいんだ。もちろん、俺も同席するし、というか俺からも話があるし。……ありがとう。父さん」

何とか話をつけ、俺は携帯を仕舞った。

「……明後日、か」

父さんとの、話し合い。もしかしたら初めての、家族会議だ。

「さだめ」

「……うん。わかってる。さだめは大丈夫。大変なのは、お父さんだから」

その大変は、何処を意味するのか。仕事か、それとも……。

「大丈夫。俺も付いてる。それに……」

「お兄ちゃん……？」

「いや、何でもない。兎に角、今日はもう休め。病院で保障された

とはいえ、病み上がりには違いないんだからな」
「……うん」
頷き、しかし動かないさだめに、俺は溜息を吐く。
「はぁ。仕方ない。……今回だけだぞ」
さだめを布団の中に。
「あ……」
「言っとくが、何もしないのが最低条件だ。調子に乗ってヘンなことしたら叩きだすからな」
「うん……ありがとう。お兄ちゃん」
「……そうやって妹してれば、普通に抱きしめてもやれるのにな」
「それは、無理かな。さだめにとってお兄ちゃんは、お兄ちゃん、なんて枠で収まりきるものじゃないから」
「……そっか」
ぎゅーっと強く顔を俺の胸に押し付けてくるさだめの頭を撫でながら、俺は眠りに就いた。

深夜、俺は布団を抜け出し、アカデミアの校舎を見上げていた。
「色々……あったよなぁ」
異世界トリップ、そんなベタな展開。だが、俺にとっては掛け替えのない日々で。いつの間にか、ずっとこの世界に居たような錯覚すらしていた。
だけど、もう決めたんだ。この揺り籠に、いつまでもは居られない。俺は意を決して、携帯電話を取り出した。
「もしもし。夜分遅くにすみません。俺です。セツです。実は、折り入って頼みがあるんですが……聞いて貰えますか？　実は――」
通話口の向こうから、驚いたような気配が伝わってくる。だが、それと共に、どこか納得したような口調で、通話相手は俺の申し出を受けてくれた。

「さて、と……」
二日後。準備を整えた俺とさだめは、定期船に乗り込み、実家を目指した。
「……っていうか、こっちの世界の実家に帰るのなんて初めてだよ」
「そうだな。父さんとは何度か電話で話したが……」
どうやら、別世界の俺とか、そういう意識はないらしかった。希望に聞いてみれば詳しいこともわかるんだろうが……元の世界の父さんたちと、そう大きな違いはないようだった。
「……」
さだめは、朝から妙に口数が少ない。普段のハイテンションさが嘘のようになりを潜めている。
「緊張してるのか？」
「……別に」
俺に対する言葉数も少なく、そっけない。珍しい状態と言えるかもしれない。
「怖いか？」
「……さだめを怖がってるのは、お父さんたちでしょ」
そう言って否定するが、俺と目を合わせないさだめ自身、わかっているのだろう。
――怖い。
――自分を否定した両親に会うのが。
正確には、会うのは父親。母親は今、病院で療養生活を送っている。
「最初は、俺が話そう。さだめは、とりあえず自分の部屋にでもいるといい」
「……ん」
家に着いて……元の世界と寸分の違いもない我が家に、懐かしさ

を覚えた俺とさだめは鍵を開けて扉をくぐった。

まだ、父さんは帰って来ていないようだった。鍵がかかっていたことからも想像はついていたが、いきなり鉢合わせしなかったことに、さだめは安堵のため息を吐いた。

「じゃあ、さだめは部屋に行ってるね」

「ああ。父さんが来たら……」

「うん。呼んで。行くから」

それだけ言い残して、さだめはさっさと二階の自室へ引っ込んでしまった。

「……あれ、なんだ？　結構、寂しいぞ」

妹からそっけない対応をされる、なんて世のお兄ちゃんにはありふれているだろうに、これまで一切そういう経験がなかったからわからなかった。

「うわ、うわうわうわ。少し涙ぐんできた」

シスコンだ。我ながら凄いシスコンだ。さだめのことをとやかく言えない。

「しかし……」

あのさだめが、ここまで余裕をなくす辺り、やっぱり産みの親が持つ影響力ってものは大きいらしい。

「俺は……そうでもなかったけどな」

今日の覚悟も、あっさりと決まってしまった。もしかしたら、さだめ以上に俺は人間として大事なところが狂っているのかもしれない。

「ま、今更か」

兄を愛する妹くらい、いるだろう。行き過ぎた愛情から、刃傷沙汰になることもないとは言えない。両方を兼ね備えた存在だって、広い世界に居ないとも限らないし、創作でならありふれているかも

しれない。だが、それを甘受し、尚も愛そうという奴は……。
「……聞いたこと、ないかもな」
考えていたことがある。
さだめは、終焉に取り憑かれて、ああなった。だが、俺は？　何かに取り憑かれたわけでも、異質な産まれだったわけでもなく、ただ普通の幼児でしかなかった筈の俺は、なんでさだめを受け入れられた？　それでいてどうして、曲がりなりにも普通の価値観を持って社会に溶け込める？
無駄スキル？　さだめのため？　ならその根源は？　俺は何故……。
「こうして今、ここに居る……？」
『私に言わせれば、あの子のなんかより、キミの方がよっぽど病んでいる。あの子と十年以上も一緒にいて、今も明るく何事もないように毎日を過ごしている、キミの方が』
ルインにかつて言われた言葉が、脳裏を過る。
『清濁呑み乾すキミが、自分だけは受け入れないのね』
「そうさ……俺は、何時だって……」
――自分が、一番怖くて堪らない……！
ガチャリ……。
「――お帰り」
「ああ……ただいま。切」
「父さん……」
さあ、ここからだ。ここから、俺は……。

「久しぶり、と言ったらいいのか？」
「……そうだな。最後に会ったのは、一年半くらい前か」
「……ああ」
本当のことを言えば、その頃俺はこっちにいなかったのだから、

知らないのだが。その辺りの事情は少々――今更アテナを恨むも何もないが――残念だ。俺たちの、実際の両親との決着は、もう望めないのだから。

「仕事は、順調か？」

「ああ。おかげ様で、今度昇進が決まったよ。お前たちへの仕送りも、なんならもっと増やせそうだ」

「……そうか。課長？」

「部長に、な。そうか。それも、話してなかったか……」

空気が、重たかった。家族の会話とは、とても思えないくらい、ぎこちなかった。そりゃあそうだ。なんってったって……。

「父さんとまともに会話したのなんて、二年やそこらじゃすまないしな」

「……そうだな」

会ったの自体、一年半ぶりくらいだ。物心ついてから、俺たち兄妹はロクに両親と会話した記憶もない。さだめに至っては、皆無に近いだろう。

殆ど、他人。そんな、親子関係。

「……」

「……」

だから、一端会話が途切れると、何を話していいのかわからなくなる。

それでも、何時までも黙っているわけにはいかない。態々時間を作ってくれた父さんに悪いし……第一、それじゃあここに来た意味がない。

「あの、さ」

「う、ん……なんだ？」

目も、合わせられない。気まずくて、ぎこちなくて。

「ホントは、さ。俺の話から先にしようかと思ってたんだけど、やっぱり、やめるな」

よく考えれば、まだ、希望はあるんだ。父さんの態度次第で、俺

からの話はなくなる……そんなことも、あるかもしれない。
「だから先に……話してくれよ。さだめと」
「ッ……！」
ぐっ、と身体を強張らせる父さん。
「いや……」
「頼むから……！　話してくれ。もう、アイツは……さだめは、昔のアイツじゃないんだから……！」
この期に及んで、煮え切らない父さんの態度に、業を煮やしてさだめを呼ぶ。
トントン、と階段を下りる軽い足音が聞こえてくる。父さんの顔色は、悪くなるばかり。
「……なんで、そんな顔してるの？」
「っぁ……！」
さだめの、暗く、沈んだ声に、父さんが小さく声を漏らす。
「いつも……そう」
階段を降り切ったさだめは、リビングの入り口で、顔を俯かせていた。
「いつも、そうだよ。いつだって、お父さんたちはさだめを見てくれない……」
「……」
さだめの声に、父さんは何も言わない。言えない。
「わかってる……！　さだめが、さだめがおかしかったから、お父さんたち、怖かったんでしょ？　わかってるよ……でも」
顔を上げたさだめは、泣いていた。
「さだめ、お父さんに手を繋いでもらったこと、ないよ……。頭撫でてもらったこと、ないよ。抱きしめて貰ったこと、ないよ……！」
もちろん、さだめにもわかっている。狂気に染まっていた自分に、そんな普通の親子のように接することなど出来ないと。それでも、その言葉を抑えきれない。その理由は……。
「いつだって……さだめの手を取ってくれるのはお兄ちゃん。撫で

てくれるのはお兄ちゃん。抱きしめてくれるのはお兄ちゃん。……さだめを愛してくれるのは……全部全部全部！……お兄ちゃん、だけ」

俺が、いたから……。

「一番、一番お兄ちゃんが怖かった筈なのに。お兄ちゃんが、一番さだめに傷つけられていた筈なのに……。それでもお兄ちゃんは、さだめを守ってくれたよ。なのに……」

さだめは、少しの間沈黙した。そして、やがてポツリと呟いた。

「さだめ、お兄ちゃんが好きなの。兄妹だからってことじゃない。一人の女の子として、お兄ちゃんが好き」

「さだめ……？」

今更だろう。俺は元より、父さんだって、そんなこと重々承知している。なのに、どうして今更……？

「きっかけは、狂気。でも、想いが育まれたのは、お兄ちゃんだったから。お兄ちゃんが、受け入れてくれなければ、さだめは狂気に呑まれて終わってた。さだめにとって、お兄ちゃんは冗談抜きで全てなの。狂気を抑えてくれたのも、狂気を消してくれたのも、全部、お兄ちゃんだったから」

さだめは一歩父さんに向かって足を踏み出す。

「お父さん。一度でいい。一度でいいから……さだめを見て」

それが、さだめの本音。狂気の元となった終焉が消えたさだめの、本当の願い。

「……さだめは、こんなに素直な娘だったんだな」

長い、長い沈黙の後、父さんは疲れたような声でそう言った。

「そうだ。父さん。本来のさだめは、素直で優しい、普通の娘だよ」

即答した。そんなこと、俺は昔から、最初からわかっていた。

「切は……最初からわかっていたんだな」

「……兄、だからな」

「そうか……父さんは、いや、父さんたちは、親なのに、そんなことと考えもしなかった。ただ、異常な娘の暴走に、震えることしか出

来なかった」
「普通は、そうだよ。お兄ちゃんは、特別」
「そうだな……」
「おいおい、俺は別に……」
「はは……」
父さんが、少しだけ笑った。空気が少しだけ、ほんの少しだけ軽くなる。……しかし。
「……だが」
「父さん？」
「だがそれでも、父さんは臆病だ」
「お父さん……」
「本当のさだめを知った今でも、過去のさだめが目に焼き付いて離れない。あの時感じた恐怖が、父さんを縛るんだ……」
それは、何らおかしなことじゃないのかもしれない。目の前で息子が傷つけられ、妻が心を壊し、その原因となったのが自分の娘だった。父さんの心労はどれほどだっただろう。
「私の心は摩耗してしまった。何かに集中していないと、心が持ちそうにない。だから私は、遮二無二働き、現実から目を背けるしか出来ない。それが、さだめをまた傷つけると分かっていても」
父さんは額に手を当てて項垂れ、首を振った。
「すまない、さだめ、切。私は……最低の父親だ」
涙。さだめの手を取ってやりたい親心と、心の底から湧き上がる根源的な恐怖（トラウマ）の板ばさみになり、行き場を無くした想いが、雫となって頬を伝う。
「十年だ。母さんが病院に入って、もう十年たった。それだけの時間、目を背け続けても、逃げ続けても、私は、まだ逃げ足りないらしい……」
「……え？」
「十、年……？」
十年。それは、俺たちの記憶と一致する。こちらの世界に来て若

返り、ずれた筈の記憶と。
「まさか……父さん？」
「こっちの世界の、とか……そんなんじゃなくて？」
「……そうだ」
「な……」
愕然とした。確かに、しっかり確認したことはなかった。だが、まさか父さんまで……。
「私も、確信がなかったから話せなかったが……今日話してみて、漸く確信が持てたよ」
「じゃあ……本当に、父さんなのか？」
「そうだ。別世界、だったか。そんなものがあるなどと、想像もしていなかったが……見覚えのない会社、見覚えのないテレビ番組、各地で宣伝されているデュエルモンスターズ……それに、全てのことを話してくれた子がいてね……。それでも何処か信じられなかったが、お前たちとも話して、流石に頭の固い中年でも、信じずにはいられなかったよ」
「全てを話してくれた人……？　それって」
「可愛らしい、少女だったよ」
アテナ……！　以前失踪していた時に、家にも来ていたのか……。
「こちらが気の毒になるくらい謝ってきてね。あの時はどうしようかと、途方に暮れたものだよ」
アテナ……。
アテナのことは気になるが、とりあえずアテナのことは置いておこう。今は……。
「お父さんが、お父さんだって言うなら……わかりやすいかな。お父さんはさだめを……」
「……すまない」
「……そっか」
長い沈黙の後、さだめは寂しそうにそう言って目を伏せた。
「……じゃあ、父さん。これで終わりにしよう」

結論は出た。俺は、話をしなくちゃならない。
「切……？」
「いつまでも、こんな……辛うじて繋がっているような親子関係じゃいられない。今日俺は、それをはっきりさせに来たんだ」
「お兄ちゃん……？」
「父さん。俺とさだめは、今日限りで父さんたちと縁を切る」
「切！？」
「ゴメン。でも、もうこれ以上、さだめを苦しめるだけの関係を、続けさせるわけにはいかない。俺が……さだめを守るから」
「お兄ちゃん……」
「だから、もう仕送りは要らない。学費も、何もしなくていいから……もう、さだめに近づかないでくれ」
「切……ぁ」
父さんは、自分でも気付いたのだろう。さだめに近づかないでくれと言われた瞬間、確かに自分が安堵していたことに。愕然とした表情で、自失している。
「……ぁ、し、しかし、どうするつもりだ。仕送りはいいって……学費まで」
「俺が稼ぐ。俺は……アカデミアをやめるよ」
「お兄ちゃん！？」
俺の言葉に、父さんだけじゃなくさだめまで驚愕の声を上げた。
「アカデミアをやめるって……だが、それでは」
「そうだよ！　お兄ちゃんがアカデミアをやめてまで、さだめを通わせることないよ！　さだめは……さだめも」
「駄目だ。さだめは通え。絶対に」
「でも！」
「さだめは！」
「っ！？」
「……さだめは、アカデミアで、やっと友達が出来ただろう？　学校で、友達と机を並べて勉強することだって、今まではしてこなか

ったんだ。俺は良い。元の世界で散々やってきたし、そもそも俺は実質大学生だ。高校レベルの勉強は修めてる」
「それは、でも……」
「切、お前が稼ぐって、伝手はあるのか？」
「当然。もう手は打ってある。俺は……プロデュエリストになるつもりだ」
「え！？」
「実は、もうカイザーに……いや、丸藤プロに話はついてる。俺の実力なら、十分以上にプロとしてやっていける。推薦してくれるってさ」
勿論、プロテストも受けなければならない。だが、プロテストの学科問題は俺からすれば話にならない低レベル問題だったし、実力の方はお墨付きだ。可能性としては、十分すぎるだろう。
「それに、実はもう大分アカデミアの方で欠席が嵩んでてな……潮時だと思ってた」
これからまた、休むことになるだろう。だから、それならいっそ、と言う奴だ。
「よしんばそれが駄目でも、俺は色々、十分以上に稼げる手段を持ってるしな」
無駄スキル……いや、もう無駄とは呼べないか。俺の技能は、どうやらみんなプロレベルに達しているらしい。
「だから……今日でお別れだ。父さん」
「切……」
「俺たちは、きっとまた、父さんを傷つける。父さんも……。だから、最後にしよう」
親子で、傷つけあうのは。
「父さんは今、俺たちを傷つけた。俺たちは今日、父さんを傷つける。それで、最後だ」
父さんがさだめを拒絶した時点で、腹は決まっていた。取り返しの付かないモノ。お互いに、それを失って……終わろう。

「ごめん。父さん。最低の息子で」
「……いいや。私こそ、最低の親だった。もしかしたら、それが最善なのかもしれないな」
「次善、だろ」
「……そうだな」
最善は、言うまでもなく、わだかまりを捨て、普通の親子に戻ること。でもそれは、最早叶わない。
「今日は……泊まって行くのか？」
「……いや、やめておくよ。もう、未練は残したくないんだ」
「そうか……」
俺は席を立つ。そして決別の証として、深く、深く頭を下げる。
「……今日は、どうもお邪魔いたしました。これでお暇させていただきます。御堂さん」
「お、兄ちゃん……」
涙は見せない。さだめも、父さんも流した涙を、俺だけは見せない。それは、未練だ。例え後で泣くことになったとしても、ここで涙は見せられない。
「……行こう、さだめ」
「う、うん……」
おずおずと、さだめも俺の後に続く。俺は、背後から聞こえてくる嗚咽に押されるようにして、玄関を抜けた。
「……さようなら」

「……お兄ちゃん」
「……なんだ？」
家から大分離れたころ、さだめはお兄ちゃんの背中に声をかけた。
「本当に、良かったの？」
「……ああ」

「でも、さだめはともかく、お兄ちゃんにとっては……」
「いいんだ」
こちらに顔を向けることもせず、そう言い切るお兄ちゃん。
「……ごめんね。お兄ちゃん」
「何がだ。お前が謝ることなんて何もないよ」
「……うん」
また、まただ。
「また……」
さだめは、奪ってしまった。お兄ちゃんから。今度は、両親を。
――さだめがいなければ。
それは、さだめが正気に戻ってから、何度となく考えてきた言葉。
そして、何度となく首を振り、考えないようにしてきた言葉。でも今回は、何度首を振っても消えてくれない、その言葉。
さだめがいなければ、お兄ちゃんは家族と幸せに暮らせたはず。
さだめがいなければ、お兄ちゃんは普通に恋して、普通に結婚して、普通に生きていけたはず。
――でも。
「……そう思っちゃ、いけないよね」
そう思ったら、お兄ちゃんの今までの行動が無駄になる。お兄ちゃんの受けた痛みが、傷が、全て無意味なものになる。だから、だからさだめは……。
「おに～いちゃんっ♪」
甘えた声で、お兄ちゃんの腕に飛びつく。
「うわっ!?　どうしたさだめ」
「なんでもな～い」
「なんでもないなら離れろ」
「い～や！　今日は絶対離れてあげない！」
「ったく……」
苦笑したお兄ちゃんが、さだめが抱きしめている反対の手でさだめの頭を撫でてくれる。

「えへへ……」

さだめが、お兄ちゃんから奪うことしかできないのなら。いくら奪っても、いくら傷つけても、それでも足りないっていうのなら。

お兄ちゃんが付き合ってくれる限り、さだめはさだめで居続けよう。せめて、世界中の誰よりも、幸せな人間で居続けよう。それが、さだめの義務で、責任だから。そのために……。

「さだめは、ずっと一緒だからね」

「……言われなくても、そうなるだろうさ」

さだめは、さだめの覚悟を決める。お兄ちゃんの覚悟を、無にしないために。お兄ちゃんに負けない、強い覚悟を。

そうでなければ、この絶対無敵で最高の男の人に、釣り合うことなんて出来ないのだから。

第三期最終話「決別」（後書き）

と言う感じで、第三期は終了になります。
いやー、しかし本当に重たい話になりました。ですが、そこそこの手応えは感じております。シリアスの方が手応えは感じやすいですね。やっぱり。
まあ……あんまり多くは語りません。疑問等ありましたら、感想の方へお願いします。
それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド三人の転生者？」（前書き）

注意書きです。

今回の話はかなり異色です。純粋にアルカナを楽しんでいただいている皆さんに、受け入れられない可能性もあったりします。そもそも、セツたちメインキャラが影も形もないので。その上、デュエルもアレです。一応、真中希望に関する設定が明かされてはいますが、アルカナ本編にはちっとも関係ないので別に無視しても構いません。知れば、少しは希望のことがわかるかな～？　くらいのもんです。

あと、秋代さんにも先んじて謝っときます。ごめんなさい。酷いです。色んな意味で、酷いです。

とにかく、読む際は色んな意味で心して御閲覧ください。

特別編「？アルカナクロスワールド三人の転生者？」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「？アルカナクロスワールド三人の転生者？」

「……ふう」

静寂に包まれた夜のアカデミア。その来賓室を臨時の執務室として借り受けている真中希望は、自らの前の景色が歪んだことに、心からの嘆息を漏らした。

「まったく。書類仕事で忙しいロートルを、表舞台にあげないで欲しいね」

そう言いつつ、希望はその手にデュエルディスクを携えて、世界の綻び。通称“時空の歪”に体を滑り込ませた。

歪から出た希望の目の前には、一件のログハウス。

「ふむ。『魔法先生ネギま！』エヴァンジェリンのログハウス、か。本格的に異世界だね。ある意味、セツたちがこちらに巻き込まれなくてよかったと考えるべきか」

基本的に一般人のセツたちを、少しの間だけだとしても魔法だの鬼だの魔族だのが跋扈する（と言うほどいないけど）世界に連れていくわけにもいかない。

「とりあえず……お邪魔します」

「お、来た来た」
「待っとったえ～」
「今日はよろしく」
「……説明が不要なのは、尺を縮める上では合理的でも、僕としては実に不満だね」
　何事もなかったかのようにこちらに挨拶してくる三人の転生者、南武貴史、近衛薫、カスミ・ヴェネーラに、少し希望は残念そうに溜息を吐く。
「おいカスミ。……？　ああ、お前か。今日カスミが言っていた客とやらは」
「はじめまして。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。吸血鬼の真祖。『闇の福音』『人形遣い』『悪しき音ずれ』……さて、どの名で呼ばれるのがお好みかな？」
　丁度いいカモが来たので強引に解説に持って行く。
「……何でもいい」
「では、キティと」
「よりにもよってその名を選ぶな！」
「解説しよう。エヴァンジェリンの本名はエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウェル。本人はキティと呼ばれることを嫌っているよ」
「解説出来るほど熟知しているなら呼ぶな！」
　一通り解説とエヴァ弄りが済んだ希望は、改めて三人を見渡す。
「さて。それじゃあ僕の相手は誰かな？」
「あ？　なんだ貴様まさかカスミたちに挑もうというのか？　命知らずも居たものだな」
　はん、と何処か馬鹿にしたようなエヴァに、希望は苦笑する。
「違うよ。それも楽しそうだけど、今回はコレ」
　と腕に付けたデュエルディスクを示す。
「ああ……こいつらがたまにやっているカードゲームか……」
　なるほど、とエヴァが頷いている。

「まあ、直に戦り合っても、そうそう負けるつもりもないけど、そんな大災害巻き起こしたいわけじゃないしね。僕も」
「だな～。俺らがマジでやりあったらホント、この麻帆良終わるし」
「……それ以前に、私は全力出せないんだが……」
カスミはとある事情（本編を見てね）により、魔力が封じられている。
「そやなぁ……そういうんは、カスミが本調子に戻ってからやな」
「ふむ。じゃあこうしようか。キミらが僕に勝ったら、カスミの呪い、解いてあげよう」
「できるのか！？」
「全然余裕。僕は、キミらとは違うタイプのチートだからね」
「よし。勝て貴史！」
「そりゃ負ける気はないっての」
雑談はさておき。
「んじゃ、早速始めっとすっか！」
「あ、ちょい待ち。どうせなら、それらしい場所でやろうじゃないか」
そう言うと希望は掌から光球を生み出す。
「うは、チート魔力」
「やっぱ、アンタも大概チートか……」
「何するん？」
興味深げに尋ねる三人に、希望はシーっと唇に指を当てる。
「まあ、見てて。コホン。……解けよ、創世の光。紡がれよ、律法の世界」
希望の言葉に呼応して、光球が毛糸のように解け、当たりの風景が変化していく。
やがて、周囲はエヴァのログハウスではなくデュエルアカデミアのデュエルリングそっくりに変化していた。
「何だこれ？　固有結界か？」
「んにゃ。似てるけど、全く別物だよ。まあ、気にしないことだね」

気付けば貴史もデュエルディスクを装備していた。服装もデュエルアカデミアのものだ。
「うお、いつの間に……」
「世界と一緒に服も再構築しただけだから。気にしないで」
直接戦闘タイプのチートというより、こういう補助系のチートなのだろうか。
「よし。それじゃあ行け。薫」
「ってウチ？」
予想外だったのか、貴史の指名に自分を指差す薫。
「考えても見ろ。俺らの幸運ランクを」
「私なんて論外中の論外でしょうが。負けられないんだし。主に私の自由のために！」
「うーんしゃーないなー」
貴史からデュエルディスクを受け取った薫がリングに上がる。
「ほんなら、今回はウチが相手になるえ。ええか？」
「もちろん。お手柔らかに、よろしく」
「それは、保障できひんなぁ」
確かに。チートキャラ同士。互いに“お手柔らかに”済むとは到底思えなかった。
「「デュエル！！」」
手札を見た薫が嬉々としてカードをドローしようと……
「はい。僕の勝ち」
「へ？」
『エクゾディア』
「へ？　ちょ、はあああああああ！？」
「いやーいい汗掻いたー」
「いや汗掻いてへんやん！　ちゅーかそれはないやろ！？」
「ふむ？」
希望はデッキを確認し、エクゾディアが各一枚ずつしか入っていないことを確かめてから、改めて首をかしげた。

「特に、問題はなさそうだけど」
「あるやろ！？」
「君たちの挑戦状。触れ込みは『チートモンスターに勝てるか？』だったから。うん。いかなるチートであってもとりあえず１００％勝てる展開が遊戯王にはあるということを……」
「積み込みか？」
「いや、君たちがチートカード全開で来るつもりなら、僕はチート能力全開で行こうかと」
「チート全開だと初手からエクゾディアが全揃いなのか」
「確実に」
貴史たちの顔には皆一様に『しまった。その展開は予想してなかった！』と書いてある。
「よし。歪を消すためのデュエル自体は終わった。帰るか」
『帰るな！』
引きとめられた。
「なにかな？」
「とりあえず、エクゾディアはヤメロ」
「良いだろう」
あっさり希望は頷く。
「じゃあ改めて……」
「「デュエル！！」」
「僕の先攻。ドロー。手札から永続魔法『魔力倹約術』発動。更に『終焉のカウントダウン』をノーコストで使用。『ターンジャンプ』×３！　計１８ターン経過。カード一枚セットしてターンエンド」
「……オチ、読めた。ウチのターンドロー」
「リバーストラップ『運命の火時計』ターンカウントを一進めて特殊勝利条件達成はいお疲れー」
「「特殊勝利はヤメロ！」」
「我儘だねー」
しかし、希望は良いだろう。と頷き、改めて別のデッキをシャッ

フルする。
「ウチ、もうやりたなくなってきたわ……」
「がんばれ！　薫！」
「私の自由のために！」
「「デュエル！！」」
「僕のターン。モンスターをセット。ターンエンド」
今度はまともか。いやしかし油断は出来まい。
「ウチのターン、ドロー！『ダンディ・ライオン』を守備表示。カードをセットしてエンドや」
「僕のターン、ドロー。僕はモンスターを反転召喚」
現れたのは、物凄くリアルな顔の人面壺。そう……
「だ……」
「『ダイス・ポット』、だ」
あ、またオチ読めた～と項垂れた薫を尻目に、希望はダイスを振る。
「はい、６ね」
「頑張れ薫！　お前の幸運ランクならいける！」
「そんなこと言われてもなぁ……」
薫の目は５。
「というわけで、６０００ポイントダメージプレゼント。はいまたしゅーりょー」
「改めて聞くとひでぇ！？　なんだ６０００ポイントダメージって！？」
とりあえず、『Ｆ・Ｇ・Ｄ』のダイレクトの方がまだ良心的と言う辺りが狂っている。ライフポイント４０００ではどちらも死に直結する辺りは変わらないが。
「なんだ。特殊勝利はダメっていうから……」
「その圧倒的な運命力はどうにかして頂けませんかねぇ！？」
詰め寄る貴史に、希望はチッチと指を振る。
「僕は基本、チートに対しては容赦しない。折角作ったオリジナル

カードを名前すら出させない程度には」
「なら名前だけでも……『ピーーーーーー』ってなにぃ!?」
「容赦は、しない」
「ホントにひでぇ!」
「チートカードを作った時点で、僕はこうすることを決めていた。
そう、まともなデュエルはさせてやらない、と」
これでも徐々に理不尽では無くしていっているつもりなんだよ?
と言う希望。確かに、最後の『ダイス・ポット』くらいなら実際にあり得ないこともない。
「じゃあ、次はまともになるのか?」
「なるとも。実に合理的な手段で封殺して見せよう」
「結局封殺されるんやな……」
「「デュエル」」
「僕はカードを一枚セット。『王虎ワンフー』を攻撃表示で召喚。永続魔法『強者の苦痛』を発動し、ターンエンド」
「ウチのターン、ドロー。ワンフーて……生贄揃えさせんつもりやな。けど、そうはさせへんで! 『サイバー・ドラゴン』特殊召喚。モンスターをセットして『二重召喚』や! この二体をリリースして……」
「あ、リバースカード『生贄封じの仮面』ね。生贄禁止」
「なぁぁっ!?」
「おい……チートモンスターって、みんな生贄……」
「必要だな」
「ってことは……」
チート封殺。
「では、僕のターン。ドロー。『抹殺の使徒』と『地砕き』で二体を破壊。『ゴブリン突撃部隊』を攻撃表示で召喚し、二体のモンスターでダイレクトアタック。はい、四度目お疲れー」
完殺。
「ま、まともな手段で完封された……」

「いや、微妙にまともではなかった気もするけど」
「ふ……まあ元々君たちがフッかけてきたケンカだ。全力で買ってみた」
「とりあえず……前半三つはどうしようもないことはわかった」
「君たちとは、チートの土俵が違う。出直してくるといい」
「カッコいいこと言っているようで微妙なセリフだなそれ」
「でも実際、私らの能力自体はカードゲームに何にも影響ないな」
「そのためのチートモンスターなんだが……」
「僕の手にかかれば、自分と相手の手札やデッキを操作することも容易い」
「そりゃ勝てんなぁ……」
「って、初めから私の呪い解くつもりなかっただろ！」
「そりゃそうだよ。許可もなしにそんなことするわけないだろ？」
「万一負けたらどうするつもりだったんだ……」
「億が一にもそれはないけど、そうなったら解いてすぐかけ直す」
「それ最悪じゃね？」
「＋αも付けよう。名付けて、『にんにくを取らずにはいられないけど取ったらお腹を壊す』呪い」
「いらんわ！」
「そう？　じゃあネギを……」
「だからいらない！」
「じゃあ貴史に、『女性の胸を揉んだら死に等しい激痛が走る』呪いとか」
「酷い嫌がらせ！　俺に死ねと言うのか！？」
「大丈夫。ほら、あくまでも『女性の』胸を揉んだら、だから、男の胸を……」
「怖気が走るわ！」
「キミんとこの作者さん好きでしょ？　そういうの」
「楽屋ネタかよ！　俺は好きじゃねえよ！」
「じゃあ薫……は、いいか。別に」

「何でや！？　なんでここに来てウチは何にもないん！？　逆に気味悪いわ！」
「おや、そろそろツッコミ疲れてきたかな、と思ったから配慮しただけなんだが……物足りない？」
「お気遣いどうも！」
「物足りない。僕が」
「お前がかよ！」
「デュエルもあっさり終わってしまったし、解説らしい解説も出来なかった。ならせめて、散々弄ぶくらいしないと欲求不満が溜まってしまうよ」
「じゃああっさり終わらせるなよ！　何のためのコラボだ！」
「お互いの作品の宣伝のためだろう？　別にコラボ“デュエル”と言うわけでもなし」
「元も子もない！」
「あ、ちなみに、今回僕が君たちの世界に来たように描写されてるけど、ぶっちゃけたところ正確には君たちが僕らの世界に来ている、が正解だから」
「それ言う意味あったか！？　そしてメタ！」
「すなわち、君たち僕に翻弄されるのは必定」
　ああなるほど。要するに、自分たちがこの世界の神に弄ばれてるようなもんだといいたいのだろう。
「くっそぅ……あの屑（神）ならどうとでもなったんだが……」
「その神すら、僕の中の一因子に過ぎないのだからね。当然、格は圧倒的に上だ」
　サラリと神以上を宣言する希望。貴史たちは俄然興味が湧いたのか、希望に問いかける。
「なあ、どうせだから、あんたの正体、もっと詳しく教えてくれないか？」
　その質問に、希望はふむ。と少し考え込んで、やがて「いいだろう」と頷きを返した。

「それなら、僕の解説欲求も少しは収まるし。……本当は創世以来永遠とも思える歴史も含めて解説したいところだけれど……まあ、それはいくらなんでも蛇足に過ぎるか」

歴史の解説、までいったところで、貴史たちがげんなりとした顔を見せたので、少し残念そうに肩をすくめる。

「……さて。では、君たちにもわかりやすく、型月風に説明しよう」

貴史たちはともかく、この小説を読んでいる人間には果たして優しいかどうかは分からないのだが。

「僕は、根源の渦。アカシックレコード。それを裡に宿した、ただの人間だ。元々はね」

「人間？」

「キミらだって、一応はただの一般人から転生者として能力を手に入れたんだろう？　まあ、僕は元々持っていた資質が開花しただけなんだが」

それを言われれば頷くしかない。

「で、まあアカシックレコードなんてものを人間が扱いきれるわけもない。力を手にした時点で僕は人から外れた。いや、酷いものだったよ。何せ、創世以前からのありとあらゆる事象、歴史が一気に頭に流れ込んできたんだ。『人としての僕』なんてもの、一瞬で塵と化したね」

何せ、ありとあらゆる存在の生と死を、一瞬で体験したも同然だ。それだけでなく、あらゆる喜怒哀楽、悲劇も喜劇も問わず、丸ごとだ。欠片でも入ればそれだけで“人”ごとき小さな器などが耐え切れる筈もない。

「……とはいえ、僕は元々、アカシックレコードの器として用意された存在だったらしくてね。存在の変質と引き換えに、僕は耐えた。耐えられて、しまった」

常時送り込まれ続ける膨大過ぎる情報量。ありとあらゆる悲劇も喜劇も、常に刻みつけられながら生きている、そう希望は語った。

「丁度いい機会だ。転生者諸君。力があれば、何物も成せるとは思

わないことだ。僕でさえ、全知ではあれど全能ではない。あらゆる全てを知りながら、救えるのは一粒の砂の如し、だ。『力がなくては守れない』『力があれば守れるのに』というのは、正しく都合のいい妄想にすぎない」

君たちも、それは既に知っているかもしれないけどね。そう希望は付け足した。

「神も悪魔も、超越者も転生者も、世界すら、全てを救えない。なまじ大きな力を持っていると、救えなかった時の痛みは増す。だからせめて、絶望しないことだ。一つでいい、君たちが絶対に守る誓いを決めるといい」

「誓い？」

「そうだ。自分が必ず為すべきを決め、為すべきを為せ。それを誓い、その誓いを守る限り、君たちは最強だ。例え、他の何かを失っても、君たちは“何か”を得られるだろう」

「希望……」

「希望にも、あるん？　守るべきもの」

薫の言葉に、希望はふっ、と寂しげな笑みを浮かべた。

「……いつも、守れないんだ。僕が守ると誓ったもの、皆。いつも、守られてしまうんだ。僕は。僕が守ると誓ったものに」

今は迷っている。そう、希望は話す。

「僕が守るものはなんなのか。愛すると誓ったヒトなのか、それとも理想か、或いは世界。あらゆるものを知っているから、わからない。あらゆるものと同一だから、人が思う“守るべきもの”の数だけ、僕にも守りたいものがある」

人として生きた時間が限りなく少なかったから。数多の記憶に溺れてしまう。無数の想いにかき消される。

「……君たちにも、あるんだろう？　守るべきものが。僕には、自分のことのようにわかるよ。……いや、『ように』じゃないな。僕は、君たちでもあるのだから」

だから、どうか悲劇にならないように。

「……喜劇もハッピーエンドも見慣れたさ。でもね。世界には、バッドエンドが多すぎる。喜びよりも、哀しみや苦しみが溢れている。だから僕は、会う人皆にこう言おう」

――ハッピーエンドを見せてくれ。バッドエンドは見飽きたよ、と……。

「今、もし僕に、守りたい誓いがあるならば……」

少しでも多くの幸せを。

「僅かでも、些細でもいい。幸せな景色を、心に刻みたい。根源に刻まれる物語を、少しでも多くの幸せに染めたいのさ」

なんだ、結局自分のためでしかないな。と希望は苦笑を洩らす。

「……そりゃ勝てねえよなぁ……」

「そうだな」

「やね」

今も尚起き続けている悲劇は、全て希望にとっての悲劇なのだ。今も尚繰り返される喜劇は、希望にとっての喜劇なのだ。希望自身が最早数えることも馬鹿らしい程に非業の死を遂げ、幸せな最期を看取られ、大事な人を失い続けているのだ。

「……ある物語のセリフを捩ろう」

希望が手をかざし、同時に世界がほどけていく。

「僕に勝ちたければ、僕以上の地獄を見つけるがいい。或いは……」

――それ以上の天国を見つけて欲しい。

「さらばだ。別世界の勇者たち。君たちのこれから紡ぐであろう喜劇の全てを、僕もまた、この身に刻もう」

世界が解け、元居たログハウスに戻っていく。同時に希望の姿も薄れ、元の世界に戻っていく。

「……また来いよ！」

「まっとるえ～」

「私の呪いが解けた頃に来い。今度は直接戦り合おう」

三者三様の反応に希望は微笑む。

「……来ることはない。なぜなら、僕は世界。僕はどの世界にも遍

在する風のようなもの。また会おう。願わくば、君たちにほんの少しだけ優しい世界がありますように」

言葉だけ。何の力もないおまじない。でも人は、時にその言葉に救われ、その言葉に奮起する。

「……僕との出会いが、君たちにとって佳いものであったことを、願っているよ」

そして、世界の境界は別たれた。

「あら、おかえり希望」

「ただいま。光」

「どうせ知ってるんでしょうけど、報告よ」

「ああ、わかっているよ」

……希冴姫が消え、セツは精霊界へと行く決意をした、ということを。

「……ここまでは、全て予想してあったメインプランの通り……最善とは言わないが、少なくとも、最悪ではない」

……やることは多い。

「とりあえず、凛の事務所に連絡をとろう」

「……希望」

「ん？　何かな？」

「……なんでもないわよ。その内、息抜きに旅行でも行きましょってだけ」

「……そうだね。ありがとう、光。気遣ってくれて」

「あんたもたまには、息抜きしないとね。私一人くらいは、あんたのこと気遣ってやっても罰は当たらないでしょ。あんたが辛いと、私も辛いんだから」

光に言われて、僕は思いだす。

「……ああ、そうだった。別に僕は、特別でも何でもなかった」

人は、痛みを共有する生き物だ。それは、幸せもまた……。

「だから、わかっているかい、希冴姫。キミの選択は、決してセツを幸せにはしないんだ。他人と共有してこその、幸せというものも、人にはあるんだ」

――ま、それを促した僕が、とやかく言えたことじゃない、か……。

「本当に……僕は何もできないな」

――所詮、脇役。

「全知であり、全能であらざるもの。それがあんただし、ね」

「ああ。でも、それを歯痒く思う」

「そう思わない人は、居ないのよ」

「……かも、しれないね。ねえ光」

「なによ」

「じゃあさ。僕も、人なのだろうか？」

「さあね」

光の返答は、ごくさっぱりとしたものだった。電話が鳴る。凛の事務所からの連絡だろう。

「あんたが思う通りよ。どっちにしたって、私は愛してあげるから、ヘンな心配しなくていいの。ほら、さっさと出る」

「……まったく。どれだけ自分が不幸だ、って言ってみても、これじゃあ説得力皆無にも程があるな」

溜息を吐いて、僕は電話を手に取った。

「ああもしもし。お電話代わりました。……はい。それで、水原凛の長期休暇を頂きたく……ええ。わかっています。代わりの者は寄こしますし、経費も……」

事務所との交渉をしつつ、僕はソファにゆっくりと体を沈めるのだった。

特別編「？アルカナクロスワールド三人の転生者？」（後書き）

……もう二回謝っておきます。ごめんなさい。ごめんなさい。三回謝ったので許して下さい。だめか。

とりあえず、秋代さんに貰っていたチートオリカ案を載せておきます。せめてもの償いです。

邪眼を持つ超越者
☆×８
闇属性
効果モンスター
魔法使い族
攻撃力　２８００
守備力　２１００
効果：デュエル中に三回モンスター、または罠、魔法の発動、攻撃を無効にし、伏せる。
（※同じカードには効かない）

場から墓地へ行った場合。
自分のスタンバイフェイズに
攻撃力　２００上げて復活出来る。

蛇使い座（アクスレピオス）
☆×１０
神属性
効果モンスター
星神族
攻撃力　３０００

守備力　２９００
効果：このカードは通常召喚が出来ない。
邪眼を持つ超越者をリリースして
特殊召喚出来るカード。

このカードが破壊されると墓地から
邪眼を持つ超越者を場に復活させる。
このカードが除外されるとデッキ、又は手札より
モンスターを無条件で一体特殊召喚する

漆黒の吸血姫
☆×８
闇属性
効果モンスター
悪魔族
攻撃力　２６００
守備力　２１００
効果：闇属性のカードを装備カードとして装備可能。
その装備カードの現攻撃力、現守備力がこのカードに加算される

炎雷の女帝
☆×８
光属性
効果モンスター
戦士族
攻撃力　２６００
守備力　２１００
効果：このカードが場から墓地に

送られた時、手札又はデッキから
怒りの暴君・雷帝を特殊召喚出来る。

怒りの暴君・雷帝
☆×１０
光属性
効果モンスター
雷族
攻撃力　４０００
守備力　２７００
効果：特殊召喚に成功した時
相手の場に存在する
モンスターカードを全て破壊する。

でした。まあ、色んな意味でアレですね。対戦相手に希望を指名しなければ出せたんでしょうけど……希望だと、あんな感じに。
希望の設定については、元々あったものを流用しています。元々こんなキャラでした。型月知らない人にはごめんなさい。アカシックレコードくらいは知ってるか？　まあともかく、色々と黒歴史な特別編です。
後は、残った野良猫さんのコラボを書いて、暗黒さだめで終わり……まだ二つもありやがる……。へ、へへ……もう１００万どころか１５０万超えたぜ……。
欲張りすぎは、身を滅ぼしました。
それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者　前編？」（前書き）

こんにちは。

コラボ四つ目。今回は野良猫さんの『遊戯王ＧＸ　精霊と転生者』になります。

やっとこさ確定していたコラボが終わり……と思ったらまさかの前後編です。めちゃくちゃに延びました。今話だけでも、普段の一話と同等か、それより長めな癖に、後編ではもっと長いという凄まじい長さ。ＨＥＲＯの書き易さが、異常です。

とりあえず、デュエルの途中まで、どうぞ！

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者　前編？」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者　前編？」

「だからな、俺は思うわけだ。ポニテという髪型は、あらゆる衣装にベストマッチする上、人種を問わない。基本的に俺は黒髪ポニテに和服の組み合わせを推奨するが、アメリカンに、金髪ポニテのチューブトップ＋短パンの組み合わせも実に王道でイイと思うんだ」

「わかるわかるぜ！　それにさ、ポニテってやっぱり、ショートとロングの魅力をどちらも内包してると思わないか？」

「流石だな八雲。俺も、その点については以前から着目していた。ポニテは、ショートの持つ活発な、それでいて僅かに覗く健康的な白いうなじという色気、更にはロングの持つしっとりとした、大和撫子的な美しさも兼ね備えていると言っても過言ではない」

正直、口が滑らかに滑り過ぎて自分でも引く。が、それについて来れてる八雲も大したもんだと思う。……同志か。

まあそんな余談はさておき、どうしてこうなったのかは……まあ、今更説明するまでもないだろう。前回出張った分、希望には今回出番なしで居て貰う。要するにあれだ。また出てきたんだよ。時空の歪。

しかし、前回と違うのは、今回は向こうも異界に放りこまれた形らしいってことだな。なんでも、向こうは俺よりも多く、何度かこういう世界に巻き込まれたことがあったらしく、お互いに説明は不

要だったので助かった。
　で、まあ折角こうして会えたんだし、お互いに交友を深めようぜってことになったんだが……。
「いやしかし、まさかここまで話せるとは思わなかったな」
「俺もだ。というか、すごいこだわりだな。セツは」
「八雲もそうだろ。っていうか、奏が落ち込み気味だからフォローしておけ」
「え？　あ……」
「あ、あの八雲くん……わ、私もポニーテールの方がいいのかな？」
「いや！　別に奏はそのままでも！　つかその、あれだ。俺とセツは所謂一つの萌え要素って奴を話し合っていただけで！　現実の好みとはまた……」
　おーおーやってるやってる。こうやって見てるのも楽しいが、とりあえずあんまりのんびりしてるのもあれだよな。
　現在、奏が作って来たと言う弁当を分けてもらって食べているところだ。
「しかし、すごいな君は。聞いた限りじゃ、運動に勉強、デュエルに家事全般。何でもできるらしいじゃないか」
「そ、そんなことないけど……私、人見知りするし……なんでか、セツさんはあんまり抵抗ないけど」
「そこら辺は、俺の特技だな」
　基本的には何処にだって自然に溶け込めるスキルだからな。俺の前では、人見知りなぞあってないようなものだ。
「それに運動も、水泳は苦手だよ」
「……気が合うな。俺もだ」
「そうなのか？　それこそセツも、何でも出来そうなのに」
「……いいか、八雲。人間はな。遥か昔サル同然の時代から、基本的に地上でのみ生活してきた種族なんだ。だから人間にはエラも、浮き袋も、水かきも付いていない。そもそもが、水中で生活するように人間の体は出来ていないんだ。地上で生活することに特化して

きた俺たちは、態々敵に有利なアウェーに飛び込むことなく、地上でのみ生活していればいいんだ」
「……とりあえず、敵ってなんだよ」
「……私は、結構気持ちわかるなぁ……水怖い」
「何より、水の中ではさだめから逃げられない！　しかも水着という極々薄いガード！　これはもう、自殺行為としか言いようがない！」
「い、いきなり気持ちが分からなくなった……」
「しかも、そっちが本命の理由っぽいな……」
ふ、ふふふ……わからないだろうな。昔から風呂と言わずプールと言わず海と言わず、人目もガン無視で常に獲物と捕食者の関係だった俺たち兄妹のことは……。
「それより、八雲たちはどうしてこう言う世界に？　俺は、さっき話した通りの理由なんだが」
「ああ……ちょっと、いやかなりアホらしい話なんだが……」
なんでも、謎の黒猫に呼び込まれて、勝てばご褒美、負ければ地獄のデュエルをすることになっているらしい。
「最初のデュエルは負けて……ちょっと、いや、思い出したくないから聞かないでくれ」
「……何か、辛いことがあったんだな（漢的に）」
「……ああ。で、二回目は勝って……」
「八雲くん？」
「……イエ、ナンデモナイデス。ワスレマシタ」
「……とても、いいことがあったんだな（漢的に）」
「……まあ、そんなところだ」
ふ～ん。ご褒美と地獄、ね……。
「それ、面白そうだね」
「おわっ！？」
「だ、だれっ！？」
突然何処からか現れた希望に、八雲と奏がびっくりしている。ま

あ、どさくさ紛れに密着してるし、役得だろう。俺は、今更コイツがどう現れたところで驚きはしない。

「……つーか、隠居してろよ。さっきお前は出番なしって言っちゃったんだが」

「僕もそのつもりだったんだけど、今実に楽しげな言葉が聞こえてきたからね。思わず世界の壁を飛び越して」

思わず、で世界の壁を乗り越えるな規格外（チート）。

「な、なあセツ。この、あからさまに常人じゃなさそうな男は一体……」

「ああ、コイツは「説明しよう！」……ああはいはい」

この説明馬鹿が……。

「と、思ったけど。あんまり長々説明もアレだしね。まあ、セツたちの世界の神様みたいなものだと思ってくれればいいよ」

「……珍しいな。お前が解説省くなんて」

「徒（いたずら）にセツたちの出番を奪うつもりもないしね。それと、さっきの話だけど。早速実装しておいたから」

「は？　さっきの？」

「ほら、ご褒美とか、地獄とかの素敵アイデアだよ」

「ご褒美はともかく、地獄は素敵アイデアじゃないだろ……」

「前から思っていたんだよね。セツのこれには、リスクもリターンもない。勝っても負けても結果は一緒。それじゃあ、盛り上がりに欠けると言うものだ」

どうでもいいところに拘るな。

「というわけで、負けたら地獄ね」

「……別にいいけど、どうするつもりだ？」

「僕がさだめの夜這いを全力でサポート」

「おっしゃあ勝つぞぜってー勝つぞ負けらんねえなぁおい！」

「ど、どうしたセツいきなり……？」

「負けちゃダメだ負けちゃダメだ負けちゃダメだ負けちゃダメだ負けちゃダメだ負けちゃダメだ負けちゃダメだ負けちゃダメだ負けち

ゃダメだ負けちゃダメだブツブツブツ……」
「なんか、急に追いつめられてるけど……大丈夫なのかな？」
わかっていない。コイツがさだめの夜這いを全力サポートなんてしたら、１００％大人の階段を登ることに……実妹相手はまずかろう。今更感があるが。
「……さって。それじゃ、そろそろ始めるとしますか」
いつまでも膝抱えて震えてるわけにもいかない。気を取り直してデュエルだな。
「え？　あ、ああそうだな。今回はよろしく頼むぜ！」
「ああ。非常に申し訳ないが、今少々わけありでな。万全のデッキと言うわけにもいかないが、そこは勘弁してくれ」
……というか、俺は万全じゃないデッキ使って勝たなくちゃさだめに……怨むぞ。希望。
「楽しいデュエルにしような！」
「……そうだな。やっぱり、それが一番だな」
一瞬、八雲が十代に被って見えた。……ああ。そうだ。デュエルは楽しむもんだよな。
「「デュエル！！」」
「先攻は譲る。一応、先輩だしな」
「そうか？　ありがたく受け取らせてもらうけど、後悔するなよ？俺のターン、ドロー！」
さて……八雲のデッキはどうなっているか……。
「俺は手札から魔法カード『Ｅ－エマージェンシー・コール』を使って、デッキから『Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン』を手札に加える！」
「エアーマン！？　まさか、漫画版ＨＥＲＯか！」
そう来るとは思わなかった。そうか。なら……。
「知っているなら話は早いぜ！　俺は『Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン』を攻撃表示で召喚！　エアーマンの効果で、デッキから『Ｅ・ＨＥＲＯオーシャン』を手札に加える！」
……間違いないな。漫画版のＨＥＲＯ。なら、属性的には光・風・

地・水を出せば危険になる……他はともかく、光だけは俺のデッキじゃ避けられない。シャイニングについては覚悟しておくか。
「俺はカードを一枚セットし、ターンエンドだ！」
「俺のターン、ドロー！」
……さて。どうするか。
「俺は『切り札の騎士―キング』を攻撃表示で召喚。更に、手札から装備カード『アルカナソード　ダイヤ』をキングに装備する」
「切り札の騎士？　って、それ『キングス・ナイト』じゃ……まさか、オリジナルカード！？」
「ま、そんなところだ。ダイヤを装備したキングの攻撃力は３００ポイントアップ。攻撃力は１９００だ」
「エアーマンを上回ったか……」
「バトル。『切り札の騎士―キング』で『Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン』を攻撃！　『ジュエル・フラッシュ・ソード』！」
「ぐっ！」
八雲ＬＰ３９００
「だがこの瞬間、トラップ起動！『ヒーロー・シグナル』！　デッキから『Ｅ・ＨＥＲＯフォレストマン』を守備表示で特殊召喚するぜ！」
シグナルからのフォレストマンか。常套手段と言えばそれまでだが、それは即ち有用性が高いのと同義だ。次のターンに融合されることは覚悟しておくか。
「更に、ダイヤの特殊効果起動。装備モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、デッキからカードを一枚ドローする」
コイツは……。
「……俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」
「俺のターン、ドロー！　俺はフォレストマンの効果で、デッキから『融合』のカードを手札に加えるぜ！　そして『融合』！」
来たか。現在わかっている八雲の手札で融合可能なモンスターは……アブソルートとガイア、ジ・アースの三体か。俺のキングも含

めるなら、シャイニングも可能性ありだな。ホントに、融合素材の縛りが緩くて困る。
「手札の『Ｅ・ＨＥＲＯレディ・オブ・ファイア』と『Ｅ・ＨＥＲＯオーシャン』を融合！」
……アブソルートか！
「行くぜ！『Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺｅｒｏ』を攻撃表示で融合召喚！」
いきなりか……！
「まだだぜ！　俺は更に、魔法カード『ミラクル・フュージョン』を発動！　墓地のオーシャンと、フィールドのフォレストマンを融合し、現れろ！　最強のＨＥＲＯ！『Ｅ・ＨＥＲＯジ・アース』！」
これは……ワンキルコンボじゃないか！
「悪いが一気に決めさせてもらうぜ！　ジ・アースの効果でアブソルートをリリースし、攻撃力をアップする！」
っさせるか！
「カウンタートラップ『天罰』！　手札の『冥幼竜ヴァーミリオン』を墓地に送り、ジ・アースの効果を無効にし、破壊する！」
『きゅー！』
「なんだって！？」
「ジ・アースの効果はコスト……よってアブソルートも墓地送りだ！」
「くっ……けど、アブソルートの効果は起動するぜ！　フィールド上から離れた時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！」
「ぐっ……キング！」
『ぬぅ……こりゃあたまらんわい！』
宝石剣ダイヤは戦闘で破壊されないと効果が使えない。氷の槍によって貫かれたキングはそのまま破壊される。
「まだだ！　まだ俺はこのターン通常召喚を行っていない！」
「っ！」
まだいたのか！

「俺は『E・HERОザ・ヒート』を攻撃表示で召喚！　バトル！　ヒートでプレイヤーにダイレクトアタック！『ヒート・ナックル』！」

「ぐあぁっ！？」

セツLP2200

く、初っ端から痛いダメージだ。だが、ワンキルを防いだだけマシか。

「俺は永続魔法『悪夢の蜃気楼』を発動し、カードを一枚セット。ターンエンドだ」

『悪夢の蜃気楼』……ってことは、もう一枚のセットカードはまず間違いなくアレだな……。

「俺のターン、ドロー！」

「スタンバイフェイズに、俺はカードを四枚ドローするぜ！」

「……俺はスタンバイフェイズに、カウンタートラップのコストとした『冥幼竜ヴァーミリオン』を手札に戻す。戻って来い。ミリー」

『きゅ～！』

「そいつがセツの相棒か？」

「まあ、そんなところだ。ミリーだけじゃないけどな。お前にもいるんだろう？」

「そいつは、後のお楽しみだぜ」

「だろうな。俺は魔法カード『強欲な壺』でカードを二枚ドロー。更に『早すぎた埋葬』を使う。ライフを800ポイント支払って、墓地からキングを特殊召喚！」

セツLP1400

「クィーンもいないのにキングを？　一体なにを……」

「……確かに、クィーンはいない。だが、切り札の騎士はまだいるぞ！　俺は『切り札の騎士―キング』をリリースし、『切り札の騎士団長―エース』を攻撃表示で召喚する！」

『相手は、別次元の者か。ならば、手を貸すのに否やはないな』

「レベル7をリリース一体で！？」

外野で奏が驚いているが、そちらは希望に任せる。折角だからお得意の解説しておけ。
「エースは切り札の騎士をリリースする場合、リリースを軽減する召喚ルール効果を持っているんだ。その代わり、攻撃力は低めだね」
「切り札の騎士……それがセツのデッキか」
「まあな。俺はエースで、『Ｅ・ＨＥＲＯザ・ヒート』に攻撃！『リッター・ブリッツ』！」
『瞬光の剣……その身に受けよ！　ぜえええいっ！』
「ぐっ！？　ヒート！」
八雲ＬＰ３７００
「俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」
「エンドフェイズにリバースカードオープン！『非常食』！『悪夢の蜃気楼』を破壊してライフを１０００ポイント回復する！」
八雲ＬＰ４７００
ライフ的には、大きく差をつけられたな。どうするか……。
「俺のターン、ドロー！　俺も手札から装備魔法『早すぎた埋葬』を発動！　ライフを８００支払って、墓地からエアーマンを蘇生！　効果発動！」
八雲ＬＰ３９００
「俺はデッキから『Ｅ・ＨＥＲＯフラッシュ』を手札に加え、守備表示で召喚する！　カードを二枚セットしてターンエンドだ」
フラッシュか……効果は確かサルベージ。八雲の墓地には融合体も含めて四種類。条件は満たしているな。
「俺のターン、ドロー！　俺は『切り札の騎士―テンス』を守備表示で召喚。エースでエアーマンを攻撃する！『リッター・ブリッツ』！」
『切り刻む！　せぃやぁっ！』
「く……！」
八雲ＬＰ３７００
「更に、テンスの効果！　切り札の騎士と名の付くモンスターが戦

闘ダメージを与えた時、墓地に存在する切り札の騎士を一体、手札に戻す！　キング！」

『やーれやれ。年寄り遣いが荒いわい』

『……文句を言うな。まだ隠居するような歳でもあるまい』

「俺はターンエンドだ」

「エンドフェイズに速攻魔法『異次元からの埋葬』発動！　除外されているオーシャンとフォレストマンを墓地に戻す！」

　このタイミングで戻してきた？　また『ミラクル・フュージョン』か？　それとも……。

「俺のターン、ドロー！　スタンバイフェイズにリバースカード発動！『リビングデットの呼び声』！　墓地のオーシャンを呼び戻し、効果発動！　墓地のエアーマンを手札に戻す！」

「……流石に、使い回すなぁ」

　そういうことか、と納得する。オーシャンは、場に維持さえできればエアーマンと併せて抜群のカード・アドバンテージを得られる。その恩恵はハンド・アドバンテージに留まらず、エアーマンの効果や融合まで含めればあらゆるアドバンテージに直結する。

「それは、困るな」

　俺はオーシャンをチラリ、と見る。とはいえ、相手はＨＥＲＯ。しかも攻撃力１５００の戦士族。となれば、サポートや蘇生、サーチには困らない。下手な除去に意味はない。

「さて……どうするか」

「俺は手札に戻したエアーマンを召喚！　効果により、デッキからもう一枚の『Ｅ・ＨＥＲＯオーシャン』を手札に加える！」

　来たか。と俺は心の中で笑みを浮かべる。

「更に魔法カード『融合回収』！　墓地の『融合』と『Ｅ・ＨＥＲＯフォレストマン』を手札に戻し、魔法カード『Ｒ－ライトジャスティス』を発動する！」

　ああ。そうだろうな。そう来ると……

「わかっていたぞ。カウンタートラップ『アヌビスの裁き』！　俺

の魔法・罠を破壊する魔法カードの発動と効果を無効にし、破壊する！」
「なにっ！？」
「俺は手札の『冥幼竜ヴァーミリオン』を墓地に捨て、『Ｒ－ライトジャスティス』を無効にする！」
「くっ！？」
「そして『アヌビスの裁き』のもう一つの効果、相手フィールドのモンスター一体を破壊し、その攻撃力分のダメージを与える！　俺が選択するのは『Ｅ・ＨＥＲＯフラッシュ』！」
「フラッシュ？」
「ソイツ以外は、戦闘で破壊した方が都合良さそうだったからな」
「なるほどな……」
そうは言ったが、本当の狙いは別にある。
「フラッシュの攻撃力、１１００のダメージを受けてもらうぞ」
「ぐ……」
八雲ＬＰ２６００
「まだ終わらないぞ。『切り札の騎士団長―エース』の効果。一ターンに一度、手札が墓地に送られた時、デッキからカードを一枚ドローする」
「手札補充か……やるな。俺は、手札のフォレストマンとエアーマンを融合！　来い！『Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』！」
フィールドに凄まじい風が巻き起こり、その竜巻を従えるようにして風のＨＥＲＯが現れる。威風堂々としたその立ち姿は、正にヒーローと言った風情だ。
「Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯは、召喚された時相手のモンスターの攻守を半分にする！『タウン・バースト』！」
強烈な下降気流が、エースやテンスを押し潰さんと迫る。
「だが、悪いがそれも、想定済みだ！　カウンタートラップ『ｏｖｅｒｗｈｅｌｍ』！　アドバンス召喚されたレベル７以上のモンス

ターが存在する時、モンスター効果か罠を無効化し、破壊する！
エース！」
『任せろ！』
エースが巻き起こる風の壁を突き破り、そのままＧｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯを貫く。
「うわっ！？」
もちろん戦闘ではないのでダメージは発生しないが、八雲の眼前まで剣が迫る光景は中々迫力があるだろう。
「くっそ……まさかＧｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯまで対処されるとは……」
「失敗したな。素直にオーシャンを素材にしてアブソルートを出しておけば、お前の勝ちだった」
そして、俺が真っ先にフラッシュを片付けたのも、シャイニングを出されることを警戒して、だ。
「やり難いぜ。そのパーミッションデッキは……」
「だろうな。正直、やってるこっちはいいが、相手からすれば腹立たしいことこの上ないデッキかもしれん」
相手のデッキの可能性を、次々に潰す。力を発揮する前に倒す。それがパーミッション。正直、これとのデュエルで早々楽しめるとは思えない。が……。
「いや、楽しいぜ。どうやったらその壁を超えることができるのか。それを考えたらすっげーワクワクするからな！」
「……ふう」
苦笑した。やっぱり俺は、主人公向きじゃないな。八雲の方が、圧倒的に主人公向きだ。が……だからと言って容赦はしないが。
「俺はターンエンドだ。まだまだ、見せてやるぜ！　俺のデッキをな！」
「……わかった。なら俺も俺らしく……その可能性、全部潰して見せようか」
俺お得意の、パーミッションでな。

「俺のターン、ドロー！」
勝負はこれからだ。八雲！

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者　前編？」（後書き）

こんにちは。

書いていて改めて思いましたが、セツのデッキって絶対主人公のデッキじゃねえ……。相手の切り札が出てくるのを妨害するとか、主人公のやるこっちゃねえ。セツのスタイルが出鼻を挫くタイプなので仕方ないと言えばしかたないんですが。

後編は、なるべく早くアップします。八割方出来ているので、今日中にアップもできるかもしれません。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者　後編？」（前書き）

どうも、自重しないことで有名な作家のタマゴ、悠です。
意味不明な挨拶はさておき、さっさと後編アップします。何しろ前編作ってるときに、あ、長すぎるわ。とか思って分けた奴なので、始めっから結構出来ていたという使用。だからと言って前編アップから三時間で挙げるのもどうかと思いますが。
とにかく、八雲君とのデュエルもクライマックス。果たして結末はどうなるのか、アルカナクロス、精霊と転生者編　後半、どうぞです。

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者　後編？」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者　後編？」

「まだまだ、見せてやるぜ！　俺のデッキをな！」
「……わかった。なら俺も俺らしく……その可能性、全部潰して見せようか」
わざと、不敵に笑ってみる。すると八雲も同じように笑みを浮かべた。
「やれるもんならやってみろ！」
「やってやるさ。俺のターン、ドロー！　スタンバイフェイズに、コストとなった『冥幼竜ヴァーミリオン』は手札に戻ってくる」
『かうっ！』
「疑似『キラー・スネーク』みたいだな……厄介な」
「俺は『切り札の騎士―キング』を攻撃表示で召喚。バトルフェイズ！　キングでオーシャンを攻撃！」
「ぐっ！」
八雲ＬＰ２５００
「更に、エースでプレイヤーにダイレクトアタックだ！『リッター・ブリッツ』！」
「ぐあぁっ！」
八雲ＬＰ５００
「ターンエンドだ」

万全。そう、今の状況は、限りなく万全に近い。だが、八雲が真に力あるデュエリストなら……まだ、油断は出来ない。

「八雲くん！　頑張って！」

『八雲！　がんばるですぅ！』

八雲くんの繰り出すモンスターは、全て相手のセツさんに妨害されて力を発揮できないでいる。あれだけ多種多様な八雲くんのＨＥＲＯをああも的確に対処するなんて……。

「……それほど不思議なことじゃないな」

「え？」

聞こえてきた声に反応して隣を振り向く。そこには、微笑みを浮かべて二人のデュエルを観察していた希望さん。

「八雲のＨＥＲＯは、確かに様々な効果を秘めている。その全てに対応するのは難しそうに思える。が……」

希望さんは指を四本立てて見せる。

「結局のところ、デュエルは四つの要素で成り立っている。何かわかるかい？」

「え、えっと、モンスター・魔法・罠……後は……」

「戦闘、だ。より正確に言うならば、モンスター効果・魔法効果・罠効果・バトル。デュエルで行われるものは結局この四つ。そして、十代もそうだが、ＨＥＲＯ使いならば基本スタイルは共通している」

「融合……」

「そ。基本的に、ＨＥＲＯ使いの手は融合し、強力な効果で場を制圧、一気に畳みかけると言ったものだ。であれば、対処法は見えてくるだろう？」

「モンスター効果封じ……」

それは実際、私もやろうとした。その時は、結局『天罰』を読まれて負けちゃったけど。

「それもあるけどね。セツには八雲の使うＨＥＲＯたちの情報がある。どのような素材でどのような効果を持つ融合ＨＥＲＯが出てくるのかを知っているセツは、その情報を上手く利用している」

例えばさっきの場面。と希望さんは指を立てて説明する。

「八雲のフィールドにはエアーマン、オーシャン、フラッシュの三体。この時点で八雲は三種類のＨＥＲＯを呼べる。『融合回収』で手札には『融合』とフォレストマン。これで、呼べる融合体は五体。主だった八雲の主力は全て召喚できるようになったね？」

「う、うん……」

「そしてあのライトジャスティス。あれを防いだセツは、真っ先にフラッシュを消しにかかった。何故か」

「それは、フラッシュが戦闘破壊をトリガーに効果を発動するタイプだったから？」

「それも、もちろんあるだろう。しかし、セツの狙いはどちらかと言うとシャイニングを防ぐため、というのが大きかっただろう」

「シャイニングを？」

「キミも経験があると思うが、シャイニングの攻撃力上昇効果は『天罰』などでは防げない。セツの伏せカードはまさしくその『天罰』と同じように、モンスター効果を無効にするタイプ。なら、それで防ぐことのできないシャイニングは鬼門。同様に、効果を使わなければ問題ないジ・アースやアブソルートでも、セツは負けていた」

でも現実には、八雲くんはＧｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯを出して効果を無効にされ、ピンチに陥った。

「……序盤の布石」

「え？」

「デュエルの序盤に、セツはジ・アースやアブソルートを捌き、無力化して見せた。あれが布石。相手の無意識に、“その二体は通用しない”と刷り込ませるためのね。もちろん、それだって確実に通用するわけじゃないし、もしそれらのモンスターしか融合できないなら何の意味もなかっただろう」

なまじ、ＨＥＲＯには融合の可能性が多くあるからこそ、八雲くんは選んでしまった。まだ使っていないＨＥＲＯを。
「それで……」
「そして、残る二体。Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯとガイアの効果は強制効果。『ｏｖｅｒｗｈｅｌｍ』で無力化が可能なモンスター。まんまとかかった」
「全部、計算ずく……？」
「……だと格好いいけど、ある程度は、運だね」
おどけた様にそんなことを言う希望さん。でも、私にはその冗談交じりの言葉が冗談には聞こえなかった。
「ま、見ているといい。セツのデュエルを。君たちにも、いい経験になる筈だ。変わったタイプのデュエリストだから。セツは」
「……」
外から見ていれば尚わかる。あの人は、強い。だから私に今できること。
「頑張って！　八雲くん！」
応援しよう。少しでも力になるように！

「頑張って！　八雲くん！」
「任せろ！　俺のターン、ドロー！」
八雲の後ろから聞こえてきた声援に、八雲は更にやる気をみなぎらせたようだった。……いいなぁ。応援アリって。しかも美少女の。
「がんばれ～セツ」
「お前はいい！」
この差はなんだ！　美人は美人でも、男の声援かよ！
「俺はモンスターを一体守備表示でセット。カードを一枚セットしてターンエンドだ！」
……まだ、その時じゃないらしい。

「……行くぞ！　俺のターン、ドロー！　バトルだ！」
「トラップ発動！『威嚇する咆哮』！　このターン攻撃宣言は行えない！」
「……ターンエンド」
……あの守備モンスターは間違いなくオーシャン。とすれば、今の『威嚇する咆哮』はドローしたカードか。やっぱり、間違いない！
「俺のターン、ドロー！」
八雲には運がある。十代たちと同じ天性のドロー力、ディスティニードローが。ならば……。
「俺はモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンド！」
「守りに入ったか。俺のターン、ドロー！」
……出せるモンスターはいない。元々モンスター数が少なめ、と言うこともあるが、間違いない。確信した。
（今、“流れ”は八雲にある）
ハンド・アドバンテージ、ボード・アドバンテージ、ライフ・アドバンテージ、どれも俺が勝っている。八雲が勝っているのは精々が墓地アドバンテージくらいのもの。だが、それでも尚攻めきれない。なら、流れは八雲だ。
「……俺はキングで左、エースで右のモンスターに攻撃する！」
キングが切り裂いたのはやはりオーシャン。そして、エースが切り裂いたのは……。
「『メタモルポット』の効果発動！　お互いに手札を全て捨て、デッキからカードを五枚ドロー！」
「っ！」
やはり！　必ず手札補充の手段があると思っていた。間違いない……このままなら、
「負けるな。このデュエル」
だが、もちろん座して負けを待つつもりはない。幸いこちらの方が有利だ。
「……俺はエースの効果を使用。手札を捨てたので、デッキからカ

ードを一枚ドローする。本来なら、八雲も捨てたからドローするんだが、一ターンに一度しか使えないからな。ターンプレイヤーの優先権行使で、俺が引かせてもらう」

これで、手札は六枚。八雲も次のドローで六枚だ。まだいくらでも、逆転の手は残っている。しかも、俺のライフもさほど多くないのだから。

「俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

（このターンだ）

このターンを、何としても乗り切る。

「……そして、俺が勝つ！」

「俺だって、負けられないんだ！　行くぞ！　マジックカード『戦士の生還』発動！　墓地の『Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン』を手札に戻す！　召喚！」

「またそれか！」

「コイツが俺のエンジンなんでね。エアーマンの効果で、デッキから『Ｅ・ＨＥＲＯフォレストマン』を手札に加える」

……確かに、エアーマンの効果は文句の付け様がないくらい強力だ。こうも使い回されると、流石に認めざるを得ないな。

「さあ、行くぜ！『融合』発動！　手札の『Ｅ・ＨＥＲＯフォレストマン』と同じく手札の『Ｅ・ＨＥＲＯクノスペ』を融合！　大地の力を持つ二体のＨＥＲＯを融合し、新たなＨＥＲＯを呼ぶ！　来い！『Ｅ・ＨＥＲＯガイア』！」

摩天楼に、黒金の光沢を放つ大地のヒーローが堂々と仁王立ちする。

「ガイアの効果発動！『切り札の騎士団長―エース』の攻撃力を半分にし、その分だけガイアの攻撃力をアップする！」

『ぐっ……力が、吸われる……？』

「エース！」

「これで、終わりだ！　ガイアで『切り札の騎士団長―エース』を

攻撃！『コンチネンタル・ハンマー』！」
『くっ……』
弱り、剣を支えに膝を着くエースに、ガイアの鉄塊のような腕が振り下ろされる。エースはそれを苦々しげに見つめる。
「トラップカード『聖なるバリア―ミラーフォース―』！　エアーマン共々、ガイアを倒すッ！」
極普遍的なトラップだが、伏せ除去もせず、リバースカードもないならこれが徹る筈！
「悪いな、セツ。そういうカードを待ってたぜ！　俺は手札から『ホシクリボー』の効果を発動する！」
『クリー！』
「何っ！？」
八雲の手札から、白い輝きに包まれた龍翼のクリボーが飛び立った。
「これが俺の相棒さ。『ホシクリボー』は、手札から墓地に捨てることでモンスターを破壊する効果を無効にし、破壊する！」
『クリクリ～！』
星屑の翼が大きく羽ばたき、ミラーフォースの輝きを奪って行く。エースを守ろうとしていたそのバリアは、結局ガイアの腕で粉砕された。
くそ……向こうにもきっと俺の知らないカードがあると思ってはいたが……一発使いきりのスターダストか……なるほど。強力だ。
「そのままエースに攻撃だ！　ガイア！」
『させん！』
今にも激突せんという両者の間に、テンスが割って入った。
「『切り札の騎士―テンス』の効果だ！　このカードが表側表示で存在する限り、切り札の騎士と名の付いたモンスターへの攻撃を代わりに受ける！」
『俺は守護騎士っ！　仲間を守ることこそが我が務めだ！』
『……すまぬ。テンス』

「テンスは守備表示。よってダメージは通らない」
「止められた……！　なら、エアーマンでエースを攻撃！」
『ぐっ……おのれ、ここまでか』
「くそ……エース！」
セツＬＰ６００
「俺はこれでターンエンドだ！」
「俺のターン、ドロー！」
しかし、想像以上に状況が悪い……これは“切り札”がどうとか言ってられないか……？　いや、まだ行ける。
「俺はカードを二枚セット。キングを守備表示に変更してターンエンドだ」
「よし。俺のターン、ドロー！」
八雲のガイアは、召喚ターンを守りきれば２２００のバニラ同然。適当な上級モンスターでも返り討ちに出来るが……。
「俺のデッキだと、そう簡単にはいかない数値だな」
アルカナを欠く今の俺には決定打と言えるアタッカーがほとんどいない。エースが倒されたこともあり、今はかなり分が悪い。
「俺は手札から『Ｅ・ＨＥＲＯボルテック』を守備表示で召喚！更に手札から魔法カード『Ｈ－ヒートハート』を使う！　ガイアの攻撃力を５００ポイントアップ！　そして、ガイアは貫通効果を得る！　バトル！」
「トラップ発動！『ガード・ブロック』！　戦闘ダメージを無効にし、カードを一枚ドローする！」
「だが、キングは倒す！」
「くっ……」
『むぅ……すまぬ。力になれんようじゃ』
「いや、キング。お前の犠牲は無駄にはならない！　リバースカード発動！『アルカナソード　クローバー』！　俺の場の切り札の騎士が破壊され、墓地に送られた時に発動！　墓地から破壊された切り札の騎士とは別の騎士を蘇生させる！　戻って来い、エース！」

『今度は、さっきの様にはいかん！』
「クローバーは、発動後攻撃力７００ポイントアップの装備カードとなり、蘇生したモンスターに装備する」
エースの攻撃力が２７００に。これなら……。
「くっ……俺はカードを一枚セット。エアーマンを守備表示に変更してターンエンドだ」
「俺のターン、ドロー！　リバースカードオープン『リビングデットの呼び声』！　墓地から『切り札の騎士―ジャック』を攻撃表示で蘇生召喚！」
「ジャック！？」
「ああ『メタモルポット』の時に、ちょいとな。バトルフェイズ！」
『さあ、行きましょうか。エース』
『団長と呼べ。ジャック』
「まずはエースでガイアに攻撃！『リッター・ブリッツ』！」
『先ほどの礼だ！　たっぷり取っておけ！』
エースの細剣が閃き、ガイアをなます斬りに討ち取る。
「速攻魔法『残留思念』！　墓地のレディ・オブ・ファイアとヒートをゲームから除外し、このターン俺へのダメージを無効化する！」
炎の遺志が八雲を包み、ダメージを弾き返す。
「ちっ……なら、ジャックでエアーマンを攻撃！『ノーブル・ソード』！」
『ここはお任せを。はぁっ！』
ジャックの騎士剣が、エアーマンを真っ二つに薙ぐ。しかし、ダメージは与えられない。
「くっ……」
お互いに、攻めきれない。ライフはもう残りわずか。だというのに、決め手が決め手にならない。
「やっぱすごいな。セツ」
「ん？」
「これだけの数、融合体ヒーローを対処されることなんて滅多にな

いぜ。それが、セツのアカデミアで過ごした一年間の成果か？」
「……ま、そうだな。そういえば、まだ一年と半年くらいしか経ってないんだな。忘れてたよ。そんなこと」
それだけ濃い一年間だったんだろう。だが、それはきっとコイツらもこれから体験する、或いは、今も体験している最中なんだ。
だとすれば。
「やっぱ、負けられないよなぁ……」
先駆者として。これから戦いに巻き込まれて行く奴らに。
「負けられないよな」
もう一度、確かめるように呟く。
「俺のターンは終了だ。来い。後輩」
「ああ！　行くぜ先輩！　ドロー！」
八雲の手札はゼロ。フィールドにはボルテックが一体のみ。恐らく、このドローで決まる。それなら、きっと……。
「……来た！　このカード！　俺は手札から魔法カード『ミラクル・フュージョン』を発動！　フィールドのボルテックと、墓地のフラッシュを融合し……」
やはり、“来た”か。いや、来て“しまった”か！
「ストップだ八雲！　その融合、する必要なし」
「なにっ！？」
「最後の最後、クライマックスに悪いが……俺にはまだ、最初で最後のリバースカードが残っている」
「……そう言えば、最初に伏せてから、結局使っていなかった。てっきり、発動条件が厳しいかブラフの一種かと……」
「そうか……なら、覚えておくといい。切り札は、最後の最後まで取っておくものだと」
「どういう、意味だ？」
わからないか？　なら、教える。
「俺は最初から、お前の“ディスティニードローを待っていた”！」
「何だって！？」

「リバースカード発動！　カウンタートラップ『マジック・ジャマー』！　手札を一枚捨てることで、魔法の発動と効果を無効にし、破壊する！」
「な、しまっ……」
八雲の『ミラクル・フュージョン』は、発動されることなく俺の作りだした魔法陣に囚われ、沈んで行く。そして……。
「そして、これで決まりだ！　八雲！　魔法カードのパーミッションに成功したことにより、俺の手札に眠る真の切り札が目を覚ます！　来い！『冥王竜ヴァンダルギオン』！」
『オオオオオオオオオオオオオオオッ！！』
魔法陣が更に広がり、その中心、地の底から冥王竜が呼び覚まされる……！
「そして、特殊召喚された冥王竜の、一番目の効果！　魔法カードのパーミッションに成功し、このカードが特殊召喚された時、相手ライフに１５００ポイントのダメージを与える！『冥王咆哮』！！」
大きくその口蓋を開けたヴァンダルギオンが冥界の波動と共に凄まじい咆哮を繰り出す。
「俺に、ディスティニードローはもう効かない」
「ぐ……あああああああっ！！」
八雲ＬＰ０

「いったたた……やられた。まさか、ディスティニードローにピンポイントでカウンターブチ当てられるとはな～」
「大丈夫か？」
「ああ。しかし、あれってマジで初めから狙ってたのかよ」
「一応な。お前がＨＥＲＯデッキだとわかった時点で、ラストのビジョンは見えていた」
「マジか……『マジック・ジャマー』なら、他にも使うべき場所あ

ったろうに……」

確かに、他の場所で使っていれば、そのまま勝てただろうと思われる個所もいくつかあった。だが、俺は敢えて最後まで温存した。最後の最後、あの場面でヴァンダルギオンと共に使うために。

「八雲くん、大丈夫？」

「ああ。ごめんな奏。折角応援してくれたのに」

「ううん。それはいいけど……」

「セツが最後まで『マジック・ジャマー』を取っておいたのが、理解できない？」

希望の言葉に、奏はコクリと頷く。

「……他の『神の宣告』や『魔宮の賄賂』みたいな汎用性のある、色んなカードに対応できるカウンタートラップならまだわかるんだけど……」

「そうだ。セツ。お前、最後にディスティニードローとして魔法カードが来るってことを確信してたみたいだった。あれはどういうことだ？」

奏と八雲が立て続けに質問してくる。

「ああそれは、ディスティニードローの特性と、ＨＥＲＯデッキの特色を考えた上で、まず間違いなく劣勢を覆すようなディスティニードローカードは魔法カードしかあり得ない、と思ったからだな」

十代や八雲の操るＥ・ＨＥＲＯは、その特性上キーカードを魔法に頼る。特に、絶体絶命を覆すようなカードとなれば、使えるカードは限られている。

例えば『融合』系。さっきの『ミラクル・フュージョン』をはじめ、『融合誕生』『平行世界融合』『融合回収』などなら、あの状況を挽回出来たかもしれない。

例えばドロー補助。『強欲な壺』はもちろん、『貪欲な壺』も使えたし、『命削りの宝札』や『壺の中の魔術書』なども可能性としてはあった。

そして今挙げたどれもが魔法カード。もちろん手札補充の方法と

してはＨＥＲＯならバブルマンもあったが、あの状況ではどっち道使えないし、その上結局魔法カードに頼らなければ状況打破は出来なかった。

「性質上、ディスティニードローなら罠はない。ＨＥＲＯである以上モンスター効果もない。なら決定だ。あの場面、状況打破できるカードは魔法カード以外になかった」

「な、なるほど……」

「八雲は引きがいい。そりゃもう、流石のドロー力だ。だけど、それを予め想定しておけば、こうやって対策もとれる」

「いないよ。初めからギリギリの状況で今引きしてくると想定して対策する人なんて。普通はね」

希望が苦笑を洩らしつつそんなことを言う。まあ、それはそうなんだけど。

「一応、先輩だしな。これから大変になっていくだろう後輩に、こういうこともあるってことを示しときたかったんだ。引きの強さが全てだと思ったら痛い目見るぞ、ってな」

「ああ。肝に銘じとく。それと、負けちまったけど、楽しいデュエルだったぜ。ありがとうな。セツ！」

「……ああ。こちらこそ。お前みたいなデュエリストの相手なら、またいつでもお願いしたいくらいだ」

「俺もだ。また絶対リベンジしてやるから、待ってろよ」

「ああ。とりあえずは、目先の地獄を乗り越えられるように祈っている」

「……あ」

どうやら忘れていたらしい。顔を青くした八雲を残し、俺も元の世界に帰還した。

「……で、ご褒美ってなんなんだ……ん？　メモか？」

現実に戻ってきた俺は、希望の言っていたご褒美が何なのか心待ちにしていたのだが、特に変わったことは起きない。仕方なくいつものテントに戻ると、そこには一枚のメモ。どうやら希望の残したものらしい。

『誰でサービスカットをするか迷ったけれど、一番セツの貞操が危険にさらされない&反応が面白そうと言うことで、彼女にしてみました。　追伸：ゆっくりしていってね！』

最後のネタはともかく……彼女？

「セツ、戻っているか？」

「……エースか？」

このタイミングでってことは……。

「少し、出てきてくれないか？」

少し緊張気味のエースの声音に首を傾げながら、多分希望の言っていたご褒美はエースのことなのかと考えてテントから出て……思わず絶句した。

「その、わ、我は見ての通り西洋風の顔立ちをしているし、こういった和装は似合わぬかもしれぬが……」

エースが少し赤く染まった頬で目を逸らしている。

「その、少しだけ興味はあったのだ。浴衣、というものに」

その言葉通り、エースが身に纏っているのは瑠璃色ベースに夜空の星々を散りばめた浴衣。短めの髪も綺麗に結われて、いつもと違う雰囲気を醸し出していた。

「それで、希望が用意してくれたらしい浴衣を、奴のメイドに着付けを手伝って貰って着てみたのだが……その、似合うか？」

エースの言葉に、俺はコクコクと首を揺らすのみで答える。それほどまでに似合っていた。銀髪に和装。一見アンバランスだが、夜空を彷彿とさせる瑠璃色の浴衣に、エースの銀髪は驚くほど映えていた。

「そ、そうか。それなら、いい……」

両者、無言。

（これは……正直マズイ雰囲気だ）
……八雲との会話でもあったが、基本俺は和服系がツボだ。ポニテに留まらず、和服美人というのはかなり俺の好みにストライクなわけで……。
（これがっ……これがギャップ萌えかッ……！）
なるほど認めよう。
「滅茶苦茶綺麗だ……」
「っ！　ばっ！？　なにをっ……」
「っ！」
うわしまった動揺のあまりベタベタなミスを……俺としたことが！
「……」
「……」
くっ！　マズイ、なんとかして空気を変えねば！
「ま、まああれだ。和服って胸ない方が似合うらしいし！」
「なっ……！」
これでどうだ。無理矢理にでもケンカに持ち込んでしまえばこっちのもん……あれ？
「そ、そうか……似合っているか……」
「え、あ、ああ……」
あ、あれー？　何故そこでプラスに受け取りますかー？　普通ここは怒る場面では……。こ、こうなったら話を逸らす……というか、強引に話を進めるに限る。希望のことだ。既定のイベント終わらせれば終わるだろう。
「は、花火でも、するか？　折角だし」
「む……そうだな。というか、何故そんなものを持っている？」
「手作り」
「……人間は、花火を手作りするのか？」
よし、とりあえず流れた！
「俺は出来る。あー尺玉は打ち上げに許可いるし……」
「尺玉！？」

「ま、騒がしいのは皆でやるとして……線香花火でいいだろ」
「……手作りか？」
「手作りだが？」
「……妹に頼まれたりしたからか？」
「そうだな。花火みたいっつーから作ってみた」
「……さだめが依存して調子に乗るのも当然だ。何でも買い与える馬鹿親じゃあるまいし」
「あー……」
そこら辺は多少反省してるんだが……。
「ふん。まあいい。お前謹製の花火、他の奴らに先んじて拝ませてもらうぞ」
「おーおー、いくらでもやりな。そこそこ上手く出来てるからさ」
「まったく、底知れない人間だ……」
いつになく穏やかな空気の中、俺たちの間で線香花火がパチパチと小さな音を立てるのだった。

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者　後編？」（後書き）

……最近ヒロイン街道を爆進しているエースです。

希冴姫……やっぱり失敗だったかもしれないぞ……お前、居ない間にＮＴＲ気配濃厚だぞ……。おかしいな。こんな予定では……？

相変わらず、コラボしてもらっているにも拘らず、普通に自分とこの主人公に勝利させる、自重しない作者です。しかも、最初のターンから伏せっぱなしだったヨーとか、読んでるだけじゃ気付かないっての。なんだその叙述トリック。違うか。

過去に類を見ないほどに長いデュエルでした。半端ない。鉄壁のライフスキル強え。ディスティニードローに関しては、書いたとおり。基本的にディスティニードローで引くのは魔法カードです。モンスターってのもあり得ますが。罠ってこたあんまりないでしょう。ちなみに、あんなこと言ってますが、このデュエル中に出てきたモンスターの中で、一体だけあの状況で引けば勝ちだった奴がいたりします。

ではとりあえず謝辞を。コラボ企画に賛同頂いた野良猫さん。ありがとうございました。そして、実に一ヶ月もの期間お待たせしてしまい、本当に申し訳ない。

八雲君たちの活躍は、野良猫さんの『遊戯王ＧＸ精霊と転生者』で楽しめます。お気に入りから飛べますので是非。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールドＸ２　前編？」（前書き）

本当は一昨日、八月六日にアップするはずだったコラボのラスト作品をアップです。というのも、うん。いつものことですが、長くなりすぎたので書き切れませんでした。とりあえず前編。まだデュエルにすら入っていません。アルカナでは初となるバトルもの（弱）。

今回はコラボ第一弾でもお世話になったカイナさんの「遊戯王Ｘ」より、エルフィＶＳアテナになります、が。前述の通り、まだデュエルには入っていないので、そこら辺を留意してお楽しみください。

特別編「？アルカナクロスワールドＸ２　前編？」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「？アルカナクロスＸ２　前編？」

時空の歪。

まあ今更説明するまでもないが、ユーキちゃん――終焉の闇――の影響で世界に現れる綻びのようなもので、別世界に繋がっている。消す方法は、繋がった別世界の存在とデュエルすることで、繋がりを断ち切るしかない。

何故今そんな話をするかと言えば、取り込まれたからだ。アテナが。しかも、説明するより先に。何故そうなったか、といえば非常にくだらないことではあるんだが……。

「くだらなくないよお兄ちゃん。これは、お兄ちゃんを奪い合う泥沼の聖戦なんだから！」

「泥沼の聖戦ってなんだよ」

まあ、そういうことだ。さだめと俺を取り合っていたアテナ……うわ、自分で説明すると滅茶苦茶嫌な奴だなこれ……ともかく、最近すごい勢いでパワーアップしたさだめが、そのパワーを持って俺を独占しようとしたところ、アテナが精霊の力を使って引き剥がそうとして……まあ、実際に見てもらった方が早いか。じゃ、回想ドン。

「さだめさん！　セツから離れてください！」
「イ・ヤ。パワーアップしたさだめなら、お兄ちゃんを無理矢理犯すことも容易！　さだめの時代キタコレ！」
「させません！　さだめさんがその気なら、私だって……」
アテナの背中から天使の翼が生え、服装が変わる。いつも思うが、折角服装が変わるならもうちょっとサービスっぽいシーンがあってもいいと思う。なんのタイムラグもなく一瞬で着替え終了とか、風情がないにも程がある。
「魔法少女ものの基本をわかってないな……」
実際の所、アテナは魔法少女ではなく天使なんだが。
「は・な・れ・て・く・だ・さ・い！」
そのアテナが人外の膂力でもってさだめを引き剥がす。意外にもあっさり引き剥がされたさだめは、すぐにアテナを振り払い、構えをとる。
「ふふん、やる？　今のさだめ、強いよ～？」
「……いいでしょう。力に溺れ、破滅しないよう……私が力の使い方を教えてあげます！」
「え、なにこのバトル漫画のノリ」
俺が戸惑っている間に、二人の間に不穏な空気が流れる。
「アテナ……わかってる？　今のさだめ、理不尽に強いよ？　かつての欠片程度の力しかないアテナに勝てると思ってる？」
「……舐めないでください。経験が違います」
一触即発、という二人。そこに……、
「やあセツ。どうやらまた歪が……」
「先手必勝です！　天上の煌めきよ！」
「無駄無駄ぁっ！　アルト〇ーゲル！」
アテナの放った光をさだめが衝撃波で相殺する。つか、お前それ見た目そのまんまワルクの技じゃねえか。オーラは黒いが。
「遅い！　カルス〇イェーガー！」

「またネタ技……！　きゃあ！？」
目にも止まらぬ高速移動でアテナを掴み、そのまま投げ飛ばす。
その先には歪が……！
「アテナっ！？」
「へっ？」
アテナは、あっさりと時空の歪の中に消えてしまった。
「あ、アテナぁぁぁっ？」
「あっちゃー……さだめ、やり過ぎちゃった？」
いや、さだめだってわざと放りこんだわけでもないだろう。とりあえず言えることは……。
「希望、お前間が悪い」
「いいんじゃないかな？　どちらにせよ、アテナには向こうに行って貰うつもりだったし、行った先の世界は、セツも前行ったことある世界だし」
「そうなのか？」
「まあ、向こうでちょっとした戦闘中みたいだけど、アテナなら大丈夫だろう」
戦闘中……というと、もしかしてレオのいた世界だろうか？　なら、大丈夫かもしれない。
「……仕方ない。さだめ、アテナが帰ってきたらちゃんと謝れよ？」
「は～い。わかったよ」
……というか、仮にも上級天使だったアテナをネタ混じりに撃退とか……どんだけ人間離れしてんだコイツは……。
俺は呆れたようにさだめを見て……その視線の先に、あるモノを見つけた。
「……おい、希望」
「……何かな？　セツ」
そのあるモノに、希望も気が付いたのか、苦笑しつつ答える。
「確か、あの歪みを消すには、向こうで誰かとデュエルしなくちゃいけないんだよな？」

「そうだね」
「……で、だ」
「うん」
「俺には、アレがどう見てもアテナのデュエルディスクとデッキにしか見えないんだが、そこんとこどう思う？」
「……なんとかなるんじゃないかな？　多分、恐らく、きっと、めいびー」
「もし戻って来なかったら、お前が迎えに行ってくれよ？」
「ふぅ……仕方ないな。アテナも間が悪いというか……」
「近頃アテナ、どっか抜けてるというか、残念っ娘キャラになって来てるから……」
三人で、はぁ……と溜息を吐くのだった。

「へっ？」
さだめさんに投げられ、セツの焦ったような声を最後に、私の周りの景色が変わってしまいました。
「えっと……」
状況が掴めません。投げ飛ばされた直後に、何か抵抗感というか、違和感を感じましたが……もしかして、転移門のようなものだったんでしょうか？
見回してみたところ、魔法都市エンディミオンに程近い街道の様です。遠くに王城の尖塔が見えます。それに、あれは……
ドォン……
「！　戦闘ですか！？」
エンディミオンの外壁の外側で、黒い点のようなものが多数舞っているのが幽かに見えます。こちら側からだと反対方向ですか……
とにかく、行ってみましょう！
翼を羽ばたかせ、空に。この空を飛ぶ感覚も懐かしいです。精霊

だった頃は、それこそ毎日飛んでいたんですけど……。
戦況は……どうやら、エンディミオン側が押されていますね。相手の数がそれほど多くなく、エンディミオン側の精霊たちが各自バラバラに動いているところを見るに……。
「奇襲、ですか……」
隠密行動と機動力に長けた悪魔族による奇襲。今はなんとか水際で食い止めているようですが、向こうにも援軍があるはずですし、このままだとマズそうですね……。
「見慣れぬ天使族め！　喰らえ！」
先を急ぐ私に、『ガーゴイル』らしき悪魔族がその爪を振りおろしてきました。
「……邪魔です。輪廻昇天」
爪をかわして手を悪魔族の身体に当てる。それだけで、勝負は決しました。
「な、に……？」
悪魔族の身体がボロボロと崩れていきます。光の粒子となり、その粒が私の前で拳大の光球となります。
「ふう……久しぶりでしたけど……失敗せずに済んで良かったです」
流石に、さだめさん相手に使うわけにもいきませんしね。文字通り一撃必殺ですし。私の攻撃って、手加減ができませんし……。
「と、今はそれよりも……」
天使族の皆さんに加勢しないと……。
「きゃああっ！？」
「危ないエルフィ！」
「！　あれは……」
声の聞こえた方を振り向くと、人間の女の子（と言っても私より年上ですが）と、『勝利の導き手フレイヤ』の姿が。でも、女の子の背後から放たれた『スナイプ・ストーカー』の銃弾を、フレイヤが庇って倒れてしまいました。
「ふ、フレイヤ！？」

「う……」
「大丈夫ですか!?」
とりあえず、次弾を装填していた『スナイプ・ストーカー』を仕留めてから、フレイヤさんたちの所に向かいます。
「わ、私は大丈夫。でも、フレイヤが……」
見ると、フレイヤさんは『スナイプ・ストーカー』の一撃が急所に入ったのか、既に虫の息でした。
「……大丈夫です。私に任せてください」
先ほどの『ガーゴイル』から奪い取った命の輝き。それをフレイヤさんに埋め込んで行きます。
「……転生!」
命の光がフレイヤさんを包み込み、満たしていきます。
「……ぅ」
「フレイヤ!」
「ぅ……エルフィ?」
「! 良かった! フレイヤ!」
エルフィと呼ばれた女の子が目を覚ましたフレイヤに抱きつきます。フレイヤさんは少し苦しそうにしながら顔を赤くしています。
「ごめんね。私が油断してたから……」
「平気よ。あんたたち人間と違って、私たちはこうして転生して貰えば生き返ることが出来るんだから……って聞いてる?」
「例え転生出来るとしても、身近な人が死ぬのを見るのは人間としては辛いモノがあるんですよ」
困惑しているフレイヤさんに助け船を出します。そこでフレイヤさんとエルフィさん（仮名）は私に気が付いたようで、二人してこちらに顔を向けてきます。
「あの……ありがとう。フレイヤを助けてくれて」
「……ありがと。ところであんた、見慣れない顔なんだけど……何者? 私たち天使族の軍に、貴女みたいな天使はいなかったと思うんだけど」

「あ、あはは……私もちょっと良く分からないんですけど……とりあえず、お話はこの状況をどうにかしてからにしましょうか」
　状況は、相変わらず良くないです。どんどん何処からか増援が現れる悪魔族の一団に、天使族や数少ない魔法使い族の人たちは押され気味です。
「この急激な敵増援の出現……相手方に召喚士がいますね」
「ええ。或いはパペット・マスターかも。さっきの『スナイプ・ストーカー』、私たち一度倒したから」
「なるほど……そういうことですか」
　だとすると、状況は悪くなるばかりですね。今の状態で出来るかはわからないですけど……やってみましょうか。
「すみません。少し離れていてください。出来れば、術が完成するまでの護衛もお願い出来れば助かります」
「え？　ええそれはいいけれど……どうするの？」
「えと、口で説明するより見てもらった方が……行きます」
　精神を集中し、高めていきます。この術を使ったのはかつての私でも一度きり。それ以降は、精霊界のバランスを崩すとして封印指定にされていた程の禁呪。
「……Ｒｅｎ、Ｂａ、Ｋａ、Ｓｈｅｕｔ、Ｉｂ。我、反魂のスピリチュアの魂名に於いて命ず。黄昏の闇に沈みし者よ、転じて暁よりの輝きとなせ」
　詠唱と共に、私の周囲に浮かぶ五つの水晶が輝きを放って行きます。その様子にただならぬものを感じたのか、周囲に居た悪魔族が私たちを攻撃してきますが、それをエルフィさん（仮名）とフレイヤが撃退していきます。
「させない！　彼女が何をしようとしているのかはわからないけど……とっても暖かい力を感じる！」
「頑張って！　エルフィ！　次、右から来るわよ！」
「了解！」
　フレイヤさんの指示に従って、エルフィさん（仮名）――って、

もういい加減（仮名）は取りましょうか。ぺいっ！――がレイピアの一撃を叩きこんで行きます。人間とは思えないくらい良い動きです。これなら大丈夫そうですね。私は安心して詠唱を続けます。

「……闇は光に、冥は天に、死は生に、狭間にてたゆたう魂魄よ、我が導きに従い希望を宿せ！　力の在り処は、生と死を司る、天空竜の名の下に！　反転呪魂の法、Ｏ・ＳＩ・ＲＩ・Ｓ（オシリス）！！」

五つの珠から、光が迸ります。戦場を切り裂く輝きが、触れた傍から悪魔族を消滅させていきます。

「す、すごい……」

「圧倒的ね……！？　見て！　フレイヤ！」

「！？」

光の粒子となって消滅した悪魔族の魂が、戦場にて斃れた天使族たちに降り注ぐ。光の粒子に触れた天使族たちは、先ほどのフレイヤさんと同じように光に包まれ、蘇っていきます。

「うそ……」

詠唱の終了と共に、戦争を終結に導く。敵だけを滅ぼし、味方を蘇らせる、絶対不可避の転生術。私の初めての戦場で、相手悪魔族を根こそぎ消し去った、終末の一撃。

「な、なんとか……使えました……」

何しろ最後に使ってからウン年（何年かは聞かないでください）と経っている上、そもそも一度しか使っていない、更に言えば人間になって、力が落ちている状態でのこの術は、成功したのが奇跡のようなものでした。

「……尤も、出力は、数十分の一くらいまで落ちていますが」

「あ、あれで……？」

私たちの視界には、突然蘇って目を瞬かせる天使族と、同じくいきなり味方が消滅したことで半ば恐慌状態に陥っている悪魔族。

「ええ。まだ敵が残っていますし。現役なら、本当の意味で根こそぎだったでしょう」

とはいえ、これで大勢は決したでしょう。

「……あ」
クラリ、と視界がぶれます。
「だ、大丈夫!?」
「……すみません。ちょっと、ヤバそうです」
久しぶりにこんな大きな力を使ったので、体が驚いてしまったのでしょう。
「……後は、お願いしますね」
それだけ呟いて、私の意識は落ちて行きました。

「……ふぁ？」
目を覚ますと、最初に目に入ったのは立派な天蓋でした。えと、こういう時、なんて言うんでしたっけ？　確か、セツが言っていたのは……
「えと、知らない天井だ、でしたっけ？」
「……目覚めて第一声が、聞きかじりのネタ台詞かよ」
横から聞こえてきた呆れたような声に目を向けると、そこに居たのは五人の男女。今のツッコミは黒の短髪をした男の人……って、二人いますね。似ていますし、兄弟でしょうか？
「ええっと、目が覚めた時の第一声はこれがメジャーなんだぞってセツが言っていたので……」
「セツ？　あんた、セツの知り合いなのか？」
「ふえ？」
驚いたように尋ねてくる男の人に、私の方が面食らってしまいます。先ほどの戦闘といい、私の知っている精霊界じゃなく、別世界の精霊界かと思ったんですが……どうしてそんなところにセツの知り合いが……。
「……いえ、別に驚くほどのことじゃないですね」
今更セツが何処に知り合いがいても驚くには値しません。人間な

のに自力で精霊界に辿りつける人ですからね。セツって。異世界に旅行していたところで不思議でもなんでもないです。

「セツは、えっと……」

セツとの関係性を説明しようとして、少し迷ってしまいました。なんて言えばいいんでしょう。友達……と言うには関係が少し深すぎる気がしますし、恋人だと断言するのはさだめさんたちのこともあって憚られます。

「……さだめさんなら迷わず恋人って断言してそうですけど」

かといって詳しい事情を会ったばかりの人に説明するのも……。ええい、ままよ！　です！

「こっ、恋人っ！……未満、です……」

あぅ……意気地なしです。いえ、これが一番適当な説明ではあるんですが……どうせなら、恋人って断言してしまいたかったです……。

「……セツの奴、こんな可愛い娘に慕われてるのかよ……羨ましい」

「レオ？」

「いや、何でもない！」

ボソっと何事か呟いた男性に、蒼い髪をポニーテールにした女の人がジト目を向けていました。その女の人が、ゴホンと一つ大げさに咳払いをしてから私に顔を向けてきました。

「……その話は今は置いておきましょう。それよりも、まずはお礼を言っておくわ。私の従妹を助けてくれてありがとう。私はメリオル。貴女の名前を教えてもらえる？」

「あ、はい。私は天音アテナといいます」

私が名乗ると、皆さんが少しヘンな顔をします。

「人間の名前みたいだけど……」

あ、そうでした。まだハネを仕舞ってませんでしたね。

「えと……えい」

服もいつものアカデミアの制服に戻す。セツは、一瞬で戻ってしまうことに風情がない、なんて言っていましたが、一々ハダカにな

るなんて恥ずかしすぎるじゃないですか。……いえその、セツが見たいのなら見せるのは吝かではないと言いますかなんと言いますかごにょごにょ……。

「私、人間なんですよ。ちょっと特殊ですけど」

私がそう告白すると、皆さんは更に驚いたような顔をしました。

「人間！？　あんなすごい術を使えるのに！？」

「あはは、あれはその……なんというか、昔取った杵柄といいますか……」

元精霊で転生しましたーなんてことまで話すのは流石に躊躇われたので、適当に誤魔化すことにしました。

「昔取った杵柄って……さっきも現役がどうのこうの言ってたけど、どう見ても高校生くらいにしか見えないんだけど……」

こ、高校生……？

「あの……私、確かに高等部に通ってますけど……一応、１３歳です……」

「え……」

エルフィさんがマズ……といった顔をして固まってしまいます。

他の人たちも少し驚いたような顔で……って！

何故、何故こうも私は年齢割増で見られるんですか！　そこまで老けて見えますか！

「わ、私は１３歳です！　なんでそんな意外そうな顔で黙り込むんですかぁ！？」

「あ、いや。とても綺麗だったから、同い年くらいかと思ってたよ。ごめんね」

そう言って、メリオルさんと似たような髪をした端正な顔立ちの男の人が頭を下げてきます。とても格好いい人ですが、セツという想い人がいる上、とんでもない美形ということなら希望さんで割と見慣れている（とはいえ、あの人は人間離れし過ぎていて素直に格好いいとは言えないのですが）ので特に気になりません。

「お、すげ。初対面のアルフ相手に赤くならない女子見たのかなり

久々かも」
　確かに、格好いい人ですが、私はセツの方がいいです。多分、好きな人いる女の子なら誰でもそんな感じでしょうが。えと……、
「あ、俺はライ。よろしくな。アテナ」
　名前がわからず、困っていたのが伝わったのでしょう。ライさんが人懐っこそうな笑みを浮かべて自己紹介してくれます。
「で、もう知っているかもしれないけど、私がエルフィ。さっきは本当にありがとう貴女が来なかったら危なかったわ」
「いえそんな……」
「謙遜しないで。本当に危なかったの。メリオル姉さんたちは、別の所で襲撃があって出払っていて、アレ以上の増援は望めない状況だったんだから」
「俺たちの方はここを落とすための囮だったってわけか……流石悪魔族。悪知恵が回る」
「まあまあ……それで、エルフィが見たっていうアテナの魔法……相手だけを消し去って味方を復活させた魔法は、一体なんだったのかな？」
　悔しそうに舌打ちするレオさんを宥めながら、アルフさんが柔和な笑みを浮かべながら聞いて来ます。
「えと、あれは転生術です。相手の魂を味方の魂に転用することで、敵だけを倒しつつ味方を蘇生する、という感じで……」
　相手の魂を奪って使うので、通常の転生術よりも少ないコストで大量に転生を可能にした転生術の極地だと言うことを説明すると、皆さん一様に感心したように頷いていました。
「すごいな……最強じゃないか」
「あはは……ホントは、禁呪なんですけど」
　人間界でいう核兵器みたいなもので、それを使うだけで戦場の常識を一変させてしまうとして、滅多なことでは使わないように言い含められていました。
「……まあ、今はもう人間ですし、精霊の法とか関係ないんですけ

ど」
　許可なしに使えば捕えられて、封印されてしまうんです。三幻魔とかみたいな感じです。
「って、神クラスじゃないか！？」
「そこまでの力はないんですけど……あの術以外は平凡ですし」
　あれだけが浮いているんですよね……元々転生に特化した精霊だったので使えたもので、私以外には使えたものじゃないんですけど。
「それに、天使族の皆さんにしか効かない上、蒐集出来る魂も闇属性に限定されていて……今回みたいな状況でならともかく、それ以外だとあんまり……」
「……それでも、私たちは助かったわ。ありがとう」
「も、もういいですって。それよりも、セツの事なんですけど……」
　私が聞きたいのは、どうすればここから帰ることができるかです。セツが心配しているかもしれませんし……さだめさんとか、意外と自分の所為だーって落ち込んじゃうタイプですし……。
「ああ、この間ここに現れてさ。俺とデュエルしたんだけど……俺、負けちまったんだよなぁ……リベンジしたいぜ」
　どうやら、セツと話したのはレオさんだけのようで、レオさんが色々とその時のことを教えてくれました。
「あの……セツは結局、どうやって元の世界に帰ったんでしょうか？」
「ん？　ああ、俺とデュエルした後で、スーッと消えてったよ。あいつが言っていたのは、帰るためには誰でもいいからデュエルしなくちゃいけない、とか言ってたかな？」
「そうなんですか……じゃあ、私もデュエルすれば良さそうですね」
　しかし、そこで問題が。
「あの……私、デッキ忘れてきました……」
「……えぇー」
　な、なんでしょう。なんだかすっごく残念な娘を見るような目で見られている気がします！　し、仕方ないじゃないですか！　さだ

めさん相手に立ちまわっている時に、デュエルディスクなんて持っているわけないじゃないですか！

「あー……まあ、デュエルディスクならここに幾つかあるし、カードも、幸いここは精霊界だからなんとか都合できるんじゃないか？」

「そ、そうね。私、ちょっと聞いてくるわ」

冷汗を流したレオさんの言葉に、メリオルさんが頷いて部屋を出て行きました。

「……なんというか、お手数をおかけします……」

縮こまって頭を下げます。

「い、いいわよ別に。それより、デュエルの相手は私にさせて？助けてもらったお礼に、私がアテナを元の世界に帰すお手伝いがしたいから」

「はい……ありがとうございます。エルフィさん」

こうして、色々問題はありましたが、私とエルフィさんのデュエルが始まるのでした。

特別編「？アルカナクロスワールドＸ２　前編？」（後書き）

こんにちは。

とりあえず、出会いと準備編です。あと、アテナの力の一端。あ、さだめもか。遂に物理的な戦力まで揃ってきたセツの周囲です。とりあえず、これでアテナ自身のカード効果も、大まかには明かされたと思ってくれていいです。まあ、流石にあそこまで凶悪過ぎるものではありませんが。アテナの核兵器発言もあり、本当は六日に挙げたかった。誕生日でしたし。……毎年思うんですが、この誕生日は素直には喜べませんね。誕生日にテレビつけたら黙祷を捧げられる悠です。これで遂に悠も成人の仲間入り。ですが、酒もタバコもするつもりのない悠からしてみれば、エロゲー解禁になった１８の誕生日ほどの感慨は沸かなかったり。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールドＸ２　後編？」（前書き）

はふぅ……なんとか書き上げました～後編です。
とりあえず、完全にミラーマッチになったので、出てくるモンスター殆ど被ってます。
それでは、どうぞ。

特別編「？アルカナクロスワールドＸ２　後編？」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「アルカナクロスワールドＸ２　後編」

「……うん。これでいいです。私のデッキ」
あのあと、メリオルさんたちが調達して来てくれたカードの中から、私がいつも使っているカードを選んでデッキを組みました。大体は元々の私のデッキの大差ないですが、幾つか私たちの世界にはなかったカードもあったので、それらも入れさせてもらいました。
「さて、それじゃあ始めましょうか」
エルフィさんは、デュエルディスクを構えて準備万端。フレイヤさんと仲が良かったようですし、多分エルフィさんも天使族……だとすれば。
「あの……」
「ん？　どうしたの？」
「いえ、ちょっと提案が」
「提案？」
「はい。ライフは８０００にしませんか？　お互い天使族みたいですし、ライフ４０００だと……」
どちらも破壊力の高いデッキなので、ライフ４０００だと一瞬で終わってしまう可能性があります。特に、お互いに『アテナ』のカードを主軸にしているようですし。
「ああ……確かにそうね。いいわ、ライフは８０００で行きましょ

う」
「はい。ありがとうございます」
エルフィさんは快く受け入れてくれました。下手をすればジャンケンゲームになりかねませんし、この変更は良かったと思います。
「それじゃあ、改めて……」
「ええ。いいデュエルにしましょう」
「「デュエル！！」」
「先攻は私よ。ドロー！」
さあ、エルフィさんの初手はどうなっているでしょうか？
「……アテナ」
「はい？」
「ライフ、８０００にしていてよかったわね」
「ふぇ？」
「行くわよ！　私は手札から『天使の施し』を発動！　デッキからカードを三枚引いて二枚捨てる！　私は手札から『堕天使スペルビア』と『堕天使エデ・アーラエ』を墓地に捨てるわ！」
「！　堕天使……」
「更に、手札から魔法カード『おろかな埋葬』！　デッキから『アテナ』を墓地に送って、手札から『ヘカテリス』の効果発動！」
「っ！」
この流れは……マズイです！
「おいおい……エルフィの奴、相当来てるぞ」
「その効果で、デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加え、発動！　手札の『アテナ』を特殊召喚！」
「ひゃ……」
「更に、手札から『コーリング・ノヴァ』を攻撃表示で召喚！『アテナ』の効果で６００ポイントのダメージ！」
アテナＬＰ７４００
「『アテナ』の効果を使って、『コーリング・ノヴァ』をリリース。墓地から『堕天使スペルビア』を蘇生召喚！　効果発動！　墓地か

ら『アテナ』を蘇生！　二体の天使族が特殊召喚されたことで、１２００ポイントダメージ！」
「うぐっ……」
アテナＬＰ６２００
「今蘇生した『アテナ』の効果で、スペルビアを墓地に送って蘇生！　スペルビアの効果で『堕天使エデ・アーラエ』を蘇生！　二体のアテナの効果で２４００ダメージ！」
「きゃああっ！？」
アテナＬＰ３８００
「私はカードを一枚セットしてターンエンド！　さあ、どうするアテナ！？」
「う、うぅ……」
ま、まさか本当に一ターンで４０００以上のダメージを受けるなんて……流石に予想外でした……。
「これは……辛いですね」
その上、エルフィさんのフィールドは上級天使で埋め尽くされています。絶望的。
「でも、やられっぱなしは悔しいです！　特に、同じ天使使いとしては猛烈に！　ドロー！」
よし！　これならまだ行けます！　それどころか……。
「エルフィさん……」
「なに？」
「私が先攻じゃなくて、良かったですね」
「え？」
「私も手札の『ヘカテリス』を捨てて、デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加え、そのまま発動！　手札から『光神テテュス』を特殊召喚します！」
「でも、私の『アテナ』の効果でダメージを受けてもらうわ！」
「く……」
アテナＬＰ２６００

これがあるから『アテナ』使い同士のミラーマッチはキツイんですよね……。それでも、私はテテュスを出さないわけにはいきませんでした。

「行きます！　私は手札から『強欲な壺』を発動！　デッキからカードを二枚ドロー！」

「テテュスのいる時にドロー……ブースト」

「そうです！　私はたった今引いた『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』をオープンしてドロー！『コーリング・ノヴァ』ドロー！『緑光の宣告者』ドロー！『紫光の宣告者』ドロー！『ムドラ』ドロー！『虚無の統括者』ドロー！……ドロー終了」

「ふぅ……」

安堵したように息を吐くエルフィさん。ですが、甘いです。

「何を安心しているんですか？」

「え？」

「私は手札から『打ち出の小槌』を発動！　手札のカードを五枚デッキに戻し、シャッフル、五枚ドロー！」

私のドローは終わりません。その程度で終わりはしません！

「私は『アテナ』をオープンしてドロー！『光神テテュス』ドロー！『ヘカテリス』ドロー！『シャインエンジェル』ドロー……！」

それから更に四枚ドローして、私のドローは終了します。これで、私の手札は１８枚。……十分です。

「すごい手札……あの分厚いデッキはそういうこと……」

「はい。普通の４０枚構成だと、すぐデッキが終わっちゃうので」

天使族の枚数を増やして、ブーストを加速させるのも目的の一つですが。

「さあ、行きますよ。魔法カード『最終戦争』！」

「なぁっ！？」

「手札を五枚捨てて、フィールド上のカードを全て破壊します！」

希望さんとのデュエルで思い知った、私のデッキの弱点、除去能力の低さ。それを補うために、セツに言われて真っ先に投入したの

がこのカードでした。通常のデッキならディスアドバンテージがきつ過ぎるこのカードも、テテュスが居ればまったく問題なしで使えます！

「くっ！　ならチェーンして『和睦の使者』！　このターンの戦闘ダメージは無効よ！」

「……通します」

残念。これではライフを削れませんね。

「もう一度手札から『ヘカテリス』の効果を使い、デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加え、発動！　手札から『光神テテュス』を特殊召喚！」

今『最終戦争』によって墓地にいった天使と、寸分違わぬ姿の天使が再度召喚されます。

「更に、手札から魔法カード『儀式の準備』！　『最終戦争』で捨てた『宣告者の預言』を手札に戻し、デッキから『神光の宣告者』を手札に加えます！　儀式魔法、発動！」

「あれは……最強の宣告者！」

「手札の『シャインエンジェル』と『紫光の宣告者』を儀式の生贄として、『神光の宣告者』を攻撃表示で儀式召喚です！」

私のフィールドに、純白の光が立ち昇り、その中から虹色の輝きを纏った宣告者が姿を現します。

「さあ、私はまだ、通常召喚を行っていません！」

「そんな……」

「私は手札から『ムドラ』を攻撃表示で召喚！『ムドラ』の攻撃力は、墓地に存在する天使族モンスターの数×２００ポイントアップします。私の墓地には天使族が、えーと……ひい、ふう、みいの……九枚！　よって『ムドラ』の攻撃力は１８００ポイントアップの３３００！」

「うわぁ……」

しかも、私の手札は未だ7枚。ここからいくらでも展開出来る形です。

「私はカードを一枚セット。ターンエンドです」
「……まさか一気にひっくり返されるとは思わなかったわ……決まったと思ったんだけど」
「まだまだ、始まったばかりですから」
「そうね。けど、この状況は厳しいわね……」

「……ライフ、１６０００くらいで始めた方が良かったんじゃね？」
「……そうね。どちらも火力が高過ぎるわ」
「普通のデッキであんな真似されたら泣くしかないよね」
「まったくだ」

「私はモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンドよ」
「私のターン、ドロー！　『緑光の宣告者』！　テテュスの効果で、更にドロー！『朱光の宣告者』ドロー！」
　ここで、メリオルさんたちに用意して貰った私が知らないカードが手札に来ました。『朱光の宣告者』。宣告者シリーズの、モンスター効果版。チューナーというのはよくわかりませんが、もう一つの効果の方は使えるので投入してみました。
「『光神機―桜火』、ドロー！……終了ですね。私はモンスターを一体守備表示でセットし、バトルに入ります！『光神テテュス』で守備モンスターに攻撃！『ホーリー・サルヴェイション』！」
「私の守備モンスターは『ジェルエンデュオ』！　戦闘では破壊されないわ！　この効果は永続効果だから、その宣告者でも無効化できない！」
「……私はターンエンドです」
　手札から溢れた三枚のモンスターカードを墓地に捨てます。これ

で、更に『ムドラ』の攻撃力はアップして３９００。
　自分でも使っていますが、下級天使は本当に場持ちが良いです。おかげで、折角さっきのターンに纏めて焼き払ったのに未だダメージを与えられていません。
「私のターン、ドロー！　私は『ジェルエンデュオ』を二体分の生贄としてリリース！」
　この効果も、ルール効果である以上『神光の宣告者』では妨害できませんね。むぅ……。
「私は『堕天使アスモディウス』を攻撃表示で召喚！」
「アスモディウス……」
　攻撃力は３０００。『神光の宣告者』の守備力を超えています。尤も、今『神光の宣告者』は攻撃表示ですが。
「……」
　エルフィさんは少しの間迷っているようでした。
「……攻撃表示ってのが意味あり気ね。正直、攻撃する気が失せるわよ」
　……私の手札に『オネスト』があるかどうか思案しているのでしょう。少なくとも、エルフィさんに見せたドローカードの中に、『オネスト』がなかったのは事実ですが、それ以外にも大量ドローしている以上、油断はできない……と、考えているんでしょう。
「……けど、攻撃しなければどちらにせよ同じね。行かせてもらうわ！『堕天使アスモディウス』で、『神光の宣告者』を攻撃！『ヘル・パレード』！」
　色欲の堕天使の放つ攻撃が、『神光の宣告者』を呑みこんで行きます。
「くっ……！」
「え？　通るの？」
　アテナＬＰ１４００
「っ……！」
　っええそうですよハッタリですよ！　あれだけ引いておいて、結

局『オネスト』は引けませんでしたよ！　伏せカードも『光神化』ですし……ああもうホントに！　引きが良いのか悪いのか！
「え、えっと……私はターンエンド」
「く……私のターン、ドロー！」
もう！　セツとの最初のデュエルでもそうでしたけど、どうしてこうピンポイントで欲しいカードが引けないのやら……。いえ、それが普通なんでしょうけど。
「……しかも、ここに来てブーストができないという……」
手札に来た『和睦の使者』を睨みつけます。いえ、いいカードなんですけど。
「……とりあえず、アスモディウスには退場してもらいます。私はセットされた『マシュマロン』をリリースし、『光神機―桜火』を攻撃表示で召喚！　バトルフェイズ！『ムドラ』でアスモディウスを攻撃！『スフィニクス・スラッシュ』！」
兎も角、『神光の宣告者』が倒されたことで『ムドラ』の攻撃力は更にアップして遂に４３００。もうまともな手段で戦闘破壊することはできない攻撃力です。
「くっ……！」
エルフィＬＰ６７００
「っ破壊された『堕天使アスモディウス』の効果発動！　私のフィールドに、アスモトークンとディウストークンを特殊召喚するわ！」
「させません！　手札から『朱光の宣告者』の効果発動！　手札の『コーリング・ノヴァ』を墓地に送って効果を無効化します！」
「しまった……！」
「行きます！『光神テテュス』でプレイヤーにダイレクトアタック！『ホーリー・サルヴェイション』！」
「きゃあっ！？」
エルフィＬＰ４３００
「続けていきます！『光神機―桜火』でダイレクトアタック！」
「うぐっ……」

エルフィＬＰ１９００
「ターンエンドです！」
ふぅ、これで漸くライフも横並びですか……普段ならワンターンキル級のダメージですが、普段とはライフが倍ですからね。
「私のターン、ドロー！　私は魔法カード『貪欲な壺』を発動！　墓地の『アテナ』二体と『コーリング・ノヴァ』『ジェルエンデュオ』『堕天使アスモディウス』をデッキに戻してシャッフル。二枚ドロー！　更に『強欲な壺』！　二枚ドロー！」
「……よくよくブーストカードが来ますね」
「私は『勝利の導き手フレイヤ』を召喚！　お願い、フレイヤ！」
フィールドに、私にとっても見覚えがあるポンポンを手にした天使の少女が現れます。……そう言えば、私あの子のコスしたんですよね。懐かしいです。
「更に永続魔法『コート・オブ・ジャスティス』を発動！　手札から『光神テテュス』を特殊召喚！」
フレイヤの声援を受け、輝きを増したテテュスが現れます。攻撃力２８００。
「行くわ！『光神テテュス』で、アテナの『光神テテュス』を攻撃！『ホーリー・サルヴェイション』！」
「きゃ……」
アテナＬＰ１０００
これで、私のブーストは効かなくなりました。その上、今度は逆にブーストがかけられる形になってしまいました。それに、攻撃力２８００は結構マズイです。『ムドラ』なら十分に超えられる数値ですが、やはり怖いのは『オネスト』ですね。手札が一枚でも残っている現段階では油断はできません。なにより、今の私のライフでは『オネスト』を受けた時点でお終いですしね。
「ターンエンド」
「私のターン、ドロー！」
手札を確認します。……試してみましょうか。

「行きます！『ムドラ』で『光神テテュス』を攻撃！『スフィニクス・スラッシュ』！」
「手札から『オネスト』を使うわ！」
っ！　やっぱりあるんですか！
「なら、私は手札から『アルカナフォース？？―ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥ』を捨てて、ダメージを無効化します！」
「っ！　ＴＥＭＰＥＲＡＮＣＥか……なるほど。道理で躊躇いなく攻撃してきたわけね」
「ええまあ。『ムドラ』は倒されてしまいますけど、仕方ありません。リバースカードオープン！『光神化』！　手札の『ジェルエンデュオ』を攻撃表示で特殊召喚！『ジェルエンデュオ』を二体分のリリースとして『アテナ』を召喚します！」
「っ……なるほど。倒されても良かったのね」
「はい。私は『光神機―桜火』をリリースし、墓地の『ムドラ』を特殊召喚！『アテナ』の効果により６００ポイントのダメージを与えます！」
「くっ……」
エルフィＬＰ１３００
「カードを一枚セットして、ターンエンドです！」
「私のターン。ドロー！　テテュスの効果発動！『アルカナフォース０―Ｔｈｅ　Ｆｏｏｌ』をオープンしてドロー。『スケルエンジェル』ドロー。『光神機―轟龍』ドロー……たった今引いた『トレード・イン』を発動！　轟龍を捨ててカードを二枚ドロー！」
「くぅ……」
私と殆ど同一のデッキ構成。それ故に、この展開がどれだけマズイかも手に取るようにわかります。しかも、エルフィさんのフィールドには『コート・オブ・ジャスティス』とフレイヤ。最上級天使の召喚は覚悟しなければならない上、フレイヤによる攻撃力アップ。攻撃力が遂に４９００まで上がった『ムドラ』は『オネスト』さえなければ気になりませんが、『アテナ』は危険です。

「更に『ダーク・ヴァルキリア』をオープンしてドロー！……終わりか。まあデッキも削れてきたし、こんなものかな」

……今のところ、上級モンスターは来なかったようですが……。

「私は『コート・オブ・ジャスティス』の効果を使って『ダーク・ヴァルキリア』を攻撃表示で特殊召喚！　更にデュアル召喚して魔力カウンターを乗せるわ！」

デュアル召喚された『ダーク・ヴァルキリア』は、周囲から闇の魔力を取り込み、力を増していきます。

「っ！　でも、特殊召喚とデュアル召喚で、二回分のダメージを受けてもらいます！」

「く……」

エルフィＬＰ１００

あと……一歩！

「『ダーク・ヴァルキリア』の効果発動！　このカードに乗っている魔力カウンターを一つ取り除くことで、相手モンスター一体を破壊するわ！　当然、破壊するのは『ムドラ』！」

「くっ！？」

『ダーク・ヴァルキリア』の周囲に満ちる闇の魔力が剣先に集中し、私の『ムドラ』を撃ち抜きます。

「バトルフェイズ！『光神テテュス』で『アテナ』を攻撃！『ホーリー・サルヴェイション』！」

「リバースカード発動！『和睦の使者』！　させません！」

流石に、マイフェイバリットの『アテナ』をむざむざ破壊されはしません。……というか、どうでもいいんですが、あのソリッドビジョンに映るキリリッとした『アテナ』の表情を見ていると、なんだか悲しくなってきます。

「……ウチのシャルナとは大違いですよね……」

聞けば、この世界の『アテナ』の精霊はとても凛々しい、立派な天使さまらしいのですが……。いえ、あんまり深く考えないようにしましょう。テンションが落ちるだけです。

「私はカードを一枚セットして、ターンエンドよ！　さあ、来なさいアテナ！」
「……私のターン」
……問題ないです。あとたった１００のライフ。『アテナ』が存在している以上、ただ手札の天使族を召喚すればいいだけ……あの伏せカードは気になりますが、例え効果ダメージを無効化されても、ヴァルキリアを戦闘で倒せば私の勝ち……。
ちらり、と手札を確認する。手札は一枚。『打ち出の小槌』です。このドローでモンスターを引ければ……。
「ドロー！」
ドローカードは……『シャインエンジェル』。
「私は……っ」
迷わず召喚しようとして……躊躇いました。何故でしょう。このまま『シャインエンジェル』を召喚したら、負ける気がします。
「……精霊としてのカン、でしょうか」
このデュエルで使われた天使たちが、私に警告を発している気がします。
『ピキィ！』
『ピピッ！』
『ピーピー！』
「ふぇっ？」
「わ……それ、宣告者たちよね」
私が動きを止めていると、突然私の周りを朱、緑、紫色の光が飛び交い始めました。
「えと……懐かれた、んでしょうか？」
「そうじゃない？　多分、だけど」
「はぁ……」
兎も角、今この場で宣告者たちが輝いた意味……やっぱり、警告……なんでしょうか。
「……なら、それに従わない手はありませんね」

ここに、何の意味もないと考えるほど楽観的にはなれません。
「行きます。手札から『打ち出の小槌』を発動！　手札を一枚デッキに戻し、一枚ドロー！」
っ！　このカードは……。
「私は魔法カード『早すぎた埋葬』を発動します！　ライフを８００ポイント支払い……」
アテナＬＰ２００
「墓地の『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を特殊召喚します！」
「なっ！？　いつの間に……」
「墓地に送るチャンスなんて、いくらでもありました」
最初の『最終戦争』然り、そもそも手札から溢れたカードもたくさんありました。
「そしてこの瞬間、『アテナ』の効果が発動し、『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』の効果により、この効果は無効化されません！」
「っあ！」
エルフィさんの目線が一瞬手札に向きました。
「これで、決まりです！　天罰てきめん！」
「きゃあああああっ！？」
エルフィＬＰ０

「それで結局、エルフィさんの伏せカードはなんだったんですか？」
「ミラーフォースよ。手札に『ハネワタ』が居たから、バーン効果はそれで無効にするつもりだったの」
私はその『ハネワタ』というカードを知らなかったので聞いてみると、手札から捨てることで、そのターンの効果ダメージを無効化するカードらしいです。『朱光の宣告者』と同様にチューナー？

というものでもあるらしいですが、その辺はよくわかりません。
「でも……そのカードいいですね。私も欲しいです」
「持って行けばいいんじゃない？　私も余っているし、今日会えた記念にあげるわ」
「本当ですか？」
「ええ。ただし、またその内リベンジするわよ」
「そうそう。今度はセツと一緒にな。俺もアイツにリベンジしなくちゃならん。このまま負け越しじゃ、ちょっとな」
「そうですね。セツなら、もしかしたら来られるように出来るかもしれませんし」
いざとなれば、希望さんにお願いすれば何とかなるでしょう。なんでもアリですし。あの人。
『ピィ……』
「あの、この子たちは……」
「……まあ、連れていくってのも、なぁ？」
「でも、こんなに懐いているのを引き離すのも……」
『キィキィ』
「きゃっ？　ちょ、ちょっと潜り込もうとしないでください！」
お腹の辺りから制服の中に潜り込もうとする朱色。
「ハッ！？　これは、セツの前にこのまま出て、できちゃったネタをすべしという……」
『いやいやいやいや！』
その場の全員から総ツッコミを受けてしまいました。
「ネタが古い！」
「あ、でもスイカとかでやるよりも、お腹が動く分リアリティが……」
「真剣に検討するな！」
「私、この子たちを連れて帰ります！」
「理由が理由だけに素直に頷けない！」
はて、何かおかしいことがあったでしょうか？

「……まあ、カードは持って帰ればいいと思うわ。きっと力になると思うし」
「はい♪　よろしくお願いしますね？」
『ピィ！』
「ちょっ……だから服に潜り込まないで……十三歳のっ……サービスシーンはっ……うくっ……ひゃっ！？　若干犯罪……っ！」
誰ですか今精神的にはお婆ちゃんだろとか言った人は！？
「あ……」
スゥ、と体が透けていきます。
「お別れみたいだな」
「セツに伝えといてくれ。リベンジするのを待っているからなってさ」
「……もうちょっとお別れイベント何とかならなかったんでしょうか？　すっごいドタバタとした最後でしたけど……ごめんなさいそれじゃあ私はこれd」
「あ、消えた」
「……別れ際の台詞も最後まで言えないのね。あの子」

「これで帰らせていただきます……って、え？」
「おーお帰りアテナ」
「……セツ？」
「どうした？　そんなキョトンとした顔して」
「あ、えと……あ、そうです！」
『ピッ！？』
傍に居た緑色の子を掴んでお腹に突っ込みます。
「で、出来ちゃいました！」
どうです！？
「……

……あ、そっか」

「……すみません。謝りますからその長過ぎる沈黙はやめてください」

「いやその……面白かった、ぞ？」

「いっそ蔑んでください……」

というか、まったく驚いていない上に心配していた様子が欠片もないんですが……。

「あの、さだめさんとかは……」

「え？　ああアイツなら通販で買った『千の棘になって～鋼鉄の童貞～』とかいう拷問器具兼拘束具を受け取りに行っていないぞ？」

「どこから突っ込めば！？」

そのあからさまに怪しい商品名とか、心配のしの字も感じられない対応とか、明らかにセツ用っぽいのにサラッと受け入れているところとか！

「どーせアテナならケロっと戻ってくるから心配しなくていいよね～とか言ってたな。あと、その拷問器具は所謂アイアンメイデンの男性版らしいぞ？　俺の無駄スキルの一つに縄抜けＥＸがあるからとくに問題ない」

「……一つ一つ丁寧な回答ありがとうございます。あと、心を読まないでください」

というか、例え信頼の結果だとしてもその対応は少しショックです！

「ま、なんにせよ帰って来てくれてよかったよ」

「……はい。あ、セツに伝言です」

「ん？」

「リベンジするのを待っているからな、だそうです」

「……レオか。そうだな。全部終わった暁には、それもいいかもな」

セツが遠い目で物思いにふけっています。ポンポン、と唐突に、セツが私の頭を撫でてきました。

「どうしたんですか？」
「んや、なんとなくな。撫でやすい位置にあったから」
「そ、そうですか。ではその……存分にお楽しみください……」
「や、そうやって頭差し出されるのもなんか違うと思うんだが……まあいいか」
しばらく、穏やかな時間が続きます。が、まあ私たちがそうそう長い時間ゆったりしていられるかというとそんなはずもないわけで。
「お兄ちゃ～ん！　届いたよ～『千の棘になって～鋼鉄の童貞～』が！　試してみない？」
「拷問器具見せられて、うん！　試してみるよ！　と笑顔で頷ける奴を、俺はノーマルとは認めない」
「またまたぁ～お兄ちゃんがノーマルとか……あ、アテナお帰り」
「あ、はいただいまです……って軽っ！　軽いですよさだめさん！　もうちょっとこう、自分のミスで異世界に放りこんじゃったことに対する誠意というか……」
「帰ってこれたんだし、いいじゃん。それに、悪いことがあったならともかく、結構幸せそうだし。ならいいじゃない」
「そ、それは……」
「……ま、そういうことだな。アテナも、もしまだ俺たちをこっちに連れてきたことに負い目があるなら、気にしなくてもいいからな」
「……え？」
セツがサラっと言った言葉に、思わず目を見開きます。
「まだちょっと引き摺ってるだろ？　いいんだよ。別に。俺たちは今、そこそこ楽しいんだから。悔やんで前に進めないくらいなら、いっそバッサリ切り捨ててしまった方がアテナのためだぞ」
「あ……」
「アテナ、最近空回ってばっかりだったもんね～気負い過ぎ気負い過ぎ」
「さだめさん……」
「無理すんな。気負ったところで、するのは後悔ばかりだぞ」

セツの言葉は、何故か私の心にスッと入って来ます。
「……はいっ！」
私は涙ぐみ、セツの胸に思いっきり飛び込んで……
「おっと、そうは問屋がおろさないよ」
さだめさんに阻まれました。
「な、なんですか！？　今の場面は感激した私がセツに抱きしめてもらう感動の場面でしょう！？」
「さだめがそれを許すとでも？」
その後は結局、いつも通りのセツ争奪戦。でも、そのいつも通りがとても心地よくて、私はちっぽけな悩みなんて何処かに消えていくのを感じました。

おまけ。
「む。何このおチビさんたち。シャルナおねーさんになにか用かしらん？」
『ピィピィ』
『ピィィ？』
『ピキィィッ！』
「おおう！？　なになに！？　なんかあたし、怒られてる！？　いたっ！？　いたたたっ！？　ちょ、やめっ……ああもうケンカ売るならかうわよ！？　天罰てきめん！」
『ピキィィィ！！』
「へっ！？　返してきた！？　ヴニャアアアアアアアアッ！？……パタム」
『ピィ！』
『ピキィ！』
『ピィピィ！』
「お、おのれ～下級天使の分際でよくも～……」

「シャルナ様～？　どこにいらっしゃるんですかぁ～……あっ！」
「げっ……見つかった！？」
「シャルナ様！　とうとう見つけました！　さあっ、いい加減キリキリ働いてください！　じゃないとまた私の休暇が潰れて……あれ？　ボロボロですね？」
「そ、そうそう！　そうなのよ！　だから仕事は……」
「丁度いいので、このまま拘束しておきましょう？　え？　貴方たちがやってくれたんですか？　わぁ、ありがとうございます。あの、これからもお手伝いしてもらってもいいですか？」
『ピィ！』
「ありがとうございますありがとうございます！　これで少しだけ負担が減りました！」
「く、くぅぅ～余計なことを～……あ、待ってホントにお姉さんボロボロで……この子らの攻撃が案外効いていて……ってカイエン！？　聞いてる！？」
「シャルナ様。カイエンは学習したのです。シャルナ様の言葉をまともに聞いていたらまた逃げられると！　だから、シャルナ様の言葉はほぼ全て嘘偽りと捉えることにします！」
「あ、じゃあ今ぴんぴんしていて全然元気だから仕事バリバリやっちゃおうかなぁ～？」
「ええ！？　そ、それは大変ですすぐに休まないと！？」
「ふっ！　その素直さがチミの敗因だよん？　じゃあな～とっつぁ～ん！」
「ってそんな手に引っ掛かるわけないでしょう！？　さあっ！　お屋敷一杯分のお仕事が溜まってるんですからねぇ～！」
「うえぇ～ぜったいやりたくなぁい～ネトゲがあたしを呼んでいる～」
「せめてアテナ様が呼んでいるとかにしたらどうですか……」

特別編「？アルカナクロスワールドＸ２　後編？」（後書き）

こんにちは。

前半のデュエルはともかく、後半の締めに自信が持てないというか、もうなんか締めが上手くいかなくて最終的にやっつけ仕事になってしまった感が強い後編でした。

デュエルの方はもう思いっきりミラーマッチ。しかも、ライフを削る速度が半端ない。やむを得ず８０００ルール解禁です。エルフィの最初の流れとか、実際やられたらほぼ詰みですけどね。上級五体一ターンでとか……不可能ではないにしろ、奇跡的な展開。で、特別編にも関わらず、強化イベントにしてしまいました。特別編であっても本編に絡ませる辺りが悠クオリティ。というわけで、アテナのデッキに『朱光の宣告者』と『ハネワタ』追加です。モンスター効果やバーン効果に対する耐性もでき、より一層強化されました。

さて……後はもう一つコラボがあったりするので……うん。いつになったら終わるのかわかったもんじゃありません。夏休み終了までに第四期に行けるのかどうか……無理しない程度に頑張ります。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者２　前編？」（前書き）

どうやら、コラボデュエルを一話に収める、ということを諦めてきた感のある悠です。とりあえず、豆フクロウさんの旋風の守護者とのコラボ二作目、前編をお送りします。今回はさだめとのことで……書き易いなぁさだめ……。

それでは、まだデュエルも始まりませんが前編をどうぞ！

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者２　前編？」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者２　前編？」

時刻は深夜。
静寂に沈むアカデミアのレッド寮、セツのテント。そこに忍び寄る影一つ。
「ふ、ふふふふふ……」
漆黒の、影のようなものを身に纏った小柄な人影が、堪え切れじとばかりに忍び笑いを漏らす。
「最近ご無沙汰だったけど……というか、元の世界に居た時以来？　兎に角、折角こんな素敵能力が手に入ったんだし、利用しない手はないよね～」
ぶっちゃけさだめである。ぶっちゃけ夜這いである。特に訓練したわけでもないのに元々の力のように終焉の精霊の力を使いこなすその適応力や器用さは凄まじいモノがあるが、主にそれが発揮されるのが、セツを襲うことにのみ特化している辺りがさだめらしい。
「影を纏った隠密行動……力尽くでの逆レ○プ……くふふ、夢が広がるね～」
実の兄に対して公然と逆レ○プを宣言するさだめ。そんなさだめが足下に一瞬光るものを見つけた。
「ん……？　糸？　まさか罠……ふふ、甘いよお兄ちゃん。この糸はダミー。本命はその先に仕掛けられた闇に同化する黒塗りのピア

ノ線……と見せかけてっ！」
さだめは下に向いていた自分の視線を上にあげる。そこにあったピアノ線をニヤリ、としてやったりの笑顔で睨む。
「ふふふ……読み切った！」
さだめは更に、自分の横手に仕掛けられたピアノ線にも注意を払いながらその全てを回避する。
ピピッ！
「……ゑ？」
カッ！
「うそぉっ！？」
一瞬の閃光の後、さだめが吹き飛んだ。
キュドッ！
「どぉうっ！？」
落下地点に今度は地雷。吹き飛ぶ相手の体重や空気抵抗等まで計算された完璧な設置位置。明らかにさだめをピンポイントで狙い撃ちしていた。
バゴゥッ！
「はぶしっ！？」
追い打ちの地雷で吹き飛ばされたさだめがセツのテントのすぐ近くに転がってくる。
ガシャンッ！
「って檻！？」
最終的に、地面からせり上がって来た檻がさだめを閉じ込めた。
目を白黒させるさだめに、気だるげに溜息を吐きながら近寄る影。
セツだ。
「……ったく。嫌な予感がしたから念のために罠を仕掛けてみれば……なにやってんださだめ」
「お、お兄ちゃんこそ、これは実の妹に対して仕掛ける罠の域を超えてるよ……」
「馬鹿言え。ピンピンしてるだろお前」

「だからって、二重三重のトラップの上に赤外線センサーとか……ただのテントが、どこの機密情報局のセキュリティ……？」
「ちなみに、それも回避した場合はテントの入り口にセンサーが仕掛けてあった。入ろうとしたら電流」
「引っかかったのがさだめだからよかったけど、もしアテナが引っかかっていたらどうするつもりだったの？」
「アテナなら、最初のピアノ線で引っ掛かるだろ。その場合は、金ダライが直撃して、その音で俺が目を覚ます手はずになっていた」
つまり、トラップを回避すればするだけ酷い目に遭っていたらしい。それなら素直に最初のトラップで引っかかっておけばよかった。
「っていうか、何時の間に爆弾なんて……」
流石に爆弾作成のスキルは法的にヤバいのでは……という目で見るさだめに対し、セツは溜息を吐く。
「貞操を守るためには、無駄スキルも犯罪レベルにまで引き上げる必要があってだな……」
「近親相姦と危険物の作成&殺人未遂ってどっちが重い罪かなぁ！？」
「正当防衛だ」
どう見ても過剰防衛に見えるが、相手がさだめならばセツの言い分が正しく聞こえてしまう。
「……どうせセンサーも手作りなんだろうね。材料は？」
「希望にねだった」
「きょ、強力なパトロンがお兄ちゃんに……」
「スポンサーと言えスポンサーと。パトロンだと俺と希望が愛人関係にあるみたいに聞こえるだろうが」
それはぞっとしない。タダでさえ希望は絶世の美青年なのだ。兄がそんな道に引きずり込まれるのだけは阻止しなければならないさだめである。
「……悪し様に言われているねぇ」
噂をすれば影、というか、噂をせずとも勝手に現れる希望がすぐ

近くに現れていた。
「希望。お前が来たってことは、もしかしてまたアレか？」
「動じないね。まあいいけどさ。うん。さだめの部屋に現れたんだけど、さだめ、ここにいるからさ」
「ああ……」
「えーつまりさだめが行かなきゃいけないの？　これからお兄ちゃんとの熱い夜が……」
「待ってないから。兎に角、さだめをそこに放りこめばいいわけか？」
「まあ、そういうことだね。都合よくセツが捕まえてくれたわけだし、このまま連れて行こう」
「ちょ、こんな猛獣を運ぶサーカスみたいな感じで連れて行かなくても……」
「似たようなものじゃないか」
「正確には淫獣だろ」
「違いない」
「極々自然な流れでさだめを獣扱いしないでよ！」
「ケダモノだろ？」
「お兄ちゃん限定で」
「このまま放りこむとするか」
「うわ～んごめんなさい今日はもう何もしないから出して～！」
とうとう泣きが入ったので、苦笑したセツが檻にかかっている鍵を開ける。
「チャンス！」
バチィッ！
「うにぃあっ！？」
さだめが懲りずに突破しようとしたところ、すかさずセツが手に持ったスイッチを押した。瞬間、さだめの全身に電流が流れ、流石のさだめも目を回して気絶した。
「甘い。その檻は全体がスタンガンだ。名付けてスタンプリズン」

「いやはや。キミの発想には中々感服するね。将来は保障するからウチに来るといい。高待遇で雇わせてもらうよ」
「……縁があればな」
目を回して気絶したさだめを担ぎあげ、セツは女子寮に向かう。
「ちなみに、その檻の電圧はどれくらいなのかな？」
「最大電圧は１００万ボルト。クマでもイチコロだ」
「……つくづく、妹に仕掛ける罠じゃないね」
希望も溜息をついて、セツについて女子寮に。自然な流れでさだめの部屋のドアをピッキングでこじ開ける（所要時間約５秒）と、セツは部屋の中にある時空の歪を見る。
「……僕が言うのもなんだけど、サラッと犯罪技術を披露しないでくれるかな？」
「いいだろ別に。妹の部屋だし」
「妹の部屋にピッキングで入るのは、果たして別にいい、と判断していいものか……」
「さだめだから大丈夫だ」
断言するセツ。
「で、コイツにさだめを放りこめばいいのか？」
「いや、どうせだから僕たちもついて行こう。それに僕は、この先に居る子たちと面識があるしね」
「そうか。ならそうするぞ」
特に動揺した様子も見せず、セツは躊躇いなく時空の歪に身を躍らせる。
「……もう少しくらい、からかい甲斐ってものがあってくれると、僕好みなんだけど。まあいいか」
溜息をついて、希望も時空の歪に入って行った。
「あーもう。またこんなとこに……」

一方、最早見慣れた、と言っても過言ではない無人のアカデミアに放りこまれた真紅の髪をポニーテールにした少女、紅龍蓮は、いつものようについ最近想いの通じた恋人、甲斐祐騎を迎えにレッド寮に向かっていた。

「祐騎、今回もいるわよね……」

少し不安そうに呟く。こういう状況に巻き込まれたのは初めてではないが、それでも好きな人がいないのは不安なのだ。

「……ちょっと急ご」

『あらあらぁ～そんなに慌てなくても、祐騎君ならちゃんといるわよ～？　エールちゃんの気配を感じるもの～』

「い、いいでしょ別に！」

茶々を入れてくる自分の精霊、『椿姫ティタニアル』の精霊、テォルに言い返しつつ、速めた足を緩めることはしない蓮。

『ああ～んもう蓮ったら初々しくていいわぁ～！　祐騎君が羨ましい！』

「うるさいわねこの色欲植物は……」

扱いにくい自らの精霊に辟易する蓮の視界に、ふと人影が映る。

「ゆう……！」

一瞬自分の恋人かと思い、呼びかけようとした蓮だったが、どうも自分の知る祐騎に比べてシルエットが大きい。単純に祐騎より背が高いのもあるが、どうも何か背負っているようだ。

「……ん？　あんたは……」

その人物は蓮を見て、驚いたように身を固めた。どうも背負っているのは女の子のようだった。

「シグナム……？」

その呟いた言葉で、蓮はその人物が自分と同じような立場の人間だと理解した。

「シグナム……？」
俺の目の前に現れたのは、リリカルな○はに登場する夜天の騎士、シグナムに酷似した容姿を持つ女の子だった。いや、よく見れば違う。俺の知るシグナムに比べて背が低いし、髪ももっと赤い。が、全体的にはそっくりだった。とりあえず、これだけは言っておこうと思う。
「……ナイスポニテ！」
「は？」
「いや、なんでもない。衝動的に溢れ出た、魂の叫びみたいなもんだから」
実に見事なロングポニーテール。個人的に満点だ。
「鮮やか！　ブラバー！　実にエクセレント！」
「は、はぁ……」
「ふ……ここまで見事なポニテがあるとはな……」
膝を着く。負けたぜ……。
「あ、あの……」
おっと、感動的なポニーテールの前に、思わず膝を着いてしまったぜ。
「あの、貴方もトリッパー……よね？」
「ん？　まあ、そんなようなもんだな。正確には、ちょっと違うんだが」
俺たちの場合は、異邦者とか来訪者、客人（まろうど）って言った方がしっくりくるが、広義では変わらない。
「その背中の子も？」
「ああコイツは御堂さだめ。俺の妹だ。ちなみに俺はセツ。今回は、妙なことに巻きこんでしまってすまない」
「いいえ、構わないわ。私たちも、何度かこういう状況は経験しているから」
「そうか。なら話は早いか」
「あ、でもちょっとまって。多分、もう一人巻き込まれていると思

うから……迎えに行ってもいいかしら」
「ああ。もちろん。どうせコイツが目を覚まさないと、デュエルもできないしな」
俺は背中で眠るさだめを示して見せる。
「あの、ところでその子はどうして眠っているの？」
「ああ、ちょいと電流を……いや、なんでもない」
正直に言おうとして、断片的に聞いてもまったく理解を得られないであろう事実に気付き、口を噤む。
「で、電流……？」
案の定、シグナム似の少女は怪訝そうな顔で訝しむ。あ、そういえば……。
「君の名前も教えてくれるか？」
「あ、そうね。ゴメンナサイ。私は紅龍蓮。蓮でいいわ」
「ああ、よろしくな。蓮」
蓮と名乗った少女は、何処かそわそわした様子でチラチラと俺の背後を見ている。あれは……レッド寮か？　ピンと来た俺は、少しイジワルな笑みを浮かべて蓮に尋ねる。
「……もう一人巻き込まれているっての、もしかして、彼氏か？」
「えっ！？　あっ、その……」
俺の問いに、蓮は顔を真っ赤にして慌てる。
『うふふ～そうよ～蓮は祐騎君の彼女だから、手を出しちゃダメよ～？』
俺の問いに答えたのは、蓮ではなくその後ろに控えていた椿の花の女性。
「君は……『椿姫ティタニアル』か？」
『ええ。ティルって呼んでね？』
「ああ、よろしく」
「それで、その……祐騎を迎えに行きたいのだけど……」
「それには及ばないよ」
おずおずとそう切り出す蓮に、それを遮る声。

「あ、貴方は……真中、希望さん？」
「やあ、久しぶり……と言うほどでもないかな？　蓮」
「蓮さん」
「あっ、祐騎！」
あいさつする希望。そして、希望の後ろから顔を出した祐騎に、蓮の顔が華やいだ。祐騎の後ろにいるのは……『ガーディアン・エアトス』の精霊か？
『ほらぁ、だから言ったでしょ？　祐騎君は来てるわよって』
『まあまあティルさん。蓮さんもマスターに会うまでは不安だったんですよ』
和気藹々と会話を交わす四人を尻目に、俺は希望に説明を求める。
「希望」
「ああ。前回の時に、彼の寝起きが悪いのは確認済みだったしね。時間の短縮のために、起こしに行っていたんだ」
「なるほどな……」
「んむ……？」
その時、背中から寝ぼけたような声。
「さだめ、起きたか？」
「……」
しばらくボケーっとしていたさだめだが、しばらくしてニヘラ、と表情を緩めて俺の首筋に顔をこすりつけ始めた。
「うへへへへ……お兄ちゃんの首～」
「……コイツは」
尚も顔を擦りつけるさだめ。
「何してんだお前は……くすぐったいからやめろ」
「マーキングマーキング～♪」
「でぇいっ！　振り落とすぞ！」
「できるもんならっ！」
「ぐがっ！？　コイツ……振りほどけない！？　絡みつくなこの……っ！」

さだめの手足が俺の身体に絡みつき、すごい力でしがみついてくる。
「ぇろっ……♪」
「うひゃっ！？　舐めるな！」
「くふふふふふふ……」
「こっ……の……っ！」
っ仕方ない！　あまりやりたくはなかったが……！
「ぐ……がぁぁっ！」
ボキメキゴキャ！
「にゃっ！？」
「だぁぁっ！」
関節どころか骨まで外してさだめの拘束から脱する。ゴキッボキッと凄い音を鳴らして全身の骨を填め直していく。
「……これで良し」
「いやいやいやいや！　良くはないでしょう良くは！　関節外すだけでも驚きだけど、骨っ！？」
「それ、脱臼って言うんじゃ……」
「段々びっくり人間になって来ているね。セツ」
「今、首から骨が外れる音が聞こえてきた気がするんだけど……」
さだめの感想に、全員畏怖の籠ったような眼で俺を見る。
「……セツ。キミも何だかんだで、人間離れしているね」
「生き残るためには……人体の限界を超えなくてはならない時が……ある」
「ないよ」
「っていうか、そこまでさだめの想いに応えるの嫌……？」
さだめが若干傷ついている様子を見せる。
「……なるほど。ティルの同類なのね。あの子」
『一度、じっくりと話し合ってみたい逸材ね～』
『……別の意味で、深く話し合うべきだと思います。主に倫理や貞操観念などの議題で』

「いえ、それより僕はあの雑技団顔負けの人体構造に興味があるんですが……」
「ぐ……いたた、流石に超激痛……だからやりたくなかったんだよな……」
全員から当たり前だ、と言いたげな視線が突き刺さる。
「むしろ、それだけで済むとは思えないんだけど……」
「痛みに耐えるのは慣れてる」
慣れたくはなかったけどな……。
「とにかく、これで役者は揃っただろ。とっとと始めてくれ」
「何を？」
「何をって……ああそうか。さだめにはまだ何の説明もしていなかったか」
「説明なら、僕の担当だね。任せてくれ」
「……好きにしろ」
「イヤ。お兄ちゃんからの説明しか受け付けません」
「どこまで我儘だお前は！？」
「何と言うか……凄い子ね……」
理解してもらえてなによりだ。仕方なく、俺はさだめに経緯を説明する。ここが異世界であり、さだめが蓮とデュエルしないといけないこと等々……それら一連の経緯を説明した時のさだめの感想がこれだ。
「じゃあ、デュエルしない！　それで万事上手く行くね！」
「……話、聞いていたか？」
「もちろん！」
自信満々に頷かれる。ウソつけ。
「だって、今この世界に居るのはこの場に居る人たちで全員なわけでしょ？　ということは、さだめとお兄ちゃんの間を邪魔されることなく、心行くまで愛の営みを楽しめるってことでしょ？」
「あっ、愛の営み……っ！」
想像したのか、蓮が真っ赤になる。祐騎の顔も若干赤い。

「ほら、蓮さんたちだって、恋人同士の甘い時間を過ごせるんだよ？　ね？」
「甘い時間……祐騎と二人っきりで……」
「れ、蓮さん！？」
「こーらこらこら！　そこ！　悪魔の誘惑をするんじゃない！」
ったくコイツは……。
「せめて既成事実くらいは作ってから帰りたいところだよね？　お兄ちゃん」
「さも俺がお前との関係に乗り気のように同意を求めるな」
しかし、マズイな。このままコイツがデュエルに乗って来なければ歪を消すことができない。それは希望としても旨くないだろうと、希望に助言を求める。
「……希望、なんとかならないか？」
「ふむ。そうだね。僕としては、実にからかい甲斐のある、面白い展開になって来た、と言う他ないね」
が、期待した返事は聞けなかった。
「あのな……」
「どうだろう？　このままアダムとイヴとして、産めや増やせやと励んでみるのは？」
「言うまでもなく、却下だ！」
「言うまでもなく、採用だね！」
俺とさだめの声が重なる。尤も、意味は真逆だったが。
「希望！　話をややこしくしてどうする！？」
「ね？　お兄ちゃん。希望さんの許可も出たことだし、心行くまでさだめという、禁断の果実を味わって？」
「却・下・だ！」
「え～」
「……ティル。貴女ととても話の合いそうな子がいたわよ」
『私、あの子となら三日三晩飽きもせずに語り合えそうな気がするわぁ～』

「……ま、このまま歪を放置しておいて欲しくはないからね。デュエルしなければアテナたちを呼ぶ、と言うことにしようか」
「始めっからそうしてくれ……頼むから」
「ええ～！？　それじゃあ邪魔が入っちゃうじゃん！」
「後、僕が全力で妨害する、と言うことにしよう」
「そんな！？」
「そしてもし、さだめがデュエルして勝つことができれば、キミにとって実に都合のいいご褒美をプレゼントすることにしよう」
「……報酬の内容は？」
「セツへの資金援助、またトラップの材料等支援物資を一切送らないようにしようじゃないか」
「やる！」
「おい」
なんて約束してるんだコイツは！　俺の生命線だぞ！？
「よーしそうと決まれば早速やるよ～蓮さん！　いざ勝負！」
「え、ええ……何か釈然としないけど……」
「頼む！　さだめに勝ってくれ！」
でないと俺の貞操が！
「今ここに、兄妹禁断の一線を賭けた大勝負が始まる……」
「妙なナレーション入れるな！」
「そんな大事な一戦に、私たちを巻き込まないでくれる！？」
「いいじゃないか。面白そうだし」
くっそぅ……所詮他人事って顔しやがって……。
「正にそうだからね」
「だろうな！　ああクソ！　こうなったら何としても蓮に勝ってもらう他ない！」
「だから余計なプレッシャーかけないで！」
「れ、蓮さんあまり興奮しないで、普段通りにやりましょう。油断できる相手じゃなさそうですし……」
「う、うん。ありがとう祐騎……」

「くふふふふふふっ！　お兄ちゃんとの蜜月のため……完膚なきまでに叩き潰すっ！」
「うぅ……なんかこの子、怖いわ……」
と、若干蓮のテンションは低いままだったが、こうしてさだめと蓮のデュエルが開始されたのだった。

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者２　前編？」（後書き）

というわけで、前編でした～。
いやもうホント、さだめは書き易い……セツとの掛け合いが自然で自然で。我ながらサラサラ書けます。
セツもいい加減一般人枠から大幅にはみ出てしまっている印象がありますね。あれ？　これも今更か。
というわけで次回、蓮ＶＳさだめのデュエルが始まります。植物族は書いたことないので多少不安ではありますが……豆フクロウさんの小説を参考に頑張ってみます。
それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者２　後編？」（前書き）

ふう、なんとかアップ出来ました。今度こそコラボ最終作品、旋風の守護者の蓮ＶＳさだめの、全編デュエルでお送りしたします。
最近書いた中では比較的良質なものが書けたかなーと思いますので、どうかお楽しみください。
ではどうぞ！

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者２　後編？」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者２　後編？」

「あ、ちょっと待って、デッキが今、少し調整不足だから、一瞬調整させて」
「え？　ええもちろんそれはいいけど……」
さだめは、蓮に許可をとり、自分のデッキのカードを何枚か抜いて別のデッキケースに入っていたカードと入れ替える。コイツ、まさか……。
「……ん、よし！　さだめはこれでいいよ。始めよっか」
「ええ。お互い、ベストを尽くしましょう！」
「「デュエル！！」」
「さだめの先攻！　ドロー！　さだめはマジックカード『闇の誘惑』を発動するよ！」
「手札交換……闇属性デッキ？」
「さだめはデッキからカードを二枚ドロー！　そして手札から『ネクロフェイス』をゲームから除外するよ！」
「なっ！？」
出たな。さだめの除外の要。いきなりとは思わなかったが、普通にあり得るか。
「『ネクロフェイス』が除外された時、お互いのデッキの上から五枚までゲームから除外するよ！」

「くっ……」
「マズイですね……蓮さんのデッキは植物族。除外にはあまり強くありませんし」
「さだめのデッキは、基本的に次元ダークだからな。相性としては、最悪ってことか……」
しかし、それでは俺が困る。
さだめのデッキから除外されたのは『闇王プロメティス』『異次元の偵察機』『ダーク・アームド・ドラゴン』『闇より出でし絶望』『漆黒のトバリ』の五枚。
「あちゃ、プロメティス落ちちゃったか……トバリもちょい痛いかな」
ダムドも落ちたのは痛手だろう。
「あ、それはいーの。どうせ今回のデュエルではダムドはあんまり活躍できなかっただろうしね」
さだめは、蓮の後ろで微笑んでいるティルを見ながら言った。なるほど。確かにダムドの効果はティタニアルにはまるで効かないな。
そして蓮の方はというと……。
「えーと『グローアップ・バルブ』『イービル・ソーン』『ポリノシス』『ギガプラント』『茨の壁』……ってキツイわね。どれも結構主力なんだけど……」
特に、『イービル・ソーン』が一体落ちた、というのは少々痛いか。その効果的に考えれば、『イービル・ソーン』は三体揃ってこそだ。一体でも落ちればその有用性はかなり落ちると言わざるを得ない。つか、シンクロありなのか。『グローアップ・バルブ』や『ウィード』って。
「んじゃ、さだめは『霊滅術師カイクウ』を攻撃表示で召喚するよ」
「う……」
とことん除外するつもりか。イヤ待て。
「さだめお前、いくらなんでもそこまで徹底的な次元デッキじゃなかっただろ。まさかお前……」

嫌な予感を感じた俺がさだめに問いかけると、さだめはくふふ、とまた黒い笑みを浮かべた。
「お兄ちゃんの想像通りだよ」
「お前、あの一瞬でメタデッキに切り替えやがったな……？」
調整不足、とか理由をつけて、除外関係のカードを大量投入したのだ。恐らく、蓮のデッキが除外に弱い植物族だと当たりをつけて。
「精霊が『椿姫ティタニアル』だったからね～ほぼ間違いないと思ったし」
「ま、まさかあんた……」
戦慄したような声をあげる蓮に、さだめはニヤリと笑う。
「……改めて自己紹介しておくね。各種メタデッキ使いの御堂さだめ、よろしくね？」
「メタ使い……！？」
恐らく、そういった使い手に遭遇したことがあまりないのだろう。驚いた顔だ。偶然にメタデッキに遭遇することはあっても、相手によってデッキを変えるメタ使いはこの世界じゃ嫌われる傾向があるしな。
「更にさだめはカードを二枚セット。エンドフェイズに『異次元の偵察機』を特殊召喚してターンエンド」
さだめのフィールドに、不可思議な色合いの異空間の扉が開かれ、その中から人工衛星のような機体が姿を現した。
「っ私のターン、ドロー！」
さて……蓮はどうするか。できれば……いや、是が非でも勝って貰いたいというのが本音だが……。
「そこんとこどう思う？　彼氏さん」
「……できれば、祐騎って呼んでください。まだ、そういうの慣れていないんで」
「へぇ、まだ付き合い始めてそう経ってないのか」
ニヤニヤと、顔を赤くする。剣士もそうだが、こういう奴をからかうのは楽しい。というか、他人事ってのは基本的に楽しいもんだ

しな。
「つい先日です。それより、今のこの状況をどう思うか……でしたよね」
「ん？　ああ」
「……蓮さんは負けませんよ。あんな卑怯な手に、負ける人じゃない」
「……すっかり俺の妹が悪者だな」
「あっいえその、そういうつもりは……すみません」
「はは、悪い。こっちもそういうつもりはない。実際、卑怯臭いのは事実だしな」
「すみません……」
「いいって。確かにああいうデッキ使いは嫌われる傾向にあるが……アイツはそんなの気にも留めないしな」
「あの……妹さんは普段からああいうデッキを……？」
「まあな。アイツは他人になにを言われても揺るがない強さを持ってる。何処までも一途で一本気。……ま、そうでなきゃ、実の兄貴に恋してる、なんて公言出来やしなかっただろうが」
　或いは、単に周りが見えてないだけかもしれんが。俺は苦笑する。
「……俺も、何時までも兄妹だから、なんて言い訳で逃げてるわけにもいかないんだろうがな」
　いつかしっかり向き合う日が来る。その時は……。
「……真正面から、受け止めてやるさ」
　それはまた、いつか、の話だけどな。

「私は手札から『ローンファイア・ブロッサム』を召喚して、効果を使用するわ！」
「む、来たね。植物族の必須カード」
「ええ。私は『ローンファイア・ブロッサム』自身をリリースして、

デッキからティルを攻撃表示で特殊召喚するわ」
『はぁ～いよろしくね？』
「はいごめん。トラップ発動『呪言の鏡』！　デッキからモンスターが特殊召喚された時に発動して、そのモンスターを破壊。さだめはデッキからカードを一枚ドローするよ。あ、わかってると思うけど、この破壊は対象をとらない。よってティタニアルの効果では無効にできないよ」
「くっ……」
『あらら～？』
ティルの姿が映り込んだ鏡がひび割れると同時、ティル自身にもその破壊が及び、ティルが破壊される。
「……なら私はカードを二枚セットして、ターンを終了するわ」
「さだめのターン、ドロー！」
ここまではいい。これで『霊滅術師カイクウ』による攻撃が成功すれば、今墓地に送られたティルや『ローンファイア・ブロッサム』は除外される。あとはそれを繰り返せば勝ちだ。
「……ま、そう上手く行くとは思っていないけど」
というより、そんな簡単に勝てるなら、蓮さんはこんなところにいないはずだし。何度もデュエルしていれば、とことんまで事故ってあっさり終わったりすることもある筈なのに、この世界ではそれがない。あっさりと終わる大事なデュエルなんてない。
「さだめは『トレード・イン』を使って『ダーク・ホルス・ドラゴン』を捨ててカードを二枚ドロー！　手札から『終末の騎士』を攻撃表示で召喚。効果により、デッキから二枚目の『ネクロフェイス』を墓地に送るよ」
着々とさだめの布石は積み上がっている。序盤は完全にさだめのペースをつかめたね。でも、このままだとどうせ逆転喰らうんだろうな～。
「手札から魔法カード『D・D・R』を発動！　手札の『ネクロ・ガードナー』を墓地に送って除外された『闇より出でし絶望』を帰

還させる。更に、墓地に存在する闇属性モンスターが三体になったことにより、『ダーク・ホルス・ドラゴン』と『ネクロフェイス』をゲームから除外し、手札の『ダーク・ネフティス』を墓地に」

当然、除外された『ネクロフェイス』は効果を発動。またしてもデッキの上から五枚が除外される。今回除外されたのは……『速攻の黒い忍者』『異次元の偵察機』『人造人間サイコショッカー』『終末の騎士』『次元幽閉』の五枚。

「ん～『次元幽閉』は勿体ないけど、まあ許容範囲かな」

対して、蓮さんのデッキから除外されたのは『フレグランス・ストーム』『増草剤』『大嵐』『ローンファイア・ブロッサム』『ブラスト・モード』の五枚。

「っ！？『ブラスト・モード』が……！」

『ブラスト・モード』？　さだめの聞いたことのないカード。多分本来は存在しない特別なカードだったんだろうけど……それが落とせたのはラッキーだったな。効果はわからないけど強力なものだろうし、精神的ダメージも見込める。

とにかくこれで、今やるべきことは終わり、攻撃態勢は整った。

「これで終わってくれると楽なんだけどな。まずは『終末の騎士』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

「残念だけど、簡単には終わってあげられないのよ！　リバースカード『聖なるバリア―ミラーフォース―』！」

清浄な輝きを放つバリアに、さだめの攻撃は反射され、さだめのモンスターが全滅する。

「……普通に通るのね」

「通しても、何ら問題ないからね」

「なんですって？」

「さだめは最後の手札、『ダーク・クリエイター』を効果により守備表示で特殊召喚するよ！　知ってるだろうけど、一応解説。『ダーク・クリエイター』は、墓地に闇属性モンスターが五体以上存在して、さだめのフィールドにモンスターが存在していないときに特

殊召喚することができる。さだめの墓地に闇属性モンスターは六体。条件は満たしているね」

何せ、さだめのモンスターは蓮さんによって全滅させられたわけだし。

「貴女まさか……罠がミラーフォースだってわかってて……！？」

「あの状況を打破出来るのなんて、それくらいしかないでしょ。別に和睦や威嚇、無力化でもいいけど、時間稼ぎにしかならないし。それに……」

こういう時、物語の登場人物は、ご都合主義を体現するもんだしね。

「さあ、『ダーク・クリエイター』の効果発動！　墓地の『異次元の偵察機』をゲームから除外して、『闇より出でし絶望』を攻撃表示で特殊召喚！　エンドフェイズに、除外された『異次元の偵察機』を二体特殊召喚！　ターンエンド！」

「そんな……モンスター四体を破壊されたのに、そのターン内で四体並べ直すなんて……」

「ご都合主義にはメタで対抗！　まさか、文句ないよね？」

「あいつ、あんなこと言ってるけど、自分自身都合良すぎる手札していたってこと気付いてんのかな」

恐らく、気付いているだろうが。気付いていて、無視しているんだろうが。

「あいつは、いっそ清々しいくらい利己主義だしな」

自分に都合のいいことしか考えない。都合の悪いことには目を瞑る。だってその方が幸せでしょ？　と自信満々に言っていた。

メタを使うことに関しても、さだめはまったく躊躇わなかった。

さだめは、

『だって、さだめたちはご都合主義っていうメタなんかより圧倒的

に卑怯な手口を使うんだよ？　今更メタデッキくらいでガタガタ言うのも、なんか……ねぇ？』

と言って苦笑していた。まったくその通り。反論のしようもない。チートドローだのディスティニードローだのを公然とやるのと、相手に合わせたメタデッキを用いることと、どちらが果たして卑怯なのか、ということだ。

「俺たちは最低限の体裁を保って戦っているにすぎない、か……」

アイツは時々、誰も触れたがらない真実を躊躇いなく言い当てるから。

「アイツは、間違っていながら、誰よりも正しいところにいるのかもしれないな」

俺は、得意げに笑う妹の顔を眺めながら、そんなことを思ったのだった。

「私のターン、ドロー！　私はリバースカード『ボーン・テンプル・ブロック』を発動するわ！」

む……。

「お互いの墓地からレベル４以下のモンスターを選択して、自分のフィールドに特殊召喚する。私は貴女の墓地から『霊滅術師カイクウ』を選択するわ」

「……さだめは、選択の余地がないね。『ローンファイア・ブロッサム』だよ」

さだめのフィールドに『ローンファイア・ブロッサム』。蓮さんのフィールドに『霊滅術師カイクウ』が特殊召喚される。

「更に私は『偽りの種』を発動し、『コピー・プラント』を特殊召喚！　効果により、貴女の場の『ローンファイア・ブロッサム』を選択し、レベルを3に変更するわ！」

「！　シンクロ……」

「レベル４『霊滅術師カイクウ』にレベル３『コピー・プラント』をチューニング！　冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け！　シンクロ召喚！　咲き乱れよ！『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

瞬間、フィールドに紅いバラの花びらが咲き乱れ、やがてそのバラが一体の龍を形作った。

「っ……！　黒薔薇の龍……！」

「包み込みなさい……『ブラック・ローズ・ガイル』！」

吹き荒れる黒薔薇が、さだめのフィールドを根こそぎ吹き飛ばしていく。

「チェーンしてリバースカード『異次元からの埋葬』を発動！　除外されている『ネクロフェイス』を二体、墓地に戻す！」

「っな！？」

もちろん、直接これで状況を打破出来るわけじゃない。でも、無為に破壊されるよりはいいし、これで更にデッキ破壊する準備が整った。

「私は『ロードポイズン』を攻撃表示で召喚！　プレイヤーにダイレクトアタック！」

「くっ……」

さだめＬＰ２５００

「カードを一枚セットして、ターンエンドよ！」

「っの……悉く全体破壊してくれるね」

「そっちこそ、散々使い回すつもりでしょう？」

ニヤリと笑いあう。

「さだめのターン、ドロー！　墓地の『ダーク・ネフティス』を効果で特殊召喚し、効果により蓮さんのリバースカードを……」

「チェーン発動！『奈落の落とし穴』！　ネフティスには消えてもらうわ！」

「……なら、さだめは『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚ドロー！」

これで手札は二枚。っていうかコイツか。
「さだめは『闇王プロメティス』を召喚！　効果で墓地に存在する９体の闇属性モンスターをゲームから除外し、攻撃力３６００ポイントアップ！」
「なんですって!?」
「更に、除外された二枚の『ネクロフェイス』の効果発動！　お互いにデッキから１０枚のカードをゲームから除外する！」
「デッキが……！」
さだめのデッキから除外されたのは『大火葬』『魂吸収』二枚『漆黒のトバリ』『闇の誘惑』『トレード・イン』『ファントム・オブ・カオス』二枚『ダーク・グレファー』『闇次元の解放』の十枚。もう今更何が除外されようが知ったことじゃない。
対して蓮さんは『アイヴィー・シャックル』『ギガプラント』『百花繚乱―桜の舞』『イービル・ソーン』二枚『ダンディライオン』『クリッター』『百花繚乱―椿の舞』『ボタニティ・ガール』『フェニキシアン・クラスター・アマリリス』の十枚。苦々しげな顔をする蓮さんだけど、蓮さんだってここに来て今更何が除外されても同じだと感じているだろう。
「さあ、バトルだよ！『闇王プロメティス』で『ロードポイズン』を攻撃！『常闇の脈動』！」
「ぐっ……きゃあああっ!?」
蓮ＬＰ７００
闇王の攻撃は『ロードポイズン』どころか蓮さんすら呑み込んで行く。
「蓮さん！」
「だ、大丈夫、びっくりしただけよ……」
そりゃそうだ。闇のゲームにしてれば兎も角、これは普通のデュエルだし。
「っ『ロードポイズン』の効果発動！　戦闘により破壊された時、墓地の植物族モンスターを一体特殊召喚する！　私が召喚するのは

当然、『椿姫ティタニアル』！」
『さあ、そう何度もやられないわよ～』
「……さだめはこれでターンエンド」
「私のターン、ドロー！　バトルフェイズに『椿姫ティタニアル』で『闇王プロメティス』を攻撃！『ヘイト・カメリア・ウィップ』！」
「くぅ……」
さだめＬＰ９００
召喚ターンを過ぎれば、『闇王プロメティス』はただの攻撃力１２００のバニラ同然。やられるのも当たり前だね。
「私はカードを一枚セットして、ターンエンドよ」
「さだめのターン、ドロー！　さあ、クライマックスだよ……」
結局、さだめが最後に頼るカードはこれなんだよね……。
「どんなに忌み嫌っても、捨てられない過去の象徴……さだめの影！　行くよ！『終焉の精霊』を攻撃表示で召喚！」
これまでに除外されている闇属性モンスターの数は２３枚。『終焉の精霊』の攻撃力は……。
「６９００……！？」
ソリッドビジョンでしかないはずなのに、物理的な重圧すらも感じることのできる程に、さだめの『終焉の精霊』は肥大化していた。
「これで……ラスト！　さだめは『終焉の精霊』で……」
「ま、待ちなさい！　リバースカード発動！『威嚇する咆哮』！攻撃はさせないわ！」
「……そっか。残念。じゃあさだめはカードを一枚セットして、ターンエンドだよ」
この時点で、さだめは半ば予感していた。
「私のターン、ドロー！」
――さだめは、負ける。
「っ！　私は手札から『桜花の王女（チェリーブロッサムセス）』を召喚！　レベル８『椿姫ティタニアル』と、レベル２『桜花の王女』をチューニング！」

見たことのないモンスター。どうやらチューナーらしい。
「草木を総べし姫よ、今こそその真の姿を現し、新たな花を咲かせよ！　シンクロ召喚！　君臨せよ！『椿女帝ティタニアル（カメリア・アブレス）』！」
『さあ、この姿になったからには、負けるつもりはないわよ～』
「更に、シンクロに使用した『桜花の王女』の効果発動！　自身を除外して、墓地の植物族モンスター一体を、効果を無効にして守備表示で特殊召喚！」
にょきにょきと、『ローンファイア・ブロッサム』が蓮さんのフィールドに生えてくる。
「……攻撃力は３３００。『終焉の精霊』には敵わないけど、どうするの？」
リバースカードは『聖なるバリア―ミラーフォース―』。だけど、さだめにはわかる。どうせ意味はない。
「さあ、それはどうかしらね。『椿女帝ティタニアル』の効果発動！　自分フィールド上の植物族モンスター一体を生贄に、相手の攻撃力の半分を自分の攻撃力にすることができるわ！」
『うふふ。どんなに高い攻撃力でも無意味よ～』
「バトル！『椿女帝ティタニアル』で『終焉の精霊』を攻撃！『カメリア・ストライク』！」
「リバースカード『聖なるバリア―ミラーフォース―』」
「無駄よ！『椿女帝ティタニアル』の効果発動！　一ターンに一度、墓地の植物族モンスター一体をゲームから除外して、あらゆる効果を無効にする！『サクリファイス・サンクチュアリ』！」
蓮さんの墓地から巻き上がった黒薔薇が、さだめのバリアを破壊する。
「終わり、か」
「ええ。いいデュエルだったわ」
先ほどの半分ほどになってしまった『終焉の精霊』を、ティルの持つ剣が切り刻む。
「いくらメタ張っても……知らないカード相手じゃ意味ないよね～

……」

……悔しいなぁ。

「……うん。いつか絶対、どんなご都合主義にも負けない、最強のメタ使いになって見せるよ！」

そのための、意味ある負けだと信じよう。

さだめＬＰ０

「本っ当によく勝ってくれた！　ありがとう！」

「あ、あはは……どういたしまして」

「む～お兄ちゃん。妹が負けたのに、涙流して喜ぶのはどうかと思う」

「煩い黙れ。お前が勝ったら大変なことになっていたんだから仕方ないだろ」

「むぅ……」

にしても……やっぱりさだめは、『終焉の精霊』をデッキから抜くつもりはないんだな。まあわかっていたことではあるけど……やっぱり少し複雑だな。

「にしても、『ブラスト・モード』が除外された時は焦ったわ。切り札の一枚だったしね」

「あ、やっぱり？　聞いたことないカードだったから、そうじゃないかと思ったんだ」

そして、スゥ、と俺たちの身体が透け始める。

「……あー、今回はこれでお別れか。時間があれば、俺も祐騎とやってみたかったんだが」

「それは、僕も残念です。またいずれ、機会があれば」

「そうだな。それを待つことにするよ」

『それじゃあさだめちゃん、今度会った時は、思いっきりアダルトトークしましょうねぇ～』

「あ、うん。それは悦んで！　じゃなかった喜んで！」
『今、どこを訂正したんですか……？』
『エールちゃんは、知らなくてもいいのよ～』
「そうそう」
「……程々にしておけよ」
「……ティルもね」
「はーい。わかってま～す」
『もちろんよ～』
「「本当か（しら）……？」」
最後に少し不安は残ったが、俺とさだめ（後一応希望も）は四人と別れて元の世界に帰還したのだった。

おまけ

俺たちが帰って来たのは朝方になってからだった。さだめの部屋から戻った俺は、テントの周りが死屍累々になっていることに気付いて頭を抱えた。
「……しまった。トラップ解除しておくの忘れてた……」
俺を起こしに来たのか、テントの周りではアテナがタライの下で目を回していて、ルインがテント前で黒焦げになって倒れていた。というか、アテナたちを救出しようとしたのか剣士たちまでトラップの餌食になってボロボロの状態で気絶していた。ミイラ取りがミイラ。
「……教訓。出かける時は、電化製品のスイッチやコンロの火が消えているかを確認してから、出かけましょう」
『そういう問題じゃない！！』
その場にいた全員から、総ツッコミを喰らう、俺なのだった。

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者２　後編？」（後書き）

こんにちは。

アルカナでは初めてになるのかな？　シンクロです。まあコラボでしか出しませんが。相変わらずアルカナ本編にはシンクロは出ません。

いくつかオリカが出ていましたが、それらの詳細は僕のお気に入りリンク辺りからでも豆フクロウさんの旋風の守護者に跳べば詳しい説明が乗っていますので、参考にしてくださいな。

それでは、豆フクロウさん。コラボにご協力していただいた全ての作家さん。ありがとうございました。今度こそ、１００万アクセス記念で予定されていたものは全て終わりました！……二か月かかった上、もうすでに１８０万近くいっておいて実に今更ですが。後はオリカ紹介と、もしかしたら何か短編の一本くらいは挟むかもしれませんがそれだけやって第四期に入ることになりますので、どうぞ応援、よろしくお願いします。

それでは、悠でした！

アルカナ　オリカ紹介（前書き）

というわけで、オリカの紹介です。本当ならもっと早くにやっておくべきだったんでしょうが……不親切設計ですみません。

しかも、今回アップしたのは僕の考えたオリカのみ。投稿されて使われたオリカはほとんどありません。ぶっちゃけ殆ど活動報告コピペしただけ。

それでも、一定の資料にはなると思うんで、どうぞです。

アルカナ　オリカ紹介

アルカナ～切り札の騎士～

アルカナ　オリカ集

・『切り札の騎士―エース』　☆４　攻／守１０００／１０００
光属性　戦士族
・効果
　このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、カード名に『切り札の騎士』とついたモンスターの攻撃力守備力は２００ポイントアップする。
　このカードが手札から墓地に送られた時、自分はデッキからカードを一枚ドローする。

・『切り札の騎士―テンス』　☆４　攻／守１０００／２０００
光属性　戦士族
・効果
　このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分の『切り札の騎士』と名のついたモンスターが相手に戦闘ダメージを与える度に墓地から『切り札の騎士』と名のついたモンスターカードを一枚手札に戻す。相手の攻撃宣言時、他の『切り札の騎士』と名のついたモンスターが攻撃対象に選択された場合、代わりにこのカードを攻撃対象にすることができる。

・『ポット』　永続魔法
・効果
　このカードの発動時、お互いのプレイヤーはライフを５００ポイント支払わなければ発動できない。スタンバイフェイズ時に、そのターンプレイヤーはライフを１００ポイント単位で支払う（上限５００）。どちらかのプレイヤーがライフを支払う度、１００ポイントにつき一つチップカウンターを乗せる。モンスターを戦闘によって破壊した時、破壊したプレイヤーはこのカードに乗っているチップカウンターをすべて取り除くことで取り除いた数×２００ポイントライフを回復する。

・『レイズ』　通常魔法
・効果
　フィールド上に『ポット』が表側表示で存在するときに発動可能。ライフを５００ポイント支払ってデッキからカードを三枚ドローする。

・『チェック』　永続罠
・効果
　このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分はスタンバイフェイズ時に『ポット』の効果でライフを支払う効果を使用しなくてもよい。

・『切り札の騎士―クィーン』　星４　光属性　戦士族１５００／１６００
・効果
　このカードのカード名は『クィーンズ・ナイト』としても扱う。
　このカードがフィールド上か墓地に存在する限り、このカードは通常モンスターとして扱う。

・『切り札の騎士―キング』　星４　光属性　戦士族１６００／１４００
・効果
　このカードのカード名は『キングス・ナイト』としても扱う。フィールド上に『クィーンズ・ナイト』が存在する場合にこのカードの召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した場合、デッキから『ジャックス・ナイト』を特殊召喚することができる。

・『切り札の騎士―ジャック』　星５　光属性　戦士族　１９００／１０００
・効果
　このカードのカード名は『ジャックス・ナイト』としても扱う。このカードがフィールド上か墓地に存在する限り、このカードは通常モンスターとして扱う。

・『ジャム・ウォリアー』　星１　光属性　戦士族３００／２００
・効果
　このカードがカウンター罠のコストとして墓地に送られた場合、このカードのコントローラーはデッキからカードを二枚ドローする。

・『アルカナソード　ハート』　装備魔法カード
・効果
　このカードは『切り札の騎士』と名のついたモンスターか『アルカナ　ナイトジョーカー』にのみ装備することができる。このカードを装備したモンスターの攻撃力を５００ポイントダウンさせる。装備モンスターは戦闘によっては破壊されず、その際に発生する戦闘ダメージは無効になり、その分だけ自分はライフポイントを回復する。装備モンスターは攻撃宣言を行うことができない。

・『冥幼竜ヴァーミリオン』　星４　闇属性　ドラゴン族　攻／守

７００／２５０
・効果
　カウンター罠のコストとして墓地に送られたこのカードが自分のスタンバイフェイズに墓地に存在する場合、墓地のこのカードを手札に加える。

・『アルカナソード　クローバー』　通常罠カード
・効果
　自分フィールド上の『アルカナ　ナイトジョーカー』か、切り札の騎士と名のついたモンスターが破壊され、墓地に送られた場合墓地から破壊されたモンスターとは別の上記のモンスターを一体選択して特殊召喚し、このカードを装備カード扱いで装備する。
　このカードを装備したモンスターの攻撃力は７００ポイントアップする。装備モンスターが破壊された場合、このカードを破壊する。装備されたこのカードが破壊された場合、装備モンスターを破壊する。

・『アルカナソード　ダイヤ』　装備魔法カード
・効果
　『アルカナ　ナイトジョーカー』か、切り札の騎士と名のついたモンスターにのみ装備可能。装備モンスターの攻撃力は３００ポイントアップし、装備モンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した場合、自分はデッキからカードを一枚ドローする。装備モンスターが戦闘によって破壊され、墓地に送られた場合自分はデッキからカードを一枚ドローする。

・『未来への光』　儀式魔法カード
・効果
　『希望の女神ルイン』の降臨に必要。フィールド上から、『破滅の女神ルイン』を含み、レベルの合計が１２になるように生贄に捧

げる。その後、手札から『希望の女神ルイン』を特殊召喚する。

・『希望の女神ルイン』　光属性　天使族　☆１２　攻／守　２５００／２５００
儀式・効果
　『未来への光』により降臨。自分フィールド上の『破滅の女神ルイン』を含み、レベルの合計が１２になるように生贄に捧げなければならない。このカードは『未来への光』の効果によってのみ特殊召喚することができる。
　このカードは相手フィールド上のモンスターの数だけ攻撃することができる。
　このカードが相手モンスターを戦闘によって破壊し、墓地に送った場合、その攻撃力の半分ライフを回復する。このカード以外に自分フィールドに女神ルインと名の付くモンスターがいる場合、このカードを破壊する。

・『過去への郷愁』　儀式魔法カード
・効果
　『慈愛の女神ルイン』の降臨に必要。フィールドから『破滅の女神ルイン』を含み、レベルの合計が１２になるように生贄に捧げる。その後、手札から『慈愛の女神ルイン』を特殊召喚する。

・『慈愛の女神ルイン』　光属性　天使族　☆１２　攻／守　２５００／３０００
儀式・効果
　『過去への郷愁』により降臨。自分フィールド上の『破滅の女神ルイン』を含み、レベルの合計が１２になるように生贄に捧げなければならない。このカードは『過去への郷愁』の効果によってのみ特殊召喚することができる。
　儀式召喚に成功した時、自分の墓地に存在するモンスターの数×

２００ポイントライフを回復する。
　このカードはカード効果によっては破壊されない。このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた場合、その数値分自分のライフを回復する。
　一ターンに一度ライフを２０００ポイント支払うことで自分か相手の墓地に存在する通常召喚可能なモンスター一体を自分フィールド上に特殊召喚することができる。
　このカードが墓地に送られた場合、このカードの効果で特殊召喚されたモンスターをこのカードのコントローラーの手札に戻す。
　自分フィールド上にこのカード以外に女神ルインと名の付くモンスターがいる場合、このカードを破壊する。

・『フェニックス・リボーン』　速攻魔法
効果
自分の墓地から鳥獣族一体を選択して自分フィールドに特殊召喚する。相手はカードを二枚ドローする。

・『水神使いエリア』　星８　水属性　魔法使い族　攻／守２８００／２５００
効果
　このカードは通常召喚出来ない。『神霊の継承』の効果によってのみ特殊召喚する。一ターンに一度、手札の水属性モンスター一体を墓地に送ることで相手フィールド上の水属性モンスター一体のコントロールを得ることができる。
　自分フィールド上に存在する水属性モンスター一体をリリースすることで、相手の手札を確認し、一枚を選択して墓地に送る。この効果は一ターンに一度だけ使用することができる。
　このカードが戦闘で相手守備表示モンスターを破壊した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その分だけ戦闘ダメージを与える。

・『神霊の継承』　通常魔法
効果
自分フィールド上に存在するエリア、ヒータ、アウス、ウィン、ダルク、ライナと名のついたモンスター一体を選択して発動する。自分フィールドの、選択したモンスターと導属性・レベル８以上のモンスター一体を選択して両者を墓地に送る。デッキから最初に選択したそれぞれのモンスターと同じ名のついた神使いを一体選択し、特殊召喚する。

・『切り札の騎士団長―エース』　光属性戦士族　星７　攻／守２０００／２０００
効果
このカードは、『切り札の騎士―エース』としても扱う。
このカードをアドバンス召喚する際、切り札の騎士と名のつくモンスターをリリースすることで、リリース一体でアドバンス召喚することができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いのプレイヤーは一ターンに一度、手札を墓地に送った時、デッキからカードを一枚ドローする。

・『アルカナソード　スペード』　装備魔法
効果
『アルカナ　ナイトジョーカー』か、切り札の騎士と名のついたモンスターにのみ装備することができる。このカードを装備したモンスターが行う戦闘によって発生する戦闘ダメージは倍になる。

・『アルカナソード　ジョーカー』速攻魔法
効果
自分の墓地の『アルカナソード　ハート』『アルカナソード　スペード』『アルカナソード　ダイヤ』『アルカナソード　クローバ

ー』の四枚をゲームから除外し、自分のライフを半分支払うことで発動する。自分のデッキ・手札・墓地から通常召喚可能な切り札の騎士と名のつくモンスターを出来る限り特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは、ターン終了時に破壊され、その攻撃力の合計の半分をダメージとして受ける。

・『切り札の騎士帝―アルカナ　ロイヤルジョーカー』　星１１
光属性戦士族
攻／守　４５００／３８００
　融合・効果
　『切り札の騎士―エース』＋『切り札の騎士―ジャック』＋『切り札の騎士―クィーン』＋『切り札の騎士―キング』＋『切り札の騎士―テンス』
　このカードの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。
　このカードは守備モンスターと戦闘する際相手の守備力を攻撃力が上回っていればその分だけ相手ライフにダメージを与える。
　このカードを対象にした魔法・罠・モンスター効果を、手札を一枚捨てることで発動と効果を無効にし、破壊する。この効果は、スペルスピードを3として扱う。

・『絵札の結束』　速攻魔法
　効果
　ライフを１０００ポイント支払う。自分フィールド上、墓地から、決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、エクストラデッキから『アルカナ　ナイトジョーカー』か、切り札の騎士と名のついた融合モンスターを一体自分フィールド上に特殊召喚する（この召喚は融合召喚として扱われる）。

・『チューンアップ』　通常魔法
　効果

自分フィールド上に攻撃力１０００以下のモンスターが存在するときのみ発動することができる。デッキから『チェンジギアモーター』を特殊召喚することができる。

・『チェンジギアモーター』　星３　地属性　機械族　攻／守１００／０
・ユニオン　効果
一ターンに一度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の攻撃力１０００以下の機械族モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターの攻撃力は８００ポイントアップする。
自分のバトルフェイズ時のみ、このカードを装備したモンスターの攻撃力を８００ポイントアップすることができる。この効果を使用した場合、装備モンスターは戦闘後、守備表示になる。（１体のモンスターが装備できるユニオンは１枚まで。装備モンスターが戦闘によって破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。）

・『ジャンク・リサイクル・フュージョン』　通常魔法
効果
エクストラデッキに存在する機械族の融合モンスター一体を選択する。その融合素材に指定されたモンスター二組を、自分の墓地から除外することで、その融合モンスターを融合召喚扱いで特殊召喚する。

・『バイクロイド』　星６　地属性　機械族　攻／守２４００／１０００
・融合　効果
『サイクロイド』＋『チェンジギアモーター』

このモンスターの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。
このカードは、機械族ユニオンモンスターの装備条件を無視してこのカードに装備することができる（この効果を使って装備したユニオンモンスターの効果は適用される）。

・『天剣―ネイキッド・ギア・フリード』　星１０　光属性戦士族
攻／守２８００／２４００
融合・効果
『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』＋『天使族モンスター』
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードに装備カードが装備された場合、自分の除外されている戦士族モンスター一体を自分フィールド上に特殊召喚することができる。この時装備された装備カードがフィールドに存在しなくなった場合、この効果によって特殊召喚されたモンスターを破壊する。特殊召喚されたモンスターが破壊された場合、その装備カードをゲームから除外する。
バトルフェイズ中、このカードに装備された装備カード一枚を破壊し、墓地に送ることで、このカードは通常の攻撃に加えてもう一度だけ続けて攻撃することができる。

・『終焉の花嫁ルイン』　星１２　闇属性天使族　攻／守２０００／２０００
融合・効果
『慈愛の女神ルイン』＋『終焉の精霊』
このカードは、融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードは、上記の融合素材でしか融合召喚できない。
このカードの融合召喚は、フィールドでしか行えない。
このカードの融合召喚に成功した時、このカード以外の、ゲーム中全てのカードをゲームから取り除く。この効果で除外されたカードの効果は無効化される。

この効果が発動したターンのエンドフェイズ、自分はデュエルに敗北する。この効果は無効化されない。

・『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』　星３　闇属性　獣族　攻／守１３００／１０００

効果

このカードが戦闘によって破壊され、墓地に送られた場合、デッキから同名モンスター一体を特殊召喚することができる。

また、このカードが戦闘によってモンスターを破壊し、墓地に送った場合、墓地に存在する同名カード一体を特殊召喚することができる。

このカードの効果によって特殊召喚された場合、このカードは特殊召喚されたターンに攻撃することができない。

・『加速する終焉』　永続魔法

効果

このカードが表側表示で存在する限り、各プレイヤーは自分のエンドフェイズに次の効果から一つを選んで発動する。

●手札を一枚選択し、墓地に送る。

●８００ポイントのダメージを受ける。

●デッキの上から五枚ゲームから除外する。

●自分フィールド上のカード一枚を破壊する。

・『終焉の魔薬』　速攻魔法

効果

このカードは自分か相手のメインフェイズにのみ発動することができる。

手札を一枚捨てる。相手モンスター一体を選択し、選択したモンスターの攻撃力をエンドフェイズ時までゼロにする。

このカードを発動したターン、バトルフェイズ中に相手が受ける戦闘ダメージはゼロになる。

・『終焉の死神（ジ・エンド・グリムリーパー）』　星４　闇属性　アンデット族　攻／守１７００／１４００
効果
このカードがデッキから直接除外された場合、自分と相手の墓地に存在するカードを一枚ずつ選択し、ゲームから除外する。

・『終焉の死霊術師（ジ・エンド・ネクロマンサー）』　星４　闇属性　魔法使い族　攻／守６００／２０００
効果
一ターンに一度、墓地の闇属性モンスター一体をゲームから除外することで、墓地の『終焉の』と名のつくモンスター一体を特殊召喚する。この効果によって特殊召喚されたモンスターは攻撃することが出来ない。

・『腐り堕ちる世界』　カウンター罠
効果
自分フィールドに存在する「終焉の」と名の付くモンスターが戦闘によって破壊され、墓地に送られた時に発動。ライフを２０００ポイント支払い、フィールド上に存在する全てのカードを破壊してその数×３００ポイントのダメージを相手に与える。

・『終焉の夜王（ジ・エンド・ナイトキーパー）』　星７　闇属性　悪魔族　攻／守２６００／８００
効果
このカードは「終焉の」と名の付くモンスター一体をリリースしてアドバンス召喚することができる。
このカードがフィールドに表側表示で存在する限り、フィールド上の表側表示モンスターの属性は「闇」としても扱う。このカードは一ターンに一度、バトルフェイズをスキップすることで、フィールド上に存在する闇属性モンスターの数×６００ポイントのダメー

ジを相手ライフに与えることが出来る。

・『反魂のスピリチュア』　星７　光属性　天使族　攻／守８００／２６００

効果

光属性のこのカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、一ターンに一度、次の効果を発動することが出来る。

●手札を任意の枚数捨てる。その枚数だけ、相手フィールド上に表側表示で存在する闇属性モンスターを選択し、デッキに戻す。その後、デッキに戻した闇属性モンスターの数だけ自分の墓地から光属性モンスターを選択し、効果を無効にして特殊召喚する。

●相手の墓地に存在する闇属性モンスター一体を選択し、デッキに戻す。その後自分の墓地から光属性モンスター一体を選択し、効果を無効にして特殊召喚する。

・『ライアー』　星４　闇属性　悪魔族　攻／守　１９００／１１００

効果

自分のメインフェイズに、墓地に存在するこのカードをデッキに戻してシャッフルすることができる。

また、自分フィールドに表側表示で存在する闇属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時に、このカードを手札から墓地へ送ることで、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力は、エンドフェイズまでそのモンスターの攻撃力の数値分ダウンする。

・『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』　星９　闇属性　戦士族　攻／守３８００／２５００

効果

このカードは通常召喚できない。

自分のエクストラデッキから『アルカナ　ナイトジョーカー』一

体をゲームから除外した場合にのみ特殊召喚できる。
　このカードの特殊召喚に成功した場合、自分フィールド上に存在するこのカード以外のモンスターを全て墓地に送る。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分はモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚することは出来ない。
　このカードが表側表示で存在する限り、自分の他のモンスターは攻撃宣言できない。
　フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。
　相手がフィールド上のカード一枚を対象にする魔法・罠・モンスター効果を発動した場合、手札を一枚捨てて、その効果を無効にする。

・『Ｓｉｎアルカナ　ロイヤルジョーカー』　星１１　闇属性　戦士族　攻／守４５００／３８００

効果

　このカードは通常召喚できない。
　このカード以外の手札が二枚以上存在し、自分フィールド上に表側表示で存在する『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』が破壊された場合に、ライフが１００ポイントになるように支払い、このカード以外の手札を全て捨てた場合のみ特殊召喚できる。
　このカードの特殊召喚に成功した場合、自分フィールド上に存在するこのカード以外のモンスターを全て墓地に送る。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分はモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚することは出来ない。
　このカードが表側表示で存在する限り、自分の他のモンスターは攻撃宣言できない。
　フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。
　相手が魔法・罠・モンスター効果を発動した時、手札一枚を除外

して発動と効果を無効にし、破壊する。この効果は、ルール上スペルスピード3として扱われる。

・『リチュアルクィーン-エル・アリア』　星８　水属性　魔法使い族　攻／守２８００／３０００
　儀式・効果
　「リチュア」と名の付いた儀式魔法により降臨。
　フィールド上に存在する『リチュアルクィーン-エル・アリア』以外の「リチュア」と名の付いた儀式モンスターをリリースする度に、相手の墓地・フィールド・手札のいずれかに存在するカードを一枚選択してデッキに戻す。
　このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手はこのカード以外の「リチュア」と名の付いたモンスターを攻撃することは出来ない。
　このカードが破壊され、墓地に送られた場合、自分の墓地に存在する『リチュアルクィーン-エル・アリア』以外の「リチュア」と名の付いたモンスター一体を選択し、フィールド上に特殊召喚することが出来る。

・『チュートリアルバトル』　速攻魔法
　効果
　自分フィールド上に存在する「ＬＶ」と名の付いたレベル４以下のモンスター一体を選択して発動する。このターン、選択したモンスターが行う戦闘によって発生するダメージはゼロになり、戦闘を行う相手モンスターを攻撃力守備力はゼロとなる。

・『ミスティック・ソードマンＬＶＭａｘ』　星１２　地属性　戦士族　攻／守３３００／２７００
　効果
　このカードは通常召喚出来ない。

自分フィールド上に存在する『ミスティック・ソードマンＬＶ６』が、戦闘により相手モンスターを破壊した時、自分フィールド上の『ミスティック・ソードマンＬＶ６』をリリースした場合のみ特殊召喚することが出来る。
このカードが戦闘を行う相手モンスターの効果は無効となる。
このカードが相手モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算を行わず、そのままそのモンスターを破壊することが出来る。
この効果で破壊したモンスターを墓地へ送らず、相手のデッキに一番上に置くことが出来る。

・『サイレント・ソードマンＬＶＭａｘ』　星１２　光属性　戦士族　攻／守３８００／２０００
効果
このカードは通常召喚出来ない。
このカードは『サイレント・ソードマンＬＶ５』の効果によって特殊召喚された『サイレント・ソードマンＬＶ７』をリリースした場合のみ特殊召喚できる。
このカードの特殊召喚に成功した時、フィールド上に存在する表側表示の魔法カードを全て破壊する。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は魔法カードを発動することは出来ない。

・『サイレント・チェンジ』　通常罠
効果
自分フィールド上のモンスターが攻撃対象となった時、そのモンスターを破壊することで、デッキ・手札からそのモンスターのレベル以下の『サイレント』と名の付いたモンスター一体を特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる。

・『チートコード』　永続魔法

効果

一ターンに一度、自分フィールド上に存在するレベルモンスター一体を選択して発動することが出来る。選択したモンスターの効果を、発動条件を無視して発動することが出来る。

このカードが表側表示で存在する限り、自分はエンドフェイズ時に１０００ポイントライフを失う。

・『切り札の騎士―ブラック・ジャック』　星８　闇属性　戦士族

攻／守２１００／２１００

融合・効果

『切り札の騎士―エース』＋『切り札の騎士―クィーン』又は『切り札の騎士―キング』又は『切り札の騎士―ジャック』又は『切り札の騎士―テンス』

このカードの融合召喚は、上記のカードでしか行えず、融合召喚でしか特殊召喚出来ない。

このカードが戦闘を行った場合、相手プレイヤーに与える戦闘ダメージはゼロになる。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し、墓地に送ったバトルフェイズ終了時、相手ライフに２１００ポイントのダメージを与える。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードの攻撃力・守備力は変動しない。

アルカナ　オリカ紹介（後書き）

こんにちは。

投稿されたオリカなどは、暇を見て追加していきます。これ以降に出るオリカも含めて。

にしても、結構出たなぁオリカ……。最初は出さないつもりだったんだけど……まあ今は出して良かったと思っていますが。それでも、あんまりオリカを増やしすぎるのは不親切でしょうし（今更か）、今後はできるだけ抑えて行きたいと思っています。演出上仕方なく出すオリカはありますが。

多分、次回更新から第四期に入れると思います。長かった……。

それでは、悠でした！

※８／２８日　オリカ追加
※９／２１日　オリカ追加
※９／２６日　オリカ追加
※９／３０日　オリカ追加
※１／２５日　オリカ追加
※２／６日　オリカ追加
※５／１日　オリカ追加
※７／１０日　オリカ追加

第四期第一話「始まりのバカンス」（前書き）

ついに改訂作業も第四期。そして、この第四期は一気に改訂を終わらせました。……はい。改訂終わりました。よって全部一気にアップします。十三話連続で。どういう更新速度だ。それでは、まずは一話目、行ってみましょう。

第四期第一話「始まりのバカンス」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第一話「始まりのバカンス」

ザザーン。

この言葉から、諸君はまず何を思い浮かべるだろうか？

「私は、ヘドロ怪獣だと思います」

「アテナ。前から思っていたんだが、お前はネタが古過ぎると思うんだ」

今時誰が帰って来た光の国の宇宙人に出てきたマイナー怪獣を連想するのか。

まあ、そんなイレギュラーな連想ゲームはさておき、普通の人はこう思うのではなかろうか。

海だ、と。

「……なんで精霊界に来て、最初に来るのが海なんだろうなー」

「夏、だからだと思いますよ？　セツも泳ぎませんか？」

「暗黒大要塞鯱とか要塞クジラとかが遠くに見える上、挙句黒き人食い鮫とか泳いでる海では、泳ぎたくないなぁ」

そもそも俺は泳げない。尚も泳ぎましょうよと誘ってくるアテナやさだめに断固拒否の構えを貫きながら、俺はこうなるまでの経緯を思い出していた。

希冴姫が消え、さだめが復活してから、俺たちは精霊界に行く準備を整えていた。剣士、凛といった、本来は無関係とも言えるメンツも、希望の助言で連れて行くことにした。もちろん、凛辺りは仕事の関係ですぐに、とはいかないようだったが、希望がスポンサー権限を発動させて事務所に話をつけてしまった。

凛自身も快く引き受けてくれたのは良かった。

「アイドルのお仕事は好きだけど、それは平和になってからでもできるから」

といって。

剣士も、アカデミアを休むことになるにも拘らず、普通に賛同してくれた。

「アカデミアには、僕の方から話を通しておこう。この際だ。使える権力は総動員するさ。こういう時のために、偉くなったんだからね」

と、希望が色々な雑事を一手に引き受けてくれたのが大きかったが。

「よし……それじゃあ、みんな。覚悟はいいか？」

「当然だ。あのクレイジー、蘇生してからもう一度墓地送りにしてくれる」

「……程々にしておけ。俺も、希冴姫には言うことがある」

真っ先に答えたのはエース。

「ユーキさんも、精霊界にいるはずです。諸々全部、終わらせてしまいましょう」

「……ああ。そうだな。それがいい」

アテナが、小さくガッツポーズしながら答える。

「さだめは、聞くまでもないよね？」

「……だな」

コイツは、何があろうと付いてくるだろう。いや、へばりついてくるだろう。

「……決着はつける。貴方も、私も、その相手がいるはずだから」
「……そうだな。俺は……」
「サイクロイドとか」
「そうそうあの二輪とはいつか決着をって違う！　っていうかあれか、またお前は向こうでアイツを呼び出すつもりか！？」
「ムードメーカー」
「やめてくれ！」
まったく……ルインは。
俺は溜息を吐いて、周囲を見渡す。皆、覚悟は決まっているようだった。
「よし……じゃあ、ゲートを開くぞ」
ゴクリ、と誰かが域を呑む音が聞こえた。俺たちの目の前が光輝き、そして……。
「……パソコン？」
「さあ、みんなで叫ぼう！　デジ○ルゲート、オープン！」
「お前結構気楽だよなぁ！？」
剣士が突っかかって来るが、俺は肩をすくめて受け流す。
「俺の知ってる一番ポピュラーなゲートなんだよ」
「気が抜けるだろうが！」
エースにも不評。なんだ、０２の何が悪い。
「いや、別に０２がどうとか言う問題じゃないと思うんですけど」
「アテナ……お前ならわかってくれると思っていたんだが……残念だ」
大ブーイングだった。さだめだけ妙に楽しそうに「デジ○ルゲート、オープン！」と叫んでいるが。そういやアイツもあの時代が好きだったか。
「でもさ～ほら、俺たちが揃って『デジ○ルゲート、オープン！　選ばれし子供達（イレギュラー）、出動！』とかやったら、ぴったりじゃね？」
「セツ……一応シリアスな場面なんですし、自重した方が……」
「じゃあ、俺が先に行って向こうから使い魔召喚の儀式っぽく……」

「コントラクト・サーヴァントまで再現してくれるなら、私はそれでもいいです」
「さだめも」
「私も」
「……すまん。自重する」
「ってなんでそこで引くんですか！」
ま、ふざけるのはここまでにしておくか。
「……希望。見送り、サンキュな」
「ああ。計画は最早、僕の手を離れた。もちろん、これからどうするかの提案はあるけれど……君たちは、それを望まないだろう？」
「ああ。いつまでも攻略本に頼りっきりじゃ、情けないしな」
「ふっ、言うじゃないか。ラストダンジョン目前で」
「だからこそ、だろ？　ラストにする。だからこそ、最後は俺たちがやらなきゃいけない」
「……今、精霊界はそれほど安全じゃない。ユーキがいるからか、終焉の影響がモロに世界全体に及んでいる。くれぐれも、気をつけて」
「ああ……」
希望の差し出してきた右手に、俺の右手を合わせる。
「雑事は引き受けた。君たちは、ただ、心の導きのままに進むが良い。世界はきっと、君に優しい」
「……ああ！」
もう一度強く握手して、希望は背を向けた。
「……セツ」
「ああ。行くか！　精霊界に！」
『応！』
「デジ○ルゲート、オープン！　選ばれし子供達（イレギュラー）、出動！」
「ってそれはやるのかよ！？」
剣士のツッコミをＢＧＭに、俺たちは光の中に呑まれて行った。

……うん、ここまではいいんだ。ここまでは。若干ふざけたところもあるが、概ねシリアスに纏まっていた。問題はここからか。

俺たちが精霊界について、さあまずはどうしようか。となったのだが……。

「ここは……海？」

俺たちの前に広がるオーシャンブルー。キラキラと輝く白い砂浜。まごうことなき海だった。

「暑……」

ギラギラと照りつける太陽に、思わず感想が漏れる。

「お、おおおおぉぉぉ……」

「……さだめ？」

「う……」

「う？」

「海……だっ！」

「さ、さだめ？」

「海だぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

「うおっ！？」

止める間もなくさだめが服を脱ぎ捨てながら海に突進していってしまう。というか、その真っ黒な水着はいつの間に着たんだ。

「多分、あれ水着じゃなくて影だと思います……」

「実質裸じゃねえか！」

あの馬鹿！　ネ〇ま！　の脱げ女のパターンを忘れたのか！

「というか、何故あんなにはしゃいでいるんですか？」

「多分、海に来たのが初めてだからじゃないか？　アイツ、前から海やプールに行きたがっていたしな」

俺の答えに、アテナたちは意外そうな顔をした。

「え？　セツたちって、海に来たことなかったんですか？」

「当たり前だろ。俺は泳げないし、何よりさだめの前で一瞬でも半

裸になったら食われる」
　一応、他にも理由はあるんだが……できればこれは言いたくない。
あ、でもルインは知っているんだったか。
「セツ……？」
「なんでもない。とにかく、さっさとあの馬鹿連れてこい」
　何故かこんな浅瀬まで出てきていた『黒き人食い鮫』とガチバトルを繰り広げているさだめ（何故かめっちゃ笑顔）を指差す。あ、鮫狩られた。
「お兄ちゃん！　フカヒレだよフカヒレ！」
「落ち着けさだめ。フカヒレは乾燥させないとダメだ」
「あ、そう。じゃあいらない」
　ぽいっ、と力尽きた鮫を放りだすさだめ。
「イヤ待て、もしかしてカマボコやチクワならいけるかもしれん。専用の道具がないから原始的な方法になるが……」
「ホント！？」
　慌てて逃げ出そうとした鮫をぐわしっ！　と掴み直すさだめ。びちびち跳ねてる様子が実にシュールだ。
「いえ、そもそも精霊を素手で狩らないでください！　あと、食料にしようとするのもやめてください！」
「ちぇ、いいじゃん味見くらい」
　アテナに突っ込まれてしまったので、仕方なく鮫をリリース（放す）するさだめ。
「けど、精霊界での食糧は必要」
「もう一回狩ってこいさだめ」
「ラジャ！」
「ダメですって！　大体精霊は死んじゃったら消えちゃいますから、食べられません！」
「じゃあどうするんだ？」
「基本的には、野菜とかです。あと、羊」
「スケープ・ゴートか！？　スケープ・ゴートだな！？」

「失礼な。迷える子羊のお肉なんかは、美味です」
「あ、アテナ……流石にそれは食べるのに罪悪感が……」
迷える子羊を、精肉売り場に送っちゃダメだろう。人道的に。
「冗談です」
「アテナの冗談は笑えない！」
白けるか、冗談じゃすまないかのどちらかの意味で。
「で、実際のところは？」
「お店がありますので、そこで」
アテナが指差す先には、海の家。
「……精霊界にも、海の家ってあるんだ」
凛が呆れたような感心したような声を漏らす。
「まあ、他にどうしようもないし、とりあえず入るか……」
「ここはどんな精霊が経営してるんでしょうね」
「……凄い嫌な予感がするぞ。俺は」
サイクロイド的予感をひしひしと感じながらも、全員揃って、ぞろぞろと海の家の暖簾をくぐる。
「おう、いらっしゃい！　いいネタ入ってるぜ！」
同時に聞こえる威勢のいい掛け声。というか、すんごい聞き覚えがある。
「おお！　兄さんたちじゃねえかい！　久しぶりだな！」
「……帰るぞ。皆」
案の定、俺の予感は的中していたので、冷静に皆の背中を押す。
「待て待て待て！　そりゃねえぜ兄さん！　まさかこの俺っちを忘れたわけじゃないだろう？　この、サイクロイド様を！」
「……俺が知っているのは二輪だ。一輪に知り合いはいない」
二輪の方も知り合いたくはなかったが。
「おいおい兄さん。今時の二輪はトランスフォームして一輪にも三輪にもなれるって相場は決まってるんだぜ？」
「そんなことはどうでもいい。俺たちは帰る」
「まあまあ、折角来たんだから、マズイラーメンでも食ってきな！

かき氷もあるぜ！」
「わーい！　かき氷～」
「マズイって言っちゃっていいんでしょうか……」
「海の家のラーメンは大抵マズイ」
「それもそうですね」
「おいコラお前ら、何躊躇いなく席についてやがる！」
「いいじゃんお兄ちゃん。お言葉に甘えようよ」
「嫌だ！」
「つれないこと言うない兄さん。俺っちと兄さんの仲だろう？」
「どんな仲だ！」
天敵が！
「大体、なんでお前がこんなところで海の家経営してやがる！」
「……意外なモンスターが経営している場合もありますよ？」
「意外すぎるわ！」
誰が海の家を自転車が経営していると思うのか。
「これがホントの自転車操業」
「やかましい！」
「なぁに、俺っちはただのバイトよバイト」
「精霊もアルバイトするのか」
「……近頃の奴ぁ、何処に行くにもエクスプレスだのジェットだのってよぉ……」
「……要するに、金がなくて暇なんだな」
精霊界も不景気は変わらないらしい。
「だが、ハマの潮風に吹かれて一人黄昏るのも、また乙なもんよ……」
「そんなことしてるからお前錆びるんだよ！　潮風舐めんな！」
「セツ。落ち着いてください。それより、丁度いいですから、ここで今後の方針を固めてしまいましょう」
「あ、ああ。悪い、取り乱した」
アテナに言われて、確かに今のこの場所は仮の拠点として会議す

るには都合が良いことに気が付いた。
「よし。じゃあまずは基本方針から決めてしまおう」
全員の顔を見回して話始める。
「まず、俺たちの目的を再確認しておこう。俺たちの第一目標は、希冴姫の蘇生。次いで、ユーキちゃん……終焉の打倒だ」
これには、全員異存はなかったのか何も言わずに頷く。
「基本的に全員纏まって動こう。各個撃破されるのは痛い。実力的に不足とは考えちゃいないが……デュエルはともかく、下手すれば実力行使もあり得ないとは言えない」
実力行使の言葉に、誰かがゴクリと息を呑む音が聞こえた。
「実力行使って……」
「……あんまり考えたくはないが、物理的に攻撃してくることも考えられる。だから、基本的にエースやルイン、さだめからは離れないように」
「うわ、さだめ別枠？」
「黒き人食い鮫とガチバトルして狩る奴は単独行動でも問題ないだろ」
攻撃力は大したことないとは言え、精霊を一蹴出来るなら一応大丈夫だろう。
「行動指針だが、まずはこのまま希冴姫たちの城に行こう。ジャックにキング、それにネイキッドが居る筈だ」
実質、俺たちの拠点と出来るのはそこかシャルナの屋敷くらいだろう。そして、あんなゴミ屋敷を拠点にはしたくない。
「アテナ、希冴姫を蘇生させるのに、どれくらい時間かかる？」
「そうですね……希冴姫さんは、肉体が完全に消失してしまっていますから……私の蘇生は、魂（ソフト）がメインで、肉体（ハード）は専門外ですから……多分、冥界側の協力が要ります。まずは、冥界に向かうべきでしょう」
「……やれやれ。また向こうに行くことになるとはな……」
エースが辟易した表情を見せる。俺もあそこに行ったことがある

からわかるが、冥界はあまり好き好んで行きたいと思う場所ではない。
「シャルナにも手伝って貰って、冥王竜のお力を借りられれば、希冴姫さんたちの神殿で、転生の儀が行えるでしょう」
ヴァンダルギオンの協力は得られるだろう。なんらかの妨害が入るかもしれないが、それ以外は問題ないな。
「よし、それじゃあ……」
「凛」
会議を終わろうとしたところで、海の家の入口から、凛を呼ぶ凛とした声……いや、シャレじゃなくて。
「エリア！　どうしたのこんなところまで……」
「貴女たちが来ることは、真中希望から聞いていたのよ。今の話も、真中希望から事前に聞いていたわ」
「アイツ……俺たちの会議内容先読みしてやがったのか……」
「それで、ここに？」
「ええ。早速だけど凛。貴女が強くなる道は、正にここにある。貴女たちがここに来たのも、何か運命的なものを感じるわね」
「ここに……？」
「海底神殿よ。海の底に沈んだ、忘れられた神殿。そこで、貴女の力が待っている。それが、エンディミオンの『水晶の占い師』によって導かれた貴女の運命」
「私の……」
「そこの二輪」
「あん？　俺っちかい？」
「貴方、バグロスと知り合いなんでしょう？　交渉を依頼するわ」
「おいおい嬢ちゃん。どうせならマブダチと呼んでくれよ。ま、構わねえさ。足が欲しいんだろ？」
「そうよ」
トントン拍子に話が進む。凛すらも戸惑っている内に話が纏まっていく。

「ちょ、ちょっと待ってエリア！」
「なに？　まだ余裕はあるけれど、それほど悠長にしている時間はないのよ」
「その……とっても言い難いんだけど……」
「だから、何よ。言いたいことがあるならはっきり言いなさい。面倒くさいわね」
「うぅ……」
……あんま話したことなかったけど、エリアきっついな。
「えと……サイクロイドさん」
「おう、なんだい嬢ちゃん」
「ラーメン、頼んでいいですか？」
『はぁ？』
思わず、全員で唱和した。
「だ、だって折角海の家に来たんだし……やっぱり、ラーメン食べたいし！」
「おう！　任せな嬢ちゃん！　とびっきりの奴作ってやんよぉ！」
「わぁ！　どんなのが出てくるのかな。楽しみ～！」
「……あのね凛。さっきも言ったように……」
「まだ余裕はあるんでしょ？　少なくとも、私がラーメン食べる時間くらいはあるよね？」
「……はぁ」
「あ、じゃあさだめかき氷ね！　シロップはイチゴ！」
「じゃあ、私は宇治金時にします」
「アテナ、渋いね」
「おいしいですよ？」
「……私は焼きそば。紅ショウガ大盛りで」
「あいよ！」
さっきまでの真剣な雰囲気が吹っ飛び、俄かに騒がしくなる店内。
「……なんつーか、女子はたくましいな。こんな時でもよ」
「いざと言う時、ああやって振る舞える胆力は必要だよ」

あんまり重たくなり過ぎず、普段通り振る舞えるのは流石だ。
「……我は、あそこまで楽観できんがな」
「私もよ。まったく。これから精霊界が戦場になるかもしれないっていうのに、凛ったら……」
「ま、同じ女子でも個人差はあるよな。無理に自分を変えようとすることたない。あいつらもお前らも、自分らしくしてりゃいい」
俺も相好を崩して、届けられた料理を頬張る女子たちを見る。
「マズッ！　何このラーメンマズイよ！」
「ッたり前よ！　ウチのラーメンは、速い、マズイ、笑顔がモットーだぜ！」
「……安くはないのか」
「そりゃあ、兄さんたちの運次第だな」
「ここでも料金ルーレット制かよ！」
「んじゃ、ルーレットスタート！」
「外れろ、外れろ、外れろ！」
「おおっと確率変動キターーー！」
「ぎゃあああああああっ！？」
「平気。私のオゴリ」
「ルイン様ぁぁぁぁぁ！」
「いざとなればさだめが踏み倒すから安心してお兄ちゃん！」
「安心できるか！」
「かき氷はおいしいですね」
「むしろかき氷を不味く作る方が非現実的だと思うぞアテナ」
「あたぼうよ！　俺っちのかき氷は一味違うぜ！？　何せ俺っちから取り外した後輪がハンドルになっているんだからなぁ！」
「手作りのリサイクル用品かお前は！」
わいわい、ガヤガヤと平和な時間が過ぎていく。
「マズイ！　もう一杯！」
「さも青汁のようにラーメンおかわり頼んでんじゃねえよ……」
「すげーな。わんこそばみたいだ……」

呆れる俺と剣士。一体どんな食べ方をしているのか、見る見るうちにラーメンがなくなって行く。
「言うなら、わんこラーメンか？」
「不味いモンお代わりしまくるなよ……」
「やっべぇよ兄さん！　確率変動が終わらねえ！」
「……ルイン、大丈夫か？」
「平気。はした金。それにしても不味い焼きそば。貴方が作って」
「いや、別にいいけど」
「おおっと兄さん。悪いがいくら兄さんでも、俺っちの聖域は侵させねぇぜ！？」
「たかがバイトがさも自分の店みたいに威張るな！」
「あぐぅっ！？　あ、頭が……」
「ああこらそんなに急いで食べるから……」
精霊界についてから、最初の一日は、こんな感じで過ぎていくのだった。そして……。

「……じゃあ、行ってきます」
「気をつけろよ。何があるかわかんねぇんだからよ」
「それなら、剣士さんがついて来てくれれば……」
「残念だけど、バグロスは二人乗り。私と凛で定員よ」
「わかってるよー」
「俺たちここで待ってるから、頑張って来い」
「……はい。ありがとうございます」
凛がバグロスに乗りこむ。
『では、もう一度改めて、行ってきます！』
そう言い残して、凛とエリアを乗せたバグロスは海の底へと潜っていくのだった。

第四期第一話「始まりのバカンス」（後書き）

というわけで、記念すべき第一話。まずは凛の話が始まります。
そして今まで殆ど音沙汰なかったエリアさん再登場。……一応、以前にも一回出てますよ？　間話で。
次回はデュエル……と思いきやまだデュエルじゃないですね。
それでは、悠でした！

第四期第二話「鏡の世界の水の国」（前書き）

二話目～。この話と次話は、エリア＆凛が主役です。特にこの話はエリアが主役、かな？

第四期第二話「鏡の世界の水の国」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第二話「鏡の世界の水の国」

「ふわ～すごいねエリア。海の中って、こんなに綺麗なんだね～！」
「……あんまりはしゃがないで。恥ずかしい」
キラキラと陽の光が差し込んでくる海に感動している私を、エリアは何故か冷ややかな目で見る。
「どうしたのエリア。随分不機嫌そうだね」
「……ちょっとね」
少しアンニュイな雰囲気。元々物静かで、クールなエリアだけど、いつもとは何処か様子がちがう。ホントに何かあるのかな？
「……精霊には、母体からの出産、という習慣はないの」
「え？」
何の話かわからず、私はちょっと間抜けな顔で聞き返してしまった。
「アイドルがそんな間抜け面しないの」
「そ、そこまで間抜け面してないよ！」
も、もうエリアったら……。
「それで、その話がどうしたの？」
「……私たちには母親、とか父親、みたいなものがない。だから、兄弟関係や家族関係、みたいなものもないのよ」
「そうなんだ……」

まだ、話が見えない。
「……察しが悪いわね」
「うぅ……いくらなんでもこれだけじゃわからないよ」
「……厳密な家族はないけれど、家族のような存在はいるの。妹みたいに可愛がっていた娘、とかね」
「エリア……？」
「私にも、終焉に弓引く理由がある、ということよ。それ以上は、着いたら話すわ」
ぐっ、と杖を強く握りしめるエリアに、それ以上の質問は出来なかった。
終焉に弓引く理由、か……。
正直なところ、私自身に終焉に対して思うところは余りない。当然、放っておけば世界を滅ぼしてしまう、というのは聞いているし、因縁の深いさだめやアテナは友達だから、そういう意味では終焉を敵としてみるのに不都合はない。
「……でも、私自身の理由、っていうものはないんだよね」
友達が大変だから、助ける。それ自体は、理由として十分だと思っている。でも、死に物狂いで敵を倒す、明確な理由みたいなものはない。
「それで、いいのかな……？」
それで、最後まで戦えるのか。それが、すごく不安。
その時、ビーッ、ビーッと船内に耳障りな警報が響く。
「な、なにっ！？」
『お嬢さん方、どうやらお客さんみたいだぜ』
「客！？　ど、どういうこと？」
「敵ってことよ。バグロスに搭載された迎撃装置だけで、何処まで対抗できるか怪しいわね……凛。私を使いなさい」
「ど、どうすればいいの？」
「いつも通り、デュエルする時の感覚でいいわ。何でもいい。海中で戦えるモンスター出しなさい。私が指示を出して戦わせるから」

「う、うん！　じゃあ、『ガガギゴ』召喚！」
バグロスさんのコクピットから見える海中に、『ガガギゴ』が召喚される。
「……来るわ！」
『よっしゃ！　迎撃だ！』
徐々に敵影がはっきりと見えてくる。
「ほ、『砲弾ヤリ貝』と『魚雷魚』！？」
「ってことは、後ろに『暗黒大要塞鯱』がいるわね……凛。上級モンスターも用意しておきなさい」
「う、うん！」
『おらおらぁ！　魚雷で俺様に勝とうなんざ百年早いわ！』
「次、右よ！『ガガギゴ』、貴方は専守防衛に努めなさい！　主な防衛はバグロスに任せて！」
エリアの言葉に頷いた『ガガギゴ』さんが、バグロスさんの撃ち漏らした弾幕を撃ち落としていく。爆発の衝撃で船内が揺れる。
「きゃあっ！？」
「落ち着きなさい。この程度で墜ちるポンコツではないわ」
『あたぼうよ！　まだまだいけるぜ！』
しかし、尚も弾幕は尽きない。
「くっ……いい加減に、しなさいっ！」
エリアが一匹の『砲弾ヤリ貝』のコントロールを奪って数体の『魚雷魚』を撃ち落とす。
『にゃろッ……！　しつけえ！』
「召喚っ『グリズリーマザー』！」
青の毛皮を持ったグリズリーがその巨体を利用して弾幕を防ぐ。
でも、いくらなんでも数が多過ぎて、耐え切れなくなった『グリズリーマザー』が消滅していく。
「『グリズリーマザー』の効果！　デッキから『ネオアクアマドール』召喚！」
「よし……それなら！」

『ネオアクアマドール』の作りだす氷壁が、全ての弾幕を防ぐ。
「これで、なんとか……」
しばらくすると、弾幕も止み、海中に元の静寂が戻って来た。
「油断するんじゃないわよ。弾切れしたのか無駄だと悟ったのか知らないけど、要するに今度は大物が来る」
「わ、わかってる……！」
エリアの言葉に気持ちを引き締める。そうだ、ここはもう、人間界じゃないし、日常でもないんだ……！
「っ来る！」
『レーダーに反応アリだ！　来るぜお嬢さん方！』
「凛！」
「うん！『ガガギゴ』をリリースして『ギガガガギゴ』召喚！」
海中に居た『ガガギゴ』が、更に強化されて『ギガガガギゴ』に進化する。
敵は多分、『暗黒大要塞鯱』。それなら、『ギガガガギゴ』の攻撃力でどうにかなる筈！
「……チッ。マズッたわね」
「え？」
「『魚雷魚』や『砲弾ヤリ貝』が飛んできたからって、敵が『暗黒大要塞鯱』だけとは限らないってことよ」
エリアの言葉通り、見えてきたのは『暗黒大要塞鯱』だけじゃなくて、それよりは小さいけど、もっと大きな力を持った深海の王。
「ちょ、『超古深海王シーラカンス』……！？」
「しばらくは『ネオアクアマドール』で耐え切れるでしょう。でも、そう長くは持ちそうにないわね」
「じゃ、じゃあどうすれば……」
視界の奥では、『超古深海王シーラカンス』の傍にぞくぞく集まってくる魚族のモンスターたち。確かに、これじゃあいくらも持たないかも……。
「私が出る。準備をして」

「あ、うん！　じゃあ『ネオアクアマドール』と『ギガガガギゴ』をリリースして『ゴギガガガギゴ』を召喚！　エリア！」
「わかってるわ！」
エリアが半透明になって海中へ飛び出していく。
「魔法カード『神霊の継承』！『ゴギガガガギゴ』と『水霊使いエリア』をリリースして『水神使いエリア』を特殊召喚！」
『ネオアクアマドール』の氷壁が消えたことでこちらに攻撃を加えようとしていたモンスターたちは、転身したエリアに驚き、身を固める。
『さあ、薙ぎ払うわよ』
エリアがその力を使って、次々と敵を殲滅していく。更に、そのお供となっている『ゴギガガガギゴ』もまた、一騎当千の働きを見せてくれている。
『ハッ！　負けられねえな！　ううぅらぁ！　墜ちろぉ！』
小粒なモンスターはバグロスさんが撃ち落とす。
『水神使いの名を以って命ずる……その身を縛る、あらゆる戒めを打ち破れ！』
エリアの杖から放たれたビームがシーラカンスの額に命中する。同時に、シーラカンスの背中から黒い影が。
「あれは……」
『終焉の精霊ね。大方、私たちの妨害工作をするための端末でしょう。潰しておくわ』
エリアの指示に従って『ゴギガガガギゴ』が『終焉の精霊』を握り潰す。思いのほかあっさりと『終焉の精霊』は消えていった。
「あ……魚族たちが退いて行く……」
『元々、『超古深海王シーラカンス』の指示に従っていただけみたいね。深海王が正気を取り戻したことで、私たちを攻撃する理由がなくなったのよ』
「そっか……ありがとうエリア」
私がデュエルディスクをたたむと、エリアは元の姿に戻ってコク

ピット内に帰って来た。
「別に。降りかかる火の粉を払っただけ」
「それでも、ありがとう」
「……どういたしまして」
ぷいっ、と顔をそらして、小さな声でエリア。
「照れなくてもいいのに」
「煩い黙りなさい。……それより、そろそろ見えてくる筈よ」
「え……」
エリアの指摘通り、私たちの前には徐々に巨大な建造物らしきものが見えてきた。
「あれが……」
「忘れられた遺跡……『忘却の海底神殿』よ。あれが、今回の目的地」
『よぉ、エリアの嬢ちゃん。あんたらはどこで降ろせばいい？』
「え？　下ろす？」
「そうね。神殿内部まで入り込めば、問題ないと思うわ。少し入口が狭いかもしれないけれど、入れる？」
『任しときなって』
「あの、エリア。私、水中でそんなに長い間息を止めていられないんだけど……」
「安心しなさい。神殿内に入れば、普通に息できるようになるから。そこで降りるの」
そ、そっか。良かった……。
「……貴女は、ここにいるのかしらね……――――」
「え？　エリア今何か言った？」
「……何でもないわ。すぐにわかると思うし」
「ふーん？」
『そろそろ神殿内に入るぜ』
バグロスさんの言葉通り、神殿は目前に迫っていた。
「これが……『忘却の海底神殿』……」

忘れられたという言葉通り、放置されてから大分時間が経っているみたいで、柱や屋根の部分は大分老朽化している。
「く、崩れないよね」
「大丈夫よ。見た目はボロくても、仮にも太古から残る神殿よ」
『着水するぜ』
バグロスさんから降りて、私は神殿内に足をつけた。
「なんか……不思議。海底なのに、普通に空気があるんだね」
「そういうものだと思っておきなさい。説明するのが面倒だし」
「ふぅん……それで、目的地は何処？」
「奥よ。こういう時、宝物は奥にあるって相場は決まっているでしょう？」
「た、宝物、なのかな」
「似たようなものよ」
私にとってもね……と小さな声で言ったエリアの言葉は、深く聞かない方が良いんだと思う。
エリアの先導で歩き出す。バグロスさんは待機。帰りの足に下手に動かれて帰れなくなっても困る、とはエリアの弁。
「……祀られた鏡、か。まず間違いなさそうね」
「エリア？」
「……着いたら話すって言っておいたわね」
溜息を一つ吐いて、エリアは話し始める。
「私には、妹がいたの。さっきも言ったように、血の繋がった、とかそういう妹じゃないけれど、妹みたいに可愛がっていた娘がね」
さっき聞いた通りなので、黙って頷く。
「名前も、見た目もそっくりで、周りの精霊からも、姉妹のような目で見られていた。私たちも、それを不満に思うことなんかなくて……」
エリアの表情は暗い。幸せな記憶を語っているはずなのに。
「……楽しかったのよ。魔術の修行も、勉強も、あの子と一緒にずっとやってきた。おっちょこちょいだったあの子の世話をするのが、

私の日課だった」
　幸せな記憶を、まるで血を吐くかのような表情で語るエリアは、見ていて痛々しかった。
「……でも、楽園は壊された。他ならぬ、あの子自身の手によって」
　邪法に手を出した、と公式では処理されているらしい。エリアの妹は、ある日突然人が変わったかのように精霊を殺し始めた。エリアがいくら止めても聞かず、ただ哄笑を上げながら。
「あの子は、今まで見たことのないような杖を持っていた。あの心優しかった妹が、あんな凶行に及ぶ筈がない。絶対、何かあるって思っていた」
　答えを教えてくれたのは、希望さんだった。
「『忘れられた海底神殿に祀られし魔鏡の儀式。君の妹は、その巫女だ』……あれはそう言っていたわ。その鏡に宿った『終焉の精霊』が、あの子を見初めて操り、惨劇を巻き起こしたことも含めてね」
　また、『終焉の精霊』。全てはそこに帰結するみたい。
「それって……さだめとかと同じ……」
「ええ。あの子は……私の妹は、『終焉の精霊』の器として、利用されたのよ」
「酷い……」
「これが、私が終焉に対して弓引く理由。あの子の汚名を雪ぎ、あの子を取り戻すために。幸せな日々を、笑顔で語れるようになるために」
「エリア……」
「だからこれは、凛。貴女の力を得るためだけじゃない。私の過去の清算と、大切なモノを取り戻すための戦いでもあるの。手を……貸してくれる？」
「……もちろん」
　エリアは友達。ずっと昔から、私の傍に居てくれた大切な親友。
「だから、絶対取り戻そう。そのためなら私、何だってやるよ！」
「……ありがと」

エリアが、少しだけ笑みを浮かべる。けど、その笑みはすぐに凍りつくことになった。

「……居るわ。この扉の向こう。私たちを待っている」

私には何もわからない。けど、エリアが言うならそうなのだろう。

「あの子よ」

巨大な石の扉を押し開けて、中に入る。中は祭壇のようになっていて、祭壇の上には、複雑な装飾が為された鏡が祀られている。

そして、その祭壇の下、祈るように片膝を着いて胸の前で両手を組んだ、蒼い髪の少女。

「やっぱり、ここにいたのね……エリアル！」

エリアの悲鳴染みた叫びに、エリアル、と呼ばれた少女がゆっくり立ち上がり、此方を振り向く。

「っ！」

ぞっとした。別に何かされたわけでもないのに、その雰囲気だけで気圧されてしまう。

「……くすっ。久しぶりだね。おねぇちゃん。くすすっ！」

無邪気な笑い声が、何処か空虚に感じる。瞳に光がなく、口元だけで嗤っている。

「エリアル……！」

「どうしたの？　おねぇちゃん。そんなに怖い顔して。久しぶりの再会なのに」

「……ええ、そうね。久しぶりだわ……ざっと七、八年ぶりくらいになるのかしらね」

「さあ？　あたし、何年経ったかなんて数えてないから、わかんないなぁ……ずっとここで、祈りをささげて、儀式を続けてきたから」

「儀式、ですって？」

「そうだよおねぇちゃん。ずっとずっと、おねぇちゃんに勝てなかったあたしが、おねぇちゃんに勝てるようになるための儀式。世界を滅ぼして余りある、偉大なる力を得るための儀式……儀水鏡に捧げる、永久（とわ）の祈りを……ずっと、続けてきたの」

エリアルの持つ杖。その先端についた鏡に映るエリアの顔は、悔しさと怒りに彩られた、痛々しいものになっていた。
「……でも、それももうお終い。儀式は終わった。もう……イビリチュア様が、降臨する」
「イビリチュア……？」
「さあ、あたしの身体を、魂を糧に！　今こそここに、その偉大なる力を現し給え！」
「エリアル！」
　祭壇の上に祀られた鏡から、一直線にエリアルに光が降り注ぎ、エリアルの身体が変質していく。
「あは、あはははっ！」
　乾いた哄笑が響き渡る。エリアルの下半身が、どんどんナニかに浸食されて行く。
「エリアル！！」
　エリアの悲痛な叫びも、変質していくエリアルには届かない。
「あ、ああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」
　エリアルの下半身は、異形の怪物のように変質してしまった。瞳孔も裂け、血の色に染まっている。
「エリア、ル……」
　呆然としたようなエリアの声。
『ハハッハハハハハハハハハッ！！　コレガ、コレガイビリチュアノチカラカ！』
　声も、最早エリアルの声からはかけ離れ、何処か機械的な声が聞こえるだけ。
「っ……！　凛」

「エリア……」
「あの子を、倒すわ。力を貸して」
「で、でも……」
「いいから！　何でもするって言ったでしょう！？　デュエルディスクを構えて！　殺されたいの！？」
「っ！」
絶叫するかのようなエリアの声に、反射的にデュエルディスクを構える。
『我に刃向かおうというのか……？　大いなる儀水鏡……イビリチュアの力を持つ我に……』
「……黙りなさい。あの子の顔で、あの子の声で……それ以上、囀（さえず）るんじゃないわ」
エリアの目には、直視できない程の憤りと、決意が満ちていた。
「……待ってて。エリアル。おねぇちゃんが、助けてあげる。目を、覚まさせてあげる。だから……」
エリアが私を見る。
「……もう一度、昔みたいに……完膚なきまでに負かしてあげるわ！」
「い、行きます！　デュエル！」
「ふふ、ふふはははははははっ！　いいだろう。我が力、超えられるものならば超えてみるがいい、“おねぇちゃん”！　デュエル！！」
「その姿で……おねぇちゃんと呼ぶなぁ！！」
エリアの叫びが、私たちのデュエル開始の合図となった。

第四期第二話「鏡の世界の水の国」（後書き）

バグロｓ……じゃない、エリア大活躍。と言うほど活躍はしてないか。ま今までに比べれば活躍している方でしょう。凛も。

次回はデュエル。相手はリチュア。恐らく、二次創作でリチュア使ったのは初めてじゃないかな？　わかりませんが。改訂前だったらそうだったかも。今ならいるかも。

それでは、悠でした！

第四期第三話「水底の儀水鏡」（前書き）

連続更新三話目。凛ＶＳエリアルをお届けします。リチュアは僕にとってはかなり好みのデッキ。儀式大好き。

第四期第三話「水底の儀水鏡」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第三話「水底の儀水鏡」

「私の先攻！　ドロー！」
今や異形の怪物と化してしまったエリアルを救うため、私は気合を入れてカードをドローした。
「うん。私は手札から『アトランティスの戦士』を墓地に送ってデッキから『伝説の都アトランティス』を手札に加え、発動！」
「ほう……アトランティスか」
私たちの周囲は、殆ど変わっていない。もしかしたらアトランティスは、この海底神殿の過去の姿なのかも。
「アトランティスの効果で、私の手札とフィールド上のモンスターのレベルは一つ下がります！　手札から『ギガガガギゴ』を攻撃表示で召喚！　カードを一枚セットしてターンエンド！」
『ギガガガギゴ』ＡＴＫ２４５０→２６５０
「我のターン、ドロー！」
エリアルの使うデッキがどんなデッキなのか、私には見当もつかない。でも、エリアの妹みたいな子なら、多分同じ水属性……。
「我は手札から『リチュア・アビス』を攻撃表示で召喚！　効果発動！『リチュア・アビス』は召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから守備力１０００以下のリチュアを手札に加えることができる！　手札に加えるのは『シャドウ・リチュア』！」

『リチュア・アビス』ＡＴＫ８００→１０００
「リチュア……？」
聞いたことのないカード名に、少し困惑する。
「手札に加えた『シャドウ・リチュア』の効果！　手札から墓地に捨てることにより、デッキからリチュアと名のついた儀式魔法一枚を手札に加える！」
エリアルの手に、禍々しい気配を放つカードが加わる。……あれは、良くない！
「我はカードを三枚セット。ターンエンドだ」
「私のターン、ドロー！」
大丈夫。幸い、エリアルの『リチュア・アビス』の攻撃力はたったの８００。アトランティスの影響下で１０００まで上がってはいるけど、それでも私の『ギガガガギゴ』に比べれば！
「バトルフェイズ！『ギガガガギゴ』で『リチュア・アビス』を攻撃！」
「リバースカードオープン！　永続トラップ、『忘却の海底神殿』！　このカードは、自分フィールド上の水属性モンスター一体を、自分のエンドフェイズまで除外することができる！『リチュア・アビス』をゲームから除外する！」
「なら、ダイレクトアタック！」
「リバースカード発動『竜巻海流壁（トルネードウォール）』！　我への戦闘ダメージは無効だ！」
「くっ……」
『ギガガガギゴ』の攻撃が、逆巻く竜巻に防がれる。
「なら、私はモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンド」
「我のターン、ドロー！　我は『リチュア・チェイン』を攻撃表示で召喚。効果を使う！」
『リチュア・チェイン』ＡＴＫ１８００→２０００
エリアルのフィールドに、鎖を手にしたトカゲのようなモンスターが召喚される。攻撃力はアトランティスの影響下で２０００。ま

だ、問題ない。
「チェインの効果は、デッキの上から三枚をめくり、その中に儀式魔法か儀式モンスターが存在すれば、その内一枚を手札に加えることができる」
エリアルがめくったカードは『イビリチュア・マインドオーガス』『強欲なウツボ』『リチュア・マーカー』の三枚。
「くくく……我は『イビリチュア・マインドオーガス』を手札に加える。更に魔法カード『天使の施し』発動。デッキからカードを三枚ドローし、手札から『リチュア・マーカー』と『リチュア・ヴァニティ』を墓地に送る。リバースカードオープン！」
僅か二ターンで、エリアルの手札はどんどん整えられていく。
「『儀水鏡の瞑想術』！　手札の儀式魔法をオープンすることで、墓地のリチュアを二体、手札に戻す。我が戻すのは『シャドウ・リチュア』と『リチュア・ヴァニティ』！」
手札が六枚。例え儀式で三枚を消費するとしても十分な手札が揃っちゃった……。
「まだだ。我は魔法カード『強欲なウツボ』を発動。手札の『スノーマンイーター』『リチュア・ヴァニティ』をデッキに戻し、デッキからカードを三枚ドローする」
「凄い回転率……」
こんな序盤から、くるくると手札が入れ替わっていく。
「手札から永続魔法『昇華する魂』発動！　そして、儀式魔法『リチュアの儀水鏡』！」
エリアルが持っていたのと同じ意匠の鏡が出現し、禍々しいオーラを放ち始める。
「な、なにが……」
「ふ、ふはは……我は『シャドウ・リチュア』を儀式の贄にする。『シャドウ・リチュア』は水属性の儀式モンスターの贄にする場合、一体で生贄を賄うことができる！　出でよ。我が写し身。『イビリチュア・マインドオーガス』！」

『イビリチュア・マインドオーガス』ＡＴＫ２５００→２７００
現在のエリアルと同じ姿をした、異形の人魚がフィールドに召喚される。
「そして我の効果を発動する。儀式召喚に成功した時、お互いの墓地に存在するカードを合計五枚まで選択し、デッキに戻すことができる。我が戻すのは『リチュア・マーカー』『儀水鏡の瞑想術』『強欲なウツボ』『天使の施し』そして貴様の『アトランティスの戦士』の五枚！」
「再利用効果……！」
「『昇華する魂』の効果により、儀式に使用した『シャドウ・リチュア』を手札に戻す。バトルだ！　その目障りな爬虫類を蹴散らしてくれる！『魔鏡黎明波』！」
「きゃああっ！」
凛ＬＰ３９５０
マインドオーガスの下半身、もう一つの口のように開かれた魚の口から、極太のレーザーが放たれ、何とか持ちこたえようとした『ギガガガギゴ』を消し飛ばす。
「まだだ！『リチュア・チェイン』で守備モンスターを攻撃！『魔鏡鎖』！」
トカゲのような『リチュア・チェイン』の手にした鎖が、私の守備モンスターを打ち抜こうとする。
「っ……リバースカードオープン！『海竜神の加護』！　このターン、私のレベル３以下のモンスターは戦闘では破壊されない！　リバースモンスターは『水霊使いエリア』！」
『水霊使いエリア』ＤＥＦ１５００
『エリアル……必ず、解放してあげるわ』
「エリアのリバース効果発動！　このカードが表側表示で存在する限り、相手の水属性モンスター一体のコントロールを得る。私が選択するのは、当然『イビリチュア・マインドオーガス』！」
「なんだと！？」

異形の人魚をこちらの支配下におくことが出来た。でもまだ安心はできない。

「……エンドフェイズに、『忘却の海底神殿』の効果によって除外されていた『リチュア・アビス』は我がフィールドに特殊召喚される。効果発動！　デッキから『リチュア・ヴァニティ』を手札に加える。ターンエンド」

あっという間に手札が補充されて五枚。あれだけカードを使ったのに……。

「わ、私のターン、ドロー！」

『凛、呑まれないで。確かに大したタクティクスだけど、付け入る隙はあるわ』

「う、うん。すぅ……はぁ……よし！」

声をかけてくれたエリアに返事をして、深呼吸。そうだ、これはいつもの、負けても何も失わない、甘いデュエルじゃない……。

「負けたら、色んなものを失っちゃうんだ」

エリアの家族。新しい力。もしかしたら、私の命や世界の命運すら。

「……負けられない。そのために」

もう一度、深く深く、深呼吸をする。

「……うん！　行くよ、エリア！」

『了解！』

「私は『アビス・ソルジャー』を攻撃表示で召喚！　効果発動！　手札の『マーメイド・ナイト』を墓地に送って、『竜巻海流壁』を手札に戻すよ！」

『アビス・ソルジャー』ＡＴＫ１８００→２０００

「ちっ……」

「バトル！『イビリチュア・マインドオーガス』で『リチュア・チェイン』をこうげ……っ！？」

ドクンッ……！

「かっ……はっ……！？」

『凛……？　どうしたの、凛！？』
「ぅく……あ、『アビス・ソルジャー』で『リチュア・アビス』を攻撃……！」
「くく……『忘却の海底神殿』の効果発動。『リチュア・アビス』を除外する」
「ぐ……わ、私はメインフェイズ2にエリアと『イビリチュア・マインドオーガス』をリリースして、デッキから『憑依装着―エリア』を攻撃表示で特殊召喚……」
『憑依装着―エリア』ＡＴＫ１８５０→２０５０
「ふん……我をリリースするとは……不快」
「カードを一枚セットしてターンエンド……」
『凛……』
エリアが心配そうにこちらを見つめてくる。私はそれに、大丈夫と手を振って答えた。
――今の……マインドオーガスで攻撃しようとしたら、いきなり息が出来なくなった……どういうこと？　マインドオーガスに、そんな効果はないのに……。
「我のターン、ドロー。くくく……何故、我を扱えなかったか……不思議そうだな？」
「……」
「当然だ。貴様ごときに我が操られるものか……リチュアとしての力を持たぬ者に、我は扱えぬ……」
「そんな……」
モンスター効果とか、そういう次元の問題じゃなかった。これは、カードゲームなんかじゃない……！
「戦い、なんだ……！」
私の知っている、デュエルモンスターズの常識がいつまでも通用する世界じゃない。気を抜けば、呑まれる……！
「我は墓地に存在する『リチュアの儀水鏡』の効果を使う。このカードをデッキに戻すことで、墓地に存在するリチュアと名のつく儀

式モンスターを手札に戻す。舞い戻るがいい。我が写し身よ！」
　除去したマインドオーガスが手札に戻っていく。しかも、あの儀式魔法までデッキに戻った。それに手札には……。
「我は手札の『シャドウ・リチュア』を墓地に捨て、デッキから『リチュアの儀水鏡』を手札に加える！」
「また……儀式召喚の準備が整った！？」
　マインドオーガスの手札は八枚。手札消費の激しいハズの儀式召喚で、八枚！
「くく……リチュアにとって、デッキも墓地もない……皆等しく、手札も同然！」
「くっ……！」
　確かに……これじゃ、キリがない！
「手札から『リチュア・ヴァニティ』の効果発動！　手札から捨てることで、このターン、リチュアと名のついた儀式を邪魔すること叶わず、儀式召喚時に効果を受けることもない！」
「そんなっ！？」
　私が伏せたのは『奈落の落とし穴』……儀式召喚に合わせて、チェーンする予定だったカード。
「更に魔法カード『サルベージ』！　墓地の『シャドウ・リチュア』と『リチュア・ヴァニティ』を手札に戻す」
　リチュアには、アドバンテージを稼ぐカードが多過ぎる！　また二対一交換……。
「さあ、もう一度行くぞ！　儀式魔法『リチュアの儀水鏡』！　手札の『シャドウ・リチュア』を生贄に、『イビリチュア・マインドオーガス』を儀式召喚！」
　『イビリチュア・マインドオーガス』ＡＴＫ２５００→２７００
　そしてこれでまた……！
「墓地に存在する『サルベージ』と、貴様の墓地の『水霊使いエリア』『ギガガガギゴ』『マーメイド・ナイト』の四枚をデッキに戻す。更に『昇華する魂』の効果により、墓地の『シャドウ・リチュ

ア』を手札に戻す」
　これでも、手札は六枚……！
「バトルフェイズ！『リチュア・チェイン』で『アビス・ソルジャー』を攻撃！『魔鏡鎖』！」
「っ迎え撃って！」
　『アビス・ソルジャー』の銛と『リチュア・チェイン』の鎖が交錯し、クロスカウンター気味に両者に突き刺さる。相討ち。
「『イビリチュア・マインドオーガス』で、『憑依装着―エリア』を攻撃！『魔鏡黎明波』！」
『ぐ……ああっ！』
　口蓋から放たれたレーザーが、エリアを守っていた『ガガギゴ』諸共エリアを吹き飛ばす。
「エリア！　きゃあっ！？」
　凛ＬＰ３５００
「くく……我はカードを二枚セットする。エンドフェイズに除外された『リチュア・アビス』を特殊召喚し、デッキから『シャドウ・リチュア』を手札に加え、ターンエンドだ」
『くっ……エリアル……！』
　傷ついたエリアが、変わり果てた姿のエリアルを見上げる。
「……『強くなったでしょう？　おねぇちゃん』」
『！？』
　突然、マインドオーガスの口調が変化する。
「……『いつもいつも、おねぇちゃんより下手だった。いつも、おねぇちゃんに守られてばっかりだった。でも、今は違う』」
『エリアル……！』
「……『あたし、強くなったよ。おねぇちゃんに勝てるくらい、ツヨク、ツヨク、ツヨクツヨクツヨクツヨクツヨクツヨクツヨクツヨクツツツツッ！』」
　徐々に抑揚がなくなり、最後には壊れたテープのように繰り返すエリアル。

『エリアル……貴女は……貴女を、追い詰めたのは……』

劣等感。コンプレックス。出来た姉と出来そこないの自分。そんな、ごくありふれたとも思える想いが、エリアルの心の中に澱のように溜まっていったんだと思う。

――私にも経験がある。アイドルに成り立ての頃、演技も歌も、デュエルすらも未熟だった頃。先輩アイドルの足を引っ張ったり、番組の進行を遅らせたり、どうしようもない大根役者だった。誰でも始めはそんなものだと言う周りの言葉も、お情け以外の何物にも聞こえなくて……。

『凛？』

「どうしようエリア。私、この子のこと他人に思えない」

似てるんだ。この子は。私と。

「エリアルも、私も、エリアみたいになりたかったんだ」

新人の頃、緊張のあまり笑顔を浮かべることも出来なかった私が考えたのは、クールなエリアの立ち振る舞いを真似ることだった。

その考えは上手くハマり、エリアの模倣をした水原凛というキャラクターは大ヒットし、私は一躍アイドルとして躍進できた。……まあ、そのクールなキャラを通すため、エリアのデッキが使えなくなったのは誤算だったけど。

「……でも、どれだけ人気が出ても、エリアの模倣でしかない。“私自身”を見ている人は何処にもいない」

私の被った、エリアの仮面を見ているだけ。自分で選んだことだけど、それは徐々に、私の心を浸食していった。

「悔しかったし、妬ましかった。自分で選んでおいて、自分勝手だとわかっていても」

だから、私にはわかる。優れた姉の影に隠れて、ダメな自分をずっと蔑んで。そんな時に“呼ばれた”んだ。魔鏡に。終焉に。

それは、とっても魅力的で、蠱惑的だったと思う。

「……でも、やっぱりそれじゃあ駄目だよね」

比べられるってことは、辛いこと。優秀な姉（エリア）が居て、誇らしい気

持ちの影にある、嫉妬と自己嫌悪の闇。とってもわかる。かつては私が抱いた想いだから。……だけど。

「例え、どんなに辛くても、いつだって私たちは『負けるもんか！』って思いながら頑張らなきゃいけない。どんなに惨めでも、どんなに這いつくばっても、『負けるもんか！』って立ち上がらなきゃいけないんだ」

『凛……』

「だから、ちょっとだけお灸を据えてあげよう、エリア。どんなに酷い時でも、楽な方に逃げようとする、弱い心に鞭打って、これから歩いて行くために」

相手はリチュア。儀式召喚でありながら、爆発的なアドバンテージを得ることができる、とても強い相手。負けたら死ぬかもしれない、絶望的な状況。

「だけど……『負けるもんか！』私のターン、ドロー！」

今の手札で出来ることを考える。手札は二枚。これじゃあ足りない！

「手札から魔法カード『強欲な壺』！　デッキからカードを二枚ドロー！」

これで三枚！

「まずは、永続魔法『ウォーター・ハザード』を発動！　手札からレベル４以下のモンスター一体を特殊召喚するよ。『コダロス』を攻撃表示で召喚！」

『コダロス』ＡＴＫ１４００→１６００

私のフィールドに、小型のダイダロスとも言うべき海竜が召喚される。

「更に『巨大戦艦クリスタル・コア』を攻撃表示で召喚。効果により、カウンターを三つ乗せる！」

『巨大戦艦クリスタル・コア』ＡＴＫ２１００→２３００

フィールドに水晶で出来たような戦艦が召喚される。

「『コダロス』の効果発動！　私のアトランティスを墓地に送るこ

とで、フィールド上のカード二枚を墓地に送るよ！　私が選択するのは『昇華する魂』と『忘却の海底神殿』！」

リバースカードの片方は、恐らく『竜巻海流壁』。なら、フィールドが『海』でさえなければ発動できない！

「ぐぬっ……！」

「更に『巨大戦艦クリスタル・コア』の効果発動！　一ターンに一度、相手攻撃表示モンスター一体の表示形式を守備表示に変更する！　私が選択するのは『イビリチュア・マインドオーガス』！」

『イビリチュア・マインドオーガス』ＤＥＦ２０００

異形の人魚が身を縮め、防御態勢をとる。

「バトルフェイズ！　まずは『コダロス』で『リチュア・アビス』を攻撃！『海流波』！」

「ぐあ……！」

エリアルＬＰ３４００

「続いてクリスタル・コアでマインドオーガスを攻撃！『アーム・レーザー』！」

クリスタル・コアから放たれたレーザーがマインドオーガスを撃ち抜く。

「ぐ……おのれ、またもや……」

「クリスタル・コアは、戦闘終了後、自らのカウンターを取り除く。カードを一枚セットして、ターンエンド」

これで手札は使いきった。ボード・アドバンテージは確保できたけど、ハンド・アドバンテージの差が大き過ぎる……。

「我のターン、ドロー！」

六枚ものハンド・アドバンテージは、多少のボード・アドバンテージなんてひっくり返してしまう。それは、デュエルモンスターズの常識。

「墓地の『リチュアの儀水鏡』の効果発動！　デッキに戻すことで我自身を手札に戻す」

「くっ……」

キリがない。これじゃあ、ジリ貧。どうにかするなら除外するしかないんだけど……。

「除外関係のカードなんて入ってないしなぁ……」

さだめのデッキなら、多分結構あっさり勝てる。でも、真正面から勝とうとすると厳しいものがある。

「更に『シャドウ・リチュア』を手札から墓地に捨て、デッキから『リチュアの儀水鏡』を手札に加え、リバースカード『儀水鏡の瞑想術』を発動！　手札の『リチュアの儀水鏡』をオープンして、墓地の『シャドウ・リチュア』と『リチュア・チェイン』を手札に戻す！」

『負けるもんか！』って思うけど、でも、いくらなんでもこれは……。

「……どうしたら、どうしたらいいの……？」

どれだけ倒しても、すぐに立て直される。

「まずは掃除だ。速攻魔法『サイクロン』右側のリバースカードを破壊する！」

「くっ……！」

最初の方に伏せていた『奈落の落とし穴』は結局効果を発揮しないまま破壊されてしまう。

「我は『リチュア・チェイン』を召喚！　効果によりデッキトップから三枚をめくる。『サルベージ』『儀式の檻』『イビリチュア・ソウルオーガ』……は」

エリアルの顔が、ニヤリと歪む。

「我は『イビリチュア・ソウルオーガ』を手札に加える」

「新しい……イビリチュア？」

「そうだ。我が切り札、その目に焼き付け屈するがいい。まずは『リチュア・ヴァニティ』を捨てて効果発動。そして『リチュアの儀水鏡』発動！『シャドウ・リチュア』をリリースし、『イビリチュア・ソウルオーガ』を攻撃表示で儀式召喚！」

『イビリチュア・ソウルオーガ』ＡＴＫ２８００

『ゴオオオオオッ！！』
　呼び出されたのは、一見してドラゴンのような海竜。マインドオーガスと同じく、禍々しい気を放っている。
「『イビリチュア・ソウルオーガ』の効果発動！　手札の『リチュア・エリアル』を墓地に捨て、効果発動！」
『エリアル！』
　エリアルは、自分自身を捨てて効果を使ってきた。
「フィールド上の表側表示のカードをデッキに戻す！　選択するのは『巨大戦艦クリスタル・コア』！」
「そんなっ……！」
　戦闘破壊耐性を持つクリスタル・コアが戻されてしまう。
「バトルフェイズ！『リチュア・チェイン』で『コダロス』を攻撃！『魔鏡鎖』！」
「くっ……！」
　凛ＬＰ３１００
「更に『イビリチュア・ソウルオーガ』でプレイヤーにダイレクトアタック！『魔鏡狂爪』！」
「きゃあああああっ！？」
　凛ＬＰ３００
「ターンエンド。さあ、ラストターンだ」
「ぐ……私のターン……」
『凛』
「エリア……」
『私を、信じなさい』
「え……？」
『……私は、あの子にとってカッコイイおねぇちゃんだったから』
　――妹に、格好悪いところは見せたくない。
「……うん！　ドロー！」
　！　これなら、まだ！
「永続魔法『命削りの宝札』！　デッキからカードを五枚ドロー！」

「ここにきて、手札増強だと……？」
「更に魔法カード『天使の施し』！　三枚ドローして二枚捨てます！　魔法カード『サルベージ』！　今墓地に捨てた『逆巻くエリア』と『水陸両用バグロス　Ｍｋ－３』を手札に戻す！」
「永続魔法『ウォーター・ハザード』の効果発動！　手札から『水陸両用バグロス　Ｍｋ－３』を特殊召喚！」
『水陸両用バグロス　Ｍｋ－３』ＡＴＫ１５００
『いよっしゃぁ！　任せな嬢ちゃん！』
「って、バグロスさん！？」
何故か、バグロスのカードに精霊として宿っていた。
『話は聞いていたぜ！　俺様も手を貸すぜ！』
「えっと、気合入っているところ悪いんだけど……」
『あん？』
「えと……『逆巻くエリア』を召喚。バグロスさんをリリースして効果発動するね」
『な、なにぃぃぃっ！？』
『……哀れね』
いつも以上に大人びた容姿のエリアが、バグロスさんを逆巻く水で包む。
『へっ……まあいいか。俺は俺の出来ることをやるさな』
「手札から『ゴギガガガギゴ』を特殊召喚！」
『ゴギガガガギゴ』ＡＴＫ２９５０
私のフィールドに、『ギガガガギゴ』が更に凶暴化した『ゴギガガガギゴ』が特殊召喚される。
「魔法カード『神霊の継承』！『逆巻くエリア』と『ゴギガガガギゴ』をリリースして、デッキから『水神使いエリア』を特殊召喚！」
『水神使いエリア』ＡＴＫ２８００
『さあ、お仕置きをしてあげるわ。エリアル』
「何を……まだ、攻撃力は同等……その程度では……」
「これだけじゃないよ！『水神使いエリア』のモンスター効果！

手札から水属性モンスター一体を捨てて、相手の水属性モンスター一体のコントロールを得る！　選択するのは当然、『イビリチュア・ソウルオーガ』！」
「馬鹿が！　イビリチュアが貴様に操られると思っているのか！？」
「操る必要はないよ」
「なに……？」
「リバースカードオープン！『リビングデッドの呼び声』！　墓地の『ゴギガガガギゴ』を特殊召喚！」
「っ……！」
「貴女のフィールドには、『リチュア・チェイン』のみ。もう、『イビリチュア・ソウルオーガ』で攻撃する必要なんてない」
「っ……また」
『エリアル……』
「また、あたしは負けるの……？　これだけ、これだけ強くなっても……あたしは……」
「エリアル……」
今までの狂気的な表情が消え、そこに居たのは一人の少女の顔。
『エリアル……ごめんなさい』
「おねぇ……ちゃん……」
『気の利かない私が悪かったわ。あの頃の私は、貴女を守っていたつもりで、貴女を傷つけていたのね』
「……おねぇちゃん」
エリアルの顔に、もう狂気はない。
『凛』
「エリア……」
『解放してあげて。デュエルに勝てば、終焉の精霊は排除できる筈よ』
「……うん！『ゴギガガガギゴ』で『リチュア・チェイン』を攻撃！」
「ぐ……ああっ！？」

エリアルＬＰ２２５０
「これで……トドメ！『水神使いエリア』で、プレイヤーにダイレクトアタック！『水神の粛清』！」
『エリアル……！　戻って来て！』
エリアの放った水流が、マインドオーガスと化したエリアルの下半身を吹き飛ばす。
「あ、あああああああああっ！！」
エリアルＬＰ０

「エリアル！」
デュエルが終わった後、エリアが下半身を失ったエリアルに走り寄る。
「お、ねぇちゃん……」
「エリアル！」
エリアルの命の灯は、正直危うい。何しろ、これまで体を操っていたも同然な終焉の精霊が消えた上、下半身を丸ごと失ったのだから。
「ど、どうしよう凛！　わ、私、やり過ぎて……」
「エリア……」
こんなに取り乱すエリアは初めて見る。でも……。
「わ、私に言われても……ど、どうしよう……」
エリアルは、エリアに一言呼びかけてすぐ、気を失った。まだ息はあるけど、このままじゃ……。
「凛さん！」
「アテナ！？　どうしてここに……」
「私もいる」
「ルインさんまで……」
「バグロスさんに連れてきてもらいました！　そんなことより、時

間がありません！　すぐに蘇生処置をしますから、手伝ってください！」
「あ……」
「助かる……？」
「助かります！　完全に死んでしまってからじゃ、私の能力の性質上エリアルさんの蘇生は出来なかったと思いますが……まだ生きてますから、なんとか……！」
「……体の再構築は私がやる。貴女は生命力の補填を」
「はい！」
ルインさんとアテナが、今にも死にそうなエリアルの身体を治している。二人の治療術はとても凄くて、どんどんエリアルの身体が元に戻っていく。
『ふぃ～。どうにか間に合ったかよ？』
「バグロスさん……」
大きな機体を揺らして、バグロスさんがやって来た。
「バグロスさん……もしかして、さっき……」
『おうよ。なんかヤバそうだったんでな。速攻陸に戻って助っ人を連れてきた。言っただろ？　俺は俺に出来ることをやるってよ』
「バグロスさん……」
『勝つだけじゃ、ハッピーエンドじゃねえんだぜ。嬢ちゃん。ま、おっさんのやることってのはいつでも脇役だがよ』
「ありがとう……バグロス」
エリアも、目に涙を浮かべてバグロスさんに頭を下げる。
『止してくれ。俺はただのアッシーに過ぎねえんだからよ。礼は、ルイン様たちに言ってやってくれや』
「それでも、貴方がいなければ、私は大切な妹を失っていたわ」
「そうだよ！　ありがとう、バグロスさん！」
『へっ……ま、それならこれからも、俺を使ってくれ。それでチャラにしといてやらぁ』
「もちろん！　よろしくお願いします。バグロスさん！」

その時、エリアルの持っていた杖についていた、あの鏡が光った。
思わず身構える私たちだったけど、どうもその鏡から邪悪な感じはしない。
「……リチュアも、元々邪悪ではなかったんです」
「エリアル！？」
アテナたちの治癒が効いているのか、それほど辛そうではない。
それでも、まだ下半身が完全に再生しているわけじゃないから、エリアが心配そうにエリアルを見る。
「あたしが手にしたときのリチュアは、終焉に犯されて、もう闇に染まっていたけど……リチュアの鏡は、元々は退魔の神器だったんです。でも……」
「……強い神聖は、一転するととてつもない邪悪に変わる。彼女と同じ」
ルインさんが言う彼女とは、多分さだめのこと。そうか、だから……。
「……凛さん」
「は、はい！」
「図々しいお願いですけど……あたしも力にならせてください。罪を償う時間を、得るために」
「エリアル……凛。私からもお願いするわ。この子の力は、きっと役に立つはずだから」
エリアにも、頭を下げて頼まれる。
「頭を上げてよ。そんなことしなくったって、断ったりしないってば！」
「じゃあ……」
「うん。エリアルも、これからよろしくね」
「っ……ありがとう、ございま……」
「エリアル！？」
安心したのか、エリアルはそこで気を失ってしまう。
「……大丈夫です。失った下半身の再生も、ルインさんのおかげで

上手くいってますし、生命力も、徐々に回復しています」
アテナの診断に、皆で胸を撫で下ろす。
こうして、私は占いの通り、新しい力と仲間を手に入れることができたのでした。
『あ、やっば!?　燃料がもう殆ど残ってねえ!　あと片道分も残ってねえぞ……』
「ええ!?」
「ちょ!　なにしてんのよ!?」
『し、仕方ねえだろ。慌てていたから、燃料補給すんの忘れたんだよ!』
「そ、それじゃあ帰れないじゃないですか!　食料もないのに!」
「……最後まで締まらない」
溜息混じりのルインさんの言葉が、慌てる私たちの間に空しく響くのでした。
※結局、さっき倒した『暗黒大要塞鯱』に『サルベージ』してもらいました。

第四期第三話「水底の儀水鏡」（後書き）

と言うわけで、エリアルを解放することが出来ました。え？　プラシド？　誰それ？　知らんなぁ。

……正直な話、この話を書いたときまだあのプラシドを知らなかったのでラストのエリアルは真面目に偶然、たまたまです。そうしようと思ったわけでは……でも似てるよね。結末。次からは凛のデッキがリチュア＋エリア、ついでにバグロスに。……え？　バランス悪い？　気にしなさんな。

それでは、悠でした！

第四期第四話「真夜中の襲撃」（前書き）

四話目！　この話で、エリアルの人気急上昇。何故だ。いやまあ、この話だけじゃないんでしょうが、この話くらいしか活躍してないのに人気が……。

第四期第四話「真夜中の襲撃」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第四話「真夜中の襲撃」

「ま～いど～ありぃ～」
間延びした声と共に、アテナたちを乗せてきてくれた『暗黒大要塞鯱』が、ルインから代金（やっぱりスロット方式だった）を受け取って海中に沈んで行く。
「……私は財布か」
「ま、まあまあ……」
「……何か釈然としない。彼からご褒美の一つや二つ貰わないと納得いかない」
「……その内な」
「言質はとった。楽しみにしている」
まったくちゃっかりしている。……いや、当然か。今んとこ会計全部ルイン持ちだし。
「……特に、そこでこそこそ隠れている駄女神も、金はある筈」
「ギクッ！」
「あ、あー！！　シャルナ今まで何処に……」
「い、いやーちょっち道に迷って……」
「シャルナがいてくれたらエリアルさんの蘇生、もっと余裕を持って出来たんですよ！」
「あ、あはは～……ま、まあ最終的に助かったからよし……だめ？」

『だめ』
「唱和で駄目出し！？」
駄女神……。
「うっわー最早威厳以前に人間としての尊厳危うい……」
「無駄に韻踏まなくていい。ついでにお前は人間じゃなくて精霊だ」
「……チッ！」
「ちょ、今舌打ちしたの誰！？」
「いつも肝心な時に役に立たないんですから……」
「あ、アテナちゃ～ん……それおねーさんのトラウマ、モロに抉ってるんですけど～……」
……まあ、駄女神は今更どうでもいい↑冷たい？　違う、妥当なだけだ。
「……兎に角、凛たちが無事でよかったな。妹さんも」
「は、はい……えとぉ～」
「ん？　ああ、俺はセツ。御堂切だ。よろしく」
「は、はいよろしくお願いします！　こ、この度は色々とご迷惑をおかけしまして……」
「いや……俺は何ら迷惑被ってないから」
「はぅ……そ、その通りでした……あの、その……」
ん～……何かこの反応は……。
「ちょいちょい、エリアルちゃん」
「は、はいっ？」
「お兄ちゃんは駄目だよ？」
「駄目ですよ？」
「……駄目」
……さだめたちが牽制にいった。
「はい。諦めます」
「はやっ！？」
余りに早い敗北宣言に、牽制したさだめたちが逆に戸惑っている。
「……あの子は、基本的に秒単位で諦めるのよ。ネガティブ且つ根

性無し。根っからの負け犬だから」
「……エリア、もうちょっとオブラートに包まない？」
「事実だもの。思い立った次の瞬間には挫折するような子なの」
「挫折と未練と後悔と諦観と絶望に満ちた生き方してますゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメ……（以下エンドレス）」
「……なんというか」
「とことん自信がないんですね……」
「さだめとは真逆だね！」
「ああ。お前は常に自信たっぷりだな」
ない胸を反らすさだめにジト目を向ける。
「あ、でもあたしにも、自慢できることが、一つだけあります！」
「そうなの？」
意外そうに尋ねる凛に、エリアルは笑顔で頷く。
「はい！　土下座です！」
「……え、土下座？」
「あたし、第２４３４５０８回精霊界土下座王決定戦に於いて、長年不動のチャンプとして君臨していた精霊さんを負かして、電撃優勝を果たしたことがあるんです！」
『……』
全員、無言。エリアのみ、額に手を当てて溜息を吐いていた。
「……ルイン、精霊界ってのは、一体何をやっているんだ？」
「……多種多様」
「便利な言葉使うね」
「っていうか、第２４３４５０８回って、どんだけ歴史ある大御所大会だよ……」
「……ところで、不動のチャンプって誰だったんですか？」
「カイエン様です。カイエン様の土下座フォームはそりゃあもう完成されつくしていて、一体どれだけ関係各所に謝罪の嵐を重ね続けてきたのかと……」
「シャ～ル～ナ～！！」

「あ、あはははは～……」
カイエンの謝罪の理由であろうシャルナに、アテナが詰め寄る。
「そのスピード、角度、美しいシンメトリーを描く形、誠意の伝わり具合、躍動感、どれをとっても素晴らしく、土下座評論家たちも思わず涙するほどの……」
「いや、土下座についての講釈はいいから。っていうか、何か。精霊界ってのは案外暇なのか」
土下座評論家ってなんだ。そんな職業が存在するのか。
「……ちょっと興味ありますね。エリアルさんは、そのカイエンさんに勝つ程の土下座の使い手なんですよね？」
「いやアテナ、土下座の使い手って……」
「我も興味があるな。クソ真面目に評論家が語るような土下座ってのは見てみたい気もする」
「エース……お前もか」
「あたしの土下座が見たい……と？」
「はい！」
「いや、土下座って謝ることもなくするもんじゃ……」
「わっかりました！　それでは、不肖この土下座マイスターたるエリアルが、土下座の真髄をお見せいたしましょう！」
俺のツッコミは届かなかった。というか、土下座の話だとイヤに積極的だな。
「それでは、すぅ～……すみませんでした！！」
エリアルは一瞬息を深く吸い込んだかと思うと、がばちょっ！と地べたに跪いた。
「お、おぉ……」
「こ、これは……！」
「あ、余りに美しい土下座フォームに、『いいよ。許してあげる』とありもしない罪を許してしまいそうになるぜ……」
エリアルは地面に額を擦りつけ、ふわり、とエリアルに遅れて地面に辿りつく衣服までもが、完全なシンメトリーを構成する程の完

成度。更に、エリアルから放たれる弱者のオーラ。それが俺たちを圧倒的優位にありながら追い詰められたマンボウのような気分にさせて……。

「……さ、流石セツさん。精霊界の評論家にも劣らぬ、素晴らしい評論です。セツさんには、土下座評論家としての天性の才能があるんですね……」

「……そんな才能はいらん」

「無駄スキルに追加だね。名付けて、『土下座の美しさを見極める程度の能力』！」

「かなぐり捨てたくなるくらいの無駄スキルだな」

「何故ですか？　精霊界でも、相当に栄誉ある職業ですよ？　土下座評論家」

「精霊界はどこへ行こうとしているんだ……」

「……ちなみに、私も資格を持っている。土下座評論家」

「ルイン、お前まで……」

「……女神だから、土下座を見る機会は多かったから、必然的に得た資格。……別に、欲しくはなかった」

だろうな。

「……ちなみにエリアル。貴女がいない間に、王座奪還されているから、貴女はもうクィーンじゃないわよ」

「ななな！？」

「カイエン……返り咲いちまったのか……」

「あ、あたしはもうクィーンじゃない！？」

「いや、絶望的な表情の所悪いが、そもそも土下座のクィーンってのは決して誇れるものでも、目指すものでもないと思うぞ」

むしろ、積極的に避けたい称号だろう。

「……おい、いつまで土下座について語るつもりだ？」

剣士の呆れ果てたような声に、俺たちは揃ってハッとする。そうだった。こんなことしている場合じゃない。

「……土下座マニアという聞いたこともないキャラに、意識を持っ

て行かれたのが原因か」
「すみませんでした！」
「や、やめろ……土下座をするんじゃねえ！　あ、あああああああ許す！！」
バグロスが悶えながらエリアルを許している。というか、あれは既に洗脳の域に達しているのでは……。
「おい」
「おっとと。悪い。じゃあとりあえず、これから先の動きだな」
またもや話がずれかかったところを剣士に諫められ、軌道修正する。
「とりあえず、今日はこの海の家で休んで、明日王都に向かおう。ジャックたちもそこに居る筈だから、拠点にはピッタリだろう」
「ネイキッドもいる筈だな」
「ああ。そして、城で旅立ちの準備を整えてから、さっき話した通り、冥界に向けて出発しよう」
「道中の足は……」
ルインが奴に目を向ける。やめろ。
「よろしくなっ、兄さん！」
「他の手段を探そう。まだ手はある筈だ！」
これからの道中、ずっとコイツがついてくるとか……。
「俺は、死ぬかもしれん……」
「お兄ちゃん、大げさ」
「大げさなもんか！」
「でもセツ、実際それしかないですよ？」
「ぐ、ぐぅぅ……」
困ったようなアテナの言葉に、唸りながら思考する。
「……くそ。仕方ない」
結局、俺が折れるしかなかった。コイツと旅とか……気が休まる暇がなさそうだ。
「じゃあ、今日はこの海の家で一夜を明かすことになるわけだが…

…」

ぐるり、とメンバーを見渡す。

「バグロス、休める部屋はいくつある？」

「あん？　そうだな……大部屋と中部屋が一つずつ、小部屋が二つってところか。そこの座敷でも寝れなくはねえが、朝になるころにゃ、体中ベッタベタだから、おススメはしねえな」

「内大部屋一つはバグロスが使うわけだ。とすると……」

メンバーは男性陣が俺、剣士、それにサイクロイドとバグロスで四人。女性陣がさだめ、アテナ、ルイン、エース、シャルナ、凛、エリア、エリアルで八人。

人数の多い女性陣に中部屋を使って貰うとして……。

「バグロス。各部屋には何人泊まれる？」

「そうさな。大部屋でも、詰めて四人だ。中部屋が三人。小部屋はかなり押し込んで二人だな」

元々、泊まることを前提に作られていないのでそんなものらしい。

「それは……困ったな。部屋数が全然足りない」

「心配すんな。俺は海中でスリープモードにしておく。それで大部屋を使える。それでどうだ？」

それでも、女性陣が一人あぶれて……あ、そうか。

「シャルナが外で寝れば解決じゃないか」

「ちょいと坊や」

「それでいいです」

「アテナサーン？」

「部屋割を決めましょう」

「ちょ、ガン無視とか！」

「そうだな……各々、希望はあるか？」

シャルナの抗議を黙殺し、俺は全員に話題を振る。全員、エリアル以外は心得ているようで、あっさりとシャルナの存在は忘れ去られる。

「さだめはお兄ちゃんと小部屋に……」

「却下だ。男女は分ける」
「……エリアルと私は同室でいいわ」
「あ、じゃあ私も同室で」
エリアとエリアル。そして凛で中部屋。となると……。
「私とさだめさんとルインさん、エースさんで大部屋ですね」
「……ちぃ」
さだめが何故か舌打ち。コイツ……。
「……お互いに相互監視体制もとれる。妥当なところ」
ルインの言葉が全てだな。アイツ、やっぱり夜這いかけるつもりだったか……。
「……あっさり決まったな。じゃあ男は適当でいいだろ。じゃあ、各自解散。ゆっくり休もう」
まだぎゃーすか吠えているシャルナを無視し、俺たちは海の家に入っていった。
「……おーい。え、なに？　ホントにおねーさん野外なの？　ハネが塩塗れになるから出来れば遠慮したいかなーっなんて……お願い待って無視しないで～!!　エリアルちゃん土下座教えて！　そしたらほら、謝るから！　おねーさん謝っちゃうから！　偉い女神さまが土下座しちゃう！　だから野外は、野外は～!!」
バタム。
「……本当に締め出されるとは……いいわよいいわよ。天界に帰る。帰っちゃうからな！　偉い女神さま、帰っちゃうわよ！　それでもいいのか～!!」
反応なし。
「……帰ろ」
溢れる滴をそのままに、シャルナはトボトボと帰って行った。

深夜。

どうにも眠れなかった俺は、水の一杯でも飲もうと、海の家の厨房に居た。
「んくっ……ぷはっ。ん……？」
コップに注いだ水を飲み干し、ふと外を見る。
「これは……」
外に出て、そこに俺は、満天の星空と、星空が映り込む精霊界の海を見た。
「これが、精霊界の夜景……。人間界じゃ、とても見られるもんじゃないな」
余計な光のない、大自然の星空だ。いつか旅行した、田舎の山奥。その星空だ。
「……守るぞ。世界を。この星空を」
そう決意した、その瞬間。
「危ねえ兄さん！」
「っ！？」
サイクロイドの声と、体が引っ張られる感覚。同時に、俺の今まで居た場所に振り下ろされる剣。
「っなんだ！？」
「ギチチッ！」
目を向けると、そこに居たのは騎士の格好をした甲虫。
「まさか……『甲虫装甲騎士（インセクトナイト）』か！」
「大丈夫かい、兄さん」
「ああ、助かった。でもお前、なんでここに？」
「トイレにでも行こうと起きたら、兄さんが出ていくのが見えたんでな。興味持って追いかけてみた」
「……トイレ行くのか。この二輪」
一体何処から何を出すというのだろうか。だが今は、そんなことを詮索している場合じゃない。
「ギチチッ！　さあ、デュエルを始めるぞ！」
インセクトナイトが、その腕にデュエルディスクを構える。

「ま、待て！　俺は今、デッキを持っていない！　ディスクも！　だから、一端取りに行かせろ！　そうしたら、いくらでも相手をしてやる！」
「ギチチッ！　それは出来ない」
「何故だ！」
「なぜなら、ここには既にデッキがあり、デュエルディスクもあるからだ。そうでなければ、このフィールドは成立し得ない！」
俺は、周囲に広がった黒い炎を見る。
「だ、だが……どこにデッキなんて……」
「兄さん、兄さん」
「……なんだボロチャリ」
「デッキならあるぜ。ディスクも」
「……何処に」
「ここ」
サイクロイドが何処からかデッキを取り出し、ハンドルの辺りが変形してディスクの形になる。
「……おい、まさか」
「兄さんは知らねえのか？　精霊ってのは大抵、自分のデッキを持っているもんだぜ？」
「そんなこと……いや、そういえば」
希冴姫もルインも、エースも持っていた。思い返せばネイキッドもだ。
「ちょっと待て。じゃあなにか、このデッキは……」
「俺っちのデッキ」
「……ビークロイドデッキか？」
「サイクロイドデッキよ！」
「……」
終わった……。
「残念、俺たちの冒険は、ここで終わってしまった……」
「おいおい兄さん。そりゃちょっとひでえぜ」

「この、命がかかった大一番、特に専用サポートカードもないサイクロイドデッキでデュエルするとか……」
「見くびって貰っちゃあ困るぜ兄さん。見なよ」
「なに……？」
サイクロイドに手渡されたデッキを見る。
「これは……」
「人間さんたちが使うだけが、精霊じゃあねえんだぜ？　人間には知らないカードも、俺っちたちなら持っている」
「……これなら。わかった。お前の力を借りる。手伝えボロチャリ！」
「おうよ！　任しときなぁ！」
まさか、精霊界最初のデュエルが、このボロチャリとの共同戦線になろうとは……。
「俺っちは思っていたぜ。いつか兄さんと組んでデュエルするってなぁ」
「……お前のその懐きようはなんなんだ。まあいい」
俺は律義に待っていてくれたインセクトナイトに顔を向ける。
「待たせたな。不本意だが、コイツのデッキを使う」
「ギチチッ！　いいだろう。かかって来い。デュエル！」
「自転車に跨りながらデュエルすることになるとはな……バイクならまだ格好ついたんだろうが……」
「細けぇことは気にすんなって。ソイツは未来までとっときな！」
「……そうさせてもらう。デュエル！」
こうして、俺の精霊界最初のデュエルが始まった。

第四期第四話「真夜中の襲撃」（後書き）

次回、まさかのサイクロイドデッキ。……オリカは使いますけどね。

それでは、悠でした！

第四期第五話「バイクロイド召喚！　フルスロットル！」（前書き）

記念すべき二次創作史上初めてであろうサイクロイドデッキです。
意外と強くなりましたが。

第四期第五話「バイクロイド召喚！　フルスロットル！」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第五話「バイクロイド召喚！　フルスロットル！」

「セツ！」
「お兄ちゃん！」
外が騒がしいことに気がついた私たちが起きて外に出た時には、既にデュエルは始まっていました。
「おいおい、セツの奴、まさかサイクロイドで戦う気か？」
「ええ！？」
「だって、セツのデッキはここにあるし……」
「お、お兄ちゃん……」
私たちが心配して見守る中、セツがカードをドローして、デュエルが始まりました。

「俺の先攻、ドロー！　俺は『サイクロイド』を守備表示で召喚！　カードを二枚セットして、ターンエンドだ！」
『サイクロイド』ＤＥＦ１０００
『おっしゃあ！　早速行くぜぇ！』
「ギチチッ！　ワタシのターン、ドロー！　ワタシは『甲虫装甲騎士』を攻撃表示で召喚。永続魔法『大樹海』を発動。『大樹海』は、

フィールド上の表側表示で存在する昆虫族モンスターが破壊された時、破壊されたモンスターと同じレベルの昆虫族モンスターを手札に加えることができる！」

『甲虫装甲騎士』ＡＴＫ１９００

「面倒なカードを……」

「更に魔法カード『ダブルアタック』を発動する！」

「『ダブルアタック』！？」

「ギチッ！『ダブルアタック』は手札からモンスター一体を捨てることにより、フィールド上に存在するそのモンスターよりもレベルの低いモンスターに、連続攻撃能力を付加する魔法カード。ワタシは手札から『鉄甲装甲虫（メタルアーマードバグ）』を捨てて効果発動！」

マズイな……『甲虫装甲騎士』の攻撃力は１９００。守備力１０００の『サイクロイド』じゃどうしようもない。

「ギチチッ！　バトル！　ワタシ自身で、『サイクロイド』に攻撃！『インセクトスライサー』！」

「トラップ発動『スーパーチャージ』！　俺のフィールドに、ロイドと名のつくモンスターのみが存在するとき、相手モンスターの攻撃宣言時にカードを二枚ドローする！」

「ギチッ！　だが、ワタシの攻撃は止まらない！　その弱小モンスターを斬り裂け！」

『うおおおおっ！？』

「くっサイクロイド！」

「更に、『ダブルアタック』の効果でもう一度続けて攻撃！『インセクトスライサー・ツヴァイ』！」

「ぐあああっ！？」

セツＬＰ２１００

「ギチチッ！　ワタシはカードを一枚セットしてターンエンドだ！」

「エンドフェイズにトラップカード『奇跡の残照』を発動する！このターン戦闘で破壊されたモンスター一体を特殊召喚する！　戻って来いボロチャリ！」

『サイクロイド』ＤＥＦ１０００
『サンキュ！　兄さん！』
「俺のターン、ドロー！　魔法カード『融合』！　俺は手札の『サイクロイド』とフィールドの『サイクロイド』を融合する！　融合デッキから『ペア・サイクロイド』を融合召喚！」
『ペア・サイクロイド』ＡＴＫ１６００
『俺っちの真の力を見やがれ！　変形合体！』
「ただ連結しただけだろ……バトルフェイズ！『ペア・サイクロイド』で攻撃する！」
「ギチッ！？『ペア・サイクロイド』の攻撃力は１６００。ワタシには敵わんぞ！」
「わかっているよ！『ペア・サイクロイド』の効果発動！　攻撃力を５００ポイント下げることで、相手プレイヤーにダイレクトアタックすることができる！　行け！　ボロチャリ！」
『行くぜ！　ダブルサイクリング！』
「ギチチッ！　そうはいかない。トラップカード『和睦の使者』！　戦闘ダメージをゼロにする！」
サイクロイドの攻撃が、修道服の女性たちに阻まれる。
『ちぃ、ご婦人方にゃあ攻撃できねえな』
「仕方ない。カードを二枚セットして、ターンエンドだ！」
「ギチチッ！　ワタシのターン、ドロー！　バトルする！　ワタシ自身で、そのポンコツを再びスクラップにしてくれる！『インセクトスライサー』！」
「速攻魔法『融合解除』！『ペア・サイクロイド』を融合デッキに戻し、墓地から二体の『サイクロイド』を守備表示で特殊召喚する！」
『サイクロイド』ＤＥＦ１０００
「ならば、片方のポンコツを鉄くずに変えてくれる！」
『甲虫装甲騎士』の剣が、片方の『サイクロイド』を切り裂く。
「カードを一枚セットしてターンエンド！　ギチチッ！　いつまで

そんな雑魚に拘るつもりだ？」
　インセクトナイトの言葉に、俺とサイクロイドは顔を見合わせニヤリと笑う。
『いつまで？』
「決まってる！」
『勝つまでさ！』
　最後は声を揃えて叩きつける。
「俺のターン、ドロー！」

「何だかんだでセツとサイクロイドさんって、仲いいですよね？」
「相性いいよね。ボケツッコミ完璧」
「……それ、セツには言ってやるなよ。きっと凹むぞ」

「俺は手札から魔法カード『チューンアップ』を発動！　俺のフィールド上に、攻撃力１０００以下の機械族モンスターが存在する場合、デッキから『チェンジギアモーター』を特殊召喚することができる！」
　『チェンジギアモーター』ＡＴＫ１００
「更に、魔法カード『機械複製術』！　デッキから攻撃力１００の『チェンジギアモーター』を二体、守備表示で特殊召喚！」
　『チェンジギアモーター』ＤＥＦ０
　俺のフィールドに、一抱えほどの大きさを持つモーターが三体召喚される。
「ギチチッ！　そんな雑魚を並べたところで、何の意味がある！？」
「コイツは、雑魚じゃない！『チェンジギアモーター』は、攻撃力１０００未満の機械族モンスターに、ユニオンすることができる！

俺は『サイクロイド』に『チェンジギアモーター』をユニオン！」
「ユニオンモンスターだと!?」
サイクロイドに、『チェンジギアモーター』が装備される。
「『チェンジギアモーター』は、装備モンスターの攻撃力を、８００ポイントアップさせる！『チェンジギア』！」
『サイクロイド』ＡＴＫ８００→１６００
『っしゃああっ！』
ドルルルルっと音を立てて、サイクロイドか強化される。
「ギチチッ！　だが、それでもまだワタシの攻撃力には及ばない！」
確かに、攻撃力が８００上がっても、サイクロイドの攻撃力は１６００。１９００の『甲虫装甲騎士』には敵わない。
「だが！『チェンジギアモーター』第二の効果！　バトルフェイズ中のみ、装備モンスターの攻撃力を、更に８００ポイントアップさせる！『チェンジギア・セカンド』！」
『サイクロイド』ＡＴＫ１６００→２４００
『俺っちを舐めるなよ!?　クソ虫野郎!』
「攻撃力、２４００だと!?」
「行くぞ！『サイクロイド』で、『甲虫装甲騎士』を攻撃！」
『おおおっ！　サイクリング・アクセル！』
サイクロイドの前輪が、『甲虫装甲騎士』を砕く。
「ギチチッ!?　こんなポンコツに、ワタシが!?」
インセクトナイトＬＰ３５００
「クッ!?　だがこの瞬間『大樹海』の効果が発動する！　ワタシはデッキから『ジャイアントワーム』を手札に加える!」
「『チェンジギアモーター』第二の能力を使用した場合、攻撃したモンスターは守備表示となる。カードを一枚セットして、ターンエンド」
『サイクロイド』ＤＥＦ１０００
『ははっ！　すげえや兄さん！　まさか初見で、俺っちのデッキをここまで使いこなすとはよ!』

「さっき軽く確認したからな。速読術も、瞬間記憶術も、中途半端にだが修めている。それに、こういうタクティクスを考えるのは得意中の得意だ」

「ギチチッ！　ワタシのターン、ドロー！」

相手の手札は四枚。フィールドには『大樹海』とリバースカードが一枚のみ。ここからどう展開してくる？

「ワタシは手札から魔法カード『天使の施し』を発動！　デッキからカードを三枚ドローし、二枚墓地に捨てる！　そして、墓地に存在する二体の昆虫族モンスターをゲームから除外し、手札から『デビルドーザー』を攻撃表示で特殊召喚する！」

『デビルドーザー』ＡＴＫ２８００

『ギシャアアアアアアッ！！』

『うおっ！？　なんじゃああのデカブツは！？』

「まだだ。ワタシは更に墓地の昆虫族をゲームから除外し、『ジャイアントワーム』を攻撃表示で特殊召喚！　そしてこれでゲームセットだ！　リバーストラップ『異次元からの帰還』！　ライフを半分支払い、ゲームから除外されているモンスターを全て特殊召喚する！」

インセクトナイトＬＰ１７５０

「……ちっ。やっぱりそのカードか……」

「ワタシは『鉄甲装甲虫（メタルアーマードバグ）』『甲虫装甲騎士』『共鳴虫（ハウリングインセクト）』を攻撃表示で特殊召喚！」

『鉄甲装甲虫』ＡＴＫ２８００

『甲虫装甲騎士』ＡＴＫ１９００

『共鳴虫』ＡＴＫ１２００

「バトルフェイズ！」

「来るか！？」

「まずはワタシ自身で『サイクロイド』を攻撃！『インセクトスライサー』！」

「っユニオンモンスターを装備したモンスターは、一度だけ戦闘破

壊をまぬがれることができる！」
　インセクトナイトの攻撃を躱し切れず、『サイクロイド』に装備された『チェンジギアモーター』が破壊される。
「ならば『共鳴虫』で追加攻撃！」
『ぐおっ……！』
「サイクロイド！」
『心配ねえ！』
「ギチチッ！　続いて『鉄甲装甲虫（メタルアーマードバグ）』と『ジャイアントワーム』で二体のモーターを蹴散らす！」
　俺の場の『チェンジギアモーター』が押し潰され、食い破られる。
「トドメだ！『デビルドーザー』でプレイヤーをダイレクトアタック！」
『兄さん！』
「セツ！」
「お兄ちゃん！」
「まだだ！　まだ終わらない！　トラップカード『ガード・ブロック』！　ダメージを無効にしてカードを一枚ドローする！」
「ギチッ！？」
「トラップカード『異次元からの帰還』によって特殊召喚されたモンスターは、ターン終了時に再び除外される、だろ？」
「ギチ……だが、ワタシは速攻魔法『神秘の中華なべ』を発動。『鉄甲装甲虫（メタルアーマードバグ）』をリリースしてその攻撃力分のライフポイントを回復する！」
　インセクトナイトＬＰ４５５０
「ギチチッ！　このターンでの決着はつかなかったが……貴様のフィールドにモンスターはなく、伏せカードも一枚。手札も残りは一枚。ワタシの勝ちだ！」
「……なあ、お前はどうして、俺たちを襲って来たんだ？」
「ギチチッ！　決まっている！　ワタシは力を得たのだ！　偉大なる終焉の闇に見染められてな！　故に、その命により、貴様を殺す

！」

インセクトナイトの言葉は、まあ予想通りではあった。このタイミングで襲ってきたのだから、馬鹿でもわかる。

「……殺せねえよ。お前なんかじゃ、俺は」

「なんだと？」

「力を得たって言ったな？　だが、俺にはお前が、力を持っているようには感じられない。間違いなく、海中から感じたエリアルの力の方が大きかった」

あの時、凛がデュエルしていたであろう時は、海が荒れ、天候すらも崩れていた。海中に居た凛たちは知らなかっただろうが……終焉の力は、本来それほどに強い。

「噛ませ犬だよ。お前」

「っ貴様！」

「精霊界に来た、俺たちに対する、ユーキちゃんからの挨拶。そんなところか。じゃなきゃ、お前程度の奴が刺客として送り込まれてくる筈がない」

「黙れ！　そんな台詞は、ワタシを倒してから言え！　現に今、貴様のライフはワタシの半分以下！　フィールドや手札も、絶望的な状況ではないか！」

「……そうか。わからないか。なら、見せてやるよ。俺のターン、ドロー！」

俺は、ドローしたカードを確認して笑みを浮かべる。来た！

「このカードを待っていた！　マジックカード発動！『ジャンク・リサイクル・フュージョン』！」

「何だそれは！？」

「『ジャンク・リサイクル・フュージョン』は、融合デッキから機械族の融合モンスター一体を選択し、その融合素材モンスターを二組、墓地から除外することで、そのモンスターを融合召喚することができる！　俺は、墓地に眠る『サイクロイド』と『チェンジギアモーター』二組をゲームから除外して、融合する！」

『おっしゃあああああっ！！　来た来たぁ！』
スクラップ状態のサイクロイドとモーターの、使える部品をリサイクルし、融合素材とし流用する『ジャンク・リサイクル・フュージョン』。これが、俺の切り札！
「轟けアクセル！　融合召喚！　爆走開始！『バイクロイド』フルスロットル！」
ギャリィィィィィィッ！！
オートバイのような形に進化したサイクロイドが、ドリフトしつつ飛び出していく。
『バイクロイド』ＡＴＫ２４００
『テンションマックス！　行けるぜ兄さん！』
「これで、俺の勝ちだ！」
「ギチチッ！　馬鹿め、ソイツの攻撃力は精々２４００！『ジャイアントワーム』を破壊するのが精一杯だ！」
「そいつはどうかな？　リバースカード発動！『ゲットライド！』！」
「なにっ！？」
「俺は『ゲットライド！』の効果で、墓地の『チェンジギアモーター』を『バイクロイド』に装備する！」
「ふん、血迷ってルールすら失念したか！？『チェンジギアモーター』は、攻撃力１０００以下のモンスターにしかユニオンできない！」
「ところがどっこい！　ここで『バイクロイド』の効果発動！　このカードは、機械族のユニオンモンスターを、条件を無視してユニオンすることができる！」
「ギチチッ！？」
『行くぜ兄さん！　ギアチェンジ！』
「ユニオンされた『チェンジギアモーター』の効果発動！　ユニオンしたモンスターの攻撃力を８００ポイントアップする！　更に、バトルフェイズ中追加で８００ポイントアップ！」

『バイクロイド』ＡＴＫ２４００→３２００→４０００
「攻撃力……４０００!?」
「俺も驚いたぜ。まさかこの二輪が、サイバー・エンドクラスの潜在能力を持っているとはな!」
「ギチッ！　だが、まだだ！　まだ『デビルドーザー』が破壊される程度では……」
「ふん、血迷って俺の手札も見えなくなったか?」
「ギチッ!?」
俺がさっきの奴の言葉を返してやると、奴はハッとして俺の手札を見る。
「ギチチッ!?　そ、それは……」
「ああ。終わりだ。速攻魔法『リミッター解除』！　俺の場の、機械族モンスターの攻撃力を二倍にする!」
『バイクロイド』ＡＴＫ４０００→８０００
『おおおおおっ！　っしゃあ！　ぶっ飛ばすぜ!』
「ば、馬鹿な……このワタシが……無死虫団のエリート兵士たるこのワタシが……こんな弱小に……!」
「やっぱり、噛ませ犬だったな。エリートさん（笑）」
『今度は、俺っちのレンタサイクルタクシーをよろしく……そう、来世でなぁぁぁぁっ!!』
「バトルフェイズ!『バイクロイド』で、『ジャイアントワーム』を攻撃!『アクセル・ウィリー』!!」
『アクセル・ウィリー!!』
大地が抉れるほどの高速回転をしたタイヤが、『ジャイアントワーム』を蹴散らし、奥に居たインセクトナイトすらも消し飛ばす。
「ギィィィィィッ!?」
インセクトナイトＬＰ０

パキン。
駒が一つ潰えた。
「……流石、セツくん。あの程度じゃ、挨拶にしても失礼だったかな？」
クスクスと忍び笑いが漏れる。
「……リチュアも負けちゃったみたいだし、やっぱり強いなぁ、セツくんたちは」
闇の中に浮かぶセツたちをみて、終焉の闇は一層笑みを深めた。

「セツ～！」
「お兄ちゃん、怪我はない？」
「ああ、全然平気だ」
「良かった……」
怪我一つない姿を見せると、アテナたちは安堵の息を漏らした。
「でも驚いたな。何でまた、サイクロイドのデッキを？」
「外で星を眺めていたんだ。デッキもディスクもないところを、今の奴に襲われてな。コイツのデッキしかなかったから、仕方なく」
「え～星見？　なんでさだめを呼んでくれなかったの？」
「最初は水を飲むだけのつもりだったんだ。偶然星空が目に入ってな」
「……確かに、精霊界の星空は綺麗」
「そうですね。人間界だと、星が少なくて悲しくなっちゃいます」
「どちらにしても、護衛もなしに一人でうろつくな。今、単独で行動するのは自殺行為だ。我か、ルイン殿あたりに声をかけてからでなければ……」
「へぇ、心配してくれているのか？」
「ば、馬鹿言え！」
「でも驚いたよ。サイクロイドって、結構強かったんだね」

凛がそう言ってサイクロイドの顔（ハンドル？）を覗き込む。
「あったり前じゃねえか！　俺っちは、国家転覆を狙う忠義の二輪だぜ！？」
「……国家転覆を狙っている時点で忠義もクソもないだろ」
「それにしても、そういう時のために外に最大戦力のシャルナを残しておいたのに……何処行ったんですかシャルナは……」
「え、そういう意図があったの？　さだめてっきり、嫌がらせか何かかな～と」
「何言ってるんですか！　シャルナに嫌がらせなんて、するわけないじゃないですか！」
「いや～正直その言葉には説得力がないかと……」
「……せめて、その事は口頭で言っておけばよかったんじゃないか？　あの駄女神、今頃どっかで不貞寝でもしているんじゃないか？」
「あ～ありそう。シャルナって、結構拗ねること多そうだし」
「そうなんですよ。ホント、ちょっとしたことで拗ねてやる気なくすので……」
アテナがブツブツと愚痴り出すのを横目で見ながら、俺は溜息を吐く。
「……まあ、アテナの口撃力が無自覚に高いのも、拗ねる理由の一つだと思うけどな」
今頃どうしているやら。次は、もうちょい優しく扱ってやるとしよう。

……で。
「ぶえっくしゅっ！　うぅ～……まだ夜中じゃないの。誰かおねーさんの噂でもしているのかしらね～？」
大方の予想通り、駄女神ことシャルナは、天界の自室で、自棄酒をして不貞寝していた。

「うぅ……何さ何よ皆して～あたしだって好きで役立たずやっているわけじゃ……そりゃあ、ちょっと間が悪かったりで失敗も多いけど……もういい！　寝てやる！　今から十二時間睡眠してやるわ～！！」

今まさに、間が悪いことで評価が下落の一途を辿っていることに気づかないまま、シャルナは再び寝床に潜り込むのであった。

第四期第五話「バイクロイド召喚！　フルスロットル！」（後書き）

今回使ったオリカは「チューンアップ」「チェンジギアモーター」「ジャンク・リサイクル・フュージョン」「バイクロイド」ですね。
他にも、原作オリカから「ペア・サイクロイド」が。ホントは補助輪も使いたかったんですけど、展開上、使えませんでした。
それでは、悠でした！

第四期第六話「銀髪騎士のホントのココロ？」（前書き）

六話目。

改訂前は「昔語り―御堂兄妹」だったんですが、まとめました。

消すには惜しかったのでデータ自体は残ってますが。エースさん爆発の回。

第四期第六話「銀髪騎士のホントのココロ？」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第六話「銀髪騎士のホントのココロ？」

真夜中の襲撃から数時間後。
あれから、襲撃を警戒せずに眠るのは自殺行為だと判断し、少し早いが王都に向けて出発することにした。
バイクロイドにも変形できるらしいサイクロイドだが、頑張っても定員は3人がいいとこなので、結局徒歩での旅だ。
「……お前、ついてくる意味殆どないな」
「そう邪険にしないでくれよ。一緒に戦った仲じゃねえのよ」
「あー、はいはい。言ってろボロチャリ」
まあ、緊急時にアテナたちを乗せて走って貰えばいい。そういう意味では役にも立つだろう。
「しっかし、王都ってのはまだ着かないのか？　何度か休憩を挟んでいるとはいえ、もう昼だぞ」
うんざりしたように愚痴る剣士の言う通り、もう太陽はほぼ真上までこようとしている。
「王都から我らのいた海岸までは近くない。だが、我の記憶が正しければ、後半日はかからないだろう」
要するに、あと半日近くはかかるわけだ。
「……けど、お腹空きましたね」
「そうだね。私もお腹空いた。最後に食べたの何時だっけ……？」

「多分、さだめはかき氷……」
「凛、お前は散々食ってただろうが……」
アテナ、凛、さだめの歳下組も、少し大変そうだ。
「……休憩を挟んだとはいえ、確かに少し強行軍過ぎたな。おいボロチャリ。バイクモードになれ」
「ん？　別に構わねえが何処行くんだい？」
「食料を調達してくる。皆は、ここで休憩していてくれ」
「食料調達？　ならさだめも……」
着いてこようとしたさだめを押し留める。
「いや、エースに一緒に来てもらう」
「我か？」
「ああ。お前なら、食べられる野草とか、そういうのもわかるだろう？」
「確かに、騎士の教練過程にサバイバルもあるから知っている。しかし、よくそんなことがわかったな」
「騎士だの兵士だのが、そういう知識ゼロなわけないだろ」
「……いや、希冴姫の奴なんかは知らんと思うぞ。一般からの叩き上げである我と違って、奴は貴族騎士の様なものだからな。そんな泥臭い知識、知らんだろう」
確かに、希冴姫がそこらの野草摘んで食べるところは想像できないな。
「でも、お兄ちゃん大丈夫？　疲れてない？」
「心配すんな。こちとら、誰かさんのおかげでタフさだけは自信があるんだ」
「う、皮肉っぽい……」
「よし。それじゃあ頼むぞ」
「あいよ。モーターセット！　変形合体！」
サイクロイドが掲げたカードから『チェンジギアモーター』が現れ、サイクロイドと合体する。
「変形完了！　乗りな兄さん、エースの姐さん！」

「……姐さんはよせ」
エースも、俺と同じくサイクロイドのことは苦手らしい。姐さん呼ばわりに、物凄く嫌そうな顔をしている。
「じゃあ、行ってくる。何かあったら水鏡で連絡、もしこの場に留まっていられなくなったら、移動して安全なところで落ち合おう。まあ、すぐに戻ってくるつもりではあるから、大丈夫だとは思うけど」
「しっかり体を休めておけ。いざというときは、躊躇うことなく逃げろ。退却することは恥ではない」
「わかっています。セツたちこそ、気をつけて」
「ああ」
道端に座り込み、各々休憩の姿勢をとるメンバーに頷いてから、俺とエースはバイクロイドに乗りこむ。
「エース、運転は？」
「……悪いが出来ん。機械は苦手だ」
「じゃ、俺が運転だ。しっかり捕まっとけ」
「ああ。というか、お前は運転できるんだな」
「普通の乗り物は一通り。飛行機や船は無理だが」
そんな会話をしながら跨る。俺の腰にエースの腕が回される。
「……役得。羨ましい」
「なっ！？」
「エースさんもさぁ、なんかユーキさんみたく、妙にいいとこ取りするよねぇ。っていうか、立ち位置的にも希冴姫さんポジションだし、キャラ的においし過ぎる気がする」
「い、意味がわからん！　ほら、さっさと出発しろ！」
「はいはい。まあ後ろに乗っているのがエースじゃ、背中の感触は期待できそうになっ！？」
「はっ倒すぞ！？」
「……もう殴ってるだろ……運転中はやめろよ。クラッシュしてもいいなら話は別だが」

「貴様がヘンなことを言わなければいいだけの話だ」
エースの文句を聞き流し、アクセルを回す。
「行くぞ、バイクロイド」
「おうよ！　いきなりフルスロットル！　全開だぜぃ！！」
「うわ馬鹿勝手にアクセル全開にすんなっ！？」
「ひゃあああっ！？」
ドォンッ！！
妙に上擦った悲鳴と共に抱きついて来たエースの身体が押しつけられる。しかし、そんなことを考える余裕もなくバイクロイドは急発進。
「あっ！　お兄ちゃん！」
さだめたちの声を遠くに置き去りにして、俺とエースは遠くに見える森へとすっ飛んで行くのだった。

アテナたちから別れて、俺とエースは街道から少し離れたところにある森へと足を踏み入れていた。バイクロイドは、森の中まで入って来られなかったので、入口で待機だ。……まあ、物凄く不満そうだったが。散々ぶー垂れていたが。
「手近なところで食料を調達するとなると、やはりこの森だろう」
木漏れ日の降り注ぐ、繁った森だ。きのこや木の実、野草など、自然で育まれた恵みが多く取れるらしい。
「このまま奥まで進むぞ。その方が安全だ」
「奥の方が安全？　どういうことだ？」
普通なら、奥まで進むにつれて危険が増していくものだと思った俺が、エースに尋ねる。
「そうだな……確かに、普通の森ならそうだろうが、この森の奥は、遥か古から変わらぬ聖域がある。お前たちには『古の森』と言えば分り易かろう」

『古の森』……フィールド魔法で、戦闘を行ったモンスターを破壊する、争うことを許さない森……なるほどな。
「つまり、その古森までいけば、俺たちを襲う獣や昆虫はいなくなるってわけだ」
「そういうことだ」
そこで、気になっていたことをエースに尋ねる。
「……これ、獣道だよな。それも、かなり大きなものだ。クマでもいるのか？」
「さあな。この精霊界には、人間界では想像もつかんほど巨大な獣もいる。もしかしたら、昆虫やもしれん」
「……人二人が楽に通れる獣道を作る昆虫か。ぞっとしないな」
「何を言う。中には森を丸ごと潰しかねん程巨大な昆虫とている。その程度で怯えるな」
別に怯えているわけではなかったが、妙に勝ち誇った顔のエースが微笑ましくて口を挟まないことにした。こんな時にまで藪を突く必要はないだろう。タダでさえ、森に住む精霊たちを刺激するのは避けたいのだから。
「……おい」
が、どうやら騎士様はそれが気に食わなかったらしい。
「なんだ？」
「その……ああもうなんだお前は！？　移動中は散々弄んでおきながら！」
「……は？」
突然爆発したエースに、俺は困惑する。
「いきなり殊勝になるな！　我は、お前に嘲笑の視線を向けたのだぞ！？　その……もうちょっと相応しい反応があろう！？」
「えーと……とりあえず落ち着け馬鹿」
「ば、馬鹿とは何だ！？　わ、我は馬鹿ではないっ」
「いやなんでニヤけてるんだお前は」
コイツ、なに『そうだ、その反応だ！』みたいにしてるんだろう。

「なんだ、お前アレか、Mなのか？　罵られないと満足できない体になっちゃったのか？」
「？　えむ、とはなんだ？」
「ああもうやりにくいなぁこの純真騎士！」
そんな、きょとんとした眼でこっち見んな！　いたたまれないよ！　なんか、そんな反応されると、俺がいたたまれないよ！
「その意味は、さだめの奴にでも聞け！」
アイツなら、それこそ嬉々としてレクチャーしてくれるだろう。
……余計な知識も大量に喋り倒しそうだが。
「……要するに、あまり健全ではない意味なのだな？」
「……お前がさだめに抱いているイメージが良くわかったよ」
いや事実なわけだが。兄としては、妹のイメージが非健全で固定されているこの状況は、事実だとしても微妙に安心できない。
「とにかく、争いを許さないような森に足を踏み入れる俺たちが、ここで争ってどうすんだってことだよ」
「……なんだ。張り合いのない……」
物凄く不満そうに、というか若干拗ねたように呟くエースに、俺は思わず呆れたような声を出していた。
「あのな……こんな時まで張り合ったって仕方ないだろ。それはお前だってわかってんだろ？」
「むぅ……」
まだ不満そうなエース。というか、少し戸惑っているらしい。
「エースって、案外子供だよな。色々と」
「なっ何を……！」
「そうやって、すぐムキになるところとか」
「むぐっ……」
「意外と無知なところとか」
「こ、この……」
「そんで……滅茶苦茶意地っ張りの頑固頭。まだ、まともに俺以外とコミュニケーションとれてないだろ」

エースが俺たちの所に来た時から、この精霊界での旅を見ていて、ずっと思っていたことだ。コイツは、あんまり人付き合いが得意ではない。

「ぬ……それは……」

「取るにしても、基本的に俺か希冴姫を通して。希冴姫が居なくなってからは、ほぼ俺一択。仲間なんだから、その人見知りはそろそろ治そうぜ」

「……」

黙り込むエース。多分、俺に突っかかって来たのも、そこら辺が関係しているんだろう。ずっと神殿に篭って、他人との接触を断ってきたコイツは、その接し方がわからない。

「だから、唯一まともにコミュニケーションのとれた俺との喧嘩を取っ掛かりにしているんだ。でも、喧嘩（それ）がある程度非常識な手段だと理解もしているから、俺以外とはその手段を取れない」

流石に、俺の言わんとしていることが理解できたらしく、エースが俺を鋭い目で射抜く。

「……貴様、まさか我を連れてきたのは……」

そう。始めからコレが目的だった。イマイチメンバーと馴染めていないエースに、もう少し歩み寄りを求めるために。勿論食料も目的だが、それはあくまでついでだ。

「お前との喧嘩は楽しいからな。つい俺もお前にちょっかい出したりしてしまうんだが……いつまでもそれじゃあ、疲れるだけだぞ？」

「……」

複雑そうな顔で黙り込むエースに、俺はさらに言葉を重ねる。

「エース。俺たちは、仲間だ。同志だ。それなのに、お前が遠慮して、イザって時に連携が取れなきゃどうしようもない。こんなこと、騎士団長のお前なら、当たり前のようにわかっていることだろう？」

「……当然、だ……素人に言われるまでもない」

その絞り出すような、弱々しい声に、まだ納得していないと感じた俺は、攻め方を変えることにした。

「……なら、言い方を変えようか」
俺は、戸惑いの表情を浮かべるエースに目を合わせる。
「俺たちは、皆友達だ。遠慮したりすることはない。固く考えず、自然なお前を見せてやればいい。そうすれば、皆受け入れてくれるさ」
「……だが、その自然な我と言うのは……」
「ほら、また難しく考えてる。子供っぽい癖に、無い頭使うな」
「な、無い頭とはなんだ!?　わ、我が馬鹿だとでもいいたいのか!?」
ガーッと噛み付いてくるエース。その顔は、やはり生き生きとしている。やっぱコイツ、若干M気質あるんじゃないか……？
「吠えるな吠えるな。そういう単純な思考回路に従って答えを出せばいいじゃないか」
「た、たんじゅん……？」
「単純だろ。物凄く。お前の行動、殆ど全部衝動的なもんだし、今お前の考えていることとかも、結構簡単にわかるぞ？」
「な、なんだと……『じゃあ読み取って見るといい！』っ……！？」
「……ほらな？」
声を重ねられて愕然としているエースを見て、俺はクックッと思わず悪い笑みを浮かべてしまう。
「単純過ぎるぞ。そんなの、俺じゃなくたって読み取れる」
「ぐ……」
「だからさ。お前は衝動的に、思ったまま行動してみろ。意外とあっさり受け入れてもらえるぞ？」
「……そういう、ものか？」
「そういうもんだ。つか、そんな難しく考えたって完璧な友達との付き合い方なんてわからないよ。だったら、不器用なりに“らしく”やってりゃいいんだよ。知ってるか？　自然体ってのはある意味最強なんだぜ？」
「……そうか」

「……ったく」
パァンっ！
「ひゃあぅっ！？」
まだ少し不安そうなエース。その背中を思い切り引っ叩く。
「ほら、元気出せ。さだめみたいのでも友達になってるような奴らだぞ？　お前くらいで尻込みする奴らじゃないっての」
「っ……っ……！」
「……エース？」
「なっ……なんでもない……！」
……おや？
「ま、まあとにかく、コミュニケーション不足ってのは思わぬ誤解を産んだりするからな。そういうのはしっかり話せよ？」
「わ……わかっている」
若干涙目で頬を染めるエースを見て思う。
――あー……もう間違いない。こいつ、ライトなM体質だ……。
発覚した微妙に衝撃の事実は忘れることにして、俺はまとめに入る。
「とりあえず、あいつらお前が俺に惚れているんじゃないかって誤解しているっぽいから、その誤解だけでも解いておけよ」
「む……その話か」
落ち着いたのか、息を整えたエースが苦々しげな顔をする。
「あ、やっぱり警告というか、忠告というか、されてるんだな」
「口には出さんが、目は口ほどに物を言う、というやつだ」
目というか、オーラだが。とエースは苦笑する。
「俺から見れば、例によって接し方が不器用だから誤解されているだけ、と見るが、その辺どうなんだ？」
「……さあな。我の思考は単純でわかりやすいのだろう？」
「ところが、感情の方はそうもいかない。頭でどう考えているのかはともかく、心でどう感じているのかは、読み取るのは容易じゃないな」

特に、恋愛感情だのという奴は、とことん複雑で難解だ。鈍感であるつもりはないが、想いの深度を図ることまでは出来そうにない。

「俺はお前のことを、掛け替えのない親友だと思っている。だけどまあ、男女間の友情ってのはささいなきっかけで恋愛に変わったりもするからな。尚更わからん」

溜息を吐く俺に、エースは少し意地悪げな目を向ける。

「随分と積極的ではないか。希冴姫も含め、五人もの女に言い寄られておいて、まだ増やすつもりか？」

「……んなつもりはない。俺は、ただはっきりさせておきたいだけだ」

「……ふむ」

エースは、少し考え込むかのように顎に手を当てる。

「……ここで我が好きだ、と言えば……どうする？」

「俺は難攻不落だぞ、と返す」

「……もう少し考えろ。もしこれが我の、一世一代の告白だったりしたらどうする」

不満そうに唇を尖らせるエースに、苦笑を返す。

「言っただろ。お前の考えることはわかるんだ。そんなあからさまなジョークにうろたえるほど、俺は可愛らしくはないぞ？」

エースはむぅ、と小さく唸って黙り込む。

「これだから女慣れしている男は……」

「ちょっと待て。その言い方は看過できん」

「事実だろう。五人も侍らせておいて、今更」

「……だからこそ、妙な誤解でごちゃごちゃするのは嫌なんだよ。修羅場なんて、傍から見れば楽しいんだろうが、その当人としちゃどうしても避けたいもんだ。タダでさえ、ウチのお姫様方は物理的に武力が高いんだから」

冗談交じりにそう言うが、ぶっちゃけ冗談じゃない。ヤンデレる危険性すら濃厚なさだめ以下五名。冗談では済まされない。特に、最近わけのわからない力に目覚めたさだめや、精霊の力を行使でき

るアテナ、破滅の女神ルイン、騎士の希冴姫、終焉のユーキちゃん……ああもうどいつもこいつも！

「……誤解では、なかったとしたら？」

エースは立ち止まり、俺に体ごと向く。

「その時は、その時で考えるさ」

さぁ、と森の風にエースの銀髪が靡く。

「……」

「……」

「……我は」

そこで一つ、間を置くエース。

「……どうなんだ？　エース」

しびれを切らした俺の問いかけに、エースは徐々にこちらに近づいて来る。

「お、おいエース？」

そのままエースは俺の頬に手を伸ばし……。

「……ふぁっ？」

俺の頬を引っ張った。

「ふぇ、ふぇーふ？（え、エース？）」

「……ふん。図に乗るな。誰が貴様なんぞに」

「ふぁ、ふぁらもっはいふるふぁ！（な、なら勿体ぶるな！）」

「これで我の一勝、だろう？」

「いだっ！？」

最後に強く頬を抓り、エースは森の先に進んで行く。

「ちょ、待てよ！」

慌てて後を追う。と……

フッ……

「は……？」

振り向いた瞬間、頬に軽い接触感。それは本当に一瞬の出来事で。

「え、エース？」

「……貴様は気を使い過ぎる。仲間だ友だというのなら、余計な気

を回さず、どっしりと構えていろ。ただでさえ貴様は奴らのリーダーなのだ。このようなことで心を乱すな」

「いやっそれよりもお前いまっ……！」

今さっき起こった事実に混乱して、らしくない醜態を晒してしまう。そんな俺に、エースは初めて見るかもしれない満面の笑みを浮かべて振り向いた。

「これで、二勝だ。さて、今のお前に、我の事が読めるかな？」

そんなもの、読めるわけがない。今のエースが何を考えているのか、どんな想いを抱いているのか、俺にはさっぱり分からなかった。

「……口で言うほど、難攻不落でもなさそうだな？」

「ってめ……！」

「さあ、腹を空かした仲間たちが待っている。この森の食糧、根こそぎかっぱらって行くとしよう」

古の聖域だと言うのに、物凄く不謹慎なことを言ったエースは、話は終わりだ、とでも言うように先に進んでいく。俺も慌てて意識を切り替える。

「お、おう……これなんかどうだ！？　このきのこ……」

「あっ馬鹿そいつは……」

俺が手に取ったきのこから糸のようなものが伸び、俺に巻きつく。

「……きのこマンだ」

呆れたようなエースがその糸（恐らく菌糸）を切り捨て、きのこマンを追い払う。

「くっく……なんだ。貴様、案外純情ではないか。我に散々子供だ子供だと言っておいて」

「う、うるさい。余りに予想外の展開が続いて、頭が着いてこないだけだ！」

くすくす笑うエースに、俺は体に残る菌糸を取り除きながら答える。完全にやり込められたことが悔しくて、どうにも顔が合わせられなかった。

――結局、俺がエースの真意を体よく誤魔化されたことに気付いたのは、皆の食事を作り始めていた時なのだった。

第四期第六話「銀髪騎士のホントのココロ？」（後書き）

この辺りで、もうエースはメインヒロインだろう的なうわさが流れ始めました。実際、作者もめっちゃお気に入り。明らかに、他ヒロインを食ってます。エースさんの本心については……一応、闇の中ということで。

それでは、悠でした！

第四期第七話「封じられたカードたち」（前書き）

七話目～。そろそろ疲れて参りました。意外とこのアップする作業がめんどくさい。この前書きやあとがきがやっつけになっているのもそれが原因。え、いらない？　そこはほら、なんていうか……書きたいんですよ。やっつけでも。

第四期第七話「封じられたカードたち」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第七話「封じられたカードたち」

「「「いただきまーす！！」」」

全員で一斉に、俺の作った料理に箸を伸ばす。

「お、こりゃ美味い」

「ホント、雑草にしか見えなかったものとは思えないわね」

エースと一緒に採取してきた野草を使った料理は、比較的好評なようで何よりだ。

「オレも料理はするが、こんな見たこともない食材でここまでの物は作れねぇな……」

「剣士は基本、料理に糖分を使い過ぎだ。もうちょい歯とスタイルに優しく作れ」

「オレは甘い方が好きなんだよ……」

「っていうかこれホントにサバイバル料理だよね……」

基本的には、そこらの食える野草やキノコを摘んできて煮たり焼いたりしただけだしな。

「火はルインが出してくれたし、水はエリア姉妹がいる。……後は、バグロスの身体で煮たり焼いたり……」

「バグロスさーん！？」

「へ、へへ……俺の身体が、お嬢さん方の血肉になってくれんなら、脇役冥利に尽きらぁ……」

「な、ならないよ！？　例え鉄板やお鍋扱いされていたとしても、バグロスさんの身体は血肉にはならないよ！？」
「……凛、冗談だ。気付け」
バグロスの演技にまんまと騙されている凛に呆れ顔の剣士がツッコム。というか、あの潜水艦、ノリいいな。
「ま、こういうサバイバル料理みたいなのは、俺の専売特許だな」
ぶっちゃけ、俺は所謂家庭料理はそれほど得意ではない。勿論、人並みに出来る自負はある。だが、どちらかというともっとお洒落なフレンチ等の高級料理を如何に美しく飾りつけるか、或いは逆に、極限状況で器具も食材も満足にない中究極に美味いサバイバル料理を作るか。
「俺の専門はそのどちらかだ」
「両極端過ぎる！」
だから、ロクな食材がないレッド寮食堂は俺にとってそこそこいい環境だったりするんだな。
「はわっ！？」
「……なにやってるのよ貴女は」
「ご、ごめんなさいおねぇちゃんっ！　あ、あたしおっちょこちょいで……」
「しょうがないわね。ほら、食べさせてあげるから口あけて」
「あ、あ～ん……」
……あいつは介護老人かなにかか。
「お兄ちゃん、さだめにも食べさせて！　あーん」
「……こっちは食虫植物だな」
「なんで！？」
「あ、間違えた。食人植物」
「そこでなくて！」
「カニバリズム」
「それは否定できない！」
「カニ」

「それは否定する！」
というか、カニバリズムを否定しようぜ。
そんな会話をしつつ、全員食事を終える。
「まだちょっと足りないような……」
「我慢しろ」
まあ、基本的に野草とか菜っ葉系ばかりだし、物足りないのもわかるんだが、な。
「王都に行けば、少しはまともな食事も出よう。なんならジャックとセツに作らせればどこぞの宮廷料理染みたものが出てくるだろうしな」
「任せておけ。そういう、日常ではまず作らないような料理こそ、俺の本領だ」
なんせ無駄スキルだからな。
「そのためにも、さっさと王都まで行こう。これは俺の予想だが、多分俺たちの動きは読まれている、というか監視されていたりしても不思議じゃないしな。早い方がいいだろう」
各々に荷物を手に持ち、出発の準備が整ったところで……。
「お兄ちゃん待って！！」
「唐突にエクスクラメーション二連打！？」
ちなみに、今のは悲鳴だ。立ち上がったところをさだめに襟首を掴まれたことによる。
「どういう悲鳴だよ……」
「げほっ！　な、なんだどうした！？」
「あれ！！　アレ見てお兄ちゃん！！」
「常に二連打するほどの何が……」
怪訝に思いつつ、さだめが指差す方向を見る。するとそこには……。
「ま、マキュラ！？」
「マキュラ～～！！」
さだめが異常にハイテンションだ。

「おい、何かこっちに近づいてくるぞ」
「こっちこっち〜！！　ちちち……！！」
「おいやめろマキュラは猫かなんかみたいな小動物じゃねえ！」
「殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺……
……」
「あからさまにヤバげな雰囲気醸し出してるー！？」
「呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪……
……」
「一体なんて発声しているのかよくわからないけどロクでもないことはわかる！」
「怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨……
……」
「もうやめて！？　なんかホントに怨みで呪い殺されそう！」
「……我が封、解き放たれし故……デュエル」
「さだめに任せて！！　デュエル！！」
「え、これデュエルする流れだった！？　今のデュエルに至る流れ、唐突じゃなかった！？」
「……こちらの、ターン。ドロー……。『処刑人―マキュラ』を召喚。ターン、エンド」
「さだめのターン、ドロー！！」
「え、あいつ思い切り禁止カード出してきたけどいいの！？」
「さだめは手札からマジックカード『強欲な壺』発動！　カードを二枚ドロー！　更に『強欲な壺』！」
「は！？」
ツッコム暇も与えないとばかりにさだめがいきなり禁断の『強欲な壺』二連打。
「更に『強欲な壺』！『天使の施し』！　三枚ドローして手札を二枚捨てる！　更にもういっちょ『天使の施し』！」
まさかの三連続『強欲な壺』に続いて『天使の施し』連打。一切の妥協を許さない超高速ドロー。

「純粋に酷ぇ！？　なんだあのデッキ！？」
剣士たち初見の人間が揃って驚愕している。俺はもう諦めた。ありゃアイツお得意の禁止スタンダード……というか、カオスだ。
「手札から魔法カード『苦渋の選択』！　デッキから『処刑人―マキュラ』『混沌帝龍（カオスエンペラードラゴン）―終焉の使者―』『カオス・ソルジャー―開闢の使者―』『マシュマロン』『魂を削る死霊』を選択！　さあ、選んでマキュラ！！」
「なんだそのラインナップ！？」
「……我、を、選択」
「やっぱり、自分を捨てさせることなんてできないよね。その気持ち、わかるよ！！」
「いや、あのラインナップなら誰でもそうするかと……」
「お前ら、一々ツッコムな。突っ込んだら負けだぞ」
どうせ聞いちゃいないんだし。
「でもごめんねマキュラ！　もっと貴女とのデュエル、楽しみたいけど……このデッキだと長くは楽しめないの！」
「……そりゃそうだろう」
というか、何故お前はマキュラを女だと断定しているんだ。声はどう聞いても男だったんだが。
「手札から魔法カード『死者転生』！　手札のマキュラを捨てて『混沌帝龍（カオスエンペラードラゴン）―終焉の使者―』を手札に戻す！」
……終わったな。
「更にマキュラが墓地に行ったことにより手札からトラップカード『第六感』！　さだめは5と6を選択するよ！」
もうやめたげてー（投げやり）。
「……ダイス、ロール」
出た目は6。よりにもよって成功……まあ、どちらにせよ結果は変わらんのだが。さだめが一気にデッキからカードを6枚ドローする。
「墓地の『マシュマロン』と『魂を削る死霊』をゲームから除外し

て、さだめは『混沌帝龍（カオスエンペラードラゴン）―終焉の使者―』を特殊召喚！　手札から魔法カード『死者蘇生』発動！　墓地から『黒き森のウィッチ』を特殊召喚！　そして『混沌帝龍（カオスエンペラードラゴン）―終焉の使者―』の効果発動！」
「おーい、ちゃんと荷物持ったかー？　そろそろ出発するからなー？」
「ライフを１０００ポイント支払って、お互いの手札とフィールド上のカード全てを墓地に送り、その数×３００ポイントのダメージを与えるよ！　さよならマキュラ！『セメタリー・オブ・ファイヤー』！！」
「がっ……は……！」
マキュラＬＰ０
ちなみに、今の一撃に耐えてもどうせ『八汰烏』が手札に呼ばれてドローロックコンボで詰みだ。
「マキュラ！！」
さだめは、マキュラが居た辺りに駆け寄る。
「ああっ！　マキュラが消し炭に！？」
「お前がやったんだろ。それはもう情け容赦皆無の一撃で」
「敵になった好きなものほど、全力で消し去りたくなるものなんだよ……」
「その理屈で行くと、俺はユーキちゃんを跡形もなく消し飛ばさなくてはいけないんだが」
「消し飛ばせばいいんじゃない？　ライバルが減って大助かり」
「ちょいとお嬢さん。正義の味方の台詞というものを、小一時間程語り合わないか？」
「さだめが正義の味方とか……笑っちゃうわぁ～」
「まったくもってその点には同意するが！　一応そういうことになってはいるんだから少しは自覚持て！」
「個人的には『わたし、皆みたいに優しくないから……』とか言いつつ容赦なく敵キャラを滅殺するダーク系ヒロインの立ち位置が妥当だと、さだめは思う」

「確かにさだめさんってそんなタイプではありますけど……それを自分から主張するのって、どうなんでしょう……」

あのマキュラも、多分終焉の闇からの刺客かなにかだったんだろうが……まあ、相手が悪かったな。禁止デッキさだめ相手じゃ……。

「ところで、さだめってマキュラがフェイバリットだったりするの？」

「あれ？　凛に話してなかったっけ？」

コクコクと頷く凛に、さだめはデッキからマキュラを抜き出して説明する。

「そりゃあもう！　さだめにとって、魂のマイフェイバリットアイドルカードと呼んで差し支えないね！」

「お前、その重複表現は癖なのか？」

「何と言っても、この処刑人っていう言葉が素晴らしいよね！　この対象を惨殺することに特化したようなフォルムといい、最高！　ああ、せめて消し飛ばす前に、あの武器貰っとけばよかったなぁ……」

俺のツッコミを黙殺したさだめが得意げに語り出す。

「そ、そうなんだ……ヘンな趣味……」

「まあ、コイツの三大フェイバリットって言えば、『処刑人―マキュラ』『万力魔神バイサー・デス』『バイサー・ショック』が三強だからな」

ちなみに魔法・罠では『拷問車輪』『悪夢の鉄檻』『悪夢の拷問部屋』などが該当する。

「……『バイサー・ショック』は経験あるのでわかります。あんまり思い出したくないけど……」

「……あのデュエルは、さだめもあんまり思い出したくないから忘れてていいよ」

自滅だったしな。

「……禁止カードをそうポンポン使うってのはどうなんだ」

「ああそれ？　別に良いじゃん。公式デュエルでも何でもないんだ

し」

誰かがボソリと言った言葉に、さだめはこともなげにそう返す。

「大体闇のデュエルだとか、世界の命運が懸かった大事なデュエルでさ、律義に禁止制限守ったデッキ使う意味ないじゃん。さだめはモラルや体裁より、命と結果を優先するね」

さだめは自分の持つ禁止カードを大量に投入したデッキを見る。

「この子たちも可哀そうだよね。デュエルで強いことはいいことなのに、強過ぎるからって禁止されて、以降誰にも使って貰えないんだよ？　精霊って、デュエルで使って貰うことに喜び感じるような子が多いのにさ。この子たち、特に強過ぎると言われている混沌帝龍（カオスエンペラー）やら『八汰烏』やらマキュラやらは、もう禁止解除は絶望的だし」

「さだめ……」

「まあ本音は、いきなり禁止カード出てきて驚いた顔や、容赦ないゲームエンド効果使われて引きつった顔するのが見たいだけなんだけど」

「いきなりぶち壊すな」

照れ隠しなのかどうなのか……まあ、さだめにはどうも他人が触れたがらないところにも躊躇わず踏み込むいい意味でのＫＹ（まあ、普通にＫＹなところもあるんだが……）なところがあるのも事実だしな。

「……それに、こんなデッキ使ってれば嫌でも目立つし、狙われるよね」

「さだめ？」

「何でもない。行こ、お兄ちゃん」

小さな声で、何事か呟いたさだめだが、当のさだめはさっさと準備を整えて行ってしまう。

「さだめさん……」

「アテナ？　今のさだめの言葉、聞こえていたのか？」

「……ええ、まあ。セツは、知らなくても大丈夫です。大したことない呟きでしたから」

「そうか」
……そういう返し、大したことあるって言っているようなもんなんだがな。相変わらず隠しごととかは苦手だな。
「……あいつなら、大丈夫だろ」
必要以上の心配はしない。アイツが俺に聞こえないように言ったってことはそういうことだし、さだめのことは信頼している。……決して信用はしていないが。色んな意味で。
「……」
くいくい、と袖が引かれたので振り向くと、ルインが何事か言いたげな視線を俺に向けていた。
「ん？　どうしたルイン」
「……後で、話がある。王都に着いた後でいい。時間を頂戴」
「わかった。何の話かはわからないが……そこそこ深刻そうだな」
「……そう。大事な、話」
「了解だ。……部屋に行けばいいか？」
「……中庭で」
「りょーかい」
ふぅ……どうしたもんかな。さだめもアテナも、なにか考えているみたいだし……エースも何考えてるのかわからなくなったしなー。
「ん……？」
「何か来るぜ。敵対的な反応じゃないが……一応気をつけておきな」
バグロスの言葉通り、遠くから何かがやってくる気配がある。かなりのスピードだが……。
「あれは……『スピード・ウォリアー』か？」
ギャギャギャギャッ！　と俺たちの前で砂埃を上げつつ急停止した『スピード・ウォリアー』が、俺たち（主にエースか）の方に一礼してから話し始めた。
「唐突且つ急な推参申し訳ありません実は王都が何者か黒くて邪悪な一団によって襲われておりまして今現在は剣聖殿や無敗将軍様大将軍様方の奮闘により何とか持ちこたえては居りますがしかし相手

の数は一向に減ることがなく剣聖殿よりこちらに向かっているであろう剣士殿らへの状況説明と即刻引き返すようにとの伝言を承りまして私「貴様は言葉が早口に過ぎる！　説明になっておらんだろうが！」はっ申し訳ありません！」

顔を上げるなり猛烈な速度（上記の内容を話すのに秒とかかっていない）で話し始めた『スピード・ウォリアー』を慌ててエースが押し留める。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ……」

息も吐かずに一気に喋り倒そうとしたためか、『スピード・ウォリアー』は息が上がってしまっている。……こういう効果だからか？

「要約すると、王都が襲われて危険だから来るのはやめて引き返せ、と」

「セツ……今の聞き取れたんですか？」

「まあ、大体な。その黒くて邪悪な集団ってのは、やっぱり『終焉の精霊』なのか？」

「はっ！　恐らくそうであろうというのが剣聖殿たちの判断であります！」

「よし。ネイキッドたちの提案は却下だ。むしろ速攻で王都に向かうぞ」

「は……？」

怪訝そうな顔をする『スピード・ウォリアー』だが、俺たちは全員で頷いて足を速める。

「お、お待ちください！」

「おい二輪、バイクモードだ。剣士、先行ってネイキッドたちを助けてやれ」

「オレが？」

「お前なら、王都に精霊が居て、即戦力になりやすい。俺が行ってもいいが、エースも一緒に乗らなきゃいけないし、希冴姫が欠けてる。お前の方が適任だ」

「そうだな。わかった。任せろ」

「い、いえだからその……」
まだなにか言おうとしている『スピード・ウォリアー』を黙殺して、バイクロイドに剣士が跨る。
「オレは運転できねえからな」
「おう！　王都まで速達してやらぁ！　しっかり掴まっとけよ！」
急加速したバイクロイドが剣士を乗せて王都へと急行する。はた目から見れば剣士が運転しているようにしか見えないが、実際はオートパイロットみたいなもんだ。……ＡＩには酷く不安が残るが。
「俺たちは急いで王都に向かうぞ！」
「はい！」
「み、皆さん！！」
慌てたような『スピード・ウォリアー』に、仕方なく振り向いて教えてやる。
「ここで引き返すと、暖かい食事と風呂に入れないんだ」
「お腹空いているから、手早く済ませちゃおう！」
「……私はそろそろベッドで眠りたい」
「『終焉の精霊』相手なら、私の力が有効に使える筈ですから」
アテナ以外の理由は実に私利私欲でしかなかったが、どちらにせよ助けに行く意志が変わらないことを『スピード・ウォリアー』に告げる。
「こっちとしちゃ、恩がある上拠点を潰されるのは結構困るんでな。色んな意味で、ここで救援に行かない選択肢は無いんだよ。諦めろ」
「……助かります」
「よし。そうと決まれば改めて出発だ。先に向かった剣士だけで終わっていれば何よりだが……万が一のために、グズグズするなよ！」
「おー！」
「はい！」
「任せて」
「剣士さん……！」
全員の士気は高いまま、俺たちは王都への進軍を再開したのだっ

た。

第四期第七話「封じられたカードたち」（後書き）

もしかして予約投稿にして余裕を持って書けば一気にアップ出来たんじゃないかと今更になって気付くアホが一人。

一応、禁止制限無視しまくりのさだめにも理由はあるんだよー、と言う話。何も考えずに無視してるわけじゃないよーと。

それでは、悠でした！

第四期第八話「漆黒の魔王」（前書き）

八話目～。ようやくここまで来た。でもまだまだあと五話暗いあるんですよね。結構あるなぁ……。

第四期第八話「漆黒の魔王」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第八話「漆黒の魔王」

「ヤクザな兄さん、そろそろ着くぜ」
「誰がヤクザだコラ。ジャンクにすんぞ」
人の気にしているところをピンポイントで突いて来やがった二輪に文句を言って、オレは目の前に広がっている戦の後を眺めた。
「……ちっ、これじゃマジで戦場じゃねえか」
視界の奥に、土埃と雄叫びをあげて戦う戦士族たちが見えてくる。対して相手は、蠢く漆黒。遠目からだと真っ黒な気持ち悪ぃ何かがうぞうぞしているだけなんだが、恐らくあれが『終焉の精霊』の団体さんなんだろうな。
「とりあえず、ネイキッドんとこまで連れて行け。そっからはあいつらんとこまで戻って待っていろ」
「あいよ！　そりゃあ構わねえが、別に一暴れしちまっても構いやしねえよな？」
「知るか。あとでセツに怒られても知らねえぞ」
妙に血気盛んなボロチャリ（今はバイクだが）を駆り、ネイキッドを探して戦場を走る。
「あの筋肉馬鹿のこった、どうせ指揮官の癖に最前線にでもいやがるだろうさ！」
「おうよ！」

オレの指示に従って、バイクロイドが戦場を駆ける。すると一角だけ妙に突出しているところが見えた。
「あそこだ！」
「うおおおおおっ！！」
案の定、というかそこで戦っていたのはネイキッドたち騎士団。
「ネイキッド！」
「剣士！？　クッ、そうではないかとは思っていたが、案の定、我の忠告を聞かなかったな！？」
「聞くか脳筋！　オレらは仲間を見捨てる程クズじゃねえ！」
「……かたじけない！」
「ネイキッド！　敵の本丸……大将はどこだ！？」
「セオリーでいけば、最後方だろうな」
「なら話は早い、オレらで大将首取りに行く！　幸い、足ならある！」
オレはバイクロイドを指して叫ぶ。
「おう！　邪魔な奴らは、全部俺っちがなぎ倒してやんよ！」
「危険だ、というのは今更か。ならばむしろ、その方が得策か」
「将軍、ここの指揮は我らにお任せを！」
部下からの言葉に頷き、オレに向き直るネイキッド。
「そういうこった。乗れ！　ネイキッド！」
「応！　剣士、これを授けておく」
「こいつは……」
「今となっては我も、出し惜しみはしていられまい。全力を以って、首級（しるし）を取る！」
手渡されたのはネイキッドのカード。だが、普通のネイキッドとも違う、粗野と言うより神聖な雰囲気すら漂うカード。
「……お前、流れの傭兵将軍じゃなかったのかよ」
「さて、そんなこと言ったか？　我は自分の経歴に興味がなくてな」
道理でいつもいつも適当な経歴語っているわけだ。
「まあいい。どちらにせよ、コイツは戦力になりそうだ。ありがた

く受け取っとくぜ！」
「応！　ぜやぁっ！」
バイクロイドを駆りながら、襲いかかる敵を一刀両断するネイキッド。
「見えた！　奴だ！」
ネイキッドの声に反応してそちらを向くと、そこには明らかに他の雑魚とは雰囲気の違う精霊が一体。
「あれは……グレファー！？　ダイ・グレファーではないか！」
「ダーク化してやがるな……アイツが指揮官か」
「フハハ……フハハハハハハハッハ！」
「グレファー！　グレファー！　くっ……我の声も届かんか！」
「知り合いか？」
ネイキッドの声がやけに焦っている。
「……かつての友だ」
「……そうか」
ならば尚更、このままにはしておけないな！
「デュエルだグレファー！　ネイキッドの友を、終焉の手先になんてしていられるか！」
「剣士……」
それまで嗤っていた『ダーク・グレファー』が漸くこちらを振り向き、その紅く血走った目をオレに向ける。
「クックククク……いいだろう。デュエル！」
「デュエル！」
「私の先攻、ドロー！　私は手札から『終末の騎士』を攻撃表示で召喚！　効果によりデッキから『ネクロ・ガードナー』を墓地に送る！」
『終末の騎士』ＡＴＫ１４００
「ダーク系のデッキか……？」
タイプとしては、セツの妹のデッキに近い。『ダーク・グレファー』自身もダークモンスターであることを考えても、その可能性は

高いな。
「私はカードを一枚セット。ターンエンドだ」
「オレのターン、ドロー！」
オレは手札と相手フィールドを確認する。
「オレは『切り込み隊長』を攻撃表示で召喚！　その効果により、手札から『コマンド・ナイト』を攻撃表示で特殊召喚だ！」
『切り込み隊長』ＡＴＫ１２００→１６００
『コマンド・ナイト』ＡＴＫ１２００→１６００
「バトル！『切り込み隊長』で『終末の騎士』を攻撃！『切り込み十字斬』！」
『コマンド・ナイト』の効果によって攻撃力が１６００に上昇した『切り込み隊長』が『終末の騎士』を十字に切り裂く。
「ぐぅ……」
グレファーＬＰ３８００
「更に、『コマンド・ナイト』でプレイヤーにダイレクトアタック！」
「トラップカード発動！『ディメンション・ウォール』！　ククク、自らの剣を受けるがいい！」
「なにっ！？」
グレファーの前方の空間が歪み、歪みに吸い込まれた『コマンド・ナイト』の剣はオレを背後から襲った。
「ぐおおっ！？」
剣士ＬＰ２４００
『ネクロ・ガードナー』の効果で防ぐ選択肢もあったから確かめてみたんだが、裏目に出たか。
「オレはカードを一枚セット。ターンエンドだ」
「私のターン、ドロー！　私自身を攻撃表示で通常召喚する！」
『ダーク・グレファー』ＡＴＫ１７００
グレファーのフィールドに、姿形が全く同じのモンスターが召喚される。

「更に、私は手札から『ダーク・クルセイダー』を墓地に送ることで、デッキから『暗黒魔族ギルファー・デーモン』を墓地に送る」
「ギルファー・デーモンだと！？」
「そうだ！『暗黒魔族ギルファー・デーモン』の効果を発動！　このカードが墓地に送られた時、フィールド上に存在するモンスター一体に装備し、攻撃力を５００ポイントダウンさせる！『切り込み隊長』に装備！」
『切り込み隊長』ＡＴＫ１６００→１１００
まさかギルファー・デーモンまで使うとは……。
「バトル！　私自身で『切り込み隊長』を攻撃！『ダーク・グラップ・ソード』！」
「ぐおっ……！」
剣士ＬＰ１８００
「破壊された『暗黒魔族ギルファー・デーモン』を、効果で『コマンド・ナイト』に装備する！」
『コマンド・ナイト』ＡＴＫ１６００→１１００
『コマンド・ナイト』は、周囲に影が纏わりつき、膝をつく。
「カードを二枚セット。ターンエンドだ」
「オレのターン、ドロー！」
ギルファー・デーモンは予想外だったが……逆に利用させて貰うぜ！
「オレは手札から『拘束解放波』を発動！　『コマンド・ナイト』に装備された『暗黒魔族ギルファー・デーモン』と共に、お前のセットされた魔法・罠を全て吹き飛ばす！」
『おおお……はぁっ！』
「なにっ！？」
『コマンド・ナイト』が、自らに纏わりつく影を伏せカードごと吹き飛ばす。伏せカードは『炸裂装甲』と『我が身を盾に』。防御陣を敷いていたらしいが、残念だったな。
「更にオレは『鉄の騎士ギア・フリード』を攻撃表示で召喚！　魔

法カード『拘束解除』！　デッキから『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』を攻撃表示で特殊召喚だ！」

『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』ＡＴＫ２６００→３０００

『グレファー……』

「オレは更に魔法カード『強欲な壺』を発動！　デッキからカードを二枚ドローする！」

ドローしたカードを確認する。よし。これで決める！

「ネイキッド。行けるな？」

『……ああ！　やれ！』

静かに目を閉じていたネイキッドが、オレの声に反応して目を開く。

「手札から装備魔法『神剣―フェニックスブレード』をネイキッドに装備！　ネイキッドの効果により、『ダーク・グレファー』を破壊する！『ウェポン・バッシュ』！」

『眠れ。我が友』

ネイキッドの剣から放たれた衝撃波が、『ダーク・グレファー』を破壊する。

「バトル！『コマンド・ナイト』でダイレクトアタック！『エンチャント・フレイム』！」

「ぐおっ……！？」

グレファーＬＰ２２００

「ラストだ！　ネイキッドでダイレクトアタック！」

「まだだ！　墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果発動！　このカードを墓地から除外することによりモンスター一体の攻撃を無効にする！」

「読めてるんだよそんなもんは！　リバースカードオープン！『天罰』！」

カウンターはセツの専売特許ってわけじゃねえ！

「手札を一枚捨てることで『ネクロ・ガードナー』の効果を無効にし、破壊する！」

グレファーを守ろうと立ちはだかった『ネクロ・ガードナー』が、天からの裁きによって消滅する。
『我が剣にて眠れ……グレファー！』
「ぐ、ぐおおおおおおっ！？」
グレファーＬＰ０

「ふぅ。案外大したことは……」
「っ！？　離れろ剣士！　奴はまだ生きている！」
「なにっ！？」
ネイキッドに制止され、慌てて飛び退く。
「お、おおおおお……盟主、殿……この、不甲斐なき私を……今一度拾ってくださるのですか……おお……！」
「な、なんだってんだ？」
オレとグレファーの見ている前で、グレファーは何事か呟くと、天に向かってその両手を掲げた。
「！　終焉の精霊たちが……」
集まっていく。グレファーの掲げた両手に。一匹、二匹と終焉の精霊が吸い込まれて行く。
「グレファー！　一体何を……」
「お、おおお……力が、力が漲る……！　盟主殿、この力、必ずや……！」
「コイツの言っている盟主殿って、やっぱり加藤のことなのか……？」
グレファーの背後に居る筈の加藤の姿を幻視する。やがてグレファーはその姿を変質させてオレを見下ろす。
「サァ、本当ノ戦イヲ始メヨウカ……」
漆黒の瘴気を纏い、此方を睥睨するその姿はまるで……。
「魔王……！」

「そこまで堕ちたか！　グレファー！」
ネイキッドが吠える。だが、目の前の魔王はそんなネイキッドには目もくれずにオレを睨み続ける。
「……何だよ。男に見つめられて喜ぶ趣味はねえぞ」
「りたーんまっちダ……デュエルディスクヲ構エロ」
オレは無言でディスクを構える。どっちにしろ、コイツをこのままにはしておけねえ。
「「デュエル！！」」
「今度はオレの先攻だ！　ドロー！」
速攻で決める！
「オレは手札から魔法カード『増援』を発動！　デッキから『切り込み隊長』を手札に加え、攻撃表示で召喚！　効果発動！　手札の『エヴォルテクターシュバリエ』を攻撃表示で特殊召喚する！」
『切り込み隊長』ＡＴＫ１２００
『エヴォルテクターシュバリエ』ＡＴＫ１９００
オレのフィールド上に、二体の戦士が現れる。
「更にフィールド魔法『侍の戦場』を発動！『侍の戦場』が存在している限り、戦士族モンスターは攻撃力を５００ポイントアップさせ、効果によっては破壊されない！　ターンエンドだ！」
『切り込み隊長』ＡＴＫ１２００→１７００
『エヴォルテクターシュバリエ』ＡＴＫ１９００→２４００
「私ノたーん、どろー！　私は『漆黒の魔王ＬＶ４』を攻撃表示で召喚」
『漆黒の魔王ＬＶ４』ＡＴＫ１０００
「漆黒の……魔王？」
さっきオレが、アイツに抱いた感想と同じだ。その攻撃力はたったの１０００。悪魔族のアイツには、『侍の戦場』の効果も及ばない。どうするつもりだ？
「私ハ手札カラ装備魔法『デーモンの斧』ヲ発動！　『漆黒の魔王ＬＶ４』の攻撃力を１０００ポイントアップ！　更ニ速攻魔法『サ

イクロン』ヲ使用シ、『侍の戦場』ヲ壊スル！」
　『漆黒の魔王ＬＶ４』ＡＴＫ１０００→２０００
「ちっ！」
「ばとる！『漆黒の魔王ＬＶ４』デ『切り込み隊長』ヲ攻撃！『瘴気の剣ＬＶ４』！」
「ぐぅっ……！」
　剣士ＬＰ３７００
「かーどヲ二枚せっと。たーんえんど」
「オレのターン、ドロー！　オレは『エヴォルテクターシュバリエ』を再召喚する！」
　『エヴォルテクターシュバリエ』はデュアルモンスター。再度召喚することによって効果を得る。
「更に、手札から装備魔法『神剣―フェニックスブレード』をシュバリエに装備する！」
「サセナイ！　かうんたー罠『八式対魔法多重結界』！　もんすたー一体ヲ対象トスル魔法ノ発動ト効果ヲ無効ニシ、破壊スル！」
「なに！？」
　しまった……シュバリエの効果は装備魔法を墓地に送ってカードを一枚破壊する効果……その装備魔法が破壊されては効果を発動できない。
「更ニ、とらっぷ発動『闇の呪縛』！『エヴォルテクターシュバリエ』ノ攻撃力ヲ７００ぽいんとだうんサセ、攻撃ト表示形式ノ変更ヲ禁ズル！」
　『エヴォルテクターシュバリエ』ＡＴＫ１９００→１２００
「なに？　どういうことだ……？」
　そのカードならば、オレが攻撃宣言した時に発動すれば、シュバリエを迎撃で破壊することも出来た筈……それをしない？
「……オレはカードを一枚セット。ターンエンドだ」
「私ノたーん、どろー！　私ハすたんばいふぇいずニ『漆黒の魔王ＬＶ４』ヲ墓地ニ送ッテ、でっきカラ『漆黒の魔王ＬＶ６』ヲ攻撃

表示デ特殊召喚！」

『漆黒の魔王ＬＶ６』ＡＴＫ１７００

「っ！　なるほど……そういうことか」

恐らく、『漆黒の魔王』のレベルアップ条件がモンスターの戦闘破壊かなにかなんだろう。だから敢えてシュバリエを倒さず、レベルアップへの布石とした。

「私ハめいんふぇいずニ手札カラ魔法かーど『大寒波』ヲ発動！　次ノ私ノたーんマデ、魔法・罠ノ発動トせっとヲ封ジル！」

「ちっ……厄介な魔法を」

オレの伏せカードは『鎖付き爆弾（ダイナマイト）』。発動出来ていれば少なくとも相討ちに持ちこむことが出来たんだが……どうやら次のターン、最上級のレベルを呼ばれることは覚悟しなければならないらしいな。

「ばとる！『漆黒の魔王ＬＶ６』デ、『エヴォルテクターシュバリエ』ヲ攻撃！『瘴気の剣ＬＶ６』！」

「ぐぁっ！？」

剣士ＬＰ３２００

シュバリエを切り裂いた剣の瘴気が、オレをも蝕む。

「『漆黒の魔王ＬＶ６』ハ、破壊シタもんすたーノ効果ヲ無効ニスル。『エヴォルテクターシュバリエ』ノ効果ヲ無効ニスル！　私ハコレデたーんえんどダ」

シュバリエは墓地で通常モンスターとして扱う効果を持っているが……無効にされてもそこまで痛くはないな。

「オレのターン、ドロー！」

しかし……マジで『大寒波』は痛ぇな……装備魔法も強化魔法も、ネイキッドを呼ぶことすらできやしねえ。

「……オレはモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンドだ」

カードを伏せることも出来ないから、こうするしかない。

「私ノたーん、どろー！　くくく、遂ニ我ガ新タナ力ガ呼ビ起コサレル……私ハ『漆黒の魔王ＬＶ６』ヲ墓地ニ送リ、でっきカラ『漆黒の魔王ＬＶ８』ヲ攻撃表示デ特殊召喚スル！　出デヨ！　我ガ写

シ身！」

『漆黒の魔王ＬＶ８』ＡＴＫ２８００

それまで『漆黒の魔王ＬＶ６』がいたところから、ＬＶ６とは比べ物にならない程の瘴気が湧き出し、フィールドを覆う。

「うっ……」

あれは……良くない。直感的にそう感じたオレは、少しだけ後退する。

「更に手札から魔法カード『強欲な壺』！　カードを二枚ドロー！　そして『ダーク・クルセイダー』を攻撃表示で召喚！　効果により、手札の『ダークジェロイド』と『ネクロ・ガードナー』を墓地に捨て、一枚につき攻撃力を４００ポイントアップさせる！」

『ダーク・クルセイダー』ＡＴＫ１６００→２０００→２４００

奴のフィールドに、漆黒の騎士が現れ、その力を増幅させる。

「ククク、さあ行け！　我が写し身よ！　バトル！『漆黒の魔王ＬＶ８』で、貴様の守備モンスターを攻撃！『漆黒の瘴気』！」

「うおっ！？」

オレのセットしていた『コマンド・ナイト』がドロドロに溶けて行く。

「我がモンスター効果！　戦闘によって破壊したモンスターの効果を無効にし、ゲームから除外する！」

「くそ……！」

「まだだ！『ダーク・クルセイダー』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

「ぐおおあっ！？」

剣士ＬＰ８００

「ターンエンドだ」

「ぐ……！」

瘴気と闇のデュエルの衝撃に、思わず膝をつく。こいつは……シャレになってねえぞ。セツの奴、こんなデュエルしてやがったのか……！

「っ……オレのターン、ドロー！」
それでも、何とか持ち直し、デッキからカードを引く。
「……オレはモンスターを一枚セット。ターンエンドだ……！」
「愚かな。守りを固めるか！　私のターン、ドロー！　私は『漆黒の魔王ＬＶ８』で、守備モンスターを攻撃！『漆黒の瘴気』！」
奴の瘴気が、オレのフィールドを浸食する。だが！
「オレの守備モンスターは『翻弄するエルフの剣士』！　エルは、攻撃力１９００以上のモンスターとの戦闘では破壊されない！」
「なに！？」
「どうやら、お前は戦闘での破壊をトリガーとする効果持ちみたいだな……なら、戦闘で破壊できないコイツはお前の効果の対象外だ！」
「ちぃ……！」
「おまけに、『ダーク・クルセイダー』の攻撃力を上げてくれたからな……上げなければそのまま倒せたのによ」
「……私はこれでターンエンドだ」
「オレのターン、ドロー！」
っ来たか！
「オレはたった今引いた魔法カード、『融合』を発動する！　手札の『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』と『オネスト』を手札融合！　来い！『天剣―ネイキッド・ギア・フリード』！」
『天剣―ネイキッド・ギア・フリード』ＡＴＫ２８００
『うおおおおおっ！！』
「ネイキッドと『オネスト』だと！？」
「コイツは、ネイキッドと天使族モンスターの融合でのみ特殊召喚することができる！　更に、コイツは装備カードを装備することで、オレの除外されている戦士族を呼び戻すことができる！」
「なんだと！？　いやだが、貴様の手札はゼロ！　装備魔法など……ハッ！？」
気付いたらしいな……。

「装備カードなら……在る！　オレは墓地の『神剣―フェニックスブレード』の効果発動！　墓地の戦士族モンスター二体をゲームから除外し、このカードを手札に戻す！」
「しまった……！」
「『神剣―フェニックスブレード』を『天剣―ネイキッド・ギア・フリード』に装備！　効果により、除外されている『コマンド・ナイト』を特殊召喚する！」
『コマンド・ナイト』ＡＴＫ１２００→１６００
『天剣―ネイキッド・ギア・フリード』ＡＴＫ２８００→３１００→３５００
「まだだ！　リバースカードオープン！『鎖付き爆弾（ダイナマイト）』！　このカードは発動後、攻撃力５００ポイントアップの装備カードとなり、フィールド上に存在するモンスター一体に装備する！　オレはネイキッドに装備する！」
『天剣―ネイキッド・ギア・フリード』ＡＴＫ３５００→４０００
ネイキッドの効果は一ターンに一度しか発動できないから、この効果ではモンスターを呼び出せない。だが！
「攻撃力は十分……！　『翻弄するエルフの剣士』を攻撃表示に変更して、バトルだ！『天剣―ネイキッド・ギア・フリード』で『漆黒の魔王ＬＶ８』を攻撃！『ヘヴンズ・ウェポン』！」
「ええい！　墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果を発動！　相手モンスターの攻撃を無効にする！」
「ならば、ネイキッドのもう一つの効果を発動する！　ネイキッドに装備された装備カード一枚を破壊し、墓地に送ることで、もう一度だけ続けて攻撃することができる！」
「バカな……！？」
「更に、破壊された『鎖付き爆弾』の効果発動！『ダーク・クルセイダー』を破壊する！」
『天剣―ネイキッド・ギア・フリード』ＡＴＫ４０００→３５００
『ぬんっ！』

ネイキッドが投げた爆弾が、漆黒の騎士を吹き飛ばす。
「もう一度だ！『天剣―ネイキッド・ギア・フリード』で『漆黒の魔王ＬＶ８』を攻撃！『ヘヴンズ・ウェポン』！」
「ぐおおおっ！？」
グレファーＬＰ３３００
「トドメだ！『翻弄するエルフの剣士』と『コマンド・ナイト』で、プレイヤーにダイレクトアタック！」
「ぐあああああああああっ！？」
グレファーＬＰ０

「グレファー！」
今度こそ、力尽きて倒れるグレファーに、ネイキッドが駆け寄る。
「ぐふっ……ネイキッド」
「グレファー！　貴様……やはり途中から！」
「ああ……ある程度の、意識は……な」
グレファーは、漆黒の魔王としての力が高まった結果、逆に自我を取り戻したらしい。
「だが、力を制御することもできず……このザマだ」
「グレファー……」
「おいしっかりしろ！　すぐにアテナたちも来るから、そしたら……！」
治療できる。そう思ったのだが、ネイキッドもグレファーも静かに首を振る。
「無駄だ……その、お嬢さんがどれほどの使い手であろうと……私の身体も魂も、闇に侵され過ぎている……最早、どうにもなるまい」
「マジかよ……！」
死ぬ……ってのか？
「何故、お前ほどの男が終焉に！？」

ネイキッドの問いかけに、グレファーは途切れ途切れの言葉で答えた。悪魔の剣を奪い、しかしその悪魔により弱っていたところで、取り込まれたことを。

「情けない……ネイキッド、お前の盟友ともあろうものが、な……」

「グレファー……」

その言葉を最後に、ネイキッドは黙り込む。代わりにグレファーは、オレの方を向いた。

「……ネイキッドの、マスターの少年よ」

「……なんだ？」

「ネイキッドを……そして世界を、頼む。あの闇は強大だ……放っておけば、世界すら飲み干そう……そうさせてはならぬ。だから……！」

「ああ、任せろ。アンタの遺志、確かに受け取った」

今にも消え逝こうとしている命に対し、オレが出来るのは少しでも心安らかに逝かせてやることだけだった。

「そうか……死ぬな、少年……若き命、よ……」

最期にフッ、と深く微笑みを残して、グレファーの身体は闇に溶けて行くのだった。

第四期第八話「漆黒の魔王」（後書き）

一応注釈を入れておくと、剣士には漆黒の魔王の知識がありません。彼にとっては初めて聞くカード。ということで。

それでは、悠でした！

第四期第九話「精霊の力」（前書き）

九話目～。遂にここに書くことがなくなりました。どうしよ。ちなみに丁度百話目がこの話になります。

第四期第九話「精霊の力」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第九話「精霊の力」

剣士がバイクロイドに乗って先行してから約半刻。やっとのことで俺たちは戦場へと辿りついた。

「酷い……」

戦場は正に死屍累々という言葉が相応しい有様で、さだめやアテナはともかく、凛やエリアルたちは息を呑んでその光景を見つめていた。

「とにかく、戦いを終わらせないと……」

「剣士先輩、大丈夫かな……」

不安そうに呟く凛のためにも、早く戦いを終わらせるか剣士と合流しなくちゃな。

「敵は全部『終焉の精霊』……それなら！　セツ、ここは任せてください！」

途中から翼を使って飛んでいたアテナが、腕を構えてそう宣言する。

「本当はこの術、禁呪指定されているんですけど……」

アテナはちらりとさだめを見やる。

「世界の命運、命を懸けた戦いで、下手なルールなんて……！」

アテナの周囲に珠が浮かぶ。

「守っていられませんよね。Ｒｅｎ、Ｂａ、Ｋａ、Ｓｈｅｕｔ、Ｉ

b。我、反魂のスピリチュアの魂名に於いて命ず。黄昏の闇に沈みし者よ、転じて暁よりの輝きとなせ。闇は光に、冥は天に、死は生に、狭間にてたゆたう魂魄よ、我が導きに従い希望を宿せ！　力の在り処は、生と死を司る、天空竜の名の下に！　反転呪魂の法、Ｏ・ＳＩ・ＲＩ・Ｓ！！」

瞬間、アテナの周囲に漂う珠から強烈な閃光と共に天から極光が降り注いだ。

「えぇぇぃ！！」

極光は、アテナの手に従って戦場を蹂躙し、触れた端から『終焉の精霊』を消滅させていく。その上、その輝きは戦場で斃れた戦士たちの何割かにも立て続けに降り注ぎ、蘇らせていく。

「すっご……」

あのさだめが呆然としている。物凄くレアな表情だ。が、気持ちはわかる。

「はぁ、はぁ……これで、どうです！？」

極光が全て消えた後には、ほぼ壊滅状態となった『終焉の精霊』と、いきなりの事態にまだ理解が及んでいないらしく、ポカンとしている戦士族たち。

「っ何をしている！　チャンスだ、一気に殲滅しろ！！」

最も早く我に帰ったエースが声を張り上げる。その声に反応し、戦士族たちが雄叫びと共に攻め込んで行く。既に大勢は決したと言ってもいいだろう。

「……よし。アテナには『殲滅天使』の二つ名をあげよう」

「その二つ名は駄目だと思います。なんとなく」

素気無く却下されてしまったが、正しくその表現が相応しいと思う。一撃かよ……。

「こりゃ、剣士を向かわせるよりアテナを先行させた方が早かったか……」

「そう単純にはいきませんよ。そんなホイホイ使える術でもありませんし」

視界には、壊滅状態に陥り撤退していく『終焉の精霊』の一軍と、勝鬨をあげる戦士族たち。その中に、此方へと向かってくる剣士とネイキッドたちが見えた。
「おお！　ルイン殿！　ご無事でしたか！」
「お前ら、今の光はなんだ!?　敵が根こそぎ吹っ飛んで行きやがったぞ!?」
「剣士先輩！」
無事な剣士の姿を見て、安心したのか飛び付く凛。
「お、おい凛……!?」
「良かったぁ……無事で」
「ちっ……」
舌打ちしつつ、満更でもなさそうな剣士。そして……。
「ルイン殿～!!」
「……（ひょいっ）」
感極まったのかなんなのか、ルインに抱きつこうとして無言でかわされるネイキッド。杖で追撃まで喰らっている。
「……私に抱きついていいのは彼だけ」
いやまあ。
「ゴホン……それで、セツ。先ほどの光は一体……？」
「あ、すみません。あれをやったのは私です」
「貴公が？」
名乗り出たアテナを見て、驚愕を隠せないネイキッド。
「貴女は、精霊？　いやしかし、人間のようにも……」
「えと、先祖返りみたいなものです。元々は、反魂のスピリチュアと呼ばれていました」
「なんと!?　スピリチュア殿が……生きておられたのか」
「正確には、一度死んで転生したんですけど」
「そうでしたか……いや、どちらにせよお元気そうでなにより。我はかつて遠目から見ただけでしたが、実にお美しい姿であったことは記憶しております」

「あ、ありがとうございます」
あーそっか。アテナのことも知っている精霊はいるんだな。
「というかネイキッド。節操無いぞ。ルインだけじゃなく、アテナにまで色眼使うな」
「お前にだけは言われたかないだろうよ……」
……まったくだな。
剣士のツッコミに、自分の現状を思い返して少し落ち込む。そんな俺に、横合いから聞き慣れた声が聞こえた。
「主様、エース」
「ジャック！　無事だったのか」
「む、ジャックか」
「ええ、私たちは後方待機組でしたし……なにより、最後の一撃でほぼ殲滅されてしまいましたから。私たちの出る幕はありませんでしたよ」
話しかけてきたのはジャックだった。ところどころ鎧が汚れているが、それほど大きな怪我はないようだ。
「キングは？」
「キング殿も、変わらず壮健ですよ。恐らくすぐに……ああ、来たようです」
ジャックが顔を向けた先、確かにキングがこちらに向かって来ていた。
「おお主、久しいの」
片手を挙げて朗らかに挨拶してくるキングに苦笑を返す。
「言うほど久しぶりじゃないだろ」
何せ、デュエルでもこちらに来る前にも会っているのだ。最後に会ってから二日と経っちゃいない。
「儂の感覚では、ものすご～く久しぶりなんじゃよ！　ジジイにも光を！」
「いきなり何叫び出してるんだコイツは……」
「ボケたか？　キング殿」

「わしゃボケとらんわい！　まだまだ現役じゃあああああああ！！」

凄まじい剣幕で突っ込まれる。

「わかったわかった……キングが歳に似合わず肺活量豊富なのはよーくわかったっての」

「歳ぢゃないわい！　言っておくがのぅ、精霊は見た目と歳が比例すると思ったら大間違いじゃぞ！　具体的に言えば、儂と希冴姫は同い年じゃ！」

「え……」

キングの衝撃発言に、その場に居た全員が固まる。同い……歳？

キングと、希冴姫が？

「……ジャック」

「ええ、まあ……私も同じく」

言い辛そうにジャックが肯定する。

「不合理だ……」

「……私は彼らより１０００歳以上年上。今更」

そう言えばそうか。ルインはそうだったな……。

「いや、それにしたって不合理だ」

「何と言う老け顔……」

「くぉら！　誰が老け顔じゃあああああああああああああああああ！？」

ボソリと呟いたさだめの言葉に激昂してキング。いやまあ、さだめの気持ちもわかるが。

「……お前たち。いつまで戦場で駄弁っているつもりだ」

「テンスか？　ああ、すまん。つい」

「キングさんの出番を少しでも増やしてあげようっていうさだめたちの配慮だよ」

「余計な御世話じゃあああああああああああ有難う！」

「感謝してるし」

まあ、すっかり存在を忘れ去られる前に出てこれて良かったな、

と……。
「兎に角、城に向かいましょう。お話はそちらで」
「ああ。頼む。結構走ったから、皆くたびれてるしな」
ジャックの言葉に頷き、全員を見やる。皆、やはり顔に疲れが見える。流石にルインとかは大丈夫そうだが……。
「わかりました。それでは、精一杯御持て成しさせていただきましょう」
「ジャックの持て成しなら、安心だな」
「……主様？　私は騎士なので、そちら方面で安心されるのも複雑なのですが……」
「今更今更」
ジャックの執事素養はこの場にいる誰しもが認めている。
「俺にも手伝わせてくれ。とびっきりのを作らせてもらうから」
「ええ。お願いします。主様」
そんな会話をしつつ、俺たちは王城へと入城していった。

「……ふぅ。こんなもんか」
久方ぶりの立派な厨房に感激し、思わず張り切り過ぎてしまった夕食からしばらく。俺は用意された客間でちょっとした研究をしていた。
「ん～やっぱり、デュエルエナジーだな……」
コンコン。
「ん？　アテナか、入っていいぞ」
扉がノックされ、そのノック音から誰が来たのかを判断した俺は扉の向こうに声をかける。がちゃり、と扉が開いて予想通りの人物が顔を出した。
「……何でセツ、私だってわかったんですか？」
「さだめならノックはしない。ルインや騎士たちにしてはノックの

位置が低かった。他のメンバーはこの部屋に来る用事が思い付かない。こんなところか」

「……セツ、探偵さんにもなれますよ」

「こんなの、無駄スキルを使うまでもないだろ。で、どうした？」

まだ微妙に納得しきれていない、と言った表情で、アテナは口を開いた。

「えっと、特に何か大切な用事ってわけじゃなかったんですけど……駄目、ですか？」

「駄目じゃないな。それどころか、渡りに船だ」

「えっ？」

驚いたような顔をするアテナに、ちょいちょいと手招きをする。

「ホントは、後でルインが来る筈だったからその時に頼もうかと思ってたんだが……アテナが来たなら、アテナに聞こう」

「ルインさんが？　どうして……」

「さあ？　話があるらしいが……結構、深刻そうだったからな」

ルインの話については、まだ本人から何も聞いていないので何とも言えない。

「そうですか……えっと、それで頼み事ってなんですか？」

「ああ、それなんだが……」

俺はさっきまでの研究内容をアテナに話す。

「要は、お前たち精霊の力と俺の、精霊界に扉を開く力。それと、デュエルエナジーの関係について、だな」

「そういえば……セツの力については詳しいことを聞いていませんでしたね」

希望に聞けば一発でわかるんだろうが……まあそれはいい。

「俺は、さっき言った三つの力、全て根源は同一なんじゃないかと思っているんだ」

そうでなければ、三幻魔の事件の際、封印を解くのにデュエルエナジーを集めたりはしないだろうし、ルインたちが人間界と精霊界を行き来することにも説明がつかない。

「……もしかして」
「ああ。デュエルエナジーって奴を自分で引き出すことができるなら、アテナたちのように魔法染みたことができるかも……てな」
もちろん、それで戦おうとは思っちゃいない。そんな付け焼刃の術で対抗できるほど、終焉の力は甘くない。
「それでも、もし何かあった時に護身程度にでも術を使えるのと、使えないのとでは、天と地ほどにも差があるだろう。一と零なら、一の方が偉い」
「そうですね……」
俺の言葉を聞いて、アテナも何事か悩んでいるようだった。
「恐らく、デュエルエナジーってのが、ファンタジー用語で言う魔力……特には、魂の力のようなものなんだろう」
思い出すのはやはり三幻魔の事件。デュエルエナジーによって封印を解かれ、呼び出された三幻魔は、精霊たちから力を吸い取り、その力を増していた。そのことから考えても、デュエルエナジーは精霊の力と非常に近い性質を持つことが窺える。
後は、サイコショッカーか。人間とのデュエルで復活の力を溜めていた、ということはやはり、精霊にとってデュエルエナジーは力の源に値する力なのだろう。
「俺たちはデュエルの時、そのデュエルエナジーを常に少量ながら放出している。それを平素から、自分の意志で取り出せるようになれば……」
「術が、使える……」
「そういうことだ」
考え込むアテナの表情が、蒼くなったり紅くなったりと忙しい。
「……セツ」
「ん？」
「もしかしたらセツは、私たち精霊すら解明できていなかったこの力の謎を、僅かばかりでも紐解いてしまったかもしれません。ですが……」

言い淀んでしまったアテナに、俺は続きを促す。
「……続けて」
「ですが、もしセツの推論が的を射ているのであれば、人間がそれを多用するのは危険です。精霊は、生まれながらにしてある程度の力を持っています。だからこそ、息をするように術が行使できるんです。でも人間は……」
その力を持っていない。或いは、少ない。
「アテナ。俺の推論はまだ途中なんだ」
「え？」
「……俺はな、このデュエルエナジー量こそが、精霊を見ることの出来る、ある程度の基準なんじゃないかとも思っているんだ」
「精霊を……？」
「そうだ。デュエルエナジーがある程度の基準値に達しているかいないか。それで、精霊を見える奴と見えない奴がいる。そして、デュエルエナジーの量は変わり得る。だからこそ、それまで精霊を見ることができなかったデュエリストが、デュエルの力を磨くことで精霊を認識出来るようになるんじゃないか、とな」
俺はこの推論、間違っているとは思えない。恐らく、ある程度正しい認識の筈だ。
「そして恐らく、俺のエナジー総量は相当に多い。だからこそ、漏れ出したエナジーが精霊を引きつけ、呼び起こし、精霊界への扉も開くことができる」
俺の推論を聞いていたアテナは、すっかり放心してポカンと口を開いている。少し可愛らしいが、これじゃ話が進まないのでアテナの前で手を振ってみる。
「アテナ～？」
「……ハッ！？」
漸く気付いたらしいアテナが、今度は頬を紅潮させ、興奮したように俺に詰め寄ってくる。
「す、すごいです！　セツ、研究者さんです！」

「お、おいおい……探偵の次は研究者か？　買い被り過ぎだって」
「そんなことありません！　そっか……そう考えると全て辻褄が……何で人間の私が力を使えるのかとか、さだめさんが力を使えるのかとかも、これで説明が……」
　そう、それだ。アテナとさだめの存在が、俺たちと精霊にそれほどの差はないことを明確に示している。
「だから、渡りに船なんだ。アテナなら、精霊の時と人間の時、両方で術を行使した経験がある。さだめの事を考えても、終焉の花婿のことを見ても、どうやら俺は精霊に比較的近いらしいからな。上手く行けば、護身程度の術なら使えるだろう」
「わかりました！　そういうことなら、お手伝いします！」
「ああ、頼む。だけど、今日はもう遅いし……そろそろルインが来るころだ。アテナ。今日のところはここまでにして、また手伝ってくれ」
「はい、もちろんです！」
　すっかり興奮してしまったらしいアテナは、何やら上機嫌で部屋を出て行ってしまった。というか、俺がルインと話すると言ったことも忘れているっぽい。普段ならまず引っかかるところだったろうに。
「それにしても……俺の力、か」
　人間界と精霊界を繋ぐ力。重宝してはいるのに、今まで気にならなかったのも不思議な話だ。最初はトリッパーにお約束の力だ、とか考えていたんだったか。
「……今となっちゃ、全ての事に意味があるとしか思えなくなってきているな」
　いや、恐らくそうなんだろう。少なくともこの力とかに関しては、希望の奴の計画の一端だ。あいつが無駄なことをするとは到底思えない。
「……いや、むしろ最初に俺が終焉の花婿になったのも、元々このエナジーに理由があるのか？」

こちらに来る時にエナジーが増えた、と見るよりも、その方が筋は通っている気もする。
「何にせよ、ルインと話してみないことにはわからないな」
ルインなら、多分俺よりそう言うことに詳しいだろう。終焉の花嫁であった経験もあるし、なにより俺より精霊に関しては博識だ。
「にしてもルイン遅いな……」
コンコン。
「噂をすれば、って奴か。入っていいぞ」
「失礼する」
静かに扉が開き、平素と変わらぬ様子のルインが入室してくる。しかし、やはりどこかその表情は硬い。
「話があるって言ってたよな？　どうする、ここで話すか？」
「……中庭へ。ここだと、他の人が来るかもしれない」
「聞かれたくない話、か？」
「二人きりが望ましい」
「わかった。行こう。中庭だな？」
「……ありがとう」
ルインは薄く微笑んで軽く頭を下げた。
「ルインも、大分表情豊かになってきたな。いいことだ」
「貴方のお陰。……行こう」
「ああ」
そして俺は、ルインに導かれて、城の中庭へと降りるのだった。

第四期第九話「精霊の力」（後書き）

こんな話を書くと、これからアルカナは能力者バトルものになるのか！？　と思われそうですが、そんなことはありません。別にガチバトルはしませんよ。能力っぽいのは出てきますが。

それでは、悠でした！

第四期第十話「理解者と宿敵」（前書き）

十話目です。ルイン様回。かなりラブ度とシリアス度高し。この回は力入れて書きましたね。結構頑張りました。

第四期第十話「理解者と宿敵」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第十話「理解者と宿敵」

アテナとの話を終え、部屋にやってきたルインに連れられて、俺は城の中庭に。そういえば、ここにはまだ来たことがなかったな。
「へぇ、綺麗なもんだな。月明かりだけで、こんなに明るいとは思わなかった」
よく手入れされた庭草や庭木には、小さなホタルのような虫が躍っている。蒼銀の月明かりとのコントラストがとても綺麗だ。
「……」
ルインは、しばらく無言で庭の草花を愛でていた。
「それで、話って？」
「……さっきは、彼女と何を話していたの？」
「さっき？　アテナか。ああそれは……って、お前の話はいいのか？」
「……後回し。多分、長くなる」
「わかった。丁度、お前にも意見を聞きたいと思っていたところだからな」
ルインの話は気になるが、急かしてもきっと話してはくれないだろう。なら、先に俺の話をするのもいいか。
「ああ、俺の力とデュエルエナジーに関する話だったんだが……」
俺は、さっきアテナと話あったことを全てルインに伝えた。

ルインは、やはりしばらく考え込むと、静かに俺の考えを肯定した。
「多分、貴方の考えている通り」
「やっぱりか……」
俺の中にある、巨大なデュエルエナジー。そしてその性質、さだめという相性のいい器の存在。全てが性質の悪い偶然という名の鎖によって繋がれた運命。
「ってことは、曲がりなりにも既にゲートという形で術を行使している俺には、術が使えるのか？」
「それはわからない。使える術には適性がある。私は力の総量が多くて、精霊としての位も高いから、ある程度応用は利く。でも例えば、天使の子の場合、反魂……即ち蘇生術系統に関しての適性に偏っていて、それ以外は殆ど使えない筈」
「なるほどな……」
ＲＰＧで言う、個人個人の属性見たいなもんだな。
「……けど、もし貴方の推測が正しければ、貴方は私と同程度には万能に力を使えるかもしれない」
「そうだな。そうなるだろう」
人間である以上、どうしても限界はあるだろうが……。
「後は……貴方は既に、世界を繋ぐ力に目覚めている。恐らく、一番適性があるのはそれ」
「転移や移動、繋ぐ力か」
危なくなったら人間界へ離脱……。
「……ま、今更だけど、つくづく俺は主人公っぽくないよな。いざとなったら逃げるしか脳のない主人公様ですか」
「貴方らしい」
「そりゃどうも」
普通に考えたら褒め言葉とは思えないルインの反応だが、なんとなくその響きに優しげな物を感じた俺は苦笑と共にそう返す。
「……ま、下手に抗う術を持って殺されるより、逃げることで助け

られるならそっちのがいいか」
「……やっぱり、貴方らしい」
「そっか」
しばらく、無言の時間が流れる。静かな闇夜に、風と虫の声だけが響いている。
――心地良い、な。
ルインとのこういう時間は、とても気持ちが良い。ある種、ユーキちゃんと同じような安らぎも感じる。
「……いつかもあったな。こうやって、ルインと二人きりになったときが」
俺は思い出していた。初めてルインに……他人に自分の心を打ち明けたあの時のことを。
ルインの世界を思い出す。ボロボロに崩れた家屋。陽の差さない空。息吹を感じぬその世界で、俺はルインに心中を語った。
「あの時から、まだ一年くらいか。濃い一年だ」
「本当……」
ルインは頷いて、此方に寄り添う。
「話って、なんだ？」
「……貴方のこと」
ルインは、中庭の中央まで進み出て、此方を振り返った。月光に照らされたその姿は、この白に飾られていたどの名画よりも美しく、幻想的に見える。
そして、ルインは俺を鋭い目で見つめる。その何処か剣呑な輝きに、俺は一瞬怯んだ。
「貴方は、もう限界」

ルインは、強い、咎めるような視線で俺を睨む。
「……限界、か。何を根拠に？」
普段通り、だったはずだ。今のところ、そんな雰囲気は出していない筈。
「……私には、隠せない」
「どうだかな」
俺は歩いて、ルインを通り過ぎる。何故か、今は真正面から顔を見られたくなかった。
「いつか、私の世界でも話した筈。貴方の心は、決して皆が思うようなものじゃない。既に枯れ、壊れ、死んでいる」
「心が死んでいる……か」
改めて言われると……キツイな。
「でも、俺は普段通りだぞ？　確かに、今日までの強行軍で心身共に疲れちゃいるが、限界だって言われるほど酷使はしていない」
「誤魔化さないで」
「取り着く島もなし、か」
「お互い様」
「確かにな」
やれやれ、だ。
「妹の狂気」
ルインは、肩をすくめる俺には構わず、言葉を続けてきた。
「天使の失踪」
「……」
「終焉の闇、本体の真実」
脳裏に、ユーキちゃんが消えてしまったあの日が思い起こされる。
「お姫様の消滅」
ピク。
「あれがきっかけ。あの時、貴方の被る仮面（ペルソナ）が、一瞬剥がれた。今も、完全には被れていない」

「……」
「そして、貴方は自分の父親、家族すらも切り捨てて、今ここにいる」
「……やめろ」
「一年。たったの一年で、貴方は一体どれだけ傷ついた？　もちろん、彼女たちの存在が、救いになったことは多くある。でも、それ以上に、貴方は……」
「やめろ……」
「皆、離れた。貴方のために、貴方の傍から消えて行った。理由は様々。でも……」
「やめてくれ……」
「貴方が好きだから、皆……」
「やめろって言ってるだろ！」
「貴方は……」
「うるさい！　それがどうした！？　例えそうだったとして、何の意味がある！？　お前は、お前はどうするんだ！？　お前も、ルインも消えるのか！？　俺の傍から！　俺の、ために……」
爆発し、抑えきれなくなった感情。こんなこと、言いたくもない。ルインに指摘された俺の心の闇。それを引き出された、ルインへの怒り。その全てがごちゃごちゃになって、頭の中が掻き回されそうな気分になる。
フワッ……。
「私は消えない」
そんな、俺の心を包み込むように、背後からルインに抱きしめられた。
「私だけは、絶対に、貴方から離れない。例え、そうすることで貴方がまた傷つくとしても、絶対に」
「ル、イン……」
「……改めて、言う」
ルインは、俺を抱く手を一層強めて、俺の耳元で、宣言する。

「私はルイン。女神ルイン。御堂切を愛し、守り、貴方と一緒の未来を一番に望む」
「ルイン……」
初めて。
「初めて、名前で呼んでくれたな……」
「私は、女神だから。特定の人を名前で呼ぶことはない。でも……」
――貴方だけは……。
「貴方だけは、何度だって呼んであげたい。セツ、セツ、セツ……」
想いを込めて。精一杯の愛情で。
「私は、妹のように、貴方の理由にはなれない」
さだめは、俺にとっての生きる理由。心の在り方そのもの。
「私は、天使の少女のように、貴方を支えることもできない」
アテナは、俺の心を支えてくれている。
「騎士たちのように、貴方を守ることもできない」
希冴姫やエースは、俺の心と、戦いでは体まで、守ってくれている。
「終焉の少女のように、貴方を癒せない」
ユーキちゃんは、俺の心を癒してくれた。
「だから……」
ルインは……。
「私は、いつでもセツの傍に居て、貴方の心を理解する。貴方の、心の理解者になる」
ルインは、いつでも俺のことをわかってくれていた。俺の心が崩れそうな時、必ず。
「私にしか出来ない、セツへの献身。お願い。私の心が言っているの。貴方は、もう……」
首筋に、滴が流れ落ちた。
俺は、そっと体に回されたルインの腕を掴む。
「……ありがとう。ルイン。でも……」
休めない。

「ルインは、きっと俺自身にもわからないほどの深淵まで、俺のことを理解してくれているのかもしれない。でも、まだ休めないんだ」

だって……。

「今、休んだら……倒れたら、きっともう、立ち上がれない気がするんだ」

一度崩れてしまえば、もう、戻らない。

「だから、倒れるのは、泣くのは、全てが終わってからだ。今はただ、前へ。がむしゃらにでもいいから、前へ……！」

前へ、進むしかない。

「大丈夫。心も体も、とっくの昔に沸点超えてる。今更どうにかなりゃしない」

もう、罅が入っているんだ。俺の……仮面。

「だから、また外したりしたら、今度はもう、被れない」

「それでも……！　それでも私たちは、貴方を愛する！　守る……！」

初めて聞く、ルインの涙声。俺は、苦笑して言った。

「女の子に守られるなんて、恥ずかしくって駄目だ。憤死しちまう」

ルインの腕の力が強まった。

「お、おいルイン。少し、苦しいぞ」

しかしルインは、俺の声には答えず、腕の力も弱くはならない。

「私にはわかる。精霊の力、セツは護身術がどうと言っていたけど、本当は……」

「……ああ、そうなんだろうな」

「戦うつもり。いざとなったら、私たちを力で逃がしてでも、一人で」

そう、かもな……。

「それは……私たちは望まない！　絶対誰も、望まない……！　お姫様のことでわかっている筈……自己犠牲は、ただの自己満足」

「ああ、そうだな……」

だから、俺は希冴姫に一発かましてやらなきゃ気が済まない。そ

れは、身に染みて分かっている。
でも。
「いざそういうことになった時、そうしないでいられる自信がないな」
頭で、理屈でわかっていても、どうにもならないことがある。
「希冴姫の気持ち、わかっちまうんだよなぁ……」
刺し違えても。命を賭けて。そんな陳腐で、どんな世界でも、必ず間違っているその選択を、それでも俺は選ぶだろう。
「ルイン、言ってたよな。決着をつける相手がいるはずだって」
「……」
「終焉の闇とは……ユーキちゃんとは、俺が決着をつける。なに、死んだりはしない。逃げる方法はあるんだ。そんなに心配するな」
「貴方は……セツは、私たちの全てなの」
「ルイン……」
「貴方にとって、私たちはそれぞれ、心の在り方であり支えであり守護者であり癒しであり理解者。でも、私たちにとっては貴方一人が……その全て」
「……」
「貴方は、セツはいなくなってはいけない。それは私たちにとって、全てを失うことと同義。決して許容出来ることじゃない」
「大げさ……じゃ、ないんだろうな」
アテナは、帰って来てから殆ど俺に依存している。今夜部屋に来たのだって、結局はそういうことだろう。ルインも、今の告白を考えれば相当だ。さだめに至っては言わずもがな。アイツは生まれた時から全て俺を中心に世界を回している。
けど……。
「確約は、できないな……」
「セツ……！」
「悪い。でも、わかっているんだろ？　ルイン」
「っ……」

俺の言葉に、唇を噛んで俯くルイン。そう、わかっているんだ。俺を説得することはできないって。

「さだめは……俺の心、その在り方そのものだ」

さっきルインが言った通りに。

「だから、俺はアイツを守るために、世界だろうが終焉だろうが敵に回す。例え、アイツ自身がそれで苦しんだとしても、俺の力の及ぶ限り。……その対象が、広がったんだ。さだめだけでもそうなのに、アテナや、ルイン。お前たちをも守るためなら、俺はきっと躊躇わない」

「……わかっている」

血を吐くような声音のルインの腕を解き、ルインと向き合う。

「泣くな。俺は、涙が見たくてお前に感情を取り戻させたわけじゃない」

それでも涙が止まらないルインを軽く抱きしめ、背中をポンポンと叩いてやる。

「ほら、笑え。泣き笑いでも、ただ泣くよりはずっといいぞ？」

「……そんなの、不細工だから嫌」

「ならこうしててやる。それなら見えない」

「……貴方に見せなきゃ、意味がない」

「なんだ。見せたいのか見せたくないのかどっちだよ」

「……ばか」

「うお、そういう台詞この体勢で言うなよ。破壊力でかいんだからさ」

冗談めかしてそう言うと、やっとルインは少し笑ってくれた。

「貴方程じゃない」

「なんだよそれ。人を誑しみたいに……でも、ま」

違うの？　みたいな目を向けてくるルインに苦笑しつつ、思う。

「お前たちを笑顔に出来るなら、何でもいいか」

「っ……！」

「……ルイン？」

「っ貴方は……間違いなく女誑し」
「断言かよ」
「プレイボーイ」
「意味、同じだろ」
「ジゴロ」
「だから、変わらんだろ意味」
「鬼畜変態雑食」
「おい待て今のは聞き捨てならん。特に、なんだ雑食って！」
あたりかまわず食い散らかしているようなニュアンスを感じるぞ！
少し軽くなった空気の中、ルインがまた真面目な表情をして、俺の目を見つめる。
「セツ、貴方は……」
「ん？」
「全て、終わったら……」
ルインが何か言いかけたその時、強烈な圧迫感が俺たちを襲った。
「っ！？」
「なんだ！？」
慌てて二人飛び退いて、圧迫感を感じた先を見る。てっきりさだめ辺りが嫉妬してきたのかとも思ったが……状況はそれどころではなかった。
「……いや、さだめとどっちがマシかは微妙なところだが」
「非常時。その比較は後にして」
中庭、城の渡り廊下の向こう。ゆっくりとこちらに近づいてくる何者かの気配。ガシャン、ガシャンと重厚な鎧を纏った足音と共に、“それ”は姿を現した。
「……余の居らぬ間に、何処とも知れぬ男と睦言か？　女神よ」
「……！」
ルインが目を見開き、続いて顔色を失う。
「貴方は……！？」
「ほう、忘れたわけではなさそうだな」

「……忘れない。忘れるわけがない」
「ルイン？」
「……私にも、決着を着けるべき相手が来たみたい」
まさか向こうから来るとは思わなかった。とルインは苦々しげに吐き捨てる。
いつの間にか月を隠していた雲が、徐々にその姿を消し、鎧を身に付けた相手の姿を、その月明かりで照らし出した。
「お前は……！？」
ガシャン。
その体を、フルプレートアーマーで覆い、その手に長大な槍戦斧を構えた精霊の姿を、俺はよく知っていた。
「デミス……！」
ルインの、呪詛のような声が歯軋りと共に聞こえる。『終焉の王デミス』。それは、ルインの世界、最後の王。野心に溢れ、終焉と共に世界を滅ぼした、終末の王。
兜をつけて尚感じられるその傲慢な瞳が、俺たちを睥睨していた。

第四期第十話「理解者と宿敵」（後書き）

次回がデュエルになることはわかると思いますが、一応注意しておくと。次回、とんでもないオリカが出ます。改訂前を見ている人は知っていると思いますが。アルカナにしては珍しい、確実にチートなオリカです。色んな意味で、ＯＣＧとか無理な奴。

それでは、悠でした！

第四期第十一話「終焉の花嫁ルイン」（前書き）

十一話目。ここにきてようやく、第二期で張った伏線回収。題名の通りです。

第四期第十一話「終焉の花嫁ルイン」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第十一話「終焉の花嫁ルイン」

「『終焉の王デミス』……」
「セツ、手を出さないで。奴とは、私が決着をつける」
私は、多少呆然としていたセツを背中に庇い、目の前の男に相対する。
「その男は、我が主が執心の小僧か。まさか貴様までが執心だとは思わなかったぞ。ルイン」
「……もうメロメロ。だから大人しく消えて」
「そうはいかぬ。大人しくするのはルイン、汝の方だ。まさか忘れたわけではあるまい？　余との婚約の儀を」
「は？　婚約？」
困惑したようなセツの声。誤解されては堪らない。私は慌てて反論した。
「貴方が勝手に決めたこと。私は了承した覚えはない」
「ならぬ。余の言葉は絶対だ」
その傲慢な態度に、私は目を細めて殺気を向ける。
「……たかが王ごときが、女神である私の断りなく支配者気取り？」
けれど、私の殺気は奴にとっては心地良いだけでしかなかったらしい。喜悦の気配。
「よい怒気だ。そうとも。如何に女神であろうとも、我が覇道の前

にはただ恭順のみ。もし、立ちはだかると言うならば……」
　奴の持つ戦斧が変形し、デュエルディスクとなって左腕に装着される。
「力尽くでも、ひれ伏させるのみ」
「……わかりやすい暴君。こちらは、元よりそのつもり」
　私も、自らの手にある杖をディスク型にし、腕に装着する。
「ルイン」
「……大丈夫。任せて」
「わかってる。俺は、どうすればいい？」
　セツの目に、不安の色はない。彼は、信じてくれている。私のことを。なら、言うことはひとつだけ。
「見ていて。私を。私の……戦いを」
「わかった。決して目は逸らさない。見届けるよ。お前の決着を」
　彼の言葉に、私は知らず微笑んでいた。ああ、思い出した。いつか、過去に居た私だ。
「……さあ、始めましょうか。昔日の残響、かつての王」
「始めようか。遠からぬ未来、我が妻となりし女神よ」
「「デュエル！！」」
「私のターン、ドロー！　私は『儀式魔人プレサイダー』を攻撃表示で召喚。ターンエンド」
　『儀式魔人プレサイダー』ＡＴＫ１８００
「余のターン、ドロー。ふん、儀式魔人か……温いわ！　手札から儀式魔法『奈落との契約』を発動！　このカードは全ての闇属性儀式モンスターの儀式に使用できる儀式魔法。更に、余が贄とするのは『儀式の供物』！　一枚で闇属性儀式モンスターの贄となるカードよ」
「……来る！？」
　私は、奴自身の召喚に対して身がまえた。
「ハッ！　まだ余が出る幕ではないわ！　余は『破滅の魔王ガーランドルフ』を攻撃表示で召喚だ！」

『破滅の魔王ガーランドルフ』ＡＴＫ２５００
「っ！？」
フィールドに現れた奈落から、禍々しい姿とオーラを持つ魔王が現れる。
「どうだルインよ。自らと同じく破滅の號を持つ魔王の姿は？　効果発動！『破滅の魔王ガーランドルフ』が儀式召喚に成功した時、このカードの攻撃力以下の守備力を持つモンスターを全て破壊する！『破滅の囁き』！」
魔王の両腕に集約した闇が、私のプレサイダーを呑みこむ。
「更に、ガーランドルフは破壊したモンスターの数×１００攻撃力がアップする！　行け、魔王よ。ルインにダイレクトアタックせよ！『破滅の波動』！」
「ぐぅあっ……あっ！？」
ルインＬＰ１４００
「ルイン！」
「だい、じょうぶ……」
「くくく。余はカードを一枚セットし、ターンエンドだ」
「わ、たしのターン、ドロー！」
流石に、闇のゲームで２６００ダメージはキツイ……！
「私は、手札から永続魔法『昇華する魂』を発動。このカードは、儀式召喚に使用されたモンスターを一体、手札に戻すことが出来る」
「慈悲深いことだ。生贄にされた愚民などを手元に戻すか」
「なんとでも……言えばいい！　私は『マンジュ・ゴット』を召喚！　デッキから『エンド・オブ・ザ・ワールド』を手札に加え、発動！『マンジュ・ゴット』と墓地の『儀式魔人プレサイダー』をリリースし、手札から『破滅の女神ルイン』を攻撃表示で召喚！」
『破滅の女神ルイン』ＡＴＫ２３００
フィールドに、私……違う。かつての私が召喚される。
「『昇華する魂』の効果により、儀式に使用した『マンジュ・ゴット』を手札に戻す」

「ほう、いつ見ても美しい姿よ。しかし、貴様では魔王の攻撃力には遠く、及ばない」
「……そう遠くもない。魔王の急所は見えている。手札から装備魔法『ダグラの剣』を『破滅の女神ルイン』に装備。攻撃力を５００ポイントアップさせる」
『破滅の女神ルイン』ＡＴＫ２３００→２８００
「む……」
「バトル。『破滅の女神ルイン』で『破滅の魔王ガーランドルフ』を攻撃！」
「この瞬間リバーストラップ『生け贄の祭壇』を発動！『破滅の魔王ガーランドルフ』を墓地に送り、その元々の攻撃力分のライフを回復する！」
デミスＬＰ６５００
魔王が祭壇に呑み込まれて行く。私の攻撃はリセットされ、相手の場はガラ空き。
「っ！？」
「ルインよ。貴様の効果、よもや余が知らぬとでも思ったか？　どちらにせよ直接攻撃を受けるならば、自らのモンスターを糧とした方が効率的だ」
「……なら、私は『破滅の女神ルイン』でダイレクトアタックする」
「ぐっ！」
デミスＬＰ３７００
「そして、私は『ダグラの剣』の効果でライフを回復」
ルインＬＰ４４００
これで、序盤のアドバンテージはとった。でも……プレサイダーの効果も無意味になった上、奴のライフは……。
「私はターンエンド」
「フッ、流石に我が女神よ。一筋縄ではいかぬと見える。だが、余とてこれでは終わらぬ！　余のターン、ドロー！　余は手札から『マンジュ・ゴット』を召喚。効果によりデッキから『エンド・オブ・

ザ・ワールド』を手札に加える」
「っ……！」
今度こそ……来る！
「儀式魔法『エンド・オブ・ザ・ワールド』。余は『マンジュ・ゴット』と手札の『終焉の精霊』を生贄に……」
「っ！！」
『マンジュ・ゴット』に、あの忌まわしい精霊の影が取り憑いて行く。その様子が、かつての終焉を思い起こすようで……
「ルイン！」
「っ……あ」
「落ち着け。あいつの呪縛から、完全に逃れるための戦いだ。俺もついてる」
肩に、セツの腕が回される。
「……ありがとう」
肩に乗る手に自分の手を重ねる。セツの温かさが身に染みた。
「さあ、ひれ伏すがよい！　余自身、王の降臨ぞ！『終焉の王デミス』！」
『終焉の王デミス』ＡＴＫ２４００
中庭の草木が抉り取られ、死滅していく。彼と共に見た、美しい光景が。
「っ！」
それが、本当にかつての世界の終焉を彷彿とさせて。
「ルイン……」
でも、体に感じる温もりが、かつての恐怖をやわらげる。
「効果発動！　ライフを２０００ポイント支払うことで、余を除く全てを終焉に！『終焉の嘆き』！」
デミスＬＰ１７００
私のフィールドに存在するかつての私、『ダグラの剣』『昇華する魂』が終焉の力に呑まれ、崩れ去っていく。
「さあ、王の裁きを受けるがよい！『ジ・エンド・カタストロフ』

！」
「くっあああ！？」
「ぐ……！」
ルインＬＰ２０００
私の傍にいた所為で、セツまでが闇のデュエルのダメージを負う。
でも、私は今更、そのことを非難したりはしない。ありがたく、その支えを享受する。
「ふはは！　ターンエンドだ！　さあ、大人しく余の寵愛を受けよ！　女神！」
「お、断り……私の、ターン。ドロー！」
く……かなり、体が辛い。奴の一撃は、やはり相当なものだった。回復していなければ、軽く４０００超のダメージになるのだから当然だけど。
「ルインよ。王の情けだ。その男と共に我が主の元まで来るがいい。然すれば、今後一切、此方からは手を出さぬ」
「だ、れが……！」
「これは女神のためを思って言っている。余の目的は女神。そして我が主の目的はその男。余は寛大だ。我が元に来るのならば、その男との交わりとて認めよう」
「……」
「何も悪いことはない。我が主は、その男のみを望んでおられる。世界を終焉に呑み込むそのお力も、その男がいればそう発動させんだろう。世界も救われ、我らの目的も叶う。何が不満だ？」
「……もう」
耐えきれなくなり、怨嗟の声が口から洩れそうになった時、私よりも先にセツが口を開いた。
「もう、黙れよ。お前」
「……小僧。余は貴様に発言を許可した覚えはない」
「黙れって言っただろ。さっきから聞いてりゃ、ルインのためだのなんだのと。……違うだろ？　ルインのためじゃない。全部、お前

らのためだ」
「何を言うかと思えば……余の、王の慈悲がわからぬのか。我が主も、何故このような……」
「お前らはいいだろうさ。全て自分の望み通りだ。言うことはない。だけどな、俺たちからすればそんなのは、どれだけ妥協を重ねてもハッピーエンドにゃなりゃしないんだ」
……そう。セツの言う通り。奴の提案には、何一つ旨みもない。
そんな提案に乗れる筈もない。
「何故だ？　貴様とて、我が主を嫌ってはおるまい？　いや、むしろ少なからず好意も持っていた筈。女神との関係もそのままでよいと言っている。何が不満だ？」
「決まってるだろ。俺が好きだったのは“ユーキちゃん”であって、お前の主、“終焉の闇”じゃないんだから。それに、あの嫉妬深い終焉の闇が、俺とルインの仲をそのまま継続させる？　あり得ないな」
もし、そんなことが許されていれば、彼は元の世界でも、一年前にも、妹の暴走で苦しむことはなかった筈なのだから。
「だから、お前の提案はクソ喰らえだ。ルインはお前と、望まぬ婚姻。俺は姿形だけ似せた“偽物の”ユーキちゃんに囚われ、いずれその不興を買って世界は終焉……ほら見ろ。お前の提案の先にはバッドエンドしか残ってない」
故に、この交渉に乗る価値はない。
「大体お前、王がどうたらこうたら言っているが、恥ずかしくないのか？　お前、さっきから我が主がどうって、王だなんだと言いながら他者に頭下げてるんだぞ？」
「貴様……っ！」
「……かつての貴方は、野心と傲慢に染まった暴君だった。でも、今はどうやらそうじゃない」
セツの言葉で、私もわかった。今の奴（デミス）は……。
「今の貴方は、偉ぶっているただの餓鬼。欲しいモノが手に入らな

くて、ダダを捏ねている我儘坊や」
「っ！　ルイン貴様ぁ！！」
「今の貴方に、私たちは負けはしない」
「くっ……だが、貴様のガラ空きのフィールドで、これ以上何が出来る！？」
「……貴方は、何もわかっていない」
「なんだと！？」
「貴方が嘲笑った儀式魔人が、魂が、私に希望を与えてくれている。私の手札とあなたの手札。それが、全ての命運を別つ鍵となる」
「っ！？」
私の手札は四枚。そして、奴の手札はゼロ。
「……儀式使いなら、手札の温存は基本中の基本。臣民を使い潰すだけの王に、未来はない」
「ぐ……」
「私は、手札から『マンジュ・ゴット』を召喚……デッキから儀式魔法『過去への郷愁』を手札に加える……」
「なんだ、そのカードは……？　余は、知らぬ！」
「更に手札から魔法カード『死者蘇生』を発動。墓地から『破滅の女神ルイン』を特殊召喚する」
「くっ……なんだ、なんだというのだ！？」
「そして儀式魔法『過去への郷愁』を発動。フィールドから、『破滅の女神ルイン』を含み、レベルの合計が１２になるように生贄に捧げる」
『破滅の女神ルイン』と『マンジュ・ゴット』が光の中へと消えていく。
「過去への想いが、私に力を与えてくれる。思い出した過去。それは忌むべきものではなく……。思い出の中の私、『慈愛の女神ルイン』！」
『慈愛の女神ルイン』ＡＴＫ２５００
フィールドに、純白の衣を纏う私が現れる。

「こ、これは……かつての、女神……？」
「過去の私は慈愛を司る。墓地のモンスター一体につき、ライフを２００回復する。墓地のモンスターは二体。よってライフを４００回復」
ルインＬＰ２４００
「くっ……攻撃力が、余を上回ったか」
それだけで終わると思っているなら……浅はか。
「これは、私の過去との決着。これだけじゃ、まだ決着はつけられない」
そう、まだ……役者が足りない。
「……『慈愛の女神ルイン』の効果発動。ライフを２０００ポイント支払い、自分か相手の墓地から、通常召喚可能なモンスター一体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する」
ルインＬＰ４００
これは、乗り越えなくてはいけない再現だから。
「ルイン……まさか、お前！？」
セツが、何かに気付いたように私を驚愕の目で見つめる。
「私が選択するのは……『終焉の精霊』！」
「なんだと！？」
私が、私が呼び寄せた。王は、デミスはその寄り代となっただけ。自らの欲に、野心に付け込まれ、世界を滅ぼす元凶となった。
「私はもう一度、この手で全てを終わらせる！『終焉の精霊』！」
私のフィールドに、あの忌まわしい影の精霊が。震えそうになる腕を、セツが優しく支えてくれる。
「そ、して……私は手札から『融合』を発動……『慈愛の女神ルイン』と、『終焉の精霊』を融合する……」
純白の私に、影が取り憑く。ああ……。
「馬鹿な……これは！？」
今でも、鮮明に蘇る。遠き日の絶望。
「……終焉の鐘の音が……遠く、響き渡る時。破滅の扉は開かれる

……世の落日を見るがいい！　融合召喚！『終焉の花嫁ルイン』！」
『終焉の花嫁ルイン』ＡＴＫ２０００
漆黒の衣を身に纏い、全てを滅ぼす毒を撒く。
「こ、これが……終焉の花嫁。ルインの……過去の姿。一体、どんな効果が……？」
これで……終わる。全てが。
「私の……『終焉の花嫁ルイン』の効果を発動する」
この、効果は……。
「このカードが融合召喚に成功した時、このカード以外、ゲーム中に存在する全てのカードをゲームから除外する。フィールドも、手札も、墓地も、デッキすら、全てに等しく終焉を……」
「なっ！？」
「馬鹿なっ！？　そんな、そんな馬鹿げた効果が……」
「その代わり、このターンのエンドフェイズ時に、私はゲームに敗北する」
それでも……つまりはこの攻撃で終わりにすればいいだけ。
終焉の花嫁の攻撃力は２０００……相手の残りライフが２０００以下なら、勝ちが決まる。
「ま、待て……ふざけるな……こんな、こんな終わり方が……」
「遍く全てを終焉せよ！『アビスフォール・ディザスター』！！」
「っっっ！？」
地べたに座り込み、手を大地に落とした私から、終わりの謳が紡がれた。
「おおおおおおおおおおっ！？」
デミスどころか、全ての存在を巻き込み、崩壊を促す絶対破滅の力。それに抗えるものはいない。
「そして、これで終わり。『終焉の花嫁ルイン』で、プレイヤーにダイレクトアタック。『ディスペアー・シャウト』！！」
「ぎ……っあああああああああああああああああ！？」
デミスＬＰ０

「眠りなさい。哀れなる王。過ぎた野心は破滅を招くと、その魂に刻んで」

輪廻の裁きを、座して待つといい。

私は、手の中から消えていく、かつての罪科を眺めつつ、王の最期を看取るのだった。

「っ……く」

「ルイン！」

「大丈夫……ちょっと、肉体的にダメージが大きいだけ」

「脂汗流して言うことじゃないだろ！？」

デュエルの後、崩れ落ちそうになったルインを慌てて支える。

「……ホントに、大丈夫。精神的にはナチュラルハイ」

「……それはそれで、心配になってくるんだが」

ともかく、大事はないようで安心した。

「お兄ちゃ～ん！！」

「ルイン殿～！！」

闇のデュエルに気が付いたのか（まあ、あれだけ派手にやっていれば誰でも気付くか）、さだめたちが駆け寄ってきた。

「……ネイキッド。お前なんでパンツ一丁なんだ？」

「いや、就寝前の筋トレを……って何故揃って引く！？」

「汗臭い。見苦しい。汚らわしい」

「ごふっ！？」

「ルイン、その三段活用は奴には酷だぞ……」

「お兄ちゃん、大丈夫！？　貞操は無事！？」

「なんで言うに事欠いて真っ先に貞操の確認なんだよ！　まずは怪我の有無を確認しろよ！」

「だってこんな真夜中にルインと二人きりだったなんて……もう五ラウンドくらい終わっていてもおかしくないと……」

「俺はどんだけ早いんだ！？　じゃなくて、お前は心配するベクトルがおかしい！」
「まったくアテナは……夜にお兄ちゃんの部屋に行ったってだけでも許し難いのに、それどころかこんな重大な危機を見逃すなんて……」
「うぅ……私だって少しテンパってたんですよ。でなければこんな状況を見逃す筈が……」
なんてこった。アテナもさだめと同意見なのか。
「……貴女たちは失礼」
「だってルインだよ！？」
それが失礼だろう。ちなみに、俺的にはルインのところをさだめに変えるとしっくりくる。
「……でも、そこまで言うのならお望み通り」
「はっ！？　エマージェンシー！？」
さだめの言葉に何か反応する間もなかった。
「ん……」
「「ああー！？」」
唐突に、唇に柔らかな感触。アテナとさだめのものらしき悲鳴。
間近に迫ったルインの端正な顔。
「……ん、ゴチ」
満足そうなルインの微笑み。膨れ上がる闇と光のオーラ。
「死ねぃ！」
「何しているんですかぁ！？」
咄嗟に身を引いたルインと俺の間を貫く光の砲撃と闇の爪。
「……危ない。一応闇のデュエル後でグロッキー」
「関係ないよ！」
「不意打ちは卑怯だと思います！」
そして始まる人外バトル。俺はと言えば……。
「で、何故貴様はそんなに落ち込んでいる」
「……いや、今更不意打ちでキスされたくらいじゃうろたえなくな

っている自分の感性に絶望していた」
「良かったな。これで、名実ともに貴様は誑しで鬼畜王だ」
エースの言葉が胸に突き刺さる。が、コイツにやられっぱなしは性に合わん！
「……言っておくが、お前も原因の一端だからな？」
「な、なんのことだ？　我は、その……知らん！」
顔を赤くして立ち去るエースに、少し溜飲を下げた俺に、さだめたちから逃げるルインが目線を向けてきた。
『ありがとう。貴方のおかげで、私は過去を乗り越えられた』
声に出さずとも、伝わったその言葉。それに俺は、こう返すのだった。
『どういたしまして。女神様』

第四期第十一話「終焉の花嫁ルイン」（後書き）

明らかにパワーカードです。が、一応対処法は幾らでもあります。まず出し難い。オリカ紹介を見てもらえば分かると思いますが。そしてライフが２０００以上だと負け確定。奈落食らうと終わり。和睦でも終わり。威嚇する咆哮でも終わり。融合召喚にチェーンして墓地からネクロ・ガードナーでも負けます。その他諸々。それでも明らかにゲームバランスがおかしくなるのは確定なのでチートです。

それでは、悠でした！

特別編「第二回アルカナ人気投票結果発表！」（前書き）

はい！　というわけで、結果発表です！
いや～今回は中々荒れましたね～。結果は本文を見ていただくとして……皆さま、人気投票への御協力、ありがとうございました！
※改訂により、人気投票に出馬している内数人が登場しなくなりました。見たことない名前があって誰それ？　とか思ったら、居なくなったキャラなんだなーと思って下さい。尚、四期にて登場しているキャラも存在します。

特別編「第二回アルカナ人気投票結果発表！」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「第二回アルカナ人気投票結果発表！」

さあ、それでは始まりました第二回人気投票結果発表～！

「どんどん～ぱふーぱふーにゃ！」

おお、お久しぶりですライムさん。すっかり特別編での出番が定着しあばばばば……。

「それもこれも、作者さんがボクを出さないからでしょー！？　お仕置きサンダー！」

あばばばっ！？　と、とにかく結果発表です！　いいじゃないですか今回はライムも票入ったんですから！

「ま、まあね！　やっとボクの魅力をわかってくれる人が現れたんだよ」

……若干同情票っぽくもあっ……いえ、なんでもありません。とりあえず、今回の作者票は……。

一位　さだめ

二位　エース

三位　ルイン

でした～。

「ありゃ？　ルイン姉さん下がっちゃったの？」

いえ、キャラとしては相変わらずルインが一番好きなんですが……今回は、書くときの書き易さに焦点を当てて考えてみました。

「やっぱり、サダコは書き易い？」
ええ……ってなんだそのニックネーム！？　一文字変えるだけでとんでもないのになってるんですが！？
「ボク的に、ぴったりなネーミングだと自負していたりするよ！」
いや、まあ……そこら辺はノーコメントで。それはともかく、やっぱりさだめは書き易いですよ。彼女が出てくるシーンは殆どタイピングが止まりません。殆ど勢いで書くことができます。
「そりゃまた……」
同じく、セツとの掛け合い的な意味でエースも書き易い。キャラ的に気に入っているのもあって、超優遇……というか贔屓しております。
「ボクとはエライ違いだね」
コホン。で、ルインはマイフェイバリットなので三位には少なくとも入ります。
「なるほどにゃ～第一回二回共に作者票の入らないメインヒロイン（笑）が不憫と言えば不憫にゃ～」
それはその、はっはっは……結果発表！
「誤魔化したにゃ……まさかまた作者さんから始まるなんてふざけた展開はないよね？」
どうやらなさそうです。が、ものすっごい形で始まったりはしますが。
「そこはかとなく不安」
ではでは、まずは総評から。総投票者数３３人（作者込み）！　投票されたキャラ数２８人（やっぱり作者込み）！　思いもよらぬ大盛況となりました今回、まずトップバッターを務めるのは……。

〇第二十四位　幽鬼（パンタレイ）　遍在する縛鎖（トリプルバインド）　暴風極限　疾風解体　虚無縛鎖（ランコリー）　得票数１ポイント　カオティックリベリオン　アサルトヴェロシティバインドメ

「って誰にゃ！？」
　左から順に、ネイキッド、アンデット使いのアホA、朱雀、ヴァーミリオン、スピードウォリアーとなっております。（参照：二つ名メーカー）
「凄まじい二つ名！　というか、誰にゃアンデット使いのアホAって！　二つ名カッコイイし！」
　ほら、剣士と凛のイベントで出てきた雑魚キャラです。ワーム使いの足を引っ張った挙句、特に何もできずに負けたオベリスクブルー所属のエリート（笑）。
「そんな奴に貴重な票を渡すなぁぁぁぁ！！」
　ほら、アンデット使いと言うところが評価されたらしいですよ？
「そんにゃもんは知らん！　そして何故スピードウォリアーとか、一話しか出てきてないような奴が票貰っているの！？」
　速さが足りない！　と言わんばかりのマシンガントークがお気に召したらしい。
「ミリーも人気落ちてるし……」
　出番、少なかったからなぁ……。
「ボクも含めて、そこら辺は要改善だよ」

○第十九位　螺旋結社（ファンダメンタルペイラジカルクレイドル）　叛逆密室（サブリミナルスパイク）　埋没する撃発　躯形中毒（パラノイドディストーション）　禁呪機関（リックエクリプス）　得票数2ポイント

「で、誰なの？」
　左から、剣士、零、ユーキちゃん、火蓮、灼夜です。
「……ユーキにゃん、ボクより下なんだね」
　……出番って、偉大ですね。というか、火蓮と灼夜が同数なのはもう運命なんだろうか……。

「個人的には、火蓮は睡眠中毒だと思う」
それは確かに。……さて、朱雀も含めて、セツ以外のメイン男子はこれで出揃いました。
「前回は剣士君にしか入ってないこと考えれば大健闘、といったところかな？」
ですね。ユーキちゃん……。
「出番は何時になるのにゃ？」
いえ、ぶっちゃけすぐにでも出番はあるんですが……。くそう、読者の意識からも消失（サイレント）し始めたか！
「本編からしてしてるよ」

○第十五位　永久叫喚（ブラッディループ）　焦熱覚醒（クレイジーエラプション）　貫通曲鎖（ネレモロダンス）　水銀粛清（フローズンリバー）　得票数3ポイント

「で？」
はいはい！　左から私、マキュラ、ゴーズ、キングです！
「なんでテメエが取得ポイントアップしているにゃ～！！」
ぎゃらっぷ!?　し、知りませんよ！　投票してくれた読者様方に言ってください！　そして、ライムはもっと上に居るんだから文句言わない！
「……ま、まあ確かに？　ボクは作者なんかよりもっともっと人気があるみたいだから？　許してあげてもいいかな！」
なんとまあ扱いやすい……ゴホン。大体ですね。考えてもみてください。冥府の使者と処刑人に挟まれて私。どうしよう！　死の香りしかしない！　キングは頼りにならないし！
「確かに……とてつもなく濃厚な死亡フラグの香りがするね」
きっと処刑された後冥府に連れて行かれるコンボですよ！　死にたくない！　死にたくない！

○第十四位　極限惨劇（インフィニティテンペスト）　得票数４ポイント

「さて、次は誰？　すっごくキケンな香りがする二つ名だけど……」
ジャックさんです。
「似合わなっ！」
極限の惨劇ですからねぇ……あの執事騎士さんには確かに似合わない。
「あ、何気に初の単独だね」
ですね。二位票を二つ獲得しての４ポイントです。
「流石執事騎士。決して一位票は貰わず、控えめだね」
偶然でしょうが。

○第十一位　忘却刻印（デイドリームオートマダンシングパラダイスショットガンシャッフル）　電波脳髄　電子絶望　得票数５ポイント

「さてお次は……」
「はいは～い真打ち登場！　とばかりにシャルナお姉さんがやってきましたよー！！」
「帰れにゃ」
「酷っ！？」
「私、だね。っていうか、電波脳髄でダンシングパラダイスって……なんか私、電波拾って頭が逝っちゃった挙句、ラリって踊っている危ない人みたい……」
「おおっ！？　凛の嬢ちゃんと同数か！　こりゃいいぜ、脇役としちゃ、これ以上ない結果って奴だ！」
というわけで、左から順に、シャルナ、凛、バグロスでした！

「おおお……遂にお姉さんにもスポットライトが……」
「ほぼ全て同情票、というか全部三位票のカワイソウな駄女神でしたにゃ」
「そんな言い方ないじゃない！　あたしだって票もらったら嬉しいのよ！？　それに、全部三位票で5ポイントってことは、逆に言えば五人もあたしに票を入れてくれているってことなんだから！」
　シャルナは、アテナに感謝しておきましょうね。彼女の同情票云々の台詞がなければまたゼロ票だったかもしれないし。
「あったり前！　そうでなくとも、アテナには毎度感謝してますとも！」
「さあさあさあ！　こんな駄女神は放っておいて、次次次～！！」
　テンション高いなぁ……次に行く前に、凛とバグロスさん、コメントをどうぞ。
「ええっと……ありがとうございます？」
　何故疑問形。
「いやその、実感が湧かなくて……」
「俺に投票してくれた猛者たちよ！　感謝するぜ！　これからも、俺の脇役街道を応援ヨロシク！」
　……サイクロイドもそうだが、何故機械族の奴らは人気投票に誰よりもノリノリなんだろう。

○第十位　爆撃断片（カオティックブラスト）　得票数6ポイント

「にゃふ～！！　ライムのターン！」
　というわけで、第十位はライムで6ポイントでした。次行ってみよう！
「待ってよ！？　なんでボクのターンそんな異常に短いの！？」
　いやだって、ライム今回散々出ているじゃん。

「そんなの関係ないよ！　あの駄女神に、一票差で勝利したボク！　ライムのコメントを求めたりとか……」
求めなくても散々コメントしてるでしょうが！

○第八位　呪禁風景（ウロボロスワールド）　虚無騎士（シャドウブレイク）　得票数８ポイント

「誰あの虚無騎士（シャドウブレイク）って！　なんかカッコよくない！？」
「す、すみません私です……」
「カイエン！？」
ちなみに、前者は希冴姫です。今回はお休み。死んでますし。
「あの……あっさり死んでいるとか言うのは、どうなんでしょうか？」
いいんじゃないでしょうか？　流石に死者までここに引っ張り出すのはちょっと。
「まあその分カイエンさんの出番が増えたってことでいいんでない？　よっ！　虚無騎士（シャドウブレイク）！」
「それはやめてください！」
二つ名とか、実際に呼ばれたら恥ずかしいことこの上ないよね。
「そうだね。永久叫喚（ブラッディループ）の悠さん」
ぐはっ！？

○第七位　頽廃運命（バロックピエロ）　得票数９ポイント

「今回は……」
エリアルさんです。ほらっ！　物陰に隠れていないで出て来なさい！

「はぅぅ！　ま、待ってください！　あ、あたしなんかがこんな、七位だなんて……ね、姉さんに申し訳なくて出れません！」
　ちなみに、エリアはゼロ票。
「妹強っ！　っていうか、まともな出番は土下座の回一度だけだった筈なのに、この順位だよ……」
　土下座マイスターってのは、新しい属性かなんかなんでしょうか。
「し、知りませんよぅ……あ、でもカイエン様に勝てたんですね。あたし」
　はい。土下座マイスター対決は、ギリギリでエリアルに軍配が上がりました。
「それは、少し嬉しいかもです」
　土下座対決はまたの機会にお願いしますねー。では、続いて第六位！

○第六位　亡骸（カオスゲート）　得票数１１ポイント

「俺っちが六位！？　おいおい、集計ミスかなんかじゃねえのかい！？　前回より下がっているじゃねえかい！」
「す、素早い登場……ボクが何か言う前に飛び出してきた……」
　ミスじゃないよボロチャリ。大体、サイクロイドが人気投票に参戦しているってだけでも異常事態なんだよ！　しかも六位とか、とんでもない大健闘しておきながら何を文句言っているんだ！
「まあ、俺っちはほとんどが一位票。二位票は一つだけ。三位票はなしってところで十分、アルカナのアイドルとしての地位を証明しているってもんよ！」
　してねえよ！　確かに殆ど一位票だったけど！　少なくともアイドルをサイクロイドに任せるほど、アルカナはキャラに困ってないよ！

「あ、あの～ボクは……」
「ま、つい最近俺っちの活躍の場を書いてくれたことは感謝するぜ！」
偉そうだよ！　お前、全キャラの中でトップクラスに偉そうだよ！　何様だ！？
「サイクロイド様よ！」
黙れ二輪！
「う、うわ～ん！　サイクロイドが出てくるとボク喋れないー！！」

○第五位　虚構戦機（プレデターレクイエム）　得票数１５ポイント

「ぐすっ……さて、次は……」
我らが主人公、虚構戦機（プレデターレクイエム）こと、セツくんです！
「その呼び名はやめろ！」
「うわ～んキリリン～！！」
「ああもうよしよし。くっそぅ、まさか奴と並びの順位になるとは……悪夢か？　これは」
憑かれてますね。前回よりは順位が下がってしまいましたが、その辺は？
「うん？　まあそれは妥当なところだろ。上位四人は流石に、今散々活躍しているしな。別に俺自身の順位はどうでもいいんだ。それより……」
それより？
「……上の奴らが、順位のことで揉めてそのとばっちりが来るのが怖い」
……なるほど。では、その上位四人の発表と参りましょう！　ライムさん、そろそろ復活ヨロ。
「うぅ……アシスタントとしての使命は果たすよ……だから、出番

を……」

さ、さあ行ってみましょう第四位！

○第四位　無双鍵盤（ヴォルカニックレクイエム）　得票数１７ポイント

「また物騒な二つ名が出てきたね～」

さて、その物騒な二つ名の持ち主は……。

「……私」

今現在大活躍中の、ルインさんです！

「私、また四位……」

いやまあ、いいんじゃないですか？　前回と比べて、順位に変動ないのはルインさんくらいのもんですし。

「……上位三人は異常」

「天高くそびえ立ってるねぇ……こりゃ勝てる気がしないや」

「……彼と並んだのは嬉しい。二つ名も何処か似通っている。満足しておく」

二人してレクイエムですからね。では、一気にポイントが跳ね上がる第三位！

○第三位　幽閉残響（ハウリングインフェルノ）　得票数２８ポイント

「うっわ。いきなり１１ポイントも……」

ルインとの差が凄い。まあ、最近の目立ち方から考えれば、ある意味当たり前ですかね……。

「というわけで、第三位は現在怒涛の活躍をしているエース姐さん～！！」

「貴様まで姐さんはやめろ！」

銀髪、ツンクール、若干M。いい属性だ……。

「黙れ！」

まあ兎に角、前回の４ポイントから凄まじい躍進を経たエースさん。感想をどうぞ。

「……まあ、悪い気はしない。ただ……」

「ただ？」

「これは、その……あれか？　わ、我は完全に、ヒロイン扱いになっているのか？」

読者の中では、ヒロイン扱いどころかメインヒロイン扱いしている方もいます。

「……それはその、困る」

「ええ～！　いいじゃんいいじゃんキリリンの嫁だよ～？」

「よ、嫁ではない！」

友達？

「そ、そうだ」

……ま、そういうことにしておきましょう。

「そういうことにとはなんだ！？」

さあ！　とうとうやって参りましたアルカナ人気投票第二回のクライマックス！　最早残っているのは例の二人のみ！　ある意味で因縁の対決となりました！　最後は二つ名と同時に本名で呼ばせて頂くことにしましょう！　それでは、第一位＆第二位は……。

○第二位　平面理論（スパイラルサーフィス）　御堂さだめ　得票数３０
○第一位　暴かれた錯誤（アリゲーターシャッフル）　天音アテナ　得票数３２

「や……」
「な……」
「やりました～！！」
「なにぃぃぃぃ！？」
はい、ヒロイン二人の、歓喜と驚愕の叫びを聞いていただきました。
「やりました！　遂にやりましたよセツ！」
「ああ、良かったな。アテナ」
「ば、馬鹿な……」
「あー、まあこんなこともある。あんまり落ち込むな。さだめ」
「うぅ……お兄ちゃ～ん！」
まあ、どうやら投票理由とかを見る限り、さだめは前回一位だし、どうせ票は入るから入れなくてもいいだろう的な……。
「なんっじゃそりゃあああああああああああ！？　そんな理由でさだめ負けたの！？」
ええまあ。加えてアテナは、今度こそ一位に！　という応援が多々……。
「実力じゃないじゃん！　ある意味同情票じゃん！　組織票じゃん！」
「組織票は違うだろ……」

「別にアテナ最近それほど活躍してないじゃん！　さだめ活躍してるじゃん！」
「し、失礼な！　最近の話ではさだめさんそれほど活躍してませんよ！　マキュラ惨殺したくらいじゃないですか！」
「アテナだって終焉の精霊殲滅しただけじゃん！」
「……なんだろうな。こんな血生臭い会話している二人がツートップって」
ちなみに、投票者数では、アテナ１４人。さだめ１３人。エースが１４人です。
「さだめさんエースさんにも負けているじゃないですか！」
「量より質だよ人気投票は！」
「どっち道私には負けてます！」
「くっ……このダメっ娘！」
「だ、誰がダメっ娘ですか！」
「シャルナの駄女神っぷりは、流石アテナの精霊だよね！」
「しゃ、シャルナと一緒にしないでください！　いくらなんでも不愉快です！」
「あ、あれ～？　なんかお姉さんのところにまで飛び火しているような～……っていうか、とばっちりで一番酷い扱いうけてるのあたしじゃない！？　ねえ！？」
「いつまで言い争いしているんだあいつらは……まあ、被害がこっちに来なくて良かったと思っておこう」
ですね。
「ところで、アテナが一位ってことは……」
はい。ご褒美短編はアテナになります。おおぅ、これはまともにラブの予感が……。
「ほ、ホントですか？」
「やめて！　お兄ちゃんとさだめ以外の女のラブなんて……」
「残念だったなエース。前回同様三位にご褒美だったらお前の短編だったのに」

「わ、我はそんなもの欲しくもなんともない。大体貴様とのら、ラブなんて……」
「ハッ！？　またエースさんがツンデレ発動させている気配！」
「貴様は何だ！？　レーダーか！？」
「お兄ちゃん関係では、衛星すらも超える！」
「私とセツの短編……こ、これはもう……」
「ヤッちゃうしかないわよ。アテナ」
「おいこらそこの駄女神！　アテナに何を吹き込んでいる！？」
「恋愛成就のおまじないよ！」
「ウソ吐け明らかに１３歳に吹き込むには犯罪チックなこと言ってただろ！」
「まあね！」
「なんでも胸張って言えば許されると思うな！　いいか、法律的にも精神医学的にも、１３歳以下に対する性的接触は犯罪であり、病気として処理されるんだからな！」
「大丈夫！　アテナの精神年齢はとっくの昔におばあさんよ！」
「それはそれで問題あるだろう！？」
「ちょ！？　誰がお婆ちゃんですか誰が！」
「婆……ぷっ」
「さーだーめーさーん！？」

さて……どうやらあちらは収拾がつかなくなってきてますね。
「だね～。避難して来て良かったよ」
ともかく、今回の人気投票も大盛況の内に終わることができまして、本当にありがとうございました。
「ました～！」
アルカナ自体はそろそろ物語も佳境に近づいてきています。多分ラスボス後にもいくらか後日談として続くとは思いますが……今後

とも、応援よろしくお願い致します。
「します！」
……こらライム。私の言葉を後追いするのはやめなさい。
「ちぇ、楽だったのに。まあいいや。今回は、ボクも結構沢山票が貰えて嬉しかったよ！　また次回もよろしくね！」
まあその次回人気投票があるかはわかりませんが……その時はまた、何卒よろしくお願いします。
それでは、今回の人気投票を司会を務めさせていただきました、作者こと悠と……。
「ライムでした～！　またね～！」

特別編「第二回アルカナ人気投票結果発表！」（後書き）

二つ名メーカー……面白い。前から知ってはいたんですが、友人との会話で久々にやってみまして。面白いからアルカナでも出してみようと。ちなみに、作者の本名でやってみたら眼球（パラノイド）でした。眼球……眼球って……。

それにしても、まさかアンデット使いのアホＡにまで票が入るとは……作者すらも殆ど忘れていましたよ。

ユーキちゃん……（涙）。サイレントしちゃっているなぁ……。

あ、それと前回言い忘れましたが、終焉の花嫁ルインの見た目は、基本的に黒桜をイメージしていただければ大体伝わると思います。正にそんな感じですから。

それでは、悠でした！

特別編「アテナんち　前編」（前書き）

こんにちは。

アテナの御褒美短編です……が、何やら話が滅茶苦茶に膨らみそうな……前中後編になってしまいそうな予感すらひしひしと……！

タイトルからわかるように、アテナ実家訪問編、どうぞお楽しみに。……あんまり甘くはなりませんでしたすみません（土下座）。

特別編「アテナんち　前編」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「アテナんち　前編」

「……悪いアテナ、もう一度だけ言ってくれるか？」
俺は、目の前で顔を真っ赤にして迫るアテナに、聞き間違いだったという希望を込めて尋ねた。というか、聞き間違いであれ。
「で、ですから！」
しかし、そういった希望は断ち切られるのが世の常なわけで……。
「こ、今度の連休……」
でも、だからって……。
「わ、私の家族に会って欲しいんです！」
これは、いくらなんでもあんまりだ。
「早すぎる……というべきなのかどうなのか……」
いや、よく考えてみたら、俺って実はアテナの家族構成とか、何も知らないな。
「アテナって、家族居たのか」
「い、いますよそりゃあ。ミリーちゃんみたく自然発生したわけじゃないんですから」
「きゅ？」
寮の俺の部屋。アテナの言葉に部屋の隅っこで積木をして遊んでいたミリーが反応してこっちを見る。その瞳は「なぁに？　僕のこと？」とか言いたげだ。

「可愛いです～……」
そんなミリーを、目にハートを浮かべる勢いでアテナが見つめる。
相変わらずミリーはアテナのことが苦手のようで、「きゅっ！」とそっぽを向いてしまったが。
「きゅ～ぅ？　くぁ～……きゅぅぅ……Ｚｚｚ」
一通り遊んで、ミリーは欠伸を一つしてからコロンと寝転がってしまった。相変わらず自由に生活してるなぁ……。
「そ、それでセツ。会ってくれますか？　私の家族……」
「あー……」
やっぱり話は逸らせなかったか。どうしたもんか……。
「大体、なんで今になって突然？　何かあったのか？」
「いえっ別に大したことじゃないんですけど……」
「？」
「この間、電話でお父さんと話していた時、ついぽろっとセツのこと話しちゃって……会ってみたいってお父さんが……ごめんなさい」
「いや、っていうかもしかして、今まで俺のこととか家族に話してなかったのか？」
むしろそっちの方が意外だ。アテナならとっくの昔に話していると思っていた。
「それはその……色々あり過ぎて、そもそも実家に電話やメールをすることすら忘れていたと言いますか……」
「……そういうことか」
そりゃ、父親としては気が気でないだろう。娘が連絡を怠っていた間に悪い虫がついたとあれば……。
「ところで、アテナ失踪とかしてたはずだけど、その時には家族から何か言われなかったのか？」
「あ、それは多分、お父さんたち、失踪の事実自体知らされてないんじゃないかと。希望さんが手を回したらしくて」
「……なるほど。大事になるのを避けたわけだ」
それでも、家族にくらいは伝えるべきだったと思うが。

「今度の連休はお兄ちゃんも帰ってくるから丁度いいだろうってお父さんが」
「マテ。今さりげなく聞き捨てならない言葉を聞いた」
「え？」
「……お兄ちゃん？　兄がいるのか？」
「あ、はい。言ってませんでしたか？」
「聞いてない」
なんというか……俺もアテナも、色々と間違っている。そんな基本的なことも知らずによくもまあここまで関係を……。
「大丈夫です！　お父さんもお母さんもお兄ちゃんも、皆優しいですから！」
「はは……」
わかってない。わかってないぞアテナ。その優しさが果たして害虫（俺）にも向けられるかどうかをわかっていない。
「えーと……今更だが、アテナの家族構成とか教えてもらってもいいか？」
「はい。というか、今まで言っていなかったのが逆にびっくりです」
俺もだよ。
「お母さんの名前は天音詩織。お仕事は洋服のデザイナーさんです」
服飾デザイナーか。ふむ……。
「お父さんは天音皐。Ｉ＆amp;Ｉ社で、カードデザイナーをやってます」
デザイナー一家なのか。アテナは。
「そしてお兄ちゃんが天音アポロ。今は本土の大学でプログラミングを学んでいます」
アポロ……また凄い名前だな。
「本当は、私の名前もお兄ちゃんに因んでアルテミスとかにしたかったみたいですけど……流石に日本人の名前でそれはないだろってことでアテナになったみたいです」
アポロの時点で十分普通じゃないが、確かにアルテミスは日本人

の名前じゃないな。
「……で、今度の連休だったか？」
「はい。えっと……来て、くれますか？」
「……逃げたと思われるのも癪だしな」
気乗りはしないが。何故アテナが勢い込んで誘ってくる時は一々意味深なのか。アテナの部屋でデートしかり、二人っきりで温泉旅行しかり。遂には家族にご紹介とか。
「……重いッ！　アテナのイベントは悉く重いッ！」
「え……わ、私、重いですか……？」
「ああいや違う！　アテナが重いとか、想いが重いとかそういう意味でなくて！　イベントが重厚過ぎる！」
さだめが、自分のフラグは脆いとか何とか言っていたが、確かに一撃一撃の重さはアテナの方が段違いかもしれん……。
「というか、連休に本土へってことは、泊まりなのか？」
「はい。二泊三日で、家に。ダメですか？」
「いや……うん。とりあえず夜は眠れそうにないなと……」
「え、そ、そんな……」
「顔を赤らめているところ悪いが、そういう意味じゃないんだよ耳年増」
むしろ顔が青くなる話だ。護身用に幾つか持って行くか……。
「そうと決まれば、対策会議だな」
「え？　どういうことですか？」
「アホ。アテナの両親に挨拶するのに無策で挑めるか」
敢えて彼女の、とは言わない。心情的にはその通りだが、一応事実としては違う……事になっている筈だ。
「普通に挨拶するだけでもいいと思うんですけど……」
……ここら辺はまだアテナも子供か。わかってない。
「じゃあ聞くが、アテナ。お前父親に俺のことなんて紹介した？」
「えっ？　そ、それはその……」
動揺して目をキョロキョロさせるアテナ。まあ、大体この反応で

わかった。
「……若干関係深めて誇張しただろう」
「うぐ……」
はいビンゴ。
「防弾チョッキはいるだろうか……？」
「いらないと思います。というか、なんでそんなもの持ってるんですか。ウチの家族に拳銃持ってる人はいません！」
「甘い。最近は手に入れようと思って手に入らないものなんて殆どない。現にさだめは持っている」
「持ってるんですか！？」
「昔撃たれたからな」
「撃たれたんですか！？」
「マグナムで」
「マグナム！？」
「翌日の体育がラグビーでな。流石にあれはしんどかった」
「体育でラグビー！？　というか撃たれた翌日になにやってるんですか！　病院は！？」
「弾は貫通してたし、止血と痛み止めすれば問題ない」
「大アリですよ！」
「俺は撃たれ強いんだ」
「字が違います！　というかそんなレベルじゃないですよ！」
「まあそんな過去のことはどうでもいい」
「今の、過去のことってサラッと流していいところでしたか！？」
「とりあえずは対策だな……」
「ホントに流しちゃうんですね……」
別に、あれ以降防弾チョッキは必需品になっただけのことだ。大した事件じゃなかった。それより対策だ……とりあえず危険を避けるためには気に入られることが第一……。
「だがここで好きなモノをお土産に、なんてあっさりした考え方じゃ死ぬと考えておこう」

「あの、マグナムで撃たれても翌日ラグビーするようなセツを殺せるほどウチの家族外れちゃってませんよ？……人から」
「服飾デザイナー……カードデザイナー……よし、それなら……後は兄の方か……」
ぶつぶつと、自分の中で計画を立てて行く。アテナに幾つか質問をして（何故かアテナは疲れ切った表情だったが、何かあったのだろうか？）、とりあえずは解散した。後は俺が頑張るだけか……。

そして、運命の日。
「セツ……」
「ん？　どうしたアテナ」
「かっこいいです……」
「そうか？　なるべく悪印象与えない程度にコーディネイトしてきただけだが」
とりあえず第一印象で悪印象を与えるわけにはいかないので、珍しく服装や髪形にも気を使った。別に結婚の挨拶に行くわけでもあるまいし、若者らしいラフな服装だが。
「ま、母親は服飾デザイナーなんだろ？　だったらまず服装で印象は変化する筈だ」
計画の一段階目。とりあえず、与しやすい方からつき崩していく。
「セツ、そんなに私の両親に気に入られたいんですね。なんか嬉しくなっちゃいます！」
「……まあ、そういうことにしておいてくれ」
現実は自己保身のためだが。
「なんだろう……どちらにせよ俺は墓場に向かうような気が……」
現実の墓場か人生の墓場かは別にして。
その後俺とアテナは定期船でアカデミア島を出発し、本土へ。アテナの道案内に従って、電車とバスを乗り継ぐこと約一時間。

「こっちです。セツ」
「あの、アテナ……俺には、ここら辺が超一級の高級住宅街にしか見えないんだが……」
アテナは思っていた以上にとんでもない家の生まれなのかもしれん。家に着いたらメイドさんが居る勢いだぞこれは……。
「そんなことないですよ。お手伝いさんは一週間に一度くらいしか来ませんし」
「来るのかよ！」
間違いない。アテナは結構お嬢様だ。自覚なしの。
「あ、ここです！」
アテナが案内してくれたのは、周囲の邸宅と比べても何ら遜色ない、というか、大きさ自体はそれほどでもないが、清潔感のある、センスのいい建物だった。
ピンポン。あ、呼び鈴の音はそれほどお屋敷っぽくない。
『はい』
「お母さん？　アテナです。帰って来ました」
『あら、お帰りなさい。じゃあ例の男の子も……』
「はい。連れてきましたよ」
『あらあら……うふふ。入ってらっしゃい。お父さんもアポロも帰って来ているわ』
なんだそのうふふ、は。激しく不安になる笑い声を上げないで欲しい。
「セツ、行きましょう！」
「……ああ」
何だろう。何故かわからんが、既に精神的にかなり崖っぷちだ。

「お帰りアテナ。遠かったでしょう？」
「お帰り。久しぶりだねアテナ。そして……」

アテナ家へと足を踏み入れた瞬間、俺は背中に冷汗が止まらなくなった。
「いらっしゃい。御堂くん……だったね？　ようこそ我が家へ。歓迎するよ」
ぐ……さだめ相手でプレッシャーには慣れているつもりだったが、これはなんていうか、そういうのとは質が違う！
「あ、それじゃあ私、お茶入れてきますね」
アテナがそう言って台所に駆けて行く。……さてそれじゃあ、始めようか。元の世界で、演劇部の切り札と呼ばれたこの俺の演技を！
「……始めまして天音さん。お噂は真中会長より伺っております。御堂切です。どうぞよろしく」
「ほう……！　真中会長というと、あの大財閥の。知り合いかね？」
「極々個人的なものですが。少々縁がありまして。奥様も、服飾ブランドの最大手『Ａｎｇｅｌ』の方で御活躍とお聞きしております」
「あら、ご丁寧に。中々頭の良い子ね」
「それほどでも。ところで……」
ここまでの流れはシミュレーション通り。問題はここからだ。
俺は天音詩織さんに顔を寄せ、一枚の紙を見せる。
「あら、これは……」
「個人的に、娘さんにはこういった服が似合うのではと思い、未熟ながらデザインをさせていただきました。如何でしょう？」
「……っ！　これは……貴方が？」
「一応。俺には妹が一人いるのですが、どうしようもない我儘娘でして。幼い頃から妹の服は俺が作る習慣だったので、ある程度アテナのような娘に似合う服を考えるのは得意なので」
「……中々強かね。でも確かに、これはいいものだわ。後でお話を聞かせてもらっても？　細かいところまでよく作り込んであるから、試作してみたいわ」
「ご安心を。試作品の方も持参しております」
「本当に準備が良いわね。あからさまなご機嫌とりだけど、悪い気

はしないわ」
「ありがとうございます」
むしろ、こういうのはあからさまなくらいが丁度いい。よし、次だ。
「ふむ、妻の次は私かな？」
「ええまあ。天音さんはカードデザイナーとのことでしたので、このようなモノを」
そう言って俺が取りだしたのは何枚かのカード。希冴姫たち三銃士とアルカナ。そして『アテナ』の絵違いカードだ。
「これは……プロキシか？　いやこれは……」
「既存カードの絵違いです。絵のデザインは僭越ながら俺が」
希冴姫たちに手伝って貰い、絵のモデルになって貰ったことは内緒だ。それでも、これをアテナに誘われてから二日で描きあげるのはいくら俺でも至難だったが。
「素晴らしい構図だ。なるほど。随分と優秀なようだな」
「あくまで、学生の趣味程度ですが」
「謙遜することはない。プロでもここまでは描けまい。正直今すぐにでもＩ&ａｍｐ;Ｉ社にスカウトしたいくらいだ」
「あらあなた。それは私の方も同じよ。素晴らしいセンスだわ」
「ありがとうございます」
よし。まず第一陣は乗り切った！　演劇部に於いて、衣装のデザイン・作成や大道具小道具の細かな模様まで、一手に引き受けた経験がここで生きた。
「……無駄スキルとはいえ、侮れないな」
正直、内心バクバクだが。
「だが御堂君」
「はい」
「例え君が優秀な能力を持っていたところで、娘に近寄ることが許されるとは――思っていないね？」
「もちろん。ただ、役に立たない無能な小僧が調子に乗るな、と思

われたくなかっただけの唯のプライドですから」
ビビったが。今のはかなりビビったが。なんだこのプレッシャー。
「まあ、どうも話によると言い寄ったのはアテナの方らしいが」
「ええまあ、あれは、かなり衝撃的でしたよ」
出会い頭だったからな。告白は。
「けど、あのアテナがねぇ……小学校でもモテていたみたいだけど、悉くバッサリやってたみたいなのに」
小学校……何故だろう。アテナがランドセル背負って集団登校していた光景が目に浮かばない。
「モテる、ということならアカデミアでも変わらないですよ？　俺と仲が良い所為か、俺の住んでいる寮に顔を出してくれることも多いんですが、俺の寮では女神扱いです。あれは既に信仰の域に達してますよ」
俺の報告に、流石に夫妻はぎょっとしていた。ま、どうせこの辺りアテナは伝えてなかった（というか気付いていなかった）だろうと思ったけど。
「……そんなに？」
「ほら、砂漠で干からびかけている人間に、コップ一杯の水を渡したら神様のように崇め奉られるでしょう？　女日照りの奴らにとっちゃ、わけ隔てなく優しいアテナは唯一のオアシスなんでしょうね」
「なるほど。確かに、アテナは優しい娘だからな」
徐々に夫妻のオーラが薄れて行く。俺の口調も、気付かれない程度の速度でフランクなモノにしていく。
「学業の方はどうかね？　アテナは頭のいい娘だが、流石に高等部の勉強ともなると、な」
「あー、確かに少し苦労はしているみたいです。とはいえ、平均くらいはいつも必ず取りますし、実技試験の方はまったく文句なしでトップランカーですよ」
何しろ半年くらいの間無敗だったくらいだしな。
「そうか、安心したよ」

「お待たせしました～」
と、そこでアテナがコーヒーを入れて戻ってきた。
「セツ、お父さんたちとのお話終わりましたか？」
「ああ、大体な。ん……ブルーアイズマウンテンか？」
このネーミングに、社長さんの圧力が感じられる。別に普通のブルーマウンテンなんだがな。
「はい。よくわかりましたね」
「まあなんとなく香りでな。……多少蒸らし時間が長かったな。ちょっと苦味が強い」
「あぅ……やっぱりセツの舌は誤魔化せません。どうしても上手くいきませんね……」
「前に比べれば格段に良くはなってるぞ？　以前は蒸らしもせずに超薄っぺらいコーヒー出されて愕然とした記憶がある」
「うっ……それはその、知らなかったもので……」
「ま、最初はそんなもんだよ。意外と不器用なアテナにしちゃ、最近は結構上手くなって……」
と、そこで気がついた。すっかり素でアテナと会話していることに。
「セツ？　どうしましたか？」
「いや、その……」
恐る恐る、夫妻の方を見る。
「うふふ」
「え」
「まったく。随分と化けたもんだな。御堂君」
しかし、夫妻の反応は予想していたものとは違い、穏やかなものだった。
「なるほど。今のが君の素か。先ほどのも演技とは到底思えない程自然なものだったが……」
「今程生き生きとはしてなかったわね。アテナも」
「え？　はい」

アテナはあまりよくわかってないらしい。
「ふぅ、まったく……所詮小細工は小細工か」
アテナと話始めただけであっさり役者の顔が剥がれてしまった。
ま、結果的には良かったっぽいけど。
「ところで、先ほどの態度が演技ということはわかったが、このカードやデザインは？」
「あ、それはホントに自分でやりました。特技ですんで」
「やれやれ。特技で済まされるレベルじゃないぞこれは……社のデザイナーが見たら腰を抜かすぞ」
「……それは言い過ぎだと」
「いや、十分食っていけるレベルだぞ。現役デザイナーの私が言うんだから間違いない」
「はは……」
これはあれか？　遠回しに勧誘されているのか？
「ところでこの服の試作品は？　持ってきているのよね？」
「ああ、これです。アテナはパッと見清純系なので、こういうのが良いかと」
「……セツ、なにか余計な一言がついてませんでしたか？」
「そうね。この娘ってば誰の影響だか耳年増に育っちゃって……」
「お、お母さん！」
いえお母様。耳年増以前にそもそもアテナはかなりアグレッシブです。とは流石に言えず、俺は曖昧に笑った。
――押し倒された、なんて言えないよなぁ……。
「あ、そういえば……」
「どうしました？　セツ」
「いや、何か一人足りないなぁ、と……」
そこまで言ったところで、リビングの外から妙に慌ただしい足音が聞こえてきた。
「あら、もしかして……」
「ア～～テ～～ナ～～！！」

ドバンッ！　とリビングのドアを蹴破らん勢いで突撃してきたのは、寝癖で妙にばさばさした長髪を軽く後ろで結んだ、中々のイケメンだった。

「あ、お兄ちゃんです」

その一言で、俺はそういえば居たなぁ、とアテナの兄、アポロ氏のことを思い出したのだった。

特別編「アテナんち　前編」（後書き）

というわけで、御両親の陥落は大体終わったので次回は兄を陥落させればアテナとの未来はほぼ障害ゼロです。後二年半の辛抱です。

というか、ここまでメインヒロインの家族構成謎にして引っ張った作品これくらいじゃないか……？　しかも、大した意味もなく。突然お兄ちゃん出てきましたし。うん。なんで？　作者が混乱しています。

それと宣伝。また懲りずにオリジナルファンタジー投稿したんで、よろしければ読んでみてください。

それでは、悠でした！

特別編「アテナんち　後編」（前書き）

というわけで、アテナ短編の後編をお送りいたします。……何故か、ギャグになっちゃうんだよなぁ……シリアスラブかギャグラブコメしか書けない……。

と、とりあえずどうぞ！

特別編「アテナんち　後編」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「アテナんち　後編」

「ア～～テ～～ナ～～！！」
「あ、お兄ちゃんです」
アテナの気の抜けたような台詞と共に飛び込んできた灰色っぽい長髪を軽く結んだ男は、アテナを見て一瞬破顔し、次いで俺を見て般若の表情を浮かべた。
「アテナ！　久しぶりだ！　良く帰ってきた！」
「はい。お兄ちゃんも相変わらずそうですね」
「うむ！　僕は何時でも元気だとも！」
「あらアポロ。帰って来ていたのね」
「なんだ、それならそれでもっと早く顔を出さんか」
「出したよ！　っていうか帰ってきたの昨日だし！　一緒に夕飯食べたじゃないか！？」
「む？　そうだったか？　どうにもお前が居た記憶が……」
「また僕のこと忘れてたんだろう！？　道理でアテナが帰って来ているのに僕に声がかからなかったわけだよ！」
「良く気が付きましたね。お兄ちゃん」
「ちょっとコンビニでも行こうかと思って玄関に行ったらアテナの靴があったからね。……同時に、見慣れない男物の靴も置いてあったけど」

ギンッ！　と俺に鋭い目を向けてくるアポロさん。甘い。普通の殺気ならさだめで受け慣れている。俺は軽く受け流した。
「っていうか、朝食だって一緒に食べたし、その時にアテナが帰ってきたら教えてくれって言っておいた筈だろ！？」
「そうだったかな……？」
「お父さん、歳ですか？」
「がふぅっ！？」
アテナ、相変わらずツッコミの威力が致死クラスだな。そして今の一連の流れで大体お兄さんの人物像は掴めた。ズバリ、影が薄くて受難体質。
「しかも！」
ビシィ！　とアポロさんは俺を指差す。
「アテナに付いたヘンな虫まで普通に歓迎してるし！」
凄い。夫妻ですらそこまで直截的な表現はしなかったのに。
「ヘンな虫とはなんですか！　セツは……」
「あーアテナ。落ち着け。多分こじれるだけだから」
まあ、アテナの口撃力なら一撃のもとに再起不能なまで粉砕してくれそうな気はするが、それは余りにも哀れ過ぎる。
「アテナだとぅ！？　キサマ誰の許可を得てアテナを呼び捨てに！」
アテナの許可だよ。と言ったら身も蓋もないのでやめておく。
「私がそう呼んで欲しいって言ったんですけど……」
だからアテナ。俺の気遣いをトコトン無に帰すな。
「ハッ！？　しかもそのコーヒーは、アテナが淹れたのか！？」
「はい。淹れ方はアカデミアで、セツに教えて貰いました」
アテナ。何故そうまでして波風を立たせる方向に持って行くんだ。どうせ天然だろうが。
「く……コーヒーの入れ方を知っているくらいでいい気になるなよ……どうやって父さんと母さんを籠絡したかは知らないが、僕はそう簡単には……」
うん。凄く典型的なシスコン兄さんだなこの人。

「セツもシスコンですけどね」
「失礼な。俺はアポロさんとは別タイプのシスコンだ」
「シスコンは認めるんですね」
「とりあえず、さだめに彼氏が出来たりなんかした日にゃあ……」
「セツ以外の彼氏は出来ない気がしますけど。いえ、出来ないですね」
言い直してまで断言するな。良いじゃないかＩＦなんだから。
「とりあえず俺の語彙の許す限りの罵詈雑言を吐いた後、無駄スキルの限りを尽くして地獄ツアーに案内し、全国の晒し者にした挙句に祝福してやる勢いだ」
「今の台詞の何処に祝福する余地がありましたか。というかこれ以上ないくらいにシスコンですよ」
「ほぅ、その辺りは気が合うな」
「気が合っちゃうんですか！？」
「恐縮です」
「セツ、気付いてください！　流れ的に、地獄ツアーに案内されるのはセツですよ！」
おっと、つい。
「というかだな。晒し者といえばお前あれだろ！　以前アカデミアの入学式で妹と銀髪美女の二股かけてた鬼畜界の英雄だろ！」
「忘れた頃に蘇るあの悪夢！」
畜生、さだめとルインめ、しっかり既成事実の偽装建築に成功してやがる！
「というか、アカデミアのラブコメ担当といい、俺の通り名はホントロクなもんねえな！」
「概ね事実だからじゃ……」
「せめて鬼畜界の英雄の称号は返上させていただきたい！」
いやホントマジで。
「あ、でも他にもありますよ通り名。『御堂切、困った時は、無駄スキル』とか」

「それは一般的に川柳っていうんだよ！　っていうか、やっぱりロクな内容じゃないし！」
「これは、到底否定できない完全無欠の事実だと思いますけど……」
「くっ……まさか料理が出来る上、ボケツッコミまで完璧にこなすとは……御堂切、恐ろしい奴！」
「ヘンに評価上がった！？」
さ、流石はアテナの兄妹……色々と感性が外れてやがる……。
「アテナ！　何か奴の弱点を知らないのか！？　なんかこう、僕が勝負して奴をコテンパンにとっちめてやれるようなやつ！」
「お兄ちゃん、その発想滅茶苦茶カッコ悪いです」
「実は俺、早口言葉が苦手で……」
「はっはっはー！　口を滑らせたな御堂切！　ならば早口言葉で勝負だ！　ガガギゴギガガガギゴゴギギャギャガッ！？」
あ、舌噛んだ。
「ガガギゴギガガガギゴゴギガガガギゴゴギガガガギゴゴギガガガギゴゴギガガガギゴゴギガガガギゴ」
はい勝利。馬鹿め、口を滑らすほど滑舌がいいなら、早口言葉も楽勝だと何故わからんのか……。
「セツ、それは違うと思います……」
「まあ、饅頭怖いの応用だな」
「ちょっと大人げないです」
「まさかモロに引っかかるとは……」
流石アテナの兄妹。何処か残念なイケメンさんだった。
「セツ、何か今、凄く引っかかる物言いをされた気がします」
「気のせいじゃないか？」
残念なのは事実だしな。
「ぐぐぐ……」
あ、復活してきた。
「く……まさか貴様の苦手分野でも負けてしまうとは……」
「おいアテナ。お前の兄貴、思いっきり信じてるぞ」

「お兄ちゃん、思い込み激しいので……」
「さすが兄妹」
「どういう意味ですか！」
「ええい妹とイチャつくなぁ！」
「え、今のイチャついてる内に入るの！？」
極々普通のやり取りだったと思うが……。
「息ぴったりだったものねぇ」
さだめやルインとのやり取りも大体こんな感じなんだが……。
「さだめさんとのやり取りは、少しレベルが違います。割って入る余地がなくて……ちょっと嫉妬です」
「いや、あんな頭悪い会話に嫉妬されても困るんだが……」
九割下ネタだし。
「くっ！　こうなったらデュエルで勝負だ！」
「そう来たか」
ある意味必然の流れだが。
「うぇ……お兄ちゃんのデュエルですか……」
何故か、アテナが凄く嫌そうな顔をしている。
「なんだ？　そんなにおぞましいデッキを使うのか？」
「いえそうじゃないんですけど……まあ、デュエルしてみればわかります。ホント、セツみたいなタイプは凄く嫌がるデュエルだと思いますけど」
「俺が嫌がる……？」
俺の苦手とするデッキ？　いや、どちらかというと俺が嫌いなデッキ……しかし、俺はさだめの影響で大半のデッキは受け入れられるつもりだが……。
「さあ、さっさとデュエルディスクを構えろ！」
「あーはいはい」
デュエリスト足るもの、いつでもどこでもデュエルディスクは手放さない。実はアカデミアの外に許可なく持ちだすのはダメなんだが、まあそこら辺はなんとでもなる。

「「デュエル！！」」
そしてデュエルが始まった。
「僕のターン、ドロー！」
うわ、先攻奪われた。
「はっはっは！　いきなり終わりにしてやる！」
「なに！？」
まさか、ワンキルデッキか！？
「あーやっぱりお兄ちゃん、デッキ変えてないんですね……」
外野からアテナのうんざりしたような声が聞こえてくる。なんだ、一体何が来る……？
「僕はモンスターを一枚セットし、マジックカード『太陽の書』を発動する！」
「リバースモンスターか！？」
だが、そうだとしても一体何を……？
「さあ、見るがいい害虫！　これが僕のフェイバリットだ！『ダイス・ポット』！」
「……は？」
おい……ちょっと待て。視界の隅では、アテナがあちゃーと頭を抱えている。割とレアな光景だったりするが、とりあえず今はスルー。
「さあ、始めようか！　運命のダイスロールを！」
「ちょ……おい」
「ん？　どうした御堂切！　余りの恐ろしさに怖気づいたか！？」
「先攻一ターン目に『ダイス・ポット』とかテメエタクティクス舐めてんのかぁぁ！？」
戦術も戦略もない。ただ純粋に運だけが勝敗を決する。ライフ４０００なら、特に。
「だから言ったんです。セツが大嫌いなタイプですって」
なるほど。大半のデッキを許容できる俺でもコイツは許し難い。
別にバーン自体はいいが、まったくただの運頼みなこの戯けたギャ

ンブルだけは許容できん！
「はっはっは！　勝てば官軍！　さあ、ダイスロールだ！」
ソリッドビジョンの上でダイスが転がる。出た目は……5。
「……ふ。運が良かったな。このターンではまだ生き残れるらし……」
「ほらダイスロール出た目は6だつまり俺の勝ちだよザマァみやがれこんちくしょうがぁぁぁ！！」
ピシャアアアアアアアアアアン！！
「ぎゃあああああああああっ！？」
アポロＬＰ０
ふぅ……。
「これは、タクティクスを馬鹿にした、デュエルの神からの裁きだ！」
「ば、馬鹿なぁ……この僕が、この『ダイス・ポット』に於いて負けるとは……！」
「はいアテナ。トドメをどうぞ」
「お兄ちゃん、ものすっごくカッコ悪いです……」
「ぐふぅぁっ！？」
天音アポロ、撃沈。
「しかし……虚しい」
『ダイス・ポット』だって、ちゃんとした戦略の下に使われるなら別に構わないが、ただの運頼みは正直どうしても、な。
「く……こうなったら手当たり次第だ！」
何処か自棄っぽいアポロさんが部屋から様々な道具を取り出してくる。
「チェス！」
五分後。
「チェックメイト」
「早くも！？」
舐めるな。さだめ程じゃないが、俺はこういうのは得意中の得意

だ。
「将棋！」
五分後。
「王手。詰んだ」
「ぐはっ！？」
チェスで惨敗したんだから将棋だって大差ないとは思わないのか。
いやまあ、将棋とチェスじゃ意外と違うけどさ。
「オセロ！」
五分後。
「じゃ、これで俺の勝ちっと」
「盤面が黒一色に！？」
俺もびっくりだよ。弱過ぎる。
「囲碁！」
十分後。
「はいこれで終わり」
「畜生！」
作者がルール知らないので詳細は省略。
「麻雀！」
五分後。
「あ、それロン。四暗刻大三元」
「ダブル役満！？」
ぶち抜いた。
「ええい！　君は完璧超人か！？　こうなったらなりふり構っちゃいられない！　格闘ゲーム！」
「別に完璧じゃないっつのに……というか、ほぼ自滅の上どれもこれも残念な実力だったし」
「うるさい！　いいからさっさとキャラを選べ！」

「……あの、なんか仲良くなってません？」
「はっはっは！　すっかり親友だなあれじゃ」
「男の子ねぇ……」
「だっ！？　なんだその動き！？　システム上不可能だろ！」
「ふはははははーっ！　この僕の専攻はプログラミングだ！」
「市販のゲームのプログラム書き換えるなよ！　ええいクソ！」
「ぬあっ！？　く、まだまだぁ！」
「お兄ちゃん……」
「大人げないわねぇ……それでいて負けてるのもあの子らしいけど」
「確かに……」

「ぎゃあああああ！？」
「はっ！　汚い手を使うからこうなる！」
「ぐ……ならばトランプで勝負だ！」
「なぁ、二人でトランプは虚しいだろ」
スピードとかポーカーならいいかもしれんが。
「なら父さんたちにも入って貰えばいい！」
おいこら味方を増やすな。
「それじゃ俺が人数的に不利だろ。なら俺はアテナを味方につけるが文句ないな？」
「なにぃ！？　何故アテナがお前の側なんだ！？」
「他に俺の味方に付く人がいないからだよ！　アテナ！」
「あ、はい。私はセツの味方です」
「アテナ何故！？　お兄ちゃんの味方はしてくれないのか！？」
いやだって、そもそも俺を連れてきたのはアテナだし。
「く、ダメだ。僕にはアテナを敵に回して戦うことは出来ない！」
「なら二人で出来るポーカーにでもするか？　あ、ちなみに俺の主力デッキは【切り札の騎士】だが」

「勝てる気がしない！？」
　実際トランプはめっちゃ強くなったしな。希冴姫たちの加護なのかは不明だが。
「アテナ、セツ君。今日は泊まって行くんだろう？」
「はい。そのつもりですよ」
「ええまあ。御迷惑でなければ」
「迷惑ではない。が、部屋に見張りくらいは許してくれるな？」
「暗殺者でなければ」
「その案は流石に却下したな」
「あったのかよ！」
「え？　それじゃあもしかして、夜セツの部屋に行っちゃダメなんですか？」
「当たり前だろアテナ！　何考えているんだ！　男は野獣だぞ！？」
「セツに限ってそれはないですよ。というか、むしろ野獣だったならこんな苦労は……」
　どちらかと言えば、襲われてるのは常に俺だしな。
「……ふむ。キミはあれか？　ふの……」
「言わせねえよ！？　っていうか違う！　フルメタルの理性の賜物だ！」
　それで尚耐えるのが難しいレベルだが。二回は押し倒されたし。
言わないけど。
「アテナ。ダメよ諦めたら。よく言うでしょ？　押してダメなら押し倒せって」
「あんたの影響か！」
「それは既に実行済みなんですけど……」
「アテナも余計なこと言うな！？」
　折角黙っていたのに！
「あら、それでも耐えたの？　凄い自制心ねぇ……」
「あんたそれでいいのか！？」
　さっきまでの態度は何処に行った！？

「それで？　彼とは結局、何処まで行ったの？」
「余計な詮索するなよ！」
「えっと、その……キス、まで……」
「アテナさんちょっと黙ってお願い！」
「セツ君。ちょっとお話しようか……」
「父さん、僕も手伝うぞ」
「全ッ力でお断りします！　お話なら今ここで！」
「キス？　何回？」
「えっと、二回、です」
「あら、意外と少ない。もっと積極的に行かなきゃダメじゃない」
「そしてそっちはもう黙れ！」
　これ以上積極的になられたら流石に自制する自信がない。
「ほら、あの反応。きっと後一息で陥落するわ。お母さんにはわかる！」
「そ、そうなんですか？　よ、よし……！」
「気合入れるな！　血の雨が降るぞ！？」
　物理的にな！
　結局、事前の準備はあまり意味を為さず、しかし何やら気に入られたらしい俺は、その後アテナ家での二泊三日も無事（と言っていいのかわからんが）乗り切り、心身ともに疲れ果てながらも（いつものことだが）、アカデミアに帰りつくことが出来たのだった。
「……またその内、か。なーんか、嫌な予感するなぁ……」
　帰り際にかけられた言葉を思い出し、げんなりとする。
「それにしても、良かったです。お兄ちゃんたちがセツを気に入ってくれて」
「あれは……気に入られたと言うのか……？」
　思い切りアポロさんには目の仇にされていたが。
「そんなことないですよ。お兄ちゃん、凄く楽しそうでした」
「……そうか。ま、確かにあんな人たちが家族なら、楽しそうではあるな」

自分の家族がアレだから、尚更な。
「はぅえっ！？」
しかし、アテナは何を思ったか顔を真っ赤にして俯いてしまった。
「？　どうしたアテナ」
「ぅ、その……せ、セツは……」
「なんだ？」
「セツは、私の家族と、家族になりたい、ですか？」
「？　ああ、楽しそうな家族だしな」
「……」
深く考えずにそう答えると、アテナは益々顔を赤くして縮こまる。
「……ん？」
ふと、気付いた。
『私の家族と、家族になりたい、ですか？』
『ああ、楽しそうな家族だしな』
まて……まったく深く考えずに口走ったが……これは、見方によっちゃ……。
「ま、待てアテナ。勘違いするなよ？　あれは単なる感想というか……決して深い意味は……」
慌てて否定しようとするが、キッと真っ赤になったアテナに見上げられ、俺は言葉に詰まった。
「セツは、いつでも思わせぶり過ぎます」
「う……いやその、すまん」
「だ、だから……そんな軽薄な口は……こうして、塞いじゃいますっ！」
「んむっ！？」
「ん……」
飛びつかれたアテナの唇が、俺のそれを塞ぐ。三回目。相変わらず意識がスパークするような感覚。
「っ……あ、アテナ」
「か、覚悟してくださいっ。わ、私この三日間で、お母さんに色々

教わりましたから！」
「な、なに？」
待て、あの母親の教えはまさか……。
「お、押してダメなら……」
「ま、待てアテナ！」
「押し倒すっ！」
がばっ！　ともう心配になるくらい顔を赤くしたアテナが俺にとびかかって……
「させるかぁぁぁぁぁぁっ！！」
「きゃふっ！？」
来る直前に、見慣れた小さな影がアテナを思いっきり蹴り飛ばした。
ザバーン！
港でのやり取りだったので、アテナは思いっきり蹴り飛ばされた挙句、海に転落した。
「はぁ、はぁ、はぁ……あ、危なかった。本当に、危なかった……！」
「さ、さだめ？」
満身創痍という言葉が相応しいさだめは、すっかりボロボロだった。
「くっ！　ホントに、油断も隙もあったもんじゃない……まさかシャルナやゴーズ・カイエンコンビまで持ち出してさだめを妨害に走るとは……ルインの援護がなければ間に合わないところだった……！」
まさか、三日三晩戦い続けてたのか。
「ぷはっ！　さ、さだめさん酷いです！　なにも蹴っとばすことないじゃないですか！？」
「問答無用で消さなかったことを感謝して欲しいくらいだよ……！
まさかさだめ以外に、こんな港のど真ん中で凶行に及ぼうとする奴がいるとは……！」

それについては同感。というか、アテナは周りが見えなくなってたっぽい。
「もう許さない！　アテナ！」
「私だって！　今日こそ、決着をつけます！」
「望むところ！」
海からびしょびしょになって這い上がってきたアテナと、ボロボロで満身創痍のさだめがぶつかり合う。見るに堪えないドッグファイトが始まったところで俺は……。
「……帰るか」
全てを放り投げてレッド寮に帰るのだった。

「……お帰り。そしていらっしゃい」
「何故ここに居る。ルイン」
「貴方の行動は予測済み」
言葉通り先読みされていたルインと、察知して戻ってきた二人との間に再び戦いが起こるのは、最早語るまでもないことだろう。

特別編「アテナんち　後編」（後書き）

こんにちは。

うん。出さないと言ってあったのに、結局最後はさだめオチ。もはや呪い。いや、むしろルインオチか？　まあ、アテナが暴走したのでさだめを出さなきゃ危なかったのが本音ですが。

そしてやっと使い手が！　ダイス・ポット！　我が魂のフェイバリット！　ちなみにアポロのやった先攻一ターン目からのダイス・ポットは僕の常套手段と化しております。なんて危険。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド５Ｄ'ｓＭＩ？」（前書き）

やっとこさ完成しました第二回コラボ企画特別編一本目。
というか、数えて見たら結局コラボするの五人になっていましたよ。一人増やして四人になっていたのは知ってましたが、数え間違っていました。やると言ったからにはやりますけどね！
とりあえず、一人目はグッチーさんの　遊戯王５Ｄ'ｓ～ｍａｇｉｃ　ｉｌｌｕｓｉｏｎ～から主人公リョウＶＳセツです。あと、時系列が完全に滅茶苦茶で、普通に希冴姫が出て来たりしますが、ご了承ください。そうでもないと現在の本編の状況ではコラボ出来なかったので。
どうぞ。

特別編「？アルカナクロスワールド５Ｄ’ｓＭＩ？」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「？アルカナクロスワールド５Ｄ’ｓＭＩ？」

「やあ、セツ。元気でいるかい？」

ある休日、俺が珍しく一人で（これがまたホントに珍しい）デッキ調整をしていると、最近はもう見慣れた金の長髪。

「またか？」

俺の言うまた、とは要するに、最早お馴染となった時空の歪のことである。

「また、だ。それも、今回は少々厄介なことになっているようでね」

希望はそう言うと、指を三本立てて見せる。

「ｔｈｒｅｅ、ｔｗｏ、ｏｎｅ、ｚｅｒｏ！」

と、希望が無駄に素晴らしい発音でカウントダウンすると同時、俺の目の前に歪が現れた。

「……で、何が厄介なんだ？」

カウントと同時に歪が出現したことには突っ込まず（コイツに関しては突っ込む意味がない）、俺は先を促した。

「今までの歪は、精々パラレルワールドに飛ばすような空間系でしかなかったんだけどね。今回の歪は、加えて時間すらも超えた彼方に飛ばされる。これも終焉の力が強まっている証拠だろうけど……」

「なるほどな。要するに、いつも以上に万全の態勢で行けってことだろ？」

「まあ、そういうことだね。皆の中でも、突出した柔軟性と適応力を持っているセツだから、それほど心配はしてないけど」
「買い被りだ、とも言えないか。わかった。それじゃあ行ってくる。アテナたちに説明は任せるぞ」
「了解。武運を祈らせてもらうよ」
「ああ。忠告、ありがとな」
ひらひらと手を振る希望にそう答えて、俺は時空の歪に身体を滑り込ませるのだった。

「っと、着地成功」
もういい加減、歪を通るのにも慣れてしまった。尻もちをついたりすることもなく、しっかり着地する。
「さてと、ここは……」
学校……か？
「見た感じはデュエルアカデミアとそれほどの差はないが……ここはあの島じゃないな」
まず、周囲の風景からして違う。アカデミアの特徴的な火山がないし、何処となく都会っぽい。というか……。
「近未来、だな」
歪を通る前に、希望の言っていた言葉を思い出す。あいつは時間がどうこう言っていたから、これは恐らく、パラレルワールドの近未来に当たるのだろう。
「って、パラレルワールドで近未来もクソもない気がするが」
自分で言っていて苦笑する。
「あれ？　君は……」
「どうしたの？　リョウ……って」
「ん？　見たことない奴だな。転校生か？」
「そんな話は聞いてないけど……」

俺がそれからどうしようかと悩んでいると、アカデミアっぽい建物の方から男女四人組が歩いてきた。……どいつもこいつも、またどっかで見たことのある外見しているな。

「はじめまして、だな。俺は御堂切。お前たちの名前を聞いても良いか？」

「ああ。オレはリョウ。こっちがアリス」

「よろしくお願いします」

「俺は石井啓斗だ」

「私は武内由里です。御堂さん」

「セツでいい。みんなそう呼んでるからさ」

いつものように自己紹介とそう訂正を入れてから、俺は四人を眺めた。

「それで、セツはどうしてここに？　アカデミアの生徒なの？」

リョウと名乗った少年がそう尋ねてくる。

「なるほど。やっぱりここはアカデミアなのか……」

「やっぱりって……知らなかったんですか？」

アリスの疑問に頷く。

「ああ。なにしろこの世界に来たのは初めてだから」

「この世界……？」

怪訝そうな顔をする四人。代表してか、リョウが俺に質問してきた。

「もしかしてセツは、デュエルモンスターズの精霊かなにかだったり？」

「精霊？　俺が？　ははは、っ違う違う。確かに精霊のことはよく知っているが、俺は精霊じゃないよ」

その突拍子もない質問に、思わず笑ってしまう。さだめやアテナだったら返答に困る質問だっただろうが、俺は胸を張ってただの人間だと言える。……言えるんだよ何か文句あるか。

「って、そうか。この世界に、とか紛らわしいこと言ったのが悪かったのか」

「精霊世界から来た……ってわけでもなさそうだね」
「ああ。精霊界自体には、何度も行ったことがあるけどな。って、それは別に良い。それよりも、折角ここで会ったんだ。少しデュエルでもしてくれないか？」
もちろん、目的はデュエル自体なので、折角ここで会った云々は関係ないが。
「デュエル？　ええと、それは別に良いけど……」
「……素性も知れない奴に言われて、はいそうですかとデュエルできるか」
啓斗がそう気色ばむ。気持ちはわかる。
「ん～……一から事情を説明すると長くなるんだが、それでもいいか？」
「あの、そのデュエルはオレたちとしなくちゃいけないの？」
「そうだな。今までのルール的に考えると、リョウたちの内誰か。流れからすると、リョウが妥当なところだな」
「オレが？」
多分、だけどな。どうせなら希望の奴に相手も聞いてくれれば良かった。
「それで、その事情って？」
リョウを指名したからなのかどうかはわからないが、アリスが先ほどより表情を険しくして俺を睨む。
「そう睨むな。えーっとだな。リョウたちは、平行世界って信じるか？」
「……はぁ？」

「……というわけで、俺はデュエルして歪を直し、元の世界に帰らなくちゃいけないわけだ。正直突拍子もない話だし、信じられなくても無理はないが……」

「いや、信じるよ。確かに突拍子もないけど、その古い型のデュエルディスクや、過去のアカデミアの制服。それに、妙に現実味のある話ぶりだったから」
「そうか。それは助かる。それで、どうだ？　デュエル、しようぜ？」
「ああ。オレで良ければ。オレも、過去のデュエリストに興味があるからね」
「過去のカードプールだからって舐めてかかると、痛い目見るからな。気をつけろよ？」
　お互いに挑発的な笑みを浮かべて、いざデュエルを……って、
「ちょっと待った！」
「え！？　な、なんだ？」
「そのデュエルディスク、自動でデッキをシャッフルするのか！？」
「まあ……あ、そうか。そのデュエルディスク旧式だから……」
　くっ……これがカルチャーギャップか！……後で俺のも改造しておこう。出来ないこともなさそうだし。
「すまん、ちょっと興味あるから、貸してくれないか？」
「おう、俺のを使えば良い。壊すなよ？」
「サンキュ。じゃあ改めて……」
「「デュエル！！」」
「先攻は譲る。付き合って貰った礼だ」
「サンキュ。じゃあ、オレのターン、ドロー！」
　さてと……どんなデッキで来るのやら。
「オレは『マジシャンズ・ヴァルキリア』を攻撃表示で召喚！　ターンエンドだ！」
　ＡＴＫ１６００
「マジシャンデッキか……俺のターン、ドロー！」
　ふむ。マジシャン使いは、何だかんだで周りに居なかったからな……ブラマジガールとやった時くらいか。
「俺は手札から『切り札の騎士―クィーン』を召喚。攻撃表示だ！」

ＡＴＫ１５００
「切り札の騎士？　って言うかそれ、『クィーンズ・ナイト』じゃあ……？」
「俺のパートナーだ。希冴姫」
『セツ様のパートナーを務めさせていただいております。希冴姫ですわ。他の騎士共々、よろしくお願いしますわね』
「そのカード、精霊か！」
「ああ。お前も精霊持っているんだろう？　とりあえず、先に紹介させてもらったよ」
「……でも、攻撃力１５００じゃ『マジシャンズ・ヴァルキリア』には勝てない！」
「なら強化するだけだ！　俺は手札から装備魔法『アルカナソードダイヤ』を希冴姫に装備！」
『さあ、行きますわ』
ＡＴＫ１５００↓１８００
「ヴァルキリアの攻撃力を上回ったか！？」
「バトル！　希冴姫で『マジシャンズ・ヴァルキリア』を攻撃！『ジェム・ハーツ』！」
「ぐっ……！」
リョウＬＰ３８００
「更にこの瞬間、装備魔法『アルカナソード　ダイヤ』の効果発動！　装備モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊し、墓地に送った時、デッキからカードを一枚ドローする！　俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」
「やるな……オレのターン、ドロー！　オレは手札から『特攻のマジシャン』を攻撃表示で特殊召喚！　このカードは、相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、特殊召喚することができる！　更に、特殊召喚時に、相手フィールドの魔法・トラップカードを一枚破壊する！」
「なにっ！？」

「出た！　リョウの黄金パターン！」
「オレは右側のカードを破壊！」
　破壊されたのは『魔宮の賄賂』か。正直痛いな……。
「良い読みしてるよ」
「お褒めに預かり光栄だよ。それじゃあオレの精霊も見せてあげるよ！『特攻のマジシャン』をリリースして『ブラック・マジシャン・ガール』をアドバンス召喚！」
　ＡＴＫ２０００
「っ！……ソイツか」
　さっきの思考がそのまま的中しているとは。
『こんにちは！　マナです。よろしくね！』
「更に、手札から魔法カード『賢者の宝石』を発動する！　コイツは自分フィールド上にマナがいる時、師匠であるマハード、つまり『ブラック・マジシャン』を特殊召喚することができる！」
「それはさせない！　トラップ発動！」
「なにっ！？」
　最初に『マジシャンズ・ヴァルキリア』。この時点で、マジシャンデッキなことは確信していたからな……保険を張っておいて良かったよ。
「カウンタートラップ『マジック・ジャマー』！　手札のカードを一枚捨てて、魔法カードの発動と効果を無効にし、破壊する！　俺は手札から『冥幼竜ヴァーミリオン』を捨てて『賢者の宝石』の効果を無効化する！」
『きゅー！！』
「くっ……もう一つもカウンタートラップ……絵札の三銃士デッキかと思っていたけど……」
「悪いな。俺のデッキはパーミッションデッキ。今捨てたヴァーミリオン、ミリーにも相応の効果がある」
　とりあえず、これで『ブラック・マジシャン』との連続攻撃を受ける危険は消えた。

「さて……『ブラック・マジシャン』の召喚は殆ど魔法頼りの特殊召喚の筈……どうする？」
「……確かにキツイけど、マナの攻撃力はクィーンより上だ！　バトル！　マナで『切り札の騎士―クィーン』を攻撃！『ブラック・バーニング』！」
『ファイヤー！！』
『くっ……申し訳ありませんセツ様。一度退きますわ！』
「っ！　すまん希冴姫。だが、この瞬間『アルカナソード　ダイヤ』の効果発動！　装備モンスターが戦闘によって破壊された時、デッキからカードを一枚ドローする！」
セツＬＰ３８００
「オレはこれでターンエンドだ！」
「俺のターン、ドロー！　スタンバイフェイズに、墓地の『冥幼竜ヴァーミリオン』の効果発動！　カウンタートラップのコストとして墓地に送られたこのカードが、自分スタンバイフェイズ時に墓地にある場合、手札に戻す！」
『かうッ！』
「な、なにあの子……か、可愛い」
「名前的に、ヴァンダルギオンの幼竜なんだろうが……」
「可愛いね～」
『きゅ？』
……相変わらず、可愛さには定評があるな。ミリー。
「俺は『切り札の騎士―テンス』を守備表示で召喚。カードを二枚セット。ターンエンドだ」
「オレのターン、ドロー！」
さて……どう来る？
「オレは手札から装備魔法『魔術の呪文書』をマナに装備！　攻撃力が７００ポイントアップだ！」
ＡＴＫ２７００
「通す」

「よし！　なら更に『魔導騎士　ディフェンダー』を召喚！　効果により、ディフェンダーには魔力カウンターが一つ乗る。バトルだ！」

ＡＴＫ１６００

「マナで『切り札の騎士―テンス』を攻撃！『ブラック・バーニング』！」

『えぇーい！』

『ぐぅ……！』

テンスはその大きな身体と剣で俺を守り、倒れる。しかし、その犠牲を無駄にはしない！

「俺はこの瞬間トラップカード『アルカナソード　クローバー』の効果を発動する！　俺の切り札の騎士が破壊され、墓地に送られた時、別の騎士を墓地から復活させる！　戻れ！　希冴姫！」

『御意ですわ！』

「だけど攻撃力は……」

「クローバーは発動後、装備カードとなり、蘇生された希冴姫に装備される。攻撃力は７００ポイントアップだ」

ＡＴＫ１５００↓２２００

「くっ……オレはカードを二枚セット。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！　俺は魔法カード『壺の中の魔術書』を発動。お互いにデッキからカードを三枚ドローする」

「オレもカードを三枚ドロー！」

よし。これで揃ったな。

「俺は『切り札の騎士―キング』を召喚！　効果発動！　デッキから『切り札の騎士―ジャック』を特殊召喚！」

「っ！　その流れは……！」

「そういうことだ。手札から魔法カード『融合』を発動！　フィールドの三銃士は、それぞれ『クィーンズ・ナイト』『キングス・ナイト』『ジャックス・ナイト』として扱う効果を持っている！　来い！　天位の騎士『アルカナ　ナイトジョーカー』！」

ＡＴＫ３８００
「それがセツのエースモンスターか！」
「こ、攻撃力３８００……」
「流石に圧巻だな……」
「更に、俺は装備魔法『アルカナソード　スペード』を『アルカナナイトジョーカー』に装備する！」
「新たな装備魔法……攻撃力が変わらない？」
「ああ、だけどその代わり、装備モンスターの戦闘によって発生するダメージを倍にするけどな」
「そんなっ！？」
「それじゃ、もしディフェンダーに攻撃されたら……」
「それは、やらせない！　速攻魔法『サイクロン』！『アルカナソード　スペード』を破壊する！」
「それは、させないな。カウンター罠『アヌビスの裁き』！　手札を一枚捨てることで、俺の魔法・罠カードを破壊する魔法効果を無効にし、破壊。その後、相手のモンスター一体を破壊してその攻撃力分のダメージを与える！　俺は『ジャム・ウォリアー』を墓地に！『ジャム・ウォリアー』はカウンタートラップのコストとなった時デッキからカードを二枚ドローする！」
「なっ！？」
アルカナの剣を破壊しようと迫る竜巻は破壊される。
「まだだ！『魔導騎士　ディフェンダー』の効果発動！　魔力カウンターを取り除くことで、魔法使い族モンスターの破壊を無効にする！」
「やるな。だが、これまでだ！　バトル！『アルカナ　ナイトジョーカー』で『ブラック・マジシャン・ガール』を攻撃！『ロイヤルストレートスラッシュ』！」
「トラップカード『ガード・ブロック』！　戦闘ダメージを無効にする！」
「だが、ガールまで守ることは出来ない！」

『きゃあああああっ！？』
「マナっ！」
アルカナの剣は、マナの放つ炎を物ともせずにマナを切り裂いた。
「っマナに装備された『魔術の呪文書』の効果発動！　フィールドから墓地に送られた場合、ライフを１０００ポイント回復する！」
リョウＬＰ４８００
「俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ。さあ、どうするリョウ？」
「あはは、凄いな……ここまでデュエルがやり難い相手は初めてだ」
「パーミッション使いだからな。相手の戦略を妨害するのが得意技なんだ。悪いな」
「いいや、オレだってまだ負けてないよ。ドロー！」
さて……追い詰めたとはいえ、リョウの手札は五枚。逆転されるには十分な手札だな。
「オレは手札から装備魔法『早すぎた埋葬』を発動！　ライフを８００ポイント支払って墓地のマナを復活させる！」
リョウＬＰ４０００
『あいたたた……』
「大丈夫？　マナ」
『な、なんとかね～流石にキツかったけど』
「ごめん。もうちょっと頑張ってくれ。僕は手札からチューナーモンスター『マジシャンズ・シンクロン』を召喚！」
「チューナー……！　シンクロ召喚か！」
未来であるならば、それがあるのは至極当たり前。今まで使って来なかったから失念していた！
「オレはレベル６のマナに、レベル１『マジシャンズ・シンクロン』をチューニング！　黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。光差す希望と為れ！　シンクロ召喚！　舞え！『ＳＦ（スターフェザー）―ブラックマジシャンガール』！」
『行きまーす！』

ＡＴＫ２４００
「更に『マジシャンズ・シンクロン』は、魔法使い族とシンクロ召喚に成功した時、デュエル中一度だけフィールドに戻る！」
「……だが、攻撃力２４００ではアルカナに及ばない！」
「これで終わりじゃない！　マナの効果発動！　マナは一ターンに一度、自分の墓地のカード一枚をゲームから除外し、その発動条件を満たしていればその効果を使うことができる！　オレは墓地の『賢者の宝石』の効果を使う！」
「なにっ！？　だが『賢者の宝石』は……」
場に『ブラック・マジシャン・ガール』が存在しなければ使えないはず……。
「わかってるよ。けど『ＳＦ―ブラックマジシャンガール』は、カード名を『ブラック・マジシャン・ガール』として扱う！　よってデッキからマハードを特殊召喚！」
「くっ……！」
師弟が揃ってしまった。そしてリョウの場にはチューナー……これは間違いなく……。
「オレはレベル７のマハードに、レベル１『マジシャンズ・シンクロン』をチューニング！　黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！　シンクロ召喚！　舞い降りよ！『Ｓ（スター）Ｆ―（フェザー）ブラックマジシャン』！」
『おおおっ！』
ＡＴＫ２９００
光の輪を潜り抜けたマハードが、白き衣と白銀の翼を持って舞い降りる。
「やっぱりソイツも来たか……！」
マナがシンクロしたことから、まず間違いないだろうとは思っていたが……。
「手札から魔法カード『千本（サウザンド）ナイフ』！　マハードがいる時に、相手モンスターを一体破壊する！」

恐らく、あのマハードにも、マナと同じくカード名を『ブラック・マジシャン』とする効果があるんだろう。だが……。
「無駄だ！　その効果は対象を取る！　アルカナの効果発動！　俺は手札から『アルカナソード　ハート』を捨てて『千本ナイフ』の効果を無効にする！」
「まだまだぁ！　魔法カード『死のマジック・ボックス』！　オレのディフェンダーのコントロールをセツに移して、アルカナを破壊する！」
「くっ！？」
アルカナの効果は一ターンに一度しか発動できない。何より、今の俺には手札がミリーしかいない！
これは、マズイな。俺のフィールドのモンスターは攻撃表示のディフェンダーのみ。伏せカードは一枚あるが……。
「純白の魔術師が二人か……絶景だな」
そうもいっていられない状況ではあるが、思わずそう言ってしまうほど、美しい光景だった。
「行くぞ！　マナでディフェンダーを攻撃！『スター・イリュージョン・バーニング』！」
『行っけー！』
「ぐあぁっ！」
セツＬＰ３０００
「更にマハードでダイレクトアタック！『スター・イリュージョン・マジック』！」
「トラップカード『ガード・ブロック』！　戦闘ダメージを無効にしてカードを一枚ドローする！」
「オレはこれでターンエンドだ」
なんて奴だ……一ターンで完全にひっくり返された。だが……。
「ここで諦めるつもりは……ない！　俺のターン、ドロー！」
よし、これなら……！
「俺は手札からマジックカード『貪欲な壺』を発動する！　墓地の

切り札の騎士四体と、アルカナをデッキに戻して二枚ドロー！」
来た！
「……俺も大概だな。コイツは……ディスティニードローだ！」
俺はミリーも含めた四枚のカードを見る。
「俺は手札から速攻魔法『アルカナソード　ジョーカー』を発動！　ライフを半分と、墓地に存在するアルカナソード、ダイヤ、クローバー、スペード、ハートの全てをゲームから取り除き、自分フィールドに可能な限り切り札の騎士を特殊召喚できる！」
俺のフィールドに、希冴姫たち五人の騎士が揃う。
セツＬＰ１５００
「一気に五体の特殊召喚……！？」
「そして更に速攻魔法『絵札の結束』！　ライフを１０００ポイント支払うことで、騎士たち全員を融合！　見せてやる！　俺の本当の最強騎士を！　来い！『切り札の騎士帝―アルカナ　ロイヤルジョーカー』！」
ＡＴＫ４５００
「攻撃力４５００……！？　こんな奴が、一ターンで……！」
リョウは、アルカナの攻撃力に慄いているが、まだ目は死んでいない。これは、まだ手があるってことか！
「マナの効果を発動だ！　墓地のカードを除外してその効果を使う！　この効果は相手ターンでも発動することが出来る！　オレは墓地の『千本ナイフ』の効果を使用！」
「そうはいかないな。ロイヤルジョーカーの効果発動！　手札を一枚捨てて、このカードを対象とした魔法・罠・モンスター効果を無効にし、破壊する！　俺はミリーを捨てて効果を無効化！」
「まだだ！　マハードは、このカード以外のモンスターをリリースすることで場のカードを破壊する効果を無効にし、破壊する！」
なるほど。流石だ。だが……。
「甘い！　ロイヤルジョーカーの効果は、ルール上スペルスピード３として扱われる！　よってモンスター効果でロイヤルジョーカー

の効果にチェーンすることはできない！」
「なんだって!?」
　これが、進化したアルカナの力だ！
「よってマナの効果は無効！　ジョーカーの効果で、マナは破壊だ！」
『きゃあああああっ!?』
「マナ！」
「バトルだ！『切り札の騎士帝―アルカナ　ロイヤルジョーカー』でマハードを攻撃！」
「まだ、まだ終わらない……！　マハードが倒されても、オレのライフは……」
「いや、これで終わりだ。俺の最後の手札の効果を発動する。『オネスト』！」
「あ……」
　アルカナの背に、マハードたちと似た光の翼は現出する。
「これでトドメだ！『ファイブ・オブ・オネスティ』！」
「ぐあああああああああっ!?」
リョウＬＰ０
「……参ったよ。ラストのマナとマハードで、完全に決まったと思ったんだけど」
「ありゃ反則だろう。シンクロから即蘇生するチューナーってさ」
「あはは、それを言ったら、一度に五体も特殊召喚するあの魔法だって相当なものだと思うよ」
「ま、そりゃそうか」
　俺たちがそうして、全力をぶつけあったデュエリストとして交流を深めていると、外野で見ていた三人も近寄ってきた。
「よ。セツ、お前強いな。コイツこれでもフォーチュンカップって

いう、デュエルキングを決める大会で優勝してるんだぞ？」
「キング！？」
「やめてってば。オレはキングにはならないって言ってるだろ」
「啓斗君も私たちもそれはわかってるって。それくらい強いって言いたかっただけだよ」
「リョウ、大丈夫？」
「ああ、オレは大丈夫。サイコデュエルでも闇のデュエルでもないからね」
「で、でも凄く激しいデュエルだったから心配で……」
言葉通り、とても心配そうにリョウに寄り添うアリス。
「ふむ……啓斗、由里、ちょっといいか？」
「あ？　なんだ？」
「どうしたの？」
「……あの二人って付き合ってるのか？」
「ああ。まあな」
「あはは、やっぱりわかっちゃうよね」
ま、あそこまであからさまならな。
「ふぅ、世の中にはキチンと決着してるヤツもいるってのに、俺は駄目だな」
もちろん、事情があることはあるが、それだって決して言い訳にして良いわけじゃない。
「お……」
そうしている内に、俺の身体がいつものように透けて行く。
「せ、セツ？」
「……すまん、これでお別れらしい」
「元の世界に、帰るのか？」
「そういうことだ。ありがとなリョウ。それに皆。こんな荒唐無稽な話を信じて付き合ってくれてさ」
「いいよ。オレだって、あんな凄いデュエルが出来たんだから、こっちこそお礼を言いたいくらいだよ」

「だな。まあ欲を言えば、俺ともデュエルして欲しかったくらいか？」
「はは、それはまた、いつか来た時にな。尤も、そのいつかが来ない方がいいんだが」
この状態は決して良いものではない。この状態こそが、俺たちの世界が危機に瀕している証拠なのだから。
「それじゃ、またいつか会えたら、その時はよろしくな」
「ああ。元気で」
透けていく手で、最後に握手を交わして、俺はその世界から帰還したのだった。

「……で、これはどういう状況だ？」
「やだなぁお兄ちゃん。見ればわかるでしょ？」
「わからん。いや訂正だ。分かりたくもない」
俺が元の世界に戻って真っ先に目に飛び込んできたのは、半裸の妹ＩＮ俺のベッド。
「疲れて帰ってくるであろうお兄ちゃんのために……暖めておきました！」
「いらん世話だ！　畜生、直接的アプローチはむしろ久しぶりで戸惑ってしまった！」
「偶には初心に帰らないとね。お兄ちゃんの布団で致すのはいつものことだし」
「偶には綺麗に締めようという考えはないのかお前には！？　ああ布団濡れてるし！　これ布団干したら俺がこの年になってやっちまったとか思われるんだからな！？」
「大丈夫！　加えて血も少量垂らしておけば……」
「全然全くこれっぽっちも大丈夫じゃねえ！　むしろ誤解が最悪の方向にシフトするだけだろうが！」

「誤解じゃなくすれば……イイんじゃない？」
「帰れ！」
無理矢理服を着せてテントから追い出す。くそ、今回はトラップを解除してから行ったのが裏目に出たか！
「……で、どうすっかなぁコレ……」
結局、布団は人知れず焼却することで事なきを得た……と思ったが。

後日。
「せ、セツ……この写真は……」
「あの野郎しっかり写真に残してやがった！」
結局、誤解を解くのに、約二時間を要したのだった。

特別編「？アルカナクロスワールド５Ｄ＇ｓＭＩ？」（後書き）

こんにちは。

勝敗については、グッチーさんよりセツを勝たせてやってくださ い、とのことでしたので遠慮なく。初めて最強のアルカナが活躍です。負けフラグとは言わせない！

ちなみに特攻のマジシャン、マジシャンズ・シンクロン、二体のシンクロモンスターについてはグッチーさんのオリカ。同氏の小説内で説明がありますので、わかりにくければそちらで補完しておいてくださいな。

多分次は……遊さん、かな？　コラボをお願いされた順で行けば違うんですけど、後の三作品はまだ本編で使われていないデッキだったりするので……書き易さ的な意味もあり、遊さんので行くと思います。

それでは、悠でした！

※１０／１７　『黒魔術のカーテン』による特殊召喚封印効果を修正しました。カーテンを『賢者の宝石』に。それによるライフの不都合は『死者蘇生』を『早すぎた埋葬（禁止カード）』に差し替えることで、ちょっと怪しいですが修正しました。それにより、マナとマハードのシンクロ順など、幾らか変更点があるのでご注意ください。

重要なお知らせ！

いつもアルカナをご愛読いただき、ありがとうございます。作者の悠です。

タイトルにあるお知らせ、というのは、アルカナのプロットの見直しと、大規模な改訂作業を行うことになりましたので、そのお知らせです。

改訂は第二期の中盤あたりから行う予定で、現在第四期中盤辺りまで来ていることを踏まえると、少々改訂に時間がかかり、その間更新が滞ってしまうと思われます。

更に、今回の改訂では、アルカナの登場キャラを数人削るというかなり大がかりなものとなります。削ることになるのは、二期に入ってから登場した朱雀、零、灼夜とその精霊。剣士の精霊であるエル、フレイ。凛の精霊であるエリア以外の霊使い。希望のメイドであるシャインなど、現在に於いて作者の力不足によりほぼ活躍の場を用意出来なかったキャラクターです。

キャラの削除に関しては、それぞれのオリキャラの作者様方には一応の通知をしてありますが、この場を借りてもう一度、深くお詫び申し上げます。

削除する理由ですが、上記のようにほぼ活躍の場が用意出来なかったこと。この先のストーリーに於いても用意出来そうにないこと。無理に用意したとしても、ストーリーがグダグダと長くなってしまい、作品としての完成度が落ちてしまうと予想されること等です。

他にも、調子に乗ってキャラを増やしすぎた挙句、いい加減キャラの書き分けが困難になっていることも理由の一つです。上記の人間キャラクター等は特に、全員一人称が「俺」であることや口調に

もさほどの差異がないことなどから、これまでの話に於いても混乱してしまった読者の皆様も多いかと思われます。更に言うならば、全員がそれぞれ魅力的なキャラであるが故、どのキャラも前面に出し過ぎるとセツ以上に「主人公」してしまうキャラクターなことも理由の一つです。

そう言った諸々の事情により、投稿していただいたキャラクターに対してする仕打ちでないことや、失礼極まりないことも承知の上で悠はキャラクターの削減を決定しました。

キャラの作者様方や、彼らを応援して下さっていた読者の皆様には、悠の見通しの甘さから不快な思いをさせてしまい、本当に申し訳ありませんでした。

……ここからは、少々言い訳染みた教訓になります。

今回アルカナを改訂するにあたり、思い知ったことが多くあります。その中の一つに、遊戯王小説ならではの例えとして、「小説作りはデッキ構築に似ている」というものがありました。

やりたいこと。やりたいコンボを全て詰め込んだり、魅力的なキャラクター、効果だからと言って詰め込み過ぎれば、やはり確実に事故を起こします。

プロットを立てるというのは、とりあえずデッキを仮組みして、仮想敵（読者）をイメージし、どのようなコンボ（イベント）でダメージ（感動）を与え、どのようにしてデュエルの詰め（クライマックス）に持って行くのかを想定するものだと。

デッキ構築に於いても、小説の構成に於いても、大事なことはやはりそのデッキ（小説）における「軸」を明確にした上で、何を、どんなコンボ（イベント）を自分でやりたいのか。どんなことを一

番に書きたいのかを絞り、そのコンセプトを定めて行かなければ事故ります。

今回削ってしまうキャラクターも、それぞれが主人公になれるだけの、デッキの中核、エースになれるだけのキャラクターを持っていながら、それ故に狙いがバラけてグダグダになるということになってしまいました。

アルカナは、やっぱりセツを軸として、その周囲のキャラクターとの関係を描いた小説です。そのセツと、主人公の役割が被るようなキャラクターは、やはり物語としては受け入れがたいことがわかりました。

キャラの数に関しても、一話、一つのターンで出来ることは限られていて、多すぎても扱いきれない。

今回のアルカナ改訂では、そう言った大切なことに気づけたことは収穫でした。遊戯王を通じて、デュエルを通じて、小説の組み方についての基本を実感出来ました。

アルカナの改訂作業は、恐らく時間がかかってしまうと思いますが、必ず、今よりももっと面白く、良い小説に出来るよう精一杯努力いたしますので、しばらくの間、本編はお待ちください。

まだ完成していないコラボの方ですが、こちらはとりあえず並行して作業を進めたいと思います。幸いデュエルの相手はセツやアテナといった改訂中でも問題のないキャラクターなので、こちらの方は更新もしたいと思います。

それでは、悠でした！

妄想小ネタ（前書き）

こんにちは。

改訂の間、完全に更新が途絶えるのもさみしいので、小ネタで場繋ぎというか、お茶を濁します。

今回のお題は、以前ちょろっと話題に出したアルカナがもしＳＤ－Ｓ編まで行ったとしたらどうなるか、というものです。

ちょっとしたお遊びとして考えたら妙に文量多くなりました。キャラ設定だけなのに。

ではどうぞ！

妄想小ネタ

アルカナ～妄想小ネタ～

○御堂（みどう）　レト　１９歳　女

・身長　　１６２ｃｍ
・体重　　黙秘
・３サイズ　Ｂ８２　Ｗ５３　Ｈ８０（公式サイトより）
・使用デッキ　【ハウリングシンクロ】
・キャラ設定

セツとアテナの間に生まれた長女で、一応メインヒロイン。
母親の影響で幼い頃から芸能界に興味を持ち、父譲りの器用さや、母譲りの容姿や歌唱力、アイドル性もあって見事に二世アイドルデュエリストとして成功している。これも父親譲りか、大抵のことはこなせる天才肌だが、勉強は苦手らしい。芸名は天音レト。尊敬する母親の旧姓を拝借したもので、本人はとても気に入っている。名前の由来はギリシア神話の女神、レートー。
明るく快活で、活発。裏表の限りなく少ない性格で、瞬く間にトップアイドルの道を駆け上がり、且つ父親譲りの悪意を持たれ難い性質も手伝って、基本的に苦労を知らない子。困難にぶつかったことがあまりないため、逆境には弱い。セツたちとしては、そこが若干気になる点ではあるようだ。
誰に対しても分け隔てなく、例えサテライト住人であっても物怖じせずに話しかける大胆さはアテナ譲り。多少スキンシップ過剰で、男子に対しての警戒心が薄い。そんなところもアテナ譲りか？
使うデッキは【ハウリングシンクロ】。ハウリングシンクロというのは、父親の設計・デザインした新しいシンクロ召喚の一つで、

リゾネーターと名の付くチューナーと別のチューナーでシンクロするもの。デッキのモンスターの大半がチューナーで構成されていて、チューナー関係のサポートカードも駆使して戦う。

○御堂　流美（るみ）　１７歳　女
・身長　　１５７ｃｍ
・体重　　できれば内緒で……
・３サイズ　　Ｂ８４　Ｗ５４　Ｈ８５
・使用デッキ　【天空パーミッション】
・キャラ設定
　セツとアテナの間に生まれた次女。姉と比べると非常に内向的で、引っ込み思案。代わりに頭は良い。姉よりも打たれ強く、精神的にも脆そうに見えて強固。運動神経はヘッポコだが。どうやらセツの内面の強さと、アテナの残念さを兼ね備えてしまったらしく、日常的にはかなりヘッポコだが、イザという時に強い。姉とは正反対である。名前の由来は姉や母と同じくギリシア神話の女神、アルテミス。
　無論容姿は整っているのだが、目立ちたくないらしく、常に伊達メガネをかけている。姉より背は低い割にスタイルは勝っているらしく、本人としてはコンプレックス（姉としてもコンプレックスだが）になっている。
　使用デッキは、フィールド魔法『天空の聖域』を最大限利用した、代行者系モンスターとパーミッションを組み合わせたデッキ。両親の影響らしい。切り札は『マスター・ヒュペリオン』。尚、デッキの特徴や本人の運動神経の無さも含めて、ライディングデュエルは出来ない（姉は嬉々としてやる）。

○御堂　月（ゆえ）　１０歳　男
・身長　　１３０ｃｍ
・体重　　回答拒否
・３サイズ　　無し
・使用デッキ　【ダークヴァンダルパーミッション】
・キャラ設定
セツとさだめの息子。双子の弟に陽（よう）がいる。男だが、常に服装はゴスロリ系（父親のデザイン）で、女装している。
理由は、流石にさだめの子であるだけあって、父親であるセツが好きだから。血縁関係や性別、その他諸々無関係でセツに情愛を向ける１０歳児。……色々と激しく間違っているが、さだめの息子なのでとりあえず色々納得である。
さだめの息子であるが故、闇のデュエルに近いサイコデュエリストとしての素質を持つ。が、本人は既に克服していて、滅多なことでは力は使わない。その力はサイコと言うよりは精霊の力に近いもののようである。
性格はやはりさだめの息子らしく、１０歳とは思えない程耳年増。且つハイテンション。女の子らしさ（？）を強調するためか「ですわ」や「わたくし」と言った言葉使いでしゃべる。違和感がないのが凄いが。
トップスの自宅にさだめと弟と一緒に暮らしており、近所に住んでいて且つ同い年の双子という縁もあって龍亞や龍可とよく遊んでいる。
常に女装しているだけあって女顔であり、声変りもしていないので言われなければ男だとは分からない。弟とも酷似しており、一卵性で同性であるので、龍亞たち以上に変装すると見分けがつかなくなる。凄く紛らわしく、色んな人を入れ替わりで騙して遊ぶなど、子供らしい一面もある。
若干十歳でありながら、既に後戻りできない茨の道（笑）を全力

疾走している少年である。両親は（さだめも）何とかして真っ当にしたいと思っているが、自分たちの境遇が境遇なので上手い言い訳が見つからないようである。

使用するのは、両親の性質を受け継いだダークモンスターとヴァンダルパーミッションを併せたデッキ。手札コスト等で墓地を肥やし、ダムドやヴァンダルギオンでトドメを差す、見事に両親の切り札を混在させている。愛故に。

○御堂　陽　１０歳　男

・身長　　１３０ｃｍ
・体重　　月によって削除されました
・３サイズ　　無し
・使用デッキ　【サイクロイド】
・キャラ設定

さだめのセツの息子にして月の双子の弟。こちらは普通に男の子の格好をしているが、女顔である。

さだめ遺伝子の変態性はどうやら陽にも及んでいるらしく、ブラコン。兄（姉？）である月を何よりも愛し、従う。兄に似たのか、性別なぞ最早どうでもいいようである。

その月が父親に懸想していることも知っていて、かといって自分も父親のことは好きだし尊敬しているので恋敵として嫌うことも出来ずに悶々としている。兄と同じく、血縁関係や性別、その他諸々無関係で兄を愛する１０歳児。やっぱり色々激しく間違っているが、さだめの息子だからやっぱり納得である。

兄と同じく精霊としての力がある。だが、陽の力は殆ど無いに等しく、精々が精霊を感じられる程度である。

兄に関わることになると暴走気味になるが、普段は一応常識人。兄への想いについても、基本的には内々に抑えているのでパッと見

普通の男の子。時々暴発するのを気にしなければ、だが。常にハイテンションな兄と比べると、どちらかと言えばダウナーでテンションは低め。暴走するとすぐにハイテンションだが。

若干十歳でありながら、既に後戻りできない茨の道（笑）を全力疾走している少年である。両親は（さだめも）何とかして真っ当にしたいと思っているが、自分たちの境遇が境遇なので上手い言い訳が見つからないようである。

使用するのはまさかのサイクロイド。決してビークロイドではなく、あくまでもサイクロイドである。切り札としてバイクロイドや、父のデザインしたサイクロイドのシンクロモンスターなども使用する。

○御堂　友瀬（ともせ）　１６歳　女

・身長　１６９ｃｍ

・体重　４７ｋｇ（あっさり答えてくれました）

・３サイズ　不明（此方は頑として答えず。ただし、スレンダー）

・使用デッキ　【Ｘ－セイバー】

・キャラ設定

セツとユーキちゃんの娘。以前は、十六夜アキとデュエルアカデミアの同じクラスにて親友の間柄だったが、アキのサイコパワーが引き起こした事件で、建物の瓦礫により頭部を強打。意識不明の重体で病院に入院していた。これは、アキのトラウマの一つになっている。

本人としては、アキを怨むつもりは全くなく、力の暴走ってあるよねーくらいにしか思っていない。恐らく、人外染みた家族の影響だろう。アキの力についても、ウチの家族の方がよっぽど異常。とまったく気にする様子はない。

間違いなく、御堂家に於いて一番の常識人且つ一般人。流石にユーキちゃんの娘なだけあり成績的にも非常に普通な女子高生。ただ、セツ譲りの肝の据わり具合だけは、いっそ主要メンバーや５Ｄ’ｓメンバーすら比較にならないレベルだろう。

男勝りで、アカデミアには女性ファンが大量に居る。入院した時も、毎日のようにお見舞いが来ていた。一人称はボク。それが尚更ボーイッシュで、女性ファンが増える原因になっている。

変人家族での常識人で女性ファン過多と、周囲の苦労を一手に請け負う受難体質。姉弟で唯一料理が出来ることなども含め、苦労が絶えない。

デュエルでは、展開力と高速シンクロ、ハンデスなどを得意とする【Ｘ－セイバー】を使う。両親からは、騎士や戦士といったデュエルタイプを受け継いだようだ。ライディングデュエルなども得意で、姉弟たちの中でも屈指の実力を持つ。

○御堂　切　??歳　男

・身長　　１７８ｃｍ
・体重　　６１ｋｇ
・３サイズ　　男の３サイズに興味ある奴がいるのか？
・使用デッキ　【アルカナパーミッション】
・キャラ設定

『アルカナ～切り札の騎士～』における主人公。現在は五児の父であり一夫多妻状態。様々な仕事を兼業しており、しかも全て手を抜かない状態で且つ、家族との時間も作るという、一体どうやっているのかわからないレベルの働きっぷりを見せている。その甲斐あってか、家はトップスやシティに幾つか立派なものを持ち、自分用のアトリエなどまで持っている。ぶっちゃけ仕事で成功し過ぎて金は有り余っている状態。利子だけでも十二分に生活できるので、現

在稼いだ金の大半はサテライト復興に充てているらしい。
　兼業している仕事は、プロデュエリスト、カードデザイナー、ファッションデザイナー、アカデミア臨時教師、料理教室、ＫＣ研究室長、真中財閥警備部門総括、治安維持局セキリュティ技術部門総括、アテナのマネージャー、レトのマネージャー、俳優など、他にも色々やっているらしい。一体何時休んでいるのか、それでいて家族との時間も確保している辺りが凄まじい。移動はどうやら、マスターした転移術をフル活用しているようだ。だとしても軽減できる仕事量ではないが。そりゃあ金も溜まるわ。噂では、仕事より妻の相手で溜まる疲労の方が大きいらしいが。
　年齢は現在不明。見た目だけなら大学生レベルの若さを保っているが、理由としては人外な妻たちの相手をする内、魂が精霊に近づいたためらしい。
　ライディングはあまりせず、主にスタンディングでのデュエルを行う。やはりライディングだとアルカナが使い難いためだろう。その代わり、スタンディングでの強さは学生時代から更に磨きがかかり、子供達には一度も負けていないレベルらしい。

○御堂　アテナ　??歳　女
・身長　　１６１ｃｍ
・体重　　軽いです。軽いですってば！
・３サイズ　Ｂ８５　Ｗ５５　Ｈ８３
・使用デッキ　【天使族】
・キャラ設定
　『アルカナ～切り札の騎士～』のメインヒロイン。念願かなってセツと結ばれ、凛に誘われたアイドルデュエリストとしても活躍。現在は一線を退いて主に主婦業に専念している。時々テレビにも顔を出して、その年齢不詳の美貌を披露してもいるようだ。

天然で残念美少女なのは変わらず、むしろドジっ娘属性には磨きがかかっているようだ。かなり子煩悩なところもあり、さだめによく甘過ぎると叱られている。

テレビでもよく若さの秘訣を聞かれるが、愛想笑いで誤魔化している。（実際は、半精霊のため老化しないだけ）。それでも成長はするらしく、スタイルの良さには磨きがかかるばかりである。

デュエルでは変わらず、重量級天使のハイビート。『虚無の統括者』や『神光の宣告者』などを使ったコントロール系まで使いこなす。子供達に無敗のセツすら軽く一蹴したりすることもあるくらいで、アイドルデュエリストのレベルじゃないとよく言われる。

○御堂　運命　??歳　女

・身長　　１６２ｃｍ

・体重　　……知りたい？（すごく、笑顔でした）

・３サイズ　Ｂ８３　Ｗ５３　Ｈ８３

・使用デッキ　【次元ダーク】【禁止混沌】【拷問ロックバーン】他、各種メタデッキ

・キャラ設定

『アルカナ～切り札の騎士～』のメインヒロイン。宿願叶ってセツと結ばれた。学生時代に比べ、かなり落ち着いてきている。現在は専業主婦として、子供たちの教育頭として頑張っている。近隣住民からも、教育ママのお手本的存在としてカリスマを得ている。

子供にだだ甘になりがちなアテナを諫めたりと、昔と比べると別人じゃないかと思われるくらいの常識人になっている。夢であったセツのお嫁さんになれたことで、色々余裕が出てきたと思われる。ただ、お仕置きとして実の息子たちに闇のデュエルを仕掛けて拷問デッキで心を折るのは色々間違っているが。

子供達は、キレたさだめママには決して近寄らず、目も合わせず、

出来ればシェルターにでも篭って関わらないようにしようと決めているらしい。

学生時代に比べて、大分スタイルが良くなった。それでもアテナやルイン、ユーキちゃん程までは行かず、コンプレックスは消えていない。見た目は例によってとても若い。終焉の影響により、魂がほぼ精霊となっているため不老。

自分と似た境遇の十六夜アキに対しては、ＡＭに居る現在のアキに対しては酷い嫌悪感を持っていて、何とか更生してやろうと意気込んでいるらしい。

デュエルでは、相変わらず相手によってデッキを使い分け、メタデッキや禁止デッキで圧殺するえげつない戦い方を好む。主力デッキは次元ダーク。フェイバリットデッキは拷問デッキ。

○御堂　友紀　??歳　女

・身長　　１６５ｃｍ

・体重　　マナー違反だよー？

・３サイズ　Ｂ８５　Ｗ５５　Ｈ８６

・使用デッキ　【サイレント】

・キャラ設定

『アルカナ～切り札の騎士～』のヒロイン。順調に進展し、セツと結ばれた。アカデミア卒業後は教師の道を志し、二年の就職浪人をしながらも夢を叶える。先に臨時教師と為っていたセツと共に、デュエルアカデミアネオドミノ校で教鞭をとる。年齢不詳は皆と同じで、終焉本体との融合が原因と思われる。噂では、ハイトマン教頭の学生時代から教師をしているとか。

娘の友瀬、十六夜アキの担任教師として勤務していたが、友瀬の入院を境にしばし休職し、友瀬の世話にかかりきりになる。とはいえ、学生時代の経験からか、アキに対して嫌悪を向けるようなこと

はしていない。それでもやはり、愛娘の事もあり、多少の蟠りはあるようではある。

セツの子供たちの勉強は基本的に彼女が担当。生活面での教育はさだめがやってと住み分けは完璧に出来ている。ちなみに、セツが臨時教師をするときは、決まってタッグデュエルの授業になるともっぱらの噂。

デュエルでは、学生時代と変わらずサイレントデッキを操る。ライディングデュエルの流行で『王宮のお触れ』や『人造人間サイコショッカー』が禁止カード指定されてしまったので、以前のような【お触れソードマン】ではなく、純粋にサイレントデッキである。

○希冴姫　??歳　女

・身長　　１６５ｃｍ
・体重　　乙女の秘密ですわ
・３サイズ　Ｂ８２　Ｗ５６　Ｈ８０
・使用デッキ　無し
・キャラ設定

『アルカナ～切り札の騎士～』のヒロインで、セツの生涯の相棒兼嫁。精霊なので厳密には籍を入れたわけではないが、似たようなものである。現在はセツの付き人として、主に私生活でのケアを中心に西へ東へと飛び回っているようだ。その仕事柄、セツといる時間は最も長く、他の妻たちには羨ましがられている。

精霊故、セツとの間に子供はいないが、やることはやってる筈。ナニがとは言わないが。同じく子供のいないルインとは仲間意識もある。ただし、ルインの方が懐かれているのでそれは不満らしい。

最近は、くっつきそうでくっつかない団長とセツの仲にやきもきしている。もういい加減こっちは割り切っているのだからさっさとくっついてしまえばいいのにとイライラが募っているようだ。

近頃は殆ど精霊界には帰らず、騎士装束も纏わないので、切り札の騎士としての立場を若干忘れかかっている。
デュエルはしないが、セツの精霊としてセツのデュエルでは必ず登場する。セツの展開の基点として、切り込み隊長的に活躍する。

○ルイン　??歳（少なくとも１０００歳以上）　女
・身長　　１７０ｃｍ
・体重　　４７ｋｇ（別に隠す程恥ずかしい体重じゃないし。とのこと）
・３サイズ　　Ｂ８７　Ｗ５７　Ｈ８５
・使用デッキ　【ルイン】
・キャラ設定
『アルカナ～切り札の騎士～』のヒロイン。セツにとっての相談役兼嫁。希冴姫と同じく、精霊故に籍や子供はないが、セツとの心の距離は最も近い。
仕事は自宅警備員。……こう書くとニートにしか見えないが、本当に警備員である。これまで何度も侵入者を撃退している。もちろん、半ニートではあるのだが。時々ふらりと出て行っては大金をせしめてくる。真の仕事を知っているのはセツ以外に居ない。実は、セツに次ぐ稼ぎ頭。半ニートの癖に。
相変わらず、必要最低限以外の言葉は喋らないが、コミュニケーションはしっかりとれていて、特にセツとは完全にツーカーである。アジテートが上手いのも相変わらず。希冴姫と違い、精霊界にもよく帰っているらしく、やはり精霊界でのモテモテっぷりも変わらない。総じて、昔から最も変わっていないのがルインである。
デュエルでは、儀式魔人を多用し、高速で自らを儀式召喚するのが常套手段。だが、ライディングデュエルは大嫌い。自分たち儀式モンスターが廃れた原因だからである。セツに何度も、ライディン

グデュエル用の儀式をデザインするように求めている。

○エース　??歳　女
・身長　　１６０ｃｍ
・体重　　聞くな
・３サイズ　　もっと聞くな。
・使用デッキ　【コストレスポーカー】
・キャラ設定
　『アルカナ～切り札の騎士～』のヒロイン（？）。希冴姫と同じく、セツの付き人で、主に護衛を担当している。セツとはもう何年も付かず離れずの実にもどかしい関係。どうやらエースの頑固さはセツたちの予想を超えていたらしく、これだけの年月があっても決定的にくっつくことはなかった。セツの頑固さも匹敵していて、お互いにどちらかが言いだすまでは！　と意地の張り合いを続けている。尤も、周りから見ればくっついているも同然なのだが。そしてセツの子供たちから最も好かれているのは（母親含め）彼女であったりするので、母親たちとしては実に複雑である。
　上記のように、以前と変わらずセツとの関係は喧嘩友達チックの傍から見ればイチャついているだけの関係。意地っ張りな性格は恐らく一生変わらないと思われる。
　デュエルは然程しないが、自身の効果と『ポット』の効果を使ったコストレスデッキ。強力な効果を持つカードのデメリットをメリットにするというかなり強力な戦術で戦う。

妄想小ネタ（後書き）

……以上！　妄想小ネタとか言いつつ、妙に具体的且つ本格的なキャラ設定を作ってみました。アルカナでの反省も踏まえ、既存の原作キャラとの関わりを多く作った設定になりました……うん。自分で、もしかしてコレ、行けんじゃね？　とか思ったり思わなかったりですが、とりあえずアルカナ自体の改訂作業と完結しないことには話にならないことも理解していますとも。

というか若干ネタバレですしね。まあ、全員とくっつくのはわかってるでしょうし、あるかなっ！　の方でも明記されてるから今更でしょうが。

５Ｄ'ｓ編、やるとしたら龍亞龍可の登場シーンからになるでしょうねぇ……というか、さだめ遺伝子すっげえ。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド５Ｄ’ｓ遊城を受け継ぐ者？」（前書き）

特別編のコラボ二つ目です。
遊さんの『遊戯王５Ｄ’ｓ～遊城を受け継ぐ者～』より主人公キラＶＳアテナになります。例によって不憫なアテナですが、どうかよろしくお願いします。

特別編「？アルカナクロスワールド５Ｄ，ｓ遊城を受け継ぐ者？」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「？アルカナクロスワールド５Ｄ，ｓ遊城を受け継ぐ者？」

その日、アテナはご機嫌だった。

「ふふっ今日は何を着て行きましょうか」

例によってセツとの強制デートである。今回でとうとう九回目。

残すは後一回のみとなっている以上、気合が入らざるを得ない。

「それ以降だと、さだめさんが遠慮なく邪魔してきますからね……」

意外だったのは、さだめが律儀にも邪魔をしない約束を守っていることだ。尤も、嫉妬心が抑えられているわけじゃないらしく、翌日は必ず瀕死になっているが。

「さだめさん曰く『嫉妬心だけで悶死しそう』だそうですしね……」

デートが終わり、さだめにそれを伝えるのは恒例になっているが、最初は驚いたものだ。

「干からびた魚にしか見えませんでしたし」

翌日には確実にストレス性の胃潰瘍になっているくらいなのだから相当だった。

「でも、やめるつもりはありません」

数少ないアドバンテージ源なのだ。

「言うなれば『強欲な壺』！」

むんっ！　と気合を入れ直し、デートの服装選びを再開するアテナ。そこにコンコン、という軽いノックの音。

「？　誰でしょう。は～い」
「アテナ、入るわよ」
光の声だった。特に警戒せず、アテナはドアを開けて光を歓迎する。
「今日はどうしたんですか？　来るのなら、メールでも入れてくれればよかったのに」
「ああ、ごめんなさいね。ちょっと緊急だったから」
「緊急、ですか？」
その言葉を聞いて、アテナは脳裏に暗雲が立ち込め始めたのを感じた。
「ええそうよ。貴女も一度行っているわよね？　時空の歪がまた現れるそうなのよ。それで、今回はアテナに白羽の矢が立ったってわけなんだけれど……」
「……私、これからデートなんですけど」
「……ごめんね？」
「笑顔で謝らないでください！　っていうか、私じゃなくても……」
そう言ってアテナは遠慮がちに断ろうとする。セツとの貴重なデートを潰されるなんて冗談じゃない、という乙女心が透けて見える。
「アテナじゃなければセツに頼むことになるって希望は言っていたわね」
「意味ないじゃないですか！」
「そ。だからよろしく！」
「い、嫌です！　さだめさんの妨害がないデートは今日合わせて二回しかないのに……！」
「アテナ、知ってるわよね？　私のモットー」
「……最終的には」
「力尽く、よ！」
ガシィ、とアテナの首元を引っ掴み、同時に現れた歪にアテナを放り投げる。
「ちょっ！？　わ、私まだパジャマで……せめて着替えを～！？」

服を選んでいるところだったので、未だパジャマにカーディガンという軽装だったアテナが悲鳴を上げる。
「あ、ゴメン。もう遅いわ」
「嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ〜！！」
物凄く軽い感じで謝った光の謝罪と、アテナの絶叫が重なる。アテナは何時かと同じく、またしても歪に放りこまれて行くのだった。
「……あ、あの子またデュエルディスク忘れてるわ。ま、いっか。まだ歪も消えてないし、一緒に放りこんでおきましょ。あー疲れた。後でお詫びくらいはしなくちゃね〜」
ポイッと消えかかっていた歪に、アテナのデュエルディスクとデッキを放りこんで、光は満足したように肩を回しながら部屋を後にした。

「嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ〜！！」
ドサッ！
「うぐぇッ！？　な、なんだ！？」
私は悲鳴を上げながら落下して、誰かにぶつかってしまいました。
「す、すみませんすみません！」
慌てて謝ります。下敷きにしてしまった相手は、私と同年代くらいの少年でした。
「い、いや俺は大丈夫ですけど……君は？」
「あ、私は大丈夫です。御心配をお掛けしてすみませんでした」
落ちたところがどうやらベッドと男の子の上だったので、私にそれほどの衝撃はありませんでした。それより思い切りお腹に尻もちを着いてしまったので、そっちの方が心配です。
「だ、大丈夫大丈夫……ちょっと内臓が出そうになっただけで」
「それ大丈夫じゃないですよね！？」
というか、私まだパジャマでした！　しかも、またデュエルディ

スクとデッキ持ってきてないです！
　ゴンッ！
「あぅっ！？」
　その時、頭の上に何かが落ちてきました。
「いたた……あ、デュエルディスク」
　それは私のデュエルディスクとデッキでした。多分、光お姉さんが気を利かせて送ってくれたんだと思いますが……。
「……もうちょっと別の気の利かせ方があると思います」
　具体的には、あらかじめ着替えとディスクを持つのを待ってから送りだすとか。
「えっと……？」
「あ、すみません。自己紹介が遅れました。私、天音アテナと言います。貴方は？」
「あ、ああ。俺はキラ。遊城キラだ」
「遊城……？　もしかして、十代さんと何か……」
「っ！？　十代！？　ね、ねえ君、父さんのこと知ってるの！？」
「と、父さん！？　い、いえ十代さんは子持ちでは……というか学生で！？」
　いえ、もしかして既に子供が……。
「……ってないですね。私と同年代の子供を作るのは年齢的に不可能ですし」
「なぁ！」
「あ、ああはいはい。ちょ、ちょっと待ってください！　とりあえず少し落ち着いて……」
「キラ？　何だか騒がしいけど、何かあったの……って！？」
　私が何やら興奮したキラさんに肩を掴まれて問い詰められていると、扉が開いて特徴的な髪形の少女が姿を現しました。
「あっ龍可……」
「き、キラ……何をして、るの……？」
「え、これはその……」

「あー！　キラがベッドの上で見知らぬ女の人とキスしてるー！？」
「「はぁっ！？」」
期せずして、私とキラさんの声が重なりました。爆弾発言をしたのは、少女に続いて現れた、少女とそっくりな男の子。
「ち、違う！　俺は別に……」
「そ、そうですよ！　わ、私には心に決めた人が……」
慌てて釈明しますが、よく考えると勘違いするのも無理ない気がします。両手で肩を掴まれて、ベッドの上で向き合っていたら。
後から現れた二人に、私が問い詰められていただけだと二人で説明し、説得します。男の子の方はなんとか納得してくれたらしく、
「な～んだそういうことかぁ～」と頷いています。
「私は天音アテナです。よろしくお願いします」
「うん！　オレ、龍亞。こっちでムスッとしてる龍可とは双子だよ！」
「ムスッとなんてしてないわよ」
「してんじゃん」
「してない！」
「だから龍可、俺とアテナさんは別に……」
あからさまに不機嫌そうな龍可さんに、キラさんが必死で説得を続けています。龍亞君は私に「それで」と更に質問を続けてきました。
「なんでアテナ姉ちゃんはウチにいるの？　しかもパジャマで」
「……パジャマ姿なことは出来れば突っ込まないでください」
それは私としても酷く不本意な事情なので。
「実はですね。説明すると少々長くなってしまうんですが……」

「つまり、アテナ姉ちゃんのところで戦っている敵の影響で、こっちの世界に飛ばされてきたの？」

「はい、大体そんなところです」
「しかも、渦みたいなものに巻き込まれてって……」
「いえ、歪ですが」
「それ、俺と似てる……」
「キラさんと……？　いえ、多分違うと思いますが」
「え？」
何か勘違いをしているらしかったキラさんたちに、私はもう一度詳しくお話します。
「キラさんの事情はよくわかりませんが……私は以前にも、同じように転移してしまったことがありまして……その時も、デュエルすることで帰ることが出来たので、今回も大丈夫だと思います」
「そ、そうなの？」
「はい。御心配には及びません。なので、キラさん。デュエルの相手をお願いできますか？」
「俺はいいけど……」
キラさんはチラリと私のデュエルディスクを見ました。
「そのデュエルディスク、旧型だから龍可のを借りてやるといいよ。龍可、いいかな？」
「うん。いいわよ。はい、アテナさん」
「ありがとうございます……わ、凄い。シャッフルが……」
借りたデュエルディスクにデッキをセットした瞬間、自動的にデッキがシャッフルされたことに驚きます。
「よし。それじゃあ始めようか。楽しいデュエルにしよう！」
「はい！」
「「デュエル！！」」
先攻をとったキラさんが勢いよくカードをドローします。
「俺は手札から『Ｅ・ＨＥＲＯクレイマン』を守備表示で召喚！カードを一枚セットしてターンエンドだ！」
ＤＥＦ２０００

「Ｅ・ＨＥＲＯ……やっぱり」
十代さんを父さんと呼んでいたことを考えれば、予想できた答えではあります。ですが、それなら！
「私のターン、ドローです！　私は手札から『ヘカテリス』の効果を使用します！　デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加え、発動します！」
「天使族か……」
「はい。私はヴァルハラの効果で、手札から『ジェルエンデュオ』を特殊召喚します！」
ＡＴＫ１７００
私のフィールドに、双子の小天使が現れます。
「更に『ジェルエンデュオ』は、光属性天使族のアドバンス召喚に使用する際、二体分のリリースとすることができます！　私は『虚無の統括者』をアドバンス召喚！」
ＡＴＫ２５００
「『虚無の統括者』だって！？」
「効果は知っているみたいですね。そうです。『虚無の統括者』は、フィールドに存在する限り、相手の特殊召喚を封じる効果を持っています！」
キラさんのデッキがＥ・ＨＥＲＯであれば、ほぼこれで封殺出来る筈！
「行きます！『虚無の統括者』で『Ｅ・ＨＥＲＯクレイマン』を攻撃！『トリニティ・ヴァニッシュ』！」
「クッ！？　クレイマン！」
「私はこれでターンエンドです！」
「俺のターン、ドロー！」
とりあえず、初手としては理想的だと思いますが……油断はできません。何しろ、相手はあの十代さんの息子。逆転の一手を使われることは想定しておかなければ。
「俺は手札から『Ｅ・ＨＥＲＯプリズマー』を攻撃表示で召喚！

効果発動！」
「プリズマー？」
　確か、セツが持っているのを見たことがあります。
「プリズマーは、エクストラデッキの融合モンスターを見せることで、その融合素材モンスター一体をデッキから墓地に送ってそのモンスターと同名カードとして扱うことができる！　俺が見せるのは『Ｅ・ＨＥＲＯゼクス・ソードフォルム』！　デッキから『Ｅ・ＨＥＲＯゼクス』を墓地に送る！」
「ゼクス……初めて聞くカード名です。それが、キラさんのエースですか」
「ああそうさ！　そしてリバースカード発動！『ヒーロー・ブラスト』！　墓地のＥ・ＨＥＲＯの通常モンスター一体を手札に戻し、その攻撃力以下の相手モンスターを破壊する！　ゼクスの攻撃力は２５００！　ピッタリ丁度『虚無の統括者』を破壊する！」
「っ！」
　まさか、本当にあっさりと……！
「そしてバトル！　プリズマーでプレイヤーにダイレクトアタックだ！」
「きゃああっ！？」
　アテナＬＰ２３００
「よし！　俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ！」
「やりますね……私のターン、ドロー！　私は『神の居城―ヴァルハラ』の効果を発動します！　手札から『アテナ』を攻撃表示で特殊召喚です！」
　ＡＴＫ２６００
「バトルします！『アテナ』で『Ｅ・ＨＥＲＯプリズマー』を攻撃！『ディヴァイン・クロス』！」
「ぐっ！？」
　キラＬＰ３１００
「この瞬間、リバースカード発動！『ヒーロー・シグナル』！　俺

の場のモンスターが戦闘によって破壊された時、デッキからレベル４以下のＥ・ＨＥＲＯ一体を特殊召喚する！　来い！『Ｅ・ＨＥＲＯフォレストマン』！」

ＤＥＦ２０００

「では、私はこれでターンエンドします」

「俺のターン、ドロー！　スタンバイフェイズにフォレストマンの効果発動！　デッキから『融合』を一枚手札に加える」

「やっかいな効果ですね……」

ヒーローデッキに於いて『融合』を手札に加えることは非常に有効です。そして『融合』が手札に加わったということは当然……。

「俺は手札から『融合』を発動！　手札の『Ｅ・ＨＥＲＯスパークマン』と『Ｅ・ＨＥＲＯオーシャン』を融合し、来い！『Ｅ・ＨＥＲＯアブソルートＺｅｒｏ』！」

ＡＴＫ２５００

キラさんのフィールドが凍結し、その中心に一体のヒーローが降り立ちます。

「氷のＥ・ＨＥＲＯ……！」

「そして俺は、フォレストマンとアブソルートをリリースし、手札のゼクスを召喚！」

ＡＴＫ２５００

「え！？」

折角召喚した融合ヒーローをいきなりリリース……！？　一体何を……。

「この瞬間、アブソルートの効果発動！　フィールドから離れた時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！」

「なっ……！」

なんて効果ですか……！

「それはさせません！　手札から『朱光の宣告者』と『堕天使スペルビア』を捨てて、その効果を無効化します！」

「ちっ！」

あ、危なかったです……。以前貰っていた『朱光の宣告者』が無かったらこの時点で負けていました……。
「なら、手札の装備魔法『ゼクター・ハンマー』をゼクスに装備！　そしてゼクスをフォルムチェンジだ！『Ｅ・ＨＥＲＯゼクス・ハンマーフォルム』！」
ＡＴＫ２５００
「装備魔法との融合召喚！？」
「バトルだ！　ゼクスで『アテナ』を攻撃！『クラッシャー・フィスト』！」
「でも、攻撃力は『アテナ』の方が上です！」
「甘いよ！　ハンマーフォルムの効果発動！　一ターンに一度、相手モンスターと戦闘する場合ダメージ計算を行わずに破壊できるんだ！」
「そんな！」
ゼクスのハンマーに『アテナ』……シャルナが叩きつぶされてしまいます。
「俺は最後の手札を伏せて、ターンエンドだ」
「くっ……私のターンです！」
私の手札はゼロ。このドローで全てが決まります！
「ドロー！　っ私は手札から魔法カード『壺の中の魔術書』を発動します！　お互いにデッキからカードを三枚ドローします！」
「よし。じゃあ俺も三枚ドローだ！」
「手札から速攻魔法『光神化』を発動します！　手札の『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を、攻守を半分にして特殊召喚します！」
ＡＴＫ１４００
「何故そんな……ヴァルハラがあるのに……」
訝しげに眉をひそめるキラさんに、私は笑みを浮かべて見せます。
「ヴァルハラだと、次弾が続かないからですよ！　手札から速攻魔法『地獄の暴走召喚』を発動します！　攻撃力１５００以下のモン

スターが特殊召喚された時、デッキ・手札・墓地から同名モンスターを出来る限り特殊召喚します！　私はデッキから二体の『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を特殊召喚します！」

ＡＴＫ２８００

「なんだって！？」

「『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』がいる限り、フィールドの天使族以外のモンスターの攻守は５００ポイントダウンします。三体ですから、１５００ポイントダウンです！」

「そんな！？」

これで、ゼクスの攻撃力はたったの１０００。これなら！

「一体目の『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』でゼクスを攻撃します！『ホーリー・フェザー・シャワー』！」

ゼクスの効果は厄介です。ですが、既に自壊が確定しているヴィーナスなら、損失はありません！

「くっ！　ゼクスの効果発動！　ダメージ計算を行わずに破壊する！」

一体目のヴィーナスが破壊され、ゼクスの攻撃力が１５００に戻ります。

「ですが、その効果は一ターンに一度しか使えません！　二体目のヴィーナスで攻撃！」

「くっ！？　ゼクス！」

キラＬＰ１８００

「ラストです！　最後の『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』でキラさんにダイレクトアタックします！」

「リバースカード発動！『リバース・オブ・ゼクス』！　これは、ゼクスと名の付く融合モンスターが破壊された時に発動し、墓地のゼクスを復活させる！」

「っ蘇生カード……！」

「更に、この効果で特殊召喚されたゼクスの攻撃力は１０００ポイントアップする！」

ＡＴＫ１５００→２５００
「それでも、ヴィーナスの攻撃力の方が上です！『ホーリー・フェザー・シャワー』！」
「うぁぁっ！」
キラＬＰ１５００
「……私はこれでターンエンドです」
削りきれませんでした……脳裏に、セツの言葉が蘇ります。
『ヒーロー使いに対して、ギリギリ削りきれなかった状況は最悪だ。確実に次のターン、逆転の一手を引いてくる』
ただでさえ、今キラさんは『壺の中の魔術書』の効果で手札が三枚。次のドローで四枚です。
「俺のターン、ドロー！」
来ます！
「手札から『Ｅ・ＨＥＲＯバブルマン』を攻撃表示で召喚！　俺のフィールドにカードが存在しない場合、デッキからカードを二枚ドロー！」
十代さんもよく使う、水のヒーローが召喚されます。これで、手札が五枚。
「まだまだ！　手札からマジックカード『Ｏ－オーバーソウル』を発動！　墓地のゼクスを再び蘇生させる！」
「くっ……！」
次々と相手フィールドにモンスターが並んで行きます。
「そして手札から速攻魔法『超融合』！　手札を一枚捨てて、俺のバブルマンと、アテナさんの『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を融合する！」
「ヴィーナスを融合素材に！？」
「このモンスターは、Ｅ・ＨＥＲＯと光属性モンスターを融合素材とするモンスター！　来い！『Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅシャイニング』！」
ＡＴＫ２６００→２１００

『超融合』の渦の中に、ヴィーナスとバブルマンが吸い込まれて行き、輝きを纏うヒーローが現れます。ヴィーナスが減ったことで、キラさんのヒーローが力を取り戻します。

ＡＴＫ１５００↓２０００

「そして、手札から装備魔法『ゼクター・ブレイド』をゼクスに装備！　そして、二枚を墓地に送ってゼクスをフォルムチェンジ！『Ｅ・ＨＥＲＯゼクス・ソードフォルム』！」

「そのカードは……」

最初に、プリズマーの効果でオープンしたカードです。

「ソードフォルムの効果発動！　このカードは、フィールド上のこのカード以外のヒーローの攻撃力分、攻撃力がアップする！」

シャイニングの攻撃力２１００が、ゼクスにプラスされて行きます。

ＡＴＫ４１００

「これで終わりだ！　手札からマジックカード『ラスト・アタック』！　ゼクスと名の付くモンスターの攻撃力を、このターンのみ二倍にする！」

「それじゃあ、ゼクスの攻撃力は……！」

ＡＴＫ８２００

「攻撃力８２００……！」

ヴィーナスの効果で下がっていて尚その攻撃力。

「バトル！　ゼクスで『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』に攻撃！『スラッシャー・ブレイク』！」

「きゃあああああああああああっ！？」

アテナＬＰ０

「ふぅ……参りました」

「だ、大丈夫？」

「はい。全然平気です。ありがとうございました」
負けはしましたが、これで元の世界に帰れる筈です。
「とても楽しかったです。まさか最後、あれだけやって逆転されるとは思いませんでした」
「俺も楽しかったよ。ありがとう」
すぅ、と私の身体が透け始めます。
「あ……」
「お別れ、ですね」
少し複雑そうな表情のキラさん。
「……帰れますよ」
「え？」
「きっといつか、キラさんは帰れます。でも、それまでは……」
心配そうに、キラさんを見つめる龍可さんを見ます。
「この時代、この場所にも、キラさんにとっての居場所があるんだってこと、忘れないでくださいね」
「あ……」
「では、お元気で。またいつかお会いしましょう！」
それだけ言い残して、私は元の世界に帰還しました。

「……ですから、今日私はやむを得ない状況に巻き込まれたので、デートを中止せざるを得なくなったんです！」
「だとしても、仕切り直しは認めないよ。さだめが今日一日、死ぬ想いで部屋に閉じこもっていたこと知ってるでしょ」
「で、でも私は実際にデートしてないわけで……」
「関係ない。私たちは、今日一日を貴女に与えた。実際にデートが行われたか否かは問題じゃない」
「ルインの言う通りだよ」
「せ、セツ！」

「あー、その……」
「お兄ちゃんは関係ないの。これは、さだめたちの問題だから！」
「いや、俺は思い切り当事者なんだが……」
「そ、そうです！　こういうのは、セツの気持ちが大事なんですよ！」
「いいじゃん後一回残ってるんだから！」
「一回しか残ってません！」
「今まで八回もデートしてたでしょ！　その時点でさだめからすれば極刑ものだよ！」
「このデートに関しては、さだめさんも了承済みのはずです！」
「仕切り直しについては認めた覚えはないよ！」
「じゃ、じゃあデュエルで決めましょう！　私が勝ったら仕切り直しです！」
「いいよ。さだめは禁止デッキ使うけど」
「り、理不尽です！」
「これでも精一杯の譲歩だよ！」
結局、禁止デッキに勝つことは出来ず、セツとの強制デートは一回無駄になってしまうのでした……。
「うぅ……光お姉さんの馬鹿ぁ～！！」

特別編「？アルカナクロスワールド５D'ｓ遊城を受け継ぐ者？」（後書き）

はい、というわけでキラの勝利です。セツと違い、アテナやさだめは結構負けが込んでますが。セツは殆ど負けませんが、意外とアテナやさだめは負けが多いです。次回のコラボは……誰になるかな。書き易いところから行きます。

さてと、それじゃあ告知です。改訂にあたり、以前の話を三日後の１１月６日に削除します。削除するのは、エース編が終わった後、剣士の出てくる話からです。改訂も、そのあたりから行います。とはいえ、剣士のあたりはまだ改訂少ないのであんまり新鮮味はありませんが。よければ、今の内に見返してどこがどう変わったかを見比べて見るのもいいかもしれません。

それでは、悠でした！

番外編「クリスマス特別編　準備編」（前書き）

さて、世間はクリスマス。というわけで、クリスマス用特別短編です。敢えて前々日にアップする悠スタイル。むしろ三部作の三日連続投稿を目標とした随分とボリューム豊かなクリスマス短編となっておりますので、どうかお楽しみください。

番外編「クリスマス特別編　準備編」

アルカナ～切り札の騎士～

番外編「クリスマス特別編　準備編」

「じんぐるべー、じんぐるべー、すっずがーなる～イェアッ！」
「何時にも増してテンション高いな。さだめ」
飛び跳ねる様にクリスマスのテーマソングを口ずさむさだめを、若干呆れの入った目で見る。しかし、俺のそんな目にもめげず、さだめのテンションはだだ上がりだ。
「そりゃもう！　なんせクリスマスだよ、クリスマス！」
「テメエみたいな悪魔の化身が聖夜を待ち望んでンじゃねェよ」
「酷っ！？　ゴーズ、アンタそれでもさだめの精霊！？」
「生身で精霊（オレ）をぶちのめす女は悪魔の化身で違いねェよ」
……俺の風邪騒動の時か。案外根に持つ奴だな。
「お兄ちゃん喧嘩の腕っ節は弱いからね。お兄ちゃんを守るため、そして邪魔な虫を蹴散らすために、さだめは強くなったんだよ！」
「イヤ、ありゃァそういう次元じゃなく、相当に異質な強さだったろうが……」
「まぁ、そんなことはどうでもいいよ。今大事なのは、明日がクリスマスというただ一点！」
正確には、イブだな。まあ、大した違いはないかもしれんが。
「クリスマスと言えばデートイベント！　デートイベントと言えば恋人たちの性夜！」

「今、“聖”の発音がおかしくなかったか？」
今更だが。どんな字を当て嵌めたのかも容易に想像できるが。
「どーせ恋人いる奴らはデートして盛り上がってホテル直行なんだから強ち間違っちゃいないよ！」
「謝れ！　全国の恋人持ちにあやま……いや、謝らなくてもいいか。恋人持ちだし」
そんな奴らはこんなもん読まずにイチャついてやがれってんだ。
「相変わらず、テメエは自分のことを棚上げするのが得意だなァラブコメ野郎」
「捨て置け」
「兎に角、こんな千載一遇のチャンスでさだめがいきり立たないわけがない！　というわけで、さだめとデートするよ！」
「ちょっと待ってください！」
「むっ、出たねアテナ！」
「出ますよ！　そりゃ出ますとも！」
アテナも随分と、いや、常ならぬオーラすら見えるほどにテンションが高い。
「いいですか、クリスマスですよクリスマス！」
「それさっきさだめが言った」
確かに、聞き覚えがある。
「クリスマスと言えば、イエス・キリストの生誕祭です」
「お、随分まとも且つ名目上に過ぎない事実を持ち出してきたな」
「イエス・キリストと言えば、聖人です。いわば天使」
いや、聖人＝天使じゃないだろう。
「そして私は元・精霊且つ天使族『反魂のスピリチュア』です」
まぁ、そうだな。
「即ち……セツとデートするのは私です！」
「長々語って貰って悪いけど、その台詞はアテナが出てきた時点で言うまでもなくわかりきってるんだよ！」
「……いやまったくだ」

さだめに同意するのもアレだが。
「ちなみに、私も天使」
「うおっ！？」
にゅっ、と俺の背後からルインが顔を出す。
「しかも女神」
「いや知ってるけど」
「……天使より格上」
「……つまり？」
「わかってる癖に」
ちらっ、とルインが自分の背後を見る。釣られて俺も振り向くと、そこには何か言いたげなユーキちゃんと希冴姫の姿。
「あー……」
「こらそこルイン！　お兄ちゃんに抱きつくな！」
「希冴姫さんたちも……くっ、ライバル多し、です」
噛みつかんばかりの勢いで突っ込んでくるさだめと、苦々しげに歯噛みするアテナ。荒れてんなぁ……二人とも。若干現実逃避気味の思考でそんなことを考える。
「……ハン、付き合ってられるか。オレは帰ンぜ」
「待てゴーズ。せめてさだめだけでも止めていけ！」
「アホ言うな。何が悲しくて一番シャレにならン奴を引き受けなきゃなンねェンだ」
それはそうだが……。
「オレにだって予定があンだよ。ニンゲンのこたァニンゲンで始末つけろや」
「予定って……まさか！？」
「さァなァ。好きに思えや」
「……カイエンか？」
「アホか。何が悲しくて双子の妹みてェなのと過ごさにゃならン。テメエら兄妹と一緒にすンな」
そりゃそうか。どうも俺の認識は怪しい。

「大体奴は二十四時間三百六十五日仕事だ」
「……それはそれで哀れな」
俺が今も職務に追われているであろうカイエンに哀悼の意を示していると、女性陣の話し合いに動きが出てきたことに気が付いた。
というか……。
「まあまあ君たち。少し落ち着いて」
「希望さん？」
「何の用？」
「君たちはセツとのクリスマスを望んでいるようだが、知っての通りセツの身体は一つ。君たち五人全員と聖夜を過ごすことは出来ないよ」
「おおそうだ。もっと言ってやってくれ希望！」
ここに来て、望外の味方だった。
「わかってるよ。だからさだめはどうにかしてライバルを蹴散らそうと戦闘態勢に入っているわけで」
「今だけは、光お姉さんのモットーをリスペクトです」
「最終的には力尽く、だっけ～？」
「至言ですわね」
「自然の摂理」
「まったく。光にも困ったものだね。いたいけな少女に悪い影響を与えてしまっている」
やれやれ、と言った具合に首を振る希望。
「何でも力尽くで解決しようと言うのは、年頃の乙女としては頂けないな」
「まったくだ。もうちょっと穏やかな解決方法をだな……」
「まあ、確かに君たちの気持ちもわからないでもない。とはいえ、セツの身体が一つということはいかんともしがたい。まさかセツの四肢をもいで五等分するわけにもいかないしね」
「超物騒！」
希望のスプラッタな提案に、思わず目を剥く。しかし。

『それだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』
「それなの！？」
まさかの、全力の同意だった。
「両手両足胴体顔で五人分。正に画期的な分配方法……」
「画期的じゃねえよ！　猟奇的だよ！　そして六人分になってるよ！」
「ふむ、ならエースも参加するかい？」
「……遠慮する」
「当たり前だ！」
「だが」
「だが？」
「パーツに切り分けるのは任せてもらいたい」
「任せねえよ！」
どいつもこいつもパーツに切り分ける前提で話してんじゃねえよ！
「どうする？　さだめとしては、やっぱり胴体が一番の目玉だと思うんだけど」
「そうですわね……他のパーツでは特にすることもありませんし」
「あ、じゃあわたしは左腕でいいから～」
「……騙されない。左手薬指は最重要パーツ」
「むぅ、けど実用性がないよ。例え指輪が填まっていても、指を斬りおとすなり本体を確保しておくなり方法はいくらでもあるし」
「……ところで、やはり胴体と頭部は分割すべき」
「そうですわね。このままだと胴体取得者があまりに得をしすぎますもの」
「むむむ……下半身を取るか頭をとるか……難しい問題だね」
「って既にパーツ分配の話し合いに入ってらっしゃる！？　やめろよ！」
「ま、マズイです。このままだと両足とかの特に旨みのないパーツを押しつけられることに……！」
「アテナお前もか！　どうしてお前らは俺がバラされることになん

の疑問も抱かない！」
「……後でくっつける」
「くっつかないよ！　俺の身体はそこまでの再生能力を有していないよ！」
「え？」
「そこで意外そうな顔をするな！」
「セツなら、再生はおろか切り取ったパーツから増えてもおかしくは……」
「おかしい！」
何時から俺はアテナたちの中でプラナリア的存在と化した！？
「大丈夫。生きていれば私がくっつける」
「だから死ぬよ！　いくら俺でも四肢もがれたら死ぬよ！　情け容赦なく完膚なきまでに死ぬよ！」
「大丈夫です。死んでしまっても蘇生させます！」
「まず死なない方向で考えてくれないかなぁ！？」
おかしい。何故俺はこんなごく当たり前のことを必死になって説いているのか。
「まあ、冗談はこのくらいにしとこうか」
「そうですね」
「十分楽しんだ」
「冗談だったの！？　俺はかなり本気で言っているように聞こえたんだが！？」
「やだなぁセツくん。わたしたちそんな酷いことしないよ～」
「そうですわ。騎士たるわたくしが、主であるセツ様に手を上げるなど」
「……え？　冗談だったのか？」
「一人本気にしている団長がいるぞ。しかも、俺を裁断する張本人が」
「……エースには、後でよく言い聞かせておきますわ」
頼むぞ、本当に。

「はっはっは。それにしても、やはり君たちは楽しいね。ちょっとネタを一つ投下しただけでここまで楽しめるとは思わなかったよ」
「黙れ元凶。助けが来たかと思えば引っかき回しやがって」
「はは、すまない。お詫びに、少しばかり助言をさせてもらおう」
「助言？」
「ああ。セツ、君たちも聞いて欲しい。君たちはセツと、クリスマスデートを望んでいるんだよね？」
「そうだよ」
「では、よく考えてみるといい。明日はクリスマスイヴ。そして、明後日はクリスマス本番。ほら、少なくともクリスマスデートと呼べるのは二日間もあるじゃないか」
「けど、わたくしたちは五人ですわ」
「そこは、多少妥協して貰わないとね。流石に二十四時間ぶっ続けで一対一デートをするわけでもないだろう？　なら、セツには多少無理して貰うことになるが、一日に二人か三人。時間で割れば良いだろう」
「おお、そうだ。その通りだ。理性的な対応も出来るじゃないか」
まあ、確かに俺は休みなしで相手せにゃならんわけだが、そこは俺が頑張るしかないだろうな……。
「むぅ……でも一日は三人でもう一日は二人なんですよね？　どう考えても二人の方がいいような……」
「君たちは、イブと本番、どちらにデートしたい？」
『イヴ』
「即答かよ」
「なら、二十四日が三人で決定だ。文句はないね」
「むぅ……」
「不満がない、といえば嘘になりますが……」
「公平ではありますわね」
「私はそれでいい」
「そうだね～。それじゃ、二人の日は空いた時間に皆でパーティだ

ね」
「おお……」
どんどん良心的になって行く。ついさっきまでスプラッタな会話をしていたとは思えない平和な会話だ。
「希望……助かった」
「ふふ、いやなに。楽しんだ後のアフターケアをしただけさ。引っかき回すなら、その後のことも面倒見るのがアジテーターとしてのプライドだからね」
「だとさ、ルイン」
「……何故私に」
「わかってる癖に」
「なんというブーメラン。キュンと来た」
「それじゃあ、順番を決めるといい」
ピィン……っ。
「……ん？」
今……なんか張りつめなかったか？
「……私、最後にしますね？」
「いや待ってアテナ。トリはどう考えても最重要ポジションでしょ」
「あ、じゃあわたし真ん中でいいから～」
「……お待ちなさい。真ん中、三番目と言えばイヴのトリでしょう。そんな美味しいポジションは渡せませんわ」
「……要するに、ハズレはイヴの二人目」
「ううん、二日目の一人目も、お兄ちゃんに疲労が溜まってグダグダになりかねないよ。さだめとしては、トップ、三人目、トリが目玉だね」
「じゃあ、そこは私とお姫様と終焉の彼女で」
「ルイン様？」
「あの、その終焉の彼女ってわたしのこと～……？」
「ちょっと待ってください！　どうして私たちを省くんですか！？」
「そうだよ！　そんなことしたら……」

「もちろん、わたくしは構いませんわ！」
「わたしもそれで～」
「くっ！？　まさか、敢えてライバルに塩を送ることで味方を増やすなんて……」
「ルインさん……なんでその三人に私も加えてくれなかったんですか！？」
「気分」
「騙されちゃいけないよ二人とも！　ルインは二人なら与し易しと見て選別したに違いないよ！　ナメられたままでいいの二人とも！」
「……まあ多少は癪ですが、貴女方二人を先に排除しよう、というのはわたくしたちの共通認識ですので」
「それに、ルインさんは皆の条件を平等にしてくれようとしてくれているんだから～」
「ぐ……マズイよ。このままだとハズレを押しつけられかねない！　アテナ、ここは一時休戦して……」
「で、でも向こうはヒロイン三人の連合軍です。私はメインヒロインで二人分だとしても、ギャグキャラのさだめさんではマイナス１にしかなりません！」
「え、何時の間にアテナの中でさだめはマイナス３と化してたの？　ていうか何気にエリート意識高いよアテナ！　ナチュラルに自分をメインヒロインに設定するな！」
「……相手の結束は脆い。今なら容易に打ち崩せる」
「……まあ、所詮恵まれた設定に甘んじているだけの小娘ですものね」
「踏みつけられる雑草は強いよ～」
「……ねえアテナ。なんでかな、ふつーにさだめ勝てない気がするんだけど」
「くっ、さだめさんがマイナスならマイナスらしくマイナス１０くらいだったら……」
「いや別にさだめダークチューナーじゃないし！　ていうかアテナ

ダークシンクロとかしらないでしょ！」
　珍しくさだめが劣勢且つツッコミに回っているな。少し助言してやるか。
「さだめ！」
「お兄ちゃん！」
「お前はボケなきゃ弱い！」
「お兄ちゃんまでさだめをギャグキャラ扱いしないでよ！」
「いやだって、さだめはクリスマス的に言えばトナカイだし……」
「トナカイ！？」
「赤鼻の」
「道化！　さだめ、お兄ちゃんに道化として見られてたの！？」
「あ、ちなみにさだめ。お前が俺と話してる間に、向こうは決着付いたらしいぞ？」
「なぁあっ！？」
「す、すみません力及ばず……」
「……そう言いながら、さだめに一番のハズレポジションである二人目を押しつけてるのはどこの誰かな？　しかも、ちゃっかり自分はトップバッターになってるんだけど？　アテナ、戦ってたんじゃなくて交渉してたでしょ。ルインと交渉してたでしょ！」
「なんのことやら、です」
「黒くなったね！　最早清純ヒロインの面影ないよ！」
　まあそれは十中八九さだめの影響なんだが。
　結局、順番はこのように決まったらしい。
　トップバッター：天音アテナ
　二人目：御堂さだめ
　三人目（イヴ最終）希冴姫
　二日目トップバッター：ルイン
　大トリ：加藤友紀
「……結局、ユーキちゃんがトリなんだな」
「べ、別に狙ったわけじゃないよっ？　ホントだよっ？」

「イヴで溜まった疲れを癒すのが私たちの役割」
癒し系二人をラスに持ってくるのはいいんだが、ユーキちゃんは兎も角ルインは若干癒されない気もする。
「私は慈愛の女神」
「その台詞回し便利だな」
しかし……。
「イヴが……荒れそうだな」
「セツの中で私たちは一体どういう存在になってるんですか」
「……察しろ」
別に嫌ってるわけじゃないし、むしろ好きではあるんだが、それとこれとは話が別だ。
「くぅ……前まではさだめとお兄ちゃん、二人きりのクリスマスが堪能出来たのに……」
「……前は、漏れなく拉致監禁薬物投与のおまけつきだったけどな。聖夜に銃声が響いた家庭はきっと家くらいだ」
「クリスマス特別バージョンということで、拘束具は十字架仕様だったね」
「薬物投与は銀の杯だったか。懐かしい思い出だ」
「いやその、そんなところでクリスマスっぽさを出さないでください」
「シャンパンタワーくらいは作ったぞ？」
「それも、家で個人的に作るものじゃないよ～」
「うぅ……真昼間のクリスマスイヴデートってなにすればいいの……？　やっぱり拉致監禁してその後一人占めくらいしか思いつかない～！！」
「ちょ、その後わたくしの番なのですから、そのようなことはやめてくださいまし！」
「……待ってください。よく考えたら、イヴの早朝とかイヴである利点殆どなくないですか？　ルインさん、ハメましたね！？」
「クリスマス本番の朝なら、私がプレゼント作戦も違和感なく実行

可能」
「いや違和感はあるだろ。バリバリあるだろ」
ぎゃいぎゃいと、一向に止まない喧騒と共に、俺たちは翌日のクリスマスイヴに臨むのだった。

番外編「クリスマス特別編　準備編」（後書き）

こんにちは。

というわけで、明日の短編ではアテナ、さだめ、希冴姫の三人が主役となります。……いいのか？　人気トップツーをいきなり二人とも出していいのか？……まあいいか。どうせその二人ギャグだし（酷）。

要するに、今回は人気トップな二人を差し置いて残り三人をピックアップする形になります。……と、すると何だかんだで人気四位のルインが一番得なんですけどね。ルイン、恐ろしい子！　まあなんだかんだで大トリのユーキちゃんも相変わらずダークホースってますけど。

それでは、なんとか明日アップしたいと思いますので、今回はこれにて。

それでは、悠でした！

番外編「クリスマス特別編　イヴ」（前書き）

……こんばんは。

申し訳ありません！　二十四日投稿に間に合いませんでした！

午前中から妙に用事が重なり、まともに時間が出来たのは夕飯を終えた八時程からでした……。

その分、クオリティを重視したつもりですので、是非お楽しみください！

番外編「クリスマス特別編　イヴ」

アルカナ～切り札の騎士～

番外編「クリスマス特別編　イヴ」

あの後、結局話し合いにより一人の持ち時間は一律六時間ということに決定し、俺は朝六時から深夜零時まで、ぶっ続けで三人の相手をすることになっていた。

メンバーからして、疲れ果てることは最早規定事項と言って過言ではないので、俺は前日からしっかり寝溜めしておこうと寝袋に包まり（真冬に、テントの中で寝袋に包まると言うこと自体が拷問だったが、もう慣れた）、トップバッターであるアテナの襲撃（比喩表現）をまどろみつつも待ちかまえていた。

「……りー」

……む。

「つー」

この声は……。

「わん」

アテ……。

「ふぁいあっ！」

どぱぁんっ！

「なぁぁぁぁぁっ?!」

瞬間、物凄い音と衝撃に、俺は文字通り飛び起きた。

「な、なんだ!?　さだめか!?　空襲か!?」

「って、さだめさんと空襲は同格なんですね！」
と、混乱していた俺は、横から聞こえてきた耳触りの良い丁寧語の主に目を向けた。
「……アテナ？」
「はい、アテナです。メリークリスマス、です。セツ」
「あ、ああ。メリークリスマス、アテナ。しかし、何だ今のは？」
「あ、これです。クラッカーです」
そう言って、アテナは両腕で抱えていたそれを俺の前に差し出した。
「……アテナよ」
「はい、なんですか？」
「これが……クラッカー？」
「……違うん、ですか？」
「あのな、アテナ。それはな……」
「はい」
「バズーカ、って言うと、思うんだ」
「？」
きょとん、と小首を傾げる姿は可愛い。だがしかし、抱えているバズーカ（８９ｍｍロケット発射筒　Ｍ２０改４型）で全てが台無しになっている。
「おめでたいイベントの時にはクラッカーを使うんだって渡されたんですけど……」
「……誰に」
「希望さんに」
「信じるなよ！　あいつ、絶対満面の笑み浮かべてコレ渡しただろ！　今頃あいつ大爆笑だよ！」
目覚ましバズーカはまあ、聞いたことはある。だが、あんなもん耳元でやられたら鼓膜が消し飛ぶ。今でも頭がぐわんぐわんして非常に気持ちが悪い。
「……いきなりヘビーな一日の目覚めに、俺は早くも心が折れそう

です」
「す、すみません。私、知らなくて……」
「まあ、目覚ましバズーカなんぞ知らなくてもいいが、クラッカーとバズーカの違いくらいは知っておこう。一般常識的に」
「は、はい……」
しょぼん、と肩を落として女の子座りするアテナを、これ以上叱る気にはならないので、手を取って立たせてやる。
「すみません……」
「もういいって。それで、今日はどうするんだ？」
「あ、はい！　その、色々考えたんですけど、やっぱりイヴといえど、こんな朝から見るべきところもそれほどなくって……」
「まあ、それはしょうがないな」
まだ六時だし。
「でもほら、見てください！　雪です。雪が降ってるんです！」
「おお……ホワイトクリスマス、だな」
テントから出て、外を見ればレッド寮の周りには雪が積もっていた。
「……ところで、バリバリ活火山あるようなこの島で、雪って積もるもんなのか？」
「様式美だよ、って希望さんは言ってましたけど……」
「……まさか、こんなくだらないことに世界的な力使ってないだろうなアイツ……」
「それは流石に……」
そう言うアテナも、若干言葉を濁している。言い切れないのだろう。
「それで、雪を使ってなにかするのか？」
「はい。私、昔からやってみたいことがあったんです」
いかにもワクワクしてます、という表情でアテナが両手をピトッと合わせる。
「やってみたいこと？」

「はい、雪だるまとか、かまくらを作ってみたいんです！」
問いかけてみると、アテナは満面の笑みでそう言った。
「……じゃ、作るか。一緒に」
「はい！」
俺とアテナは、朝食もそこそこに（ちなみに、アテナが作った。相変わらず、そこそこの出来だった）、レッド寮正面の広場で雪をかき集めていた。
「はぅ……どうしてお料理、あんまり上達しないんでしょう……」
「あんまり気にするな。普通に食べれるレベルではあるんだからさ」
「でもでも、さだめさんは何気に料理上手ですし、ルインさんは順調に上達してますし……ユーキさんは普通ですけど」
「希冴姫は出来ないけどな」
ちなみに、希冴姫の場合は一切上達しなかった。漫画のように吐いたり倒れたりはないものの、丸焦げだったり調味料の入れ過ぎだったりと、リアルに身体に悪そうな料理しかできない。
「まあ、そんなことはいいだろ。それより、この積雪量だとかまくらはちょっと厳しいな」
雪だるまくらいなら、雪をかき集めればできそうだが。
「残念です……」
「ま、あとは雪うさぎとかで勘弁してくれ」
「雪うさぎ！」
アテナの目が輝いた。
「作りたいです！　雪うさぎ！」
「はは、じゃあ作ろうか」
「はい！」
無邪気に満面の笑顔でアテナ。
「……こうしてれば普通に子供なんだがなぁ……」
笑顔で雪と戯れるアテナは、その白銀の髪とマッチして非常に絵になる。
「精霊、というか、妖精みたいな感じだよな」

「え？　セツ、何か言いましたか？」
「……いや、何でもない」
改めて真正面から語るのは恥ずかしすぎる。しかし、アテナは納得いかないようで、更に問い詰めてくる。
「いいじゃないですか。もう一度言ってくださいよ～」
「いいから、さっさと雪を集めなさい。胴体と頭、どっち作る？」
「う～仕方ないです。私、雪をコロコロするの好きなんです！」
「そっか。んじゃ胴体はアテナに任せた」
「はい！　セツは頭をお願いしますね！」
「おう。土台と合わせて作っておくさ」
「土台……？」
「いや、せっかくだし『スノーマンイーター』っぽくしようかと……」
いつかの飴細工ではないが、どうせ作るならデュエルに関係のある形にしてみたい。しかし、アテナは不満なようだ。
「ダメです！　ちゃんと、普通に可愛く作るんです！」
「そうか？」
まあ、アテナがそう言うならそうしようか。
「セツ、雪うさぎさんの目は……」
「ビー玉でいいか？」
「あっ、茶色いです。ダメですよ。赤い眼じゃないと」
「でも、普通のウサギは大抵眼が茶色くて、赤い眼のウサギは珍しいんだぞ？」
「あ・か・い・め・です！」
「……はい」
妙に迫力のあるアテナに押され、仕方なく赤いビー玉を調達してくる。そんな風にして、アテナとのデートは過ぎて行った。

「さだめのターン！」
「ターンエンド」
「テンション低っ！　そして、まだ終わらないよ！　スタンバイフェイズにも入ってない！」
「お前はテンション高いなぁ……」
「ちょっとお兄ちゃん。アテナとのデートだけで疲労困憊じゃ、先が思いやられるよ？」
「あの早朝バズーカが効いててな……」
「アテナそんなことしたの？」
「希望の差し金でな」
その後に雪だるまだ。雪遊びってのは案外体力を使う。
「で、お前のプランを聞こうか。下ネタ禁止で」
「いきなり選択肢を大幅に狭められた！」
「選択肢の大半が下ネタということに、年頃の乙女として何か思うところはないのか」
「むしろ、健康な乙女の証拠だと思う」
「男なら兎も角、乙女でその理論は初めて聞くな」
「女の子がエロくないと考える男子は馬鹿だと、さだめは思う」
「見させてやれ。夢を」
「少なくとも、さだめはエロエロです」
「改めて宣言するまでもなく、骨の髄まで知ってるよ」
「で、今日のプランだけど」
「おう、なんだ？」
もうこのナチュラルな流しも慣れてきたな。
「日頃ストレスを溜めているであろうお兄ちゃんのストレス解消になればと……」
「珍しく殊勝じゃないか。お前がストレス溜める第一人者であることに眼を瞑れば、だが」
「雪だるま割りを」
「却下だ」

俺の午前中の頑張り兼アテナとのデートの成果を無にするつもりか。
「えー」
「えーじゃない。俺がその提案を了承すると、本気で思ってるのか？」
「お兄ちゃんなら、雪だるまを作った時に内部に爆破解体用の火薬くらいは用意してるかなって」
「……ハハハ、ソンナバカナ」
「片言だよ」
「仕込んでない。自分一人で作るなら兎も角、あんだけ無邪気そうに作られたら、そんな悪戯はちょっとな」
ちょっと考えちゃったりしたのは内緒だ。
「むぅ、さだめの選択肢から下ネタとライバルへの嫌がらせ、拉致監禁系を排除すると……」
「最後のを、自主的に除外したことは、成長したと褒めてやろう」
「決めた！」
「聞こうか」
「徹底的に甘える！」
さだめはそう言って飛びついてきた。
「おわっと、ととと……」
一瞬何をしてくるか身構えたが、さだめは特に何をすることもなくゴロゴロと猫のように俺に身体を擦りつけてくるのみ。
「お、おい……」
「だいじょうぶ。な～んもしないからぁ～♪」
「だ、だけどな……」
体中を這い回れるのは若干……おうっ！？
「さ、さだめ！　顔に抱きつくな！」
「いつもなら、このまま股間まで持ってくところだけど……今日はおっぱいで我慢」
「何が我慢だ！　こらっ！」

顔面にうっすい胸を押しつけてくるさだめを引き剥がす。
「にゃー！　ならこう！」
「うおっ！？」
今度は俺の胸に顔をうずめてくるさだめ。
「これくらい良いでしょ？」
「……まあ、いいか」
胸元のさだめを軽く撫でる。
「むふ～……」
「ったく……」
たまに、コイツのことが分からなくことがある。俺のことを襲いかねない勢いで迫ってきたり、今のようにただ抱きつくだけで満足したり……。
「結局、お前は何を求めているんだ？」
「決まってるでしょ」
俺の呟くような疑問に、さだめはあっさりと答えた。
「さだめが昔から、ただ一番に望んでいるのは……」
きゅっ、とさだめが俺を強く抱きしめる。
「お兄ちゃんと一緒の未来。さだめは、それだけを望んでる。例えお兄ちゃんが、別の誰かと結婚しても、さだめはずっと、お兄ちゃんの一番傍でお兄ちゃんと一緒にいるの」
「別の誰か、か……」
「……さだめも、甘くなったもんだよね」
昔のさだめなら、例え冗談でも、間違っても言わなかっただろう。
「でもね。なんだか、それが悪くない気分なの。みんなと一緒の未来が……心地いいの」
「……そっか」
昔では考えられないほどに穏やかな顔で、俺の胸に顔をうずめるさだめ。
「あっ！　でもでも、第一嫁はさだめだよ！　っていうか、単独だと尚良し！　そこんとこは勘違いしないでよお兄ちゃん！」

「クッ、ああ。わかってるよ」
「誰かと結婚したからって、さだめも一緒じゃなきゃゼッタイ駄目だからね！」
「ああ」
大丈夫だよ。さだめ。
「……お前のいない俺なんて、想像もつかないからな」
そうして、やがてさだめが寝息を立て始めるまで、俺はゆっくりとさだめの頭を撫で続けるのだった。

「セツ様」
「おう、希冴姫。もうお前の順番か？」
「はい。よろしくお願い致しますわ」
「んじゃ、ちょいと外に行くか。コイツは……」
すっかり寝入ってしまったさだめを見る。
「妹様……寝てしまったのですわね」
「ああ。実はコイツの寝顔はレアだぜ？　よく見とけ。コイツ、寝顔は天使だから」
「赤ちゃんですか……でも、本当ですわね」
元々童顔だからか、さだめが寝てしまうと本当にあどけない顔で寝る。手足を畳んで、首を縮めて、胎児のような姿勢で眠る。
「これだけは、昔から変わらないな……」
「それは、終焉の傀儡であった頃から、ということですの？」
「ああ……こうやって……」
口元に指を持って行く。
「んむ……」
指に反応して、さだめが指を銜える。
「まあ……」
「俺の両親は、前にも言ったかもしれないが、さだめを避けていて

……コイツを寝かしつけたり、子守歌を歌ってやるのは俺の役目だった」

今思っても、不思議でならない。殺されかけたり、怖い目にばかり遭っていた筈の当時の俺が、どうしてさだめの面倒を見ていたのか。

「でも……」

「守りたい。……この寝顔は、素直にそう思わせてくれますわね」

「ああ……」

希冴姫が、眠るさだめの頭を撫でる。

「セツ様」

「ん？」

「わたくしが、何故セツ様に惹かれたのか、今やっと、わかった気がしますわ」

「そうか」

「セツ様は……ずっと、妹様の騎士で在られたのですね……。周囲全てを敵に回した、妹様の……」

「……そうだな」

希冴姫の言葉に、俺は頷く。だが……。

「そんなのは、当然だろう？」

俺は、兄なんだから。

「妹の騎士になるのは、兄貴の義務だろう」

誰も、守ってくれなくても。誰もが、眼を逸らしても。

「いや、だからこそ」

俺が騎士であるべきなんだ。兄貴である、俺が。

「だとしたら……皮肉ですわね」

「何がだ？」

「だって……わたくしは、さだめ様の騎士であるセツ様に、惹かれたんですもの」

「ああ……そうか」

「セツ様は、わたくしの知るどの騎士よりも素晴らしい騎士ですわ。

でもそれも、さだめ様をお守りするその姿勢からくるものであったのですから……」

少し寂しげに希冴姫。

「……なんだ。さだめといい、希冴姫といい。今日は随分と寛容……というか、謙虚だな」

「わたくしにだって、自信のなくなる時くらいありますわ」

肩を落とした希冴姫が、拗ねたようにそう呟く。

「ふぅん……」

俺は少し考えて、希冴姫の手を引いて外に出た。

「あ、あの？　セツ様？」

「いいから。来いよ」

戸惑う希冴姫に構わず、俺はレッド寮から離れ、近くの断崖へと向かった。

「セツ様……」

「良い夜だな。希冴姫」

「え？　ええ、その、はい……」

俺の真意が掴めないのか、イマイチ歯切れの悪い希冴姫。

「ちょっと注目」

ポケットからハンカチを取り出す。

「取り出しましたるは、何の変哲もないただのハンカチ」

「せ、セツ様？」

「ですが、私が一つ、念じますと……ワン、ツー、スリー！」

「わ、わたくしの剣……と？」

「エースの剣だな。ま、ちょっとした手品だ」

「いえその……エースが貸したんですか？」

「無論、無断拝借だ」

「……怒られますわよ？」

「アイツとの喧嘩は望むところだ」

どうせ何言っても貸してくれないだろうし。

「んで、希冴姫」

「は、はい……」
「俺と、決闘してくれないか？」
「え、ええ！？」
「もちろん、剣でな」
「そ、そんな……無茶ですわ！」
「いいから、ほら、構えた構えた」
「せ、セツ様？」
「構えないなら、こっちから行くぞ！」
俺は剣を振りかざし、希冴姫に切りかかる。
「くっ！？」
しかし、剣なぞ素人でしかない俺の剣は、希冴姫にあっさりと流される。
「ふっ！」
「うおっ！？」
キィンっ！
そのまま弾かれ、俺の（というかエースの）剣は希冴姫に弾き飛ばされる。
「うわっ！？」
一緒に弾かれた俺は、その場に尻餅を付き、希冴姫に剣を突きつけられる。
「せ、セツ様！？　す、すみませんわたくし……！」
「い、いや、いい……たた、やっぱ強いな。希冴姫」
「い、いえわたくしなど……それより、なぜこんなことを……」
「ああ……」
慌てたような希冴姫に、俺は落ち着いて答える。
「希冴姫、俺は……弱いだろ？」
「いえ、そんな……」
「実際に、ほら。希冴姫に負けた」
「それは……わたくしは精霊で、騎士ですもの……」
「ああ、そうだな」

それを、俺はあっさり認める。
「でも、俺も騎士だ。さだめの」
「ええ……」
そう。俺は弱い。腕っ節は特に。
「だからさ。お前が必要なんだよ。俺には」
「あ……」
「俺は、さだめを守るさ。でも、希冴姫。俺は、お前に守って貰いたい。駄目か？」
「だ、駄目だなんて……」
「じゃ、それでいいじゃないか、別に。何を気にすることもない」
「セツ様……」
「騎士に、騎士がいておかしいか？」
「……いいえ」
「んじゃ、それで決まりだ」
「……はい」
「じゃ、戻ろうか。何時までもここに居ても寒いだろ？」
「……いえ」
「ん？」
「セツ様さえよろしければ……しばらく、ここで」
「……是非もないさ」
「はい……」
そのまま、俺と希冴姫は雪の深々と降り積もる断崖の上で、しばしの間寄り添うのだった。

「もう、十二時を回ってしまいましたわね……」
「ああ」
「ここまで、ですか」
「それじゃ、剣を回収して帰るとするか」

「はい」
希冴姫に弾き飛ばされたエースの剣を探す。すると……。
「あ……」
「あ……」
地面に突き刺さったエースの剣は、半ばからポッキリと折れてしまっていた。
「セツ！　貴様～！！」
その剣をエースに返却した瞬間、即座に切れたエースが飛びかかってきたのは、態々書くまでもないことだろう……。

番外編「クリスマス特別編　イヴ」（後書き）

いかがでしたでしょうか？　とりあえず、ギャグとシリアスの配分は丁度いい配分になったかなと思います。

一人目、アテナはまあ、いつものようにほのぼのと。さだめは前半ギャグ、後半シリアス。希冴姫は全編シリアスで構成しました。読みやすく……なっているとは思いますが、どうでしょうか。

では、明日……というか今日こそは日が変わる前にアップしたいと思います。

それでは、悠でした！

番外編「クリスマス特別編　クリスマス本番」（前書き）

間に合いました！

いやー……良かった。また間に合わないかと思いました。一日更新、大変だ……よくもまあ、初めの頃はやってましたね。一日一話。

というわけで、今回のメインはルインとユーキちゃん。ボリュームもそこそこあるので、お楽しみください。

番外編「クリスマス特別編　クリスマス本番」

アルカナ～切り札の騎士～

番外編「クリスマス特別編　クリスマス本番」

昨夜の騒動で、眠りに就くというよりは就かされた俺は、心地良い歌声で、徐々に目覚めに導かれた。
「……ルインか？」
「おはよう」
ふわっ、と微笑むルインの手が俺の髪を優しく梳く。これは……膝枕？
「テーマは癒し」
「はは、そう言えば、そんなこと言ってたな」
「……本当は、妹たちの暴走で疲れた貴方を癒すのが目的だった」
「ああ……まあ、思ったほど疲れなかったな」
珍しく、さだめが然程暴走しなかったし。
「けど、銀騎士の折檻があったから、結果オーライ」
「いや、俺が怪我したことを喜ばれても困るんだが」
それじゃ本末転倒だろう。
「わかってる。冗談」
「ホントか……？」
まあ……膝枕自体は心地良いから別にいいけどさ。
「そういえば、昨日から思ってたんだが……」
「なに？」

「お前ら、クリスマスっぽいデートをする気ないだろ」
雪遊びはまあともかく（それでも、クリスマスっぽいわけじゃないが）、甘えたり、決闘したり（これは俺が誘った）癒しがテーマだったり……。
「仕方ない」
「なんで？」
「作者が、クリスマスデートなんてしたことないから思い付かない」
「切実だな」
普通のデートもしたことない癖に。
「というか、メタ会話をするな」
「貴方から振った」
「そうだけどさ」
その時、ぐ～、と俺の腹の虫が鳴った。
「お腹、空いてる？」
「ああ。そう言えば、昨日はアテナの朝飯以外食べてなかった」
さだめは時間になった瞬間に飛び込んできたし、希冴姫とのやり取りから直接エースに眠らされたので、夕食も食ってない。
「任せて」
ルインはそう言うと、俺の頭を優しく下ろして立ち上がった。
「簡単な朝食なら」
「作れるようになったか？」
「ん」
ぐっ、と小さくガッツポーズしてルインが胸を張る。
「私は日々進化する」
「そりゃ楽しみだ」
まあ、上達するまでには多くの（例、レッド男子）犠牲があったりしたらしいが、奴らも本望だろう。……多分。
「手伝いは？」
「……お願い」
少し考えた後、ルインはそう言った。

「珍しいな？　アテナだと嫌がることが多いんだが」
「基本的には私が作る。でも、ミスがあったり指摘するべきところを指摘したりして貰わないと上達出来ない」
「なるほど」
相変わらず、見栄は張らない。向上心もあって尚良し、だな。
「でも、余計な手出しはダメ」
「わかってるよ」
ルインの努力の成果だ。野暮はしないさ。
「……えっと」
ルインは若干たどたどしい手つきながらも、幾つかの器具を動かしていく。
「お、ルイン」
「あ、ぜいご取らなきゃ」
ルインはあっさりと俺が指摘しようとしたポイントに気付き、自分で鯵のうろこを取り除く。
その後も、ところどころ危なっかしかったが、終わってみれば致命的なミスは一つもなく、立派な朝食を完成させた。
「……どう？」
「うん。中々美味い。立派なもんだよ」
ほんのちょっと前まで器具の名前も覚束なかったことを思えば大進歩だ。
「あーん」
「う……まあ、いいか」
ルインが差し出してきた卵焼きを口に入れて貰う。
「どう？」
「美味いよ。味付けも前より丁度良くなったし」
以前は薄かったり濃すぎたりと不安定だったのが、随分と安定した味付けだ。
「よかった」
俺が褒めると、ルインは安心したように胸を撫で下ろす。

「……口移し」
「調子に乗るな」
ビシっ、と軽くチョップを入れる。
「……痛い」
「ったく……」
「じゃあ……」
「それよりルイン、この食卓見て、なんか気付かないか？」
また「あ～ん」とやろうとしていたルインを押しとどめ、俺は食卓を指差した。
「……？」
小首を傾げて食卓を眺めるルイン。
「気付かないか？」
「……わからない」
見当もつかないらしく、不思議そうに俺を見る。仕方ないので苦笑しつつ教えてやる。
「お前の分がないだろ」
「……あ」
初めて気付いたらしく、少し眼を見開いて声を漏らす。
「ったく、俺の分を用意するのに一杯一杯で、自分の分は忘れたのか？」
「……面目ない」
「いや、それだけ俺のこと考えてくれてたんだから、文句はないよ」
俺は席を立ってキッチンへ向かう。
「と、いうわけで、これはお礼だ」
「あ……」
ルインが作っている横で、こっそりと作っていたルインの分の朝食を並べる。
「これ……」
「材料からして、一人分なのはわかったからな。作っておいた」
折角なので、メニューは全く同じ。ご飯に味噌汁。焼き魚に卵焼

き。
「……ズルイ」
「え？」
喜ばれるかと思ったら、何故か返ってきたのは不満そうに、拗ねたように唇を軽く尖らせたルインの顔。
「貴方は男なのに、気が利き過ぎ」
「えーっと……」
そんなこと言われても……。
「……みまみま」
ルインは俺の作った朝食をみまみま食べて、また一言。
「……私のより美味しい」
「いや、その……」
「私のより美味しい」
「あー……」
「私のより……」
「いやまあ、ほら。俺はもっと昔からやってたから」
すっかり拗ねてしまったらしいルインの背中に声をかける。
「でも……」
「ふぅ……」
本格的に落ち込んでしまったらしいルインを、後ろから軽く抱きしめてやる。
「口移しは無理だけどな……」
箸を持ち、ルインの肩越しに卵焼きを口に運んでやる。
「これで、精一杯だからな……あ～ん」
……この台詞を、自分から素面で言うことになるとは。
「……あ～ん」
パクっ、もぐもぐ……。
「どうだ？」
「……やっぱり、美味しい」
「そうか？　それな……」

「？」
「お前の作った卵焼きなんだ」
「……え？」
パッ、と驚いたように振り向くルイン。
「ほら」
俺は皿に残った卵焼きを見せてやる。
「本当……」
呆然とした表情で二つの卵焼きを見比べる。
「こんなもんはな。気の持ちようだ」
ポンポン、とルインの頭を撫でながら俺は言い聞かせる。
「ルインの料理、美味かったぞ」
「……嘘」
「嘘じゃない」
「でも……」
「俺は、嘘は吐かない」
「……うん」
暫しの躊躇いの後、ルインは小さく頷いた。
「やっぱり、貴方はジゴロ」
「やめてくれ。今のはかなりクサかったって自覚はあるんだ」
態勢も態勢なので、頬が赤くなる。それだと悔しいので、少しくらいは反撃させてもらう。
「ルインだって、結構子供っぽいところあるじゃないか。拗ねてるルインは、中々可愛らしかったぞ」
「う……」
ルインの頬も赤く染まる。二人して顔を赤くしつつ、その後のデートを楽しんだのだった。

「最後はユーキちゃんか」

結局、ルインは時間一杯までは使わず、そこそこで自ら帰って行った。
『私は十分楽しんだ。貴方は次の時間まで、ちゃんと休んで』
その気遣いをありがたく受け取り、俺はユーキちゃんが来るまでの束の間の休息を楽しんだ。
「……こういうところで好感度稼いでるんだよな。ルインは」
わかっていても、嬉しいものだ。
「ルインさんは優しいから～」
「来たか。ユーキちゃん」
「うん。今日はよろしくお願いします。セツくん」
ぺこり、と頭を下げてくるユーキちゃん。
「ああ、こちらこそよろしく」
まあ、ユーキちゃんなら大丈夫だろう。ルインに休ませても貰ったし、元々ユーキちゃんは無茶言わないしな。

……と、思っていた時期が、俺にもありました。
「うおおおおおおっ!?」
「御堂～!!　覚悟!」
「テメエコラ御堂～!」
「すまん!　ユーキちゃん!　もうちょい付き合ってくれ!」
「わ、わかったよ～!」
ユーキちゃんも俺と一緒に走っていた。確かに、ユーキちゃん自身は特に無茶を言わなかった。だが……。
「いい加減にしろこの男の敵～!」
「ルイン様の手料理を～!!」
「っていうか昨日お前何してた!?」
ユーキちゃんとのデートは外でしていたのだが、その所為で眼を付けられてしまったのだ……あの、野獣たちに。

「アテナ様は何処だ!?　隠すとタメにならんぞ!」
「知らん!　今日はアテナと会ってない!」
「なら昨日か!?　昨日、俺たちの知らないところでよろしくやってやがったのか!?」
どうもコイツら、カップル狩りだか何だか知らんが昨日は巡回に出ていたらしく、レッド寮前で雪だるまを作っていたアテナの姿は見ていないらしい。しかも、滅茶苦茶早朝から眼を血走らせてパトロールしていたのが裏目に出たのだろう。アテナがレッド寮に来ていたことすら知らなかったらしい。
「だからって、今日来るかコイツら!?」
「わ、わたし、そんなに、持久走とか、ふぅ、ふぅ……得意じゃ、ないよ～……」
「くっ、ユーキちゃんが限界か……!」
場所はレッド寮近くの断崖。昨夜希冴姫と決闘した辺りだ。
「……ええい!　こうなったら……」
ちらりと後ろに迫るレッド男子（数名イエローやブルーも）に眼を向け……覚悟を決めた。
「ユーキちゃん!」
「ふぅ、ふぅ……え?」
「すまん!」
一言謝り、かなり足にきているユーキちゃんを思い切って抱えあげる。
「え、え?　きゃあっ!?」
「でぇりゃあああああああああっ!!」
『なにぃ!?』
後ろから、追手の生徒たちが驚愕する声が聞こえてくる。
「せ、せ、せ、セツくん!?」
腕の中からユーキちゃんのテンパった声が聞こえてくる。
「うおおおおおおおっ!?」
俺は断崖を、ユーキちゃんを抱えて滑り降りていた。

「だあああああっ！」
崖の僅かな突起に足をかけ、勢いを殺しつつ、崖を滑り降りる。
「ぬあああああっ！？」
流石の俺もこんな馬鹿げた行為をしたのは二回目（学校の屋上からエスケープしたことはある）だし、しかも今回はユーキちゃんを抱えているので全く余裕がない。
「ずあっ！？」
履いていたスニーカーの踵がメリメリッ、と音を立ててちぎれた。
「ぐはっ！？」
最後は姿勢を崩して、崖下に尻餅をつく。俺はそのままバウンドして、海中に真っ逆さま。最後の意地でユーキちゃんだけは地面に寝かせる。
「きゃわっ！？」
すまん！　ちょっと痛いかもしれんが我慢してくれ！
「ぷはっ！」
さ……。
「さむっ！？」
ま、真冬の海……舐めていた。
「や、ヤバい……」
て、手足が悴んで……。
「せ、セツくん手！」
「うくっ……」
震える手をユーキちゃんに伸ばす。
「よい……しょっ！」
ユーキちゃんの手を借りて、海中から上がる。
「す、すまんユーキちゃん……けけけ怪我は……」
「いいから！　わたしは大丈夫だからセツくん！　寮に戻らなきゃ……」
「お兄ちゃん！」
「セツ！」

騒ぎを聞きつけたのか、さだめやアテナたちもやってきた。
「我が運ぼう。人一人運ぶなら、我が一番速かろう」
手足が悴んで動かない俺を、エースが背負う。
「冷たっ！？　うぐ……」
俺の身体が思った以上に冷たかったことにエースが驚く。
「ひゃっ！？　こ、こら！　首筋に唇を寄せるな！」
そんなこと言われても、身体が動かないのでどうしようもない。
「そ、な……」
「う、動くな！？　く、くちっ、唇が！？」
「こらそこ！　こんな状況でなにラブコメってるの！」
「そんな羨ましい状況になるなら、わたくしが運びますわ！」
そんな、相変わらずのメンバーに囲まれながら、俺はレッド寮の希冴姫たちの部屋に運び込まれた。
「仕方……ないよね？」
暗転していく意識の中で、ユーキちゃんのそんな声が聞こえてきた。

「ん……」
運び込まれてすぐに意識を失った俺が眼を覚ましたのは、気を失ってから一時間程度経った後だった。
「なんだ……？」
身体があったかい。海に落ちて冷え切った体を、何かとても暖かいものが包み込んでいた。
「起きた……？　セツくん」
「ユーキちゃん……？」
「わっ！　こ、こっち見ちゃダメっ！」
耳元から聞こえたユーキちゃんの声に、振り向こうとしたが、慌てたようなユーキちゃんの声と共に顔が正面に固定された。

「ユーキちゃん、なにして……っ！？」
そこで、気づいた。ユーキちゃんの声が、妙に近くから聞こえたことに。そして同時に、身体を包んでいる、この暖かさの正体に。
「ユーキちゃ、まさっ！？」
動揺のあまり、言葉が最後までしっかり発音できなかった。
「しっ、下着！　下着は……着てるから～」
「い、いやそれ……」
要するに、下着姿なんだろ……！？
「だ、だってセツくんすっごく身体が冷たくて……あ、あったためるのは人肌がいいって……だから～……うぅ」
ユーキちゃんの表情はここから見えないが、可哀そうなくらい真っ赤になっているであろうことは容易に想像がつく。そして、それは多分、俺も同じなのだ。
「だからって……これは、不味いだろ……」
素肌に直接感じる以上、俺も半裸なのだ。それくらいは、回転が鈍くなった今の頭でも理解できる。いや、出来てしまう。
「セツくん……」
耳元で聞こえる、ユーキちゃんのこの切なげな声もアウトだ。守護神エクゾードクラスの硬さを誇る俺の理性だって、無敵じゃないんだ……！
「あっそ、そうだ！　さだめ、さだめたちはっ！？」
アイツらが、特にさだめが、こんな状況を見過ごす筈がない。両刃の剣だろうが、今はアイツが来てくれることを祈るしか……。
「さだめちゃんは……来ないよ」
「な……」
なんで……。
「今は……わたしの時間、だから～」
「り……」
理由になってない……っ！
「ゆっ、ユーキちゃん！　も、もう大丈夫、暖まった！　暖まった

から……！」

兎にも角にも、この状況から脱しようと、俺はすっかり火照り始めた身体をアピールして解放を促す。しかし……。

「だめっ！」

「だ、だめって……」

思いつめたような声で抱きとめられる。押し付けられる胸。感じる鼓動が俺の理性を溶かしていく。

「セツくん……」

「お、俺はもう暖まったから……だから」

苦し紛れに繰り返したその言葉は、しかし。

「わたしが……寒いの」

「っ！」

あっさりと、跳ね除けられた。

どくん、どくん……。

トクン、トクン……。

鼓動が重なる。混じり合う。寒いと言うユーキちゃんの吐息は、しかし確かな熱を帯びていて……。

「ユーキ、ちゃ……」

「セツ、くん……」

お腹に回されたユーキちゃんの腕が、徐々にその高度を上げて行き……。

「あjf@おあいhふあひゃづしあ「dヴぁsヴぃでゃshv～～～～！！」

言葉にならない絶叫に、全ての空気が弾き飛ばされた。

「さ、さだめっ！？」

「さだめちゃん！？」

「くぁwせdrftgyふじこlp;@:」

相変わらず意味不明の言語で叫び続けるさだめの全身が真っ赤だった。興奮し過ぎて全身の毛細血管が破裂しているのか。

「……さすがにやり過ぎ」

「あ、ルインさん……」
思わず俺と離れたユーキちゃんに、ルインがコートをかけていた。
その声には、珍しく険が篭っていて、確かな怒りを感じさせる。
「コー……ホー……」
「か、完全にダークサイドに堕ちてらっしゃる……」
充血し過ぎて赤い眼を光らせて、さだめが深く息をする。
「セツ……」
「あ、アテナ……」
「流石に……それはダメです」
「はい……」
静かに、しかし初めて聞くほどに冷たい声色のアテナに身を縮めて返事をする。スッ、と首筋に冷たい感触。
「……辞世の句を詠むが良い」
「え、エース……さん？」
「は、は、は……破廉恥な……くれいじー、だ」
動揺し過ぎてクレイジー、がひらがなになっている。
「お兄ｔｙン……」
「さ、さだめ……」
ようやく多少発音がマシになった（それでも発音し切れてない）さだめがその手を俺に伸ばしてくる。
「うぐっ……」
その手が触れた頬が赤く染まる。掌が血塗れになっていた。
「キ、キキキキキ……」
「さ、さだめさ～ん……？」
完全に眼がイってらっしゃる我が妹に呼びかける。
「キュケーーーーーー！」
「ぎゃあああああああっ！　トランクスを剥ぐなぁぁぁぁ！」
イっちゃった眼のまま、唯一の聖域に手をかけるさだめから逃げる。
「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@：」

またしても意味不明になったさだめの猛攻を掻い潜りながら、俺はやっぱ最後はこうなるのか、と半ば諦観の溜息を吐くのだった。

番外編「クリスマス特別編　クリスマス本番」（後書き）

こんにちは。

本当はこの後に、全員でパーティを書く予定だったんですが、尺と時間の都合で全面カット。非常に残念です。ルインとユーキちゃんがスペース取りすぎました。

ちなみに、気付かれた方もいらっしゃるかもしれませんが、今回、書くヒロインにはそれぞれ別々のテーマがありました。まずアテナは「ほのぼの」或いは「ほのラブ」。次にさだめが「ギャグ&シリアス」。希冴姫が「シリアス」。ルインが「甘々」。ユーキちゃんが「お色気」です。ユーキちゃん……。

そして、最後のシーン希冴姫が出てませんが、希冴姫は耐えきれずに気絶してました。ウブなので。

それでは、悠でした！

第四期第十二話「旅立ち……そして現れる終焉」（前書き）

この辺りから、割込じゃなく普通に新規更新枠にしますね。そろそろ良いかな、と思うので。

第四期第十二話「旅立ち……そして現れる終焉」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第十二話「旅立ち……そして現れる終焉」

「よし、っと。こんなもんかな」
俺は荷物を纏めて、旅立ちの準備を整える。
「セツ～準備出来ましたか？」
「ああ、アテナ。とりあえずな。アテナの方はどうだ？」
「私は、そんなに荷物とかありませんし……というか、セツこそ、何でそんなに沢山？」
「少しくらいは調理器具とか、非常食とかも持っていた方がいいだろ」
後は、研究資料とかを諸々。まあ、それほどの大荷物ではない。
「そうですか。もしかして、私たちも何か持って行った方がいい物ありますか？」
「いや、大丈夫だ。心配するな。アテナたちは、デュエルディスクとデッキだけ、しっかり忘れなければいい」
「はい。わかりました。それじゃあ行きましょう。みんな待っていますよ」
アテナに促され、荷物を持って城門まで降りる。
「あ、来た来た。お兄ちゃん！」
「おはようさだめ。昨夜は、良く眠れたか？」
「うん。もうバッチリ！」

「……図太いな。お前は」
俺たちはと言えば、実はあんまり眠っていない。その理由は、当然と言えば当然だが、デミスのような大物があっさり侵入してきたもんだから、城の中でもゆっくりは眠れなかったからだ。
「申し訳ありません。主様。これでも、警備は厳重にしていた筈なのですが……」
「終焉の前には、儂らの警戒なぞ通用せんと言われたようで腹が立つわい」
「道中は、誰かが寝ずの番だな」
「ああ、我らで交代制にする。一晩につき三人のローテーションが妥当か？」
騎士たちも、そのことには責任を感じて昨夜から徹夜で見回りを行っていたようだ。それでも、傍目には疲れが見えない辺り、流石に騎士だ。
「……おはよう」
「お、来たかルイン」
そして、昨晩の主役、といっても過言ではないルインは、消耗していたのもあって一番の厳戒態勢の中、安心して眠りについていたらしい。番についていたのがネイキッドらしいが、むしろそれはネイキッドが危険要素な気がしてならん。
「はっはっはっ！　案ずるなセツよ。流石の我も、昨夜のようなことがあって尚煩悩に集中を乱されるようなことはない」
「……まあ、実際ルインは無事みたいだし、いいけどな」
ちなみに俺も厳戒態勢だった。主に見回りの騎士の中で手が空いた騎士が見張り。ただし、エース以外。
「……何故だ。我が最も戦闘技術には長けているというのに」
とエースは不満たらたらだったが、さだめが猛反発したので他の連中が見張りをしていたらしい。さだめは、
「エースさんは危険だよ……さだめをして、お兄ちゃんへの感情の種類が掴めない。パッと見ライバルにしか見えないけど……でも、

なんか違う。しかもそれを天然でやっているんだから……危険な橋を渡る愚は避けるべきだね」

とかなんとか、訳知り顔で考察していた。

「それじゃ、そろそろ出発するか」

全員揃ったことを確認し、俺は皆にそう声をかけ……。

「何処に行くの～？　わたしも連れてってよ。セツくん」

「っな！？」

「馬鹿なっ！　何時の間に！？」

背後から、抱きすくめられる感触。耳元で聞こえた声は、聞き慣れた、何処か間延びした柔らかな声質。

「ユーキ……ちゃん」

俺の声に、ユーキちゃんはクスリと妖艶に微笑んだ。

「おのれ！」

一瞬惚けていたエースたちが、慌てて剣を抜く。

「待て！」

俺は、今にも飛びだしそうなエースたちを制止する。

「何故だ！？」

「クス、いい判断だよ。セツくん」

そう、ユーキちゃんが言った瞬間、周囲が闇の炎で包まれた。

「こ、これは……」

「闇のゲーム」

誰かの戸惑う声に、全員の中でも、特に顔色の悪いルインが短く答える。

「……このタイミングでの襲撃は、一網打尽が目的か？」

「流石セツくん。一発で見抜いちゃうんだ」
でも、とユーキちゃんは更に言葉を重ねる。
「それだけじゃないよ。どうやら、適当な小物をぶつけても、セツくんたちが強くなって行っちゃうだけみたいだから～。わたし、ゲームのラスボスさんみたいに親切設計してないよ？」
「……なるほどな」
ユーキちゃんは、元々結構なゲーマーだったからな。その性質もわかっているわけだ。
「……やっぱりだ。まだ、ユーキちゃんは消えてない。お前の中にいるんだな。終焉の闇」
俺の言葉に、終焉の闇は頬をピクリと動かした。
「当たり前だよ～？　わたしは、加藤友紀なんだから」
「そうだな。表面上はともかく、根っこにはユーキちゃんが生きている」
そう言うと、終焉の闇は苛立たしそうに舌打ちを一つ。
「……セツくん。今の状況わかってる？　セツくんたち、もう逃げられないよ？」
「ああ、そうだな。少なくとも、こうやって抱かれてちゃ、俺は逃げられそうにない」
「……俺、は？」
終焉の闇の言葉尻を取った疑問に、俺は笑って見せる。
「ああ。“俺は”、だ」
「っ待って！」
昨夜の会話から、俺が何をするか見当がついていたのだろう。ルインが慌てて制止しようとするが、もう遅い。
「これは……！」
「転送魔法陣？」
「セツ！？」
さだめたちはともかく、アテナたち精霊の知識を持つ者にはわかったらしい。アテナは悲痛な表情で俺に向かって叫ぶ。

「お兄ちゃん！　何、何しているの!?　これ何!?」
さだめも、珍しく狼狽した様子で叫んでいる。
「……セツくん」
背後から抱きすくめられているので、ユーキちゃんの表情はわからない。が、冷たい表情をしているであろうことは容易に想像がついた。
「……俺の力は転送とか、繋げることに長けているらしくてな。例え闇のゲームの結界で閉ざされていようが、無理矢理人間界にみんなを送ることくらいはわけないらしい」
俺の説明で、皆もその事実に気が付いたのだろう。声を荒げて迫ってくる。
「おいセツ！　テメエ何考えてやがる!?」
「セツ！　馬鹿な真似はやめて、これ解いてください！　みんなで戦えば……」
半ば以上涙目のアテナの言葉に苦笑する。
「そっちこそ、馬鹿言え。どちらにせよ、デュエルってのは一対一でやるのが基本だろ。応援なら、傍にいなくたってできる。それよりも、お前らをこの危険地帯から逃がす方が先だ」
説明しても、アテナはふるふると首を横に振るだけだ。
「お兄ちゃん！」
「さだめ、我儘はなしだぞ」
「違うよ！　これは、我儘なんかじゃない！」
わかってる。でもな、さだめ。
「俺は、お前を守る。昔から、それだけが俺の全てだったんだ」
「っ……」
「その上、この世界にはお前と同じように、守りたい奴らがこんなに増えちまった。なら、やるしかないだろ……！」
アテナたちを包む光が更に強く発光する。
「大丈夫。ここで俺が、ユーキちゃんに勝てば万事解決なんだから。……人間界で、待ってろ」

「待っ……！」
最後まで言わせず、アテナたちはその場から消えた。
「……ふぅん、すごいね。わたしの干渉を物ともせずに人間界と繋げるなんて」
「何だかんだ言って、ユーキちゃん邪魔しないでいてくれたからな。首でも絞められたら出来ないところだった」
「そっか。じゃあそうしておけばよかったね～」
俺が逃げないことはわかったのか、ユーキちゃんは俺から離れて、俺の正面に立つ。
「でも、セツくんだけ残ったのは下策だね。どうするの？　あの子たち、立ち直れないかもよ？」
「その辺は、頼りになる奴に任せるさ」
「……頼りになる奴？」
「ま、どうせこの状況も想定して動いているような奴さ」
俺の言葉に、終焉の闇は何か思うところがあるのか思案顔になる。
「……まあいいや。とりあえずわたしは、ここでセツくんをわたしのものにしちゃうね」
「……どうやら、俺の童貞人生は長く続きそうにないな。無事に帰っても、さだめに力尽くで奪われそうだ」
男としちゃ、喜ばしいことなのかもしれんが、どうにも素直には喜べないな。冗談めかしてそういった俺に、終焉の闇はユーキちゃんの顔でクスクス笑う。
「セツくん、この状況でも自然体だね。凄いよ。でも……」
終焉の闇の目が、黒く怪しく輝いた。
「どうする気？　騎士さんたちまで逃がしちゃって。戦えないよ？」
「……俺が、異世界の人間だってことは知っているよな？」
唐突な俺の言葉に、終焉の闇は怪訝そうな顔をする。
「俺の世界じゃ、一人の人間が複数のデッキを使うことなんてありふれていてな。俺はパーミッションだけじゃなく、バーンも、コントロールも、特殊勝利も、ビートダウンだって多少は使っていた」

「それが？」
「……俺が、アルカナだけだと思うなよ」
俺は腰のホルダーからデッキを取り出し、デュエルディスクにセットする。
「こうなることは想定済みだ。エースたちがいない状況でも戦えるように、別のデッキは組んでおいた」
「フフフ……アハハハハハッ！　うん、いいよ。遊んであげる。愉しいデュエルにしようね。セツくん！」
「愉しませやしない。ここで、全て終わらせる！」
「「デュエル！！」」

「待って！　セツ！」
私が伸ばした腕は、セツに届くことなく空を切りました。
「ここは……レッド寮前か……？」
困惑するみなさんと、脱力し、力なく座り込むことしかできない私たち。
「クソッ！　馬鹿が！　主を守らず、逃げ帰る騎士が何処に居る！？　自分を犠牲に、騎士を逃がす君主が何処に居る！？　あの、クレイジーがぁ！」
エースさんは今まで見たことがないくらいに荒れていて、傍に居るジャックさんやキングさん、テンスさんも、常ならぬ殺気立った様子で拳を握りしめています。
「……す」
「さだめさん？」
「……犯す」
「え」
「犯す。力尽くで奪う。素っ裸にひん剥いて縛りあげて吊るし上げて思う存分視姦してから凌辱してやる……！　じゃなきゃ、絶対割

に合わない……」
「さ、さだめさん……？」
なんだかこう、聞いちゃいけないくらい物騒というか……危険な言葉の羅列に思わず引いてしまいました。
「……でも、セツ」
気持ちは、わからなくはないです。これは、許せません。
「セツは、ウソ吐きです。離さないって言ったのに……私が離れた時は、無理矢理強引に引き止めてくれたのに……なのに、自分から手放さないでくださいよ……」
「ぐすっ……うっ、えぐっ」
ルインさんは、泣いていました。普段の冷静な面影が見えないくらい、弱々しい姿で、子供のように。
「わ、わたっ、私は……知ってたのに……彼、がっ……こうする、って……なのに！」
止められ、なかった。そう言って、ルインさんはまた泣いてしまいました。
セツは……あんなこと言ってましたけど。セツのこと、信じてもいますけど。それでもあの状況では、最悪を意識せずにはいられません。エースさんたちもここにいるのに、どうやって抗うつもりなのか、見当もつきません。
「セツ……！」

「まったく。セツにも困ったもんだね。これでも僕は忙しいって言うのにさ」

「あ……」

「大丈夫？　アテナ。しっかりしなさい。落ち込んでても、前には進めないわよ」
　聞き覚えのある声が背後から聞こえてくるのと、背中を強めに叩かれるのは殆ど同時でした。
「光、お姉さん。希望さん……」
「雰囲気が暗いね。まるでお通夜だ」
「しょうがないじゃないですか……」
「負けたから？」
「負けてません」
「どうかな。セツ一人を残して逃げ帰ってきたのは、負けじゃないのかな？」
「……」
　希望さんの言葉は正論で、私は黙り込んでしまいました。
「まったく、セツにも困ったもんだ。トカゲの尻尾切りで尻尾じゃなく心臓切り捨てたようなもんじゃないか」
　溜息を吐きながらそんな風に評する希望さん。
「……うるさいからちょっと黙って」
「おやおや。嫌われているのは承知しているけど、そう邪険にしないでくれ。一応、僕は君たちを助けに……」
「ちょっと黙っててよ！　今さだめたちは……」
「落ち込んでいる暇が、あると思っているのか？」
「っ！」
　ふいに温度の下がった冷たい声に、当たり散らそうとしていたさだめさんの言葉は遮られました。
「自体は切迫している。詳しくは省くが、今の人間界は破滅の光によって危機が迫りつつある。そして、精霊界では終焉の闇。破滅の光と終焉の闇が同時期に、別々の世界でその活動を本格化しているんだ。正直な話、二つの世界の終わりが近い」
「破滅の……光？」
「希冴姫が消滅したのは破滅の光による影響だ。詳しい話は省く」

希望さんの言葉に、私たちは呆然とするだけでした。
「僕は、破滅の光の影響がなるべく小規模で済むように手を打つので精一杯。君たちに全面協力している暇はない」
「なら、ほっといて」
「放っておいても世界は滅ぶ。だから君たちが落ち込んでいるとか、そんな余計な手間は省略させてもらう。一刻も早く精霊界に戻り、終焉の闇を止めてくれ」
「そんなの、当たり前……」
「ああ、言い方が悪かった。今の君たちでは、どうにも頼りない。君たちは力を得るのが先決だ。だが、今は呑気に冒険の旅に出ている余裕はない」
「じゃあ、どうすれば」
「僕が君たちを、行くべき場所へと直接送ろう。力を使ってね」
希望さんが力を使う。それはつまり……。
「そ、それじゃあ終焉の闇が……」
「ああ、力を増すだろう。だが、悠長に時間をかけて世界が滅びるくらいなら、多少相手の力を割増にしても僕が何とかするしかない」
確かに、破滅の光というものは良く分かりませんが、終焉の闇は既に行動を起こしています。時間はかけられません。
「今は巧遅より拙速を尊ぶ。君たちの精神状態も心配ではあるが、その辺は各自乗り越えてもらうしかない」
「ま、待って！　お兄ちゃんは……」
「セツなら、勝てなかったとしてもすぐには死なない。終焉の花婿でもあり、セツ自身が賢い。下手は打たないさ」
そうですね……セツを助けるためにも、今は……。
「……『倒れるのは、泣くのは、全てが終わってからだ。今はただ、前へ。がむしゃらにでもいいから、前へ……！』彼の、言葉。彼の覚悟」
ルインさんがボソリと呟いた言葉は、私たちの気持ちも奮い立たせてくれました。

「セツ……！」
「必ず助けるから。お兄ちゃん」
「もし、セツがこのまま勝てばよし。勝てなければ、助け出す。いいね？」
全員、黙って頷きます。
「……本来なら、こんな風に君たちに干渉してしまうのは下策なんだが……手段は選べないからね。すまないけど、世界は任せた。セツを救うついでにでも救ってやってくれ」
最後に冗談交じりのそんな台詞を言って、希望さんは私たちの周りに魔法陣を敷きました。
「当然。世界はともかく、お兄ちゃんは必ず救う。早くしないと、ユーキさんに食べられちゃうし」
「心配するベクトルが違いますけど……セツは、絶対助けます」
「……彼から離れない。そう誓ったから」
「当然だ。希冴姫共々、奴は特別痛い一撃をくれてやらねば気が済まん」
他の皆さんも、その気持ちは同様で、一斉に頷きます。
「ありがとうございます。希望さん。おかげで、何とかなりそうです」
「……礼はいらない。正直、ロクな手助けができなくて謝りたい気持ちで一杯だよ。さあ、行ってくれ」
セツの時もみた、強い光と共に私たちは再び精霊界へ戻るのでした。

第四期第十二話「旅立ち……そして現れる終焉」（後書き）

改訂前は、確かセツが使うデッキはなんでしょう！　とかクイズしましたね。結局、ヒントの出し方が悪かったのか誰も正解者居ませんでしたが。今回はすぐに判明しますよ。

それでは、悠でした！

第四期第十三話「輝ける鋼核ＶＳ終焉の闇」（前書き）

十三話目です。いやまあ、不吉な数字。流石終焉。狙ったわけでもないのにこんな数字です。明日更新だったら尚不吉でしたね。まあタイトルでセツが使うデッキはわかるでしょう。そうです。あの使いにくいことで有名なあのデッキです。

第四期第十三話「輝ける鋼核ＶＳ終焉の闇」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第十三話「輝ける鋼核ＶＳ終焉の闇」

「先攻は譲ってもらっていいか？」
「どうぞ～」
「んじゃ、遠慮なく。ドロー！」
気楽そうな、それでいて鋭い気配に促され、俺はデッキからカードをドローした。
「俺はモンスターを一体、守備表示でセット。カードを一枚セットしてターンエンドだ」
「……わたしのターンだね。ドロー」
恐らく、俺に先攻を譲ったのは俺のデッキがどういうデッキなのかを確認する意味合いもあったんだろう。裏守備と一枚のリバースカード。これじゃあ、何もわからないに等しい。思惑は外せた。
「わたしは『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を召喚。攻撃表示」
『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』ＡＴＫ１３００
「む……」
しかし、こちらもユーキちゃんの初手に首を傾げざるを得なくなった。聞いたことのないカードだ。
「攻撃力１３００か……」
攻撃力だけなら、それほど脅威は感じない。が、ただのモンスターではないだろうことは、あの『終焉の精霊（ジ・エンド・スピリッツ）』を彷彿とさせる名前

と外見で容易に想像がついた。
「バトルフェイズ。『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』で、セツくんの裏守備モンスターに攻撃。『ジ・エンド・ファング』！」
闇の獣が切り裂いたのは、岩石の化け物。その額の紋章が輝く。
「あれは……！」
「破壊された『コアキメイル・ロック』の効果を発動する！　戦闘によって破壊され、墓地に送られた時、デッキから『コアキメイルの鋼核』を一枚選択し、手札に加える！」
『コアキメイル・ロック』ＤＥＦ１０００
これで、ユーキちゃんにもわかっただろう。俺の新しいデッキ。コアキメイルが。
「……やってくれるね～。なるほど、わたしに対してはこの上ない選択かもね」
「お褒めに預かり光栄だ」
コアキメイルは、扱いの難しいビートダウンとしての見識が一般的だが、その実光・闇属性に対するメタ効果を持つモンスターを多く擁するテーマデッキ。その上、扱い易い専用カウンター罠まで持っているとなれば、この選択は間違っていない筈。
「以前のわたしはサイレント。つまり光属性主軸。そして今は……」
「終焉の『闇』。少なくともどちらかを使ってくるのは間違いないと思っていたよ」
ちなみにこのデッキなら、アテナ、さだめ、ルインにも有効な、ある意味俺の秘蔵デッキ。みんな結構光と闇に偏っているからな。
「ふふ……まさかわたし用にデッキを組んで来ているとは思わなかったよ～。光栄だね。セツくん。わたしはカードを一枚セット。ターンエンド」
「俺のターン、ドロー！　俺は手札から永続魔法『コア転送ユニット』を発動する！　手札の『コアキメイルの鋼核』を墓地に送り、デッキから『コアキメイルの鋼核』を手札に加える」
「デッキ圧縮だね～」

「そして更に魔法カード『コア濃度圧縮』を発動。手札の『コアキメイルの鋼核』をオープンし、『コアキメイル・フルバリア』を捨ててカードを二枚ドロー！」

更にデッキを掘り進める。このデッキは特性上、なるべく速攻で決めてしまいたい。

「俺は『コアキメイル・ウルナイト』を攻撃表示で召喚。効果発動！　手札の『コアキメイルの鋼核』をオープンし、デッキから『コアキメイル・サンドマン』を特殊召喚する」

コアキメイルの要であるウルナイトと、トラップに対するカウンターモンスターであるサンドマン。どちらも攻撃力は１９００以上！

『コアキメイル・ウルナイト』ＡＴＫ２０００

『コアキメイル・サンドマン』ＡＴＫ１９００

「バトル！『コアキメイル・ウルナイト』で『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を攻撃！」

「きゃ……！」

ユーキＬＰ３３００

「更に『コアキメイル・サンドマン』で……」

「戦闘で破壊された『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』の効果を発動。デッキから同名モンスターを特殊召喚できるよ～。『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を守備表示！」

『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』ＤＥＦ１０００

「くっ……そう簡単にはいかないか。『コアキメイル・サンドマン』で『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を攻撃！」

「効果により、デッキから『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』をリクルートするよ～」

『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』ＤＥＦ１０００

「……俺はターンエンドだ。エンドフェイズ時、ウルナイトの維持コストとして手札の『神獣王バルバロス』をオープン。更にサンドマンの維持コストとして『コアキメイル・ガーディアン』をオープンする」

「ふふ、わたしのターン、ドロー！　わたしは永続魔法『加速する終焉』を発動するよ～」

「加速する終焉？」
「このカードは、互いのエンドフェイズに自分の手札・ライフ・デッキ・フィールドの内、どれかを選んで終焉を加速するカード。手札なら、一枚を墓地へ。ライフなら８００ポイント。デッキなら上から五枚を除外。フィールドなら一枚破壊というように。どれを選ぶかは、ターンプレイヤーの自由だよ」
「……なるほど。そんな厄介なもんは使わせたくないな。カウンター罠『鋼核の輝き』！　手札の『コアキメイルの鋼核』をオープンすることで、魔法・罠の発動と効果を無効にし、破壊する！」
「残念。わたしもカウンター罠『魔宮の賄賂』を発動するよ。『鋼核の輝き』を無効にして、セツくんはカードを一枚ドローだよ」
「くそ……」
　得意のカウンターにカウンターを返され、俺は苦虫を噛み潰したような顔になっていることだろう。
「手札から速攻魔法『終焉の魔薬』を発動。手札を一枚捨てて、相手モンスター一体の攻撃力をこのターンのエンドフェイズまで０にするよ～。私が選択するのは『コアキメイル・ウルナイト』だよ」
　『コアキメイル・ウルナイト』ＡＴＫ０
「なにっ！？」
「『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を攻撃表示に変更。『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』で『コアキメイル・ウルナイト』を攻撃。『ジ・エンド・ファング』！」
「くっ……？」
　ウルナイトが破壊され、来ると思っていた衝撃がこない。
「あ、言い忘れていたけど、『終焉の魔薬』を使ったターン、セツくんは戦闘ダメージを受けないよ。良かったね？」
　クスクスと笑うユーキちゃん。
「うん。それじゃあ『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』の効果を発動するよ」
「え？」
　リクルートだけじゃなかったのか？
「『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』が相手モンスターを戦闘によって破壊した時、自

分の墓地に存在する『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を一体特殊召喚できる。でも、この効果で特殊召喚された『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』はこのターン攻撃できない」

これ以上の攻撃はない、か。とはいえ、厄介な壁モンスターだ。倒しても再び現れ、攻め込まれればその数を増やす。

「終焉は終わらない。終焉を終焉に導くことが出来る者はいないよ。わたしはカードを一枚セット。エンドフェイズに『加速する終焉』の効果でデッキからカードを五枚除外する」

ユーキちゃんのデッキから落ちたのは『終焉の死神（ジ・エンド・グリムリーパー）』『終焉の精霊（ジ・エンド・スピリッツ）』『終焉の焔』『奈落の落とし穴』『キラー・トマト』の五枚。

「アハハッ！『終焉の死神（ジ・エンド・グリムリーパー）』の効果発動！　このカードがデッキから直接除外された時、自分と相手の墓地に存在するカードを一枚ずつゲームから除外するよ～！　わたしが選択するのは『終焉の魔薬』と『コアキメイルの鋼核』！」

「なんだと!?」

不味い……ただそれだけが頭にある。要である鋼核が一枚除外され、残るは手札の一枚とデッキに一枚。コアキメイルにおいて、この状況はかなり厳しい。

「ターンエンドだよ。さあ、セツくん頑張って」

「くっ……俺のターン、ドロー！」

落ち着け……ユーキちゃんのデッキは大まかに言えば多分、除外系の闇属性。今のところは、余り攻撃力の高いモンスターはいない。とはいえ、ビートダウンで押し切れるか……？

「俺は『コアキメイル・デビル』を攻撃表示で召喚！　コイツがいる限り、メインフェイズ中光と闇属性のモンスター効果を無効にする！」

『コアキメイル・デビル』ＡＴＫ１７００

「っ……」

ユーキちゃんが苦々しげに顔を歪める。やはり、コイツの効果は苦しいらしい。

「バトルだ！『コアキメイル・デビル』で『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』に攻撃！」
「リバースカード『次元幽閉』！　その厄介なモンスターには消えて貰うよ！」
「そうはいかない！『コアキメイル・サンドマン』の効果発動！　このカードをリリースすることで罠カードの発動と効果を無効にし、破壊する！」
　デビルの攻撃は止まらない。カマイタチを纏った爪が影の狼を切り裂く。
「くっ……！」
　ユーキＬＰ２９００
「……俺はこれでターンエンドだ。エンドフェイズに『コアキメイル・デビル』の維持コストとして手札の『クリッター』を見せる」
「それと、『加速する終焉』の効果だよ」
「……ライフダメージを選択する」
　周囲の闇が、俺に纏わりついてくる。
「ぐぁ……！」
　セツＬＰ３２００
　纏わりつく闇が、俺の身体から体力を奪っていく。
「わたしのターン、ドロー！　苦しいの？　セツくん。すぐ、楽にしてあげるからね」
「っ……は、余計な心配だよ。ユーキちゃん」
　この程度の痛みで音を上げるはずもない。伊達にさだめの兄を１９年もやってない。
「……そう。じゃあ、参ったって言わせてあげる。そんな、使い慣れてない急造デッキでわたしに挑んだ事を後悔しながらね」
「やってみろ」
「っわたしは、手札から『闇の誘惑』を発動！　デッキからカードを二枚ドローして、手札の闇属性モンスターを除外する！　除外するのは『ネクロフェイス』！」
　例の不気味な顔の人形が現れる。さだめとデュエルしたときも、

コイツの効果には苦しめられたもんだが……。
「無駄だ！『コアキメイル・デビル』は例え除外された先で発動する効果であっても、闇属性モンスターの効果を無効にする！」
『ネクロフェイス』の効果も、例にもれず無効化する。
ギリッ、とユーキちゃんの口から苛立たしげな歯軋りが聞こえた。

「……生意気」

「なに？」
「生意気。生意気だよセツくんは。わたしと戦う力なんてない癖に。そんなデッキで、わたしに勝てるなんて思ってない癖に。それなのに抗う。無駄な抵抗ばっかりして、時間だけ稼いで。そんなにアテナちゃんたちが大事？」
「……大事だよ。そうじゃなきゃ、命なんて賭けるもんか。それに……」
「それに？」
「勝てないと思ってデュエルしたことなんてない。どんな相手でも、どんなデッキでも、俺は勝つための手段（タクティクス）を探し続ける。その先にある、勝利を信じて」
「……やっぱり、生意気」
「生意気で結構。いつまでもユーキちゃん……いや、終焉の闇の思惑通りに踊らされて溜まるかよ」
「……わたしはモンスターを一体守備表示でセット。エンドフェイズに『加速する終焉』の効果でデッキからカードを五枚除外するよ」
今回除外されたのは『終焉の精霊（ジ・エンド・スピリッツ）』『終末の騎士』『キラー・トマト』『激流葬』『サイクロン』の五枚。

「ターンエンド」
「行くぞ、俺のターン！　ドロー！　俺は『神獣王バルバロス』を攻撃表示で妥協召喚」
『神獣王バルバロス』ＡＴＫ１９００
ウルナイトが倒され、手札に温存しておく必要のなくなったバルバロスを妥協召喚する。
「バトルだ！『コアキメイル・デビル』で『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を攻撃！『コアデビル・クライ』！」
影の狼が、悪魔の腕に貫かれて消えていく。デッキにはもう、同名モンスターはない。ならこれ以上リクルートされることはない！
「そして『神獣王バルバロス』で守備モンスターに攻撃！『トルネード・シェイパー』！」
神獣王の槍が、終焉の場にあるモンスターを襲う。しかし。
「わたしの守備モンスターは『終焉の死霊術師（ジ・エンド・ネクロマンサー）』。守備力は２０００。妥協召喚したバルバロスの攻撃力は１９００だから破壊できないよ」
『終焉の死霊術師（ジ・エンド・ネクロマンサー）』ＤＥＦ２０００
「ぐ……」
セツＬＰ３１００
バルバロスの槍は、闇の結界を張ったネクロマンサーを破壊できず、その余波が俺を襲う。
「……仕方ない。俺はカードを一枚セット。エンドフェイズに維持コストとして『クリッター』をオープンし、『加速する終焉』の効果で８００ダメージを受けてターンエンドだ……うぁ！」
セツＬＰ２３００
くそ……この『加速する終焉』のダメージ……他のダメージとは質が違う。なんというか、血を抜かれているような感覚だ……。
「わたしのターン、ドロー。カードを一枚セット。エンドフェイズに『加速する終焉』の効果で８００ポイントのダメージを受ける」
ユーキＬＰ２１００

「俺のターン、ドロー！　俺は手札から『コア濃度圧縮』を発動！　手札の『コアキメイルの鋼核』をオープンし、『コアキメイル・ガーディアン』を墓地に送ることでデッキからカードを二枚ドロー！」

よし、来た！

「俺は『コアキメイル・パワーハンド』を攻撃表示で召喚！」

『コアキメイル・パワーハンド』ＡＴＫ２１００

この『コアキメイル・パワーハンド』は戦闘を行う光・闇属性モンスターの効果を無効にする。デビルと共にコイツがいれば……。

「闇属性モンスターを恐れることはない！　バトルだ！『コアキメイル・パワーハンド』で『終焉の死霊術師（ジ・エンド・ネクロマンサー）』を攻撃！『コアパワークラッシュ』！」

パワーハンドの攻撃が死霊術師を粉砕する。よし、これで壁は消えた！

「行け！『コアキメイル・デビル』で……「リバースカードオープン」なに！？」

ここでトラップ！？　一体何を……っ！？

俺はそこで、終焉の闇からユーキちゃんの表情が抜けていることに気がついた。

「ユーキ、ちゃん？」

憤怒、苛立ち、憎悪。この世の全てを呪わしげに睥睨する狂気的な無表情。

「カウンタートラップ『腐り堕ちる世界』。『終焉の（ジ・エンド）』と名の付くモンスターが戦闘によって破壊された時、ライフを２０００ポイント支払うことで発動」

ユーキＬＰ１００

「フィールド上に存在する全てのカードを破壊し、相手プレイヤーに破壊した数×３００ポイントのダメージを与える」

「なっ！？」

俺のフィールドには、モンスターが三体と『コア転送ユニット』

の合計四枚。ユーキちゃんのフィールドに『加速する終焉』が一枚。
「……フィールドのカードを全て破壊し、１５００ポイントのダメージを受けて貰う」
ドロドロと、世界が崩れて行く。まるで、そう。世界の終焉を見るかのような。
「ぐあああっ！？　ぁ……が」
セツＬＰ８００
ヤバ……流石に、目が霞んできたな。今度は、それこそ全身が腐り落ちるような、おぞましい感覚のダメージだ。流石に、こんな痛みは初めての経験、だな……。
それでも、膝はつかない。屈しない。
「倒れ、ないぞ……俺は、カードを一枚セット。ターン、エンド」
当初は『コアキメイル・パワーハンド』のコストとしてオープンしようと思っていた『聖なるバリアー―ミラーフォース―』をセットする。くそ……それでも、俺に出来ることは……ここまでか。
「わたしのターン、ドロー。セツくん」
「……？」
なんだ……？

「……良くデキマシタ」

そう言って、嗤った。ニタリ、と気味の悪い笑顔を、ユーキちゃんの顔で。
「っ終焉！！」
それが、ユーキちゃんを酷く汚されたような気がして、俺は叫んだ。

「手札から魔法カード『死者蘇生』を発動。『終焉の死霊術師（ジ・エンド・ネクロマンサー）』を特殊召喚。効果発動。一ターンに一度、墓地の闇属性モンスターを除外して、墓地の『終焉の（ジ・エンド）』と名の付くモンスター一体を特殊召喚する。わたしは墓地の『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を除外して『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を特殊召喚」

フィールドに二体のモンスターが並ぶ。リリース要員か……！？

「その『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』をリリースして『終焉の夜王（ジ・エンド・ナイトキーパー）』を攻撃表示で召喚。『終焉の夜王（ジ・エンド・ナイトキーパー）』は『終焉の（ジ・エンド）』と名の付くモンスター一体をリリースしてアドバンス召喚することができる。そしてこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールドで表側表示のモンスターはその属性を『闇』としても扱う」

『終焉の夜王（ジ・エンド・ナイトキーパー）』ＡＴＫ２６００

「レベル、７……攻撃力２６００……！」

『アテナ』と同じ能力値。だが……！

「来るなら……来い！」

ユーキちゃんの手札はゼロ。リバースカードを破壊する手立てはない。それなら……！

そう、思った。

しかし。

「行く必要も、ないのよ」

そう言って、また嗤った。ニタリ、と。

「な、に……？」

「『終焉の夜王（ジ・エンド・ナイトキーパー）』の効果発動。このターンバトルフェイズをスキップすることで、フィールドに表側表示で存在する闇属性モンスターの数×６００ポイントのダメージを相手に与える」

「……ぁ」

夜の王。ナイトキーパーの持つ杖に、そのエネルギーが増幅されていく。

「フィールドの闇属性モンスターは二体。よって１２００ポイントのダメージを与える。『ジ・エンド・ナイト・グロウ』」

目前に迫る“終わり”を見つめ、俺は敗北を確信し……笑う。
――まったく……いつも俺は、肝心なところで勝てないな……。
「終わり、だよ」
ああ……そうみたいだな。
もう、痛みは感じない。ただ、体の力が抜けて行く。
「俺の……負けだ」
セツＬＰ０
だけどせめて最後まで、絶望だけは見せずにいよう。デュエルに負けても、せめて絶望にだけは負けずにいよう。
「それが……最後の意地だ」
意識が遠のく。自分が今、何処に立っているのか、それどころか立っているのかさえもわからない。わからない。
「みん、な……」
――あとは、任せ、た……。

ドサ。
目の前で、セツくんが倒れた。最後に、笑顔と一滴の雫だけ、その頬に映して。
「セツ……くん」
涙が止まらない。大好きなセツくんを、自分の手で傷つけてしまった。それが、わたしの心をどこまでも蝕む。
悲しかった。苦しかった。死にたかった。でも……死ねない。わたしが死んだら、“この子”が一人ぼっちになってしまうから。
最初から、わたしはわたしとしての意識が残っていた。演技をしていたわけでも、一つの嘘もついてない。でも……。
「セツくんなら……本当のこと、話せるかなぁ……」
最初から、全部わかってやっていたこと。自分の中に終焉がいて、その所為でアテナちゃんが苦しみ、逃げてしまったこと。

「セツくん……」
うつぶせに倒れたセツくんを、仰向けにして自分の膝に乗せる。
ボロボロで、傷だらけで、それでも強さしか感じない、その寝顔。
知らず、涙が零れる。
「ごめんね……ごめんね。わたし、悪い子だよね……わかってる。わかってるよ……でも、でもこの子は……“エンヴィー”は悪くないから……悪いのは、わたしだから……だからセツくん……お願い」
わたしと、一緒に来て。
世界なんて、絶対滅びない。最初から、世界が終焉になんてならないんだよ……。
流した涙が、セツくんの顔に落ちる。慌てて拭った。わたしの涙なんて、セツくんを汚すだけだから。セツくんの流した一滴の涙を、きっと汚してしまうから。
「絶対、助けるから……！」
傷だらけのセツくんを抱えて飛ぶ。最後は、エンヴィーが暴走して加減が出来なかった。早く手当てしないと助からない。
「死なせない……わたし、死なせないよ……」
この子にも、もう絶対殺させない。
わたしは、胸の裡に眠る闇を押さえて、飛ぶスピードを上げた。

第四期第十三話「輝ける鋼核ＶＳ終焉の闇」（後書き）

こんにちは。

というわけで……これにて改訂、終了～！！

いや～長い改訂作業でした。ホントに。疲れた……。ラストは一気に全部やってしまいましたが。ふう、なんとかなりましたね。大抵大規模な改訂作業入れた小説は改訂が遅々として進まず、やがて自然消滅していくことが多かったりするので、悠自身も非常に心配でした。我が事ながら。ところどころに新規の話を混ぜつつでしたしね。

改訂作業も終わりましたので、重要な話はその内削除します。そういえば、あの章の始まりがズレるのって割込投稿が原因みたいですね。やっとわかりました。またズレてるんで、直しておきます。

次回からは新しい話になります。セツを失ったパーティは、一体どうするのか。

それでは、悠でした！

第四期第十四話「冥界における抗争」（前書き）

改訂終了後、一発目！　比較的早めにアップすることが出来ました。

今回からは、まあタイトルからわかるかもしれませんが冥界編です。冥界ということで、普段はあまり出てこないゴーズやカイエン、ヴァンダルギオンも総出演となっております。キャラが……減らしたのにまだ多いよぅ……。

第四期第十四話「冥界における抗争」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第十四話「冥界における抗争」

「私はシャルナでダイレクトアタックします！『ディヴァイン・クロス』！」

『久々の活躍っ！　いっけー！』

「ぐおおおおおおっ！？」

地獄戦士ＬＰ０

シャルナが嬉々として放った光線が、妙に寸胴で短足な重戦士を葬ります。

「……ふぅ、手強い相手でした」

「……そういう台詞は、せめてもっとデュエル描写をしてから言うべき」

私としては純粋な感想を言っただけなのに、何故かルインさんに突っ込まれてしまいました。

「いっくよー！『混沌帝龍（カオスエンペラードラゴン）―終焉の使者』の効果発動！　纏めて消し飛べー！！」

『ぎゃあああああああああ！？』

雑魚１～……？？人ＬＰ０

「……少なくとも、あっちで禁止カード無双しているさだめさんよりは、苦戦したと断言出来ます」

「……あれは一体、何対一のデュエルをしているのだ？」

「だって、相手の人数が多ければ多いほど混沌帝龍（カオスエンペラードラゴン）の効果の威力高くなるし。いやーもうダメージが軽く万を超えたね！」
「酷過ぎる……」
ホクホク顔のさだめさんに、エースさんが頭を抱えていました。気持ちは分かります。
現在私たちは、希望さんから直接冥界に送られて――なんかこう書くと、殺されたみたいですね私たち――冥界における抗争に巻き込まれてしまったようです。
「悪ィな。オレらのメンドウごとに巻き込ンじまってよ」
「いえいえ。私たちとしても、ゴーズさんたちの協力が必要なんですから当然です」
「……にしても、我がマスターはなンだありゃ。一人で適当に敵陣突ッ込ませりゃ勝てるンじゃねェのか？」
「……いっそ実行したらどうですか？　お勧めしますよ？」
「ちょっとそこ。勝手にさだめを人身御供にする算段進めないでよ」
「いえ。さだめさんなら、無事大将首どころか敵陣壊滅の知らせと共に帰ってくると信じているんですよ」
「余計悪いよ！」
今まさに軍団規模の相手を一斉に葬ったのは何処の誰ですか。
「まあ、とりあえず気にしないでください。カイエンさんには、いつもシャルナが迷惑かけている分の借りもありますし」
「え、ええっと……できれば、シャルナ様をキチンと働かせることで返して欲しい気もしますが、ありがとうございます？」
「それは無理。一度染みついた引き籠り根性サボり癖は簡単には消えない」
「ルイン様～……」
「そこはかとなく飛んできたあたしへの皮肉が痛い……」
「皮肉を言われないように仕事してくださいねシャルナ」
「……最近は、マシになったもん」
「ですがシャルナ様。未だにノルマは減るどころか増える一方なの

ですが……」
「そもそも仕事が多すぎるのが悪いッ！　おねーさんはそう声高に主張したい！」
「その意見には大いに、心から、誰よりも切実に賛成しますが、そもそも私の仕事が増えている原因であるシャルナ様におっしゃられても信憑性が今一つ」
「あたしの仕事が多すぎるから、あたしはサボる。あたしがサボるから、カイエンの仕事が増える。つまり、カイエンの仕事が多いのはあたしの仕事が多すぎるのが原因！」
　結局サボらなければいいだけの話では？
「っていうか、おねーさんの仕事が増えたのも元はと言えば同じ仕事してたアテナがいなくなったことが大きい！」
「そこで私に振るんですか！？　っていうか、私は終焉に……」
「そう！　要するに原因は終焉！　というわけで終焉許すまじ！　あたしは許して！」
「最後の一言が激しく余計です」
　最終的に自分への責任追及を逸らそうとするシャルナを窘めます。油断も隙もない……。
「……しかし、まさかまた冥界にやってくることになるとはな」
　多少気分の悪そうなエースさんが、首を振って嘆息しています。
「む、ぅ……これは、ちぃとしんどいのぅ……」
「皆さんは平気ですか？　かなり強烈な重圧がかかっていますが……」
　そう言うジャックさんやキングさんだけじゃなく、剣士さんや凛さんも大分辛そうでした。ですが、私は首を振って大丈夫だと告げます。
「私なら平気です。本来天使族は冥界に適応できないんですけど……私やシャルナは特別です」
　シャルナや、私の前世である『反魂のスピリチュア』は、元々冥界と天界を繋ぐ天使。冥界の空気には慣れています。

「ルインさんは？」
「私も平気。私は破滅の女神」
微妙に理由になっていない気もしますが……。
「……死の空気には慣れている。破滅の名前は伊達じゃない」
「そう、でした。えっと、そう言えばさだめさんは？　一応、便宜的に、もしかしたら或いは人間だったかもしれませんでしたし念のため」
「随分長ったらしく、婉曲にしかも最終的に人外呼ばわりしてくれてありがとうアテナ」
口の端をヒクヒクさせながらさだめさんが私にお礼を言ってきました。
「えっと、それで大丈夫なんですか？」
「……まあ、むしろ気分良いくらいだね。今のアテナの台詞で機嫌は悪くなったけど」
やっぱり、普通に人外で良いような気がします。冥界の空気で気分良くなる人間がいていい筈ないですし。
「……まあ、それはいいや。それよりゴーズ、説明してくれる？　冥界で今、何をやっているのか」
「ああ。ま、ぶっちゃけ反乱だ」
全員の視線が、一斉にサイクロイドさんへ。
「あ？　ほら、俺っち言ったろ？　ここじゃ、国家転覆の反乱なんぞ子供のお遊びだってよぉ」
「そりゃお前ンとこだけだ。修理すりゃどうとでもなるからって暇つぶしに反乱起こさせンなって機械王に言っとけ。冥界でもまあ、過去になかったわけじゃねェが、ここまでデカイのは久々だな」
……というか、機械族の国では反乱がありふれている、というところにもっと突っ込むべきだとは思いますが。
「……そう言えば、サイクロイドさんは平気なんですか？」
「おうよ！　機械族に死の匂いとか、わかるはずねえしな！」
そう言われればその通りでした。バグロスさんも涼しい顔をして

います。
「……で、首謀者は？」
「お前らも知ってンだろ。ハ・デスのオッサンだよ」
「ハ・デスって……『冥界の魔王ハ・デス』？」
「ああ。今は、お前らも知ってンだろうが、ヴァンダルのオッサンが冥界を仕切っちゃいるが、それまでは冥界でもケッコウ色々と派閥があってな」
「その一つが、ハ・デス様を盟主とする魔王派だったんです。ですが、それもヴァンダルギオン様の派閥が勝利することで収まっていたのですが……」
「よりにもよって、このタイミングで蜂起してきたんですか……」
「どうせ終焉の差し金だろォよ。このタイミングの良さはそれしか考えらンねェ」
確かに。と私たちは一斉に頷きました。
「元より、ハ・デス様は決起の時を狙っていたものと思われます。きっかけ一つあれば、動かすことは容易かったのかと」
「思いの外、ハ・デスのオッサンに付くアホも多くてな。ったく、そこまで戦争がしたいってかヨ。アンデットや悪魔共が争ったところで泥沼になるだけだってのに」
ゴーズさんは、くだらないと態度で示しながら舌打ちしています。
「ま、そういうわけでだ。悪ィが、この反乱治めねェ事にゃオレらやヴァンダルのオッサンが冥界を離れることはできそうにねェ。そのチビなら問題ねェが、蘇生に関わらせるにゃ、まだそのチビじゃ心許ねェ」
ゴーズさんは、さだめさんに纏わりついては振り落とされているミリーちゃんに目を向けながらそう答えます。
「そうですね……」
一番早いのは、私たちも鎮圧に協力することでしょうが……。
「いいじゃん。そうすれば」
「さだめさん？」

「お兄ちゃんを助け出すためにも、早いとこ前準備は済ませなきゃならないの。今更巧遅に拘って、何の意味があるわけ？」
「同感。こんなところで、グズグズしている暇はない」
「そうだな。今は拙速の時か……」
「ルインさんやエースさんまで……」
三人や騎士さんたちの瞳には燃え上がる炎。
「でも、焦りは禁物よ？　おねーさんの経験として言わせてもらえば、力はあっても素人のさだめちゃんや、連携の要を欠いて、冥界の空気に中てられている騎士じゃ戦争の役には立たない。他も同様だしねぃ」
『……』
全員、無言でシャルナを見つめます。
「あれ、なに？　この沈黙は」
「いえ……」
「シャルナさんって、まともなこと言えたんだね」
「し、失敬な！？　一応戦女神よ！？」
「自分で一応、とか付けている時点で……」
「う、うるさーい！　いいわよいいわよ！　そんなにあたしが信じられないなら好きにすれば！」
またぷんすかと拗ね始めたシャルナ。ですが、その言葉自体は一理あるのも事実です。
「……でも」
それでも、私たちは……。
「関係ない。どっちにしろ、グズグズしてお兄ちゃんが死んだりしたら、もう終焉もクソもない。さだめが世界を滅ぼす。或いはさだめが死ぬ」
「同感」
「私も、です」
今更、何を躊躇う必要があるでしょうか。戦争だろうがなんだろうが、セツを助けるための道がそれしかないのなら、迷わず進むだ

けです。
「けどナお前ら……」
「大丈夫です。ゴーズさん。幸い、私がいます」
「お、珍しいね。アテナがそんなに強気なの」
「はい。ですが、この冥界で、私は無敵ですから」
私は目に自信を漲らせてさだめさんを見ます。事実、私の能力は……。
「……ちィ、しょうがねェな。なら、まずはヴァンダルのオッサンに許可取れ」
「貰えなくてもさだめは行くよ」
「だとしても、せめて報告はしやがれチート娘。勝手に動くなら動くとわかってりゃ、こっちとしてもやりようはある」
「……わかった」
不満そうに、それでも納得はしたのかさだめさんがそう答えます。
「どちらにしても、ここで話しこんでいても仕方あるまい。行くなら直ぐに行くぞ」
「……必死」
「……ふん。希冴姫から奴を任されたというのにこのザマだ。せめて奴を早急に救い出さねば、騎士としての名誉に関わる。それだけだ」
それでも、少しだけ顔が赤いエースさんを先頭に、私たちはヴァンダルギオンさんの居城まで向かうのでした。

『……いいだろう。むしろ渡りに船と言ったところだ』
私たちが戦列に加わることに関しては、予想以上にあっさりと許可が出ました。
「おいおい、良いのかよ。ンな簡単に決めちまって」
『反魂と戦女神が揃っているなら問題はない。しかし、エース』

「は」
『お前たちが前線に出ることはまかりならぬ。その体では犬死するのみ。駆り手も、己が騎士たちの死を望まぬ』
「……しかし」
反論しようとするエースさんでしたが、反論の言葉が浮かばなかったのか悔しそうに唇を噛んで俯きます。
『そして……駆り手の妹よ』
「さだめは行くよ。なんて止めようが、無駄」
『分かっている。駆り手の妹ならば、一度言いだして聞かぬことぐらいは予想が付く。なにより、文句なしで戦力となるお主を態々止め置く意味はない』
「そういうこと。それに……」
さだめさんは、不意に視線を逸らして外を見ます。
「……呼んでいる気が、するんだ。さだめの、さだめの『敵』が。だから、行かなくちゃ」
その真意はわかりませんが、さだめさんにもいるんでしょう。ルインさんのように、戦うべき相手が。
「……なら、この子たちはあたしが率いる。それで文句ないかい？」
『……いいだろう。戦女神よ。お前ならば文句はない』
「ありがと。流石に、あたしもふざけてられる状況じゃなくなってきたしね」
シャルナも、本当に久々に見る真剣な表情で武器を取ります。
「けどよォ……」
ゴーズさんが、心なしか不安そうにさだめさんや私の顔を覗き込んできました。
「お前ら、本当に大丈夫なンだろうな？　セツのヤロウはいねェし、ホントはお前ら……」
ゴーズさんの言葉に、私たちは顔を少しだけ俯かせます。
「……本音を言えば、大丈夫なんかじゃありませんよ」
それは、当然のこと。私たちにとって、セツは心の支え、パーテ

ィの心臓とも言える程に重要な人だったのです。私やさだめさん、ルインさんのように、セツのことが好きなら当然、そうでなくても、セツは私たちの中心で……。

「……でも」

「彼は、言っていた」

ルインさんが教えてくれました。セツの、覚悟を。その、言葉を。

『倒れるのは、泣くのは、全てが終わってからだ。今はただ、前へ。がむしゃらにでもいいから、前へ……！』

潰れてしまいそうな心で、痛々しい顔で、セツが戦う。そう、言ったのなら。

「なら、私たちが倒れるわけにはいかない」

「絶望するのは、全てが終わってからでいいんです」

「一番キツイのは間違いなくセツだ。そんな時、我らが膝を屈してどうする？」

「心は張り裂けそうだけど……痛む心を癒してくれるのは、お兄ちゃんしかいないから……」

「だから、私たちは戦います。セツを……取り戻すために」

戦わなきゃ、取り戻せないんです。セツを。私たちにとって、一番大切な、たった一人のヒト。

「……そうかい。心配したオレがバカだったみてェだな」

私たちの言葉に、偽りがないことを読み取ったゴーズさんは、バイザー越しに表情を緩めました。安心しても尚、憎まれ口を叩く辺りは、らしいですけど。

「んじゃ、反乱の常習者としてアドバイスだ。反乱ってのはよ、どっちかがアタマを失ったら終わりだぜ。こっちが少数精鋭だってなら、気付かれねぇよう懐に飛び込んでグサリ。これで勝ちだ」

突然口を開いたサイクロイドさんに、全員の視線が集まります。

『……なんだ？　その二輪は』

「……気にしないでください」

『だが、言うことは尤もだ。無論、ハ・デスたちとて似たような考

えは持っているであろう。我も幾度か侵入者を撃退している』
「主に撃退してンのはオレだろォがよ。その図体じゃデュエルもロクに出来ねェ癖して威張ンなオッサン」
「ご、ゴーズ様ぁ……」
そういうことなら、突入部隊とヴァンダルギオンさんを護衛する隊に分かれた方がいいわけですね……。
「……私はハ・デスの方へ行きます」
少し考えて、私はそう答えました。
「そうね。あたしが一緒に行くことも考えると、それが妥当ね」
「……私は前線に行く」
「ルインさん？」
「どうせデュエルは一対一。なら、私は前線で引きつけておく。ネームバリュー的に適任」
確かに、破滅の女神の異名と、あとついでにファンクラブ持ちのルインさんが前線に出て行けば、大きな注目を集めるでしょうけど……。
「さだめは……」
「決まってンだろォが。お前はオレらと一緒だ。ここに残って防衛戦だよ」
「ちょっと待って！　さだめは……」
「テメエが一番素人なンだよ。神経使う潜入も、危険過ぎる前線にも行かせらンねェ。テメエが死んだらセツのヤツに殺されるンだ。ちったァ考えろ」
「……」
悔しそうにさだめさんが俯きます。けど、負けられない戦いであることはわかっているのか、それ以上の反論はしません。
「……流石に、俺っちの出る幕はなさそうだな。素直に引っ込んどくぜ」
「そうしろボロチャリ。チャリンコ乗って戦場なンざアホらしくて泣けてくる」

「……オレはやったんだがな」
ゴーズさんの容赦ない言葉に、つい昨日実際にサイクロイドさんで戦場を駆け抜けた（一応、あの時はバイクロイドさんでしたが）剣士さんが渋い顔をします。
「無論、剣士。お前もここにいろ」
「ネイキッド……わぁってるよ」
「凛もよ。エリアルと一緒に震えてた方がいいわ」
「ぶるぶる、ぶるぶるっ！」
「……ええと、あんな風には怯えないけどね」
冷めた目のエリアさんと呆れたような凛さんの視線の先で、エリアルさんが部屋の隅っこに蹲って震えていました。
「こ、怖いよぅ。ど、ドラゴン怖い戦争怖い冥界気持ち悪いクィーンがいる……」
……最後のクィーンって、もしかしてカイエンさんのことでしょうか？　土下座の。
「けど……クソッ！　折角ネイキッドから新しい力を貰ったってのに、いきなり待機組かよ……情けねぇ」
「得た力を使いたい気持ちはわからんでもないが、あまり調子に乗れば力に振り回される。気をつけろ」
「わぁってる。言ってみただけだよ」
エースさんの忠告に、剣士さんはひらひらと手を振って答える。
「……それより凛、お前大丈夫か？」
「う、うん……なんとか」
冥界の空気は、普通の人間でしかない凛さんには少し、いえ、かなり毒です。心配そうに尋ねる剣士さん自身、顔色が余り良くありません。
「ったく……セツの奴は、こんなところにずっといたってのか……」
「正直……二日も居たら倒れちゃいそう……」
『……我が駆り手は、一月以上。それも、我が炎に焼かれながら耐え切った。だが、やはり普通の人間に冥界の環境は厳しいか……カ

イエン』
「は、はい！」
『主が付いていてやれ。お前なら多少楽には出来るであろう』
「はい。お任せください。さ、こちらへ……」
「悪ぃ……」
「ご迷惑を……」
「うぅ……あ、あたしも～」
何故か、二人の後にエリアルさんもよろよろとカイエンさんにくっついて行きました。
「あの娘ったら……リチュアの魔鏡で耐性ある分、どう考えても私より楽でしょうに……！　あの根性無し」
そう顔を顰めるエリアさんは、すっかりダウンしているギゴバイトを薄い水の膜で包んでいました。恐らく、結界術の応用でしょう。
「……皆さんの体調のこともありますし、尚更早く終わらせないといけませんね」
あまり長引かせたら、セツや終焉以前に皆さんの命に関わります。
「行きましょう、シャルナ。ハ・デスの所に」
「そうね……もうルインなんかはさっさと出て行っちゃったし、そろそろ頃合いね」
言われて見回すと、確かにルインさんの姿が見えません。恐らく、役割を決めた時既に動いていたんでしょう。
「それじゃあ、さだめさん。後のことは……」
「うん、ここは任せて。あ、マッハでよろしく。ワンキルオッケーだから、さっさと終わらせてきてよ？」
「そんなにいつもいつもワンキルなんて出来ませんって……でも、分かりました。出来る限り、手早く済ませて戻ってきますね」
さだめさんらしい激励に頬を緩ませて、私はシャルナと共に戦場へと向かうのでした。

第四期第十四話「冥界における抗争」（後書き）

こんにちは。

というわけで、冥界編はアテナとさだめが主役を勤めます。まあ、普通にメインヒロイン二人なので大きいイベントですね。それも二連続。最初は、多分さだめかと。さだめの話を終わらせて、アテナＶＳハ・デス。アテナ編では、お待ちかね、アテナのオリカが登場しますので、お楽しみに。

本編とは関係ないですが。今週のアニメは中々良いカードが沢山でましたね。個人的にＴＧは強いと思ってますし、今回はＢＦを彷彿とさせる展開力を見せてくれました。そして遊星の方も。ジャンク・サーヴァントとジャンク・バーサーカーの二体は普通に強い。しかも、どちらもＯＣＧだと強化されて出るみたいですし。これは……そろそろリアル遊戯王をやりたくなってきたじゃないですか。くそう。金食い虫だとわかっているのに。

ゾーンの正体については……個人的には、ああやっぱり、とだけ。そんな節はありましたし、要するに士郎とアーチャーですねわかります。みたいな。

それでは、悠でした！

第四期第十五話「想いのヒトカケラ」（前書き）

滅茶苦茶長くなった第四期第十五話をお届けします。切るべき場所が定まらなくて……遂に一万字越えですよ。

今話久しぶりに残酷描写アリなんで、その辺に留意しつつお楽しみください。

第四期第十五話「想いのヒトカケラ」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第十五話「想いのヒトカケラ」

「むぅ……」
さだめは、若干不機嫌だった。
「そんなに後詰にされたことが不満か？　マイマスター？」
「……べっつに～」
あと、その全く敬ってるように感じないマイマスターはムカつく。
「お兄ちゃんもいないし、満足に暴れることもできないし……あ～！　イライラする～！！」
こうなったら、侵入者とか居たら思いっきり禁止デッキで……。
「あ～それなンだが、マスター」
「なに？」
「あンま、禁止デッキとか使うな。危ねェ」
「なんで？」
どういう意味での危ない、なんだろう。
「マスターたちンとこに、マキュラが現れたンだろ？」
「そうだよ。あの時は良かったなぁ……」
「このまま禁止デッキとか使い続けているとだな、ソイツらの封印まで解けちまうンだ」
「封印？」
「お前らニンゲンの世界で禁止されているヤツらは、精霊界でもメ

チャクチャスゲエ力を持ってる。その力を危険視されて、封印処理されてるヤツらばっかりなんだよ」

「その、封印が解けちゃうから、使うのをやめろって？」

「まァ、簡単に言えばそういうこった。精霊世界のバランスを崩す要因、だったか？　それになりかねンらしい」

むぅ……そういうことなら、さだめも自重せざるを得ない。バランスを崩した結果、お兄ちゃんを助け出すのに不都合が起きては本末転倒だし。

「それに、そのデッキにゃオレが入ってねェだろ」

「それが本音か」

まあ確かに、さだめはデッキにゴーズを入れてはいてもあんまり出したことない気もする。単純に機会がないだけなんだけど、ゴーズからすれば不満なのかも。

「まーいいけどねー。大体、侵入者がいなけりゃ戦う機会なんてない……」

「言ってる傍から、来たぞ」

「え？」

表情を険しくしたゴーズの視線の先、確かにフードを被った怪しい人影。

「……最近の侵入者ってのは、忍ぶ気がねェのか？　堂々と仁王立ちしやがって」

「さあね。なんにしろ、怪しすぎるよね」

「……」

視線の先で、ただ静かに佇むそのフードは、さだめたちを確認したのか身体を震えさせる。あれは……歓喜？

「……見つけた」

酷くしわがれた、聞き取り辛い女の声。でも、その声は確かに喜びにあふれていた。そして……憎しみ。

「警備のヤツらは何やってやがった。こんな堂々と侵入されやがって」

「見つけた、見つけた見つけた見つけた見つけた見つけたァッ！」
「っ！？」
侵入者は、ゴーズの言葉には一切耳を貸さず、ただ嗄れた声で、濁った眼で、さだめを見ていた。
「あなた……だれ？」
「誰……？　貴女がそれを聞くのね……！」
酷い、憎しみの感情。さだめが、かつて周囲に向け続けていた、醜い意志。
「デュエルよ……構えなさい。御堂運命」
「っ……！」
フードを被っていて、その姿は見えないけれど、少なくとも確かなことは、さだめたちの敵だということ。さだめもデュエルディスクを構え、相対する。
「「デュエル！！」」
さだめＬＰ４０００
フードの女ＬＰ４０００
「私の先攻。ドロー！」
謎のフードは、黒くて醜い、怨霊が凝縮したようなデュエルディスクからカードをドローする。
「私は『インヴェルズを呼ぶ者』を攻撃表示で召喚。カードを一枚セットして、ターンエンドよ」
『インヴェルズを呼ぶ者』ＡＴＫ１７００
「インヴェルズ……！？」
さだめは、インヴェルズについてはあまり詳しくなかった。何故なら、さだめがこちらの世界に来たときには、まだ登場したばかりだったから。お兄ちゃんなら、さだめよりは知ってるんだろうけど……。
「さだめのターン、ドロー！」
確か、インヴェルズはアドバンス召喚主体のテーマデッキ。なら、

相手フィールドにモンスターを残しておくのはどう考えても良くない！

「さだめは『ダーク・クルセイダー』を召喚！」

『ダーク・クルセイダー』ＡＴＫ１６００

「『ダーク・クルセイダー』は、手札から闇属性モンスターを捨てるごとに、攻撃力を４００ポイントアップさせるよ！　さだめは手札から『ダーク・グレファー』と『ネクロ・ガードナー』を捨てて、攻撃力を８００ポイントアップ！」

『ダーク・クルセイダー』ＡＴＫ１６００→２４００

「バトル！『ダーク・クルセイダー』で『インヴェルズを呼ぶ者』を攻撃！『クルセイダー・ファントム』！」

「リバースカードオープン！　トラップカード『侵略の手段』！　デッキから『インヴェルズの斥候』を墓地に送り、『インヴェルズを呼ぶ者』の攻撃力を８００ポイントアップさせる！」

『インヴェルズを呼ぶ者』ＡＴＫ１７００→２５００

「コンバット・トリックっ！？」

『インヴェルズを呼ぶ者』の攻撃力が、『ダーク・クルセイダー』を上回った。

「くっ！？」

さだめＬＰ３９００

「……さだめはカードを一枚セット。ターンエンドだよ」

やられたね……いきなり手札差をつけられた上、ボードアドバンテージまで取られた。攻撃は迂闊だったかな。

「私のターン、ドロー」

「オイ、テメエいい加減顔を見せやがれ。どこの誰だよ」

顔も見せないフード女に嫌気が差したのか、ゴーズがそう呼びかける。

「……いいわ」

ゴーズの言葉も聞こえてはいたのか、フードの人影はそのフードを脱ぎ去った。

「っ！？」
思わず、息を呑んだ。
「っテメエ……アンデットか？」
ゴーズがそう思うのも仕方ない。フードの下から現れたのは、それはもう醜い身体。傷だらけで、腐ったようなにおいで、爛れたような顔。その中で鈍く輝く濁った瞳が、さだめを憎しみの篭った目で睨みつけていた。
「アンデット？　アンデットね……ええ、貴方がそう思うのも仕方ないわ……けど、違う。私は……ニンゲンよ」
「ナンだと……？」
ゴーズが絶句する。それは、さだめも同じ。フードの下から現れたその姿は、とても生きているニンゲンとは思えないものだったから。
「……私は『インヴェルズを呼ぶ者』をリリース。手札から『インヴェルズ・モース』をアドバンス召喚するわ」
『インヴェルズ・モース』ＡＴＫ２４００
さだめたちの反応に構わず、女はプレイを続行。現れたのは蛾のような悪魔。
「『インヴェルズ・モース』の効果発動。ライフを１０００ポイント支払うことで、相手のカードを二枚まで手札に戻す」
女ＬＰ３０００
「なっ！？」
これじゃ、さだめのフィールドはガラ空き……！
「更にリリースした『インヴェルズを呼ぶ者』の効果発動！　このカードがインヴェルズと名の付くモンスターのアドバンス召喚のリリースとなった時、デッキからインヴェルズと名の付くレベル４以下のモンスター一体を特殊召喚する。私は『インヴェルズ万能態』を守備表示で特殊召喚！」
『インヴェルズ万能態』ＤＥＦ０
「バトルよ！『インヴェルズ・モース』で御堂運命、貴女にダイレ

クトアタック！」
「うあああっ！？」
さだめＬＰ１５００
っ効いたぁ……でも！
「さだめはこの瞬間、手札から『冥府の使者ゴーズ』の効果発動！
特殊召喚し、受けたダメージと同じ攻撃力・守備力を持つ『冥府の使者カイエントークン』を特殊召喚！」
『オラ行くぞ！』
『頑張ります！』
『冥府の使者ゴーズ』ＡＴＫ２７００
『冥府の使者カイエントークン』ＡＴＫ２４００
「……ふん。私は手札からカードを一枚セット。ターンエンドよ」
『もう一つ聞くぞ！　テメエ、ハ・デスのオッサンの配下か？　ヴァンダルのオッサンを殺りにきたってンなら……』
ゴーズが殺気の篭った目で武器を構える。でも、女は全く意にも介さずさだめを睨み続ける。
「ハ・デス？　ヴァンダル？　知らないわ。そんな人たち。私はただ、その女に用があるだけ」
女は、その爛れた指で、さだめを指差す。
「さだめ……？」
「そうだっ！」
さだめが自分を指差すと、女はガッ！　と血走った眼を見開いて叫んだ。
「御堂運命……貴様だけは……ここで殺すッ！」
『アンタ……一体ナニモンだ？』
ゴーズが問いかける。でも、さだめはさっきから汗が止まらない。なんだろう。さだめは、知っている気がする。あの人を。あの、顔を……。
「覚えてる？　覚えてるわよね？　覚えてなきゃおかしい。覚えてるはず。覚えてないなんて言わないわよね？　お・ぼ・え・て・る・

よ・ね？」
「っっ！？」
詰め寄られた、その顔は。たしかに、覚えがある顔で。
「ねぇ……御堂君、元気？」
「っあ……」
その言葉で、完全に思い出した。
「あはっ、思い出したんだ」
「貴女……まさか」
「そう……」
その女は、さだめから少しだけ離れて、笑った。
「っ！」
壊れた笑み。昔のさだめが、よくお兄ちゃんに見せていた笑顔。
「私は、御堂君に憧れていて……貴女に壊された……名前は、なんだったかな？　わからなくなっちゃった」
「っぁ……！」
そうだ。間違いない。かつて、終焉に侵されていたさだめが、お兄ちゃんに憧れている女を次々に壊していた。その、最初の被害者。
焼け爛れた顔も、その声も、聞き覚えがある筈だ。だって……。
「一番最初に、一番残虐に、一番冷酷に、一番容赦なく火あぶりにした女だもの……ね？」
「っっ！」
さだめの脳裏に、かつての光景がリフレインする。

『いや、いやあああああああっ！』
『このッ……兄さんに擦り寄る薄汚い蛆虫ッ！　その顔が……その顔で、兄さんを誑かそうとするのなら……！』
『なにっ！？　何をするの！？　いや、やめて、やめてぇっ！』
『焼いてあげる。その綺麗な顔、見るも無残に焼け爛れてしまえッ

！』

『いやあああああああああっ！！』

「……」

さだめの、過去の罪。拭いきれない、穢れそのもの。

「私は、終焉に導かれてこの世界にやってきた。私と同じく、貴女にコワサレタ女たちの無念と憎しみ、その全てを背負って。御堂運命……貴女を、殺すために」

「あ、あ……」

「正確には、私たち全ての無念が折り重なって形を為した……言うなれば、貴女への憎しみの塊。それが私」

『チッ……そういやそうか。スピリチュアに導かれて、マスターやセツがこっちに来たンなら……』

『対存在たる終焉にだって、同じことが出来る筈……！』

「私は、私たちは、貴女を殺すため、終焉に力を貰ったの……私たちが受けた苦しみを、何倍にもして返してあげる……私たちだけが奪われて、貴女だけが幸せになるなんて許さない……絶対、這い蹲らせて、絶望の中で殺してやる……！」

『辛かった……苦しかった……』

『どうして……？　私はただ、遠くから見ているだけで良かったのに……』

『許せない……！　貴女がいたから、全てが狂った』

『許せない……！　私は貴女に、未来を奪われた』

『許せない……！　私は貴女に、幸せを奪われた』

『許せない……！　私は貴女に、全てを奪われた』

『許せない』

『許せない』

『許せない』

『許せない』

『許せない』

『許せない』

「――――ッ！！」

思わず、膝をついた。フードを被っていた女。その中から聞こえてくる、数え切れない怨嗟の声に。

『オイッ、マスター！』

『さだめさんっ！』

ゴーズたちの言葉も、耳に入らなかった。

「……聞けば貴女、随分と幸せそうね？」

「……」

「御堂君に助けてもらって、友達も出来て、楽しい毎日を過ごしているそうね？」

「……」

「……許せない」

「っ……！」

「なんで？　どうして？　貴女は幸せそうにしているの？」

女は、心底から不思議そうに尋ねてくる。

「どうして？　私たちは泣いているのに、どうして貴女は笑っているの？　ねえ、どうして？」

「……ぁ……あ……っ！」

そうだ、忘れていた。

「私たちから、全てを……幸せを、未来を奪っておいて……」

さだめは、どうしようもない罪人で。

「ねえ、御堂運命……」

さだめには……。

「貴女、幸せになれると思っているの？」

幸せになる資格なんか、ない。

「――――――ッッッ！！」

声にならない悲鳴が、さだめの口から、こぼれおちた。

『オイッ！　マスター！　クソッ！』

「あら？　もう壊れちゃったの？　案外脆いのね。私たちのことを、あれだけ痛めつけたのに。もう戦意喪失？」

『テメエ……』

「貴方も、そんな犯罪者にこれ以上付き合うことはないのよ？　そんな女、この冥界で朽ち果てて行くのがお似合いだわ」

『オイマスター、言われてンぞ。さっさと立って構えろよ！』

「無駄よ。その女の心は折れた。もうサレンダーすることしか出来やしない」

『違ェな』

「なに？」

『ウチのマスターはそンなデリケートな精神持っちゃいねェよ。見ろよ』

ゴーズは、さだめの右手を指差した。

『ウチのマスターは、まだ手札を握ってる。捨てちゃいねェ。まだ

戦える。そうだろ？』
　さだめの手札。バウンスされた一枚のカードが手札にある。さだめは……そのカードをしっかりと握っていた。
『デュエル続行だ。オラ、とっとと立ちやがれ』
「……」
「無駄だと言っているでしょう。大体、貴方どうしてそんな女の肩を持つの？　御堂君もそうだった。どうしてそんな犯罪者を……」
『うるせェよ』
「……なんですって？」
『うるせェって言ってンだ。さっきからゴチャゴチャと……それがどうした？』
「どうした……ですって？」
『オレのマスターはオレが決める。横からゴチャゴチャうるせェんだよ』
　ゴー……ズ？
『ああ、ああ。テメエは辛かったンだろうよ。コイツが悪かったンだろうよ。だが、それがどうした？　ここは冥界。暴力沙汰なんざありふれてる。テメエのような顔した女なンてどこにでもいらァ。そんなことで引く程、オレは健全な精神を持っちゃいねェんだ』
『……それに、貴女の言葉には矛盾があります』
「なに……？」
『奪われた痛み、憎しみ……その感情は、確かに産まれてもおかしくない。当然のものであるでしょう。しかし……』
『やったのはコイツでも、それを仕向けたのは終焉だ』
「そんな、そんなの……」
『関係ない？　ええそうでしょう。確かに、それはさだめさんの弁護にはなり得ないかもしれません。しかし……』
『確実に、終焉はテメエにとって、コイツと同じく……いや、コイツ以上に仇なンじゃねェのか？』
「っ……」

ゴーズたちの言葉に、それまで余裕の笑みすら浮かべていた女が、初めて口を閉ざした。
『その終焉に、テメエはあろうことか尻尾を振りやがったンだ。その時点で――』
『貴女に、正義を語る資格はありません』
「ッ黙れ！」
女は、それまでの余裕に満ちた口調から一転、激しく動揺した。
「……さだめの、ターン」
「っ！？」
「さだめは、ゴーズで『インヴェルズ・モース』を攻撃。『冥天刃影の太刀』」
『ハッ！　なるほどそういうことか……イイゼ。やってやらァ！』
「ットラップ発動！『侵略の波動』！『インヴェルズ・モース』を手札に戻し、効果発動！ゴーズを破壊する！」
『ぐっ！？』
モースが去り際に放った波動で、ゴーズを吹き飛ばす。
『勝てよ……マスター！　そのためなら、捨て駒役ぐらい大歓迎だ！』
「カイエンで『インヴェルズ万能態』を攻撃。『冥天刃陽の太刀』」
『はぁっ！』
カイエンの剣が小さな蓑虫を一刀両断する。
「カードを一枚セット。ターンエンド」
「……なんとか、なんとか言いなさいよ！　何よその淡々としたプレイングは！？」
「……」
「は、はは……そう。そういうこと。貴女、結局まだ戦意喪失したままでしょ？　ただ惰性でプレイしてるだけ……舐めるなッ！　私のターン、ドロー！　私は墓地から『インヴェルズの斥候』を特殊召喚！」
『インヴェルズの斥候』ＤＥＦ０

「更に『インヴェルズの斥候』をリリースして『インヴェルズ・ギラファ』をアドバンス召喚！　効果発動！　相手フィールドのカード一枚を墓地に送り、ライフを１０００ポイント回復する！」
『インヴェルズ・ギラファ』ＡＴＫ２６００
『くっ……！？』
「チェーンしてトラップカード『デストラクト・ポーション』を発動。カイエンを破壊し、その攻撃力分だけライフを回復する」
さだめＬＰ３９００
『さだめさん……』
「忘れてた……忘れてたんだ……」
カイエンの精気を、全て吸い取る。
「クッ！　例えライフを回復しても無駄よ！『インヴェルズ・ギラファ』でダイレクトアタック！」
「墓地から『ネクロ・ガードナー』の効果発動。攻撃を無効にする」
「この……！　私はカードを一枚セット。ターンエンド！」
「さだめのターン、ドロー」
そう。さだめには……。
「正義の味方なんて、柄じゃない」
自分の精霊すら使い捨て、勝利へと向かう礎にする。モンスターを墓地に捨て、命すらも弄ぶ。
「はじめから、わかってたことだった」
さだめの後ろから、漆黒の鎧竜が姿を現す。
「さだめの墓地に存在する闇属性モンスターの数は三体丁度。よって、さだめは手札から『ダーク・アームド・ドラゴン』を特殊召喚」
『オオオオオオッ！！』
『ダーク・アームド・ドラゴン』ＡＴＫ２８００
さだめには、普通の人間に戻ることなんて出来ないって。
「ダムドの効果起動。墓地の『ダーク・クルセイダー』を除外して、『インヴェルズ・ギラファ』を破壊する」
さだめは、最初から……。

「チェーンして速攻魔法『侵略の一手』！　ギラファを戻してカードをドロー！」
「なら、『ダーク・アームド・ドラゴン』でプレイヤーにダイレクトアタック。『ダーク・アームド・ヴァニッシャー』！」
「ぐあああああああっ！？」
女ＬＰ２００
「さだめは、これでターンエンド」
罪人、なんだ。
「ぐ、くっ……私のターン、ドロー！」
ダムドの攻撃で、女は更にボロボロになっている。それでもその目から憎しみは消えず、相変わらずさだめを睨み続けている。
「私は墓地から『インヴェルズの斥候』を蘇生！『インヴェルズ・ギラファ』をアドバンス召喚し、『ダーク・アームド・ドラゴン』を墓地に送る！」
『インヴェルズ・ギラファ』ＡＴＫ２６００
オオオオオオオオ……。
『ダーク・アームド・ドラゴン』の身体が崩れて行く。
「そして、私はライフを１０００ポイント回復する」
女ＬＰ１２００
「もう『ネクロ・ガードナー』はいない。喰らいなさい！『インヴェルズ・ギラファ』でダイレクトアタック！」
「ッ……！」
さだめＬＰ１３００
「カードを一枚セット。ターンエンドよ」
「さだめのターン、ドロー。さだめは魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚ドロー。更にマジックカード『死者蘇生』。墓地からゴーズを呼び戻す」
『冥府の使者ゴーズ』ＡＴＫ２７００
『ヤレヤレ。このオレを使い回しかよ』
「文句ある？」

『ねェよ。好きにやれ』
「……なんで」
「……？」
「なんで、平気な顔してデュエル出来るの？」
女の声は、怒りに震えていた。
「……さだめね」
その怒りの炎に、油を注ぐ。
「お兄ちゃんを、守りたい……って、そう思ってたんだ」
「――ッ！　巫山戯ないで！　私から……私たちから、幸せを、未来を、全てを奪った貴女が……言うに事欠いて“守る”ですって……！？　巫山戯るのも大概にしなさいよ！」
「うん、そうだね」
「――ッ！！」
ガッ！
カッとなったのか、その場に落ちていた石をさだめに投げつけてくる。さだめの額から血が流れ落ちる。
『ッテメエ！　デュエル中に「ゴーズ、いいから」……チッ』
「わかってるんだ……ううん。今までは目を逸らしてた。でも、もう逃げない」
「そうよ……貴女は、貴女なんかに……」
「さだめなんかに……」
――誰かを守ることなんて、出来ない。
「……」
「……」
「……さだめは、色々なものを奪って生きてきた」
「そうよ……貴女は、私たちから、全てを奪ったのよ」
「お兄ちゃんからも、奪い続けてきた。そんなさだめが、誰かを守るなんて、おこがましいにも程がある」
「そうよ。そうよそうよそうよ！　貴女は、誰も守れない！　ただ無情に、ただ冷酷に、誰かから何かを奪うことでしか生きていけな

い疫病神だわ！」
「……そんなさだめが、できることは一つだけ」
「ない！　貴女なんかに出来ることなんて――――」
「――――奪うこと」
「っ！？」
「さだめに出来るのは、お兄ちゃんの敵から全てを奪い尽すこと。奪って、焼いて、滅ぼすことだけ」
「な……」
「お兄ちゃんは、アテナたちが守ってくれる。でも、こんなさだめですら受け入れてくれたアテナたちに、敵を殺して焼き尽くすことなんて頼めないから……」
さだめは、俯いていた顔を上げた。
「“敵”はさだめが焼き尽くす。そう、決めたんだ」
もう、さだめは穢れているから。守るなんて、綺麗な言葉は使えない。だから、焼く。敵を焼いて、焼いて、焼き尽くす。アテナたちには出来ない、これは、さだめがやるべきことだから。
「……バトル。ゴーズで『インヴェルズ・ギラファ』を攻撃。『冥天刃影の太刀』」
『らァッ！』
「ぐっ……ぁ！」
女ＬＰ１１００
「この……っ！」
「ターンエンド。さあ、ラストターンだよ」
「ラストターンですって……！？」
「そう。最後。次のさだめのターン、貴女を焼き尽くす」
「ッッ！」
身体が震えていた。やっぱり、炎の記憶はトラウマになっているらしい。
「わ、私のターン、ドロー！」
でも、その恐怖も、ドローしたカードを目にした瞬間にその目か

ら消えた。
「ラストターン……ええ、ラストターンね……ただし、死ぬのは貴女よ！」
自信に満ちた目。自分の勝利に確信を持った目で、彼女は笑う。
「私は手札から『インヴェルズの魔細胞』を特殊召喚！」
『インヴェルズの魔細胞』ＡＴＫ０
「このカードは、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、特殊召喚することが出来る。そしてトラップカード『侵略の波紋』！　ライフを５００ポイント支払い、墓地から『インヴェルズ万能態』を特殊召喚！」
『インヴェルズ万能態』ＡＴＫ１０００
女ＬＰ６００
フィールドに二体のモンスター。間違いなくリリース用。最上級モンスター……。
「『インヴェルズ万能態』はインヴェルズと名の付くモンスターのアドバンス召喚に使用する場合、二体分のリリースとすることが出来る！　私は『インヴェルズ万能態』と『インヴェルズの魔細胞』を三体分のリリースとし……」
「三体リリース……？」
まさか、神クラスの最上級モンスター……？
「来なさい。最強にして至高のインヴェルズ……『インヴェルズ・グレズ』！」
『インヴェルズ・グレズ』ＡＴＫ３２００
「攻撃力３２００……」
『チッ……またズイブンとデカブツを出して来やがった』
「『インヴェルズ・グレズ』のモンスター効果発動！　ライフを半分支払い、このカード以外の全てを破壊する！」
女ＬＰ３００
『なッ……ぐァッ！？』
『インヴェルズ・グレズ』の攻撃で、ゴーズが吹き飛ばされる。

さだめのフィールドは、空。
「ふ、ふふふふ……さぁ、やりなさいグレズ。あの女を……叩き潰せぇ！」
巨大な角が、さだめを串刺しにしようと迫る。
『マスター！』
『さだめさん！』
その角が、さだめを突き刺そうとした、その瞬間。

ボーン……。

「っ！？」

ボーン……。

『インヴェルズ・グレズ』の角が、止まっていた。
まるで時を止められたかのように、ピタリとその動きを止めていた。響き渡る鐘の音が、全ての動きを封殺する。
「……さだめは手札から『バトルフェーダー』の効果を発動。相手のダイレクトアタック宣言時、手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する」
『バトルフェーダー』ＤＥＦ０
「くっ……だが、グレズの効果は毎ターン使える。次のターンが来たら……」
「次はない。これが、最後の一ターン」
「……っ！」
「さだめのターン、ドロー。さだめは手札から魔法カード『闇の誘惑』を発動。デッキからカードを二枚ドローして、手札の『ネクロフェイス』を除外する」
不気味な顔の人形が、闇の中へと消えて行く。
「『ネクロフェイス』が除外された時、お互いにデッキの上からカ

ードを五枚除外する」
お互いに、カードが除外されて行く。除外されたカードがなんであるかは、今となっては関係なかった。
「さだめは魔法カード『カオス・エンド』を発動。さだめの除外されているカードが七枚以上の時、フィールド上に存在する全てのモンスターを破壊する」
「なっ……！」
ボロボロと、『インヴェルズ・グレズ』が崩れていく。女はそれを愕然とした面持ちで見つめる。
「そんな……いや。いやぁ……また、また私は……」
「そう。また貴女は、さだめに全てを奪われるの」
「――――ッ！」
声にならない悲鳴が、女の口から洩れる。
「……そして、さだめはこのモンスターを召喚する。『紅蓮魔獣ダ・イーザ』！」
『紅蓮魔獣ダ・イーザ』ＡＴＫ？
「あ、ぁ……」
『――――――――ッ！！』
燃え盛る魔獣が、咆哮する。彼女のトラウマを刺激する、炎の化身。
「ダ・イーザの攻撃力・守備力は、ゲームから除外されているさだめのカードの枚数×４００ポイントとなる。さだめの除外されているカードは九枚。よって攻撃力は……」
『紅蓮魔獣ダ・イーザ』ＡＴＫ３６００
「……終わりだよ。『紅蓮魔獣ダ・イーザ』でプレイヤーにダイレクトアタック。『煉獄の業火・インフェルノフレイム』」
「あ、あああああああああああああああああああああっ！？」
女ＬＰ０
ダ・イーザの炎は、さだめの目の前で、かつてさだめが壊してし

まった少女をまた、焼き尽くした。

「……全部終わったら、まず警察、かな」

いい加減、目を逸らし続けるわけにもいかないんだ。さだめは間違いなく、罪を犯したんだから。

「……けど、さだめさんがやったことというのは、元の……ええと、セツ様と同じ、別の世界でのことですよね？」

「関係ないよ。罪は罪。そうでしょ？」

「で、ですがその、この世界でやったことでないのであれば、人間界の法制度ではさだめさんを……その、罪に問うことは……」

できない。人間界の法律まで勉強しているカイエンには感心するね。けど……。

「けどそれじゃあ……さだめは、どうやって罪を償えばいいのかな……？」

罪を償わなきゃ、幸せになる資格はない。そう改めてはっきりと言われて、でも罪を償う方法はなくて……。

「……誰よりも、幸せになりゃいいンじゃねェか？」

「……え？」

通路の壁に背中を寄り掛からせたゴーズが、面倒くさそうな口調でボソリと言った。

「お前は、アイツらの幸せを奪ったンだろ？　奪うってのはナ。“自分の物にする”ってことなンだよ。だから、つまり……」

ゴーズは少し照れくさそうに顔を背ける。

「アイツらの分まで、誰よりも幸せになる。それでいいだろ」

「……」

「ゴーズ様……」

「大体、アイツらが不幸になって、お前も不幸になってたら救いがねェだろ。起きちまったことは変えられねェ。だったら、例え盗人

猛々しいと言われようと、お前一人でも幸せになった方がよっぽどマシだろうが」
「……そう、なのかな」
「そうだ」
「……そっか」
ゴーズの言葉で、少しだけ胸が軽くなった。
「……それでも」
さだめが罪人であることは変わりない。今にも、罪悪感で胸が潰れそうになる。
「お兄ちゃんは、こんなさだめでも、抱きしめてくれるのかな……」
くれるのだろう。わかっていて、そんなことを呟く。
「……だったら」
さだめは、お兄ちゃんの分まで、泥を被ろう。起きてしまった過去は変えられない。だから、未来を変えるんだ。お兄ちゃんに、これ以上の重荷は背負わせない。そのためなら、さだめは……。
「いくらでも、罪を重ねてあげるから……」
頬を、一筋の雫が流れ落ちた。
それは、きっと……普通の女の子であることを捨てたさだめの……。
「……」
想いの、ヒトカケラ。

第四期第十五話「想いのヒトカケラ」（後書き）

こんにちは。

さだめの過去と、真の意味で決着をつけた、と言っていいんでしょうか。今回の話も少々、以前の決別と同様に言いたいこともあるでしょうが……。

今回インヴェルズを使いましたが、シンクロのないＧＸ時代の今、インヴェルズめっちゃ強いです。シンクロある今でもそこそこ強いのに、帝全盛期でもあるＧＸ時代にインヴェルズ。軽くチート気味の強さでした。何しろ、使用するカードをインヴェルズとそのサポートカードに限定して尚あの強さですからね。あれで悪夢再びとかサモン・チェーン、二重召喚だのといったカードを使わせればどんな強さになるやら……。ちなみに、さだめインヴェルズデッキ回収してます。ゴーズだのバトルフェーダーだのダムドだのまで混入したデッキを作る気か。その内使うかもしれません。

今回はゴーズ回でもありましたね。かっこよく書けてるでしょうか？　ぶっちゃけ相手がさだめじゃなければ間違いなくフラグものです。

ちなみに現在『ＣＨＡＯＳ・ＨＥＡＤらぶＣｈｕ☆Ｃｈｕ！』プレイ中。カオスヘッドは猟奇描写が中々良くて参考になります。歌もカッコイイ。なんでいきなりこんなこと言い出したかは、カオスヘッドやったことある人ならピンと来るはず。

次回はアテナ。遂にベールを脱ぐアテナの真の姿にご期待下さい。

それでは、悠でした！

第四期第十六話「反魂のスピリチュア」（前書き）

アテナ回更新です。前回のシリアス&ダークとは打って変わり、比較的ほのぼのとした回です。……いえ、反乱を治める回なんですけど！

遂にベールを脱ぐアテナの力！　結構な能力になったので、お楽しみに。

それと、今回あとがきにて読者の皆さまに協力して頂きたいことがございますので、出来ればあとがきの方も面倒くさがらずに読んでご協力くだされば幸いです。

第四期第十六話「反魂のスピリチュア」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第十六話「反魂のスピリチュア」

さだめさんに後を任せ、ルインさんに敵を前線に引きつけて貰い、私とシャルナは敵の懐、本拠地へと潜入することに成功しました。

「かなり警備が手薄になっていますね……ルインさんのお陰でしょうか？」

「さてさて……罠ってこともあるからねぃ」

潜入方法は、当初翼を使って空から……という予定だったのですが、デフォルトで真っ暗な冥界では純白の翼は目立ち過ぎるということで、それは断念しました。で、どうやって潜入したか、ですが……。

「と、ところでシャルナ、この偽装は本当に完璧なんですよね？」

「あったりまえでしょー。どこぞの傭兵が身を隠す時に常用していた由緒正しき一品よ～？」

「……ただの段ボールにしか見えないんですけど」

イメージは蛇さんらしいです。にょろにょろ。

「実際見つかってないんだから無問題（モーマンタイ）無問題（モーマンタイ）」

「それはそうなんですけど……」

珍しく真面目モードだと思いましたが、そうでもない気がしてきました。でも、実際潜入に成功している事実もありますし……。

「……まさかマジでイケるとは思ってなかったけど（ボソッ）」

「何か言いましたか？」
「何でもないよん」
怪しいです。また騙されているような気がします。でも上手くいってますし……。
「む？　なんだこの箱は？」
「っ！」
や、ヤバいです。遂に見つかりました。というか怪しまれました。
『ど、どうするんですか。遂に見つかっちゃいましたよ（ひそひそ）！』
『む～ん……だいじょぶじょぶ。静かに黙ってればバレないって（ひそひそ）』
「むぁっ！？　こ、これは……！」
こ、今度こそバレました！？　こ、こうなったら先制攻撃を……。
「これは、最近発売した新型のモニターではないか！　こ、こうしてはおれん、可及的速やかにハ・デス様のところへ運ばねば……」
……へ？
「最近軍備に資金をつぎ込みすぎて買う金などないとおっしゃっていたのに……流石ハ・デス様！　その様な財政から新型を購入する資金をひねり出すとは……気に恐ろしきはいんたあねっとおんらいんという奴か……私のような末端には理解できないものだが」
……えーと。
『……どこから突っ込めばいいのかわかりませんが……御同輩のようですよシャルナ』
『……いやはや、あたしが適当に選んだ段ボールだけど、妙な具合にハマったもんだねぃ。道理で誰もこんな段ボールが置いてあっても不思議に思わない筈だよ』
『……ってちょっと待ってください。やっぱりコレ、悪ふざけだったんですね！？　また私を騙して！』
『ちょっ！？　しーっ、しーっ！……まあまあ、上手く行ったんだから結果オーライってことで……』

『っていうかハ・デスってネトゲーマーだったんですか……あ、相変わらず精霊界は……！』

『まあハ・デスってば明らかに格下の深淵の冥王にしてやられて、一時期大分腐ってたらしいしねぃ。落ちぶれた精霊の行き着く所ってのは、どいつもおんなじようなもので……』

『落ちぶれたらネトゲ廃人って、妙にリアルな社会形成してますね精霊界！』

ああもう！　戦争中で潜入作戦中だっていうのにまったくもう！

「しかしっ、重いなこのモニター……！」

『言われてるよアテナ。ダイエットとかした方がいいんでない？』

『なっ！？　聞き捨てなりませんシャルナ！　大体、どう考えても体格的にシャルナの方が重たいでしょうに！　生活習慣的にも、ダイエットした方がいいのはどう考えてもシャルナの方です！』

『ところがどっこい。精霊は体格も体重も一生変化なしだったり』

『くっ！　これだから見せる相手もいないのに無駄にスタイルいい女は……！』

『ちょ、無駄とはなにさ～』

『言いたいことがあるならいい加減恋人の一人でも作ったらどうです！？　一体何百年一人身でいるつもりですか』

『うわっ、ちょっといい男捕まえたからって何という暴言。流石におねえさん、カチンときちゃったよ～？』

『やりますか！？』

『やらいでか！？』

「ん～？　なんか何処かから声がするような……」

『……』

『……』

い、一時休戦です。こんなアホな言い争いでバレたら末代までの恥です。

「しかし……前線にはあのルイン様が現れたっていうのに……なんで俺は後詰で一人荷物運びなんてしてるんだろうなぁ……はぁ、俺

もルイン様を見に行きたいよ……」
　……それにしても、相変わらず凄い人気ですねルインさん。
「見たかったなぁ、ルイン様の戦場生ライブ」
　ってまさかホントにファンクラブ的な意味で引きつけてるんですか!?　敵ながらなにやってんですか!?　サイクロイドさんじゃないですけど、反乱って子供の遊びじゃないんですよ!?
「ハ・デス様～。お届けモノで～す」
　貴方は何処の配達員ですか。一応兵士でしょう。
「む？　それは……」
　っ……ハ・デス！
「通路に放置されてたんで、一応お届けに。これ、ハ・デス様がご所望の最新型モニターッスよね？」
「お？　おおおそれは！　財政難で手に入らんと半ば諦めていたものだが……」
「へ？　ハ・デス様が注文したんじゃないんスか？」
「いや？　ワシも欲しいとは思っておったが……まあよい。大義であった。下がって良いぞ」
　本当は大義どころか、図らずも獅子身中の虫となってるんですけどね……。
『今よ！』
『はい！』
　シャルナの合図に、私は段ボール箱（最新型モニター）から飛び出し――。
「へみゃっ!?」
　べちっ！
　……段ボール箱に足を取られて転びました。痛いです。
　いそいそと立ち上がり、改めて宣言します。
「反乱軍総大将ハ・デス！　その首貰ったぁ！　です！」
「……」
「……」

「……あれ？」
「なんでこー、登場シーンすらカッコ良く決まらないのかしらねこの娘は……」
私に続いて段ボールから出てきたシャルナは、何故かよよよとばかりにハンカチで目元を拭っていました。
「何の話ですか？　私は転んだりしていません」
「……」
「……」
……なんですかその沈黙は。あたかも私が残念な娘とでも言いたげですね。
「……やや！　怪しい奴！」
「冥界の魔王ハ・デス……今日が年貢の納め時よ！」
「何事もなかったかのように猿芝居を始めないでください！」
「ぬうぅ……まさかワシの所望していた最新型モニターに扮して侵入するとは……流石は精霊界一の駄目オタニート……アテナよ」
「今はシャルナよん。って！　誰が精霊界一の駄目オタニートか！」
「いえそれ以前に私をなかったことにして話を進めないでください！」
ついでに、ハ・デスの言い方だと私が駄目オタニートみたいで嫌です。
「と、兎に角！　ハ・デス！　貴方の野望はここで潰えるのです！　私とデュエルです！」
「よかろう……このワシに打ち勝つことが出来れば、我が矜持に懸けて全軍を退かせることを誓おう……」
「……あれ？　思った以上に聞きわけが……」
ま、まあいいです。全軍を退かせるというならそれに越したことはありません。私はデュエルディスクを構え、ハ・デスと相対します。
「「デュエル！！」」
アテナＬＰ４０００

ハ・デスＬＰ４０００
「ワシの先攻。ドロー！」
ハ・デスである以上、デッキは悪魔族……油断はできません。
「ワシは『クリッター』を攻撃表示で召喚。カードを一枚セットし、ターンエンド」
『クリッター』ＡＴＫ１０００
「初手に『クリッター』を攻撃表示……明らかに誘っているとしか思えない布陣ですね……私のターン、ドロー！」
それでも、私のデッキは攻めるデッキ。罠を恐れて立ち止まるような私じゃありません！
『相変わらず、顔に似合わず男らしい戦術ね……』
「うるさいです。私は手札から『ヘカテリス』の効果発動。このカードを墓地に捨てて、デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加えます」
私はいつものように、上級召喚のためのカードを手札に加えます。
「そして『神の居城―ヴァルハラ』の効果発動。私は手札から『アテナ』を特殊召喚します！」
『アテナ』ＡＴＫ２６００
『なーんか嫌な予感するのよね……ねえ、攻撃やめない？』
「嫌な予感に関しては私も同感ですが……かといって躊躇っていては勝てません！　バトル！『アテナ』で『クリッター』を攻撃します！『ディヴァイン・クロス』！」
『あー、はいはい。しゃーないわねーっと！』
「ククク……トラップ発動『ヘイト・バスター』！　悪魔族に攻撃したモンスターを、その悪魔族ごと道連れにし、その攻撃力分のダメージを与える。我が軍勢に背いた報いを受けよ！」
『ほらやっぱりーっ！？』
「きゃああっ！？」
アテナＬＰ１４００
「くっ……！」

「更に、墓地に送られた『クリッター』のモンスター効果により、ワシは『死霊操りしパペット・マスター』を手札に加える」
「私はモンスターを一枚セット。ターンエンドです」
『あたた……もうアテナ～』
「ご、ごめんなさいシャルナ。てっきりミラーフォース辺りだと思ったんですけど……これなら追撃用のモンスターも出しておくべきでした」
『ってそれ、結局あたしはやられるじゃないの！』
「うっ……」
それを言われると痛いです。
「ワシのターン、ドロー！　ワシは『ニュードリュア』を攻撃表示で召喚。バトル！」
『ニュードリュア』ＡＴＫ１２００
「私の伏せモンスターは『スケルエンジェル』！　リバース効果によりカードを一枚ドローします！」
「ワシはカードを三枚セットし、ターンエンドだ」
「私のターン、ドロー！　私は『ジェルエンデュオ』を攻撃表示で召喚します！」
『ジェルエンデュオ』ＡＴＫ１７００
「バトルします！『ジェルエンデュオ』で『ニュードリュア』を攻撃！」
「ぬぅっ！　しかし『ニュードリュア』のモンスター効果発動！　戦闘によって破壊され、墓地に送られた場合、相手モンスター一体を破壊する！」
ハ・デスＬＰ３５００
『ニュードリュア』の瘴気に中てられ、『ジェルエンデュオ』が力なく倒れて行きます。
「それは予想済みです。私はメインフェイズ２にヴァルハラの効果を使い、手札から『光神テテュス』を攻撃表示で召喚します！　ターンエンドです！」

『光神テテュス』ＡＴＫ２４００
「エンドフェイズ時に、我が伏せカード『針虫の巣窟』を発動！ワシのデッキを上から五枚、墓地に送る」
「墓地肥し……！？」
確か、ハ・デスは蘇生能力に長けた悪魔……そのための布石ですか。
「ワシのターン、ドロー！　ワシは永続トラップ『リミット・リバース』を発動。墓地から『クリッター』を蘇生させる」
『クリッター』ＡＴＫ１０００
三つ目の小悪魔が再び姿を現します。
「そして『クリッター』をリリース！　手札から『死霊操りしパペット・マスター』を守備表示でアドバンス召喚！　そしてライフを２０００ポイント支払い、墓地から『闇の侯爵ベリアル』と『暗黒の侵略者』を特殊召喚する！」
ハ・デスＬＰ１５００
『闇の侯爵ベリアル』ＡＴＫ２８００
『暗黒の侵略者』ＡＴＫ２９００
「そんなっ……！？」
一瞬で最上級モンスターを二体！？　二体とも『針虫の巣窟』で墓地に送っていたんですか……。
「しかし、残念なことにこの効果により特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃することが出来ぬ。ワシは『クリッター』の効果でデッキから『グレイブ・スクワーマー』を手札に加える」
ほっ……攻撃出来ないのなら、まだ良かったです。ライフもこれで並びましたし、これならまだ……。
「しかし、まだ終わらぬぞ！　手札から魔法カード『冥界流傀儡術』！　墓地の悪魔族一体を選択し、そのモンスターと合計レベルが同じになるようにフィールドからモンスターを除外し、特殊召喚する！　ワシが選択するのは『エンド・オブ・アヌビス』！　そのレベルは６！」

「6ってことは……」
「そう！　ワシのフィールドには既に用なしの『死霊操りしパペット・マスター』が存在する。ワシはパペット・マスターを除外し、墓地から『エンド・オブ・アヌビス』を蘇生する！」
『エンド・オブ・アヌビス』ＡＴＫ２５００
「フッフッフ……『エンド・オブ・アヌビス』が存在する限り、墓地への魔法・罠・モンスター効果は無効となる」
「そんなモンスターまで！？」
くっ……まさか一ターンでここまで……！　魔王の名は伊達じゃないということですか……！　ところで……。
「結局自分自身は出さないんですか？」
「ワシが出るまでもなかろう！　この圧倒的な陣容！　速攻魔法を封じられ、墓地利用を封じられ、攻撃可能なのはベリアル一人……最早貴様に勝ち目はない！」
「それは、どうでしょうね……！」
「ふん。貴様の手に『オネスト』が存在することなど、見るまでもなく明らかよ！　トラップ発動『マインド・クラッシュ』！　手札から『オネスト』を捨てぃ！」
「そんなっ！？」
ハ・デスの読み通り、私は手札に『オネスト』が存在しました。
私の手札から『オネスト』が葬られます。
「バトル！『エンド・オブ・アヌビス』で『光神テテュス』を攻撃！」
「きゃああっ！？」
アテナＬＰ１３００
「くっ……強いです！」
「当然よ。ワシは冥界の、真なる魔王ぞ！」
ライフはほぼ横並び。ですがボード・アドバンテージは完全に握られました。くっ……。
「どうやら貴様、ボード・アドバンテージを握られると弱いらしい。

この状況、どう覆す？　戦女神の使い手よ。ワシはカードを一枚セットし、ターンエンドだ」

「……私のターン、ドロー！」

確かに、状況は相当にマズイです。ボード・アドバンテージは握られ、墓地からの蘇生も不可能。リクルーターによる場つなぎも出来ず、速攻魔法を封じられた以上『光神化』と『地獄の暴走召喚』のコンボも使えない……。私の得意とする戦術の殆どを封じられた形です。

「私はモンスターを一枚セット。カードを一枚セットしてターンエンドです」

今は、凌ぐしかありません！

「守りに入ったか。しかし、凌ぎ切れるか？　ワシのターン、ドロー！」

フィールドには、三体の上級悪魔。凄まじい威圧感です……。

「バトル！『エンド・オブ・アヌビス』でモンスターを攻撃！」

「守備表示のモンスターは『マシュマロン』！　戦闘では破壊されません！　更に効果により、１０００ポイントのダメージを受けて貰います！」

ハ・デスＬＰ５００

「ぬぐっ……！　耐えるだけでなくダメージまで与えるとは……。ならばワシはモンスターをセット。ターンエンドだ」

「私のターン！」

くっ……！　状況を打開できるカードじゃありません！　早く、戦いを終わらせなきゃいけないのに……！

「……カード一枚をセットしてターンエンドです」

「その逃げ腰、何時まで持つかな？　ワシのターン、ドロー！　ワシはセットされた『グレイブ・スクワーマー』をリリースし、ワシ自身をアドバンス召喚！」

『冥界の魔王ハ・デス』ＡＴＫ２４５０

「遂に出てきましたか……」

「更に、墓地に存在する三体の悪魔族モンスターを除外し、『ダークネクロフィア』を特殊召喚！」

『ダークネクロフィア』ＡＴＫ２２００

「更にモンスターを……！？　しかも、墓地は使えない筈なのに……」

「『ダークネクロフィア』の墓地除外はコスト。よって『エンド・オブ・アヌビス』では無効化されぬわ！」

……本格的に不味くなってきました。相手フィールドには上級悪魔が五体。こちらは戦闘破壊耐性を持ったモンスターで何とか凌いでいる状況……！

「何時までもそんな守りが通用するものか！　ワシは手札から『地砕き』を発動！『マシュマロン』を破壊する！」

「きゃあっ！？」

「終わりだ！　ワシ自身でダイレクトアタック！」

「トラップカード発動！『和睦の使者』！　このターン戦闘によるダメージはゼロになります！」

「ぬぅ……またしても耐えたか。しかし、次はない」

「くっ……」

『アテナ、アテナ』

「シャルナ……？」

『な～にを焦ってるかなこの娘は！』

「たっ！？」

呆れたような顔のシャルナに、ペシリと軽く叩かれました。

「な、何するんですか」

『何するんですかじゃないわよ。出陣前にさだめちゃんに言われたこと気にしてる？　手早く済ませてきますから～って』

「そ、それは……」

『あぁ、それだけじゃないわね。大方、セツを助けるためにこんなところでグズグズしちゃいられないってところかしらん？』

「う……」

『図星？　でしょうね。あんたってばわかりやすいし』
　はぁやれやれ、とシャルナが首を振ります。
『ホント、アテナってばセツが居ないとダメになっちゃったわねぇ。見ちゃいらんないわ』
「な、なんですか」
『プレイングが荒い、焦り過ぎ慌て過ぎ気圧され過ぎ。あとついでにあたしの扱いがぞんざい！』
「シャルナの扱いが悪いのはいつものことです」
『しゃらっぷ！　お黙り！』
「ひぅ」
『とにかく！　あんたってば強いんだから。普段通り、落ち着いて平常心で行けば勝てるのよ。あの程度の陣容、昔のアテナ……ううん。スピリチュアなら簡単に突破できた。違う？』
「それは……」
『あとはアンタ次第。手札はある。ヴァルハラはある。あと足りないのはアテナの力』
　シャルナの言葉に、私は心を落ちつけてデッキに手を添えます。
『アテナ自身が言ったことでしょ？　この冥界で……アンタに勝てる奴なんていないのよ』
「……はい！　ドロー！」
　来ました！　逆転の一手！
「ハ・デス！　終わらせます！」
「なんだと……？」
　私のフィールドにはヴァルハラ一枚と伏せカード。まずは……。
「私も使わせて貰います！　リバースカードオープン！『針虫の巣窟』！　デッキの上から五枚、墓地に送ります！」
　墓地に送られたのは『堕天使スペルビア』『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』『光神機―桜火』『光神機―轟龍』『虚無の統括者』……見事に上級一色。改めて自分のデッキの滅茶苦茶さを再認識しました。でも、今は好都合です！

「私はヴァルハラの効果を使って、私自身。『反魂のスピリチュア』を特殊召喚します！」

『反魂のスピリチュア』ＡＴＫ８００

「こ、これは……！　まさか小娘貴様……いや、貴女様は……！？」

「私自身。『反魂のスピリチュア』はその昔、強力さ故封印指定を受けました。その力……存分に思い知ってください！　効果発動！」

フィールドにて輝く翼が、闇を祓っていきます。

「第一の効果！　手札を任意の枚数捨てることにより、その枚数だけ相手フィールドの闇属性モンスターをデッキに戻します！　私の手札は二枚。よって『エンド・オブ・アヌビス』と『ダークネクロフィア』をデッキに戻します！」

「ぬぅっ！？」

破壊することが危険な『ダークネクロフィア』と、第三の効果を阻害する『エンド・オブ・アヌビス』を先に除去します。

「更に第二の効果！　第一の効果でデッキに戻した数だけ、墓地から光属性モンスターを効果を無効にして蘇生します！　私は『アテナ』と『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を蘇生します！

『反魂呪魂の法、Ｏ・ＳＩ・ＲＩ・Ｓ』！」

『アテナ』ＡＴＫ２６００

『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』ＡＴＫ２８００

闇に染まりし魂を、反魂の輝きが浄化して、シャルナとヴィーナスを蘇らせます。

「まだです！　第三の効果発動！　相手の墓地に存在する闇属性モンスター一体を選択してデッキに戻し、私の墓地から光属性モンスター一体を、効果を無効にして蘇生します！　私は貴方の墓地から『レッサー・デーモン』をデッキに戻し、『光神機―轟龍』を蘇生！」

『光神機―轟龍』ＡＴＫ２９００

最初の『針虫の巣窟』で墓地に送られていた悪魔をデッキに戻し、その魂は光輝く機械仕掛けの龍に受け継がれます。

「な、なんという……！？」
　これが、かつて生と死の境界を侵したとされ、禁忌……封印指定をされた私の力。闇を光に変え、戦場を光に包むこの力は、闇と光の闘争のバランスを崩すとされ、使用制限を出された力です。
「……効果は無効になっているため、シャルナの効果は発動しません。ですが」
　フィールドを見る。先ほどとは真逆。最上級天使に支配された私のフィールドに対し、ハ・デスの持つ闇は押し潰されそうです。
「……バトルです。まずは『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』で『闇の侯爵ベリアル』を攻撃です！」
「くっ……迎え討てぃ！」
　攻撃力は互角。『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』の効果は無効になっているので、相討ちになるのみ。
「更に『光神機―轟龍』で『暗黒の侵略者』に攻撃！」
「ぬおおっ！」
　攻撃力はやはり互角。相討ち。ですが……。
『あたしとアンタじゃ、格が違うみたいねん』
「ぐっ……！」
「行きます！　シャルナで『冥界の魔王ハ・デス』に攻撃！『ディヴァイン・クロス』！」
『ぜえええいりゃあっ！』
「ぐおおおおっ！？」
　ハ・デスＬＰ３５０
「……終わりです。『反魂のスピリチュア』で、プレイヤーにダイレクトアタック！『トライデント・サンシャイン』！」
　ソリッドビジョンの私が、その手に持った三又の槍をハ・デスに投げつけました。
「ぐあああああああああっ！？」
　ハ・デスＬＰ０

「では、これで軍を退いていただけますね？」
「……うむ。ワシに二言はない」
「それにしても、嫌に素直ですね。もう少し何かあるかと思いましたが……」
「どこぞの雑魚に敗れるなら兎も角、かの有名な戦女神両名に敗れるなら本望というものよ。何より、死んだと聞かされていたスピリチュア様が存命であったとは……」
「……私はアテナです。今は精霊ではなく、ただの人間ですよ」
「そうですか……」
「というか、何で敬語なんですか？　私、別にハ・デスよりも偉い精霊だった訳じゃないですよ？」
「いやいや！　まさかこのワシが、スピリチュア様を呼び捨てになど出来る筈もあるまい。そう、我が女神たるスピリチュア様を！」
「……はい？」
何だか雲行きが怪しくなってきました。
「かつてスピリチュア様が死んだと聞かされた時には、どれほど嘆き苦しんだことか！　あまりのショックについ不覚を取り、深淵の冥王ごときにやられ、ネットゲームにハマりこむ程で……」
「あらん。あたしとおんなじような理由だったの？　益々御同輩みたいね」
「見てくださいこの会員証！」
「ええと……『スピリチュアファンクラブ会員Ｎｏ．６６６』……ってファンクラブ！？」
「ちなみに、あたしも持ってるよ。っていうか会長」
「シャルナ！？」
「ワシの会員番号……三桁台というのは非常に珍しいものでして……」
「いえ、どっちかと言うとその不吉な数字に目が行きますが……そもそもシャルナはシングルナンバーですし」

ってそういうことじゃあありません！

「苦節ウン十年……長きに渡る雌伏の時でありました。こうしてはおれん！　一刻も早くこの情報をネットに流し、スピリチュア様の復活祭の計画をせねば……シャルナよ！　ヴァンダルギオンへの伝言は任せる！　今回はワシの負けじゃとな！」

「あいあ～い」

「ちょ、ちょっと待ってください！　復活祭ってそんな……」

慌てて抗議しようとしましたが、ハ・デスは鈍重そうな見た目に反し、凄いスピードで奥へと引っ込んで行ってしまいました。

「え、え～っと……」

「ま、何にせよ反乱はこれで終わり。とっとと戻って報告して、希冴姫ちゃんを蘇らせましょ～やね」

「え、いやあの……こんなあっさりした終わりでいいんですか？」

「こじれるより良いでしょ～よ。ま、あのレッド寮じゃないけどアテナ信者ってのはどこにでもいるみたいねん」

「……ルインさんのファンクラブといい私のファンクラブといい土下座評論家といい……精霊界はどうしてこう……」

私は呆れ果ててもう何も言えませんでした。まあ兎に角、これで反乱は終わったらしいのでヴァンダルギオンさんに報告してしまうとしましょう。

「はぁ……なんかドッと疲れました……」

シリアスになりきれない自分のキャラ特性が、改めて憎く思った私でした。

第四期第十六話「反魂のスピリチュア」（後書き）

こんにちは。

というわけで、反魂のスピリチュア、その効果は完全なる闇属性アンチ効果でした～。うん。ぶっちゃけ闇属性相手ならブリュどころじゃないフィニッシャーですよ。この子。ちなみに、今回は書かれていませんが、制約としてスピリチュアの属性が光属性の時にしか使えません。要するに、ＤＮＡ移植手術とのコンボは出来ませんということで。出来たらチート甚だしいですしね。やけに攻撃力が低いのは、攻守がシャルナの反対だから。故に守備力は２６００あります。まあ正式なテキストは例によって活動報告にて。

いやしかし、ハイテンションになりがちなさだめのギャグも書き易いですが、アテナのこういうほのぼのとしたギャグも書いていて心が癒されます。只でさえ最近暗い話ばっかりだったし……。最初のスネ○クネタの辺りなんかは、結構ノリノリで書いてました。

そして企画！　実は、あと二週間と経たない内に、アルカナは丁度一周年を迎えます！　そこで記念として、アルカナ一問一答！みたいなことをやろうかと思っているのですが、その際の質問を募集します！　セツたちに答えてもらいたい質問等ありましたら、遠慮なくお願いします。ネタバレなどの限度はありますが、かなりきわどい質問とかもアリにします。以下は一問一答の例です。

Ｑ：セツの無駄スキル、一番活用機会が多いのはなに？

Ａ：「まあ生活に密着している時点で料理だろうな。ただ、これは無駄スキルの副産物だから……無駄スキルそのものだと、やっぱり空気に溶け込む程度の能力、かな？」

Ｑ：アテナ、小学校で浮いてたりしなかった？

Ａ：「……何故か例題に悪意を感じます。別に浮いてはいませんよ。いえ、確かに周りより大人びて見えるということで多少……誰です

か今老けてるって言った人！　確かによく「アテナちゃんランドセル似合わないね～」って言われてましたけど、それは老けていたわけではなく（強制終了）」

……まあ今のは一例ですが、こんな感じです。なんでも良いので質問がありましたら。もし少ないようなら別のモノを考えるので、絶対とかはいいませんが。ご協力、お願いします。質問の締め切りは、一週間後の二月一日終日です。よろしくお願いします。

それでは、悠でした！

第四期第十七話「望まぬ再会」（前書き）

第十七話です。今回で、というか前回で冥界編は終わり、今回からは新章に突入です。具体的には……まあタイトルと本編からなんとなくわかるかな？　それでは、風雲急を告げる十七話、お楽しみください！

第四期第十七話「望まぬ再会」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第十七話「望まぬ再会」

『……そうか。まったく傍迷惑な……』

私がヴァンダルギオンさんに、反乱終結の経緯を話した際の反応は、大きな溜息でした。まあ、妥当なところだと思います。

「きゅ、きゅ～！」

「あーはいはい。遊んであげるから少し落ち着いてってば。まったくもう。な～んでさだめにばっかりこんなに懐くのかな」

「かう～」

「羨ましいです……」

「ほら、アテナんとこ行けば沢山遊んで貰えるよ～？」

「きゃうっ！」

ミリーちゃんはぷいっ、と顔を背けて拒否。うぅ、どうして……。

「きゅっ！　きゅきゅ～！」

「あ～なんかね。抱き締め殺されそうで怖い、だってさ。行き過ぎた愛情表現は嫌われるよ～？」

「よりにもよってさだめさんがそれを言いますか」

「……だよね」

「さだめさん……？」

先ほどから、どうもさだめさんの様子がおかしいです。普段の明るさがすっかり鳴りを潜め、どこか落ち込んでいる様子です。

「……なんでもないよ」
「私、まだ何も聞いてません」
「……」
明らかにおかしい。それはわかりますが、安易に踏み込むことを躊躇わせるような雰囲気を持っていて、聞くに聞けません。
「別に。ただ……」
さだめさんは寂しそうに笑い、呟きました。
「お兄ちゃんに、会いたいなぁ……って、さ」
「……」
今にも泣きだしそうに見えるさだめさんの言葉に、私は何も言えずに黙りこみます。まだ、セツと別れてから一日と経ってはいません。ですが、それでも私たちの強がりは限界に達しようとしているのが、自分でもわかるからです。
「……元々、強がりという意味で最も強いのはセツだった」
「ルインさん！」
私より一足遅れて戦場から帰還したらしいルインさんが話に加わります。
「今戻った」
「大丈夫でしたか？」
「問題ない」
まあ基本的にファンクラブにサービスしてただけみたいなものですからね……。
「彼の強がりは、完璧だった。誰もそうとは気付かないくらいに」
「でも、ルインさんは気づいたんですよね？」
「私は特別。彼と似たような経験があるから」
だとしても、私としては複雑です。私は、全然気づいていなかった。ただ、セツは強くて、格好良くって、無敵なんだって、盲目的に依存していた。
「……駄目ですね。私」
セツのことを好きだって言いながら、もしかして私は、本当のセ

ツ自身を見ていなかったんじゃないか。そんなことを思い、私は顔を俯かせます。
「諦める？　大歓迎」
「まさか」
例え、今までの私が浅はかでも、セツへの想いは本物です。
「知らないのなら、知ればいい。そうですよね？」
「……ポジティブ」
「セツと一緒にいると、そうなるんです」
どんなに辛くても、強がりを悟らせないセツを見ていると。
「こんなところでへこたれちゃいられない。そう、思えるんです」
だけど。だから。
「セツが居ない今、私たちは強く在れない」
「はい……」
我ながら、依存してますね……セツに寄りかかり過ぎです。私は、セツを支えたいのに。
「今のままじゃダメです。もっと、強くならなくちゃ」
セツを、助けられません。
「それで？　これで希冴姫を蘇生するのに力を貸してくれるのだろうな？」
私たちの話がひと段落するのを待って、エースさんがヴァンダルギオンさんに協力を要請します。
『うむ。しかし、少し時間が欲しい』
当然のように、頷くヴァンダルギオンさんでしたが、少し歯切れが悪いです。
「どういうこと？　反乱は終わったじゃん」
「反乱ってなァ戦争だゼ？　終わった後にも色々あンだよ。戦後処理っつってなァ」
「すみません。出来る限り急ぎますが……私たちの手が空くのは一週間……いえ、五日でなんとか……」
「……シャルナ」

「え～？　それ業務外労働じゃ……」
「シャルナ！」
「わかってるってばさ。あたしも手伝うって」
「仕方ねェからオレもマジメにやってやらァ」
「ああ……この二人が真面目に働くなんて……私、この日をどれだけ渇望したことか……」
「どれだけ不真面目だったんだコイツら……」
奥の部屋から、剣士さんたちも戻って来ました。
「大丈夫ですか？」
「ああ、オレはなんとかな……」
「あ、はは……私はちょっと、キツイかも……」
凛さんの顔色が余り良くありません。
「きゅう……」
「ほら、シャキッとしなさい！　凛だって気をしっかり持っているんだから……貴女精霊でしょうが！」
すっかり目を回しているエリアルさんをエリアさんが――名前が似ていて紛らわしいですね――気つけしています。
「では、一度我々の拠点に帰還しましょう。何時までもここにいてはお辛いでしょう」
「そうじゃな。冥界の空気は老体に堪えるわい」
「違いない」
冗談めかして言うキングさんに、苦笑気味のテンスさんが続きます。
「それじゃあ、私もシャルナたちのお手伝いをしていきますので……」
「うん。わかった。さだめたちは城に戻ってる」
私とルインさん、シャルナは冥界で戦後処理を。他のメンバーは拠点に戻って休息を取ることに決め、私たちは一端別れたのでした。

「ねえ、エースさん」
「む？　どうした妹」
さだめは、王城の廊下を歩いていたエースさんに声をかけた。お兄ちゃんになにか言われたのか、以前よりとっつきやすくなっているエースさんは、ぶっきらぼうではあったけど無視することなく答えてくれた。
「このお城、何処かにこう、暴れられるところってないかな？　訓練施設みたいな」
「戦士族の城だからな。当然あるが……どうするつもりだ？」
「そりゃ、訓練だよ」
「精霊でもないお前が？　何のために」
「憂さ晴らし」
さだめが簡潔に答えると、エースさんは若干きょとんとして固まった。
「あぁ……なるほどな。まあ、気持ちはわからんでもない。我も、少し身体を動かしたいと思っていたところだ。案内してやろう」
そう言って歩き出すエースさんの後をついて行く。ちょうどいいや。この際はっきりさせておこう。
「ねえ、エースさん。エースさんは、お兄ちゃんのことどう思ってるの？」
ピクッ……。
「どういう意味だ？」
「どういう意味って、そのままだよ。もっと直接的に言うなら、お兄ちゃんを恋愛対象として見てるかどうか」
「本当に直球だな……」
「それがさだめだもん」
呆れたようなエースさんに、さだめは胸を張って返す。
「で、どうなの？」
「……さあな」

「このタイミングでの沈黙は肯定と受け取るけど、それでもいいね？」
「……違う」
「嘘ばっかり」
「なら何と言えばいい？　結局、我が何と答えようと関係ないのだろう？」
そうかもしれない。さだめの視点では、どう見てもエースさんはお兄ちゃんに惚れているから。
「……結局、さだめは自己中なんだよね。人の事情なんか関係ない。自分の見たいようにしか世界を見てない」
訓練場に着く。エースさんの返事も聞かず、さだめは闇を展開して薙ぎ払う。
「だから、忘れてたんだ。さだめから見た世界が、あんまりにも優しいから。あんまりにも幸せだから」
闇を叩きつけ、訓練場の床が陥没する。
「……さだめが、どうしようもなく醜いってことに」
意味もなく、力を振るう。きちんと整えられた訓練場を蹂躙する闇の爪。
ギィンッ！
「……それでも、奴はお前を受け入れた」
さだめが振るった力を、エースさんが剣で受け止めていた。
「相手がいる方がストレス発散にはよかろう。我も、派手に動きたい気分だ」
「……怪我しても知らないよ？」
「素人が。甘く見るなよ」
さだめのお尻から伸びる闇の尻尾が、エースさんを襲う。
「ッふ！」
受け流された。その仕草に焦りは見えない。余裕なんだ。
「……ッ貴様は、幸せにならねばならん」
「……」

剣を交えながら、エースさんはさだめに語りかけてくる。
「醜かろうと卑しかろうと、受け止めてくれる者がいるのだろう！　ならば、貴様は幸せにならねばならん！」
「どうして」
「恵まれているからだ！」
「！」
一瞬、闇の制御が緩んだ。その隙を見逃さず、エースさんが斬り込んでくる。
「どんなに醜くても、卑しくても、それでも受け入れて貰える……そんな恵まれた女が、幸せにならねば誰がなる！？」
「醜くも、卑しくもない普通の人間を、傷つけたさだめがいるんだ。反省するでも、罪を償うでもなく、これからも、傷つけ、奪い続けると誓ったさだめがいるの！」
「なら奪えばいい！　傷つければいい！　奴は……セツはどんなお前でも好きでいてくれる筈だ！」
「だから！……だから、苦しいの。だから、泣きたくなるの。自分がどんどん醜くなっていくのが止められない。お兄ちゃんは受け入れてくれるから。だから、歯止めが利かない――ッ！」
闇が渦巻く。さだめの手の中で。さだめの、心の中で。
「それは違うッ！」
光の刃が、闇を断ち切る。飛び込んできたエースさんが、さだめに肉薄する。
「奴は、セツは、どんなお前でも受け入れるだろう……だが、間違うお前を放ってはおかない！」
エースさんが振るう剣を、闇の盾で受け止める。細身の剣なのに、その剣撃は酷く重たかった。
「奴の人当たりの良さは、貴様のためだ！　貴様がやがて社会復帰出来るようにと、その緩衝材になれるようにと、奴が磨いた、お前のための技能だ！」
連続で振るわれる剣を、なんとか闇を使って捌く。

「どんなお前でも、奴は受け入れる……しかし！　間違った道を往く人間を、そのまま見過ごすようなバカではない！　間違っている物を、間違っていると殴り飛ばせる奴だからこそ、我は――ッ！」

「ッ！」

これ以上は捌き切れないと悟ったさだめは、思い切り闇を爆発させてエースさんをつき放す。

「……恵まれているお前は、幸せにならねばならない」

「……罪を犯したさだめは、幸せになっちゃいけない」

一瞬の硬直。

「……」

「……」

「「――――ッ！！」」

激突する。さだめの闇が、エースさんを喰い荒らそうと迫り、その闇をエースさんは突き破る。

「誰にも理解されず、ただ恐怖に精神が摩耗していく時を、貴様は知っているのか！？」

「過去の暴走と罪を、憎しみとしてぶつけられた罪悪感と恐怖が、貴女にわかるの！？」

ただ、ぶつかる。技術も何もない。ただ、想いを込めて。

ビシィッッ！！

訓練場の壁に罅が奔る。暴力的な闇が、さだめから溢れてくるのを感じる。

「この闇が……ニンゲンじゃないっていう証が、自分が自分じゃなくなっていく感覚が、どれだけ怖いかわかってる！？」

「……ああ。わかるさ」

「嘘！」

「嘘じゃない。自分が自分じゃなくなっていく。その恐怖は、我もつい最近、感じているさ……！」

エースさんの剣が、徐々にさだめの闇を貫き始める。同時に、剣自体にも綻びが走る。

「お前にも、わかる筈だ……人を想う、その感情が、自分を自分じゃなくさせて行く、その感覚は――！」
「っ！」
「おかしいんだ！　我は奴を友だと思っている。友だと思っているはずなのに……それだけでは済まない想いが、我を別の何かに変えて行く！“我”ではない、別の“私”が顔を出す！」
「エース、さん……！」
闇が、突き破られた。同時に、剣が砕けて崩れ落ちる。
「……だが、勘違いはするな。我は、奴を友人以上の存在にするつもりはない」
「……理解できないね。そこまで明らかな想いを抱えて、自分の中に押し留めるの？」
「それが、我の意地だ」
エースさんは、使いものにならなくなった剣を放り捨てて、さだめに背を向ける。訓練はこれで終わり、ということらしい。
「……さだめ、貴女のこと嫌いだよ」
「奇遇だな。我も良く似た感想だ。だが……」
背を向けたまま、エースさんは首だけさだめに振り向いた。
「お前とは、良い友人になれそうだ」
「奇遇だね。さだめもそう思ってたとこ」
嫌いだけど。憎らしいけど。まったく理解できないけれど。
何故か、わかる。この人とは仲良くなれるって、分かりあえるってわかる。
「不思議だね」
「ああ。不思議だ」
一頻り笑い合い、表情を引き締めた。
「――奴は救うさ。我の、騎士としてのプライドにかけて」
「――お兄ちゃんは助けるよ。さだめのセカイを守るため」

「……というかだな。貴様は素人の癖にどうしてそう戦いなれた動きをする」
「さあ？　漫画やアニメの見よう見まねだけど」
「それだけでは説明がつかんぞ……大した格闘センスだ」
「エースこそ、素人のさだめにまったく躊躇なく剣振るってたでしょ」
「躊躇したらやられかねん。実際、かなり本気でやってこのザマだ」
鍔割れた鎧と、砕け散った剣を差す。
「まったく……お陰で新しく剣と鎧を発注せねばならん。もう貴様と模擬戦はせん」
そう言ってエースさんは溜息を吐くのだった。

冥界での反乱騒ぎから五日後。カイエンさんの言葉通り、五日で戦後処理を終わらせた私たちは、全員で希冴姫さんたちの神殿に集まっていました。
「あ～やれやれ。こんな真面目に仕事したん、何時以来かしらね～」
「まったくだ。こりゃ、しばらくは全力でサボりだな」
「お～ふ～た～り～と～も～……！」
肩こったと言わんばかりの二人に、カイエンさんが涙目で睨みつけます。でも、何だかんだ言いつつ、二人も今回はかなり頑張ってくれました。
「きゅ！」
「ミリーちゃんも、頑張りましょうね」
「か～ぅ！」
か、可愛い……。抱きしめたい気持ちを何とか抑え、私は配置に着きます。
「……今更ですけど、本当はセツにも立ち会って欲しかったですね」

「そうだな。奴も、それを望んでいただろうが……」
「仕方ないよ。お兄ちゃんを助けたら、そのまま最終決戦突入でもおかしくないし、その時希冴姫さんがいないとお兄ちゃんも困るもん」
「そうですね。それに、希冴姫さんを何時までも寝かせておくわけにもいきません」
「……アイツには、色々と言いたいこともある。始めてくれ」
エースさんの言葉に頷き、私はシャルナたちと顔を見合せます。
「まず、手順を確認いたしましょう」
カイエンさんが、そう言って全員を見渡します。
「兎にも角にも、まずは肉体……器がないことには始まりません。これは、私たち冥界の者が担当いたします」
今回儀式に参加するのはヴァンダルギオンさん、ゴーズさん、カイエンさん。ミリーちゃんは、今回見学です。
「肉体の再構成が成功しましたら、アテナ様とシャルナ様で魂の方を」
「はい。わかりました」
「任せといて～。あたしがサポートはするし、アテナなら大丈夫」
気楽に手をひらひら振るシャルナに、カイエンさんはジトっとした目を向けましたが、小言は後にしようと思ったんでしょう。咳払いを一つして纏めに入ります。
「然る後、全員で魂を肉体に定着させます。手順としてはこれだけです。何か質問は？」
全員首を振ります。手順としては非常に単純なものなので、そこに問題はありません。
『……然らば、まずは我らが騎士の肉体を再構成しよう。ゴーズよ』
「わァってるって。マジメにやるっての」
「では……始めましょう」
カイエンさんがそう言い、今まさに儀式が始まろうとした……その瞬間でした。

ガシャァァンッッ！！
「っ！？」
「何事だ！？」
「入口の方から……」
何か、大きなものが破壊される大音響に、私たちは集中を乱して儀式を中断しました。
「一体何が……」
全員で慌てて神殿の入り口に急ぎます。そこには……。
「……嘘」
真っ二つに破壊された扉。そして、そこに立つ人影は、格好こそ見慣れぬ鎧姿でしたが、見間違う筈がありません。それは紛れもなく……。
「セ、ツ……？」
私たちが、探し求めていた人でした。
「悪いが……」
見慣れない、簡易的な鎧を身に付けたセツは、聞いたこともないような冷たい声で――
「お前たちには、ここで消えて貰う」
――私たちに、剣を向けてきました。

第四期第十七話「望まぬ再会」（後書き）

こんにちは。

急展開！　と言いつつ、何人かはこの展開、予想してた人もいるんじゃないかなーと思いつつ。

あ、ちなみに唐突にバトル展開になることはありません。剣を向けたりしてますが、勝負はあくまでデュエルです。遊戯王ですからね。

今回、一番の見せ場はもちろんラストですが、途中のさだめとエースの模擬戦が一番の見どころではありますね。戦闘描写とかはあんまり得意じゃないんですが、会話中心でならある程度書けてるかな？　実質、さだめに関しては闇としか描写してませんし。ただ、さだめとエースの台詞が同じ文字数になるように調整はしました。見栄えというか、対比というか……ああすると綺麗ですよね。読んでみて自画自賛しましたが。時々小説であいうのがあって、やってみたいなぁとは前から思ってましたが、ようやくすることが出来ました。セツの蒔いた伏線も回収出来ました。別名、エースさんお友達化計画。相変わらず、エースとさだめは良いキャラしてるなぁ……。書き易い。

次回、敵になったセツ。動揺するメンバー。そんな中、セツは無情にもデュエルディスクを構える。闇の衣を纏う、セツの新たな力とは――？

あ、それとアルカナの一問一答、質問の締め切りは今日の午前零時となっております。もしまだ何か質問があるようでしたら、感想辺りにでも書き込んでやってください。

それでは、悠でした！

第四期第十八話「天位の闇騎士」（前書き）

お待たせしました。アルカナ第四期、十八話をお送りします！
敵に回ったセツ。その力とは……？　ということで、内容はセツとのデュエルになっております。かなりの強力オリカも登場しますのでご注意を。

第四期第十八話「天位の闇騎士」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第十八話「天位の闇騎士」

「セツ……？」
「お兄ちゃん……？」
目の前に立った鎧姿の人物を見て、さだめたちは一様に絶句した。
それは、あり得ない人間だったから。あり得ちゃいけない人だったから。
「一応、聞いておく。お前たちが、彼女たち……終焉に仇為す敵か？」
その手に漆黒のデュエルディスクを構え、油断なく此方を見据えるその目に、狂気や虚無の気配は感じられない。信じたくない。でも、あれは……。
「セツ……！　貴様、正気か！？」
「正気？　おかしなことを聞くな。俺が狂っているとでも言いたいのか？」
「でなければ何故！？」
「決まっている。俺にとっての守るべきモノ。それを守るため、俺はここに、こうして立っている。俺は昔から、守るために生きてきた」
「お兄ちゃん……」
呆然と呟いたさだめに、お兄ちゃんはさだめを見て……眉を顰め

た。
「お前は誰だ？」
「ッ！！」
ぁ……。
「さだめさんっ！」
力が抜けて、崩れ落ちる。隣で、アテナが崩れかかったさだめを支えてくれていた。
「貴様、冗談は程々にしろ！」
「……冗談？　俺が何時、冗談など言った？　まあ……そんなことはどうでもいい。俺と……デュエルしろ」
お兄ちゃんが、その手のデュエルディスクを構える。
「待って」
「なんだ」
「貴方は……記憶がないの？」
「……」
お兄ちゃん……？
「セツ……今の、ルインさんが言っていたことは本当ですか？」
「……本当だ。だが、関係ない。記憶があろうとなかろうと、俺は俺だ。守るべきモノのため、ただ、ここに在る」
「貴方の守るべきは、彼女の筈。貴方の心、その拠り所は、妹の彼女だった筈」
ルインが、さだめを指差して言う。
「……違うな。俺は、記憶をなくしても尚、覚えている。俺のこの魂に、守るべきモノを。俺の……終焉の花婿としての魂に」
「セツ……」
「セツ、お前は操られていたりするわけじゃ……ねえんだな？」
「想像に任せる。だが、操られていると思うのか？」
……思わない。さだめだけじゃなく、他のみんなもそれは同意見だったらしい。
「……恐らく、刷り込み」

「ルインさん？」
「記憶を失った後、終焉に刷り込みを受けた。過去の妹と酷似している終焉本体なら、刷り込みすることもできる筈」
「あ……昔のさだめは、そうか……」
記憶を失って、さだめの雰囲気だけは忘れていなかったとしたら……。
「俺は、守るんだ。世界を敵に回してもいい。ただ一人、あいつだけ守れればそれでいい」
「……記憶がないから、仮面も被れていない。これが彼の……セツの真実」
「究極のエゴイズム……妹の事だけは、何としても守り抜こうというわけか……尤も、守るべき妹を勘違いさせられている奴を見ると、虚しいだけだな」
エースさんが、さだめのことをチラリと見、その手にデュエルディスクを構えた。
「セツ！　我とデュエルしろ！」
「……いいだろう。裏切りの騎士」
「どちらが裏切りか……その身を持って知るが良い！」
「「デュエル！！」」
「我のターン！　セツ、我は友として、貴様を倒す！　ドロー！」
エースさんは、お兄ちゃんから先攻を取り、カードをドローする。
「我は『切り札の騎士―テンス』を守備表示で召喚。カードを二枚セットし、ターンエンドだ」
『切り札の騎士―テンス』ＤＥＦ２０００
「俺のターン、ドロー。俺は手札からフィールド魔法『ダーク・ゾーン』を発動する」
お兄ちゃんはあくまで冷静にカードをドローし、珍しくフィールド魔法を使用した。
「セツがフィールド魔法……？　初めて見ます」
さだめも、お兄ちゃんがフィールド魔法を使うところなんて久し

く見ていない。それも、ただ攻撃力を上げるだけのフィールド魔法なんて、本当に珍しい。
「何を……」
「俺は融合デッキから『アルカナ　ナイトジョーカー』を除外する」
「えっ……！？」
この召喚方法は……まさか！？
「来い。真なる天位騎士。『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』！」
『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ３８００→４３００
「なん……だと？」
闇の衣を纏うアルカナが、お兄ちゃんのフィールドに現れる。
「『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』は、融合デッキから『アルカナ　ナイトジョーカー』を除外することでのみ、手札から特殊召喚できる。『Ｓｉｎ』の名を持つモンスターは、フィールドに一体しか存在できず、『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』以外のモンスターは攻撃が出来なくなる」
それでも、その攻撃力は『ダーク・ゾーン』の効果と合わせて破格の４３００。一ターンで、しかも手札二枚から召喚するには、巨大過ぎるモンスターだ。
「エース……お前たちの力は、もう要らない。『Ｓｉｎアルカナナイトジョーカー』で『切り札の騎士―テンス』を攻撃！『Ｓｉｎロイヤルストレートスラッシュ』！」
「ッ！　トラップ発動『和睦の使者』！　このターン、我のモンスターは戦闘によっては破壊されず、ダメージも受けない！」
「……いいだろう。俺はこれでターンを終了する」
カードを伏せない？　唯でさえ用心深いお兄ちゃんが、フィールド魔法を除去するだけで自壊するＳｉｎモンスターを出して？
「エースさん、何かあるよ！」
「わかっている！　我のターン、ドロー！　我はテンスをリリースし、我自身をアドバンス召喚する！」

『切り札の騎士団長―エース』ＡＴＫ２０００
「そしてトラップ発動！『サンダー・ブレイク』！　手札を一枚捨てることで、フィールド上のカードを一枚破壊する！　我が破壊するのは『ダーク・ゾーン』！」
「よし！　これなら……」
「アルカナには耐性があったとしても、フィールド魔法は……」
破壊できる？　お兄ちゃんが、そんなにあっさりと？
「……違う。そんな筈ない」
「そうだ。違う」
「っ！？」
「俺は『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』の効果を発動する。手札を一枚捨てることで、フィールド上のカード一枚を対象とした魔法・罠・モンスター効果の発動と効果を無効にする！『ジャミング・アウト』！」
「なにっ！？　ぐっ！」
エースさんのフィールドから伸びた雷が、アルカナによって跳ね返される。
「……我は自身の効果で、カードを一枚ドローする。カードを二枚セット。ターンエンドだ」
「俺のターン、ドロー。俺は手札からマジックカード『おとり人形』を発動する。俺から見て右側のカードを強制発動だ」
「くっ！？　ミラーフォースが……」
「発動条件の正しくないミラーフォースは破壊され『おとり人形』はデッキに戻してシャッフルする。更に魔法カード『サイクロン』。もう一枚の伏せカードを破壊させてもらう」
「くっ……」
エースさんの伏せカードは『激流葬』。
「なるほど。アルカナの効果を受けない罠を仕掛けていたか。だが、無駄だったな」
「……無駄ではない」

「どういう意味だ？」
「貴様の手札は消費された」
お兄ちゃんの手札は二枚。あと、無効化出来るのは二回だけ。
「……なるほどな。だが、やっぱり無駄だ」
「！？」
「手札から永続魔法『命削りの宝札』を発動。デッキから手札が五枚になるようにカードをドローする」
「なっ……！」
「そんな、それじゃあ……！」
手札を消費させた意味がない。それどころか、手札は更に増強された。
「手札から速攻魔法『トラップ・ブースター』！　手札を一枚捨てることで、このターン俺は手札から罠カードを使うことが出来る」
お兄ちゃんの得意技。このカードは、お兄ちゃんの勝ちパターンだ！
「そして、お前の効果でデッキからカードを一枚ドローする」
「クッ……」
まんまと効果を利用され、歯噛みするエースさん。
「終わらせる。バトルだ。『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』でエースに攻撃する」
「っ！　手札から『オネスト』の効果を発動する！」
「上手い！『オネスト』の効果なら、対象を取りません！」
「無駄だ。俺も手札から『ライアー』の効果を使わせてもらう」
「『ライアー』……？　なんだそれは！」
「これは『オネスト』の対。自分の闇属性モンスターが戦闘を行う場合、戦闘する相手モンスターの攻撃力を、自分の闇属性モンスターの攻撃力分ダウンさせる」
「なんだと！？」
『切り札の騎士団長―エース』ＡＴＫ２０００→０→２０００
「切り裂け騎士皇。『堕天の剣』！」

「がぁっ！？」
エースＬＰ１７００
闇に染まった騎士の剣が、エースさんを切り裂いた。
「がっ、ぐっ……だ、だが我のライフはまだ残っている……まだ、終わっては……！」
「いや、残念だが終わりだよ。手札からトラップカード発動『連撃』！　自分のモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した時、続けて相手プレイヤーかモンスターに攻撃することが出来る」
「な、に……？」
「『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』で、プレイヤーにダイレクトアタック。終わりだ」
「くっ！？　あああああっ！？」
エースＬＰ０
「エースさん！」
慌ててアテナがエースさんに駆け寄る。
「すぐに治療を！」
「ぐ……大丈夫だ。心配いらん」
「でも……」
「怪我はしていない筈だ。これは、闇のゲームでもなんでもない」
「セツ……」
「これは、警告だ。これ以上、俺たちに干渉するというのなら……今度は、容赦しない」
「……セツ、それでも私は、私たちは……」
「敵対するのか。わかった。なら、とことんやろうか」
「はい。今度は私が「待って」さだめさん？」
立ち上がろうとするアテナを制して、さだめはお兄ちゃんの前に立つ。
「お兄ちゃん」
「……何故、お前は俺を兄と呼ぶ。俺に、妹がいた記憶はない」
「忘れているだけだよ。まさかお兄ちゃんに忘れられるなんて、思

ってもいなかった。でも……すぐに思い出させてあげる。お兄ちゃんが、さだめを忘れるなんて、出来るわけないから」
「そこまで言うなら、いいだろう。デュエルしようか」
「さだめさん……」
「ごめんアテナ。ここは譲れない。お兄ちゃんが守るべきはなんなのか、しっかり思い出して貰わないとね」
さだめは速攻で自分のデッキを改造し、今見た限りでのメタを構築する。
「「デュエル！！」」
「俺のターン、ドロー。俺は手札からマジックカード『テラ・フォーミング』を発動。デッキから『ダーク・ゾーン』を手札に加え、発動する」
再び、フィールドが闇に囚われる。
「行くぞ。俺は融合デッキの『アルカナ　ナイトジョーカー』を除外し、手札から『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』を特殊召喚する」
『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ３８００→４３００
「いきなり来たね……」
「俺はこれでターンエンドだ。さだめ……といったか」
「……なに？」
「お前は……いや、何でもない。お前のターンだ」
「……さだめの、ターン。ドロー！」
大丈夫。お兄ちゃんは全てを忘れてなんかいない。お兄ちゃんは、やっぱり……。
「さだめの、味方でいなきゃダメだよ。さだめは『終末の騎士』を守備表示で召喚。効果により、デッキから『ネクロ・ガードナー』を墓地に送るよ」
「……なるほどな」
『終末の騎士』ＤＥＦ１２００
対象を取る効果じゃない『ネクロ・ガードナー』なら、あのアル

カナ相手でも守りきれる。でも、守ってばかりじゃ勝てないのも確か。
「さだめはカードを二枚セット。ターンエンドだよ」
「……お前は、どうやら相手の戦術を見切る力に長けているらしい。このアルカナでは抗し切れないか」
「お兄ちゃんの妹だからね」
さだめが自信を持ってそう言うと、お兄ちゃんは少し表情を歪めた。
「……まあ、いい。俺のターン、ドロー。カードを二枚セットして、バトルだ。『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』で『終末の騎士』を攻撃する」
「トラップ発動『聖なるバリア―ミラーフォース―』！」
伏せカードの破壊もせずに突っ込んできたことに違和感を覚えたけれど、発動しないという選択肢は無かった。
「ふっ……」
その笑みに、やっぱりダメか？　と思ったけれど、意外とあっさりアルカナは破壊されてしまう。
「なんで……」
「お前にこのアルカナでは勝てないと分かったからな。無駄な手札の使用はやめておこうと思っただけだ。何しろ……」
お兄ちゃんは手札の中から一枚、カードを抜き出す。
「まさか……」
「アルカナには、更に上がいるんだからな」
ガシャアアアアアアアアン！！　と凄まじい雷鳴がとどろき、お兄ちゃんのフィールドが一瞬見えなくなる。
「このカードは、手札が二枚以上の時、『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』が破壊された場合に、ライフを１００にすることと、他の手札全て、そして融合デッキの『切り札（トランプ・ナイト・ロード）の騎士帝―アルカナロイヤルジョーカー』をゲームから除外することでのみ特殊召喚することが出来る」

セツＬＰ１００
間違いない。コストに使ったカードといい、間違いなくあれは……。
「さあ、お前たちに見せてやろう。究極のアルカナ。その真なる姿を。遠き深淵の裡より出でよ！『Ｓｉｎアルカナ　ロイヤルジョーカー』！」
雷鳴を貫く闇が、剣を形作る。雷光が闇色に染まり、漆黒の鎧を組み上げる。
『Ｓｉｎアルカナ　ロイヤルジョーカー』ＡＴＫ４５００→５０００
「やっぱり、最強のアルカナの『Ｓｉｎ』……。攻撃力５０００……」
「さあ、行くぞ。『Ｓｉｎアルカナ　ロイヤルジョーカー』で『終末の騎士』を攻撃！」
「きゃ……！」
流石に、ダメージを受けるわけでもないのに『ネクロ・ガードナー』の効果は使わない。でも、流石にあれを突破するのは厳しい。
「……でも、相当なライフコストを要求して、手札もゼロなら勝機は……」
「悪いが、それは対策済みだ。リバースカードオープン。永続魔法『命削りの宝札』を発動。手札が五枚になるようにデッキからカードをドローする」
「そんな……っ！」
これじゃあ、手札コストが五枚も……。
「俺はこれでターンを終了する」
あのアルカナの上位種であるなら、手札をコストにパーミッションする系統の効果の筈。効果の詳細は分からないけど……。
「さだめのターン、ドロー！」
お兄ちゃんの手札は五枚。伏せカードが一枚。あれだけの手札コストを払っておきながら、手札は余裕。でも、ライフは風前の灯！

「さだめは『ダーク・グレファー』を守備表示で召喚。効果発動！　手札の闇属性モンスターを墓地に送って、デッキから闇属性モンスターを墓地に送るよ！　さだめは手札の『ネクロ・ガードナー』を墓地に送って……」

「悪いが……このアルカナの召喚を許した時点で、お前に勝機はない。『Ｓｉｎアルカナ　ロイヤルジョーカー』の効果発動！　手札を一枚除外し、魔法・罠・モンスター効果の発動と効果を無効にし、破壊する！」

「なぁっ……！？」

ちょ、ちょっと待って！　なにその反則効果っ！？

さだめのフィールドから『ダーク・グレファー』がアルカナの剣に貫かれて消滅していく。一応『ネクロ・ガードナー』を墓地には送れたけれど、これじゃあ……。

「更に言っておくと、この効果はルール上スペルスピード３として扱われる。カウンター罠以外でのチェーンは組めない上、そのカウンター罠に対してもカウンターは可能だ」

「それじゃ対抗策がないじゃない！」

「召喚条件は、その分厳しい。『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』が破壊された時限定で、手札はこのカードの他に二枚必要。全て除外するから再利用も難しい。ライフコストも凄まじい。『火の粉』一枚で負ける程にな」

「そんなの……！」

たったの二ターンで召喚されたら、厳しいと思うこともできない！　それに、そんな効果があったらバーン効果なんて……！

「だが、その分制圧力は圧倒的だ。元々の攻撃力に加え、効果の一切をスペルスピード３でパーミッション出来る、最強の騎士。これが、俺の切り札だ」

「く……」

マズイ。マズイマズイマズイ！　さだめは既に召喚権を使い、フィールドはガラ空き。墓地には一応ネクロが二体いるけど、お兄ち

ゃんの手札枚数的に無効化される。
「マジックカード『闇の誘惑』！」
「手札一枚を除外し、無効だ」
「くっ……『おろかな埋葬』！」
「無効だ」
これで、さだめに手札はもうない。さだめの……負けか。
「……一つ聞かせてもらいたい」
「なに？」
「お前たちは何故、彼女を……終焉を敵視する？」
「決まってるじゃん。お兄ちゃんをぶんどったかｒ「違いますさだめさん」……さだめ的にはそれが一番なんだけど」
「セツこそ、どうして終焉の味方を？　世界を終焉に導く意志が、セツにあるんですか？」
「……お前たちが滅ぼそうとしている終焉が、何も知らない、無垢な少女であったとしても、お前たちは終焉を滅ぼすのか？」
「何も知らなかった、で済まされるものではないだろう。我は、間接的にとはいえ仲間を殺されて黙っていられるほどお人好しではない」
「……そうか。そうだろうな」
エースさんの返答を聞いて、お兄ちゃんは少しの間痛々しい表情で黙り込む。
「……お互いに事情持ちとはいえ、俺はアイツを……エンヴィーを守るため、お前たちを打ち負かす。俺のターン」
さだめには、もう打つ手がない。二枚のネクロじゃ、アルカナの攻撃は受け切れない。
「バトルだ」
アルカナが、さだめに向かって剣を振る。もう、終わりかな。でも……。
「せめて、足掻く！　さだめは墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果発動！　墓地のこのカードを除外することで、戦闘を無効にする

！」
「無駄だ。『Ｓｉｎアルカナ　ロイヤルジョーカー』の効果発動。手札を一枚捨て、モンスター効果を無効にする」
「二枚目！『ネクロ・ガードナー』！」
「無効だ」
「……」
もう、防ぐ手立てはない。
「まあ、いっか……」
お兄ちゃんに、殺されるなら。
「今まで、ごめんね……お兄ちゃん」
迫りくる剣を感じながら、さだめは静かに目を閉じた。

「……あれ？」
何時まで経っても、ダメージが来ない。さだめはゆっくりと目を開く。
「……あ」
剣が、目の前で止まっていた。
「……くっ」
お兄ちゃんが一言呻き、デュエルディスクを仕舞った。
「……今日は、ここまでだ」
「セツ！　待ってください！」
「……俺たちに、もう関わるな」
アテナとルインが手を伸ばすも、お兄ちゃんは唐突にその場から姿を消した。
「転移術……あんなにあっさりと」
「オイ、マスター。大丈夫か？」
「う、うん……何ともない」
お兄ちゃんは、さだめを殺せなかった。

「なら、完全に忘れちゃいないんだ」
エースにだって、怪我をさせなかった。きっと、忘れていても心のどこかで覚えてる。さだめたちのことを。なら……。
「……方針に変更はなし」
「だね」
顔を見合わせて頷く。
「セツを取り返す。その方針に変わりはありませんね」
「記憶ごと、な」
さだめたちは、そう言って頷き合う。
「お前ら……大丈夫なのか？」
剣士さんが、複雑そうな顔で聞いてくる。
「ええ。むしろ、セツが元気そうで安心しました」
「お兄ちゃんは死んでなかった。記憶を失っていても、さだめたちを傷つけなかった」
「……なら、落ち込むことは何もない」
そう。今回は負けちゃったけど、お兄ちゃんを倒して、目を覚まさせてやればいい。お兄ちゃんは無事に生きてる。顔も見れた。今は、それでいい。
「なに、取り返す対象が、セツ本人とその記憶になっただけのことだ」
「そのためにも、まずは希冴姫さんを蘇生しましょう」
アテナはそう言って、お兄ちゃんの襲撃によって中断していた儀式を再開するのだった。

第四期第十八話「天位の闇騎士」（後書き）

こんにちは。

というわけで、今回は敗北です。アルカナのＳｉｎというのは、実はかなり初期から考えていたもので、セツがダーク化、或いはそれに準ずる事態になった場合には出そうと考えていました。超凶悪なパーミッション効果をもったＳｉｎアルカナと、もう一つのオリカ『ライアー』の正式なテキストは、例によって活動報告にて掲載後、オリカ一覧に追加いたします。ちなみに、トラップ・ブースター、命削りの宝札、連撃はどれも原作オリジナルカードです。連撃酷い……。

そして……遂に明日、アルカナは一周年を迎えます。皆さまに協力していただいた企画小説もアップする予定で、現在鋭意執筆中です。お楽しみに。

それでは、悠でした！

アルカナ一周年記念特別編（前書き）

アルカナ一周年記念！　遂に一周年を迎えました我がアルカナ！
その感謝もこめて、読者の皆様から寄せられた質問にセツ達がしっかり答えてくれますアルカナ一問一答の始まりです！

アルカナ一周年記念特別編

アルカナ～切り札の騎士～

アルカナ一周年記念特別編

アルカナ、一周年！

「今回は記念として、アルカナ一問一答を企画したよ！」

「今回、突然の募集だったのにも関わらず、多くの質問を提供して頂き、ありがとうございました」

「中には、作者の個人的な理由で答えられなかったりする質問もあったりするが、出来る限り答えようと努力はしたらしい。勘弁してやってくれ」

「順番は質問順になっていますわ」

「……あれ？　お兄ちゃんと希冴姫さん、なんでいるの？」

「……番外編は時系列無視。深くは考えない」

「そういうことだ。まあとにかく、最初の質問からどんどん回答していこう」

Q：『セツの無駄スキル、本当に無駄なスキルもとい、あまり使われることがないスキルはありますか？』

A：「……土下座を評価する程度ののうりょkもとい、やっぱり有名人を記憶できない能力、だろうな。これはさだめの世話やら他の無駄スキルを磨くのに忙しくて、偶発的に取得したスキルだからな。凛と知り合ったことで若干緩和されてるが、あっても意味がないスキルの代表例だな」

Q：『アテナは大きいお兄さん方にナンパされたことはありますか？』
A：「……お兄さんというか、おじさんに声をかけられたことならあります」
「アテナ、ソイツの身体的特徴を教えろ」
「ちなみに、どうするつもりですか？」
「アポロさんにチクる」
「やめてください。お兄ちゃんきっと、いえ間違いなく殺しに行きます！」
Q：『アルカナ主要メンバー全員に質問。今まで真面目に行動したのに『こんな筈じゃなかった！』ということはありますか？』
A：「むしろ最近は常に、私が真面目（シリアス）に動くとギャグになることが多すぎて、例を一つに絞ることができません」
「さだめは真面目にお兄ちゃんを襲ってるのに、ギャグとしてしか受け止めてくれない」
「え～と、敢えて言うなら知らない内に『沈黙の闇狩人』の二つ名が広まっていたこと、かな～……」
「……命を懸けた結果、エースに出番と人気とポジションを奪われましたわ」
「……自分の世界を滅ぼすつもりはなかった」
「後半二人、前半の三人と温度差があり過ぎるな……」
「我は……セツと友になろうとしただけだ。別に、こんな……（フェードアウト）」
「ダチになろうと声をかけたら悲鳴を上げて逃げられた」
「剣士先輩に見つけて貰おうと思って芸能界に入ったのに、まったくの無意味だったこと、かな」
「……誰よりも理性を強く持ち、真面目に生きてきた筈なのに、気づいたら鬼畜界の英雄として祭り上げられてしまったこと」
「おねーさんも真面目に生きてきたつもりなんだけどねぃ。な～ぜか駄目オタニート扱いされてるのよねん」

「シャルナ、真面目に生きてたことあるんですか？」
「……ほら」
Q：『闇丸&邪々丸へ。この世界ではあっさりと終わる大事なデュエルなんて無い、と言っていた切君のペアに命がけのデュエルであっさりと勝負を決められたお気持ちをどうぞ！』
A：「「……相手が悪かった」」
「……よく、わかってるじゃないか」
「あの、すみません……」
Q：『各キャラの好きなものと嫌いなもの』
A：「俺は、カルパッチョとかマリネとか、サラダ系が好きだな。さっぱりしてて、健康にも良い。見た目も綺麗だしな。嫌いなものはない。敢えて言うならインスタントやカップ麺とかのジャンクフードか」
「セツらしいですね」
「そういうアテナは？」
「私は……」
「いや待て、当てて見せよう」
「わ、わかりますか……（ドキドキ）」
「――ふ菓子だろ」
「なんッでですか！？　なんでですか！　敢えてもう一度言いますけどなんでですか！？　私一度でもセツの前でふ菓子を口にした描写がありましたか！？　いえそれ以前に、アルカナに於いて初めて登場した単語ですよふ菓子！」
「あれ？　違ったか？　おかしいなぁ」
「そこまで絶対的な確信を持ってふ菓子好きだと認定されてしまった私はどうすれば……」
「まさかアテナがそこまでふ菓子が嫌いだとは」
「嫌いとは言ってませんよ！　というか、ふ菓子がピンポイントで嫌いって言ってる人見たことないですよ！」
「いやさ、アテナってどうも妙なところで渋いところあるから」

「……セツの中で、ふ菓子は渋いお菓子として認識されてるんですね」
「まあ冗談は兎も角、アテナは何が好きだ？」
「……私は、まあ甘いもの全般、でしょうか」
「ふ菓子か」
「引っ張ってきた！？　いえ確かに甘いですけど！」
「嫌いなものは？」
「うぅ……甘いものでもそうですけど、あんまり濃い味は好きじゃないです。基本的に薄味が」
「なるほど……ふ菓子だな」
「しつこい！」
「で、さだめは？」
「……今の一連の漫才を、羨ましく思ったさだめがいるよ」
「お前、いつもやってるだろう」
「ガチでもギャグにされる程度にはね。まあ兎も角、さだめの好きなもの……苦いものかな？」
「……苦いものね」
「……主に、下半身的な意味で」
「補足説明いらないよ！　そしてルイン、何故お前が答える」
「……代弁してみた」
「実に的確だね」
「……で、嫌いなものは？」
「ん～、特にないけど、お兄ちゃんの料理になれちゃったから、それ以外はあんまり好きじゃない」
「俺限定かよ。まあいい。ルインは？」
「……おかゆ」
「こないだの看病で味をしめたな」
「ときめいたと言って欲しい。貴方に褒められたから、私の得意料理」
「さりげない好感度稼ぎ……やりますわね」

「地道なフラグ立てがトゥルーへの道」
「……せめて本人のいないところで話せ。で、希冴姫は？」
「わたくしは……それほどありませんが、やはり食べ慣れた城の料理が一番ですわね」
「高級品？」
「まあ、そうなりますわ。実際、レッド寮の料理は多少……セツ様が調理された時は、一切感じませんけれど」
「まあ、お兄ちゃんの料理って、どれだけ節約して豪華に魅せるかを追求してるような所あるしね」
「わたしは、逆に高級食材系は苦手かな～？」
「ユーキちゃん、一般庶民だもんな」
「うん。なんか腰が引けちゃって。味がよくわかんないんだ～」
「好きなものは、確か俺と同じでサラダ系だったか？」
「うん～。あとは辛いものとかも好きだよ～」
「ジト～……」
「ん？　どうしたアテナ」
「……私の好きなものは知らないのに、ユーキさんのは……むぅ～！」
「いや、前に話したのを覚えていただけだって」
「アテナちゃんと比べて、友達経由で今に至るから～。そういう会話も良くしたよ～」
「……堅実な積み重ねと、劇的なステップスキップ。どちらが良いとは一概には言えない」
「綺麗に纏めてくれてありがとう。ルイン」
Q：『シャルナ、年にどれくらい仕事してるの？』
A：「そりゃ～もうジャンジャンバリバリと……」
「シャルナ、正直に」
「……まあ、それでも一応最低限はやってるのよ。うん」
「それならなんで、カイエンさんの土下座スキルが日々上昇してるんですか？」

「いやだって！　ホントにマジに仕事が多すぎるんだってばさ！　最近終焉の影響だとかでまた更に被害報告とか面倒な書類仕事が回って来て……あ～もうネトゲに戻る！」
「ってちょっと待ってください！　シャルナ～！」
Q：『セツってどんなアニメ見てるの？』
A：「う～ん、最近はあんまり見る暇がないが、基本雑食だな。敢えて分類するとしたら、主人公のタイプがクール系のアニメは結構好きかもしれん」
Q：『胸が大きく出来るなら、どれくらいまで大きくしたいですかさだめさん』
A：「……質問に若干含みを感じる。まあいいや。そりゃあやっぱり出来るだけ大きく……と言いたいところだけど、お兄ちゃんの好み的にアテナやユーキさんみたいな丁度手に収まるくらいがいいな。それがお兄ちゃんの好み」
「それは良いことを聞きました」
「わたしたち有利だね～」
「……お前は何を勝手に人の性癖暴露してるんだ」
Q：『メインヒロインなのに良い扱いされてないことにどう思いますか？』
「……質問に悪意を感じます。そして、そのことについては私も大いに言いたいことが多々あります」
「大いにと多々が意味被ってるぞ」
「些細なことです。それより問題は、私の扱いについてです」
「アテナの出番量でそんなこと言いだしたら希冴姫辺りが怒るぞ……」
「そうですわ……ってセツ様？」
「というか私がいい扱いされていないと言うよりは、さだめさんプッシュが強すぎるんですよ！　なんですか第三期終盤辺りからのイベントの数々！　それに比べて、私と言えば番外編ばっかりじゃないですか！」

「番外編でもスポットの当たらない希冴姫に謝れ！」
「これは、わたくし怒っても良いところですわよねぇ！？　いくらセツ様といえども……いえ、むしろ怒るべきは作者でしょうか……」
Q：『アテナとさだめへ。魔法少女になるなら、どんなスタイル？』
A：「変わった質問ですね……私は、某管理局の悪魔さんと同じだと思います。デッキコンセプト的に」
「さだめはそうだな～高攻撃力高防御力は同じだけど、肉弾戦主体、かな？　パワータイプのフェ〇トみたいな」
Q：『ねえ三沢君。アルカナでも空気になって今どんな気持ち？』
A：「……俺は、空気じゃない……」※どう考えても空気です。
Q：『セツへ。どんな時でも平常心で居られるコツを教えてください』
A：「簡単だ。自分を騙してしまえばいい。動揺している自分を、平常心でいる自分の仮面で覆い隠す。この時、意識して仮面をつけちゃ意味がない。仮面を被っていることに、自分が気付かないくらい自分を騙す。或いは、動揺している自分を仮面だと思えばいい」
「……もうちょっと一般層に優しい方法を提示してください」
Q：『セツとデートするなら何処に行きたいですか？　参考にしたいです』
A：「私は、セツとさだめさんの元の世界に行ってみたいです。セツに案内して貰いたいですね。ご友人の方々も紹介して欲しいです」
「ラブｈ（検閲的削除）」
「……自宅でのんびりするのがいい。膝枕とか、耳掃除とか、まったりと」
「精霊界を見て回りたいですわ。セツ様のお力なら移動も楽チンですし、精霊界には名所が多くありますもの」
「ゲームセンター、かなぁ？　セツくん、器用だし反射神経いいし、クイズゲームとかも二人で協力したら楽しそうだよ～」
「……基本的に、あんまり参考にならなそうな意見ばっかりだな。ルインくらいか」

Q：『現在使用しているデッキ以外だと、どんなデッキを使いたいですか？』
A：「そうだな……俺は、元の世界でも使っていた特殊勝利系かな。フルバーンも。特にフルバーンはこの世界だと最強クラスだろう」
「私は、今のデッキ以外のデッキはあんまり使う気にならないですね。あのデッキで満足しています」
「さだめはワンキル。あと無限ループ。っていうかそもそも、この世界では敬遠されがちなデッキをこそ使いたいな」
「……私も今のデッキで満足している。ビバ儀式」
「わたしはそうだね～。えっと、次元斬っていうんだっけ？　そういうのかなぁ」
「オレはそうだな。六武衆、だな。オレのイメージにもあってるだろうし、なによりコンセプトがオレ好みだ」
「私は霊使いデッキ。エリア以外の霊使いも使いたいよ」

えーっと次の質問は……希望さん、刹那さんに会ってから今までのことを……ん？　これ別作品の話ですね。じょが「いいじゃないか。答えてあげよう」いやちょっとまっｔ
「まずは刹那さんのところでの地獄の修行からだね。あれは今から四千年以上は昔のことで……」
待った待った！　それ話始めるとどれだけかかるかわからないから！
「それもこれも、君が僕たちの物語を書いてくれない所為なのだけれどね」
すみませんでした！　というわけで次！
Q：『相手にしたくない苦手なデッキはありますか？』
A：「そうだな……基本的に俺は、苦手なデッキってのはない。どのデッキ相手にも戦えるつもりだ。一番怖いのは自分の手札事故。相手の出方に合わせる以上、適宜応じたカウンターを持っているとは限らないからな」

「さだめも特にないよ。基本的に相手に合わせてメタ組むし。敢えて言うなら、自分でやるのは良いけど相手にメタ組まれたりワンキルされたり無現ループ喰らうのは嫌い」
「特殊召喚メタ。属性的に、セツの使ったコアキメイル辺りは私に刺さる。辛い」
「えーと、悪魔族とかかな？『ダークネクロフィア』で『サイレント・ソードマンＬＶ７』を奪われると、逆にロックされちゃったりするし～」
「下級の攻撃力が低いからな……どうしようもないって程じゃねえが、苦痛ワンフーとかは辛いぜ」
「私も、特殊召喚メタとかは苦手かな。あとアトランティスデッキなら、フィールド魔法に依存しちゃってるから他のフィールド魔法で上書きとかされちゃうと痛いな」
Ｑ：『エースさん、メインヒロインのアテナさんより目立ってますが、正直な感想を』
Ａ：「いや我は「ちょっと待ってください」……ああ」
「この質問に悪意を感じます！」
「それさっきも言っていたな」
「しかも、質問者まで同じです」
「愛されているではないか」
「そうは思えません！」
「……で、エース。感想を（アテナを羽交い締めにしつつ）」
「……我は別に、目立とうとして目立っているわけではない」
「だろうな」
「嬉しくないとは言わんが……戸惑っているのが正直なところだ」
Ｑ：『エースさんのチャームポイントをセツさん視点でどうぞ！』
Ａ：『ジト～……』
「……これは、あれか？　俺に死ねと？」
「あ、大丈夫さだめたちのことは気にしないで」
「そうです。セツの正直な意見を」

「……参考にするだけ」
「信用できない……まあいい。エースのチャームポイント、だったか？」
『……』
「（言い難い……）あ～……特にない」
「なんだと貴様！？」
「と、まあこうやって些細な挑発にも乗ってくれるところ、だな」
「……は？」
「気持ちいいじゃないか。自分のとった行動に、大きな反応返してくれるとさ。エースと話してると楽しいよ。お互いに、生き生きと喧嘩（かいわ）が出来る」
「む、む……」
「反応も極上だ。顔真っ赤にして怒ったり怒鳴ったりしてくるエースが一番可愛い」
「あぁあああぁも、もう黙れ！　それ以上喋るなバカ！」
「お、なんだ照れてるのか？　うん、やっぱそのはんの……」
「だっ、黙れぇえぇえぇっ！」

「……嫉妬する余地もなかったです」
「やっぱり、ツンデレは強いのか……」
「……どう見ても痴話喧嘩。少し羨ましい」
「おのれエース……わたくしのいない間に……」
「あはは～……うん、なんだろ。すごいね～……」
Q：『セツへ。ヒロインたちの長所を語ってください』
A：「……なあ、狙ってるのか？　狙ってこういう質問重ねてきてるのか？」※マジで偶然です。質問は着順で並べてます。
「……まあいいけどさ。アテナからか？」
「は、はいお願いします！」
「……本人いる前でってのは、若干以上に告白の体をなしているような……まあいい。アテナは責任感が強い。努力家だしな。誰より

も“頑張る”娘だ。それに何より、一緒に居て明るい気持ちになれるのが一番だ」
「……はぅ」
「次、さだめ」
「ばっちこい！」
「……は、いいか」
「なにゆえ！？」
「お前はお前らしくしてろ。それが長所だ」
「いえっさー！」
「ルイン」
「……ん」
「表情こそまだ乏しいが、人を思いやる優しさ、慈愛があってよろしい。時々見せる乙女チックなところは可愛らしいと思う。以上！」
「……満足した」
「希冴姫！」
「は、はい！」
「他の奴らみたいにがっついてこないで、一歩引いている奥ゆかしさ。見た目や称号とは正反対だが、大和撫子っぽさは一番あると思う」
「……ありがとうございますわ」
「ユーキちゃん……」
「う、うん」
「一緒に居ると癒される。安心する。何より疲れない！」
「な、何か微妙な……でも、うん。嬉しいよ～」
「以上だ！　俺は帰って寝る！　これ以上は憤死する」
「わ、私たちも若干オーバーヒートしかかってますが……次、行きましょう」
Q：『シンクロ召喚主体のデッキを作るとしたらどんなデッキを使いますか？』
A：「お兄ちゃんの分はさだめが代わりに答えるね。お兄ちゃんは

多分、氷結界辺りだと思うよ？　コントロール色の強いデッキが好きだしね。あ、ちなみにさだめは当然インフェルニティ」
「当然なんですか……私は、あんまり考えてませんけど、敢えて言うなら『カオス・ゴッデス―混沌の女神―』辺りを軸にすると思います」
「『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』主軸のキュアビート」
「オレは……戦士族シンクロだな。不死武士辺りで」
「セツ先輩と被るけど、やっぱり氷結界かな。水属性だし」

「お、次の質問で最後だね」
「け、結構ありましたね」
「本当だね～。もう少し少ないと思ってたけど～」
「……途中、若干一問一答の体をなしていなかった気がしますわ」
「複数人回答の質問が多かったから」
「それじゃあ、最後のこの質問に答えて、一周年記念作品と言うことにしましょう！」
「そんな締めを飾るに相応しい（？）質問は……こちら！」

Q：『ライムは元気ですかー？』
A：「……うん。元気」

アルカナ一周年記念特別編（後書き）

こんにちは。

まさかのライムオチ。仕方ないじゃんこの質問で最後だったんだから！　ちなみにセツたちのシンクロ云々ですが、ああ言ってはいますがセツが５Ｄ'ｓ編で氷結界を使うことはありません。他のメンバーも同じく。シンクロ使うかどうかも未定……というか書くかどうかも未定だしね！

いやー、参りました。何がって、一問一答を面白く答えることが。他の一問一答を見ていてこれは面白そうだと思ってやっては見ましたが、一答ってのが案外難しい。本編を見てもらえば分かるように、殆ど一問一答の体をなしていません。話を長くしがちな悠の悪いところでもありますが。

ところで一周年というのは、実は迎えたくなかったというのが正直なところだったりします。本当は年内完結を目指したかった……。一年で百二十話ってことは、大体三日に一話アップしてる計算ですか。途中大改訂を挟んだとはいえ、最初の頃は一日一話だったんですから、落ちたもんですねぇ……。頑張ろう。

アルカナはとうとうクライマックスへ向けて一直線な感じですが、そろそろいい加減放置しまくっていたコラボを完成させにゃ……流石に放置し過ぎました。関係各所に申し訳が立ちません。なので、ちょいと本編はお休みということで、次も番外編行きますね。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド精霊の歌声？」（前書き）

まずは謝ります。すみませんでした！　以前コラボすると言ってから、早五ヶ月……ほぼ半年も延期していたコラボ作品になります。今回は、ＨＩＲＯさんの精霊の歌声になります。カードはセツと、盲目の令嬢二階堂詩音さんになりますね。

それでは、お楽しみください。

特別編「？アルカナクロスワールド精霊の歌声？」

アルカナ～切り札の騎士～

特別編「？アルカナクロスワールド精霊の歌声？」

「恵方巻きってさ、エロいよね」
「……さだめよ」
「なに？」
「お前がエロトークするのはいい」
「エロ解禁！？　じゃあ話すよ！？　超話すよ！？　運営のメスが入るくらい話すよ！？」
「残念ながら、本番行為でも描写しない限りは運営のメスは入らない。じゃなくてだな」
「さだめはその本番行為をこそ望んでいると言うのに」
「黙れ。話を戻すぞ。お前がエロトークをするのはいい。もういい諦めた。だがな、するならするでせめてツッコミ易い形でボケてくれ。『恵方巻き食べてるのを横から見るとモザイク処理されてるみたいでエロいよねー』とか言われても反応に困るんだ」
「セツ、さだめさんそこまで言ってません。セツ自身の手で補足説明しないでください」
「バナナとフランクフルトは良く聞くけど、恵方巻きでってのはあんまり聞かないし、どんな感じか試してみようか？」
「ツッコミ無視ですか！？」
「許可する」

「許可するんですか！？」
「俺は見ないが」
「何の意味が！？」
「さだめの知的好奇心」
「……痴的好奇心？」
「実に的確な表現だ。流石アテナ」
「まったく嬉しくありません」
「……で、この会話のオチは誰が務めるんだい？」
『どうぞどうぞ』
「……残念ながら、僕にダチョウ倶〇部的オチを求めるのはキャラ的に無理があると思うんだ」
　麗らかな午後のレッド寮。俺とアテナ、さだめが三人でそんな意味のあるかないかわからないボーっとした漫才を繰り広げている中、希望は苦笑を携えやってきた。
「で、なんで今更恵方巻き？」
「いやー、節分に何もしなかったから、節分補給？」
「一転して親父ギャグときたか。キミたちの引き出しの多さには、まったく恐れ入る」
「それで？　お前が来たってことは、例のあれか？」
「如何にも。遅すぎた節分じゃないけれど、本当はもっと早くに発生する筈だったのだけれどね」
「まあ、そんなことはいい。俺が行けばいいのか？」
「それがいいだろうね。中々変わった御令嬢を相手して貰うことになるだろうが……」
「良いよ別に。変わった御令嬢なら慣れ過ぎるくらいに慣れている。……普通の女子の方が異質に見えるくらいには」
「実に頼もしい。では、いってらっしゃい」
「夜ごはんまでには帰って来てね～」
「忘れ物、ないですか？　デュエルディスクにデッキ、差しました？　忘れて行ったら大変ですよ？」

「……アテナじゃないから大丈夫だ。っていうかコイツら、反応がすっかりいつものことになってやがる……」
二人の順応能力の高さに半ば呆れつつ、俺は時空の歪へと身を躍らせた。

ガサガサガサッ！
「……？」
アカデミアの休日。自室で読書をしていた二階堂詩音は、寮裏手の森から“聞こえてきた”物音に首を傾げた。
「なんでしょう……？」
森に住む獣が立てたにしては大きく、無粋な木々の破砕音。何か大きな物体が落ちてきたような。そう例えば……人間のような。
「……大変っ」
それが本当なら、大怪我をしているかもしれない。そう思った詩音は、慌ててデュエルディスクとデッキを抱えて部屋を飛び出した。

「いってて……たく、まさか空中に出るとは……」
俺は身体に付いた枝葉を払い落しながら毒づいた。
「そう言えば、アテナも以前、人の上に落ちたとか言ってたな……」
そう考えると、俺は木で良かったのかもしれない。華奢で軽いアテナなら兎も角、標準体重とはいえアテナの一・五倍はある俺が、女の子の上に落下なんてしたら潰してしまう。
「しかし……俺だったから良かったが、下手すると骨折くらいしてるぞ」
幸い、俺はかすり傷程度。落ちた時に枝や葉っぱで切ったくらいだ。

枝葉を払い終え、ある程度身だしなみを整えた俺は、周囲を見渡した。

「ここは……アカデミアか？　ブルーの女子寮っぽいが……」

木々の向こうに見える白い壁と青い屋根は、俺も見慣れた女子寮のものと相違ない。とすれば、ここはその裏にある森なんだろうが……。

ガサガサ。

「ん？」

物音。草木を除けてこちらに進んでくる。

「誰かいるのか？」

「ぁ……」

か細い声が聞こえた。そちらに目を向けると、黒い長髪の少女が、ワンピースを葉っぱ塗れにしてこちらを見ている。……いや、見てはいない。

「君は……」

彼女の開かれた黒瞳には、しかし光はない。

「目が……？　いや、でもそれなら……」

どうやって、こんな森の中に？

「私は、目が見えない分、耳が人より良いのです。例えば、反響してくる音で周囲の障害物を認識したり」

そんな俺の疑問に気付いたのか、彼女はそう言って微笑んだ。しかし、それは驚異的なことだ。それはエコーロケーションと言われるもので、例えば蝙蝠など一部の動物は洞窟などの障害物を視覚に頼らず避けるため、自らの発した音の反響してくる到達速度の違いで周囲を“見る”ように“聞く”技術だ。

人間でも不可能な技術じゃないし、生まれつきの視覚障害なら尚更だ。だが、ここは森。森は、そのイメージとは裏腹に、絶えず動植物の音が鳴り響き、多くの木々が音を吸収し、あらゆる場所に音が反響する。そんな中でのエコーロケーション。それは、いくらなんでも相当特殊だ。

「凄いんだな、あんた」
「いえ、生まれつきのことなので」
そう言って彼女は微笑んだ。視覚障害とか異常聴覚とか、そういったハンデを一切感じさせない微笑みだ。
「そうだ、お怪我はありませんか？　ここに落ちてこられたのですよね？」
「ん？　ああ、問題ない。多少擦りむいた程度だから」
「ですが……そうだ、これを」
差しだされたのは真新しいハンカチ。縁にレースが施された品の良いハンカチは、新品のように見えた。
「いや、だが……」
「構いません。ハンカチは汚すためにあるんですから」
「……そう言うことなら」
俺はハンカチを受け取って、軽く血の滲んでいた頬を拭った。
「えっと……」
「差し上げます。お近づきの記念に」
「ああ……ありがとう」
今まであまり近くに居なかったタイプのお嬢様で、少々調子が狂う。
「そうだ、名前は？　俺はセツ。御堂切だ」
「はい。私は二階堂詩音と申します。セツさん……でいいでしょうか？」
「ああ。俺は……そうだな。詩音でいいか」
年上っぽくはあるのだが、まあ良いだろう。詩音も特に気にしないようで、はいと頷いている。
「それじゃあ、詩音。不躾で悪いんだが、頼みを一つ聞いて欲しいんだ」
「頼み……ですか？　はい。なんでしょうか？」
「俺と……デュエルして欲しい」
俺は、ここに来た理由と、元居た場所に帰るためにはデュエルを

しなくちゃいけないことを話した。疑われるかとも思ったが、詩音はあっさりと信じ、快くデュエルを受けてくれた。
「信じてくれるのか？　結構、突拍子もない話だったと思うが……」
「貴方の声に、嘘の音は聞き取れませんでしたから」
「そうか。そりゃ、嘘は吐けそうにないな」
苦笑して、デュエルディスクを構える。詩音も、俺に倣い、デュエルディスクを構える。
「「デュエル！」」
セツＬＰ４０００
詩音ＬＰ４０００
「私のターン、ドローです。私は手札から永続魔法『神曲』を発動します」
「神曲？」
俺の知らないカード。恐らくは、彼女独自のものだろう。
「更に、手札から永続魔法『神曲「戦乙女の舞」』を発動します」
流れ出すは戦いの歌。軽やかで、何処か力強い曲。
「この永続魔法は、永続魔法『神曲』が発動している時にのみ発動することが出来る永続魔法です。私の場に『ヴァルキリートークン』を一体特殊召喚します」
『ヴァルキリートークン』ＤＥＦ１２００
「『ヴァルキリートークン』は私の場に『神曲「戦乙女の舞」』が存在している限り破壊されず、戦乙女の舞が破壊された時に破壊されます」
なるほど……破壊耐性を持ったトークンか。あれは……リリース要員か？　それとも……。
「私はこれでターンを終了します」
「俺のターン、ドロー！　俺は『切り札の騎士―クィーン』を攻撃表示で召喚。このモンスターはカード名を『クィーンズ・ナイト』として扱う。カードを二枚セット。ターンエンドだ」
破壊されない守備モンスターが相手じゃ、攻撃しても意味はない。

とりあえずはこれでいいだろう。あとは、次のターンの詩音の行動次第だな……。

「では、私のターン、ドローです。私は永続魔法『魔法吸収』を発動します」

これは……魔法特化型のデッキか。さっきのターンで発動しなかったことを考えると、今ドローしたカードか。

「私は手札から速攻魔法『曲調変更（コードチェンジ）』を発動します。私のフィールドの『神曲』と名の付いた永続魔法を破壊して、デッキから別の『神曲』を手札に加えます。私は『神曲「戦乙女の舞」』を破壊し、デッキから『神曲「世界を焼き尽くす炎」』を手札に加えます。そして、永続魔法『魔法吸収』の効果で、ライフを５００ポイント回復します」

詩音ＬＰ４５００

戦乙女が消えて行き、曲調も元に戻る。しかし、まさか彼女のデッキ……。

「私はライフを１０００ポイント支払い、永続魔法『神曲「世界を焼き尽くす炎」』を発動します。フィールドに『スルトトークン』を特殊召喚します！」

詩音ＬＰ４５００→３５００→４０００

『スルトトークン』ＡＴＫ２３００

「更に、永続魔法『神曲』の効果を発動します。ライフを５００ポイント支払い、墓地の神曲と名の付いた永続魔法一枚を手札に戻します。私は『神曲「戦乙女の舞」』を選択し、手札に戻して発動します」

詩音ＬＰ４０００→３５００→４０００

『ヴァルキリートークン』ＡＴＫ１３００

「おおっ！？」

これは、少々マズイか？　あの神曲……途切れることなく鳴り響く。

「バトルします。私は『スルトトークン』で『切り札の騎士―クィ

ーン』を攻撃します」
「リバースカードオープン『攻撃の無力化』！　攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了する！」
　流石に、そうそう簡単に攻撃を通すわけにはいかない。スルトトークンがどんな能力を持っているかは分からないが、どちらにしても相当なダメージを受けるのは間違いない。
「……では、私はこれでターンを終了します」
「俺のターン、ドロー！　俺は『切り札の騎士―クィーン』で『ヴァルキリートークン』を攻撃！『エレガント・ハーツ』！」
『はぁっ！』
「きゃっ……！」
　詩音ＬＰ４０００→３８００
「っ……ですが『ヴァルキリートークン』は破壊されません」
「なら俺は、手札から装備魔法『アルカナソード　ハート』を『切り札の騎士―クィーン』に装備。このカードを装備したモンスターの攻撃力は５００ポイントダウンし、戦闘での破壊と戦闘ダメージを免れる。更に、その時の超過分ダメージは俺のライフを回復させる」
「っ……」
　詩音の表情が変化した。どうやら、この装備魔法は苦手なのか？　だとすれば……。
「……はい。私のデッキには、除去カードがあまり入っていません」
「っ！？」
　今、心を読まれた？　聴覚が良いとは言え、まさか心の声まで読み取れるのか？
「はい。確かに私は、心を読めます。いえ、正確には聞こえる心音や呼吸音から推測する、と言った方が正しいでしょうか」
「それは……」
「やはり……卑怯でしょうか？」
　不安そうに聞いてくる詩音。だが、俺は特に気にせず否定する。

「いや？　デュエルじゃあ、相手の思考を読むのは当たり前。詩音は、偶然それを得意とするスキルを持ってただけだろ？　そりゃ、インチキアイテム使ってするのは良くないが、産まれ持ったモノなら、それはただの才能だ。気にすることはない」

誰でもすることだ。相手の考えを読み、それに合わせてデュエルする。そこに恥じる要素など何もない。

「自分の力を全て使って戦うデュエリストを、誰も卑怯とは言えないよ」

「……ありがとうございます」

「ま、そうそう簡単に心を読まれるつもりもないしな。俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ」

さて……相手の場には破壊されないトークンが二体。魔法・罠ゾーンには永続魔法が四枚か……。こりゃ、完全に魔法デッキだな。それにしても、偏った構成だ。

「私のターン、ドロー。私はライフを５００支払い、手札から永続魔法『神曲「混乱を起こす悪戯」』を発動します。『ロキトークン』を特殊召喚！」

詩音ＬＰ３８００→３３００→３８００

『ロキトークン』ＡＴＫ１２００

「『ロキトークン』は手札から魔法カードを一枚墓地に送ることで、相手モンスターの表示形式を変更できます。私は手札から『神曲「不死身の英雄」』を墓地に送り、『切り札の騎士―クィーン』の表示形式を守備表示に変更します」

『切り札の騎士―クィーン』ＤＥＦ１６００

「……？」

何をするつもりだ？　クィーンは戦闘耐性を持つ上、守備力の方が高い。戦闘破壊が目的とは考えづらい……となると、俺に回復をさせず、戦闘する必要があるのか？

「私は『霧の谷のファルコン』を召喚します。バトルです！」

『霧の谷のファルコン』ＡＴＫ２０００

「そいつか！」
　ファルコンは攻撃時、自分のカードをバウンスしなければ攻撃出来ない。そのセルフ・バウンス能力を使うために……。
「私はファルコンでクィーンを攻撃します！」
　ファルコンは希冴姫に攻撃するが、その攻撃は希冴姫の持つ儀礼剣に受け止められ、防がれる。
「この時、私は『神曲「戦乙女の舞」』を手札に戻します。ターンエンドです」
「俺のターン、ドロー！」
　しかし……魔法特化となると面倒だ。カウンターデッキの特徴として、同じカウンタートラップに対抗するためのカウンタートラップ……即ち、罠対策カウンターの方が多く積まれる。それら罠対策カードが軒並み役立たずになるわけで……。
「……とはいえ、あのカードが来れば……」
　文字通り、一発逆転だ。だが、それまでは耐えるしかない。
「俺はクィーンを攻撃表示に変更し、ターンエンドだ」
「私のターン、ドローします。　私は手札から魔法カード『歌姫の宝札』を発動します！　手札の『神曲「戦乙女の舞」』を墓地に送り、カードを二枚ドロー！」
　詩音ＬＰ３８００→４３００
　手札交換……いや、神曲は手札に戻せることを考えれば、ほぼ『強欲な壺』だな。
「っ来ました。速攻魔法発動！『サイクロン』！『アルカナソードハート』を破壊します！」
「おっと、そうはさせない。カウンタートラップ発動『マジック・ジャマー』！　手札を一枚捨てることで魔法カードの発動と効果を無効にして破壊する！」
「そんなっ！？」
「更に、俺がコストに使った『ジャム・ウォリアー』の効果により、デッキからカードを二枚ドローする」

「くっ……」
「そのデッキ、それ以上除去カード積んでないだろ？『大嵐』だと自分に被害が大きいしな」
「……私は『神曲』の効果でライフを５００支払い、墓地から『神曲「戦乙女の舞」』を手札に戻し、ターンエンドです」
詩音ＬＰ３８００
「俺のターン、ドロー！」
っと、俺も引いたか。『サイクロン』。だが……。
「まだだな……」
まだ、使い時じゃない。どうせ、あの永続魔法はどれだけ破壊しても大した意味がない。こんなところで使っても仕方ない。
「だとすれば……ここは攻める！　俺は『切り札の騎士―キング』を召喚！　効果発動！　俺の場に『切り札の騎士―クィーン』が存在する時、このカードの召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、デッキから『切り札の騎士―ジャック』を特殊召喚する！」
『切り札の騎士―キング』ＡＴＫ１６００
『切り札の騎士―ジャック』ＡＴＫ１９００
「っまさかその三体は……」
「その、まさかだ。俺は手札から魔法カード『融合』を発動！　俺の場の三体の切り札の騎士を融合し、エクストラデッキから『アルカナ　ナイトジョーカー』を融合召喚！」
『アルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ３８００
詩音ＬＰ３８００→４３００
「攻撃力……３８００」
「回復させるのはあまり得策じゃないが……まあいいだろう。俺は手札から装備魔法『アルカナソード　ダイヤ』をアルカナに装備。攻撃力を３００アップさせる」
『アルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ３８００→４１００
詩音ＬＰ４３００→４８００
「バトルだ。『アルカナ　ナイトジョーカー』で『霧の谷のファル

コン』を攻撃！『ロイヤルストレートスラッシュ』！」
「きゃああっ！？」
詩音ＬＰ２７００
「ダイヤを装備したモンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した場合、俺はデッキからカードを一枚ドローする。俺はこれでターンエンドだ」
「私のターン、ドロー！」
流石に焦れて来たか。声に余裕がなくなってきた。攻撃力４１００の壁は相当に大きい筈……。どうやって超えてくるか。
「っ！　行きます。私は手札から魔法カードを一枚捨て、『ロキトークン』の効果を発動します！　アルカナの表示形式を守備表示に！」
「残念。対象を取る効果は無効化出来る！　俺は手札から『切り札の騎士団長―エース』を捨てて効果を無効化！」
「なら、速攻魔法『曲調変更（コードチェンジ）』！『神曲「混乱を起こす悪戯」』を破壊してデッキから『神曲「混乱を起こす悪戯」』を手札に加え、発動します！」
詩音ＬＰ２７００→３２００→２７００→３２００
「ぬっ……」
そうくるか……。アルカナの効果は一ターンに一度。なら、手札コストさえ確保できれば……そして、あのデッキに於いてそれは……。
「私は『神曲』の効果を使い、ライフを５００ポイント支払って『神曲「混乱を起こす悪戯」』を手札に加え、そのままコストとして使用します！」
詩音ＬＰ３２００→２７００
「くっ……アルカナの効果は起動出来ない」
『アルカナ　ナイトジョーカー』ＤＥＦ２５００
「４１００には届きませんが……２５００なら届きます！　私のフィールドに神曲が三枚以上存在する時、このカードは手札から特殊

召喚することが出来ます。私は『清音の歌姫　セイレーン』を攻撃表示で特殊召喚します！」

『清音の歌姫　セイレーン』ＡＴＫ２５００

「セイレーンは、場にある神曲の数だけ攻撃力を２００ポイントアップします。私の場にある神曲は三枚。よって攻撃力は６００ポイントアップして３１００です！」

『清音の歌姫　セイレーン』ＡＴＫ２５００→３１００

「超えてきたか……！」

「バトルします！　セイレーンで『アルカナ　ナイトジョーカー』を攻撃！」

アルカナがセイレーンの放つ歌声に膝をつき、倒れる。だが、ただじゃやられない。

「リバースカードオープン！　トラップカード『アルカナソードクローバー』！　戦闘破壊されたアルカナの代わりに『切り札の騎士団長―エース』を蘇生させる！」

『切り札の騎士団長―エース』ＡＴＫ２０００

「クローバーは、発動後装備カードとなり、蘇生した切り札の騎士に装備される。攻撃力は７００ポイントアップだ！」

『切り札の騎士団長―エース』ＡＴＫ２７００

「更に、戦闘によって破壊されたアルカナの装備していたダイヤの効果で俺はカードを一枚ドローする」

「他のモンスターじゃ超えられませんね……私はカードを一枚セットしてターンエンドします。このエンドフェイズ時に、セイレーンの効果が発動します。モンスターを戦闘で破壊した場合、墓地の神曲と名の付いたカード一枚を手札に戻します。私は『神曲「混乱を起こす悪戯」』を手札に戻します」

「俺のターン！」

さて……状況は、正直あまり良くない。が、打開するためのキーカードは一枚、か……これは、このドローにかかってるな。

「……正直、運頼みはあまり好かないんだが……やるか！　ドロー

！」

……来たか！？

「よし！　俺は手札から速攻魔法『サイクロン』を発動！『魔法吸収』を破壊する！」

いい加減ウザくなってきたところだ。まずはさっさとそのカードを消しておく！

「させません。それなら私は、その効果にチェーンして速攻魔法『非常食』を発動します！」

不要となったカードをライフに変換する速攻魔法。これをされればライフを回復され、サイクロンの無駄撃ちになるわけだが……俺は、ニヤリと口元を歪めた。

「っ！？」

不穏な気配を感じたのか、詩音がハッとする。だが、遅い！

「使ってくると思ったぞ！　そのカード！　更にチェーンして速攻魔法『魔法効果の矢』を発動する！」

「っ！？　そのカードは……！」

これこそ、俺の待ち望んでいたカード！　永続効果を苦手とするパーミッションの弱点を補うために入れていた、逆転の一矢！

「改めて自己紹介だ。俺はパーミッション使いの御堂切。チェーンの重ね合い、裏の読み合いで、負けるわけにはいかなくてね！」

チェーン処理の関係で、まずは『魔法効果の矢』が処理され、全ての魔法カードを破壊し、その分だけダメージを与える。

「詩音の場にある表側表示の魔法カードは『非常食』を合わせて四枚！　よって２０００ポイントのダメージだ！」

「くぅっ！？」

詩音ＬＰ７００

「次に『非常食』の効果で詩音のライフが１０００ポイント回復する」

詩音ＬＰ１７００

「最後に、対象の居なくなった『サイクロン』は不発だ」

「まさか……私の『非常食』を読んで……！」
「ああ。『サイクロン』は結構前からドローしてたんだが、ここまで自重した。『魔法効果の矢』を効果的に使うためにな」
あの『非常食』を『魔法効果の矢』にチェーンされていれば、詩音はライフを４０００回復し、俺の『魔法効果の矢』は不発に終わっただろう。だが、そうはならなかった。
「『サイクロン』は、囮だよ」
「っ……」
そして、神曲がなくなったことでセイレーンの攻撃力も元に戻る。
『清音の歌姫　セイレーン』ＡＴＫ３１００→２５００
「さて、それじゃあバトルだ。『切り札の騎士団長―エース』で『清音の歌姫　セイレーン』を攻撃！『リッター・ブリッツ』！」
「きゃっ……！」
詩音ＬＰ１５００
「俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ」
「私の、ターン。ドローします！」
さて……俺の予想が正しければ、これで……。
「私は手札から魔法カード『歌姫の宝札』を発動します。手札の『神曲「混乱を起こす悪戯」』を捨てて、カードを二枚ドロー！」
違う。ここじゃない。
「っこれで……！　私は手札から永続魔法『神曲』を発動します！」
「ここだ！　リバースカードオープン！　カウンター罠『封魔の呪印』！　手札から『アルカナソード　スペード』を捨てて効果発動！　魔法の発動と効果を無効にし、そのカードを封印する！」
「な……」
「これで、もう神曲は流れない」
これが、俺の本当の秘策。サルベージ手段の非常に多い『神曲』を止めるなら、元を断つしかない。これで、このデュエルで神曲は使えない。神曲が使えなければ、他の神曲も発動できない。
「そして俺はエースの永続効果でカードをドロー……これは」

そうか……これで終わりか。
「俺は……魔法カードをパーミッションしたことにより、手札から『冥王竜ヴァンダルギオン』を特殊召喚。効果を起動する」
「ぁ……」
「魔法カードをカウンターした時の効果は……相手ライフに１５００ポイントのダメージを与える。これで、終わりだ。『冥王咆哮』！」
「あああっ！？」
詩音ＬＰ０

「結局、『封魔の呪印』の意味はあんまりなかったな」
「いえ、お陰で私のデッキの弱点がわかりましたから」
「『神曲』、か？」
「はい。私のデッキは、『神曲』がないとどうにもなりません」
「そうだな……ちょっと見せてみ」
許可を得て、詩音のデッキを見させてもらう。
「……うん。やっぱり、除去カードが不足してる。『オオアリクイクイアリ』くらいは入れた方が良いな。神曲系はサルベージ手段が豊富だから、『神曲』が来るまでの戦線維持にもなるし。あとはコストカードか。手札コストに使っても余り影響がないから、そう言うカードを入れるといい。それで大分強くなる筈」
「はい……ありがとうございました」
あれで除去カードが豊富なら、きっともっと苦戦していた。というか、下手すると負けていたかもしれん。神曲系はコストに最適過ぎる。
「おっと、そろそろか……」
徐々に身体が透けて行く。
「じゃあ、俺はこれで帰るよ。ありがとうな」

「いえ、こちらこそ、良い勉強をさせていただきました」
「はは……なんか、悪かったな。いきなりさ」
いきなり現れて、いきなりデュエルを挑んで、遠慮なしに叩く。
正直、微妙に後味が悪い。いや、今までもそうだったっちゃーそうなんだが。詩音の儚げな雰囲気が尚更それを強調させていた。
「いいえ。私も、新鮮な体験をさせていただきました。ありがとうございました」
「そっか。なら、いいんだが」
っと、そろそろ限界か。
「じゃあ、またいつか、機会があれば会おう。詩音」
「はい。いつかまた」
最後にそう挨拶して、俺はその世界から帰還するのだった。

「っと」
「あ、お帰りー」
「お帰りなさいです。セツ」
「おー、ただいま。良い子にしてたか？」
「って、私たちはセツの娘ですか」
「お転婆の、な」
お淑やかな詩音と会ったばかりだから尚更そう思う。
「セツ～……」
冗談めかしてそう言うと、アテナは恨めしそうにこちらを睨んできた。
そしてさだめはというと、俺の傍に寄って来てクンクンと何か嗅いでいる。
「……他の女の匂いがする」
「いきなり不穏なことを言いだすな」
「……そのハンカチ、誰の？」

そしてさだめは、俺のポケットから顔を出しているハンカチを目敏く見つけた。
「あ？　ああ、これか。今行ってきた世界でな。少し頬を切ったから、貰ったんだ」
「じゃ、その血はお兄ちゃんの……その部分だけ切り取って捨てるね♪」
「お前はどこのヤンデレの妹だ、って……」
「そのものズバリじゃないですか」
「……そうだった」
「お兄ちゃん成分補給ー！！」
ハンカチの血をちゅーちゅー吸い始めたさだめを見ながら、俺とアテナは溜息をつくのだった。

特別編「？アルカナクロスワールド精霊の歌声？」（後書き）

こんにちは。

……今回は、特に遠慮という言葉を何処か遠くに旅立たせたようなデュエルでした。終わってから気が付きましたが、セツ無傷です。いやだって、一度通したらそのまま終わりそうだったし……なら負ければよかったじゃないかという声が聞こえてきそうですが。

ちなみに、魔法効果の矢ですが、普段からセツは入れてます。カウンター罠は発動済みの永続カードは無効化出来ませんしね。その対策に。

あ、ちなみに詩音さんのオリカですが、詳しい効果はＨＩＲＯさんまで。基本的に神曲関連の永続魔法は神曲がないと発動不可です。頂いたデッキレシピを拝見しましたが、とりあえずオオアリクイクイアリが非常に欲しい構成でした。ので、セツに言わせときました。あと、神曲サーチするカードも欲しいところ。サルベージは充実してますが。

それと……先日のバレンタイン、本当なら番外編をアップする予定でした。その前日まで友人宅に行っていましたが、ちゃんと九割方完成していたのですが……。帰宅して、パソコンを起動。結果……データ、飛んでました（泣）。しばらく呆然としました。これまで書いてたデータも根こそぎだったんで。幸い、今までのはバックアップがあったんでなんとかなりましたが、まだ書き途中だったバレンタインは……アテナメインだったのに。すまんアテナ。恨むならパソコンにすら嫌われた己の残念さを恨んでくれ。一応、希望があれば時期遅れですが書いてアップします。

それでは、悠でした！

番外編「聖戦再び」（前書き）

物凄く遅れてしまい、申し訳ありませんでした。バレンタインの番外編です。ただその分、ボリュームは過去最高クラスです。いや、五人分のバレンタイン且つアテナをメインに据えようとすると、どうしても……。とりあえず、かなり難産だったバレンタイン特別編、お楽しみください。

あ、ちなみに十五禁です（笑）

番外編「聖戦再び」

アルカナ～切り札の騎士～

番外編「聖戦再び」

「遂に明日はバレンタインデー……」
ザクザクと、厨房にチョコを刻む音が響く。
「今年こそは……！」
チョコを刻むその後ろ姿に、並々ならぬ決意を秘めて、少女は猛る。なんかもー湯煎とかするまでもなくチョコが溶け始めそうなくらいのオーラを放ちながら。
「待っててください……今年こそ、今年こそは最高のバレンタインチョコを……！」
ザクッ！！
どう考えてもオーバー過ぎる気合と共に振り下ろされた包丁が、チョコを刻む。運命の日へのカウントダウンと共に。

「セツくんおはよう！　ハッピーバレンタイン！」
「お、おうおはよう……ユーキちゃん」
朝、目覚めて直ぐにユーキちゃんからチョコを手渡された。ユーキちゃんにしては珍しく速攻の構えに、思わず目を剥く。
「ありがとう。でも、どうしてこんな朝っぱらから？」

「あ、ごめんね～セツくん。……迷惑だった？」
「いや、そんなことはないけど」
どちらにせよ、そろそろ準備して食堂へ行こうとしていたところだ。
「えへへ～わたしね、考えたんだ」
ユーキちゃんが得意げに胸を張る。
「いつもわたし、ダークホースがどうのこうのって言われるでしょ？」
「ああ。最早共通認識となってきてるな」
俺が当たり前のようにそう言うと、ユーキちゃんは若干「ぅ……」と呻いた後、改めて胸を張った。
「だ、だからね。どうしてそう呼ばれるようになったのか、考えてみたんだ～」
「その結果が、この速攻？」
「そう！　ほら、いつもは出遅れて、皆が自爆ｏｒ相討ちしたあとでしか動かないから、そんな風に言われるんだって気が付いたの！」
「……なるほど」
確かに、それは言えてるかもしれん。特にさだめとかアテナとかアテナとか。
「つまり～、みんなが動く前に行動すれば、誰もわたしのことをダークホースなんて呼ばなくなるんじゃないかなって！」
「……ユーキちゃんがこんな速攻仕掛けてくるとは思わなかった。こいつぁとんだダークホースだぜ！」
「……いじわる」
ユーキちゃん、涙目。
「いや、でも多分、そうなるぞ？　まず周囲の共通認識として、ユーキちゃん＝ダークホース的なイメージが根付いているから」
いつもと違う行動したとしても、イメージが固定されてしまっているとそうなる。
「うぅ……」

「……まあいいや。チョコ、ありがとな。開けても良いか？」
「あ、うんもちろん。えへへ、実はあんまり甘いもの得意じゃないから、自信はないんだけど」
「大丈夫だろ。去年だって普通に美味かったし。え～と、トリュフチョコか？」
「あんまり難しいのは出来なかったから～」
ユーキちゃんは謙遜するが、見た目も味も中々だ。よく言えば素朴。悪く言えば標準的な味が嬉しい。
「うん。いいじゃないか。残りは、今日の終わりにでも食べさせて貰うかな」
「終わり？」
「ああ……なんというか、ユーキちゃんのは安定して美味いから、色々と癒されるんだよ。だから、さ」
間違いなく疲れる一日になるだろうから、胃薬代わりに。そう言うとユーキちゃんは苦笑する。
「そう言ってくれるのは嬉しいけど……みんなのチョコ、危ないものみたいに言っちゃだめだよ～」
「ああいや、そういうつもりじゃなかったんだが……けど、そうだな。折角くれるもの、悪く言うのは駄目だな」
「うん。それじゃあ、わたしはこれで寮に戻るね～。また学校で～」
「ああ。また後でな」
ちゃんとチョコが渡せて、安心したのだろう。ユーキちゃんはホッとした表情で女子寮に戻って行った。
「さて……今日も一日、頑張りますか」
波乱の一日になりそうなことは、例によって予想済みなのだ。何でも来い。俺はそう気合を入れ直し、食堂へ向かうのだった。

パサッ……。

「ん？」
教室、机に座ると、俺の席から一通の便箋が零れ落ちた。
「おいセツ、それ……」
「ああ……」
今日と言う日、ハートマークのシールとベタな便箋。どう考えてもアレなんだが……。
「どうした？」
剣士がそう尋ねてくるのに構わず、俺は溜息を吐いて手紙を読む。
『御堂切さんへ。突然のお手紙、申し訳ありません。実は、折り入ってお話と、お渡ししたいものがあります。急な話ではありますが、本日放課後、アカデミア屋上までいらしていただけると嬉しいです』
まあ、要約すればこんなところだ。
「どう見てもラブレターだな……」
呆れたように剣士が俺をジト目で見ている。俺は溜息をもう一つ吐いて、それに応じる。
「……ああ、どうみてもさだめだ」
「は？」
「これ、さだめだよ。差出人」
あっさりとそう言う俺に、剣士は暫し呆気に取られていたが、慌てて反論する。
「待て待て、なんであの妹がこんな回りくどいことを？」
「大方、新しいシチュエーションプレイの一環だろ。大分意識して筆跡とかも変えてあるけど、俺が見間違うもんか」
一見さだめの字とは違う、普通の女子風の丸文字だが、俺にはわかる。
「実にあいつらしいことだが、文章のそこかしこから抑えきれぬ欲望のオーラ的なものを感じる……」
「……そんなもんを感じとれるお前もどうなんだ」
「あと多分、清純な後輩女子を演じようとしたんだろうな。演じ切れなかったっぽい文章の不自然さが如何にもアイツらしい」

あれに清純は無理だ。なんて書けば清純っぽいのかわからなくてそれっぽい言葉を並べてみたって感じだ。
「ま、こんなことを書いてあるってことは、今日は放課後まで平和だよ」
ひらひらと手紙を剣士の前で振って見せる。
「つくづくヘンな兄妹だよなお前らは……」
「自覚はしてるよ」
苦笑しつつ、授業のために教室に入ってきた教師の方を向き直るのだった。

「さて……」
昼休みである。さだめ（断定）から指示された時間までは、まだ時間があるものの、俺はそろそろ一波乱、というか、誰かやってきそうな予感に顔を上げた。
「……」
「ぅおっ！？」
顔を上げた瞬間、目の前にルインの顔。思わず仰け反る。
「る、ルイン……心臓に悪いからその登場の仕方はやめてくれ」
「ごめんなさい」
ぺこっ、と素直に頭を下げるルイン。
「で、なんでまたあんな心臓に悪い登場を？」
「神出鬼没は私のアイデンティティ」
「……そういや前にもそんなこと言ってたっけか」
もしかして、いつも唐突に現れるのはそれを意識してるのか？
「それは、単に私が無口だから」
「自分で言うか」
それに、案外お前は雄弁だ。
「ところで、何の用だ？」

「……今日が何の日か、わからないとは言わせない」
「まあ、な。ルインも、チョコくれるってことでいいのか？」
「……えい」
ドン、とルインが何処からともなく携帯ガスコンロを取り出し、机の上に置いた。
「……ガスコンロ？」
「……そい」
ゴン、と更にその上に置かれる鍋。
「……鍋？」
ルインの意図が見えず、困惑する俺。
「……てい」
最後にトン、と脇に置かれたフルーツやビスケットを見て、漸くそれが何かわかった。
「チョコフォンデュか」
「御明察」
幽かに、蓋の閉じられた鍋からも甘い香りが漂って来ていた。
「最近の私は家庭的」
「……それで、料理とバレンタインチョコを掛け合わせてきたってわけか」
それはいい。実にすばらしい。若干昼食にするには甘ったるすぎる様な気もするが、そこはまあ許容範囲だろう。だが……。
「……ルイン、ここは教室だ」
「……それが？」
「……周りをご覧ください。生徒が沢山居ります」
「……それが？」
「こんな中で、こんな手間暇かけたバレンタイン過ごしている男が居たら、周囲の人間は一体どう思うと思う？」
「あ～ん」
「話聞けよ！？　なんでよりにもよってあ～んとかし始めますか！？　ほら周囲！　殺意のオーラが半端なくなってきてるから！　特

になんか、ユーキちゃん辺りのオーラがシャレになってないから！」
「だいじょ～ぶだよセツくん。わたし、皆みたいにセツくんを傷めつけたり暴走したりしないから～」
「余計に怖い！　その理性的な笑顔から感じるドス黒いオーラが物凄く怖い！」
「あ～ん」
「マイペースだよなお前はホントに！　神出鬼没よりよっぽどそのマイペースさの方がアイデンティティだよ！」
「じゃあ……ん～（ビスケットを銜えて差し出す）」
「ビスケットでポッキーゲームは無理がある！　というか、あ～んより更にヤバい！」
「じゃあ……はい」
ルインは指をチョコにつけて、此方に差し出してくる。
「……舐めて？」
「無理だよ！　少なくとも今ここでそれやったら俺問答無用で縛り首だよ！」
「……火傷した」
「そりゃ熱したチョコに指つければ火傷もするよ！」
「……舐めて？」
「結局そこに行きつくのな！　ケ○ル！　ケア○使えよ！　使えるじゃんお前回復魔法！」
「……○アルじゃなくて、ホ○ミ」
「そこは良いよ別に！　この際Ｆ○かドラ○エかの違いは些細だよ！　そして俺は○Ｆ派だ！」
「それが一番些細だろ……」
剣士がげんなりとツッコミを入れてくれたが、とりあえず今は無視だ。
「……教室だからダメ。なら……別室へ」
「行かねえよ！？　この流れでは行けねえよ！　この流れで人気のないところへ移動したらあからさま過ぎるだろ！」

教室は、別室行って何する気だテメエ的な空気に満ち満ちている。
あ～ん、口移し、指舐めと来て人気のないところ行ったらどうなるのか、想像出来ない程高校生無知じゃない。
「もうちょっとこう……空気読もうか。ルイン」
「大丈夫」
何がだ。
「読んだ上で、やっている」
「余計悪いわ！　そのアジテーターっぷりも十二分にお前のアイデンティティだよ！　俺を殺す気か！？」
「……私は破滅の女神」
「わかってるよ！　その定型句、流石にもう想定内だよ！」
明らかに生きて帰れなさそうな空気になって来ている教室の空気に戦々恐々としつつ、ルインとの昼休みは過ぎて行った。

「ふぅ……」
放課後である。正直昼休みのルインの一件で、凄まじく精神力を削られたが、少なくともこの後に三人程残っているのだ。そう考えると、若干絶望的な気持ちになる。とりあえず、ユーキちゃんのチョコを食べて体力回復。
「……行くか」
さだめに指定された時間である。既に大分気力が尽きかけているが、行かないわけにもいかない。重い足を引きずりながら、屋上への扉を開く。
「ずっと、お慕い申し上げてございました……」
「いきなりだが、口調が滅茶苦茶だださだめ。もうちょっと勉強してから出直してこい」
「いきなりダメ出しされた！？」
髪を下ろして、少しだけいつもと雰囲気変えてみました的なさだ

めに冷ややかな目で突っ込む。
「ほら、チョコくれるんだろ。寄こせ」
「冷やか！　しかも超めんどくさそう！」
「昼休みのルインで大分疲れてな」
「おのれルイン！」
すっかりキャラ作りする気はなくなったようでいつものさだめに戻る。まあ、やっぱさだめはこうじゃなくちゃな。
「っていうか、お兄ちゃんノリ悪い！　もうちょっとノッてくれても良いじゃん！」
「……あのさ、バレンタインチョコってのはノリでギャグチックに手渡すもんなのか？」
「む、それを言われると……」
「大体だな。お前の髪を下ろした姿なんて見慣れてるし、あんまりいつもと違う雰囲気は出せてなかったぞ」
「くっ、一緒に居た時間が長いことの弊害が……」
「まあそういうわけで、くれるならさっさと寄こせ」
「でもその反応はあんまりじゃないかなぁ！？」
む、そう言われて見ればそうかもしれん。仮にもバレンタインチョコだ。
「だが、お前の作った食物は危険だしなぁ……」
必ずと言っていい程媚薬だか筋弛緩剤だか睡眠薬だか混入されているわけで。
「今回はそんなことないから大丈夫！　今までのさだめは闇さだめ。今年のさだめは普通のさだめだから！」
「まあ、それもそうか……」
それでも、一抹の不安は残るが。
「そんなことより、はいこれ。今年のバレンタインチョコ」
「おう、サンキュ……って、なんで二つあるんだ？」
「片方はさだめスペシャル」
「丁重にお返しいたします」

「大丈夫だって。ヘンなの入ってるわけじゃないから」
「本当か……？」
正直、さだめを信頼していても信用はしていないわけで。
「本当だってば。ただ単に、さだめ好みの味付けにしてるだけ」
「ということは、相当ビターなんだな」
さだめは苦いもの好きである。さだめ好みと言うことは、それが反映されているのだろう。
「うん。カカオ比率を高めてみた」
「ってお前、まさかカカオから作ったのかこれ」
「まあね。こっちはお兄ちゃん用。粉乳も使ってホワイトチョコ」
サラリとそんなことを言うさだめ。
「ったく、相変わらず、真面目にやれば何でもできる奴だな」
「でも、お兄ちゃんだってそれくらい出来るでしょ？」
「出来ん」
「え？」
「俺はお菓子作りの技術は人並みなんだ。そりゃ、やり方教われば出来るだろうが、少なくとも現時点では出来ないよ」
「そうなんだ。意外」
「お前、俺を何でもできる完璧超人か何かだと思ってないか？」
「違ったっけ？」
「違う」
まったくどいつもこいつも……。
「俺は、何処にでもいる一般人だ」
「それは嘘だね」
「……」
言い切られた。
「お兄ちゃんが一般人なら、この世の全ての人間が落ちこぼれだよ」
「それは言い過ぎだろういくらなんでも」
「強ち言い過ぎでもないと思うけど……」
小声で何かしら呟いたさだめに構わず、とりあえずチョコを一粒

取り出して食べる。何か混ざってたりはしなかったので、コイツも成長したってことだろう。
「ふむ……美味いな」
「あ、そっちは……」
さだめスペシャルの方だ。確かに苦い。苦いが……。
「ただ苦いだけじゃないな。ちゃんと味のバランスは取れてる。口どけも良いし、完成度高いな。相当手間暇かかってるのもわかる」
「まあね。これでもさだめ、やる時はやるし、手は抜かない主義だから」
「普段からそうしてくれ。ぜひとも」
「でも、それはそれでお兄ちゃん寂しいでしょ？」
「……否定はしないな」
確かに、普段のコイツは滅茶苦茶だが、愉快であることもまた確かなわけで。
「……ま、とりあえずチョコはありがとな。美味かったよ」
「ホワイトデー、楽しみにしとくね！」
「ホワイトから派生する白いモノはやらんから、そのつもりで」
「超先回られた！？」
収拾つかなくなるので、とりあえずボケは封殺しておいて、俺は屋上を後にした。

「あの……っセツ様！」
「お？」
アカデミアの校舎を出た辺りで、ガチガチに緊張して裏返った声が俺を呼び止めた。
「希冴姫」
セツ様、という呼び方からわかってはいたが、そこに居たのは希冴姫。

「どうした。ガチガチだぞ」
「そ、それはそのっ、このようなことは初めてですので……その、心の準備が、と言いますか……」
希冴姫の顔は真っ赤で、今にもオーバーヒートしそうだった。
「そ、それに……」
「ん？」
希冴姫が唐突に下を向き、落ち込んだように肩を落とす。
「……結局、手作りは出来ませんでしたもの」
そう言って、希冴姫はその手にある包装されたチョコレートを俺に手渡す。
「なんだ、そんなことか」
「そ、そんなことって……わたくしにとっては、そんなことでは済まされないことなのですわ！　皆さん手作りのチョコを……なのに、わたくしだけ」
「ジャックに師事したはいいが、結局満足のいくものは出来なかったってことか」
「……はい」
肩を落とし、すっかり落ち込んだようにしょんぼりする希冴姫。
「今の今までジャックに手伝って貰ったのですけれど、遂にジャックが……」
そこまで言って眼を伏せる希冴姫。おい、ジャックがどうした。
頼むから最後まで言ってくれ。
「……なら、それでいいさ」
「え？」
「……要するに、希冴姫は頑張ったんだろう？　単に結果がついてこなかっただけで。それに、上手くいかなかったからこそ、不本意ながらも失敗作じゃなく既製品を持ってきたわけだ」
「はい……」
「ならそれは、お前の優しさだよ。例え一人だけ手作りチョコじゃなくなったとしても、俺の体調を気遣うことを選択した、お前のな」

「セツ様……」
「ありがとう希冴姫。このチョコ、ありがたく食べさせて貰うよ」
「……はい！」
「あ、それと結局ジャックはどうなったんだ？」
「……それでは、わたくしはこれで！」
「おおい！？　眼を逸らすな背を向けるな小走りに去って行くな！
ジャック、ジャーック！？」

「え～と、ユーキちゃんにルイン、さだめに希冴姫……」
残るは、アテナか。ん？　そういえば……。
「セツく～ん」
「？　ああ、ユーキちゃんか。どうした」
「えと、特に用事はないんだけど、見かけたから～……だめ？」
「いや、ダメなんてことはないが……」
「そっか、良かった。それで、セツくん、それ皆の？」
「ああ。こっちがさだめ、これが希冴姫の」
「……あれ？　アテナちゃんは？」
「それが、まだなんだ。っていうか、よく考えたら、今日俺アテナと顔を合わせてもいないんだよ」
「え……そういえば、授業もいなかったね。おかしいな～。アテナちゃんがこんな日に病欠なんてするとは思えないんだけど……」
「だよな……なんかあったのか……？」
そう考えると、凄く不安になった。ユーキちゃんと二人、暫しその場で考え込む。
「……セツくん、見に行ってあげて」
「え、でも女子寮だろ？　男の俺が行くのは……」
「それは、セツくんなら今更なんじゃあ……」
……確かに。最近は行くことが減ってたから忘れてたが。

「そうだな。それじゃ、見に行ってみるよ。ごめんなユーキちゃん」
「ううん。わたしのことはいいから、アテナちゃんの所に行ってあげて～。わたしは、もうちゃんと渡せたから……」
「……ありがとう」
アテナは恋敵の筈なのに、自然にそう気遣ってくれるユーキちゃんにもう一度お礼を言って、俺は女子寮に向かって走り出した。

「おーい、アテナー？　いないのかー？」
とりあえず女子寮のアテナの部屋に来てみたが、ノックしても返事がない。
「仕方ない。こういうときは……」
ザ・ピッキング！
「よし、開いた」
所要時間約二秒。そこそこ満足出来るスピードだ。
「入るぞー」
一応、改めて声を掛けてからドアを開ける。
「ん……いないな」
アテナの部屋は整然としていて、人の気配は感じられない。以前に入った時と然程違いもない。
「けど……まさかアイツ」
一切の乱れがないベッドのシーツ。寒々しい部屋。まさかアテナの奴、昨夜部屋に戻ってないのか？
「だとしたら……」
調理室か？　少なくとも、ユーキちゃんの話を聞く限り、バレンタインの準備はしていた筈だ。
「アテナ……！」
慌てて部屋を飛び出し、女子寮の調理室に向かう。調理室に居れば良い。それならいいが……もし、何かあったら。

「アテナ！」
調理室に着くなり、俺は扉を蹴破るようにして開けた。
「ぅ……セツ？」
電気の点いていない、暗い室内に、果たしてアテナはそこに居た。
そのことに安堵しつつも、俺は様子のおかしいアテナに近寄ろうとする。
「セツ……来ないで、ください」
「アテナ……？」
アテナの目は虚ろで、眼の下には隈も出来ていた。一体何があったのか、調理室中に飛び散ったチョコの残骸や、アテナの体中にも飛び散ったホワイトチョコなどもあって、かなり悲惨な状態だ。というか、見た感じ凌辱エンド後のＣＧっぽくて凄く嫌だ。
「私、私……」
「どうしたんだアテナ。なんか、凄く悲惨なことになってるが……」
そう言うと、アテナは眼にジワっと涙をにじませる。
「う、うぅ……ごめんなさい。ごめんなさい、セツ……」
「お、おい……ホントにどうしたんだよ」
なんだかとてつもなく悲壮感を滲ませているアテナに、思わず俺も声が震える。
「私……」
「なんだ？」
「私、今年こそ、今年こそはって、バレンタイン……」
「あ、ああ……」
「でも、どうしても上手く行かなくて……普通のチョコしか出来なくて……」
「いや……それでいいんだが」
何やら、雲行きが怪しくなってきた。
「ルインさんは、おしゃれなチョコフォンデュとかするみたいでしたし、さだめさんなんか、カカオから本格的な手作りチョコで……私の、私のチョコなんて……とっても、普通で……」

「いや……ユーキちゃんのチョコも割りかし普通だったが」
そして、その普通さが非常に嬉しかったんだが。
「ユーキさんは……それがパーソナリティとして確立してるからいいんです。でも、私は……私は、普通のチョコなんかじゃ何のインパクトも……」
「あのなアテナ……」
インパクトとか、そんなんいらんっちゅーのに……。
「それで、私負けられないって……でも、結局私……」
この有様……か。
「はぁ……」
俺は溜息を一つ吐いて、アテナに近づく。アテナはすっかり落ち込んでしまっているらしく、がっくりと座り込んだまま顔もあげない。
「アテナはホント、空回るよなぁ」
「ぅ……」
自覚はあったのか、小さく呻く。
「去年のバレンタインもそうだったし、普段もさ」
「……」
「その理由、教えてやろうか？」
「……ぇ？」
俺の思いがけない言葉に、アテナは驚いたように顔を上げる。その頬に付いたチョコをはがして食べる。
「あ……」
「うん。美味いじゃないか」
ユーキちゃんと同じく、普通に良く出来たチョコレート。でも、ユーキちゃんのそれとは違う、アテナらしい、一生懸命で優しい味だ。
「お前はな。周りを気にし過ぎなんだよ」
ポンポン、と頭を軽く撫でる。
「アテナは、さだめと似てる」

「さだめさん、と……？」
「まぁ、パッと見正反対なんだけどな」
光の天使族使いのアテナ。闇の悪魔族使いのさだめ。性格とかも、丸きり正反対に見える二人だが、俺は、きっと二人はそっくりなんだと思っている。
「思い込んだら一直線。一図で、暴走しがちで、負けず嫌いで、デュエルでは容赦なくて、結構、我も強い」
本質的なところは、この二人は殆ど同一だ。
「でも、アテナは少し、さだめと比べて周りを気にし過ぎるな」
もちろん、それが悪いことだとは言わない。さだめみたいに、周囲を完全無視して暴走されるのも困ると言えば困る。
「だけどさ、アテナはさだめと似てるのに……自分に自信がないんだろうな」
そこだけが、さだめとは違うところ。あいつは、何だかんだ言って自分の行動に迷いがないし、意味不明なまでの自信に溢れてる。けど、アテナはそれがない。
「周りと比べて自分はどうとか、そういうことを気にし過ぎだ。いいじゃないか。他の奴らなんてどうでも」
「で、でも……」
「いいから」
俺はアテナを抱きしめる。こんなことしかできないのがもどかしいし、これから言う言葉がキザっぽくて恥ずかしく、顔が赤くなるのを見られなくないから。
「お前は、俺だけ見てろ」
「ぁ……」
耳元で囁く。
「今日は、バレンタインだ。女の子が、勇気を出して男に想いを告げる日だ。なら……他の人のことなんて気にせずに、まっすぐ、俺にだけ向かって来いよ」
まったく……俺は何様だ？　どれだけ自信過剰なナルシストだよ

と思わなくもないが、仕方ない。アテナに、このまま潰れて欲しくない。

「普通のチョコでもいいじゃないか。それに、想いが篭っていれば、例え手作りじゃなくったって特別だ。俺は……そこに込められた想いくらい、汲み取ってやる自信はあるぞ？」

「セ、ツ……」

「だから、アテんぷっ！？」

唇に、熱い感覚。喉に流れ込んでいく、とろりとした甘さ。

「あ、アテナお前…んっ！？」

間髪いれずに、また流しこまれるチョコレート。

「……ちょこれーと、型にはめて、冷やしたりする時間はない、ですから……」

チョコ以上にとろんとした眼をしているアテナが、陶然とした面持ちで言葉を続ける。

「わたし、思った通りにします……。この熱くて、とろけて、溢れてしまいそうなくらいのモノ……型になんてはめません。そのまま、貴方に……」

「ちょ……！」

いつの間にか、体勢が逆転し、殆どアテナにのしかかられるように抱きつかれている。

「こんなに、熱いのに……冷やしたチョコなんて、ダメです。熱いまま……とろとろで、溢れそうな……セツ」

「あ、あてな……」

そ、そうそういうところ！　こういうところもさだめに似てるんだよ！　この、なんというか、押し倒されそうな感じが！

「って、若干酒臭いぞ！？　まさか、これ……んむっ」

アテナに絡みつかれながら、俺は横目でキッチンに置かれた瓶のラベルを見る。

“ブランデー”

やっぱり！　チョコにブランデーはまあ、それほどおかしなこと

じゃないが！　“特別なチョコ”を求道する内、ボンボンに辿りついたのもわからない話じゃないが！
「セツ……」
「ま、待った！　待ったアテナ！　酔ってるだろ！？　お前、物凄く酔ってるだろ！」
「酔ってなんて……それに、んっ……そうだとしても、関係ないです……」
「い、いやいやいや！　関係ないこた……んっ！？」
や、ヤバい……流石に、くらくらしてきた。い、色んな意味で……。
「セツ、私……」
喰われる！？　そう、本気で身の危険を感じた瞬間だった。
ゴンっ！
「ぶっ！？」
アテナの後頭部から鈍い音が響き、そのままずるずると崩れ落ちた。
「あ、アテナ……？」
「……きゅぅ」
すっかり眼を回しているようだ。しかし、今のは……。
「……流石に、ここまでとは思わなかった」
「る、ルイン！？」
神出鬼没がアイデンティティの女神が、アテナの背後で杖を構えて立っていた。珍しく、その口元は引き攣り、額に青筋を浮かべている。
「お、お前なんでここに……」
「ここは、女子寮だよ……お兄ぃ～ちゃぁ～ん……！」
調理室の電気がパッと点き、入口には眼を血走らせた（超危険域）さだめの姿。
「セツくん……流石に、これはちょっと……」
その後ろでは、ユーキちゃんも顔を引き攣らせて拳を握っていた。

「こ、このエロ小娘……！　ひ、人気のない調理室でなんと破廉恥な……！」

希冴姫も、今にも抜刀しかねない形相で震えている。

「え、えっと……皆さん、お揃いで……？」

久しく感じていなかった程に濃密な死の気配に、流石の俺も泣きそうです。

「あ、危なかったですわ……嫌な予感に従ったのは正解でしたわ……」

「うん……女の勘って、結構バカにできないね～……」

「濡れ場寸前」

「このエロ天使、時折さだめ以上に発情期なんだから……！」

これは……さっきまでとは別の意味でヤバい。俺かアテナか、どちらかが死ぬ……っ！

「さて……」

「セツ様？」

「はいっ！」

「わたし、今日結構我慢したよ～……？」

「さだめも……ちょっと冷たい反応でも我慢したんだけどなぁ……？」

アテナ……やっぱり、前言撤回だ。

「代償は……高くつく」

もう少し……他人は気にしようか。

「さ～てと……」

じゃないと、どうやら……。

「何してもらおっかな～？」

俺が、ヤバい……！

安らかに眠るアテナの横顔を見ながら、俺はこの処刑場から如何にして逃れるか、それだけを必死で思考するのだった。

番外編「聖戦再び」（後書き）

こんにちは。

というわけで、十五禁です。ラスト辺りが、もうかなり十五禁です。少なくとも悠的には、既にあっぷあっぷです。

基本的には、最後のセツの言葉が書きたくて書きました。アテナとさだめが似てるってこととかも、結構書きたかったところです。ちなみに、一番書き易かったところはルイン。あのあたりだけはするする書けました。

このバレンタイン、前回書いたように、一度クラッシュした上、改めて書こうとすると全然書けなくて、仕方なくもう一度全消ししてから書き直したと言う、物凄く難産だった番外編になります。遅れたのはそれが原因……すいません。それだけじゃないです。ゲームしてました。それもあるけど、ゲームが一番の原因です。レディアントマイソロジー、やってました。プレセアの加入タイミングのあまりの遅さに、必死こいてやってました。すいませんでした。

それと、今週は卒業式やら引っ越しやらと、若干忙しい週になりそうです。遅れた分の更新を頑張りたいですが、どうなることやら……。

それでは、悠でした！

第四期第十九話「騎士の憂鬱」（前書き）

皆さまお久しぶりです！　復活の悠です！　先日の地震の影響で更新がストップしていましたが、今日から復活です。心配してくださった方々、本当にすみませんでした。そしてありがとうございました。悠はこうして無事です。詳しい事情は活動報告にてアップしておりますので、そちらをご覧ください。

久しぶり繋がりで、久しぶりの彼女が復活です。

第四期第十九話「騎士の憂鬱」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第十九話「騎士の憂鬱」

「天と地、生と死、光と闇。境界を司りし我が力を以て、我が神オシリスに願い奉る……傷つき斃れ、力尽きし魂に、今一度目覚めの力を与え給え」

光が猛る。アテナの詠唱と共に踊る光の粒が、ゴーズたちによって再生された希冴姫さんの身体に吸い込まれて行く。その中心に在るのは、エースが持っていた希冴姫さんの魂だ。

「そう……イイ感じよアテナ。細かい制御はあたしに任せて、アテナは……」

「はい……わかってます。このまま……押し込みます！」

光は若干暴力的な動きで以て希冴姫さんの身体に吸い込まれて行く。シャルナが溢れる光を漏らさず制御しているみたいだけど、凄まじい力技にさだめたちは若干不安になる。

「お、おい……大丈夫なのだろうな？」

「希冴姫……」

「むぅ……」

「……雑な仕事だ」

騎士たちも、それぞれに不安そうな顔を隠せない。

「まぁ……アテナらしくはあるけど……」

「あ～、心配すンな。そこら辺はシャルナの奴がやってる」

「……むしろ、それが一番不安」
ルインの台詞に、全員で頷く。シャルナの信頼感のなさは相変わらず。
『……仮にも、アレで最上級の天使だ。パワーこそスピリチュアに及ばないが、緻密さであれば奴の方が上だ』
確かに、アテナの効果とシャルナの効果を見る限りそんな感じではある。
「つーか、あれって相当力尽くだよね？　アテナってもしかして、昔から結構大雑把で力押し上等の精霊だったわけ？」
「力尽くは力尽くでも、その力尽くで封印指定を受けるレベルのゴリ押し具合でしたが……」
カイエンの言葉に、思わず絶句。アテナって……。
「つくづく、見た目や雰囲気と本質が釣り合ってないよねぇ……」
「行きます！　えええええいっ！」
「ちょっ！？　ま、待ってアテナ早い早い！　もっとゆっくり……」
「今調子が良いんです！　だから、勢いで押し込みます！」
「だぁぁっ！　だからその、何とかなるなる行け行けゴーゴー青信号な姿勢やめてぇー！　カイエン、ルイン、制御の手を貸して！　あたしだけじゃおっつかない！」
「は、はいただいま！」
「……世話が焼ける」
ついに泣きが入ったシャルナに、カイエンとルインが手を貸す。
「……おい、もう一度聞くぞ。本当に、大丈夫なのだろうな？　あの小娘は」
「……昔より、更に力押しになってンなァ……つーか、ニンゲンだからかもしれンが、力にムラがあり過ぎンだろォが。こりゃ、シャルナの奴は相当キツイ筈だゼ」
「最近のアテナ、後先考えないからなぁ……」
ジト目で見つめる先、光が徐々に薄くなり、希冴姫さんの顔に生気が戻ってくる。

「これでっ！　終わりです！」
「終わってない終わってない！　まだ色々残ってるって！」
「ぐ、ぐちゃぐちゃですよ！　も、もっと丁寧に……」
「……適当過ぎる」
「本当にあの小娘、希冴姫を助ける気があるのか！？」
「あ～あ……」
「きゅ～ぅ……」
一人嬉々として儀式を行うアテナに、さだめはミリーと一緒に溜息を吐くのだった。

「ったくもう！　いくら久しぶりだからって無理矢理過ぎ！　あたしやカイエン、ルインのサポートなかったらとんでもないことになってたわよっ！」
現在、アテナは珍しくガチなシャルナさんに説経を喰らっていた。口調も普段のおちゃらけたものじゃなく、真面目な仕事口調である辺りに、シャルナさんの本気っぷりが伺える。
「で、でも結果的に上手くいったわけですし……」
「あたしらが居なかったら折角再構成した肉体が粉々になるか、生きてるだけの植物状態にでもなってたかもしれんっつーのよ！」
「ひぅ……」
アテナが怒られている横で、さだめはルインに事情を尋ねる。
「で、どれくらい無茶振りだったわけ？」
「……例えるなら、仕切りも区別も見境もなく、煮物やデザート、ご飯を適当に、許容量すら無視してお弁当にぶち込んだミキサー状態」
「最悪だね……」
「わ、私はそういう細かい制御は昔からシャルナ任せでしたし……」
「言い訳しない！」

「はぅ！」
　要するに、カードの効果的にはアテナが一気に不完全状態のモンスターを蘇生して、シャルナさんが一つ一つ調整し直して完全蘇生……みたいな感じなんだろう。きっと。
「事実、あの緻密なコントロールには驚いた。普段のニートとは別人レベル」
「ゴーズ様と同様、真面目にやれば優秀な方なので……」
「大体、あんたが現役時代からあたしの仕事が多かったのもそもそもあんたの雑な仕事のフォローで……」
「ひぃ～ん……」
「泣かされてるし……」
「いつもとは立場が逆だなありゃ……」
「そ、それで、当の希冴姫さんはどうしたんですか？　ここにはいないみたいですけど……」
「ああ、エースがこれまでの事情を説明しに行ってるみたいだよ？　まだ眼が覚めたばかりで、少しボーッとしてるみたいだったから、さだめたちは遠慮したけど」
「大丈夫かな……」
「まあ、ジャックさんも付いて行ってるみたいだし、なんかあればどうにかなるでしょ。お兄ちゃんばりの高スペックだし」

「……と、こんなところか。以上が、貴様が眠ってから今までの大まかな経緯だ」
「そう、ですの……」
　我が説明している間から、希冴姫は顔を俯かせ、心ここに在らずと言った様子だったが、説明を終え、事態を把握してからは、尚更それが顕著だった。
「どうした。随分と覇気がないが、まだ蘇生の後遺症でも残ってい

るのか？」
「……違いますわ」
「ではなんだ」
「わたくしは……」
希冴姫は一瞬言い淀んでから、ふっ、と自嘲的な笑みを見せた。
「わたくしは……愚かですわね」
「そうだな」
即答してやった。
「主を遺し、勝手な自己犠牲で逝き、真に守るべき時に傍にいることも出来なかった貴様は、騎士として最低で愚かだな」
「……」
「エース……」
「いいのです。ジャック。わたくしは……本当に、愚かで……」
「だが……」
「……？」
「それは、我らとて然して変わらん」
苦々しげな様子の我に気付いたのか、希冴姫が漸くこちらを見る。
「エース、貴女……」
「肝心な時に、守るどころか主に逃がされる騎士など……笑い話にもならん」
こいつが……希冴姫が抱いている想いは、我ら全員が共有すべきものだ。我らは揃って、主を守ることが出来なかった。
「奴も……お前も……どちらもバカだ！　勝手な自己判断で、勝手な自己犠牲で守った気になって！　ふざけるな！　お前らはわかっていない！　お前らが誰かを守りたいと思えば思うほど、お前たち自身を守りたいと思う者がいることに、何故気付かない！？」
「エース……」
「命を懸けてでも、守りたいと思うのは勝手だ……だが、その命を懸けてもいいと思ったほどの存在が、その判断を良しとする筈がないと……どうして、気づかん」

「……申し開きも、ありませんわね」
「そう思うなら……さっさと立ち直れ。いつまでそんな、死んだ目をしているつもりだ。奴の前に行くのに、そんな目では足手纏い以外の何物でもない」
「ええ……ですが、少し……もう少しだけ、待ってくださいまし」
「……勝手にしろ」
心の整理という奴が、そうそう簡単に着くものだとは思っていない。我はそれだけ言い残し、希冴姫の部屋を出た。

「あ、エース」
「……さだめか。どうした」
「どうしたって、希冴姫さんのことに決まってるじゃん。どうなの？」
「どうもこうも、すっかり死人だ。あれでは、生き返ったのか死体のままなのかわからん」
「そっか……」
ふぅ、とさだめは溜息を吐いた。
「まったく……しょうがないなぁ」
「後は任せる」
「って、さだめまだ何も言ってないんだけど」
「元気づけるつもりだろう？　任せる」
「……何時の間にそんな敏くなったやら」
「お前ら兄妹は似ている。どちらかを理解出来れば纏めて理解出来る程度にはな」
「へぇ。じゃあエースは、お兄ちゃんのことを深く理解したと」
「……友だからな」
目を逸らしてボソッと呟くエースを、ジト目で見つめる。
「白々しいのもここまで来ると清々しいね。まあいいや。それじゃ」

「ああ。煮るなり焼くなり好きにしろ」
若干慌てたように去っていくエースを見送った後、さだめは希冴姫さんの部屋の扉をノックした。
「はい……おや、さだめ様ですか」
「ジャックさん」
扉を開けてくれたのはジャックさんだった。にしても、相変わらず背が高い。ちっさいさだめからすると、話すだけで首が疲れる。
「って、誰がちんまいか！？」
「は？」
「ああゴメン、こっちの話」
「はぁ……希冴姫の見舞いですか？　よろしければ、席を外しますが」
「あ、ごめんね気を使わせちゃって」
「いえ、我らではどうにもならないことですので……立場が近し過ぎるというのも、時と場合によっては考えものですね」
「エースが匙を投げてたしね」
「まったく……エースは少々、短気で困ります。エースも同じく、傷ついているでしょうに……まぁ、あちらにはテンスを送ります。彼なら上手くとりなしてくれるでしょう」
「ジャックさんも大概、苦労人だねぇ……」
「はは……すっかりこの立ち位置にも慣れてしまいました。希冴姫もエースも、昔からああでしたからね」
「ん～……」
さだめはジャックさんの顔をじーっと見つめる。
「なんでしょう？」
「もしかして、さ……」
さだめは、昔から気になっていたことを思い切って尋ねてみることにした。
「ジャックさんって、希冴姫さんのこと、好きだったりする？」
「は……？」

思いがけない言葉だったのか、ジャックさんは一瞬言葉を失ったかのようにポカンと立ち尽くした。
「どうなの？　なーんか、昔馴染みとか、そういうだけじゃないような気もするんだけど」
それだけじゃ、希冴姫さんの我儘にあれだけ振り回されて尚、従う理由には弱い気がする。
「そう見えますか」
「見える、かな。よくわからないけど」
「……さて」
ジャックさんが見せたのは曖昧な笑み。
「どうでしょうね。私には、わかりかねます」
「どうして？　自分のことじゃん」
「さだめ様は、自分に素直で、自分に真正面から向き合える方ですから。私は……私は、それこそ産まれたときから希冴姫と共に在りましたから」
ジャックさんは、曖昧な笑みのまま、部屋の方を見つめる。
「……そういった感情は、持ち合わせていません。私にとっては、それこそ手のかかる妹のようなもので……。我儘も、妹だと思えば、微笑ましいものでしたから」
「そっか……」
道理で、ジャックさんとお兄ちゃんは何処か似てる感じがするんだ。時折ジャックさんが、希冴姫さんに向ける感情は、兄が妹に向ける親愛。慈しみの笑顔。
「ですから、さだめ様」
「うん」
「希冴姫を……“妹”を、よろしくお願い致します」
「おっけ。任されたよ。同じ“妹”だからね。何とかしてみるよ」
「ええ。お任せします」
綺麗に一礼したジャックさんは、最後に少し微笑んで、部屋の前を離れて行った。

「ジャックよ」
「……キングですか。どうしました？」
「いや。お主も、大概不器用じゃなぁ」
「先ほどのことですか。不器用、とは？」
「女としては意識しとらずとも、何より大切な存在で在ったことは事実じゃろうに。あっさり他人に譲ってしまいおってからに」
「私には、癒せぬ傷だと判断したんですよ。キングだって、だからこそこんなところで覗き見の真似ごとをしているのでしょう？」
「まあ、そうなんじゃが……」
「……私たちは、切り札の騎士団は、家族でした」
「……じゃな」
「キング、貴方が父。私が長兄。エースが長女、テンスが次男。そして、希冴姫が末娘……そんな、家族」
「エースも含めて、じゃが……皆、末娘を可愛がるもんじゃ。エースは、若干アレじゃが」
「嫉妬していたのでしょう。私たちが、希冴姫ばかり構うものだから」
「じゃな。騎士団として……それを差し置いても主には感謝しとるのじゃよ。“家族”としての、ワシらの絆を取り戻してくれた主には、の」
「そうですね……だからこそ、助けねばなりません」
「うむ。“娘”を悲しませるわけにもいかんしの」
「ええ。“妹”ですから」

「希冴姫さん、入るよ」

ジャックさんが出て行ったあとの部屋に残された希冴姫さんは、なるほどエースの言っていた通り半死人みたいな有様だった。
「ぁ……妹様」
「いい加減名前で呼んでよ。さだめでいいからさ」
「さだめ、様……」
「様いらな～い」
「さだめ、さん」
「さんもいらないけど、まあいいか。それで？　なにをそんなに落ち込んでるの？」
「それは……」
「あ、ちなみに守れなかった～とか肝心な時に～とか、そういうのは知ってるしわかってるから、それ以外のことでね。時間の無駄」
「っ……！」
図星、か。やっぱりね。そう言うことじゃないとは思ってた。もちろん、落ち込む要因の一つではあるんだろうけど、そこが本題じゃない。それよりも……。
「……わたくしは、どうして精霊なのでしょう」
「ん～？」
「皆様は……特に、さだめさんは顕著ですけれど……初めてお会いした時とは比べ物にならないくらいに成長なされました」
「まあ、さだめの場合は特殊だけどね」
「いえ、正気に戻ったとか、そのようなことは度外視したとしても……さだめさんは強く、優しく……とても可愛らしくなりましたわ」
「え～と、うん。ありがと？」
唐突に褒められ、首を傾げる。それが何の関係があるのだろう。
「けれど、わたくしは変わりません。見た目はもちろん、中身も……初めてセツ様とお会いした頃から、全然変わっていませんわ」
「そっかな？　結構変わってるんじゃない？　気付いてないだけでさ」
「いいえ。蘇生して……エースに会って、さだめさんが慰めに来て

くださって、尚強く思うようになりましたわ。わたくしは、昔から何も変わっていない。今も昔も、愚かな小娘のままですわ」

希冴姫さんはそう言って、自分の手元に視線を落とす。

「この手で、セツ様をお守りしたかった……以前のように、力不足でセツ様の足手纏いにならないように……それなのに、わたくしは結局」

「すっごい自虐的になってる所悪いけどさ」

このままだと際限なく落ち込んで行きそうだったので、口を挟む。

「そのことと精霊であることと、何の関係があるの？」

「……さだめさんやセツ様のような人間は、限りある命の中、わたくしたちからは想像もできない程の速さで成長していきます。初めて出会ってから、たったの二年弱。それだけの期間で、人はここまで変われるものかと……そして、エースも」

「エースは、精霊だよ？」

「ですが、彼女はまるで人間のように苦しみ、人間のように悩み、人間のように成長していきました。今ではすっかり、あの頑なだったエースがセツ様に心開いていますわ」

「デレ期もいいとこだよね。ツンなところも残した最高に萌える状態だよ」

しかも、その状態をこのまま維持するつもりみたいだから油断ならない。

「いつまでも読者をやきもきさせて人気を上げようって魂胆だね。敵ながらあっぱれと言わざるを得ないよ」

くっつきそうでくっつかないあの絶妙なデレは相手に対しても効果的な筈。事実、お兄ちゃんも若干意識してる感じが……。

「おのれ孔明……！」

「……それはよくわかりませんが」

おっとと、話が逸れた。

「つまり希冴姫さんは、今よりもっと強く、魅力的に成長したい。けど精霊である自分は中々成長することもできず、愚かな小娘のま

まで嫌になる……と？」
「……はい」
「……アホらし」
「なっ！？」
バッ、とさだめの方に向き直る希冴姫さんに、さだめは急にバカバカしくなって姿勢を崩した。
「あ～あ。もっと深刻なもんかと思ってたのに……心配して損した。バッカみたい」
「な、なにを……わたくしは真剣に……」
「尚更アホらしいね。そんなことで悩んでたの？」
「そんなことって……さだめさん、貴女は……！」
「だって、希冴姫さん十分魅力的じゃん」
「……ぇ？」
さだめの言葉に、希冴姫さんは暫し絶句した後、それだけ小さく絞り出した。
「超豪華な金髪美人だし。スタイルだって悪くないし。強いし。しかも、老けることもなくその美しさを保ってられるんだよ？　これ以上何を望むんだか」
そりゃ、永遠の美貌なんて求めるほどさだめもバカじゃないけど。それでも、希冴姫さんは十分、人に羨まれるくらいの容姿をしているのも事実。
「成長だってしてるよ。自分じゃ気付かないだけ。今だって、成長しようとしてる。人間とおんなじようにさ」
「それ、は……どういう」
「どういうも何も、人間だって同じだよ。失敗して、悩んで、苦しんで、立ち直る。成長するって、そういうことでしょ？　希冴姫さんは今、失敗して、悩んで、苦しんでる。後はそこから立ち直るだけ。もう八割方成長の段階は踏んでるじゃん」
「……」
「エースだってそうだよ。失敗して、悩んで、苦しんで、立ち直っ

たから成長して、今のエースになったわけだし。そんなの、さだめよりエースのこと良く知ってる希冴姫さんなら承知の上でしょ？」

「それは、そう……ですわね」

「まあアレだよ。さだめだって、成長がどうとか、そんな小難しいこと良くわかんないけどさ。手っ取り早いのは、真似してみれば？」

「真似……ですの？」

「そ。誰かの真似。それで結構解決することもあるよ。そうだね。とりあえず、さだめの楽観的でポジティブシンキングなところ、真似てみればいいんじゃないかな？」

「……貴女は、いつも自信満々ですのね」

「そりゃあ、それがさだめの持ち味だから」

「貴女は、悩んだりとか、苦しんだりとかするんですの？」

「そりゃするよ。けど、そのスパンが短いだけ。さだめだって失敗は一杯するし、落ち込むし、悩んで苦しむよ？　けど、時間は有限で、いつまでもそれじゃあすぐ取り返し付かないことになっちゃいかねないし、さっさと立ち直るようにしてるの」

突撃して、失敗して、落ち込んで、すぐ立ち直って突撃再開。それがさだめの行動指針。

「言っとくとね。悩んで悩んで悩み抜いて、それでちゃんとした解決策とか、答えが見つかる人って結構少ないんだよ？　だから、悩んだらその悩みを抱えたまま動けばいい。それでもきっと、得るものはあるから」

「それでまた、失敗したら……？」

「また立ち上がって、動けばいいよ。その内、もっと強くて優しくて、可愛い自分になれるから」

「心が、折れてしまいそうになったら……？」

「慰めて貰えばいいんじゃない？」

「慰めて欲しい人が……今、近くにいないなら？」

「取り戻す。ね？　答えは出たでしょ？」

「……はい」

そう。それでいいんだ。誰だって、一人で成長なんて出来ないし、一人で強くなんてなれない。だから……。

「一人で、居たくないんだ。だから、お兄ちゃんは必ず取り戻して見せる。希冴姫さんも、手伝ってね」

「……もちろん、当たり前ですわ」

うん。もう大丈夫だろう。希冴姫さんの目にも、生気が戻った。勿論、まだ本調子じゃないだろうけど、それでももう、動けるはず。

「ふふ……」

「ん？　どうしたの希冴姫さん」

「いえ……さっきのさだめさん、まるでセツ様のようでしたわ」

「あ～……」

思わず苦笑する。

「そりゃ、まあ、兄妹だから、ね。それに……お兄ちゃんに、いつも慰められてるさだめだから、自然とね」

けど、そうかなるほど。お兄ちゃんはこうして日々好感度を高めてるわけだね。納得。

「それにしても、まさかさだめさんが元気づけてくださるとは夢にも思いませんでしたわ」

「あはは、まあ、さだめも柄にもないことしてる自覚はあるよ。……けどさ」

「けど？」

「ほら、好きな人のことで落ち込んでる女の子を元気づけるのは、恋敵って昔から決まってるしね」

「そ、そうなんですの？」

「そうなの。けど、アテナは絶賛叱られ中だし、ルインは無口（？）だし、ユーキさんはいないしエースは無理だって言うしさ。消去法で仕方なく」

「仕方なく、ですの」

「そ。仕方なく」

なんとなく、そのやり取りが楽しくて、お互いに笑顔になる。が、

希冴姫さんは急に真顔に戻って声を顰めた。
「ところで……ですが」
「なに？」
「……やっぱり、エースも？」
「……だと思うよ。ううん。ほぼ確定」
「……わたくしのいない間にあの娘は……これは、わたくしからも一言物申さなければいけないようですわね」
「そーだねー。エース、希冴姫さんのポジション喰いまくってたし」
「許すまじエース、ですわ」
「まー、これから挽回していけばいいんじゃない？」
「その前に釘の一つも刺しておかなければ」
「皆に刺されてるけどね」
「いっそ針山になるくらい刺されてしまえばいいのですわ」
「あははっ」
そんな会話をしつつ、まあ順当に考えれば刺されるのってむしろお兄ちゃんだよね、とか言いだしそうになるのを寸での所で呑み込むさだめなのだった。

第四期第十九話「騎士の憂鬱」（後書き）

こんにちは。

というわけで、今回は希冴姫復活と、騎士たちをメインに据えたお話でした。え？　一人いない？……マァ、キニスルナヨ（ぁ

とりあえずこれで希冴姫は復活。次回から、色々と動いていきますよー。

それでは、悠でした！

第四期第二十話「その身に抱える、罪」（前書き）

さて、希冴姫も復活し、いよいよ最終局面に向けて加速していくアルカナ第四期第二十話をお届けいたします！　今回の話はちょっと説明とか多くなってしまったので、その辺を留意してお読みください。

第四期第二十話「その身に抱える、罪」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第二十話「その身に抱える、罪」

「どうも。お兄ちゃんがいないので、臨時の視点人物を務めているさだめです」
「……お前、いきなり何をわけのわからんことを言っている？」
「いや、そういえばこういうことは断っておいた方がいいのかな、と」
「だから、誰にだ」
そりゃ、画面の前の皆様方に。
「兎も角、無事に希冴姫さんも復活し、漸く旅立ちの準備が整ったさだめたちは、未だガミられている（※ガミガミ怒られているの略）アテナと、ガミってるシャルナを尻目に、城の会議室に集合していた」
「だから、誰に向かって説明してるんだお前は」
だから画面の前の（ｒｙ
「ソイツのメタ話はまあいいとして……具体的にどうすんだ？　よく考えたらオレら、セツたちが何処に居るのかもわからねえんだぞ」
「そうですね……先輩たちの居場所がわからないんじゃ、それこそ最後まで隠れられてしまえば為す術なく……」
「いざとなれば、あの男も動くでしょう？　折角こちらには、最大の情報源が存在するのだし」

エリアの言葉に、さだめたちは頷く。真中希望さん。頼り過ぎると危険そうだけど、全く情報がない今、手っ取り早いのは彼に聞くこと。

「そうだな。一度でも見つけて、交戦しさえすれば、そこで勝てずとも事を動かすことは出来よう」

珍しく全身鎧（フルプレートアーマー）姿のネイキッドさんがそう言って腕を組む。

「っていうか、なんでネイキッドさん鎧なの？」

「……筋肉が暑苦しいから、何か着ろとルイン殿が」

「……暑苦しいって言われて、着るのが全身鎧（フルプレートアーマー）なんだ」

それってむしろ……。

「室内で全身鎧（フルプレートアーマー）とか、暑苦しいから脱いで」

「ルイン殿ぉぉぉぉぉぉぉっ！？」

「だよねぇ……」

「な、ならば潔く……拘束解除ぉっ！」

「……筋肉が暑苦しい」

「ならどうすれば！？」

「……普通に服を着りゃいいんじゃねえか？」

「漢らしい筋肉の鎧も、鋼鉄の鎧も脱ぎ捨てた我などっ！　もっての外だ！」

あんたの趣味かい。

「ならば出て行け。暑苦しい上鬱陶しい筋肉ダルマが。会議の邪魔だ」

「酷いっ！？」

結局、ネイキッドさんはエースに蹴りだされてしまう。

「さ、流石に酷いんじゃ……」

「いいんじゃない？　貴女だって、上半身裸の筋肉男や全身鎧（フルプレートアーマー）の拘束着けたおっさんがいるより精神衛生上いいでしょう？　エリアル」

「え？　う、うんまあそうなんだけど……」

「容赦ねえな……」

「他には邪魔な奴はいない？　なんなら追い出すわよエリアル」

「え？　じゃ、じゃあヒゲ……」
「出て行きなさいヒゲ面」
「何故じゃあああああああっ！？」
今度は唐突にキングさんが流されて行った。
「あと、潜水艦は流石に邪魔なんじゃ……」
「消えなさいバグロス」
「久々の出番なのに！？」
「バカでかい図体が邪魔だそうよ」
「これがっ、脇役の扱いかぁぁぁぁぁぁっ！？」
バグロスさんも追い出された。と言うか、よく入れたよね。どう見ても入口より大きいんだけど。
「今もどうやって出て行ったんだろう……」
「ふぅ、危ねえ危ねえ。コンパクトな二輪で助かったぜ」
「貴様も、どう見ても役に立たなそうだし個人的に嫌いだから出て行け」
「なんじゃそりゃぁぁぁっ！？」
最後にサイクロイドがエースに蹴りだされて、会議室は少し広くなった。
「さて、汚物とその他諸々を排除したところで再開と行こう」
「いやホント容赦ねえな！？」
「会議を円滑に進めるためだ」
「いわば必要悪ね」
「オイ待てそこのシスコン精霊使い。最後の方明らかに私怨だろ。というか最初からかなり私怨だろ」
「会議のためだ」
「エリアルのためよ」
「エリアちょっと待て」
「ごめんなさい！　お姉ちゃんがごめんなさい！」
「ぐっ……ゆ、許す」
「ありがとうございます！」

「相変わらず、洗脳染みた土下座だね……」
「流石はエリアル……これは、私もうかうかしてはいられませんね……」
「……オイカイエン。なんで対抗心燃やしてンだお前」
結局、邪魔になりそうな（話を脱線させそうな）メンツを追いだして尚、話が脱線するさだめたち。
「……まぁ、いつものことだよね」
さだめがボケなくてもこの調子だ。これでお兄ちゃんが居て、さだめがボケ始めればきっと収拾なんて一切付けられないことになっていたに違いない。我ながら。
「……話を戻すぞ。真中希望にコンタクトを取ろうにも、そもそも我らは奴とコンタクトを取る方法がない。直通ナンバーを知っているのはセツだけだ」
「そうなんだよね」
けど、あの人の能力考えたら、そもそもここで会議している内容すらリアルタイムで把握していて駆けつけてきてもおかしくはない。
「それがないってことは……」
「まだ、あの人が手を貸す場面じゃない、ということでしょうね」
「あ、アテナ。解放されたんだ」
「……ええ。ホントに、偶に真面目になるとああなんですから」
「日頃の鬱憤を晴らす勢いでガミってたしね」
「これで、普段のサボリ癖も治ってくれればいいんですが……」
「無理だろうね」
「はい」
あっさり頷くアテナ。実際、あのサボリ魔が早々改心なんてしないだろうしね。
「うぁ～眠い～、疲れた～休みたい～ネトゲしたい～ビール～」
「貴様も放りだすぞ駄女神」
「黙ってますサー！」
「……あの様子じゃ、ね」

「もう……」
それはともかくとして、そうなるとさだめたちには相手の出方を待つ以外に手がない、ということになる。
「それは、なんとなく癪だね」
「ええ。わたくしとしても、むしろこちらから乗り込んで行きたいくらいなのですが……」
「元気になったとたんアグレッシブだな貴様……」
もしかして、さだめを見習うように、とか言った所為かな……？
さだめが少し不安になった、その時。
「……どうやら、まだ懲りてはいないらしい」
『っ！？』
会議室の扉。そこに寄りかかるようにしてお兄ちゃんが立っていた。
「セツ……！」
反射的に身構えるさだめたちに、お兄ちゃんは手を振った。
「早まるな。俺は今、戦うつもりはない」
「戦うつもりがない？」
「俺の目的は確かにお前たちを倒し、エンヴィーを救うことだが……お前たちも、何も知らないまま倒されては不本意だろう？　事情の説明くらいは必要だと思ったまでだ」
「……そりゃ、ありがたいがナ。その上から目線は腹立つからやめろや」
「悪いが、その頼みは聞けないな。これが俺のスタンダードだ」
ゴーズの言葉をにべもなく断るお兄ちゃんは、やっぱりこちらに対する歩み寄りの姿勢を見せてはくれない。
「セツ様……」
「切り札の姫騎士か……どうやら、蘇生させたらしいな」
「セツ様……ええ。わたくしは皆さまのお陰で、こうして無事に蘇ることが出来ましたわ。セツ様。貴方もどうか、こちらに戻って来てくださいまし」

「断る。戻るも戻らないも、そもそも俺には、そちら側に居た記憶もない」
「けど、あたしらがこれだけ言ってるんだから、いい加減こっちに居たことくらい認めてもいいんじゃないの？」
「過去がどうあれ、今の、記憶のない俺に信じられるのは、魂に刻み込まれた守護の記憶。エンヴィーと初めて出会った時に感じた、守護の想いだけだ」
「初めて会った奴を信じるって、アヒルの子じゃねえだろお前は！」
「言い得て妙だな。事実、俺は最初に会った瞬間からエンヴィーを守ることを刷り込まれていると言っても間違いではない」
「それがわかっていて、何故？」
「俺はそこに疑問を持っていない。不信感も、不快感も、不自由も抱いてはいない。刷り込まれはしたが、それでも俺は、俺の意志でエンヴィーを守る」
「……その、エンヴィーというのは、終焉の名？」
「そうだ」
「嫉妬（エンヴィー）……ですか。その名前、七つの大罪と何か関係が？」
アテナの質問に、お兄ちゃんは直接答えず、さだめたちを一様に見渡した。
「……終焉とは、即ち世界のバランスが崩れた結果、世界が自己崩壊してしまうシステムの一つだ。そして、世界のバランスを崩しているのは、俺たちイレギュラーの存在……ここまでは知っているな？」
「……はい」
「では、イレギュラーをイレギュラーたらしめている物は何か。知っているか？」
「それは……」
知らない。敢えて言うなら、原作に存在しなかったさだめたちが存在することで、正史からずれ、バランスを崩す……くらいのことしか聞いていない。

「……そうか。なら、これがその答えだ」
お兄ちゃんはそう言うと、自分の前髪を軽く掻き揚げた。そこには、見覚えのない痣の様なもの。
「痣……？」
「俺の……終焉の花婿としての証。イレギュラー存在としての刻印。傲慢（プライド）の痣だ」
「プライド……」
「なるほど……傲慢か。ただ一人を守れれば、他はどうなっても良いというエゴイズム。それがお前の罪か」
エースは何か思うところがあるのか、苦々しげに表情を歪める。
「貴様と我は何処か似ている……そう思ってはいたが、なるほど。そういうことか」
「……待って」
他のみんなが戸惑う中、一人深刻な表情をしていたルインが、お兄ちゃんに問いかけた。
「貴方は、花婿としての証、そう言った？」
「そうだ」
「なら……私は……」
「……そうだ。お前も俺と同じだ。怠惰（スロース）の花嫁」
「っ！」
お兄ちゃんにそう指摘され、ルインは太ももを押さえた。そこに痣が浮かんだのかもしれない。
「……怠惰。そう……」
「他にもいるぞ。憤怒（ラース）」
「オレか！？」
剣士さんの頬に痣。
「暴食（グリトニー）」
「きゃっ！？」
凛はお腹を押さえて蹲る。
「そして、お前だ。色欲（ラスト）」

そう言って指差したのは……。
「ってええ!?　わ、私ですか!?」
アテナ。
「ちょ、ちょっと待ってください！　どうして私がよりにもよって色欲なんですか!?　さだめさんでしょうそこは！　常識的に考えて！」
「いやーアテナ結構エロいじゃん」
「え、えっちくありません！　誰がえっちぃんですか!?」
「アテナ」
「違います！」
アテナは必死に否定しようとしてるけど、まあ正直仕方ない気もする。最近のアテナエロいし。さだめより色仕掛けしてる気がするし。
「お似合い」
「違います違います！　これは何かの間違いです～！　大体、痣の場所が……」
そこまで言ってアテナはごにょごにょと顔を赤くして黙りこむ。
「あ、そっか。もしかしてこk「きゃあああああああっ！」……まあ色欲らしい場所ってことだね」
けど、確かにさだめだって自分で言うのもアレだけど、色欲に選ばれていてもおかしくないはず。どうしてアテナに？
「そもそも、その娘が大罪に選ばれることはあり得ない」
「え？」
お兄ちゃんはさだめとシャルナを指差す。
「その二人は、終焉の器だ。器に罪は宿らない」
「器……」
「なるほどねぃ……どーして怠惰がおねーさんじゃなくルインに宿ったのかと思えば、そういうことね」
「それ、自分で言う？」
「これでわかったと思うが……」

お兄ちゃんはアテナたちを見渡して言う。
「お前たちは俺たちと同じだ。エンヴィーが、一人で終焉なのではない。俺も、お前たちも、全員が終焉だ。だからこそ、言うぞ。例えエンヴィーを倒したところで解決などしない。俺たちが居る限り、俺たちが新たな終焉（エンヴィー）になるだけだ」
「っ……」
それは、つまり……。
「無駄だよ。お前たちがいくら頑張ったところで、世界は救えない。いやむしろ、お前たちが頑張れば頑張るほど、力を付ければ付けるほど、世界は終焉に向けて加速する」
「オレたちは……エンヴィーとは違う。世界を滅ぼしたりしない！」
「お前たちがどう思おうと勝手だが……俺を見ればわかる筈だ」
お兄ちゃんが自分を指差して言う。
「人の意志など、記憶など、実に薄弱なものでしかない。お前たちの知る俺が、どんな俺だったかは知らない。だが、その俺は既に消え、傲慢（おれ）がいる。これが、現実だ」
「……消えてないよ」
「なに？」
「お兄ちゃんは……消えて、ないよ」
「そうです。セツは、今でも貴方の中にいます」
「例え記憶は無くされても、わたくしたちの知るセツ様の本質は、決してぶれてはいませんわ」
「……それは、きっと魂の記憶」
「いつかどこかで、誰かを守ると誓ったお前は……決して消えはしない」
さだめたちの言葉に、お兄ちゃんは黙りこみ、俯いた。
「俺は俺、か……あいつも、そう言っていたな」
小さな声で、何かを呟いた。
「お兄ちゃん？」
「……何でもない。お前たちが、最後まで抗うと言うのなら、いい

だろう。次に会うときは、容赦はしない」
「セツ！」
「……精々、一人で出歩いたりはしないことだな」
「待っ……！」
手を伸ばしても、届かない。お兄ちゃんは、もうその場にはいなかった。
「……」
届かなかったその手を見つめて、さだめは俯く。
「さだめさん……」
「ねえアテナ……こんな感じ？」
「え？」
「お兄ちゃんが、自分以外の誰かを優先して……遠くに行っちゃうのって……こんな気持ちなの？」
「……はい」
「そっか……」
これは……辛いな。
「アテナは……こんな気持ちだったんだ」
「そうですね。以前、さだめさんを理由に振られた時は……こんなものじゃありませんでしたよ」
「そっか……それは、耐えられそうにないね」
「でも、大丈夫です」
アテナは、柔らかく微笑んで言った。
「セツは、絶対戻って来ますから。あ、これ経験談です」
「……ぷっ」
思わず笑ってしまった。
「そうだね。お兄ちゃん、さだめのこと大好きだもんね。ちゃんと戻ってくるよね。さだめのところに」
「いえ、そこは、私のところに、です」
「ちょ……なんでアテナなのさ。お兄ちゃんはさだめの所に戻ってくるって」

「それは、所詮昔の話です。今は、私です。私のところに戻ってきます」
「むか。お兄ちゃんは何時だってさだめ優先。アテナは二の次」
「ですからそれは、昔の話です。さだめさんは、過去の女です」
「むきーっ！　誰が過去の女か！　このっ……清純の皮を被った淫乱小娘が！」
「だ、誰が淫乱小娘ですか！」
「アテナのことだよ！　この色欲（ラスト）！」
「そ、それは、何かの間違いで……さだめさんが器じゃなければ、さだめさんに行っていた筈のポジションで……」
「そーだねさだめはエロいよ～。でも、アテナもエロい！」
「何を根拠に！？」
「今までの行動！　色欲の痣！　ロリ巨乳な身体そのもの！」
「ち、違います！　私、えっちじゃありません！」
「い～やエロいねエッチだね！　そんなアテナは、精々お兄ちゃんの肉〇器にでもなってればいいよ。それくらいなら許可してあげる！」
「に、にくっ！？　な、なんて単語を口にしてるんですか！？」
「すぐその意味を理解できる１３歳エロ～い！　淫乱〇学生！」
「そ、それはさだめさんがいつも……」
「はい嘘！　さだめはアテナの前で初めてその単語を口にしましたー！　えっちぃことに興味津々なアテナが熱心にお勉強しなきゃ知らない筈の単語ですー！」
「が、ぐ……い、一般教養で」
「はい言い訳に無理が出てきーまーしーたー！　アテナエロ！　エロアテナ！　やーいエロー！」
「小学生男子ですか！　い、いえそうじゃなくて……えと、ぜ、前世も含めれば、私の方が年上なので！」
「なにそれ？　合法ロリアピール？　それとも淫乱天使アピール？　どっちにしろエローい！」

「い、いい加減にしてください！」
「……キング殿」
「なんじゃね？　ネイキッド将軍」
「またまた。とぼけることはありますまい」
「……うむ。エロだエッチだと連呼する美少女……こう、クるものがあるのぅ……」
「でしょう？」
「しかもどちらも年端も行かぬ乙女とくればのぅ……」
「……そこのエロ親父二匹。三枚に下ろして欲しければそう言え」
「「ごめんなさい」」
「……こんな状況で、よくもまあふざけられるなコイツら」
「でも、暗いどよよんとした空気よりはいいですよね？　剣士さん」
「そりゃまあ、な」
絶望的な真実を知らされながらも、さだめたちは努めて明るく振る舞った。希望を忘れないため。不安を紛らわすため。でも、その一番の理由は……。
「お兄ちゃんは、戻ってくるって信じているから」
だから絶対、諦めたりしないんだ。

第四期第二十話「その身に抱える、罪」（後書き）

こんにちは。

シリアスなハズなのに、比較的コメディタッチな二十話でした。

痣とかの設定はちょっと中二っぽいんで出すかどうか迷ったんですが、手っ取り早くイレギュラーの特殊性というか、七つの大罪的な特徴を出すために出しました。まあ遊戯王は元々中二っぽい設定多いし、まあむしろらしいかなと。

しばらくデュエル無い回が続いていましたが、次回はちゃんと（？）デュエルあります。そろそろ某蟹さんから「おいデュエルしろよ」的なツッコミが入りそうなので。

それでは、悠でした！

第四期第二十一話「お前が泣くから」（前書き）

久々にデュエルを書いたので（遊戯王小説なのに）結構大変でした。その割にそんなに長いデュエルじゃないですが、文章量自体はいつもと大体同じくらい。会話と心理描写重視にして見ました。

第四期第二十一話「お前が泣くから」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第二十一話「お前が泣くから」

「おい剣士、良いのか？　皆の所を離れて……」
「いいんだよ」
結局話が逸れまくって滅茶苦茶な内に終了した会議の後、オレはネイキッドと共に割り当てられた部屋を抜け出して、城の裏庭へと出てきていた。
「憤怒……ね」
頬に付けられた痣に手を触れる。
「やっかいなもんを科せられちまったもんだ」
「まったくだな。皆、気持ちこそ切れていないが、状況は最悪と言っていいだろう」
「……いや」
オレはセツの話していたことを思い出し、首を振る。
「そうでもない」
「なに？」
「ネイキッド。あいつの言ったこと、覚えているか？」
「あ？　ああそりゃ……ついさっきのことだからな」
「あいつは……セツはいかにも、オレたちに希望がない、ということを強調してやがった。オレたちを諦めさせて、倒しやすくするってだけならまあ、わからなくもないんだが……」

「だが？」
「……それにしちゃ、あいつは諦めてねえのが気になる」
「む……」
セツは言っていた。エンヴィーを“救う”のだと。オレたちと同じ、終焉である筈なのにも関わらず。
「だとすれば、ある筈だ。オレたちにも勝つ道が。あいつの抱えている希望。それこそが、オレたちにとっても希望である筈だ」
「なるほど……確かに、それは道理だな」
「根拠と言えるものは何もねえ。だが、僅かでもそこに希望の存在を感じられるなら……オレたちは戦える」
「……うむ」
オレがそう言うと、ネイキッドは満足そうに頷いた。
「それでこそ我のマスター。よくぞ言った！」
「だっ！？　痛ッ、痛ぇって叩くな！」
機嫌の良さそうなネイキッドがオレの背中をバンバンと叩く。とんでもなく痛い。
「痛つ……ったく、テメエの平手は威力シャレにならねーんだからもうちっと手加減しろ」
「はっはっはっ、悪い」
ふぅ、と一息吐き、辺りを見回す。
「……にしても、人……じゃなくて、精霊が少なくないか？」
「うむ……。見回りを強化したはいいが、元々人手不足だ。時折こうして穴が出来ることも……む」
そこまで言って、ネイキッドは目を鋭く尖らせた。
「どうした」
「いや……こうした穴というのが出来てしまう。故に、この時間帯は出来るだけ城の中に居た方が良い。もし今……」
「襲われたら、どうするつもりだったんだ？」
「「！？」」
背後からかけられた声に、オレとネイキッドはすぐさま身構える。

ネイキッドに至っては、既にその手に剣を構えていた。
「次に会えば容赦はしない。精々一人にならないことだ。二重に忠告はしておいたつもりだが……伝わらなかったのか？」
その声の主……セツは、ついさっきとまるで変わらぬ様子で、その場に悠然と立っていた。
「……いいや。伝わったぜ。『俺と戦いたければ、その条件を満たせ』ってな」
「なるほど……」
セツは僅かに頷いて、冷淡な笑みを見せた。
「馬鹿ではないらしい」
どうやら、オレの考えは当たっていたらしい。
「だが、同時に愚かでもある。あれは本心からの忠告でもあったのだがな」
「愚かかどうか……」
ガシャン！　とオレはデュエルディスクを構える。
「試してみるか！？」
「いいだろう……」
セツはその手に持つ剣を逆手に持ち替え、自らの腕に添える。
「闇のゲーム……スタートだ」
添えられた剣は変形し、セツの腕にデュエルディスクとして装着される。同時に広がった黒炎が、俺たちの周りを囲みこむ。
「「デュエル！！」」
剣士ＬＰ４０００
セツＬＰ４０００
「先攻はオレだ。ドロー！」
オレは手札を確認する。よし。悪くない。
「オレはモンスターを一体守備表示でセット。カードを二枚セットしてターンエンドだ！」
「俺のターン、ドロー……フッ」
セツはカードをドローし、オレのフィールドを確認して意味あり

気な笑みを見せる。
「……なんだ？」
「いや、お前はやはり、馬鹿ではないなと思っただけだ」
「どういう意味だ」
「きちんと対策を練って来ている。この短い間に大したものだ」
「っ……！」
動揺が表に出ないよう、必死で平静を保つ。だが、それも無意味だったかもしれない。セツの目と口調は、明らかにそれを確信したものだったから。
「お前……」
「下手に誤魔化すなよ。程度が知れる」
「……お前がどう思うかは勝手だけどな。お前の言う“対策”って奴が、正しいものかはわからないぜ」
「だろうな。だが、ほぼ確信はしている」
「そうかい。なら、どうするんだ？」
アイツがオレの戦略を読み切っているんだとすれば、Ｓｉｎアルカナは出せない。だが、Ｓｉｎアルカナ抜きの総力戦なら、勝ちの目はある。
「残念だが……お前の目論見は外れる」
「どうだかな。お前の読みが、どれだけ正しいかはわからねえぞ」
「ふっ……直情的な賢者ほど、御しやすいものはない、ということだ」
「……なんだと？」
「当ててやろう。お前の伏せカード。一枚は対象を指定しない召喚反応型。もう一枚はフリーチェーンの除去カード。或いはどちらも前者だ」
「……」
「だんまりか？　まあ、いい。ついでにもう一つ。守備モンスターは戦闘耐性持ちだ」
「っ……！」

オレは、身体に震えが走るのを感じた。
――恐怖。
ここまで明確に、強く感じたのは、後にも先にもこの時だけだった。それほどに、オレは目の前の男に強い恐怖を感じた。
「お前は……馬鹿ではない。だが、愚かだ。確か俺は、そう言った筈だ」
オレは、セットされた『翻弄するエルフの剣士』を見る。何故……!?
「お前たちは、俺の大罪（Ｓｉｎ）に拘り過ぎている」
セツの目には、傲慢に相応しい、強い嘲りの色が浮かんでいた。
「何時、誰が、Ｓｉｎを使うと言った？　Ｓｉｎが切り札であると、一体誰が言ったんだ？」
セツはその場から動いていない。それなのに、オレはセツがゆっくりと近づいてきているような錯覚に陥った。
「あんなものは、俺の手札の一つに過ぎない」
プレッシャーというものが、殺気というものが何なのか、オレは初めて味わった。
「お前たちの前で、態々俺は、手札を晒してやったんだ」
「お前は……セツ、なのか……？」
わかりきったことを、オレは尋ねた。尋ねなければ、いけなかった。
「俺は……傲慢（プライド）のセツだ」
オレは思わず身構えた。
「身構えることに意味はない。お前のターンは終了している。今は……俺のターンだ」
セツはその手から一枚のカードを抜き出し、デュエルディスクにセットした。
「俺は永続魔法『悪夢の拷問部屋』を発動。効果ダメージが発生した時、相手に追加で３００ポイントのダメージを与える」
「バーンカードだと！？」

全く予想外のカードに、オレは驚愕する。
「Ｓｉｎアルカナは強力だ。だが、その特性上戦闘耐性を持ったモンスターを突破し辛い……そうだろう？」
「くっ！？」
確かに、そのことはオレも対策の一つとして考えていた。例え圧倒的な制圧力があろうと、壁を突破されなければ勝てる、と。
「更に、俺は魔法カード『デス・メテオ』を発動。相手ライフに１０００ポイントのダメージを与える」
「っ！？」
オレは上空から迫る巨大な隕石を見上げる。まさか……。
「天の嘆きを受けるといい。闇のゲームに於ける１０００ポイントがどれほどのものか……知るといい」
「ぐ……あああああああああああああっ！？」
剣士ＬＰ３０００
「がっ！？　がはっ……！　ぐ……あ、ちぃ……」
「追加だ。『悪夢の拷問部屋』の効果により、３００ポイントのダメージ」
「がああっ！？」
剣士ＬＰ２７００
「これも喰らえ。魔法カード『火炎地獄』俺のライフに５００ポイント、お前のライフに１０００ポイントのダメージを与える……ぐっ！」
「あああああああああああああああっ！？」
セツＬＰ３５００
剣士ＬＰ１７００
「追加で３００ダメージだ」
「っ……！」
剣士ＬＰ１４００
最早声を出すことも出来ずに膝を着く。一瞬、意識が飛んだ。皮肉なことだが、追加ダメージがなければ気を失っていただろう。

「耐えたか。一度に１０００ポイントクラスの攻撃を間髪入れずに二度、直接受けたんだ。ライフの有無に関わらず、死んでいても不思議ではなかったんだが」

『貴様……セツ！　本気で剣士を殺そうとしたな！？』

「何度もそう言っていた筈だ。それとも、俺の言葉をただの脅しとでも考えていたのか？　おめでたいな」

『くっ……！』

「俺はモンスターを一体セット。カードを二枚セットしてターンエンドだ」

「……」

『剣士！？　しっかりしろ！　剣士！』

「……ぅ」

尽きかけた戦意。途切れそうな意識。体中に走る激痛。その中で、オレは最後に見た正気のセツを思い出す。

（アイツは……こんな痛みを喰らったのか）

恐らくは……セツは負けた。あの様子を見る限り、闇のゲームであったことは間違いない。だとすれば、アイツは累計４０００以上のダメージを受け、倒れた筈だ。

（そりゃ……記憶も失うな）

アイツは……何を想って負けたのだろうか。勝たなければ。絶対に勝つ。その想いが打ち砕かれ、事前の対策が無に帰して。全身に絶え間ない激痛が走るその中で。

（ああ……そうか）

唐突に、理解した。

（後を、託したんだ）

オレたちに。オレたちなら、きっと勝てると。笑顔で負けたんだ。迫りくる死に、絶望に負けず、オレたちを信じて負けたんだ。

「っ……！」

そう気付いた時、オレは顔を上げた。

（セツ……すまねえな）

オレじゃ、お前に勝てなかった。
「だけど……っ！」
他の奴らが、お前を絶対止めるから。
「オレの……！」
だから、オレも……。
「タァァッン！」
絶望だけは、しないからよ。
「リバースカードオープン。『仕込みマシンガン』」
「っ……！」
「相手フィールドと手札の枚数×２００ポイントのダメージを与える。お前の手札とフィールドのカード合計は七枚。よって１４００ポイントのダメージを与える」
「オレ、は……チェーン、してリバース、オープン。『サンダー・ブレイク』……！」
諦めねえ。例え結末が変わらないとしても、最後まで足掻く。それは……。
「オレは、手札を一枚捨てて……セットされた『激流葬』を破壊する……」
オレの、意地だ！
「……チェーンの逆処理で、『サンダー・ブレイク』の効果が先に発動するな。手札とフィールドのカードが一枚ずつ減ったため、ダメージは１０００。『悪夢の拷問部屋』の効果と合わせても……１３００か」
ジャキン、とオレに向けてマシンガンの銃口が向けられる。
「……放て」
「がっ……ぐあああああああああああああっ！」
剣士ＬＰ１００
「無駄なことを……今のお前は、お前たちの行動そのものだな」
「……」
「無駄な足掻き……長引かせているだけだ。痛みを、苦しみを……

悲しみを。眠ればいいものを、避け得ぬ終焉に向かって、ただ苦痛のみを重ねている」

「避け、たいから」

オレ口は、もう何も考えられなくなっている頭から出る言葉ではなく、ただ想いを紡ぐ。

「避け得ぬ終焉……運命を、覆したいから……戦う」

「覆せない。想いだけでは、何も変わらない」

「例え……覆せないとしても」

想いだけでは、変えられなくても。

「戦う……っ！」

オレは手札からカードを抜き出し、デュエルディスクにセットした。

「セット、された『翻弄するエルフの剣士』を……攻撃表示に変更……！」

例え、これが無駄な足掻きでも。

「『鉄の騎士　ギア・フリード』を召喚！」

敗北を、アイツが情けで遅らせているだけだとしても。

『剣士……っ！』

「更に、魔法カード『拘束解除』……ネイキッド……！」

『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』ＡＴＫ２６００

「オレ、は……ネイキッドに『融合武器ムラサメブレード』を、装備……効果により、モンスターを破壊する……！」

諦めて……溜まるか！

ネイキッドの剣圧はセットされた『マシュマロン』を一刀両断にする。

『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』ＡＴＫ３４００

「バトル……っ！」

これが、通れば……！

「そろそろ……いいか？」

「っ！」

「トラップ発動。『ファイアーダーツ』俺の手札がゼロ枚の時、サイコロを三回振って、出た目の合計×１００ポイントのダメージを与える」
「……」
そうか。
「ダイスロール……６」
オレには、無理だったか。
「二回目……６」
無情にも、セツの周りに炎の弾丸が装填されて行く。
「三回目……６。６６６、合計値は１８００。皮肉だな。まさか最大ダメージが出るとは……」
フル装填された炎の弾丸が、オレに照準を合わせる。
「セ、ツ……」
「命乞いを聞く気はない。そろそろ……死ね」
全てが、スローモーションに感じる。脳裏に浮かぶ、今までの日々。そうか。これが、走馬灯か。
「オレ、は……ここまでだ」
過ぎ去って行く走馬灯。その中に、見たことのない筈の、泣き顔。
「っ……！」
オレは、知らない。アイツが泣いているところを、見たことなんてない。なのに。
「凛……っ！」
泣いていた。走馬灯の中のアイツは、笑っている筈なのに。
「死にたく、ない……っ！」
お前が……。
「お前が……っ泣くから……！」
例え、勝てなくても。勝利の可能性は尽きたとしても。
「泣かせない……！」
生への望みだけは、潰えさせない……！
「あ、あああああああああああああっ！」

「……穿て。『ファイアーダーツ』」
そして、オレの意識は闇に沈んだ。

「……ネイキッド」
「……ぐっ」
俺は、目の前で炎の楔に身を焼かれ、それでも尚立つ精霊に目を向けた。
「何故、邪魔をした」
「我は……騎士だぞ」
精霊――ネイキッドは苦痛に歪む頬に、それでも誇り高く俺の前に立ち塞がる。
「主を守るのは、当たり前であろう？」
ズキッ……！
頭の中で、なにかが痛んだ。
「デュエルに於いて発生するダメージを肩代わりするなど、精霊と知ってのルールに反する。それだけでも存在の根幹に関わるダメージを負う筈だ。その上に、肩代わりしたダメージは１８００……お前、死ぬぞ？」
「……」
ボロボロになったその姿。だが、ネイキッドは笑顔を浮かべる。
「死なぬよ。我の筋肉は、そう薄くない」
そう言う問題ではない。そう言いかけて、やめる。無意味だ。
「それも無駄な足掻きだぞ。ルールだ。俺は、闇のゲームに負けたそいつを殺す。デュエルに負けたそいつの命は奪う」
「させん。我が剣と筋肉に懸けて」
「お前も死ぬ。憤怒も、その傷ではどの道死ぬ」
「助けて見せよう。我が誇りと信念に懸けて」
ズキンッ……！

「っ……！」
自らのマスターを、命を賭して守るその姿に、俺は何故か……酷く、頭が痛む。
「……勝手にしろ」
俺はネイキッドに背を向けた。
「見逃して、くれるのか？」
「……死まで、そう遠くない。精々、最後まで苦しみ抜くことだ」
「誰も……殺せぬさ」
ピクッ……。
「セツよ……お前には、誰も殺せぬ」
「殺す。殺せる」
「殺せぬ。お前は絶対、我らの誰も殺せはせん……」
「……死に損ないが。好きに言ってろ」
心と頭に不愉快な痛みを残しつつ、俺はその場を後にした。

「……死に損ないが。好きに言ってろ」
そう言って、セツは我の前から姿を消した。
「……ぐっ、ふっ」
我は倒れこみそうになるのを、必死で耐えた。ここで倒れれば、剣士は助からん。
「そう……殺せぬ。殺させは……せん」
剣士を抱える。満身創痍。死にかけの剣士は、酷く、重たい。
「ぐ……っ」
筋肉に、力が入らない。剣士の重みを、身体が支えきれない。
「だが……っ！」
無理を通す。死なせないため。殺させないために。
「お、おおお……」
一歩一歩。進んで行く。亀のように鈍い歩み。だが、止まるわけ

にはいかない。
「っ……動け、我が身体……我が、筋肉よ……！　我が主を、守るのだ……！」
我の目に、光が映る。夜闇の中に、一際輝く銀の髪。我が求めてやまぬ、愛しき女神。遥か遠く、城の窓辺に映るその銀に、我は最後の力を振り絞る。
「る……！」
声にならない声を、無理矢理絞り出す。今だけでいい。今だけでいいから……声を！
「ルイン殿ぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！」
最後の叫びに、ルイン殿が反応したことを確認した瞬間、我の意識も、そのまま闇に落ちて行くのだった。

第四期第二十一話「お前が泣くから」（後書き）

こんにちは。

というわけで、セツのフルバーンにて、剣士敗北。ネイキッド含めどうなったかは次回。セツのデッキについての話も次回。

ちなみに、次回はかなり長くなりそうだと自己判断されております。普段から短めに見るタイプの悠でさえ、長くなりそうだと感じております。もしかしたら次回のデュエルは前後編になるかも。それくらい。

それでは、悠でした！

第四期第二十二話「俺の勝ちだ」（前書き）

こんにちは。めっちゃスランプ状態な悠です。おかしい。先の展開は大体決まっているはずなのに、何故か書けない。決まってなくて書けないことは良くありますが、何を書くか決まっているのに満足の行く文章が書けないとキツイですね。とりあえず、結局前後編になりました。若干上手く書けた自信がありませんが、どうぞ。

第四期第二十二話「俺の勝ちだ」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第二十二話「俺の勝ちだ」

城の医務室。ルインによって運び込まれた剣士さんとネイキッドの治療が、二日経った今も尚行われている。
さだめたちはしっかり見てはいないけど、ルインの様子を見る限り相当ヤバそうだ。
「剣士さん……」
凛などは先ほどから顔を真っ青にして震えている。報告を聞いた時は気を失ったけど、今のところ涙は見せていない。尤も、それも時間の問題だろうけど。……どちらにしても。
「それにしても……フルバーン、かぁ」
剣士さんたちの傷を見て、ルインが判断したのはバーンカードによる直接攻撃、だった。
「フルバーンを相手取るのは厳しいな……。さだめ、セツの奴は、昔からフルバーンを使用していたのか？」
エースの質問に、軽く頷いて答える。
「まあね。こっちの世界に来るまでは、フルバーンを結構多用してたよ」
「なるほど……セツ様の記憶が失われている現在、元の戦法をメインに使ってきたということですわね」
「それだけじゃない。多分お兄ちゃんのデッキは、Ｓｉｎもバーン

も入った混合デッキ。正確にはフルバーンじゃなくて変則ビートバーンだと思う」

これはさだめの推測。けど、強ち間違いじゃないとは思う。

「何故そう思う？」

「お兄ちゃんのＳｉｎには、必須カードが少ないの。ロイヤルジョーカーのための手札補充くらい。そして手札補充は、フルバーンのコンセプトにも合ってるから……」

「……アルカナをメインにする時は、バーンカードをコストに使うか。なるほどな」

「なら、彼を相手にする場合、Ｓｉｎとバーン両方に警戒しなくてはいけないのね」

エリアの言葉に、さだめは力なく首を振る。

「どうだか。お兄ちゃん、そんな単純な人じゃないよ」

それくらいの予測は誰でも立てられる。誰でも立てられる予測を、お兄ちゃんが予測してないとは思えない。

「……つまり、全くわからんということだな」

「さだめはお兄ちゃんほど頭良くないしね」

メタデッキを構築する腕ならさだめの方が上だと思う。けど、そもそもの戦術眼というか、相手を見極め、相手に応じた柔軟なプレイングという点で、さだめはお兄ちゃんに大きく劣っている自覚がある。

「だから、正直な話、下手にメタを張るより自分にとっての最高のデッキで、状況に応じて臨機応変に戦うしかないよ」

「……つまり、ぶっつけ本番なるようになれ、か……クレイジーだな」

ガチャ。

その時、医務室のドアが開いてアテナが顔を出す。

「治療、終わりました」

「アテナ！　剣士さん、剣士さんはどうだったの！？」

案の定、といったところか。凛が真っ先に反応してアテナに詰め

寄った。
「お、落ち着いてください凛さん。い、一応峠は越えました」
峠は越えた。その言葉に安心したのか、凛はほ～っと大きく溜息を吐いてその場にペタンと座り込んだ。堪え切れなかった涙がその頬を伝う。
「よかった……剣士さん」
「アテナ、一応って？」
さだめがアテナに引っ掛かったところを尋ねると、凛もピクッと反応して顔を上げる。
「……意識不明です。とりあえず、峠は越しましたが……意識が戻るまでは、予断を許しません」
「そんな……」
「ネイキッドはどうだ？　奴も相当な重症だろう」
「そちらも……いえ、ネイキッドさんに関しては、まだ何とも言えません。デュエルのダメージは兎も角……デュエル中にデュエリストのダメージを肩代わりした、所謂“ルール違反”のダメージの方が大きくて……こちらは、単純な傷とは違います。希冴姫さんなら、わかりますよね？」
「……ええ」
厳しい顔つきの希冴姫さんが頷く。なんでも、デュエル中に実体化するのは精霊としてはタブーらしく、そのルールを犯すと魂レベルでダメージを受けるらしい。
「ですが、不幸中の幸いと言いますか……ダメージが現実のものとなる闇のゲーム中だったため、実体化のルール違反についてもダメージが軽減されています」
なんでも、元々ダメージを与える時に実体化する闇のゲーム内だったからこそ、実体化のリスクが軽かったらしい。これは、本当に不幸中の幸いだ。
「ネイキッドさんはまだ面会謝絶です。剣士さんも……本当はそうなんですが……」

そこまで言って、アテナは凛の顔を真剣に見つめる。
「凛さん」
「う、うん」
「何かあれば、すぐに私たちに連絡してください。すぐ近くに居るようにします」
「わ、わかった。約束する」
「では、どうぞ」
アテナが道を開けると、凛はすぐさまドアを開けて医務室の中に入っていった。

「剣士さん……」
私は剣士さんの眠るベッドに近づく。そこには、全身に包帯を巻いて眠る剣士さんの姿。どれだけのダメージだったのか、想像することも出来ない。アテナたちが言うには、ダメージが大きすぎて、傷が癒えても目を覚ますには時間がかかるみたい。
「その男が大切か？」
ふいに、背後からそう声をかけられた。
「……ええ。例え友達の想い人だとしても、ちょっと許せないくらいには」
声をかけられたことに、僅かに動揺する。けど、それよりも「ああやっぱり」という感じが強いのと、なによりも強い憤りが、暴れ出しそうな心臓を抑えつけた。
「そうか……なら、言葉は要らないな」
ジャキンッ、と背後でデュエルディスクを展開させたらしき音。
先輩が、剣士さんにトドメを刺しにきたのか、それとも最初から私を狙っていたのかは知らない。
「でも……」
カシャン、と私のデュエルディスクも展開させる。

「絶対、負けるもんか」
剣士さんの、ためにも。
「「デュエル」」
凛ＬＰ４０００
セツＬＰ４０００
「私の先攻。ドロー！」
先輩の表情は、闇に隠されて見えない。私は手札を確認し、私なりに立てた戦略を実行に移す。
「私は『リチュア・アビス』を守備表示で召喚。効果によりデッキから守備力１０００以下のリチュア……『イビリチュア・ガストクラーケ』を手札に加えます」
『リチュア・アビス』ＤＥＦ５００
「リチュアか……」
先輩は言葉少なに私のデッキを分析する。
「私は手札から儀式魔法『リチュアの儀水鏡』の効果を発動！　手札の『シャドウ・リチュア』を、その効果により６レベル分のリリースとし、『イビリチュア・ガストクラーケ』を儀式召喚！」
『イビリチュア・ガストクラーケ』ＡＴＫ２４００
「そして儀式召喚された『イビリチュア・ガストクラーケ』の効果発動！　相手の手札をランダムに二枚まで選択して確認し、その中から一枚をデッキに戻します！」
「む……」
ピーピングとハンデス効果。割と嫌がられる戦法だけど、さだめなんかはむしろ推奨してくれた。相手のデッキと戦術を見破るのには持ってこいだって。
案の定、先輩は苦々しげに口元を歪めると私が指定した二枚を見せてくる。『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』と『デス・メテオ』……やっぱり、混合デッキ。
「私は『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』を選択します」
「……良いだろう」

よし。とりあえずこれで、先輩のＳｉｎは封じた。あとはバーン戦術だけど……。

「私はカードを一枚セット。ターンエンドです」

「俺のターン、ドロー」

先輩がドローした瞬間、私はすかさず動く。

「リバースカードオープン！『水霊術―「葵」』！　私は『リチュア・アビス』をリリースして発動します！　エリア、お願い！」

『任せなさい』

「っ……」

先輩がまた苦しい表情をする。やっぱり、手札を奪っていけば勝機はある！

「『水霊術―「葵」』の効果です。手札を確認して、その内一枚を墓地に送ります」

先輩がオープンしたのは『デス・メテオ』『手札抹殺』『聖なるバリアーミラーフォース―』『テラ・フォーミング』『ファイヤー・トルーパー』の五枚。

「……」

厳しい……。手札を減らすことを考えれば、それほど痛くない『手札抹殺』は無視出来る。『テラ・フォーミング』もＳｉｎがいないことを考えれば除外していい。問題はバーンカードとミラーフォース。現状ミラーフォースを破壊できるカードは手札にないし、かと言って１０００ポイントダメージを二回受けるのはフルバーン相手には苦しい。

「……私は『デス・メテオ』を選択します」

「わかった」

迷ったけど、結局選んだのは『デス・メテオ』。正直『ファイヤー・トルーパー』と比較してどちらがどうとも言えなかったけど、どうせなら再利用し難い魔法カードを墓地に送っておく。なにより『デス・メテオ』は序盤以外の発動は難しい。

「……なら俺は『ファイヤー・トルーパー』を召喚し、効果を発動。

墓地に送ることで１０００ポイントのダメージを受けて貰う」
「っ……！」
来るっ！　私は身を縮めてダメージに備える。
「っっっ！？　あっ、あああああああああああああっ！？」
凛ＬＰ３０００
炎の兵隊の特攻は、私の身体を容赦なく焼き焦がした。凄まじいダメージ。こんなダメージを２０００ポイントも受けていたら……そう考えてぞっとする。剣士さんは、こんなダメージを……。
「っ……ぅくっ！」
『凛、大丈夫？』
「な、なん……とか」
心配そうなエリアに引き攣った笑みを見せる。けど、正直甘く見てた。
「これが……闇のゲームのバーンダメージ……」
「洗礼だ。そこで寝ている男は、少なくとも合計で３９００のダメージを受けた」
「っ……！？」
これの……ほぼ四倍。想像を絶する。
「俺はカードを二枚セット。ターンを終了する」
「わ、たしのターン、ドロー！」
引いたカードは除去カードじゃない。伏せカード二枚の内、一枚は確実にミラーフォース。もう一枚は……どちらかはわからないけど、ブラフ。どっちにしても除去手段がないんじゃ見に徹するしかない。
「私は手札から魔法カード『サルベージ』を発動……墓地から『リチュア・アビス』と『シャドウ・リチュア』を手札に戻し、『リチュア・アビス』を召喚。効果によりデッキから『シャドウ・リチュア』を手札に加えます」
とりあえず、手札は補充出来た。でも、他に出来ることはない。
「……ターンエンドです」

「……そうか。なら俺のターンだ。ドロー。俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ」

あっさりとしたエンド宣言。引いたカードを元あった手札とシャッフルし、一枚セットして、先輩はターンを終えた。

「私のターン、ドロー！」

よし、『サイクロン』だ。これで、カードを一枚破壊出来る。でも……。私はちらりと先輩の魔法・罠ゾーンを見る。

候補は三枚。けど、今伏せたカードは可能性が低い。一応シャッフルしてから伏せていたから、ドローしたカードを伏せたのかはわからない。でも、違うとすればさっきは無防備で私のターンを迎えたことになる。それは、流石に考えにくい。とすれば……。

「どうした。何を悩んでいる」

「っ……別に、何でもないです」

仕掛けようとした絶妙のタイミングで声をかけられ、私は動揺した。そして、ふと気付いた。先輩が、真っ正直なプレイングをするとは思えない。敢えて無防備なまま、ブラフしか伏せずにエンドを迎え、次のターンに改めてミラーフォースを伏せる……それくらいはやりかねない。綱渡りだけど、やってやれないことじゃない。

「……くっ」

おかしい。どんなふうに考えても、思考が誘導されているようにしか思えない。手札を見たのは私の筈なのに、たった一声かけられただけで、考えが定まらない。

心が見透かされているような不快感が、汗となって私の頬を伝う。

「わ……私は手札から速攻魔法『サイクロン』を発動。真ん中の……最初に伏せたカードを破壊します！」

惑わされちゃダメ。先輩の言葉は、最初の二枚の内どちらかを守るための誘導！　最初に考えた通りに破壊する！

「……ふっ」

「っ！？」

先輩が、ニヤリと嗤った。破壊されたカードは……『手札抹殺』。

「一番つまらんカードを引き当てたな。これが心理誘導だ。ピーピングをするなら少しくらいは嫌らしくなれ」
はめられた。つまりは、単純なこと。ワザと動揺させて、私の視野を狭めてきた。そのまま『サイクロン』を撃たれれば、どれが破壊させるかわからなかったから。
「……わ、私はターンエンドです」
「俺のターン、ドロー」
マズイ……折角の『サイクロン』を活用出来なかっただけじゃなく、先輩に猶予を与えてしまった。
「ふむ。俺はモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンドだ」
「私のターン、ドロー……」
そうこうしている内に壁モンスターも召喚されてしまう。このままじゃ、先輩にバーンカードが揃うのも時間の問題。こんなことなら……。
「お前は、一つミスをしたな」
「っ！？」
またしても、心を読んだかのようなタイミングで声をかけられる。しかも、ミスの指摘、という形で。
「最初に攻撃しなかったのが何よりのミスだ。あのときなら、例えガストクラーケを倒されていても挽回は楽に出来た。いや、ガストクラーケの効果がもう一度使えると考えれば、得をするくらいだ」
ギリッ、と歯を噛みしめる。本当に、その通りだった。
「お前の敗因は、リチュアを使いなれていなかったことだな」
確かに、私はリチュアを使いなれてはいない。さだめたちと、何度かテストデュエルをしただけだ。
「……まだ、負けてはいません」
そう。まだ負けてない。確かにミスはミスだ。けど、致命的じゃない。
「私はガストクラーケで守備モンスターを攻撃！」
失敗は取り返せばいいだけ！

「……どこまでも素直だな。お前は」
「!?」
「俺のリバースモンスターは『デス・コアラ』……お前の手札一枚につき、４００ポイントのダメージを与える。お前の手札は五枚。さあ……２０００ポイントのダメージを纏めて喰らって生きていられるか……見物だな」
「あ……」
衝撃が、迫る。１０００ポイントのダメージでも、意識が飛びそうになるほどなのに、その倍のダメージ……？
「あ、あ……あああああああああああああああっ!?」
『凛っ！』
『凛さん！』
凛ＬＰ１０００
意識が保てない。身体を突き抜けた衝撃は、１０００ポイントの比じゃなくて……エリアたちの悲鳴のような声を、何処か遠くに感じて……私の意識は闇に落ちた。

『凛！　凛目を覚まして！　凛ッ！』
『凛さん！』
「……」
倒れ伏した少女に、二人の精霊が必死に声をかけている……が、無駄だろう。それなりに鍛えられた男の剣士ですら、１０００ポイントのダメージで瀕死になるレベルのバーンダメージを、一度に２０００受けたんだ。華奢な少女の身体では受け止めきれない。
「……決まりだな」
まだ、凛のライフは残っている。だが、これで終わりだ。

「デュエリスト、デュエル続行不可能……いや」

どうだ。見ろネイキッド。

「対戦者死亡につき……」

俺は、殺せたぞ。

「俺の勝ちだ」

第四期第二十二話「俺の勝ちだ」（後書き）

こんにちは。

さて……あまり色々は言わないでおきましょうか。次回を待て、ということで。それはともかくリチュア。強いです。ガストクラーケとか何アレ酷い。あれって現環境だとあそこから更に、フィッシュボーグガンナー辺りとシンクロしてトリシュだのグングだの出てくるんですから笑えません本当に。マインドクラッシュとか葬とか織り交ぜたハンデスリチュアとか、普通に作れそうですよ。特に、リチュアは召喚後はほぼバニラなので葬の弾には事欠きません。ガストクラーケで手札を荒らし、ソウルオーガでフィールドを制圧し、マインドオーガスで墓地を封殺し、トリシューラで絶望しますよ。いや、割とマジで。ゼアルのメインキャラが水属性使いですし、水属性大好き悠からしてみれば水属性の大幅強化に期待が高まります。

それでは、悠でした！

第四期第二十三話「もう、やめろ」（前書き）

こんにちは。

滅茶苦茶お待たせしてしまい、申し訳ありません（汗）。スランプ継続中でございます……。この話も、能動的に全消しすること三回以上……細かな修正まで含めたら何十回と手直しし、やりすぎてぐちゃぐちゃになったから結局全消しし、と滅茶苦茶に難産でした。それと、若干前回のデュエルを修正しました。時間も経って忘れていると思われるほど小さな、しかし無視できない修正箇所ですので、記憶の補完的な意味でも前話を見直しして頂くことを推奨します。

ホント、すみません。

第四期第二十三話「もう、やめろ」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第二十三話「もう、やめろ」

「デュエル続行不可能……いや、対戦者死亡につき、俺の勝ちだ」
俺の言葉に、少女は動かない。微動だにしないその身体には、既に生命の息吹を感じなかった。
「呼吸はない。心臓も……ああ、止まったな。終わりだ」
自慢じゃないが、俺は目も耳もいい。心臓の鼓動や息遣い程度は多少離れていても聞き取れる。
――だから、それはあり得ない筈だった。
「……ぅ」
「っ」
『凛っ！』
背を向けて、今にも去ろうとしていた俺は、背後から聞こえたその声に、信じられないと思いつつも振り向いた。
「っ……！？」
あろうことか、その声の主は立ち上がろうとしていた。あり得ない。例え奇跡的に蘇生したとしても、一度心臓と呼吸が止まった娘が、すぐに意識を取り戻して立ち上がるなど。
「馬鹿な……」
「っ……っふ」
「なんだ……？」

様子がおかしい。いや、おかしいと言えば立ち上がること自体が不自然だが、それよりも。

「くふっ……くふふふ」

嗤っている。どうにも堪え切れない。そんな様子で。

「くふふふっ！　くふっ」

不気味。その一言に尽きる。死にかけて狂ったか。そう思わなくもないが、それよりも納得できそうな理由に今、気がついた。

「まさか……死して覚醒したのか？　終焉としての己に……」

凛の腹部が、ドクン、ドクンと不気味に脈動していた。まるで、動かぬ心臓の代わりと言わんばかりに。

思い返せば、わからない話ではない。死に瀕して蘇生した人間が、特殊能力を得ること自体も在り得る話だし、そもそも俺たちは終焉。元より特殊だ。俺だって、一度死にかけたからこそこうして記憶を失い、ここにいるのだ。……そして、エンヴィーも。

「ア、あぁァあぁアあぁァあぁァっ！！」

『凛っ！？　凛っ！』

『凛さん！　どうしたんですか！？』

彼女の精霊が声をかけているが、恐らくは無駄だろう。今の凛は意識もなく、ただ終焉……暴食（グラトニー）としての本能に支配されている、一種の暴走状態だ。

「……デュエルは、続行だな」

「くふっ」

俺がそう言った瞬間、凛は笑いながら手札から魔法を行使した。

「手札から魔法カード『強欲なウツボ』。手札の水属性モンスター二体をデッキに戻し、三枚ドローする！」

手札交換、か。手札が悪いのかそれとも気に入らない手札だったのか……いずれにせよ、利用させてもらう。

「リバースカードオープン。トラップカード『逆転の明札』！　相手がドローフェイズ以外でカードを手札に加えた場合、相手の手札と同じ枚数になるようにデッキからカードをドローする。お前の手

札は五枚。俺の手札は一枚だから、デッキからカードを四枚ドロー」
　流石に、ハンデスによる弾の不足は無視できない。が、逆を言えば弾さえ確保してしまえば残り１０００しかないライフを削ることなど容易い。
「カードを二枚セットしてターンエンド……くふっ」
　異様な雰囲気のまま、凛はターンを終了した。さて……この手札なら、このターンで終わりか。
「俺のターン、ドロー」
「リバースカードオープン。『リチュア・アビス』をリリースして、トラップカード『水霊術―「葵」』を発動。手札を見せて」
「……いいだろう」
　また手札を晒すことになるとはな。コイツのデッキ、相当底意地の悪い覗き魔の変態の手が加わっているな。

「へっくしゅっ！」↑相当底意地の悪い覗き魔の変態。
「うォっ!?　どうしたンだ？」
「いや、今お兄ちゃんがさだめのことを噂していたような……」
「……噂されていることはおろか、個人まで特定できンのかオマエは」
「お兄ちゃん限定で」

　……今、ヘンなヴィジョンが見えたような。兎も角、俺は凛に手札を晒す。どうせ焼け石に水。一枚程度捨てられた所でどうにかなる手札じゃない。俺は手札の『火炎地獄』二枚と『ファイヤー・トルーパー』『御隠居の猛毒薬』『マシュマロン』『テラ・フォーミング』の六枚。六枚中四枚が１０００ポイントダメージ。更に内三

枚は即効カード。一枚くらいであれば何の問題もない。
「……『ファイヤー・トルーパー』を選択」
「良いだろう」
どちらにせよ、意味などない。これで……。
「俺は「更にトラップ発動。『マインドクラッシュ』」なに？」
俺の手札から二枚の『火炎地獄』が叩き落とされる。ちぃ……。
「……そういうことか。暴食（グラトニー）」
簡単な話だった。暴食（グラトニー）は、暴食（グラトニー）らしく俺の手札を貪った。ただ、それだけのこと。
「そうだとしても、気に食わないことには変わらないな」
結局、即効カードは全て叩き落とされ、出来ることと言えば猛毒薬で８００ダメージを与えることくらいか。
「……俺は速攻魔法『御隠居の猛毒薬』を発動。相手ライフに８００ポイントのダメージを与える」
凛ＬＰ２００
「っ……くふふっ」
凛は一瞬顔を顰めるも、すぐに元の不気味な笑みに戻る。
「暴食（グラトニー）に毒は効かんか」
勿論、ライフは減っている。が、俺の本来の目的である殺害には程遠い。終焉に覚醒した際に、与えてあったダメージからは回復してしまったようだし……面倒だ。
「俺はモンスターを守備表示でセット。カードをセットし、ターンエンドだ」
伏せたのは『マシュマロン』と『テラ・フォーミング』。そんなことは向こうも承知しているだろうが、伏せない手はない。
「はァッ！　はぁ、がぁああッ！」
ドクン、ドクン、ドクンと暴食（グラトニー）の痣が脈打つ。完全に暴走しているようだ。本人の意識や人格が死にかけている以上、当然のことではあるが。
「はァ……っ！　ゥ……ドロー！」

ギラギラとした飢えた獣のような目をしている。
「醜いな……」
所詮は本能……獣同然の大罪でしかない暴食（グラトニー）などこんなものか。
「ギッ！？　ぐゥ……『リチュア・ビースト』を、召喚……効果発動」
『リチュア・ビースト』ＡＴＫ１５００
凛……いや、もう暴食（グラトニー）か。暴食（グラトニー）のフィールドに、立派な水かきをもった異形の獣が現れる。全く、今の暴食（グラトニー）に相応しい怪物（モンスター）だ。
「ビーストの……召喚に成功した時、墓地からレベル４以下のリチュアを蘇生する。『リチュア・アビス』を蘇生……効果発動」
『リチュア・アビス』ＤＥＦ５００
「またソイツか……」
若干うんざりする。リチュアのエンジンとなっているあのモンスターを止めなければ、良い様にくるくると回されるだろう。が、俺のデッキにそれを成すことの出来るカードはない。
「デッキから『ヴィジョン・リチュア』を手札に加え……効果発動。手札から捨てることで、リチュアと名の付いた儀式モンスターを一体、手札に加える。『イビリチュア・マインドオーガス』を手札に」
サーチカードからサーチカードをサーチする、か。本当に、大した回転力だ。
「手札から『シャドウ・リチュア』を捨ててデッキから『リチュアの儀水鏡』を手札に加え、発動。フィールドの『リチュア・ビースト』と『リチュア・アビス』をリリースして『イビリチュア・マインドオーガス』を儀式召喚」
『イビリチュア・マインドオーガス』ＡＴＫ２５００
ビーストとアビスが儀水鏡の中へと吸い込まれ、半人半魚のモンスターと化す。あの人型は……エリアルか。
『ゥ、うあああああっ！』
『エリアル！』
『だ、大丈夫……凛さんの痛みより、絶対マシだから……ッ』

終焉の力とは大分決別したらしく、エリアルが正気を失うことはない。だが、それでも残る終焉の残滓はエリアルを蝕む。尤も……暴食（グラトニー）がそれを気にするかというと、そんなことはないようだが。

「効果発動。墓地の『サルベージ』『マインドクラッシュ』『水霊術―「葵」』『サイクロン』とそっちの『デス・メテオ』をデッキに戻してシャッフルする」

「なるほど。そう来たか」

『デス・メテオ』は今となっては使い道がない。事故要因を抱え込まされたか。

「だが、それでもお前は攻撃することは出来ない」

『マシュマロン』に攻撃すればそれで終わりだし、そうでなくてもミラーフォースが残っている。攻撃することは出来ないだろう。

「ターン、エンド……」

「俺のターン、ドロー……チッ」

バーンカードではなかった。今となっては『火の粉』ですら倒せるのだが、そう上手くはいかないか。このデッキが本当に純粋なフルバーンであったなら兎も角、特殊な混成ビートバーンではこういうこともある。だが、まあ……。

「どの道、お前に勝ちはない。お前の想うその男と共に、そろそろ眠るといい」

ピクリ、と暴食（グラトニー）が反応した。

「……殺す」

「なに？」

「殺す。アノ人を傷つけた……アナタを殺す……ッ！」

「……ターンエンドだ」

暴走していても尚、本人の持つ一番強い想いにだけは反応するか。それは……共感しなくもないな。

「殺す。殺す……！　あああああああァッ！」

「だが……その想いの強さ故に、暴走がより強まる、か。皮肉だな」

「あァっ！　がぁあッ！　ぅぐっ……がァあっ！」

『凛っ！　落ち着いて凛！　ああもう、どうしてこんな……』
『凛さん……あたしたちの力が足りないばっかりに……ごめんなさい』
「ぐっ……うああアァッ！　許さ、ない……！　アノ人を……剣士さん、を……！　あああああああああッ！」
『『きゃあああああっ!?』』
ズァッ……！　と暴食（グラトニー）を包むオーラが一層凶暴なものに変わる。
あれの精霊だろう二人の少女も、堪らず吹き飛ばされる。
「これは……時間の問題だな」
俺がどうこうするまでもなく、このままならいずれ暴走する力に耐え切れず、暴食（グラトニー）の力は自らを喰らう。そうなれば、待っているのはその身の終焉のみだ。
「案外、俺たちには相応しい末路なのかもしれんが、な」
自らの罪に焼かれるのなら……それが一番良いのかもしれないな。
俺はそう思い……次の瞬間、見えた光景に、目を見開いた。

「ア、ああァああアああアあァあああァっ！！」
熱い……。お腹が燃えてるような感覚。その熱はお腹から全身に回って、今にも燃え尽きそうな、酷い激痛が体中を包んでいる。
「くふっ」
でも……いいかな。燃え尽きちゃっても。それで、剣士さんの仇が取れるなら。剣士さんを傷つけた報いを受けさせられるなら。
「はァッ！　はぁ、がぁああッ！」
視界が霞む。目の前で誰かが何かを言っている。あれ……？　そう言えば私、誰と戦ってたんだっけ……？
「殺す。アノ人を傷つけた……アナタを殺す……ッ！」
そうだ……そんなこと、もう関係ない。
「ぐっ……うああアァッ！　許さ、ない……！　アノ人を……剣士

さん、を……！　あああああああアアアッ！」
私はただ……“敵”を倒すだけ……っ！

「やめろ」

「アア、ァ……？」
ぐっ、と私の腕が誰かに掴まれた。
「もういい。やめろ」
離せ。
「離セ……！」
「お前が……そんなことする必要なんてない」
「離セ……ッ！！」
離せ、離せ、離せ！　私は、倒すんだ。勝つんだ。殺すんだ。私の大切な人を傷つけた……殺そうとした“敵”を……ッ！
「殺すんだ……！　“敵”を……！」
「アイツは、“敵”じゃない。もう、やめろ」
「ウルサイッ！」
「ぐっ！？」
何を言っても離そうとしないその手を、私は“暴食（グラトニー）”のオーラで跳ねのけた。跳ねのけようとした。
「ぐっ……離さねえ」
その傷だらけの、包帯が巻かれ、今のダメージで出来たと思われる新たな傷口から血を滲ませたその腕は、私を離そうとはしなかった。
「だいじょうぶだ……オレは、もう大丈夫だから……目を、覚ませ」
その声は、私が良く知るもので。
「お前がそんなになってまで……頑張る必要は、ねえんだ」
その顔は、私が守りたかったもので。

「だから……もう、やめろ。凛」
その目は、私が焦がれた強い目で。
「剣士……さん？」
その名前は、私が何よりも大切なヒトのもの。
「ああ……おはよう、って言うには、まだ早いか？」
「遅すぎ……です」
「そうか、悪いな。寝坊したちまったらしい」
笑い慣れてない剣士さんの笑顔は、包帯やガーゼの所為で更に不格好なものだったけど。
「無事で……良かった」
「お互い様だ」
凄く、安心出来る笑顔だった。
「……お前たちは」
ふいに、その声が響いた。
「お前たちは、どうして死なない？」
「……決まってんだろ」
困惑した、何処か弱気にも見える先輩に、剣士さんはすっぱりと言い切った。
「まだ、死ねないからだ」
「……うん！」
私も頷く。まだ、死ねない。こんなところで、死んでなんてやれない。だから、死なない。実にわかりやすい、生きる理由だ。
「剣士さん……」
「なんだ？　凛」
「もう少しだけ、支えててくれる？」
剣士さんの体温が伝わって、凄く心地良い。今なら、何でも出来そうなくらいに。
「……ああ。アテナたちにゃ悪いが、あの馬鹿の目を、オレたちで覚ましてやろうぜ」
「……うんっ！」

私は、デッキに手をかける。私の手札は、『シャドウ・リチュア』と『リチュアの儀水鏡』の二枚。これじゃ、勝てない。

「ッドロー！」

このカードに……賭けるしかない！

「私は『リチュア・ディバイナー』を召喚！」

『リチュア・ディバイナー』ＡＴＫ１２００

「『リチュア・ディバイナー』の効果発動！　一ターンに一度、カード名を宣言して、デッキの一番上のカードをめくる。そのカードが宣言されたカードだった場合、手札に加えることが出来る！」

「……正気か？　デッキトップの操作もせずに、当てられるとでも？」

「当たるよ」

私は確信を持って言った。剣士さんと目を合わせ、コクリと頷く。

「ううん。違う。当たるんじゃない。当てるんだ！」

脳裏に思い浮かべるのは、ずっと昔から、私を守って、支えてきてくれたその姿。私の名前のように、凛とした佇まいで、私に勇気をくれたエリアの姿。

「エリア……私に、力を貸して？」

『当たり前でしょう？　ふふ。やっちゃいなさい。凛』

「うん！　私が宣言するのは……『リチュアルクィーン・エル・アリア』！」

ビッ、と私は力強くデッキからカードをドローした。私が思う、最強のカード。私の切り札。私の……力！

「私がドローしたのは『リチュアルクィーン・エル・アリア』！　よって手札に加える！」

「馬鹿な……！？　本当に……？」

『良くやったわ。凛』

『あたし、見つけられた気がします。邪悪（イビル）を超えた、リチュアの本当の力』

「うん。行こう！　私は手札から儀式魔法『リチュアの儀水鏡』の

効果を発動！　手札の『シャドウ・リチュア』をレベル分のリリースとして、儀式モンスター『リチュアルクィーン・エル・アリア』を儀式召喚！」

エリアが、儀水鏡をその胸に抱く。光が放たれ、その光の中からは、いつもよりずっと成長したエリアが、その手にエリアルと同じリチュアの杖を掲げている。

『リチュアルクィーン・エル・アリア』ＡＴＫ２８００

「なんだ、ソイツは……っ！？」

「『リチュアルクィーン・エル・アリア』は、リチュアの持つ暗黒面を聖なる力へと転化させた女王……その効果は、イビリチュアを力に変える！　効果発動！　フィールド上の『リチュアルクィーン・エル・アリア』以外のリチュアと名の付いた儀式モンスター一体をリリースする度に、相手の手札・フィールド・墓地のいずれかからカードを一枚選択して、デッキに戻す！」

「なにっ！？」

「私は『イビリチュア・ガストクラーケ』と『イビリチュア・マインドオーガス』の二体をリリースして、伏せモンスターとそのカード、ミラーフォースをデッキに戻す！『流転の水鏡』！」

『さあ……戻りなさい！　在るべきところへ！』

「くっ……！？」

「これで……先輩のフィールドはガラ空きです！」

エル・アリアとディバイナーの二体の攻撃力は合計で４０００。丁度倒せる！

「これが、通れば……！　お願い！『リチュアルクィーン・エル・アリア』で、ダイレクトアタック！」

「行けぇっ！」

『吹き飛んで反省しなさい！』

「『クィーンズ・ミラー・ストリーム』！」

エル・アリアの杖から噴き出した水流が、先輩を呑み込んで行く。

「よっしゃ！　これで……！」

「私たちの勝ちだ！」
私たちが勝利を確信した、次の瞬間。
「……いや」
「えっ！？」
水流が割れて、その中から無傷の先輩が現れる。
「ど、どうして……」
「アイツは……！？」
剣士さんが先輩の上を睨みつけて戦慄する。
「……俺はお前の攻撃宣言時に、手札から『バトルフェーダー』の効果を発動した。特殊召喚することで、ダイレクトアタックを無効にし、バトルフェイズを終了させる」
『バトルフェーダー』ＤＥＦ０
「そ、そんな……」
「通らなかった、のか……？」
「もう一体……リチュアの儀式モンスターがいれば、やられていた。あと一手……足りなかったな」
「わ、私は……ターン、エンドです」
私にもう手札はない。先輩にもないけど……。
「お前は……言ったな」
「……」
「当たる、じゃなく……引き当てるのだと」
「まさか……」
「暴食（グラトニー）。お前に出来て……この俺に、出来ない筈がないだろう……！？」
ガッ、と先輩は鋭い目でデッキトップに手を添える。
「これが……俺の、お前たちの運命だ！　ドロー！」
バーンカードを引かれたら負ける。そしてその確率は、先輩のデッキ構成から言って低くない。けど……それ以上に。
「もしかして……」
先輩が口元に笑みを浮かべる。己の傲慢（プライド）に歪んだ、壮絶な笑み。

「俺はセットされた『テラ・フォーミング』の効果を発動。デッキからフィールド魔法『ダークゾーン』を手札に加え、発動する」
フィールドが、闇のゲームの闇を更に増幅させる。その光景に、私たちは嫌な予感が止まらない。
「おい……まさか」
「私、一ターン目に、デッキに戻しただけだった……。何度もシャッフルやドローをする内、また引いてもおかしくは……」
でも、まさかそんな、そんなことって……！？
「俺はエクストラデッキから『アルカナ　ナイトジョーカー』をゲームから除外し……」
先輩の……大罪（Ｓｉｎ）！
「『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』を特殊召喚！」
『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ３８００→４３００
「あ、ああ……っ！？」
「暴食（グラトニー）……憤怒（ラース）……獣の本能レベルでしかない貴様らが、この俺に……傲慢（プライド）の終焉に勝てると思うな！　バトル！『Ｓｉｎアルカナナイトジョーカー』で、『リチュアルクィーン・エル・アリア』を攻撃！　切り裂け騎士皇！『堕天の剣』！」
『くっ……あああっ！？』
「きゃあああああああああっ！？」
「凛っ！　ぐぁあああっ！？」
凛ＬＰ０
エル・アリアを切り裂いた黒の剣圧に、私たちは吹き飛ばされた。
「その身に刻め……傲慢（プライド）の騎士は、嫉妬（エンヴィー）を必ず守り抜くと！」
そう言い残して、先輩はその場から消え去った。
「ゴメン。さだめ、アテナ……やっぱり私じゃ、無理だったよ」
最後にそれだけ呟いて、私は意識を失った。

第四期第二十三話「もう、やめろ」（後書き）

というわけで、結局セツの勝ち、と。いや、なんでセツといい凛といい、最強カードは出たと思ったら負けるんだ。いや僕の所為なんですけど。

今回出した新オリカは『リチュアルクィーン・エル・アリア』のみ。ヴィジョンやディバイナーは、もしかしたら聞き覚えがないかもしれませんがれっきとしたＯＣＧカードです。最新ですが。おそらく最も早い小説への登場だと信じております。オリカの紹介は例によって活動報告に載せます。

あ、ちなみに『逆転の明札』はアニメオリカです。遊星が使った奴。どう考えてもチートドローカード。黒セツはそんなんばっかりです。

リチュアもう書きたくねえ……いや、好きなんだけど。儀式で水属性とか超俺得なんですけど。小説で使おうとすると超大変。くるくるくるくる……把握し切れねえ！　作者自身がそうなので、読者のみなさんにとってもすっごい読み難いかもです。すみませんでした。

さて次回は……このデュエルの裏側で起きていた、もう一つのデュエルになります。対戦カードは秘密。

それでは、悠でした！

第四期第二十四話「サイレント・ダークホース」（前書き）

お久しぶりです。まずは、滅茶苦茶お待たせしてしまって申し訳ありませんでした。相変わらずスランプモードでバイトも始まったので、色々時間がかかってしまいました。

タイトルからわかると思いますが、今回はお久しぶり。彼女の登場になります。成長した彼女の強さを、どうぞご覧あれ。

第四期第二十四話「サイレント・ダークホース」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第二十四話「サイレント・ダークホース」

時は少し遡ります。

剣士さんの看病を凛さんに任せた私は、一人城門の前で物思いに耽っていました。

「セツ……」

以前、セツがユーキさんと戦い、恐らくは負けた場所。私たちを逃がして、セツが一人で戦った地。

守るために、一人犠牲になることが間違っていると、私はセツから学んだ。それなのに、セツは一人で戦い、一人で苦しんで……。

「おかしい、ですよ……セツ」

セツの行動は矛盾しています。他人にするなと言いながら、自分では息をするようにその行動を取ってしまう。

「自己犠牲……誰かのために何かをしたいって気持ちは、どうしてもそこに繋がっちゃうんですかね。その相手が、大切であればある程に。どう思います？　ユーキさん」

「……気付かれちゃってた、か～」

物陰から姿を現した、何処か間延びした聞き覚えのある声。

「ユーキさん……」

「アテナちゃん」

以前に会ったのは、セツが居なくなったあの日。まだそれほど時

間は経っていない筈なのに、随分と久しぶりに感じます。
「久しぶり、だね」
「そうですね」
「……」
「……」
お互いに、暫し無言。話したいことは沢山あるのに、どれも喉元に引っ掛かったように出てきません。
「ユーキさん。私、聞きたいことがあるんです。答えて、くれますか？」
「……内容による、かな」
「ユーキさんやセツは、自分の意志で終焉に味方しているんですか？」
何よりもまず、聞かなきゃいけないこと。
「……当たり前だよ。勘違いしてるかもしれないけど、エンヴィーに人を操るような能力はないよ。確かに、器としてのわたしが、エンヴィーの意識に引き摺られて暴走することはあるけど……エンヴィーを守りたいっていうのは、間違いなくわたしの意志。セツくんも、同じだよ」
「記憶を奪ったのに、ですか？」
私のその言葉に、ユーキさんは僅かに唇を噛みます。
「セツの記憶を奪って、さだめさんの居場所を奪って、それでセツの意志？……違います。それは、ぜったい違います！」
「っ……！」
それは、セツの意志じゃありません。真っ白にされた人間に、都合のいい目的を植え付けるような……そんな、歪んだ偽物の意志です。
「ユーキさんが正気なら……わかる筈です。セツが私や、さだめさんと敵対することのおかしさが」
「……アテナちゃんは知らないんだよ」
ユーキさんの声は、何処か私たちを憐れむような、寂しげな響き

を伴っていて、思わず私は乱暴に問いかけます。
「何をです？　私が知らないなら、教えてください！」
「アテナちゃんの知ってるセツくんこそが、偽物だってこと」
「っ！？」
ズキッ、とユーキさんの言葉に、胸を刺すような痛みが走ったのを感じました。
「どういう、ことですか？」
「気付いてない……なんてこと、ないよね」
「……偽物じゃ、ありません」
そう言ったつもりです。でも、ちゃんと声になっていたかはわかりません。掠れたような吐息が口から漏れます。
「セツくんの眼、濁ってた。記憶を失って、まっさらになったはずのセツくんの眼が。そういうの、鈍いわたしでもわかったよ。セツくんが、もう根本的に「やめてください！」……いいよ。やめてあげる。でもアテナちゃん。それで、本当にいいと思ってる？」
「私、は……」
「駄目だよ。アテナちゃん。そんなんじゃわたし、セツくんを返してなんてあげられない。アテナちゃんも、さだめちゃんも、希冴姫さんも……全てわかってて見ない振りしてたルインさんにも……絶対、渡せない」
ユーキさんの声は、私が今まで聞いたことがない程の怒りと、哀しみに満ちていました。
「……ねぇ。セツくんが記憶を失ったのって、何でだと思うの？」
「それは……ユーキさんが」
「うん。闇のデュエルで傷つけたから。それを言い訳するつもりはないよ。でもね……良く考えて？　アテナちゃんたちの知るセツくんは、闇のデュエルで瀕死になったからって、記憶を失ったりするほど柔だった？」
「……じゃあ」
「セツくんはね。忘れたかったんだよ。セツくん自身が、望んだの。

アテナちゃんたちのことを忘れたい。全ての柵（しがらみ）を捨てて、楽になりたいって」

「嘘です！　セツが、セツがそんなこと……」

「思わないって、本当に思う？　セツくんが、どれだけ苦労して、傷ついて、戦い続けてきたか……アテナちゃんだって知ってるでしょ？」

「ッ……」

ユーキさんの言葉に、私は反論出来ません。私が出会ってからだけでも、セツは私やさだめさん。皆のために戦い続けてきました。話だけしか聞いていませんが、さだめさんを守ってきた日々は、私の想像を遥かに超えるものだったでしょう。

「でも、セツは……」

「強い……って、本当にそう思ってる？」

「……」

「強くないよ。セツくんも、さだめちゃんも。話で聞いただけだけど、きっとセツくんたちの両親も。みんなみんな弱かったから、セツくんが強がるしかなかった」

「でも、セツ以外の人たちは強がることも出来ませんでした」

「そうだね。でもきっと、それはセツくんが他の人より心が強かったわけじゃない。セツくんが強かったのは、きっと責任感」

兄だから、妹（さだめ）を守らなきゃ。セツはその一心で、今までずっと強がって生きてきた。

「そしてそれは、きっとアテナちゃんたちに対しても同じ。セツくんは、周りがとってもよく見える人だったから。わかっちゃったんだね。みんな、弱いって。自分が守らなきゃ、潰れてしまうんじゃないかって。……きっと、それがセツくんの罪の源泉」

強すぎる責任感が、行き過ぎて大きな罪となった。自分が守らなきゃダメなんだ、という傲慢に。

「……今までのわたしじゃ、ダメなんだ。アテナちゃんたちも、そう。セツくんに寄りかかって、依存して……わたしたちが、セツく

んを……」
　ユーキさんの目が、苦痛に歪みます。
「セツくんを……罪人（プライド）にしたんだ」
「っ……！」
　私たちが、セツを……。
「セツくんは独りだった。わたしたちみんながいくら傍にいても、縋るばかりのわたしたちはどこまでもセツくんの“お荷物”でしか、なかったんだよ。だから……」
　ユーキさんは、自らのデュエルディスクを構え、私を鋭く睨みつけます。強い、強い意志を込めた目で。
「だから、わたしは戦う。セツくんの、本当のパートナーになりたいから。セツくんの隣で、セツくんを守れる人になりたいから！」
　セツの時とは違って、闇のゲームではなさそうでした。闇の代わりに、ユーキさんからは凄まじい意志の力を感じます。
「闇のゲームなんかしないよ。エンヴィーの力は借りない。わたしは、わたしだけの力で、アテナちゃんと戦う。これは……決闘（デュエル）、だから」
「決闘……」
「そうだよ。一対一、コンティニューなしの一本勝負。賭（ベットする）けるものは……全て」
「全て……？」
「文字通り、自分の全て。敗者は勝者の言葉に従うの。本当なら、闇のゲームで命そのものを賭けたいところだけど……わたしは、エンヴィーの力は使わないって決めたから。だから代わりに、わたしの全てを、この決闘に賭ける！」
「ユーキさん……」
「だからアテナちゃん。約束して。わたしが勝ったら、もうセツくんには関わらないって。もう……苦しめないって！」
「わ、私はセツを苦しめてなんか……」
「アテナちゃん！」

「っ……！　わ、わかり……ました」
「うん。それでいいよ。じゃあ……決闘を、始めようか」
「っ……」
重い……です。今までの……命を賭けた闇のゲームなんかより、よっぽど。ユーキさんの想いも、セツへの罪悪感も、自分自身への後悔も……その全てが、私の心に圧し掛かります。
セツは……いつでも私たちを想って、助けてくれました。守ってくれました。セツの行動には、いつも誰かを想う意志があって、私たちは常にその意志に助けられてきました。
「私は……」
私は、どうだったでしょう？　そんなセツに対し、私は？
「ただ逃げて、縋って……苦しめただけ」
だとしたら、私がセツのために戦うと、どの口で言えるでしょう？　私は、ただ私のためだけに戦っているに過ぎないと言うのに。
「さあ、アテナちゃん。顔を上げて、デュエルディスクを構えて。貴女の言葉、想い、力も全て、完膚なきまでに叩き潰して見せるから！」
「くっ……！？」
それでも……それでも今は、戦うしかありません！
「「デュエル！！」」
アテナＬＰ４０００
ユーキＬＰ４０００
「わたしの先攻！　ドロー！」
ユーキさんとデュエルするのは二度目。以前は、まだユーキさんの想いも、タクティクスも固まっていなかった一年生の頃……今のユーキさんとは、何もかもが違い過ぎて参考にはなりませんが……。
「私はモンスターを守備表示でセット。カードを一枚セットして、ターンエンドだよ！」
「私のターン、ドロー！」
負けるわけにはいきません！　例え私自身が、戦う意味を見失っ

ていたとしても……私が負ければ、さだめさんたちにも迷惑がかかります。それだけは……。

「嫌、です……！　私は手札から『ヘカテリス』の効果を発動します！　手札から墓地に送ることで、デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加え、発動します！」

私の背後に、いつも通りのヴァルハラが出現します。

「私はヴァルハラの効果を発動！　手札から『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を攻撃表示で特殊召喚します！」

『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』ＡＴＫ２８００

「更に私は『ウィクトーリア』を攻撃表示で召喚します！」

『ウィクトーリア』ＡＴＫ１８００

「行きますよ！　まずは『ウィクトーリア』でユーキさんの守備モンスターに攻撃します！」

ドラゴンを従える女神の一撃が、ユーキさんの守備モンスターを襲います。あのモンスターは……。

「っ……！　戦闘破壊された『荒野の女戦士』の効果発動！　デッキから攻撃力１５００以下の地属性・戦士族モンスター一体を攻撃表示で特殊召喚するよ！　私が召喚するのは『ミスティック・ソードマンＬＶ２』！」

『ミスティック・ソードマンＬＶ２』ＡＴＫ９００→４００

「攻撃力たったの４００……？」

ヴィーナスの効果を考えなくとも９００。それなら同じダメージを受けるにしても、まだ攻撃力が高く、後続も呼べる『荒野の女戦士』を呼び出した方が良い筈……だとしたら、何か考えが？　でも、攻撃反応型の罠なら『ウィクトーリア』の時に使われていてもおかしくはない筈……ヴィーナスを破壊するために？

「……それならそれで構いません。私には、攻撃あるのみですから！　バトルします！『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』で『ミスティック・ソードマンＬＶ２』に攻撃！『ホーリー・フェザー・シャワー』！」

ヴィーナスの翼から溢れ出た光の奔流が、小さな剣士に容赦なく襲いかかります。
「そうはいかないよ。リバースカード、発動！　速攻魔法『チュートリアルバトル』！」
『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』ＡＴＫ２８００→０
「速攻魔法!?　ヴィーナスの攻撃力が……!?」
「『チュートリアルバトル』はＬＶモンスター専用の速攻魔法。ＬＶ４以下のＬＶモンスターの戦闘時、戦闘ダメージを与えられない代わりに相手モンスターの攻撃力を０にする戦闘補助魔法だよ」
一気に勢いを失った光の奔流を、小さな剣士はその剣で貫き、ヴィーナスを一刀両断にしてしまいました。
「くっ……!?　私はカードを一枚セットして、ターンエンドです」
「相手モンスターを戦闘で破壊したターンのエンドフェイズに、ミスティック・ソードマンはレベルを上げるよ。『ミスティック・ソードマンＬＶ２』を墓地に送って、デッキから『ミスティック・ソードマンＬＶ４』を攻撃表示で特殊召喚！」
『ミスティック・ソードマンＬＶ４』ＡＴＫ１９００
「っ『ウィクトーリア』の攻撃力を……」
上回りました。しかも確か『ミスティック・ソードマンＬＶ４』のレベルアップ条件もＬＶ２と同じくモンスターの戦闘破壊……。
「わたしのターン、ドロー！　わたしは『サイレント・マジシャンＬＶ４』を攻撃表示で特殊召喚するよ！」
『サイレント・マジシャンＬＶ４』ＡＴＫ１０００
「サイレント……マジシャン！」
私にとっては鬼門とも言えるモンスターです。ドローカードを多用する都合上、その攻撃力はみるみる上昇してしまいます。
「バトル！『ミスティック・ソードマンＬＶ４』で『ウィクトーリア』を攻撃！『神秘の剣ＬＶ４』！」
「きゃあっ!?」
アテナＬＰ４０００→３９００

「更に『サイレント・マジシャンＬＶ４』でプレイヤーにダイレクトアタック！」
「さ、させません！　トラップカード『ガード・ブロック』！　戦闘ダメージを無効にして、デッキからカードを一枚ドローします！」
「でもそのドローで、『サイレント・マジシャンＬＶ４』には魔力カウンターが一つ乗るよ！」
『サイレント・マジシャンＬＶ４』ＡＴＫ１０００→１５００
「わたしはカードを一枚セット。エンドフェイズ時に『ミスティック・ソードマンＬＶ４』を墓地に送って、デッキから『ミスティック・ソードマンＬＶ６』を特殊召喚して、ターンを終了するよ」
『ミスティック・ソードマンＬＶ６』ＡＴＫ２３００
「私のターン、ドロー！」
「そのドローで、『サイレント・マジシャンＬＶ４』にはまた一つ、カウンターが乗るよ」
『サイレント・マジシャンＬＶ４』ＡＴＫ１５００→２０００
「っ……！」
強い、です……！　リクルーターからのレベルモンスター展開、そしてそのレベルアップに至るまで、とても鮮やかに決められてしまいました。レベルモンスターに、これ以上の時間を与えるのは危険過ぎます。手がつけられなくなる前に、速攻で倒さないと……！
「私はヴァルハラの効果を使い、手札から『光神機―轟龍』を攻撃表示で特殊召喚します！」
『光神機―轟龍』ＡＴＫ２９００
「バトルします！『光神機―轟龍』で『サイレント・マジシャンＬＶ４』を攻撃！『ライトニング・バースト』！」
「させないよ！　速攻魔法『月の書』！『光神機―轟龍』を裏側守備表示に変更するよ！」
「ああっ！？」
サイレント・マジシャンに攻撃を仕掛けた轟龍が、掲げられた書によって姿を消してしまいます。しかも、裏守備表示ということは

……！

「そう。ミスティック・ソードマンの餌食だよ」

「っ……！　わ、私は『ジェルエンデュオ』を守備表示で召喚して、ターンエンドです」

『ジェルエンデュオ』ＤＥＦ０

「わたしのターン、ドロー！　アテナちゃん、戦闘破壊耐性を持ったモンスターだからって、安心しちゃだめだよ」

「っ……どういう意味ですか？」

「……こういうこと！　わたしは手札から速攻魔法『エネミーコントローラー』を発動！表側表示モンスター一体の表示形式を変更するよ！」

「そんなっ！？」

『ジェルエンデュオ』ＤＥＦ０→ＡＴＫ１７００

虚空に出現したコントローラーが、私の『ジェルエンデュオ』を操り攻撃表示へと変更させられてしまいます。

「ミスティック・ソードマンが出てきたら、表側表示にしてくるのはわかってた。アテナちゃんが守備で出すなら、そのモンスターは『ジェルエンデュオ』か『マシュマロン』、後はリクルーターくらいだからね～」

そしてそれらの内、『ジェルエンデュオ』以外は裏守備で出せばミスティック・ソードマンの餌食になり、表側だと効果を発揮し辛いモンスター……まさか、そこまで考えて……！？

「さあ、行くよ！『ミスティック・ソードマンＬＶ６』で裏守備の『光神機―轟龍』に攻撃！『神秘の剣ＬＶ６』！」

「くっ……！？」

轟龍が切り裂かれ、光の粒子を残して消滅していきます。

「『ミスティック・ソードマンＬＶ６』の効果だけど……今回は使わないでおくよ。続けて『サイレント・マジシャンＬＶ４』で『ジェルエンデュオ』を攻撃！『サイレント・バーニング』！」

「きゃあああっ」

アテナＬＰ３９００→３６００
私が戦闘ダメージを受けたことで『ジェルエンデュオ』は破壊されます。これでまた、私のフィールドは空っぽです。
「わたしはカードを一枚セットしてターンエンドだよ」
またしてもユーキさんはカードを一枚だけセットしてターンを終了します。ですが、そのたった一枚に先ほどから戦況を覆されてばかりの私としては、そのたった一枚に寒気を覚えずには居られません。しかも、モンスター自体はデッキからの特殊召喚ばかりで、殆ど手札を消費せずに展開されています。これでは、手札からの大量展開を行っている私の方が先に枯渇するのは明らかです。
「私のターン、ドロー！」
私がドローしたことにより、またしても『サイレント・マジシャンＬＶ４』にカウンターが乗ります。
『サイレント・マジシャンＬＶ４』ＡＴＫ２０００→２５００
もう一刻の猶予もありません。けど、そんな中でも希望はあります。私は先ほどのユーキさんの言葉を思い出します。
『『ミスティック・ソードマンＬＶ６』の効果だけど……今回は使わないでおくよ』
「……」
『ミスティック・ソードマンＬＶ６』の効果は、裏守備モンスターを問答無用で破壊する効果と、その効果で破壊したモンスターを、墓地へは送らずデッキトップに戻す効果……。それを使わなかった。と言うことは、ユーキさんにとって轟龍はデッキトップに戻したくなかったモンスター……再利用されることを恐れるモンスターだったと言うことです。
「轟龍の特徴は、妥協召喚と貫通ダメージ、それに２９００の攻撃力……」
ヴァルハラが存在し、守備モンスターがいない以上、轟龍の効果が問題だったわけではありません。だとすれば、問題は攻撃力。２９００の攻撃力に対抗する手段がなかったからこそ、ユーキさんは

轟龍をデッキトップに戻さなかった。なら！
「私はもう一度ヴァルハラの効果を使います！　手札から『堕天使スペルビア』を特殊召喚！」
『堕天使スペルビア』ＡＴＫ２９００
轟龍と同等の攻撃力を持つスペルビアなら、突破出来る筈です！
「バトルします！」
問題は、どちらのモンスターを狙うべきか、です。まだ成長し切っていないとはいえ、これ以上の攻撃力増加を見過ごしたくはない『サイレント・マジシャンＬＶ４』か、守りに入ることを許してくれない『ミスティック・ソードマンＬＶ６』か……。個人的にはサイレント・マジシャンを狙いたいところですが……。
「……」
私はチラリとユーキさんの手札を見ます。二枚……残っています。二枚ある手札の内、どちらかが『オネスト』である可能性も考える必要があります。それなら……！
「行きます！『堕天使スペルビア』で『ミスティック・ソードマンＬＶ６』を攻撃します！」
スペルビアの放つ闇の波動が、ユーキさんの『ミスティック・ソードマンＬＶ６』を襲います。この攻撃を凌ぐことは出来ないっ……そう、確信した時でした。
「……くすっ」
「！？」
ユーキさんが、笑いました。
「思った通り、だね。速攻魔法『収縮』！『堕天使スペルビア』の攻撃力を半分にするよ！」
『堕天使スペルビア』ＡＴＫ２９００→１４５０
「そ……そんな、きゃあああっ！？」
アテナＬＰ３６００→２７５０
スペルビアが切り裂かれるのを、私はただ呆然と眺めていました。
「ど、どうして……？　ユーキさんには、対抗手段がなかったんじ

や……」
だから、効果を使わなかったんじゃ……。
「それはねアテナちゃん。アテナちゃんの、勝手な想像、だよ？」
「ぁ……っ」
確かに……ユーキさんの言葉通りです。ユーキさんに対抗策がないと、勝手に思い込んだ私の……。
「で、でもそれは……」
「わたしが『ミスティック・ソードマンＬＶ６』の効果を使わなかったから、でしょ？」
「……そう、です。まさか……！？」
「うん」
私が瞠目する前で、ユーキさんが人差し指を口元に持って行きます。
「ワザと、だよ」
くすり、と笑うその姿に、私は言いようのない恐怖を覚えました。
「アテナちゃんは頭もいいからね。きっと、効果を使わなかった意味を見抜いてくれるって思ってた。でも、アテナちゃんは頭も良いけど、同時にとっても素直だから……それ以上深くは考えない、そう思った通りだったよ」
くすくすと、まるで悪戯が成功した少女のように笑うユーキさん。
「いい加減カードを一枚セット、じゃあワンパターンだったからね。流石にそろそろ迂闊な攻撃はしてこないと思ったんだ。だから……ちょっとした仕掛けを、ね？」
それが、ミスティック・ソードマンの効果不使用……！　私はまんまと、ユーキさんの仕掛けた罠にハマり、三度目の迂闊な攻撃を……！？
「二度あることは三度ある……三度目の正直とは行かなくて残念だったね。アテナちゃん」
「くっ……！」
これが、今のユーキさんの実力……！？　以前とは比べ物に……

いえ、完全に、別次元の強さです。
「……この強さはね、セツくんがくれたんだ」
「セツが……？」
「そう。中学では落ちこぼれで……高等部に入ってからも負け続きだったわたしに、セツくんが教えてくれた……わたしの、たった一つの武器！」
「心理誘導……！」
セツからも、聞いてはいました。ユーキさんが、凄くデュエルに於ける駆け引きに長けている事実。相手の油断を誘い、目に見えない不意の一撃を与える……正に。
「そう、目に見えない不意の一撃（サイレント）。それが、わたしの武器（ダークホース）！」
「ッ……！」
「わたしたち、普段からそうだもんね。アテナちゃんのアプローチは、重たくてパワーがあって、わたしは何時も美味しいところを持ってくからってダークホースって言われてて。……デュエルでも、同じ。アテナちゃんがパワーのある重量級天使を繰り出して戦うのなら、わたしは皆の隙を突いて勝ちを拾うの。皆、同じだよ」
それを、セツが見出した。
「そう。わたしはセツくんと出会って、変われた。誰よりも強い自分を、見つけることが出来たんだ！　だから……！」
ユーキさんは手札からカードを一枚抜き出し、掲げます。
「見せてあげるよ。わたしの得た力、その一つを！　わたしは『ミスティック・ソードマンＬＶ６』がモンスターを戦闘によって破壊したことにより、『ミスティック・ソードマンＬＶ６』をリリースすることで『ミスティック・ソードマンＬＶＭａｘ』を特殊召喚するよ！」
「レベル……マックス！？」
『ミスティック・ソードマンＬＶＭａｘ』ＡＴＫ３３００
光に包まれた『ミスティック・ソードマンＬＶ６』が、より先鋭的なフォルムの衣装を纏って現れました。

「さあ、アテナちゃん。アテナちゃんにこれから見せてあげるよ。
レベルがカンストしたキャラの強さをね……！」

第四期第二十四話「サイレント・ダークホース」（後書き）

こんにちは。

さてさてお待たせしてしまってすみません。これからしばらくはＳＹＴ（スーパー・ユーキちゃん・タイム）です（笑）。

次回からはユーキちゃんとセツの出会いからの出来事を回想していく形になるかと。もうしばらく、お付き合いください。

今回登場したオリカは『チュートリアルバトル』と『ミスティック・ソードマンＬＶＭａｘ』。後者はまだ全貌が明らかになっていませんが、前者については後ほど活動報告にて。そして今まで使っていなかったミスティック・ソードマンにそんなオリカが登場するくらいなので……あとは、言わずともわかるでしょう。尤も、ユーキちゃんの過去話等も間に入るので、このデュエル、かなり長引きそうです。

序盤の今回は、ユーキちゃんの強さがかなり強調されました。セツといいユーキちゃんといい、敵は心理フェイズばっかり使ってきます（笑）。そしてセツがカウンター罠ならユーキちゃんは速攻魔法です。エネコンとか使いだしました。ＬＶモンスターやチューリアルバトルも含め、ようやくユーキちゃんのゲーマー設定が日の目を見ましたね。長かった……。

バイトをしつつスランプな現在ですが、次の話はなんとか早めにアップしたいものです。……五月病に負けないように！

それでは、悠でした！

第四期第二十五話「静寂の始まり・前編」（前書き）

少しだけ更新速度が戻りました。また落ちないようにしたいところですが……はてさて、どうなるやら。

今回はユーキちゃんとセツの過去話ですね。タイトルにもあるように、まだ続きます。ＳＹＴ（スーパー・ユーキちゃん・タイム）ですのでｗｗｗ

第四期第二十五話「静寂の始まり・前編」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第二十五話「静寂の始まり・前編」

「さあ、アテナちゃん。アテナちゃんにこれから見せてあげるよ。レベルがカンストしたキャラの強さをね……！」

ゴクリ、と息を呑むアテナちゃんを見て、わたしは少しだけ安堵の息を吐く。

（うん。上手く出来てる。ここまでは想定通り、だよ～）

レベルモンスターは、効果は強力だけどその性質上強くなるまで時間がかかる。だから、強くなるまでの序盤は魔法・罠を惜しまず使う。レベルが上がるにつれて、場持ちも良くなるからそうなってからが勝負、だね。

わたしはセツくんの教えを思い出す。セツくんはなんでも教えてくれたわけじゃない。むしろ、セツくんが教えてくれたのは基本的なルールや効果の使い方。それと、わたしが強くなるために必要な取っ掛かりだけ。

（でも、お陰でわたしは強くなれた）

セツくんは、不思議なヒトだった。それは、初めて会った時から、同じ。わたしは、少しの間だけ目を閉じて、セツくんと初めて会った時のことを思い出していた。

その日は、いつものように実戦形式のデュエルの授業があった。
わたしの相手は、同学年のイエロー男子。
「加藤友紀です。よろしくね～」
「俺はイエローの隼鋼太（はやぶさうた）。よろしく」
お互いに軽く挨拶をしてから、デュエルディスクを構える。
「「デュエル！」」
ユーキＬＰ４０００
鋼太ＬＰ４０００
「先攻は、シニョ～ルユーキなノ～ネ」
相変わらず特徴的なクロノス先生の言葉に従って、わたしはカードをドローする。
「わたしのターン、ドロー」
え～と……。手札に『サイレント・ソードマンＬＶ３』がいるね。この子は攻撃力も守備力も一緒だから～……。
「わたしは『サイレント・ソードマンＬＶ３』を守備表示で召喚するよ～」
『サイレント・ソードマンＬＶ３』ＤＥＦ１０００
守備で出しておいた方がいいよね？
「え～と……カードを一枚伏せて、ターンエンドするよ～」
うん。ミラーフォースも伏せたし、次のターンでレベルアップ出来るよね～。
「俺のターン、ドロー！　俺は『メカファルコン』を攻撃表示で召喚だ！」
『メカファルコン』ＡＴＫ１４００
「う……」
『サイレント・ソードマンＬＶ３』の守備力を上回っちゃってるよ～。けど、ミラーフォースもあるし……。
「速攻魔法『サイクロン』！　伏せカードを破壊だ！」
「ええっ！？」

ミラーフォースが破壊されちゃった！？
「へへっ、ミラーフォースだったのか。良い勘してるぜ俺！　よしっ！『メカファルコン』で『サイレント・ソードマンＬＶ３』を攻撃だ！『ソニック・ダイブ』！」
「きゃっ！」
「よし、俺はカードを二枚セットして、ターンエンドだぜ！」
「わ、わたしのターン、ドロー！」
うぅ……折角レベルアップ出来ると思ったのに～。
「わたしはモンスターをセット。カードを一枚セット！」
と、とりあえず壁と『炸裂装甲』を伏せて……。
「えと、ターンエンドだよ」
「俺のターン、ドロー！　俺は『強化支援メカ・ヘビーウェポン』を召喚！　攻撃表示だ！」
『強化支援メカ・ヘビーウェポン』ＡＴＫ５００
「更に、手札から魔法カード『機械複製術』を発動！　デッキからヘビーウェポンを二体特殊召喚するぜ！」
『強化支援メカ・ヘビーウェポン』ＡＴＫ５００×２
「うわわっ！？」
モンスターが一気にならんじゃった……。
「そしてヘビーウェポンを『メカファルコン』にユニオンだ」
『メカファルコン』ＡＴＫ１４００→１９００
「バトルだぜ！『メカファルコン』で守備モンスターを攻撃！『ヘビー・ソニック・ダイブ』！」
「え、えっとトラップカード『炸裂装甲』！」
「無駄無駄。ヘビーウェポンがユニオンされている機械族モンスターは、ヘビーウェポンを身代わりにして破壊を免れる！」
『メカファルコン』ＡＴＫ１９００→１４００
少しだけ攻撃力は下げられたけど……伏せてたのは『華麗なる潜入工作員』で、守備力は１２００……全然届かないよ～！
「よっし！　続けて二体のヘビーウェポンでも攻撃だ！」

「きゃあっ！？」
ユーキＬＰ４０００→３０００
「俺はメインフェイズ２にもう一体のヘビーウェポンを『メカファルコン』にユニオン！　ターンエンドだ！」
『メカファルコン』ＡＴＫ１４００→１９００
「うぅ～……わたしのターン、ドロー」
あ、このカードなら……。
「わたしは魔法カード『洗脳―ブレインコントロール』を発動するよ～！」
ユーキＬＰ３０００→２２００
このカードなら、強くなった『メカファルコン』を奪い取れるよ～！
「残念！　永続罠発動！『レアメタル化・魔法反射装甲』を『メカファルコン』に装備させて、対象を取る魔法の効果を一度だけ無効にするぜ！」
『メカファルコン』ＡＴＫ１９００→２４００
「そ、そんなぁ～……」
折角ライフまで払ったのに……。攻撃力を上げただけだよ～。
「うぅ……『シャインエンジェル』を守備表示で召喚してターンエンドだよ」
『シャインエンジェル』ＤＥＦ８００
「よ～し絶好調！　俺のターン、ドロー！　俺は『メカファルコン』に装備魔法『７カード』を装備するぜ！」
『メカファルコン』ＡＴＫ３１００
「こ、攻撃力３１００～！？」
ど、どうしよう。そんな攻撃力、わたしのデッキじゃどうしようもないよ～！
「まだまだぁ！　手札から速攻魔法『リミッター解除』発動！　このターンのエンドフェイズまで、俺の機械族モンスターの攻撃力は倍になるぜ！」

「ば、倍！？」
『メカファルコン』ＡＴＫ３１００→６２００
『強化支援メカ・ヘビーウェポン』ＡＴＫ５００→１０００
「ろ、ろくせんにひゃく……」
え、えっと……詰んだ？　う、ううんまだだよ！
「行くぜ！　ヘビーウェポンで『シャインエンジェル』を攻撃！」
「しゃ、『シャインエンジェル』のモンスター効果発動！　デッキから攻撃力１５００以下の光属性モンスターを攻撃表示で召喚するよ～！　わたしは『サイレント・ソードマンＬＶ３』を特殊召喚！」
『サイレント・ソードマンＬＶ３』ＡＴＫ１０００
「へっ！　そんな雑魚モンスター、俺のファルコンの敵じゃないぜ！『メカファルコン』で攻撃だ！」
チャンス到来、だよ～！
「手札から『オネスト』を捨てて効果発動！　攻撃モンスターの攻撃力分『サイレント・ソードマンＬＶ３』の攻撃力をアップさせるよ！」
「な、なに～！？」
『サイレント・ソードマンＬＶ３』ＡＴＫ１０００→７２００
「迎え討って！『沈黙の剣ＬＶ３』！」
「ファルコーンッ！？」
鋼太ＬＰ４０００→３０００
「くっ！　だが『メカファルコン』はヘビーウェポンを身代わりに破壊を免れるぜ！　そしてメインフェイズ２に最後のヘビーウェポンを『メカファルコン』にユニオン！」
『メカファルコン』ＡＴＫ６２００→６７００
「エンドフェイズ時に『リミッター解除』の効果を受けたモンスターは破壊されるが、ヘビーウェポンを装備した『メカファルコン』は破壊を免れるぜ！」
『メカファルコン』ＡＴＫ６７００→３１００→２６００
「ターンエンドだ！」

「うぅ……わたしのターン、ドロー！」
何とか凌いだけど、虎の子の『オネスト』まで使ったのに、結局『メカファルコン』を倒すことが出来なかった……でも！
「このスタンバイフェイズに『サイレント・ソードマンＬＶ３』はレベルアップ！　デッキから『サイレント・ソードマンＬＶ５』を特殊召喚するよ！」
『サイレント・ソードマンＬＶ５』ＡＴＫ２３００
「更に魔法カード『レベルアップ』を発動するよ～！『サイレント・ソードマンＬＶ７』を特殊召喚！」
『サイレント・ソードマンＬＶ７』ＡＴＫ２８００
「うおっ！？」
「更に『ブレイドナイト』を召喚するよ～。手札がゼロだから、攻撃力は２０００だよ」
『ブレイドナイト』ＡＴＫ１６００→２０００
「反撃開始だよ～！『サイレント・ソードマンＬＶ７』で『メカファルコン』を攻撃！『沈黙の剣ＬＶ７』！」
これで倒せれば……。
「甘いぜ！　トラップカード発動！『ゲットライド！』！　墓地から『強化支援メカ・ヘビーウェポン』を『メカファルコン』にユニオンさせるぜ！」
「えっ！？」
『メカファルコン』ＡＴＫ２６００→３１００
「迎撃だ！『ヘビーメタル・ソニック・ダイブ』！」
「きゃあああっ！？」
ユーキＬＰ１９００
「サイレント・ソードマンが……ターンエンド、だよ」
「俺のターン、ドロー！　よし！　俺は『強化支援メカ・ヘビーウェポン』のユニオンを解除して攻撃表示で特殊召喚するぜ！」
『メカファルコン』ＡＴＫ３１００→２６００
『強化支援メカ・ヘビーウェポン』ＡＴＫ５００

「そして、手札から速攻魔法『地獄の暴走召喚』！　墓地のヘビーウェポンを二体、特殊召喚するぜ。そっちも、他に『ブレイドナイト』がいれば出していいぜ」
「う……『ブレイドナイト』は一枚しか入れてないよ～」
「そんじゃ、特殊召喚した『強化支援メカ・ヘビーウェポン』を『メカファルコン』にユニオンだ！」
　『メカファルコン』ＡＴＫ２６００→３１００
「これでトドメだ！『メカファルコン』で『ブレイドナイト』に攻撃！『ヘビー・ソニック・ダイブ』！」
「きゃあああっ！？」
　ユーキＬＰ８００
「二体の『強化支援メカ・ヘビーウェポン』でダイレクトアタック！」
「ひゃあああっ！？」
　ユーキＬＰ０
「そこまで！　シニョ～ルユーキの負けなノ～ネ」
「うぅ～……また負けちゃった」
　ガックリと肩を落としてデュエルリングを降りる。最近はいつもこうだった。
　フェイバリットカードの『サイレント・ソードマンＬＶ５』を眺めて、少し涙目になる。わたしのお気に入りなんだけど、上手く扱えた試しがない。
「向いてないのかなぁ～……」
　中等部の頃から、勝率はあまり良いとは言えなかった。けど、高等部に上がってそれがますます顕著になってきた気がする。
「はぁ……」
　溜息を吐きつつ、机にカードを並べて考える。
「う～ん……」
「……お？」
「え？」

わたしが『サイレント・ソードマンＬＶ５』を手に唸っていると、後ろから興味深そうな声が聞こえてきた。
「それ、サイレント・ソードマンだよな」
「あ、うん……」
レッドの制服を着た、親しみやすそうな顔をした男子生徒。わたしは、この人を知っていた。
「えっと……御堂くん？」
「あれ？　俺のこと知ってるの？」
「うん……入学試験、見てたから～」
絵札の三銃士で、カッコ良くワンターンキルを決めていた御堂くんのことは、その時から知っていた。
絵札の三銃士。わたしのサイレント・ソードマンと同じく、あのデュエルキング、武藤遊戯が使っていたモンスター。わたしがサイレント・ソードマンを全然上手く使えないのに対して、御堂くんは凄く上手に絵札の三銃士を操っていた。レッド寮所属なのが、今でも信じられない。
「ああ、あの時か……あの時は、手札が揃い過ぎてただけだよ。完全に運だ」
そう言って謙遜する御堂くんだけど、わたしからすれば羨ましい。
「それでも凄いよ。わたし、全然運良くないから～」
「そうなのか？　え～と、加藤さん、だったか？」
「うん。加藤友紀。よろしくね～。御堂くん」
「ああ。よろしく。あ、そうだ。出来れば、名前で呼んでくれないか？　妹がいるんで、昔から名前呼びの方がされ慣れてるんだ」
「えっ？　う、うん。じゃあ、え～と……セツ、くん？」
男の子を下の名前で呼んだことなんて、数えるくらいしかなかったから、思わず疑問形になる。
「ああ、それでいい。ありがとう」
そう言ってセツくんは笑いかけてくれる。最初にも思ったけど、凄く親しみやすい、柔らかい笑顔だった。

「あ、それじゃあセツくんも、わたしのこと名前でいいよ」
「おっけ。ふむ……友紀、いや、ユーキちゃん、だな」
「ふえっ？」
“ちゃん”という聞き慣れない敬称に、少しだけドキッとする。
一方、セツくんはその呼び名が気に入ったのか、満面の笑みだ。
「ユーキちゃん……うん。なんかしっくりくるな。これでいいか？」
「え、えっと……うん」
今更ダメとも言えないし、わたし自身別に嫌なわけじゃなかったから、少しためらった後頷く。
「それで……どうしたの～？」
「ん？　ああ、さっきデュエルしてただろ？　サイレント・ソードマン使いって初めて見たし、絵札の三銃士とも無関係じゃないしで、少し気になったんだ」
無関係じゃない、というのは、多分デュエルキング・武藤遊戯のことだと思う。ていうか、さっきのデュエル見られてたんだ……。
「あはは……負けちゃって、恥ずかしいけど～」
「まあ、誰だって負けることくらいあるし、それくらい何でもないだろ」
セツくんは、そう言って肩をすくめた。その後でブツブツと、「ヘビーウェポンの使い回しはいいとして……なんで『メカファルコン』にあそこまで拘ってたんだアイツ……」とか呟いていた。確かに……それはちょっと気になるけど～。
「うん……でも、負けるの、いつもだから～」
負けることもある、じゃなくて、勝てることもある、と言う方が正しい。
「いつも？」
「うん。全然勝てないんだ。高等部に来てからは、まだ一度も」
「……そうなのか？」
セツくんは意外そうな目でわたしを見る。それがなんとなく期待を裏切った気がして申し訳なくて、わたしは目を伏せる。

「そうなの。ごめんね？」
「や、謝られてもな。う～ん……そうだ！」
セツくんが、何かを思いついたようにパチン、と指を鳴らす。
「ユーキちゃんさえ良ければ、俺にも手伝わせてくれないか？」
「え？　手伝うって……」
「デッキ構築。カードを並べて唸ってたってことは、今丁度調整中だったんだろ？」
「あ、うん。でも……いいの？」
恐る恐る、と言う感じで聞き返すと、セツくんは苦笑する。
「俺が言いだしたことだぞ？」
「そうじゃなくて……天音さん」
わたしの指摘に、セツくんはうっと息をつまらせた。
天音アテナ。わたしたちの学年なら、知らない人は殆どいないと思う有名人。まだ１３歳でありながら高等部に飛び級してくる程の実力と、アイドル顔負けの容姿やスタイル。人当たりも良いから、入学してすぐにアカデミアの人気者になっちゃった凄い娘。その天音さんが、セツくんに思いっきりアプローチをかけていることも、やっぱり有名。
「アテナは……まあいいだろ。別に疚しいことするわけじゃないし」
それはそうだと思うけど、それでもきっと天音さんは嫉妬すると思う。
「じゃあ……お願いします」
それなのに、そう言ってセツくんの言葉に甘えたわたしも、ちょっと不思議だった。普通なら、憎からず想っている女の子にアプローチをかけられていながら他の女の子に声をかけるなんてって思うはずなのに、セツくんにはそういうことを感じさせない不思議なオーラというか、魅力があった。
「おう。任せてくれ。きっと役に立てると思うから」
笑顔で握手を求めるセツくんの手を、わたしは取った。

――その時が、全ての始まりだった。

第四期第二十五話「静寂の始まり・前編」（後書き）

こんにちは。

今回の見どころ：攻撃力６２００の『メカファルコン』（笑）。

デュエルはちょっとしたネタ兼弱かった頃のユーキちゃんなのですが、思いの外面白い感じで出来ました。使用モンスターが『メカファルコン』なのは、悠が好きだからです。遊戯王を始めた頃に使ってました。貰い物でしたが、イラストが好きだったので良く出して倒されてました（笑）。

一応ヘビーウェポンの使いまわし自体はそこそこ有用です。対象が『メカファルコン』である必要性は皆無ですが。

これは内容と全く関係のない話ですが、先日ＰＳＰが壊れました。といっても、使えなくなったわけじゃなく、ゲーム自体は出来ます。充電とかセーブとかももんぢアありません。では何が壊れたのか？

……アナログパッドが砕けました。

あ、ありのまま起こったことを話すぜ！『ちょっとディシディアでデスペラードカオスを使っていたら、アナログパッドが砕けた』……な、何を言っているかわからｎ（ｒｙ

デスペラードカオス……俺のＰＳＰをよくも（涙）！　決してゲームが出来なくなったわけでもなく、金もないので買い替える程ではない損傷、というのがまた地味にイラつきます。

それでは、悠でした！

第四期第二十六話「静寂の始まり・後編」（前書き）

お久しぶりです！　いやホント、約三週間ぶりの投稿になります。長かった……。今回は結構、書くことが定まらなかった感じですね。いつものように言い訳ですが。それでは、例によって難産だった（最近ずっとそう）第二十六話、ご覧ください。

第四期第二十六話「静寂の始まり・後編」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第二十六話「静寂の始まり・後編」

セツくんは、まるで魔法使いみたいだった。
「勝者、オベリスク・ブルー女子、加藤友紀！」
「え……か、勝っちゃ……た？」
セツくんに助言を貰って、自分なりにデッキを改造して……その結果は、余りにもあっけない、あっさりとした勝利。
「すごいじゃんユーキ！　アンタ、いつの間にそんな強くなったのよ！」
「あ、う、うん……えっと～」
興奮した様子で声をかけてきた友達に、わたしは曖昧な言葉をもらすだけ。正直、自分でも実感が湧かなかった。
一頻り友達と話終わった頃、セツくんが軽い調子で声をかけてきた。
「な？　言った通りだろ？」
「セツくん……」
セツくんがしてくれたことは本当に僅かだった。デッキ圧縮に回転率。引きたいカードをドローするにはどうするか。そんな、授業でも習うような基本的な知識を、授業より圧倒的にわかりやすく、噛み砕いて説明してくれた。わたしだけじゃなくて、他の誰を教えるにも過不足ない、なんていうか、本当に“先生”だった。

そんなセツくんがわたしにしてくれた“わたし”へのアドバイスは、

『序盤を乗り切れ。たったの二ターンでいい。そこでペースを掴めれば、後は普通にプレイするだけだ』

というだけだった。

『二ターン……』

『あくまで目安だけどな。ユーキちゃんのデッキは速攻型じゃないけど、ある意味速攻型のデッキよりも序盤にペースを掴む必要がある』

その言葉だけを頼りに作ったデッキで、わたしは勝った。

「セツくんの言った通り、二ターン耐えたら後は完封出来たよ～」

そう。完封。相手にロクな抵抗も許さずに、あっさりと勝つことが出来た。呆気なさ過ぎて、逆に拍子抜けしたくらいだった。

「だろうな。この世界で『サイレント・ソードマンＬＶ７』の封殺力はかなり圧倒的だ。序盤の序盤さえ乗り切れば、後はそうそうやられないさ」

「この世界？」

ちょっと引っかかる言い回しに首を傾げると、何故かセツくんは少しだけ焦ったように眼を逸らした。

「あ、いや……アマチュアの世界ではってこと。ほら、流石にプロ相手には簡単にいかないだろうし、さ」

「あ、そっか～。そうだよね」

その頃のわたしは、その言葉に何の疑問も抱かずに首肯した。まさか、セツくんが別の世界の人間で、その世界ではこの世界以上にデュエルの戦術が研究されている、なんて思いもしなかったから。

「まあ、これで念願の初勝利だな。ほい」

そう言ってセツくんが片手を顔の横に掲げる。その意味を察してわたしも手を挙げた。

パァンッ！　と小気味良い音を立てて、わたしとセツくんの手が音を奏でる。

「初勝利、おめでとう。ユーキちゃん」
「うん！　ありがとう～。セツくん」
「また、何かあれば何でも聞いてくれ。思いのほか、こうやって誰かのデッキ構築手伝うのも楽しかったよ」
「……ありがとう。セツくん。本当に」
嬉しそうに笑うセツくんを見て、漸くわたしにも実感が湧いてきた。
――勝ったんだ。
高等部に来てから、一度も勝てなかったわたしが、セツくんの手を借りてとはいえ、デュエルに勝った。その事実が、わたしの涙腺を緩ませた。
「あり、がとう……ありがとう。セツくん」
「あ～……」
突然泣きだしたわたしに、セツくんはちょっと困った顔で頬を掻く。当然だ。いきなり目の前で人が泣きだしたら誰でも困惑する。セツくんの反応はマシな方だ。
「……良かったな」
セツくんは、ただそれだけ言って、わたしの頭にポン、と手を置いた。たったそれだけのことで、わたしは酷く救われた気分になる。正直。
わたしは物語のヒロインみたいに、友達が居なくて孤独だったとか、負け続けている自分を慰めてくれる友達がいなかったとか、そういうことはなかった。セツくんみたいに声をかけてくれた人も、心配してくれた人も、デッキ構築を手伝ってくれた人もいた。
けれど、結果を出したのはセツくんだけだった。
醜いって思うかもしれない。酷いって思うかもしれない。でも、どんなに優しくされても、どんなに手助けしてくれても、究極の所セツくん以外の人たちは、わたしの悩みを解決出来なかった。勿論、声をかけてくれて、心配してくれたことは心の支えにはなった。でも、悩みの根本を解決するきっかけを作ってくれたセツくんとは、

重みが違った。
友達のことを、口だけとか、役立たずとか、そんな風に思いたくはないけれど。声をかけてくれただけの友人たちより、この瞬間セツくんは誰よりも“特別”になった。
その時はまだ、恋でも愛でもなかったけれど、間違いなくセツくんは、わたしの中で特別だった。
この人なら、わたしを強くしてくれる。
この人なら、わたしを助けてくれる。
この人なら、わたしを……。

――“特別”に、してくれる。

「……ユーキちゃん？」
「あっ……な、何でもないよ～」
訝しげなセツくんに、慌てて手を振って誤魔化す。
（今、わたし……）
何を、考えていたんだろう。自分の中に、得体の知れない何かが蠢いている。そんな、異常な感覚――。
「って、なんか今の、すっごい中二病っぽい……」
何よ得体の知れない何か～って。ゲームじゃあるまいし。
「ユーキちゃん？」
「あ、ううん何でもないよ～！」
訝しげな顔を向けてきたセツくんに、慌てて手を振る。危ない危ない。
「それじゃ、俺はこれで。また、何かあったら相談してくれ。あ、別に何にもなくてもいいけど」
「あ、うん。ありがとうセツくん。セツくんのおかげでわたし、まだ頑張れそうだよ～」

「そっか。それなら、良かった。じゃ、またな」
「うん～」
セツくんとは、それから何度か話した。どれもわたしがプレイングに悩んだのを相談してただけだけど、セツくんは毎回親身になって話を聞いてくれて、そのお陰でわたしの成績も右肩上がりになっていった。肝心のアテナちゃんには負けちゃったけど……まあ、アレは性質の悪い夢だった、ということにしたい。
……少なくとも、この時点でのわたしは、セツくんのことを少し気になる男の子、としか意識していなかったと思う。それはきっと、セツくんが恩人だという感覚もあったし、何よりアテナちゃんと張り合うような自信はこれっぽっちもなかったから。だから、アテナちゃんには友達だと言ったし、わたしもそう思ってた。その意識が変わったのは、きっとあの時。さだめちゃんが現れて、セツくんが突然アカデミアからいなくなってしまった後……。
「今日はタッグデュエルのお勉強なノ～ネ！」
タッグデュエル、と言われても、正直あんまりピンとこなかった。中等部では、ずっとシングルデュエルしかしてこなかったし、デュエルの大会とかも、シングルデュエルの方が多かったから。
「それでぇ～わ、各自決められたパートナーとタッグを組んでデュエルをするノ～ネ」
「パートナー、かぁ～……」
その時、脳裏に浮かんだのはセツくんだった。けど、アカデミアにいないセツくんがパートナーになる筈もない。わたしのパートナーは、田中くんというブルー男子の人だった。
「キミが、加藤さんかい？　ボクは田中康彦。今日はよろしく」
田中くんは、ブルーの男子にありがちな嫌味っぽい感じはしなくて、第一印象は結構悪くなかった。
「ボクのターン！　ボクは『D・Dアサイラント』を攻撃表示で召喚！」
デュエルも、ブルーに居るだけはあって凄く強かった。これは後

で友達から聞いたけど、田中くんは女子の間でもそれなりに人気があるらしい。
「そこまで！　なノ～ネ。田中&加藤ペアの勝ちなノ～ネ！」
「よし、やったぁ！　ボクたちの勝ちだね。加藤さん、フォローありがとう。助かったよ」
「そんな、こちらこそ～。田中くん、強いね～」
「そんなことないよ。一応ブルーなんだし、これくらいは当然さ」
田中くんはそう言って胸を張る。その姿に、セツくんの笑顔が重なった。セツくんもそうだったけど、強い人はやっぱり自分の力に自信を持ってる。それは、純粋にすごいと思う。わたしも徐々に成績は良くなってきているけど、まだあんまり自信は持てないでいるから。
「加藤さん」
「え？」
少しわたしが物思いに耽っていると、田中くんが声をかけてきた。
「あの、良かったらまたタッグ組んでくれないかな？　今日タッグを組んでみて、ボクたち凄く相性いいと思うんだ」
「え、え？」
「じゃあ、ボクはこれで。出来れば、今言ったこと、考えておいて欲しい」
「え、あの……？」
殆ど言うだけ言って田中くんは足早に去って行った。

「そりゃアンタ、あからさまにアンタに気があるんでしょうよ」
アカデミアのお昼休み。初めてのタッグデュエルから、何度かタッグを組んだ田中くんのことを、友達の奈津代ちゃん（通称なっつん）に話してみると、あっさりとその答えが返ってきた。
「……え？」

それでもわたしがきょとん、とすると、なっつんは溜息を吐いた。
「前から思っちゃいたけど、ユーキってばそういうの疎いよね」
「そう、かな～？」
「そうよ！」
なっつんはダンッ、と力強く机を叩いて立ち上がる。
「わっ！？」
「ユーキ、アンタはあんまり目立つ方じゃないけど、結構可愛いの。わかってる？」
「またまた～、なっつんってば冗談ばっかり～」
「冗談じゃないっての！」
「可愛いって言うのはほら、アテナちゃんとかのことを言うんだよ～？」
「それは比較対象が間違ってる！」
「え～……」
それ、結局アテナちゃんに劣るってことじゃあ……。
「あんな銀髪さらさらロリ巨乳天使な廃スペック美少女を比較に出しちゃダメ！」
「それはそうかもだけど～……」
それでも、わたしが可愛いっていうのは言い過ぎだと思う。
「言い過ぎじゃないわよ。ユーキ、アンタ中等部で何回くらいコクられた？」
「え？　え～と……七、八回？」
「ほら見なさい！」
「……？」
「っだぁ～！　やっぱりわかってない！　中等部三年間で七回も八回もコクられてりゃ充分モテよ！　リア充よ！」
「そ、そうなの？」
「そうなの！」
「で、でもアテナちゃんとかきっともっと凄いよ？」
「だから！　あの娘を比較に出さない！」

「う……」
なんでか、ついアテナちゃんを引き合いに出しちゃう。別に意識してやってるわけじゃないんだけど……。
「いい！？　アンタは地味だけど、そこそこ容姿も整っててふわっとした雰囲気の癒し系なの！　男心をくすぐるタイプなの！　無自覚に男を寝取るタイプなのよ！」
「ね、ねと……？」
というか、やっぱり地味ではあるんだ……。
「寝取るタイプよ！　だってアタシが当事者だから！」
「え！？」
いきなりとんでもないことを言われた。なっつんはブツブツと「これだから無自覚は……」とか「何が『お前といると疲れるんだ』よ……『加藤の雰囲気が凄く心地良くて』よ……」とか呟いていた。
「そう言えば、なっつん中等部の時……」
「忘れなさい」
「う、うん……」
言いたいことを言って一先ず満足したのか、なっつんは席について、少しトーンを落とした声でわたしを諭し始めた。
「……康彦はアンタに惚れてるわよ。女子の間でも結構噂になってるし」
「そ、そうなの！？」
「そりゃ、毎回タッグデュエルの度に組んでたら噂にもなるわ。アンタの場合、御堂くんとどっちが本命か、とか言われてるし」
「ええっ！？　な、なんでそこでセツくんが～？」
「だってアンタたち、仲良かったじゃない。まあ、御堂くんにはアテナちゃんがいたから、アンタと付き合ってる、とまで思ってる人はいなかったでしょうけど」
なっつんの言葉に、わたしは頭の中がグルグルし始めるのを感じた。
「セ、セツくんとわたしが……でもアテナちゃんいるし……セツく

んは特別で、でもそんなんじゃ……」
「……その様子じゃ、御堂くんの方が本命か。茨の道だわ。あの怖い妹さんとかもいるし」
「ほ、本命……」
「違うの？」
「……」
何も言い返せなかった。顔が熱くなっているのがわかる。その時までは思いもしなかった。或いは、敢えて見ないようにしてたその気持ち。
「はぁ……けど、御堂くんは厳しいわよ。レッドだからって敬遠してる子もいるけど、良く見れば顔もイイし、勉強も出来てデュエルも強い。その内ライバルも増えるでしょうね。なにより……」
そこでなっつんは一息ついて、一つの空席を見やる。
「……フラれたみたいだけど、あの一撃必殺天使アテナちゃんが全力アピールしてるわけだしね」
「い、いちげき……？」
「ん？　ああ、アテナちゃんの通り名よ。入学試験からこっち、殆どのデュエルをワンキルかそれに準ずる破壊力で勝ちまくってるから、一部でそう言われてるのよ。アンタも似たような感じだったでしょ？」
「無限ループでね～……」
ふっ、と思わず遠い目になる。
「まあ兎に角、そんな比較するのも間違ってるような廃スペック美少女相手に、モテとはいえ地味なアンタじゃ、そうそう勝ち目なんてないわよ？　康彦辺りで妥協しとけば？」
「だ、妥協って……」
身も蓋もないなっつんの台詞に戸惑う。
「所詮十台の恋愛じゃない。そこそこ好条件の男が言い寄ってくるんならそれでいいじゃないの。態々手痛い失恋することないって」
「失恋……」

やっぱり、そうなるのかな……。傍から見ていたセツくんとアテナちゃんは、とても楽しそうで、幸せそうだった。わたしじゃ、セツくんをあんなに楽しそうにしてあげることなんてできそうにない。そんな自信は、ない。

「でも……」

ズキン……ッ、と胸が痛んだ。確かに、セツくんとアテナちゃんはお似合いだ。あの二人が付き合ったら、とても幸せで、素敵なカップルになれると思う。

「でも……」

ズキン、ズキン、と痛みが増していく。

「……ま、そうよね」

なっつんはやれやれ、といった感じで苦笑する。わかってるんだと思う。わたしが、意外に頑固だってこと、知ってるから。

「うん……無理だよ」

だって、気づいちゃったから。

「気付いちゃったら……無理だよ」

どうして、何かにつけてアテナちゃんを引き合いに出していたのか。

「だって……」

ライバルだったからだ。同じ人を想う、乙女（ライバル）だったから。

「わたしの、初恋……だから」

諦めるなんて、出来ない。

「勝てるの？　あのアテナちゃんに」

「……勝つよ」

今は無理でも。

「絶対に勝つ」

もっともっと強くなって……いつか、必ず。

……それが、始まり。それから、さだめちゃんをはじめとしてライバルは増えたけど、それでもわたしにとって一番のライバルはアテナちゃんだった。

……アテナちゃんは、どうだったかわからない。わたしのことなんて眼中になかったかもしれないし、少なくともさだめちゃんより手強いとは思われてなかったと思う。

「……わたしは、違ったよ」

わたしが強くなれたのは、セツくんのお陰。わたしが強くなろうと思ったのは、アテナちゃんの存在。

「感謝はしてるよ。アテナちゃんがいたから、わたしは強くなれた。絶対に負けたくない。そう思ったのは、アテナちゃんが初めてだったから」

「ユーキさん……」

「どうしようもないの。もう、どうしようもないくらい、セツくんのことが好きだから……アテナちゃん」

わたしは、全力で……。

「アテナちゃんを……倒すよ」

第四期第二十六話「静寂の始まり・後編」（後書き）

おまけ（笑）

「ところでなっつん。なんで田中くんのこと呼び捨てなの？」

「え？　そりゃ、アタシも田中だもん。紛らわしいじゃない」

「あ、それもそっか～」

（危ない危ない……若干天然入ってて助かったわ）

こんにちは。

今回は、時期的には第一期。そのユーキちゃん視点のお話になりますね。色々と、後付けな感じの伏線もいくつか。

今回二人程タッグフォースキャラ出しました。田中を二人ほど（笑）。康彦くんの方は、まあ情報に敏い人なら知ってるでしょう。タッグフォースに於けるユーキちゃんの相方です。ただし、3まで。事情は……まあ、調べてみてください。今回の話は大体それに乗っ取ってるんで。これがその理由だったんだよ！　みたいな。

田中奈津代の方は、別にゲームでユーキちゃんと関わりがあったわけじゃないんですが、同じ田中姓で同じネフロード（正確には、康彦くんの方はその要素もある、というだけ）と、共通点が多かったので選出。中学時代、彼氏をユーキちゃんに寝取られた（笑）にも関わらず、友達やってる良い子。

ユーキちゃん、実は結構モテだった事実発覚。大抵の理由は、傍にいると心地良いから。ちなみに、同じ理由で女子からも嫌われていません。良いポジショニングです。

そしてついに判明したアテナの通り名。一撃必殺天使。人によっては、恐怖の、の枕詞が付きます。主にトラウマになった人が。

次回、恐らくはアテナＶＳユーキちゃん編クライマックス！　恐らくは誰もが予想してなかったあのカードが飛び出します。何が出

るかはお楽しみ。
それでは、悠でした！

第四期第二十七話「レベルカンストの恐怖！　アテナの覚悟」（前書き）

早めの更新です。というのも、このデュエルの流れ自体がユーキちゃんの過去話を書くより前から決まっていたおかげですが。

それと、今回のデュエルに例によって『命削りの宝札』が出てくるのですが……諸事情により、原作のものとはちょっと効果が違います。理由としては、どうやら悠はかなり以前からその効果を間違えて覚えていたらしく、通常魔法ではなく永続魔法になってたりします。ただ、今回のデュエルの流れは変えたくないので、申し訳ありませんが以下の効果をアルカナ版『命削りの宝札』として認識しておいてください。申し訳ありませんでした。

・『命削りの宝札』　永続魔法

効果

手札が五枚になるようにデッキからカードをドローする。このカードは発動後五ターン目のスタンバイフェイズ時に破壊される。

このカードが破壊された時、自分は手札を全て墓地に送る。

以上です。悠の勝手な勘違いで効果を変えてしまい、本当に申し訳ありませんでした。以降、アルカナに於いてはこのような効果で通しますのでよろしくお願いします。

第四期第二十七話「レベルカンストの恐怖！　アテナの覚悟」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第二十七話「レベルカンストの恐怖！　アテナの覚悟」

「私は……モンスターとカードを一枚ずつセットして、ターンを終了します」

正直ミスティック・ソードマン系列の効果を考えれば、この行為にどれほどの意味があるかはわかりません。ですが、フィールドを空の状態でターンを終了するわけにもいかず、私は仕方なくカードをセットしました。

「わたしのターンだね。ドロー！」

ユーキさんの手札はこのドローで二枚。フィールドには攻撃力３３００の『ミスティック・ソードマンＬＶＭａｘ』と、攻撃力が２５００まで上昇した『サイレント・マジシャンＬＶ４』の二体……純粋な攻撃力だけでも脅威ですが、『ミスティック・ソードマンＬＶＭａｘ』の効果も未知数です。

「わかってると思うけど……ミスティック・ソードマン相手に裏守備なんて通じないよ。まあ、ＬＶＭａｘに関しては、表側でも無駄だけどね～」

余裕の表情のユーキさん。ですが、ミスティック・ソードマンに仕事はさせません！

「じゃあ……行くよ！」

「させません！　私はトラップカード『威嚇する咆哮』の効果を使

います！　このターン、ゆーきさんは攻撃宣言を行えません！」
「……仕方ないね。わたしはカードを一枚セットしてターンエンドするよ～」
　また、一枚の伏せカード……流石に、ユーキさんも息切れをしてくる頃だと思いますが……。尤も、私の方はそれ以上に酷い状況ですけど。
「私のターン、ドロー！」
「この瞬間『サイレント・マジシャンＬＶ４』ＡＴＫ２５００→３０００乗るよ！」
　『サイレント・マジシャンＬＶ４』にカウンターが一つ引いたのは……『光神テテュス』。私のデッキにおけるエンジンです。でも、この状況ではその効果を有効に使えません。けど！
「私も……」
「？」
「私も、負けるわけにはいかないんですよ！　モンスターを反転召喚！」
　このデュエルには、文字通り全てがかかっています！　セツのこと、終焉のこと、そして何より……。
「ユーキさんのことも、です」
　私がこのデュエルに負けたら、私だけじゃありません。ユーキさんだって、大切なものを失う。そんな、気がするんです。戻れなくなる。きっと。だから……！
「私は……勝ちます！　リバースした『魔導雑貨商人』の効果を発動します！」
　『魔導雑貨商人』ＡＴＫ２００
「リバースモンスター……昆虫族！？」
「私は確かに天使族使いですが……種族統一デッキと言うわけじゃありません！」
　何より『魔導雑貨商人』の効果。デッキからモンスターを墓地に送り、魔法・罠を手札に加えられる効果は、私のデッキと相性が良

いです！
「デッキの上から魔法か罠が出るまでカードをめくり、手札に加えます！」
一枚目『緑光の宣告者』二枚目『虚無の統括者』三枚目『ヘカテリス』四枚目『シャインエンジェル』五枚目『紫光の宣告者』六枚目……。
「来ました！　私は『命削りの宝札』を手札に加えます！」
「ドローカード……！」
サイレント・マジシャンを成長させてしまいますが、背に腹は代えられません。
「そして『魔導雑貨商人』をリリースして『光神テテュス』をアドバンス召喚！」
「テテュス……！？　このタイミングで！？」
「そして私は当然、永続魔法『命削りの宝札』の効果を使わせてもらいます！　デッキからカードを五枚ドロー！」
五枚の中に天使族モンスターは……。
「当然、います！　テテュスの効果を発動します！　『勝利の導き手フレイヤ』をオープンしてドロー！」
「くっ……でも、その前に『サイレント・マジシャンＬＶ４』に最後のカウンターが乗るよ！」
『サイレント・マジシャンＬＶ４』ＡＴＫ３０００→３５００
これで、サイレント・マジシャンはレベルアップ条件を満たしました。けれど、それは承知の上です！
「一枚目……『コーリング・ノヴァ』！　ドローします！『アテナ』です。ドロー！『反魂のスピリチュア』！」
私のカード。ですが、今は正直いりません！
「更にドローします！『オネスト』！　ドロー！」
「っ……」
私がオープンしたカードに、ユーキさんが苦しげな顔を見せます。
『オネスト』の有効性は当然ユーキさんも知っています。

「これで……！」
攻略の手は整いました！
「ドローを終了します。バトルします！『光神テテュス』で、『ミスティック・ソードマンＬＶＭａｘ』を攻撃します！『ホーリー・サルヴェイション』！」
「『オネスト』で倒そうとするなら無駄だよ！『ミスティック・ソードマンＬＶＭａｘ』の効果発動！　戦闘を行う相手モンスターの効果を無効にし、ダメージ計算を行わずに破壊することが出来る！」
「……そうだと、思いました」
「！」
「レベルモンスターの効果は、段階的に強力になって行きます。裏守備を問答無用で破壊しつつ、墓地で発動する効果すら発動させないことができるミスティック・ソードマン系列の最高レベルなら、戦闘の時に発生する破壊効果があると……」
「アテナちゃん……」
「ユーキさんが心理誘導してきたとしても、私はそれを超えて見せます！　どれだけ誘導しても、変えられない結果を見せて！　手札から『朱光の宣告者（バーミリオン・デクレアラー）』の効果を発動します！」
「わたしの知らない……宣告者！？」
そう。この『朱光の宣告者（バーミリオン・デクレアラー）』は、ユーキさんが精霊界に行ってしまってから手に入れたカード。ユーキさんが知らないのも当然です。
「新しいカードを手に入れたのは、ユーキさんだけじゃありません！『朱光の宣告者（バーミリオン・デクレアラー）』は、手札から天使族モンスターと墓地に送ることでモンスター効果を無効にして破壊します！　私は手札の『シャインエンジェル』を墓地に！」
テテュスに切りかかるミスティック・ソードマンの前に飛び出した『朱光の宣告者（バーミリオン・デクレアラー）』が、朱色の輝きと共にミスティック・ソードマンを呑みこんで行きます。
「きゃ……！」
「まだですよ！　攻撃対象が居なくなったことにより、戦闘の巻き

戻しが発生します！　テテュスで『サイレント・マジシャンＬＶ４』を攻撃します！『ホーリー・サルヴェイション』！」

これなら……！

「それは、させないよ！　トラップカード『サイレント・チェンジ』！　相手の攻撃宣言時、攻撃対象となったモンスターを破壊することで、そのモンスターよりレベルの低いサイレントと名の付くモンスターを特殊召喚してバトルフェイズを終了させるよ！　わたしは『サイレント・マジシャンＬＶ４』を破壊してデッキから『サイレント・ソードマンＬＶ３』を特殊召喚！」

『サイレント・ソードマンＬＶ３』

「っサイレント、ソードマン……」

遂に出てきましたか。ユーキさんのフェイバリットモンスター……しかも、バトルフェイズを強制終了されてしまったので追撃もできません。

「……私はこれでターンエンドです。エンドフェイズに、手札から溢れた『コーリング・ノヴァ』と『反魂のスピリチュア』を墓地に捨てます」

私自身ではありますが、少なくともこのデュエルに於いては真価を発揮できません。

とりあえず、目先の脅威であったレベルカンストモンスターとサイレント・マジシャンを破壊することは出来ました。その上、手札アドバンテージも上回ることが出来ましたし、私の手札にはまだ『オネスト』も残っています。

「これで、形勢逆転です！」

「……そう思うのは、早いよ」

しかし、ユーキさんの表情は変わりません。

「強がっても無駄です！　そんなハッタリはもう、通じません！」

「強がり、かぁ」

私の指摘にも、ユーキさんは一切動揺しません。

「アテナちゃん、わたしがハッタリと心理誘導だけしか出来ないと

思ったら大間違いだよ」
「え……」
「見せてあげるよ。これが、わたしの切り札だから。ドロー！」
切り札……？　まさか、ミスティック・ソードマンみたいに……。
「このスタンバイフェイズに『サイレント・ソードマンＬＶ３』をレベルアップ！『サイレント・ソードマンＬＶ５』を特殊召喚！」
『サイレント・ソードマンＬＶ５』ＡＴＫ２３００
「更に、これがキーカード！　永続魔法『チートコード』！」
「ちーと、こーど……？」
「ゲーム得意じゃないアテナちゃんは知らないかもね～。チートって言うのは、要するにズルとか、騙すって意味。システムとか、データを改ざんしたりすることでもあるんだけど……この『チートコード』の効果は、一ターンに一度、レベルモンスター一体の効果を発動条件を無視して発動することが出来るって効果だよ」
「それは、つまり……」
「そう。『レベルアップ！』とは違う、レベルアップモンスターの正規特殊召喚。例え、スタンバイフェイズやエンドフェイズじゃなくっても、発動条件を満たしていなくても、正規レベルアップを実現させるチートコードだよ。『サイレント・ソードマンＬＶ７』を特殊召喚！」
『サイレント・ソードマンＬＶ７』ＡＴＫ２８００
「くっ……！？」
一ターンでサイレント・ソードマンが最高レベルまで……！　けれど、例えテテュスの攻撃力を上回っていても、『オネスト』がいる以上、迂闊に攻撃は出来ない筈……。
「ねぇ、アテナちゃん」
「なんですか？」
「永続魔法『命削りの宝札』のデメリット効果、知ってる？」
「……五ターン後に破壊され、破壊された時手札を全て捨てる効果、です。まさか……」

「そのまさか、だよ。わたしのフィールドに、ＬＶ５の効果で特殊召喚された『サイレント・ソードマンＬＶ７』が存在する時、そのカードを墓地に送ってこのカードを特殊召喚するよ……来て。わたしの切り札。『サイレント・ソードマンＬＶＭａｘ』！」

『サイレント・ソードマンＬＶＭａｘ』ＡＴＫ３８００

「レベル……マックス。攻撃力、３８００、アルカナクラス！？」

二体目のレベルカンストモンスター……それも、ユーキさんのフェイバリット。一体、どんな効果が……。

「『サイレント・ソードマンＬＶＭａｘ』のモンスター効果。特殊召喚に成功した時、フィールド上の表側表示の魔法カードを全て破壊するよ！　沈黙の世界へ！『サイレント・フィールド』！」

サイレント・ソードマンが、その手に持つ剣を地面に突き刺すと、私の背後にそびえるヴァルハラが、音もなく崩れ落ちて行きます。

「わたしの『チートコード』。アテナちゃんの『神の居城―ヴァルハラ』と……『命削りの宝札』も、だよ」

「……それじゃあ」

「『命削りの宝札』は、破壊された時全ての手札を失う。アテナちゃん。手札を……『オネスト』を、捨てて貰うよ」

「あ……」

折角の『オネスト』が、使うことなく叩き落とされてしまいました。

「さあ、バトルするよ。『サイレント・ソードマンＬＶＭａｘ』で『光神テテュス』を攻撃！『沈黙の剣ＬＶＭａｘ』！」

「きゃあああああああっ！？」

アテナＬＰ２７５０→１３５０

「ターンエンド。それとねアテナちゃん。『サイレント・ソードマンＬＶＭａｘ』が表側表示で存在する限り、アテナちゃんは魔法カードを発動出来ないから、そのつもりでね」

「っ……！」

これが……レベルカンストモンスター！

「ユーキさんの、切り札ですか」
「そうだよ」
淡々と、でも自信に満ちた顔で、ユーキさんは頷きました。それは、以前のユーキさんには見られなかった表情で、それだけ固い決意と覚悟を感じさせます。
「っ……」
気圧されているのが、嫌でもわかります。こんな人に、私は勝てるのでしょうか。いえ、勝てると仮定して、勝っても良いのでしょうか？　こんな、簡単に気圧されてしまう程度の意志しか持たない私が。
「……ドロー」
それでも。
「私は、モンスターを一体守備表示でセット。ターンエンドです」
脳裏にちらつくのは、セツの顔。
「……まだ、やる気だね。アテナちゃん」
どうしたって、諦めきれないものがあります。この戦いに、それが賭けられている以上。
「退くことは出来ません。例え、ユーキさんがどんな強い決意を持っていたとしても。私は、私は……！」
セツを、諦めない。
「思えば私は、ずっとそれだけしかありませんでした」
セツと出会ってからの私は、比喩でも、大げさでもなく、セツが世界の中心でした。セツに振り向いてもらうため。セツに選んでもらうため。セツを守るため。セツを取り戻すため……。
「……もう、セツのいない日々なんてあり得ません。セツを諦めた私は、ただの抜け殻。人形ですらありません」
これが、依存だとしても。これが、セツに負担を強いる行為だとしても。
「今の私は、セツ在っての私です。セツを諦めることなんて、死んでも出来ません」

「……そっ、か。でも、うん。わかるよ。その気持ち。でも、でもねアテナちゃん。いざという時、相手の幸せを想って退く勇気も、必要なんだよ」

「そうかもしれません。けど、違う。違うんですよユーキさん。真に相手を想うなら、相手の幸せのために退くんじゃなくて、自分が絶対、誰より幸せにして見せる。その気持ちが、大切なんだと思うんです」

「アテナちゃん……」

「独りよがりかもしれません。自分勝手な思い込みかもしれません。けど、私はセツと一緒に幸せになりたい。私が一番に、セツを幸せにして見せる。今はただ、それだけを望みます」

「……そう」

ユーキさんは、しばらく眼を閉じて、何かを考え込んでいるようでした。そして、次に目を開いた時、その目には変わらず闘志を宿していました。

「なら、わたしも同じ。わたしは、わたしのやり方で、セツくんを支える。例えアテナちゃんたちと決別しても、必ず」

「……安心しました」

「どういうこと？」

「ユーキさんも同じなら、このデュエル。どちらが勝ってもセツは幸せです。誰よりも」

「……そうだね。じゃあ……最後の勝負を、始めようか」

「はい！」

「わたしのターン！　ドロー！」

ユーキさんが引いたのが、リクルータークラスのモンスターであれば、私の負けです。いえ、場合によっては、モンスターの時点で負けが決まります。何故なら、私の守備モンスターは『聖なるあかり』……守備力ゼロの、このデュエルでは使い道のない効果しか持たない壁でしかありません。

「……」

どうです……？
「……命拾いしたね。わたしはカードを一枚セット。バトルするよ」
「っ……」
思わず、安堵のため息を吐きます。
「バトル！『サイレント・ソードマンＬＶＭａｘ』で守備モンスターを攻撃！『沈黙の剣ＬＶＭａｘ』！」
「っ……！」
巨大な剣に貫かれて、淡い輝きは虚しくも散って行きます。けれど、その役目は果たしてくれました。
「『聖なるあかり』……モンスターさえ引いていれば、わたしの勝ちだった」
「……はい」
でも、状況は結局変わっていません。ユーキさんのフィールドには、攻撃力３８００を誇る『サイレント・ソードマンＬＶＭａｘ』と、謎の伏せカードが一枚。対して私のフィールドは空で、手札もゼロ……絶望的、ですね。
「ラッキーは何度も続かないよ。魔法も使えず、フィールドにも手札にもカードがなく、墓地肥しやドロー促進で削れたアテナちゃんのデッキはもう十枚ちょっと」
「……はい。次が、きっと最後です」
もうこうなっては、ドロー加速も出来ません。ドローカードは大半が魔法ですし、残り少ないデッキに、壁モンスターがどれだけ残っているかは疑問が残ります。
「きっとこれが、最後のドロー……」
眼は閉じて、雑念は捨てます。バクバクと暴れ出す心臓も、無理矢理抑えて、自分のデッキだけに集中します。
「……」
お願いです。このデュエル、絶対に勝たなくちゃいけないんです。だから……だからお願いです。私のデッキ……。
「応えて……！　ドロー！！」

セツ……！
「……ありがとう、ございます」
「っ……！？」
「私の、勝ちです。ユーキさん」
瞠目するユーキさん。それもそうでしょう。手札、フィールド共にゼロ。ライフは無傷のユーキさんに対して、私はリクルーターのダイレクトアタックにも耐え切れない。そんな状態での、勝利宣言。
「何を……引いたの？」
「……私は」
私はドローしたカードを、高く、高く掲げます。そして、呼び出します。私が引き当てた、勝利のカードを！
「私は、手札から『究極時械神セフィロン』を特殊召喚します！」
『究極時械神セフィロン』ＡＴＫ４０００
「こ、攻撃力……４０００！？　そんな、何の前触れもなく、そんな攻撃力のモンスターが……！？」
「『究極時械神セフィロン』は、墓地にモンスターが十体以上存在する時のみ、手札から特殊召喚することが出来る私の扱える最高クラスのモンスター……そして、その効果は」
『究極時械神セフィロン』の身体が眩い光に包まれます。
「一ターンに一度、手札か墓地から、レベル８以上の天使族モンスター一体を、効果を無効にし、攻撃力を４０００にして特殊召喚することができます！」
「っ……そ、そんな」
「私は……墓地から『光神機―轟龍（ライトニングギア）』を特殊召喚します！」
『光神機―轟龍（ライトニングギア）』ＡＴＫ２９００→４０００
「う、嘘……何もないところから、一瞬で攻撃力４０００のモンスターが二体……！？　そんな、そんなの……！」
「決めます！　バトル！『究極時械神セフィロン』で、ユーキさんの『サイレント・ソードマンＬＶＭａｘ』を攻撃！『アカシックストーム』！！」

セフィロンの放つ波動が、サイレント・ソードマンに向かって突き進んでいきます。これで、これで……！

「まだ、まだだよ……！　まだ、終わってない！　まだわたしには、伏せカードが残ってる！」

「!?」

「トラップ発動！『強制脱出装置』！　これで、フィールド上のモンスター一体を手札に戻す！」

「な、それじゃあ！」

「そう、そうだよ……！　これで轟龍を戻せば、まだわたしのライフは……っ！?」

ライフは残る。そう言おうとしていたユーキさんの目が、大きく見開かれます。そして、唇を噛みしめました。

「わたしは……わたしは……！」

「ユーキさん……？」

ユーキさんは、最後にふっ……と諦めたように、力ない笑みを浮かべました。

「わたしは……『サイレント・ソードマンＬＶＭａｘ』を、手札に戻すよ」

「……え!?」

セフィロンの射線上から、『サイレント・ソードマンＬＶＭａｘ』が音もなく消えて行きます。そして……。

「っ……あぁっ!?」

ユーキＬＰ４０００→０

セフィロンの放った光条は、容赦なくユーキさんを呑みこんで行きました。

「まだ、まだだよ……！　まだ、終わってない！　まだわたしには、伏せカードが残ってる！」

アテナちゃんの逆転の一手には驚かされたけど、まだわたしには出来ることが残ってる！

「！？」

「トラップ発動！『強制脱出装置』！　これで、フィールド上のモンスター一体を手札に戻す！」

一時凌ぎでしかないとわかってる。この攻撃を耐えたとしても、わたしの手札はゼロ。フィールドもゼロで、アテナちゃんのフィールドには攻撃力４０００のモンスター……一瞬前とは真逆の状況に立たされてしまう。それでも！

「な、それじゃあ！」

見苦しくても、最後まで足掻いて見せる。そう、思った。

「そう、そうだよ……！　これで轟龍を戻せば、まだわたしのライフは……っ！？」

残る。そう、言おうとした。けど。

「わたしは……わたしは……！」

その視界に、攻撃を受けとめようと剣を構えるサイレント・ソードマンの姿が映った時、わたしは思わず唇を噛みしめた。

「ユーキさん……？」

ふっ……と、力のない笑顔が自然に浮かぶ。

――そう。そうだよね……。

「わたしは……『サイレント・ソードマンＬＶＭａｘ』を、手札に戻すよ」

「……え！？」

それが、わたしの選択だった。アテナちゃんだけじゃなく、今にも攻撃を受けようとしていたサイレント・ソードマンまでもが、驚きに目を見開いたような気がした。

迫り来る光の奔流。わたしの視界が、白く、白く染まった。

「ユーキさん！」
がくり、と力なく項垂れているユーキさんの下に、慌てて駆け寄ります。
「ユーキさん、どうして……？」
どうして、サイレント・ソードマンを戻したのか。あそこで轟龍を戻していれば、少なくともあのターンで負けることはなかった。もしかしたら、逆転の可能性だってあったかもしれません。なのに……。
「ダメ、だよ……」
「ダメ……？」
あれだけの決意と覚悟を持って戦っていたユーキさんが、意味もなく諦める筈がありません。いえ、諦めたにしても、サイレント・ソードマンを戻す意味は……。
「勝てたかもしれない……逆転出来たかもしれない。でも……」
ユーキさんは、その手に持ったサイレント・ソードマンのカードを抱きしめます。
「このカードだけは……この、サイレント・ソードマンだけは、破壊させない」
「どうして、そこまで……」
「だって……」
ユーキさんは、サイレント・ソードマンのカードを見つめて、力なく笑いました。
「だってサイレント・ソードマンは、絆だから」
「絆……？」
「セツくんと、わたしを結び付けてくれた、何よりも大切なフェイバリットだから……サイレント・ソードマンを盾にして、生き延びるようなこと、出来ない……」
「ユーキ、さん……」
「ゴメンね……サイレント・ソードマン。わたし、わたし……また、負けちゃった」

涙を流しながら、カードを抱きしめるユーキさん。
「頑張ってくれたのに……裏切るようなことしてゴメンね……」
そう言って静かに嗚咽を漏らすユーキさんの胸元が、ポゥ……と僅かに輝きました。
「あ……」
『……』
サイレント・ソードマン。沈黙の騎士は、あくまでも静かに、ユーキさんの頭を優しく撫でて、その姿を消しました。
「今のは……精霊？」
「そう、だったんだ……」
ユーキさんは、尚も強くカードを抱きしめます。
「ずっと、見守っててくれたんだよね……」
サイレント・ソードマンは、言葉を発さない。自己主張をしない精霊だったから、わからなかったのでしょう。その沈黙の騎士が、一瞬とはいえ現れて、ユーキさんを慰めた……。それだけ、強い絆があったから。
「わたし、もっと強くなるよ……貴方のマスターに相応しくなれるように……もっと、もっと……頑張るから……っ！」
「ユーキさん……」
それ以降は言葉にならず、とめどなく流れる涙をそのままに、ユーキさんは泣いていました。
「一緒に、行きましょう」
「……」
「セツを取り戻して、皆で幸せになるんです。それには……ユーキさんの力が必要です」
「アテナ、ちゃん……」
「デュエルの前に、言いましたよね？　全てを賭けるって……私が望むのは、それだけです。一緒に戦いましょう。そして、セツを……」
「……」

「ユーキさん……」
「……わかっ、たよ」
長い沈黙の後、ユーキさんは小さくそう呟きました。
「全部、話すよ。セツくんのこと。エンヴィーのこと。わたしの知っていること、全部」
「……お願いします」
「でも、でも今は……もうちょっと」
「……はい」
そのまま、ユーキさんはまた、静かに泣き始めました。そんなユーキさんの背を撫でながら、私はより強く、セツを取り戻す意志を固めるのでした。

第四期第二十七話「レベルカンストの恐怖！　アテナの覚悟」（後書き）

こんにちは。

ええ、まあ何を言いたいかはわかります。皆さんの心の声を代弁して見せましょう。究極時械神出ちゃったよ！

流石にこのカードを使うか否かは悠自身かなり葛藤したのですが……。アテナのデッキに物凄く相性がいいのと、ＯＣＧ版効果の究極時械神の効果が土壇場からの逆転劇に非常に相応しかったことでの大抜擢です。前回のあとがきで言っていた誰も予想しないであろうカードとはコレのことです。

そして、今回登場したオリカは以下の四枚。『ミスティック・ソードマンＬＶＭａｘ』『サイレント・チェンジ』『チートコード』『サイレント・ソードマンＬＶＭａｘ』。以上四枚は、後ほど活動報告にて。後日オリカ紹介にもアップします。

さて、これでユーキちゃん編が終わり、遂にヒロインが終結します。いやぁ……長かった。物凄く長かった。第二期の最後にアテナが離脱してからというもの、入れ替わり立ち替わり全然揃わなかったヒロインがやっとこさ集まりました。そして次回一話のインターバルを挟み、とうとうセツ編。そしてクライマックスへ……。長かったアルカナも、とうとう終わりが見えて参りました。どうか最後までお付き合いの程、よろしくお願いいたします。

それでは、悠でした！

第四期第二十八話「勝たない！？」（前書き）

徐々に更新速度が戻ってきました。といっても、ぽっかり時間が空いたので書く時間が取れたと言うだけなんですが。あと、やっぱりさだめ視点は書き易い。

というわけでインターミッションです。タイトルの意味は、ラスト付近にて。今回目立っているのは……ルインかな？

第四期第二十八話「勝たない！？」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第二十八話「勝たない！？」

「それでは、今ユーキさんの中に終焉は既にいないんですね？」
「終焉じゃなくて、エンヴィー」
ユーキさんは訂正してから、アテナの質問に頷いた。
「元々、エンヴィーが器を必要としていたのは失った力を取り戻すためだったみたいだから～。ほんの一年ちょっとだけど、アテナちゃんたちが集まってきたことで急速に力は戻って、最近はもう独立してるよ～」
さだめたちが集まって、世界の歪みが増した……。
「何か、聞けば聞くほどアテナ元凶だよね」
「うっ」
さだめの指摘に、アテナが目を逸らす。
「最初に終焉の花嫁になって？」
「ぐっ……！」
胸を押さえて呻く。
「精霊になってからは取り逃がしてさだめとお兄ちゃんが巻き込まれて」
「うぅっ……！」
目尻に涙が溜まってきた。
「こっちの世界に引き寄せた挙句ユーキさんを巻き込んで……と」

「う、うぅ……」
アテナがぷるぷると震えだした。
「うわぁ～っん！！」
遂に爆発して隅の方で小さくなってしまった。
「……その辺にしておけ」
「はぁい」
一頻りアテナをイジメて満足したさだめは改めてユーキさんに向き直る。
「いじめっ子ですわね……」
「あれがコミュニケーションの一種なのだろう。気持ちはわかる」
後ろで何か言ってるけど、とりあえずスルーして質問する。
「それで、ユーキさん。何よりも聞きたいことがあるんだけど……」
「……うん。なんでも聞いて。さだめちゃん」
神妙な顔でさだめを見るユーキさんに、さだめも真剣な表情で尋ねる。
「お兄ちゃんとヤッたの？」
「ちょっと待て」
「何エース。さだめは今、とてつもなく大事な質問の答えを待っているところなんだけど」
「後にしろ！」
「や、ヤッてないよ！？」
「貴様も答えんでいい！」
「なら良し。さだめにはもう聞くことがないよ」
「もっと大事なことが他にいくらでもあるだろうが！」
「はっ！？　そうか。そうだね……」
「全く、貴様はもう少し……」
「ユーキさん！　記憶を失ってからのお兄ちゃんとの生活について詳しく！」
「もう貴様は黙れ！」
エースが本気で剣を抜きかねないので、エース弄りもこの辺にし

ておく。
「いや～エースは弄ると楽しいね。お兄ちゃんが一々喧嘩売ってた気持ちがわかったよ」
「ジャック！　この妹地下牢にでも放りこんで来い！」
「いえエース。さだめ様は正直、私の手には余ります」
「で、結局お兄ちゃんはどうして記憶を失ったの？」
「何事もなかったかのように話を戻すな！」
エースがまだ何か喚いているけど、お兄ちゃん直伝のスルーでユーキさんの言葉に耳を傾ける。
「わたし……とエンヴィーとデュエルした時に受けたダメージが切欠になったんだと思う」
「切欠？　主原因じゃなくて？」
その質問には、ルインが答えた。
「……元々、彼の精神は限界だった。この世界に来てから……来る前から」
チラリ、とさだめを見てから、ルインは言い直した。
「……お兄ちゃん、さだめのことずっと守ってきたからね。たった一人で」
お母さんも、お父さんも助けてくれなくて……それどころか、守っているさだめ自身からこそ沢山の痛みを受けて。
「……この世界に来てからも、彼の精神はいつも崖っぷちだった。ここ最近は特に顕著で、心の支えとしていた少女の失踪から始まり、妹の自殺未遂、友人の裏切り、お姫様の死……」
ルインの言葉に、アテナ、さだめ、ユーキさん、希冴姫さんの全員が暗い顔で俯く。さだめたちが、どれだけお兄ちゃんに負担を強いていたか、それがよくわかる。
「……私も、全てわかっていて何も出来なかった。現状の幸せに甘えて、彼を助けてあげられなかった。これがきっと、私の罪」
怠惰。でもさだめは、ルインが決して怠惰に過ごしていたとは思っていない。

「それは違うよルイン。ルインは十分、お兄ちゃんを気遣ってた」
「……そうですね。思えば近頃は、ルインさんが無意味に煽って騒動を大きくしたり、セツに負担がかかることをしてはいなかったです」
「……わたくしの看病や、セツ様自身の看病。女神としてのプライドも度外視でセツ様が家事をするのを代わっていたのは知っていますわ」
「……そんなこと、ない」
さだめたちの言葉にも、ルインは首を振る。
「私は、貴女たちにそれを伝えることをしなかった。私たち全員で、彼を休ませてあげることが出来れば、まだ……」
「それは、わたしたちの問題だよ～」
「そうです。私たちが、セツに依存し切って何も見ようとしなかったのが原因です」
「気付いて差し上げることが出来なかった自分自身を棚に上げて、ルイン様を責める様な恥知らずはできませんわ」
お兄ちゃんは皆の中心で、でもだからこそ、独りだった。さだめたちは縋るばかりで、お兄ちゃんの負担になるばかりだった。
「……張りつめて、気力だけで持っていた彼の心が、彼女とのデュエルで切れた。彼は……セツは言っていた。今倒れたら、立ち上がれない……だから今は、どんなに辛くても進み続けるしかない、と」
歯を食いしばって、折れそうな心を無理矢理奮い立たせて、お兄ちゃんは戦って……。
「負けて、しまったんですね……」
「記憶を失ったセツは、いつもは被っていた人当たりのいい明るい仮面を被れていない。今のセツは、記憶を失っているけれど、限りなく素の彼に近い」
お兄ちゃんは、自分を演じている。そのことは、さだめたちもわかってた。けど、演じているといってもそれは別に嘘のお兄ちゃんというわけじゃない。けど……。

「……セツくんは、泣いてたよ」
「え……？」
小さく呟いたユーキさんの言葉に、全員が注目する。
「記憶を無くして、全ての柵から解放されて……泣いてた。それが、嬉し涙だったのか、無くした記憶を惜しんでの涙だったのかはわからない。でも……」
ギリ、と下唇を噛んで、ユーキさんは絞り出すように続けた。
「わたしは……っ！　なければいいって、思った……！　セツくんを苦しめるような、涙を流させるような記憶なら……なくなったままでいいって……そう、思った。だから隠した！　さだめちゃんたちのこと、全部隠して、“ただの”セツくんとして……わたしが。そう、思ったから……」
それが、間違っていたとは思えない。立場が違えば、さだめたちだって同じことをしいたかもわからないから。
「……それでも、彼は守ることを選んだ」
でもルインは、冷静にそう指摘した。ユーキさんはコクリと頷く。
「セツくんはわたしを……エンヴィーを守る騎士になった。そんなこと、しなくてもいいのに……アテナちゃんたちと殺し合うセツくんなんか、見たくなかった」
「だから、一人で私と……？」
ユーキさんは頷く。
「アテナちゃんと……さだめちゃんを退ければ、なんとかなるって思った。セツくんがいない今、実力的に一番上だろう二人に勝って、退かせれば……」
でも、無理だった。多分、ユーキさんもわかってたと思う。例えさだめたちに勝って、さだめたちを退かせたとして、状況は何も変わらない。
「ねぇ、さだめちゃん」
「なに？」
「厳しいことを言うけど、セツくんが苦しんだ一番の原因は、さだ

めちゃんだよ」
「……わかってる」
言い訳のしようもない。まともじゃなかった、なんて言い訳は、さだめにとってもタブーだ。
「記憶を取り戻せば、セツくんはきっと苦しむよ。もしかしたら、今度こそ心が耐え切れないかもしれない。……それでも、セツくんの記憶を取り戻したい？」
「取り戻したい」
即答した。
「これは、さだめのエゴだけど……お兄ちゃんに忘れられたさだめは、何者でもなくなってしまうから。さだめはさだめのために、お兄ちゃんに記憶を取り戻して貰いたい。それを、誤魔化すことはしない」
「私も……セツには思い出して貰いたいです」
さだめの言葉に、アテナも頷いた。
「それに、それでセツが苦しむのなら、今度こそ私が支えます。セツを……」
「……同意ですわ」
希冴姫さんも、強い目で頷く。
「わたくしは、騎士の本分を果たせませんでしたわ。ですから、今度こそ本当の意味で、セツ様をお守りします。そのためにも、記憶は取り戻して頂かねばなりませんわ」
「……私は、どちらでも構わない」
ルインだけは、少し違った。
「例えどちらでも、彼が彼であることに変わりはない。記憶があるに越したことはないけれど……」
ルインはさだめたちを見渡す。
「……やっぱり、過去のアドバンテージがなくなる分、記憶がないままのほうがいいかも」
「ちょっ！？」

「ルインさん！？」
とんでもないことを言いだしたルインに、思わず詰め寄るさだめとアテナ。
「……ふふ」
何がおかしかったのか、ユーキさんが小さく微笑む。
「結局……恋愛バトルなんだね～」
「？　当たり前じゃん」
「……私たちは、いつもそう」
「セツとの恋が、何時でも私たちの中心でしたからね」
そう。思えば何時だってそうだった。
一年の頃、さだめとアテナがぶつかったのも。
アテナが失踪したのも。
さだめが自殺未遂しかけたのも。
ユーキさんが終焉になったのも。
希冴姫さんがお兄ちゃんを庇って一度死んだのも。
「……なんだ。結局、お兄ちゃんが全ての元凶じゃん」
「ですね。セツに恋してなければ、色んな騒動がなかったことになりそうです」
今ここにお兄ちゃんがいれば、きっと苦々しげに唸っていたことだろう。
「ま、というわけでお兄ちゃんには色々思い出して貰うよ」
「そうですね。いい加減決着も着けて貰わないとですし」
「それもまた負担にはなるのでしょうが……」
「それは、彼自身が撒いた種」
「皆容赦ないね～……」
ユーキさんが呆れたように苦笑いする。
「大丈夫！　ユーキさんも含めたさだめたちなら、絶対お兄ちゃんを助けられるから！」
「今まで支えて貰った分、お返ししないといけませんしね！」
「さだめちゃん……アテナちゃん……」

ユーキさんは迷っていたみたいだけど、やがて吹っ切れたのか、うんっ！　と大きく一つ頷いて笑顔を見せた。
「じゃあ、考えよっか～。セツくんの記憶を取り戻す方法」
その言葉に、全員で頷いた。
が、話し合いを始めたところで全員とあることに気が付いた。代表してさだめが思ったことを口にする。
「と言っても、ぶっちゃけデュエルで勝てばいいんじゃないの？」
「身も蓋もないな！」
だって。
「デュエルで記憶が飛んだなら、デュエルで取り戻すのが筋でしょ。どうせほっといてもお兄ちゃんは闇のデュエルを仕掛けてくるだろうし、そこで完膚なきまでにメタメタにしちゃえば、それで記憶戻るんじゃないの？……メッタメタにしてやんよ！」
「……そのデュエルで勝てないのが、一番の問題だよ。さだめ」
ネタも織り交ぜて軽く言うさだめに、呆れたような凛がそう答える。
「セツ先輩、ホントに強いよ。なんて言うか、タクティクスやセンス、引きもそうだけど、もっとこう……別次元の強さ？」
「そうだな。なんつーか、本能的に“勝てない”と思わせちまうような強さがあるぜ。探せばいくらも隙はあるんだろうが……それすらも捻じ伏せるような力だ」
実際にお兄ちゃんと闇のデュエルをした凛の剣士さんは揃って勝てないと評する。
「……まあ、ぶっちゃけ主人公補正に加えて強敵&ダーク化補正も付いてるようなもんだしね……」
さだめは皆に聞こえないように、小さくそう呟いた。これだけとことん補正に守られていれば、そりゃ勝てないよ。
「……さだめさんから見て、セツはどうですか？」
アテナのその若干曖昧な質問に、さだめは少し悩みながら答える。
「ん～……とりあえず、お兄ちゃんのプレイスタイルは後の先を取

る形で、さだめと同じく相手に合わせたデッキを組んでくることが多いよ。だから、相手するのは結構つらいと思う」

　正確に言えば、さだめが相手の弱点を突く攻撃型であることに対して、お兄ちゃんは相手のデッキに対応する防御型のデュエルタクティクスを組んでくる。

「だから、さだめのデッキ程のえげつなさはないけど、付け入る隙はかなり少ないタイプ」

「自分で言いますか……」

「ならば、まずすべきは奴の予想を外すことか。とはいえ……」

「此方も使い慣れないデッキで、どれほどセツ様に対抗できるかは疑問ですわね」

「うん……私も、リチュアを使い慣れてないことが原因で一気に不利になったし……どうして先輩は、あんなに易々といつもと違うデッキを使いこなせるの？」

「元々さだめもお兄ちゃんも、特定のデッキだけをメインに使ってたわけじゃないからね。デッキを組み換えてもパフォーマンスが落ちないのはさだめたちの特権だよ」

　むしろさだめたちからすると、この世界の人たちは自分で使うデッキを限定することで、可能性を狭めているようにも思えるくらい。まあ、この世界には遊戯王ウィキみたいな情報交換サイトとかはないし、一つのデッキを追求するので精一杯なのかもしれないけど。

「じゃあ、セツの相手はさだめさんがするんですか？」

「そうしたいところだけど……」

　正直、さだめはお兄ちゃんに勝てる自信がない。そもそも産まれてこの方、ずっとお兄ちゃんに頼り切りの生き方しかしてこなかったから、さだめの中でお兄ちゃんはかなり絶対的なもので、さだめがガチで戦って勝てる、というビジョンがどうしても浮かばない。

「勝てるビジョンが浮かばない、というのは、私だって同じですね……間近でセツのデュエルをずっと見てきましたし……セツは強い、っていう印象が頭にこびりついてますから」

そして、それは全員同じだった。いざ、お兄ちゃんとデュエルして勝つ自信があるか、そう聞かれると、どうしても首を横に振らざるを得ない。それくらい、お兄ちゃんは強い。

「……どちらにしても、凛。お前はやめとけ。怪我は大丈夫だったにしても、ダメージ全部がなくなったわけじゃねえんだ」

「そんなの、剣士さんも同じです。むしろ、剣士さんの方が……」

確かに、ついさっきお兄ちゃんに殺されかけた二人に任せるのは苦しい。何より、これはさだめたちの手で決着を着けたい。

「とすると……」

さだめとアテナ、ユーキさんにルイン。希冴姫さんはデュエルをする人じゃないから除外するとして……エースもかな？

「……いや、我には荷が重いな。我も所詮、デュエルの精霊でしかない」

「私も……実力的に勝てそうにない」

エースとルインはそう言って辞退した。となると……。

「わたしたち、ですね……」

さだめ、アテナ、ユーキさん。この三人の中から、お兄ちゃんとデュエルする人間を選ぶことになる。当然、さだめだってアテナだって、多分ユーキさんも、自分の手でお兄ちゃんを取り戻したい。けど、事が事だけにこればっかりは我儘とか感情で突っ走るわけにもいかないし……。

「……ねえ、ちょっといいかな～？」

その時、しばらく黙ってさだめたちの話を聞いていたユーキさんが手を挙げた。

「なんですか？　何か案が？」

「うん。みんなの話し合いを聞いていて、やっぱりこれしかないかなっていうのがあるから～」

これしかない？　つまり、考えがあるってこと？

「それは？」

「うん。みんな、セツくんにどうやって勝つか、そればっかり考え

てるけど、結論はもっとシンプルだと思うんだ」
「シンプル……とは？」
「簡単だよ」
こともなげに、ユーキさんはピッ、と指を立てて解決案を提示した。
「勝たない。これが、唯一のセツくん攻略法、だよ～」
そう言って、ユーキさんは自信ありげに微笑んだ。

第四期第二十八話「勝たない！？」（後書き）

こんにちは。

若干いつもより短いですが、まあ所詮インターミッションなのでこのくらいでご容赦ください。

ヒロインが全員揃って会話するなんて、番外除けばいつ以来でしょうか？　いやむしろ、番外くらいでしかなかったような気も……。ついでに、何だかんだ久しぶりのさだめな気がします。二ヶ月ぶりくらい？　うわぁ……。

何気にルインはセツの事を気遣って大人しく、且つ労わるように行動していた事実。少なくとも、三期に入って以降、ルインは常に一歩引いて騒動を起こさないように行動してました。例外は入学式。あの時は元気付けるという名目だったので。そしてルインだけが、セツを精神的に追い詰めるような行動を取っていないのもヒロインとしてはポイントだと思っています。

ラストに向けて加速してきたアルカナですが、明日から四日間程はバイトの研修があるので更新は難しいかもしれません。ようやくセツとのデュエルだというのに申し訳ない。なるたけ早めにアップ出来るように頑張ります。

それでは、悠でした！

第四期第二十九話「記憶を取り戻せ！　目指すは敗北！？」（前書き）

こんにちは。
前回あんな書き方をした所為か、みなさん結構色んな予想を立ててくれました。今回はその回答編になります。デュエル自体は、まだほんの触りだけです。

第四期第二十九話「記憶を取り戻せ！　目指すは敗北！？」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第二十九話「記憶を取り戻せ！　目指すは敗北！？」

「……やはり、来たか」

見渡す限りの闇、闇、闇……。終焉の影響か、一面を闇に包まれた空間に、セツは一人佇んでいた。

「お兄ちゃん……エンヴィーは？」

「ここにはいない」

さだめの問いに、セツは端的にそう答える。

「友紀と連絡がつかなくなった時点で、この場所が突きとめられることはわかっていた。敵が来るとわかっている所に、態々庇護対象を放置するようなバカはしない」

それも当然だろう。普通でもそうするだろうし、用心深いセツのこと、尚更用心して隠している筈だ。

「お前たちに負ける気は微塵もないが、一度に相手できる人数は限られている。何処の誰とは言わんが、俺と誰かを戦わせている間に、エンヴィーを狙う……等と言う狡い戦略を立ててくるとも限らんからな」

「……あの、さだめを見ながら言わないでくれる？　さだめ、そこまで小悪党じゃないよ？」

「よく言いますね。実際それを提案してた癖に」

「ぐむっ……」

友紀の“勝たない”という言葉から真っ先にさだめが連想したのがそれだった。別にセツに勝たなくても元凶であるエンヴィーを倒してしまえば解決じゃないか？　と。

「しかし……お前がそちら側に着くとはな……友紀」

「セツくん……」

言葉を向けられた友紀は、僅かに顔を俯かせ、しかしすぐに顔を上げた。

「……ゴメンね。セツくん。でも、わたし「言い訳は良い」っ……！」

友紀の言葉は、セツに届く前に封殺される。

「……残念だよ。俺が何者か教え、導いてくれた君が、まさか俺の敵に回るとは」

一瞬だけ悲しげに顔を歪め、すぐに目つきを鋭いものに戻す。

「わたしは……！」

「黙れ！　最早、誰であろうと関係ない！　俺がエンヴィーを守る障害になるのなら……俺はっ！……全て、排除するだけだ」

元々は一般人だったとは思えないほどに濃密な殺気が周囲を満たす。思わず、全員の頬を冷汗が流れ落ちる。

「コイツ……オレたちと戦った時より更に冷酷さを増してないか？」

「……多分、余裕がないんだよ。水原さんが最後に見せた抵抗とか……自惚れかもしれないけど、わたしがこっちについたことで」

自分が本当に正しいのか。いや、正しくないことくらい、セツはわかっているだろう。それでも、考えてしまうのだろう。困難にぶつかっても尚、乗り越えて見せる凛たちの姿に。自分から離れ、彼らについた友紀に。セツの心は揺れていた。

「もうやめてくださいセツ！　私たちを排除して、エンヴィーの敵を排除し続けて……その先に何が待っているのか、セツはわかっている筈でしょう！？」

それなら、とアテナが大きく声を張り上げて、説得を試みる。しかし、そんなアテナの悲痛な叫びも、セツには届かない。

「わかっている。ああ、わかっているとも。俺がエンヴィーを守り続けて、そして辿りつく未来。それは……全ての、終わりだ」

終焉。セツにはわかっていた。否、誰にでもわかることだ。終焉たるエンヴィーを庇い続ければ、いつか全てが終焉の闇に沈む。わかっている筈だった。

「じゃあどうして!?　全てを終わらせて……終焉に導いて、それでどうなるんですか!?」

「始まりだ」

「え……？」

アテナの問いに、セツは静かにそう答えた。

「始まりに終わりがあるように、終わりの後には必ず始まりが待っている。終焉が、逃れ得ぬものならば、俺はその先の始まりをこそ渇望する！　例え世界と共に滅びても、新たに始まる世界で、俺は必ずエンヴィーを探し出す。そして……今度こそ守るんだ。本当の意味で、共に歩む未来を」

絶望の先に、セツは希望を見据えている。いや、未来に絶望しかないからこそ、その更に先に希望を繋ぐしか、彼には残されていないのだろう。

「それは……ただの自暴自棄」

ルインが冷静に指摘するが、セツは聞く耳を持たない。

「理想と現実。俺はそのどちらも等しく見据えているだけだ。俺は、俺の理想（みらい）のために、現実（いま）を切り捨てた……それだけだ」

「……らしく、ない」

これ以上答えることはない、とばかりに目線を切るセツに対し、小さく呻くように、さだめが呟いた。

「なに？」

「そんなの、お兄ちゃんらしくない！」

過去のセツを、誰よりも深く知っているが故に。今のセツは、さだめには許せない。

「お兄ちゃんは、確かに何時も理想（みらい）を追ってた。でも、それは現実（いま）

を諦めて追うものじゃなかった！　お兄ちゃんなら、現実（いま）を変えることで、理想（みらい）を掴む。現実（いま）を捨てて理想（みらい）を掴む？　そんな、妄想でしかないことを叫ぶお兄ちゃんは……らしくないよ」

「黙れっ！」

ドスッ！　と音を立ててセツの持つ騎士剣が床にめり込む。

「今更、そんな言葉で何が変わる！？　相容れぬ俺たちがわかりあうことなんて出来やしない！　それでももし、わかりあうことがあるとすれば……」

ジャキン、と剣が変形し、デュエルディスクとなってセツの腕に装着される。

「コイツで語れ。決闘者（デュエリスト）」

言葉は届かない。最初からわかっていたこととはいえ、一同は落胆を隠せない。しかし、そんなことで落ち込んでいる暇はなかった。

「さあ！　誰が戦う！？　お前たちの意志・覚悟・決意・理想……その全てを砕いて見せよう！」

セツの求めに、一歩進み出る者がいた。

「……私が」

アテナだった。

「私が、貴方の相手です。セツ」

話し合って決まったことだった。セツの相手はアテナがやる。そして、それは……。

「……やはりな」

セツの、予想通り。

「……お前しかいないと思っていた。最早、残っているのはお前だけだ」

エース、さだめ、剣士、凛とは既に戦い、ルインにはセツと戦える程の実力はなく、友紀はセツと戦うには心情的に厳しい。故に、アテナしかいなかった。そうでない可能性も考えられただろうが、それでも可能性としてはアテナが一番高かっただろう。

「ええ。そうですね。ですから……」

アテナは決意を秘めた目で、セツを見つめる。
「私とのデュエルに、私たちの命を賭けます」
それは、決着をつけようという宣言だった。このデュエルで負けたら、命を差し出す。その言葉を受け、セツは満足気に笑みを浮かべた。
「それはいい。いい加減、俺も一々削ることが億劫になってきたところだ。このデュエルで……全てが終わる」
そんなセツの言葉に、しかしアテナは首を振る。
「終わりません。終わらせませんよ……絶対に」
それが、アテナの……いや、全員共通の意志だ。
「私たちは殺されることも、セツを殺すことも絶対にしません。必ず、生きて……貴方を」
取り戻す。最後まで語るまでもなく、アテナの目はそう言っていた。
「面白い。なら、見せて貰おうか。お前たちの……最期の悪足掻きを！」
「行きますっ！」
アテナが構えると同時、周囲に闇の炎が巻き起こる。闇のデュエル、そのリングの中心で、アテナとセツ。二人の声が響き渡った。
「「デュエル！！」」
アテナＬＰ４０００
セツＬＰ４０００
デュエルが開始されても、セツは動きを見せない。先攻は譲る、という意思表示なのだろう。
「私のターン、ドロー！」
勢い良くデッキからカードをドローするアテナを見つつ、さだめたちは小声で話し合う。
「……始まったね」
「うん。もう後は、アテナちゃんに任せるだけだよ～」
「上手く行きゃいいけどな……」

若干不安気に眉を顰める剣士に、凛がまあまあと宥める。
「アテナを信じましょう。剣士さんだって、信じてないわけじゃないんでしょ？」
「そりゃ、な。けど、事が事だけに慎重にならざるを得ないのも事実だろ」
何しろ、全員の命が懸かっているのだ。安易に楽観視など、出来ようはずもない。
そんな剣士たちの見ている前で、早速アテナは動きを見せた。
「私は……『サイクロイド』を守備表示で召喚します！」
『サイクロイド』ＤＥＦ１０００
『いやっほぉぉおうぅっ！　行くぜ行くぜえぇえええっ！』
「な、ん……だと？」
のっけからフルスロットルのハイテンションで召喚されたサイクロイドは、いつも通り変わらぬ様子でセツに語りかける。
『よう兄さん！　元気かい？　おれっちは何時でもフルスロットルだぜ！』
「貴様……」
しかし、セツはそんなサイクロイドには目も向けず、怒りに燃えた目をアテナに向ける。
「貴様、これは……これは、どういうつもりだ！？」
「どういうもなにも……」
アテナは陽気にデュエルフィールドを走り回るサイクロイドを見やり、当然のように言う。
「命を懸けたデュエル、ですよ？」
「ふざけるなっ！」
アテナの言葉に、間髪いれずに激昂するセツ。
「天使族、それも重量級効果モンスター主軸のビートバーンデッキを使っていたお前が、機械族通常モンスター、それも超軽量級の雑魚を呼び出してどうするつもりだと聞いている！？」
「そんなこと、言うと思いますか？」

「っ……く！」
そう。言う筈がない。例え、アテナにどんな思惑があったとしても、対戦相手であるセツに、その思惑を話す筈もない。だが……。
「だが、これは……！」
セツの顔が怒りに歪む。
「戯れている……！」
ギリリ、と憎らしげに歯軋りをする。
「こんな、こんな奴らに、俺は……！　こんなふざけた奴らに、本気を出せと……？　こんな、奴らに……っ！」
そんなセツを見て、さだめたちは見えないように頷き合う。
「お兄ちゃん、怒ってるね」
「そりゃ、そうだろうな。文字通り、命を懸けた大一番で、単体じゃ役に立たない雑魚を突きつけられりゃ……」
「プライドに傷がつく、でしたっけ？　ユーキさん」
「うん」
今回のデュエルで何をするか、それをほぼ全て一人で立案した友紀が頷く。
「これが、第一段階だよ～」
デュエルをする二人を真剣に見詰めつつ、友紀はそう言った。

「勝たない？」
ユーキさんの言った思いがけない言葉に、さだめたちは一様に怪訝な顔をする。
「それって、どういうことですか？」
「う～んと……ねぇアテナちゃん。デュエルの決着がつくのって、どんなとき？」
「え？」
突然ユーキさんはそんな極々初歩的なことを尋ねてきた。

「どうして、そんなことを？」
「いいから～。煮詰まった時は、一度基本に戻って考えてみるのも大事だよ～」
確かに、それはわかる。どうやらユーキさんは、一言で正解を口に出す気はないらしく、とりあえずユーキさんの言ったことを考えてみる。
「えっと、片方若しくは互いのライフポイントがゼロになるか、デッキが尽きてドローが出来なくなるか……」
「後は『終焉のカウントダウン』みたいな、特殊勝利条件をどちらかが満たすことでも決着はつくよね？」
さだめは自分も使ったことのあるカード名をだして追加する。
「他には？」
「え、えっと……デュエル続行不可能、とかですか？」
ついさっきそうなりかけたからか、恐る恐ると言った感じで凛が聞く。ユーキさんはそれにも頷いて、けど首を振る。
「そうだね～。でも、それはかなり特殊だから、今は置いとこっか～。もっと基本的なことだよ～」
基本的……？　ライフゼロ、ドロー不可、特殊勝利……。
「あ」
その時、ふとさだめの中に一本の線が繋がった。
「あ、あああ。あああああああああああああっ！？」
「さ、さだめさん？」
「気付いた～？」
「も、もしかしてユーキさん、勝たないって……」
「うん。そういうことだよ～」
「ちょ、ちょっと待ってください。二人だけで納得されても……」
アテナ抗議を無視して、さだめは一人思考の海へと沈んでいく。
ユーキさんは代わりに、アテナに最初から解説をし始めた。
「アテナちゃん。まず前提として、わたしたちじゃセツくんに勝てない。勝てるとしても、限りなく確立が低い。いいよね？」

「はい」
そこには文句なく、アテナは頷く。
「じゃあどうする？　もう一度言うよ。“わたしたち”じゃ勝てないんだよ？」
「私たち……？」
「……つまり、今のアイツに勝てる奴は誰か、ってことか？」
剣士さんの言葉に、ユーキさんは満足げに頷いた。
「そう。わたしたちじゃ勝てない。なら、誰なら今のセツくんに勝てる？」
「誰、って……」
まだピンと来ないらしいアテナに、先に気付いたルインが助け船を出す。
「……貴女は、誰より大事な仲間を忘れている」
「誰より、大事な……ぁ」
そこでようやく、アテナは気付いた。
「セツ……」
お兄ちゃんに勝てるのは、お兄ちゃん。目には目を、歯には歯を。つまり……。
「さだめたちの目的は、お兄ちゃんを闇のデュエルで倒すことじゃない。あくまでも目的は、お兄ちゃんの記憶を取り戻してこちら側に戻って来て貰うこと」
「つまり、倒す必要なんてない……」
「デュエルをしながら、セツ様の記憶に語りかけ、記憶を戻すことが出来れば……」
「セツは、自らデュエルを終わらせてくれる……つまり」
全員の視線を受け、ユーキさんはもう一つ大きく頷いた。
「そう。わたしたちが目指すべきは、セツくんの敗北（サレンダー）。そのために、皆のフェイバリットカードに想いを込めて、セツくんにぶつけるの」
勝敗は度外視。フェイバリットに込められた絆で、お兄ちゃんの記憶に呼びかけて、記憶の扉を紐解くこと。

「それが、セツくん攻略の唯一の方法だよ」

作戦は決まった。けれど、勿論そう簡単なことじゃない。いくら勝ちを度外視するといっても、記憶を取り戻す前に瞬殺されては意味がない。

「それで、私……ですか？」

お兄ちゃんとデュエルする役に選ばれたのはアテナだった。

「うん。実際にデュエルしてみてわかったよ～。アテナちゃんには、持って生まれた天運みたいなものがある。それは、元精霊のデュエリストっていうのも関係があるかもしれないけど、兎に角カードの精霊との親和性が高くて、良いカードをドローしやすい」

「そ、そうでしょうか……？」

「さだめ的には、ご都合主義とかディスティニードローとか補正とか言うんだけど、まあ確かにそんな感じはあるね」

さっきの目には目を、って話じゃないけど、色んな補正かかってるっぽいお兄ちゃんを相手取るには、こっちも多少の補正は考慮しておいた方が良さそう。そりゃ、さだめだって自分の手でお兄ちゃんを取り戻したいって思うけど……。失敗は出来ないんだから、ここは引いておく。

「それに、みんなのフェイバリットを集めてデッキを作ることには、もう一つ意味があるよ」

「もう一つの、意味？」

「うん。それは……」

「それは、お兄ちゃんを怒らせること」

「記憶を取り戻すって言っても、簡単じゃない。ただカードを突き

つけるだけじゃ、今のセツくんは小揺るぎもしない。だけど……」

怒らせて動揺させることで、心に隙が出来る。その隙は記憶を取り戻すために必要なだけじゃなく、上手くいけばプレイングミスも誘発させて、プライド自ら高みから転がり落ちてきてくれる。

「要するに、ハッタリかますってことだよね？　上回ることが出来そうにないから、向こうから落ちてきてくれるようにさ」

「そうだね～。まあ、いつものセツくんならそんなのすぐにお見通しだろうし、プライドのセツくんでも平常時なら効かないと思うよ？　だけど……」

今のプライドは、心に余裕がない。

「それなら、嵌めるのは簡単。プライドを刺激してあげればいい。これは、エースさんの方が良くわかると思うけど～」

「……ああ。我もそうだが、プライドとは高潔さであり潔癖さでもある。本気の相手を、更に上回る実力で叩き潰すこと。それが奴の望みだろうからな」

そう言う人間は、己のプライドにプライドを持つ。

「見限られること。見くびられること。見下されること。それがどうしても我慢ならない。格下相手に全力で戦うことが我慢ならないものだ」

「慢心だね」

「高慢、と言え」

「同じじゃん」

「高、の字が入っているか否かで印象が違う」

「細かいなぁ」

「兎も角、奴を怒らせるには、真剣にふざけることが必要なのだ。更に言えば、奴の記憶に語りかけるにも、お前たちの何時もの雰囲気が出る分有効だろうな」

セツがサイクロイドに対し、半ばトラウマ染みた苦手意識を持っているのも、動揺させるには効果が高い、と言える。これは流石に、半ば以上こじつけだが。

視線の先では、セツが鬱陶しそうに走り回るサイクロイドを睨みつけていた。不愉快さを隠しもしないセツを見つめて、立案者である友紀は自信ありげに笑みを浮かべる。

「さあ……ここからだよ」

目指すは……敗北（サレンダー）。

第四期第二十九話「記憶を取り戻せ！　目指すは敗北！？」（後書き）

こんにちは。

はい。というわけで、正解はサレンダー。ちなみに、今話のタイトルもミスリードとなっております。あんな引きでこんなタイトル出されたらアテナたちの敗北を考えるだろうという。実際は、セツのサレンダーを目指す、という意味です。アテナたちが自ら負けを目指すと言う意味ではありません。

数ある遊戯王作品の中でも、かなり珍しいとは思いますが。相手のサレンダーを前提にしたデッキ構築。少なくとも悠は見たことがありません。答えが掠ってる云々は、まあこのデュエルを最後まで見ていただければわかると思います。

まさかの初手サイクロイド。どうしてこう、このアルカナはサイクロイドを無駄にプッシュしているのか。いい加減悠にもわからなくなってきました。まさかこの重要な局面で初手サイクロイドはきっと誰も予想していなかったに違いない。予想していた人はおめでとうございます。あなたはエスパーです。

今回ちょっと視点がコロコロ入れ替わるので、少々見辛かったらすみません。一応、少しでも俯瞰的に見られるように三人称視点にして見ましたが（途中はさだめ視点）、どうだったでしょうか？見辛ければ、今後はなるべく控えます。特に問題ないよー、という場合も、あんまりやらないとは思いますが。基本、視点がコロコロするのは書く側としても把握が面倒ですしね。

……信じられるか？　一話丸々使って、まだサイクロイド出しただけなんだぜ？……次回は、もっとデュエルも進むと思います。予定では、セツ編は後二話ですので。

それでは、悠でした！

第四期第三十話「皆の心を」（前書き）

さだめ「な～っにかな～な～っにかなっ！」
ルイン「今回は、これ」
『レインボー・ライフ』
さだめ「手札一枚をコストに、そのターン受けるダメージを回復に変換しちゃうカードだね」
ルイン「類似カードの『ドレインシールド』と比べると、手札コストが要る代わり、全てのダメージに対応出来てそのターン中は安全になるところ」
さだめ「モンスターを守ることも出来ないけど、フリーチェーンなことやバーンダメージも無効に出来ることを考えると、汎用性では一歩上だね」
ルイン「強大な攻撃力を持つ彼のＳｉｎや、バーンカードを相手取るには最適のカード」
さだめ「まあ、それはアテナにも言えるんだけどね……」

というわけで、ちょっと始めてみました。今回のキーカード。ＭＣは安定のさだめ＆ルイン。主にさだめですね。では、本編の方へどうぞ！

第四期第三十話「皆の心を」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第三十話「皆の心を」

一先ずは、成功と言ったところでしょうか……。
私は手札を覗き、密かに溜息を吐きます。
（思いっきり事故ってます……）
当然と言えば当然です。あんなデッキ構成で事故らない方がどうかしてます。
「行きますよ。私はカードを五枚セットして、ターンエンドです！」
いきなりの五枚セット。ぶっちゃけ召喚できるのがサイクロイドさんしかいなかったのはかなり最悪です。
『おうおう！　来いよ兄さん！　思いっきりなぁ！』
張り切っている所悪いですけど、思いっきり来られたら負けるのであんまり滅多なことは言わないで欲しいです。
「くっ……！　俺の、ターン！」
不愉快さを隠しもせずに、セツはカードをドローします。
「俺は魔法カード『融合』を発動する！」
「融合……！？」
これまでプライドのセツが融合戦術を取ってきたことはありませんでした。あちらも、私とのデュエルに備えてデッキ構成を変更してきたのでしょう。
「俺は手札の『切り札の騎士―エース』と『切り札の騎士―ジャッ

ク』を融合する！」
「我ら、だと？　まさか……」
融合素材として使われたエースさんが、愕然とした顔でセツを見る。
「来い。黒の騎士。『切り札の騎士（トランプ・ナイト）―ブラック・ジャック』！」
『切り札の騎士（トランプ・ナイト）―ブラック・ジャック』ＡＴＫ２１００
黒の鎧に身を包んだ騎士が、セツのフィールドに現れる。見たことのないモンスターに、私は警戒を強めます。
「そして『切り札の騎士―エース』が融合素材として手札から墓地に送られたことにより、デッキからカードを一枚ドローする」
融合により失った手札も即座に回復するセツ。流石に、その辺りは激昂していても抜かりはない。でも、それは私にとっても好機！
「リバースカードオープン！『逆転の明札』！　相手がドローフェイズ以外でカードを手札に加えた時、相手の手札と同じ枚数になるようにデッキからカードをドローします！　デッキからカードを四枚ドロー！」
態々手札を全て伏せたのはこのためです。セツのデッキにドロー加速カードが多いことは、あのＳｉｎモンスターの特性から明らかでしたし。
「そんな雑魚は壁にもならんと言うことを教えてやる。『切り札の騎士（トランプ・ナイト）―ブラック・ジャック』で『サイクロイド』を攻撃！『ハイローラー・オブ・スペイド』！」
『ぬああっ！？　アテナの嬢ちゃん、どうにかしてくれ！』
迫る漆黒の剣に、慌ててサイクロイドが私に声をかけてきましたが、私は僅かに眼を逸らします。
「えと、すみません。サイクロイドさんはその……」
『え……？』
「基本的に出オチ……なので」
『そんだけ伏せといてそりゃないぜ！？　ぎゃあああああああっ！？』

何の防御も得られなかったサイクロイドさんがあっさり剣で両断されてしまいます。……えと、すみません。

「更に『切り札（トランプ・ナイト）の騎士―ブラック・ジャック』がモンスターを戦闘破壊したバトルフェイズ終了時、相手ライフに２１００ポイントのダメージを与える！『ブラッディ・ジャック』！」

「なっ！？　と、トラップ発動！『レインボー・ライフ』！　手札を一枚捨てることで受けるダメージを無効にし、その分だけライフを回復します！」

アテナＬＰ４０００→６１００

ありがとうございます。サイクロイドさん。貴方のお陰で、ライフに保険が出来ました。

「ふん。バーン対策カードか。当然と言えば当然か。まあいい。その程度のライフ、すぐにでも奪える」

「更に、手札から捨てた『切り札の騎士―エース』の効果で、私もデッキからカードを一枚ドローします」

「貴様……」

再び私のものではないカードを使ったことで、セツの表情が歪みます。が、それも一瞬。すぐにその表情を冷静なものに戻してしまいます。

「……ふん。だが、満更ふざけているわけでもなさそうだ。油断は捨てるとしよう」

「……」

やはり、こんな序盤に『レインボー・ライフ』を使うべきではなかったかもしれません。セツを怒らせて、油断させる目的が、早くも崩れてしまいそうです。

「まあいい。俺はカードを二枚セットし、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！」

さて……どうしましょうか。手札の総とっかえは出来たので全体的なカード・アドバンテージは稼げましたし、サイクロイドさんの犠牲のお陰でライフ・アドバンテージも得られました。

「ですが……一番大事なアドバンテージが消滅してしまった感じですね」

心理（メンタル）・アドバンテージ。ユーキさんの提唱した心理的な優勢・劣勢のことですが、このデュエルに於いてはある意味最も重要です。

共に負けられないデュエル。初期のモチベーションはどちらもこれ以上なく最高でしょう。しかしそこでセツのプライドを刺激してあげることにより、怒りや油断と言った“雑念”を生じさせ、ミスを誘発させる。ユーキさん曰く「逆裁で言えば“ゆさぶる”だね～」だそうですが、ゲーム知識はあまりないので良く分かりません。

そうして生じた隙に、希冴姫さんたちをはじめとしたセツの思い出に呼びかける行為や攻撃を通し、記憶を取り戻す。またまたユーキさん曰く「“つきつける”、だね～」だそうです。

「……私は手札から『ヘカテリス』を墓地に送り、デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加え、発動します！」

どうするか迷いましたが、今は兎に角セツの攻撃を凌ぐ必要があります。何とかしてもう一度、メンタル・アドバンテージを取り戻さないと……！

「ふん。漸く真面目に相手をする気になったか」

「……行きます！　私はヴァルハラの効果で手札から『アテナ』を攻撃表示で召喚します！」

『アテナ』ＡＴＫ２６００

『ほいほ～いセツっちお久～って、こんな序盤に呼ばれると死にフラグにしか見えないｏｒｚ』

良くわかってるじゃないですか。

「っていやいやそうじゃありません。シャルナ、私たちでなるべく稼ぎますよ！」

『……時間を？』

「それ以外に何を？」

『結局やられること前提のおねーさん涙目』

「文句言わないでください！　更に私は『シャインエンジェル』を

攻撃表示で召喚します！」
　『シャインエンジェル』ＡＴＫ１４００
「まずはシャルナの効果で６００ポイントのダメージ！」
「考えることは同じらしいな。俺は手札を一枚捨てて、トラップカード『レインボー・ライフ』を発動。このターン受けるダメージは全て回復となる」
「くっ！？」
　セツＬＰ４０００→４６００
「お前のデッキがワンキル特化の高火力デッキであることはわかっていた。当然、そのための対策くらいはしている。結果若干俺自身の火力は落ちたが……まあいいだろう。所詮寄せ集めカードのネタデッキ相手だ」
「……そう言っていられるのも、今の内ですよ」
「だといいがな」
　『レインボー・ライフ』が発動している中で攻めるのは悪手ですが、ブラック・ジャックの効果を考えれば長生きさせておくわけにはいきませんね……。
「バトルします！　シャルナで『切り札（トランプ・ナイト）の騎士―ブラック・ジャック』を攻撃！『ディヴァイン・クロス』！」
『あ～、もうどうにでもなれ～！！』
「リバースカード発動！　速攻魔法『収縮』！『アテナ』の攻撃力を半分にする！」
『げっ……』
「させません！　カウンタートラップ『マジック・ジャマー』！手札から『冥幼竜ヴァーミリオン』を墓地に送り、魔法カードの発動と効果を無効にして破壊します！」
『きゅきゅ～！！』
「なにっ！？」
　シャルナを小さくしようとしていた魔力を、ミリーちゃんが身体を張って無効にしてくれます。

「シャルナ！」
『いよっし行くわよ！　せえええいっ！』
「くっ……！」
シャルナの放った十字の極光が、黒の騎士を焼き尽くし、セツまで届きます。
「だが、『レインボー・ライフ』の効果により俺はダメージを回復に変換する！」
セツＬＰ４６００→５１００
「私はカードを一枚セット。ターンを終了します」
「俺のターン、ドロー！」
カードをドローしたセツは、私に感心したような目を向けてきました。
「褒めてやろう。そんな狂ったバランスのデッキで、よくも回せるものだ、と」
「……」
あまり、今の状況では嬉しくありませんね……。
「だが……」
感心したような顔から一転、酷くつまらなそうな顔でセツが睨んできます。
「敢えて言おう。下らん」
「なっ……」
「デュエルにお前らしさがなく、プレイングに精彩を欠く。先を先をと考えるあまり、焦りがお前の心に巣食う」
「それは……」
「俺の記憶。俺の心。取り戻したいと願う気持ちに、焦りが余計なノイズを走らせている。そんなザマで、俺の記憶が戻ると思うな」
「セツ……？」
何故、そんなアドバイスの様な……。
セツはそれ以上何も言わず、デュエルを続行します。
「行くぞ。俺は手札から『融合回収』を発動。墓地の『融合』一枚

と『切り札の騎士―エース』を手札に戻す」
手札補充……！
「そして『スナイプストーカー』を召喚。効果を使用する」
『スナイプストーカー』ＡＴＫ１５００
「『スナイプストーカー』……！」
ここでそんなモンスターを……。
「手札から『切り札の騎士―エース』を墓地に捨て、『アテナ』を選択して効果を発動。ダイスロール」
「くっ……おのれ、よくも人をポイポイと捨ててくれる……！」
墓地に対する嫌悪感が拭えないエースさんは歯噛みします。
「出た目は……５。よって破壊は成立だ。消えろ」
『きゃあっ！？』
「シャルナ！」
『スナイプストーカー』の持つ光線銃のような武器が、シャルナを狙い撃ちます。
「墓地に送られた『切り札の騎士―エース』の効果で、俺はデッキからカードを一枚ドローする。手札から『融合』を捨ててもう一度効果を使おう。『シャインエンジェル』を対象にダイスロール……６か。破壊は不成立」
「ほっ……」
助かりました。この上更に『シャインエンジェル』まで破壊されたら折角サイクロイドさんが作ってくれたライフ・アドバンテージまで失うところでした。
「バトルだ。『スナイプストーカー』で『シャインエンジェル』を攻撃。『スナイプショット』」
「リバースカードオープン！『ガード・ブロック』！　この効果により私はダメージを受けず、デッキからカードを一枚ドローします！」
「だが、モンスターは破壊される」
「それなら！『シャインエンジェル』の効果を発動します！　デッ

キから攻撃力１５００以下の光属性モンスター……『サイレント・ソードマンＬＶ３』を攻撃表示で特殊召喚します！」

『……』

『サイレント・ソードマンＬＶ３』ＡＴＫ１０００

「サイレント・ソードマン……か」

セツは私の後ろで見ているユーキさんを一瞥し、首を振ります。

「……いや、未練は捨てよう。俺は……」

セツは何かを振り払うように二度、三度と首を振り、此方を見つめてきました。

「俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！　このスタンバイフェイズに『サイレント・ソードマンＬＶ３』はレベルアップします！　デッキから『サイレント・ソードマンＬＶ５』を攻撃表示で特殊召喚します！」

『サイレント・ソードマンＬＶ５』ＡＴＫ２３００

「ミリーちゃんも戻って来ます！」

『かぅ！』

これで手札は四枚。次は……！

「希冴姫さん、お願いします！」

『承知しましたわ！』

『切り札の騎士―クィーン』ＡＴＫ１５００

「貴様は……」

『セツ様……騎士の務めを、果たしに参りましたわ』

「黙れ。今更貴様に何が出来る。折角拾った命を、無駄に散らすだけだ」

『……そうでも、ありませんわ』

「なに？」

『例えその身が朽ち果てようとも、守るべき存在を守る。その意志に殉じたわたくしだからこそ、確かな実感と共に言えるのですわ。セツ様。貴方は間違っています』

「間違い……か」

『刺し違えてでも、等と言う考え方では、守れるものも守れません。死んでも守る、等と言う自己満足では、結局誰も守れません。セツ様、貴方も……』
「だから、どうした？」
『な……』
まったく堪えた様子のないセツに、希冴姫さんが絶句します。
「俺が間違っている？　そんなこと、百も承知だ。世界の滅びを甘んじて受けよう等と言う考え方が、正常である思っているとでも？」
『……では、何故？』
「簡単なことだ」
セツは胸を張り、誇らしげに答えます。
「例えどれほど間違っていようとも、俺は己の意志を通す覚悟をしている。他の何を裏切ろうとも、己の信念だけは己が誇りに懸けて裏切らん、とな」
『セツ様……！』
「だから希冴姫。止めたいのならかかって来い。俺は言った筈だ。わかり合えるとすれば、デュエルでしかあり得ないと」
「希冴姫さん」
『……わかりましたわ。アテナ、わたくしの剣、一時預けますわよ』
「はいっ！」
希冴姫さんに初めて名前を呼ばれました。それを信頼の証と受け取り、私は動きます。
「行きます！『サイレント・ソードマンＬＶ５』で『スナイプストーカー』を攻撃！『沈黙の剣Ｌｖ５』！」
「未練は……断つ！　リバースカード『次元幽閉』！　サイレント・ソードマンをゲームから除外する！」
『……！』
「サイレント・ソードマン！」
ユーキさんが次元の彼方へと消えて行くサイレント・ソードマンを見て声を挙げます。

「くっ……希冴姫さん」
『問題ありません。行けますわ』
「……すみません！　希冴姫さんで『スナイプストーカー』を攻撃！『エレガント・ハーツ』！」
『はあああああああああああああっ！』
「迎撃する。過去の残滓は……消えろ！」
攻撃力は互角。一瞬の交錯の後、希冴姫さんと『スナイプストーカー』は共に消滅していきます。
「希冴姫さん……」
『後は、頼みましたわ』
「……はい！」
「くっ……どいつもこいつも」
いらだたしげにセツが歯軋りをします。多少……冷静さはなくなってきたみたいですね。
「私はこれでターンエンドです」
「俺のターン、ドロー！……ちっ、カードをセットしてターンエンドだ」
「っ！」
攻撃が止みました！　今なら……！
「行きます！　私のターン、ドロー！」
今、セツは揺れています。堪えていないように見えて、希冴姫さんたちによる揺さぶりは意味がありました！
「私は手札から魔法カード『強欲な壺』を発動します！　デッキからカードを二枚ドロー！」
手札は五枚！　行けます！
「私は手札から『融合』を発動します！　手札の『希望の女神ルイン』と『剣聖―ネイキッド・ギア・フリード』を融合！」
「ネイ……キッドだと！？」
「比類なき剣、光翼を纏いし姿を見せよ！『天剣―ネイキッド・ギア・フリード』！」

『おおおおおおっ！』
『天剣─ネイキッド・ギア・フリード』ＡＴＫ２８００
「貴様……ネイキッド！」
『ふ……どうした、セツよ。随分と険しい顔をしているな？』
「生きていたか」
『皆が戦っている時に、一人だけ寝てはおれんだろう』
「……随分と深く抉ってやったつもりだが」
『ふん。あの程度、我がたくましい筋肉の前では蚊の一刺しにしか過ぎんということよ』
何時も通り、力コブを見せて筋肉アピールをするネイキッドさん。
そんなネイキッドさんに、セツは冷ややかな目を向けます。
「男の肉体美を誇るなら、まず下半身から露出することだ」
「ってなんでですか！？」
『盲点であったアアああっ！！』
「脱がないでくださいっ！」
その身に纏う天使の衣を躊躇いなく脱ぎ捨てようとするネイキッドさんを怒鳴りつけて止めます。ああもうこの人は……。

「……アテナに呆れられる辺り、大概だよね」
「ネイキッド……あの馬鹿は」
「……ちなみに、あんなこと言えるくらいセツくんのってその、凄いの？」
「……さだめは具体的には言わない。ただ、これだけは言っておくよ。……さだめが最後に見た時は、猛々しい龍○牙……」
「上位素材……！？」

「貴様らは何の話をしている……」

「うぷっ……」

は、鼻血が……。た、猛々しい……。

『どうしたアテナ殿。我が肉体は無垢な少女には刺激的過ぎたか？』

「貴方じゃありません！」

「無垢でもないだろうな。色欲（ラスト）」

「と、兎に角！　私は更に、手札から装備魔法『与奪の首飾り』をネイキッドさんに装備します！」

『むぅ……攻撃力が上がるわけではないが……』

「効果は使えます！　私はネイキッドさんの効果で、除外されている『サイレント・ソードマンＬＶ５』を特殊召喚します！」

『……』

『サイレント・ソードマンＬＶ５』ＡＴＫ２３００

「サイレント・ソードマン！」

無言で生還したサイレント・ソードマンに、ユーキさんがまた声を挙げます。

「このダイレクトアタックが通れば……！」

丁度５１００ポイント。サレンダーに頼らなくても、ここで……！

「ネイキッドさんとサイレント・ソードマンでダイレクトアタックをします！」

「させん！　トラップ発動！『和睦の使者』！　このターンのダメージを無効化する！」

「くっ……やはり、通りませんか」

「当然だ」

そうは言っても、あの時ドローした一枚がダメージ無効カードだった辺り、セツのドロー力はやはり相当なものです。

「私は、これでターンを終了します」

「俺のターン、ドロー！　俺も使わせてもらう。手札から魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚ドローする」
　ドローしたカードを見たセツは、ニヤリと笑みを浮かべて私を見ます。
「そろそろ……潮時だな」
「っまさか！？」
「俺はフィールド魔法『ダークゾーン』を発動。そして、エクストラデッキから『アルカナ　ナイト・ジョーカー』をゲームから除外し、来い。『Ｓｉｎアルカナ　ナイトジョーカー』」
　『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』ＡＴＫ３８００→４３００
「……っ！」
　遂に……出ましたか！
「Ｓｉｎ……！」
「まずは、鬱陶しいサイレント・ソードマンを蹴散らす。『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』で『サイレント・ソードマンＬＶ５』を攻撃。『Ｓｉｎロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」
「っと、トラップカード『体力増強剤スーパーＺ』！　２０００ポイント以上のダメージを受ける際、その前に４０００ポイントライフを回復します！　きゃあああっ！？」
　アテナＬＰ６１００→１０１００→８１００
　サイレント・ソードマンが漆黒の剣で切り裂かれ、そのダメージが私まで届きます。
「うぐっ……！」
　さ、流石に一度に２０００ダメージは結構効きますね……！
「ターンエンド。さあ、足掻いて見せろ」
「くっ……わ、私のターン！」

カードをドローしたアテナを見つつ、さだめはユーキさんに尋ねる。
「どう思う？」
ユーキさんは、目の前でフェイバリットカードが切り裂かれた衝撃から、少し青い顔で答える。
「そうだね……とりあえず、アテナちゃんはあのデッキを良く回せてると思うよ」
「だよね。正直、驚異的だよ」
普通じゃあり得ないような構成で、無茶苦茶なデッキを組んでいるのに、未だに初期ライフを下回っていないなんて普通じゃ考えられないくらい。
「……だけど、ちょっと上手く回し過ぎ、かな～？」
「どういうこと？」
それっていいことなんじゃ？
「上手く回し過ぎて、互角の戦いをしちゃってる。これじゃ、セツくんのプライドは刺激出来ないし、セツくん自身も本気で戦いにきちゃう。そうすると、最初の目的だったサレンダーが難しくなる」
「それは……」
確かにそうだ。お兄ちゃんを本気にさせちゃいけない。それじゃ勝てない。
「それに、アテナちゃん自身もそろそろあのプレイングに耐え切れなくなってきてる」
「そうだね……」
元々アテナは刹那的っていうか、その場その場で臨機応変……っていうか行き当たりばったりでデュエルを回すタイプのデュエリストだから、今回みたいに先の展望とかを見据えたデュエルは苦手な筈。あのデュエルスタイルはどちらかと言えば、お兄ちゃんやユーキさんのスタイルだし。
「……ただ、それをセツくん自身がアテナちゃんに指摘してきたことが気になるよ」

「そうだね。そんなこととしても、お兄ちゃんに不利になるだけだし」
「それこそ、奴のプライドの問題ではないのか？　本気のアテナを叩き潰そう、という」
「うん。それはそうだと思うんだけど～……」
お兄ちゃんは、さっきから希冴姫さんの言葉やサイレント・ソードマンの存在に反応したり、ネイキッドさんの下らない台詞にも一々ツッコミを入れたりと、以前のプライドからは少し雰囲気が変わって来ている印象を受ける。
「もしかしたら……」
「結構、良いところまで来てるのかもね。お兄ちゃんの記憶」
今はまだ、雰囲気でしかない。でも、その内思い出せる筈。だって……。
「お兄ちゃんは、プライドなんかに絶対負けない。必ず、思い出してくれる。だから……」
もう少し、頑張って……アテナ！

第四期第三十話「皆の心を」（後書き）

こんにちは。

シリアス全開の展開のハズなのに、ノリは結構ギャグ風味。これです。こういうのが書きたい。

ちなみに、本来は今回でデュエルは終わっているつもりでした。……ええ、ご覧の通り、まだお互いライフが４０００を割ってません。ちくしょう。思った以上に激戦になりすぎた！　アテナがあんなデッキを回し過ぎる所為だ！↑責任転嫁

というわけで、一話伸びます。次回デュエルに決着。次々回セツ編終了。多分。

今回出たオリカ、ブラック・ジャックですが、めちゃ強そうに見えて一応弱点というか、デメリットはあります。セツは語ってませんが、一応。活動報告にてアップしたのち、オリカ紹介の方にも乗っけときます。

※最後のところをちょっと修正しました。

それでは、悠でした！

第四期第三十一話「心を届けて」（前書き）

さだめ「な～にっかな～な～にっかなっ！」

ルイン「今回は、これ」

『狂戦士（バーサーカーソウル）の魂』

さ＆ル『……え？』

……二人の反応が、全てです。

第四期第三十一話「心を届けて」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第三十一話「心を届けて」

遂に、出てきましたか……。

『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』ＡＴＫ４３００

「流石に、圧巻の攻撃力ですね……」

元々の私のデッキでは、ヴィーナス暴走召喚でようやく相討ちが取れるレベル。そう考えると、あまりにあんまりな攻撃力ですね……。兎も角、それでも何とかするしかないです。

「私はネイキッドさんを守備表示に変更。更にモンスターを一体守備表示でセットしてターンを終了します……」

それでも、そうそう何とかなるなら苦労はしません。仕方なく、ドローしたモンスターをセットして守りを固めます。

「ふん。俺のターン、ドロー」

そんな私をつまらなそうに睥睨して、セツはカードをドローします。幸い、『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』のデメリット効果で他のモンスターを展開することは出来ませんから、それだけが救いですね……。

「モンスターが展開出来ないからと言って、安心して貰っては困る。俺は手札から永続魔法『命削りの宝札』を発動する」

「ドロー強化！？」

マズイ、です。これでアルカナの効果が使えるようになったのみ

ならず、手札にあのカードが行ってしまった可能性も……。
「それだけじゃない。俺は手札から魔法カード『デス・メテオ』を発動する！」
「なっ！？　きゃあああああああああっ！？」
アテナＬＰ７１００
「ぐっ……そ、ういえば……そうでしたね」
セツには、豊富なバーンカードもありました。まだ、ライフに余裕はありますが、身体に蓄積する実際のダメージは馬鹿になりません。正直、今も結構くらくらしています。
「バトルだ。そろそろその暑苦しい筋肉には退場して貰おうか。『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』で『天剣―ネイキッド・ギア・フリード』を攻撃。『Ｓｉｎロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」
『ぐおおおおおおおおおっ！？』
「ネイキッドさん！」
『ぐっ……すまぬアテナ殿！　我では、力不足であった……！』
「そんなことは、ありません。私は『与奪の首飾り』の効果を発動します！　装備したネイキッドさんが戦闘によって破壊され、墓地に送られたことで、私はデッキからカードを一枚ドローします！」
「ふん。まあいい。俺はターンエンドだ」
「私のターン、ドロー！」
これは……なんとか、してみましょう。
「私は、何もせずにターンエンドです」
何もせずターンを終了した私を見て、セツが嘲笑を浮かべます。
「遂に事故を起こしたか」
「さあ……それは、どうでしょうね」
「ふん。まあいい。俺のターン、ドロー」
ドローカードを見たセツは、愉快そうにニヤリと笑いました。
「ほう……これは、耐え切れるかどうか、見物だな」
「っ！？」

「俺は魔法カード『ハリケーン』を発動する。フィールド上の魔法・罠を全て持ち主の手札に戻す！」
「なっ！？」
『ハリケーン』だと、フィールド魔法も手札に戻ります。当然、フィールド魔法がなくなったＳｉｎモンスターは自壊するはずですが……。
「更に、俺はチェーンして速攻魔法『禁じられた聖杯』を発動！『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』の効果を無効にすることで、『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』は自壊せず、フィールドに残る」
『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』ＡＴＫ４３００→４７００→４２００
「っ……」
これがセツの目的ですか……！
「まだだ。俺は手札から速攻魔法『トラップ・ブースター』を発動。手札を一枚墓地に送ることで、俺はこのターン、手札からトラップカードを発動することができる」
「っ……！『トラップ・ブースター』……！」
セツの、黄金パターン……！
「更に、墓地に送った『切り札の騎士―エース』の効果でカードを一枚ドローする」
またしてもエースさんを墓地に送り、セツは手札を回復させます。
「俺はフィールド魔法『ダーク・ゾーン』を再び発動し、バトルフェイズに入る」
『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』ＡＴＫ４２００→４７００
「バトル。『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』でセットモンスターに攻撃。『Ｓｉｎロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」
『リチュア・エリアル』ＤＥＦ１８００
『きゃあああああっ！？』

「エリアルさん……ごめんなさい！」
『だ、大丈夫です……それよりも、お役に立てなくてすみません！』
「そんなことはありません！　私はエリアルさんの効果を発動します！」
「エリアルの……効果？」
「『リチュア・エリアル』がリバースした時、デッキからリチュアと名の付いたモンスターを一枚、手札に加えることが出来ます！　私が手札に加えるのは……『反魂のスピリチュア』！」
「っ……そういう、ことか」
　かなり無理矢理なこじつけですけど、事実名前にリチュアが入っていることには変わりありません！
「だが、それも無駄だ！　俺は手札からトラップカード『連撃』を発動する！」
「っそ、それは……！」
「Ｓｉｎの剣……お前の小さな身体で受け止めきれるか？『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』でプレイヤーにダイレクトアタック！『Ｓｉｎロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」
「あ、ああっ！？」
　アテナＬＰ７１００↓２４００
『アテナ（ちゃん）っ！』
　凄まじいダメージに、私の身体は大きく跳ね飛ばされます。
ドンっ！　と吹き飛ばされた身体が、誰かに抱きとめられる感覚。
「ぁ……？」
『よォ……まだ、死んでねェよな？』
　吹き飛ばされた私を受け止めてくれたその精霊は、そう言ってシニカルな笑みを浮かべます。
「と……ぅ、ぜんですよ……ゴーズさん」
『ハッ……。なら、とっとと立てや』

私はゴーズさんの手を借りて何とか立ち上がり、手札のカードをデュエルディスクにセットします。
「フィールドに……何のカードも存在しない状態でダメージを受けた時、手札から『冥府の使者ゴーズ』と『冥府の使者カイエントークン』をフィールド上に特殊召喚することが出来ます……」
『冥府の使者ゴーズ』ＡＴＫ２７００
「そして……この効果で特殊召喚されたカイエントークンの攻撃力・守備力は……受けたダメージと同じになります！」
『冥府の使者カイエントークン』ＡＴＫ４７００
今、私の目の前には圧倒的な存在感を放つカイエンさんが、その手に武器を構えて立ち塞がっています。
『ハッ……漸く、マトモにやれそうじゃねェかヨ。カイエン』
『はい。今の私には、力が漲ってくるようです！』
「ちっ……ゴーズとカイエン。いや、それよりも……」
セツは戸惑うような視線を私に向けます。
「何故……生きている」
４７００という破格の戦闘ダメージをまともに受けて、私はそれでも立っています。正直……もうフラフラですけどね。
「それでも……倒れるわけにはいきませんから」
セツに、もう一度……。
「もう一度、貴方に……抱きしめてもらうまで」
私は、倒れません！
「なら……耐え切って見せろ！　俺は『ファイヤー・トルーパー』を召喚し、リリースすることで１０００ポイントのダメージを相手ライフに与える！」
「きゃあああああああっ！？」
アテナＬＰ２４００→１４００
「ぐっ……ぁ……ぅ」
熱い……熱い熱い熱い熱い！　でも……！
「負けま、せん……！」

「くっ……この……っ！」
腹立たしげに、セツが歯軋りをします。私は、今にも途切れそうな意識を必死に繋ぎとめ、セツに向かって笑いかけます。
「セツ……セツなら、きっと」
この苦しみにも、耐え切れる筈。だから私も……！
「耐えて、みせますよ……！」
「……俺は、永続魔法『命削りの宝札』を再び発動。デッキからカードを五枚ドローする」
セツの手札が再び増強されます。
「カードを一枚伏せ、ターンエンドだ……」
エンド宣言をしたセツは、何か言いたげに、私を見つめます。
「……どうしましたか？」
「……耐え続けても、辛いだけだぞ」
「え？」
「俺には……わからん。過去・現在・未来……その全てを絶望に彩られて尚、その両足で立つお前の在り方が……。俺は、裏切ったんだろう？　記憶を無くして、この傲慢（プライド）に身を任せたとはいえ……お前を。仲間を。それも、お前にとって、誰よりも大切だっただろうこの俺が」
困惑を強めたかのように、セツが首を振ります。その姿が、まるで親とはぐれた子供のように寂しげで……私は、一瞬身体の痛みを忘れました。
「それでも……それでも前に進み続ける。そんな貴方の姿を、私たちは知っているから」
私が強いんじゃありません。そんな貴方を取り戻したいから。今の私は、貴方の模倣をしているだけ。
「だから……思い出してください。セツ。貴方なら……きっと」
終焉になんて、負けませんから。
『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』ＡＴＫ４７００↓４３００

セツのターンエンドと同時に、『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』の攻撃力が元に戻ります。これで、カイエンさんの攻撃力がアルカナを上回りました。

「私の、ターン！　ドロー！」

今は、必ず貴方を助け出します！

「バトルです！　カイエンさんで『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』を攻撃！『冥天刃陽の太刀』！」

『行きます……！　やあああああああああっ！』

「ぐぁっ……！」

セツＬＰ５１００→４７００

「続けて……！」

「させん！『Ｓｉｎアルカナ　ナイト・ジョーカー』が破壊された時、手札全てとエクストラデッキの『切り札の騎士帝―アルカナロイヤル・ジョーカー』をゲームから除外し、ライフを１００にすることで、手札から『Ｓｉｎアルカナ　ロイヤル・ジョーカー』を特殊召喚する！」

セツＬＰ４７００→１００

カイエンさんに切り裂かれた天位の闇騎士が、その鎧と剣に、さらなる力を宿して復活します。

「やっぱり……出てきましたか！」

『Ｓｉｎアルカナ　ロイヤル・ジョーカー』ＡＴＫ４５００→５０００

「攻撃力……５０００！」

ゴーズさんどころか、今のカイエンさんですら相手にならない攻撃力。仕方なく、私は攻撃を中断し、メインフェイズ２に入ります。

「手札がない今の内に……！　私はカードを二枚セット。永続魔法『神の居城―ヴァルハラ』を発動し、魔法カード『貪欲な壺』を発動します！　私は墓地から『サイクロイド』『シャインエンジェル』『サイレント・ソードマンＬＶ３』『サイレント・ソードマンＬＶ５』『リチュア・エリアル』の五枚をデッキに戻してシャッフルし、

二枚ドローします！」
「ならば、俺はリバースカード『逆転の明札』を発動！　お前の手札は四枚。よって俺もデッキから四枚カードをドローする！」
「っ……！」
これで、また手札が……！
「私は……ゴーズさんを守備表示に変更してターンエンドです」
『チッ……コイツは旨くねェな』
「俺のターン、ドロー！　バトルを行う！『Ｓｉｎアルカナ　ロイヤル・ジョーカー』で『冥府の使者カイエントークン』を攻撃！『Ｓｉｎファイブ・オブ・ア・カインド』！」
『あああっ！？』
「きゃあああっ！」
アテナＬＰ１４００→１１００
カイエンさんが破壊され、私のライフにも更に危険信号が灯ります。流石に……余裕がなくなって来ましたね。
「俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ」
アルカナの耐性を減らしてでもカードをセットしてきた……？
あの伏せカード、一体……。もしまた『連撃』のようなカードであれば……。
「私のターン、ドロー！」
これで手札は五枚。けれど、今出来ることは何もありません。保険としてミリーちゃんを守備で出してもいいかもしれませんが……
『きゅ～？』
……いえ、やめておきましょう。もしあのカードが『連撃』であれば、壁は壁としての意味をなしません。
「……私は、ターンエンドです」
「俺のターン、ドロー！　俺は手札から装備魔法『巨大化』を『Ｓｉｎアルカナ　ロイヤル・ジョーカー』に装備する！」
セツがドローしたカードをプレイするのを聞いて、私は戦慄します。

「っ『巨大化』！？」
今、セツのライフは風前の灯……！
「『巨大化』の効果により、アルカナの元々の攻撃力は倍になる！」
『Ｓｉｎアルカナ　ロイヤル・ジョーカー』ＡＴＫ５０００→９５００
「攻撃力、９５００……！？」
最早、まともな手段で戦闘破壊することは叶いません。かといって、あの効果を考えれば効果破壊も……！
「これで……終わりにする！『Ｓｉｎアルカナ　ロイヤル・ジョーカー』で、『冥府の使者ゴーズ』を攻撃！『Ｓｉｎファイブ・オブ・ア・カインド』！」
『グッ、オオオオオオオォッ！？』
天すらも断たんと言うほど巨大な剣で、ゴーズさんが一刀両断されてしまいます。ゴーズさん……！
「俺は……ターンエンドだ」
圧倒的優位に立っている筈のセツですが、その表情は険しい。迷いが断ち切れていないのか、それとも……。
「何故だ……」
それとも。
「何故……そんな目で俺を見る……？」
希望を捨てず、ただ憐れむようにセツを見る私に、困惑しているのか。
「何故……諦めてくれない？」
「……私のターンです」
「答えろ！」
ごめんなさいユーキさん。私、作戦は無視します。
「アテナちゃん……？」
「私……勝ちます！　この……ターンで！」
今の私なら……出来る筈です！
「セツ……貴方の罪（Ｓｉｎ）を、私が消します！」

「なんだと……？」
私の脳裏に蘇るのは、いつかの光お姉さんとのデュエル。そう、思い出しました。これが、セツのＳｉｎ攻略の答え！
「私はリバースカード『サンダー・ブレイク』を発動します！　手札一枚をコストに、『Ｓｉｎアルカナ　ロイヤル・ジョーカー』を破壊します！」
「させると思うのか！？　手札を一枚ゲームから除外することで、『サンダー・ブレイク』の発動と効果を無効にして破壊する！」
当然、この『サンダー・ブレイク』は無効にされます。ですが、これで全ては整いました！
「私は、フィールドの『神の居城―ヴァルハラ』の効果を発動します！」
「っ……！」
そう。アルカナの弱点その一は、既に発動済みの永続魔法や罠の効果には干渉出来ないことです！
「私は手札から『反魂のスピリチュア』を特殊召喚！」
『反魂のスピリチュア』ＡＴＫ８００
「そいつは……お前の……」
そしてここからが……アルカナ最大の弱点！
「私は、墓地から『レベル・スティーラー』の効果を発動します！」
これが……『サンダー・ブレイク』発動の真の意図！　手札コストとして墓地に送った『レベル・スティーラー』！
「なんだと！？」
セツが息を呑む。当然です。だって『レベル・スティーラー』の効果は……。
「一ターンに、何度でも使えます！　私は『反魂のスピリチュア』のレベルを一つ下げて『レベル・スティーラー』を特殊召喚します！」
「くっ……！？」
本来なら、無効にするまでもない効果。でも、アルカナは……。

「強制効果か……！」
『反魂のスピリチュア』レベル７→６
セツの手札が一枚消滅し、残りは二枚。
「もう一度『レベル・スティーラー』の効果を発動！」
「ッ無効だ……！」
『反魂のスピリチュア』レベル６→５
あと、一枚！
「最後です！『レベル・スティーラー』の効果を発動！」
「馬鹿な……！」
『反魂のスピリチュア』レベル５→４
「手札が……！」
これで、アルカナの効果は使えません！
「行きます！　私は私自身の効果、手札を捨ててフィールド上の闇属性モンスターをデッキに戻し、同じ数だけ墓地から光属性モンスターを蘇生します！」
これで……アルカナを戻せば！
「おおお……！　速攻魔法『神秘の中華なべ』を発動する！」
「えっ！？」
「ここで……こんなところで、あんなデッキに……負けてたまるか！　俺は自らアルカナをリリースすることで、その攻撃力分、９５００ポイントのライフを回復する！」
セツが……自らＳｉｎをリリースした！？
セツＬＰ１００→９６００
「それでも……！『反魂のスピリチュア』第二の能力！　一ターンに一度相手の墓地に存在する闇属性モンスター一体をデッキに戻すことで、墓地の光属性モンスターを、効果を無効にして特殊召喚します！　私は『切り札の騎士―ブラック・ジャック』を戻して『切り札の騎士―クィーン』を特殊召喚！」
希冴姫さん……！　もう一度、お願いします！
『……感謝、しますわ。わたくしに、もう一度チャンスを与えてく

れて』
「バトルします！　私自身……『反魂のスピリチュア』でセツにダイレクトアタック！『トライデント・サンシャイン』！」
「ぐあっ……アテ、ナ……！」
セツＬＰ９６００→８８００
「続けて希冴姫さんでダイレクトアタック！『エレガント・ハーツ』！」
『セツ様……！』
「希……冴、姫……っ」
セツＬＰ８８００→７３００
「まだだ。まだ、終わっては……！」
「そう。まだです」
まだ……。
「私のバトルフェイズは残っています！」
「な、に……？」
「この瞬間私は、手札を全て捨てることで速攻魔法『狂戦士の魂（バーサーカーソウル）』を発動します！」
『……え？』
それまで固唾を呑んで見守っていた後ろの皆から、何故か気の抜けたような声が聞こえました。どうしたんでしょうか？
『……はっ！？　あ、あのアテナ？　もしかしてその、それは……』
「希冴姫さん、お願いします！」
『そ、そんなっ！？　あ、あああああああああああああああああああっ！？』
狂戦士の力が宿った希冴姫さんが、その剣を構え直します。
「くっ！？」
「まずは一枚目……ドローします！」
引いたカードは……。
「『切り札の騎士―キング』！　モンスターカードです！」
『あああああああああああああああああああああああっ！』

「ぐあああああああっ！？」
セツＬＰ７３００→５８００
「二枚目、『切り札の騎士―ジャック』、モンスターカード！」
『やあああああああっ！』
「ぐがっ……ぁ」
セツＬＰ５８００→４３００
希冴姫さんがセツの眼前で、狂ったように剣を振るいます。
「三枚目……！『切り札の騎士―テンス』！」
『おおおおおおおおっ！』
「っ……が！？」
セツＬＰ４３００→２８００
「四枚目……！『冥王竜ヴァンダルギオン』、モンスターカードです！」
『■■■■■■――――――ッ！』
「ア……ア……っ」
セツＬＰ２８００→１３００
「これで……最後です！」
「っ！」
その時、膝を着いていたセツの目が力を取り戻し、ギッ！　と睨みつけてきました。
「っ……！　五枚目は……魔法カード、です」
その気迫に恐れてしまったのか、私が最後にドローしたのは魔法カード『光神化』。セツのライフは、１３００残りました。
『あ、あああ……ぁ？』
瞳から狂気の色が消え、カクンと膝を着く希冴姫さんを、セツが抱きとめます。
「……」
『せ、セツ……様？』
「……おはよう。希冴姫」
『ぇ……？』

「……ッ」
痛みをこらえるように立ち上がるセツ。その目には……理性の光。
私たちの良く知る……穏やかな、セツの顔。
「……いつかのバズーカといい、お前の目覚ましは何時も苛烈だな……アテナ」
「ぁ……」
セ、ツ……？
「お、お兄……ちゃん？」
「久しぶり……って言えばいいのか？　さだめ。皆も」
「せ、セツ……記憶、が？」
私は、震える手を伸ばし、セツに問いかけます。セツは、悪戯っぽい微笑を浮かべて答えます。
「……誰かさんが、随分強烈過ぎる目覚ましをしてくれたから、な」
「セツ……！」
戻って、来てくれた……！　やっと、やっと……私たちの、セツが……！
『セツ（くん・先輩）！』
「お兄ちゃん……」
中でも、さだめさんは安堵のあまり座り込んでしまっています。
よかった……本当に……。
「セ、セツ……お前、大丈夫、か？」
「剣士か。お前と凛には、悪いことをした。謝っても謝りきれん」
「い、いやオレらのことは別に良い。こうして、何ともなかったんだ。今更蒸し返しゃしねえよ。けど……」
「そ、そうですよ！　先輩、身体の方は……」
そうです。不可抗力とはいえ（強調）、セツの身体は９０００近いダメージを纏めて受けてしまっている筈……。しかし私たちの心配を余所に、セツは軽く笑って手を振ります。
「ん？　ああ、大丈夫大丈夫。こんなん全然大したことなごぷぁっ!?」

「血が！？」
「お、お兄ちゃーーーーーん！？」
「セツーーーーー！？」
セツが会話の最中に、おびただしい量の血を吐いて蹲ります。え、えと……。
「もしかして……私？」
『もしかしなくてもお前の所為だ！』
「ひゃうっ！？」
恐る恐る呟いた私に、皆さんから一斉にツッコミが入りました。
だ、だって……。
「ああするしかなかったんですよ！　ああでもしないと、セツのライフを削れなかったですし……」
「限度があるよ～！」
「そもそもあんなカード入れんな！」
「う、うぅ……」
非難轟々のなか、セツが口元を押さえつつ立ち上がります。
「っ……っ……だ、だいじょうぶ。俺は、平気だ」
「い、いやだってお兄ちゃん！　今、血がビシャァって！『ごぷぁっ！？』って！」
「『ぐはっ！？』くらいなら兎も角……」
「うん……『ごぷぁっ！？』はマズイよ～……」
「血の量も……ボタボタ、とかいう可愛いもんじゃなかっただろ」
「……バケツ一杯分ひっくり返したような音」
「それ、致死量なんじゃ……」
セツ以外の全員が大慌てでセツの心配をする中、セツ自身は一人だけ冷静に口元の血を拭います。
「だから、大丈夫だ。俺は、やせ我慢なら昔から得意なんだ」
「ほらやっぱりやせ我慢じゃん！　ほらアテナ！　さっさとターン終了してお兄ちゃんにターン回して！　お兄ちゃんはさっさとサレンダーする！」

「は、はい！　ターンエンドです！　セツ！」
「……俺の、ターンか」
さっきの『狂戦士の魂（バーサーカーソウル）』では、ギリギリセツのライフを削りきれませんでした。まあそれで記憶は戻ってくれたので、結果オーライとして……。
『ジロッ！』
け、結果オーライとして！　当初の目的だったセツにサレンダーを促した私たちでしたが、セツは自分にターンが回って来ても中々サレンダーしようとはせず、何かに耐えるように眉間にしわを寄せていました。
「セツ……？」
「すまん。アテナ、皆」
え……と疑問に思うよりも早く、セツはその手をデッキに掛けました。
「え、セ、セツ……？」
「お兄ちゃん……」
それは、どう見てもサレンダーの体勢ではなく……ドローの格好。戦意の篭った眼。困惑する私たちに、セツは悲しげに告げました。
「俺の記憶は戻った。皆のこと、全部思い出した。けど……けど俺は」
喜びの絶頂にあった私たちを、一気にどん底まで突き落とす、その言葉を。
「それでも俺は……皆の敵だ」

第四期第三十一話「心を届けて」（後書き）

セツ「おれは　しょうきに　もどった！」

こんにちは。上記の台詞は皆さんご存じの裏切りネタ。……知ってますよね？

……まあ、言いたいことは多々あるでしょうね。主に『狂戦士の魂』とか『狂戦士の魂』とか『狂戦士の魂』とか。

アテナのデッキには、マッチしてるんです。モンスター多めのアテナデッキには。テテュスみたいな感じで。

アテナ王様化計画進行中。あんなバランス崩壊したデッキを回したり『狂戦士の魂』使ったり……一体このメインヒロイン（爆）はどこに向かっているんでしょうか。そろそろ、しゃれにならんぞ……。

内容的には、なんとか主要な精霊は全部出せました。最後無理矢理バーサーカーソウルで出しましたが。それでも枠が足りずに出れなかった精霊もいますが。

最後の締めが、こんなのでいいのだろうか……。

※ラストの方で指摘のあった『巨大化』関連の数値間違いを修正しました。

それでは、悠でした！

第四期第三十二話「心を重ねて」（前書き）

さ「な～っにかな～な～っにかなっ！」
ル「今回は、これ」
『反魂のスピリチュア』
さ「アテナ自身を象徴するカードだね」
ル「対闇属性だと、圧倒的なアドバンテージ能力を有する退魔の女神」
さ「その分、攻撃力は低いし、闇属性じゃない相手だとただのバニラになっちゃうからかなり相手を選ぶんだけどね」

……遅くなりました！　なんとか、なんとか自分の誕生日には間に合わせました！　今回は妥協せずに書きたかったのと、来る夏の祭典に向けてバイトに明け暮れていたのが原因です。言い訳ですけども。

とにもかくにも、セツ編クライマックスの第四期第三十二話。どうぞお楽しみください。

第四期第三十二話「心を重ねて」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第三十二話「心を重ねて」

――それでも俺は、皆の敵だ。

その言葉の意味が、まったく理解できなかったのは、どうやら私だけではなかったようです。私の後ろで、今にもセツに駆け寄って行きそうだったさだめさんをはじめとする皆、セツが何を言っているのかわからないといった様子で呆然としていました。

「どういう、こと……？」

「……俺は、記憶を取り戻して尚、エンヴィーの騎士だ。さだめ」

「だから、どういうことなの！？」

理解できない、というようにさだめさんが叫びます。

「さだめ……」

セツはさだめさんを見て、苦しそうに唇を噛みしめます。

「……逆に、聞くぞ。俺に……この俺に、エンヴィーを倒せると思うか？　なあ、さだめ。お前なら、わかるんじゃないか？」

「そんなのわかるわけ……っ！？」

殆どムキになって言い返そうとしたさだめさんの勢いが、唐突に止まります。そして、顔が真っ青に。

「ただ、俺を愛して……それ以外には何も要らなくて……遍く全てに嫌われ憎まれ恐れられ……そんなエンヴィーを、俺が」

次にセツは、私に顔を向けます。

「アテナ。お前たちが、俺のためにここまでしてくれたこと、凄く感謝している」

「なん……ですか、それ。まるで、まるで……」

それじゃまるで、お別れの、言葉みたいな……。

「だけど、ここまでだ。アテナ。お前たちは人間界に帰れ。俺のことなんて忘れて、平和に生きてくれ」

「な……」

なにを……。

「何を言ってるんですかっ!?　セツを忘れるなんて、そんなこと、出来るわけがないでしょう!?　大体、エンヴィーを放って帰ったって、世界が……！」

「俺と一緒に居れば、エンヴィーは安定する。世界の滅びは避けられないかもしれないが……時間は稼げる。皆が、天寿を全うするくらいまで、俺が保たせてみせる」

「っそういう問題じゃ……！」

反論しようとしますが、セツは首を振って私の言葉を遮ります。

「ダメなんだよ。アテナ。俺には、無理だ。俺に、エンヴィーを傷つけることは出来ない」

「お前が……」

それまで後ろで見ていた剣士さんが、拳を握って反論します。

「お前が出来ないっていうなら、オレたちがやる！　オレたちだって強くなった！　必ず、お前の代わりにエンヴィーを……！」

「……そうだな」

セツは眼を伏せ、悲しげに答えます。

「確かに、皆は強くなった。例外なく、俺と会った時の皆とは見違えるようだ」

「だったら……！」

「だけど、俺は変わらない。昔から、ずっと俺だけは、一つも成長出来ていない。昔と同じ……バカなままだ」

苦しげに吐き捨てるセツ。

「お前らがエンヴィーを害そうと言うのなら、俺は皆の敵になる。俺には、自分の手でエンヴィーを傷つけることも、エンヴィーが傷つけられるのを傍観することも出来ない」

「どうして、そこまで……」

先ほどから顔を青くして黙ったままのさだめさんも含めて、私には全然わかりませんでした。セツが、変わっていない？　バカなまま？　一体……。

「……こう言えば、わかりやすいか。アテナ」

セツの目が、スッと細められます。感情の宿らないその目には、見覚えがあります。あれは、あの目は……。

「俺は、エンヴィー（あいつ）のために、お前を振るよ。今度こそ、さよならだ」

「……ぁ」

思い、出しました。そう。セツのあの目は……この状況は、あの時と同じ……。

――『……悪い、アテナ。俺がここで、お前の気持ちに答えたら……あいつは、さだめは支えを失って壊れる。俺は……あいつのために、お前を振るよ』――

「～～～～～～っ！」

私は、頭にカッと血が上るのを感じました。

「ふっ……ざけないでください！」

ダンッ、と足を地面に叩きつけて、私はセツを怒鳴りつけます。

「すまない。アテナ。お前が怒るのも当然だ。俺は、お前の気持ちを踏みにじった」

「そんなことはどうでもいいんです！」

「な、なに？」

全然わかっていないセツに、私は更に語気を強めて怒ります。

「私が怒っているのは、セツが嘘をついているからです！　そんな、そんな苦しそうで、泣きそうな顔で振られたって、なんとも思いませんよ！」
「アテナ……」
「もし、例え万が一！　セツが本心から私を振るなら、仕方ありません。散々泣いてまた改めてアタックすることにします！」
後ろから「あ、それでも諦める気はないんだ……」と呆れたような声が聞こえてきましたが、無視します。当然です。私はもう、セツが例え私以外の誰かと一緒になったとしても、一生セツを追いかけ続けます。今度は「ストーカー……」とか聞こえてきましたが、無視します。
「今の私の気分、わかりますか？……最低の告白を受けた気分です」
嘘の“嫌い”は“好き”の裏返し。そんなことは子供でもわかります。
「いいですか？　セツは私が……私たちが好きですよ。間違いありません」
我ながら凄い台詞です。ですが、今のセツはどう見てもそうなんですから、仕方がありません。
「そんな、ことは……俺は」
「セツ。隠しごとが得意なセツが、そんなにわかりやすい嘘を吐くんです。それくらい、好きになってくれてたんですよね？　セツですら隠しきれないくらいに」
確認、というよりは断定。自分でこんなこと言うのもどうかとは思いますけど……。
「……ああ。そうだ」
セツは、やはり苦しそうに、小さく頷きました。
「俺は……みんなが好きだ。愛している。心の底から……狂おしいほどに」
……あぁ。
「……どうして、でしょうね」

ずっと、待ち望んだ言葉だったはずなのに。
「今は、凄く虚しく響きます」
それは、きっと私たちとセツの心が重なっていないから。すれ違ったまま、どんな言葉を聞いたとしても、それはただ悲しみが増すだけでしかないのでしょう。
「貴方の言葉を、心を、聞かせてください。セツ」
「……」
しかし、セツは静かに首を振り、黙して語りません。
「……どうしてですか？　どうして、貴方は何も言ってくれないんですか？」
思えば、セツが私たちに弱音を吐いたところなんて、殆ど見た記憶がありません。
「セツは、何時も毅然と、堂々としていて……」
けれど。
「辛かったんでしょう？　苦しかったんでしょう？　だったらそう言えばいいんです。助けて欲しければ、そう言えばいいんです。セツが助けを求めれば、私たちは万難を排してセツの助けになります。なのに……」
セツは決して、弱音を吐かない。強い自分を私たちにずっと見せていて……それでも、その裏で一人傷つき苦しんでいる。
「そんな……そんな、血反吐を吐くまで頑張って……どうして、助けを求めなかったんですか」
「……そんなの、当然だ」
「当然？　どうしてですか？　私たちは、そんなに頼りになりませんか？　私たちは、セツの足手纏いでしかなかったんですか？」
「俺は……！」
キッ、と強い視線を向けてきたセツは、口の端から血が零れるのも意に介さず、強く叫びました。
「どれほど血反吐を吐こうとも、弱音を吐くよりよほどいい……！」
「セツ……！」

「血反吐くらい、いくらだって吐いてやる。そんなもんは、精神力でどうとでもなる。だけどな……弱音を吐いたら心が死ぬんだ。そうしたら、身体はどんなに健康だったとしても動かない。身体の限界はねじ伏せられても、心が折れれば何も出来ない！」

信念、決意、理想、覚悟……そういった全ての言葉が霞んでしまうほどに、強い想い。でも、でもそれは……。

「間違ってる。貴方は、それだけ強い想いを抱いていながら、向かうべき道を間違えている」

ルインさんの言う通りです。セツがどれほど正しく強い想いで動いていても、その想いを傾ける先が、世界の終焉なんて……絶対に間違っています。

「セツ、考え直してください！　私たちと一緒に、終焉を止めましょう！　このままずるずると終焉に向かうに任せるなんて……そんなのは、エンヴィーだって……！」

「わかってるよ！」

セツは私の言葉を遮って、吐き捨てるように叫びます。

「わかってるんだよ……俺が間違っている。理性でも、感情でも、俺はお前たちと行くのがどう考えても正しい。それを、望んでいる……」

「それじゃあ、なんで……」

頭ではわかっている。心も私たちのところにある。なら何が、セツをあちら側に留めているのでしょうか。

「俺の、今まで生きてきた軌跡。俺自身の人生。俺がここでお前らに着いたら、その全てが間違いだったってことになる。俺には、今まで生きてきた“御堂切”を捨てることは、出来ない」

生きてきた……軌跡？

「わかってるだろう？　今の状況は、かつてと同じだ。さだめを守りたい俺が、アテナを振った時と。その時だって、今と同じだったんだ。理性では、さだめが間違ってることなんてわかりきってた。感情でも、俺はアテナが好きだった。それでも俺は、拒絶した」

確かに……あの時と状況が似ていることは否定しません。でも……。

「同じじゃ、ないよ」

「さだめ？」

「同じじゃないよ。お兄ちゃん」

さだめさんが、今にも泣きそうな、それでも必死に耐えているような……今のセツとそっくりな顔で前に進み出ました。

「確かに、似てはいるよ。さだめの立ち位置に、エンヴィーが居るだけ。でも……」

さだめさんは、大きく手を広げて、私たち全員を指し示しました。

「あの頃とは違う」

「違う……？」

「さだめには味方がお兄ちゃんしかいなくって。お兄ちゃんには、誰も味方が居なかった、あの頃とは全然違う。……見てよ」

もう一度、小さな身体を一杯に広げて、さだめさんは私たちを強調します。

「お兄ちゃんには、こんなに一杯味方がいるじゃない！　さだめにも出来たように、お兄ちゃんにも……トモダチ一杯いるじゃんかぁ……！」

「さだめさん……」

最後は完全に涙声で、さだめさんは叫びました。そう。そうです。

「セツが……セツ自身が例え、あの頃と変わっていなかったとしても。セツを取り巻く環境は、全く別物になってる筈です」

例え、本人が変わっていなかったとしても。

「全く変わらないものなんてないんです。セツ。あの頃のセツは、さだめさんを救いました。なら、今回だって出来る筈です。エンヴィーを救うことが。……今度は」

私たちと、一緒に。

「……前回も出来たこと。それなら」

セツはギリ、と歯軋りをして、叫びます。

「それなら、また俺一人でやる！　みんなは関係ない！　これは、俺の……！」
「セツ！」
今度は私が、セツの言葉を遮って叫びます。
「セツだけの問題じゃありません！　どうして……どうして一人で全部やろうとするんですか！　弱音を吐かないというのなら、それでも良いです！　差しのべられた手を、ただ掴んでくれるだけでいいんです！　なのになんで……」
「俺が、傲慢（プライド）だからだ！」
「っ！？」
プライド。セツの罪。セツの、心の闇。
「お前たちが、俺に依存していた。俺は、それを知っていた」
依存……。確かに私たちは、みんな多かれ少なかれセツに依存していました。
「俺は、お前たちが依存してくれることを望んでいた。俺なしでは生きていけない程に、依存してくれることを」
「せ、セツ……」
「俺という精神的な支柱を必要とするように。俺と言う存在を、その心の奥の奥まで刷り込むように……俺は、皆と接していた。恐らく、無意識の内に」
私たちの依存心が、セツによって導かれたものだった……？
「俺を頼れ。俺に任せろ。俺に委ねろ。俺が守ってやる……お前たちは何もしなくていい。ただ、俺に身を任せていればそれでいい……」
セツは自嘲気味に笑い、決定的な言葉を放ちました。
「お前らは、俺が生かしてやる」
「っそれは……！」
あまりにも、傲慢。そう。確かに、誰かを守ってやる、どころではありませんでした。セツの、罪は。
「そんな……見下しているも同然の相手に、助けを求める……？

不可能だな。俺が例え傲慢（プライド）でなかったとしても、そんなことは出来やしない」

セツは……。

「俺は、心の底では皆を、仲間とも、味方だとも思っちゃいなかった。……きっと、そういうことなんだろうな」

「セツ、お前……」

「そんな……」

剣士さんたちが、ショックを受けたように項垂れる。

「……」

「アテナ？」

ですが私は、むしろセツの言葉に、突破口を見つけた気がします。

「……セツ」

「アテナ。これでわかっただろ。俺は、差しのべられた手を掴む、なんてこと出来やしないんだ。傲慢だから。俺が、手を差し伸べる側でしかあり得ないから」

「……それが、セツの心の闇だというのなら」

私はセツに、デュエルディスクを突きつけます。

「アテナ……？」

「引いてください。セツ。セツの……ターンです」

「なに……？」

セツが私たちを、対等に見ていないというのなら。見下しているというのなら。

「思い知らせてやればいいんです。セツ。貴方が……決して強くはないことを」

お互いに、ライフは互角。手札も互いにゼロ。フィールドは私の方が有利ですが、攻撃力１５００の希冴姫さんと、たった８００でしかない私……。アドバンテージと言えるかどうかは微妙です。

「さあ、セツ。引いてください。そして勝って見せてください。できるものなら」

私はあくまでも強気に、セツに迫ります。

「今の状況はわかるでしょう？　セツのドロー如何で、このデュエルの勝敗が着きます。ですから……」
「俺の、ドロー次第か」
「はい。ここでセツが、私の残りライフ１１００ポイントを削り切れれば、セツの勝ち。セツの好きなようにしてください。でも」
それでも尚、セツが逆転出来なかったなら。私が、このまま勝利したなら。
「……認めざるを得ない筈です。私たちが、決してセツのお荷物ではないことを。セツを支え、共に歩くことの出来る……仲間だということを」
セツが、今までの自分を捨てられないというのなら。
「私が粉砕してあげます。過去のしがらみに囚われて、心でも理性でも動けないのなら、私が無理矢理にでも、力尽くで動かして見せます。だから、だからセツ」
「アテナ……」
「……引いてください、セツ。セツのデッキは、必ず応えてくれます。セツの心に。セツが……本当に望んでいる答えに」
「俺の……」
セツは導かれるように、デッキに指を伸ばします。
「……わかってるのか？　これは、大分俺に有利な賭けだぞ」
「だからこそ、それを乗り越えて勝利することに意味があります。私が、勝ちます」
セツの想い。そして私たちの想い。セツのデッキが紡いでくれる筈です。
「私たちとセツの……未来を」
「……」
セツは暫し眼を閉じて、何事か考え込んでいるようでした。
「……そうだな」
「！」
「どうせ、どんなに押し問答したところで、お互い考えを変えやし

ないんだ。だったら、いっそ身を任せてみようか……運命に」
「じゃあ……！」
「決着を着けよう。アテナ。俺が勝つか、お前が勝つか。このドローできっと、全てが決まる」
「……はい！」
セツがデッキに指をかけます。その様子を、固唾を呑んで見守る私たち。誰かがゴクリ、と唾を呑みこむ音。
「俺の……ドロー！！」
ピッ！　と軽い音を立て、デッキから一枚のカードが引き抜かれます。
「俺は……」
セツがそのカードをゆっくりと眺め……フッ、と微笑みます。
「っ！？」
まさか……！
戦慄する私たちに、セツは笑顔で、こう言いました。
「……どうやら、これが俺の、運命だったみたいだ」
「っ何を……！」
セツは引いたカードを、デッキの魔法・罠ゾーンに差し込みます。
「俺は、手札から魔法カード……『火炎地獄』を発動する！」
「火炎……」
「地獄……？」
セツの宣言したカード名に、私たちは暫し頭が真っ白になりました。
「……魔法カード『火炎地獄』は、相手ライフに１０００ポイント。俺のライフに５００ポイントのダメージを与えるバーンカード……俺は」
ゴゥッ、と私とセツの周囲に炎が舞います。
「俺は……こうなることを望んだのか。アテナ」
「きゃあああああああああっ！？」
アテナＬＰ１１００→１００

セツＬＰ１３００→８００
炎が消え、あとに残ったのは首の皮一枚で繋がった私のライフと……丁度８００という数値で止まった、セツのライフ。
「セツ……」
「俺は、ターンエンドだ。……やってくれ。アテナ」
どこかすっきりとした表情で、セツは両手をだらりと下げます。
「残り……８００」
私は自分の手を眺め、強く握ります。
「……わかりました。思いっきり行きますよ。セツ！」
「ああ……来い！　アテナ！」
「私の、ターン！」
引いたカードを、今更確認はしません。私がこれからすることは、たった一つ！
「バトル！　私は、私自身……『反魂のスピリチュア』で、セツにダイレクトアタック！『トライデント・サンシャイン』――――――！！」
スピリチュアが掲げた槍が、強い輝きを持って投擲されます。セツは、両手を広げて槍を受けとめました。
「ぐっ……おおおおおおおあああああああっ！！」
セツＬＰ８００→０
「あっ……が、はっ！」
『セツ（お兄ちゃん）！』
ガクン、と膝を着いたセツに、私たちは駆け寄ります。
「アテナ……」
膝を着いたセツは、それでも倒れることはなく私たちを迎えてくれます。
「セツ……！」
「強く、なったな……」
そして、セツは何処か吹っ切れたように、満面の笑顔でこう、呟きました。

「俺の……負けだ」
セツの頬を、雫が一筋、流れ落ちて行きました。

第四期第三十二話「心を重ねて」（後書き）

こんにちは。

はい。というわけで、ようやくセツ編がこれにて終了しました。そしてついに、次回からは終焉、エンヴィー編に入ることになります！

今回のラスト、前回ちょっと『巨大化』関連で修正したことで、どうなるか心配してくれた人たちもいたんですが、ご覧の通りになりました。当初のプロットでは、ラストセツが『火炎地獄』を使って疑似サレンダーみたいな感じにするつもりでした。もうちょっと前は、『火炎地獄』でアテナとセツのライフが共にゼロ。つまり引き分けで終わらせようかとも考えていたんですが、けがの功名と言いますか、結果的には一番上手く纏まったんじゃないかな、と思います。

以下、没小ネタ。ラストの余韻を壊す確率百パーセントなので、余韻が冷めてから、或いはそれでも読む！　という方のみお進みください。

「私のターン、ドロー！」

引いたカードは……サイクロイドさん。

『ようよう嬢ちゃん、おれっちの攻撃力も丁度８００だったりするんだけどそこら辺どーよ！？』
「……」
『今のおれっちにはわかる……！　おれっちが皆の旅に着いてきたのは、きっとこのためだったのよ！　そう、頑固者の兄さんを、この手でぶっ飛ばして目を覚ましてやるためになぁ！』
「さ、サイクロイドさん……！」
『さあ、やってくれ嬢ちゃん……！　おれっちの……ラスト・ウィリーを！』
「……はいっ！」
私はサイクロイドさんのカードデュエルディスクにセットして、高らかに叫びます！
「私は、『サイクロイド』さんを攻撃表示で召喚！　バトルします！」
「……え、あ、アテナ？」
「サイクロイドさんで……セツにダイレクトアタック！『ラスト・ウィリー』！」
『行くぜ兄さん！　受け取れ！　おれっちのこの熱き魂の一撃をぉ！』
「ちょ、ちょっと待っ……おおおおおおおおおおおおおおっ！？」
セツＬＰ８００→０
「私たちの……勝ちです！」
『目、覚めたかい？　兄さん』
「や、やっぱりお前は……俺の天敵だ……」
セツはそう言って、その場に崩れ落ちました。

……それは、あり得たかもしれない物語。

……こういう展開も、あり得たんだよ！　ちょっと考えちゃったんだよ！　サイクロイドとか、丁度貪欲な壺でデッキに戻ってたし！　攻撃力丁度８００だし！……サイクロイドで始まりサイクロイドで終わる……以前感想で、サイクロイドがフィニッシャーになることを冗談交じりに話題にしたりしたこともありましたが……現実として、あり得た……っ！　ここに来てまさかのサイクロイドフィニッシュ……っ！

それでは、悠でした！

第四期第三十三話「対峙」（前書き）

さ「な～っにっかな～な～にっかなっ！」
ル「今回は、これ」
『終焉の餓狼』
ユ「終焉モンスターの一枚だよ～。まずは小手調べ、みたいなものかな～？」
さ「え、あのユーキさん……？　ここ、さだめたちの……」
ユ「戦闘で破壊されるとデッキから。逆に戦闘で相手を倒せば墓地から同名モンスターをリクルートすることが出来る高性能なリクルーターだよ～」
ル「……私たちの、コーナー……」
ユ「効果は強力だけど、一般的なリクルーターに及ばないステータスの低さが一番の問題。一番目の効果は兎も角、二つ目の効果を使うには他のカードで補助してあげる必要があるね～。あ、詳しい効果はオリカ紹介に載ってるから、そっちも見て参考にしてね～」
さ&ル「「乗っ取られた……！？」」

お久しぶりです悠です。なんかさだめとルインのコーナーがユーキちゃんに乗っ取られましたが、二人は効果を知らないから仕方ありません。
遂に対峙する終焉、エンヴィー。セツたちはエンヴィー相手にどうするのか。アルカナクライマックスです！

第四期第三十三話「対峙」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第三十三話「対峙」

「ぐっ……」
俺は、痛み悲鳴を上げる身体を無理矢理動かし、立ち上がる。
「……無理しちゃだめ」
「痛っ……悪い、ルイン」
すぐに駆け寄ってきたルインが俺の身体を癒してくれる。それだけじゃ精々が応急処置にしかならないが……十分だ。
「まずは……ありがとう。みんな。こんな、バカな男のために、手間をかけさせた」
「そんな……いいんですよ。それより、私こそすみません。その……大丈夫ですか？」
全て終わって、漸く散々に痛めつけた事実を思い出したのか、アテナがビクビクと、聞き辛そうに聞いてきた。
「……大丈夫だ、と言ったら、また嘘になるな」
「はぅ……」
尤も、俺としてはそんなアテナの様子に微笑ましさすら感じているのだが……これは惚れた弱みかね。
しょんぼりと肩を落とすアテナに笑みを浮かべる。
「心配するな。確かにもう強がりでも大丈夫だとは言えないが……助けて、くれるんだろう？」

「ぁ……」
俺の言葉に、俯いていたアテナはパッと顔を上げて、満面の笑顔を浮かべた。
「は、はい！」
そんなアテナの、輝かんばかりの笑顔に、今の俺はただ愛しさしか感じない。……駄目だな。認めた途端、思考が色ボケしている。
「お兄ちゃん……」
そんな自分自身に苦笑していると、おずおずといった様子でさだめが近寄ってきた。
「……さだめ。お前にも心配かけたな」
本当に、コイツにとっては死ぬより辛い時間だった筈だ。自惚れでも何でもなく、さだめにとって俺は世界の中心であったはずなのだから。
「ほら。さだめ」
涙目になっているさだめを、軽く手招きする。それだけで、さだめには十分だったようで、勢い良く飛びついてくる。
「お兄ちゃん……お兄ちゃん、お兄ちゃんお兄ちゃん！　う、うぁあああああああああああああああああああああああああん！」
「……悪かったな。俺は今度こそ……本当の意味で、お前を守るから」
今までの俺はただ、さだめを“飼って”いただけだ。自分に都合のいい、俺だけを求めるペットとして。自分の所業に、我ながら反吐が出る。
「守るなんてどうでもいい！　さだめは、さだめはただ、お兄ちゃんが傍に居てくれるならなんでもいいの！　だから、だから……」
「ああ……俺はもう、居なくなったりしないよ」
胸の中で泣き続けるさだめを抱きしめながら、俺は希冴姫に顔を向けた。
「セツ様……」
「希冴姫。良かった。お前が生きていてくれて」

「そんな……わたくしは、わたくしは結局、騎士としても女としても、貴方を守ることが出来なかった……無意味に死んで、不必要な悲しみを、貴方に背負わせてしまいましたわ」
「それは違う。お前の死が、無意味だったわけじゃない」
そう。希冴姫は決して、無意味に一度死んだわけじゃない。
「ですが……結局わたくしは、セツ様を守れませんでした」
「違う。お前の死が無意味だったわけじゃなく……俺が、無意味なものにしてしまったんだ」
今こそこうして希冴姫と話すことが出来ているが、もしかしたらもう話せなかったかもしれない。
「……今だからわかる。誰かの死を、意味あるものに出来るかは、生きている奴にかかってるんだ。俺は……お前の死を、無意味なものに変えてしまった。本当に、すまない」
「セツ様……」
俯いてしまった希冴姫から顔を動かし、ルインを見る。その顔は、いつものように無表情で、しかし何処か安堵したものだった。
「……無事で良かった」
「ルイン。ありがとうな。そして、すまない。ルインの忠告を、もっと俺がしっかり聞いていれば、きっとこんなことにはならなかった筈なのに」
「……そんなこと、ない。私は……貴方を止められなかった」
俺のことを、良く理解してくれていたルインだからこそ、一番辛かっただろう。
「俺は……バカだな」
「……うん」
言葉少なルインに対して、俺も一言に色々な意味を込めてそう呟く。ルインには、それでも十分伝わった様で、微笑んで頷いてくれた。
「ホント、馬鹿だ。こんなに深く、自分を理解してくれる奴がいるのに、俺は……」

俺自身が、誰も信用しようとしなかった。
「貴方は、もっと手を抜くことを覚えるべき」
「……だな」
手を抜く、か……確かに、殆ど考えたことなかったよ。
「……貴方は不思議。普段は頭が柔らかいのに、そんなところだけ頑固で生真面目」
「う、まあなんというか……歪なんだろうな。我ながら」
頭が柔らかく、融通の利く表人格と、自分の立てた誓いのためだけに生きる頑固な本質と。長いこと表人格のまま生きてきたから、どちらが本物とも言えなくなって、結果全体的に歪な人格構造になってしまっているんだろう。
「自分のことなのに、随分他人事みたいに分析するね～」
「ユーキちゃんか」
彼女にも、色々と謝らないといけない。俺はユーキちゃんに向き直り、軽く頭を下げた。
「ゴメン。ユーキちゃん。君を巻き込んだ」
「違うよセツくん」
「え？」
スパっと即否定されて、思わず間抜けな声を上げてしまう。それがおかしかったのか、ユーキちゃんはクスリと笑った。
「わたしはね。巻き込まれたかったの。セツくんに」
「巻き込まれたかった……？」
オウム返しに聞き返す俺に、ユーキちゃんは微笑んで頷く。
「わたしは、セツくんが好き。好きな人が傷ついて、苦しんでいる時に、一人何も知らないままのほほんと過ごすなんて出来ないよ」
「む……」
相変わらず、ユーキちゃんからの告白、というものには弱い。思わず目を逸らす。
「それに……わたしは、エンヴィーのお姉ちゃんだから」
「……そっか」

もう他人事じゃない、ってことか。
「辛いことも沢山あった。一杯泣いたし、一杯苦しんだ。それでもわたしは、セツくんに会えて強くなれたし、少しだけだけど、自信も持てるようになった。大切なもの、一杯くれたの。だから、わたしは後悔なんてしてないよ」
「……ホントに、強くなったんだな。ユーキちゃん」
ユーキちゃんを、普通の女の子、という枠に当てはめて考えるのは、もう逆に失礼なんだろうな。
「ねえ、お兄ちゃん」
そんな時、もぞもぞと腕の中でさだめが動いて声をかけてきた。
「ん？　どうした、苦しかったか？」
「ううん。もっと強くてもいいくらい。そうじゃなくて」
さだめはチラ、と俺の顔を見上げる。
「お兄ちゃん、その血なんだけど……」
「え？　ああ、そうだな。何時までも血を垂らしててもみっともないよな。今拭いて――」
「舐めていい？」
「良くねえよ！　なに!?　なんでこのタイミングでボケ!?　脊髄反射的に突っ込んだけど、今漫才するタイミングじゃねえだろ！」
「いや、割かし真剣（マジ）で」
「余計悪いわ！」
「さっきからこう、そこの血溜まりに顔突っ込んで血を啜りたくて身体が疼いてしょうがないんだけど」
「今日び吸血鬼でももっとエレガントに血を嗜むわ！」
ちなみに首から吸うのもエレガントじゃないらしいが。……輸血パックからならいいんだろうか？
「ワイングラスなら用意するよ？」
「どこから!?　つかそういう問題じゃない！」
「うん、わかった。じゃあ口移しで」
「さも妥協案のごとく極論持ちだすのはやめような？」

すっかり空気をブレイクされてしまい、やれやれと溜息を吐く。
対するさだめは何が嬉しいのか、にっこにっこと満面の笑みだ。
「いやーやっぱりお兄ちゃんのツッコミは心地良いね！　エースとかのも悪くないけど、下ネタ系だとノリノリで突っ込んでくれるのがアテナくらいしかいなくてさ～」
「わ、私だってノリノリで突っ込んだりしてないですよっ！？」
「その猫被り、いい加減誰も信用しなくなってるからね。エロ～アテナエロ～」
「さだめさん！」
「……俺がいない間、世話をかけたな。エース」
「……まあ、この我が不覚にも貴様を尊敬しそうになったことは否めないな」
そりゃ相当だな。
「ん？」
ちょいちょい、と肩を突かれて、そちらに顔を向けると、ルインが声を潜めて語りかけてきた。
「……ああは言っているけど、貴方が居ない間、彼女はあんまりボケてなかった。むしろ……」
「みんなのこと、気遣ってくれてたんだろ？　俺の、代わりに」
こく、と頷くルインに、思わず苦笑する。ったく、あいつは……。
「さっきのやり取りだって、俺を含めてみんなを元気づける行動の一環だろうしな。いつからそんな気遣い出来るようになったんだか」
「流石、貴方の妹」
「ははっ」
自分がそこまで大した奴とは思っちゃいないが、さだめが誰にも誇れる、立派な妹に成長してくれたことが素直に嬉しい。何だかんだ、さだめのお陰で場の雰囲気は大分明るくなった。
「さて……」
俺は気を取り直し、全員の顔を順番に見やる。
「……行こう。エンヴィーのところに」

「でもセツ、身体は……」
「正直、大丈夫じゃないけどな。完治するのを待つ時間は正直、もう残っていない」
ユーキちゃんが去り、俺すらもいなくなったことにエンヴィーが気付けば、その時点で暴走が始まってもおかしくない。いや、十中八九始まるだろう。それくらい、エンヴィーは危うい。
「……だから、行くしかない。行って、エンヴィーに伝える。今の、俺の気持ちを」
「わたしも……」
ユーキちゃんが、真剣な目で俺を見つめる。
「わたしも、伝えないと。今、わたしはこんなにも満たされてるってこと。エンヴィーだって、絶対に今よりずっと幸せになれるんだってこと。伝えなきゃ」
「まさかまた、私たちを置いて行く、なんて言いませんよね？」
「……ああ」
本心を言えば、置いて行きたい。どうせ、向こうに行ってもデュエルするのは俺一人。皆を連れていく必要はない。だが……。
「もう、離れない。俺たちは、ずっと一緒だ」
同時に、離れたくない。ついて来て欲しいと心から思う。俺だけじゃ、きっと負けてしまうんだろうと思う。皆と一緒に行けば……。
「きっと、伝わるって信じてる。伝えるためには、みんな一緒じゃないとダメなんだ」
ひどく、穏やかな気分だ。気負うこともなく、ただ静かに、希望を持って未来を見れる。傲慢が心に巣食っていたときには、考えられない程に。
「さあ、準備は良いか？　あとは、クライマックスまで一直線だぞ」
『もちろん！』
全員の返事に満足し、俺はエンヴィーの居る所まで皆で跳んだ。

「あっ！　セツ帰って来……た……」
　エンヴィーの居る所まで跳ぶと、俺の帰りをそわそわとしながら待っていたエンヴィーがパッ、と笑顔を見せて駆け寄り……表情を凍らせた。
「……誰。なんで、セツ以外の人たちが居るの」
　一瞬で無表情になったエンヴィーは、そう言って後ずさる。
「エンヴィー、これは……」
「聞いて欲しいの。わたしたちは……」
「嫌ッ！」
　俺とユーキちゃんが代表してエンヴィーに話しかけたが、エンヴィーは更に一歩後ずさって自分の身体を抱きしめた。
「セツ……？　どうして、その人たちがいるの……？　セツ、セツも……ボクを捨てるの……？」
「違う、エンヴィー俺は……」
「やめて！　ボクを……ボクを捨てないで！」
　エンヴィーの言葉は、俺に問いかけているようで、全て自分の中で完結してしまっている。既に、俺の言葉に耳を貸す様子もない。
「エンヴィー聞いてくれ！　俺はお前を……」
「煩い！　煩い煩い煩いぃ！　やっぱり、そうだ。みんな、ボクを捨てるんだ……ボクが、終焉（ボク）だから……ボクは、独りぼっちなんだ」
　エンヴィーの目は、既に焦点を失い、俺たちを見ていない。
「セツ……その、エンヴィーは……」
「……正直、エンヴィーは俺以上に追い詰められてるからな。しかし、俺以外の人間を見るだけでこうなるほどとは……思ってなかったが。俺のミスだな」
　アテナたちを振り切ってでも、一度俺だけ、或いはユーキちゃんと二人だけで話してみるべきだったかもしれない。けど、こうなってしまってはもう仕方ない。
「嫌だ……嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ！　ボクは……ボクは……」

頭を抱えて、髪を振り乱すエンヴィーに、俺は諦めずに声をかける。
「エンヴィー！」
「どうして……？　セツは、ボクを守ってくれるって言った！　愛してくれるって言った！　抱きしめてくれるって言ったのに！　どうして、そっちにいるの！？」
「守るために、愛するために、抱きしめてやるために！……俺はお前を救わなきゃいけない。救われないまま守っても、愛しても、抱きしめても。……意味がないことを知ったから」
「いらない！　救いなんていらない！　だって、救いって死ぬことでしょう？　ボク、知ってるよ。ボクの救いは死ぬことなんだって。死ぬことが、ボクにとって一番の救いなんだって！」
「違う！　死ぬことが救いだなんて、そんなことがあってたまるか！」
「煩い！……もう、いい。ボクを愛してくれないなら……ボクを、守ってくれないなら……みんな、みんな……」
「エンヴィー……！」
「みんな……死んじゃえ！」
エンヴィーが叫ぶと同時、エンヴィーの腕に闇のデュエルディスクが出現し、周囲を闇が覆う。
「くそ……やるしかないのか」
「聞く耳持たないって感じだね。というか、持てないって言った方がいいのかな？」
さだめの言う通り、今のエンヴィーは周囲の言葉に耳を貸す余裕がない。多少荒療治にはなるが、一度落ち着かせるためにもデュエルするしかないだろう。
「……エンヴィー。絶対、助けてやるからな。デュエル！」
セツＬＰ４０００
エンヴィーＬＰ４０００
「ボクの、ターン。ドロー！」

闇色のデュエルディスクから、エンヴィーはカードをドローした。
「ボクは『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を攻撃表示で召喚！　カードを一枚セットしてターンエンド！」
『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』ＡＴＫ１３００
「俺のターン、ドロー！」
終焉モンスターか……。
以前ユーキちゃんが使ってきた時には負けてしまったことを思い出す。
「けど、今度は違うぞ」
使っていたのがユーキちゃんという事実。そして何より切り札の騎士の助力を得られる今は、そう簡単に負けはしない。
「俺は『切り札の騎士―クィーン』を攻撃表示で召喚！　バトルだ！」
『切り札の騎士―クィーン』ＡＴＫ１５００
「希冴姫で『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を攻撃！『エレガント・ハーツ』！」
『行きますわ！　はあああああっ！』
希冴姫の振るう剣によって、闇色の獣が斬り伏せられる。
エンヴィーＬＰ４０００→３８００
「やりました！　先制です！」
「いや……」
無邪気に喜ぶアテナだが、終焉はそう簡単に終わらない。
「っ……『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』が戦闘によって破壊された場合、デッキから同名モンスターを特殊召喚するよ」
『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』ＡＴＫ１３００
「リクルート効果持ち……！？」
「……俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」
前回の戦いから、餓狼の効果はわかっていた。だが、それでもあえてダメージを与えることを選択したのは……。
「かふっ……！？」
「セツ！？」

「血が……」
「……正直、あんまり長く立ってられそうにないな」
今も、視界が揺れてしょうがない。デュエルディスクを構えるだけでも一苦労だった。
「そんな……！？」
「さだめが代わる！　お兄ちゃん、デュエルディスク貸して！」
「駄目だ。闇のデュエルがもう始まってしまっている以上、選手交代は出来ない」
「セツ、まさか……！」
「……俺の生きてきた二十年は、たった一度の負けですっかり変わるほど、軽いものじゃなくってな」
すまない、とは思う。結局、俺はまた無駄な自己犠牲でこの場に立っている。そのことに、酷い自己嫌悪すら覚える。だが……。
「それだけじゃない。どうあれ俺は、エンヴィーと決着を着ける役目を、他の誰にも任せはしなかった」
それに、考え方が全く変わらなかったわけでもない。
「でも……！」
「だから」
尚も不満そうにするアテナたちに、俺は微笑みかけた。少しでも安心して貰えるように。
「だから、アテナ。みんなも、頼む。俺を……支えてくれ。最後まで俺が、倒れることのないように」
「……ぁ」
俺の言葉に、しばらくポカンとしていたアテナたちだが、すぐにその顔を苦笑に変えた。
「……全く、仕方ないね。お兄ちゃんも」
「ん～でも、少しは改善の兆しあり、だよ～？」
「……改心への道のりは遠そう」
『そこは、時間をかけるしかありませんわね』
「そのためにも、ここで負けて貰うわけにはいかんな」

スッ、と俺の背中にアテナの手が添えられる。
「……支えます。今はまだ、それだけしか出来ませんから。でも、きっといつか……」
いつか、俺がみんなを本当に頼れるようになったなら。
「……ああ。いつになるかはわからないけど、な」
俺はアテナたちに頷きを返し、改めてエンヴィーと向き合うのだった。

第四期第三十三話「対峙」（後書き）

こんにちは。

なんか、ユーザＴＯＰにアルカナがなくなっていてよもや削除されたか……！？　と激しく戦慄した悠です。その時の悠の動揺っぷりは凄かったです。え、ここまで来て！？　みたいな。また一から評価ポイントとか溜め直しかと思いましたよ。そこまでポイントに拘っちゃいないですが、流石にここまで読者のみなさんと一緒に書き上げてきたアルカナが無に帰すとか、考えたくないですしね。

ともあれ、なんとか更新自体は出来て何より。以下、内容補完です。

ようやくセツを本当の意味で取り戻したアテナたちですが、セツの本質自体はまだ改心しきってはいないようで。でも、それも仕方ないです。セツも言ってますが、二十年間生きてきた価値観とか考え方が、コロッと変わるわけがないのですから。これから先続いていく未来で、ゆっくりと癒していくしかないのでしょう。そのためにも、ここで負けるわけにもいきません。まだデュエルは始まったばかりですが、応援よろしくお願いします。

ところで、新しい禁止・制限……開闢が解禁されましたね。さだめ大喜び。ルインはｏｒｚです。そしてサイクロン無制限、だと……！？　大嵐制限復帰といい、どうしてそうも永続カードを排斥するのか。永続は元より、フィールドも装備もユニオンとかすらも始めっから日陰ってたのにますます日陰になっていく……可哀想に。

それでは、悠でした！

第四期第三十四話「俺に出来ること」（前書き）

さ「な～っにっかな～な～っにっかな！？」
ル「今回は、これ」
『魂吸収』
さ「除外を条件に発動する、ライフゲインカードの中でも屈指の回復効率を誇るカードだね」
ル「『ネクロフェイス』や『大火葬』辺りと併用すると凄い」
さ「一番は『ヘルテンペスト』とのコンボかな？　発動条件の所為でダメージがかさむ『ヘルテンペスト』だけど、まとめて回復出来るしね」

お久しぶりです！　お待たせしました！　エンヴィー戦の中編をお届けします！　尚、今回はかなりオリカ祭りとなっておりますので、何かわからないことがあれば遠慮なく感想辺りでお尋ねください！

2013

第四期第三十四話「俺に出来ること」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第三十四話「俺に出来ること」

「……ボクのターン。ドロー」

俺たちのやり取りを見ていたのか見ていないのか、幾分激情は収まったエンヴィーがカードをドローする。

「ボクはモンスターを一体守備表示でセット。『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を守備表示に変更してターンエンド」

『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』ＤＥＦ１０００

激情の収まったエンヴィーは嫌に慎重だ。いや、焦らずとも、俺が自滅する可能性の方が高いのだから当たり前か。

「俺のターン、っ……ドロー！」

カードをドローする度、体中を激痛が走る。だが、これくらいは今更だ。気にしちゃいられない。

「俺は『切り札の騎士―キング』を攻撃表示で召喚！　効果によりデッキから『切り札の騎士―ジャック』を特殊召喚する！」

『切り札の騎士―キング』ＡＴＫ１６００

『切り札の騎士―ジャック』ＡＴＫ１９００

『主よ、無理をするでないぞ』

『貴方が死んでは元も子もありません。くれぐれも、ご自愛を』

「ああ、わかってる。俺は『アルカナソード　ダイヤ』をジャックに装備。バトルだ！」

『切り札の騎士―ジャック』ＡＴＫ１９００→２２００
『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』はリクルーター。倒しても次の餓狼が出てくるが、三銃士による波状攻撃なら全て討ち取れる！
「まずは希冴姫で『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を攻撃！『エレガント・ハーツ』！」
『はあああああああっ！』
希冴姫の剣が闇の狼を切り裂く。
「無駄だよ。『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』はもう一体居る」
『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』ＤＥＦ１０００
「もう一度！　今度はキングで『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を攻撃する！」
『わしを、老骨と侮るでないぞ。おおおおおおっ！』
キングの剣は力強く狼を切り裂く。これで三体だ。これ以上は召喚されない！
「そしてジャックで守備モンスターを攻撃だ！」
『……御免ッ！』
ジャックが切り裂いたのは『終焉の精霊（ジ・エンド・スピリット）』と似た顔を持つ小さな闇の塊。
『終焉の僕（ジ・エンド・サーヴァント）』ＤＥＦ０
「あれは……『終焉の僕（ジ・エンド・サーヴァント）』？」
「ユーキちゃん、知ってるのか？」
「うん。『終焉の僕（ジ・エンド・サーヴァント）』は、戦闘で破壊されたとき、除外することでデッキからカードを一枚ドロー出来るドロー強化モンスターだよ」
ユーキちゃんの言葉通り、エンヴィーはカードを除外して一枚ドローしている。俺も『アルカナソード　ダイヤ』の効果でカードを一枚ドローする。
「それに……『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を三体とも倒しちゃったのは、ちょっとマズイよ～」
「……どういうことだ？」
「ボクのターン！」
ユーキちゃんに詳細を尋ねる間もなく、エンヴィーがカードをド

ローする。
「ボクは、手札から永続魔法『魂吸収』を発動」
「『魂吸収』？」
『魂吸収』はカードが除外される度、一枚につき５００ポイントライフを回復するゲインカード。前回のユーキちゃんとのデュエルでも思ったが、やはり除外軸なのか。
「ここで『魂吸収』！？　マズイよ。一気に回復されちゃう！」
「なに？」
ユーキちゃんが蒼白な顔で叫ぶ。エンヴィーが動く。
「ボクは墓地に存在する三体の『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』を墓地融合する！」
「墓地融合！？」
墓地の『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』が除外され、その魂がエンヴィーに吸収されて行く。
エンヴィーＬＰ３８００→５３００
「……地獄に落ちた三匹の餓狼。互いにその屍肉を喰らい、混ざり合い、その身は一つ、三つ首を持つ魔獣へと変わる……『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』は、墓地にリクルーターでありながら、墓地に溜まることを警戒しなくちゃいけないモンスター。『融合』の魔法カードを使うまでもないの。……出てくるよ。三頭狼が」
「ケルベロス……！？」
「融合召喚……！『終焉の三頭狼（ジ・エンド・ケルベロス）』！」
『ガアアアアアアアアアアアッ！！』
『終焉の三頭狼（ジ・エンド・ケルベロス）』ＡＴＫ１３００
「な、なんだ……名前の割に攻撃力は『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』と同じじゃん。希冴姫さんよりも低いし、脅かさないでよ」
安堵したようなさだめの言葉に、しかしユーキちゃんは首を振った。
「『終焉の三頭狼（ジ・エンド・ケルベロス）』は戦闘では破壊されない上、モンスターがいる限り一ターンに三度まで攻撃出来る効果を持ってる。それだけなら、単なるリクルーター潰しのモンスターだけど……」

なにか、あるのか。コンボカードが。
「ボクは手札から魔法カード『終焉思想』を発動」
「っ……やっぱり！」
聞き慣れぬカード名に、ユーキちゃんを見る。ユーキちゃんは俺たちに説明、というよりは自分で確認するように説明してくれた。
「……魔法カード『終焉思想』は、簡単に言えば『ジェノサイド・ウォー』の除外版。戦闘を行ったモンスターを、バトルフェイズ終了時に除外するの」
「除外か……！」
マズイ。希冴姫たちを除外されれば、アルカナが……！　それに『魂吸収』がある時にそんなに大量に除外されれば……。
「バトル！『終焉の三頭狼（ジ・エンド・ケルベロス）』で、セツの騎士を攻撃！『ヘル・エンドファング』！」
『くっ……迎撃するしか！』
希冴姫たちは剣を構え、『終焉の三頭狼（ジ・エンド・ケルベロス）』を迎撃する。
「ぅ……っ」
エンヴィーＬＰ５３００→３９００
エンヴィーにダメージが入るが、『魂吸収』のゲイン効果の前ではあまり意味を為さない。
「全部……奪ってあげる。セツの大事なモノ……全部、全部……そうすれば、また抱きしめてくれるよね……？　ボクだけを見て、ボクだけを愛してくれるよね……？」
『ぐっ……きゃあああああっ！？』
『こ、これは……！？』
『ぬうっ！？』
「希冴姫っ！　ジャック！　キング！」
三銃士の足元から闇が這いより、希冴姫たちを呑みこんで行く。
くっ……！
「エンヴィー……！」
座り込んだまま、ブツブツと呟くエンヴィーの目に、光はない。

希望も、ない。
「……『終焉思想』の効果で、『終焉の三頭狼（ジ・エンド・ケルベロス）』を含めたモンスターは除外される。『魂吸収』の効果により、ボクはライフを２００ポイント回復する」
エンヴィーＬＰ３９００→５９００
「全部、呑み込んであげる……みんなみんな、ボクのモノになればいいんだ……優しい闇の世界に抱かれて……みんな、消えていく」
「……それは、優しさじゃない。それは、絶望と諦観に満ちた終焉だ。終焉なんだよ。エンヴィー」
「わからない。わからないよセツ……ボクには、なにもわからない」
「いつかきっと、わかる日が来る！　だから、エンヴィー」
「煩い！　ボクは、ボクは一人だけいればいい。セツ、セツが一緒に居てくれるなら、他にはなにも、なにもいらない。いらないんだ……！」
「エンヴィー！」
「ボクは『終焉の魔術師（ジ・エンド・マジシャン）』を攻撃表示で召喚！　カードを一枚セットしてターンエンド」
『終焉の魔術師（ジ・エンド・マジシャン）』ＡＴＫ１７００
「気を付けてセツくん。『終焉の魔術師（ジ・エンド・マジシャン）』はカードが除外される度に、相手ライフに５００ポイントのダメージを与えるモンスター。今のセツくんじゃ、何発も受けられない」
「……ああ。わかったよ。ありがとうユーキちゃん」
幸い、ユーキちゃんが終焉モンスターを知っているお陰で情報は不足しない。
「俺のターン、ドロー……っ！？」
「セツ！」
一瞬よろけた俺を、アテナが慌てて支えてくれる。くそ……流石にキツイ。ドローを一回する度に魂ごと持って行かれそうになる。
「……俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ」
今は、耐えるしかない。正直長引くと厳しいが、手がない以上は

仕方がない。
「ボクのターン、ドロー！」
エンヴィーも、墓地アドバンテージを大分失った。すぐに攻めてくるとも思えないが……。
「ボクはトラップカード『針虫の巣窟』を発動。デッキの上から五枚を墓地に送る」
「くっ……！？」
エンヴィーのデッキから五枚が墓地に送られる。送られたカードは『終焉の僕（ジ・エンド・サーヴァント）』『終焉の死霊術師（ジ・エンド・ネクロマンサー）』『腐り堕ちる世界』『終焉の死神（ジ・エンド・グリムリーパー）』『終焉の夜王（ジ・エンド・ナイトキーパー）』の五枚。
「四枚がモンスターカード……これは」
「更に『終焉の精霊（ジ・エンド・スピリット）』を召喚。魔法カード『ブラック・ホール』！」
「なっ！？」
「ぶ、『ブラック・ホール』！？」
「た、確か『終焉の精霊（ジ・エンド・スピリット）』の効果は……」
ここここに至って、アテナたちも終焉モンスターの特性を理解したようだ。
「墓地と除外ゾーンをフル活用した変則的な除外デッキ……！」
今、エンヴィーの除外ゾーンには五体の終焉モンスター。そして墓地に四体。フィールドに二体の計十一体。これが全て、エンヴィーの墓地に集まる……！？
「ユーキちゃん……教えてくれ。この状況で、一番不味い展開を」
「……」
顔色を悪くしていたユーキちゃんは、恐る恐る顔を上げて俺を見る。
「……間違いない。出てくるよ。わたしの知ってる中で、一番危険なモンスター……」
「切り札クラスか……！」
「名前は……」
ユーキちゃんがその名前を告げようとした瞬間、エンヴィーは墓

地に戻った終焉モンスターを全て除外した。

「『終焉の混沌獣（ジ・エンド・カオティック・キメラ）』……融合召喚！」

『オオッ！！』

「うわっ！？」

「なんだっ！？」

「くぅっ……！？」

頭をぐちゃぐちゃに掻き回されるような咆哮と共に、それは姿を現した。

『終焉の混沌獣（ジ・エンド・カオティック・キメラ）』ＡＴＫ４４００

「こ、攻撃力４４００……」

「『終焉の混沌獣（ジ・エンド・カオティック・キメラ）』の攻撃力は、融合召喚時にゲームから除外した終焉モンスターの４００倍……除外したのは十一体、だよ」

だが、それだけじゃない筈だ。ただ攻撃力が高いだけなら、ユーキちゃんもここまで狼狽はしないだろう。

「……そして、除外したカードの種類二種類ごとに、混沌獣の効果はプラスされて行くの」

「二種類ごと……！？　確か、除外されたのは……」

「『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』『終焉の僕（ジ・エンド・サーヴァント）』『終焉の三頭狼（ジ・エンド・ケルベロス）』『終焉の死霊術師（ジ・エンド・ネクロマンサー）』『終焉の死神（ジ・エンド・グリムリーパー）』『終焉の夜王（ジ・エンド・ナイトキーパー）』『終焉の魔術師（ジ・エンド・マジシャン）』『終焉の精霊（ジ・エンド・スピリット）』……八種類もいるじゃないですか！？」

「ユーキちゃん」

俺の視線に、ユーキちゃんは頷いて話してくれる。

「……まず、二種類。混沌獣は、対象となる効果を受けない。四種類。一ターンに一度戦闘を放棄して、相手フィールドのカードをゲームから除外する。六種類。守備表示モンスターを戦闘によって破壊した時、その守備力を攻撃力が上回っていればその分だけ戦闘ダメージを与える。……そして八種類。エンドフェイズに、除外され

た自分のカードを任意の枚数墓地に戻すことが出来る」
「っ……！」
どの効果も相当強力だ。しかも、召喚条件も見たところ緩い。全ての効果を得るのは難しいが、四種類くらいなら比較的容易に出せるだろう。
「更にマズイことに……」
エンヴィーLP５９００→１１４００
エンヴィーのライフが極端に回復されてしまった。墓地と除外ゾーンを行き来するエンヴィーのデッキに、『魂吸収』の回復効率は半端じゃないな。
「バトル……！『終焉の混沌獣（ジ・エンド・カオティック・キメラ）』で、セツを攻撃……っ！『カタストロフ・スクリーム』！　っ死んじゃえ！」
「セツ！」
「悪いが、まだ死ぬわけにはいかないんだよ……！　トラップカード『天位の階（きざはし）』！　ゲームから除外された切り札の騎士をデッキに戻して融合する！」
「トラップ融合！　いいタイミング！」
「『切り札の騎士―クィーン』『切り札の騎士―キング』『切り札の騎士―ジャック』の三体を融合し、来い！　天位の騎士『アルカナ　ナイトジョーカー』！」
『アルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ３８００
「ダメ！　アルカナでも、ダメージを減らすことしか……！」
「アルカナの攻撃力でも、今の混沌獣には敵わないなんて……」
「セツの騎士……その魂すら喰い尽してあげる……！『終焉の混沌獣（ジ・エンド・カオティック・キメラ）』！」
『オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！』
「っ……！」
「バトル！『終焉の混沌獣（ジ・エンド・カオティック・キメラ）』で、『アルカナ　ナイトジョーカー』を攻撃！『カタストロフ・スクリーム』！」
混沌獣の咆哮が、剣を盾のように構えたアルカナを打ち破る。

「ぐっ……あああああああああああああああっ！？」
「きゃあああああああああああっ！？」
セツＬＰ４０００→３４００
アルカナを貫通した混沌獣の咆哮が、俺を支えているアテナたちごと吹っ飛ばした。
「ぐっ、がはっ！？」
「お兄ちゃんっ！」
たった６００。それだけのダメージですら、今の俺には致命的な激痛を与えてくる。思わず膝をつきそうになる俺を、さだめが支えてくれた。
「……ボクはこれでターンエンド。エンドフェイズに除外されている三体の『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』と『終焉の夜王（ジ・エンド・ナイトキーパー）』、『終焉の死霊術師（ジ・エンド・ネクロマンサー）』を墓地に戻す」
……まさかとは思うが、次のターン二体目が出てくるとか言わないよな？
「くすっ！　安心してよセツ。混沌獣は強すぎる……ボクでも制御出来るのは一体だけ。これ以上従えることはできないから」
そいつは何より。とはいえ、一体だけでも相当キツイことに変わりはないが。
「俺の、ターン！　ぐ……ドロー！」
まずは、兎に角あの化け物を倒さないことにはどうにもならないな……。
「……いや、だがそううろたえる必要はないな」
沢山の効果を持つモンスター。確かにそれだけ聞けば強そうだが、決して倒せないレベルじゃない。
「冷静になれ。怪我も、痛みも、今はどうでもいい……」
大事なのは、今だ。
「俺はモンスターを一体、守備表示でセット」
「守備表示……」
「けど、混沌獣は……」

貫通効果持ち。だが、仕方がない。今は、なんとかして耐えなければ。

「カードを二枚セットして、ターンエンドだ」

攻略する。あの凶獣を。救って見せる。エンヴィーを。

「ボクのターン、ドロー。バトル！」

「来るか！」

「『終焉の混沌獣（ジ・エンド・カオティック・キメラ）』で、セツの守備モンスターを攻撃！『カタストロフ・スクリーム』！」

『主！』

俺に迫る混沌獣の咆哮を、テンスが身体を張って受け止める。

『ぐっ……おのれ！　ぐおおおっ！？』

「テンス！　くっ……トラップカード『ガード・ブロック』！　戦闘ダメージを無効にし、デッキからカードを一枚ドローする！」

テンスを吹き飛ばした咆哮は、ギリギリ俺の眼前で結界によって受け止められる。

「ごぶっ……ぁ」

ダメージこそ防げたが、結界ごしに届くちょっとした振動だけで目の前が暗くなる。

くそ……目の前が、暗い……だが、負けん！

「俺、は……リバースカード『アルカナソード　クローバー』を、発動……！　切り札の騎士がやられたことで、『アルカナ　ナイトジョーカー』を、復活させる！」

『アルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ３８００→４５００

「や、やった……！　混沌獣の攻撃力を上回った！」

「けど、セツくん……！」

「だ、大丈夫……まだ、やれるさ」

嘘だ。もう目の前が霞んで殆ど見えない。今、ユーキちゃんの呼びかけに応えられただけでも奇跡的だった。

「……ボクは、カードを一枚セット。ターンエンド」

「お、れの……ターン。ぐっ……」

「しっかりしやがれ！　ドロー！」
「け、んじ……か？」
「お前、もう死にかけじゃねえか！　本当はデュエル自体を代わってやりたいところだが……それは納得しねえだろうしな。せめて、ドローくらいは代わってやるよ」
「サンキュ、な……」
「礼は良い。兎に角、お前は死ぬな。いいか、絶対だぞ」
「わ、かってるよ……」
剣士からドローしたカードを受け取る。
「まずは……カードを一枚セットする」
カードをセットして、俺は混沌獣をキッと睨みつける。
「バトル……！『アルカナ　ナイトジョーカー』で、『終焉の混沌獣（ジ・エンド・カオティック・キメラ）』を攻撃……！『ロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」
「なにをやっても……無駄なんだよぉ！　手札から『ライアー』を捨てて効果発動！　戦闘を行う闇属性モンスターの攻撃力分、相手モンスターの攻撃力をダウンさせる！」
「そんなっ！？」
「この効果が通ったら……！」
「通す、かよ……！　リバースカードオープン！　カウンタートラップ『天罰』！　手札の『ジャム・ウォリアー』を捨てることで、相手モンスター効果を無効にし、破壊する！」
「っ……！」
混沌獣の背に生えようとしていた堕天使の翼が、天からの裁きによって粉砕される。俺は『ジャム・ウォリアー』の効果でカードを二枚ドローし、これで手札は三枚。
「これで、終わりだ……！　混沌獣！」
「ぅうっ！」
エンヴィーＬＰ１１４００→１１３００
ダメージは微々たるものだが、これでなんとか混沌獣を倒すことも出来た。

「よし……！　俺は、これでターンエンドだ」
「……」
「エンヴィー？」
エンド宣言をしても、動きを見せないエンヴィーに、俺は声をかける。
「……ったと」
「え……？」
「終わったと……思った？」
「なっ……っ！？」
「ボクのターン、ドロー！」
不気味に呟くと、エンヴィーは勢い良くカードをドローする。
「くっ……俺はリバースカードオープン！『サンダー・ブレイク』！　手札の『アルカナソード　ハート』を捨てて『魂吸収』を破壊する！」
エンヴィーがどう動くにしろ、終焉デッキの特性上カードを除外する。なら、いい加減『魂吸収』をこれ以上残しておくことは出来ない。
「ボクは墓地の三体の『終焉の餓狼（ジ・エンド・ウルフ）』をゲームから除外して『終焉の三頭狼（ジ・エンド・ケルベロス）』を融合召喚！」
『終焉の三頭狼（ジ・エンド・ケルベロス）』ＡＴＫ１３００
「今更三頭狼……？　もしかして、また『終焉思想』を……」
「いや、これは……」
「更に手札から魔法カード『死者蘇生』！　ボクの墓地から『終焉の死霊術師（ジ・エンド・ネクロマンサー）』を守備表示で特殊召喚！」
『終焉の死霊術師（ジ・エンド・ネクロマンサー）』ＤＥＦ２０００
「そして『終焉の死霊術師（ジ・エンド・ネクロマンサー）』のモンスター効果。墓地から闇属性モンスター一体を除外することで終焉モンスターを一体特殊召喚できる。ボクは『終焉の夜王（ジ・エンド・ナイトキーパー）』を除外して『終焉の混沌獣（ジ・エンド・カオティック・キメラ）』を特殊召喚！」
『終焉の混沌獣（ジ・エンド・カオティック・キメラ）』ＡＴＫ０

「モンスターを三体……！　まさか、これは……！」
「ボクは、フィールド上に存在する三体の終焉を生贄に……」
「うそ……わたし、知らない。知らないよ……」
「『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』を召喚する！」
『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』ＡＴＫ６５００
エンヴィーのフィールドに、闇が溢れた。
「攻撃力、６５００……！」
「……お兄ちゃん」
「……ああ。わかってる」
「ヤバい、な」
剣士の言う通り、膝が震えそうになるほどのプレッシャーを感じる。
「だが、俺にはこうするしか出来ない」
「お兄ちゃん……？」
訝しげに声を上げるさだめたちから少し離れ、俺はエンヴィーの前で手を広げる。
「セツ！？」
「なにを……！」
「来い、エンヴィー。それが、お前の深淵……心の闇だとするなら、俺はその全てを受けとめてやる」
「セツ……？」
戸惑うように声を漏らすエンヴィー。俺は構わず続ける。
「言葉じゃ、何も変えられないから……」
どれだけ言葉を尽くしても、人を信じることをやめてしまったエンヴィーには、きっと届かない。
「けど、ただ力尽くで叩きのめしたって、当然なにも変わらない」
もし俺が、エンヴィーをこのデュエルで倒したとしても。エンヴィーの心を救わなければ意味がない。それは、ただエンヴィーを苦しめるだけだから。
「だから……」

俺には、これしかない。
「約束してくれ。エンヴィー。俺が、お前の全てを受けとめて……それでも尚、ここに立っていられたのなら……」
――俺を、信じてくれ。
「……むり、だよ」
俺の言葉を聞いたエンヴィーは、いやいやと首を振る。
「むりだよ……セツ、死んじゃうよ……」
「死なない」
「死んじゃうよ！　終焉は……ボク、は……世界だって殺すんだ！　ただの人でしかないセツに耐え切れるはず、ない！」
「それでも、耐える。耐えて見せる。だからエンヴィー。お前の心に溜まった淀み……もやもやを、全部纏めてぶつけて来い！」
「セツ、いくらなんでも無茶です！」
「そうだよ～！　唯でさえセツくんは、さっきまでのデュエルでボロボロなのに……」
後ろからアテナたちも叫んでいるが、それでも俺は体勢を変えない。
「それでも……俺には、これしかないから」
昔から、そうだった。俺がさだめにしてやれたことってなんだろう。俺が、さだめを救えたとしたら、その理由はなんだろう。
「ずっと、考えてきた」
俺は、さだめの全てを受けとめた。どんな痛みも、苦しみも、屈辱も。全てこの身体で受け止めて、やっとあいつを救えた。なら……。
「お前も同じだ。エンヴィー。かつてのさだめと同じ……全部、俺が受け止めてやる。だから……」
「うるさい！　むりだったらむりなんだよ！」
「だったら、試してみれば良い！　俺は、死なない……！」
全部、全部受け止めて……必ず、お前を救うから。
「さあ、来い！　エンヴィー！」

「う、うぅわあああああああああああああっ、バトルッッ！！」

エンヴィーの宣言と同時に、フィールドが闇に包まれた。

第四期第三十四話「俺に出来ること」（後書き）

こんにちは。

まずはもう一度お詫びを。お待たせしてしまってすみませんでした。かろうじて九月中には間に合いましたが、一ヶ月以上間が空いてしまったこと、深くお詫び申し上げます。理由は、仕事が忙しくなってきたのもありますが、クライマックス故に妥協したくなかったことと、あとは……すみません、九月はゲームが一杯で（爆）。お馴染みタッグフォースとかテイルズとか英雄伝説とか。精神と時の部屋が欲しいです……。

今回の終焉モンスター。この終焉シリーズがもしＯＣＧにあった場合、間違いなくダムドが禁止になります（笑）。まさにダムド無双になりますから。使いまわしウマー。とりあえず、数が多いので若干時間を頂きますが、例によって活動報告とオリカ紹介にアップしておきます。

次回、エンヴィー戦クライマックス！　圧倒的なエンヴィーの闇に、セツは耐えきれるのか。そして、エンヴィーの心は……？

それでは、悠でした！

第四期第三十五話「終わりなき終焉」（前書き）

さ「な～っにっかな～な～っにかな？」
ル「今回は、これ」
『トラップ・ブースター』
さ「アニメオリジナルカードにして、お兄ちゃんの勝ちフラグ！」
ル「手札一枚をコストに、手札から罠を使えるようになる速攻魔法」
さ「さだめの大好きなマキュラの調整効果みたいだね。これくらいならＯＣＧ化してくれてもいいのにな～」
ル「色々と悪用されるのは目に見えてる」
さ「けど手札消費激しいし、事故要因にもなるからアリだと思うけど……」
ル「大人の事情」
さ「……それ言ったらなんでも許されると思ってない？」

またまた一ヶ月ぶりになってしまいました。申し訳ない。兎も角、エンヴィー戦クライマックスです。多くは語りません。どうぞ、セツの覚悟を見届けてやってください。

第四期第三十五話「終わりなき終焉」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第三十五話「終わりなき終焉」

「さあ、来い！　エンヴィー！」
「う、うぅわあああああああああああああああっ、バトルッッ！！」
エンヴィーの宣言と同時に、フィールドが闇に包まれた。
「『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』で……『アルカナ　ナイトジョーカー』を攻撃！『終わりなき終焉（エンドレス・エンド）』！」
『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』。そう呼ばれた闇の塊が、一つの像を紡ぎ出す。
『オ、オオ……オオオオオオオオオオオオオオンッ！！』
「きゃっ……！？」
「ひっ！？」
「こいつは……！？」
そのあまりの異形と迫力に、アテナたちが怯む。何とも形容し難いその姿は、不安定で絶望と諦観に満ちたエンヴィーの心そのものを表しているようにすら思える。
そして、その終焉は一度収束させた闇を再び広げ、アルカナに伸ばし……喰らった。
「ぐっ……！？」
「う、わ……」

俺やさだめですら一瞬怯むほどの光景。闇がアルカナを足下から浸食していき、分解していく。そしてそれは、俺自身すら例外ではなかった。

「ぐ、ぅあああああああああああああああああっ！？」

セツＬＰ３４００→１４００

「セツ！」

「お兄ちゃん！」

「っ……いけない！」

苦痛、苦痛、苦痛。ただ肉体的なモノだけじゃない。心の奥底まで浸食されそうなほどの苦痛が、俺の身体を蝕む。ルインが治癒術をかけてくれているようだが、それも殆ど効果がない。

「ぐっ、く……！」

それでも俺は、倒れない。倒れるわけにはいかない。歯を食いしばり、血の滲む手を握りしめ、何とか耐え切った。

「くっ……なん、とか……」

途切れそうになる意識を必死で繋ぎとめる。そんな俺に、エンヴィーは僅かに驚いたように眼を見開くが、すぐにデュエルを続行する。

「……『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』が戦闘によって破壊したモンスターは、墓地にはいかず、ゲームから除外される。そして『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』がフィールドに表側表示で存在する限り、この効果で除外されたモンスターはそのデュエル中使用出来ない」

「なにっ……！？」

「じゃあ、アルカナは……！」

あいつを倒すまで、フィールドに戻せない……！

「更に『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』の攻撃力は、ゲームから除外されているモンスターの数×５００ポイントとなる」

『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』ＡＴＫ６５００→７０００

「攻撃力、７０００……」

「こんな時に、アルカナが封印されるなんて……！」

「……ついでに『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』は、カードの効果を一切受けない。倒したいなら、戦闘でどうにかする以外にない」

更に告げられる絶望的な一言。

「そんな……それじゃ、どうすれば……」

「……」

全員が青い顔で俯く。確かに、絶望的な状況だ。圧倒的な攻撃力。倒したモンスターを永久封印する能力。そして一切の効果を受け付けない防御能力。どれをとっても攻略は難しいと言わざるを得ない。

「……それだけか？」

しかし、俺は逆にスッ……と身体が楽になって行くのを感じた。決して、ルインの治癒術だけの効果じゃない。心と体の沸点を超えたのか、単に限界を超えて痛覚が麻痺してしまったのかはわからない。痛みはあるし、身体の各所から危険信号が送られ続けている。それでも俺は、ここで倒れてしまう自分が想像できなかった。

「え……」

「それだけか、って聞いたんだ。……見ろよ」

俺は両手を大きく広げ、エンヴィーに笑いかける。流れる血や切れた頬。エンヴィーやアテナたちに、それは凄絶な笑みに見えていることだろう。だが、それでも俺は笑顔で語りかける。

「俺は、生きてるぞ？」

「っ……！？」

理解出来ない、と言うようにエンヴィーの表情が歪む。当然だ。普通の闇のデュエルよい、更に苦痛や精神的ダメージが大きいこのデュエルで、一度に２０００ポイントものダメージを受けておきながら、俺は確かに立っている。

――正直、自分でも異常だとは思う。一度闇のデュエルで死にかけた剣士や凛は、殊更にその異常さを感じているだろう。

これだけのダメージを受けて尚、どうしてふらつくこともなく立っていられるのか。

「何故？……決まってる」

誰だって、自分の望みを、夢を、想いを、叶えるために歯を食いしばって苦難の時を耐えしのぶ。
エンヴィーを救いたい。この想いは、きっとかつて、さだめと共に在ったエンヴィーに抱いた、俺の生き様。その源泉。
「なら、倒れるわけにはいかない。いや、倒れるわけがない」
さあ、限界を超えよう。人として、生命として、超越しよう。死を、絶望を、終焉を超え、希望を掴む活路を拓こう。大丈夫。恐れることはない。例え人の道を外れようとも、俺には傍にいてくれる奴らがいる。傍にいて、支えてくれる奴らがいる。
「エンヴィー。俺に全てをぶつけて見せろ。俺は全てを乗り越えて、お前の全てを抱きしめて、お前の全てを愛してみせる」
「セ、ツ……」
「その第一歩だ。見せてやる。俺が、終焉を超えるところをな！俺のターン、ドロー！」
何の心配もいらない。俺の手札は三枚。フィールドは空。これだけじゃ、あの終焉は超えられない。それでも。
「足りないなら、補うまでだ！　俺は手札から速攻魔法『トラップ・ブースター』！　手札を一枚捨てることで、このターン俺は手札から罠カードを発動することが出来る！」
今まで幾度も俺のデュエルを支えてきた速攻魔法。俺はこのターンに全てを懸ける！
「俺は手札から『アルカナソード　スペード』を捨て、効果発動！」
「例え……例え手札からトラップが使えるようになっても、セツの手札は一枚！　それに『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』はカードの効果を受け付けない！」
そうだ。エンヴィー。俺はお前の全力を乗り越えなくちゃいけない。そのために、この手札だけじゃ足りない。キーカードはいくつも必要だ。それなら、どうする？……決まっている。
「引きたいカードがあるのなら……根こそぎ引っこ抜くまでだ！手札からトラップカード『活路への希望』を発動する！」

「あれは！？」
「『活路への希望』は、相手よりライフが１０００ポイント以上少ない場合、ライフを１０００ポイント支払うことで発動出来る！」
セツＬＰ１４００→４００
ライフと共に生命力が消費されて行くのを感じるが、今更１０００ポイントのダメージでどうにかなる筈もない。
「相手とのライフ差２０００ポイントにつき、デッキからカードを一枚ドローする！　エンヴィー、お前と俺のライフ差は１００００以上！　よって俺はデッキからカードを五枚ドローする！」
「一気に五枚も……！」
エンヴィーとのライフ差は圧倒的。だがだからこそ、このカードで活路を見出す！
「さあ、行くぞ！　俺は手札から速攻魔法、『アルカナソード　ジョーカー』を発動！　四枚のアルカナソードを墓地から除外し、ライフを半分支払うことで、デッキ・手札・墓地から切り札の騎士を可能な限りフィールドに特殊召喚する！　これが最後だ。俺に力を貸してくれ！」
『元より！』
『我らは主の騎士じゃぞ』
『我らの力、存分にお使いください』
『フン。呼ぶのが遅すぎる。出番がないかと思ったぞ』
『セツ様……必ず、お助けしますわ！』
『切り札の騎士―クィーン』ＡＴＫ１５００
『切り札の騎士―キング』ＡＴＫ１６００
『切り札の騎士―ジャック』ＡＴＫ１９００
『切り札の騎士―テンス』ＡＴＫ１０００
『切り札の騎士団長―エース』ＡＴＫ２０００
セツＬＰ４００→２００
「そして魔法カード『融合』！　フィールド上の切り札の騎士五体を融合し、来い！『切り札の騎士帝―アルカナ　ロイヤルジョーカ

ー』！」

『切り札の騎士帝―アルカナ　ロイヤルジョーカー』ＡＴＫ４５００

「出た！　お兄ちゃんの切り札！」

「ですが、終焉の攻撃力は……」

そう。アルカナより上だ。そして終焉はカードの効果を受け付けない。成す術はない、ように思える。

「だが、終焉は即ち、エンヴィーの心の闇だ。だからこそ、不安定」

「どういうこと？」

怪訝な顔をするルイン他にもわかりやすく、見せてやろう。『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』……その弱点！

「俺は手札からトラップカード『次元回帰』を発動する！」

「次元……回帰！？」

「『次元回帰』は、お互いのゲームから除外されているモンスターを全てデッキに戻す！　そして『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』の攻撃力は、ゲームから除外されているモンスターの数×５００ポイント！　よって……」

「『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』が……！？」

『オオオオオオオオオオオオオオオォォォォ……ン！』

『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』ＡＴＫ７０００→０

「終焉の攻撃力が、ゼロに！？」

「さあ終焉。ここがお前の終焉だ。エンヴィーの心を食い物にするお前だけは、今ここで切り捨てる！　アルカナぁ！」

俺の声に応え、アルカナがその手に持った剣を構える。

「バトル！『切り札の騎士帝―アルカナ　ロイヤルジョーカー』で……『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』を攻撃！『ファイブ・オブ・ア・カインド』！」

剛剣一閃。アルカナの剣は、『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』を一刀両断に討ち取った。

「ぅあああああっ！？」

エンヴィーＬＰ１１３００→６８００

「やった！」
「これで……！」
「……いや」
アルカナの剣が闇を切り裂いたのを見て喜ぶアテナたち。だが、俺はエンヴィーの表情が今まで以上に悲痛に染まるのを見た。
「無駄、だよ……無駄。無駄無駄無駄無駄。全部、無意味……」
「ど、どういうことですか？　終焉は……」
倒した。それは間違いない。だが、なんだ？　この悪寒……この、ビリビリと肌を打つような恐怖は……。
「セツ……」
「……なんだ？」
「全部、受け止めてくれるって……言ったよね？」
「なに……！？」
「ボクは『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』の、最後の効果を発動！」
「最後の、効果！？」
「まだあったの！？」
「『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』が、戦闘で破壊され、墓地に送られた時、全てのモンスターは死に絶えて、その攻撃力分のダメージをお互いに受ける！」
「なんだって！？」
「そんな、お兄ちゃんのライフはもう……」
「アルカナの攻撃力分……４５００もダメージを受けたら！」
終わる。何もかも。
『セツ様……！』
「死して尚……終焉は絶望をまき散らす……！『ラスト・ディザスター』！」
世界が、闇に染まった。

闇に染まる視界。闇に堕ちる意識。
（俺は……負けたのか？）
エンヴィーを守れず、救えず。アテナたちを遺して……。
（……駄目だっ！）
そんなことは許されない。俺の命は、ただ俺の命であるというだけじゃない。もう、俺は独りじゃない。独りじゃないということは、自分の命に責任が出てきたということだ。俺は、その責任を果たせないまま死んでいくわけにはいかない。
（あぁ……だけど）
辺りは一面の闇。上下左右すら定かではないこの暗闇じゃ、もうなにも見えない。
（……？　なんだ）
闇の中で、それでも輝く光が見えた。それは、俺の胸元から発せられる光で……。
（ああ、そうか……）
俺は、まだ手が残っていることを知った。

エンヴィーＬＰ６８００→２３００
セツＬＰ２００→０
「そ、んな……セツ……？」
闇の中に消えて行ったセツ。無情にも敗北を示すライフゲージ。
――それが示す答えは、セツの敗北と……死。
「い、や……」
足が震える。セツが死んだ？　ありえません。セツは、何時だって……。
「でも、今度こそ死んだよ。やっぱりセツでも、無理だった」
何処か空虚なエンヴィーの言葉に、血の気が引く自分を感じました。

「お兄ちゃんは死なない！　死ぬわけない！」
「さだめさん……」
「ライフがゼロ？　負けた？　関係ないよ！　お兄ちゃんは……さだめのお兄ちゃんは不死身なんだ！　どれだけさだめが酷いことしても、すぐにケロっとして笑えるくらい、凄い人だ！　だから……！」
「そう、ですよね……」
セツが、死ぬなんてあり得ない。一瞬でも、そんな想像をしてしまった自分に怒りを覚えます。
「セツは……例え闇に呑まれても、必ず戻って来ます。ここに」
私たちの、ところに！
「むりだよ……幾らセツが凄くても、終焉に呑まれて、ライフも尽きて……生きてるわけがない。元々風前の灯でしかなかった命で、抗いきれるわけないもん……」
『……それは、どうだろうな？』
「エース？」
『我ら切り札の騎士は……二度同じ失敗はせん。一度ならず二度までも、仕えるべき主を失うようなことを、我らは決してしない。そうだろう……？　希冴姫』
ハッとしてセツの消えて行った闇を見ます。そこには、幽かな、本当に幽かな光が見えます。あれは……。
光が徐々に広がり始め、その光はやがて一つの像を為す。
『アルカナ　ナイトジョーカー』ＡＴＫ３８００
「アルカナ……？」
「ど、どうして……？　もう、デュエルは終了している筈なのに」
困惑する私たちとエンヴィーに、あの聞き慣れた声が語りかけます。
「……知りたいか？」
「……ぁ」
デュエルフィールドを覆っていた闇が晴れ、その中から私たちの

良く知っている、大好きなヒトが姿を現しました。
「俺は、手札からカウンタートラップ『アルカナ・ペンダント』を発動させた」
セツの胸元では、希冴姫さんが贈ったというペンダントが、眩しい光を放っていました。

俺の胸元と、同じ輝きを胸に抱くアルカナを見ながら、俺は『アルカナ・ペンダント』の効果を説明する。
「相手によって、俺のライフがゼロになった瞬間、手札とフィールド上の、全てのカードを墓地に送ることで、エクストラデッキから『アルカナ　ナイトジョーカー』を特殊召喚する。この効果で特殊召喚された『アルカナ　ナイトジョーカー』がフィールド上に表側表示で存在する限り、俺はデュエルに敗北しない」
逆を言えば、アルカナがフィールドから消えた時、俺も負ける。
「命の全賭(チップ　オールイン)けだ。俺は、俺の騎士に全てを託す」
俺は胸に輝くペンダントを握りしめる。
「ありがとう。希冴姫」
『セツ様……わたくしは、わたくしは今度こそ……』
感極まったように言葉を漏らす希冴姫に、俺は笑いかけた。
「ああ……守ってくれたな」
『はい……！』
「エンヴィー！」
「っ！」
俺の声に、エンヴィーはビクリと肩を震わせる。
「俺は……俺は……！」
震えるエンヴィーに、俺は万感の思いをこめて叫ぶ。
「俺は、耐えたぞ！」
耐え切った。終焉に、絶望に、闇に、耐え切った。エンヴィーの

繰り出す終焉の、その悉くを受けとめて尚、俺はここに立っている。
「ぁ……」
「そしてエンヴィー。これで……俺の勝ちだ」
俺の場には、剣を構える『アルカナ　ナイトジョーカー』。
「バトルフェイズ中に特殊召喚された『アルカナ　ナイトジョーカー』には、まだバトルフェイズが残っている！」
この世界。俺が初めてしたデュエル。その時も、確かこの台詞を言った気がするな。
「バトルだ！『アルカナ　ナイトジョーカー』で、プレイヤーにダイレクトアタック！」
ただ攻撃しただけでは、アルカナの剣はエンヴィーを傷つけ、殺してしまうかもしれない。だが、心配ない。
「騎士の剣は、斬るべきものを間違えない！　行け、アルカナ！『オール・イン・スラッシュ』！」
アルカナの剣は光を増し、両断する。エンヴィーの、闇を。『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』と呼ばれた災厄の象徴を、アルカナの剣は切り裂いた。
エンヴィーは……無傷だ。
『ッッォオオオオオオオオオオオオオオオォォンッッッ！』
エンヴィーＬＰ２３００→０

「エンヴィー……」
「うっ……う、ひっく……」
『終焉の真闇（ジ・エンド・ダークネス）』が切り裂かれ、後に残ったのは無力な子供。エンヴィーはその処理能力を超えたのか、ただ泣いている。
「あ……」
俺は、そんなエンヴィーの頭に手を置き、ゆっくりと撫でた。
「……気は、晴れたか？」

「え？」
「色んなもやもや、全部出し切れたか？　まだ、吐きだしてないこととかないか？」
「セツ……ボクは」
「なんかあったら、何でも言え。また全部、受け止めてやるから」
「ぅ、あ……」
「ほら、エンヴィー」
ユーキちゃんが、優しく微笑んでエンヴィーの背を押す。エンヴィーの小さな身体が、すっぽりと俺の胸に収まった。
「ぁ……」
「これで、また一緒だ」
「ぁ、ボク……ユーキにも、酷いこと……」
「いいの。わたし、エンヴィーのお姉ちゃんだよ～？　ちょっとくらい酷いことされたって気にしないし、遠慮されるより嬉しいよ～」
ユーキちゃんも、俺の上からエンヴィーを抱きしめる。
「ほら、エンヴィー？　悪いことしちゃったときは、どうするの～？」
「ごめ……なさい」
たどたどしく紡がれる言葉。ユーキちゃんはもう一度、優しく促す。
「ん？」
「ごめん、なさい」
謝罪の言葉を口にしたエンヴィーを、ユーキちゃんは満面の笑顔で頭を撫でる。
「良く出来ました～」
ユーキちゃんに頭を撫でられて、くすぐったそうにはにかむエンヴィー。その姿を見て、俺はもう大丈夫だと安堵した。そして……。
「……まだ、終わりじゃないんだよな」
「え？」
エンヴィーから身体を離し、闇の奥をじっと見つめる。

「……そうなんだろう？」
怪訝な顔を向けてくるアテナたちに構わず、俺は呼びかける。全ての元凶。本当の黒幕。本当の、ラスボス。その名を。
「出てこいよ。真中、希望」
アテナたちの驚愕の表情と共に、今まで俺たちを導き、助けてくれていた“世界”……真中希望が闇から姿を現した。
「やあ、セツ。無事勝利出来た様で何よりだ。それと……」
その端正な顔に無色の笑みを張りつけた真中希望は、殊更に冷たい声で言葉を発した。
「何時から気付いた？」
その右手には、終焉の刻印が鈍い光を放っていた。

第四期第三十五話「終わりなき終焉」（後書き）

こんにちは。

というわけで、エンヴィーはラスボスじゃありません。まあこれはほぼバレバレでしたが。敢えてエンヴィーをラスボスとは呼ばない様にしてましたし。

そして真のラスボス、真中希望。まあ、これも何だかんだ予想してた人は多いんじゃないでしょうか？　意味ありげに出てきた訳知り顔の強い金髪イケメンが主人公の手助けとか導き役とかしてたわけですし。完全にラスボス要素丸出しです。こっからが長いです。すみません。次回は諸々の伏線回収とかラストデュエルへの繋ぎの話になります。来月は……時間が今月以上にないですが、なんとか早めにアップ出来るように頑張ります。

今回出てきたオリカは『終焉の真闇』『アルカナ・ペンダント』に二つですね。ちなみに『次元回帰』は５Ｄ'ｓでアキさんが使ったアニメオリカです。ミスティ戦ですね。ちなみに一戦目。『活路への希望』といい攻撃力ゼロといい、どこかラグナロク戦っぽい仕上がりになりましたが、割とわざとです。『活路への希望』がアニメで登場した時からこの流れを計画してました。

漸く回収出来た伏線、希冴姫のペンダント。効果には悩みましたが、希冴姫の想いが籠ったペンダントとしては相応しい効果になったかと。セツらしいカウンター罠ですし。若干チートですが。遊戯さんの『魂のリレー』も参考にしました。

要望のあったハロウィンですが……頑張ってはみますがゼロから書いて今日中に投稿出来たら褒めてやってください。望み薄ですが頑張っては見ます。

それでは、悠でした！

第四期第三十六話「チェックメイト」（前書き）

本日の最強カードはありません。
遅くなりました。色々と真実が明らかになる第三十六話、どうぞお楽しみください。ちなみに、衝撃のラストです。

第四期第三十六話「チェックメイト」

アルカナ～切り札の騎士～

第四期第三十六話「チェックメイト」

「まあとりあえず、よく気付いたとは言っておこう。セツ」
パチ、パチ、とどこか寒々しい称賛の拍手が耳に届く。
「ちなみに、どこで気付いた？　後学のために聞いておこう」
「……気付いたの自体は、ついさっきだ」
それまで俺は記憶を失っていて、一連の事件のことを覚えていなかったし、記憶を失うまでは、エンヴィーや終焉のことをロクに知らなかった。
「だが、記憶を取り戻し、エンヴィーのことを知った今なら、おかしな所がいくつもあるということに気付く」
「ほう」
興味深げに希望が先を促す。
「……最初に、疑問を感じたのは、デミスだ」
「……どういうこと？」
デミスと実際にデュエルしたルインが訝しげに俺を見る。
「考えて、見ろ。ルイン。エンヴィーの属性は……嫉妬だ。だが、俺には『終焉の王デミス』が、何かに嫉妬していたようには見えなかった」
「あ……」
敢えて言うなら、ルインを奪われた俺に、だろうが、アイツは基

本、俺に対しては大した関心がないようだった。
「俺には……アイツが終焉に堕ちるとすれば、その属性は『強欲』以外に考えられなかった。同じことは、修学旅行の帝使いたちにも言える」
「風丸たちか！」
「ああ……直接言葉を聞いたお前にならわかると思うが……力を求める、と言うことは周囲への嫉妬以前に欲望があるはずだ。それにあいつ等は、終焉に力を与えられたという以外に何も言っていない。ユーキちゃんの名前も、エンヴィーの名前も出してないんだ」
「そういう……ことかよ！」
「まだあるぞ。海でデュエルしたインセクトナイト。アイツもデミスと同じく自分の欲望がその力の源泉だろう」
「待て、まさかセツ。グレファーの奴も……」
「多分な。悪魔の剣……恐らく『破邪の大剣バオウ』のことだと思うが、その悪魔の力に魅入られたとしか思えない。だとすればそれは“強欲”だ」
「なんということだ……」
「でも待って。終焉の王は、力を得た理由を“彼女”と言っていた」
ルインの指摘に、俺は頷く。
「確かに、デミスは彼女と言っていた。だが、真中希望がどんな存在か考えれば、それは大した矛盾じゃない」
「あ……」
世界そのものたる真中希望。全ての存在の始原にして根幹。故に、出来ない筈がない。ユーキちゃんに成り済ますことくらい。
「だが、それは君の想像だ。証拠はあるかい？」
「惚けるなよ真中希望。そんな証拠、ユーキちゃんに聞けば一発だろうが」
俺はユーキちゃんに向き直り、一つの根本的な質問をした。
「ユーキちゃん。答えて欲しい。ユーキちゃんが、エンヴィーのことを自覚して、俺たちの前からいなくなったのは、一体どのタイミ

ングだ？」
「いなく、なった……？」
　質問の意図が掴めなかったのか、アテナが不思議そうな顔をする。
ユーキちゃんも戸惑いながら答えてくれた。
「えっと……わたしがエンヴィーのことを自覚したのは、アテナちゃんが居なくなった頃、かな？　それで、エンヴィーと一緒に精霊界に来たのは……セツくんとタッグデュエルで、万丈目くんたちとデュエルした後すぐ、だよ～」
「タッグデュエルの後……だと？」
　ユーキちゃんの言葉に、俺はやっぱりなと頷く。
「つまり、ユーキちゃんはアテナが帰って来たときも、さだめが怪我したことも、希冴姫が一度死んだことも知らない。そういうことだ」
「え……！？」
　希冴姫が一度死んだ、の下りでユーキちゃんがハッとして希冴姫を見る。その反応が、何よりの証拠だった。
「ユーキちゃんは……エンヴィーは、一連の事件に何の関わりもない。ユーキちゃんがやったことは、俺とデュエルしたことと、アテナとデュエルした、その二つだけだ」
　そもそも、幼子も同然のエンヴィーに、刺客を俺たちに差し向ける、なんて発想が出来た筈がない。ユーキちゃんだって、悪戯に俺たちと敵対する無意味さは良くわかっていたはずだ。
　パチパチパチ……と闇の世界に拍手の音が響き渡った。
「お見事。そこまで辿りついた君なら、僕の目的はもうわかっているね？」
「エンヴィーを……殺すことか」
　俺の言葉に、エンヴィーがビクッと身体を震わせた。そのエンヴィーの頭を軽く撫で、俺は希望を睨みつける。
「させない。俺はエンヴィーを守る」
「セツ……」

だが、希望は笑みを消して首を振る。
「それは認められない。終焉を殺さなければ、世界が滅ぶ。情が湧いた君たちに殺させる、なんて非情は言わない。だから終焉をこちらに渡して貰いたい」
「ふざけんな。直接殺すも見殺しも、大して変わりゃしないだろうが」
しかし、希望は更に首を振る。
「ならば、後ろを見るといい。御堂切」
「なに……？」
俺の後ろには、アテナたち。
「君がその終焉を殺さなければ、彼女らが死ぬ。それは、見殺しではないのかな？」
「っ……」
世界が滅びる、ということは、そう言うことだ。暗にそう指摘され、俺は言葉を詰まらせる。
「……だが！　そもそもエンヴィーの終焉は祓った！　もうエンヴィーを殺さなくても、世界が終焉を迎えることは……」
「本当に？」
「っ」
俺の言葉を、たった一言で止める希望。
「本当に、エンヴィーの闇は祓われたのか？　そもそも、祓えるようなものなのか？　君たちは、何も知らない」
「……エンヴィーの、闇は」
「祓われたのはあくまで表層。溢れ出た、終焉の上澄みのようなものでしかない。言うなれば、ゴミ箱から溢れたゴミを掃除したようなものさ」
「ゴミ箱……だと？」
「おっと、言い方が気に食わなかったかな？　しかし、事実として終焉とは、世界にとってのバグやウイルス……ようはゴミを纏めて焼却するための器だ。そうなるように、僕が設定した、ね」

「設定、した……？　じゃあ、まさか終焉って」
さだめが呆然としつつ、問いかけた。希望は微笑みを浮かべたまま、あっさりと肯定する。
「そう。僕が創った世界の防衛システムだ」
創った。つまり、エンヴィーが苦しみ、さだめが、アテナが、ルインが、皆が終焉によって人生を狂わされてきた元凶は……。
「僕、ということになるのかな？」
あくまでも微笑みのまま、何でもないことのように希望は言った。
「て、テメエ……」
あまりに平然と、とんでもないことを言いだした希望に、堪え切れず剣士が爆発した。
「テメエは！　こんな不幸をまき散らして、風丸たちを……殺して！　何様のつもりだ！？」
風丸。その名前に、希望はやはり微笑んだまま否定する。
「それは違う。僕は彼らを殺してなんかいない」
「なんだと！？」
殺していない？　しかし、彼らは現に終焉の力に耐え切れず、その身体は闇に溶けた。
「ああ、殺していない。だって……」
希望は、その手を真横に掲げた。
「彼らはそもそも、命を持たぬ人形でしかなかったのだから」
手を振るう。一瞬で風が渦巻き、剣士にとって見知ったであろう人間が現れた。
「か、風丸……！？」
「命を持たぬ人形……それは、どういうことだ？　風丸たちは、一体……？」
俺の問いに、希望は軽い調子で答えた。
「そうだね。終焉をバグやウイルスに例えた流れで例えるなら……うん。ゲームのアバター、或いはＮＰＣと言ったところか？　ＧＭの気の赴くまま設定し、プログラムに則って動くチェスの駒、そん

な感じかな」
「お、お前……！」
「酷い……」
「貴様、命を何だと思っている！？」
エースの罵声にも、希望は涼しい顔で苦笑した。
「だから、命なんてないんだって。だからほら。僕が手を一振りすれば……」
フッ、と希望の手が一閃すると、風丸の姿が掻き消えた。
「全て、思いのままだ」
シュン、と手がもう一度振られると、またしてもそこには風丸の姿が。これは……。
「僕は造物主とは違うし、独立した個の命を生み出すようなことは出来ない。だけどまあ、それらしい幻にリアリティを持たせることくらいなら造作もない。君たちの見た加藤友紀も、中々良い出来だっただろう？」
アテナと再会したときに現れたユーキちゃんを思い出す。
「……そうやって、俺たちの往く先々に試練とやらを作り出していたのか」
「その通り。そしてその結果、見事君たちは終焉を倒す程にまで成長した。まあ、最終的には僕の意に反することになってしまったけどね」
「……全てが思い通りになるとは思わないで」
「わかっているとも。ルイン。僕は全知の存在ではあるが、全能足り得ない。そんなことは、ずっと昔からわかっているさ」
だからこそ、と希望は前置きし、強い視線を俺たちに向ける。
「計画が歪んでも修正出来るよう、初めから想定はしていたさ。いや、こうなる確率の方が高いと踏んでいたくらいだ」
俺たちが、エンヴィーを殺せず、守ろうとすること。それは、確かに全知である希望ならば予測出来て然るべき事だったのだろう。
「だけど……出来るなら、こうならないことを望んではいた。君た

ちが、何の疑問も罪悪感も覚えずに、終焉を倒し……あとは僕が自分自身に始末を着ければ、君たちは素直にハッピーエンドを迎えることも出来ただろうに……」
「始末って……お前」
「全てが終わった後、僕は死ぬ。なんなら、君たちが殺してくれてもいい。そのくらい怨まれることは、してきただろう」
「お前は……それでいいのか。死ぬことに、なんの疑問も抱かないのか？」
希望はその笑みを寂しげなものに変える。
「もう……いい加減、長生きするのも潮時なんだよ」
そう言って、希望はその表情を厳しいものに変えた。
「さあ、真実の追求はここまでにしよう。終焉を……渡して欲しい」
「断る！」
俺は、迷わずその言葉を跳ねのけた。
「君は、そうだろうね」
「君、は……？」
「果たして彼らは、どうかな？」
希望は俺の後ろを指差す。
「な、なんですか？　私たちだって、セツと同じで……」
「『エンヴィーを守れても、世界が滅びたら何の意味もないじゃないか』」
「っ！？」
希望の言葉に、絶句するアテナたち。
「っ……そういう、ことか」
「つい数刻前、君たちはこの理屈を武器にプライド……セツと戦った。僕は、数刻前の君たちと同じことを言っているだけに過ぎない。それとも、翻すのか？　全てを懸けて使命を果たそうとした、プライドを打倒したその武器を！」
「そ、それは……」
アテナたちは、ついさっきまでの俺と同じ立ち位置に立っている。

だからこそ、希望の言葉を否定できない。
「事情を知らなかったから？　エンヴィーのことを知らなかったから？　そう言い訳でもしてみるかい？　だとすれば、プライドが可哀そうだ。完全に無駄死にだね彼は」
「っ……っ……」
「君たちの勝手な“正論”に振り回されて。自分の使命を否定されて。それがいざとなったらあっさり翻される程度の薄っぺらい言葉だったなんて……哀れ過ぎる」
「私、たちは……」
「そして、君もだ。御堂切」
「……！」
アテナたちが沈黙すると、希望は俺に言葉を向けた。
「君は変わらず、終焉を守ろうとするんだね。君を止めてくれた、アテナたちをまた裏切って」
「っ……」
また。また俺は、裏切る……？　アテナたちを？
「一度ならず二度までも。二度ならず三度も。君は君を慕ってくれる少女の想いを裏切るわけだ。君にとって、一番大事なものはなんだい？　己の矜持か、それともアテナたちか……今一度考えてみるといい」
トッ、トッ……と真中希望が近づいてくる。俺たちは……動けない。
「俺は……がふっ！？」
なんとか反論しようと開いた俺の口から出たのは、言葉ではなく血塊。希望はニィ、と笑って言った。
「迷ったね？」
「な、に……？」
「今の君の身体は限界を超えている。とっくの昔に致命傷だ。そんな君が今まで立っていられたのは、その強靭な精神力と鋼鉄の意志。だが、もしそれが揺らいだら？……簡単だ。君の身体は崩れる。僕

が、戦うまでもない」
「俺は……揺らいで、なんか……！」
「それは……君の身体が一番良く知っているだろう？」
「くっ……」
目の前が暗い。耳が遠い。俺は、それでも必死に言い募った。
「何故……エンヴィーなんだ。どうして、そんな辛い役目を、エンヴィーに背負わせた……？」
「必要だったからだ」
「だから……！　何故……！？」
「世界は君たちが思っているほど盤石なものじゃない。長い時を経るうちに、どうしたってバグは見つかるし、綻びが出来る。その綻びは、世界を歪め、多くの人を死に至らしめる。僕はそうならないよう、終焉というシステムを作り、たった一つの犠牲で全てが救えるよう調整した」
「エンヴィーである必要は、無かった筈だ！」
「では誰なら良かった？　アテナか？　さだめか？　希冴姫か？　ルインか？　加藤友紀か？　エースか？　剣士か凛かジャックかキングかテンスかシャルナかネイキッドかエリアかエリアルかゴーズかカイエンかヴァンダルギオンかヴァーミリオンかサイクロイドかライムか？……誰なら良かった？　誰なら、犠牲に出来た？　さあ……選べ」
「ふ、ざけるな……！　そんなの選べるか！　みんなを、誰か一人を犠牲にするなんて……！」
「名も知らぬ誰かなら良かったか？　君にとって、何のかかわりもない存在なら心は痛まなかったか？　それとも……」
真中希望は自らを示す。
「僕自身が犠牲になればよかったのか？」
「お前……」
「エンヴィーを守りたい。その意志を馬鹿にするつもりはない。だけど、そうしなければ世界が滅びる。あとから終焉の属性を付与さ

れた君たちとは違い、アレは産まれからして終焉だ。覆し様がない」
「くっ……」
「チェックメイトだ御堂切。僕は世界を救う。己が使命。義務。想いに懸けて。必ず」
「俺は……俺は……」
何も、言えなかった。エンヴィーを守りたい。その気持ちは僅かも揺らいでいない。だが、身体が動かない。
「エンヴィー」
ビクッ……と、身体を揺らすエンヴィー。そんなエンヴィーに、真中希望は優しい声音で語りかける。
「君は、終焉として全てを滅ぼし、死んでいくか。それとも、大好きなセツたちを守るため、身体を張るか。どちらかを選べる」
「まも、る……？」
「そうだ。守る。君はただ死ぬわけじゃない。セツの身体は、暖かかったろう？　優しかったろう？　君は、彼を守るため、この世界を守るために、今まで生きてきた」
「守る、ために……」
「君がいなければ、もっと多くの人が苦しみ、絶望し、息絶えてきたことだろう。君はそんな人たちを守り、そして今度は、セツを守って消えていく。何も、怖がる必要なんかない」
「セツを……」
駄目だ、エンヴィー。そいつの言葉を聞いちゃいけない……！
そう思うのに、口は動かない。
「このままでは、セツは今以上に苦しみ、世界と共に終焉を迎える。今度は、抗いようもない。君はそれでいいのか？　セツを苦しめ、絶望させ、死なせてもいいのか？」
ふるふる、とエンヴィーが無言で首を振る。
「なら、受け入れて欲しい。大丈夫。怖くはない。だって君はもう、独りじゃないだろう？」
「お前……！」

愕然とした。コイツは、コイツは初めからこうするつもりだったんだ。エンヴィーとの戦いの中で、俺たちの反論を奪い、エンヴィーに自らの意志で死を選ばせるために。そのためだけに、コイツは全てを操った。全ては、この瞬間のために。

それがわかっても尚、俺は動けない。

「ボクは……」

駄目だ。やめろ。やめてくれ。そんな言葉が脳裏を過り、そして消えていく。俺の頭の中には、エンヴィーを止めようと、希望を止めようとする意志と、諦めに近い感情が渦巻いている。

『もういいじゃないか』

『俺はもう、充分に頑張った』

『これはエンヴィーの意志でもある』

『世界を守るためだ』

『アテナたちを裏切れない』

『誓ったんだろう？　妹を、さだめを守ると』

『これが、エンヴィーの運命だったんだ』

いくつもの諦めの言葉が頭に浮かび、その度に力が抜けていく。

ここまで。ここまで来て。俺は……。

「しっかりしやがれ兄さんよぉ！」

「っ！？」

「む……？」

突然の大声に、俺たちは一斉にその声の主を見る。

「サイクロイド……？」

「ったく、黙って聞いてりゃ、らしくねぇぜ兄ちゃんよ」

サイクロイドはやれやれと肩（ハンドル？）を竦めて嘆息した。

「ここは素直にテメエの感情に従う。それが漢ってもんだろうが！」

「だが、俺は……」

「言い訳なんざ、聞きたくねえ！」
「っ……！」
「俺っちは部外者で、脇役で、弱っちぃ雑魚だが……だからこそ、兄ちゃんみてぇな強い漢に憧れたもんよ」
サイクロイドはキッ、と真中希望を睨みつける。
「それがなんでい！　こんな男のおしゃべりに付き合って、揺らいじまってなさけねえ！」
「いや、だが……」
「漢なら！」
俺の言葉を遮って、サイクロイドは見栄を切る。
「ごちゃごちゃと細かい理屈は抜きにして、テメエの想いに正直になりやがれ！　少なくとも俺っちは、そんな兄ちゃんをスゲエと思ったし、そんな兄ちゃんで居て欲しい！　だからよぉ……」
サイクロイドはエンヴィーの前、真中希望の眼前に移動する。
「俺っちが見せてやるぜぃ！　細けぇ理屈なんざスッ飛ばした、漢の生き様ってやつを！」
「……君は、状況を理解していないのか？」
「細けぇ理屈は抜きって言った！　さあ来いパツキン！　いたいけな少女を誑かすテメエのような奴は、このサイクロイド様が相手になるぜ！」
「馬鹿っやめろ！　お前の敵う相手じゃない！」
「理屈は抜きって何度言やわかるよ？　勝てる勝てないは別に問題じゃねえだろこの場合！　いいか兄ちゃん！」
サイクロイドはまたしても見栄を切り、叫んだ。
「漢の生き様、しかとその目に焼き付けな！　漢は黙ってサドルで語る！　俺っちが兄ちゃんたちに着いてきたのは、このためだったと言わせて見せる！」
「お前……」
「……やれやれ。とんだイレギュラーがあったもんだ。部外者故の暴走か。しかし、そうまで言われて相手にしないのは、礼儀に反す

るな」
　真中希望は苦笑しつつもデュエルディスクを構え、サイクロイドに正対する。
「いいだろう自転車くん。君の心意気に免じて、僕は自らの計画を歪めよう。戦わず、言葉だけで封じ込められれば一番だったが……こうなっては仕方がないね」
「おうおうおう！　意外と話がわかるじゃねえか！」
「チェックメイト直前のチェス盤を、横合いからひっくり返した責任は取って貰う。覚悟してくれよ」
「「デュエル！！」」
　そうして、勝ち目のない戦いが幕を開けた。

第四期第三十六話「チェックメイト」（後書き）

こんにちは。

衝撃のラスト。いったい誰が予想したでしょうか。ラスボスと戦うサイクロイドを。誰が予想したでしょうか。サイクロイドがアポリアポジションを掻っ攫うなど。安心して下さい。悠も予想外です。

ちなみに劇中では言われてませんが、冥界の抗争も希望の仕業です。そのことはセツが知らないので明言されていませんが。他にもなにかわからないことがあれば感想にて。今なら大抵のことは答えます。

それでは、悠でした！

クリスマス特別編2「聖夜に笑う決闘者」（前書き）

クリスマス特別編です。なんとかクリスマス当日に間に合って良かった良かった。

実は以前から違和感は感じていたのですが、漸くその違和感の正体に思い至りまして。その違和感とは……。

遊戯王小説なのに、イベントネタが全く遊戯王関係ないじゃん！と言うことに（今更）。

ということで、今回はデュエル回です。オリカも使いますが、殆どネタオリカ……のつもりが結構強くなりましたが。

それでは、クリスマス特別編、お楽しみください。

クリスマス特別編2「聖夜に笑う決闘者」

アルカナ～切り札の騎士～

クリスマス特別編2「聖夜に笑う決闘者」

「お兄ちゃんに、クリスマスプレゼントを要求する！」
「随分と図々しい奴だな……まあ、用意してないわけじゃないが」
ふわふわの毛に覆われた耳あてを、さだめの耳にひょいっと着けてやる。
「お？」
「前言ってたろ。耳が（寒さに）弱いって」
「意味が違う！？」
「知ってる」
「でも悔しい！　あったかい！」
「そうか、良かったな」
まあ、コイツとのこのやり取りはもう毎年のことなので今更何を思うこともない。これでちゃんと喜んでるしな。一種のお約束という奴だ。
「じゃあさだめからも、はい。プレゼントね」
「……おい、なんかこれ、無闇に動いてるぞ」
「さだめの……使用済み♪」
「クーリングオフで」
「せめて一度くらい使ってから返してよ！」
「男の俺にどう使えというんだ！？」

「そりゃ、お尻で」
「妹の使用済みをケツに入れて喜ぶような奴を、俺は同じ人類として認めない！」
「あ、でも心配しないでお兄ちゃん！　そんな紛い物で膜破ったりはしてないから！」
「黙れ！」
「セツもさだめさんも、相変わらずですね……」
「あ、アテナだ。メリクリ～」
「すっごく適当な挨拶ですね！　メリークリスマスです。セツ、さだめさん」
「おう。何時になく平和な登場してきたな」
「……あの、私いつもそんなに物騒な登場してませんよ？　さだめさんじゃあるまいし」
「え～アテナだって何時もアグレッシブな登場はしてるじゃんか」
「それは、さだめさんが何時も……っと、こんな余計なことで時間を取られている場合じゃありませんでした。セツ！」
「お、おう？」
さだめとの言い争いを中断し、アテナがやけに気合の入った様子で俺に詰め寄る。
「クリスマスプレゼントです！　良ければ是非、受け取ってください！」
「お、おう……なんだ？　今回はプレゼント回なのか？　大丈夫なのか？」
プレゼント経験のない作者。本当に大丈夫なんだろうな？
「お、マフラーか」
「定番だね」
「いいじゃないですか定番でも。これでも私、頑張って編んだんですから」
確かに、不格好ながら形にはなっている。
「あの、セツ……？」

「ん？　ああ、ありがたく受け取らせてもらう。サンキュな」
「い、いえ……その、巻かせて貰ってもいいですか？」
「……ああ。いいぞ」
ちょっとだけ嫌な予感が脳裏を過ったが、折角の好意を無駄にするのも悪い。俺はアテナの申し出を快く受け入れた。
「ではっ！」
「あれ？　アテナそのマフラー……」
「え？　なんですか？」
「まち針付いてない？」
ぷすぷすぷすっ！
「ぎゃあああああああああああああああっ！？」
「ああっ！？　セツ！」
チクチクがっ、チクチクがぁっ！？
慌ててマフラー（と言う名の拷問具）を首から外し、首をさする。幸い、深く突き刺さった針はない。
「アテナぁ！」
「ご、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」
「三回言っても許すかぁ！　大体なんでマフラーなのにまち針！？　使わないだろどう編んでもさぁ！」
「そこはかとない悪意すら感じるね……」
「ご、誤解です！　ただその、私編み物ってやったことなくて……お裁縫ってまち針一杯使った記憶があったので適当にその……」
「よくそれで形になったね！　逆に感心するよ！」
あの言い方からして、マフラーの編み方をネットとかで見た様には思えないから、完全にオリジナルなのだろう。確かにある意味凄い。
「だとしても抜けよ！　途中で意味ないことに気付いて抜けよ！」
「す、すみません。よくわかんないまま進めてたので、凄く時間かかっちゃって……その、ついうっかり忘れちゃって……」
そのついうっかり、で危うく死にかけた俺としては何とも言えな

い。頑張って編んだってことだけは伝わってくるから余計に。
「全く……数々の修羅場を生き抜いてきた俺が、まち針ごときに殺されちゃ笑い話にもなりゃしない……」
いやまあ、よほど運が悪くない限りまち針で死にはしないだろうが。
「教訓。作り方がわからないときは、人に聞くかネットや本で調べよう」
「はい……肝に銘じます」
しゅん、としてしまったアテナだが、まあ元々アテナは思い立ったら一直線で深く考えず行動あるのみ！　みたいなスタンスだし、その行動力自体は長所なので、そこまで怒るつもりはない。
「……ほら」
「え？」
「プレゼント。いらないならさだめにやるぞ」
「い、要ります！　ください！」
慌てたように俺の差し出したプレゼント箱を受け取ろうと……。
ババッ！
「え？」
「なっ？」
「ふぇ？」
箱が消えた。
「さだめさん？」
「違うけど……」
真っ先に疑われたさだめも首を振る。不思議そうな顔を見る限り、とりあえず嘘はついてなさそうだ。その時。
「ハーッハッハッハッ！」
「なんだ！？」
「あれは……？」
レッド寮の屋根上。紅い服を纏った男がその手にプレゼントを掲げて持っていた。

「だ、誰ですか!?　私の、セツからのプレゼントを引っ手繰った下手人は!?」
　下手人って、妙に渋い言い回しだな。
「天が呼ぶ！　地が呼ぶ！　人が呼ぶ！　季節の節目にやってくる、天衣無縫の決闘者（デュエリスト）！　その名も……」
　ビシィッ！　と妙なポーズを着けて人影が叫ぶ！
「エンタメン！」
「……」
「……」
「……」
　無音。
「エンタメン！」
「……」
「……」
「……」
　無音。
「えんたｍ「それはもういい！」それは残念」
　思わず突っ込んでしまったが……。
「……なにあれ」
　さだめの言葉に、今心から同意する。こんな時期にもかかわらず、真っ赤なタイツ一丁にサンタ帽と、サングラス姿の変態（うん。この表現がしっくりくる）は、何故か無駄に偉そうにふんぞり返る。
「ふっ……私こそ、今巷で有名な、イベントの度に現れる時期モノ決闘者（デュエリスト）……その名もエンタメン！」
「……アテナ、知ってる？」
「知るわけがないでしょう」
「お兄ちゃん？」
「……少なくとも、積極的に知り合いたい感じではないな」
「じゃあ新キャラ？　この時期に？　誰得？」
「さあ……ってそんなことより！」

あまりの展開に呆然としてしまったが、アテナが気を取り直して声を荒げる。
「それ！　返してください！　私への、セツからのプレゼントなんですよ！？」
「ふ……少女よ。そんなにこのプレゼントが大事かね？」
「当たり前です！」
「ならば、私とデュエルすることだ！」
「は？」
「欲しいものは、力尽くでも手に入れる。それがこの世の理。ああっ！　なんと無情！」
「意味が分かりません！……でも、良いですよ。そんなに私とデュエルがしたいというのなら……」
ジャキンッ、と物々しい音を立ててアテナのデュエルディスクが展開する。やる気満々。いやむしろ殺る気満々と言った風情だ。
「大丈夫か……？　あの変態」
「大丈夫じゃない？　変態だし」
「さあ、デュエルです！　エンタメ（？）さん！」
「おぉっと、今の私はエンタメン・惨汰！　親しみを込めて、サンタさんとお呼びなさい」
「黙りやがれです！」
「アテナって、時々ガラ悪くなるよね」
「反動じゃないか？　普段丁寧語な分」
最早思考を放棄して完全に傍観者ポジションの俺とさだめが適当なことを言う。
「さあ、私の準備は出来てますよ！　瞬殺される覚悟は良いですか！？」
「ふっ……甘く見ないことだな。この天衣無縫のエンタメンを！」
「「デュエル！！」」
エンタメンＬＰ４０００
アテナＬＰ４０００

「ふっ、では私が先攻だ。ドロー！　キランッ☆」
　ウザッ！
「私はモンスターを守備表示でセット。カードを一枚セットして、ターンエンドだ。さあ、どこからでもかかって来なさい。少女よ」
「っ私のターン！　ドロー！」
「ふっ。この瞬間、リバースカードオープン！『ギフトカード』！」
「はっ！？」
「なにっ？」
　しょ、初手から『ギフトカード』？　シモッチもないのに？
『ギフトカード』は、相手ライフを３０００ポイント回復させるという、単体では全く意味不明な誰得カード。『シモッチによる副作用』とかと組み合わせればその限りではないんだが……。
　アテナＬＰ４０００→７０００
「ふっふっふ……私のデッキは少々強ぉいからね。少女が一瞬にして蒸発しないよう、私からのせめてものギフトだよ。受け取ってくれたまえ」
「っ……馬鹿にして。ここまで精神を逆撫でする相手は、希望さん以来です」
　そう言いつつも、アテナは冷静だ。相手の意味不明な行動が、逆にアテナに警戒心を抱かせたのだろうか。
「私は手札から『ヘカテリス』の効果を使います！　このカードを墓地に捨て、デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加え、発動します！」
　アテナの何時もの戦術だな。アテナの背後に、荘厳な城が出現する。
「ヴァルハラの効果を使います！　手札から『光神テテュス』を攻撃表示で特殊召喚！」
　『光神テテュス』ＡＴＫ２４００
「そして更に『ジェルエンデュオ』を攻撃表示で召喚します！」
『ジェルエンデュオ』ＡＴＫ１７００

「バトルしますよ！『光神テテュス』で、守備モンスターを攻撃！『ホーリー・サルヴェウィション』！」
「ふっ、甘いな。私の守備モンスターは『ギフテッド・カリブー』！」
『ギフテッド・カリブー』ＤＥＦ１２００
テテュスの放つ光に焼かれ、サンタ帽を被ったトナカイが破壊される。
「『ギフテッド・カリブー』は戦闘によって破壊された時、私のデッキから攻撃力１５００以下のギフテッドと名の付くモンスターを特殊召喚できるのだよ！　私が呼び出すのは『ギフテッド・マジシャン』！　守備表示だ」
エンタメンのフィールドに、サンタ服のちょっとエロい感じの女性モンスターが召喚される。
『ギフテッド・マジシャン』ＤＥＦ２５００
「守備力２５００……流石に手が出せませんね。ターンエンドです」
「私のターン、ドロー！　くるりんっ！」
だからそれウザい！
「ふっふっふっ……それでは少女に、我がデッキの真髄をお見せしようではないか」
「真髄……？」
「まずは『ギフテッド・マジシャン』を攻撃表示に変更する！」
『ギフテッド・マジシャン』ＡＴＫ１２００
「１２００の２５００……なるほど。クリスマスモンスターなわけだ」
フレームが黄色ってことはバニラモンスターか。
「更に手札から魔法カード『古のルール』！　手札からレベル６、通常モンスターである『ギフテッド・マジシャン』を攻撃表示で特殊召喚！」
『ギフテッド・マジシャン』ＡＴＫ１２００
「そして永続魔法！『ジングルヴェール』を発動する！」

『ギフテッド・マジシャン』の手にはベル。周りにはオーロラのようなオーラが満ちる。
「永続魔法『ジングルヴェール』は、ギフテッドと名の付いたモンスターの攻撃力と守備力を反転させるのだよ！」
「なっ！？　それじゃあ……」
「そう！　今や『ギフテッド・マジシャン』の攻撃力は２５００！　少女のモンスターを超越したのだ！」
『ギフテッド・マジシャン』×２　ＡＴＫ１２００→２５００
「さあ！　バトルと行こう！『ギフテッド・マジシャン』で『光神テテュス』を攻撃！『アンハッピー・ギフト』！」
「きゃあっ！？」
アテナＬＰ７０００→６９００
「くっ……私がダメージを受けたことで、『ジェルエンデュオ』は破壊されます……」
「ふはははは！　追撃だ！『ギフテッド・マジシャン』でダイレクトアタック！」
「きゃあああああっ！？」
アテナＬＰ６９００→４４００
「私はカードを一枚セット。ターンエンドだ」
「くっ……私のターン！」
意外とやるな。あの変態。アテナ相手にあれだけやるとは。
「私は『神の居城―ヴァルハラ』の効果を使います！　手札から『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を攻撃表示で特殊召喚！」
『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』ＡＴＫ２８００
「む……」
「更に『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』が表側表示で存在する限り、天使族以外のモンスターの攻撃力守備力は５００ポイントダウンします！」
『ギフテッド・マジシャン』×２　ＡＴＫ２５００→２０００
「バトルします！『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』で『

ギフテッド・マジシャン』を攻撃！『ホーリー・フェザー・シャワー』！」

「ふっさせんよ！　トラップ発動！『聖なるバリア―ミラーフォース―』！」

「そっちこそ、させません！　手札から『紫光の宣告者』のモンスター効果です！　手札から天使族モンスター一体と共に墓地に送ることで、相手の発動したトラップを無効にし、破壊します！」

「なんと！？」

エンタメンの発動したトラップが、紫色の球体によって砕かれ、消えていく。

「むぅぅっ！？」

エンタメンＬＰ４０００→３２００

「ターンエンドです！」

「ふっふっふ……どうやら私はお嬢さんを甘く見ていたようだ」

「……なんですか？」

「これは我が真の力をお見せする必要がありそうだ、ということだよ。私のターン、ドロー！」

エンタメンが今度は余計な動きをせずにカードをドローした。本気ということだろうか。

「まずは手札を整えようではないか。お互いに、ね。魔法カード『天よりの宝札』！　お互いにデッキから、手札が六枚になるようにカードをドローする！」

「何をたくらんでいるかは知りませんが……遠慮なくドローさせてもらいます！」

これで互いに手札は六枚。何が起きても不思議じゃないな。

「私は手札から儀式魔法『聖者降臨の儀式』を発動する！」

「儀式魔法！？」

「フィールドのレベル６『ギフテッド・マジシャン』と、手札のレベル４『ギフテッド・カリブー』をリリース！　降臨せよ！『奇跡の担い手―ギフテッド・イエスマン』！」

『奇跡の担い手―ギフテッド・イエスマン』ＡＴＫ２５００

「そしてイエスマンもまた、ギフテッドの名を冠するモンスター。よって攻撃力と守備力が逆転する！」

『奇跡の担い手―ギフテッド・イエスマン』ＡＴＫ２５００→３０００

「くっ……」

イエスマンは天使族であるらしい。ヴィーナスの効果が通用していない。

「凄い……」

「どうしたさだめ。お前が素直に感心するなんて珍しいな」

「いや、宗教的に間違いなく現実だとＯＣＧ化しないだろうカードを躊躇いなく出してくるあたりが」

「……なるほど」

「バトル！『奇跡の担い手―ギフテッド・イエスマン』で、『Ｔｈｅ ｓｐｌｅｎｄｉｄ ＶＥＮＵＳ』を攻撃！『ザ・ミラクル』！」

攻撃名が酷い。

「きゃあっ！？」

アテナＬＰ４４００→４２００

「私はカードを一枚セット。ターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー！」

アテナの表情は苦しい。無理もない。最初に渡されたライフアドバンテージを、早くも失いかけているのだから。

「ですが、手札は潤沢です！　まずは手札から速攻魔法『サイクロン』！　その厄介な『ジングルヴェール』を破壊します！」

「なんと！？」

相手フィールドを覆っていたオーロラ状のヴェールが吹き飛ばされ、消えていく。

『奇跡の担い手―ギフテッド・イエスマン』ＡＴＫ３０００→２５００

「そして私はヴァルハラの効果を発動！　手札から『アテナ』を攻

撃表示で特殊召喚します！　シャルナ！」
『はいは～い。シャルナおねーさんサンタコスヴァージョン！』
「あ、ホントにサンタコスしてる」
『アテナ』ＡＴＫ２６００
「更に手札から『聖なるあかり』を通常召喚します！『アテナ』のモンスター効果です！　天使族モンスターが召喚、特殊召喚、反転召喚される度に、相手ライフに６００ポイントのダメージを与えます！」
『聖なるあかり』ＡＴＫ０
「おっと、そうは行かぬよ。リバースカードオープン！　トラップカード『ホーリーライフバリアー』！　このターン、私は少女から受けるダメージを全て無効にする！」
「なっ！？」
巧い。アテナのデッキは基本、ワンキルタイプのビートバーン。たったの一ターンで会っても全てのダメージを無効にする『ホーリーライフバリアー』は良いメタカードだ。
「くっ……それでも！　私はシャルナの効果を使用します！『聖なるあかり』をリリースすることで、墓地から『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』を蘇生します！」
『Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ』ＡＴＫ２８００
「しかし、『ホーリーライフバリアー』の影響下では、我が『奇跡の担い手―ギフテッド・イエスマン』を破壊することは叶わない！」
「……わかってます。私はこれでターンエンドです」
「ふっ。私のターン！　それ、ドロー！」
カードをドローしたエンタメンは暫し黙考。
「……ふむ。とはいえ流石に『ジングルヴェール』が破壊されては敵わない。私は手札から魔法カード『ブラックホール』を発動しよう！」
「なぁっ！？」
『うにゃあああああああああああっ！　おねーさんのコスがぁぁ

ぁっ！！』

なんとエンタメンは自らの切り札ごとアテナのモンスターを全滅させてきた。再利用の難しい儀式モンスターで、よくそんなことをする気になったな。

「そして私は魔法カード『一時休戦』を発動。互いにカードを一枚ドローし、次の少女のターン終了時まで、お互いに受けるダメージはゼロになる。汝、争うなかれ、だ。ターンエンド」

「私のターン、ドロー！」

「ふっ……一日目だ」

「は？」

「いや、なんでもない。続けてくれたまえ」

「……私はヴァルハラの効果を使います。手札から『光神機―轟龍』を特殊召喚。ターンエンドです」

『光神機―轟龍』ＡＴＫ２９００

「私のターン、ドロー」

切り札を失ったというのに、余裕綽々な様子のエンタメンがカードをドローする。

「ほぅ……私はカードを一枚セットし、ターンを終了する」

「私のターン、ドロー！」

その時。

「三日だ」

「え……？」

「聖者の死は死に非ず。聖者は死なず、また蘇る」

「何を……」

「破壊され、墓地に送られてから三回目のスタンバイフェイズ時、我が主、『奇跡の担い手―ギフテッド・イエスマン』は墓場より蘇る！　その手に奇跡を携えて！」

「なんてすって！？」

『奇跡の担い手―ギフテッド・イエスマン』ＡＴＫ２５００

「そして『奇跡の担い手―ギフテッド・イエスマン』が自身の効果

により蘇生した時、私は墓地からカードを一枚手札に戻すことが出来る。私が手札に戻すのは『ジングルヴェール』！」
「……何度でも蘇るのなら！　私は何度でも打ち倒すまでです！」
流石、アテナらしい強引な帰結だ。
「バトルです！『光神機―轟龍』で、『奇跡の担い手―ギフテッド・イエスマン』を攻撃！『エクストリーム・バースト』！」
「ふっ……聖者に奇跡はつきものだろう？　リバースカードオープン！　速攻魔法『禁じられた聖杯』！　対象モンスター効果を無効にする代わり、攻撃力を４００ポイントアップさせる！」
『奇跡の担い手―ギフテッド・イエスマン』ＡＴＫ２５００→２９００
「攻撃力が互角……！」
相討ちか。だが……。
「聖者は三ターン後、再び蘇る！」
「くっ……私はターンを終了します」
最上級モンスターばかりの重いアテナのデッキは、それが破られると途端に脆くなる。今も、通常召喚権を残したまま、ターンを終了するしかない。
「アテナ、苦戦してるね」
「意外とやるな。あの変態」
「エンタメン、或いは惨汰さんと呼びなさい！　私のターン！」
どうでもいい訂正をしつつ、エンタメンはカードをドローする。
「まずは『ギフテッド・カリブー』を攻撃表示で召喚！　手札から『ジングルヴェール』を発動させてもらおう！」
『ギフテッド・カリブー』ＡＴＫ６００→１２００
「バトルを行う！『ギフテッド・カリブー』でプレイヤーにダイレクトアタック！」
「きゃあああっ！」
アテナＬＰ４２００→３０００
「私は再び、魔法カード『一時休戦』を発動しよう！　聖者が舞い

戻るには、今しばらくの猶予が必要なのでな。ターンエンド」
「私のターン、ドロー！」
「苦しいな……」
「このターンはダメージを与えられない。でも次のターンにはイエスマンが蘇ってくる」
「このターンで何か対策を講じないとマズイな」
エンタメンは内心ほくそ笑む。少なくともこのターンで負けることはない。そして手札には……。
「（ふっふっふ……聖者の復活と共に『ブラックホール』を手札に戻し、この『禁じられた聖槍』とのコンボで一方的に殲滅。勝負を決めて差し上げよう）」
しかしふと、エンタメンは窮地に追い込んだ筈の少女が笑っていることに気付く。
「……何故、微笑んでいる。少女よ」
「変態さん。ちょっと調子にのって、私にカードを引かせすぎましたね」
「なに……？」
「私はヴァルハラの効果をしようします！　手札から『ジェルエンデュオ』を特殊召喚！」
『ジェルエンデュオ』ＡＴＫ１７００
「聖者はもう、蘇りません！　これが私の逆転の一手！　『ジェルエンデュオ』を二体分のリリースとし……」
ヴァルハラで召喚せず、態々『ジェルエンデュオ』を経由する……？
「……そうか、なるほどな」
アイツか。
「私は『虚無の統括者』を攻撃表示でアドバンス召喚です！」
『虚無の統括者』ＡＴＫ２５００
「『虚無の統括者』が存在している限り、貴方は特殊召喚を行えません！　よって、聖者が墓地から蘇ることも、もうありません！」

「な、なんですとぉぉぉぉぉっ！？」
「バトルです！『虚無の統括者』で、『ギフテッド・カリブー』を攻撃！『トリニティ・ヴァニッシュ』！」
「ぬぅぅっ！？」
『一時休戦』の効果で、エンタメンにダメージはない。しかし……。
「『虚無の統括者』の効果により、『ギフテッド・カリブー』のリクルートも無効です！」
「くぅっ！」
「ターンエンド！　さあ！　打つ手がありますか！？」
アテナの啖呵に、エンタメンは悔しげに口元を歪め……ふっ、と力を抜いた。
「……なるほど。これが想いの力というものか」
「そうです！　セツからのプレゼント、返して貰いますよ！」
「聖者の復活が妨げられた以上、最早私に打つ手はない。サレンダーだ」
エンタメンＬＰ３２００→０
「私の勝ちです！　プレゼントを返して下さい！」
「……よかろう！」
ばばっ！　と無駄に大げさな動きをし、エンタメンは俺のプレゼントをアテナに向かってぶん投げた。あ、そんな乱暴に扱うと……。
「ふはははははははっ！　さあ受け取るが良い！　エンタメンからのプレゼントだ！」
「セツからのプレゼントですぅ！　いきなり価値を暴落させないでくださいぃ！」
「それでは諸君！　季節の節目にイベントに！　また、会おう！」
「もう来なくていいです！」
ふはははははははーっ！　と高笑いをしつつ、エンタメンは寒空の向こうへと消えて行った。
「せ、セツ……私、なんとかセツからのプレゼント、取り戻しまし

た！」
「あ、ああ……その、アテナ」
「いや、まあお前にあげたものだし、ダメとは言わないが……その、な？」
「ありがとうございます！　楽しみです～」
「あ～……そのプレゼントなんだが」
浮かれているのか、俺が言葉を濁していることに全く気付かず、嬉しそうにアテナがプレゼントの箱を開ける。
「……え？」
「実は特製のケーキを作ってみたんだが……あんだけ派手に振り回されると、な？」
箱の中身は、それはもうぐっちゃぐちゃだった。元の面影はまったくない、ただの生クリームの残骸。
「あ、な、なんだったら作り直すぞ？　別に作るのにそんな手間がかかるというほどでもないし、俺は全然……」
構わない、という前に、アテナが爆発した。
「あ、あ、あの変態デュエリストぉぉぉぉぉぉ！！」
アテナはエンタメンが消えた寒空の向こうを危険な目で睨みつける。
「今度……今度会った時はサレンダーなんて許しません！　二度と！　二度と奇行の出来なくなるまで徹底的に痛めつけて反省させてやりますからぁ！！」
「あ、雪……」
「ホワイトクリスマス……だな」
「絶対、絶対許しませんからぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
雪の降りしきる聖夜に、少女の怒りの声が響き渡るのだった。

クリスマス特別編２「聖夜に笑う決闘者」（後書き）

こんにちは。
久しぶりにこういう軽いノリの話を書いたので気持ち良かったです。
とりあえず今回使われたオリカだけここに乗っけておきますね。
『ギフテッド・カリブー』　レベル４　光属性　獣族　攻／守６００／１２００
このカードが戦闘によって破壊され、墓地に送られた場合、デッキから攻撃力１５００以下の『ギフテッド』と名のついたモンスター一体を特殊召喚することが出来る。

リクルーターです。それ以外には特に言うことないですかね。尤も、自身と後述のマジシャンしかリクルート対象居ませんが。

『ギフテッド・マジシャン』　レベル６　光属性　魔法使い族　攻／守１２００／２５００
聖なる夜に、カリブーに乗って幸せを配り歩くと言われている。
怒らせると逆に幸せを吸われてしまう。

珍しいバニラのオリカです。フレーバーテキストは適当。単体ではネオアクアマドールとかの下位互換でしかありませんが、後述の『ジングルヴェール』と組み合わせることで……フロストザウルスの下位互換になります（ぁ

『ジングルヴェール』　永続魔法
自分フィールド上に存在するギフテッドと名のついたモンスターの攻撃力・守備力を入れ替える。

これもまあ、それほど言うことはないですかね。キーカードです。

『奇跡の担い手―ギフテッド・イエスマン』　レベル１０　光属性
天使族
攻／守２５００／３０００
『聖者降臨の儀式』により降臨。
このカードが破壊され、墓地に送られた場合、三ターン後のスタンバイフェイズ時にフィールド上に特殊召喚される。
この効果により特殊召喚に成功した場合、自分の墓地からカードを一枚選択して手札に加える事が出来る。

エンタメンの切り札です。タイムラグのある自己再生効果と、万能なサルベージ効果を内蔵しています。自己再生にタイムラグがあるのが弱点ですが、サルベージ効果がかなり強いです。カードの種類を問わず、手札に戻せるので。強力な制限カードでも再利用が難しい魔法でも、ブラフその他に使える罠でもなんでもござれです。レベルが高いので儀式召喚は手間ですが、悪くない効果だと思います。

サイクロイドのデュエルはもう暫しお待ちを……出来れば年内、最低でも年明けにはアップ出来るように頑張ります。
それでは、悠でした！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7516j/

アルカナ～切り札の騎士～

2011年12月25日19時54分発行